


岐阜大学
大学院医学系研究科・医学部・附属病院の
現状と課題

第 8 号



GIFU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL OF MEDICINE

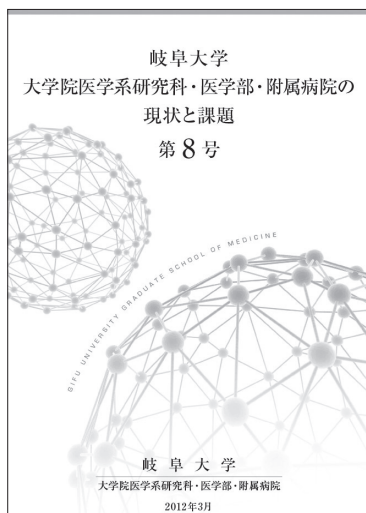
岐 阜 大 学

大学院医学系研究科・医学部・附属病院

2012年3月

凡 例

1. 名簿は原則として2011年12月1日の教育職員配置表の在職をもって記載した。
2. 記載した業績の期間は2009年1月1日から2011年12月31日とした。
3. 原著(欧文)の各論文のインパクトファクターはISI Web of Knowledge 2010年版を使用した。
インパクトファクターの付いていない論文においては空欄とした。



小さな繋がりが大きな形になっていくことと、地道な研究が大きな成果となることを重ね、未来に繋がる医学を目指す岐阜大学大学院医学系研究科・医学部・附属病院をイメージしました。

医学部地区全景



第5回学術研究発表会



附属病院屋上に駐機するドクターヘリ



祝岐阜大学西医学部 西医学部優勝報告会 (2010年)

総合優勝!!



解剖体慰霊祭



岐阜薬科大学との相互研究発表会



市民講座「精神疾患・うつ病」



医学部本館



看護学科校舎



教育・福利棟



附属病院



ホスピタルパークの藤棚から附属病院を望む



医学図書館



生命科学棟



雪の日の医学部



序 文

岐阜大学大学院医学系研究科長・医学部長 犬塚 貴

岐阜大学大学院医学系研究科・医学部・附属病院は1994年以来「現状と課題」を発行しており、このたび2009年から2011年の3年分を第8号として発行することになった。この3年間の活動に影響した最大の因子は、遡る2004年に導入された新臨床研修医制度と国立大学法人化であり、今後もこの2つの影響は続くものと思われる。

前者は結果として本学においては若手医師を減らし、研究体制および県内の地域中核病院機能の脆弱化を招いている。この窮状を救うために地域枠による入学定員の増加が行われ、本学では2010年度には107名まで増加した(34%増)。2007年に地域医療医学センターを立ち上げ、2009年には県内の主要病院と共に岐阜県医師育成・確保コンソーシアムを結成した。今後の地域枠在学者の増加、卒後の指定勤務とキャリア支援のため、2012年度からのセンターの再構築を決定した。新臨床研修医制度はまた、学部から研究科への研究志向の流れを断ち切る存在になり、本学でも大学院入学者が減少している。

後者の国立大学法人化については、医学部・医学研究科・病院の組織運営上の変更が、予算の範囲内では比較的柔軟に行われるようになったが、同時に毎年1%の人件費削減が行われ、教育・研究の足かせとなってきた。医学部・研究科だけでも毎年助教2.5人相当分が削減され、医学科の設置基準を満たす工夫も限界にきている。法人化と共にスタートした第1期6年(2004-2009)の中期目標の最終評価が2010年にまとめられ、医学系研究科・医学部はすべての面で期待される水準にあるという評価となった。

教育においては、地域枠を導入した2008年に地域医療教育を意識した新カリキュラムを設定し、現在も学年進行中である。本学がリードしてきたテュートリアル教育の改善と見直しが行われている。医学教育開発研究センターは、2010年に医学系の教育分野では全国唯一の「全国共同利用拠点」に採用され、2011年には同センター開設10周年を祝った。課外活動では、2010年に第62回西日本医学生体育大会(西医体)で総合優勝に輝き、開学以来の快挙となった。医学科後期入試の倍率は、2011年度には約100倍となり話題となったが、2012年度には2段階選抜になる予定である。

研究に関しては前述のように厳しい中、ITを利用した救急医療体制の構築は国の支援を得て、多くの企業が参加して進行している。文科省知的クラスター事業の後継である、都市エリア産学官連携促進事業が2009年に採択され、2010年には本学においても人間医工学研究開発センターとして発展し、医工連携、産学協同の理想的な発展を遂げている。2010年に隣接地に移転してきた薬大との連携も、学部学生の教育研究指導に関する覚書、医薬連携推進部会、臨床研究推進支援助成も創られ成果が期待されている。

附属病院の診療については、学長から責任と権限の委任を受けた歴代病院長の努力と各診療科・各職域の積極的な取り組み、さらに特定機能病院の実績を反映した2010年の診療報酬改定により、附属病院の運営・経営はおおむね順調に進んでいる。

ここ3年間、国立大学の統廃合の動きがさらに進んでおり、2011年、東海国立大学包括連携が事務管理部門を軸に調印された。研究医志向の学生教育や産学共同研究を軸に大学群連携の動きが見られている。2012年度予算には国立大学改革強化推進事業費が新規で認められ、その動きは更に加速される見込みである。連携の中で埋没せず、名誉ある状態で生き残るための努力が求められている。

2009年春は新型インフルエンザが本邦を席卷したが、本学は県内の対策に大きく貢献した。2011年3月11日に起こった東日本大震災は、地震・津波・原発事故の複合災害であった。幸い本学学生および同窓生の直接的な被災の報告はなかった。被災大学から院生の受け入れ、DMATに引き続き現地でのさまざまな医療活動を展開した。自然に対する謙虚さ、科学技術への過信に対する戒めを学んだ。一方で疾病や災害との戦いは人類の歴史であり、現代における戦いの主な担い手は大学であり、我々自身であることも確認した。浜岡原発の突然停止は、猛暑を控えての節電のみならず、貴重な検体や生物の管理・保護という点で緊張したが、今後の対策が必要である。

2009年9月には政権交代が起こり、政治・経済の閉塞感の解消が期待されたが、政治の混迷は深まるばかりである。文教・厚生への影響は大きく、政治に対する関心を持ち続ける必要がある。

機構図

岐阜大学
Gifu University

全国共同利用施設
Facility for Collaborations Studies

大学院医学系研究科
Graduate School of Medicine

医学教育開発
研究センター
Medical Education
Development Center
(医学教育共同利用拠点)
Collaboration Center for
Medical Education

テュートリアル部門
Tutorial Education Division
バーチャルスキル部門
Virtual Skill Division

医科学専攻
Research Field of
Medical Sciences

再生医科学専攻
Research Field of Regeneration
and Advanced Medical Sciences

看護学専攻
Research Field of
Nursing Sciences

地域医療医学
センター
Center for Regional
Medicine

医学科
Medical Course

学科目(21)
Tutorial Course

看護学科
Nursing Course

基礎看護学
Basic Health Science and Fundamental Nursing
母子看護学
Maternal and Child Health Nursing
成人・老年看護学
Adult and Gerontological Nursing
地域・精神看護学
Community and Mental Health Nursing

分子・構造学講座
Division of Molecule
and Structure

細胞情報学分野
Cell Signaling

分子生理学分野
Physiology and Biophysics

薬理病態学分野
Pharmacology

寄生虫学分野
Parasitology

遺伝発生学分野
Gene and Development

内分泌代謝病態学分野
Diabetes and Endocrinology

小児病態学分野
Pediatrics

病態情報解析医学分野
Informative Clinical Medicine

病態制御学講座
Division of Disease Control

解剖学分野
Anatomy

分子病態学分野
Molecular Pathobiochemistry

循環病態学分野
Cardiology

呼吸病態学分野
Respirology

高度先進外科科学分野
General and Cardiothoracic Surgery

整形外科科学分野
Orthopedic Surgery

皮膚病態学分野
Dermatology

泌尿器科学分野
Urology

麻酔・疼痛制御学分野
Anesthesiology and Pain Medicine

口腔病態学分野
Oral and Maxillofacial Sciences

神経統御学講座
Division of Neuroscience

高次神経形態学分野
Morphological Neuroscience

生理学分野
Physiology

スポーツ医学分野
Sports Medicine and Sports Science

神経内科・老年学分野
Neurology and Geriatrics

精神病理学分野
Psychopathology

脳神経外科学分野
Neurosurgery

耳鼻咽喉科学分野
Otolaryngology

眼科学分野
Ophthalmology and Visual Sciences

※脳病態解析学分野
Clinical Brain Sciences

腫瘍制御学講座
Division of Tumor Control

腫瘍病理学分野
Tumor Pathology

免疫病理学分野
Immunopathology

腫瘍外科学分野
Surgical Oncology

消化器病態学分野
Gastroenterology

血液病態学分野
Hematology

産科婦人科学分野
Obstetrics and Gynecology

放射線医学分野
Radiology

疫学・予防医学分野
Epidemiology and Preventive Medicine

臨床腫瘍学分野
Clinical Oncology

医療管理学講座
Division of Medical
Management

医療情報学分野
Biomedical Informatics

総合病態内科学分野
General Internal Medicine

臨床薬剤学分野
Clinical Pharmacy

医療経済学分野
Health Economics

救急・災害医学分野
Emergency and Disaster Medicine

法医学分野
Legal Medicine

産業衛生学分野
Occupational Health

医学教育学分野
Medical Education

再生分子統御学講座
Division of Molecular
Regeneration

組織・器官形成分野
Tissue and Organ Development

神経生物学分野
Neurobiology

病原体制御学分野
Microbiology

再生工学講座
Division of Regeneration
Technology

生命機能分子設計分野
Molecular Design and Synthesis

知能イメージ情報分野
Intelligent Image Information

再生応用学講座
Division of Applied
Regeneration

循環呼吸制御学分野
Cardiovascular and Respiratory Research

医学系倫理・社会医学分野
Biomedical Ethics and Social Medicine

看護学教育領域
Division of Nursing
Education

継続看護学教育分野
Continuing Education
in Nursing

実践看護学領域
Division of Nursing Practice

母子看護学分野
Maternal and Child Health Nursing

成人看護学分野
Adult Nursing

地域健康援助学分野
Community Health Care Nursing

寄附講座
「脊椎骨関節再建
外科学講座
(整形外科領域)」
Department of
Reconstructive
Surgery for
Spine, Bone, and
Joint
(Division of
Orthopedic
Surgery)

寄附講座
「地域医療学講座
(岐阜県)」
Department of
Community
Medicine (Gifu)

寄附講座
「乳腺・分子腫瘍
学講座」
Department of
Breast and Molecular
Oncology

共通研究機器センター
Research Equipment Center

微生物遺伝資源保存センター
Pathogenic Microorganism
Genetic Stock Center Office

先端医療セルプロセッシング
センター
Cell Processing Center for the
Regenerative and Advanced Medicine

地域医学部門
Division of Regional
Medicine

内科系分野
Internal Medicine

産科系分野
Obstetrics

外科救急系分野
Surgery and Emergency Medicine

小児系分野
Pediatrics

総合臨床系分野
General Medicine

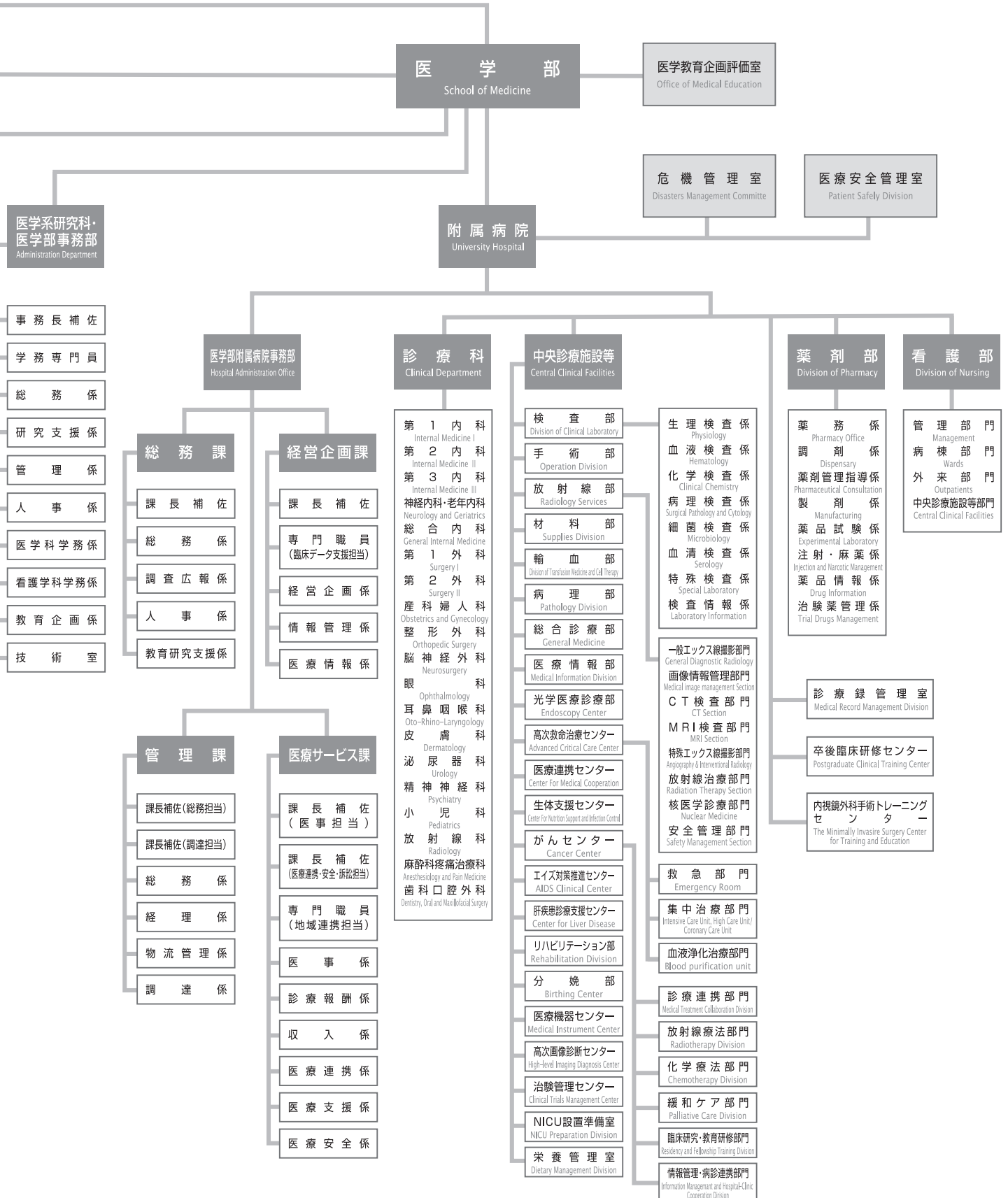
地域・へき地医療
部門
Division of Community
Medicine

地域へき地総合
医療分野
Community Medicine

※連携分野

Organization Chart

(平成23年8月1日現在)
as of Aug 1, 2011



組織及び役職員

Organization and Staff

研究科長・医学部長(併)
Dean of Graduate School of Medicine, Dean of School of Medicine

附属病院長(併)
Director of University Hospital

地域医療医学センター長(併)
Director of Center for Regional Medicine

医学教育開発研究センター長(併)
Director of Medical Education Development Center

犬塚 貴
INUZUKA, Takashi

岩間 亨
IWAMA, Toru

犬塚 貴
INUZUKA, Takashi

鈴木 康之
SUZUKI, Yasuyuki



医学系研究科 Graduate School of Medicine

副研究科長(併) 清島 満 小澤 修
Deputy Dean of Graduate School of Medicine SEISHIMA, Mitsuru KOZAWA, Osamu

医科学専攻 Research Field of Medical Sciences

■ 分子・構造学講座 Division of Molecule and Structure

細胞情報学 Cell Signaling	教授 Professor	中島 茂 NAKASHIMA, Shigeru
分子生理学 Physiology and Biophysics	教授 Professor	恵良 聖一 ERA, Seiichi
薬理病態学 Pharmacology	教授 Professor	小澤 修 KOZAWA, Osamu
寄生虫学 Parasitology	教授 Professor	高橋 優三 TAKAHASHI, Yuzo
遺伝発生学 Gene and Development	教授(併) Professor	近藤 直実 KONDO, Naomi
内分泌代謝病態学 Diabetes and Endocrinology	教授 Professor	武田 純 TAKEDA, Jun
小児病態学 Pediatrics	教授 Professor	近藤 直実 KONDO, Naomi
病態情報解析医学 Informative Clinical Medicine	教授 Professor	清島 満 SEISHIMA, Mitsuru

■ 病態制御学講座 Division of Disease Control

解剖学 Anatomy	教授 Professor	千田 隆夫 SENDA, Takao
分子病態学 Molecular Pathobiochemistry	教授 Professor	長岡 仁 NAGAOKA, Hitoshi
循環病態学 Cardiology	教授 Professor	湊口 信也 MINATOBUCHI, Shinya
呼吸病態学 Respirology	教授(併) Professor	湊口 信也 MINATOBUCHI, Shinya
高度先進外科学 General and Cardiothoracic Surgery	教授 Professor	竹村 博文 TAKEMURA, Hirofumi
整形外科学 Orthopedic Surgery	教授 Professor	清水 克時 SHIMIZU, Katsuji
皮膚病態学 Dermatology	教授 Professor	清島 真理子 SEISHIMA, Mariko
泌尿器科学 Urology	教授 Professor	出口 隆 DEGUCHI, Takashi
麻酔・疼痛制御学 Anesthesiology and Pain Medicine	教授 Professor	飯田 宏樹 IIDA, Hiroki
口腔病態学 Oral and Maxillofacial Sciences	教授 Professor	柴田 敏之 SHIBATA, Toshiyuki

■ 神経統御学講座 Division of Neuroscience

高次神経形態学 Morphological Neuroscience	教授 Professor	山口 瞬 YAMAGUCHI, Shun
生理学 Physiology	教授 Professor	森田 啓之 MORITA, Hironobu
スポーツ医学 Sports Medicine and Sports Science	教授 Professor	松岡 敏男 MATSUOKA, Toshio
神経内科・老年学 Neurology and Geriatrics	教授 Professor	犬塚 貴 INUZUKA, Takashi
精神病理学 Psychopathology	教授 Professor	塩入 俊樹 SHIOIRI, Toshiki
脳神経外科学 Neurosurgery	教授 Professor	岩間 亨 IWAMA, Toru
耳鼻咽喉科学 Otolaryngology	教授 Professor	伊藤 八次 ITO, Yatsuji
眼科学 Ophthalmology and Visual Sciences	教授 Professor	山本 哲也 YAMAMOTO, Tetsuya
※脳病態解析学 Clinical Brain Sciences	客員教授 Professor	篠田 淳 SHINODA, Jun

※連携分野

■ 腫瘍制御学講座 Division of Tumor Control

腫瘍病理学 Tumor Pathology	教授 Professor	原 明 HARA, Akira
免疫病理学 Immunopathology	教授 Professor	高見 剛 TAKAMI, Tsuyoshi
腫瘍外科学 Surgical Oncology	教授 Professor	吉田 和弘 YOSHIDA, Kazuhiro
消化器病態学 Gastroenterology	教授 Professor	森脇 久隆 MORIWAKI, Hisataka
血液病態学 Hematology	教授(併) Professor	森脇 久隆 MORIWAKI, Hisataka
産科婦人科学 Obstetrics and Gynecology	教授 Professor	森重 健一郎 MORISHIGE, Ken-ichirou
放射線医学 Radiology	教授 Professor	星 博昭 HOSHI, Hiroaki
疫学・予防医学 Epidemiology and Preventive Medicine	教授 Professor	永田 知里 NAGATA, Chisato
臨床腫瘍学 Clinical Oncology	教授(併) Professor	森脇 久隆 MORIWAKI, Hisataka
	教授(併) Professor	伊藤 善規 ITO, Yoshinori

■ 医療管理学講座 Division of Medical Management

医療情報学 Biomedical Informatics	教授 Professor	紀ノ定保臣 KINOSADA, Yasutomi	法医学 Legal Medicine	教授 Professor	武内康雄 BUNAI, Yasuo
総合病態内科学 General Internal Medicine	教授 Professor	石塚達夫 ISHIZUKA, Tatsuo	産業衛生学 Occupational Health	准教授 Associate Professor	井奈波良一 INABA, Ryoichi
臨床薬剤学 Clinical Pharmacy	教授 Professor	伊藤善規 ITO, Yoshinori	医学教育学 Medical Education	教授(併) Professor	鈴木康之 SUZUKI, Yasuyuki
医療経済学 Health Economics	教授(併) Professor	永田知里 NAGATA, Chisato		教授(併) Professor	藤崎和彦 FUJISAKI, Kazuhiko
救急・災害医学 Emergency and Disaster Medicine	教授 Professor	小倉真治 OGURA, Shinji		教授(併) Professor	丹羽雅之 NIWA, Masayuki

再生医学専攻 Research Field of Regeneration and Advanced Medical Sciences

■ 再生分子統御学講座 Division of Molecular Regeneration

組織・器官形成 Tissue and Organ Development	教授 Professor	國貞隆弘 KUNISADA, Takahiro	病原体制御学 Microbiology	教授 Professor	江崎孝行 EZAKI, Takayuki
神経生物 Neurobiology	教授 Professor	中川敏幸 NAKAGAWA, Toshiyuki			

■ 再生工学講座 Division of Regeneration Technology

生命機能分子設計 Molecular Design and Synthesis	教授 Professor	大沢匡毅 OSAWA, Masatake	知能イメージ情報 Intelligent Image Information	教授 Professor	藤田廣志 FUJITA, Hiroshi
--	-----------------	-------------------------	---	-----------------	-------------------------

■ 再生応用学講座 Division of Applied Regeneration

循環呼吸制御学 Cardiovascular and Respiratory Research	准教授 Associate Professor	竹村元三 TAKEMURA, Genzo	医学系倫理・社会医学 Biomedical Ethics and Social Medicine	教授 Professor	塚田敬義 TSUKATA, Yukiyo
--	----------------------------	-------------------------	---	-----------------	-------------------------

地域医療医学センター Center for Regional Medicine

■ 地域医学部門 Division of Regional Medicine

内科系分野 Internal Medicine	教授 Professor	村上啓雄 MURAKAMI, Nobuo	小児系分野 Pediatrics
産科系分野 Obstetrics			総合臨床系分野 General Medicine
外科救急系分野 Surgery and Emergency Medicine			

■ 地域・へき地医療部門 Division of Community Medicine

地域へき地総合医療分野 Community Medicine	特任教授 Specially Appointed Professor	山田隆司 YAMADA, Takashi
-----------------------------------	---------------------------------------	-------------------------

寄附講座 Department of Integral Medicine

脊椎関節再建外科学講座 (整形外科領域) Reconstructive Surgery for Spine, Bone, and Joint (Division of Orthopedic Surgery)	准教授 Associate Professor	宮本 敬 MIYAMOTO, Kei	地域医療学講座(岐阜県) Department of Community Medicine(Gifu)	特任教授 Specially Appointed Professor	山田隆司 YAMADA, Takashi
乳腺・分子腫瘍学講座 Department of Breast and Molecular Oncology	准教授 Associate Professor	二村 学 FUTAMURA, Manabu		教授 Professor	宇野嘉弘 UNO, Yoshihiro
				准教授 Associate Professor	川口順敬 KAWAGUCHI, Yoshihiro

医学部 School of Medicine

副学部長(併)

Deputy Dean of School of Medicine

清島 満

SEISHIMA, Mitsuru

小澤 修

KOZAWA, Osamu

江村 正一

EMURA, Shoichi

医学科 Medical Course

医学科長(併)

Director of Medical Course

犬塚 貴

INUZUKA, Takashi

■ 学科目 Tutorial Course

人体構造学 薬理・中毒学 内分泌代謝学 運動器学 産科婦人科学
代謝・機能学 病理学 血液学 皮膚科学 麻酔・救急・疼痛学
遺伝・発生・発達学 神経・精神・行動学 循環器・呼吸器学 感覚器医学 放射線医学
病原体学 消化器・検査医学 腎・尿路学 免疫応答学 地域・産業保健学
生命倫理・法医学

看護学科 Nursing Course

看護学科長(併)

Director of the Administration Office of Nursing Course

江村 正一

EMURA, Shoichi

基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	滝内 隆子 TAKIUCHI, Takako	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	足立 久子 ADACHI, Hisako
基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	小松 妙子 KOMATSU, Taeko	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	西本 裕 NISHIMOTO, Yutaka
基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	江村 正一 EMURA, Shoichi	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	松田 好美 MATSUDA, Yoshimi
基礎看護学 Basic Health Science and Fundamental Nursing	教授 Professor	武藤 吉徳 MUTOH, Yoshinori	成人・老年看護学 Adult and Gerontological Nursing	教授 Professor	松波 美紀 MATSUNAMI, Miki
母子看護学 Maternal and Child Health Nursing	教授 Professor	杉浦 太一 SUGIURA, Taichi	地域・精神看護学 Community and Mental Health Nursing	教授 Professor	後閑 容子 GOKAN, Yoko
			地域・精神看護学 Community and Mental Health Nursing	教授 Professor	奥村 太志 OKUMURA, Futoshi

医学教育開発研究センター Medical Education Development Center

(医学教育共同利用拠点) Collaboration Center for Medical Education

テュートリアル部門 Tutorial Education Division	教授 Professor	鈴木 康之 SUZUKI, Yasuyuki	バーチャルスキル部門 Virtual Skill Division	教授 Professor	藤崎 和彦 FUJISAKI, Kazuhiko
	教授 Professor	丹羽 雅之 NIWA, Masayuki			

事務部 Administration Office

医学系研究科・医学部 Graduate School of Medicine and School of Medicine

事務長

森田 安夫

MORITA, Yasuo

医学部附属病院 Hospital

事務部長

倉坪 弘一

KURATSUBO, Hirokazu

総務課長

臼井 清

USUI, Kiyoshi

管理課長

加藤 三一

KATO, Mikazu

経営企画課長

蓑島 博徳

MINOSHIMA, Hironori

医療サービス課長

伊藤 文雄

ITO, Fumio

附属病院 University Hospital

副院長(併)
Deputy Director of University Hospital

吉田 和 弘
YOSHIDA, Kazuhiro

村 上 啓 雄
MURAKAMI, Nobuo

五 島 光 子
GOSHIMA, Mitsuko

病院長補佐(併)
Deputy of the Hospital Director

水 田 啓 介
MIZUTA, Keisuke

診療科 Clinical Department

第 1 内 科 Internal Medicine I	科長(併) Director	森 脇 久 隆 MORIWAKI, Hisataka	眼 科 Ophthalmology	科長(併) Director	山 本 哲 也 YAMAMOTO, Tetsuya
第 2 内 科 Internal Medicine II	科長(併) Director	湊 口 信 也 MINATOOGUCHI, Shinya	耳 鼻 咽 喉 科 Oto-Rhino-Laryngology	科長(併) Director	水 田 啓 介 MIZUTA, Keisuke
第 3 内 科 Internal Medicine III	科長(併) Director	武 田 純 TAKEDA, Jun	皮 膚 科 Dermatology	科長(併) Director	清 島 眞 理 子 SEISIMA, Mariko
神 經 内 科・老 年 内 科 Neurology and Geriatrics	科長(併) Director	犬 塚 貴 INUZUKA, Takashi	泌 尿 器 科 Urology	科長(併) Director	出 口 隆 DEGUCHI, Takashi
総 合 内 科 General Internal Medicine	科長(併) Director	石 塚 達 夫 ISHIZUKA, Tatsuo	精 神 神 經 科 Psychiatry	科長(併) Director	塩 入 俊 樹 SHIOIRI, Toshiki
第 1 外 科 Surgery I	科長(併) Director	竹 村 博 文 TAKEMURA, Hirofumi	小 児 科 Pediatrics	科長(併) Director	近 藤 直 実 KONDO, Naomi
第 2 外 科 Surgery II	科長(併) Director	吉 田 和 弘 YOSHIDA, Kazuhiro	放 射 線 科 Radiology	科長(併) Director	兼 松 雅 之 KANEMATSU, Masayuki
産 科 婦 人 科 Obstetrics and Gynecology	科長(併) Director	森 重 健 一 郎 MORISHIGE, Ken-ichirou	麻 酔 科 疼 痛 治 療 科 Anesthesiology and Pain Medicine	科長(併) Director	飯 田 宏 樹 IIDA, Hiroki
整 形 外 科 Orthopedic Surgery	科長(併) Director	清 水 克 時 SHIMIZU, Katsuji	歯 科 口 腔 外 科 Dentistry, Oral and Maxillofacial Surgery	科長(併) Director	柴 田 敏 之 SHIBATA, Toshiyuki
脳 神 經 外 科 Neurosurgery	科長(併) Director	岩 間 亨 IWAMA, Toru			

中央診療施設等 Central Clinical Facilities

検 査 部 Division of Clinical Laboratory	部長(併) Director	清 島 満 SEISHIMA, Mitsuru	生 体 支 援 セ ン タ ー Center for Nutrition Support and Infection Control	センター長(併) Director	村 上 啓 雄 MURAKAMI, Nobuo
手 術 部 Operation Division	部長(併) Director	吉 田 和 弘 YOSHIDA, Kazuhiro	が ん セ ン タ ー Cancer Center	センター長(併) Director	吉 田 和 弘 YOSHIDA, Kazuhiro
放 射 線 部 Radiology Services	部長(併) Director	兼 松 雅 之 KANEMATSU, Masayuki	エイズ対策推進センター AIDS Clinical Center	センター長(併) Director	鶴 見 寿 TSURUMI, Hisashi
材 料 部 Supplies Division	部長(併) Director	湊 口 信 也 MINATOOGUCHI, Shinya	肝疾患診療支援センター Center for Liver Disease	センター長(併) Director	永 木 正 仁 NAGAKI, Masahito
輸 血 部 Division of Transfusion Medicine and Cell Therapy	部長(併) Director	清 島 満 SEISHIMA, Mitsuru	リハビリテーション部 Rehabilitation Division	部長(併) Director	清 水 克 時 SHIMIZU, Katsuji
病 理 部 Pathology Division	部長(併) Director	高 見 剛 TAKAMI, Tsuyoshi	分 娩 部 Birthing Center	部長(併) Director	森 重 健 一 郎 MORISHIGE, Ken-ichirou
総 合 診 療 部 General Medicine	部長(併) Director	石 塚 達 夫 ISHIZUKA, Tatsuo	医 療 機 器 セ ン タ ー Medical Instrument Center	センター長(併) Director	竹 村 博 文 TAKEMURA, Hirofumi
医 療 情 報 部 Medical Information Division	部長(併) Director	紀 ノ 定 保 臣 KINOSADA, Yasutomi	高次画像診断センター High-level Imaging Diagnosis Center	センター長(併) Director	兼 松 雅 之 KANEMATSU, Masayuki
光 学 医 療 診 療 部 Endoscopy Center	部長(併) Director	森 脇 久 隆 MORIWAKI, Hisataka	治 験 管 理 セ ン タ ー Clinical Trials Management Center	センター長(併) Director	伊 藤 善 規 ITOH, Yoshinori
高次救命治療センター Advanced Critical Care Center	センター長(併) Director	小 倉 真 治 OGURA, Shinji	NICU設置準備室 NICU Preparation Division	室長(併) Director	折 居 建 治 ORII, Kenji
医療連携センター Center for Medical Cooperation	センター長(併) Director	武 田 純 TAKEDA, Jun	栄 養 管 理 室 Dietary Management Division	室長 Director	田 村 孝 志 TAMURA, Takashi

医療安全管理室 Patient Safety Division

医 療 安 全 管 理 室 Patient Safety Division	室長(併) Director	村 上 啓 雄 MURAKAMI, Nobuo
--	-------------------	----------------------------

薬剤部 Division of Pharmacy

薬 剤 部 Division of Pharmacy	部長(併) Director	伊 藤 善 規 ITOH, Yoshinori
-------------------------------	-------------------	----------------------------

看護部 Division of Nursing

看 護 部 Division of Nursing	部長 Director	五 島 光 子 GOSHIMA, Mitsuko
------------------------------	----------------	-----------------------------

診療録管理室 Medical Record Management Division

診 療 録 管 理 室 Medical Record Management Division	室長(併) Director	白 鳥 義 宗 SHIRATORI, Yoshimune
---	-------------------	---------------------------------

卒後臨床研修センター Postgraduate Clinical Training Center

卒 後 臨 床 研 修 セ ン タ ー Postgraduate Clinical Training Center	センター長(併) Director	水 田 啓 介 MIZUTA, Keisuke
--	----------------------	----------------------------

内視鏡外科手術トレーニングセンター The Minimally Invasive Surgery Center for Training and Education

内 視 鏡 外 科 手 術 ト レ ー ニ ング セ ン タ ー The Minimally Invasive Surgery Center for Training and Education	センター長(併) Director	岩 田 尚 IWATA, Hisashi
--	----------------------	-------------------------

目次

序文

I 大学院医学系研究科・医学部・同附属病院の将来構想

1 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科	1
2 看護学専攻及び医学部看護学科.....	6
3 医学部附属病院.....	8

II 大学院医学系研究科

1 専攻

[医学系研究科医科学専攻]

1. 教育・研究の理念, 目標.....	9
2. 医科学専攻の構成.....	9
(1) 分子・構造学講座	
(2) 病態制御学講座	
(3) 神経統御学講座	
(4) 腫瘍制御学講座	
(5) 医療管理学講座	
3. 学生定員と入学状況.....	10
4. カリキュラムの編成方針.....	11
(1) 履修単位基準	
(2) 教育の特色	
(3) 社会人学生のための措置	
(4) 教育研究分野, 指導教員	
(5) 基礎技術トレーニングコース	
(6) 大学院特別講義	
5. 教育活動.....	19
(1) 教育活動の実施内容と方法	
6. 研究活動.....	20

[分子・構造学講座]

(1) 細胞情報学分野.....	20
(2) 分子生理学分野.....	24
(3) 薬理病態学分野.....	27
(4) 寄生虫学分野.....	33
(5) 遺伝発生学分野.....	38
(6) 内分泌代謝病態学分野.....	42
(7) 小児病態学分野.....	54
(8) 病態情報解析医学分野.....	87

[病態制御学講座]

(1) 解剖学分野.....	93
(2) 分子病態学分野.....	98
(3) 循環病態学分野.....	101
(4) 呼吸病態学分野.....	114
(5) 高度先進外科学分野.....	119
(6) 整形外科学分野.....	130
(7) 皮膚病態学分野.....	147
(8) 泌尿器科学分野.....	158
(9) 麻酔・疼痛制御学分野.....	170
(10) 口腔病態学分野.....	177

〔神経統御学講座〕	
(1) 高次神経形態学分野	182
(2) 生理学分野	185
(3) スポーツ医科学分野	189
(4) 神経内科・老年学分野	192
(5) 精神病理学分野	201
(6) 脳神経外科学分野	208
(7) 耳鼻咽喉科学分野	219
(8) 眼科学分野	226
(9) 脳病態解析学（連携大学院）分野	234
〔腫瘍制御学講座〕	
(1) 腫瘍病理学分野	239
(2) 免疫病理学分野	245
(3) 腫瘍外科学分野	248
(4) 消化器病態学分野	260
(5) 血液病態学分野	281
(6) 産科婦人科学分野	287
(7) 放射線医学分野	291
(8) 疫学・予防医学分野	302
(9) 臨床腫瘍学分野	307
〔医療管理学講座〕	
(1) 医療情報学分野	314
(2) 総合病態内科学分野	320
(3) 臨床薬剤学分野	328
(4) 医療経済学分野	334
(5) 救急・災害医学分野	337
(6) 法医学分野	347
(7) 産業衛生学分野	350
(8) 医学教育学分野	353
7. 学位の授与状況と研究成果	365
8. 学生生活支援	365
(1) 奨学金の申請・採択状況	
(2) 授業料免除実施状況	
9. 自己評価・課題と展望	365
〔医学系研究科再生医科学専攻〕	
1. 教育・研究の理念、目標	366
2. 再生医科学専攻の構成	366
(1) 再生分子統御学講座	
(2) 再生工学講座	
(3) 再生応用学講座	
3. 学生定員と入学状況	367
4. カリキュラムの編成方針	368
(1) 履修基準	
(2) 教育研究分野, 指導教員	
(3) 基礎技術トレーニングコース	
(4) 大学院特別講義	
5. 教育活動	371
(1) 教育活動の実施内容と方法	
6. 研究活動	373
〔再生分子統御学講座〕	
(1) 組織・器官形成分野	373
(2) 神経生物分野	378
(3) 病原体制御学分野	382

〔再生工学講座〕	
(1) 生命機能分子設計分野	393
(2) 知能イメージ情報分野	399
〔再生応用学講座〕	
(1) 循環呼吸制御学分野	411
(2) 医学系倫理・社会医学分野	415
7. 学位の授与状況と研究成果	419
8. 学生生活支援	419
(1) 奨学金の申請・採択状況	
(2) 授業料免除実施状況	
9. 自己評価・課題と展望	419
〔医学系研究科看護学専攻〕	
1. 教育の理念, 目標	421
2. 看護学専攻の構成	421
(1) 看護学教育領域	
(2) 実践看護学領域	
3. 学生定員と入学状況	421
4. カリキュラムの編成方針	422
(1) 履修基準	
(2) 教育研究分野, 指導教員	
5. 教育活動	425
(1) 教育活動の実施内容と方法	
6. 学位の授与状況と研究成果	426
7. 学生生活支援	426
(1) 奨学金の申請・採択状況	
(2) 授業料免除実施状況	
(3) 学生の保険加入	
8. 自己評価・課題と展望	427
(1) 看護学教育領域	
(2) 実践看護学領域	
〔その他関連施設等研究活動〕	
(1) 附属病院輸血部	429
(2) 附属病院病理部	432
(3) 地域医療医学センター (内科系分野)	436
(4) 地域医療医学センター (外科救急系分野)	444
(5) 地域医療医学センター (小児系分野)	447
(6) 地域医療医学センター (総合臨床系分野)	455
(7) 地域医療医学センター (地域へき地総合医療分野)	457
(8) 医学教育開発研究センター (テュートリアル部門)	461
(9) 医学教育開発研究センター (バーチャルスキル部門)	469
(10) 寄附講座「脊椎骨関節再建外科学講座 (整形外科領域)」	476
(11) 寄附講座「地域医療学講座 (岐阜県)」	485
(12) 寄附講座「乳腺・分子腫瘍学講座」	489
(13) 保健管理センター (学内施設)	491
(14) 生命科学総合研究支援センター (ゲノム研究分野)	506
(15) 生命科学総合研究支援センター (嫌気性菌研究分野)	511
(16) 人獣感染防御研究センター (プリオン研究部門)	515
(17) 大学院連合創薬医療情報研究科 (医療情報学専攻)	521
2 教員組織	
1. 専任教員と非常勤講師等の配置状況	531
(1) 専任教員の配置状況等	
(2) 非常勤講師の配置状況	
(3) 客員臨床系医学教授等	

(4) 臨床教授等	
2. 教育補助者と研究補助者の配置状況.....	533
(1) ティーチング・アシスタントの実施及び活用状況	
(2) リサーチ・アシスタントの配置状況	
3. 採用, 昇任等の方法.....	534
(1) 採用, 昇任の選考基準と選考方法	
(2) 非常勤講師の選考基準と選考方法	
4. 兼業・兼職の基準と状況.....	534
(1) 兼業・兼職の基準	
(2) 兼業・兼職の状況	
3 施設・設備	
1. 施設・設備の現状・整備状況.....	535
(1) 医学部・附属病院の移転整備の経緯	
(2) 医学研究科・医学部新施設の特徴	
(3) 附属病院の特徴等	
(4) 医学部看護学科新施設の特徴	
4 国際交流	
1. 留学生の受入れ体制と状況.....	536
2. 留学生の教育・研究指導の方法と体制.....	537
(1) 留学生センター	
(2) チューター	
3. 在学生の海外留学・研修の状況.....	537
4. 教員の在外研究の状況.....	538
5. 外国人研究者の招致の状況.....	538
6. 海外の大学との学術交流協定の締結状況.....	540
5 社会との連携	
1. 公開講座の開設の方針と状況.....	541
2. 地域社会での活動状況.....	541
3. 生涯学習への対応状況.....	542
4. 奥穂高岳夏山診療所.....	543
6 岐阜薬科大学との連携.....	543
7 管理運営, 財政	
1. 教授会(教授会議), 各種委員会の構成と活動状況.....	546
(1) 教授会(教授会議)の構成員, 任務, 意志決定方法, 意志伝達方法	
(2) 各種委員会の設置年度, 任務(運営方針), 意志決定方法, 意志伝達方法	
2. 教育・研究に関する意志決定方法と体制.....	548
(1) 教育に関する意志決定システム	
(2) 研究に関する意志決定システム	
3. 事務組織と事務職員の配置状況.....	548
(1) 現状	
(2) 点検・評価	
(3) 改善・改革と展望	
4. 予算編成と執行(配分)の方針と状況.....	549

Ⅲ 医学部医学科

1 教育の理念・目標等	
1. 教育の理念と目標.....	551
2. 教育の活性化と充実の経過.....	551
3. 教育の将来構想.....	551
(1) 基本理念	
(2) 教育体制	
2 教育活動	

1. 学生の受入れ.....	552
(1) 学生募集の方法	
(2) 入学者選抜の方法と方針	
(3) 学生の受入れ状況	
(4) 編入学制度と実態	
(5) 研究生の受入れと実態	
2. カリキュラム.....	554
(1) カリキュラムの編成方針	
(2) 教育活動の実施内容と方法	
(3) 課題と展望	
3. 教育方針.....	557
(1) 教育改革	
(2) 全学共通教育	
(3) 各テュートリアルコースの授業計画（シラバス）の作成及び学習内容の調整	
(4) 臨床実習	
(5) 新入生合宿研修	
(6) 臨床実習資格総合判定試験（共用試験 CBT, OSCE）	
(7) 他大学における授業科目の履修の方針と状況	
(8) 在籍，留年，休学，退学の状況	
(9) 教育施設・設備の現状	
(10) 成績の評価，認定の基準	
(11) 医師国家試験合格状況	
4. 学生生活への配慮.....	560
(1) 奨学金の種類と採択状況	
(2) 授業料の免除の状況	
(3) 学生生活相談の体制と実態	
(4) 課外活動の実態	

IV 医学部看護学科

1 教育・研究の理念・目標等	
1. 教育・研究の理念と目標.....	563
2. 教育・研究の活性化と充実の経過.....	563
3. 教育・研究の将来構想.....	563
(1) 基本理念	
(2) 教育体制	
(3) 研究体制	
2 教育活動	
1. 学生の受入れ.....	564
(1) 学生募集の方法	
(2) 入学者選抜の方法と方針	
(3) 学生の受入れ状況	
(4) 編入学制度と実態	
(5) 研究生の受入れと実態	
2. カリキュラム.....	566
(1) カリキュラムの特徴	
(2) カリキュラムの構築	
(3) 課題と展望	
3. 教育方針.....	567
(1) 教育改革	
(2) 全学共通教育	
(3) 専門教育	
(4) 他大学における授業科目の履修方針と状況	

(5) 在籍, 留年, 休学, 退学の状況	
(6) 教育施設・設備の現状	
(7) 成績の評価, 認定の基準	
(8) 看護師等国家試験合格状況	
(9) 学生の就職状況	
4. 学生生活への配慮.....	571
(1) 奨学金の種類と採択状況	
(2) 授業料の免除の状況	
(3) 学生生活相談の体制と実態	
(4) 課外活動の実態	
3 研究活動	
【基礎看護学講座】	
(1) 基礎看護学分野.....	572
(2) 生命機能学分野.....	576
【母子看護学講座】	
(1) 母性看護学分野.....	579
(2) 小児看護学分野.....	582
【成人・老年看護学講座】	
(1) 成人看護学分野 (慢性期).....	585
(2) 成人看護学分野 (急性期).....	588
(3) 老年看護学分野.....	592
【地域・精神看護学講座】	
(1) 地域看護学分野.....	596
(2) 精神看護学分野.....	600

V 附属病院の現状と課題

1 病院の理念・組織・運営等	
1. 理念・基本方針.....	603
(1) 理念	
(2) 基本方針	
(3) 職業倫理・臨床指針	
2. 組織, 運営.....	603
(1) 組織	
(2) 科長会議	
(3) 病院運営会議	
(4) 病院経営企画会議	
(5) 大学経営戦略検討会議附属病院検討部会	
(6) 附属病院各種委員会の設置年度, 任務 (運営方針), 意志決定方法, 意志伝達方法	
(7) 事務組織と事務職員の配置状況	
2 診療活動の現状と課題	
1. 診療体制.....	608
(1) 臓器別診療	
(2) 診療科の連携	
(3) 高度救命救急センター	
2. 活動状況.....	609
(1) 第一内科.....	609
(2) 第二内科.....	613
(3) 第三内科.....	616
(4) 神経内科・老年内科.....	618
(5) 総合内科・総合診療部.....	620
(6) 第一外科.....	623
(7) 第二外科.....	626

(8) 産科婦人科.....	629
(9) 整形外科.....	632
(10) 脳神経外科.....	635
(11) 眼科.....	637
(12) 耳鼻咽喉科.....	639
(13) 皮膚科.....	642
(14) 泌尿器科.....	644
(15) 精神神経科.....	646
(16) 小児科.....	647
(17) 放射線科.....	651
(18) 麻酔科疼痛治療科.....	654
(19) 歯科口腔外科.....	656
(20) 検査部.....	658
(21) 手術部.....	660
(22) 放射線部.....	663
(23) 材料部.....	665
(24) 輸血部.....	667
(25) 病理部.....	670
(26) 医療情報部.....	672
(27) 光学医療診療部.....	673
(28) 高次救命治療センター.....	676
(29) 医療連携センター.....	678
(30) 生体支援センター.....	681
(31) がんセンター.....	686
(32) 肝疾患診療支援センター.....	690
(33) エイズ対策推進センター.....	692
(34) 分娩部.....	694
(35) リハビリテーション部.....	695
(36) 医療機器センター.....	696
(37) 治験管理センター.....	698
(38) 高次画像診断センター.....	699
(39) 薬剤部.....	700
(40) 看護部.....	703
(41) NICU 設置準備室.....	705
(42) 診療録管理室.....	707
3. 診療スタッフ.....	709
(1) 診療要員の配置状況	
(2) 診療支援要員の配置状況	
(3) 看護要員の配置状況	
4. 先進医療.....	710
(1) 先進医療	
(2) 高度先進医療技術の開発導入	
5. 地域医療の取り組み.....	710
(1) 地域医療の確保	
(2) 難病医療拠点病院の指定	
(3) 都道府県がん診療連携拠点病院の指定	
(4) エイズ中核拠点病院の指定	
(5) 肝疾患診療連携拠点病院の指定	
(6) 岐阜県予防接種センターの機能	
(7) 三次周産期医療ネットワーク岐阜県予防接種センターの機能	
(8) 臓器提供連絡調整員の配置	
6. 卒後臨床研修の状況.....	711
(1) 初期臨床研修	

(2) 後期臨床研修	
7. 外来患者数及び入院患者数	714
(1) 外来患者数	
(2) 入院患者数, 病床稼働率及び平均在院日数	
8. 診療用施設・設備等の整備	714
9. 病院経営・財務の状況	714
(1) 病院経営について	
(2) 財務状況	
10. 各種療法等の届出状況	716
11. エイズ拠点病院としての診療体制	718
12. 医療関連(院内)感染対策	718
13. 医療安全対策	720
(1) インシデント報告とその対策	
(2) 医療安全に係る職員教育	
(3) 院内ラウンド	
(4) 医療安全マニュアルの策定	
(5) ニュース・トピックスの発行	
(6) 国立大学病院間相互チェック・医療法第 25 条による立入検査	
14. 入院基本料・入院時食事療養の状況	722
(1) 入院基本料	
(2) 入院時食事療養	
15. 病院ボランティア	722
16. 院内学級	722
17. 院内図書室	723
18. 医薬品の臨床試験の実施方針	723
19. 広報	723
(1) ホームページのリニューアル	
(2) 広報誌「鵜舟」の充実	

VI 自己評価

1. 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科	725
2. 看護学専攻及び医学部看護学科	736
3. 医学部附属病院	737

I 大学院医学系研究科・医学部・
同附属病院の将来構想

1 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科

大学院医学系研究科長・医学部長 犬塚 貴

現状から将来構想へ

遷延、拡大する新臨床研修医制度の影響

2004年に導入された新臨床研修医制度は本学卒業生の都市部への流出、市中病院への移行を生じ、学内の研究体制、地域医療体制の脆弱化を招き、大学間格差を大きくしている。押し寄せる大学群構想の中で本学の自立を維持していくには戦略的な努力が必要である。新臨床研修医制度は、研修の質の保証と出身大学の混ざり合いの重要性を謳いながら、新規卒業生に経済的好遇と職場選択の自由を満喫させ、それを享受した初期臨床研修医が研修後、より一層大学に戻りにくくなった。周辺の公的病院も含め初期臨床研修医の待遇は、近年、大学の常勤教員を上回るような勢いである。振り返ってみると国立大学時代の研修医・医員の身分、給料、労働実態は、世間一般から見えにくかったが、甚だしく劣悪であり、大学院生の奨学金制度も生活支援という面からは極めて不十分であった。今なお基本的に改善されていない。医師集団は長年の慣行ということで受け入れてきた。そもそも処遇に対し公式に不満を述べるのはタブー視されてきたのである。また、いわゆる外勤が問題から目を反らせてきた。国がこのような状況を放置したまま制度を導入したため、都会地の歴史のある大学を除き、多くの大学が苦境に立たされることになったのは当然のことであった。卒業生の半数以上が大学病院を選択しないことを、あたかも大学の努力不足とする論調には同意できない。結果的に従来の「いわゆる」医局の教育的見地を加味した指導的地域循環型人事が行き詰まり、非都会地の地域中核病院の医療は崩壊しかけた。その責任を一方的に大学に押し付け、「大学による地域医療の再生を期待する」と言うに至ってはあきれ果てるばかりである。当面は都会地も相対的医師不足であり、当地に流出した若手医師は生活に困ることはないだろうが、キャリア教育を満足に受けていない多くの医師にとって、50年に亘る医師としての人生を浮遊して終わるとしたら気の毒である。

新臨床研修医制度の理念の良し悪しは置くとして、導入にあたり必要だった、大学病院医師の然るべき待遇改善とキャリア教育は直ちに取り組むべきことである。大学病院は学び教えるモチベーションをもつ者が構成する場であり、特別に良い待遇は不要と思うが、専門的な知識と技術をもって昼夜を分かたず、病む人に対応する仕事の内容からみても、日雇いは不適切である。年金積み立ての問題があるなら年俸制でもよい。もし、多くの医員を医師として正規雇用できないのであれば、大学病院の制度設計に問題があると思われるので、我々年配の医師も、自らの昔の経験を若手医師に押しつけるのではなく、改善に立ち上がるべきである。求める正規雇用は、大学病院の使命を全うする意志を持つ者に対して行うものであり、その意志を失った時には速やかに退職し、若手の道を塞いではならない。そのためにも、しっかりと任期制を同時に導入しなくてはならない。また、これまでの医学教育の中で欠落していたキャリア教育を確立すべきである。ここで言うキャリア教育とは単なる就職のことではなく、専門職としての医師としてどのように生きて社会に貢献していくか、ということである。医局と対立するものではなく、むしろそのような考えをしっかりとつ者が医局に集い、それぞれの自己実現に必要な専門的な指導を得て、高度先進医療への挑戦、研究、臨床経験の共有、地域医療への協力、生涯を通じた随時再教育、学外との学術・医療交流などをしていくべきである。外勤の問題は一括りにできないが、外勤受け入れ希望医療機関が大学病院に一定の寄附を行い、医員の正規雇用の原資の一部にあて、大学病院としての地域貢献の一環として、外勤命令を出すようなしくみも考慮できないだろうか。

研究体制の危機と活性化

新臨床研修医制度は卒業生を学外に押しやったばかりか、卒業生のほぼ全員を2年間臨床研修に専念させることによって、学部から研究科への研究志向の流れを断ち切る存在にもなっている。本学でも大学院入学者が減少している。近年、全国的に若手医師の研究志向が鈍化してきているが、このことが大きな理由である。その他に、医療の高度化と専門医制度による臨床への傾斜、研究者の処遇・ポスト数・研究費の問題、基礎医学自身の魅力の問題などが挙げられている。本学における基礎研究者指向は以前から高くはなかったが、新臨床研修医制度によって以前なら基礎に行ったかもしれない人が初期研修後も臨床に留まる例、臨床分野における入局者の減少・診療の高度化・多忙化などで、臨床分野の院生が基礎に行けなくなったことが、基礎研究における若手医師の枯渇を招いており、将来の指導者育成の観点からも深刻である。最近、岡山大学等が導入した、初期臨床研修期間に社会人大学院を重ね、卒前から研究マインドを切れ目なく育てる方法は、文科省も推奨しており、本学でも検討に価する。研究体制の危機は、新臨床研修医制度・国立大学法人化と

ほぼ同時に始まった、毎年1%の件費削減にもよるところも大きい。医学部・研究科に限っても毎年助教2.5人相当分が削減され、医学科の設置基準を満たす工夫も限界にきている。各分野の教員は3名体制も危機的となり限界集落化している。技術職員は法人化以前からの削減の方針が維持されており、医学部特有の専門的技術の担い手の消滅も危惧されている。こうした中で複合講座の統廃合の議論もあったが、学問領域の広がり確保したいこと、厳しい選考過程を踏んで選ばれた意欲に燃えた人材が一人でも多く本学に存在することの方が、より望ましいと考えてきた。若い人達が大学に集まるかどうかという本質的な問題は、言うまでもなく、魅力ある研究・診療が大学でどれだけ展開されているかということである。研究の動向を左右する、教授の選考においては研究領域の慎重な検討を行い、選考委員による積極的なリクルートを展開してきた。少数ながら「任期付きの重点化助教」の競争的獲得も、毎回業績の高い人材が選出され、ある程度の人数は、このような制度で活性化を図るべきと思われる。研究の活性化には教員ポストの増加が必要であるが、この3年間の教員増加は、文科省などのプロジェクト獲得によるもの、学生入学定員増に伴う措置、病院では「拠点病院」の獲得による自治体からの補助、大型研究費獲得による外部資金によるものであるが、いずれも若干名で削減数をカバーできないでいる。なお、平成24年度には企業・自治体等からの寄附講座が4つ設置される予定である。臨床系の分野では病院収入による病院教員の増員に頼っているが、この先無限というわけにはいかないだろう。

研究の活性化、若手研究者の育成を考え、共通実験室機器の整備に加えて、若手研究者を対象に多分野・異分野・岐阜薬科大学との共同研究助成に研究科長裁量経費をあててきた。他組織との研究情報や技術の交換は、新たな視点に基づく研究を推進するために大切であり、大型プロジェクトにいつでも参画応募できる準備にもなる。助成をうけた研究者による研究報告発表会、ビッグジャーナル掲載報償企画、同窓会の寄附に基づく「基礎系大学院・留学スカラシップ」や基礎分野院生の奨学金制度の活用を行った。しかし、基礎分野院生の生活支援にまでは及んでいない。また海外留学からの帰学者への研究費支援も行ってきたが、帰国後の研究継続と持ち帰った技術の波及効果を図るために重要である。2010年、本学に隣接して移転した岐阜薬科大学との連携も、学部学生の教育研究指導に関する覚書、医薬連携推進部会、臨床研究推進支援助成も創られ成果が期待されている。こうした施策努力にも関わらず、若手研究者の減少は、結果として英文原著論文の数、総インパクトファクター(IF)の減少をきたした。さらに論文当たりのIFも減少しており質の低下も危惧される。学生時代から医学研究のおもしろさに接し、将来研究に携わる気持ちを育てるために、学生が比較的気楽に参加できる大学院コース(MD-PhDコース)を2009年春に設置したが僅か2名の参加に留まった。カリキュラム上、多忙になった学生にとって大したメリットがないことによるものと思われた。

もちろん活発に展開している研究もある。ITを利用した救急医療体制の構築に関する研究は、経済産業省の支援を得て、多くの企業が参加して進行している。文科省知的クラスター事業の後継である、都市エリア産学官連携促進事業が2009年に採択され、医工連携、産学協同の理想的な発展を遂げている。その成果の一部は2010年に人間医工学研究開発センターとして発展した。また医療画像情報処理による医師のコンピュータ支援診断の開発も実用化に迫っている。iPSに関する研究も、歯髄幹細胞からの誘導やCell processingセンターの設置により基礎・臨床の多分野で広がっている。リプログラミングによる分化制御の研究の一部がCell Stem Cell (Yamada Y, et al, 2010)に掲載され、主任研究者は京大iPS細胞研究所の教授に昇進した。糖尿病の発症機序の解明と遺伝子診断法の開発、体脂肪減少因子を用いた2型糖尿病の治療、循環器リスクと耐糖能の効率的な健診マーカーの探索、食物アレルギー対策食品の創生、アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドライン、先天性ケトン体代謝異常症に関する研究、核内受容体蛋白を分子標的とした肝臓化学予防の研究などが、大型の競争的外部資金等を獲得して進行中である。

ここ数年の間に、個人情報保護、臨床研究の指針、利益相反、動物愛護など倫理的観点から、非常に多くの手続きが日常的に必要になり、研究の立案の段階で立ち往生してしまうことも多くなっている。また臨床研究の途上・終了時での報告も求められるようになり、臨床研究推進への抵抗感も否めない。学術上、正当な取り組みであることを保証してもらうことが、最終的には研究者と国民の利益に適うと改めて考えることが必要である。

大学の連携、大学群への動向

今世紀に入って道州制や国立大学の統廃合の議論がなされてきたが、2011年、行政刷新会議の「提言型政策仕分け」では国立大学の数、教育レベルなどについても厳しい改革提言がなされた。東海地方においては、同年、東海4県国立大学包括連携が事務管理部門を軸に調印された。また学生の研究志向を育てるという目的で、学生リトリートと教員のFDを内容とする東海6大学研究医養成コンソーシアムも名古屋大学を中心に動きだそうとしている。同大の先端医療・臨床研究支援センター、トランスレーショナルリサーチクラブによる本学を含む周辺大学・企業への参加呼びかけもなされている。2012年度予算には国立大学改革強化推進事業費が新規で認められた。国際的な知的競争が激化する中で、大学の枠を超えた連携の推進や、大学の

個性・特色の明確化などを通じた国立大学の改革強化を推進するという目的であるが、大学の層別化が進むことが予想される。一法人複数大学方式、いわゆるアンブレラ方式の導入も示唆されている。前述のように新臨床研修医制度、国立大学法人化で極度に脆弱化されてきた本学にとって、こうした動向は危機的である。本学が名誉ある状態で生き残るためには、或いは大学群の中で煌めいて活躍するには、何としても若手研究者を確保することであり、その上で、学内外との主体的な連携をしていくことが重要である。大学群は地域だけでなく、研究領域、産業界、海外連携など様々なものを想定して、それぞれの群の中で光ることができる分野・チームを学内に育てていく必要がある。そういう意味で「出る杭」を育てる風土も大切である。また現実的な対応として、大学群の中心となる施設をもり立てていくことが、結果として本学の研究費の獲得につながる局面もあると考えられる。いずれにしても若い人材の確保と共に研究費の確保、社会に向けた適切な発信、活動結果に対する客観的評価を受けることが必要である。

地域枠と地域医療医学センター

本学の地域枠は、臨床研修医制度導入を機に顕在化された本県の地域医療の窮状を救うために、国の緊急的な施策に沿って 2008 年度に設置された。本学科の入学定員は 2008 年春に 80 名から 90 名に、2009 年度に 100 名、2010 年度に 107 名と 34% の増加となった。但し、それに伴う国による教員増はごく僅かであった。地域枠制度の効果が発揮されるまでには、順調な経過でも約 10 年かかることは周知のことである。本学は、地域医療に実効性が発揮でき、且つ当事者の発展的な長期的キャリアを支援するために、2007 年度に全国に先駆け地域医療医学センターを設置した。岐阜県からは学生への修学資金貸付けと 2011 年度までの期限付き寄付講座「地域医療学講座」の協力があつた。2009 年度には岐阜県の主導で、地域枠卒業生の研修や指定勤務を確保するために、本学と県内の主要病院で岐阜県医師育成・確保コンソーシアムを立ち上げた。

本学の地域医療医学センターは、2007 年度に「単に医療だけでなく教育と質の高い研究によって裏打ちされたものにする」という理念を掲げて部局内に設置された。これまで、地域枠学生の継続的な面接指導、入試業務、地域医療に関心をもつ学生のための地域医療実習および地域医療ゼミの実施、看護学科での保健医療福祉活動体験地域実習（選択）導入の検討、将来の地域医療の人材確保をめざした地域枠推薦入試希望の高校生を対象にした授業や説明会、初期研修医の「地域研修」の整備と調整、岐阜県や自治医大関係組織との交流と連携、地域医療の実態に関する調査研究を行ってきた。また、女性医師問題についても県医師会と共に牽引的役割を果たし、女性医師就労支援の会（2010 年）、全学的な男女共同参画事業（2011 年）の立ち上げに貢献した。センター設立当時 10 名であった地域枠の定員も 25 名と増員され、まもなく在学者が 150 名となり、2014 年春には地域枠一期生が卒業する。膨大な地域枠学生・卒業生に対して責任をもった指導体制が必要になった。また当初掲げられた、横断的総合臨床医の理念を踏まえつつも、各人の卒後の指定勤務と将来設計を支援する後期研修プログラムの整備に向けて、各医局やコンソーシアム構成病院との審議・調整が始まろうとしている。まさにセンターにとっては正念場であり、2012 年 4 月からのセンター組織の再構築を行った。センターの目的は「地域における医療体制の確保という社会的課題に抜本的に対応するため、地域医療に関する学生教育、地域医療を担う医師の養成及び地域医療に関わる機関との連携並びに地域医療の学術的な研究を行うこと」と謳われた。業務として、1. 医学科地域枠学生の継続的な指導及び支援に関すること。2. 医学科地域枠卒業生の指定勤務遂行状況の把握に関すること。3. 地域医療の状況とニーズの継続的な把握に関すること。4. 地域医療・医学の構築のため、地域行政機関、岐阜県医師育成・確保コンソーシアム及び医療機関との連携に関すること。5. 臨床、基礎及び社会医学を基盤とした地域医療学の教育・研究に関すること。6. その他地域医療医学に関し必要な事項とされた。本学は岐阜県の医療の充実のために、自治体と連携して難局を乗り越えるために責任ある行動を取る必要がある。一方で過大な期待を寄せられることも多い。教育と医療に関わる専門家として、行政や県民に向けて適切な情報発信をすることが非常に重要である。なお、地域枠の制度は新臨床研修医制度の「混ざり合う」理念とは全く異なるものであるので、地域枠卒業生が初期臨床研修のマッチングを行う際には、当該地域内に確実にマッチされるしくみと、彼らのマッチが、通常学生のマッチを阻害しないしくみが必要であり、医学部長病院長会議、県を通じて厚労省に検討を求めているが未だ明確にされておらず問題となっている。

岐阜県医師育成・確保コンソーシアム

2010 年 9 月、岐阜県の働きかけで、岐阜県医師育成・確保コンソーシアムが設立された。これは本学医学部・附属病院と、多くの研修医が集まる県内の病院（県総合医療センター、岐阜市民、松波総合、大垣市民、中濃厚生、木沢記念、県立多治見、高山赤十字）が構成病院となり、地域の病院や医師会との連携のもとに、初期臨床研修および同研修を終了した地域枠医師を主な対象として、効果的な研修プログラムの提供や各医師のキャリアアップ支援を行いつつ地域医療を確保しようというものである。コンソーシアムでは各病院における臨床研修プログラムの作成協力、臨床研修医向けセミナーや厚労省に指針に則った臨床研修指導医育

成講習会の開催等を行う一方、県修学資金貸付者等には本人の意向を踏まえながら、各構成病院および大学の各医局が作成した多様な研修プログラムを呈示する。これらのプログラムの履修によって、単に指定勤務の義務年限が果たされ、地域の医療が確保されるだけでなく、各研修医が自らの将来につながるキャリアを積み上げることができるような仕組みになっている。現在、地域枠一期生が卒業する 2014 年に向けて準備が進められているが、過大な期待を抱く自治体、各病院・診療科・大学の利害の錯綜、地域枠学生・卒業生のモチベーションの維持など大きな課題が待ち受けている。本学は岐阜県における唯一の医学教育機関として地域医療医学センターを中心として、これらの調整に大いに貢献していくべきである。このコンソーシアムの取り組みは、地域医療再生事業および県の支援を受けているが、事務局は県から独立して本学の地域医療医学センター内に設置されている。このコンソーシアムは医師の派遣斡旋や地域医療の陳情窓口ではない。切羽詰まった医療過疎地域や県の熱心な担当者によっては即効性・実効性を求めるあまり、過剰な期待を抱かれることもある。医学生の教育、若手医師の育成過程や医療のしくみ等、基本的なことを理解していただくために、継続的に懇切丁寧な説明が必要である。

教育

学生の能動的な学習習慣の確立を目的にテュートリアル教育が導入されて 15 年以上経過した。その評価は卒業後長期の追跡調査や、群間比較ができないことなどの困難があり、導入後の国試合格率の増加、授業態度の改善など一時的なエピソードに限られている。テュートリアル教育不要論もあるが、本学のハイブリッド型テュートリアル教育における講義の出席率は、過去の講義のみの時代に比べると遙かに高い。コアタイムのあり方については、新しい学習領域のスタート時期に相応しいかどうか、基本的知識があつてこそ有意義だとする意見、その実施回数について、近年議論が多く交わされるようになった。コアタイムにおいて、症例の診断到達がゴールだと勘違いする傾向がある。病因、病態や当該疾患領域の研究動向への深まりがあるとよい。アドバンス講義や抄読会など、伸びる可能性がある学生への配慮がもっとあつてもよい。そこでは学生と教員とのより密接な学問的接触も期待できる。最低限度を示したコアカリキュラムのレベルに学生を安住させない工夫、リサーチマインドを涵養する取り組みが必要である。医学教育企画評価室と当該分野等によるテュートリアル各コースの振り返り、チューター評価の改善が進んでいるが、学生による授業評価は途上である。テュートリアル教育システム運用の改良、或いは次世代型教育システムの開発が必要がある。

卒業後初期研修の見直しの中で、卒業前臨床実習の充実が求められている。また卒業前臨床実習の確保について ECFMG から勧告があり、臨床参加型実習の整備が課題となっている。同時に卒業試験、国家試験対策で明け暮れる 6 年生のあり方も問題になっている。基本的知識は CBT で確認し、医師国家試験を臨床実習の成果を求めるようなものにすれば、6 年生がもっと実習に参加できるのではないかとされている。ただ臨床参加型実習には、より多くの教員の貢献が必須であり、学生定員の増加に伴い、十分な教員が増えていない現状では極めて厳しいものがある。教員側の指導方法の工夫、学外教員の協力、学生が行うことができる医行為の法的整備など解決すべき問題が多い。

近年、全国的な現象であるが、本学でも一部学生の引きこもり、勉学意欲の低下が問題になっており、保護者の協力を得るため、2011 年から入学時に学生の了承を得て成績表の送付を始めた。また 1-2 学年において在学できる年限は 4 年までとする関門年齢を設定して、早期の進路変更配慮することにした。国試浪人には心身の健康を確認し、できるだけ専門予備校での勉強専念を勧めている。また、情報ネット空間での振る舞い、個人情報取り扱いの問題など、過去に例のない新たな問題が生じており、学生に対して、医師・医療者としての使命感、責任感、倫理観をしっかりと育てるため、情報倫理の教育に力を入れることを再確認した。教員の学生との関わりは授業、課外活動、里親制度など多面的に用意してあるが、学生の多様化、個別化、仮想世界への耽溺が進んでおり、教職員と学生、学生相互のコミュニケーションを意識的に確保していくことが重要である。

課外活動では、2010 年に第 62 回西日本医学生体育大会（西医体）で総合優勝に輝き開学以来の快挙となった。移転後は全学 1 クラブ制となっているが、医学生の授業・実習時間等を考えると、全学との合同クラブは難しい面があり、独自の練習施設の確保に理解をもつ必要がある。文化系クラブについては医学部記念会館 1F に共用ミーティング室の設置、学生棟の防音改装を行うことになった。

本学の国際化を進める観点から、また学生個人が海外に出てカルチャーショックを受けることが望ましいことから、臨床実習（6 年生）では海外研修を推奨している。医学教育開発研究センターでは、外国人講師や前年経験した学生の協力を得て海外研修のサポート講座を開催し、GM 会の経済的支援も用意されているが、参加者は毎年 10 名足らずであり、今後増やしていくべきである。一方、韓国の忠北大学、タイのチェンマイ大学から不定期であるが学生実習生を受け入れている。学生の相互実習交流は本学の国際化に重要であり、個別の教授のみに依存せず、学生クラブの設立や大学、自治体等の協力を得て発展させていく必要がある。

入学試験は競争倍率が前期、後期共に全国の医学科の中で最高となり、全国的に注目されている。高倍率

の理由の一つは2次試験の配点が大きく、センター試験で偶々失敗した者に挽回の機会を与えていること、二つ目は前期試験のみにシフトした大学がかなりあること、また本学の前期・後期試験は面接を課していない数少ない大学であることも理由の一つだという指摘もある。2011年度後期試験では100倍近くになり、会場、監督員、採点教員の確保に苦心したが、危機管理上の観点から2012年度からは40倍での2段階選抜を実施することになった。入学試験をめぐっては問題作成、採点、面接、監督等教員の負担が大きく、特に負担が特定の教員に集中する傾向が問題になっており、特任教員の採用やさまざまな工夫が必要である。

本学および全国の医学教育を牽引してきた、医学教育開発研究センターは、2010年に医学系の教育分野では全国唯一の全国共同利用拠点に採用され、2011年には同センター開設10周年を祝った。現在「多職種連携医療法の開発とFDの全国展開」などのプロジェクトを遂行中であるが更なる発展が期待される。

人事評価、組織評価

本学では2005年度から教員の個人評価が始まり、さらに35歳から6年毎に閉門年齢を定め部局長・学長による総合評価を行っている。特に59歳における閉門は退職年齢の選択、例外はあるが給料の1割減、選択した定年までの計画書の作成などを伴っており、定年までの惰性的な仕事を避けるには良いしくみであろう。閉門時の総合評価の項目については「格段に優れている」「おおむね良好」「要努力」しかなく、「要努力」者への警告と社会に向けて評価をしていることを示すことが主眼と見られている。一方で、努力している教員には「格段」、「おおむね」の基準が曖昧で違和感が寄せられている。特に「おおむね」の表現は、あまり角がたたない、幅のある便利な「文部業界用語」で、法人化以降よく聞く。ただ「おおむね良好」は「良好」まで到達していないニュアンスがあり、違和感の原因になっている。評価制度は「要努力」者への警告も必要であるが、優れている面を積極的に評価して待遇につなぎ、本人の意欲や大学の活性化に結びつくことで有意義と言えるものである。今後の評価方法の改善が必要である。

法人化と共にスタートした第1期6年(2004年-2009年)の中期目標の最終評価が2010年にまとめられ、医学系研究科・医学部はすべての面で「期待される水準にある」という評価となった。第1期中期目標の中間評価では、教育・研究の「質の向上」が読み取れないということで厳しい評価となっていた。評価者にわかりやすい説明と根拠資料が届くことが必須であり、最終評価までの間、多くの教職員にお世話になったことを、まずお礼申し上げたいと思う。それにしても評価とは何か、と深く考えさせられた。「読み取れない」ことを理由に、質の向上がみられない、追記・修正無用という一方的な「中間評価」通知はいかがなものか。「読み取れない」のであれば、評価できない、という差し戻しが常識的であろう。評価の目的を考えると、途中は形成的な評価を望みたい。第1期は評価項目も非常に多く、中には抽象的でどのような回答をすべきか難しいもの、重複的なものもあった。第2期は項目もやや絞られ、目標の自己設定も進められたが、今後は数値等で示せるものだけが目標とされる危惧を感じる。現場に「評価疲れ」という言葉のみが残ることは避けたい。評価を通じて「期待される水準にある」というような、言葉をもらうのが本質的な目的ではない。評価を通じて本学の良い点を見出し、それを伸ばすという視点がなければ、膨大なエネルギーはそれこそ徒労になってしまう。教員と事務職員は国立時代から別立ての組織であるが、このような評価、評価後における今後の発展を実行していくには、相互理解と協力体制の構築がきわめて重要である。

交付金減少への対応

わが国の慢性的財政危機に震災が加わり、中期的には国立大学法人運営交付金の減少が避けられない状況である。文科省は国立大学改革強化推進事業を掲げて大学群構想、一法人複数大学方式、いわゆるアンブレラ方式の導入も示唆している。現場の抵抗が強いと思われるこれらの改革の他にも、全大学が提唱できるいくつかの改革があると思われる。例えば、研究費の予算執行の弾力化(基金化による年度越執行)を推進すること。これで相当の無駄な出費が省ける。国の流通改革、特に輸入代理店のありようを改革して、実情にあわないドル換算レートをとる海外書籍、試薬、研究・医療等の器機や物品の価格の適正化を行うこと。大学の備品・文具消耗品・印刷等の購入について、量販店との著しい価格差がある、納入業者の実質的な固定化を見直しすること。様々な規制や基準の見直しを行うこと。必要以上に堅牢な建設基準や過剰設備がないか、過去に不正が起こるたびに重ねられてきた防止策が、実質的な仕事に比して多くの労力を消費していないか、幾重もの評価に多くのエネルギーが費やされていないか。事務や制度の簡素化へのインセンティブが働くことも重要である。国立大学時代の種々の制度や慣行を見直すこと。膨大な書類の作成と回覧の妥当性、電子媒体処理の促進、電子掲示による情報アクセスへの簡易化・平等化、などが考えられる。政府の政策の混迷は教育と医療にも深刻な危機をもたらしている。それこそ大学がスクラムを組んで提唱、誘導していくべきである。

以上、「将来構想」とするには、近視眼的で愚痴にすぎないところも多いかもしれない。ちょうど本誌の発行年度に研究科長・学部長であった個人の認識とお考えいただき、ご寛容いただきたい。

2 看護学専攻及び医学部看護学科

医学部看護学科長 江村 正一

医学部看護学科においては、平成 13 年 4 月に 1 回生を受け入れ、平成 17 年 3 月に最初の卒業生を出している。医学部看護学科と医学系研究科看護学専攻(修士課程)の歴史はともにまだ日の浅いものであり、さまざまな課題をかかえている状況であるが、以下に最近 3 年間における看護学科の現状と今後の課題について述べたい。

1. 看護学教育の質とその現状

近年の医療・福祉を取り巻く環境、特に急速な少子・高齢化社会の進展、生活習慣病を中心とした慢性疾患の増加、健康への関心の高まり、国際化社会などの変化に対応し、多様な社会の要請に応えるため、新しい医療に向けて、豊かな感性と人間性に備え、日々進歩する知識や技術を習得し・発展させる能力や、地域に即した保健医療活動の中心的役割を果たすことのできる資質の高い看護職の育成が課題である。看護教育の現状としては、平成 23 年度に看護系大学が 200 校を超え、それに伴って実習先確保の困難、保健師教育に関心を持たない学生など、看護師教育、助産師教育及び保健師教育を取り巻くさまざまな問題が生じている。

1) 看護学科における教育課程の改定

平成 24 年度の保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正として、保健師教育課程を選択制の導入によって看護師課程の卒業要件として必要な単位数を 133 単位から 127 単位に変更した。これにより、学生がゆとりをもって学習する機会を提供し、岐阜大学が改革課題としている英語教育の強化、e-learning 等を活用した主体的学習の促進につなげていく。

英語教育では、現行の教養科目としての英語は 4 単位 60 時間となっているが、改正後は 4 単位 120 時間とした。さらに、専門科目としての英語を 3 単位 90 時間積み上げ、4 年一環の英語教育プログラムを確立していく。また、e-learning システムによって、開講科目の予習、復習に活用し、講義では触れられなかった部分についても学習の機会を提供し、自己学習時間の確保につなげグループワークなどを多く組み入れ、主体性の育つ授業展開方法の構築につなげたい。

さらには統合実習の位置づけを明確にし、4 年次への配置と全分野の教員が担当することで質的な充実を図った。これら変更に伴って、「学士課程に必要な看護実践能力の卒業到達目標」に示されている内容が過不足なく教授されているかを各分野および全体で確認し、すべての目標を達成できるように科目および授業内容の調整を行った。それによって削減した科目もあるが、それは以前よりも効果的、効率的に授業が運営されることを意味しており、質的向上を目指している。

看護学専攻(修士課程)においては、平成 19 年 3 月に第 1 回修了生が誕生した。平成 20 年度から教育課程の見直しを行い、平成 21 年度から新しい教育課程で実施されている。看護学専攻としては社会人が多く、看護系大学を卒業と同時に大学院に入学する学生は少ないのが現状であり、入学しやすい環境づくりを考えたい。

2) 入学状況、入学者、看護師の需給の現状

入学試験の状況に関しては、大きな変化はなく、看護学科志願者数はほぼ安定してきている。平成 18 年度入学試験から、文系と理系の両者ともに受けやすい科目選択制にして、受験生にとって、受験しやすい条件作りをした。これまでと同様、岐阜県及び愛知県出身者が全入学者の 80% 以上を占めている。病院における看護体制の充実のために 7 対 1 の看護体制が取り入れられ、その結果全国的な看護師不足が生じている。岐阜県をはじめとする東海地域でも、看護師の不足は大きな社会問題化している。このような中、看護学科は、毎年卒業生の 90% 以上が看護師として就職している。最も多数の卒業生が岐阜大学医学部附属病院に就職しているが、まだ、充足しているとは言い難い状況である。今後、多くの卒業生が岐阜県内をはじめとして東海地域などで、看護職として活躍することを期待したい。

3) 助産師教育、保健師教育をめぐる教育の問題

助産師教育過程は、選択性とし、看護学科の 3 年生のうちから 8 人を上限に希望者から選抜している。教育課程の運営では、必修である助産学実習は遠隔地の病院を実習施設としているため、教員および学生の負担が大きく、今後より近い場所の実習施設の確保が課題である。

保健師教育過程は、開校以来、全学生を対象に保健師教育を実施してきたが、昨今の看護系大学の急増に伴った実習先確保の困難、保健師教育に関心のない学生の受講による他学生への影響などの問題が生じてきた。保健師として就職した学生およびその職場からは、学生時代の実習体験の不足が指摘されており、より

一層の保健師教育の充実が課題となった。実際に、教育年限の4年間で看護師・保健師の2つの国家試験受験資格を得るために、これまでは過密スケジュールとなっていたため、平成24年度から保健師教育課程を20名を上限とする選択制を導入し、充実した看護師教育を実施するために過密スケジュールをなくした。

2. 教員に関する現状

わが国における看護系大学数は急速に増加しており、こうした看護学教育の大学化、4年制化は看護師の質の向上につながる。高度化、専門化した医療において、看護の役割を果たし、人々のQOLの向上のためには、このような教育の大学化は望ましいものであるが、適切な教員の確保に各大学が困難をきたしている。岐阜大学看護学科においても常にどこかの分野において欠員となっているのが現状である。

教員の研究活動に関しては、看護学科としての研究プロジェクトがあるような全体的な研究活動体制にはなっていない。それぞれの教員が、各自の研究テーマにそって、分野を超えて個人的に共同研究する場合も多いが、看護学科としての特徴的な研究プロジェクトがあってもよい時期に来ていると考える。

3. 教育運営体制

看護学科においては、教育運営の中心は、教授会議が協議し決定を行っているが、教育運営の検討、実践は各種委員会である。看護学科では、教務厚生委員会、将来計画委員会、入試委員会、実習委員会、予算配分委員会、広報情報委員会などが常設されている。看護学専攻の委員会としての学務委員会がある。このほかに平成19年には、FD委員会を常設委員会として設置し、教員の資質向上を目指した活動を行っている。さらに、必要時に臨時的な委員会を設置している。これらの看護学科内委員会のほかに、医学部の委員会、全学の委員会など多種多様な委員会が設置されているので、各教員は複数の委員会に所属して、多忙な状況でもある。

学長・役員と学生との懇談会などをおして、看護学科で強調されたのは、セミナー室の整備不足であった。そこで、看護学科棟のオープンラボラトリーを借りセミナー室を増設した。

今後の課題

厚生労働省・文部科学省が保健師教育・助産師教育・看護師教育での看護基礎教育における技術項目の卒業時の到達度を明示した。これらを受けて岐阜大学医学部看護学科のカリキュラムも、少子高齢化の進展、医療技術の進歩、国民の意識の変化、看護教育水準の向上など時代の要請に応じて、教育内容、教授方法について検討をし、平成21年度から新しいカリキュラムで実施している。

平成24年度から高等学校の進路指導教諭や高校生からの強い要望を受け、養護教諭養成課程を設置した。看護学科においても、広い分野で活動する看護職を育成することは、教育の理念にもかなうことである。教育学部や他学部との協力のもと、充実した教育内容になるようにしたい。

修士課程である看護学専攻においては、入学者の多くは社会人であり、ほとんどが3年間の長期履修を希望している。このような現状を鑑み、社会人である大学院生が学びやすい環境づくりやカリキュラム運営の工夫など改善しなければならない。さらに、岐阜大学医学部看護学科卒業生が臨床経験を積み、それぞれの専門分野での研究課題を見出して、大学院へ進学されることを期待したい。教員もこれらの意欲を持つ卒業生への支援をしたいと考える。

3 医学部附属病院

医学部附属病院長 岩間 亨

医学部附属病院の役割の三本柱は教育、診療、研究であり、これらを基盤として地域貢献・社会貢献に取り組んでいくことが求められている。本院は岐阜県下唯一の医学部附属病院、特定機能病院であるため、岐阜医療圏のみならず岐阜県全域の医療機関と連携を進めるとともに岐阜県などの行政機関からの要請に応え医療政策に参画していく必要がある。

平成 21 年度に策定した国立大学法人化後の第 2 期(平成 22～27 年度)中期目標として本院は以下の 4 項目を挙げた。それぞれが本院の役割である教育、診療、研究とそれを遂行するための基盤となる経営に対応している。

1. 地域の中核となる医療人を育成する
2. 地域医療の基盤に立ち高質な医療を提供する
3. 拠点病院機能を活用し、EBM を確立するための臨床研究の推進と新規医療技術開発を遂行する
4. 迅速な経営判断に基づき経営基盤を強化する

第 1 の医療人の育成は、将来のわが国および岐阜県の医療を考えた場合、今後の最も重要な課題である。人間性豊かで有能な医師の育成には徹底した初期教育とそれに続くキャリアパスが必要であり、中期計画として医学部の臨床実習カリキュラム改革と学部・研修医一貫教育、専門医の技術向上支援を挙げた。病院にとって優秀なメディカルスタッフは宝とも言うべき存在であり、メディカルスタッフの研修支援と本院のみならず地域医療人のための研修会の実施を進めていく必要があると考えている。

第 2 の医療に関しては、特定機能病院として先進・高度医療の提供と拠点病院機能の充実、4 疾病 5 事業への対応とともに「安心・安全」な質の高い医療の実践を中期計画に挙げた。安全で質の高い医療を推進するためには、医療内容の公開と様々な視点からの検証が必要であり、今後は診療科間や職種間の枠を超えたチーム医療の確立が必須となるであろう。

第 3 の臨床研究と新規医療技術の開発は大学病院にとって極めて重要な課題である。近年わが国から発信される医学研究の減少傾向が続いており喫緊の問題となっている。中期計画としては、医療情報データを利用した研究の推進と岐阜薬科大学、連合創薬医療情報研究科との連携強化を挙げたが、研究に従事する人材の確保が最優先であり、医学系研究科、附属病院が一体となって研究を推進することのできる体制の再構築と様々な支援を充実させることが必要であると考えている。

第 4 の経営に関しては、組織、業務の継続的な検証、改善と、迅速な状況把握による戦略的な経営改善を計画に挙げている。病院の経営には 2 年毎に行われる診療報酬の改訂や運営費交付金の支給額などの不安定要素が存在するが、事業の継続には安定した経営が必要不可欠である。長期的展望とともに時には臨機応変の対応が必要になるであろう。

医学部附属病院は地域医療の最後の砦として、また東日本大震災で明らかとなったように災害など緊急時の中核施設としても期待されている。教育、診療、研究を進めながらそのような期待に応えていくためには組織としての真の体力が必要となる。組織の礎は人であり、優秀な医療人の育成がますます重要になると思われるが、もとより地域医療も人の育成も大学病院のみでは到底成し得るものではない。地域の医療機関との協働が必要不可欠であり、その連携強化が最初に取り組むべき課題となるであろう。

II 大学院医学系研究科

1 専攻

[医学系研究科医科学専攻]

1. 教育・研究の理念、目標

本学においては、昭和 36 年 5 月に大学院医学研究科(博士課程)が設置され、これまで医学に関する高度な教育・研究組織として先端的な医学研究の遂行を通じ、独創的な研究能力とともに豊かな学識と人間性を備えた医学教育者・研究者、さらにはリサーチマインドをもつ医療従事者を養成してきた。

21 世紀が始まった現代社会の急速で著しい生命科学の変容に対応するため、平成 14 年に新たに再生医科学専攻と医科学専攻から成る医学研究科に改組した。改組後の医科学専攻は、旧来の小講座を軸とした縦割りの学問体系を基盤とした組織から新しい学問体系に即した大講座制に移行した。平成 16 年度には大きな変化があった。1 つは国立大学の法人化であり、もう 1 つは医学部・附属病院の柳戸地区への統合移転であった。さらに、時期を同じくして部局化に踏み切り、大学院に軸足を置いた組織となり、5 大講座の括りに編成変えも行った。

このような組織の編成変えの間も、1) 医療と医学研究における国際的通用性の高い人材育成システムの確立、2) 研究成果の地域並びに国際社会への発信と展開、3) 生命医科学研究の臨床医学への応用等、の達成に向けてより一層教育・研究内容を充実させるとともに、高度で先端的・学際的・創造的研究を推進し、将来の医学を担うリーダーとなるべき優れた生命医科学研究者、臨床医学研究者、生命医科学教育者及び高度な医学的素養を身に付けた臨床医並びに急速に発展する現代医療に対応できる医療行政の専門家を育成することを目標としている。

なお、平成 20 年度には教育研究上の目標を「先端医学・医療の学識や技術をもち、先進的・学際的・創造的な探求心と倫理観を兼ね備えた研究者及び高度専門職業人を育成する。」と明確に規定し、明文化している。

2. 医科学専攻の構成

前述のとおり、平成 14 年度の改組の際、医学研究科(博士課程)はこれまでの5専攻(形態系、機能系、社会医学系、内科系、外科系)を改めて医科学専攻の1専攻とし、3つの領域(構造機能医科学、病態制御医科学、統合情報医科学)に区分した。学生中心の教育体制を確立するとともに専攻のボーダーレス化を図ることにより、高度の独創性と国際性を併せ持った医科学研究者並びに専門職業人を育成することを目指した。

平成 16 年度から部局を医学部から大学院医学研究科に移行し、医科学専攻を3領域から5大講座(分子・構造学、病態制御学、神経統御学、腫瘍制御学、医療管理学)に改組して研究体制の更なる充実を図った。この部局化により、今日の医科学を解析、統合、応用それぞれの側面から、より効率的に研究を展開している。

平成 20 年 4 月には効果的な医学・医療教育を推進できる教育者及び研究者の養成を目的とした「医学教育学分野」を医療管理学講座に設置するとともに、同年 10 月には独立行政法人自動車事故対策機構及び社会医療法人厚生会との間で教育研究に係る連携・協力(いわゆる「連携大学院」)に関する協定を締結して神経統御学講座に「連携分野 脳病態解析学」を設置した。

一方、「がんプロフェッショナル養成プラン」においては「東海がんプロ」に参画し、平成 20 年 4 月からは、「横断的な化学療法の専門医養成コース」として前年度に設置した腫瘍制御学講座の臨床腫瘍学分野において、実践的な教育を実施している。

また、再生医科学専攻の循環病態学分野及び呼吸病態学分野について、本研究科の教育目標に沿って組織の見直しを行い、平成 23 年 4 月に医科学専攻病態制御学講座に両分野を移設した。

(1) 分子・構造学講座

細胞情報学、呼吸病態学、薬理病態学、寄生虫学、遺伝発生学、内分泌代謝病態学、小児病態学、病態情報解析医学の8分野で構成する。

生命機能の発現の本質ともいえるタンパク質相互反応の解析が病因解明と治療法開発に結びつくことは明らかであり、分子情報から立体構造と変異立体構造の比較に基づく新たな創薬・治療法の開発を推進し、21 世紀型テーラーメイド医療を実現するとともに、先端的な教育・研究・診療を担う優れた人材を育成する教育研究を進める。

(2) 病態制御学講座

解剖学，分子病態学，分子生理学，循環病態学，呼吸病態学，高度先進外科学，整形外科学，皮膚病態学，泌尿器科学，麻酔・疼痛制御学，口腔病態学の 10 分野で構成する。

高度に特化された専門分野からなり，それぞれの臓器構築・病態に関する新たな知見を共有し，より高度の先端的診断・治療・予防法の研究と開発を実現する教育研究を行う。

(3) 神経統御学講座

高次神経形態学，生理学，スポーツ医科学，神経内科・老年学，精神病理学，脳神経外科学，耳鼻咽喉科学，眼科学の 8 分野と，連携分野 脳病態解析学を加えた計 9 分野で構成する。

複雑化・高齢化が進む現代社会では生産労働力の低下や医療諸資源の投入を増加させる精神・神経系疾患が増加し，社会的にも大きな問題となっている。このため，精神・神経系の機能を解析し，その治療法・予防法の確立と新しい治療法の開発を目指し，研究・教育・診療能力の高い人材を育成する教育研究を行う。

(4) 腫瘍制御学講座

腫瘍病理学，免疫病理学，腫瘍外科学，消化器病態学，血液病態学，産科婦人科学，放射線医学，疫学・予防医学，臨床腫瘍学の 9 分野で構成する。

死亡原因第 1 位を占める癌の克服は，わが国のみでなく先進諸国の大きな問題であり，本領域では癌の研究を進めてきた基礎・社会・臨床医学系研究者が集結し，総力を挙げて癌の治療法・予防法を確立するため，先駆的な教育・研究を行う。

(5) 医療管理学講座

総合病態内科学，臨床薬剤学，医療経済学，救急・災害医学，法医学，産業衛生学，医学教育学の 7 分野で構成する。

今日では，だれでも・どこでも適切な医療を受け，健康保持・増進を進めることに対する社会的要請が高く，一方，未曾有の不測の災害に対する医療体制の整備が要請されている。その実現のためには，EBM (科学的根拠に基づく医療) を踏まえた総合的な医学・医療，医薬品，救急・災害医学のみならず，医療経済の知識を統合・管理する新たなシステムの構築が必須であり，本領域では新たな医療管理に関する教育研究を推進してこれらの問題に的確に対応する体制の構築と人材の育成を行う。

3. 学生定員と入学状況

医科学専攻の入学定員，収容定員及び過去 5 年間の入学状況は，次表のとおりである。

定員の充足が従前からの課題であり，ホームページによる発信はもとより募集パンフレットを関連病院に配布するなどの広報活動により，定員を充足するための取り組みを行っている。また，募集期間を 1 週間から 2 週間に伸ばし，2 次募集で十分な充足率が得られない場合には 3 次募集も行うこととした。

医科学専攻の入学定員及び収容定員

研究科	専攻	課程	入学定員	収容定員
医学系研究科	医科学専攻	博士課程	47	188

過去 5 年間の入試統計

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
			()		()		()		()
平成 19 年度	47	34	<18> 《3》	34	<18> 《3》	34	<18> 《3》	33	<17> 《3》
平成 20 年度	47	44	<32> 《4》	44	<32> 《4》	44	<32> 《4》	44	<32> 《4》
平成 21 年度	47	37	<27> 《3》	37	<27> 《3》	32	<23> 《3》	30	<21> 《3》
平成 22 年度	47	35	<31> 《0》	33	<29> 《0》	30	<26> 《0》	30	<26> 《0》
平成 23 年度	47	40	<31> 《2》	40	<31> 《2》	37	<29> 《2》	37	<29> 《2》

() は女子、< > は社会人、《 》 は外国人留学生をすべて内数で表します。

(参考)

医科学専攻・再生医科学専攻の入学状況

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
			()		()		()		()
平成 22 年度	64	63	<39> 《1》	61	<37> 《1》	57	<34> 《1》	56	<34> 《1》
平成 23 年度	64	55	<32> 《4》	54	<32> 《4》	50	<30> 《4》	49	<30> 《4》

() は女子、< > は社会人、《 》 は外国人留学生をすべて内数で表します。

4. カリキュラムの編成方針

平成 24 年度から医学の研究や実践を遂行する上で、共通して必要と考えられる「基礎技術」を共通科目とし、修了要件単位に加えることができることとした。さらに最先端の医学・医療の知識を幅広く修得することを目的に「医学先端セミナー」を共通科目として開講することとした。

(1) 履修単位基準

医科学専攻の修了に必要な履修単位は以下のとおりである。

科目区分	最低履修単位数	備考
共通科目	3	
学際科目	1	
専門科目	20	専攻分野から必修科目 14 単位を含め、20 単位以上
特別研究	6	
合計	30	

(2) 教育の特色

- ① 専攻分野の専門科目の重厚性を高める単位認定
専攻分野が開講する講義科目、演習科目、セミナー科目を併せて3年次までに14単位を修得できるような構成とし、志望分野の専門科目の重厚性を高めるカリキュラムとしている。
- ② 他専攻の授業科目を履修単位に認定
医科学専攻では、再生医科学専攻(博士後期課程)の共通科目及び専門科目を修了に必要な単位として認定している。
- ③ 生命倫理・医療倫理学の義務化
今日の医科学研究を進める上で、生命科学、遺伝発生学のみならず、多くの研究が生態系に及ぼす多大な影響を鑑み、「生命倫理関係の科目」の履修を必修としている。
- ④ 学位論文作成に必要な研究活動の単位認定
1年次から学位論文作成に必要な研究活動を、特別研究として単位化している。

(3) 社会人学生のための措置

大学院設置基準の第14条特例により、夜間(6及び7時限目)、土曜日及び夏季休業期間中における集中開講で実施している。

また、社会人学生が全体の7割近くを占めているおり、勤務の都合で留年又は休学する者が年々増加傾向にある。主に職業を有している学生を対象に、平成21年度から長期履修制度を導入するとともに、在学生(最終学年を除く)にも適用することとした。

(4) 教育研究分野、指導教員

医科学専攻における各領域別の教育研究分野、指導教員、主な研究内容は次表のとおりである。

領域 (講座)	分 野	指導教員	研 究 内 容
分 子 ・ 構 造 学	細胞情報学	中 島 茂	1. 細胞生・死(アポトーシス)のシグナル伝達メカニズム 2. 細胞の分化・アポトーシスに関する遺伝子の探索 3. 神経細胞分化誘導因子の探索 4. 神経細胞再生の分子メカニズム 5. 遺伝子治療の基礎的研究 6. 血管内皮細胞の増殖と細胞死のシグナル
	分子生理学	恵 良 聖 一	1. 蛋白質一般の高次構造形成過程の物理化学的研究 2. 蛋白質・ペプチドの異常凝集体形成の分子メカニズム 3. 生体内酸化ストレスとレドックス応答 4. 蛋白質と水分子間相互作用の分子メカニズム(生体系の水の分子生理) 5. MRI情報と生体組織の分子生理・分子病理
	薬理病態学	小 澤 修	1. ストレス応答のメカニズムの解明と低分子量ストレス蛋白質の役割の解明 2. 骨粗鬆症の病態の解明と薬物の影響 3. 骨芽細胞の細胞内情報伝達機構の解明と骨調節因子の作用機序の解明 4. 肝細胞・膵細胞の細胞内情報伝達機構の解明と薬物の影響 5. 神経細胞の細胞内情報伝達機構の解明と薬物の影響 6. 代謝性疾患における血小板機能に関する研究 7. アポトーシス発現機序の解明と薬物の影響
	寄生虫学	高 橋 優 三	1. 宿主-寄生虫相互関係の細胞生物学的研究 2. 免疫診断法, DNA診断法の開発

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
分子 ・ 構 造 学	遺伝発生学	近藤直実	<ol style="list-style-type: none"> 1. 分子遺伝学・免疫遺伝学的研究 2. 遺伝病の病因・病態解明 3. 遺伝病の病因遺伝子にもとづくポストゲノム解析, 特にタンパク立体構造の解明と臨床応用 (構造生物医学) 4. Common diseases (アレルギーなど) のゲノム, トランスクリプトーム, プロテオーム解析と応用 (遺伝子・分子生態医学)
	内分泌代謝病態学	武田純	<ol style="list-style-type: none"> 1. 2型糖尿病の発症機構の解明研究 2. 糖尿病, 肥満, 動脈硬化などの生活習慣病の遺伝子診断法の開発 3. 糖尿病治療薬の作用に関する分子遺伝学的研究 4. 糖尿病及び合併症の再生医療の研究 5. 下垂体副腎疾患の診断治療に関する研究 6. 高血圧症の病態解明研究 7. 内分泌腫瘍の成因に関する研究
	小児病態学	近藤直実	<ol style="list-style-type: none"> 1. アレルギー疾患の病因病態に関する免疫学的, 遺伝子学的, 構造生物学的, 環境学的研究 2. 先天性免疫不全症の病因病態に関する遺伝子学的, 構造生物学的研究 3. ペルオキシソーム病の病因病態に関する分子遺伝子学的・構造生物学的研究 4. 遺伝性ムコ多糖症の病因病態に関する分子遺伝子学的研究 5. 有機酸代謝異常症の病因病態に関する分子遺伝子学的研究 6. 神経・発達に関する分子遺伝学的研究 7. DNA 修復及び細胞周期とその異常に関する分子遺伝学的研究
	病態情報解析医学	清島満	<ol style="list-style-type: none"> 1. リポ蛋白代謝 2. ウイルス性肝炎における免疫学的機構 3. NASH の病因病態解明 4. トリプトファン代謝と病態 5. 新しい測定法の開発及び評価 6. プロテオーム解析
病態 制 御 学	解剖学	千田隆夫	<ol style="list-style-type: none"> 1. Wnt シグナル伝達系の機能と制御 2. APC 遺伝子 (APC 蛋白質) の形態形成における役割 3. 鍼灸技術の科学的解析 4. ヒト血管系の肉眼解剖学的解析 5. 加齢に伴う骨微細構造の変化と骨粗鬆症発症との関連
	分子病態学	長岡仁	<ol style="list-style-type: none"> 1. 抗体記憶形成・維持の分子機構の解明 2. B リンパ球最終分化時の運命決定機構の研究 3. 抗体遺伝子改変の分子機構の研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
病 態 制 御 学	循環病態学	湊 口 信 也	<ol style="list-style-type: none"> 1. 心不全の成因と治療に関する基礎的・臨床的研究 2. 虚血心筋保護のメカニズム解明と治療薬開発に関する研究 3. 不整脈の先進的治療に関する研究 4. 動脈硬化の成因と治療に関する基礎的・臨床的研究 5. 高血圧・高脂血症の成因と治療に関する研究 6. 腎疾患の成因と治療に関する基礎的・臨床的研究 7. 循環器疾患に対する再生医学・再生医療
	呼吸病態学	湊 口 信 也	<ol style="list-style-type: none"> 1. 肺癌の病態解明と治療薬開発のための分子生物学的研究 2. 呼吸器疾患の先進的画像診断法の開発に関する研究 3. COPD の病態解明と治療薬開発のための基礎的・臨床的研究 4. 呼吸器感染症における薬物動態と有効性評価に関する臨床的研究 5. 呼吸器疾患に対する再生医学・再生医療
	高度先進外科学	竹 村 博 文	<ol style="list-style-type: none"> 1. 外科手術における低侵襲化の研究 2. 心臓血管, 呼吸器, 消化器外科の再生医療, 遺伝子治療の研究 3. 人工臓器の研究 4. 心臓血管外科, 呼吸器外科におけるロボット手術の研究
	整形外科学	清 水 克 時	<ol style="list-style-type: none"> 1. ユーイング肉腫に対する遺伝子治療の基礎研究 2. ヒト脊椎の生体力学研究 3. 関節炎におけるカルパインの局在及び生理的機能の解明 4. カルパインによる特異的プロテオグリカン分解マーカー抗体の作成 5. 軟骨マトリックス, プロテオコンドロイチン硫酸の軟骨細胞への作用の研究] 6. 脊椎椎間板変性メカニズムの解明 7. 多発性外骨腫症の実態把握と遺伝子多型に関する研究
	皮膚病態学	清 島 真理子	<ol style="list-style-type: none"> 1. 炎症性角化症の病因解明と治療法の開発研究 2. 自己免疫性水疱症の発症機序の解明 3. 膠原病の発症病理の分子学的研究 4. アトピー性皮膚炎の病態と治療に関する研究 5. 皮膚悪性腫瘍の診断と治療に関する基礎的及び臨床的研究 6. 皮膚感染症の原因微生物同定と発症病理に関する臨床的研究
	泌尿器科学	出 口 隆	<ol style="list-style-type: none"> 1. 尿路性器感染症の基礎的・臨床的研究 2. 尿路性器悪性腫瘍の基礎的・臨床的研究 3. 排尿障害に対する臨床的研究 4. 泌尿器科領域の内視鏡下手術手技の開発研究 5. 腎移植における臨床的研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
病態制御学	麻酔・疼痛制御学	飯田 宏 樹	<ol style="list-style-type: none"> 1. 脳・脊髄微小循環に対する麻酔薬及び麻酔関連薬の影響の研究 2. 血管内皮機能と酸化ストレスに関する研究 3. 脳脊髄保護と性ホルモンに関する研究 4. 難治性疼痛制御に関する研究 5. グリア細胞における細胞内情報伝達に関する研究
	口腔病態学	柴田 敏 之	<ol style="list-style-type: none"> 1. 口腔病変の分子疫学的研究 2. 口腔がんの悪性化進展機序の検索と抑制 3. 口腔がん治療の基礎的・臨床的開発 4. 顎・口腔機能改善に対する細胞工学の応用 5. ヒト歯髄 iPS 細胞の研究
神経統御学	高次神経形態学	山口 瞬	<ol style="list-style-type: none"> 1. 記憶・学習のメカニズムの解明 2. 蛍光タンパク質発現トランスジェニックマウスを用いた脳機能イメージング 3. 体内時計に関する研究 4. 遺伝子工学および光学を用いた生体現象の可視化 5. ヒトの表情による脳活動とその制御機序の研究 6. サル視覚皮質神経回路の形態学的研究 7. ラットを用いた感覚情動連関の形態学的研究
	生理学	森田 啓 之	<ol style="list-style-type: none"> 1. 血圧調節のシステム解析 2. 宇宙医学・重力生理学 3. 静脈循環支援装置の開発 4. 高齢者補助装置の開発
	スポーツ医科学	松岡 敏 男	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動処方における運動強度の研究 2. 競技選手のトレーニング効果に関する研究 3. スポーツ障害・外傷の予防の研究
	神経内科・老年学	犬塚 貴	<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経障害機序の解明と再生修復・神経保護薬の開発 2. 免疫性神経疾患の成因と治療に関する研究 3. 神経変性疾患の分子病態と治療法の開発 4. 認知症の診断と治療に関する研究 5. 高齢者及び神経難病の医療・福祉に関する研究
	精神病理学	塩入 俊 樹	<ol style="list-style-type: none"> 1. 精神疾患の脳機能画像研究 2. 精神疾患の自律神経研究 3. 精神科診断学に関する研究 4. 発達障害の疫学研究 5. 災害精神医学に関する研究
	脳神経外科学	岩間 亨	<ol style="list-style-type: none"> 1. 悪性脳腫瘍の病態と治療に関する研究 2. 脳卒中の病態と治療 3. MRI, PETによる高次脳機能の解析 4. 神経細胞再生, 移植
	耳鼻咽喉科学	伊藤 八 次	<ol style="list-style-type: none"> 1. 体平衡機能検査法の研究 2. めまい診断と治療の研究 3. 前庭障害のリハビリテーションに関する研究 4. 蝸牛・前庭感覚細胞再生の研究 5. 頭頸部腫瘍治療の研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
神経 統 御 学	眼科学	山本 哲也	<ol style="list-style-type: none"> 1. 緑内障性視神経障害の病態生理に関する研究 2. 緑内障性視神経障害の画像解析法による検討 3. 眼圧下降を介さない緑内障治療に関する基礎的研究 4. 眼内血液循環に関する生理学的及び形態学的研究 5. 黄斑疾患への画像解析法の応用による新しい治療法の開発 6. 各種レーザーの眼内組織に及ぼす影響に関する形態学的研究 7. 緑内障手術における代謝拮抗薬の応用に関する研究 8. 羊膜を利用した角膜疾患治療に関する研究 9. 眼感染症の新しい診断治療に関する研究 10. 網膜硝子体疾患の手術療法に関する研究
	※連携分野 脳病態解析学	篠田 淳	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遷延性意識障害・高次脳機能障害・その他臨床神経科学領域の疾患等の病態評価と治療に関する研究 2. PET, SPECTを用いて脳の機能解析, MRIを用いて脳の形態解析を行い, 病態を評価し, それらの画像データを治療効果判定に応用する。
腫瘍 制 御 学	腫瘍病理学	原 明	<ol style="list-style-type: none"> 1. 遺伝子改変マウス作製技術を用いた大腸癌の分子機構解明 2. がん細胞リプログラミングによるがんエピジェネティック異常の意義解明 3. DNAメチル化機構と腫瘍発生の解明 4. 再生医療, 幹細胞医学に関連する腫瘍発生の解明とその制御 5. 神経再生研究のための神経障害動物モデルの開発
	免疫病理学	高見 剛	<ol style="list-style-type: none"> 1. リンパ増殖性疾患の分子細胞病理学 2. 悪性リンパ腫の組織発生 3. 腫瘍の分子免疫治療 4. ヒト腫瘍関連拒絶抗原の解析

※独立行政法人自動車事故対策機構及び社会医療法人厚生会との連携大学院

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
腫瘍 制 御 学	腫瘍外科学	吉田 和弘	<ol style="list-style-type: none"> 1. 食道癌・胃癌・大腸癌・肝臓癌の鏡視下手術の臨床研究 2. 消化器癌・乳癌の化学療法及び分子標的治療の臨床研究と個別化療法の研究 3. 消化器癌発癌機構の分子生物学的検討及びその臨床応用 4. 抗癌剤の耐性のメカニズムの解析 5. 大腸癌多発肝転移に対する外科的切除—限界への挑戦— 6. 肝腫瘍に対する凍結療法による免疫賦活のメカニズム 7. DC細胞を用いた癌に対する免疫治療の開発
	消化器病態学	森脇 久隆	<ol style="list-style-type: none"> 1. 急性・慢性肝不全の病態と治療に関する研究 2. バイオ人工肝臓の開発と臨床応用に関する研究 3. 核受容体を分子標的とした発癌予防・癌の分化誘導療法に関する基礎的・臨床的研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
腫瘍 制御 学	血液病態学	森 脇 久 隆	1. 造血器疾患の遺伝子治療に関する基礎的研究 2. 造血器悪性腫瘍に関する臨床病理学的研究
	産科婦人科学	森 重 健一郎	1. 婦人科癌における抗血管新生治療の研究 2. 子宮体癌の腹腔鏡下手術の臨床研究 3. 婦人科癌における抗癌剤耐性メカニズムの解析 4. 産科出血予防のための子宮内バルーンの開発 5. 体外受精における初期胚発生のキー・ファクターの解析
	放射線医学	星 博 昭	1. 核医学による癌の診断・脳機能測定 2. 早期肝癌および腹部の画像診断 3. Interventional Radiology 4. 悪性腫瘍に対する定位放射線治療, IMRT, IGRT 5. コンピュータ支援診断 (CAD)
	疫学・予防医学	永 田 知 里	1. がんの疫学研究 2. 生活習慣病の疫学研究 3. 栄養疫学研究 4. 患者の行動医学研究
	臨床腫瘍学*	森 脇 久 隆 伊 藤 善 規	1. がん化学療法の理論と有害事象 2. 主要がんの化学療法及び管理法 3. 臨床試験の実際 4. がんにおける緩和医療

*平成 19 年度から始まった「がんプロフェッショナル養成プラン」による化学療法を担う臨床腫瘍医の養成コースで学位とともに専門医資格を目指す。

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
医 療 管 理 学	総合病態内科学	石 塚 達 夫	1. 長寿地域における生活習慣病の臨床疫学的検討 2. 2 型糖尿病発症機構の分子生物学的研究 3. 生活習慣病と血小板凝集能の関連 4. 脂肪細胞のサイトカイン遺伝子発現 5. リウマチ・膠原病の分子標的治療
	臨床薬剤学	伊 藤 善 規	1. 医薬品による副作用の発現機構と対策に関する研究 2. 医薬品の適正使用に関する研究 3. 薬物相互作用の解析に関する研究 4. 治療的薬物血中濃度モニタリングに関する研究 5. 薬学的ケアの有用性に関する臨床研究
	医療経済学	永 田 知 里	1. 医療における生産性及び効率生に関する研究 2. 予防医療に対する需要分析 3. 手術待機期間に関する研究 4. レセプト情報分析
	救急・災害医学	小 倉 真 治	1. 救急災害医療体制の研究 2. 救急医療情報の研究 3. 敗血症性ショックの研究 4. 外傷に関する研究 5. 重症急性膵炎に関する研究 6. 航空医療に関する研究

領域 (講座)	分野	指導教員	研究内容
医療 管理 学	法医学	武内康雄	1. 心臓性突然死に関する病理学的研究 2. SIDS の病理学的研究 3. 交通外傷に関する研究 4. DNA 多型に関する研究 5. ショック時早期に発現する諸臓器の形態学的変化の研究
	産業衛生学	永田知里 井奈波良一	1. 屋外労働の快適化に関する研究 2. 物理的環境刺激の生体影響に関する研究 3. 職場のメンタルヘルスに関する研究
	医学教育学	鈴木康彦 藤崎和彦	1. カリキュラム開発と学生評価法の研究 2. コミュニケーション教育に関する研究 3. 能動的問題基盤型学習に関する研究 4. Professionalism 教育に関する研究 5. 地域基盤型医学教育に関する研究 6. シミュレーション医学教育に関する研究 7. 医学教育指導者の育成に関する研究

(5) 基礎技術トレーニングコース

本コースは、1 コースを原則として1 週間とするが、期間と内容については担当教員と相談の上決める。また、教員、研究生で希望する者も本コースに参加することができる。

本コースの修得単位は、平成 24 年度から共通科目として修了に必要な単位に加えることとなった。

基礎技術トレーニングコース

No.	授業科目名	教育研究分野
1	基礎技術(免疫組織化学 A)	免疫病理学
2	基礎技術(免疫組織化学 B)	高次神経形態学
3	基礎技術(電子顕微鏡基礎技術)	解剖学
4	基礎技術(RI 実験法)	薬理病態学
5	基礎技術(遺伝子操作基礎技術 A)	細胞情報学
6	基礎技術(遺伝子操作基礎技術 B)	病原体制御学
7	基礎技術(無麻酔無拘束動物での実験法)	生理学
8	基礎技術(中枢神経実験法 A)	高次神経形態学
9	基礎技術(中枢神経実験法 B)	神経生物
10	基礎技術(情報処理基礎)	疫学・予防医学
11	基礎技術(組織培養技術 A)	免疫病理学
12	基礎技術(組織培養技術 B)	分子病態学
13	基礎技術(蛋白質分析法 A)	蛋白高次機能学
14	基礎技術(蛋白質分析法 B)	法医学
15	基礎技術(生体内物質分析法)	法医学
16	基礎技術(微生物培養技術)	嫌気性菌実験分野 (生命科学総合実験センター)
17	基礎技術(公衆衛生診断学)	産業衛生学
18	基礎技術(発癌実験法)	腫瘍病理学
19	基礎技術(シグナル伝達実験法)	細胞情報学
20	基礎技術(抗体作製法)	寄生虫学
21	基礎技術(運動生理学基礎実験)	スポーツ医科学

(6) 大学院特別講義

大学院特別講義は、随時、主として基礎医学系講座を中心に実施している。

5. 教育活動

(1) 教育活動の実施内容と方法

本研究科は医科学専攻と再生医科学専攻の両輪よりなるが、いずれも超高齢化社会を迎えようとする現在、メディカル、コメディカルを問わず、入学した大学院生にはこれからの高度な医療を支えるべく、最先端の医学教育を行うことを前提としている。

そのためには、自由度の高い履修が可能なカリキュラムを設定するとともに、研究指導教員や研究助言教員による複数指導体制を導入するなど、学生の立場にたった教育内容を提供し、学生と教員が一体となって国際的に評価されるような医科学研究を推進している。

① 教育研究分野の機能強化

5つの大講座からなる医科学専攻のうちの神経統御学講座内に、平成20年10月に、連携分野としてあらたに「脳病態解析学分野」を設置し、脳科学系の研究力の強化を図った。

また、腫瘍制御学講座内に「臨床腫瘍学分野」を設置することによって、「がんプロフェッショナル養成プラン」への対応を強化させた。

さらに平成23年度より、両専攻の組織改編により、再生医科学専攻の「循環病態学」および「呼吸制御学」の2分野を医科学専攻内へ移設した。

② カリキュラムの充実

がん治療における化学療法を担う臨床腫瘍医の養成コースとして、上述のとおり平成20年度から「がんプロフェッショナル養成プラン」による臨床腫瘍学分野を開設し、大学院において学位の取得とともに専門医資格を目指している。

本学部の内外では、最先端の医学研究会や講演会、シンポジウムなどが日々開催されている。これらに加えて、学位論文発表会なども対象に、共通科目のなかに「大学院医学先端セミナー」を加えた。またどの分野に所属しようとも、基本的な研究手法のはば広い修得の必要性の再認識から、「基礎技術」を共通科目(選択)に加えた。

③ 他大学、他研究施設、他研究科との連携の強化

現在の高度化した医療を支える最先端医学は、もはや本研究科内のみで修得されるものではないことは、論をまたない。従って、他大学等との共同研究、とくに、本研究科に距離的にも近い岐阜薬科大学や本学連合創薬医療情報学科などとの共同研究等によって連携の強化が容易になるように、規則改正を行った。

④ 大学院制度の改正：MD-PhD 制度

基礎・社会医学研究者の養成を目的とし、学部在籍時から大学院教育を開始するMD-PhDプログラムを設置した。平成24年3月現在、1名が本プログラムに入り、学業に加え、配属された研究室で研究活動に参加している。

⑤ 大学院生への経済的支援

平成16年度の卒後臨床研修の必修化等により医学部医学科卒業者の大学院離れ、さらには研究者離れに拍車がかかり、特に基礎・社会医学系研究者の育成が急務となっている。

このような状況から、本研究科医科学専攻の基礎医学系・社会医学系に入学した学生(社会人大学院生を除く。)に対し、入学金相当額及び在学期間中の授業料相当額を奨学金として給付する制度を平成20年度に設けた。

平成21年度からは、MD-PhDプログラム後期進学者も資格要件に加えるよう見直し、「岐阜大学大学院医学系研究科学生(博士課程・博士後期課程の基礎医学系)奨学金」と改め、応募対象者を拡大した。本奨学金創設以降、5名に対し奨学金を支給している。

この他、平成17年度に設けた「岐阜大学医学部医学科・研究者育成スカラシップ」は、1名が給付を受けており、大学院修了後の基礎医学研究者としての活躍を期待している。

6. 研究活動

[分子・構造学講座]

(1) 細胞情報学分野

1. 研究の概要

基礎医学系は人員が限られているために、脳神経外科学、腫瘍外科学などの臨床分野から人的支援を受けながら、臨床に役立つ基礎研究を目標に研究を続けてきた。研究対象は従来の細胞の生と死のメカニズムから、主として神経系、血管系の再生システムにシフトした。動脈硬化巣での血管再生、脳梗塞後の組織障害の軽減、および血管・神経組織再生の研究を進めている。動脈硬化に対するステント治療による血管内皮細胞の障害メカニズムとその予防についても、一定の成果を上げている。血管はすべての臓器・組織が成立するための重要な基本単位であり、ポストゲノム時代の重要な研究テーマのひとつである。国立成育医療センターとの共同研究で、血管の発生・再生に重要な遺伝子を同定しており、詳細な機能解析を行っている。さらに、もう一つの脈管系であるリンパ管の発生、再生機構についてもがん転移モデルで骨髄由来の幹細胞からがん周囲のリンパ管が形成されることを明らかにした。アルコール代謝メカニズムの研究から、酸化還元・抗酸化のプロジェクトも動き始めている。2011.3.11、我が国は未曾有の大震災に見舞われた。原発事故が復興を阻んでおり、放射線障害の軽減対策の研究も、ドイツの研究機関との共同研究として開始した。

2. 名簿

教授： 中島 茂 Shigeru Nakashima
助教： 池亀由香 Yuka Ikegame

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)

- 1) Inufusa H, Nakashima S. SUPALIV supplement that reduces alcohol level in blood. In Neeser KJ, Klentze M eds. *The Health Properties of Red Wine*. Chulalongkorn University Press; 2011:140-143.

総説 (和文)

- 1) 里 直行, 武田朱公, 篠原 充, 栗波仁美, 林真一郎, 島村宗尚, 森下竜一. アルツハイマー病の後天的危険因子, *Anti-aging Science* 2010年; 2巻: 8-12.
- 2) 中島 茂. イノシトール, 日本臨床 増刊号1 広範囲血液・尿化学検査 2010年: 208-210.
- 3) 林真一郎, 里 直行, 森下竜一, 中島 茂. Amyloid β と血管障害, *Cardiovascular Frontier* 2011年; 2巻: 35-39.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Nemoto S, Nakamura M, Osawa Y, Kono K, Itoh Y, Okano Y, Murate T, Hara A, Ueda H, Nozawa Y, Banno Y. Sphingosine kinase isoforms regulate oxaliplatin sensitivity of human colon cancer cells through ceramide accumulation and Akt activation. *J Biol Chem*. 2009;284:10422-10432. IF 5.328
- 2) Ito H, Murakami M, Furuhashi A, Gao S, Yoshida K, Hagiwara K, Takagi A, Kojima T, Suzuki M, Banno Y, Tanaka K, Tamiya-Koizumi K, Nozawa Y, Murate T. Transcriptional regulation of neural sphingomyelinase 2 gene expression of human breast cancer cell line, MCF-7, induced by the anti-cancer drug, daunorubicin. *Biochim Biophys Acta. Gene Regulatory mechanisms*. 2009;1789:672-762. IF 4.000
- 3) Hayashi S, Sato N, Yamamoto A, Ikegame Y, Nakashima S, Ogihara T, Morishita R. Alzheimer disease-associated peptide, amyloid beta40, inhibits vascular regeneration with induction of endothelial autophagy. *Arterioscler Thromb Vasc Biol*. 2009;29:1909-1915. IF 7.215

- 4) Hayashi S, Yamamoto A, You F, Yamashita K, Ikegame Y, Tawada M, Yoshimori T, Shimizu S, Nakashima S. The stent-eluting drugs sirolimus and paclitaxel suppress healing of the endothelium by induction of autophagy. *Am J Pathol.* 2009;175:2226-2234. IF 5.224
- 5) Yamashita K, Nakashima S, You F, Hayashi S, Iwama T. Overexpression of immediate early gene X-1 (IEX-1) enhances gamma-radiation-induced apoptosis of human glioma cell line, U87-MG. *Neuropathology.* 2009;29:20-24. IF 1.605
- 6) You F, Aoki K, Ito Y, Nakashima S. AKT plays a pivotal role in the acquisition of resistance to 5-fluorouracil in human squamous carcinoma cells. *Mol Med Rep.* 2009;2:609-613. IF 0.307
- 7) Ikegame Y, Yamashita K, Hayashi S, Yoshimura S, Nakashima S, Iwama T. Neutrophil elastase inhibitor prevents ischemic brain damage via reduction of vasogenic edema. *Hypertens Res.* 2010;33:703-707. IF 2.353
- 8) Murakami M, Ito H, Hagiwara K, Yoshida S, Sobue M, Ichihara A, Takagi T, Kojima K, Tanaka K, Koizumi K, Kyogashima M, Suzuki M, Banno Y, Nozawa Y, Murate T. ATRA inhibits ceramide kinase transcription in a human neuroblastoma cell line SH-SY5Y cells. The role of COUP-TFI. *J Neurochem.* 2010;112:511-520. IF 4.337
- 9) Takauwa N, Ohkura S, Takashima S, Sugimoto N, Tanaka T, Hirano K, Banno Y, Okamura M, Sasaki M, Nakamura Y, Du W, Takamura M, Takada S, Kaneko S, Satouchi K, Mitumori K, Takauwa Y. Development of cardiac fibrosis but not increased spontaneous malignancy or reduced lifespan in mice transgenic for sphingosine kinase 1a. *Cardiovasc Res.* 2010;85:494-502. IF 6.051
- 10) Gao S, Murakami M, Ito H, Yoshida K, Tagawa Y, Hagiwara K, Takagi A, Kojima T, Suzuki M, Banno Y, Nozawa Y, Murate T. Mechanism of increased PLD1 gene expression during early adipocyte differentiation process of mouse cell line 3T3-L1. *J Cell Biochem.* 2010;109:375-382. IF 3.122
- 11) Ikegame Y, Yamashita K, Hayashi SI, Mizuno H, Tawada M, You F, Yamada K, Tanaka Y, Egashira Y, Nakashima S, Yoshimura SI, Iwama T. Comparison of mesenchymal stem cells from adipose tissue and bone marrow for ischemic stroke therapy. *Cytotherapy* 2011;13:675-685. IF 2.925
- 12) Kozawa S, Honda A, Kajiwara N, Takemoto Y, Nagase T, Nikami H, Okano Y, Nakashima S, Shimozawa N. Induction of peroxisomal lipid metabolism in mice fed a high-fat diet. *Mol Med Rep.* 2011;4:1157-1162. IF 0.307

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：上田 浩，研究分担者：坂野喜子；科学研究費補助金基盤研究(C)：新規 $\beta\gamma$ 依存性 RhoGEF と相互作用する生体分子の同定とその生理機能の解明；平成 20-22 年度；4,200 千円 (1,400：1,400：1,400 千円)
- 2) 研究代表者：坂野喜子，研究分担者：大澤陽介；科学研究費補助金基盤研究(C)：スフィンゴ脂質代謝による抗癌剤耐性の制御機構；平成 21-23 年度；3,600 千円(1,900：1,000：700 千円)
- 3) 研究代表者：中村光浩，研究分担者：坂野喜子；科学研究費補助金基盤研究(C)：リピドミクスによる新規アトピー性皮膚炎バイオマーカーの探索と検証；平成 21-23 年度；3,800 千円(1,200：1,400：1,200 千円)
- 4) 研究代表者：林真一郎；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：消化器腫瘍における骨髄細胞由来のリンパ管新生の解明および腫瘍組織内と正常組織内での新生リンパ管内皮細胞の形態的・遺伝子発現的相違の検討；平成 21 年度；1,000 千円
- 5) 研究代表者：吉村紳一，研究分担者：中島 茂，林真一郎；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：自家移植のためのヒト脂肪幹細胞移植の培養・移植法の確立；平成 21 年度；2,000 千円
- 6) 研究代表者：林真一郎，研究分担者：大澤陽介，池亀由香；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：組織幹細胞によるアルツハイマー病の早期診断；平成 22 年度；2,000 千円
- 7) 研究代表者：池亀由香；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：Sirtuin 遺伝子を介した発癌抑制機構の解明；平成 23 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 中島 茂：還元水素水の抗炎症・抗アレルギーならびに抗がん作用効果の測定及び測定結果の解析；平成 21-24 年度；130 千円；桂鋳社

3) 共同研究

- 1) 坂野喜子：皮膚及び皮膚細胞のセラミド動態に関する研究；平成 21 年度；500 千円；コーセ(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

中島 茂：

- 1) 日本生化学会評議員・参与(～現在)
- 2) 日本脂質生化学会幹事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

中島 茂：

- 1) 岐阜高血圧症治療セミナー(平成 21 年 6 月, 岐阜, 座長)
- 2) ラスウィートセミナー2010(平成 22 年 2 月, 神戸, 特別講演「アルコールと健康」演者)
- 3) Basic Medical Conference 2010(平成 22 年 4 月, 岐阜, 特別講演「基礎研究から臨床応用へ」演者)
- 4) 還元水素水研究セミナー(平成 22 年 6 月, 岐阜, 特別講演「還元水素水の可能性-生体への効果」演者)
- 5) Metabosartan Forum in Gifu(平成 22 年 6 月, 岐阜, 座長)
- 6) 第 18 回日本血管生物医学会学術集会(平成 22 年 12 月, 大阪, シンポジウム「血管細胞の転写因子」座長)
- 7) ゼチアエリアカンファレンス(平成 23 年 6 月, 岐阜, 座長)
- 8) アンチエイジングフェスタ 2011 抗加齢医学の実践(平成 23 年 12 月, 大阪, シンポジウム「老化のメカニズムはどこまで分かったのか?」座長)

坂野喜子：

- 1) 第 4 回スフィンゴセラピー(STC)研究会(平成 21 年 7 月, 米子, 演者・シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

中島 茂：

- 1) TIMA Foundation (Liechtenstein) Adviser (～現在)
- 2) 震災復興支援：一般社団法人 Lumiere et Espoir pour le Japon 理事(平成 23 年度～現在)

林真一郎：

- 1) 日本体育協会スポーツドクター(平成 22 年度)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 中島 茂：入学試験委員長 98 倍の狭き門岐阜大医学科：朝日新聞(2011 年 2 月 12 日)
- 2) 中島 茂：「水素水」の効能メカニズムの研究：中日新聞(2011 年 6 月 3 日)

12. 自己評価

評価

研究については制限されたマンパワー、予算の中で量よりも質にこだわり、きちんと評価される研究

を目指してきた。投稿中、発表準備中の研究成果も複数あり、一定の成果を上げることができたと思う。准教授(定年)、助教(転出)が相次いで去ったが、臨床科から MD の池亀助教を迎えることができ、まとまりのある研究体制が構築できた。

現状の問題点及びその対応策

基礎系分野共通の問題である研究者・大学院生の確保は、初期研修の義務化以降ますます困難となっている。研修医の大都市集中は日本全体の問題でもあるが、早急な対策がなされなければ、早晩、地方の医療体制、ひいては地方大学の基礎医学研究は人材的に崩壊の危機を迎えるであろう。帝大系でも基礎研究分野への医師の入局が激減しており、各分野あるいは大学単位の努力では限界に達していると思われる。学部学生をみていると、理系にもかかわらず実験や研究に興味を示さないものが急増しているように思われる。勉強会を企画しても参加者が集まらない。学業成績として評価されること以外には余り興味を示さず、夢とか希望という言葉が感じられない学生が急増しているように思われる。大学入学以前の家庭あるいは学校教育をきちんと見直していかなければ、医学部入学定員をいくら増やしても、本当に献身的な働きをしてくれる医師を育てるのは余り期待できないのでは、思わざるを得ない。初等・中等教育、さらに社会システム全体の抜本的な改革がなされなければ、この国の医療体制のみならず、基礎医学研究は世界から取り残されるのではないかという強い危機感を感じている。発想の柔軟な若手研究者を確保する意味でも、これからは各分野が今以上に研究業績を内外にアピールし、学生達に研究の重要性やおもしろさを啓蒙していくことが重要になるであろう。(あまり期待はできないかも知れないが、)明るい未来を信じて、努力することだけは続けたい(続けなければいけない)と思っている。

今後の展望

生化学・分子生物学は、分子レベルで病態を探る学問であるが、ともすれば木を見て森を見ずに陥る危険がある。細胞・組織再生の研究が盛んとなった昨今ではあるが、体の一部だけを更新しても他の部位がそのままでは早晩、生命体は機能不全に陥ることは明白である。現在進行中である酸化還元プロジェクト、放射線防御プロジェクトを基盤として、健康増進・アンチエイジングをキーワードに、全身を視野においた研究を今後進めていきたい。

(2) 分子生理学分野

1. 研究の概要

1) タンパク質の高次構造と機能に関する物理化学的研究

ポストゲノムに続く研究領域はプロテオーム、メタボロームなどともいわれているが、遺伝情報の翻訳によってタンパク質が生合成されて生体内で実際にその機能を発揮するまでに、タンパク質は高次構造を形成したあとに様々な翻訳後修飾を受ける。数あるタンパク質の中で血中に最も多く存在している血清アルブミン分子を例にして、さまざまな翻訳後修飾がアルブミンの生理機能、たとえばリガンド結合能などにどのような影響を及ぼしているかといった研究を行い、さらに疾患との関連について研究している。

2) 生体内酸化ストレスとレドックス応答

生体はさまざまな外部環境要因によってさまざまなストレスを受けている。とくに酸化ストレスは老化や癌化に密接に関連している。血清アルブミンは生体内で最も多量に存在する唯一のSH基含有タンパク質で、細胞外酸化還元緩衝機能を有している。細胞外液、とくに微小空間内に存在する微量なアルブミンの酸化還元状態を測定することによって、個体全体としてのレドックス応答のメカニズムの解明に取り組んでいる。

3) タンパク質と水分子間相互作用の分子メカニズム

水は生体の約60%を占める重要な分子集団で、さまざまな生体高分子にその活動の場を提供している。NMRという研究手段によって、タンパク質周辺の水分子集団の動的挙動、すなわちタンパク質-水分子間相互作用を検出することができる。その臨床応用としてMRIが知られているが、我々は現在、NMRとMRIとを用いて、新規の「分子・細胞イメージング法」の確立を目指して研究している。

2. 名簿

教授： 恵良聖一 Seiichi Era
助教： 寺田知新 Tomoyoshi Terada
助教： 村山幸一 Koichi Murayama

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 恵良聖一, 伊藤正男, 井村裕夫, 高久史麿総編集. 医学大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2009年.
- 2) 恵良聖一, 比留間 潔. アルブミンハンドブック. 大阪: トップランメディカルコミュニケーションズ; 2009年.
- 3) 寺脇博之, 山田研一, 鈴木信夫, 管谷 茂, 松山幸枝, 南 武志, 恵良聖一, 原 征彦. 糖尿病性腎症への緑茶カテキンの効果に関する予備的検討: 福永 恵, 榎野博史監修. 腎とフリーラジカル 第10集, 東京: 東京教学社; 2010年: 91-95.
- 4) 鈴木祥史, 須田健二, 平岡 厚, 村上辰和嘉, 松山幸枝, 南 武志, 前田貞亮, 恵良聖一, 副島昭典. 電解還元水を添加した透析液を用いた血漿アルブミンの透析とその効果: 福永 恵, 榎野博史監修. 腎とフリーラジカル 第10集, 東京: 東京教学社; 2010年: 158-163.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 寺脇博之, 松山幸枝, 恵良聖一, 細谷龍雄. アルブミン酸化還元比を指標として評価した腎不全の病態, 透析会誌 2010年; 43巻: 264-267.

総説（欧文）

- 1) Terarwaki H, Era S, Nakayama M, Hosoya T. Decrease in reduced-form albumin among chronic kidney disease patients: new insights in cardiovascular complication. Ther Apher Dial. 2011;15:156-160.

原著（和文）

- 1) 清水秀年, 宮村広樹, 松島 秀, 村上政隆, 恵良聖一, 内山良一, 紀ノ定保臣. Equivalent Cross-relaxation Rate Imagingを用いた耳下腺機能評価. 生体医工学 2009年; 47巻: 215-221.
- 2) 村瀬 忍, 川島 卓, 佐竹裕孝, 恵良聖一. 事象関連電位記録を用いた吃音者の言語処理の特性に関する予備的研究. 岐阜大学教育学部研究報告 2009年; 58巻: 209-214.
- 3) 鈴木祥史, 須田健二, 南 武志, 松山幸枝, 恵良聖一, 副島昭典. 糸球体疾患に続発する尿細管間質傷害と酸化型血漿 albumin の関係, 杏林医会誌 2010年; 41巻: 19-25.

原著 (欧文)

- 1) Era S, Sogami M, Kuwata K. Comparative ^1H NMR studies on the structural looseness of the aged (A) and non-aged (N) bovine mercaptalbumin in the alkaline region. *Int J Biol Macromol.* 2009;44:37-42. IF 2.502
- 2) Matsuyama Y, Hayashi T, Terawaki H, Negawa T, Terada T, Okano Y, Era S. Human astrocytes and aortic endothelial cells actively convert the oxidized form of albumin to the reduced form: reduced albumin might participate in redox regulation of nerve and blood vessel systems. *J Physiol Sci.* 2009;59:207-215. IF 1.356
- 3) Matsuyama Y, Terawaki H, Terada T, Era S. Albumin thiol oxidation and serum protein carbonyl formation are progressively enhanced with advancing stage of chronic kidney disease. *Clin Exp Nephrol.* 2009;13:308-315. IF 1.460
- 4) Murayama K, Sonoyama M, Terada T, Yokoyama Y, Nara M, Tomida M, Matsuda S. Bisphenol A weakens calcium binding affinity of sites III and IV in C-terminal domain of bovine brain calmodulin. *Chem Lett.* 2009;38:1062-1063. IF 1.401
- 5) Nakamura K, Sogami M, Era S, Matsushima S, Kinosada Y. Comparative ^1H NMR studies of saturation transfer in copolymer gels and mouse lenses. *NMR Biomed.* 2010;23:584-591. IF 3.064
- 6) Terawaki H, Takada Y, Era S, Funakoshi Y, Nakayama K, Nakayama M, Ogura M, Ito S, Hosoya T. The redox state of albumin and serious cardiovascular incidence in hemodialysis patients. *Ther Apher Dial.* 2010;14:465-471. IF 1.098
- 7) Kawai K, Hayashi T, Matsuyama Y, Minami T, Era S. Difference in redox status of serum and aqueous humor in senile cataract patients as monitored via the albumin thiol-redox state. *Jpn J Ophthalmol.* 2010;54:584-588. IF 1.054
- 8) Era S, Sogami M, Uyesaka N, Kato K, Murakami M, Matsushima S, Kinosada Y. Comparative intermolecular cross-relaxation studies on human hemoglobin in red blood cells and bovine serum albumin in solution. *NMR Biomed.* 2011;24:483-491. IF 3.064
- 9) Yoshioka T, Kimura M, Saio M, Era S, Okano Y. Plk1 is negatively regulated by RNF8. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;410:57-61. IF 2.595
- 10) Terada T, Nunomura S, Shimokawa T, Murayama K, Era S, Kondo N, Ra C. Fc ϵ RI-induced mast cell cytokine production critically involves an aspartic acid residue (D234) in the C-terminal intracellular domain of the Fc ϵ RI β chain. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;410:744-748. IF 2.595

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：寺田知新，研究分担者：恵良聖一，村山幸一；大学活性化経費(研究)：高親和性 IgE 受容体 β 鎖の構造解析；平成 21 年度；1,000 千円
- 2) 研究代表者：恵良聖一，研究分担者：松島 秀，紀ノ定保臣；科学研究費補助金基盤研究(C)：磁気共鳴法による細胞集団の機能イメージング法への展開と臨床応用；平成 22-24 年度；3,100 千円 (1,600：800：700 千円)
- 3) 研究代表者：寺田知新，研究分担者：恵良聖一，村山幸一；科学研究費補助金基盤研究(C)：高親和性 IgE 受容体 β 鎖の構造解析と予防・治療および創薬開発への応用；平成 22-24 年度；3,400 千円 (1,900：800：700 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 恵良聖一：アロマオイルの利用法の検討(2)；平成 22 年度；550 千円；正プラス(株)
- 2) 恵良聖一：ヒトに対する低線量放射線ラバーシートの抗酸化効果の検討(2)；平成 22 年度；990 千円；つげ石材(株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 恵良聖一：磁気共鳴イメージング装置及びその作動方法，画像診断システム並びに診断方法(国際特許)；平成 22 年(特許登録番号 WO2009/041534)

6. 学会活動

1) 学会役員

恵良聖一：

- 1) 日本生理学会評議員(~現在)

- 2) 日本病態生理学会理事(～現在)
- 3) 日本病態生理学会評議員(～現在)
- 4) 日本磁気共鳴医学会代議員(～現在)

寺田知新：

- 1) 日本生理学会評議員(平成 23 年度～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

恵良聖一：

- 1) 第 87 回日本生理学会大会(平成 22 年 5 月, 盛岡, シンポジウム「オフレゾナンス MR イメージング法による生体高分子と水分子間の相互作用の研究」シンポジスト)
- 2) 第 58 回日本輸血・細胞治療学会総会(平成 22 年 5 月, 名古屋, シンポジウム「アルブミンの基礎知識：アルブミンの生理的意義と病態生理」シンポジスト)
- 3) 第 39 回日本磁気共鳴医学会(平成 23 年 10 月, 北九州, 教育講演 14「基礎③」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 恵良聖一：「研究室から 大学はいま」がん検出に MR 画像化応用：岐阜新聞(2009 年 6 月 9 日)

12. 自己評価

評価

後述するが、分野の現員が非常に少ない中で研究の activity を上げるために、他大学や他研究施設との共同研究を積極的に進めてきたが、この 3 年、ようやくその成果が実ってきた感がある。しかしいつまでもこのような状況が続くのはやはり異常な状態であろうし、いずれ解決されなければならないと思われる。

現状の問題点及びその対応策

平成 16 年の大学法人化の年に、学内の事情（旧人獣共通感染防御研究センターの設立）によって、当該分野の准教授ポスト 1 が減員されたまま、既に 7 年が経過している。この間、地域医療の崩壊に関連して、学生の入学定員が 80 名から 107 名へと順次増員されてきたが、教員側の増員はないまま今日に至っている。このようなアンバランスな状態で従前通りの教育・研究を実施するのは、かなり異常な状態かつ限界点に達しているし、早急に改善されなければ、いずれ何らかのかたちで破綻をきたす可能性もあろう。

今後の展望

上記の問題は単に当該の 1 基礎医学分野に限った特殊な状態ではない。解決策としては、学部全体として人的資源の確保に取り組むことが不可欠であろう。それもし多くの要因で実現できないのであれば、今後の展望は現状以上にますます厳しいものとなる。

(3) 薬理病態学分野

1. 研究の概要

薬理学的手法, 細胞生物学的的手法および分子生物学的的手法を用い研究を行い, 代謝性疾患・血栓症・動脈硬化症・消化器系疾患の病態の解明を通してヒトに有用な新たな創薬を目指し研究を行っている。

1) 種々の病態における低分子量ストレス蛋白質の役割の解明

生体のストレス応答において中心的役割を担うと考えられているストレス蛋白質に注目し, 中でも分子量が 10-30kDa の低分子量低分子量の機能を解析している。ストレス蛋白質 (low-molecular-weight heat shock protein:HSPB) のファミリーの中で, HSPB6 (HSP20)と HSPB5 (α B クリスタリン) が従来の細胞内シャペロンとしての機能以外にストレス応答に際し, 細胞外に遊離され血小板機能を抑制することを発見し, その活性部位を見出した。また, 肝癌の病態において HSPB1 (HSP27) のリン酸化の程度および HSPB6 (HSP20) の総発現量がヒト肝細胞癌における TNM ステージと逆相関することを見出し, 最近, 低分子量 HSP が癌細胞の増殖の細胞内情報伝達機構を制御していることを示した。さらに, 血小板からの顆粒分泌を HSPB1 (HSP27) のリン酸化が制御していることを明らかとしている。現在, 低分子量ストレス蛋白質 (HSP27・HSP20・ α B クリスタリン) の細胞内 (骨芽細胞・神経細胞・血小板・肝癌細胞・膵癌細胞)・細胞外での機能及び役割の詳細な検討を行っている。

2) 骨芽細胞・神経細胞・血管平滑筋細胞・肝細胞・膵細胞の細胞内情報伝達機構の解明

初代培養細胞およびモデルクローン化細胞を用いて, 細胞増殖因子・サイトカイン・ホルモン等種々の生理活性物質の細胞内情報伝達機構について検討を行っている。細胞の増殖・分化や死のメカニズム・その制御における役割を解析し, 骨粗鬆症・血栓症・動脈硬化症・急性冠症候群・肝癌・膵癌・大腸癌の病態の解明を試みている。さらに, これら疾患に使用されている種々の薬物の新たな作用の解析および作用機構の検討を行っている。

3) 代謝疾患 (糖尿病・骨粗鬆症等) における血小板機能の変化と誘発される種々の病態生理の解明

糖尿病などの代謝疾患は, 血栓症 (虚血疾患) や神経・臓器障害などの 2 次的疾患の誘発率が高く, 血小板機能の変化と血栓症や各臓器障害との関係を追求している。最近, 骨粗鬆症の治療薬として使用されている SERM の一つであるラロキシフェンがその副作用として血小板凝集能を亢進させることを明らかとしている。現在, 代謝疾患 (糖尿病・骨粗鬆症等) における血小板の機能および血小板細胞内情報伝達機構の解析を行っている。

4) アポトーシス発現機序の解明とその予防法の確立

種々の疾患に, アポトーシスにおける細胞死が深く関与していることが明らかとなってきた。スナネズミやマウスにおける脳虚血・再灌流にともなう海馬神経細胞死モデルや網膜神経細胞死モデル, あるいは好中球細胞死モデル等を指標に, その発現機序の解明ならびに予防法の探求を行っている。

2. 名簿

教授:	小澤 修	Osamu Kozawa
教授(併任):	丹羽雅之	Masayuki Niwa
助教:	足立政治	Seiji Adachi

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)
なし

総説 (和文)

- 1) 土井智章, 小澤 修, 加藤久晶, 足立政治, 小倉真治. 血小板に対するアンチトロンビン III の抗炎症作用の分子機序の解析: 血小板に対する直接作用の可能性について, *Coagulation & Inflammation* 2010 年; 4 巻: 19-21.

総説 (欧文)

- 1) Shimizu M, Adachi S, Masuda M, Kozawa O, Moriwaki H. Cancer chemoprevention with green tea catechins by targeting receptor tyrosine kinases. *Mol Nutr Food Res.* 2011;55:832-843.

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Niwa M, Hara A, Taguchi A, Kozawa O, Mori H. Intriguing expression of HSP20 and its phosphorylation in hippocampal CA1 pyramidal neurons following transient forebrain ischemia. *Neurol Res.* 2009;31:721-727. IF 1.621
- 2) Kuno M, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Mizutani J, Otsuka T, Harada A, Adachi S, Kozawa O, Tokuda H. Rho-kinase inhibitors decrease TGF- β -stimulated VEGF synthesis through stress-activated protein kinase/c-Jun N-terminal kinase in osteoblasts. *Biochem Pharmacol.* 2009;77:196-203. IF 4.889
- 3) Tokuda H, Hosoi T, Hayasaka K, Okamura K, Yoshimi N, Kozawa O. Overexpression of protein kinase C- δ plays a crucial role in interleukin-6-producing pheochromocytoma presenting with acute inflammatory syndrome: a case report. *Horm Metab Res.* 2009;41:333-338. IF 2.414
- 4) Yamauchi J, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Adachi S, Minamitani C, Natsume H, Mizutani J, Otsuka T, Takeda J, Harada A, Kozawa O, Tokuda H. Tacrolimus but not cyclosporine A enhances FGF-2-induced VEGF release in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2009;23:267-272. IF 1.814
- 5) Adachi S, Natsume H, Yamauchi J, Matsushima-Nishiwaki R, Joe AK, Moriwaki H, Kozawa O. p38 MAP kinase controls EGF receptor downregulation via phosphorylation at Ser1046/1047. *Cancer Lett.* 2009;277:108-113. IF 4.864
- 6) Minamitani C, Otsuka T, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Adachi S, Hanai Y, Mizutani J, Tokuda H, Kozawa O. Involvement of Rho-kinase in sphingosine 1-phosphate-stimulated HSP27 induction in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2009;24:77-82. IF 1.814
- 7) Tanabe K, Nishimura K, Dohi S, Kozawa O. Mechanisms of interleukin-1 β -induced GDNF release from rat glioma cells. *Brain Res.* 2009;1274:11-20. IF 2.623
- 8) Natsume H, Mizutani J, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Tokuda H, Kozawa O, Otsuka T. Involvement of Rho-kinase in TGF- β -stimulated heat shock protein 27 induction in osteoblasts. *Mol Med Rep.* 2009;2:687-691.
- 9) Natsume H, Adachi S, Takai S, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Yamauchi J, Kato K, Mizutani J, Kozawa O, Otsuka T. (-)-Epigallocatechin gallate attenuates the induction of HSP27 stimulated by sphingosine 1-phosphate via suppression of phosphatidylinositol 3-kinase/Akt pathway in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2009;24:197-203. IF 1.814
- 10) Yamaguchi S, Tanabe K, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Adachi S, Iida H, Kozawa O, Dohi S. Involvement of Rho-kinase in tumor necrosis factor- α -induced interleukin-6 release from C6 glioma cells. *Neurochem Int.* 2009;55:438-445. IF 3.601
- 11) Adachi S, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Natsume H, Minamitani C, Mizutani J, Otsuka T, Kozawa O. Involvement of Rho-kinase in prostaglandin E₁-stimulated VEGF synthesis through stress-activated protein kinase/c-Jun N-terminal kinase in osteoblast-like MC3T3-E1 cells. *Prostag Oth Lipid M.* 2009;90:1-6. IF 2.033
- 12) Hanai Y, Adachi S, Yasuda I, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Akamatsu S, Sakakibara S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O, Tokuda H. Collagen-induced p38 MAP kinase activation is a biomarker of platelet hyper-aggregation in patients with diabetes mellitus. *Life Sci.* 2009;85:386-394. IF 2.451
- 13) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Niwa M, Tokuda H, Akamatsu S, Doi T, Kato H, Yoshimura S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O. α B-crystallin extracellularly suppresses ADP-induced granule secretion from human platelets. *FEBS Lett.* 2009;583:2464-2468. IF 3.601
- 14) Adachi S, Shimizu M, Shirakami Y, Yamauchi J, Natsume H, Matsushima-Nishiwaki R, To S, Weinstein IB, Moriwaki H, Kozawa O. (-)-Epigallocatechin gallate downregulates EGF receptor via phosphorylation at Ser 1046/1047 by p38 MAP kinase in colon cancer cells. *Carcinogenesis* 2009;30:1544-1552. IF 5.402
- 15) Doi T, Adachi S, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Minamitani C, Otsuka T, Tokuda H, Akamatsu S, Iwama T, Kozawa O, Ogura S. Antithrombin III suppresses ADP-induced platelet granule secretion: inhibition of HSP27 phosphorylation. *Arch Biochem Biophys.* 2009;489:62-67. IF 3.022
- 16) Tokuda H, Harada A, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Natsume H, Minamitani C, Mizutani J, Otsuka T, Kozawa O. Raloxifene enhances spontaneous microaggregation of platelets through up-regulation of p44/p42 MAP kinase: a case report. *Osteoporosis Int.* 2010;21:189-193. IF 4.859
- 17) Tokuda H, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Hanai Y, Takai S, Harada A, Kozawa O. Inhibition by minodronate of basic fibroblast growth factor-stimulated vascular endothelial growth factor synthesis in osteoblast-like cells. *Mol Med Rep.* 2010;3:167-171. IF 0.307
- 18) Takai S, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Saio M, Takami T, Kozawa O. TGF- β superfamily enhances the antigen-induced IFN- γ production by effector/memory CD8⁺ T cells. *Int J Mol Med.* 2010;25:105-111. IF 1.814

- 19) Minamitani C, Tokuda H, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Yamauchi J, Kato K, Natsume H, Mizutani J, Kozawa O, Otsuka T. p70 S6 kinase limits tumor necrosis factor- α -induced interleukin-6 synthesis in osteoblast-like cells. *Mol Cell Endocrinol.* 2010;315:195-200. IF 4.119
- 20) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Doi T, Niwa M, Akamatsu S, Tokuda H, Ogura S, Yoshimura S, Iwama T, Kozawa O. Thromboxane A₂ promotes soluble CD40 ligand release from human platelets. *Atherosclerosis.* 2010;209:415-421. IF 4.086
- 21) Kato H, Adachi S, Doi T, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Akamatsu S, Enomoto Y, Tokuda H, Otsuka T, Iwama T, Kozawa O, Ogura S. Mechanism of collagen-induced release of 5-HT, PDGF-AB and sCD40L from human platelets: role of HSP27 phosphorylation via p44/p42 MAPK. *Thromb Res.* 2010;126:39-43. IF 2.372
- 22) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kozawa O, Moriwaki H. Rho-kinase negatively regulates epidermal growth factor-stimulated colon cancer cell proliferation. *Int J Oncol.* 2010;36:585-592. IF 2.571
- 23) Yasuda E, Kumada T, Toyoda H, Kaneoka Y, Maeda A, Okuda S, Yoshimi N, Kozawa O. Evaluation for clinical utility of glypican-3 (GPC3), measured by a commercially available ELISA kit with GPC3 antibody, as a serological and histological marker for hepatocellular carcinoma. *Hepatol Res.* 2010;40:477-485. IF 1.857
- 24) Natsume H, Tokuda H, Adachi S, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Minamitani C, Niida S, Mizutani J, Kozawa O, Otsuka T. Rho-kinase limits FGF-2-stimulated VEGF release in osteoblasts. *Bone.* 2010;46:1068-1074. IF 4.601
- 25) Adachi S, Yasuda I, Natsume H, Nakashima M, Moriwaki H, Kozawa O. HSP90 inhibitors induce down-regulation of EGF receptor via p38 MAPK-mediated phosphorylation at Ser1046/7 in human pancreatic cancer cells. *Oncol Rep.* 2010;23:1709-1714. IF 1.686
- 26) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Yamaguchi S, Iida H, Dohi S, Kozawa O. Mechanisms of tumor necrosis factor- α -induced interleukin-6 synthesis in glioma cells. *J Neuroinflamm.* 2010;7:16. IF 5.785
- 27) Natsume H, Tokuda H, Mizutani J, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Kato K, Kozawa O, Otsuka T. Synergistic effect of vasoactive intestinal peptides on TNF- α -induced IL-6 synthesis in osteoblasts: amplification of p44/p42 MAP kinase activation. *Int J Mol Med.* 2010;25:813-817. IF 1.814
- 28) Kato K, Tokuda H, Natsume H, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Mizutani J, Kozawa O, Otsuka T. Rho-kinase regulates prostaglandin D₂-stimulated heat shock protein 27 induction in osteoblasts. *Exp Ther Med.* 2010;1:579-584.
- 29) Doi T, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Natsume H, Kato K, Mizutani J, Otsuka T, Tokuda H, Akamatsu S, Iwama T, Kozawa O, Ogura S. Antithrombin III reduces collagen-stimulated granule secretion of PDGF-AB and the release of soluble CD40 ligand from human platelets. *Int J Mol Med.* 2010;26:387-392. IF 1.814
- 30) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Dohi S, Kozawa O. Phosphorylation status of heat shock protein 27 regulates the interleukin-1 β -induced interleukin-6 synthesis in C6 glioma cells. *Neuroscience.* 2010;170:1028-1034. IF 3.215
- 31) Kato K, Tokuda H, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Natsume H, Yamakawa K, Gu Y, Otsuka T, Kozawa O. AMP-activated protein kinase positively regulates FGF-2-stimulated VEGF synthesis in osteoblasts. *Biochem Biophys Res Commun.* 2010;400:123-127. IF 2.595
- 32) Natsume H, Tokuda H, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Minamitani C, Otsuka T, Kozawa O. Wnt3a regulates tumor necrosis factor- α -stimulated interleukin-6 release in osteoblasts. *Mol Cell Endocrinol.* 2011;331:66-72. IF 4.119
- 33) Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Yamauchi T, Yoshioka T, Okano Y, Moriwaki H, Kozawa O. Rho-kinase inhibitor upregulates migration by altering focal adhesion formation via the Akt pathway in colon cancer cells. *Eur J Pharmacol.* 2011;650:145-150. IF 2.737
- 34) Kato K, Otsuka T, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Natsume H, Kozawa O, Tokuda H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits thyroid hormone-stimulated osteocalcin synthesis in osteoblasts. *Mol Med Rep.* 2011;4:297-300. IF 0.307
- 35) Kato K, Tokuda H, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Yamauchi J, Natsume H, Minamitani C, Mizutani J, Otsuka T, Kozawa O. Role of heat shock protein 27 in transforming growth factor- β -stimulated vascular endothelial growth factor release in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2011;27:423-428. IF 1.814
- 36) Tokuda H, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Natsume H, Otsuka T, Kozawa O. Enhancement of basic fibroblast growth factor-stimulated VEGF synthesis by Wnt3a in osteoblasts. *Int J Mol Med.* 2011;27:859-864. IF 1.814
- 37) Enomoto Y, Adachi S, Doi T, Natsume H, Kato K, Matsushima-Nishiwaki R, Akamatsu S, Tokuda H, Yoshimura S, Otsuka T, Ogura S, Kozawa O, Iwama T. cAMP regulates ADP-induced HSP27 phosphorylation in human platelets. *Int J Mol Med.* 2011;27:695-700. IF 1.814
- 38) Kato K, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Natsume H, Katagiri Y, Hirose Y, Mizutani J, Tokuda H, Kozawa O, Otsuka T. Regulation by heat shock protein 27 of osteocalcin

- synthesis in osteoblasts. *Endocrinology*. 2011;152:1872-1882. IF 4.993
- 39) Natsume H, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Kato K, Yamakawa K, Otsuka T, Kozawa O. Wnt3a up-regulates transforming growth factor- β -stimulated VEGF synthesis in osteoblasts. *Cell Biochem Funct*. 2011;29:371-377. IF 1.651
- 40) Kato K, Otsuka T, Matsushima-Nishiwaki R, Natsume H, Kozawa O, Tokuda H. Rho-kinase regulates thrombin-stimulated interleukin-6 synthesis via p38 mitogen-activated protein kinase in osteoblasts. *Int J Mol Med*. 2011;28:653-658. IF 1.814
- 41) Yamauchi T, Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Nishii Y, Yoshioka T, Okano Y, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. UV-C irradiation induces downregulation of EGF receptors via phosphorylation at serine 1046/1047 in human pancreatic cancer cells. *Radiat Res*. 2011;176:565-574. IF 2.578
- 42) Tanabe K, Kozawa O, Iida H. Midazolam suppresses interleukin-1 β -induced interleukin-6 release from rat glial cells. *J Neuroinflamm*. 2011;8:68. IF 5.785
- 43) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kawaguchi J, Hanamatsu T, Yoshioka T, Okano Y, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Inhibition of Rho-associated coiled-coil containing protein kinase enhances the activation of epidermal growth factor receptor in pancreatic cancer cells. *Mol Cancer* 2011;10:79. IF 3.779
- 44) Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Yamauchi T, Kawaguchi J, Shimizu M, Itani M, Nakamura M, Nishii Y, Yoshioka T, Hirose Y, Okano Y, Moriwaki H, Kozawa O. Ultraviolet irradiation can induce evasion of colon cancer cells from stimulation of epidermal growth factor. *J Biol Chem*. 2011;286:26178-26187. IF 5.328
- 45) Yamauchi T, Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Yoshioka T, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Ultra-violet irradiation induces apoptosis via mitochondrial pathway in pancreatic cancer cells. *Int J Oncol*. 2011;39:1375-1380. IF 2.571
- 46) Kato K, Tokuda H, Mizutani J, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Natsume H, Kozawa O, Otsuka T. Role of HSP27 in tumor necrosis factor- α -stimulated interleukin-6 synthesis in osteoblasts. *Int J Mol Med*. 2011;28:887-893. IF 1.814
- 47) Matsushima-Nishiwaki R, Adachi S, Yoshioka T, Yasuda E, Yamagishi Y, Matsuura J, Muko M, Iwamura R, Noda T, Toyoda H, Kaneoka Y, Okano Y, Kumada T, Kozawa O. Suppression by heat shock protein 20 of hepatocellular carcinoma cell proliferation via inhibition of the mitogen-activated protein kinases and Akt pathways. *J Cell Biochem*. 2011;112:3430-3439. IF 3.122
- 48) Adachi S, Yasuda I, Kawaguchi J, Yamauchi T, Nakashima M, Itani M, Nakamura M, Yoshioka T, Moriwaki H, Kozawa O. Ultraviolet enhances the sensitivity of pancreatic cancer cells to gemcitabine by activation of 5' AMP-activated protein kinase. *Biochem Biophys Res Commun*. 2011;414:53-59. IF 2.595
- 49) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kawaguchi J, Itani M, Yoshioka T, Matsushima-Nishiwaki R, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Phosphorylation status of heat shock protein 27 plays a key role in gemcitabine-induced apoptosis of pancreatic cancer cells. *Cancer Lett*. 2011;313:218-225. IF 4.864

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：徳田治彦，研究分担者：小澤 修；科学研究費補助金基盤研究(C)：糖尿病患者における血栓形成亢進機序の解明と簡便な血小板凝集能の検査法の確立；平成 20-22 年度；3,700 千円(1,500：1,100：1,100 千円)
- 2) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；科学研究費補助金基盤研究(C)：心血管系における過大侵襲に対するストレス応答の分子基盤の解析；平成 20-22 年度；3,500 千円(1,500：1,000：1,000 千円)
- 3) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；科学研究費補助金基盤研究(C)：中枢神経系における神経保護作用の分子基盤の解析；平成 20-22 年度；3,600 千円(1,900：1,000：700 千円)
- 4) 研究代表者：足立政治；科学研究費補助金若手研究(B)：脂質ラフトを標的とした EGCG による大腸癌予防の研究；平成 20-21 年度；3,100 千円(1,600：1,500 千円)
- 5) 研究代表者：小澤 修，研究分担者：足立政治；科学研究費補助金基盤研究(C)：原発性肝細胞がんの発症・進展における低分子量ストレス蛋白質の役割に関する解析；平成 22-24 年度；3,500 千円(1,500：1,000：1,000 千円)
- 6) 研究代表者：足立政治；科学研究費補助金若手研究(B)：EGFR のセリン残基を分子標的とした新規治療薬の開発；平成 22-23 年度；3,000 千円(1,600：1,400 千円)
- 7) 研究代表者：小澤 修，研究分担者：足立政治；財団法人成長科学協会助成金：AMPK を介するエネルギー代謝機構の骨の成長における役割に関する研究；平成 22 年度；500 千円
- 8) 研究代表者：足立政治，研究分担者：小澤 修，中島賢憲，山内貴裕；財団法人横山臨床薬理研究助成基金：上皮成長因子受容体のセリンのリン酸化を分子標的とした新規膵がん治療薬の開発；平成

22年度；1,000千円

- 9) 研究代表者：安田一朗，研究分担者：小澤 修，足立政治；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：膵癌に対する Gemcitabine の作用発現における HSP27 の役割；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,500：1,400：1,000千円)
- 10) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：全身麻酔薬の中樞神経系に対する脳保護作用の分子機序の解析；平成 23-25 年度；4,100 千円(2,200：1,100：800千円)
- 11) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：過大侵襲に対する凝固線溶系におけるストレス応答の分子基盤の解析；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,700：1,100：1,100千円)

2) 受託研究

- 1) 小澤 修：高齢者の代謝疾患における血小板機能等の病態・診断・治療に関する研究；平成 22-23 年度；3,000 千円(1,500：1,500千円)；国立長寿医療研究センター

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

小澤 修：

- 1) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 2) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 3) 日本 Shock 学会評議員(平成 21 年 5 月～現在)

丹羽雅之：

- 1) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 2) 日本炎症・再生学会評議員(～現在)
- 3) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 小澤 修，徳田治彦：骨代謝における全体防御機構の分子基盤の解析：ストレス蛋白質の機能：平成 19-20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 21 年 5 月)

11. 報道

- 1) 小澤 修：「研究室から 大学はいま」病態の解明から創薬目指す：岐阜新聞(2010年12月11日)

12. 自己評価

評価

私共、大学教員の使命は“日々遂行している研究の成果を英文原著論文として公表することである”との観点から、この三年間のアウトプットは49報であった。論文の質としての一つの指標であるインパクトファクターの平均値は2.842である。この観点からアウトプットの“質”を上げることが必要と思われる。

現状の問題点及びその対応策

研究を推進する上で最も重要な点は、日々の研究を一緒に進めてくれる優秀な人材の獲得である。やはり、研究を遂行していく上で、この一点に懸かっている。この人たちの中から、将来、大学および公的研究機関で医学研究を担う研究者が一人でも育成できるよう努力していきたい。

今後の展望

医学部内外との共同研究を推し進めていきたいと考えている。現在遂行している私共の研究成果から、将来有効で安全な薬剤を開発すること（創薬）を目指し、いつの日か患者さんに還元したいと考えている。

(4) 寄生虫学分野

1. 研究の概要

- 1) 旋毛虫感染による筋肉細胞変異機序の解明
- 2) 旋毛虫の機能蛋白の合成とその応用
- 3) 旋毛虫感染による自己免疫の抑制
- 4) 旋毛虫感染による糖尿病抑制
- 5) タイ肝吸虫感染による発癌機序の解明
- 6) 能動的な医学教育方法の開発

2. 名簿

教授： 高橋優三 Yuzo Takahashi
准教授： 長野 功 Isao Nagano
助教： 呉 志良 Zhiliang Wu

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 高橋優三, 長野 功編著. ヒトが生き残るための体のしくみ 第2版, 名古屋: 三恵社; 2009年.
- 2) 高橋優三. 糞便検査 虫卵 原虫: 臨床検査データブック, 東京: 医学書院; 2009年: 655-656.
- 3) 長野 功, 高橋優三, 森田啓之, 坂 昌範. ヒトが生き残るための体のしくみ, 第3版, 名古屋: 三恵社; 2009年.
- 4) 長野 功, 高橋優三, 森田啓之, 坂 昌範. ヒトが生き残るための体のしくみ, 第4版, 名古屋: 三恵社; 2010年.
- 5) 呉 志良, 長野 功, 高橋優三. 医科学の進歩: 寄生虫とその宿主たる人と動物: RB pathway involves in tumorigenesis of *Opisthorchis viverrini* infection-induced cholangiocarcinoma, 大阪: 大阪市立大学; 2010年: 103-110.
- 6) 長野 功, 呉 志良, Yi-Chun Lo, 前田卓哉, Ljiljana Sofronic-Milosavljevic, Somchai Jongwutiwes, 高橋優三. 医科学の進歩: 寄生虫とその宿主たる人と動物: 種特異的組換え抗原を用いたヒト旋毛虫症の血清学的診断法の検討, 大阪: 大阪市立大学; 2010年: 111-114.
- 7) 志村俊郎, 高橋優三監修. スキルスラボハンドブック, 東京: 日本M&S医学教育研究会; 2010年.
- 8) 高橋優三分担翻訳, シミュレーターとシミュレーション; 医学教育実践医学教育ガイド, 東京: エルゼビア・ジャパン株式会社; 2010年.
- 9) 高橋優三. 教育・訓練システム: 医療画像ハンドブック, 東京: (株)オーム社; 2010年: 1377-1382.
- 10) 長野 功, 高橋優三, 森田啓之, 坂 昌範, 今井篤志, 高岡 健, 浅野一信. 巧みな体のしくみ - ヒトの生存を脅かす要因と生き残り戦略-(初版), 名古屋: 三恵社; 2011年.
- 11) 高橋優三. 新医学教育あれこれ, 名古屋: 三恵社; 2011年.
- 12) 高橋優三. シミュレーション医学教育の原理的な利点と欠点(問題点): 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 20-25.
- 13) 高橋優三, 奥 幸子, 早川大輔. シミュレーション医学教育の現状と将来: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編集, シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 26-34.
- 14) 奥 幸子, 高橋優三. シミュレーションを用いた医療英語訓練: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 174-181.
- 15) 高橋優三, 木島竜吾, 近藤大祐. 患者ロボット(メカ: 全身 部分, ソフト): 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 204-213.
- 16) 高橋優三, 奥 幸子, 早川大輔, 木島竜吾, 近藤大祐. シミュレーション医学教育用の教材ソフト開発: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 266-274.
- 17) 高橋優三, 奥 幸子. シミュレーション医学教育の外注産業: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 303-307.
- 18) 高橋優三. 社会への貢献: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 310-313.
- 19) 高橋優三. PBL テュートリアルを成功させるための基本戦略: 日本薬学会編. 問題解決型学習ガイドブック-薬学教育に適した PBL テュートリアルの進め方, 2011年: 13-22.
- 20) 丹羽雅之, 高橋優三, 鈴木康之. インターネットチュートリアル “楽位置楽 The Tutorial”の開発と実践: 日本薬学会編. 問題解決型学習ガイドブック-薬学教育に適した PBL テュートリアルの進め方, 2011年: 81-88.
- 21) 高橋優三. 糞便検査 虫卵 原虫: 臨床検査データブック, 東京: 医学書院; 2011年: 699-700.

著書（欧文）

なし

総説 (和文)

- 1) 高橋優三, 奥 幸子. 医療シミュレーションとは?, J Integ Med. 2009年; 119巻: 102-105.

総説 (欧文)

- 1) Takahashi Y, Alexandra, Oku S. Attractive Scenario Writing Kaoshiung Medical Journal. 2009; 25:250-253.
- 2) Nagano I, Wu Z, Takahashi Y. Functional genes and proteins of *Trichinella* spp. Parasitolo Res. 2009;104:197-207.

原著 (和文)

- 1) 高橋優三, 長野 功, 奥 志良. 学生がプレゼンテーション技術を学ぶための自己評価と同僚評価の評価シートの試作, 医学教育 2009年; 40巻: 355-359.
- 2) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 加藤智美, 阿部恵子, 若林英樹, 高橋優三, 鈴木康之. 医学教育セミナーとワークショップ: 30回開催を振り返って, 医学教育 2009年; 40巻: 367-374.
- 3) 小森伸也, 小國 務, 末森晋典, 望月清文, 林 裕子, 高橋優三. 岐阜県内で感染したと推定される東洋眼虫のヒト結膜嚢内寄生例, あたらしい眼科 2009年; 26巻: 1401-1404.
- 4) 高橋優三. 医学教育におけるVRのニーズ, 日本バーチャルリアリティ学会誌 2010年; 15巻: 14-18.
- 5) 寺町ひとみ, 葛谷有美, 加藤 隆, 馬場 博, 高橋優三, 土屋照雄. 医療コミュニケーション授業における教材の開発とその評価—動画およびシミュレーターの効果—, Jpn. J. Pharm. Health Care Sci. 2010年; 36巻: 807-816.
- 6) 高橋優三, 奥 幸子. 海外で臨床実習をするに当たっての準備, 医学教育 2010年; 41巻: 211-216.
- 7) 高橋優三, 谷本真由実, 奥 幸子. シミュレーション教育を同学年屋根瓦方式とインターネットテュートリアルを組み合わせて実施, Japanese Association of Simulation for Medical Education. 2010年; 3巻: 1-4.
- 8) 奥 幸子, 高橋優三. スキルラボ内でのシミュレーターの効果的な配置について, Japanese Association of Simulation for Medical Education 2010年; 3巻: 5-7.
- 9) 志村俊郎, 吉井文均, 吉村明修, 阿部恵子, 高橋優三, 佐伯晴子, 藤崎和彦, 阿曾亮子, 井上千鹿子. 医学部・医科大学における模擬患者・標準模擬患者養成および参加型教育に関する実態調査, 医学教育 2011年; 42: 29-35.
- 10) 寺町ひとみ, 東 明香, 高橋優三, 土屋照雄. ファーマンストレーナーを活用した医療コミュニケーション授業の構築および評価, Journal of pharmaceutical Communication 2011年; 9巻: 5-16.

原著 (欧文)

- 1) Shimizu A, Takahashi Y, Suzuki Y, Lefor A T. Preparing Students for Overseas Clinical Rotations. Med Education 2009;40:47-53.
- 2) Wakabayashi H, Diaz L A, Rubenstein D, Lefor A, Kitajima Y, Aoyama Y, Suzuki Y, Takahashi Y, Ban N. Opinion "Three essential conditions to cultivate physician scientists. Med Education 2009;40:433-437.
- 3) Wu Z, Nagano I, Kajita K, Nishina M, Takahashi Y. Hypoglycemia induced by *Trichinella* infection is due to the increase of glucose uptake in infected muscle cells. Int J Parasitol. 2009;39:427-434. IF 3.822
- 4) Boonmars T, Wu Z, Boonjaruspinyo S, Pinlaor S, Nagano I, Takahashi Y, Kaewsamut B, Yongvanit P. Alterations of gene expression of RB pathway in *Opisthorchis viverrini* infection-induced cholangiocarcinoma. Parasitol Res. 2009;105:1273-1281. IF 1.812
- 5) Ikeda T, Kajita K, Zhiliang Wu, Hanamoto T, Mori I, Fujioka K, Okada H, Fujikake T, Uno Y, Morita H, Nagano I, Takahashi Y, Ishizuka T. Effects of phorbol ester-sensitive PKC (c/nPKC) activation on the production of adiponectin in 3T3-L1 adipocytes. IUBMB Life. 2009;61:644-650. IF 4.251
- 6) Yi-Chun Lo, Chien-Ching Hung, Ching-Shih Lai, Zhiliang Wu, Isao Nagano, Takuya Maeda, Yuzo Takahashi, Chan-Hsien Chiu, Donald Dah-Shyong Jiang. Human Trichinosis after Consumption of Soft-Shell Turtles, Taiwan. Emerging Infectious Diseases 2009;15:2056-2058. IF 6.859
- 7) Yoshikawa H, Wu Z, Pandey K, Pandey BD, Sherchand JB, Yanagi T, Kanbara H. Molecular characterization of *Blastocystis* isolates from children and rhesus monkeys in Kathmandu, Nepal. Vet Parasitol. 2009;160:295-300. IF 2.331
- 8) Sriraj P, Boonmars T, Boonjaruspinyo S, Kaewsamut B, Srisawangwong T, Sithithaworn P, Wu Z. Effect of curcumin on pathogenesis of hamster-opisthorchiasis through apoptosis-related gene expression. Southeast Asian J Trop Med Public Health. 2009;40:1208-1215.
- 9) Wu Z, Nagano I, Asano K, Takahashi Y. Infection of non-encapsulated species of *Trichinella* ameliorates experimental autoimmune encephalomyelitis involving suppression of Th17 and Th1 response. Parasitol Res. 2010;107:1173-1188. IF 1.812
- 10) Wu Z, Boonmars T, Boonjaruspinyo S, Nagano I, Pinlaor S, Puapairoj A, Yongvanit P, Takahashi Y. Candidate genes involving in tumorigenesis of cholangiocarcinoma induced by *Opisthorchis viverrini* infection. Parasitol Res. 2011;109:657-673. IF 1.812
- 11) Boonmars T, Wu Z, Boonjaruspinyo S, Puapairoj A, Kaewsamut B, Nagano I, Pinlaor S, Yongvanit P, Wonkchalee O, Juasook A, Sudsarn P, Srisawangwong T. Involvement of c-Ski Oncoprotein in

- Carcinogenesis of Cholangiocarcinoma Induced by *Opisthorchis viverrini* and N-nitrosodimethylamine. *Pathol Oncol Res.* 2011;17:219-227. IF 1.483
- 12) Nagano I, Wu Z, Asano K, Takahashi Y. Molecular cloning and characterization of transgelin-like proteins mainly transcribed in newborn larvae of *Trichinella* spp. *Vet Parasitol.* 2011;178:134-142. IF 2.331
- 13) Boonjaraspinyo S, Wu Z, Boonmars T, Kaewkes S, Loilome W, Sithithaworn P, Nagano I, Takahashi Y, Yongvanit P, Bhudhisawasdi V. Overexpression of PDGFA and its receptor during carcinogenesis of *Opisthorchis viverrini*-associated cholangiocarcinoma. *Parasitol Int.* 2011;61:145-150. IF 2.259
- 14) Boonjaraspinyo S, Boonmars T, Aromdee C, Puapairoj A, Wu Z. Indirect effect of a turmeric diet: enhanced bile duct proliferation in Syrian hamsters with a combination of partial obstruction by *Opisthorchis viverrini* infection and inflammation by N-nitrosodimethylamine administration. *Parasitol Res.* 2011;108:7-14. IF 1.812
- 15) Wonkchalee O, Boonmars T, Kaewkes S, Chamgramol Y, Pairojkul C, Wu Z, Juasook A, Sudsarn P, Boonjaraspinyo S. *Opisthorchis viverrini* infection causes liver and biliary cirrhosis in gerbils. *Parasitol Res.* 2011;109:545-551. IF 1.812

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：長野 功，研究分担者：鎌足雄司，古山浩子，呉 志良；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」；創薬ライブラリーとしての寄生線虫を用いた新規生理活性物質の探索；平成 21 年度；500 千円
- 2) 研究代表者：長野 功，研究分担者：呉 志良；科学研究費補助金基盤研究(C)：旋毛虫由来転写関連因子 Rcd1 が筋肉細胞分化誘導に及ぼす影響の分子生物学的解析；平成 20-22 年度；3,960 千円(1,560：1,500：900 千円)
- 3) 研究代表者：長野 功；独立行政法人科学技術振興機構シーズ発掘試験；種特異的組換え抗原による旋毛虫感染の血清学的検査法の開発；平成 21 年度；2,000 千円
- 4) 研究代表者：長野 功，研究分担者：鎌足雄司，古山浩子，呉 志良；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」；創薬ライブラリーとしての寄生線虫を用いた新規生理活性物質の探索；平成 22 年度；1,000 千円
- 5) 研究代表者：長野 功；独立行政法人科学技術振興機構，研究成果最適展開支援事業フィージビリティスタディ【FS】ステージ 探索タイプ；旋毛虫分泌蛋白質の免疫抑制機構の解析とその医薬品への応用；平成 22 年度；1,300 千円
- 6) 研究代表者：呉 志良，研究分担者：長野 功；科学研究費補助金基盤研究(C)：タイ肝吸虫感染による胆管癌の発癌分子メカニズム；平成 21-23 年度；3,500 千円(1,300：1,400：800 千円)
- 7) 研究代表者：呉 志良；研究科長・医学部長裁量経費；旋毛虫感染でアトピー性皮膚炎や花粉症の症状を軽減する動物モデルの作製；平成 21 年度；500 千円
- 8) 研究代表者：長野 功，研究分担者：呉 志良；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：旋毛虫分泌タンパク質による免疫抑制作用の免疫学および構造生物学的解析；平成 23-25 年度；5,460 千円(2,470：1,690：1,300 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 長野 功，高橋優三，呉 志良；旋毛虫の種特異的抗原；および該抗原を利用した旋毛虫感染の検査法；平成 23 年 9 月 30 日特許取得；特許第 4830106 号

6. 学会活動

1) 学会役員

高橋優三：

- 1) 日本寄生虫学会理事(～現在)
- 2) 日本臨床寄生虫学会評議員(～現在)
- 3) 日本医療教授システム学会理事(～現在)

- 4) 日本 M&S 医学教育研究会副会長(平成 22 年 1 月～現在)
- 5) 臨床コーチング研究会副会長(～現在)
- 6) International Congress for Trichinellosis ; Active Member(～現在)

長野 功 :

- 1) 日本寄生虫学会評議員(～現在)
- 2) 日本感染症学会評議員(～現在)

呉 志良 :

- 1) International Congress for Trichinellosis ; Active Member(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

高橋優三 :

- 1) Parasites & Vectors ; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

高橋優三 :

- 1) 第 3 回医療教授システム国際シンポジウム(平成 21 年 7 月, 東京「手術の計画と教育シミュレーションで全員が共有ー耳鼻咽喉科領域での具体的取り組みー」座長)
- 2) Simulation and Training in 3rd Computational Surgery (2011.01, Houston Texas USA)

呉 志良 :

- 1) 13th International Congress for Trichinellosis (平成 23 年 8 月, 中国「Human Trichinellosis」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

高橋優三 :

- 1) 医療通訳サポーター研修(平成 21 年度～現在)

10. 報告書

- 1) 長野 功 : 種特異的組換え抗原による旋毛虫感染の血清学的検査法の開発 : 平成 21 年度シーズ発掘試験(発掘型)研究報告書(平成 22 年 4 月)
- 2) 長野 功 : 独立行政法人科学技術振興機構, 研究成果最適展開支援事業フェージビリティスタディ【FS】ステージ 探索タイプ; 旋毛虫分泌蛋白質の免疫抑制機構の解析とその医薬品への応用報告書(平成 23 年 4 月)
- 3) 呉 志良 : タイ肝吸虫感染による胆管がん発生の分子機構 : 平成 20-22 年度国際学術研究助成研究成果報告書 (平成 23 年 10 月)
- 4) 長野 功 : 旋毛虫由来転写関連因子 Rcd1 が筋肉細胞分化誘導に及ぼす影響の分子生物学的解析 : 科学研究費補助金基盤研究(C)報告書(平成 23 年 12 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究業績は順調にあがっている。

現状の問題点及びその対応策
特記すべき問題点はない。

今後の展望
次期教授に委任。

(5) 遺伝発生学分野

1. 研究の概要

遺伝発生分野の研究目的は生命を遺伝と発生の視点から解明し、さらにそれを疾患の解明と診断治療に応用すること、およびこの目的を遂行できる人材を育成することである。

研究面では、アレルギー、先天性免疫不全症、先天性代謝異常、癌、ヒトの発生、分化、神経などについて、画期的、独創的な idea と strategy を駆使して、分子遺伝学的かつ構造生物学的に解析している。

近年、遺伝性疾患は診断、治療のみでなく、カウンセリング、インフォームドコンセント、心理的ケア、社会的サポートを含めた総合的フォローアップの重要性が叫ばれている。研究成果の応用として本学においても、遺伝病診療がなされ、定期的な症例カンファレンスを開催し、より良い遺伝病診療を目指して活動している。その内容は主に、患者およびクライアントに対する情報提供、カウンセリング方針の検討、臨床遺伝に関する最新知見、諸課題についての情報意見交換、臨床各科の相談への対応などである。

また、2003年には日本人類遺伝学会新制度による研修指定を獲得した。2004年春より新たに遺伝発生学分野として独立したのを機会に、さらに研鑽に努めている。ヒトの出生前期の遺伝・発生及び、出生後の成長・発達における生理的かつ病的状態を対象としている。

基礎研究において、幾つかの分野に絞ることにより、奥深い研究が進められている。アレルギー、免疫不全、代謝異常の各分野で幾つかの疾患の病因遺伝子が当講座で世界に先駆けクローニングされ、世界をリードする成果が幾つも輩出され、新聞紙上の一面でも取り上げられている。各テーマに共通することは、各分野の疾患の病因と病態の解明であり、その成果を診断・治療・予知・予防に適用していくことである。さらにこれらを通じて、ヒトの遺伝・発生、成長・発達の新たな解明につなげている。方法論的には、日常臨床の中からヒントと発想が得られ、遺伝子学的手法に加え、医学への構造生物学の導入(21世紀型ポストゲノムとしての構造生物医学 structure biological medicine –近藤による)をしている。ゲノム遺伝子異常からエピジェネティクス、遺伝子発現異常を経てタンパク立体構造の異常と機能異常との関連を解析し、診断・治療への応用を進めている。世界的かつ画期的な成果が期待されている。これらの成果は幾つかの大型競合的研究費獲得に現れている。

以下詳細は、小児病態学と共同である。

1) アレルギー

①アトピー(アレルギー)の抑制系の病因遺伝子を世界で初めて明らかにし(Lancet 1996年, BBRC 1999年に続いて, JACI 2003年), IgE産生の抑制系IL-12-IL-12レセプターまたはIL-18-IL-18レセプター-IFN γ シグナリングの重要性を示した。②これらの成果をもとにして世界に先駆けて、新たにアトピー(アレルギー)を遺伝子学的に分類した。③さらに、これをもとにアレルギー(アトピー)の遺伝子診断キットを開発し、特許を取得した(2010年)。④ヒトIL-18のタンパク立体構造を世界に先駆けて解明し(Nature Struct Biol 2003年), その臨床応用としての低分子創薬を進めている。⑤遺伝子情報と抗アレルギー薬効果から個別化医療、すなわち、アレルギーのオーダーメイド治療の確立を進め“気管支喘息のテーラーメイド治療管理法のための手引き”を世界で初めて作成した(2007, 2010年度)。⑥遺伝子発現, RNAプロセッシング特にRNA editingとalternative splicingがアレルギー発症に関わっていることを世界で初めて解明した。⑦食物アレルギーの抗原特異性の発現機構の解明のため, T細胞クローンの樹立に世界で初めて成功し, アレルギー発症におけるHLA-ペプチド-T細胞レセプターの特異性と結合性を立体構造から解明している(PNAS 2008年他)。⑧この成果に基づいて, 経口免疫寛容を誘導する治療法確立のため“食べて治す食品の開発”プロジェクトがすすめられ, 現在, 臨床応用が進行している(2010, 2011年)。⑨環境と遺伝子によるアレルギー発症の分子遺伝学的解明(21世紀型ポストゲノムとしての遺伝子生態学 genetic ecological medicine-近藤による)。温度変化により, NF- κ Bの機能が変化し, サイトカイン産生パターンが変化することを明らかにした。さらに概日リズムの視点から, 光と体内時計遺伝子との関連を検討している。⑩自然免疫系と疾患との関連を探求し治療開発につなげるために, Toll-like receptor (TLR) およびそのシグナル伝達系のMyD88分子などの分子およびそれらの結合様式を明らかにし, 同時にそれらの遺伝子学的タンパク構造学的異常を明らかにしている。⑪ストレスとアレルギー発症の分子遺伝学的解明, ウイルス感染によるアレルギー発症, アラキドン酸カスケードの評価とオーダーメイド治療, 質の高いQOL評価表の作成, 臍帯血プロジェクト, FACSを用いた自然免疫系調節性T細胞の解析と獲得免疫系Th1・Th2アンバランスの解明と応用など。⑫以上のプロジェクトに関して以下の大型競合的外部資金を獲得できた。(文部科学省科学研究費などは別項参照)

1. <文部科学省高等教育局>文部科学省高度先進医療開発経費「免疫・アレルギー疾患病因タンパク質立体構造に基づいた構造生物学的創薬による治療法の確立」研究代表者：近藤直実, 研究協力者：加藤善一郎, 篠田紳司, 寺本貴英, 下澤伸行, 金子英雄, 深尾敏幸, 松井永子, 桑田一夫, 鈴木正昭, 白川昌宏

(平成 13-15 年度)

2. <厚生労働省科学研究費補助金>免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業「アレルギー疾患の治療反応性予測因子の確立及びテラーメイド治療法の確立に関する研究」および「アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化」主任研究者：近藤直実，班員：松井永子ほか（平成 16-18 年度）（平成 19-21 年度）

3. <生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業>異分野融合研究開発型「食物アレルギー対策食品の基礎研究に基づく画期的創成」研究代表者：近藤直実，班員：金子英雄，大西秀典ほか（平成 17-21 年度）

4. <環境保全機構委託業務>「気管支喘息のテラーメイド的予知に基づく発症予防と QOL 調査票を導入した独自の評価法の確立」研究代表者：近藤直実，研究協力者：松井永子，加藤善一郎，木全かおり，篠田紳司ほか（平成 21-23 年度）。

5. その他 厚生労働省科学研究費など多数。

2) 先天性免疫不全症と自己炎症性疾患と DNA 修復

IgG サブクラス欠損症の病因となる遺伝子異常を世界に先駆け明らかにした (J Clin Invest 及び JACI)。常染色体優性の遺伝形式をとる高 IgM 症候群の病因についても AID の dominant negative 効果によることを世界で初めて明らかにした (JACI 2003 年)。比較的頻度の高い免疫不全症である IgA 欠損症について解析を行いその B 細胞の分化障害部位を明らかにした。さらに、本邦 2 例目の免疫グロブリン重鎖遺伝子の欠損家系を報告した。高発癌と免疫不全を示す Bloom 症候群や Ataxia-telangiectasia の病因遺伝子 BLM と ATM の機能と構造の解析を通して細胞周期，DNA 修復，シグナル伝達につき解明し発癌機構の解明を行っている (Blood, CEI, PNAS 他)。さらに多彩な自然免疫不全症，自己炎症性疾患の病因病態解明と治療開発に着手した。特に IRAK4 欠損症，MyD88 欠損症，外胚葉形成不全症の包括的迅速診断スクリーニング法の開発を行い，世界で 6 症例目の IKBA 異常症を診断し報告した (JACI 2011 年)。またクライオパイリン関連周期熱症候群の重症度スクリーニング方法の開発を行っている (J Clin Immunol 2011 年)。

3) 有機酸代謝異常症

当該の疾患群の早期診断，遺伝子診断，病態解析，治療法の開発などに取り組んでいる。ケトン体代謝異常症のβ-ケトチオラーゼ欠損症，サクシニル-CoA:3-ketoacid CoA トランスフェラーゼ (SCOT) 欠損症の酵素診断や遺伝子診断については，世界中からの依頼を受けて解析を行っている。これまで多くの遺伝子変異とその特徴，遺伝子型と臨床像の関連について明らかにしてきた。上記 2 疾患に加え HMG-CoA 合成酵素欠損症と HMG-CoA リアーゼ欠損症というケトン体産生障害についても研究を開始した。有機酸代謝異常症，脂肪酸代謝異常症の病態解析においては島根大学との共同研究として成果を挙げている。

4) 遺伝性ムコ多糖症

遺伝性ムコ多糖症については，酵素補充療法が開始された I 型 (Hurler/Scheie)，II 型 (Hunter)，VI 型 (Maroteaux-Lamy) の治療成績，骨髄移植を行った II 型の治療成績を解析している。また III 型 (Sanfilippo) に対する Genistein の効果，IV 型 (Morquio) の疫学についても検討している。デュボン小児病院・セントルイス大学・島根大学と共同でムコ多糖症に対するマス・スクリーニング法の開発を行っている。日本ムコ多糖症研究会を毎年開催し，情報交換，患者家族会との連携を図っている。

5) ペルオキシソーム病

ペルオキシソーム病の診断については全国からの検体依頼に対応している。先天性ペルオキシソーム代謝異常症の病因と治療について研究をすすめており，ペルオキシソーム欠損症の新規病因遺伝子 PEX16, 19, 13, 3, 26, 14 の同定，温度感受性現象の発見，新たなβ酸化酵素欠損症の発見，副腎白質ジストロフィーの診断と治療のそれぞれにおいて世界をリードする成果を挙げている。ペルオキシソーム欠損症の温度感受性については蛋白立体構造解析や軽症型温度感受性モデルマウスの作成などを行い病態解明と治療法の開発に取り組んでいる。また iPS 細胞を用いたペルオキシソーム病神経系モデル構築などの試みを行っている。

6) タンパク立体構造解析

小児の疾患関連蛋白質の立体構造解析に基づいた病態解析・治療法の開発などを行う“構造医学”の確立を目指し，低分子リガンドスクリーニング・蛋白レベルでの蛋白工学的アプローチによる治療法の開発に重点を置いて研究を進めている。また，自然免疫から獲得免疫に至る経路に關与する IL-1 ファミリー分子，及び Toll-like receptor 群に必須な分子であるシグナル伝達アダプター蛋白を中心にした構造学的研究を進めている。最近の成果として，ヒト IL-18 立体構造に続き，多次元核磁気共鳴法にてアダプター分子 MyD88 の立体構造を決定し，変異体解析によるタンパク間の動的相互作用情報を基盤としてヒト MyD88 欠損症の特異的な病態解明を行った (PNAS 2009 年)。現在，前述の IL-18 や MyD88 を含めた高

次複合体立体構造の解析を進めており、その構造情報を基盤とした創薬プロジェクトにつなげる予定である。

7) 現在共同で行われているプロジェクト

Ataxia-telangiectasia と Bloom 症候群の病態解析:(近藤直実) オーストラリア Queensland Institute of Medical Research Professor M. Lavin, 小児気管支喘息の QOL 評価 (近藤直実, 松井永子) 平山耕一郎, 抗アレルギー薬と遺伝子に関する研究:(近藤直実, 松井永子) ムコ多糖症の酵素補充療法の基礎的研究および臨床応用:(近藤直実, 折居建治) USA St.Louis University 教授 戸松俊治, 毛細血管拡張性運動失調症における神経変性機構を解明するための基礎的研究:(折居建治, 近藤直実) USA St.Jude Childrens Research Hospital Associate member Peter J. McKinnon, 常染色体劣性高 IgE 症候群の原因遺伝子の検討:(金子英雄, 近藤直実) 東京医科歯科大学大学院 免疫アレルギー 峯岸克行, IRAK4 欠損症及び自然免疫異常症の病態解明:(大西秀典, 加藤善一郎) 京都大学 西小森隆太, 九州大学 高田英俊, 金沢大学 谷内江昭宏, 大阪大学 大石和徳. IL-18 とその結合分子のタンパク立体構造と機能:(加藤善一郎, 近藤直実) 京都大学 白川昌宏, MyD88 とその結合分子のタンパク立体構造と機能:(加藤善一郎, 大西秀典, 近藤直実) 京都大学 朽尾豪人, 放射線高感受性疾患の分子病態に関する研究:(深尾敏幸) オーストラリア Queensland Institute of Medical Research Professor M. Lavin, チオラーゼ蛋白の3次構造と機能に関する研究:(深尾敏幸) フィンランド Oulu University Professor R. Wierenga, 先天性ケトン体代謝異常症に関する研究:(深尾敏幸) オランダ Amsterdam Medical Center Professor RJA Wanders, 先天性ケトン体代謝異常症に関する研究:(深尾敏幸) USA Oregon Health and University Assistant Professor C Harding 先天性ケトン体代謝異常症に関する研究:(深尾敏幸) カナダ Ste-Justine Hospital, Montreal, Professor GA. Mitchell, ATM と BLM の会合:(金子英雄) オーストラリア Queensland Institute of Medical Research Professor M. Lavin. 自己免疫疾患病態解明・治療開発への HLA・TCR 立体構造解析:(加藤善一郎, 近藤直実) アメリカ合衆国 Harvard University, Prof. J. Strominger 疾患特異的 iPS 細胞樹立と治療開発 (船戸道徳, 加藤善一郎, 近藤直実): 京都大学 iPS 細胞研究所 長船健二

8) 新たなプロジェクト

難治性神経疾患(脊髄性筋萎縮症など)の診断と治療開発(再生医療など), 若年性関節リウマチと自己免疫疾患の治療開発, 遺伝性高発癌疾患(P53欠損, ATM欠損, BLM欠損など)に対する遺伝子関連治療開発などに着手している。iPS細胞研究も進めている。リンパ管腫症への新規治療開発(プロプラノロールによる)を世界に先駆けすすめている。

2. 教員名簿

教授(併任): 近藤直実 Naomi Kondo

3. 研究成果の発表

小児病態学参照

4. 研究費獲得状況

小児病態学参照

5. 発明・特許出願状況

小児病態学参照

6. 学会活動

小児病態学参照

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

小児病態学参照

8. 学術賞等の受賞状況

小児病態学参照

9. 社会活動

小児病態学参照

10. 報告書

小児病態学参照

11. 報道

小児病態学参照

12. 自己評価

評価

総合的にはそれなりの評価はできる。今後も引き続き研究成果と業績の更なる維持, 向上が望まれる。

現状の問題点及びその対策

小児病態学と共同している。全領域をカバーする小児科の臨床からわき出る疑問とテーマの全てに着手することは困難であるが, アレルギー・免疫・代謝に加えて環境や感染と遺伝子のような新たなプロジェクトを立ち上げて進めている。

今後の展望

現在のテーマと方向性の更なる充実と拡大。さらに, これらの成果を医療に直接的に応用する (トランスレーショナルリサーチ)。

(6) 内分泌代謝病態学分野

1. 研究の概要

日本人の2型糖尿病はやせ型インスリン分泌不全を特徴とするので、膵内分泌機能と関連する制御システムを総合的に理解し、日本人に特有の疾患感受性を求めてきた。研究戦略として、疾患発症の責任遺伝子を分子遺伝学的に同定することによって、糖尿病の発症機構の解明と罹患体質の遺伝子診断法の開発を目指した。転写因子を中心に研究を進展させてきたが、下流の転写標的の網羅的な理解と臨床応用へも研究を展開させた。すなわち、ゲノムシークエンスである膵島トランスクリプトームを活用した分泌不全のバイオマーカー同定を試みると共に、液性因子の創薬への展開も目指した。また、糖尿病診療の究極の目的は合併症予防にあるので、種々の代謝異常、動脈硬化、細小血管病変との病態リンクの解明と治療法の開発も同時に推進してきた。

一方、2型糖尿病は生活習慣病の代表的疾患であるので、食習慣、日常の身体活動、ストレス応答などの調査研究を地域主体に実施することによって、個々の体質を考慮したオーダーメイド的な生活指導法の開発を目指している。

2. 名簿

教授：	武田 純	Jun Takeda
教授(併任)：	山本真由美	Mayumi Yamamoto
准教授(併任)：	堀川幸男	Yukio Horikawa
准教授：	諏訪哲也	Tetsuya Suwa
講師(併任)：	飯塚勝美	Katumi Iizuka
講師：	川地慎一	Shin-ichi Kawachi
臨床講師：	塩谷真由美	Mayumi Enya
臨床講師：	廣田卓男	Takuo Hirota
臨床講師：	橋本健一	Ken-ichi Hashimoto
医員：	丹羽啓之	Hiroyuki Niwa
医員：	富田礼子	Reiko Tomita
医員：	水野正巳	Masami Mizuno
医員：	加藤丈博	Takehiro Katou

3. 研究成果の発表

著書(和文)

- 1) 堀川幸男, 安田和基. オーダーメイド医療の将来—糖尿病治療の新しい展開—東京: 文光堂; 2009年: 118-125.
- 2) 山本真由美. 健康診断とは, 定期健康診断について, メタボリック症候群, 動脈硬化症, 肥満とやせ: 岐阜県大学保健管理研究会企画, 山本真由美監修. 大学生の健康ナビ—キャンパスライフの健康管理—, 岐阜: 岐阜新聞社; 2010年: 8-14, 139-142.
- 3) 堀川幸男, 武田 純. 日本人の糖尿病治療における DPP-4 阻害剤の位置づけ: DPP-4 阻害剤のすべて, 東京: 先端医学社; 2010年: 155-162.
- 4) 堀川幸男, 塩谷真由美, 武田 純. わが国の糖尿病治療においてインクレチン製剤をどのように使うか. 2. 糖尿病治療の新たな展開—インクレチンの登場. 4) DPP-4 阻害薬の作用機構と臨床成績: *Progress in Medicine*, 東京: ライフ・サイエンス; 2010年: 345-352.
- 5) 諏訪哲也, 堀川幸男, 武田 純. 2型糖尿病: 糖尿病研修ノート, 東京: 診断と治療社; 2010年: 125-128.
- 6) 山本真由美. 南フロリダ大学留学: 岐阜大学教育推進センター編. 教養ブックレット Vol.3 日本脱出! 留学のすすめ, 岐阜: みらい; 2010年: 76-77.
- 7) 山本真由美. II-8 糖尿病: 分子予防環境医学研究会編. 分子予防環境医学, 東京: 本の泉社; 2010年: 483-494, 819-826.
- 8) 飯塚勝美. その他の転写因子(ChREBP ほか)とその役割: メタボリックシンドローム, 東京: 日本臨床; 2010年: 275-278.
- 9) 堀川幸男, 武田 純. α -グルコシダーゼ阻害薬: メタボリックシンドローム(第2版)—基礎・臨床の最新知見—, 東京: 日本臨床 増刊号1; 2011年: 641-664.
- 10) 堀川幸男. 1. 糖尿病 B. 臨床分野での進歩 3. 糖尿病ゲノム研究の現状と展望: *Annual Review 内分泌代謝* 2011, 東京: 中外医学社; 2011年: 67-74.
- 11) 塩谷真由美, 堀川幸男, 武田 純. 遺伝子異常による糖尿病/耐糖能異常: スマートな糖尿病診断と治療の進め方, 東京: 中山書店; 2011年: 69-76.
- 12) 山本真由美. 各論 37 月経異常: 新版 学生と健康—若者のためのヘルスリテラシー—, 東京: 南江堂; 2011年: 134-137.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 飯塚勝美, 堀川幸男. グルコース感受性転写因子: ChREBP, 細胞工学 2009年; 28巻: 780-783.
- 2) 堀川幸男. 全ゲノム関連解析(GWAS)の成果をふまえた 2 型糖尿病遺伝子同定の現状と課題, *Diabetes Journal* 2009年; 37巻: 95-103.
- 3) 堀川幸男, 武田 純. ビグアナイドとチアゾリンの使い分け, 日本医事新報 2009年; 4466号: 76-77.
- 4) 武田 純. 地域糖尿病医療をどうするか?—早期発見から早期治療にむけて—, 2009年; 118号: 20-21.
- 5) 武田 純. あまからばなし, 2009年; 77号: 1.
- 6) 山本眞由美. SPさんから教えていただきました, 岐阜大学模擬患者の会 10周年記念誌 2009年; 47-48
- 7) 山本眞由美. Doctor's view vol.17, 特定健康診査・特定保健指導について, 新たな健診・保健指導について, 岐阜の国保 2009年; No.293: 6-17.
- 8) 山本眞由美. 東海支部企画特集「平成 18 年度油科学講演会・機能性食品の科学と展望」の総説の企画にあたって, オレオサイエンス 2009年; No.9: 2.
- 9) 山本眞由美. Doctor's view vol.18, 特定健康診査・特定保健指導について, 新たな健診・保健指導について(第2回), 岐阜の国保 2009年; No.294: 16-17.
- 10) 山本眞由美. Doctor's view vol.19, 特定健康診査・特定保健指導について, 生活習慣病改善は薬より予防効果あり, 岐阜の国保 2009年; No.295: 10-11.
- 11) 山本眞由美. Doctor's view vol.20, 特定健康診査・特定保健指導について, 病気の“ゼロ次予防”の重要性 岐阜の国保 2010年; No.296: 16-17.
- 12) 山本眞由美. Doctor's view vol.21, 生活習慣病予防に関して, 第1回糖尿病発症のしくみについて, 岐阜の国保 2010年; No.297: 14-17.
- 13) 山本眞由美. Doctor's view vol.22, 生活習慣病予防に関して, 第2回糖尿病について, 岐阜の国保 2010年; No.298: 20-21(平成22年8月)
- 14) 山本眞由美. Doctor's view vol.23, 生活習慣病予防に関して, 第3回世界糖尿病デーについて, 岐阜の国保 2010年; No.299: 12-13.
- 15) 堀川幸男, 塩谷真由美, 武田 純. DPP-4 阻害薬の作用機構と臨床成績, *Progress in Medicine* 2号 2010年; 30巻: 345-352.
- 16) 堀川幸男, 塩谷真由美. ポスト GWAS の新規糖尿病感受性遺伝子同定戦略, 医学のあゆみ 2010年; 232巻: 1201-1206.
- 17) 堀川幸男, 武田 純. SU 薬でコントロール不良患者の治療, 日本医事新報 2010年; 4478号: 94-95.
- 18) 堀川幸男, 武田 純. インスリン抵抗性—第一選択薬は抵抗性改善薬かインクレチンか?, 治療 2010年; 92巻: 611-617.
- 19) 塩谷真由美, 堀川幸男, 武田 純. DPP-4 阻害薬 Q&A DPP-4 阻害剤薬はどのようにきくのでしょうか? どんな患者に使うのですか? 食事に関係なくいつでも服用できるって本当ですか?, 薬局 2010年; 61巻: 78-82.
- 20) 堀川幸男. 糖尿病地域連携パスについて, 岐阜市医師会だより 2010年; 42巻: 8-11.
- 21) 塩谷真由美, 堀川幸男, 武田 純. 糖尿病網膜症の遺伝素因, あたらしい眼科 2010年; 27巻: 1223-1228.
- 22) 飯塚勝美. 糖尿病の新診断基準について, ぎふ栄養士会だより 2010年; 2号: 2-3.
- 23) 飯塚勝美, 堀川幸男, 武田 純. グルコース感受性転写因子 ChREBP に注目した 2 型糖尿病患者の膵β細胞機能障害(ブドウ糖毒性)の分子機構の解明, 財団法人大和証券ヘルス財団研究業績集 2010年; 34巻: 78-83.
- 24) 武田 純. 2 型糖尿病の新しい治療ステージ, 内科会だより 2010年; 4月: 1-2.
- 25) 山本眞由美. Doctor's view vol.24, 生活習慣病予防に関して, 第4回糖尿病との上手な付き合い方, 岐阜の国保 2011年; No.300: 18-19.
- 26) 堀川幸男. 私の処方, *Modern Physician* 2011年; 31巻: 756-757.
- 27) 堀川幸男. 診療の秘訣, *Modern Physician* 2011年; 31巻: 1249-1250.
- 28) 堀川幸男. 糖尿病領域における GWAS と全ゲノムシークエンス, *Diabetes Frontier*, 2011年; 22巻: 87-93.
- 29) 堀川幸男, 武田 純. DPP4 阻害薬と他剤との併用療法 特集:糖尿病治療最前線2011, 月刊糖尿病 2011年; 3巻: 52-61.
- 30) 塩谷真由美, 堀川幸男, 武田 純. インクレチンシステム調節にかかわる遺伝子異常の 2 型糖尿病への影響—TCF7L2 遺伝子を中心に—, 日本臨床 2011年; 69巻: 930-936.
- 31) 飯塚勝美, 堀川幸男, 武田 純. インクレチン関連薬登場から 1 年—その治療効果と安全性を探る—2. 実臨床を踏まえたインクレチン関連薬の有効性と安全性 3)DPP-4 阻害薬と GLP-1 受容体作動薬の使い分けとポジショニング, *Prog Med* 2011年; 31巻: 1421-1425.
- 32) 山本眞由美. 労働者の糖尿病管理に関する最近の話題, 恵那医師会だより 2011年.
- 33) 武田 純. Doctor's view vol.25 糖尿病と遺伝について(その1), 岐阜の国保 2011年; No.301: 12-13.
- 34) 武田 純. Doctor's view vol.26 糖尿病と遺伝について(その2), 岐阜の国保 2011年; No.302: 20-21.
- 35) 武田 純. Doctor's view vol.27 糖尿病と遺伝について(その3), 岐阜の国保 2011年; No.303: 14-15.
- 36) 堀川幸男, 武田 純. 糖尿病 update—2 型糖尿病成因と治療の最先端, 周産期医学 2011年; 41巻:

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 丹羽啓之, 奥村昇司, 武田 純. 脂質異常症を合併した 2 型糖尿病患者に対するコレステミドの使用経験, *Diabetes Frontier* 2009 年; 20 巻: 735-739.
- 2) 山本眞由美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 長瀬江利, 加納晃子, 浅田修市, 清水克時. 岐阜県内の大学・短大等学生の喫煙実態調査—岐阜県大学保健管理研究会の調査結果より—, *CAMPUS HEALTH* 2009 年; 46 巻: 199-201.
- 3) 田中生雅, 佐渡忠洋, 梶川幸世, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の精神的健康度と QOL, *CAMPUS HEALTH* 2009 年; 46 巻: 327-329.
- 4) 佐渡忠洋, 田中生雅, 清水克時, 山本眞由美. 集団スクリーニングへのバウムテストの導入可能性—個別法と集団法の描線比較から—, *CAMPUS HEALTH* 2009 年; 46 巻: 392-394.
- 5) 佐渡忠洋, 伊藤宗親, 田中生雅, 山本眞由美. わが国の身体像境界得点の文献展望, *岐阜大学カリキュラム開発研究* 2009 年; 27 巻: 100-108.
- 6) 渋谷高志, 加納克徳, 諏訪哲也, 佐々木昭彦, 川地慎一, 廣田卓男, 伏見宣俊, 浅井雅幸, 堀川幸男, 武田純. 眼窩先端部症候群に至る副鼻腔侵襲型アスペルギルス症を来した 2 型糖尿病の一例, *糖尿病* 2009 年; 10 巻: 855-858.
- 7) 山本眞由美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 岩田美知絵, 野口佳代, 野田智子, 清水克時, 山本眞由美. 岐阜県大学保健管理研究会の活動から—大学生のための健康啓発教育冊子出版—, *CAMPUS HEALTH* 2010 年; 47 巻: 301-303.
- 8) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 山本眞由美, 清水克時. 大学生の健康に対する取り組みと生活環境に関する検討, *CAMPUS HEALTH* 2010 年; 47 巻: 321.
- 9) 佐渡忠洋, 田中生雅, 宮地幸雄, 磯村有希, 臼井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 岩田美知絵, 野口佳代, 野田智子, 山本眞由美, 清水克時. 回答方法が UPI 結果へ与える影響—自己記入式と Web 回答との比較, *CAMPUS HEALTH* 2010 年; 47 巻: 340-342.
- 10) 山本眞由美. 内部障害をかかえる学生の支援, *CAMPUS HEALTH* 2010 年; 47 巻: 36-41.
- 11) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 田中優司, 塩入俊樹, 山本眞由美, 清水克時. 大学生の健康に対する取り組みと生活環境に関する検討, *CAMPUS HEALTH* 2010 年; 47 巻: 97-102.
- 12) 山本眞由美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 清水克時. 大学の禁煙推進の取り組みと学生の喫煙率変化—10 年の取り組みを経過して—, *学校保健研究* 2010 年; 1 巻: 71-74.
- 13) 山本眞由美. 大学生の肥満に関する実態調査—将来の健康生涯を防ぐための青年期の健康サポートはどうかあるべきか—, *岐阜県医師会医学雑誌* 2010 年; 3 巻: 67-73.
- 14) 山本眞由美. 糖尿病にみられる味覚・食欲異常, 栄養—評価と治療 2010 年; 27 巻: 29-32.
- 15) 佐渡忠洋, 坂本佳織, 田中生雅, 山本眞由美, 緒賀郷志. 個別法と集団法で行ったバウムテスト結果の印象の相違—マッチング法と印象評定, 検査者体験から—, *岐阜大学教育学部研究報告—人文科学—* 2010 年; 1 巻: 139-146.
- 16) 佐渡忠洋, 田中生雅, 山本眞由美, 緒賀郷志. ソンディ・テストの本邦における文献一覧表(1950-2009年), *岐阜大学教育学部研究報告—人文科学—* 2010 年; 1 巻: 147-158.
- 17) 伏見宣俊, 加納克徳, 廣田卓男, 川地慎一, 渋谷高志, 武田 純. 多発性筋炎に再発を繰り返す腸管囊腫様気腫症を合併した一例, *臨床リウマチ(日本臨床リウマチ学会雑誌)* 2010 年; 22 巻: 220-228.
- 18) 加藤丈博, 諏訪哲也, 渋谷高志, 廣田卓男, 飯塚勝美, 堀川幸男, 武田 純, 松尾公美浩, 藤枝 憲二. Methimazole と cabergoline が奏効した McCune-Albright 症候群の 1 例, *日本内科学会雑誌* 2010 年; 99 巻: 2542-2544.
- 19) 磯村有希, 佐渡忠洋, 田中生雅, 臼井るり子, 高井郁恵, 岩田美知絵, 野口佳代, 大森弘美, 大島由美子, 加納亜紀, 浅田修市, 宮地幸雄, 清水克時, 山本眞由美. 大学生を対象とした健康啓発セミナーの経験と評価, *CAMPUS HEALTH* 2011 年; 48 巻: 138-140.
- 20) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 加納亜紀, 大森弘美, 野口佳代, 山本眞由美, 清水克時. 大学生の健康に対する取り組みと効果に関する検討, *CAMPUS HEALTH* 2011 年; 48 巻: 141-143.
- 21) 高橋裕子, 守山敏樹, 藤本繁雄, 山本眞由美, 川村 孝, 小西郁生. 大学における子宮頸がん予防教育の普及に関する連携研究の試み, *CAMPUS HEALTH* 2011 年; 48 巻: 160-162.
- 22) 山本眞由美, 飯塚勝美, 田中生雅, 加納亜紀, 臼井るり子, 野口佳代, 岩田美知絵, 大森弘美, 高井郁恵, 佐渡忠洋, 浅田修市, 清水克時, 武田 純. 事後指導で抽出し, 生活指導のみで正常化した若年境界型糖尿病の一例, *CAMPUS HEALTH* 2011 年; 48 巻: 223-225.
- 23) 臼井るり子, 野口佳代, 野田智子, 稲垣都互子, 高井郁恵, 大森弘美, 佐渡忠洋, 浅田修市, 加納亜紀, 田中生雅, 清水克時, 山本眞由美. 流行性ウイルス感染症調査票による自主的予防接種実施勧奨効果について, *CAMPUS HEALTH* 2011 年; 48 巻: 237-238.
- 24) 佐渡忠洋, 田中生雅, 磯村有希, 加納亜紀, 宮地幸雄, 臼井るり子, 野口佳代, 大森弘美, 稲垣都互子, 清水克時, 山本眞由美. 大学学部新入生の UPI 結果と体格指数(BMI)の関係についての検討, *CAMPUS HEALTH* 2011 年; 48 巻: 458-460.

- 25) 窪田泰三, 春日晃章, 長屋和将, 山本眞由美, 佐渡忠洋, 福富恵介, 小藪博史. 大学生の体力における生活習慣の複合的関連, 岐阜大学教育学部研究報告=自然科学= 2011年; 35巻: 141-146.
- 26) 小藪博史, 春日晃章, 山本眞由美, 福富恵介, 窪田泰三, 佐渡忠洋, 山脇恭二. 岐阜大学 1 年生における肥満度と血液検査および生活習慣の関連, 岐阜大学教育学部研究報告=自然科学= 2011年; 35巻: 153-159.
- 27) 山本眞由美, 福重八恵, 仲村渠砂絵子, 安藤憂紀, 浅田孝幸, 前田利之. モバイルコミュニケーションシステムを利用した大学生の体重コントロール指導, CAMPUS HEALTH 2011年; 48巻: 97-101.
- 28) 山本眞由美. American College Health Association (米国大学保健管理協会)の紹介, CAMPUS HEALTH 2011年; 48巻: 228-230.
- 29) 山本眞由美. 南フロリダ大学の Student Health Service(保健管理センター)と The Counseling Center(カウンセリングセンター)を視察して, CAMPUS HEALTH 2011年; 48巻: 231-236.
- 30) 福重八恵, 佐藤希代巳, 樽見智美, 山本眞由美. 教育情報と健康情報の統合化に関する研究 -大学生の学業成績と定期健康診断の受診との関係に関する調査結果を中心として-, 教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集 2011年; 22-23.
- 31) 田中利江子, 川地慎一, 古田 均, 三島百有, 榊 美香, 日比野美, 保岩下明子, 小野しとみ, 富田礼子, 堀川幸男, 武田 純. 糖尿病合併妊娠および妊娠糖尿病9例における, 日常生活下での血糖変動のCGM評価, 糖尿病と妊娠 2011年; 11巻: 116-121.

原著 (欧文)

- 1) Iizuka K, Takeda J, Horikawa Y. Hepatic overexpression of dominant negative Mlx improves metabolic profile in diabetes-prone C57BL/6J mice. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009;379:499-504. IF 2.595
- 2) Kuroda E, Horikawa Y, Enya M, Oda N, Suzuki E, Iizuka K, Takeda J. Identification of minimal promoter and genetic variants of Kruppel-like factor 11 gene and association analysis with type 2 diabetes in Japanese. *Endocr J.* 2009;56:275-286. IF 1.952
- 3) Miyake K, Yang W, Hara K, Yasuda K, Horikawa Y, Osawa H, Furuta H, Ng MCY, Hirota Y, Mori H, Ido K, Yamagata K, Hinokio Y, Oka Y, Iwasaki N, Iwamoto Y, Yamada Y, Seino Y, Maegawa H, Kashiwagi A, Wang HY, Tanahashi T, Nakamura N, Takeda J, Maeda E, Yamamoto K, Tokunaga K, Ma RCW, So WY, Chan JCN, Kamatani N, Makino H, Nanjo K, Kadowaki T, Kasuga M. Construction of a prediction model for type 2 diabetes mellitus in the Japanese population based on 11 genes with strong evidence of the association. *J Hum Genet.* 2009;54:236-241. IF 2.496
- 4) Ishiyama M, Suzuki E, Katsuda J, Murase H, Tajima Y, Horikawa Y, Goto S, Fujita T, Takeda J. Associations of coronary artery calcification and carotid intima-media thickness with plasma concentrations of vascular calcification inhibitors in type 2 diabetic patients. *Diabetes Res Clin. Pract.* 2009;85:189-196. IF 2.134
- 5) Iizuka K, Takeda J, Horikawa Y. Glucose induces FGF21 mRNA expression through ChREBP activation in rat hepatocytes. *FEBS Lett.* 2009;583:2882-2886. IF 3.601
- 6) Suzuki E, Yoshimura T, Omura Y, Sakaguchi M, Nishio Y, Maegawa H, Hisatomi A, Fujimoto K, Takeda J, Kashiwagi A. Higher arterial stiffness, great peripheral vascular resistance and lower blood flow in lower-leg arteries are associated with long-term hyperglycaemia in type 2 diabetic patients with normal ankle-brachial index. *Diabetes Metab Res Rev.* 2009;25:363-369. IF 3.094
- 7) Watanabe T, Ito H, Morita A, Uno Y, Nishimura T, Kawase H, Kato Y, Matsuoka T, Takeda J, Seishima M. Sonographic evaluation of the median nerve in diabetic patients: comparison with nerve conduction studies. *J Ultrasound Med.* 2009;28:727-734. IF 1.246
- 8) Okayasu S, Nakamura M, Sugiyama T, Chigusa K, Sakurai K, Matsuura K, Yamamoto M, Kinosada Y, Itoh Y. Development of computer-assisted biohazard safety cabinet for preparation and verification of injectable anticancer agents. *Chemotherapy* 2009;55:234-240. IF 2.108
- 9) Shimoda H, Taniguchi K, Nishimura M, Matsuura K, Tsukioka T, Yamashita H, Inagaki N, Hirano K, Yamanamoto M, Kinosada Y, Itoh Y. Preparation of a fast dissolving oral thin film containing dexamethasone: A possible application to antiemesis during cancer chemotherapy. *Eur J Pharm Biopharm.* 2009;73:361-365. IF 4.304
- 10) Watanabe T, Ito H, Sekinr A, Katano Y, Nishimura M, Kato Y, Takeda J, Seishima M, Matsuoka T. Sonographic evaluation of the peripheral nerve in diabetic patients :the relationship between nerve conduction studies, echo intensity, and cross-sectional area. *J Ultras Med.* 2010;29:697-708. IF 1.246
- 11) Motohashi K, Toda T, Sue M, Furihata K, Shizuri Y, Matsuo Y, Kasai H, Shin-Ya K, Takagi M, Izumikawa M, Horikawa Y, Seto H. Isolation and structure elucidation of tumescenamides A and B, two peptides produced by *Streptomyces tumescens* YM23-260. *J Antibiot (Tokyo).* 2010;63:549-552. IF 1.628
- 12) Horikawa Y, Enya M, Iizuka K, Chen GY, Kawachi S, Suwa T, Takeda J. Synergistic effect of α -glucosidase inhibitors and dipeptidyl peptidase 4 inhibitor treatment. *J Diabet Invest.* 2011;2:200-203.
- 13) Iizuka K, Takeda J, Horikawa Y. Kruppel-like factor-10 is directly regulated by carbohydrate response element-binding protein in rat primary hepatocytes. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;412:638-643. IF 2.595

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：武田 純；厚生労働科学研究費補助金創薬基盤推進研究事業：体脂肪減少因子を用いた2型糖尿病の治療；平成19-21年度；123,447千円(50,326：46,841：26,280千円)
- 2) 研究代表者：武田 純；科学研究費補助金特定領域：膵島特異的遺伝子の発現調節軸に焦点を絞った糖尿病遺伝子の探索；平成17-21年度；21,000千円(5,900：5,400：5,700：4,000：4,000千円)
- 3) 研究代表者：武田 純；科学研究費補助金萌芽研究：膵島機能に関連するマイクロ分子の同定と機能解析；平成20-21年度；3,200千円(1,900：1,300千円)
- 4) 研究代表者：堀川幸男；経済産業省ゲノム創薬加速化支援バイオ基盤技術開発費：化合物等を活用した生物システム制御基盤技術開発；平成18-21年度；200,624千円(85,000：68,000：40,000：22,000千円)
- 5) 研究代表者：飯塚勝美；科学研究費補助金基盤研究(C)：グルコース感受性転写因子の活性調節による代謝症候群治療法の開発；平成19-21年度；3,300千円(1,430：1,300：1,300千円)
- 6) 研究代表者：飯塚勝美；財団法人和証券ヘルス財団：グルコース感受性転写因子 ChREBP に注目した2型糖尿病患者の膵β細胞機能障害(ブドウ糖毒性)の分子機構の解明；平成21年度；1,000千円
- 7) 研究代表者：飯塚勝美；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：2型糖尿病における膵β細胞ブドウ糖毒性の新規解除法の確立；平成21年度；1,000千円
- 8) 研究代表者：武田 純；厚生労働科学研究費補助金；循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業：循環器リスクと耐糖能障害の効果的な健診マーカーの探索；平成20-22年度；45,945千円(18,945：16,100：10,900千円)
- 9) 研究代表者：武田 純；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業；MODY1-6の病態調査と識別的診断基準の策定；平成22-23年度；28,200千円(18,200：13,000千円)
- 10) 研究代表者：武田 純；科学研究費補助金基盤研究(B)；体脂肪分解と肝糖取り込みを促進させる糖尿病治療の開発；平成22-23年度；10,100千円(5,400：4,700千円)
- 11) 研究代表者：堀川幸男；経済産業省ゲノム創薬加速化支援バイオ基盤技術開発費：化合物等を活用した生物システム制御基盤技術開発；平成18-22年度；220,324千円(85,000：68,000：40,000：22,000：5,324千円)
- 12) 研究代表者：堀川幸男；バイオ産業情報化コンソーシアム；糖尿病ターゲット遺伝子の個体レベルでの検証と創薬基盤の構築；平成22年度；8,190千円
- 13) 研究代表者：堀川幸男；独立行政法人 科学技術振興機構；日本人とデンマーク人のタンパクコード領域集中型シーケンシング法による若年発症家族性糖尿病(MODY)の新規原因因子固定；平成22-23年度；10,500千円(6,000：4,500千円)
- 14) 研究代表者：飯塚勝美；第8回研究助成花王健康科学研究会；新規時計遺伝子 KLF - 10 の脂肪合成系酵素発現調節における役割の解明；平成22年度；1,000千円
- 15) 研究代表者：飯塚勝美；公益財団法人痛風財団；グルコース活性化転写因子 ChREBP の機能制御に基づく高尿酸血症治療法の開発；平成22年度；200千円
- 16) 研究代表者：飯塚勝美；科学研究費補助金基盤研究(C)；グルコースによる時計遺伝子発現調節機構に注目した代謝異常症候群予防法の開発；平成22-25年度；4,160千円(1,170：1,040：1,040：910千円)
- 17) 研究代表者：山本眞由美；大学活性化経費(教育)；キャンパスライフの健康科学ー生涯健康のためにー(全学共通教育、健康科学・スポーツ演習)；平成18-23年度；3,000千円(500：500：500：500：500：500千円)
- 18) 研究代表者：山本眞由美，研究分担者：田中生雅；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生の生涯健康指導必要性の科学的根拠を示す～肥満と将来の糖尿病発症の関係から～；平成21-25年度；4,520千円(1,430：1,170：520：900：500千円)
- 19) 研究代表者：飯塚勝美；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：2型糖尿病におけるコレステラミン+メトホルミン併用療法の有用性の検討ー脂肪合成におけるグルコースシグナル(ChREBP)と胆汁酸シグナル(FXR-SHP 経路)に注目した解析ー；平成23年度；1,000千円

2) 受託研究

- 1) 武田 純：インスリン使用中の2型糖尿病患者を対象とした心血管系イベント発生リスクに関する検討；平成19-22年度；1,500千円：サノフィ・アベンティス株式会社
- 2) 武田 純：ミカルディス錠 特定使用成績調査～長期使用時の脳・心血管イベントに関する調査；

平成 18-21 年度；252 千円

- 3) 武田 純：ソバマート特定使用成績調査—長期使用に関する調査—(プロトコール No.A6291023；平成 20-25 年度；189 千円
- 4) 武田 純：ヒューマトロープ特定使用成績調査—成人成長ホルモン分泌不全症(重症に限る)；平成 20-21 年度；126 千円
- 5) 加納克徳：アクテムラ特定使用成績調査(全例調査)関節リウマチ—多関節に活動性を有する若年性突発性関節炎—；平成 20-25 年度；94,500 円；中外製薬株式会社
- 6) 加納克徳：アクテムラ特定使用成績調査(長期フォローアップ調査) 関節リウマチ；平成 20-25 年度；31,500 円；中外製薬株式会社
- 7) 武田 純：ソバマート特定使用成績調査—長期使用に関する調査— (プロトコール No.A6291023；平成 20-25 年度；189 千円
- 8) 武田 純：ノルディトロピン特定使用成績調査；平成 22-26 年度；189 千円
- 9) 武田 純：アピドラ注 長期使用に関する特定使用成績調査；平成 22-25 年度；315 千円
- 10) 武田 純：アピドラ注 長期使用成績調査；平成 22-24 年度；210 千円
- 11) 武田 純：アベロック錠の副作用調査；平成 22 年度；21 千円
- 12) 武田 純：2 型糖尿病患者を対象とした OPC-262 の併用療法長期投与試験；平成 22-24 年度；1,669,500 円；大塚製薬株式会社
- 13) 武田 純：リピートル錠 特定使用成績調査；平成 22-24 年度；630 千円
- 14) 武田 純：プログラフカプセル ループス腎炎長期使用に関する特定使用成績調査；平成 20-24 年度；283,500 円
- 15) 武田 純：ヒューマトロープ特定使用成績調査—成人成長ホルモン分泌不全症(重症に限る)；平成 21-22 年度；63 千円
- 16) 諏訪哲也：SK-0403 第Ⅲ相試験 — α -グルコシダーゼ阻害剤又はピオグリタゾンとの併用療法における長期投与試験；平成 21-23 年度；1,523,592 円
- 17) 諏訪哲也：エクア錠 50 mg 特定使用成績調査；平成 23-25 年度；315 千円；ノバルティスファーマ株式会社
- 18) 諏訪哲也：ゴナトロピン 5000 使用成績調査；平成 23-27 年度；21 千円；あすか製薬株式会社
- 19) 武田 純：2 型糖尿病の治療における, SYR-472(100 mg)の第 3 相単独長期投与又は併用長期投与試験；平成 23-25 年度；1,234,800 円；武田薬品工業株式会社

3) 共同研究

- 1) 武田 純： α -グルコシダーゼ阻害剤と DPP-IV 阻害剤の併用によるインクレチンホルモン効果の増強メカニズムの解明研究—；平成 21-23 年度；1,890 千円；三和化学研究所

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

武田 純：

- 1) 日本内科学会評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会監事, 評議員(～現在)
- 3) 日本糖尿病合併症学会評議員(～現在)
- 4) 日本糖尿病妊娠学会理事, 評議員(～現在)
- 5) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 6) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 7) 日本老年病学会評議員(～現在)
- 8) 日本糖尿病眼学会理事(～現在)
- 9) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 10) 日本糖尿病情報学会評議員(～現在)

堀川幸男：

- 1) 日本病態栄養学会評議員(～現在)

- 2) 日本糖尿病学会評議員(～現在)
- 3) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 4) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 5) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)

山本眞由美：

- 1) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会学術評議員(～現在)
- 3) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 4) 日本臨床栄養学会評議員(～現在)
- 5) 日本病態栄養学会学術評議員(～現在)
- 6) 日本油化学会代議員(～現在)
- 7) 日本油化学会東海支部常任幹事(～現在)
- 8) 日本油化学会東海支部代議員(～現在)
- 9) 日本内分泌学会女性医師専門医育成・再教育委員会委員(～現在)

諏訪哲也：

- 1) 日本内分泌学会代議員(～現在)

2) 学会開催

武田 純：

- 1) 第 82 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 22 年 10 月, 岐阜)
- 2) 第 10 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 23 年 2 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

武田 純：

- 1) 日本人類遺伝学会；Journal of Human Genetics 編集委員(～現在)
- 2) 日本内科学会；Internal Medicine 英文誌編集委員(～現在)
- 3) 日本糖尿病協会；DM Ensemble 編集委員長(～現在)
- 4) Diabetes Frontier；編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

武田 純：

- 1) 第 12 回日本病態栄養学会年次学術セミナー共催ランチョンセミナー(平成 21 年 1 月, 京都, 特別講演「食後管理を考えたインスリン戦略とは？」演者)
- 2) 第 82 回日本内分泌学会学術総会ランチョンセミナー(平成 21 年 4 月, 群馬, 特別講演「日本人 2 型糖尿病と食後血糖の管理」演者)
- 3) 第 82 回日本内分泌学会学術総会教育講演(平成 21 年 4 月, 群馬, 特別講演「糖尿病の薬物特性に基づく最新薬物療法 - α グルコシダーゼ阻害薬の特性と病態の予防効果について」演者)
- 4) 第 52 回日本糖尿病学会年次学術集会共催ランチョンセミナー(平成 21 年 5 月, 大阪, 特別講演「食後と生活を考えたインスリン治療戦略」演者)
- 5) 第 208 回日本内科学会地方会, 第 45 回生涯教育講演会(平成 21 年 6 月, 名古屋, 特別講演「日本人の体質を考えた 2 型糖尿病の治療」演者)
- 6) 第 209 回日本内科学会東海地方会, 第 46 回生涯教育講演会(平成 21 年 10 月, 岐阜, 特別講演「日本人 2 型糖尿病におけるインスリン抵抗性をどう考えるか？」演者)
- 7) 第 13 回日本病態栄養学会(平成 22 年 3 月, 京都, 座長)
- 8) 第 44 回糖尿病学の進歩(平成 22 年 3 月, 大阪, 座長)
- 9) 第 83 回日本内分泌学界学術集会(平成 22 年 3 月, 京都, 座長)
- 10) 第 107 回日本内科学会総会講演会(平成 22 年 4 月, 東京, 座長)
- 11) 第 53 回日本糖尿病学会年次学術集会イブニングセミナー(平成 22 年 5 月, 岡山, 座長)
- 12) 第 31 回日本肥満学会(平成 22 年 10 月, 前橋, 講演「転写因子と肥満」演者)
- 13) 第 25 回日本糖尿病合併症学会(平成 22 年 10 月, 滋賀, 座長)
- 14) 第 26 回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会(平成 22 年 11 月, 埼玉, 座長)

- 15) 第 45 回糖尿病学の進歩(平成 23 年 2 月, 福岡, 特別講演「DPP-V1 阻害薬と臨床応用」 演者)
- 16) 第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 23 年 5 月, 札幌, 講演「インスリン分泌不全」 演者)
- 17) 日本内科学会第 214 回東海地方会, 第 50 回生涯教育講演会(平成 23 年 6 月, 名古屋, 講演「食後血糖管理の意義とインクレチン治療」 演者)
- 18) The 3rd Scientific Meeting of the Asian Association for the Study of Diabetes, (平成 23 年 7 月, 北京, 特別講演「Ethnical difference in MODY」 演者)
- 19) 第 16 回日本病態プロテアーゼ学会学術集会(平成 23 年 8 月, 大阪, 講演「日本人 2 型糖尿病において食後血糖上昇の意味するところ」 演者)
- 20) 第 49 回日本糖尿病学会九州地方会 ランチョンセミナー(平成 23 年 10 月, 福岡, 特別講演「経口薬による食後血糖管理の新しい展開」 演者)

堀川幸男：

- 1) 第 43 回糖尿病学の進歩(平成 21 年 2 月, 松本, 特別講演「2 型糖尿病感受性遺伝子同定の軌跡」 演者)
- 2) 第 52 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 21 年 5 月, 大阪, 特別講演「ポストゲノムの糖尿病遺伝子パズルの解明戦略について」 演者)
- 3) 第 80 回糖尿病学の進歩(平成 21 年 10 月, 浜松, 座長)
- 4) The joint international symposium on the 25th Kumamoto Medical Bioscience Symposium & G-COE program in Kumamoto University New progress in diabetes research : From basic research to clinical trials(平成 21 年 11 月, 熊本, 特別講演「Strategy to find novel type 2 diabetes susceptibility genes in the post genome sequencing era」 演者)
- 5) 3 学会合同学会 NOW2009(平成 21 年 12 月, 名古屋, 特別講演「糖尿病網膜症の遺伝素因について」 演者)
- 6) Danish-Japanese Joint Workshop “Molecular Diabetology”(平成 22 年 3 月, コペンハーゲン, 講演「Strategy to find novel type 2 diabetes susceptibility genes in the post genome-wide association study era」 演者)
- 7) 第 81 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 22 年 4 月, 金沢, 座長)
- 8) 第 221 回日本内科学会東海地方会(平成 22 年 6 月, 浜松, 座長)
- 9) 第 82 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 22 年 10 月, 岐阜, 座長)
- 10) 第 25 回日本糖尿病合併症学会 (平成 22 年 10 月, 滋賀, 「トランスクリプトーム解析による合併症関連遺伝子の網羅的獲得」 演者)
- 11) Japanese-Danish Kick-off Workshop “Molecular Diabetology”(平成 23 年 3 月, 神戸, 「The Genetics of Type 2 Diabetes: What have we Learned from GWAS? What is Next?」 演者)
- 12) 第 83 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 23 年 4 月, 富山, 座長)
- 13) 16th Japan-Korea Symposium on Diabetes Mellitus(平成 23 年 10 月, 千葉, 「Molecular dissection of early-onset type 2 diabetes in Japanese」 演者)
- 14) 第 84 回日本糖尿病学会中部地方会(平成 23 年 10 月, 名古屋, 座長)
- 15) 第 26 回日本糖尿病合併症学会(平成 23 年 10 月, 大宮, 「隣島トランスクリプトーム解析による血管合併症関連液性因子の網羅的獲得」 演者)
- 16) 日本人類遺伝学会第 56 回(平成 23 年 11 月, 幕張, 座長)

山本眞由美：

- 1) 国立大学法人保健管理施設協議会第 11 回フィジカルヘルス・フォーラム(平成 21 年 3 月, 岐阜, 「学生に対する指導の重要性」 シンポジスト)
- 2) 日本静脈経腸栄養学会 第 8 回 TNT 岐阜研修会(平成 21 年 5 月, 岐阜, 「症例検討・糖尿病」 演者)
- 3) 大学教育・学生支援推進事業 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム 意見交換会(東海・北陸地区)(平成 22 年 3 月, 名古屋, 報告講演「生涯健康を目指した学生健康支援プログラム」 演者)
- 4) 日本静脈経腸栄養学会 TNT 岐阜研修会(平成 22 年 5 月, 岐阜, 講演「症例検討 5・II 型糖尿病」 演者)
- 5) 第 48 回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会研究集会(平成 22 年 7 月, 静岡, 基調講演「健康管理における大学での危機管理」 演者)
- 6) 第 48 回全国大学保健管理研究集会(平成 22 年 10 月, 千葉, 「教育講演 II」 座長)

- 7) 第5回日本禁煙学会学術総会日韓ジョイント記念シンポジウム(平成22年11月, 徳島, 招聘講演「岐阜大学の敷地内禁煙」シンポジスト)
- 8) Japan-Korea Joint Symposium in Tokushima(2010.11, Tokushima, Total smoking ban in Gifu University; Symposist)
- 9) The Korean Society for Research on Nicotine and Tobacco, Japan-Korea Joint Symposium, Smoke-free Campus(2011.06, Seoul, Smoke Free Campus in Japan –Changes in Students Smoking Rate and the Total Smoking Ban–; Symposist)
- 10) 第49回全国大学保健管理研究集会(平成23年11月, 下関, 招聘講演「留学生の健康管理支援について」演者)

鈴木英司:

- 1) 第7回日本フットケア学会学術集会(平成21年2月, 特別講演「糖尿病と末梢循環障害」演者)

諏訪哲也:

- 1) 第208回日本内科学会地方会(平成21年6月, 名古屋, 座長)
- 2) 第215回日本内科学会東海地方会(平成23年10月, 岐阜, 座長)

飯塚勝美:

- 1) 第208回日本内科学会地方会(平成21年6月, 名古屋, 座長)
- 2) 第26回日本糖尿病合併症学会(平成23年10月, 大宮, 「GLP-1アナログ導入時の空腹時血糖正常化の重要性」演者)
- 3) 第23回分子糖尿病学シンポジウム(平成23年11月, 熊本, 「グルコース応答性遺伝子発現におけるグルコース6リン酸とキシルロース5リン酸の役割」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

武田 純:

- 1) 日本臨床内科医会岐阜県副会長(～現在)
- 2) 日本糖尿病協会岐阜県支部長(～現在)
- 3) 岐阜県糖尿病対策推進評議会副会長(～現在)
- 4) 日本糖尿病協会療養指導委員会委員長(～現在)
- 5) 岐阜県医師会理事(～現在)
- 6) 岐阜大学医師会副会長(～現在)
- 7) 日本学術振興会科学研究費委員会委員(～現在)
- 8) 岐阜県へき地医療対策委員会委員(～現在)

堀川幸男:

- 1) 岐阜地域医療連携研究会幹事(～現在)
- 2) 岐阜地域医師会連携パス運営委員会委員(～現在)
- 3) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜県医師会糖尿病地域連携パワーキンググループ委員長(～現在)
- 5) 岐阜県医師会地域連携検討委員会委員(～現在)
- 6) 日本糖尿病協会岐阜支部代議員(～現在)

山本眞由美:

- 1) 恵那地域糖尿病協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県大学保健管理研究会会長(～現在)
- 3) 岐阜県保健医療推進協議会委員(～現在)
- 4) 岐阜県保健医療推進協議会地域保健計画部会委員(～平成21年度)
- 5) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員長(～現在)
- 6) 岐阜県医師会男女共同参画委員会委員(平成21年度)

- 7) 岐阜医学研究協議会 専務理事(平成 22 年度～現在)
- 8) 岐阜県糖尿病対策推進協議会平成 22 年度世界糖尿病デー記念事業「糖尿病県民セミナー」ワーキンググループ委員(平成 21 年度～平成 22 年度)
- 9) 岐阜県糖尿病対策推進協議会幹事(平成 22 年度)
- 10) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員(平成 23 年度～現在)
- 11) 国立大学法人保健管理施設協議会保健管理業務の情報処理に関する特別委員会委員(平成 21 年度～現在)

10. 報告書

- 1) 野方文雄, 石塚達夫, 森田浩之, 宇野嘉弘, 山本眞由美: 動画で学ぶ頸動脈エコー検査アトラス(CD 版): ロボティック先端医療クラスター技術シーズ集: 27-28, CD(全 25 ページ)(平成 21 年 1 月)
- 2) 山本眞由美: 生涯健康を目指した学生健康支援プログラム: 平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」意見交換会実施報告書: 107-126(平成 21 年 2 月)
- 3) 山本眞由美: はじめに, ラウンドテーブルディスカッション「薬剤師の医療マネジメント教育に求めること」: 情報発信型 特別講演会 医療専門職のための医療マネジメント教育発展のために～創薬医療情報研究科に期待すること～: 1, 17-22(平成 21 年 2 月)
- 4) 山本眞由美: (日本語訳監修)「オーストラリアにおけるジェネリック医薬品の現状とその政策」「意見交換」, (執筆)「さいごに」: 特別講演および意見交換会記録集「オーストラリアにおけるジェネリック医薬品の現状とその政策」: 6-17, 18-21, 23(平成 21 年 3 月)
- 5) 武田 純: 体脂肪減少因子を用いた 2 型糖尿病の治療: 平成 20 年度厚生労働科学研究費 総括研究報告書(平成 21 年 4 月)
- 6) 武田 純: 循環器リスクと耐糖能障害の効果的な検診マーカーの探索: 平成 20 年度厚生労働科学研究費 総括研究報告書(平成 21 年 4 月)
- 7) 武田 純: 膵島特異的遺伝子の発現調節軸に焦点を絞った糖尿病遺伝子の探索: 平成 20 年度科学研究費補助金 特定領域報告書(平成 21 年 4 月)
- 8) 武田 純: 膵島機能に関連するマイクロ分子の同定と機能解析: 平成 20 年度科学研究費補助金 萌芽研究報告書(平成 21 年 4 月)
- 9) 堀川幸男: 化合物等を活用した生物システム制御基盤技術開発: 経済産業省ゲノム創薬加速化支援バイオ基盤技術開発費 平成 20 年度研究報告書(平成 21 年 4 月)
- 10) 飯塚勝美: グルコース感受性転写因子の活性調節による代謝症候群治療法の開発: 平成 20 年度科学研究費補助金実績報告書(平成 21 年 4 月)
- 11) 山本眞由美: 学生に対する指導の重要性: 第 11 回フィジカルヘルス・フォーラム報告書: 61-66(平成 21 年 9 月)
- 12) 飯塚勝美: グルコースシグナルと概日リズムの連関に注目したメタボリックシンドローム治療法の探索: 平成 21 年度花王健康科学研究会 第 6 回研究助成成果報告会 研究助成成果報告要旨集(平成 21 年 11 月)
- 13) 武田 純: 体脂肪減少因子を用いた 2 型糖尿病の治療: 平成 21 年度厚生労働科学研究費 総括研究報告書 平成 19-21 年度 総合研究報告書(平成 22 年 4 月)
- 14) 武田 純: 循環器リスクと耐糖能障害の効果的な検診マーカーの探索: 平成 21 年度厚生労働科学研究費 総括研究報告書(平成 22 年 4 月)
- 15) 武田 純: 膵島特異的遺伝子の発現調節軸に焦点を絞った糖尿病遺伝子の探索: 平成 21 年度科学研究費補助金 特定領域報告書(平成 22 年 4 月)
- 16) 武田 純: 膵島機能に関連するマイクロ分子の同定と機能解析: 平成 21 年度科学研究費補助金 萌芽研究報告書(平成 22 年 4 月)
- 17) 堀川幸男: 化合物等を活用した生物システム制御基盤技術開発: 経済産業省ゲノム創薬加速化支援バイオ基盤技術開発費 平成 21 年度研究報告書(平成 22 年 4 月)
- 18) 飯塚勝美: グルコース感受性転写因子の活性調節による代謝症候群治療法の開発: 平成 21 年度科学研究費補助金実績報告書(平成 22 年 4 月)
- 19) 飯塚勝美: グルコース感受性転写因子 ChREBP に注目した 2 型糖尿病患者の膵β細胞機能障害(ブドウ糖毒性)の分子機構の解明 大和証券ヘルス財団の助成による研究業績集 No. 34 : 78-83.
- 20) 山本眞由美: 岐阜大学「生涯健康を目指した学生健康支援プログラム」: 平成 21 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」・「大学教育・学生支援推進事業(学生支援推進プログラム)」意見交換会(東海・北陸地区)日本学生支援機構ホームページ: 全 8 ページ(平成 22 年 4 月)

- 21) 山本眞由美：健康管理における大学での危機管理：全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会報告書平成(22年度)：39-42(平成22年)
- 22) 福重八恵, 三浦徹志, 前田利之, 山本眞由美, 安藤憂紀, 浅田孝幸：モバイルコミュニケーションシステムを利用した大学におけるインフルエンザ予防：シンポジウム報告書「モバイル11」：10-11(平成23年3月)
- 23) 武田 純：循環器リスクと耐糖能障害の効果的な検診マーカーの探索：平成22年度厚生労働科学研究費 総括研究報告書 平成20-22年度 総合研究報告書(平成23年4月)
- 24) 武田 純；MODY1-6の病態調査と鑑別診断基準の策定：平成22年度厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 総括研究報告書(平成23年4月)
- 25) 武田 純；体脂肪分解と肝糖取り込みを促進させる糖尿病治療の開発：平成22年度科学研究費補助金基盤研究(B) 実績報告書(平成23年4月)
- 26) 堀川幸男；糖尿病ターゲット遺伝子の個体レベルでの検証と創薬基盤の構築：平成22年度バイオ産業情報化コンソーシアム
- 27) 堀川幸男；日本人とデンマーク人のタンパクコード領域集中型シーケンス法による若年発症家族性糖尿病(MODY)の新規原因因子固定；平成22年度独立行政法人 科学技術振興機構 実績報告書(平成23年4月)
- 28) 飯塚勝美；グルコースによる時計遺伝子発現調節機構に注目した代謝異常症候群予防法の開発：平成22年度科学研究費補助金基盤研究(C) 実績報告書(平成23年4月)
- 29) 飯塚勝美；新規時計遺伝子 KLF-10 の脂肪合成系酵素発現調節における役割の解明；第8回花王健康科学研究会 研究助成金 研究助成成果報告要旨集(平成23年11月)
- 30) 仲村渠砂絵子, 前田利之, 福重八恵, 浅田孝幸, 安藤憂紀, 山本眞由美：モバイルコミュニケーションシステムを利用した体重コントロール指導の経験：第48回全国大学保健管理研究集会報告書：124(平成23年)
- 31) 山本眞由美：禁煙指導, 新入生全員を対象とした「健康科学特別講義」の開催, 健康診断管理システムの導入と健康診断の質の向上, 啓発冊子「大学生の健康ナビ」の出版, 南フロリダ大学の健康支援の取り組み, American College Health Association の紹介, American College Health Association での研究発表, 生涯健康を目指した学生健康支援プログラム 活動報告書：23-25, 26-30, 34-35, 36-38, 60-67, 68-71, 72-73(平成23年)

11. 報道

- 1) 加納克徳：「研究室から 大学はいま」膠原病に最適な治療法研究：岐阜新聞(2009年11月17日)
- 2) 飯塚勝美：大和証券ヘルス財団「糖尿病予防研究に助成金」：岐阜新聞(2009年11月20日)
- 3) 武田 純：「岐阜県における世界糖尿病デーの取り組み 岐阜城ブルーライトアップとともに県民健康講座を開催」DITN(2009年12月5日)
- 4) 山本眞由美：学術研究助成受賞者の軌跡「日本女医会学術研究助成を授与された後について」：日本女医会 <http://jmwa.or.jp/kiseki/post-130.html>.(2010年1月)
- 5) 山本眞由美：「大学生の健康ナビ」広告：岐阜新聞(2010年6月1日)
- 6) 武田 純：多様化する治療法：中日新聞(2010年11月25日)
- 7) 武田 純：食後高血糖の古くて、新しい理解と対策：岐阜県保険医新聞(2010年12月10日)
- 8) 武田 純：糖尿病の予防と上手な食生活(第8回清談会)：中日新聞(2011年9月20日)
- 9) 武田 純：健康食で糖尿病予防(世界糖尿病デー記念事業)：岐阜新聞(2011年10月19日)
- 10) 武田 純：11月14日は世界糖尿病デー「オール岐阜」で医療連携：岐阜新聞(2011年11月12日)
- 11) 武田 純：ぎふ医療ナビ 糖尿病に新たな薬物療法：岐阜新聞(2011年11月26日)
- 12) 堀川幸男：地域連携パスを用いた2型糖尿病最新治療戦略の展開：岐阜県保険医新聞(2011年12月)

12. 自己評価

評価

3年毎の過去の実績に比して、この3年間では世界をリードするオリジナル研究論文を発表できなかったことは最大のマイナス評価である。このことは、大型研究費の継続取得に至らなかったことにも通じる。背景として、教官自身による研究成果や若手研究者の指導効果が不十分であった点が主であり、大学ミッションの一端を損なったことに対して猛省しなければならない。

学会活動としては、来年から「日本糖尿病妊娠学会」と「日本糖尿病情報学会」を続けて主催することが内定したことは評価できる。社会活動では、日本糖尿病協会での企画や運営に積極的に参画した。

「健康手帳」に替わる「糖尿病連携手帳」の刊行、療養指導ツールである「カンパセーションマップ」の開発と普及活動、療養指導に特化した機関誌「DM Ensemble」の創刊（初代編集長）、CDE ネットワークの新設などへの寄与は特記に値する。一方、地域活動では、医師会との共同事業として「糖尿病連携バス」を完成させた。

現状の問題点及びその対応策

附属病院の診療科運営に教室人員が割かれ、十分な研究者と研究時間が確保できなかったことは今回も問題点であった。対策としては大学院留学生を 1 名増員する予定であるが、量的には不十分であることに変わりない。教官自身のキャリア形成および若手の効率的な育成のためには研究への直接的な参加が必要であり、教育および指導体制と研究意識の再構築が欠かせない。一方で、研究状況の加速のためには、研究員を補完する実験補助員の更なる確保も同時に必要であり、追加雇用のための外部資金を獲得するよう努力する。

今後の展望

先駆的である「膵島トランスクリプトーム」に関する糖尿病ゲノム研究を更に推進させる。インスリン合成と分泌に関する新規の生理活性物質の機能解明を通じて糖尿病の診断と治療への展開を図ると共に、海外一流誌での成果発表と特許取得を到達目標とする。

学術的な社会活動としては、日本糖尿病学会の年次学術集会を主催することを目指す。更に、既に開催が内定している「日本糖尿病妊娠学会」、「日本糖尿病情報学会」についてインパクトのある開催内容を企画する。

地域糖尿病学としては、行政、医師会、関連団体との連携のもとに、疫学的な病態調査研究、早期発見と発症予防の体制構築、地域で活用される薬物療法の開発、医療連携バスなどを推進していく。改訂された「糖尿病連携手帳」の普及も推進するとともに、県内での LCDE ネットワークの設立と充実を目指す。

(7) 小児病態学分野

1. 研究の概要

当教室における基礎研究・臨床研究はいずれも臨床に立脚し、極めて基礎的な追求がなされ、その成果は必ずや臨床に還元されるものである。トランスレーショナルリサーチでもある。またその内容と手法は常に過去から現在の歴史に立脚して、将来を見据えた極めてユニークなテーマであり、かつ手法である。出生前小児期の遺伝・発生及び、小児の成長・発達と全臨床分野にわたる病的状態のすべてを対象としている。

基礎研究においては、幾つかの分野に絞ることにより、奥深い研究が進められている。アレルギー、免疫不全、代謝異常の各分野で幾つかの疾患の病因遺伝子が当教室で世界に先駆けクローニングされ、世界をリードする成果が幾つも輩出され、新聞紙上の一面でも取り上げられている。各テーマに共通することは、各分野の疾患の病因と病態の解明であり、その成果を診断・治療・予知・予防に適用していくことである。さらにこれらを通じて、ヒトの遺伝・発生、成長・発達の新たな解明につなげている。方法論的には、日常臨床の中からヒントと発想が得られ、遺伝子学的手法に加え、医学への構造生物学の導入(21世紀型ポストゲノムとしての構造生物医学 *structure biological medicine* -近藤による)をしている。ゲノム遺伝子異常からエピジェネティクス、遺伝子発現異常を経てタンパク立体構造の異常と機能異常との関連を解析し、診断、治療への応用を進めている。世界的かつ画期的な成果が得られ発表されている。

これらの成果は幾つかの大型競合的研究費獲得、年間論文総数約 100 編、そのうち国際誌掲載の英文論文年間約 30 編に現れている。

1) アレルギー

①アトピー(アレルギー)の抑制系の病因遺伝子を世界で初めて明らかにし(Lancet 1996年, BBRC 1999年に続いて, JACI 2003年), IgE産生の抑制系 IL-12-IL-12レセプターまたは IL-18-IL-18レセプター-IFN γ シグナリングの重要性を示した。②これらの成果をもとにして世界に先駆けて、新たにアトピー(アレルギー)を遺伝子学的に分類した。③さらに、これをもとにアレルギー(アトピー)の遺伝子診断キットを開発し、特許を取得した(2010年)。④ヒト IL-18のタンパク立体構造を世界に先駆けて解明し(Nature Struct Biol 2003年)、その臨床応用としての低分子創薬を進めている。⑤遺伝子情報と抗アレルギー薬効果から個別化医療、すなわち、アレルギーのオーダーメイド治療の確立を進め“気管支喘息のテーラーメイド治療管理法のための手引き”を世界で初めて作成した(2007, 2010年度)。⑥遺伝子発現, RNAプロセッシング特に RNA editing と alternative splicing がアレルギー発症に関わっていることを世界で初めて解明した。⑦食物アレルギーの抗原特異性の発現機構の解明のため、T細胞クローンの樹立に世界で初めて成功し、アレルギー発症における HLA-ペプチド-T細胞レセプターの特異性と結合性を立体構造から解明している(PNAS 2008年他)。⑧この成果に基づいて、経口免疫寛容を誘導する治療法確立のため“食べて治す食品の開発”プロジェクトがすすめられ、現在、臨床応用が進行している(2010, 2011年)。⑨環境と遺伝子によるアレルギー発症の分子遺伝学的解明(21世紀型ポストゲノムとしての遺伝子生態学 *genetic ecological medicine* -近藤による)。温度変化により、NF- κ Bの機能が変化し、サイトカイン産生パターンが変化することを明らかにした。さらに概日リズムの視点から、光と体内時計遺伝子との関連を検討している。⑩自然免疫系と疾患との関連を探求し治療開発につなげるために、Toll-like receptor (TLR) およびそのシグナル伝達系の MyD88分子などの分子およびそれらの結合様式を明らかにし、同時にそれらの遺伝子学的タンパク構造学的異常を明らかにしている。⑪ストレスとアレルギー発症の分子遺伝学的解明、ウイルス感染によるアレルギー発症、アラキドン酸カスケードの評価とオーダーメイド治療、質の高い QOL 評価表の作成、臍帯血プロジェクト、FACSを用いた自然免疫系調節性 T細胞の解析と獲得免疫系 Th1・Th2アンバランスの解明と応用など。⑫以上のプロジェクトに関して以下の大型競合的外部資金を獲得できた。(文部科学省科学研究費などは別項参照)

1. <文部科学省高等教育局>文部科学省高度先進医療開発経費「免疫・アレルギー疾患病因タンパク質立体構造に基づいた構造生物学的創薬による治療法の確立」研究代表者：近藤直実、研究協力者：加藤善一郎、篠田紳司、寺本貴英、下澤伸行、金子英雄、深尾敏幸、松井永子、桑田一夫、鈴木正昭、白川昌宏(平成 13-15 年度)

2. <厚生労働省科学研究費補助金>免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業「アレルギー疾患の治療反応性予測因子の確立及びテーラーメイド治療法の確立に関する研究」および「アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化」主任研究者：近藤直実、班員：松井永子ほか(平成 16-18 年度)(平成 19-21 年度)

3. <生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業>異分野融合研究開発型「食物アレルギー対策食品の基礎研究に基づく画期的創成」研究代表者：近藤直実、班員：金子英雄、大西秀典ほか(平成 17-

21 年度)

4. <環境保全機構委託業務>「気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立」研究代表者:近藤直実, 研究協力者:松井永子, 加藤善一郎, 木全かおり, 篠田紳司ほか (平成 21-23 年度)。

5. その他 厚生労働省科学研究費など多数。

2) 先天性免疫不全症と自己炎症性疾患と DNA 修復

IgG サブクラス欠損症の病因となる遺伝子異常を世界に先駆け明らかにした (J Clin Invest 及び JACI)。常染色体優性の遺伝形式をとる高 IgM 症候群の病因についても AID の dominant negative 効果によることを世界で初めて明らかにした (JACI 2003 年)。比較的頻度の高い免疫不全症である IgA 欠損症について解析を行いその B 細胞の分化障害部位を明らかにした。さらに、本邦 2 例目の免疫グロブリン重鎖遺伝子の欠損家系を報告した。高発癌と免疫不全を示す Bloom 症候群や Ataxia-telangiectasia の病因遺伝子 BLM と ATM の機能と構造の解析を通して細胞周期, DNA 修復, シグナル伝達につき解明し発癌機構の解明を行っている (Blood, CEI, PNAS 他)。さらに多彩な自然免疫不全症, 自己炎症性疾患の病因病態解明と治療開発に着手した。特に IRAK4 欠損症, MyD88 欠損症, 外胚葉形成不全症の包括的迅速診断スクリーニング法の開発を行い, 世界で 6 症例目の IKBA 異常症を診断し報告した (JACI 2011 年)。またクライオパイリン関連周期熱症候群の重症度スクリーニング方法の開発を行っている (J Clin Immunol 2011 年)。

3) 有機酸代謝異常症

当該の疾患群の早期診断, 遺伝子診断, 病態解析, 治療法の開発などに取り組んでいる。ケトン体代謝異常症の β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA:3-ketoacid CoA トランスフェラーゼ (SCOT) 欠損症の酵素診断や遺伝子診断については, 世界中からの依頼を受けて解析を行っている。これまで多くの遺伝子変異とその特徴, 遺伝子型と臨床像の関連について明らかにしてきた。上記 2 疾患に加え HMG-CoA 合成酵素欠損症と HMG-CoA リアーゼ欠損症というケトン体産生障害についても研究を開始した。有機酸代謝異常症, 脂肪酸代謝異常症の病態解析においては島根大学との共同研究として成果を挙げている。

4) 遺伝性ムコ多糖症

遺伝性ムコ多糖症については, 酵素補充療法が開始された I 型 (Hurler/Scheie), II 型 (Hunter), VI 型 (Maroteaux-Lamy) の治療成績, 骨髄移植を行った II 型の治療成績を解析している。また III 型 (Sanfilippo) に対する Genistein の効果, IV 型 (Morquio) の疫学についても検討している。デュボン小児病院・セントルイス大学・島根大学と共同でムコ多糖症に対するマス・スクリーニング法の開発を行っている。日本ムコ多糖症研究会を毎年開催し, 情報交換, 患者家族会との連携を図っている。

5) ペルオキシソーム病

ペルオキシソーム病の診断については全国からの検体依頼に対応している。先天性ペルオキシソーム代謝異常症の病因と治療について研究をすすめており, ペルオキシソーム欠損症の新規病因遺伝子 PEX16, 19, 13, 3, 26, 14 の同定, 温度感受性現象の発見, 新たな β 酸化酵素欠損症の発見, 副腎白質ジストロフィーの診断と治療のそれぞれにおいて世界をリードする成果を挙げている。ペルオキシソーム欠損症の温度感受性については蛋白立体構造解析や軽症型温度感受性モデルマウスの作成などを行い病態解明と治療法の開発に取り組んでいる。また iPS 細胞を用いたペルオキシソーム病神経系モデル構築などの試みを行っている。

6) タンパク立体構造解析

小児の疾患関連蛋白質の立体構造解析に基づいた病態解析・治療法の開発などを行う“構造医学”の確立を目指し, 低分子リガンドスクリーニング・蛋白レベルでの蛋白工学的アプローチによる治療法の開発に重点を置いて研究を進めている。また, 自然免疫から獲得免疫に至る経路に関与する IL-1 ファミリー分子, 及び Toll-like receptor 群に必須な分子であるシグナル伝達アダプター蛋白を中心にした構造学的研究を進めている。最近の成果として, ヒト IL-18 立体構造に続き, 多次元核磁気共鳴法にてアダプター分子 MyD88 の立体構造を決定し, 変異体解析によるタンパク間の動的相互作用情報を基盤としてヒト MyD88 欠損症の特異的な病態解明を行った (PNAS 2009 年)。現在, 前述の IL-18 や MyD88 を含めた高次複合体立体構造の解析を進めており, その構造情報を基盤とした創薬プロジェクトにつなげる予定である。

7) 現在共同で行われているプロジェクト

Ataxia-telangiectasia と Bloom 症候群の病態解析:(近藤直実) オーストラリア Queensland Institute of Medical Research Professor M. Lavin, 小児気管支喘息の QOL 評価 (近藤直実, 松井永子) 平山耕一郎, 抗アレルギー薬と遺伝子に関する研究:(近藤直実, 松井永子) ムコ多糖症の酵素補充療法の基礎的研究および臨床応用:(近藤直実, 折居建治) USA St.Louis University 教授 戸松俊治, 毛細血管拡張性運

動失調症における神経変性機構を解明するための基礎的研究：(折居建治, 近藤直実) USA St.Jude Childrens Research Hospital Associate member Peter J. McKinnon, 常染色体劣性高IgE症候群の原因遺伝子の検討：(金子英雄, 近藤直実) 東京医科歯科大学大学院 免疫アレルギー 峯岸克行, IRAK4欠損症及び自然免疫異常症の病態解明：(大西秀典, 加藤善一郎) 京都大学 西小森隆太, 九州大学 高田英俊, 金沢大学 谷内江昭宏, 大阪大学 大石和徳. IL-18 とその結合分子のタンパク立体構造と機能：(加藤善一郎, 近藤直実) 京都大学 白川昌宏, MyD88 とその結合分子のタンパク立体構造と機能：(加藤善一郎, 大西秀典, 近藤直実) 京都大学 朽尾豪人, 放射線高感受性疾患の分子病態に関する研究：(深尾敏幸) オーストラリア Queensland Institute of Medical Research Professor M. Lavin, チオラーゼ蛋白の3次構造と機能に関する研究：(深尾敏幸) フィンランド Oulu University Professor R. Wierenga, 先天性ケトン体代謝異常症に関する研究：(深尾敏幸) オランダ Amsterdam Medical Center Professor RJA Wanders, 先天性ケトン体代謝異常症に関する研究：(深尾敏幸) USA Oregon Health and University Assistant Professor C Harding 先天性ケトン体代謝異常症に関する研究：(深尾敏幸) カナダ Ste-Justine Hospital, Montreal, Professor GA. Mitchell, ATM と BLM の会合：(金子英雄) オーストラリア Queensland Institute of Medical Research Professor M. Lavin. 自己免疫疾患病態解明・治療開発へのHLA・TCR立体構造解析：(加藤善一郎, 近藤直実) アメリカ合衆国 Harvard University, Prof. J. Strominger 疾患特異的iPS細胞樹立と治療開発(船戸道徳, 加藤善一郎, 近藤直実)：京都大学iPS細胞研究所 長船健二

8) 新たなプロジェクト

難治性神経疾患(脊髄性筋萎縮症など)の診断と治療開発(再生医療など), 若年性関節リウマチと自己免疫疾患の治療開発, 遺伝性高発癌疾患(P53欠損, ATM欠損, BLM欠損など)に対する遺伝子関連治療開発などに着手している。iPS細胞研究も進めている。リンパ管腫症への新規治療開発(プロブテロールによる)を世界に先駆けすすめている(図3参照)。

2. 名簿

教授：	近藤直実	Naomi Kondo
教授(併任)：	深尾敏幸	Toshiyuki Fukao
臨床教授：	加藤善一郎	Zenichiro Kato(准教授)
准教授：	折居建治	Kenji Orii(NICU 設置準備室)
臨床准教授：	寺本貴英	Takahide Teramoto
臨床准教授：	松井永子	Eiko Matsui
併任講師：	大西秀典	Hidenori Ohnishi(臨床講師)
臨床講師：	船戸道徳	Michinori Funato
臨床講師：	森本将敬	Masahiro Morimoto(NICU 設置準備室)
臨床講師：	木村 豪	Takeshi Kimura(NICU 設置準備室)
医員：	川本典生	Norio Kawamoto(NICU 設置準備室)
医員：	川本美奈子	Minako Kawamoto
医員：	小関道夫	Michio Ozeki
医員：	神田香織	Kaori Kanda
医員：	笠原由貴子	Yukiko Kasahara
医員：	伊藤裕子	Yuko Ito
医員：	久保田一生	Kazuo Kubota
医員：	山本崇裕	Takahiro Yamamoto(NICU 設置準備室)
医員：	堀 友博	Tomohiro Hori
教授(併任)：	下澤伸行	Nobuyuki Shimosawa

3. 研究成果の発表

著書(和文)

- 1) 近藤直実, 他. アトピー性皮膚炎 病因・病態：片山一郎, 河野陽一監修. アトピー性皮膚炎診療ガイドライン2009, 東京：協和企画；2009年.
- 2) 近藤直実, 他. 小児喘息. 危険因子：社団法人日本アレルギー学会 喘息ガイドライン専門部会監修. 喘息予防・管理ガイドライン2009, 東京：協和企画；2009年.
- 3) 宇理須厚雄, 向山徳子, 森川昭廣, 近藤直実, 相原雄幸, 有田昌彦, 伊藤浩明, 伊藤節子, 海老澤元宏, 金子英雄, 柴田瑠美子(分担執筆). 食物アレルギー 経口負荷試験ガイドライン 2009, 東京：協和企画；2009年.

- 4) 深尾敏幸, 笹井英雄, 近藤直実. 低身長精査の際の肝機能障害を指摘された1歳4ヶ月女児: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 7-10.
- 5) 浦澤林太郎, 久保徹夫, 深尾敏幸. 急性胃腸炎を契機に急激な意識障害を起こした9ヶ月男児: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 100-102.
- 6) 鈴木康之. 発語の遅れと特有の顔貌を指摘された2歳6ヶ月男児: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 168-171.
- 7) 下澤伸行, 鈴木康之, 折居忠夫. 出生時からの著明な筋緊張低下, 哺乳不良に特異な顔貌を認めた生後2ヶ月男児: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 220-223.
- 8) 下澤伸行. ペルオキシソーム病 Meet the Expert: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 212-215.
- 9) 菊地正広, 下澤伸行. 成績低下, 行動異常から心療内科を受診していた11歳男児: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 216-219.
- 10) 近藤直実. 第14章 ワンポイントレッスン 2. アスピリン喘息(AIA): 西牟田敏之, 西間三馨, 森川昭廣, 近藤直実監修. 小児気管支喘息治療・管理ハンドブック 2009, 東京: 協和企画; 2009年: 127-128.
- 11) 船戸道徳, 大塚節子. 新生児のGVHD, 高K血症の予防: 大戸 齊編. わかりやすい周産期・新生児の輸血治療, 東京: メジカルビュー社; 2009年: 98-103.
- 12) 近藤直実, 他. 第2章 アレルギーを理解するための基礎知識-IgE抗体産生とその制御-: 永倉俊和, 森田 寛, 足立 満編. アレルギー疾患イラストレイテッド 第2版, 東京: メディカルレビュー社; 2010年: 146-151.
- 13) 近藤直実. 昆虫アレルギー: 金澤一郎, 永井良三編. 今日の診断指針 第6版, 東京: 医学書院; 2010年: 1232-1235.
- 14) 近藤直実. 乳幼児健康診査: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 2241.
- 15) 近藤直実: 新生児ミルクアレルギー: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 1572.
- 16) 松井永子. 先天(性)サイトメガロウイルス感染症: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 1782.
- 17) 松井永子. 先天(性)梅毒: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 1785.
- 18) 松井永子. 先天(性)風疹症候群: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 1786.
- 19) 近藤直実. ツベルクリンアレルギー: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 2037.
- 20) 松井永子. 電撃性猩紅熱: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 2081.
- 21) 松井永子. 日本脳炎. 日本脳炎ワクチン: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 2224.
- 22) 松井永子. 麻疹の内攻: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 2734.
- 23) 松井永子. 麻疹脳炎: 和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2010年: 2734.
- 24) 近藤直実, 松井永子編著. アレルギー(特に気管支喘息)のテラーメイド治療管理ガイドライン(試案), 厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業「アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化」研究班, 岐阜: コームラ; 2010年: 1-41.
- 25) 近藤直実. 第6章 腸管粘膜免疫とアレルギーの制御: 上野川修一監修. 免疫機能性食品の基礎と応用, 東京: シーエムシー出版; 2010年: 41-50.
- 26) 近藤直実, 他. アレルギー発症にかかわる遺伝子: 福田 健編. 総合アレルギー学 改訂2版, 東京: 南山堂; 2010年: 98-102.
- 27) 深尾敏幸. ケトosis: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 14-17.
- 28) 深尾敏幸. ケトン体. 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 93-95.
- 29) 下澤伸行. 極長鎖脂肪酸測定: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 112-115.
- 30) 下澤伸行. ペルオキシソーム病: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 214-217.
- 31) 深尾敏幸. ケトン体利用異常症: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 218-221.
- 32) 深尾敏幸. β -ケトチオラーゼ欠損症: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先

- 天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 260-262.
- 33) 近藤直実. 小児の気管支喘息(bronchial asthma in childhood): 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編. 今日の治療指針 2011年版, 東京: 医学書院; 2011年: 1197-1199.
 - 34) 近藤直実. アレルギー疾患から子どもたちを守る 一信頼を大切にするーアレルギー専門医, : ひよこクラブ, 東京: ベネッセコーポレーション, 風讀社; 2011年: 219.
 - 35) 近藤直実, 他. 5.アレルギー疾患: 岡田 正, 馬場忠雄, 山城雄一郎編. 新臨床栄養学 増補版, 東京: 医学書院; 2011年: 371-377.
 - 36) 深尾敏幸, 近藤直実. リジン尿性蛋白不耐症: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 70-71.
 - 37) 深尾敏幸, 近藤直実. イソ吉草酸血症: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 105-106.
 - 38) 深尾敏幸, 堀 友博. CPT2欠損症: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 136-137.
 - 39) 下澤伸行. Zellweger 症候群: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 146-148.
 - 40) 鈴木康之, 小関道夫, 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィー: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 149-151.
 - 41) 下澤伸行. RCDP type1: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 152-153.
 - 42) 下澤伸行. 脳肝腎症候群(ツェルウェーガー症候群): 井村裕夫総編. 症候群ハンドブック, 東京: 中山書店; 2011年: 126-127.
 - 43) 鈴木康之. ハーラー/シャイエ症候群: 井村裕夫総編. 症候群ハンドブック, 東京: 中山書店; 2011年: 387.
 - 44) 鈴木康之. ライソゾームのムコ多糖症代謝: 衛藤義勝責任編. ライソゾーム病ー最新の病態, 診断, 治療の進歩ー, 東京: 診断と治療社; 2011年: 19-21.
 - 45) 鈴木康之. ムコ多糖症(MPS)III型: 衛藤義勝責任編. ライソゾーム病ー最新の病態, 診断, 治療の進歩ー, 東京: 診断と治療社; 2011年: 197-200.
 - 46) 折居建治. ムコ多糖症 IIIC型の酵素欠損, 遺伝子異常の機構, 遺伝子座位: 折居忠夫総監修. ムコ多糖症 UP DATE, 東京: E・N MEDIX; 2011年: 82-83.
 - 47) 折居建治. ムコ多糖症 IIIC型: 折居忠夫総監修. ムコ多糖症 UP DATE, 東京: E・N MEDIX; 2011年: 115-118.
 - 48) 浜崎雄平, 河野陽一, 海老澤元宏, 近藤直実監修. 小児気管支喘息治療管理ガイドライン 2012, 東京: 協和企画; 2011年: 1-296.
 - 49) 近藤直実, 金子英雄, 他. 宇理須厚雄, 近藤直実監修. 食物アレルギー治療管理ガイドライン 2012. 東京: 協和企画; 2011年: 1-131.
 - 50) 近藤直実. こどものアレルギー診療のポイント, 東京: 診断と治療社; 2011年: 1-135.

著書 (欧文)

- 1) Kondo N, Matsui E, Kaneko H, Fukao T, Teramoto T, Kato Z, Ohnishi H, Nishimura A. Genetics of pediatric asthma. In: Pawankar R, Holgate S.T, Rosenwasser L.J, eds. Allergy Frontiers: Epigenetics, Allergens and Risk Factors. pt1. Tokyo: Springer; 2009:189-203.

総説 (和文)

- 1) 近藤直実, 大西秀典, 徳見哲司, 金子英雄, 加藤善一郎. 感染症・免疫異常の臨床遺伝学, 小児科診療 2009年; 72巻: 77-82.
- 2) 近藤直実, 金子英雄, 渡邊倫子, 加藤善一郎. 原発性(先天性)免疫不全症の分類, 小児科診療 2009年; 72巻: 178-187.
- 3) 近藤直実, 松井永子, 加藤善一郎, 西村あかね. 気道アレルギー疾患に対するテーラーメイド治療の現状と可能性, アレルギーの臨床 2009年; 29巻: 37-45.
- 4) 森田秀行, 金子英雄, 大西秀典, 加藤善一郎, 松井永子, 深尾敏幸, 中埜 拓, 近藤直実. 食物アレルギー寛容誘導に向けた抗原エピトープの解析と治療戦略, Visual Dermatology 2009年; 8巻: 966-969.
- 5) 徳見哲司, 大西秀典, 金子英雄, 加藤善一郎, 近藤直実. 自然免疫系の障害による原発性免疫不全症の最近の動向ーToll 様受容体シグナル伝達経路異常, 特に MyD88 欠損症の最新情報も含めてー, アレルギー 2009年; 58巻: 19-28.
- 6) 近藤直実. 特別座談会 日本小児アレルギー学会の展望ー新理事長を迎えてー, AIR 2009年; 8巻: 6-9.
- 7) 近藤直実. antibody deficiency, 小児科診療 2009年; 72巻(増刊号): 398-399.
- 8) 近藤直実. 5. 長期管理薬の使い方 2)小児, 医薬ジャーナル 2009年; 45巻: 1372-1381.
- 9) 松井永子, 川本典生, 金子英雄, 深尾敏幸, 近藤直実. 小児喘息の関連遺伝子, アレルギーの臨床 2009年; 29巻: 221-226.
- 10) 深尾敏幸. 質疑応答 ケトン体とケトアシドーシス, 日本医事新報 2009年; 4441巻: 144-146.
- 11) 深尾敏幸. アシル-CoA 脱水素酵素欠損症. 小児疾患診療のための病態生理 2. 第4版, 小児内科 2009年; 41巻(増刊号): 390-394.
- 12) 深尾敏幸, 近藤直実. 出生コホート研究による発症要因分析の可能性, アレルギーの臨床 2009年; 29

- 巻：605-611.
- 13) 金子英雄, 近藤直実. 分類不能型免疫不全症候群および免疫グロブリンサブクラス欠損症, 臨床検査 2009年; 53巻: 569-574.
 - 14) 近藤直実, 大西秀典, 加藤善一郎, 松井永子, 木村 豪, 徳見哲司, 森田秀行, 金子英雄, 寺本貴英. 免疫不全とアレルギー-特に, 自然免疫系の分子のタンパク構造生物学的視点から-, 日本小児アレルギー学会誌 2009年; 23巻: 203-211.
 - 15) 川本美奈子, 大西秀典, 川本典生, 森田秀行, 松井永子, 金子英雄, 深尾敏幸, 寺本貴英, 笠原貴美子, 白木誠, 岩砂眞一, 近藤直実. 母乳栄養とアレルギー疾患発症との関連について, 日本小児アレルギー学会誌 2009年; 23巻: 49-55.
 - 16) 金子英雄, 鈴木啓子, 近藤直実. IgA・IgA サブクラスとIgA 欠損症の病態, 日本臨床免疫学会誌 2009年; 32巻: 142-148.
 - 17) 近藤直実. 食物アレルギーに対する経口免疫寛容誘導-食べて治す-, 小児科診療 2009年; 72巻: 1319-1326.
 - 18) 深尾敏幸, 近藤直実. 出生コホート研究による発症要因分析の可能性, アレルギーの臨床 2009年; 29巻: 47-53.
 - 19) 近藤直実. 母乳と食物アレルギーについて教えてください, Q&A でわかるアレルギー疾患 2009年; 5巻: 303-305.
 - 20) 近藤直実. アレルギー疾患の QOL 障害 II. 各論 2)小児気管支喘息, アレルギー・免疫 2009年; 16巻: 43-51.
 - 21) 近藤直実. 乳児食物アレルギー発症における母乳とその成分の意味. アレルギー疾患の早期診断と早期治療, アレルギーの臨床 2009年; 29巻: 45-49.
 - 22) 大西秀典, 加藤善一郎, 寺本貴英, 船戸道徳, 金子英雄, 深尾敏幸, 近藤直実. 自然免疫の分子構造に基づいた自己炎症性症候群の診断へのアプローチ, アレルギー 2009年; 58巻: 1502-1512.
 - 23) 近藤直実. アレルギーの患者と地球に優しい医療とその開発, アレルギー 2009年; 58巻: 1581-1590.
 - 24) 近藤直実. 気管支喘息とテラーメイド医療, 呼吸 2009年; 28巻: 455-461.
 - 25) 近藤直実, 大西秀典, 川本美奈子, 森田秀行, 加藤善一郎, 金子英雄, 松井永子, 寺本貴英. シンポジウム 2 乳幼児アトピー性皮膚炎の悪化因子と予防 母乳とその成分, 日本小児皮膚科学会誌 2009年; 28巻: 49-55.
 - 26) 近藤直実. クリーンな家庭暖房機は小児喘息の症状軽減に有用, The Mainichi Medical Journal 2009年; 5巻: 172-174.
 - 27) 近藤直実. 講演 3「小児期の食物アレルギー その病態と予防, 治療の戦略」, 牛乳栄養学術研究会 第23回国際学術フォーラム報告書 2009年: 48-66.
 - 28) 近藤直実. Congress Report 第21回日本アレルギー学会春季臨床大会 -テーマ:患者と地球に優しい医療-, Allergy From the Nose to the Lung 2009年; 7巻: 25-29.
 - 29) 近藤直実. Congress Report 第21回日本アレルギー学会春季臨床大会 -テーマ:患者と地球に優しい医療-, Pediatric Allergy for Clinicians 2009年; 5巻: 43-48.
 - 30) 近藤直実. 第21回日本アレルギー学会春季臨床大会 -患者と地球に優しい医療-, Topics in Atopy 2009年; 8巻: 38-39.
 - 31) 鈴木康之. 小児科における OSCE, 小児科 2009年; 50巻: 85-92.
 - 32) 下澤伸行. 日本人が発見に関わった疾患遺伝子 ペルオキシソーム病, 小児科 2009年; 50巻(増刊号): 907-913.
 - 33) 下澤伸行. ペルオキシソーム病, 小児内科 2009年; 41巻(増刊号): 479-486.
 - 34) 近藤直実, 金子英雄. 母乳とアレルギー, 小児科 2010年; 51巻: 923-928.
 - 35) 近藤直実. トランスレーショナルリサーチの展開と遺伝子分子生態医学, 呼吸 2010年; 29巻: 569-570.
 - 36) 近藤直実. 4. 免疫・アレルギー 明確に定義された免疫不全症-Wiskott-Aldrich 症候群, 毛細血管拡張性小脳失調症など(小児の治療指針), 小児科診療 2010年; 73巻(増刊号): 222-225.
 - 37) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 加藤善一郎, 折戸万紀子. 疾患群の遺伝学的検査(Genetic Testing)と遺伝子検査(Gene-Based Testing). アレルギー疾患-Allergic disorders-, 日本臨床 遺伝子診療学 第2版 2010年; 68巻(増刊号): 388-396.
 - 38) 近藤直実. 序-アレルギー疾患のオーダーメイド医療-, アレルギー・免疫 2010年; 10巻: 9-17.
 - 39) 加藤善一郎, 近藤直実. アレルギー疾患への低分子創薬, アレルギー・免疫 2010年; 10巻: 110-115.
 - 40) 松井永子. アレルギー(特に気管支喘息)のオーダーメイド医療のガイドライン(試案), アレルギー・免疫 2010年; 10巻: 69-80.
 - 41) 近藤直実. トランスレーショナルリサーチの真の展開. 日本小児アレルギー学会誌 2010年; 24巻: 120-124.
 - 42) 福富 悌, 寺本貴英, 小関道夫, 安藤恵美子, 久保田一生, 森本将敬, 深尾敏幸, 近藤直実. 小児インフルエンザ治療における麻黄湯の有用性についての検討, 日本小児東洋医学会誌 2010年; 24巻: 11-15.
 - 43) 深尾敏幸. 診断へのアプローチ 2.First line 検査 2)アシドーシス・ケトーシス, 小児内科 2010年; 42巻: 1093-1096.
 - 44) 川本美奈子, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 近藤直実. 食物アレルギーの感作と発症, 臨床免疫・アレルギー科 2010年; 54巻: 558-563.
 - 45) 下澤伸行. ペルオキシソーム病-副腎白質ジストロフィー, Zellweger 症候群-(小児の治療指針), 小児科診療 2010年; 73巻(増刊号): 515-517.

- 46) 下澤伸行. ペルオキシソーム病を見逃していませんか?, 小児内科 2010年; 42巻: 1167-1173.
- 47) 鈴木康之, 下澤伸行. 日本先天代謝異常学会学会賞受賞論文-ペルオキシソーム病との30年, 二人三脚の旅-, 日本先天代謝異常学会雑誌 2010年; 26巻: 2-12.
- 48) 下澤伸行. ペルオキシソーム形成異常症-Zellweger 症候群-, 日本臨床(別冊)新領域別症候群シリーズ 肝・胆道系症候群 第2版 2010年; 13巻: 515-518.
- 49) 鈴木康之. シミュレーション医学教育, 小児科臨床 2010年; 63巻: 55-57.
- 50) 近藤直実. アレルギー疾患のQOLとその評価, アレルギー 2010年; 39巻: 79-85.
- 51) 近藤直実. 特集 食物アレルギーに対する経口免疫療法 8. 岐阜大学での取り組み-モディファイしたアレルゲンを用いて-, アレルギーの臨床 2011年; 31巻: 51-55.
- 52) 近藤直実. アレルギー治療の現在と未来, 日本小児科医会会報 2011年; 42巻: 9-14.
- 53) 大西秀典, 寺本貴英, 久保田一生, 清島真理子, 近藤直実. 皮膚症状からみた自己炎症性症候群, 小児皮膚科学会雑誌 2011年; 30巻: 11-16.
- 54) 近藤直実, 金子英雄, 大西秀典, 松井永子, 寺本貴英, 森田秀行, 加藤善一郎. 特集 周産期のアレルギー低アレルゲンミルクなど加水分解乳はアレルギー疾患を予防するか?, 周産期医学 2011年; 41巻: 661-667.
- 55) 加藤善一郎, 松井永子, 近藤直実. 特集 遺伝子解析からアレルギー疾患の治療戦略を考える 気管支喘息と薬物選択-遺伝子・タンパク解析から-, 小児科 2011年; 52巻: 859-865.
- 56) 加藤善一郎, 近藤直実. 蛋白立体構造に基づいた経口免疫寛容誘導療法-食物アレルギーへの応用-, 臨床免疫・アレルギー科 2011年; 55巻: 74-80.
- 57) 加藤善一郎, 近藤直実. アレルギー性疾患への構造医学の応用-アレルゲン特異性と治療へ-, アレルギーの臨床 2011年; 31巻: 93-96.
- 58) 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行, 川本美奈子, 久保田一生, 寺本貴英, 加藤善一郎, 松井永子, 山本崇裕, 加藤晴彦, 中埜 拓, 近藤直実. 食物アレルギーの発症・増悪を修飾する因子-「食べて治す食品(2005 岐阜)」開発への展開-, 日本小児アレルギー学会誌 2011年; 25巻: 85-89.
- 59) 金子英雄, 松井永子, 近藤直実. 小児喘息における新型インフルエンザ(Pandemic H1N1 2009)による肺炎合併症の発症機序, 臨床免疫・アレルギー科 2011年; 56巻: 423-428.
- 60) 鈴木康之. ALDの造血幹細胞移植療法, Clinical Neuroscience 2011年; 29巻: 958-959.
- 61) 三善陽子, 酒井規夫, 池田佳世, 長谷川泰浩, 橋真紀子, 清原由起, 山田寛之, 近藤宏樹, 濱田悠介, 木村志保子, 里 龍晴, 峰 淳史, 神尾範子, 鈴木保宏, 塩見正司, 太田秀明, 下澤伸行, 大園恵一. 副腎白質ジストロフィーの日本人男児11例に置ける副腎機能解析, 日本内分泌学会雑誌 2011年; 87巻: 83-85.
- 62) 寺本貴英, 松井永子, 近藤直実. 支援活動. 誌上シンポジウム 災害時における喘息・アレルギーへの対応と問題点, アレルギー 2011年; 40巻: 19-24.
- 63) 近藤直実, 斎藤博久. 災害時における喘息・アレルギー患児への対応と問題点-東日本大震災での報告と今後への提言- 1. 序文, 日本小児アレルギー学会誌 2011年; 25巻: 719-720.
- 64) 寺本貴英, 松井永子, 近藤直実. 災害時における喘息・アレルギー患児への対応と問題点-東日本大震災での報告と今後への提言- 3. 支援活動, 日本小児アレルギー学会誌 2011年; 25巻: 726-733.
- 65) 近藤直実, 大西秀典, 加藤善一郎, 松井永子, 金子英雄. 食物アレルギーの病態解析に基づく経口免疫寛容誘導食品開発への道, 臨床免疫・アレルギー科 2011年; 56巻: 667-676.

総説 (欧文)

- 1) Munakata M, Kato Z, Schleimer R, Nagase H. Asthma and Innate Immunity(Round Table Discussion). International Review of Asthma & COPD. 2009;11:6-28.
- 2) Kato Z. Molecular and Cellular Biology, Harvard University. International Review of Asthma. 2009;11: 54-60.
- 3) Kondo N, Matsui E, Nishimura A, Kaneko H. Pharmacogenetics of asthma in children. Allergy Asthma Immunol Res. 2010;2:14-19.
- 4) Kondo N, Nishimuta T, Nishima S, Morikawa A, Aihara Y, Akasaka T, Akasawa A, Adachi Y, Arakawa H, Ikarashi T, Ikebe T, Inoue T, Iwata T, Urisu A, Ebisawa M, Ohya Y, Okada K, Odajima H, Katsunuma T, Kameda M, Kurihara K, Kohno Y, Sakamoto T, Shimojo N, Suehiro Y, Tokuyama K, Nambu M, Hamasaki Y, Fujisawa T, Matsui T, Matsubara T, Mayumi M, Mukoyama T, Mochizuki H, Yamaguchi K, Yoshihara S. Japanese pediatric guidelines for the treatment and management of bronchial asthma 2008. Pediatr Int. 2010;52:319-326.
- 5) Kondo N, Chang KK, Yoshihara S, Katsunuma T. Round Table Discussion(English) Treatment and Management of Pediatric Asthma. International Review of Asthma&COPD. 2010;12:5-27.
- 6) Shimozawa N, Honda A, Kajiwara N, Kozawa S, Nagase T, Takemoto Y, Suzuki Y. Diagnostic and follow-up system of patients with X-linked adrenoleukodystrophy in Japan. J Hum Genet. 2011;56:106-109.
- 7) Shimozawa N. Molecular and clinical findings and diagnostic flowchart of peroxisomal diseases. Brain Dev. 2011;33:770-776.

原著 (和文)

- 1) 久保田一生, 岩田晶子, 田中龍一, 山本崇裕, 永田智子, 伊藤貴美子, 中嶋義記, 近藤富雄. 低身長・貧血で経過観察中, 吐血により肝外門脈閉塞症と診断された1女児例, 小児科臨床 2009年; 62巻: 517-520.

- 2) 小川晴久, 中村 誠, 福田弥生, 柴原数雄, 西垣康広, 伊藤国徳, 成瀬哲哉, 藤巻吾朗, 松井永子, 折居建治, 近藤直実. 調湿建材の使用が室内環境及び人体に与える影響調査に関する研究, 室内環境 Indoor environment 2009年;12巻:125-131.
- 3) 福原 忍, 水江伸夫, 坂井拓郎, 稲澤奈津子, 池本 亘, 足立憲昭, 下澤伸行. 同一遺伝子異常を持ちながら臨床型が異なる ALD 兄弟例, 小児科臨床 2009年;62巻:457-461.
- 4) 松井永子, 近藤直実, 金子英雄, 川本美奈子, 折居建治他. 小児気管支喘息患児におけるトシル酸スプラタストの有用性の検討, 小児科診療 2009年;12巻:2329-2392.
- 5) 松井猛彦, 岩田 力, 勝沼俊雄, 南部光彦, 岡田賢司, 近藤直実. 小児喘息の現症または既往歴を有する新型インフルエンザ患児で医学的理由から入院を要した症例に関する第1次調査の解析, 日本小児アレルギー学会誌 2009年;23巻:697-704.
- 6) 平林詩子, 嶋井真奈美, 荒川典子, 垣ヶ原昭美, 岩越浩子, 福富 悌, 久保田一生, 笹井英雄, 安藤恵美子, 深尾敏幸. 病児保育園で行った5年間の地域保健活動, 保健と保育 2009年;15巻:40-42.
- 7) 松井猛彦, 岩田 力, 勝沼俊雄, 南部光彦, 岡田賢司, 近藤直実. 新型インフルエンザ入院例に関する緊急第二次調査報告:基礎疾患のない症例との比較-呼吸器症状を呈した症例を中心に-, 日本小児アレルギー学会誌 2010年;24巻:155-166.
- 8) 大江直行, 野中裕康, 船戸道徳, 小関道夫, 加藤久和, 矢野大仁, 吉村紳一, 高見 剛, 岩間 亨. 後頭部皮下に発生した限局性 Ewing sarcoma/PNET の1例, 小児の脳神経 2011年;36巻:26-30.
- 9) 田口皓一郎, 久保田一生, 伊藤裕子, 木村 豪, 寺本貴英, 加藤善一郎, 近藤直実. 小児の原発性皮膚ノカルジア症の1例, 小児科診療 2011年;74巻:322-326.
- 10) 久保田一生, 深尾敏幸, 堀 友博, 小林弘典, 船戸道徳, 長谷川有紀, 山口清次, 近藤直実. カルニチンパルミトイルトランスフェラーゼ2欠損症のろ紙血血清のアシルカルニチンプロファイルの経時的変化, 日本小児科学会雑誌 2011年;115巻:956-960.

原著 (欧文)

- 1) Kato Z, Orii KE, Morimoto M, Sasai H, Funato M, Sawatari S, Kuwabara H, Kondo N. A transient lesion in the corpus callosum during rotavirus infection. *Pediatr Neurol.* 2009;41:467-469. IF 1.513
- 2) Kato Z, Yamagishi A, Nakamura M, Kondo N. Theophylline-associated status epilepticus in an infant: pharmacokinetics and the risk of suppository use. *World J Pediatr.* 2009;5:316-318. IF 0.945
- 3) Ozeki M, Kato Z, Sasai H, Kubota K, Funato M, Orii K, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Congenital inner ear malformations without sensorineural hearing loss in children. *Int J Pediatr Otorhinolaryngol.* 2009;73:1484-1487. IF 1.067
- 4) Kato Z, Okuda M, Okumura Y, Arai T, Teramoto T, Nishimura M, Kaneko H, Kondo N. Oral administration of the thyrotropin-releasing hormone (TRH) analogue, taltireline hydrate, in spinal muscular atrophy. *J Child Neurol.* 2009;24:1010-1012. IF 1.668
- 5) Funato M, Fukao T, Sasai H, Hori T, Terazawa D, Ozeki M, Orii K, Teramoto T, Kaneko H, Kondo N. Translocation (1;10)(p34;p15) in infant acute myeloid leukemia with extramedullary infiltration in multiple sites. *Cancer Genet Cytogen.* 2009;192:86-89. IF 1.551
- 6) Kato Z, Teramoto T, Kondo N. Beneficial effects of herbal medicine on susceptibility to infection in a patient with immunoglobulin deficiency. *Open Ped Med J.* 2009;3:18-20.
- 7) Kato Z, Shimada Y, Ishiko H, Kondo N. Reversion to the Neurovirulent Genome Sequence of Polio Virus Isolated from Community-Acquired meningitis. *Open Ped Med J.* 2009;3:31-32.
- 8) Kato Z, Nakamura M, Yamagishi Y, Teramoto T, Kondo N. Pediatric thioridazine poisoning as result of a pharmacy compounding error. *Pediatr Reports.* 2009;1:30-31.
- 9) Funato M, Kato H, Sasai H, Kubota K, Ozeki M, Kato Z, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Diffuse large B-cell lymphoma presenting with osteolytic lesions in the bilateral Femur. *Eur J Haematol.* 2009;83:502. IF 2.785
- 10) Frappart PO, Lee Y, Russell HR, Chalhoub N, Wang YD, Orii KE, Zhao J, Kondo N, Baker SJ, McKinnon PJ. Recurrent genomic alterations characterize medulloblastoma arising from DNA double-strand break repair deficiency. *Proc Natl Acad Sci USA.* 2009;106:1880-1885. IF 9.771
- 11) Ohnishi H, Tochio H, Kato Z, Orii KE, Li A, Kimura T, Hiroaki H, Kondo N, Shirakawa M. Structural basis for the multiple interactions of the MyD88 TIR domain in TLR4 signaling. *Proc Natl Acad Sci USA.* 2009;106:10260-10265. IF 9.771
- 12) Nagase T, Ueno M, Matsumura M, Muguruma K, Ohgushi M, Kondo N, Kanematsu D, Kanemura Y, Sasai Y. Pericellular matrix of decidua-derived mesenchymal cells: A potent human-derived substrate for the maintenance culture of human ES cells. *Dev Dynam.* 2009;238:1118-1130. IF 2.864
- 13) Kuratsubo I, Suzuki Y, Orii KO, Kato T, Orii T, Kondo N. Psychological status of patients with mucopolysaccharidosis type II and their parents. *Pediatr Int.* 2009;51:41-47. IF 0.755
- 14) Teramoto T, Fukao T, Hirayama K, Asano T, Aoki Y, Kondo N. Escherichia coli O-157-induced hemolytic uremic syndrome: Usefulness of SCWP score for the prediction of neurological complication. *Pediatr Int.* 2009;51:107-109. IF 0.755
- 15) Matsukuma E, Aoki Y, Sakai M, Kawamoto N, Watanabe H, Iwagaki S, Takahashi Y, Kawabata I, Kondo N, Uchida Y. Treatment with OK-432 for persistent congenital chylothorax in newborn infants resistant to octreotide. *J Pediatr Surg.* 2009;44:e37-e39. IF 1.308

- 16) Suzuki Y, Aoyama A, Kato T, Shimozawa N. Retinitis pigmentosa and mucopolysaccharidosis type II: an extremely attenuated phenotype. *J Inher Metab Dis.* 2009;32:582-583. IF 3.808
- 17) Al-Dirbashi OY, Shaheen R, Al-Sayed M, Al-Dosari M, Makhseed N, Safieh LA, Santa T, Meyer BF, Shimozawa N, Alkuraya FS. Zellweger syndrome caused by PEX13 deficiency: Report of two novel mutations. *Am J Med Genet A.* 2009;149A:1219-1223. IF 2.505
- 18) Purevsuren J, Kobayashi H, Hasegawa Y, Mushimoto Y, Li H, Fukuda S, Shigematsu Y, Fukao T, Yamaguchi S. A novel molecular aspect of Japanese patients with medium-chain acyl-CoA dehydrogenase deficiency (MCADD): c.449-452delCTGA is a common mutation in Japanese patients with MCADD. *Mol Genet Metab.* 2009;96:77-79. IF 3.539
- 19) Morimoto M, Matsui E, Kawamoto N, Sakurai S, Kaneko H, Fukao T, Iwasa S, Shiraki M, Kasahara K, Kondo N. Age-Related changes of Transforming Growth Factor β 1 in Japanese children. *Allergol Int.* 2009;58:97-102.
- 20) Suzuki H, Kaneko H, Fukao T, Jin R, Kawamoto N, Asano T, Matsui E, Kasahara K, Kondo N. Various Expression patterns of α 1 and α 2 genes in IgA Deficiency. *Allergol Int.* 2009;58:111-117.
- 21) Kato Z, Sasai H, Kondo N, Kato T. Scoring clinical functions in subacute sclerosing panencephalitis. *Am J Neuroradiol.* 2009;30:e99. IF 3.464
- 22) Fukao T, Kondo M, Yamamoto T, Orii KE, Kondo N. Comparison of mitochondrial A3243G mutation load in easily accessible samples in a family with maternally inherited diabetes and deafness. *Mol Med Rep.* 2009;2:69-72. IF 0.307
- 23) Macdonald MJ, Longacre MJ, Langberg EC, Tibell A, Kendrick MA, Fukao T, Ostenson CG. Decreased levels of metabolic enzymes in pancreatic islets of patients with type 2 diabetes. *Diabetologia.* 2009;52:1087-1091. IF 6.973
- 24) Otomo T, Muramatsu T, Yorifuji T, Okuyama T, Nakabayashi H, Fukao T, Ohura T, Yoshino M, Tanaka A, Okamoto N, Inui K, Ozono K, Sakai N. Mucopolipidosis II and III alpha/beta: mutation analysis of 40 Japanese patients showed genotype-phenotype correlation. *J Hum Genet.* 2009;54:145-151. IF 2.496
- 25) Purevsuren J, Fukao T, Hasegawa Y, Fukuda S, Kobayashi H, Yamaguchi S. Clinical and molecular investigations of 5 Japanese patients with mitochondrial trifunctional protein deficiency. *Mol Genet Metab.* 2009;98:372-377. IF 3.539
- 26) Yamada K, Uchiyama A, Arai M, Kubodera K, Yamamoto Y, Orii KO, Nagasawa H, Masuno M, Kohno Y. Severe upper airway stenosis in a boy with partial monosomy 16p13.3pter and partial trisomy 16q22qter. *Congenit Anom.* 2009;49:85-88.
- 27) Takahashi Y, Mine J, Kubota Y, Yamazaki E, Fujiwara T. A substantial number of Rasmussen syndrome patients have increased IgG, CD4+ T cells, TNF α , and Granzyme B in CSF. *Epilepsia.* 2009;50:1419-1431. IF 3.955
- 28) Fukao T, Zhang G, Matsuo N, Kondo N. CpG islands around exon 1 in the succinyl-CoA:3-ketoacid CoA transferase (SCOT) gene are hypomethylated even in human and mouse hepatic tissues where SCOT gene expression is completely suppressed. *Mol Med Rep.* 2010;3:355-359. IF 0.307
- 29) Fukao T, Nguyen HT, Nguyen NT, Vu DC, Can NT, Pham AT, Nguyen KN, Kobayashi H, Hasegawa Y, Bui TP, Niezen-Koning KE, Wanders RJ, de Koning T, Nguyen LT, Yamaguchi S, Kondo N. A common mutation, R208X, identified in Vietnamese patients with mitochondrial acetoacetyl-CoA thiolase (T2) deficiency. *Mol Genet Metab.* 2010;100:37-41. IF 3.539
- 30) Ozeki M, Kunishima S, Kasahara K, Funato M, Teramoto T, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. A family having type 2B von Willebrand disease with an R1306W mutation: Severe thrombocytopenia leads to the normalization of high molecular weight multimers. *Thromb Res.* 2010;125:e17-e22. IF 2.372
- 31) Ozeki M, Funato M, Teramoto T, Ohe N, Asano T, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Reversible cerebrospinal fluid edema and porencephalic cyst, a rare complication of ventricular catheter: Case report and literature review. *J Clin Neurosci.* 2010;17:658-661. IF 1.165
- 32) Ohnishi H, Tochio H, Kato Z, Kimura T, Hiroaki H, Kondo N, Shirakawa M. (1)H, (13)C, and (15)N resonance assignment of the TIR domain of human MyD88. *Biomol NMR Assign.* 2010;4:123-125. IF 0.707
- 33) Suzuki M, Fujii H, Fujigaki H, Shinoda S, Takahashi K, Saito K, Wada H, Kimoto M, Kondo N, Seishima M. Lipocalin-type prostaglandin D synthase and egg white cystatin react with IgE antibodies from children with egg allergy. *Allergol Int.* 2010;59:175-183.
- 34) Hori T, Fukao T, Kobayashi H, Teramoto T, Takayanagi M, Hasegawa Y, Yasuno T, Yamaguchi S, Kondo N. Carnitine palmitoyltransferase 2 deficiency: The time-course of blood and urinary acylcarnitine levels during initial L-carnitine supplementation. *Tohoku J Exp Med.* 2010;221:191-195. IF 1.145
- 35) Kato Z, Morimoto W, Kimura T, Matsushima A, Kondo N. Interstitial deletion of 18q: comparative genomic hybridization array analysis of 46, XX,del(18)(q21.2.q21.33). *Birth Defects Res A Clin Mol Teratol.* 2010;88:132-135. IF 2.482
- 36) Kato Z, Ohnishi H, Kimura T, Kondo N. Prediction of the pathogenesis of the mutation in MeCP2 C-terminal domain. *Brain Dev.* 2010;32:169. IF 1.979
- 37) Adachi S, Sakaguchi H, Kuwahara T, Uchida Y, Fukao T, Kondo N. High regression rate of coronary aneurysms developed in patients with immune globulin-resistant Kawasaki disease treated with steroid pulse therapy. *Tohoku J Exp Med.* 2010;220:285-290. IF 1.145

- 38) Fukao T, Horikawa R, Naiki Y, Tanaka T, Takayanagi M, Yamaguchi S, Kondo N. A novel mutation (c.951C>T) in an exonic splicing enhancer results in exon 10 skipping in the human mitochondrial acetoacetyl-CoA thiolase gene. *Mol Genet Metab.* 2010;100:339-344. IF 3.539
- 39) Aoki Y, Fukao T, Zhang G, Ohnishi H, Kondo N. Mutation in the Q(28)SDD(31)SD site, but not in the two SQ sites of the survival of motor neuron protein, affects its foci formation. *Int J Mol Med.* 2010;26:667-671. IF 1.814
- 40) Matsui E, Shinoda S, Fukutomi O, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Relationship between the benefits of suplatast tosilate, a Th2 cytokine inhibitor, and gene polymorphisms in children with bronchial asthma. *Exp Therap Med.* 2010;1:977-982.
- 41) Kaneko H, Teramoto T, Kondo M, Morita H, Ohnishi H, Orii KE, Matsui E, Kondo N. Efficacy of the Slow Dose-up Method for Specific Oral Tolerance Induction in Children With Cow's Milk Allergy: Comparison With Reported Protocols. *J Invest Allerg Clin Immunol.* 2010;20:538-539. IF 1.489
- 42) Kato Z, Stern JN, Nakamura HK, Miyashita N, Kuwata K, Kondo N, Strominger JL. The autoimmune TCR-Ob.2F3 can bind to MBP85-99/HLA-DR2 having an unconventional mode as in TCR-Ob.1A12. *Mol Immunol.* 2010;48:314-320. IF 2.916
- 43) Kato Z, Morimoto M, Orii KE, Kato T, Kondo N. Developmental changes of radiological findings in Fukuyama-type congenital muscular dystrophy. *Pediatr Radiol.* 2010;40:127-129. IF 1.499
- 44) Yamauchi A, Iwata H, Ohnishi H, Teramoto T, Kondo N, Seishima M. Interleukin-17 expression in the urticarial rash of familial cold autoinflammatory syndrome: a case report. *Brit J Dermatol.* 2010;163:1351-1653. IF 4.353
- 45) Saito H, Kato M, Okada I, Orii KE, Higuchi T, Hoshino H, Kubota M, Arai H, Tagawa T, Kimura S, Sudo A, Miyama S, Takami Y, Watanabe T, Nishimura A, Nishiyama K, Miyake N, Wada T, Osaka H, Kondo N, Hayasaka K, Matsumoto N. STXBP1 mutations in early infantile epileptic encephalopathy with suppression-burst pattern. *Epilepsia.* 2010;51:2397-2405. IF 3.955
- 46) Miyoshi Y, Sakai N, Hamada Y, Tachibana M, Hasegawa Y, Kiyohara Y, Yamada H, Murakami M, Kondou H, Kimura-Ohba S, Mine J, Sato T, Kamio N, Ueda H, Suzuki Y, Shiomi M, Ohta H, Shimozawa N, Ozono K. Clinical aspects and adrenal functions in eleven Japanese children with X-linked adrenoleukodystrophy. *Endocr J.* 2010;57:965-972. IF 1.952
- 47) Okuyama T, Tanaka A, Suzuki Y, Ida H, Tanaka T, Cox GF, Eto Y, Orii T. Japan Elaprase Treatment (JET) study: Idursulfase enzyme replacement therapy in adult patients with attenuated Hunter syndrome (Mucopolysaccharidosis II, MPS II). *Mol Genet Metab.* 2010;99:18-25. IF 3.539
- 48) Tomatsu S, Montaña AM, Oguma T, Dung VC, Oikawa H, Gutiérrez ML, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Barrera L, Orii T. Validation of disaccharide composition derived from dermatan sulfate and heparan sulfate in mucopolysaccharidoses and mucopolipidoses II and III by tandem mass spectrometry. *Mol Genet Metab.* 2010;99:124-131. IF 3.539
- 49) Tomatsu S, Montaña AM, Oguma T, Dung VC, Oikawa H, de Carvalho TG, Gutiérrez ML, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Sakura N, Barrera L, Kida K, Kubota M, Orii T. Dermatan sulfate and heparan sulfate as a biomarker for mucopolysaccharidosis I. *J Inherit Metab Dis.* 2010;33:141-150. IF 3.808
- 50) Matsukawa T, Asheuer M, Takahashi Y, Goto J, Suzuki Y, Shimozawa N, Takano H, Onodera O, Nishizawa M, Aubourg P, Tsuji S. Identification of novel SNPs of ABCD1, ABCD2, ABCD3, and ABCD4 genes in patients with X-linked adrenoleukodystrophy (ALD) based on comprehensive resequencing and association studies with ALD phenotypes. *Neurogenetics.* 2010;12:41-50. IF 3.488
- 51) Thummler S, Dupont D, Acquaviva C, Fukao T, de Ricaud D. Different clinical presentation in siblings with mitochondrial acetoacetyl-CoA thiolase deficiency and identification of two novel mutations. *Tohoku J Exp Med.* 2010;220:27-31. IF 1.145
- 52) Dai J, Kim OH, Cho TJ, Schmidt-Rimpler M, Tonoki H, Takikawa K, Haga N, Miyoshi K, Kitoh H, Yoo WJ, Choi IH, Song HR, Jin DK, Kim HT, Kamasaki H, Bianchi P, Grigelioniene G, Nampoothiri S, Minagawa M, Miyagawa SI, Fukao T, Marcelis C, Jansweijer MC, Hennekam RC, Bedeschi F, Mustonen A, Jiang Q, Ohashi H, Furuichi T, Unger S, Zabel B, Lausch E, Superti-Furga A, Nishimura G, Ikegawa S. Novel and recurrent TRPV4 mutations and their association with distinct phenotypes within the TRPV4 dysplasia family. *J Med Genet.* 2010;47:704-709. IF 7.037
- 53) Hasan NM, Longacre MJ, Seed Ahmed M, Kendrick MA, Gu H, Ostenson CG, Fukao T, MacDonald MJ. Lower succinyl-CoA:3-ketoacid-CoA transferase (SCOT) and ATP citrate lyase in pancreatic islets of a rat model of type 2 diabetes: knockdown of SCOT inhibits insulin release in rat insulinoma cells. *Arch Biochem Biophys.* 2010;499:62-68. IF 3.022
- 54) Yamamoto Y, Kohno Y, Kato Z, Uchiyama A. Brain infarction localized on left inferior temporal gyrus of presumed fetal onset. *J Obstet Gynaecol Res.* 2010;36:1144-1147. IF 0.869
- 55) Fukao T, Ishii T, Amano N, Kursula P, Takayanagi M, Murase K, Sakaguchi N, Kondo N, Hasegawa T. A neonatal-onset succinyl-CoA:3-ketoacid CoA transferase (SCOT)-deficient patient with T435N and c.658-666dupAACGTGATT p. N220_I222dup mutations in the OXCT1 gene. *J Inherit Metab Dis.* 2010;33:636. IF 3.808
- 56) Ozeki M, Fukao T, Kondo N. Propranolol for intractable diffuse lymphangiomatosis. *N Engl J Med.* 2011;364:1380-1382. IF 53.486

- 57) Uchida Y, Morita H, Adachi S, Asano T, Taga T, Kondo N. Bacterial meningitis and septicemia of neonate due to *Lactococcus lactis*. *Pediatr Int*. 2011;53:119-120. IF 0.755
- 58) Kato Z, Manabe T, Teramoto T, Kondo N. Adenovirus infection mimics the cerebellitis caused by rotavirus infection. *Eur J Pediatr*. 2011;170:405-406. IF 1.644
- 59) An Y, Ohnishi H, Matsui E, Funato M, Kato Z, Teramoto T, Kaneko H, Kimura T, Kubota K, Kasahara K, Kondo N. Genetic variations in MyD88 adaptor-like are associated with atopic dermatitis. *Int J Mol Med*. 2011;27:795-801. IF 1.814
- 60) Kaneko H, Fukao T, Kasahara K, Yamada T, Kondo N. Augmented cell death with Bloom syndrome helicase deficiency. *Mol Med Rep*. 2011;40:607-609. IF 0.307
- 61) Nishimuta T, Kondo N, Hamasaki Y, Morikawa A, Nishima S. Japanese guideline for childhood asthma. *Allergol Int*. 2011;60:147-169.
- 62) Katayama I, Kohno Y, Akiyama K, Ikezawa Z, Kondo N, Tamaki K, Kouro O. Japanese guideline for atopic dermatitis. *Allergol Int*. 2011;60:205-220.
- 63) Urisu A, Ebisawa M, Mukoyama T, Morikawa A, Kondo N. Japanese guideline for food allergy. *Allergol Int*. 2011;60:221-236.
- 64) Kato H, Kanematsu M, Orii K, Morimoto M, Kato Z, Kondo N. Apparition of iodinated contrast agents in the twin neonatal gastrointestinal tracts after maternal contrast-enhanced CT. *Jpn J Radiol*. 2011;29:521-523. IF 0.487
- 65) Funato M, Fukao T, Sasai H, Hori T, Terazawa D, Kubota K, Ozeki M, Orii K, Kaneko H, Kondo N. Successful treatment of pediatric immune thrombocytopenic purpura associated with ulcerative colitis. *Pediatr Int*. 2011;53:771-773. IF 0.755
- 66) Funato M, Kaneko H, Kubota K, Ozeki M, Kanda K, Orii K, Kato Z, Fukao T, Kondo N. Pediatric acute lymphoblastic leukemia mimicking Henoch-Schönlein purpura. *Pediatr Int*. 2011;53:766-768. IF 0.755
- 67) Funato M, Kaneko H, Ohkusu K, Sasai H, Kubota K, Ohnishi H, Kato Z, Fukao T, Kondo N. Refractory chronic pleurisy caused by *Helicobacter equorum*-like bacterium in a patient with X-linked agammaglobulinemia. *J Clin Microbiol*. 2011;49:3432-3435. IF 4.220
- 68) Fukao T, Sass JO, Kursula P, Thimm E, Wendel U, Ficicioglu C, Monastiri K, Guffon N, Barić I, Zobot MT, Kondo N. Clinical and molecular characterization of five patients with succinyl-CoA:3-ketoacid CoA transferase (SCOT) deficiency. *BBA-Mol Basis Dis*. 2011;1812:619-624. IF 5.211
- 69) Kato Z, Kondo N, Kato H, Morita H, Teramoto T, Miyamoto K, Shimizu K. Selective pontine hypoplasia: a possible common feature in 5p monosomy syndrome. *Brain Dev*. 2011;33:702-703. IF 1.979
- 70) Okumura A, Nakagawa S, Kawashima H, Muguruma T, Saito O, Fujimoto J, Toida C, Kuga S, Imamura T, Shimizu T, Kondo N, Morishima T. Deaths Associated with Pandemic (H1N1) 2009 among Children, Japan, 2009–2010. *Emerg Infect Dis*. 2011;17:1993-2000. IF 6.859
- 71) Macdonald MJ, Longacre MJ, Stoker SW, Kendrick MA, Thonpho A, Brown LJ, Hasan NM, Jitrapakdee S, Fukao T, Hanson MS, Fernandez LA, Odorico J. Differences between human and rodent pancreatic islets: low pyruvate carboxylase, ATP citrate lyase and pyruvate carboxylation; high glucose-stimulated acetoacetate in human pancreatic islets. *J Biol Chem*. 2011;286:18383-18396. IF 5.328
- 72) Morita H, Kaneko H, Ohnishi H, Kato Z, Kubota K, Yamamoto T, Matsui E, Teramoto T, Fukao T, Kasahara K, Kondo N. Structural property of soybean protein P34 and specific IgE response to recombinant P34 in patients with soybean allergy. *Int J Mol Med*. 2011;29:153-158. IF 1.814
- 73) Morita H, Kaneko H, Ohnishi H, Kato Z, Kondo N. Antigen-specific immune response to endotoxin-free recombinant P34. *Allergy*. 2011;66:985-986. IF 6.297
- 74) Hintze JP, Tomatsu S, Fujii T, Montaña AM, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Ishimaru T, Orii T. Comparison of liquid chromatography-tandem mass spectrometry and sandwich ELISA for determination of keratan sulfate in plasma and urine. *Biomark Insights*. 2011;6:69-78.
- 75) Tomatsu S, Montaña AM, Oikawa H, Smith M, Barrera L, Chinen Y, Thacker MM, Mackenzie WG, Suzuki Y, Orii T. Mucopolysaccharidosis type IVA (Morquio A disease): clinical review and current treatment. *Curr Pharm Biotechnol*. 2011;12:931-945. IF 3.455
- 76) Morita M, Shimozawa N, Kashiwayama Y, Suzuki Y, Imanaka T. ABC subfamily D proteins and very long chain fatty acid metabolism as novel targets in adrenoleukodystrophy. *Curr Drug Targets*. 2011;12:694-706. IF 3.061
- 77) Shaheen R, Al-Dirbashi OY, Al-Hassnan ZN, Al-Owain M, Makhshood N, Basheeri F, Seidahmed MZ, Salih MA, Faqih E, Zaidan H, Al-Sayed M, Rahbeeni Z, Al-Sheddi T, Hashem M, Kurdi W, Shimozawa N, Alkuraya FS. Clinical, biochemical and molecular characterization of peroxisomal diseases in Arabs. *Clin Genet*. 2011;79:60-70. IF 2.942
- 78) Uranishi H, Nakamura M, Nakamura H, Ikeda Y, Otsuka M, Kato Z, Tsuchiya T. Direct-injection HPLC method of measuring micafungin in human plasma using a novel hydrophobic/hydrophilic hybrid ODS column. *J Chromatogr B Analyt Technol Biomed Life Sci*. 2011;879:1029-1032. IF 2.971
- 79) Kozawa S, Honda A, Kajiwara N, Takemoto Y, Nagase T, Nikami H, Okano Y, Nakashima S, Shimozawa N. Induction of peroxisomal lipid metabolism in mice fed a high-fat diet. *Mol Med Report*. 2011;4:1157-1162. IF 0.307
- 80) Okura Y, Yamada M, Kobayashi I, Santisteban I, Arredondo-Santisteban G, Kato Z, Iguchi A, Yoshida

- M, Ohara O, Nakagawa N, Imai K, Hershfield MS, Ariga T. ADA-SCID with 'WAZA-ARI' mutations that synergistically abolished ADA protein stability. *Brit J Haematol.* 2011;153:675-676. IF 4.942
- 81) Terada T, Nunomura S, Shimokawa T, Murayama K, Era S, Kondo N, Ra C. FCεRI-induced mast cell cytokine production critically involves an aspartic acid residue (D234) in the C-terminal intracellular domain of the FcεRIβ chain. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;410:744-748. IF 2.595
- 82) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Kondo N, Hirose Y, Hoshi H. MR imaging findings of cervical lymphadenopathy in patients with Kikuchi disease. *Eur J Radiol.* 2011;80:e576-e581. IF 2.941

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：近藤直実；科学研究費補助金基盤研究(C)：アレルギー発症の遺伝環境相互関係の分子遺伝学的蛋白構造学的解明と臨床展開；平成 21-23 年度；4,550 千円(1,950：1,690：910 千円)
- 2) 研究代表者：深尾敏幸；科学研究費補助金基盤研究(C)：ケトン体代謝異常症の分子病態とその原因酵素遺伝子の発現調節機構の解明；平成 21-23 年度；4,550 千円(1,820：1,690：1,040 千円)
- 3) 研究代表者：金子英雄；科学研究補助金基盤研究(C)：抗体産生不全症における新たな病態の解明と臨床像との関連；平成 20-22 年度；4,680 千円(2,210：1,300：1,170 千円)
- 4) 研究代表者：折居建治；科学研究費補助金基盤研究(C)：小脳変性を来す先天性遺伝子修復異常症の病態，治療法に関する研究；平成 20-22 年度；4,550 千円(1,820：1,300：1,430 千円)
- 5) 研究代表者：加藤善一郎；科学研究費補助金基盤研究(C)：新規に発見されたインターロイキン 18 阻害剤等によるアレルギー免疫病態解析治療開発；平成 22-24 年度；4,420 千円(1,690：1,430：1,300 千円)
- 6) 研究代表者：松井永子；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：遺伝，環境要因の相互作用がアレルギー発症に及ぼす影響；平成 23-25 年度；4,680 千円(1,820：1,430：1,430 千円)
- 7) 研究代表者：大西秀典；科学研究費補助金若手研究(B)：構造生物学的手法による自然免疫及び IL-18 機能制御と新規免疫調節薬の開発；平成 20-22 年度；4,160 千円(2,210：1,170：780 千円)
- 8) 研究代表者：大西秀典；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：Toll-インターロイキン 1 受容体ドメインの結合特異性を利用した免疫抑制法の開発；平成 23-25 年度；4,160 千円(1,820：1,170：1,170 千円)
- 9) 研究代表者：木村 豪；科学研究費補助金若手研究(B)：アレルギー・自己免疫疾患治療開発を目指した IL-18 レセプター複合体構造解析；平成 21-23 年度；4,080 千円(2,210：960：910 千円)
- 10) 研究代表者：小関道夫；科学研究費補助金若手研究(B)：MRP1 モジュレーターとしてのロイコトリエン受容体拮抗薬の作用機序と臨床応用；平成 21-22 年度；4,160 千円(2,210：1,950 千円)
- 11) 研究代表者：小関道夫；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：MRP1 モジュレーターのスクリーニング解析方法の確立；平成 23-24 年度；4,030 千円(2,080：1,950 千円)
- 12) 研究代表者：森田秀行；科学研究費補助金若手研究(B)：構造生物学的手法を用いた大豆アレルギーの病態の解明；平成 21-23 年度；3,250 千円(1,300：1,170：780 千円)
- 13) 研究代表者：近藤直実，研究分担者：近藤直実，松井永子；厚生労働省免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業：アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化に関する研究；平成 19-21 年度；78,000 千円(24,000：27,000：27,000 千円)
- 14) 研究代表者：近藤直実，分担研究者：近藤直実，他；厚生労働省科学特別研究事業：小児の喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及び対応ガイドラインに関する研究；平成 21 年度；14,000 千円)
- 15) 研究代表者：海老澤元宏，研究分担者：近藤直実；厚生労働省免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業：食物アレルギーの発症要因の解明および耐性化に関する研究；平成 21-23 年度；5,500 千円(2,000：2,000：1,500 千円)
- 16) 研究代表者：大田 健，研究分担者：近藤直実；厚生労働省免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業：アレルギー疾患の予後改善を目指した自己管理および生活環境改善に資する治療戦略の確立に関する研究；平成 21-23 年度；3,100 千円(1,100：1,000：1,000 千円)
- 17) 研究代表者：多田 裕，研究分担者：近藤直実；厚生労働省食品の安心・安全確保推進研究事業：母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究；平成 20-21 年度；1,500 千円(750：750 千円)
- 18) 研究代表者：原 寿郎，研究分担者：近藤直実；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：原発性免疫不全症候群に関する調査研究；平成 20-22 年度；6,000 千円(2,000：2,000：2,000 千円)
- 19) 研究代表者：原 寿郎，研究分担者：近藤直実；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：原発性免疫不

- 全症候群に関する調査研究；平成 23-25 年度；1,500 千円
- 20) 研究代表者：山口清次，研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：タンデムマス等の新技術を導入した新しい新生児マスキング体制の確立に関する研究；平成 20-22 年度；500 千円(300：200 千円)
 - 21) 研究代表者：深尾敏幸，研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症，サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症形態と患者数の把握，診断指針に関する研究；平成 21 年度；24,700 千円
 - 22) 研究代表者：岡 明；研究分担者：近藤直実；厚生労働省食品の安心・安全確保推進研究事業：母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究；平成 22-23 年度；1,000 千円(500：500 千円)
 - 23) 研究代表者：平山宗宏；研究分担者：近藤直実；厚生労働省：予防接種研究班；平成 21-23 年度
 - 24) 研究代表者：深尾敏幸；研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症，HMG-CoA リアーゼ欠損症， β -ケトチオラーゼ欠損症，SCOT 欠損症)の発症形態と患者数の把握，診断治療指針に関する研究；平成 22-23 年度；32,500 千円(19,500：13,000 千円)
 - 25) 研究代表者：大西秀典；研究分担者：大西秀典，加藤善一郎；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：インターロイキン 1 受容体関連キナーゼ 4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究；平成 22-23 年度；30,550 千円(17,550：13,000 千円)
 - 26) 研究代表者：金子英雄；研究分担者：金子英雄，深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査，早期診断法の確立に関する研究；平成 22 年度；19,500 千円
 - 27) 研究代表者：水谷修紀；研究分担者：金子英雄；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：毛細血管拡張性小脳失調症の実態調査，早期診断法確立と，病態評価に関する研究；平成 22 年度；1,000 千円
 - 28) 研究代表者：衛藤義勝；研究分担者：鈴木康之；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する研究；平成 22-23 年度；5,000 千円(2,500：2,500 千円)
 - 29) 研究代表者：金子英雄；研究分担者：金子英雄，深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：遺伝子修復異常症(Bloom 症候群，Rothmund-Thomson 症候群，RAPADILINO 症候群，Baller-Gerold 症候群)の実態調査，早期診断法の確立に関する研究；平成 23 年度；13,000 千円
 - 30) 研究代表者：船戸道徳；研究分担者：船戸道徳；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：Li-Fraumeni 症候群とその類縁症候群の実態調査及び悪性腫瘍の発症予防法と治療法の確立に関する研究；平成 23 年度；6,500 千円
 - 31) 研究代表者：大西秀典；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：自然免疫系シグナル伝達タンパクの構造生物学的解析と自然免疫シグナル伝達異常症の病態解析；平成 21 年度；1,000 千円
 - 32) 研究代表者：船戸道徳；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：iPS 細胞技術を用いた L-アスパラキナーゼによる薬剤性急性膵炎の発症要因の同定；平成 22 年度；1,300 千円
 - 33) 研究代表者：大西秀典；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：自然免疫系シグナル伝達タンパクの構造生物学的機能解析を応用した創薬への展開と自然免疫シグナル伝達異常症の病態解析；平成 22 年度；1,000 千円
 - 34) 研究代表者：大西秀典；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：原発性免疫不全症，特に自然免疫異常症の迅速診断法の開発と病態解明に向けたプロテオミクス的手法の応用；平成 23 年度；1,000 千円
 - 35) 研究代表者：小関道夫；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：プロプラノロールのリンパ管内皮細胞に対する薬理作用の解析；平成 23 年度；1,000 千円
 - 36) 研究代表者：大西秀典；森永奉仕会研究奨励金：MyD88 シグナル特異的阻害剤の開発に向けた細胞膜誘導性アダプター分子のタンパク構造・機能解析；平成 21 年；600 千円
 - 37) 研究代表者：木村 豪；森永奉仕会研究奨励金：可溶性 IL-18receptor の免疫アレルギー疾患治療薬開発に向けた機能解析と，IL-18receptor 蛋白構造に基づいた低分子阻害剤の開発；平成 21 年度；600 千円
 - 38) 研究代表者：小関道夫；森永奉仕会研究奨励金：抗癌剤耐性機構の解明と多剤耐性関連蛋白質(MRP1)モジュレーターの開発；平成 22 年度；500 千円
 - 39) 研究代表者：深尾敏幸；小児医学川野賞：先天性ケトン体代謝異常症の分子病態に関する研究；平成 21 年度；1,000 千円
 - 40) 研究代表者：船戸道徳；母子保健協会小児医学研究助成：抗癌剤耐性機構の解明と多剤耐性関連蛋

- 白質(MRP1)モジュレーターの開発；平成 22 年度；1,300 千円
- 41) 研究代表者：大西秀典；岐阜医学奨励賞：「自然免疫異常症の病態解明－Toll 様受容体(TLR)4 シグナル伝達経路における MyD88 TIR ドメインの多面的相互作用の構造的基盤について」；平成 22 年度；300 千円
 - 42) 研究代表者：小関道夫；岐阜医学奨励賞：びまん性リンパ管腫症に対するプロプラノロール療法－小児難治性血管腫リンパ管腫に対する新規治療－；平成 23 年度；300 千円
 - 43) 研究代表者：小関道夫；上原記念生命科学財団研究奨励金：リンパ管腫に対するβ受容体拮抗薬療法；平成 23 年度；2,000 千円
 - 44) 研究代表者：近藤直実；独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業：食物アレルギーの病因病態の遺伝子学的およびタンパク質構造学的解明；平成 17－21 年度；113,100 千円(23,100 : 21,000 : 21,000 : 21,000 : 27,000 千円)
 - 45) 研究代表者：金子英雄；独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業：食物アレルギーの病因病態の遺伝子学的およびタンパク質構造学的解明；平成 17－21 年度；85,500 千円(19,000 : 19,000 : 19,000 : 14,500 : 14,000 千円)
 - 46) 研究代表者：木村 豪；独立行政法人科学技術振興機構シーズ発掘試験：免疫・アレルギー疾患治療を目指した可溶性ヒトインターロイキン受容体の大量生産法の構築；平成 20－21 年度；4,000 千円(2,000 : 2,000 千円)
 - 47) 研究代表者：近藤直実；独立行政法人環境保全機構委託業務：気管支喘息のテーラード的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立；平成 21－23 年度；21,450 千円(7,150 : 7,150 : 7,150 千円)
 - 48) 研究代表者：近藤直実；糧食研究会：牛乳アレルギーにおける経口免疫寛容誘導とその機序の独創的解明；平成 20－22 年度；4,800 千円(1,600 : 1,600 : 1,600 千円)
 - 49) 研究代表者：近藤直実；糧食研究会：牛乳アレルギーなどの新規治療開発と予知予防；平成 23－25 年度；1,600 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 近藤直実，金子英雄：先天性免疫不全症の原因遺伝子同定および病態形成機序の解明；平成 17－23 年度；独立行政法人理化学研究所

5. 発明・特許出願状況

- 1) 近藤直実，松井永子，金子英雄：アトピー素因を規定する遺伝子の検出方法(発明)；平成 22 年(特願 2004-532780)(特許第 4547492)
- 2) 近藤直実，金子英雄，大西秀典，森田秀行，栗本森義：大豆アレルギー免疫寛容誘導剤(特許)；平成 22 年(特願 2010-026557)
- 3) 中埜 拓，加藤晴彦，近藤直実，金子英雄，大西秀典，森田秀行：経口免疫寛容を誘導するペプチド組成物およびその調製方法(特許)；平成 22 年(特願 2010-36982)
- 4) 近藤直実，加藤善一郎，大西秀典，白川昌宏，柄尾豪人：変異導入 MyD88 蛋白による Toll 様受容体/インターロイキン 18 シグナルの特異的制御法(発明)；平成 22 年(特願 2009-525472)

6. 学会活動

1) 学会役員

近藤直実：

- 1) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会施設認定・指導責任医(～現在)
- 3) 日本小児科学会専門医(～現在)
- 4) 日本小児科学会東海地方会理事長(平成 22 年 2 月～現在)
- 5) 日本小児科学会東海地方会理事(～現在)
- 6) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)

- 7) 日本アレルギー学会常務理事(財務担当, 専門医制度担当)(平成 21 年 6 月～現在)
- 8) 日本アレルギー学会理事(～現在)
- 9) 日本アレルギー学会施設認定・指導医(～現在)
- 10) 日本アレルギー学会専門医(～現在)
- 11) 日本アレルギー学会アトピー性皮膚炎ガイドライン専門部委員(～現在)
- 12) 日本小児アレルギー学会理事(～現在)
- 13) 日本小児アレルギー学会理事長(平成 20 年 12 月～現在)
- 14) 日本小児アレルギー学会喘息治療・管理ガイドライン委員(～現在)
- 15) 日本小児アレルギー学会食物アレルギー委員(～現在)
- 16) 日本人類遺伝学会評議員(～平成 23 年)
- 17) 日本人類遺伝学会施設認定・指導医(～現在)
- 18) 日本人類遺伝学会専門医(～現在)
- 19) 日本小児遺伝医学会幹事
- 20) 日本遺伝子診療学会評議員
- 21) 日本小児保健協会評議員・支部長(～現在)
- 22) 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会理事(～現在)
- 23) 食物アレルギー研究会世話人(～現在)

深尾敏幸：

- 1) 日本先天代謝異常学会評議員(～現在)
- 2) 日本先天代謝異常学会理事(～現在)
- 3) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 4) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 5) 日本人類遺伝学会指導医(～現在)
- 6) 日本先天代謝異常学会教育担当幹事(～現在)
- 7) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 8) 日本マスキング学会評議員(～現在)
- 9) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 10) 東海臨床遺伝・代謝懇話会世話人(～現在)

金子英雄：

- 1) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 3) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 4) 日本アレルギー協会評議員(～平成 22 年 8 月)

加藤善一郎：

- 1) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 2) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 3) 日本アレルギー学会広報委員(～現在)
- 4) 日本アレルギー学会化粧品中のタンパク加水分解物の安全性に関する特別委員(～現在)
- 5) 日本小児アレルギー学会選挙管理委員(～現在)
- 6) 日本小児神経学会評議員(～現在)
- 7) 日本小児神経学会東海地方会世話人(～現在)
- 8) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 9) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)

寺本貴英：

- 1) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 2) 日本アレルギー学会代議員(～現在)

松井永子：

- 1) 日本アレルギー学会代議員(～現在)

- 2) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 3) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)

折居建治 :

- 1) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)

2) 学会開催

近藤直実(会長) :

- 1) 第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 21 年 6 月, 岐阜)
- 2) 第 247 回日本小児科学会東海地方会(平成 21 年 11 月, 岐阜)
- 3) 第 1 回東海信州免疫不全症研究会(平成 22 年 7 月, 名古屋)
- 4) 21th Congress of Interasma Japan / North Asia(第 21 回国際喘息学会日本・北アジア部会)(平成 23 年 7 月, 岐阜)
- 5) 16th Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011 (APAPARI 2011) 副会長(平成 23 年 10 月, 福岡)
- 6) 岐阜県小児保健協会総会・岐阜県こどもの健康を考えるつどい(平成 21, 22, 23 年 10 月, 岐阜)
- 7) 第 253 回日本小児科学会東海地方会(平成 23 年 10 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

近藤直実 :

- 1) Journal of Investigational Allergology & Clinical Immunology ; 編集委員(～現在)
- 2) 日本小児アレルギー学会誌 ; 編集委員長(～平成 22 年 2 月)
- 3) 日本小児アレルギー学会 ; 編集委員(～現在)
- 4) アレルギーの領域 ; 編集顧問(～現在)
- 5) International Review of Asthma ; 編集委員(～現在)
- 6) Allergy From the Nose to the Lung 誌 ; Editorial Board(編集幹事)(～現在)
- 7) アレルギー ; 編集委員長(～現在)
- 8) Pediatric Allergy for Clinicians ; 顧問(～現在)
- 9) Pediatric Allergy Immunology ; Editorial Board(～現在)

深尾敏幸 :

- 1) Case Reports in Medicine ; Editorial Board(～現在)
- 2) Intractable & Rare Diseases Research ; Editorial Board(～現在)

加藤善一郎 :

- 1) Journal of Pediatric Neurology ; Editorial Board(～平成 23 年)
- 2) Journal of Pediatric Neurology ; Asian Editor(平成 23 年～現在)

大西秀典 :

- 1) The Scientific World JOURNAL ; Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

近藤直実 :

- 1) 第 17 回小児臨床薬理・アレルギー・免疫研究会(平成 21 年 2 月, 宇都宮, 「ディベートセッション② 吸入ステロイド薬」座長)
- 2) 第 12 回中国地区小児免疫薬物療法研究会(平成 21 年 3 月, 広島, 特別講演 1 「最近の免疫異常症について」演者)
- 3) 第 112 回日本小児科学会学術集会(平成 21 年 4 月, 奈良, 総合シンポジウム 2, 子どもと喫煙 座長)
- 4) 第 112 回日本小児科学会学術集会(平成 21 年 4 月, 奈良, 乳幼児喘息の炎症ゼロレベル作戦～なぜ「炎症」がターゲットか?～ランチョンセミナー 座長)
- 5) 第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 21 年 6 月, 岐阜, 会長講演「アレルギーの患者と地球に優しい医療とその開発」演者)
- 6) 第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 21 年 6 月, 岐阜, 市民公開講座「アレルギー・喘息

- を克服するために」座長)
- 7) 第 28 回 the XXVIII Congress of the European Academy of Allergy and Clinical Immunology(平成 21 年 6 月, Warszawa, Symposium16, Introduction and Chairpersons : -Pharmacogenetics of Asthma- 座長)
 - 8) 第 33 回日本小児皮膚科学会学術大会(平成 21 年 7 月, 千葉, シンポジウム 2「乳幼児アトピー性皮膚炎の悪化因子と予防 母乳とその成分」シンポジスト)
 - 9) 第 19 回国際喘息学会日本北アジア部会(平成 21 年 7 月, 東京, ミート・ザ・エキスパート「IL-18 による Th1 型気管支喘息の発症機序と治療戦略」座長)
 - 10) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, シンポジウム 1「アレルギー疾患の治療最前線と将来展望」座長)
 - 11) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, 招請講演「The Role of Epithelium in Innate Immunity and Inflammation in Chronic Rhinosinusitis Robert P.Schleimer」座長)
 - 12) 第 41 回日本小児感染症学会学術集会(平成 21 年 11 月, 福井, 特別講演 1「腸管の免疫機構は良いものと悪いものをどのようにして見分けるのか? -最近の研究の進展- 宮坂昌之」座長)
 - 13) 第 46 回日本小児アレルギー学会(平成 21 年 12 月, 福岡, 招待講演 1「The role of respiratory viral infection in childhood asthma Hyun-Heekim」座長)
 - 14) 第 46 回日本小児アレルギー学会(平成 21 年 12 月, 福岡, シンポジウム 5「小児アレルギー研究の方向性を探る」座長)
 - 15) 第 46 回日本小児アレルギー学会(平成 21 年 12 月, 福岡, シンポジウム 5「トランスレーショナルリサーチの真の展開」演者)
 - 16) 第 18 回小児臨床薬理・アレルギー・免疫研究会(平成 22 年 1 月, 四日市, ランチョンセミナー3「乳幼児喘息コントロール評価のコツ」座長)
 - 17) 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫・アレルギー疾患等予防・治療研究事業研究報告会 (平成 22 年 1 月, 東京, 近藤班主任研究者「厚生労働科学研究費補助金 免疫・アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化研究班」演者)
 - 18) 市民呼吸器公開講座(平成 22 年 2 月, 群馬, 特別講演「子どものぜんそく -最新の知識-」演者)
 - 19) 東名古屋こどもフォーラム 2010(平成 22 年 2 月, 名古屋, 特別講演「アレルギーのテーラーメイド医療とその開発 -患者に優しい医療-」演者)
 - 20) 平成 21 年度岐阜県喘息対策実施事業研究会(平成 22 年 2 月, 岐阜, 特別講演「現在と近未来の喘息治療」演者)
 - 21) 平成 21 年度環境保健調査研究報告会(平成 22 年 3 月, 東京, 「気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立」演者)
 - 22) 第 2 回小児気道アレルギーフォーラム(平成 22 年 4 月, 名古屋, シンポジウム「長引く咳嗽をめぐる各診療科における現状と問題点 -将来の展望-」座長)
 - 23) 第 113 回日本小児科学会学術集会(平成 22 年 4 月, 岩手, 教育セミナー12「小児喘息の最新情報 -ぜんそくの重症度とコントロールテスト-」座長)
 - 24) 第 113 回日本小児科学会学術集会(平成 22 年 4 月, 岩手, 教育講演, Gelfand EW「Is Asthma in Childhood Different Than Asthma in Adults? Why do We Need Special Approaches to Asthma in Children?」座長)
 - 25) 第 22 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 22 年 5 月, 京都, 講演「喘息・アレルギーのテーラーメイド医療とその開発」演者)
 - 26) 第 22 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 22 年 5 月, 京都, 教育コース 16「小児気管支喘息ガイドライン」演者)
 - 27) 第 10 回小児科医のための喘息フォーラム(平成 22 年 5 月, 大阪, 特別講演「現在と近未来の喘息治療」演者)
 - 28) 第 12 回名古屋呼吸器研究会(平成 22 年 5 月, 名古屋, 特別講演「アレルギー免疫におけるトランスレーショナルリサーチとその臨床展開」演者)
 - 29) 第 27 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会(平成 22 年 5 月, 東京, ランチョンセミナー4「呼吸機能検査と喘息診療の新展開」座長)
 - 30) 第 12 回 QOL 研究会夏期セミナー(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演「小児科医療における QOL」演者)
 - 31) 第 1 回東海信州免疫不全症研究会(平成 22 年 7 月, 名古屋, 特別講演「先天性免疫不全症の最近の話

- 題「抗体産生不全症の診断・病態・治療」座長)
- 32) 第 20 回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成 22 年 7 月, 東京, シンポジウム 1「喘息を取り巻く諸問題」司会)
 - 33) 第 55 回山口腔アレルギー疾患研究会(平成 22 年 9 月, 山口, 特別講演 I「喘息・アレルギーのテーラーメイド医療とその開発—トランスレーショナルリサーチ—」演者)
 - 34) BABY SYMPOSIUM 2010(平成 22 年 9 月, 東京, Session「患児・保護者の視点に立ったよりよい喘息治療」総合座長)
 - 35) 城南小児アレルギー懇談会(平成 22 年 10 月, 東京, 特別講演「新型インフルエンザの臨床と重症化機序」演者)
 - 36) 厚生労働科学研究費補助金 成果発表シンポジウム(平成 22 年 10 月, 埼玉, 講演「小児の喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及び対応ガイドラインに関する研究」演者)
 - 37) The 3rd Asthma Meeting in Tokyo(平成 22 年 10 月, 東京, Session2(English)「喘息の難治化要因とその対策」座長)
 - 38) 糧食研究会研究成果報告会(平成 22 年 11 月, 東京, 特別講演「食物アレルギーの基礎と臨床と治療戦略」演者)
 - 39) The 8th Asia Pacific Congress of Allergy, Asthma and Clinical Immunology(APCAACI) / Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology (APAPARI)(2010.11, Singapore, Symposium 17: Immunotherapy for Allergic Disorders; 座長)
 - 40) 第 42 回日本小児感染症学会総会・学術集会(平成 22 年 11 月, 仙台, ミート・ザ・エキスパート 1「抗体検査—目的・結果・次にすることは?—」座長)
 - 41) 第 47 回日本小児アレルギー学会(平成 22 年 11 月, 横浜, シンポジウム 2「若いアレルギー研究者からの発信」座長)
 - 42) 第 47 回日本小児アレルギー学会(平成 22 年 11 月, 横浜, 特別講演 2「日陰者が一気に檜舞台に」座長)
 - 43) 第 60 回日本アレルギー学会秋季臨床大会(平成 22 年 11 月, 東京, 招請講演 4, Adnan Custovic「Gene-Environment Interactions in the Development of Asthma and Allergy」司会)
 - 44) 第 60 回日本アレルギー学会秋季臨床大会(平成 22 年 11 月, 東京, シンポジウム 8「新型インフルエンザと喘息について多面的に考える」座長)
 - 45) International Review of Asthma & COPD 2010 年 8 月号座談会(English) (平成 22 年 12 月, 福岡「小児喘息における長期管理」司会)
 - 46) 第 19 回小児臨床薬理・アレルギー・免疫研究会(平成 23 年 2 月, 京都, シンポジウム「食物アレルギーの診断と治療の最前線 II—食物アレルギーコンポーネントを活用した新しい診断法—」座長)
 - 47) 第 11 回食物アレルギー研究会(平成 23 年 2 月, 東京, 特別プログラム「食物アレルギー(FA)診断ガイドライン(GL)2011 と診療の進歩」座長)
 - 48) 第 8 回 JASCOM 総会(平成 23 年 3 月, 東京, 2011 年新規プロジェクト「小児 QOL 向上を目指して」演者)
 - 49) 平成 22 年度環境保健調査研究発表会(平成 23 年 3 月, 東京, 「気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立」演者)
 - 50) 第 23 回日本アレルギー学会春季臨床大会共催セミナー(平成 23 年 5 月, 千葉, 教育セミナー6「気管支喘息個別化治療に向けて—小児から成人まで—」座長)
 - 51) 第 23 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 23 年 5 月, 千葉, シンポジウム 13-2「食物アレルギーの病態解析に基づく経口免疫寛容誘導食品(食べて治す食品)開発への道」演者)
 - 52) 第 23 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 23 年 5 月, 千葉, シンポジウム 14「アレルギー性皮膚疾患について」座長)
 - 53) 第 23 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 23 年 5 月, 千葉, 会長緊急企画「アレルギー疾患患者への医療支援活動」演者)
 - 54) 第 3 回小児気道アレルギーフォーラム(平成 23 年 5 月, 福岡, セッション 1「気道過敏性の評価」座長)
 - 55) 第 28 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会(平成 23 年 6 月, 横浜, 教育セミナー3「小児気管支喘息と末梢気道」座長)
 - 56) 第 22 回日本小児科医会総会フォーラム(平成 23 年 6 月, 岐阜, 特別講演 2「アレルギー治療の現在と未来」演者)

- 57) 第 21 回国際喘息学会日本・北アジア部会-The 21th Congress of Interasma Japan / North Asia-(平成 23 年 7 月, 岐阜「治癒(根治)と予防-cure and prevention of asthma- 序」会長)
- 58) 第 114 回日本小児科学会学術集会(平成 23 年 8 月, 東京, 教育講演「アレルギー免疫療法と免疫寛容」座長)
- 59) 第 114 回日本小児科学会学術集会(平成 23 年 8 月, 東京, 教育セミナー31「慢性咳嗽の生理学と治療戦略」座長)
- 60) 第 114 回日本小児科学会学術集会(平成 23 年 8 月, 東京, 教育セミナー4「小児気管支喘息治療の最前線」演者)
- 61) 第 11 回喘息 Early Intervention 研究会(平成 23 年 10 月, 東京, 講演 1「小児気管支喘息の治療と予防の開発について」演者)
- 62) Symposium for pediatrics 2011(平成 23 年 10 月, 東京, 講演 1「ワクチン医療の現状と将来展望」座長)
- 63) 第 253 回日本小児科学会東海地方会(平成 23 年 10 月, 岐阜, 特別講演「プラダー・ウイリー症候群および関連疾患の遺伝学的診断」座長)
- 64) 第 48 回日本小児アレルギー学会 第 16 回アジア太平洋小児アレルギー呼吸器免疫学会合同学術大会 -Joint Congress of 16th Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011 (APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)-(平成 23 年 10 月, 福岡, 特別シンポジウム「東日本大震災における日本小児アレルギー学会の取り組み」座長)
- 65) 第 48 回日本小児アレルギー学会 第 16 回アジア太平洋小児アレルギー呼吸器免疫学会合同学術大会 -Joint Congress of 16th Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011 (APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)-(平成 23 年 10 月, 福岡, 合同シンポジウム 10「アレルギーに關与する遺伝子/Genetics & Mechanisms of Allergy」座長)
- 66) 第 48 回日本小児アレルギー学会 第 16 回アジア太平洋小児アレルギー呼吸器免疫学会合同学術大会 -Joint Congress of 16th Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011 (APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)-(平成 23 年 10 月, 福岡, Presidential Symposium「Future in Food Allergy」座長)
- 67) 第 61 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 23 年 10 月, 東京, イブニングシンポジウム 3「I 型アレルギーとアレルギー検査-ヒスタミン遊離試験を中心に-」座長)
- 68) 第 61 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 23 年 11 月, 東京, 招請講演 1「Novel roles for mast cells and basophils in allergy and autoimmunity」座長)
- 69) 第 61 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 23 年 11 月, 東京, ミニシンポジウム 11「アレルギーの発症」座長)
- 70) 第 61 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 23 年 11 月, 東京, イブニングシンポジウム 5「喘息治療の現状と将来展望-小児気管支喘息治療の現在から近未来へ-」演者)
- 71) 第 61 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 23 年 11 月, 東京, シンポジウム 17「免疫療法その機序と効果-免疫療法の基礎的背景-」演者)
- 72) 第 61 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 23 年 11 月, 東京, 口演「小児アレルギー1 感染・その他: 気管支喘息のテーラーメイド的発症予知の試み」演者)
- 73) 小児アレルギーマネジメントセミナー(平成 23 年 11 月, 東京「小児アレルギー疾患の現状」演者)
- 74) 石川県小児科医会(平成 23 年 11 月, 特別講演「喘息, アレルギー治療の現在から近未来へ」演者)
- 75) 第 68 回臨床アレルギー研究会(平成 23 年 11 月, 東京, 特別講演 2「アレルギー治療の現状から近未来へ-食物アレルギーを中心に-」演者)

深尾敏幸:

- 1) 11th International Congress of Inborn Errors of Metabolism(2009.08-2009.09, SanDiego, An exonic splicing mutation identified in a beta-ketothiolase-deficient patient, 演者)
- 2) 11th International Congress of Inborn Errors of Metabolism(2009.08-2009.09, SanDiego, The Time-course of blood and urinary acylcarnitine levels during initial L-carnitine supplementation to a CPT2-deficient patient, 演者)
- 3) 第 51 回日本先天代謝異常学会総会(2009 年 11 月, 東京, 教育講演 2「フローチャート式 低カルシ

ウム血症の鑑別診断 大菌恵一」座長)

- 4) 第4回大分メディエーター研究会(平成22年6月, 大分, 特別講演「小児アレルギー疾患の予知?」演者)
- 5) 第21回三重県小児内分泌代謝研究会(平成22年7月, 三重, 特別講演「ケトン体代謝とその異常症」演者)

金子英雄:

- 1) 第IV期アレルギー大学開講記念講演会&アレルギーっ子防災の集い(平成21年3月, 名古屋, 記念講演「アレルギーで困らない社会に&私たちは災害にどう立ち向かうか 将来のアレルギー治療の方向 -アレルギーにならない時代はやって来るか?-」演者)
- 2) 第145回東三河小児科医会総会・学術講演会(平成21年4月, 豊橋, 特別講演1「岐阜県における小児地域医療の取り組み」演者)
- 3) 第21回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成21年6月, 岐阜, ミニシンポジウム「自己免疫疾患・リウマチ性疾患・免疫不全症」座長)
- 4) 第59回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成21年10月, 秋田, ミニシンポジウム「食物アレルギー・薬物アレルギー 病態生理と治療 経口免疫療法を中心に 牛乳アレルギーにおける特異的経口免疫寛容の誘導法(岐大方式)」演者)
- 5) 第59回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成21年10月, 秋田, ミニシンポジウム「食物アレルギー・薬物アレルギー 病態生理と治療 経口免疫療法を中心に 牛乳アレルギーにおけるBLGによる経口免疫寛容誘導の検討」演者)
- 6) つばさの会(先天性免疫不全症の患者の会(平成21年11月, 大阪, 講演「PID(primary immunodeficiency)合併症との付き合い方について」演者)
- 7) 第18回小児臨床薬理・アレルギー・免疫研究会(平成22年1月, 四日市, ランチョンセミナー3「乳幼児喘息コントロール評価のコツ」座長)
- 8) 第20回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成22年7月, 東京, 講演「新型インフルエンザによる肺炎合併症例におけるサイトカインプロフィールと遺伝子多型の解析」演者)
- 9) The 14th International Congress of Immunology(平成22年8月, Kobe, Workshop Various expression patterns of alpha1 and alpha2 genes in IgA deficiency. -Primary immunodeficiency-; 演者)
- 10) The 8th Asia Pacific Congress of Allergy, Asthma and Clinical Immunology(APCAACI) / Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiratory and Immunology (APAPARI)(2010.11, Singapore, Expression and purification of recombinant soybean protein P34 and its clinical application; 演者)
- 11) 第60回日本アレルギー学会秋季臨床大会(平成22年11月, 東京, シンポジウム「小児喘息の新型インフルエンザによる肺炎合併症の発症機序-新型インフルエンザと喘息について多面的に考える-」演者)
- 12) 第47回日本小児アレルギー学会(平成22年11月, 横浜, シンポジウム「食物アレルギーの発症・増悪を修飾する因子-食べて治す食品(2005 岐阜)開発への展開-, アレルギー疾患の経過を修飾する因子」演者)
- 13) The 7th Congress of Asian Society for Pediatric Research(2011.03-04, Denver, Symposium 「Pathogenesis and clinical feature of primary antibody deficiencies」演者)
- 14) 第23回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成23年5月, 千葉, クリニカルレクチャー「コメディカルのための食物アレルギーの基礎」演者)
- 15) 第514回長野市小児科集団会(平成23年10月, 長野, 特別講演「小児アレルギー疾患の治療法-食物アレルギーを中心に-」演者)
- 16) Joint Congress of Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiratory and Immunology 2011 (APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)(2011.10, Fukuoka, Mini Symposium 「Development of enzymatically digested peptides for immunomodulation therapy in patients with cow's milk allergy」演者)
- 17) 第61回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成23年11月, 東京, ミニシンポジウム19「アレルギー治療薬(MS19-3): 免疫寛容誘導をめざしたカゼイン分解物の作製とその臨床応用」演者)

加藤善一郎：

- 1) 第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 21 年 6 月, 岐阜, シンポジウム「ゲノム・ポストゲノムのテーラーメイド医療への応用 免疫アレルギー治療に向けたタンパク立体構造解析」演者)
- 2) 第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 21 年 6 月, 岐阜, シンポジウム「ゲノム・ポストゲノムのテーラーメイド医療への応用」シンポジウム司会)
- 3) 第 57 回日本ウイルス学会学術集会(平成 21 年 10 月, 東京, ワークショップ「MyD88 立体構造に基づくシグナル伝達及び自然免疫不全症の分子基盤」演者)
- 4) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, シンポジウム「アレルギー疾患の治療最前線と将来展望 タンパク構造に基づいた経口免疫寛容誘導療法と創薬へのアプローチ」演者)
- 5) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, ミニシンポジウム「サイトカイン/ケモカインおよび化学伝達物質 IL-18 タンパク立体構造に基づいた低分子薬剤スクリーニング」演者)
- 6) 第 38 回日本免疫学会総会・学術集会(平成 21 年 12 月, 京都, English Symposium 「Recognition in Innate Immunity; Structural basis of signaling via MyD88」演者)
- 7) 第 46 回日本小児アレルギー学会(平成 21 年 12 月, 福岡, シンポジウム「タンパク立体構造からアプローチする免疫アレルギー病態解析・治療開発」演者)
- 8) 第 1 回東海信州免疫不全症研究会(平成 22 年 7 月, 名古屋, 講演「自己炎症性症候群・自然免疫不全症の診断・治療へ向けた分子病態解析」演者)
- 9) 第 21 回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成 23 年 7 月, 岐阜, 緊急企画「震災における喘息・アレルギーへの対応と問題点」座長)
- 10) Joint Congress of Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011 (APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)(2011.10, Fukuoka, Joint Symposium: Proteomics analysis for genetic polymorphisms associated with allergy; 演者)
- 11) The 8th Asia Pacific Congress of Allergy, Asthma and Clinical Immunology(2011.10, Fukuoka, Symposium: Gene polymorphisms in innate immune signaling pathways associated with allergic disease; 演者)

寺本貴英：

- 1) Autoinflammation 2010 6th International Congress on FMF and SAID(2010.09, Netherlands, A case report of atypical mild chronic infantile neurological cutaneous and articular syndrome showing the phenotype of mixed connective tissue disease; 演者)
- 2) 岐阜免疫アレルギー病態・予防研究会 2011(平成 23 年 2 月, 岐阜, 講演「細菌性髄膜炎を考える」演者)
- 3) 第 23 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 23 年 5 月, 千葉, 会長緊急企画「アレルギー疾患患者への医療支援活動」演者)
- 4) 第 28 回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会(平成 23 年 6 月, 横浜, 教育セミナー「乳幼児喘息の診断と治療」演者)
- 5) 第 21 回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成 23 年 7 月, 岐阜, 緊急企画「アレルギー疾患患者への医療的支援」演者)

松井永子：

- 1) 第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 21 年 6 月, 岐阜, シンポジウム 5「アレルギーの薬の患者に優しい使用法」座長)
- 2) 第 21 回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成 23 年 7 月, 岐阜, シンポジウム 2「喘息の発症予防と重症化予防：喘息発症のテーラーメイド予知予防と重症化予防」演者)
- 3) 第 48 回日本小児アレルギー学会 第 16 回アジア太平洋小児アレルギー呼吸器免疫学会合同学術大会(平成 23 年 10 月, 福岡, 教育セミナー「小児喘息の個別化予防指導および個別化治療を目指して」演者)

大西秀典：

- 1) 第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会(平成 21 年 6 月, 岐阜, ミニシンポジウム 11「自己免疫疾

- 患・リウマチ性疾患・免疫不全症 自己炎症性症候群の包括的診断フローチャート(GIFU)に基づく CINCA 症候群の診断例について」 演者)
- 2) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, ミニシンポジウム 24 「家族性寒冷自己炎症症候群(FCAS)の分子生物学的解析」 演者)
 - 3) 第 20 回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成 22 年 7 月, 東京, 講演「MyD88 アダプター様タンパク(Mal)の遺伝子多型とアレルギー疾患の関連について」 演者)
 - 4) A joint EUROMAR 2010 and 17th ISMAR Conference, a World Wide Magnetic Resonance Conference (WWMR2010)(2010.07, Italy, Structural basis for the interactions of the MyD88 TIR domain in TLR4 signaling; 演者)
 - 5) The 14th International Congress of Immunology(2010.08, Kobe, A conserved interaction mode between MyD88 and distinct membrane-sorting adaptors in TLR4 and IL-18 signaling; 演者)
 - 6) Autoinflammation 2010 6th International Congress on FMF and SAID(2010.09, Netherlands, The LPS induced enhancement of IL-1 β and IL-18 production is a useful tool for diagnosis of familial cold inflammatory syndrome (FCAS); 演者)
 - 7) The 8th Asia Pacific Congress of Allergy, Asthma and Clinical Immunology(APCAACI) / Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology (APAPARI)(2010.11, Singapore, Structural basis for the innate immune deficiency syndrome; 演者)
 - 8) 第 6 回岐阜小児アレルギー・喘息研究会(平成 23 年 6 月, 東京, 講演「自然免疫不全症の病態解明と診断手順について」 演者)
 - 9) 第 61 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 23 年 11 月, 東京, ミニシンポジウム 10(平成 23 年 11 月, 「サイトカイン・ケモカイン(MS10-4) : インターロイキン 18 シグナル伝達経路の分子生物学的解析」 演者)
 - 10) Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011 (APAPARI 2011) 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48 th JSPACI)(2011.10, Fukuoka, Symposium: Gene polymorphisms in innate immune signaling pathways associated with allergic disease; 演者)

森田秀行 :

- 1) The 19th congress of Interasma Japan/North Asia(2009.07, Gunma, B and T cell epitope analysis in soybean allergic patients - Identification of T cell epitope by in silico system; 演者)
- 2) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, ミニシンポジウム「膠原病と類似疾患 ヒトおよびウシ β カゼインの交差反応性およびアレルギー性に関する検討」 演者)
- 3) 第 46 回日本小児アレルギー学会(平成 21 年 12 月, 福岡, シンポジウム「新生児・乳児消化管アレルギーの診断法について 食物アレルギーにおける抗原特異的リンパ球幼若化反応の意義と応用」 演者)

下澤伸行 :

- 1) 59th annual meeting of American Society of Human Genetics(2009.10, Hawaii, Genotype and phenotype of Japanese patients with X-linked adrenoleukodystrophy ; 演者)
- 2) 第 51 回日本先天代謝異常学会, 第 8 回アジア先天代謝異常症シンポジウム(平成 21 年 11 月, 東京, 学会賞受賞講演「ペルオキシソーム病との 30 年 : 二人三脚の旅」 演者)
- 3) International Symposium on Epilepsy in Neurometabolic Diseases(2010.03, Taipei, Plenary Lecture; Clinical findings and diagnostic flowchart of peroxisomal disease ; 演者)
- 4) 第 52 回日本先天代謝異常学会, 第 9 回アジア先天代謝異常症シンポジウム(平成 22 年 10 月, 大阪, 講演「副腎白質ジストロフィー発症前患者に対する早期介入の取組み」 演者)
- 5) 第 52 回日本先天代謝異常学会, 第 9 回アジア先天代謝異常症シンポジウム(平成 22 年 10 月, 大阪, 「岐阜大学ペルオキシソーム病診断システムの展開—プラスマローゲンによる近位肢型点状軟骨異形成症の診断—」 演者)
- 6) 第 55 回日本人類遺伝学会(平成 22 年 10 月, 大宮, 講演「近位肢型点状軟骨異形成症におけるペルオキシソーム病診断システムの有用性—日本人初の RCDP type3 同胞例の診断解析—」 演者)

木村 豪 :

- 1) The 19th congress of Interasma Japan/North Asia(2009.07, Gunma, Purification of Human IL-18 Binding Protein: A Potent Therapeutic Molecule for Allergy ; 演者)

- 2) 第 61 回日本アレルギー学会秋季臨床大会(平成 23 年 11 月, 東京, ミニシンポジウム 19「アレルギー治療薬(MS19-1): 昆虫細胞培養系由来可溶性 ST2 による IL-33 活性阻害の検討」 演者)

川本典生:

- 1) Joint Congress of Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011(APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)(2011.10, Fukuoka, Mini Symposium 2, Food Allergy & Atopic Dermatitis: Immunological factors relating to atopic dermatitis at 3 years old; 演者)
- 2) 第 61 回日本アレルギー学会秋季臨床大会(平成 23 年 11 月, 東京, ミニシンポジウム 11「アレルギーの発症(MS11-2): 臍帯血を用いた出生コホート研究-3 歳のアトピー性皮膚炎に関わる免疫因子の検討-」 演者)

木全かおり:

- 1) 第 60 回日本アレルギー学会秋季臨床大会(平成 22 年 11 月, 東京, 講演「気管支喘息のテーラーメイドの予知および予防指導」 演者)
- 2) 第 21 回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成 23 年 7 月, 岐阜, 講演「1 歳 6 ヶ月児におけるテーラーメイドの喘息発症予防予知と予防指導」 演者)

戸松俊治:

- 1) 第 52 回日本先天代謝異常学会(平成 22 年 10 月, 大阪, 講演「Newborn screening for MPS by using Liquid tandem mass spectrometry method」 演者)

小関道夫:

- 1) 第 46 回中部日本小児科学会(平成 22 年 8 月, 金沢, 講演「びまん性リンパ管腫に対するプロプラノロール療法の試み」 演者)

久保田一生:

- 1) The 8th Asia Pacific Congress of Allergy, Asthma and Clinical Immunology (APCAACI) / Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology (APAPARI)(2010.11, Singapore, Case reports of atypical periodic autoinflammatory syndrome associated with MEFV exon3 and NLRP3 exon5 gene mutations in Japanese children; 演者)

堀 友博:

- 1) Joint Congress of Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011(APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)(2011.10, Fukuoka, In vitro analysis of a case of chronic mucocutaneous candidiasis combined with atrophic thyroiditis and autoimmune hepatitis; 演者)

山本崇裕:

- 1) Joint Congress of Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology 2011(APAPARI 2011) and 48th Annual Meeting of Japanese Society of Pediatric Allergy and Clinical Immunology (48th JSPACI)(2011.10, Fukuoka, A case report of an infant with Haemophilus influenzae meningitis with severe eczema, high serum IgE, and hypoproteinemia; 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 大西秀典: 森永奉仕会研究奨励金(平成 21 年)
- 2) 深尾敏幸: 小児医学川野賞(平成 21 年度)
- 3) 木村 豪: 森永奉仕会研究奨励金(平成 21 年度)
- 4) 船戸道徳: 母子保健協会小児医学研究助成(平成 22 年度)
- 5) 大西秀典: 岐阜医学奨励賞(平成 22 年度)
- 6) 大西秀典: Best Paper Award(8thAPCAACI&APAPARI2010)(平成 22 年度)
- 7) 大西秀典: Travel Grant Award(APAPARI2010)(平成 22 年度)

- 8) 久保田一生：Travel Grant Award(APAPARI2010) (平成 22 年度)
- 9) 小関道夫：森永奉仕会研究奨励金(平成 22 年度)
- 10) 近藤直実：岐阜新聞大賞(平成 23 年度)
- 11) 小関道夫：上原記念生命科学財団研究奨励金(平成 23 年度)
- 12) 小関道夫：岐阜医学奨励賞(平成 23 年度)
- 13) 久保田一生：ポスター大賞(第 22 回日本アレルギー学会春季臨床大会) (平成 23 年度)

9. 社会活動

近藤直実：

- 1) 日本アレルギー協会理事(～平成 22 年 5 月)
- 2) 日本アレルギー協会評議員(平成 22 年 6 月～現在)
- 3) 日本学術振興会 特別研究員等審査委員会専門委員及び国際事業委員会書面審査委員(平成 21 年度)
- 4) 岐阜県小児保健協会会長(～現在)
- 5) 岐阜県予防接種健康被害調査専門委員(～現在)
- 6) 日本小児アレルギー学会理事長(～現在)
- 7) 日本小児科学会東海地方会理事長(平成 22 年 2 月～現在)
- 8) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 22 年 12 月～23 年 11 月)
- 9) 岐阜県感染症予防対策委員会予防接種部会委員(～平成 22 年 3 月)
- 10) 岐阜県感染症予防対策委員会エイズ対策部会委員(～平成 22 年 3 月)
- 11) 岐阜県予防接種健康被害調査専門医師(～平成 22 年 3 月)
- 12) 日本アレルギー学会常務理事(財務, 専門医制担当)(平成 21 年 6 月～現在)
- 13) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 14) 日本小児科学会中部地区資格認定委員会委員(～現在)
- 15) 日本アレルギー協会誌委員会委員長(～現在)

深尾敏幸：

- 1) 岐阜県小児保健協会常任理事(～現在)
- 2) 岐阜県予防接種健康被害調査専門医師集団専門医師(～現在)
- 3) 岐阜市保育所児童の健康を考える会委員(委員長) (～現在)
- 4) 岐阜市保健医療審議会委員(～現在)

金子英雄：

- 1) 岐阜地域小児救急医療体制連絡会議委員(～現在)
- 2) 岐阜地域小児救急医療協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜圏域小児救急医療協議会(～現在)

加藤善一郎：

- 1) 岐阜圏域小児救急医療協議会(～現在)
- 2) 岐阜市小児救急医療体制運営部会委員(～現在)
- 3) 岐阜県児童虐待対応リーフレット作成検討会委員(～現在)

寺本貴英：

- 1) 岐阜県医師会予防接種委員会委員(～平成 22 年 3 月)
- 2) 岐阜市小児慢性特定疾患対策協議会委員(～平成 22 年 3 月)

松井永子：

- 1) 発達障害の早期発見にむけた乳幼児健診検討委員(平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月)
- 2) 岐阜県家庭教育推進委員(～平成 22 年 3 月)

折居建治：

- 1) 岐阜市小児慢性特定疾患対策協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県小児慢性特定疾患対策協議会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 岩砂眞一, 白木 誠: アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(海老澤班): 17(平成 21 年 2 月)
- 2) 近藤直実, 大西秀典, 川本美奈子, 森田秀行, 松井永子, 深尾敏幸, 金子英雄: アトピー性皮膚炎発症と母乳の関連, 特に母乳成分の解析に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(河野班): 33(平成 21 年 2 月)
- 3) 近藤直実: アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(近藤班): 111-113(平成 21 年 2 月)
- 4) 近藤直実: アレルギーの遺伝要因・環境要因の質と量の評価法の確立とテラーメイド治療管理ガイドラインの確立, および総括: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(近藤班): 114(平成 21 年 2 月)
- 5) 松井永子: 遺伝子情報の網羅的解析, および小児喘息におけるロイコリエン受容体拮抗薬の治療反応性予測遺伝子因子とテラーメイド治療開発: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化に関する研究 研究報告会抄録集(近藤班): 119(平成 21 年 2 月)
- 6) 近藤直実, 松井永子: 小児気管支喘息の早期診断・早期治療の指針の作成と評価および気管支喘息に関連する遺伝子解析: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(大田班): 62(平成 21 年 2 月)
- 7) 近藤直実: アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 総括・分担研究報告書(近藤班): 1-4(平成 21 年 3 月)
- 8) 近藤直実: アレルギーの遺伝要因・環境要因の質と量の評価法の確立とテラーメイド治療管理ガイドラインの確立, および総括: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 総括・分担研究報告書(近藤班): 5-7(平成 21 年 3 月)
- 9) 松井永子: 遺伝子情報の網羅的解析, および小児喘息におけるロイコリエン受容体拮抗薬の治療反応性予測遺伝子因子とテラーメイド治療開発: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 総括・分担研究報告書(近藤班): 41-43(平成 21 年 3 月)
- 10) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠: アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー性疾患の発症・進展・重症化の予知に関する研究 総括・分担研究報告書(海老澤班): 8-11(平成 21 年 3 月)
- 11) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠: アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究: 平成 18-20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究 総合研究報告書(海老澤班): 14-17(平成 21 年 3 月)
- 12) 大西秀典, 加藤善一郎, 木村 豪, 名田匡利, 徳見哲司, 長屋聡一郎, 金子英雄, 近藤直実: 化膿性細菌感染に関与する Toll 様受容体の細胞内シグナル伝達機構の構造生物学的解析: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班): 134-137(平成 21 年 3 月)
- 13) 近藤直実: 乳幼児への健康影響調査(免疫機能等). 母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業 総括・分担研究報告書(多田班): 65-67(平成 21 年 3 月)
- 14) 近藤直実: アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第 2 分冊(近藤班): 379-382(平成 21 年 3 月)
- 15) 近藤直実: アレルギーの遺伝要因・環境要因の質と量の評価法の確立とテラーメイド治療管理ガイドラインの確立, および総括: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第 2 分冊(近藤班): 383-385(平成 21 年 3 月)
- 16) 松井永子: 遺伝子情報の網羅的解析, および小児喘息におけるロイコリエン受容体拮抗薬の治療反応性予測遺伝子因子とテラーメイド治療開発: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用

- 化 研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第2分冊(近藤班):416-418(平成21年3月)
- 17) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠: アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究:平成20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 分担研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第1分冊(海老澤班):146-149(平成21年3月)
 - 18) 近藤直実, 松井永子, 川本美奈子, 大西秀典, 森田秀行:アトピー性皮膚炎発症と母乳の関連,特に母乳成分の解析に関する研究:平成20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 分担研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第1分冊(河野班):191-193(平成21年3月)
 - 19) 近藤直実:小児気管支喘息の早期診断・早期治療の指針の作成と評価および気管支喘息に関連する遺伝子解析:平成20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 分担研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第1分冊(大田班):279-281(平成21年3月)
 - 20) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄:アレルギー疾患の自己管理と個別化医療を目指した早期診断基準と早期治療法の確立及びその有効性と有害事象の評価に関する研究:平成20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 総括・分担研究報告書(大田班):41-43(平成21年3月)
 - 21) 近藤直実:アレルギー疾患の自己管理と個別化医療を目指した早期診断基準と早期治療法の確立及びその有効性と有害事象の評価に関する研究:平成18-20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 総合研究報告書(大田班):1-32(平成21年3月)
 - 22) 近藤直実, 松井永子, 川本美奈子, 大西秀典, 森田秀行:アトピー性皮膚炎発症と母乳の関連,特に母乳成分の解析に関する研究:平成20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 総括・分担研究報告書(河野班):18-20(平成21年4月)
 - 23) 近藤直実:アトピー性皮膚炎発症と母乳の関連,特に母乳成分の解析に関する研究:平成18-20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 総合研究報告書(河野班):1-28(平成21年4月)
 - 24) 近藤直実:小児喘息の治療法と自己管理のコツ:平成20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業報告書 V. 研究成果等普及啓発事業 財団法人日本予防医学協会:17-28(平成21年4月)
 - 25) 川本典生:研究実績報告書:平成20年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業報告書 II 外国への日本人研究者派遣事業 財団法人日本予防医学協会:9-14(平成21年4月)
 - 26) 近藤直実, 秋山一男, 大田 健, 赤澤 晃, 山口悦郎, 松井永子, 海老澤元宏, 藤澤隆夫, 河野陽一:アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化に関する研究:平成21年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(近藤班):43-45(平成22年2月)
 - 27) 近藤直実:アレルギーの遺伝要因・環境要因の質と量の評価法の確立とテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立,および総括 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(近藤班):46(平成22年2月)
 - 28) 松井永子:遺伝子情報の網羅的解析,および小児喘息におけるロイコトリエン受容体拮抗薬の治療反応性予測遺伝子因子とテーラーメイド治療開発 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(近藤班):51(平成22年2月)
 - 29) 近藤直実, 松井永子:小児気管支喘息の早期診断・早期治療介入の指針と評価,および喘息の重症化を予知する遺伝リスク診断の確立 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集,(大田班):196(平成22年2月)
 - 30) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行, 加藤善一郎:食物アレルギーの感作発症予知と免疫療法の開発-積極的治療法(経口免疫寛容誘導)- 平成21年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(海老澤班):124(平成22年2月)
 - 31) 近藤直実:気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 平成21年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 報告書(近藤班):3-12(平成22年2月)
 - 32) 木全かおり, 近藤直実:調査票集計及び岐阜市におけるテーラーメイド指導 平成21年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 報告書(近藤班):13-25(平成22年2月)

- 33) 松井永子：簡易遺伝子検索等による予知および QOL 調査票に関する研究. 平成 21 年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 報告書(近藤班)：26-33(平成 22 年 2 月)
- 34) 加藤善一郎, 近藤直実：QOL 調査と遺伝子検索の有機的評価へ向けた基礎的検討 平成 21 年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 報告書(近藤班)：34-38(平成 22 年 2 月)
- 35) 深尾敏幸, 川本典生：問診による遺伝要因と環境要因に基づく予知に関する研究. 平成 21 年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 報告書(近藤班)：39-48(平成 22 年 2 月)
- 36) 金子英雄, 篠田紳司, 福富 悌, 近藤直実：気管支喘息発症のテーラーメイド的予知予防に有用な遺伝子多型の検討 平成 21 年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 報告書(近藤班)：49-56(平成 22 年 2 月)
- 37) 近藤直実：総括研究報告. 平成 19-21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 総合研究報告書(近藤班)：1-6(平成 22 年 3 月)
- 38) 近藤直実：アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化. 平成 19-21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 総合研究報告書(近藤班)：51-54(平成 22 年 3 月)
- 39) 松井永子：遺伝子情報の網羅的解析, および小児喘息におけるロイコトリエン受容体拮抗薬の治療反応性予測遺伝子因子とテーラーメイド治療開発 平成 19-21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 総合研究報告書(近藤班)：101-105(平成 22 年 3 月)
- 40) 近藤直実：アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化. 総括・分担研究報告書(近藤班)：1-4(平成 22 年 3 月)
- 41) 近藤直実：アレルギーの遺伝要因・環境要因の質と量の評価法の確立とテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立, および総括 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化. 総括・分担研究報告書(近藤班)：5-8(平成 22 年 3 月)
- 42) 松井永子：遺伝子情報の網羅的解析, および小児喘息におけるロイコトリエン受容体拮抗薬の治療反応性予測遺伝子因子とテーラーメイド治療開発 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 分担研究報告書(近藤班)：49-51(平成 22 年 3 月)
- 43) 近藤直実：小児喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及びガイドラインに関する研究 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業 小児喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及びガイドラインに関する研究 総括・分担研究報告書(インフルエンザ班)：1-6(平成 22 年 3 月)
- 44) 近藤直実, 金子英雄, 松井永子：新型インフルエンザによる肺炎合併症例におけるサイトカインプロフィールの解析 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業 小児喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及びガイドラインに関する研究 総括・分担研究報告書(インフルエンザ班)：55-59(平成 22 年 3 月)
- 45) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄：新型インフルエンザによる肺炎合併症例における遺伝子多型の解析 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業 小児喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及びガイドラインに関する研究 総括・分担研究報告書(インフルエンザ班)：61-64(平成 22 年 3 月)
- 46) 近藤直実：乳幼児への健康影響調査(免疫機能等) 平成 19-21 年度厚生労働科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業 母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究 総括・分担研究報告書(多田班)：43-45(平成 22 年 3 月)
- 47) 近藤直実：乳幼児への健康影響調査(免疫機能等) 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業 母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究 総括・分担研究報告書(多田班)：25-26(平成 22 年 3 月)
- 48) 大西秀典, 寺本貴英, 加藤善一郎, 木村 豪, 金子英雄, 近藤直実：当科で経験した CIAS1 遺伝子異

- 常症 5 例の分子生物学的解析(特に IL-18 の関与について) 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班) : 81-84(平成 22 年 3 月)
- 49) 金子英雄, 船戸道徳, 久保田一生, 大西秀典, 寺本貴英, 加藤善一郎, 深尾敏幸, 近藤直実 : X 連鎖無ガンマグロブリン血症にみられた高エンドトキシン血症を伴った慢性胸膜炎の病態解析 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班) : 90-92(平成 22 年 3 月)
- 50) 近藤直実 : アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 総括研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第 1 分冊(近藤班) : 405-408(平成 22 年 3 月)
- 51) 近藤直実 : アレルギーの遺伝要因・環境要因の質と量の評価法の確立とテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立, および総括 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 分担研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第 1 分冊(近藤班) : 409-412(平成 22 年 3 月)
- 52) 松井永子 : 遺伝子情報の網羅的解析, および小児喘息におけるロイコトリエン受容体拮抗薬の治療反応性予測遺伝子因子とテーラーメイド治療開発 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化 分担研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第 1 分冊(近藤班) : 448-450(平成 22 年 3 月)
- 53) 近藤直実, 松井永子 : 小児気管支喘息の早期診断・早期治療介入の指針と評価, および喘息の重症化を予知する遺伝リスク診断の確立 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー疾患の予後改善を目指した自己管理および生活環境改善に資する治療戦略の確立に関する研究 分担研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第 3 分冊(大田班) : 212-214(平成 22 年 3 月)
- 54) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行, 加藤善一郎 : 食物アレルギーの感作発症予知と免疫療法の開発 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 食物アレルギーの発症要因の解明および耐性化に関する研究 分担研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第 3 分冊(海老澤班) : 144-146(平成 22 年 3 月)
- 55) 近藤直実, 松井永子 : 小児気管支喘息の早期診断・早期治療介入の指針と評価, および喘息の重症化を予知する遺伝リスク診断の確立 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー疾患の予後改善を目指した自己管理および生活環境改善に資する治療戦略の確立に関する研究 総括・分担研究報告書(大田班) : 42-44(平成 22 年 3 月)
- 56) 深尾敏幸 : 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班) : 1-5(平成 22 年 3 月)
- 57) 深尾敏幸 : ケトン体代謝異常症 患者数把握のための全国調査 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班) : 7-8(平成 22 年 3 月)
- 58) 深尾敏幸 : 酵素, 遺伝子診断(典型例, 非典型例, 海外の症例も含めて) 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班) : 25-29(平成 22 年 3 月)
- 59) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行, 加藤善一郎 : 食物アレルギーの感作発症予知と免疫療法の開発 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 食物アレルギーの発症要因の解明および耐性化に関する研究 総括・分担研究報告書(海老澤班) : 16-18(平成 22 年 4 月)
- 60) 近藤直実, 木全かおり, 金子英雄, 松井永子, 加藤善一郎, 深尾敏幸, 篠田紳司, 福富 悌, 藤井秀比古, 大西秀典, 寺本貴英 : 健康診査事業の効果的な実践及び改善のための評価手法に関する調査研究 平成 21 年度独立行政法人環境再生保全機構 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立に関する調査研究 大気汚染による健康影響に

- 関する総合的研究成果集(近藤班)：30-49(平成23年1月)
- 61) 近藤直実：乳幼児への健康影響調査(免疫機能等) 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業 母乳のダイオキシン類汚染の実態調査と乳幼児の発達への影響に関する研究 総括・分担研究報告書(岡班)：63-65(平成23年3月)
 - 62) 大西秀典, 安陽, 松井永子, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実：新規自然免疫不全症同定に向けたTIRAP/Mal 遺伝子変異/多型の構造生物学的機能解析 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班)：93-96(平成23年3月)
 - 63) 深尾敏幸：先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β -ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症機序と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β -ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症機序と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班)：1-5(平成23年3月)
 - 64) 深尾敏幸：ケトン体代謝異常症に関するアンケート調査に関する研究 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β -ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症機序と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班)：7-9(平成23年3月)
 - 65) 大西秀典：インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 平成22年度厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 総括・分担研究報告書(大西班)：1-18(平成23年3月)
 - 66) 加藤善一郎：IRAK4欠損症の分子構造基盤についての研究 平成22年度厚生労働省科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 インターロイキン1受容体関連キナーゼ4(IRAK4)欠損症の全国症例数把握及び早期診断スクリーニング・治療法開発に関する研究 総括・分担研究報告書(大西班)：29-33(平成23年3月)
 - 67) 大西秀典, 安陽, 松井永子, 加藤善一郎, 金子英雄, 近藤直実：新規自然免疫不全症同定に向けたTIRAP/Mal 遺伝子変異/多型の構造生物学的機能解析：平成22年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班)：93-96(平成23年3月)
 - 68) 鈴木康之, 下澤伸行：副腎白質ジストロフィーの早期診断・治療に関する研究：平成20-22年度厚生労働科学研究費 難治性疾患克服研究事業 運動失調症に関する調査研究班 総括研究報告書：11-14(平成23年3月)
 - 69) 鈴木康之, 下澤伸行：副腎白質ジストロフィーの早期診断・治療に関する研究：平成22年度厚生労働科学研究費 難治性疾患克服研究事業 運動失調症に関する調査研究班 総括研究報告書：85-87(平成23年3月)
 - 70) 辻省次, 松川敬志, 後藤順, 鈴木康之, 下澤伸行, 高野弘基, 小野寺理, 西澤正豊：副腎白質ジストロフィー患者におけるPEX5遺伝子の全塩基配列解析及び表現型における関連解析：平成22年度厚生労働科学研究費 難治性疾患克服研究事業 運動失調症に関する調査研究班 研究報告書：83-84(平成23年3月)
 - 71) 鈴木康之, 奥山虎之, 田中あけみ, 折居忠夫, 戸松俊治：ムコ多糖症IV型に対する疫学調査：平成22年度厚生労働科学研究費(臨床研究・予防・治療技術開発研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 総括・分担報告書：12-14(平成23年3月)
 - 72) 近藤直実：小児気管支喘息の早期診断・早期治療介入の指針と評価, および個別化治療介入の評価による予後改善を目指した治療戦略の確立 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー疾患の予後改善を目指した自己管理および生活環境改善に資する治療戦略の確立に関する研究 総括・分担研究報告書(大田班)：51-53(平成23年5月)
 - 73) 近藤直実：牛乳アレルギーにおける経口免疫寛容誘導とその機序の独創的解明 平成22年度研究の概要 財団法人糧食研究会(糧食研究会)：121-129(平成23年7月)
 - 74) 近藤直実：食物アレルギーの感作発症予知と免疫療法の開発-特に, 経口免疫寛容誘導- 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第2冊目(海老澤班)：154-156(平成23年9月)

- 75) 近藤直実：小児気管支喘息の早期診断・早期治療介入の指針と評価、および個別化治療介入の評価による予後改善を目指した治療戦略の確立 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第 2 冊目(大田班)：227-229(平成 23 年 9 月)

11. 報道

- 1) 近藤直実：「JPGL2008」改訂版普及を図る「総合アレルギー診療」指針も作成へ：教育医事新聞(2009 年 2 月 25 日)
- 2) 近藤直実：緊急報告！4000 万人の国民病“アレルギー”のヒミツ：関西テレビ S コンセプト(2009 年 3 月 7 日)
- 3) 近藤直実：第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会：教育医事新聞(2009 年 3 月 25 日)
- 4) 近藤直実：第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会の開催に当たって 患者と地球に優しい医療：MEDICAMENT NEWS(2009 年 5 月 5 日)
- 5) 近藤直実：緊急報告！4000 万人の国民病“アレルギー”のヒミツ：関西テレビ広島 S コンセプト(2009 年 5 月 10 日)
- 6) 松井永子：ほっとイブニングぎふ「岐阜の子育て支援～アレルギーっ子・親の会」：NHK(2009 年 5 月 20 日)
- 7) 近藤直実：患者に優しい治療追求 日本アレルギー学会 臨床大会始まる：岐阜新聞(2009 年 6 月 5 日)
- 8) 加藤善一郎，大西秀典：病原体侵入時，細胞内で真っ先に反応 伝達分子の構造特定：岐阜新聞(2009 年 6 月 10 日)
- 9) 近藤直実：第 21 回日本アレルギー学会春季臨床大会 アレルギー疾患の QOL 評価は多角的な視点で：Medical Tribune(2009 年 7 月 23, 30 日)
- 10) 森田秀行：食物アレルギー：誠広会ニュース 第 28 卷(2009 年 8 月 1 日)
- 11) 松井永子：特色ある診療内容：診療科・部門紹介－小児科－：鶴舟(2009 年 10 月 20 日)
- 12) 福富 悌：キズあり柿おいしい変身 岐阜の通所施設ドライフルーツに：朝日新聞(2009 年 11 月 19 日)
- 13) 大西秀典，寺本貴英：自己炎症性症候群適切な診断可能に－フローチャート作成－：岐阜新聞(2010 年 1 月 18 日)
- 14) 近藤直実：第 16 回アレルギー週間－アレルギーの克服に向けて－：朝日新聞(2010 年 2 月 6 日)
- 15) 近藤直実，松井永子，寺本貴英：第 16 回アレルギー週間－学校・保護者・医師の連携で楽しい学校生活－：毎日新聞(2010 年 2 月 17 日)
- 16) 近藤直実，寺本貴英：アレルギー対応であす講演と相談会 岐阜大病院で：岐阜新聞(2010 年 2 月 17 日)
- 17) 福富 悌：小学生文集「双葉の育つところに」－日々の思い素直につづる－：岐阜新聞(2010 年 3 月 12 日)
- 18) 松井永子：教えてホームドクター－子どもの発熱について－：岐阜新聞(2010 年 5 月 17 日)
- 19) 松井永子：教えてホームドクター－アレルギーがかかわる病気－：岐阜新聞(2010 年 7 月 5 日)
- 20) 松井永子：教えてホームドクター－アレルギー疾患－：岐阜新聞(2010 年 9 月 20 日)
- 21) 近藤直実，松井永子：子どもの自尊心高めて－医療従事者らが「健康を考えるつどい」－：岐阜新聞(2010 年 10 月 8 日)
- 22) 近藤直実：アレルギーを食べて治す!?新開発の食品：NHK－ゆうどきネットワーク－(2010 年 11 月 8 日)
- 23) 松井永子：教えてホームドクター－子どもの嘔吐，下痢－：岐阜新聞(2010 年 11 月 22 日)
- 24) 近藤直実：第 61 回岐阜新聞大賞 学術部門：岐阜新聞(2011 年 1 月 6 日)
- 25) 松井永子：教えてホームドクター－子どもの熱性けいれん－：岐阜新聞(2011 年 1 月 24 日)
- 26) 近藤直実：輝く功績 アレルギー治療を進化：岐阜新聞(2011 年 2 月 3 日)
- 27) 近藤直実：創刊 130 年，岐阜新聞大賞 社説：岐阜新聞(2011 年 2 月 12 日)
- 28) 近藤直実：第 61 回岐阜新聞大賞贈呈式：岐阜チャン・テレビ(2011 年 2 月 12 日)
- 29) 近藤直実：岐阜新聞大賞 7 氏に贈呈：岐阜新聞(2011 年 2 月 13 日)
- 30) 近藤直実：輝く足跡，古里に光「岐阜新聞大賞－贈呈式」：岐阜新聞(2011 年 2 月 13 日)
- 31) 近藤直実：「研究室から 大学はいま」アレルギー個別化医療開発：岐阜新聞(2011 年 2 月 15 日)
- 32) 近藤直実：あなたの処方箋 93 食物アレルギー「多くは成長につれ完治」：毎日新聞(2011 年 2 月 22 日)

- 日)
- 33) 金子英雄：病児・病後児対応で議論：岐阜新聞(2011年3月8日)
 - 34) 近藤直実, 寺本貴英：わが家で暮らす1 集中治療室 常に満床：岐阜新聞(2011年3月8日)
 - 35) 近藤直実, 寺本貴英：わが家で暮らす2 「訪問看護」が支えに：岐阜新聞(2011年3月9日)
 - 36) 近藤直実, 寺本貴英：わが家で暮らす3 重症心身障がい児の療養支援：岐阜新聞(2011年3月10日)
 - 37) 近藤直実, 寺本貴英：わが家で暮らす4 受け入れは「限定的」：岐阜新聞(2011年3月11日)
 - 38) 近藤直実, 寺本貴英：わが家で暮らす5 医療的ケア幅広がる：岐阜新聞(2011年3月15日)
 - 39) 近藤直実：アレルギー対応食「届けて」粉ミルクや離乳食, 被災地に：日本経済新聞(2011年3月21日)
 - 40) 近藤直実, 寺本貴英：被災のアレルギー児に届け「小児アレルギー学会対応粉ミルク, 県から発送」：岐阜新聞(2011年3月26日)
 - 41) 鈴木康之：書評「ワシントン小児科マニュアル」：医学界新聞 2923号(2011年4月4日)
 - 42) 近藤直実, 寺本貴英：被災地からのSOS アレルギー対応食を：スーパーニュースアンカー. 関西テレビ(2011年4月7日)
 - 43) 小関道夫, 深尾敏幸, 近藤直実：リンパ管腫, 高血圧薬で抑制「岐阜大が世界初確認」：岐阜新聞(2011年4月16日)
 - 44) 近藤直実：新型インフルエンザ対応「手引き」作成：教育医事新聞(2011年4月25日)
 - 45) 近藤直実：アレルギー児へ支援(大震災)日本小児アレルギー学会現地へ食品や医薬品：教育医事新聞(2011年4月25日)
 - 46) 近藤直実：食物アレルギーに対する新たな治療戦略 医学講座：ラジオ NIKKEI(2011年5月12日)
 - 47) 松井永子：教えてホームドクターー自閉症や学習障害ー：岐阜新聞(2011年5月30日)
 - 48) 近藤直実：子どものアレルギー「災害時の対応紹介」：河北新報(2011年6月5日)
 - 49) 近藤直実：最新ぜんそく治療報告 岐阜市国際喘息学会が部会：岐阜新聞(2011年7月2日)
 - 50) 松井永子：教えてホームドクターー子どもの肥満ー：岐阜新聞(2011年8月8日)
 - 51) 近藤直実：気管支喘息に合併するアレルギー性鼻炎の評価と喘息コントロールについて(小児編)：infoAllergy(2011年9月1日)
 - 52) 松井永子：教えてホームドクターー夜尿症(おねしょ)についてー：岐阜新聞(2011年10月17日)
 - 53) 大西秀典, 寺本貴英, 近藤直実：呼吸器科 THE NEXT 第14回原発性免疫不全症(MyD88欠損症)：m3.com(2011年11月14日)
 - 54) 深尾敏幸：病院の実力 遺伝カウンセリング「情報提供し治療サポート」：読売新聞(2011年12月4日)

12. 自己評価

評価

研究業績と世界への発信, 競合的中～大型研究費獲得, 若手育成などそれなりに評価できる。今後も引き続き研究成果と業績の更なる維持, 向上が望まれる。そして, 社会, 世界への貢献をさらにすすめる。次世代を担う若手研究者, 若手小児科医の育成に力を入れていることは評価に値する。さらに強化したい。

現状の問題点及びその対応策

最大の問題点は研究室のスペースが狭小であったが2004年4月の医学部移転統合により緩和された。大学院の入学は毎年4～5人で, 小児病態学の大学院生は全学年あわせて常に20人前後であったが, 現在は減少している。全領域をカバーする小児科の臨床からわき出る疑問とテーマの全てに着手することは困難であるが, アレルギー・免疫・代謝に加えて神経, 環境や感染と遺伝子のような新たなプロジェクトを立ち上げて進めている。

今後の展望

現在のテーマと方向性の更なる充実と拡大。さらに, これらの成果を医療に直接的に応用する(トランスレーショナルリサーチ)。現在までの研究の主な流れ(図1)と全容(図2)と新聞報道(図3)を図示する。“地球と地域に向けた優れた医学研究者とよりよい医師の育成と実践”と“患者に優しい医療”を目標にしている。

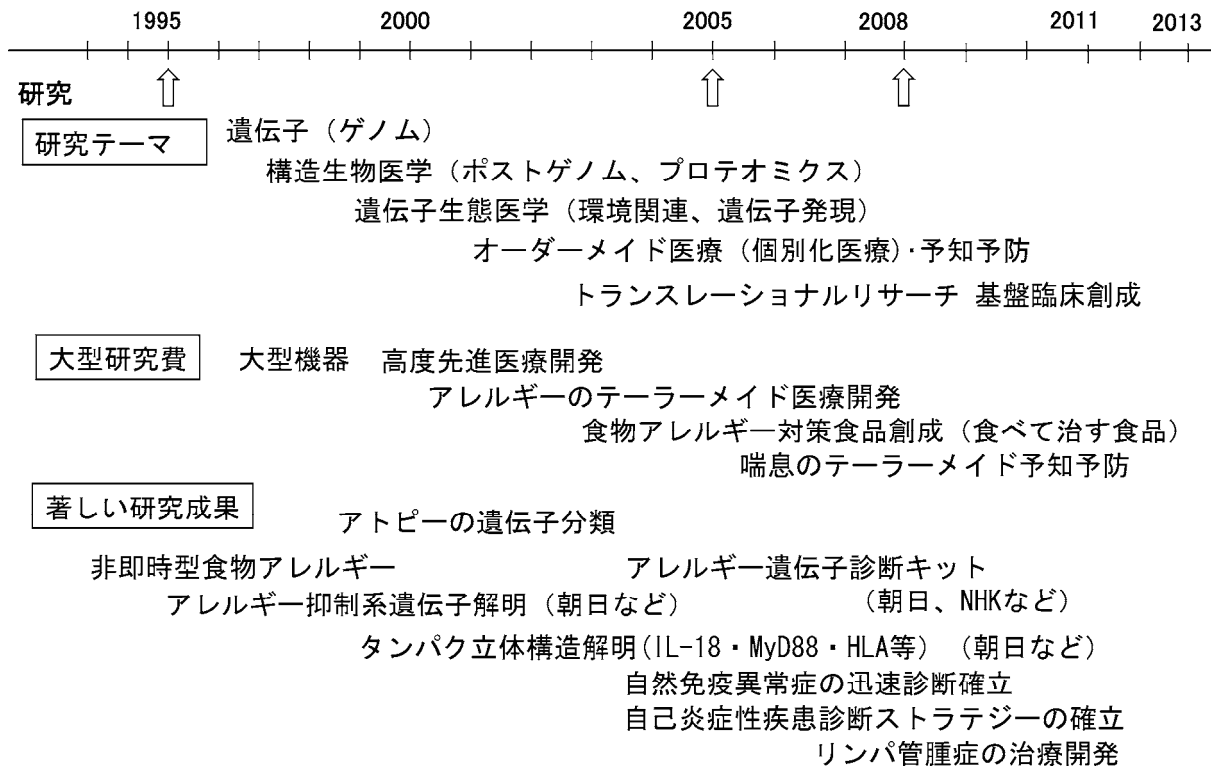
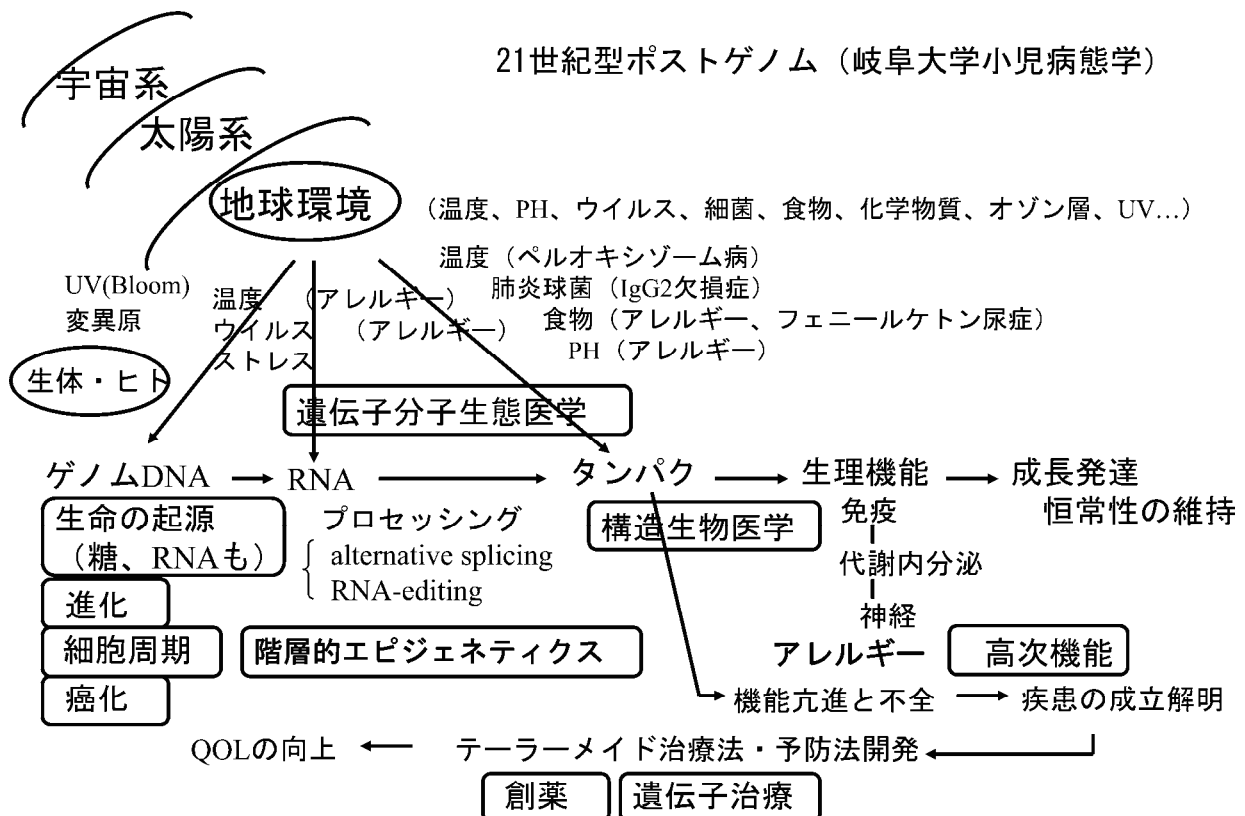


図1 現在までの研究の主な流れ



designed by N.Kondo 2002.1. 岐阜大学小児科

図2 研究の全容

(8) 病態情報解析医学分野

1. 研究の概要

1) スタチン製剤の副作用としての筋障害

コレステロール低下薬である HMGCoA reductase 阻害剤であるいわゆるスタチン系薬剤の副作用である筋障害と遺伝子多型との関連性について検討し、さらに副作用発症機序の解明。

2) 肝炎発症機序

CH-B (B 型慢性肝炎) における Impaired CTL proliferation の機序の解明及び IDO の肝炎発症における役割。

3) NASH の発症機序について

動物モデルを用いて、分子生物学的見地からアポトーシス、オートファジーおよび線維化を評価。

4) 心筋細胞におけるオートファジー

オートファジーの役割と心機能に与える影響を絶食および心筋梗塞モデルを用いて検討。

5) プロテオーム解析

種々疾患における血清を解析し、病態を反映する新しいマーカーを見出し同定する。

2. 名簿

教授：	清島 満	Mitsuru Seishima
講師(留学中)：	伊藤弘康	Hiroyasu Ito
臨床講師：	大澤陽介	Yosuke Osawa
臨床講師(併任)：	金森寛充	Hiromitsu Kanamori
臨床講師：	森 一郎	Ichiro Mori

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 清島 満. 臨床検査：内藤通孝編. 病理学入門, 京都：昭和堂；2011年：52-56.

著書 (欧文)

- 1) Osawa, Y, Seki E, Brenner DA. Apoptosis in liver injury and liver diseases. In: Xiao-Ming, Yin-Zheng Dong, ed. Essentials of apoptosis-apoptosis in mammalian physiology and pathogenesis, 2th ed. Humana Press; 2009:547-564.

総説 (和文)

- 1) 篠田貢一, 藤井徹也. からだのしくみと考える看護技術「生体機能にかかわる技術(1)心臓の構造と正常心電図」, 看護技術 2009年; 55号 No.1: 6-8.
- 2) 篠田貢一, 藤井徹也. からだのしくみと考える看護技術「生体機能にかかわる技術(2)心筋梗塞時の心電図波形」, 看護技術 2009年; 55号 No.2: 6-8.
- 3) 篠田貢一, 藤井徹也. からだのしくみと考える看護技術「生体機能にかかわる技術(4)高血圧」, 看護技術 2009年; 55号 No.4: 6-8.
- 4) 渡邊恒夫, 伊藤弘康, 松岡敏男, 竹村正男, 清島 満. 末梢神経の超音波検査：超音波検査による糖尿病患者の正中神経計測の有用性について, 超音波テクノ 2009年; 21号: 105-110.
- 5) 星 雅人. 顕微鏡検査のコツ-臨床に役立つ形態学(結晶成分の同定) 検査と技術 2009年; 37号: 1023-1027.
- 6) 清島 満, 伊藤弘康. リポ蛋白X, 広範囲, 血液・尿化学検査 免疫学的検査(第7版) 2 日本臨床 2010年; 68巻(増刊号1): 46-49.
- 7) 清島 満, 大瀧博文, 前田悟司. リポ蛋白(a)とそのフェノタイプ, 広範囲, 血液・尿化学検査 免疫学的検査(第7版) 2 日本臨床 2010年; 68巻(増刊号1): 50-53.
- 8) 前田悟司, 高崎昭彦, 清島 満. Lipid-poor アポリポ蛋白 A-I, グリコアポリポ蛋白 A-I, 広範囲血液・尿化学検査 免疫学的検査(第7版) 2 日本臨床 2010年; 68巻(増刊号1): 90-93.
- 9) 竹村正男, 斎藤邦明, 佐藤正夫, 清島 満. 可溶性 TNF レセプター I, II 広範囲 血液・尿化学検査 免疫学的検査(第7版) 4 日本臨床 2010年; 68巻(増刊号1): 183-186.
- 10) 清島 満, 金森寛充, 服部高幸. Lp(a) [リポ蛋白(a)], これだけは知っておきたい検査のポイント第8集 Medicina 2010年; 47巻(Suppl): 254-256.
- 11) 竹村正男, 斎藤邦明, 佐藤正夫, 清島 満. インターロイキン 2, 関節リウマチ(第2版)日本臨床 2010年; 168巻(増刊号5): 10-114.

総説 (欧文)

- 1) Takemura G, Nakagawa M, Kanamori H, Minatoguchi S, Fujiwara H. Benefits of reperfusion beyond

infarct size limitation. *Cardiovasc Res.* 2009;83:269-276.

- 2) Ito H, Ando K, Ishikawa T, Seishima M. Role of tumor necrosis factor- α in acute hepatitis B virus Infection. *Inflammation and Regeneration.* 2010;30:445-450.
- 3) Ito H, Seishima M. Regulation of the induction and function of cytotoxic T lymphocytes by natural killer T cell. *J Biomed Biotechnol.* 2010;641757:8 pages.

原著 (和文)

- 1) 柏森裕三, 中村雄一, 中嶋克行, 岸 浩司, 花田寿郎, 齊藤和典, 松井寛史, 三池 彰, 大和 隆, 根占哲也, 横田敦子, 増本道子, 堀田多恵子, 小野美由紀, 青木芳和, 清島 満, 櫻林郁之介. 血清中 HDL-コレステロールおよび LDL-コレステロール測定の報告法-実試料の測定値を評価するための二次基準測定法-, *臨床化学* 2009年; 38巻: 308-331.
- 2) 篠田智美, 竹村正男, 平林香奈子, 小林沙織, 松岡加菜, 服部高幸, 古田伸行, 丸本雅夫, 伊藤弘康, 清島満. 高速液体クロマトグラフィ(HPLC)を用いた血中ゾニサミド濃度測定法の検討, *日本臨床検査自動化学会誌* 2009年; 34巻: 345-348.
- 3) 古田伸行, 太田浩敏, 服部高幸, 小池紀子, 星 雅人, 丸本雅夫, 竹村正男, 伊藤弘康, 前田悟司, 齊藤邦明, 清島 満, 当検査部におけるコストマネージメントについて, *日本臨床検査自動化学会誌* 2009年; 34巻: 349-353.
- 4) 足立真理子, 星 雅人, 服部高幸, 小林沙織, 牛丸星子, 古田伸行, 丸本雅夫, 竹村正男, 金森寛充, 大澤陽介, 伊藤弘康, 清島 満. 全自動血液凝固分析装置 CA-7000, CS2000i, COAPRESTA2000, STA-R Evo の比較検討, *日本臨床検査自動化学会誌* 2009年; 34巻: 365-370.
- 5) 小林沙織, 星 雅人, 稲垣勇夫, 服部高幸, 牛丸星子, 大橋葉津希, 古田伸行, 丸本雅夫, 竹村正男, 伊藤弘康, 清島 満. CKD(慢性腎臓病)における尿蛋白/クレアチニン比と尿沈渣の有用性, *臨床病理* 2009年; 57巻: 213-220.
- 6) 石田秀和, 古田伸行, 小池紀子, 小林沙織, 長屋昌幸, 竹村正男, 金森寛充, 伊藤弘康, 清島 満. 自動分析装置の2項目分析機能を利用した試薬“デュアル CHO T&L「生検」”の基礎的検討, *医療と検査機器・試薬* 2009年; 32巻: 653-658.
- 7) 小林沙織, 星 雅人, 牛丸星子, 大橋葉津希, 服部高幸, 古田伸行, 竹村正男, 稲垣勇夫. 早期 CKD における尿沈渣成分と生化学成分の関連性, *医学検査* 2010年; 59巻: 694-698.
- 8) 照井裕美, 川瀬晴美, 金森寛充, 横山明孝, 加藤義弘, 松岡敏男, 清島 満. 呼吸機能検査中の不整脈の検討, *医学検査* 2011年; 60巻: 767-772.
- 9) 足立真理子, 星 雅人, 牛丸星子, 大橋葉津希, 服部高幸, 林 麻実, 稲垣勇夫, 竹村正男, 伊藤弘康, 清島満. 多項目自動血球分析装置 XE-5000 による体腔液測定の検討-夜間・休日への取り組み-, *岐阜県臨床衛生検査技師会誌* 2011年; 40巻: 6-10.
- 10) 星 雅人, 井上里奈, 宮崎 崇, 太田浩敏, 竹村正男, 稲垣勇夫, 伊藤弘康, 清島 満. 尿沈渣中にみられる Sternheimer 染色陽性細菌の臨床的意義, *医学検査* 2011年; 60巻: 741-745.
- 11) 石田秀和, 星雅人, 下條千枝, 小池紀子, 古田伸行, 竹村正男, 金森寛充, 清島 満. 高感度化学発光を用いた全自動免疫測定装置4機種における HBs 抗原, HCV 抗体測定試薬の比較検討, *日本臨床検査自動化学会誌* 2011年; 36巻: 74-80.
- 12) 石田秀和, 下條千枝, 小池紀子, 古田伸行, 竹村正男. HISCL-2000i による高感度フェリチン測定試薬の基礎的検討, *岐阜県臨床検査技師会誌* 2011年; 40巻: 4-5.
- 13) 篠田貢一, 鳥居 亮, 林 省吾, 太田慶一, 清島 満, 浅本 憲, 中野 隆. 心房細動における心耳血栓についての一考察 ~左心耳と右心耳の比較~, *日本解剖学雑誌* 2011年; 86-53.
- 14) 佐藤正夫, 四戸隆基, 竹村正男, 田中 領, 清水克時. 関節リウマチに対するアダリムマブの使用経験, *中部リウマチ* 2011年; 41巻: 18-19.
- 15) 佐藤正夫, 四戸隆基, 竹村正男, 田中 領, 清水克時. エタネルセプトで加療中にニューモシスティス肺炎を生じた一例, *中部リウマチ* 2011年; 41巻: 24-25.

原著 (欧文)

- 1) Ito H, Ando K, Ishikawa T, Saito K, Takemura M, Imawari M, Moriwaki H, Seishima M. Role of TNF- α produced by nonantigen-specific cells in a fulminant hepatitis mouse model. *J Immunol.* 2009;182:391-397. IF 5.745
- 2) Hoshi M, Ito H, Fujigaki H, Takemura M, Takahashi T, Tomita E, Ohyama M, Tanaka R, Saito K, Seishima M. Indoleamine 2,3-dioxygenase is highly expressed in human adult T-cell leukemia/lymphoma and chemotherapy changes tryptophan catabolism in serum and reduced activity. *Leuk Res.* 2009;33:39-45. IF 2.555
- 3) Li L, Okada H, Takemura G, Esaki M, Kobayashi H, Kanamori H, Kawamura I, Maruyama R, Fujiwara T, Fujiwara H, Tabata Y, Minatoguchi S. Sustained release of erythropoietin using biodegradable gelatin hydrogel microspheres persistently improves lower leg ischemia. *J Am Coll Cardiol.* 2009;53:2378-2388. IF 14.293
- 4) Iwamoto N, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hara A, Taguchi A, Saito K, Takemura M, Imawari M, Moriwaki H, Seishima M. Upregulation of indoleamine 2,3-dioxygenase in hepatocyte during acute hepatitis caused by hepatitis B virus-specific cytotoxic T lymphocytes in vivo. *Liver Int.* 2009;29:277-283. IF 3.840

- 5) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hoshi M, Tanaka R, Osawa Y, Yokochi T, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Interaction between LPS-induced NO production andIDO activity in mouse peritoneal cells in the presence of activated Valpha14 NKT cells. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009;389:229-234. IF 2.595
- 6) Goto K, Takemura G, Maruyama R, Nakagawa M, Tsujimoto A, Kanamori H, Li L, Kawamura I, Kawaguchi T, Takeyama T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Unique mode of cell death in freshly isolated adult rat ventricular cardiomyocytes exposed to hydrogen peroxide. *Med Mol Morphol.* 2009;42:92-101. IF 1.513
- 7) Yasuda Y, Shimizu M, Sakai H, Iwasa J, Kubota M, Adachi S, Osawa Y, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate prevents carbon tetrachloride-induced rat hepatic fibrosis by inhibiting the expression of the PDGFR β and IGF-1R. *Chem Biol Interact.* 2009;182:159-164. IF 5.838
- 8) Ohashi T, Tanabe J, Ishikawa T, Okumura A, Sato K, Ayada M, Hotta N, Kuzuya T, Ito H, Nakao H, Yoneda M, Kakumu S. Inflammatory cytokines modulate chemokine production patterns of HepG2 cells toward initially inclined direction. *Hepatol Res.* 2009;39:510-519. IF 1.857
- 9) Hoshi M, Saito K, Murakami Y, Taguchi A, Fujigaki H, Tanaka R, Takemura M, Ito H, Hara A, Seishima M. Marked increases in hippocampal neuron indoleamine 2, 3-dioxygenase via IFN- γ -independent pathway following transient global ischemia in mouse. *Neurosci Res.* 2009;63:194-198. IF 2.096
- 10) Kodama, Y, Taura K, Miura K, Schnabl B, Osawa Y, Brenner DA. Antiapoptotic effect of c-Jun N-terminal Kinase-1 through Mcl-1 stabilization in TNF-induced hepatocyte apoptosis. *Gastroenterology.* 2009;136:1423-1434. IF 12.030
- 11) Nemoto S, Nakamura M, Osawa Y, Kono S, Itoh Y, Okano Y, Murate T, Hara A, Ueda H, Nozawa Y, Banno Y. Sphingosine kinase isoforms regulate oxaliplatin sensitivity of human colon cancer cells through ceramide accumulation and Akt activation. *J Biol Chem.* 2009;284:10422-10432. IF 5.328
- 12) Tsukada Y, Nagaki M, Suetsugu A, Osawa Y, Moriwaki H. Extracellular matrix is required for the survival and differentiation of transplanted hepatic progenitor cells. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009;381:733-737. IF 2.595
- 13) Li L, Okada H, Takemura G, Kosai K, Kanamori H, Esaki M, Takahashi T, Goto K, Tsujimoto A, Maruyama R, Kawamura I, Kawaguchi T, Takeyama T, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Postinfarction gene therapy with adenoviral vector expressing decorin mitigates cardiac remodeling and dysfunction. *Am J Physiol Heart Circ Physiol.* 2009;297:H1504-1513. IF 3.881
- 14) Kanamori H, Takemura G, Maruyama R, Goto K, Tsujimoto A, Ogino A, Li L, Kawamura I, Takeyama T, Kawaguchi T, Nagashima K, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Functional significance and morphological characterization of starvation-induced autophagy in the adult heart. *Am J Pathol.* 2009;174:1705-1714. IF 5.224
- 15) Watanabe T, Ito H, Morita A, Uno Y, Nishimura T, Kawase H, Kato Y, Matsuoka T, Takeda J, Seishima M. Sonographic evaluation of the median nerve in diabetic patients: comparison with nerve conduction studies. *J Ultrasound Med.* 2009;28:727-734. IF 1.246
- 16) Hoshi M, Ito H, Fujigaki H, Takemura M, Takahashi T, Tomita E, Ohyama M, Tanaka R, Ohtaki H, Saito K, Seishima M. Changes in serum tryptophan catabolism as an indicator of disease activity in adult T-cell leukemia/lymphoma. *Leuk Lymphoma.* 2009;17:1-3. IF 2.492
- 17) Takemura G, Kanamori H, Goto K, Maruyama R, Tsujimoto A, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Autophagy maintains cardiac function in the starved adult. *Autophagy.* 2009;5:1034-1036. IF 6.643
- 18) Ohtaki H, Ohkusu K, Sawamura H, Ohta H, Inoue R, Iwasa J, Ito H, Murakami N, Ezaki T, Moriwaki H, Seishima M. First report of acute cholecystitis with sepsis caused by *Cellulomonas denverensis*. *J Clin Microbiol.* 2009;47:3391-3393. IF 4.220
- 19) Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Yamada T, Sawada M, Goto H, Fukuno K, Kitagawa J, Yasuda I, Katsumura N, Takemura M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble Fas level determines clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP and R-CHOP. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2009;135:1421-1428. IF 2.485
- 20) Hattori T, Saito K, Takemura M, Ito H, Ohta H, Wada H, Sei Y, Kawamura M, Seishima M. Statin-induced Ca²⁺ release was increased in B lymphocytes in patients who showed elevated serum creatine kinase during statin treatment. *J Atheroscler Thromb.* 2009;16:870-877. IF 2.293
- 21) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Saito K, Imawari M, Yokochi T, Moriwaki H, Seishima M. V α 14 NKT cells activated by alpha-galactosylceramide augment lipopolysaccharide-induced nitric oxide production in mouse intrahepatic lymphocytes. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009;378:579-583. IF 2.595
- 22) Osawa Y, Seki E, Adachi M, Suetsugu A, Ito H, Moriwaki H, Seishima M, Nagaki M. Role of acid sphingomyelinase of Kupffer cells in cholestatic liver injury in mice. *Hepatology.* 2010;51:237-245. IF 10.885
- 23) Tanaka R, Takemura M, Sato M, Yamada Y, Nakagawa T, Horibe T, Hoshi M, Otaki H, Ito H, Seishima M, Shimizu K. Comparison of chemiluminescence enzyme immunoassay (CLEIA) with ELISA for the determination of anti-cyclic citrullinated peptide antibodies. *Clin Chim Acta.* 2010;411:22-25. IF 2.389
- 24) Kimura A, Sakurai T, Koumura A, Yamada M, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Tanaka R, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. High prevalence of autoantibodies against phosphoglycerate mutase 1 in patients with autoimmune central nervous system diseases. *J Neuroimmunol.* 2010;219:105-108. IF 2.901
- 25) Yoshikawa T, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Hoshi M, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Ito H,

- Takemura M, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum concentration of L-kynurenine predicts the clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Eur J Haematol.* 2010;84:304-309. IF 2.785
- 26) Tomita E, Ando K, Sugihara JI, Nishigaki Y, Yamada T, Ando R, Takemura M, Seishima M. Advantage of IFN- $\beta/\alpha 2b$ same-day administration for ribavirin-intolerant patients with chronic hepatitis C. *Hepatology Res.* 2010;40:261-268. IF 1.857
- 27) Watanabe T, Ito H, Sekine A, Katano Y, Nishimura T, Kato Y, Takeda J, Seishima M, Matsuoka T. Sonographic evaluation of the peripheral nerve in diabetic patients: the relationship between nerve conduction studies, echo intensity, and cross-sectional area. *J Ultrasound Med.* 2010;29:697-708. IF 1.246
- 28) Kimura A, Kanoh Y, Sakurai T, Koumura A, Yamada M, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. Antibodies in patients with neuropsychiatric systemic lupus erythematosus. *Neurology.* 2010;74:1372-1379. IF 8.017
- 29) Suzuki A, Imanishi Y, Nakano S, Niwa T, Ohmori T, Shirai K, Yoshida S, Furuta N, Takemura M, Ito H, Ieiri I, Seishima M, Ogura S, Itoh Y. Usefulness of serum cystatin C to determine the dose of vancomycin in critically ill patients. *J Pharm Pharmacol.* 2010;62:901-907. IF 1.918
- 30) Hoshi M, Saito K, Hara A, Taguchi A, Ohtaki H, Tanaka R, Fujigaki H, Osawa Y, Takemura M, Matsunami H, Ito H, Seishima M. The absence of IDO upregulates type I IFN production, resulting in suppression of viral replication in the retrovirus-infected mouse. *J Immunol.* 2010;185:3305-3312. IF 5.745
- 31) Ito H, Hoshi M, Ohtaki H, Taguchi A, Ando K, Ishikawa T, Osawa Y, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Ability of IDO to attenuate liver injury in alpha-galactosylceramide induced hepatitis model. *J Immunol.* 2010;185:4554-4560. IF 5.745
- 32) Kawamura I, Takemura G, Kanamori H, Takeyama T, Kawaguchi T, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Watanabe T, Shiraki T, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Repeated phlebotomy augments angiogenesis to improve blood flow in murine ischemic legs. *Am J Physiol Heart Circ Physiol.* 2010;299:H372-378. IF 3.880
- 33) Miyata S, Takemura G, Kosai K, Takahashi T, Esaki M, Li L, Kanamori H, Maruyama R, Goto K, Tsujimoto A, Takeyama T, Kawaguchi T, Ohno T, Nishigaki K, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Anti-Fas gene therapy prevents doxorubicin-induced acute cardiotoxicity through mechanisms independent of apoptosis. *Am J Pathol.* 2010;176:687-698. IF 5.224
- 34) Ogino A, Takemura G, Kawasaki M, Tsujimoto A, Kanamori H, Li L, Goto G, Maruyama R, Kawamura I, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Moriguchi Y, Saito H, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Erythropoietin receptor signaling mitigates renal dysfunction-associated heart failure by mechanisms unrelated to relief of anemia. *J Am Coll Cardiol.* 2010;56:1949-1958. IF 14.293
- 35) Osawa Y, Seki E, Kodama Y, Suetsugu A, Miura K, Adachi M, Ito H, Shiratori Y, Banno Y, Olefsky JM, Nagaki M, Moriwaki H, Brenner DA, Seishima M. Acid sphingomyelinase regulates glucose and lipid metabolism in hepatocytes through AKT activation and AMP-activated protein kinase suppression. *FASEB J.* 2011;25:1133-1144. IF 6.515
- 36) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Hoshi M, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Shimizu M, Ito H, Saito K, Hirose Y, Yamada T, Takahashi T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase in tumor tissue indicates prognosis in patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Ann Hematol.* 2011;90:409-416. IF 2.688
- 37) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Maruyama R, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. The role of autophagy emerging in postinfarction cardiac remodeling. *Cardiovasc Res.* 2011;91:330-339. IF 6.051
- 38) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Maruyama R, Ono K, Nagao K, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Kawasaki M, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Autophagy limits acute myocardial infarction induced by permanent coronary artery occlusion. *Am J Physiol Heart Circ Physiol.* 2011;300:2261-2271. IF 3.881
- 39) Goto N, Tsurumi H, Kasahara S, Kanemura N, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Sawada M, Yamada T, Takemura M, Seishima M, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum interleukin-18 level is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP or R-CHOP regimens. *Eur J Haematol.* 2011;87:217-227. IF 2.785
- 40) Osawa Y, Kanamori H, Seki E, Hoshi M, Ohtaki H, Yasuda Y, Ito H, Suetsugu A, Nagaki M, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. L-Tryptophan-mediated enhancement of susceptibility to nonalcoholic fatty liver disease is dependent on the mammalian target of rapamycin. *J Biol Chem.* 2011;286:34800-34808. IF 5.328

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：清島 満，研究分担者：伊藤弘康，金森寛光，大澤陽介，斉藤邦明；科学研究費補助金基盤研究(B)：スタチン製剤による筋障害予防のためのスクリーニング法と遺伝子解析；平成21-24年度；15,950千円(5,850：5,000：3,100：2,000千円)

- 2) 研究代表者：大澤陽介；科学研究費補助金若手研究(B)：慢性肝障害におけるクッパー細胞の役割に関する研究；平成 21-22 年度；3,810 千円(2,210：1,600 千円)
- 3) 研究代表者：金森寛充；科学研究費補助金若手研究(B)：オートファジー制御による新しい心不全治療法の開発；平成 21-22 年度；3,800 千円(2,600：1,200 千円)
- 4) 研究代表者：竹村正男；科学研究費補助金奨励研究：ガン細胞周期に対応したオーダーメイド化学療法の有効性に関する研究；平成 21 年度；560 千円
- 5) 研究代表者：伊藤弘康；第 27 回先進医薬研究振興財団血液医学分野海外留学助成金：免疫学的制御能を有すオリゴデオキシヌクレオチドを用いた肝疾患への新たな治療応用；平成 21 年度；2,000 千円
- 6) 研究代表者：大澤陽介；JSH Award 海外研修スポンサーシップ：胆管結紮誘導性慢性肝障害モデルにおける肝細胞抗アポトーシス獲得機序の検討；平成 21 年度；300 千円
- 7) 研究代表者：竹村正男；科学研究費補助金奨励研究：RA 患者における生物製剤治療の二次無効症例に対する臨床検査医学的研究；平成 22 年度；550 千円
- 8) 研究代表者：大瀧博文；科学研究費補助金特別研究員奨励費：肝障害におけるトリプトファン代謝を中心とした免疫学的病態の解明；平成 22 年度；700 千円
- 9) 研究代表者：大瀧博文；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：急性肝炎マウスモデルにおけるトリプトファン代謝による免疫機構への関与；平成 22 年度；1,000 千円
- 10) 研究代表者：星 雅人；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：マウスウイルス性心筋炎モデルにおけるトリプトファン代謝の解明-Encephalomyocarditis virus 感染における Indoleamine 2,3-dioxygenase の役割-；平成 22 年度；1,000 千円
- 11) 研究代表者：大瀧博文；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：ウイルス性心筋炎における細菌二次感染マウスモデルの確立およびその病態解析；平成 23 年度；1,000 千円
- 12) 研究代表者：大澤陽介；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：トリプトファンにおける内臓脂肪蓄積および脂肪肝炎発症のメカニズムに関する研究；平成 23 年度；1,000 千円
- 13) 研究代表者：金森寛充；大学活性化経費：心筋オートファジー制御による左室リモデリング改善効果と治療応用；平成 23 年度；1,000 千円
- 14) 研究代表者：大澤陽介；先進医薬研究振興財団助成金：自然免疫により調節される肝再生・抗アポトーシス機構についての研究；平成 22-23 年度；1,000 千円
- 15) 研究代表者：大澤陽介；武田科学振興団医学系研究助成奨励「生活習慣病」：トリプトファンにおける非アルコール性肝脂肪化のメカニズムに関する研究；平成 23 年度；3,000 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

清島 満：

- 1) 日本臨床検査医学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床化学会評議員(～現在)
- 3) 日本臨床検査自動化学会評議員(～現在)
- 4) 日本動脈硬化学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床分子医学会評議員(～現在)
- 6) 日本臨床化学会国際交流委員(～現在)

2) 学会開催

清島 満：

- 1) 第 48 回日本臨床検査医学会東海・北陸支部総会，第 318 回日本臨床化学会東海・北陸支部例会(平

成 21 年 3 月, 岐阜)

- 2) 第 215 回内科学会東海支部地方会, 第 51 回東海支部主催生涯教育講演会(平成 23 年 10 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

清島 満:

- 1) 医療と検査機器試薬; 編集同人(~現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

伊藤弘康:

- 1) 第 19 回生物試料分析科学会大会(平成 21 年 2 月, 名古屋, 市民フォーラム「医療における食と安全と危機管理 臨床医の立場から見た肝臓(肝障害)と健康食品について」)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 星 雅人: 日本臨床化学会学術奨励賞(平成 21 年度)
- 2) 金森寛充: 第 14 回日本心不全学会・学術集会 YIA 優秀賞(平成 22 年度)

9. 社会活動

清島 満:

- 1) 岐阜県精度管理専門委員(~現在)
- 2) 岐阜市精度管理専門委員(~現在)
- 3) 岐阜県医師会臨床検査精度管理委員会委員(~現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究業績は質、量ともに目標レベルに達したと評価しているが、競争的研究資金の獲得についてはもう少し努力する必要がある。

現状の問題点及びその対応策

マンパワー不足が最も大きい問題点である。これに対してはまず院生の確保に努め、さらに他分野との共同研究を促進する。

今後の展望

研究テーマは多岐にわたるが、必要なときは他分野および他施設との共同研究を行い、効率的な研究を目指したい。

〔病態制御学講座〕

(1) 解剖学分野

1. 研究の概要

(1) Wnt シグナル系は、細胞の増殖、分化、癌化に関わるシグナルを伝える。Wnt 系抑制因子の一つである APC 蛋白質は、大腸がん抑制因子として発見されたが、腸だけでなく脳での発現が非常に高い。しかし、Apc 遺伝子の変異と脳腫瘍の発生との関連性は否定的である。APC の Wnt 系抑制機能 (=がん抑制機能) には、APC 分子の中央にある“βカテニン結合部位”が必須である。一方、APC の C 末端には、PSD-95, DLG, 微小管, EB1 (微小管結合因子) 等が結合し、神経との関連性が濃厚です。そこで私たちは、APC の C 末端特異的な生体機能を知るために、1639 アミノ酸以降の C 末端側が欠損した変異 APC 蛋白質を発現する、APC1638T マウスを解析している。

(2) 安全な鍼治療手技を教育・トレーニングするための効果的方法の構築をめざし、御遺体を用いた肉眼解剖学的観察に加え、ハイスピードカメラによる動画などを用いた鍼技術の多角的な解析をおこなっている。

(3) ヒトおよび各種実験動物の骨格の外部形状と内部構造を、数理力学的に解析している。加齢に伴う骨の三次元微細構造の変化を検索している。また慢性ストレス負荷モデル動物を作成し、ストレス負荷と骨粗鬆症との関連を調べている。さらに、“嚙む動作 (チューイング)” によるストレス性骨粗鬆症の改善効果の解明に取り組んでいる。

2. 名簿

教授：	千田隆夫	Takao Senda
准教授：	早川大輔	Daisuke Hayakawa
講師：	東 華岳	Kagaku Azuma

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 高橋優三, 奥 幸子, 早川大輔. シミュレーション医学教育の現状と将来: 日本医学教育学会教材開発・SP 小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011 年: 26-34.
- 2) 高橋優三, 奥 幸子, 早川大輔, 木島竜吾, 近藤大祐. シミュレーション医学教育用の教材ソフト開発: 日本医学教育学会教材開発・SP 小委員会編集. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011 年: 266-274.
- 3) 伊藤正裕, 早川大輔, 坂本 歩, 山村 聡監訳. ボディセラピーのためのトータル標準解剖生理学, 東京: 丸善株式会社; 2011 年.
- 4) 陳 華岳, 正村静子. 骨の疾患: 骨の加齢変化と骨粗鬆症: 日本臨床分子形態学会編集. 病気の分子形態学, 学際企画株式会社; 2011 年: 251-253.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 江村正一, 奥村年彦, 陳 華岳. レッサーパンダの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察, 哺乳類科学 2009 年; 49 卷: 37-43.
- 2) 奈良村五十志, 林 達郎, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. X 線 CT 画像における骨盤腔形状を用いた前立腺の中心位置の自動推定, 医用画像情報学会誌 2009 年; 26 卷: 73-77.
- 3) 韓 明旭, 林 達郎, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 藤田広志, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭. 体幹部 X 線 CT 画像における脊柱の正中矢状面を利用した椎体の骨密度と彎曲角度の自動計測法, 医用画像情報学会雑誌 2009 年; 26 卷: 52-58.
- 4) 吉本俊一, 周 向栄, 陳 華岳, 原 武史, 藤田広志, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭. 非造影 CT 画像における腎臓の位置・傾き・形状特徴量の解析とそれに基づく腎臓自動抽出に関する初期的検討, 電子情報通信学会技術報告 2009 年; 109 卷: 107-110.

- 5) 林 達郎, 周 向榮, 陳 華岳, 原 武史, 橫山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. X線 CT 画像における脊柱の彎曲角度の定量化法の開発とその評価, 電子情報通信学会技術報告 2009年;109巻:29-32.
- 6) 神谷直希, 周 向榮, 陳 華岳, 林 達郎, 原 武史, 橫山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. X線 CT 画像における腹部骨格筋モデルの作成と自動認識, 電子情報通信学会技術報告 2009年;109巻:31-34.
- 7) 江村正一, 阿閉泰郎, 陳 華岳. 哺乳類の喉頭蓋の形態について, 形態・機能 2010年;9巻:13-16.
- 8) 高橋優三, 長野 功, 呉 志良, 加藤智美, 鈴木康之, 早川大輔. PBL のコア・タイム省察用ポートフォリオ, 医学教育 2010年;41巻:207-209.
- 9) 青木隆明, 山岸宏江, 清水克時, 篠田信之, 浜田篤至, 林 典雄, 早川大輔. 短下肢装具の圧力による下腿半月の高さの検討, 日本義肢装具学会誌 2011年;27巻:171-173.
- 10) 藤田広志, 原 武史, 周 向榮, 林 達郎, 神谷直希, 張 学軍, 陳 華岳, 星 博昭. 計算解剖モデルの構築, Med Imag Tech. 2011年;29巻:116-122.
- 11) 林 達郎, 陳 華岳, 宮本 敬, 周 向榮, 原 武史, 橫山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. エックス線 CT 画像を用いた椎体の微細形態計測による新規骨折の予測能の調査(中間報告), Osteoporosis Japan 2011年;19巻:415-420.
- 12) 東 華岳, 久保金弥, 鷺見雄希, 林 達郎, 周 向榮, 藤田広志, 小野塚實. 腰椎の外部形状と内部構造の統合解析による骨粗鬆症の解明, Osteoporosis Japan 2011年;19巻:665-668.

原著 (欧文)

- 1) Chen H, Shoumura S, Emura S, Isono H. Tibetan medicated-bath therapy may improve adjuvant arthritis in rat. eCAM. 2009;6:211-217. IF 2.964
- 2) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the Oriental Scops Owl (*Otus scops*). Okajimas Folia Anat Jpn. 2009;86:1-6.
- 3) Chen H, Yano R, Emura S, Shoumura S. Anatomic variation of the celiac trunk with special reference to hepatic artery patterns. Ann Anat. 2009;191:399-407. IF 1.658
- 4) Zhou X, Hayashi T, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated measurement of bone-mineral-density (BMD) values of vertebral bones based on X-ray torso CT images. Proc. of the 31st Annual International Conference of the IEEE Eng Med Biol Soc. 2009;pp.3573-3576.
- 5) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Hara T, Hoshi H, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Automated recognition of the psoas major muscles on X-ray CT images. Proc. of the 31st Annual International Conference of the IEEE Eng Med Biol Soc. 2009;pp.3557-3560.
- 6) Zhou X, Hayashi T, Han M, Chen H, Hara T, Fujita H, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H. Automated segmentation and recognition of the bone structure in non-contrast torso CT images using implicit anatomical knowledge, Proc. of SPIE Medical Imaging. 2009: Image Processing 2009; 7259:72593S-1-72593S1-4.
- 7) Chen H, Zhou X, Emura S, Shoumura S. Site-specific bone loss in senescence-accelerated mouse (SAMP6): A murine model for senile osteoporosis. Exp Gerontol. 2009;44:792-798. IF 3.804
- 8) Chen H, Zhou X, Shoumura S, Emura S, Bunai Y. Age- and gender-dependent changes in three-dimensional microstructure of cortical and trabecular bone at the human femoral neck. Osteoporos Int. 2010;21:627-636. IF 4.859
- 9) Washimi Y, Chen H, Ito A, Takao R, Uzawa T, Yamamoto Y, Yamada H, Shoumura S. Effect of intermittent treatment with human parathyroid hormone 1-34 in SAMP6 senescence-accelerated mice. J Endocrinol Invest. 2010;33:395-400. IF 1.476
- 10) Ishiguro M, Mishiro K, Fujiwara Y, Chen H, Izuta H, Tsuruma K, Shimazawa M, Yoshimura S, Satoh M, Iwama T, Hara H. Phosphodiesterase-III inhibitor prevents hemorrhagic transformation induced by focal cerebral ischemia in mice treated with tPA. PLoS One 2010;5:e15178. IF 4.411
- 11) Emura S, Okumura T, Chen H. Comparative studies of the dorsal surface of the tongue in three avian species by scanning electron microscopy. Okajimas Folia Anat Jpn. 2010;86:111-115.
- 12) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the Jungle Nightjar (*Caprimulgus indicus*). Okajimas Folia Anat Jpn. 2010;86:117-120.
- 13) Hayashi T, Zhou X, Chen H, Hara T, Miyamoto K, Kobayashi T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated extraction method for the center line of spinal canal and its application to the spinal curvature quantification in torso X-ray CT images. Proc. of SPIE Medical Imaging 2010:Image Processing. 2010;7623:76233F-1-76233F-4.
- 14) Fujita H, Hara T, Zhou X., Chen H, Hoshi H. Computational anatomy: Model construction and application for anatomical structures recognition in torso CT images. Proc. of the First International Symposium on the Project "Computational Anatomy". 2010:58-61.
- 15) Zhou X, Wang S, Chen H, Zhang X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Rapid organ localization in 3D torso CT images based on ensemble learning. Proc. of 2010 International Conference on Future Computer, Control and Communication (FCCC 2010) - International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010). 2010:2:312-315.
- 16) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. A model based method for recognizing psoas major muscles in torso CT images. Proc. of SPIE Medical Imaging 2010:

- Computer-Aided Diagnosis. 2010;7624:76241X-1-76241X-6.
- 17) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Analysis of bone mineral density distribution at trabecular bones in thoracic and lumbar vertebrae using X-raising X-ray CT images. J Bone Miner Metab. 2011;29:174-85. IF 2.238
 - 18) Chen H, Washimi Y, Kubo K, Onozuka M. Gender-related changes in three-dimensional microstructure of trabecular bone at the human proximal tibia with aging. Histol Histopathol. 2011;26:563-570. IF 2.502
 - 19) Wu M, Zhao S, Ren L, Wang R, Bai X, Han H, Li B, Chen H. Research on relationship between tissue quantitative distribution of ³H-achyranthes bidentata Ecdysterone and channel-tropism of herbal drugs in mice. China J Chinese Materia Medica. 2011;36:3018-3022.
 - 20) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the sitatunga. Okajimas Folia Anat Jpn. 2011;88:23-27.
 - 21) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the rainbow lorikeet (Trichoglossus haematodus). Okajimas Folia Anat Jpn. 2011;88:17-21.
 - 22) Fujita H, Hara T, Zhou X, Zhang X, Hayashi T, Kamiya N, Chen H, Hoshi H. Model construction for computational anatomy: Progress overview FY2010. Proc. of the Second International Symposium on the Project "Computational Anatomy". 2011:13-17.
 - 23) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. A computerized scheme for localization of vertebral bodies on body CT scans. Proc. of SPIE Medical Imaging 2011: Image Processing. 2011;7962:796238-1-796238-11.
 - 24) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated segmentation of recuts abdominis muscle using shape model in X-ray CT images. Proc. of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society. 2011:7993-7996.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：東 華岳；京都大学霊長類研究所共同利用研究：霊長類椎骨における三次元画像の電脳解析；平成 21 年度；36 千円
- 2) 研究代表者：東 華岳，研究分担者：中川敏幸，大田和徳，李 詩沫，上田昌史，桑田一夫，松本友治，周 向榮；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：ハンチントン病における小胞体微細構造からの病態解明；平成 21 年度；1,000 千円
- 3) 研究代表者：東 華岳；財団法人骨粗鬆症財団研究助成：腰椎の外部形状と内部構造の統合解析による骨粗鬆症の病態解明；平成 22 年度；800 千円
- 4) 研究代表者：東 華岳；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：ハンチントン病における小胞体微細構造からの病態解明；平成 22 年度；1,500 千円
- 5) 研究代表者：東 華岳；自然科学研究機構生理学研究所共同利用研究：異常タンパク質の蓄積による粗面小胞体の三次元構造変化；平成 22 年度；66 千円
- 6) 研究代表者：東 華岳；京都大学霊長類研究所共同利用研究：霊長類大腿骨頸部における三次元画像の電脳解析；平成 22 年度；45 千円
- 7) 研究代表者：東 華岳；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：チューイングによるストレス性骨粗鬆症進行抑制機構の賦活；平成 23-25 年度；5,070 千円(2,080：1,950：1,040 千円)
- 8) 研究代表者：久保金弥，研究分担者：東 華岳；科学研究費補助金基盤研究(B)：チューイングによる小児期の母胎ストレス性神経認知回路の賦活と再生；平成 23-25 年度；200 千円(23 年度分担金)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

千田隆夫：

- 1) 日本解剖学会理事(～現在)
- 2) 日本解剖学会解剖体委員(～現在)
- 3) 日本解剖学会倫理委員(～現在)
- 4) 日本臨床分子形態学会理事(～現在)
- 5) 日本臨床分子形態学会編集委員(～現在)

東 華岳：

- 1) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)
- 2) 日本顕微鏡学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

東 華岳：

- 1) The Open Anatomy Journal ; Editorial Advisory Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

東 華岳：

- 1) 日本顕微鏡学会関西支部平成 21 年度特別講演会(平成 21 年 8 月, 名古屋, 特別講演「骨三次元構造の電腦解析」演者)
- 2) 第 26 回老化促進モデルマウス(SAM)研究協議会(平成 23 年 7 月, 岐阜, シンポジウム「口腔と中枢老化システムの関係」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

千田隆夫：

- 1) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 21 年 12 月～平成 23 年 11 月)

東 華岳：

- 1) 岐阜県准看護師試験委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 早川大輔：献体に支えられる解剖学：岐阜新聞(2010 年 12 月 7 日)
- 2) 東 華岳：骨の強度を画像解析で評価：岐阜新聞(2011 年 8 月 9 日)

12. 自己評価

評価

この 3 年間はずっと教授不在であり, 教員 2 名で当分野を維持するのはきわめて困難であったと思われる。もともと, 解剖学は教育負担の大きい分野であるが, 困難な状況下でも, 可能な範囲で精一杯の研究活動を行ない, 一定の研究成果を挙げたことを評価したい。

現状の問題点及びその対応策

平成 23 年 8 月に, 千田が教授として着任した。教室員は 4 名(教員 3 名, 秘書 1 名)で, 大学院生, 研究生等はまったくおらず, マンパワーの絶対的不足は明らかである。平成 24 年 4 月から, 社会人大学院

生1名と研究生(中国からの留学生)1名が入室することになった。今後、学内外から一人でも多くの人材を集め、教育・研究の活性化をはかることが急務である。現状の研究室の設備・機器は、最低限の形態学が可能な程度である。今後、形態学を基盤としたダイナミックな研究の展開をめざし、ライブイメージング、細胞培養、基本的な分子生物学・生化学テクニックの導入を急ぎたい。

今後の展望

教育においては、学生の知的好奇心を刺激する明快でインパクトのあるチュートリアル、講義、実習を実践していきたい。学部学生が教室に来やすいアットホームな雰囲気を作り、将来的な人材確保を目指したい。遺伝子・分子を扱いながらも、常に個体レベルの構造と機能を追究する研究を進めていく。臨床医やコメディカルスタッフの臨床現場からの研究の要請に答えるために、肉眼解剖学、各科臨床医学、画像診断学等の総合的な知識と理解のブラッシュアップを常に心がける。

(2) 分子病態学分野

1. 研究の概要

1) 抗体記憶の形成維持機構の解明

免疫記憶は、特異性免疫の最も重要な特徴であり、その人工的付与であるワクチン療法は感染症対策、さらには抗腫瘍免疫療法として期待されている。また、近年ヒト型抗体医薬による B 細胞除去療法の SLE、慢性関節リウマチ、多発性硬化症等自己免疫疾患での有効例が示唆する様に、ある種の自己免疫病の病態にはスイッチ型の自己抗体産生が関わっており、慢性難治性の本態に記憶 B 細胞の形成が関連している可能性がある。従って免疫記憶の生成と消退の分子機構を解明する事は、医学・医療の進歩に寄与する所大である。

B 細胞は末梢で抗原と出会い、T 細胞からのヘルプを受け、胚中心を形成する。その際 B 細胞に Activation induced cytidine deaminase (AID) が発現し、自らの抗体遺伝子を改変し、高親和性のスイッチ型抗体をコードした遺伝子へと作り変えてゆく。胚中心 B 細胞のうち、一部が形質細胞に分化、更にその一部が骨髄の微小環境で長期生存形質細胞として長期にわたる血清抗体価の維持に貢献する。また、別の一部は休止状態で長期生存する記憶 B 細胞となると考えられている。その運命決定の原理や、その長期生存の本態等、記憶 B 細胞に関する基本的な事項は、未だ十分に明らかではない。我々は、抗体記憶の形成維持機構を分子レベルで進め、そこから免疫記憶制御の基礎を築く事を目指している。

2) 細胞周期制御

胚中心 B 細胞は 8 時間も言われる短い細胞周期で分裂し、また、その過程で抗体遺伝子に変異や組替えを蓄積して行く。従って特異な細胞周期・DNA 修復の制御が働いている可能性がある。当研究室では世界に先駆けて、ヒトから細胞周期制御に重要な Aurora キナーゼを 3 種類クローニングし、これらの機能解析を行ってきた。Aurora A と B は細胞周期に依存して発現量が変化し、Aurora A は中心体、Aurora B は動原体および中央体に局在して細胞分裂を制御している。また、Aurora がヒトがん組織で高発現していることも明らかにした。一方、N 末伸長型ユビキチン付加酵素 (ubiquitin conjugating enzyme) の UBE2E2 や UBE2E3 をクローニングし、その機能解析を進めてきた。その過程で、これら E2 と相互作用する RING-finger タンパク質 RNF8 をクローニングした。RNF8 は DNA 修復および細胞分裂を制御することが報告されており、我々もその機能解明に努力している。

2. 名簿

教授： 長岡 仁 Hitoshi Nagaoka
助教： 木村正志 Masashi Kimura

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

なし

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Baba S, Hara A, Kato K, Long NK, Hatano Y, Kimura M, Okano Y, Yamada Y, Shibata T. Aberrant promoter hypermethylation of the CHFR gene in oral squamous cell carcinomas. *Oncol Rep.* 2009;22:1173-1179. IF 1.679
- 2) Nemoto S, Nakamura M, Osawa Y, Kono S, Itoh Y, Okano Y, Murate T, Hara A, Ueda H, Nozawa Y, Banno Y. Sphingosine kinase isoforms regulate oxaliplatin sensitivity of human colon cancer cells through ceramide accumulation and Akt activation. *J Biol Chem.* 2009;284:10422-10432. IF 5.328
- 3) Matsuyama Y, Hayashi T, Terawaki H, Negawa Tsuneo, Terada T, Okano Y, Era S. Human astrocytes and aortic endothelial cells actively convert the oxidized form of albumin to the reduced

- form:reduced albumin might participate in redox regulation of nerve and blood vessel systems. J Physiol Sci. 2009;59:207-215. IF 1.356
- 4) Mori N, Ishikawa C, Senba M, Kimura M, Okano Y. Effects of AZD1152, a selective Aurora B kinase inhibitor, on Burkitt's and Hodgkin's lymphomas. Biochem Pharmacol. 2011;81:1106-1115. IF 4.889
- 5) Yoshioka T, Kimura M, Saio M, Era S, Okano Y. Plk1 is negatively regulated by RNF8. Biochem Biophys Res Commun. 2011;410:57-61. IF 2.595

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：木村正志；研究分担者：岡野幸雄；科学研究費補助金基盤研究(C)：オーロラキナーゼの細胞分裂における機能とがんにおける異常の解明；平成 21-24 年度；3,700 千円(1,000：900：900：900 千円)
- 2) 研究代表者：森脇久隆；研究分担者：岡野幸雄，田中卓二，小嶋聡一，西口修平，清水雅仁；科学研究費補助金特定領域研究：核内受容体蛋白を標的とした肝癌化学予防に関する研究；平成 17-21 年度；66,000 千円(16,300：16,300：16,300：17,100 千円)
- 3) 研究代表者：木村正志；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：オーロラキナーゼの細胞分裂と発がんにおける役割の解明；平成 21 年度；1,000 千円
- 4) 研究代表者：岡野幸雄；研究分担者：木村正志，坂野喜子，大野貴敏，伊藤善規；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：がん細胞のオーロラによる分裂制御とスフィンゴ脂質による細胞死制御；平成 21 年度；2,000 千円
- 5) 研究代表者：木村正志；研究分担者：坂野喜子，大野貴敏，伊藤善規；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：がん細胞のオーロラによる分裂制御とスフィンゴ脂質による細胞死制御；平成 22 年度；2,000 千円
- 6) 研究代表者：長岡 仁；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究；Cre マウスを用いた新たな in vivo 分子機能解析法の確立；平成 23-25 年度；3,770 千円(1,430：1,170：1,170 千円)
- 7) 研究代表者：長岡 仁；科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)；B リンパ球終末分化機構の解明；平成 23-24 年度；3,910 千円(1,700：2,210 千円)
- 8) 研究代表者：長岡 仁；武田科学振興財団生命科学研究助成；抗体記憶の形成維持機構の解明；平成 23 年度；10,000 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

長岡 仁：

- 1) 日本生化学会評議員(~現在)
- 2) 日本免疫学会評議員(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

- 1) 第 37 回免疫カンファレンス(平成 23 年 11 月，京都，特別講演「抗体遺伝子に免疫記憶を刻む分子 AID」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

本年度より教授 長岡が着任し、主要な研究テーマも従前の細胞周期関連の課題に加え免疫記憶形成の分子機構を進めるという事で大幅に変更された。実験系の立ち上げと整備及び学部教育は軌道に乗りつつある。研究成果はまだ目に見える形になっては居ないが着実に進みつつあると考える。

現状の問題点及びその対応策

研究室は資金及び人の両方が居なければうまく立ち行かないが、教室スタッフのリクルート、大学院生の勧誘、ポスドク採用可能な研究費の獲得等一層の努力が必要である。中でも能力ある教室スタッフの採用は学生ポスドク勧誘の基礎になるので最優先課題として慎重に且つ速やかに取り組む必要が有る。又、従前からの蓄積がある細胞周期関連の研究と新たな免疫関係の研究の発展的な融合が必要である。その為、細胞周期関係の変異マウスにおけるリンパ球異常の解析等を計画している。

今後の展望

分子免疫学研究の立ち上げからコンスタントに新たな知見を発信できる体制を構築し、基礎系・臨床系各分野との連携で岐阜大学発のユニークな研究を作り上げて行く。それを通じて若い医師・研究者が身を投じてみたいと思わせるような環境を作り上げ、最終的には岐阜大学から次世代を担う研究者を育てる事が最終目標である。そのための展望としては早急且つ慎重にスタッフの適任者を選定し、研究体制の一層の充実を図ることで、その目標に近づいて行きたい。

(3) 循環病態学分野

1. 研究の概要

1. 再生医学・再生医療

- 1) G-CSF (顆粒球コロニー刺激因子) を用いた狭心症, 心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する再生療法
- 2) Erythropoietin を用いた心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症, に対する再生療法の開発
- 3) 抗がん剤, 5-FU 等を用いた心筋梗塞後の再生療法の開発
- 4) Gelatin hydrogel sheet あるいは粒子の Drug Delivery System を用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する心臓組織再生あるいは血管再生療法の開発
- 5) ナノリポソームを用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞後心筋組織修復再生療法の開発, 下肢閉塞性動脈疾患に対する血管再生療法に関する研究
- 6) ホーミング分子で修飾された内皮前駆細胞あるいは筋芽細胞による心血管再生治療法の開発
- 7) 骨髄細胞移植ならびに G-CSF を用いた COPD 等の肺疾患に対する再生療法
- 8) LOX 遺伝子改変マウスを用いた下肢虚血モデルにおける LOX-1 の血管新生血における LOX の関与に関する研究
- 9) Erythropoietin を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究
- 10) Erythropoietin と gelatin hydrogel 粒子を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究

2. 遺伝子治療

- 1) 心不全に対する HGF, sFas, 可溶性 TGF- β II 型受容体, Decorin の遺伝子治療
- 2) 糖尿病性腎症に対する sFas, HGF 遺伝子治療

3. アポトーシス, オートファジー

- 1) 循環器疾患とアポトーシス
筋繊維芽細胞のアポトーシスのブロックによる左室リモデリング予防
- 2) 腎疾患とアポトーシス
糖尿病性腎症の発症メカニズムにおけるアポトーシスの役割の解明
- 3) 循環器疾患とオートファジー
心筋梗塞・心不全の際のオートファジーの病態生理解明と治療法の開発

4. 虚血心筋保護のメカニズム解明と new drug の開発

- 1) 抗糖尿病薬 miglitol, acarbose, voglibose など α -glucosidase 阻害薬, ピオグリタゾン, ナテグリニド, グリクラジドによる虚血心筋保護作用のメカニズム解明とその臨床応用
- 2) 抗高脂血症薬スタチンの pleiotropic effect としての虚血心筋保護作用のメカニズム解明
- 3) 各種心血管薬 (ARB, Ca 拮抗薬, 抗血小板薬, β 遮断薬) の虚血心筋保護作用のメカニズム解明

5. 心不全

- 1) 不全心筋における angiotensin II type 2 受容体の病態生理学的意義の解明
- 2) 心筋細胞変性の分子病理
- 3) アシアロエリスロポエチンの抗心不全作用の解明
- 4) LOX-1 伝子改変マウスを用いた左室圧負荷モデルでの LOX-1 の心筋肥大への関与に関する研究
- 5) LOX-1 遺伝子改変マウスを用いたドキシビシン誘導性心筋症による心不全に対する LOX-1 関与に関する研究
- 6) インスリン抵抗性改善薬, 食後高血糖改善薬の心不全に対する保護効果

6. IB-IVUS, IB-エコー, および光干渉波断層画像

- 1) 冠動脈プラーク progression のメカニズムの解明
- 2) 急性冠症候群発症のメカニズムの解明
- 3) 冠動脈プラークの動態と組織性状の関連の解明
- 4) 脂質低下療法が冠動脈・頸動脈プラークの組織性状に及ぼす影響の解明
- 5) 頸動脈プラークの組織性状と脳梗塞発症の関連の解明と核磁気共鳴画像との比較
- 6) 頸動脈プラークの組織性状と頸動脈ステント合併症の関連の解明
- 7) 光干渉波断層画像による冠動脈・頸動脈プラークの不安定性の評価
- 8) 光干渉波断層画像のステレオ三次元化
- 9) Velocity vector imaging による心房機能の評価と心房細動発症の予測
- 10) 糖尿病治療と動脈硬化改善の関連の解明
- 11) 頸動脈硬化と予後の関連の解明

- 12) PET-CTによる頸動脈硬化の評価
- 7. MDCTによる冠動脈病変診断**
- 1) MDCT画像とIB-IVUS画像との組織性状診断比較
- 8. カテーテルアブレーションによる各種頻脈性不整脈治療**
- 1) 心房細動患者における肺静脈のIB-IVUSによる組織性状診断
- 9. T波交互現象を用いた心室性致死性不整脈による心臓突然死のリスク層別化に関する研究**
- 1) 急性心筋梗塞発症時の超短期予後の予測に関する研究
- 2) 慢性維持透析患者における心臓突然死の予測に関する研究
- 10. 安定労作性冠動脈疾患に対する治療法に関する研究**
- 1) 低リスク安定労作性狭心症に対する薬物療法とインターベンション療法の予後に関する無作為介入試験(JSAP Study)の長期予後調査研究(JSAP: Seven year outcome study)
- 2) 経皮的冠動脈形成術の高血圧患者におけるカルシウム拮抗薬の臓器保護効果に関する研究(benidipine vs nifedipine, CACOT Trial)
- 3) 冠動脈疾患合併慢性動脈閉塞症患者に対するサルボグレラート塩酸塩の心機能改善効果に関する研究(アンブラーグ, SCAPA Study)
- 4) COPD合併冠動脈疾患に対するセリプロロールの効果に関する研究(ECCAP Study)
- 5) 薬剤溶出ステントに対する抗血小板療法—シロスタゾールの有用性に関する研究(MUGIC-CYPHER Study)
- 11. 冠攣縮性狭心症に対する薬物治療に関する研究**
- 1) 冠攣縮性狭心症患者における主要心血管イベントに対するカルシウム拮抗薬の効果に関する研究—メタ解析(VSA-meta Study)
- 2) 切迫冠攣縮性狭心症(Urgent vasospastic angina: UVA)の実態と臨床的特徴に関する研究
- 12. 慢性腎臓病合併心疾患に対する薬物治療に関する研究**
- 1) 冠動脈造影による造影剤腎症発症予防に対するニコランジルの有用性に関する研究(ニコランジル-CKD study)
- 2) 冠動脈疾患を有する慢性維持透析患者に対する経口ニコランジル投与の心血管イベントに及ぼす影響に関する研究(PRECON Trial HD)
- 3) CKD合併高血圧患者におけるN型CCBの効果に関する研究(NAGARA study, azelnidipine vs. cilnidipine)
- 13. 急性冠症候群に対する薬物治療に関する研究**
- 1) 急性心筋梗塞患者におけるアンジオテンシンII受容体拮抗薬の炎症性マーカーに及ぼす影響に関する研究(INMAT-AMI Study)
- 2) 急性冠症候群に対する抗血小板療法と予後に関する研究(シロスタゾール vs プレタール)
- 3) 急性冠症候群における内因性サイトカインの役割とその予後予測
- 14. 臨床核医学**
- 1) 心筋梗塞, 狭心症, 肥大型心筋症, 二次性心筋疾患(サルコイドーシスなど)の核医学的検討
- 2) α -グルコシダーゼ阻害薬の虚血心筋保護作用の核医学的検討
- 15. 高血圧についての基礎的および臨床的研究**
- 1) SHRにおいて塩分負荷が心臓・腎臓組織レニン, プロレニンに与える影響に関する研究
- 2) 高血圧症患者におけるレニン, プロレニンの関与に関する研究
- 3) 家庭血圧測定的重要性と降圧薬の評価に関する臨床研究, DOHSAM研究, GAIN研究, GIFT研究
- 16. 閉塞性動脈硬化症に対する治療法の開発**
- 1) エリスロポエチン, G-CSF注射による下肢閉塞性動脈疾患の治療
- 2) エリスロポエチン含浸ゲラチンハイドロゲル筋注による下肢閉塞性動脈疾患の治療
- 17. 東洋医学的アプローチ**
- 1) パーキンソン病に対する鍼治療
- 2) 天台烏薬の腎疾患に対する効果の検討
- 3) 天台烏薬の動脈硬化に対する効果に関する実験的検討
- 4) 入院循環器重症患者のICUせん妄に対する東洋医学の効果の検討

2. 名簿

教授： 湊口信也 Shinya Minatoguchi
 准教授： 西垣和彦 Kazuhiko Nishigaki

講師：	川崎雅規	Masanori Kawasaki
講師：	青山琢磨	Takuma Aoyama
臨床講師：	服部有博	Arihiro Hattori
臨床講師：	村田一知朗	Ichijiro Murata
臨床講師：	加納亜紀	Aki Kanou
助教：	久保田知希	Tomoki Kubota

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 竹村元三, 湊口信也. 第2章 生体シグナル因子の利用 1. 細胞増殖因子 3) 下肢血管:造血系サイトカイン治療遺伝子医学 MOOK 13号:臨床再生誘導治療, 東京:メディカルドゥ社; 2009年:107-111.
- 2) 西垣和彦, 湊口信也. 2. 狭心症の病態生理:小川久雄編. 最新狭心症診断の実際, 東京:永井書店; 2009年:6-13.
- 3) 西垣和彦, 藤原久義. 第4章 心外膜疾患 急性心膜炎心タンポナーデ慢性収縮性心膜炎炎症性心膜液貯溜:相澤義房編. メディカル ノート循環器疾患がわかる, 東京:西村書店; 2009年:163-170.
- 4) 西垣和彦, 藤原久義. B. 慢性冠動脈疾患 ①安定狭心症 4. 低リスク患者に最適な初期治療法は(薬物 vs PCI)? :小室一成, 横井宏佳, 山下武志, 楽木宏実編. EBM 循環器疾患の治療 2010-2011, 東京:中外医学社; 2009年:86-89.
- 5) 西垣和彦. 2 最新アプローチ急性冠症候群-:小川久雄編. 2章 急性冠症候群を見逃さない「ガイドライン」に示された診断アプローチ」循環器臨床サビア, 東京:中山書店; 2009年:36-49.
- 6) 西垣和彦. 第5章 大学生のための病気の知識 -大学生に比較的多い病気を中心に-第2節 心臓の病気:山本真由美監修. 大学生の健康ナビキャンパスライフの健康管理:岐阜県大学保健管理研究会企画, 岐阜:岐阜新聞社; 2009年:108-112.
- 7) 川崎雅規. 科学の中にある民族の壁:万有財団の歩み, 東京:万有財団; 2009年:64-65.
- 8) 西垣和彦. III. インターベンションの基礎知識:PCI・EVT 共通事項 C. その他 2. 二次予防のための薬剤とガイドライン:南都伸介, 中村正人編. PCI・EVT スペシャルハンドブック, 東京:南江堂; 2010年:252-266.
- 9) 西垣和彦. 米国を見てみよう! -ノースカロライナ大学チャペルヒル校への留学-:岐阜大学教養教育推進センター編. 教養ブックレット Vol. 3:日本脱出!留学のすすめ, 岐阜:みらい; 2010年:88-89.
- 10) 川崎雅規, 湊口信也. 冠動脈 IVUS・IB-IVUS の実際, 循環器臨床サビア 9「血管エコーパーフェクトガイド」2010年:188-201.
- 11) 田中新一郎, 小塩信介. 第二章 集中治療法:小倉真治監修. 冠動脈疾患管理 図説臨床看護医学デジタル版(21;集中治療), 東京:エディターシップ; 2010年.
- 12) 西垣和彦. 第1部 第1章 PCI にまつわるエビデンスの解釈 Indication を考えるA「4. JSAP 研究から学ぶ:欧米の臨床試験との差異」成功に導く PCI 治療戦略 optimal medical treatment の実践:中村正人編. 東京:南江堂; 2011年:11-14.
- 13) 西垣和彦. Part II 心臓移植の社会的基盤 3. 心臓移植の施設認定基準:松田 暉監, 布田伸一, 福嶋教偉編. 心臓移植, 東京:シュプリンガー・ジャパン; 2011年:33-36.
- 14) 西垣和彦. Part II 心臓移植の社会的基盤 4. レシピエント登録から移植までの手順:松田 暉監, 布田伸一, 福嶋教偉編. 心臓移植, 東京:シュプリンガー・ジャパン; 2011年:37-43.

著書（欧文）

- 1) Tanaka S. Novel Insights Into Stenosis on Coronary Angiography—Outline of Functional Assessment of Stable angina Patients with Angiographic Stenosis In Advances in the Diagnosis of Coronary Atherosclerosis, Suna FK, ed. Rijeka Croatia: InTech; 2011:331-334.

総説（和文）

- 1) 竹村元三. 心疾患におけるアポトーシスの意義とその治療応用への可能性, 日本薬理学雑誌 2009年;134巻:192-197.
- 2) 小川俊一, 赤木禎治, 石井正浩, 唐澤賢祐, 佐地 勉, 鈴木淳子, 菌部友良, 馬場 清, 濱岡建城, 藤原久義, 鮎沢 衛, 岡田知雄, 荻野廣太郎, 西垣和彦, 深澤隆治. 循環器病の診断と治療に関するガイドライン(2007年度合同研究班報告)「川崎病心臓血管後遺症の診断と治療に関するガイドライン(2008年改訂版): Guidelines for diagnosis and management of cardiovascular sequelae in Kawasaki disease (JCS 2008)」ダイジェスト版「川崎病心臓血管後遺症の診断と治療に関するガイドライン(2008年改訂版): Guidelines for diagnosis and management of cardiovascular sequelae in Kawasaki disease (JCS 2008)」:日本循環器学会 HP のみ 2009年公開 <http://www.j-circ.or.jp/guideline/index.htm> (e-publication only)
- 3) 西垣和彦. 「虚血性心疾患 再発予防と長期予後の改善を目的とした最新の実地診療」セミナー 虚血性心疾患の治療は長期予後を改善させるか? 血行再建術:その2 経皮的冠動脈インターベンション, Medical Practice 2009年;26巻:220-224.
- 4) 西垣和彦, 藤原久義. 特集「血栓症をめぐるわが国の臨床研究」II. 心疾患 8. JSAP (Japanese Stable

- Angina Pectoris) Study —低リスク安定労作性狭心症に対する薬物療法とインターベンション療法の予後に関する無作為試験, 血栓と循環 Thrombosis and Circulation 2009年; 17巻: 79-82.
- 5) 西垣和彦. 特集「心筋梗塞・狭心症の再発予防」2. 虚血性心疾患の再発予防 —PCIと薬物療法の比較動脈硬化予防, Prevention of Arteriosclerosis 2009年; 8巻: 9-15.
 - 6) 西垣和彦. 世界の医学誌から LANCET 解説「責任冠動脈病変は PCI が左右する」, MMJ 2009年; 5巻: 540-541.
 - 7) 西垣和彦, 藤原久義. 特集 PCI の最近の動向 トピックス「安定狭心症は PCI 先行か, 薬物療法か?」: JSAP Study と COURAGE Trial を比較して, Cardiac Practice 2009年; 20巻: 35-40.
 - 8) 川崎雅規. 血管内エコー法の進歩, 内科学会雑誌 2009年; 98巻: 42-49.
 - 9) 川崎雅規. 超音波後方散乱波で何がわかるか, 心エコー 2009年; 10巻: 754-762.
 - 10) 川崎雅規. Integrated backscatter intravascular ultrasound (IB-IVUS), Coronary Intervention 2009年; 5巻: 30-37.
 - 11) 竹村元三, 湊口信也. 心疾患とオートファジー, BIO Clinica 2010年; 25巻: 30-35.
 - 12) 牛越博昭, 湊口信也. 11章 心膜疾患と心内膜炎 1 急性心膜炎, カラー版循環器病学基礎と臨床 2010年; 1030-1039.
 - 13) 湊口信也, 渡辺佐知郎, 田中 孜, 西垣和彦, 小塩信介. <座談会>高血圧治療の Next Stage, 血圧 2010年; 17巻(suppl. 1): 9-15.
 - 14) 西垣和彦, 湊口信也. Information Up-to Date 特別編 冠縮性狭心症患者における Ca 拮抗薬の予後への影響—メタ解析—, 血圧 2010年; 17巻: 62-63.
 - 15) 西垣和彦, 湊口信也. 第2内科一般臨床から高度医療までカバーする守備範囲の広い医療を目指して, 岐阜県医師会報 2010年; 771号: 6-9.
 - 16) 竹村元三. 最新・心不全 Update—臨床と研究の最前線 第2章 心不全の診断【心筋病理】21.心筋細胞死と心筋再生は不全心で認められるか?, 医学のあゆみ 2010年; 232巻: 427-435.
 - 17) 三浦俊郎, 竹村元三, 新井昌史, 木村彰方. 「心肥大・心不全・心筋症の機序解明はどこまで進んだか」, 分子心血管病 2010年; 11巻: 29-38.
 - 18) 西垣和彦, 藤原久義. 特集 薬剤溶出性ステントの現状を識る 診る 1「PCIを決断するまで—PCIのエビデンス—」, Heart View 2010年; 14巻: 8-15.
 - 19) 西垣和彦. 診療の秘訣「高純度 EPA の多彩な作用と期待する効果」, Modern Physician 2010年; 30巻: 430-431.
 - 20) 西垣和彦. 特集「新法に向けての体制」循環器内科医からの臓器移植法改正後の取り組み, 移植(日本移植学会雑誌) 2010年; 45巻: 199-204.
 - 21) 西垣和彦. COURAGE 研究と JSAP 研究の対比と解釈, 循環器内科 2010年; 68巻: 83-89.
 - 22) 西垣和彦. 新しい診断と治療の ABC69: 狭心症 第5章 ガイドライン「日本循環器学会ガイドライン」最新医学別冊 2010年; 178-187.
 - 23) 西垣和彦. 循環器専門医から見る高血圧治療—EBMにより裏付ける—, 新城医師会報 2010年; 32巻: 22-24.
 - 24) 西垣和彦. 特集「バスきゅら—インターベンション」内科資料と結構再建の選択: Strategy for patients with low-risk coronary artery disease: initial medical therapy only or PCI plus medical therapy, 日本臨床 2011年; 69巻: 253-258.
 - 25) 西垣和彦, 湊口信也. 第2内科一般臨床から高度医療までカバーする守備範囲の広い医療を目指して, 岐阜県医師会報 2011年; 771巻: 6-9.
 - 26) 西垣和彦. 特集「冠血行再建術のエビデンスをどうみるか—PCIと CABG」JSAP Study を中心に循環器内科医の立場から, 呼吸と循環 2011年; 59巻: 475-483.
 - 27) 西垣和彦. 特集「内科診療における論点」II 循環器: 糖尿病患者の冠動脈疾患は CABG を第一選択とすべきか?, 内科 2011年; 107巻: 1003-1010.
 - 28) 島田和幸, 西垣和彦. 特集「心不全治療 予防と治療の最前線」心臓移植の適応と現況, 日本医師会雑誌 2011年; 140巻: 772-776.
 - 29) 西垣和彦. 改正臓器移植法をめぐって, 呼吸と循環 2011年; 59巻: 605-610.
 - 30) 西垣和彦. 特集「いま PCI の適応を考える」2・1 エビデンスから PCI の適応を考える: COURAGE と JSAP から考える, Coronary Intervention 2011年; 7巻: 39-44.
 - 31) 西垣和彦. VIII. 特論「心臓移植の現状と展望」, 日本臨床 冠動脈疾患 診断と治療の進歩 上 2011年; 69巻: 651-659.
 - 32) 西垣和彦. IX. 狭心症の臨床 狭心症総論 狭心症の治療「薬物療法と血行再建術」, 日本臨床 冠動脈疾患 診断と治療の進歩 下 2011年; 69巻: 41-47.
 - 33) 西垣和彦, 藤原久義. IX. 狭心症の臨床 安定労作性狭心症「安定労作性狭心症に対する薬物療法と PCI との比較」, 日本臨床 冠動脈疾患 診断と治療の進歩 下 2011年; 69巻: 83-89.
 - 34) 川崎雅規. IVUSによってプラークはどこまでみえるか, Heart View 2011年; 15巻: 14-22.
 - 35) 川崎雅規. 心血管イメージングによるプラークイメージングの評価, Mebio 2011年; 28巻: 26-32.
 - 36) 青山琢磨, 湊口信也. ARB. 特集: 炎症と動脈硬化—基礎・臨床研究の最新動向—IV. 動脈硬化の予防・治療—抗動脈硬化・抗炎症の観点から—薬物療法, 日本臨床 2011年; 69巻: 92-99.

総説 (欧文)

- 1) Minatoguchi S. Granulocyte colony stimulating factor, peripheral blood stem cells and bone marrow

- stem cells for cardiac repair after myocardial infarction. *Circ J*. 2011;75:789-790.
- 2) Takemura G, Maruyama R, Goto K, Kanamori H, Tsujimoto A, Minatoguchi S, Fujiwara H. Fate of isolated adult cardiomyocytes undergoing starvation-induced autophagic degeneration. *Autophagy* 2009;5:90-92.
 - 3) Takemura G, Nakagawa M, Kanamori H, Minatoguchi S, Fujiwara H. Benefits of reperfusion beyond infarct size limitation. *Cardiovasc Res*. 2009;83:269-276.
 - 4) Takemura G, Kanamori H, Goto K, Maruyama R, Tsujimoto A, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Autophagy maintains cardiac function in the starved adult. *Autophagy* 2009;5:1034-1036.
 - 5) Takemura G. Does the tongue eloquently address the question of cardiac regeneration? *Circ J*. 2010;74:1075-1076.

原著 (和文)

- 1) 西垣和彦. One Point Advice 「血圧測定は眼を閉じて」, *Medical Practice* 2009年;26巻:1217.
- 2) 西垣和彦. 私の処方「冠攣縮性狭心症の薬物療法」, *Modern Physician* 2009年;29巻:1227-1228.
- 3) 西垣和彦. 第73回日本循環器学会学術集会 5. 冠動脈疾患の治療戦略 -PCIかCABGかあるいは薬物治療か「PCI先行療法(PCI+薬物療法)は薬物療法より急性冠症候群の発症を効果的に減少させる」, *日本循環器学会専門医誌 循環器専門医* 2009年;17巻:259-265.
- 4) 西垣和彦. わが国における臓器移植の現況と将来展望-脳死移植実施10周年を記念して-IV, *臓器移植の現状「心臓」移植(日本移植学会雑誌)* 2009年;44巻(Special Issue):167-171.
- 5) 久保田知希, 川崎雅規, 中島 孝, 竹山俊昭, 竹山 麗, 高杉信寛, 石原義之, 大久保宗則, 八巻隆彦, 小塩信介, 青山琢磨, 荒井正純, 西垣和彦, 竹村元三, 湊口信也. *Integrated Backscatter* を応用した経食道エコーによる左心房筋の評価と心房細動予測, *岐阜県内科医会雑誌* 2010年;24巻:89-92.
- 6) 横山明孝, 加藤義弘, 川瀬晴美, 牛越博昭, 後藤 浩, 松岡敏男. 高校男子ラグビー選手の心形態, *臨床スポーツ医学* 2010年;27巻:451-456.
- 7) 田中新一郎, 野田俊之, 瀬川知則, 岩間 眞, 皆川太郎, 渡辺佐知郎, 湊口信也. *Integrated backscatter intravascular ultrasound(IVUS)*を用いた急性冠症候群における冠動脈ステント留置によるプロラプス予測の試み-緊急血行再建における一断面での評価-, *心臓* 2011年;43巻:33-41.

原著 (欧文)

- 1) Takemura G, Nakagawa M, Kanamori H, Minatoguchi S, Fujiwara H. Benefits of reperfusion beyond infarct size limitation. *Cardiovasc Res*. 2009;83:269-276. IF 6.051
- 2) Hayakawa K, Ohashi H, Yokoyama H, Yoshida G, Okada M, Minatoguchi S. Adiponectin is increased and correlated with the degree of proteinuria, but plasma leptin is not changed in patients with chronic glomerulonephritis. *Nephrology*. 2009;14:327-331. IF 1.172
- 3) Takemura G, Kanamori H, Goto K, Maruyama R, Tsujimaoto A, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Autophagy maintains cardiac function in the starved adult. *Autophagy*. 2009;5:1034-1036. IF 6.643
- 4) Kanamori H, Takemura G, Miyata S, Maruyama R, Goto K, Ogino A, Esaki M, Nakagawa M, Li L, Ushikoshi H, Seishima M, Minatoguchi S, Fujiwara T, Fujiwara H. Functional significance and morphological characterization of basal and starvation-induced autophagy in the adult heart. *Am J Pathol*. 2009;174:1705-1714. IF 5.224
- 5) Okada H, Takemura G, Kosai K, Li Y, Misao Y, Takahashi T, Esaki M, Ohno T, Miyata S, Kanamori H, Ogino A, Nakagawa M, Maruyama R, Minatoguchi S, Fujiwara T, Fujiwara H. Combined therapy with cardioprotective cytokine administration and anti-apoptotic gene transfer for postinfarction heart failure. *Am J Physiol Heart Circ Physiol*. 2009;296:H616-H626. IF 3.881
- 6) Yasuda S, Kobayashi H, Iwasa M, Kawamura I, Sumi S, Narentuoya B, Yamaki T, Ushikoshi H, Nishigaki K, Nagashima K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Anti-diabetic drug pioglitazone protects the heart via activation of PPAR- γ , PI3 kinase, Akt and eNOS pathway in a rabbit model of myocardial infarction. *Am J Physiol Heart Circ Physiol*. 2009;296:H1558-H1565. IF 3.881
- 7) Li L, Okada H, Takemura G, Kosai K, Okada H, Kanamori H, Esaki M, Takahashi T, Maruyama R, Kawamura I, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Postinfarction gene therapy with adenoviral vector expressing decorin attenuates left ventricular remodeling and heart failure. *Am J Physiol Heart Circ Physiol*. 2009;297:H1504-H1513. IF 3.881
- 8) Yamada K, Yoshimura S, Kawasaki M, Enomoto Y, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Effects of atorvastatin on carotid atherosclerotic plaques: a randomized trial for quantitative tissue characterization of carotid atherosclerotic plaques with integrated backscatter ultrasound *Cerebrovasc Dis*. 2009;28:417-424. IF 2.987
- 9) Itoh H, Sakaguchi T, Ding W, Watanabe E, Watanabe I, Nishio Y, Makiyama T, Ohno S, Akao M, Higashi Y, Zenda N, Kubota T, Mori C, Okajima K, Haruna T, Miyamoto A, Kawamura M, Ishida K, Nagaoka I, Oka Y, Nakazawa Y, Yao T, Jo H, Sugimoto Y, Ashihara T, Hayashi H, Ito M, Imoto K, Matsuura H, Horie M. Latent genetic backgrounds and molecular pathogenesis in drug-induced long-QT syndrome. *Circ Arrhythm Electrophysiol*. 2009;2:511-523.
- 10) Tanaka S, Noda T, Segawa T, Minagawa T, Watanabe S, Minatoguchi S. Relationship between functional exercise capacity and functional stenosis in patients with stable angina and intermediate

- coronary stenosis. *Circ J.* 2009;73:2308-2314. IF 3.225
- 11) Nakagawa Y, Kuwahara K, Takemura G, Akao M, Kato M, Arai Y, Takano M, Harada M, Murakami M, Nakanishi M, Usami S, Yasuno S, Kinoshita H, Fujiwara M, Ueshima K, Nakao K. p300 plays a critical role in maintaining cardiac mitochondrial function and cell survival in postnatal hearts. *Circ Res.* 2009;105:746-754. IF 9.504
 - 12) Takasugi N, Nishigaki K, Kubota T, Tsuchiya K, Natsuyama K, Takasugi M, Nawa T, Ojio S, Aoyama T, Kawasaki M, Takemura G, Minatoguchi S. Sleep apnoea induces cardiac electrical instability assessed by T-wave alternans in patients with congestive heart failure. *Eur J Heart Fail.* 2009;11:1063-1070. IF 4.512
 - 13) Mori H, Tanaka H, Ohno Y, Ito F, Funaguchi N, Endo J, La BL, Minatoguchi S. Effect of intermittent systemic corticosteroid on bone metabolism in bronchial asthma patients. *J Asthma.* 2009;46:142-146. IF 1.341
 - 14) Kubota T, Kawasaki M, Takasugi N, Takeyama U, Ishihara Y, Okubo M, Yamaki T, Ojio S, Aoyama T, Arai M, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara H, Minatoguchi S. Evaluation of left atrial degeneration for the prediction of atrial fibrillation usefulness of integrated backscatter transesophageal echocardiography. *JACC Cardiovasc Imaging.* 2009;2:1039-1047.
 - 15) Li L, Okada H, Takemura G, Esaki M, Ushikoshi H, Kobayashi H, Tsujimoto A, Maruyama R, Nakagawa M, Kanamori H, Ogino A, Kawamura I, Nagashima K, Fujiwara T, Fujiwara H, Tabata Y, Minatoguchi S. Sustained release of erythropoietin using biodegradable gelatin hydrogel microspheres persistently improves lower leg ischemia. *J Am Coll Cardiol.* 2009;53:2378-2388. IF 14.293
 - 16) Bao N, Ushikoshi H, Kobayashi H, Yasuda S, Kawamura I, Iwasa M, Yamaki T, Sumi S, Nagashima K, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Simvastatin reduces myocardial infarct size via increased nitric oxide production in normocholesterolemic rabbits. *J Cardiol.* 2009;53:102-107. IF 1.175
 - 17) Minatoguchi S, Zhang Z, Bao N, Kobayashi H, Yasuda S, Iwasa M, Sumi S, Kawamura I, Yamada Y, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H. Acarbose reduces myocardial infarct size by preventing postprandial hyperglycemia and hydroxyl radical production and opening mitochondrial KATP channels in rabbits. *J Cardiovasc Pharmacol.* 2009;54:25-30. IF 2.406
 - 18) Kobayashi H, Yasuda S, Bao N, Iwasa M, Kawamura I, Yamada Y, Yamaki T, Sumi S, Ushikoshi H, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Post-infarct treatment with oxytocin improves cardiac function and remodeling via activating cell-survival signals and angiogenesis. *J Cardiovasc Pharmacol.* 2009;54:510-519. IF 2.406
 - 19) Goto K, Takemura G, Maruyama R, Nakagawa M, Tsujimoto A, Kanamori H, Li L, Kawamura I, Kawaguchi T, Takeyama T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Unique mode of cell death in freshly isolated adult rat ventricular cardiomyocytes exposed to hydrogen peroxide. *Med Mol Morphol.* 2009;42:92-101. IF 1.513
 - 20) Hayakawa K, Ohashi H, Yokoyama H, Yoshida G, Okada M, Minatoguchi S. Adiponectin is increased and correlated with the degree of proteinuria, but plasma leptin is not changed in patients with chronic glomerulonephritis. *Nephrology.* 2009;14:327-331. IF 1.172
 - 21) Yoshida T, Sawa T, Ishiguro T, Horiba A, Minatoguchi S, Fujiwara H. The efficacy of prophylactic Shakuyaku-Kanzo-to for myalgia and arthralgia following carboplatin and paclitaxel combination chemotherapy for non-small cell lung cancer. *Support Care Cancer.* 2009;17:315-320. IF 2.058
 - 22) Ono K, Kawasaki M, Tanaka R, Segawa T, Matsuo H, Watanabe S, Takemura G, Minatoguchi S. Integrated backscatter and intima-media thickness of the thoracic aorta evaluated by transesophageal echocardiography in hypercholesterolemic patients: Effect of pitavastatin therapy. *Ultrasound Med Biol.* 2009;35:193-200. IF 2.493
 - 23) Shimomura M, Ushikoshi H, Hattori A, Murata I, Ohno Y, Aoyama T, Kawasaki M, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Treatment with *Lindera strychnifolia* Reduces Blood Pressure by Decreasing Sympathetic Nerve Activity in Spontaneously Hypertensive Rats. *Am J Chinese Med.* 2010;38:561-568. IF 1.383
 - 24) Miyata S, Takemura G, Kosai K, Takahashi T, Esaki M, Li L, Kanamori H, Maruyama R, Goto K, Tsujimoto A, Takeyama T, Kawaguchi T, Ohno T, Nishigaki K, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Anti-Fas gene therapy prevents doxorubicin-induced acute cardiotoxicity through mechanisms independent of apoptosis. *Am J Pathol.* 2010;176:687-698. IF 5.224
 - 25) Kawamura I, Takemura G, Kanamori H, Li L, Takeyama T, Kawaguchi T, Tsujimoto A, Goto K, Maruyama R, Watanabe T, Shiraki T, Aoyama T, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Repeated phlebotomy augments angiogenesis to improve blood flow in murine ischemic legs. *Am J Physiol Heart Circ Physiol.* 2010;299:372-378. IF 3.881
 - 26) Sumi S, Kobayashi H, Yasuda S, Iwasa M, Yamaki T, Yamada Y, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. Postconditioning effect of granulocyte colony-stimulating factor is mediated through activation of RISK pathway and opening of the mitochondrial KATP channels. *Am J Physiol Heart Circ Physiol.* 2010;299:1174-1182. IF 3.881
 - 27) Yamada K, Kawasaki M, Yoshimura S, Enomoto Y, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Prediction of silent ischemia lesions after carotid artery stenting using integrated backscatter ultrasound and magnetic resonance imaging. *Atherosclerosis.* 2010;208:161-166. IF 4.086
 - 28) Nishigaki K, Inoue Y, Yamanouchi Y, Fukumoto Y, Yasuda S, Sueda S, Urata H, Shimokawa H,

- Minatoguchi S. Prognostic effects of calcium channel blockers in patients with vasospastic angina-a meta-analysis. *Circ J.* 2010;74:1943-1950. IF 3.225
- 29) Ogawa S, Akagi T, Baba K, Fujiwara H, Hamaoka K, Ishii M, Karasawa K, Saji T, Sonobe T, Suzuki A, Ayusawa M, Fukazawa R, Nishigaki K, Ogino H, Okada T, Echigo S, Nakazawa M, Ochi M, Yamaguchi T. Guidelines for diagnosis and management of cardiovascular sequelae in Kawasaki Disease(JCS2008)-Digest Version-. *Circ J.* 2010;74:1989-2020. IF 3.225
- 30) Kawasaki M, Hattori A, Ishiara Y, Okubo M, Nishigaki K, Takemura G, Saio M, Takami T, Minatoguchi S. Tissue characterization of coronary plaques and assessment of thickness of fibrous cap using integrated backscatter intravascular ultrasound:Comparison with histology and optical coherence tomography. *Circ J.* 2010;74:2641-2648. IF 3.225
- 31) Takasugi N, Nishigaki K, Kubota T, Tsuchiya K, Natsuyama K, Takasugi M, Nawa T, Ojio S, Aoyama T, Kawasaki M, Takemura G, Minatoguchi S. Impact of T-wave amplitude on circadian variation in T-wave alternans. *Eur J Heart Fail.* 2010;12:209-211. IF 4.512
- 32) Ogino A, Takemura G, Kawasaki M, Tsujimoto A, Kanamori H, Li L, Goto K, Maruyama R, Kawamura I, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Moriguchi Y, Saito H, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Erythropoietin receptor signaling mitigates renal dysfunction-associated heart failure by mechanisms unrelated to relief of anemia. *J Am Coll Cardiol.* 2010;56:1949-1958. IF 14.293
- 33) Nishi H, Ono K, Iwanaga Y, Horie T, Nagano K, Takemura G, Kinoshita M, Kuwabara Y, Tanabe Mori R, Hasegawa K, Kita T, Kimura T. MicroRNA-15b modulates cellular ATP levels and degenerates mitochondria via Arl2 in neonatal rat cardiac myocytes. *J Biol Chem.* 2010;285:4920-4930. IF 5.328
- 34) Tanaka S, Noda T, Segawa T, Iwama M, Minagawa T, Watanabe S, Minatoguchi S. Relation between functional stenosis and tissue characterization of intermediate coronary plaques in patients with stable coronary heart disease. *J Cardiol.* 2010;55:296-302. IF 1.175
- 35) Iwasa M, Kobayashi H, Yasuda S, Kawamura I, Sumi S, Yamada Y, Shiraki T, Yamaki T, Ushikoshi H, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Anti-diabetic drug voglibose is protective against ischemia-reperfusion injury via GLP-1 receptors and PI3 kinase-Akt-eNOS pathway in rabbits. *J Cardiovasc Pharmacol.* 2010;55:625-634. IF 2.406
- 36) Yoshimura S, Kawasaki M, Yamada K, Enomoto Y, Hattori A, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. Demonstration of intraluminal thrombus in the carotid artery by optical coherence tomography. *Neurosurgery.* 2010;67:305. IF 3.298
- 37) Mori H, Ohno Y, Ito F, Funaguchi N, Yanase K, Endo J, Nakano M, Bai La BL, Minatoguchi S. Massive hematuria from the bilateral upper urinary tract in a patient treated for advanced lung cancer with gefitinib. *Jpn J Clin Oncol.* 2010;40:263-266. IF 1.856
- 38) Mori H, Ohno Y, Ito F, Endo J, Yanase K, Funaguchi N, Bai La BL, Minatoguchi S. Polymerase chain reaction positivity of pneumocystis jirovecii during primary lung cancer treatment. *Jpn J Clin Oncol.* 2010;40:658-662. IF 1.856
- 39) Mori H, Ohno Y, Tsuge Y, Kawasaki M, Ito F, Endo J, Funaguchi N, La BL, Kanematsu M, Minatoguchi S. Use of multidetector row CT to evaluate the need for bronchial arterial embolization in hemoptysis patients. *Respiration.* 2010;80:24-31. IF 2.543
- 40) Matsuno Y, Minatoguchi S, Fujiwara H, GIFU Substudy Group of The Case-J Trial. Effects of candesartan versus amlodipine on home-measured blood pressure, QT dispersion and left ventricular hypertrophy in high-risk hypertensive patients. *Blood Pressure.* 2011;Suppl 1:12-19. IF 1.256
- 41) Kawamura I, Takemura G, Tsujimoto A, Watanabe T, Kanamori H, Esaki M, Kobayasu H, Takeyama T, Kawaguchi T, Goto K, Maruyama R, Fujiwara T, Fujiwara H, Tabata Y, Minatoguchi S. Treatment of leg ischemia with biodegradable gelatin hydrogel microspheres incorporating granulocyte colony-stimulating factor. *J Cardiovasc Pharmacol.* 2011;57:416-423. IF 2.406
- 42) Onoue K, Zaima N, Sugiura Y, Isojima T, Okayama S, Horii M, Akai Y, Uemura S, Takemura G, Sakuraba H, Sakaguchi Y, Setou M, Saito Y. Using Imaging Mass Spectrometry to Accurately Diagnose Fabry's Disease. *Circ J.* 2011;75:221-223. IF 3.225
- 43) Yoshida M, Ohkusa T, Nakashima T, Takanari H, Yano M, Takemura G, Honjo H, Kodama I, Mizukami Y, Matsuzaki M. Alterations in adhesion junction precede gap junction remodeling during the development of heart failure in cardiomyopathic hamster. *Cardiovasc Res.* 2011;92:95-105. IF 6.051
- 44) Kawashima T, Inuzuka Y, Okada J, Kato T, Niizuma S, Tamaki Y, Iwanaga Y, Kawamoto A, Narazaki M, Matsuda T, Adachi S, Takemura G, Kita T, Kimura T, Shioi T. Constitutive SIRT1 overexpression impairs mitochondria and reduces cardiac function in mice. *J Mol Cell Cardiol.* 2011;51:1026-1036. IF 5.499
- 45) Takasugi N, Kubota T, Nishigaki K, Verrier RL, Kawasaki M, Takasugi M, Ushikoshi H, Hattori A, Ojio S, Aoyama T, Takemura G, Minatoguchi S. Continuous T-wave alternans monitoring to predict impending life-threatening cardiac arrhythmias during emergent coronary reperfusion therapy in patients with acute coronary syndrome. *Europace.* 2011;13:708-715. IF 1.842
- 46) Iwasa M, Yamada Y, Kobayashi H, Yasuda S, Kawamura I, Sumi S, Shiraki T, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara H, Minatoguchi S. Both stimulation of GLP-1 receptors and inhibition of glycogenolysis additively contribute to a protective effect of oral miglitol against ischaemia-reperfusion injury in rabbits. *Br J Pharmacol.* 2011;164:119-131. IF 4.925

- 47) Kanamori H, Takemura G, Maruyama R, Goto K, Ono K, Nagao K, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Kawasaki M, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Autophagy limits acute myocardial infarction induced by permanent coronary artery occlusion. *Am J Physiol Heart Circ Physiol*. 2011;300:2261-2271. IF 3.881
- 48) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Maruyama R, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. The role of autophagy emerging in postinfarction cardiac remodeling. *Cardiovasc Res*. 2011;91:330-339. IF 6.051
- 49) Bai Y, Muqier, Murakami H, Iwasa M, Sumi S, Yamada Y, Ushikoshi H, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Uno B, Minatoguchi S. Cilostazol protects the heart against ischaemia reperfusion injury in a rabbit model of myocardial infarction: Focus on adenosine, nitric oxide and mitochondrial KATP channels. *Clin Exp Pharmacol Physiol*. 2011;38:658-665. IF 1.960
- 50) Nakashima T, Takasugi N, Kubota T, Takasugi M, Kanamori H, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Kawaaski M, Nishigaki K, Takemura G, Minatoguchi S. 'Flase-positive' intrathoracic impedance monitor alarm caused by amiodarone-induced hypothyroidism in a patient with cardiac resynchronization therapy-defibrillator. *Europace*. 2011;74:1989-2020. IF 1.842
- 51) Yamada K, Kawasaki M, Yoshimura S, Enomoto Y, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Evaluation of Symptomatic Carotid Plaques by Tissue Characterization Using Integrated Backscatter Ultrasound and Magnetic Resonance Imaging. *Cerebrovasc Dis*. 2011;31:305-312. IF 2.987
- 52) Yoshimura S, Kawasaki M, Yamada K, Hattori A, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. OCT of human carotid arterial plaques. *J Am Coll Cardiol Img*. 2011;4:432-436. IF 5.528
- 53) Yamada K, Yoshimura S, Kawasaki M, Enomoto Y, Takano K, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Prediction of silent ischemic lesions after carotid artery stenting using virtual histology intravascular Ultrasound. *Cerebrovasc dis*. 2011;31:106-113. IF 2.987
- 54) Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Asano T, Kanematsu M, Takamatsu M, Hara A, Iwama T. High intensity signal on time of flight MR angiography indicates carotid plaques at high risk for cerebral embolism after stenting. *Stroke*. 2011;42:3132-3137. IF 5.756
- 55) Ohmori T, Suzuki A, Niwa T, Ushikoshi H, Shiraki K, Yoshida S, Ogura S, Itoh Y. Simultaneous determination of eight β -lactam antibiotics in human serum by liquid chromatography-tandem mass spectrometry. *J Chromatogr B Analyt Technol Biomed Life Sci*. 2011;879:1038-1042. IF 2.971
- 56) Osawa Y, Kanamori H, Seki E, Hoshi M, Ohtaki H, Yasuda Y, Ito H, Suetsugu A, Nagaki M, Moriwaki H, Saito K, Seoshima M. L-Tryptophan-mediated enhancement of susceptibility to nonalcoholic fatty liver disease is dependent on the mammalian target of rapamycin. *J Biol Chem*. 2011;286:34800-34808. IF 5.328

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：川崎雅規；科学研究費補助金基盤研究(C)；冠動脈不安定プラーク検出のための新しい三次元画像構築装置の開発と臨床応用；平成 20-22 年度；3,600 千円(1,300：1,400：900 千円)
- 2) 研究代表者：服部有博，研究分担者：湊口信也；科学研究費補助金基盤研究(C)：内因性 GLP-1 の虚血心筋保護作用の分子メカニズム解明とその臨床的重要性の研究；平成 22-24 年度；4,550 千円(1,950：1,690：910 千円)
- 3) 研究代表者：湊口信也，研究分担者：木曾 真，竹村元三；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：分子標的性ナノ DDS サイトカインと骨髄幹細胞ハイブリッド心筋組織再生治療の開発；平成 23 年度；2,000 千円
- 4) 研究代表者：湊口信也；臨床研究推進支援経費：ウサギ心筋梗塞モデルにおける抗血小板薬 cilostazol の心筋梗塞サイズ縮小効果に対する adenosine の役割；平成 23 年度；1,000 千円

2) 受託研究

- 1) 湊口信也，村田一知朗，森 麗；ブレディニン錠原発性糸球体疾患を原因とするネフローゼ症候群特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成 18-22 年度；630 千円：旭化成ファーマ(株)
- 2) 西垣和彦；シグマート注使用成績調査-急性心不全-(慢性心不全の急性増悪期を含む)；平成 20-22 年度；210 千円：中外製薬(株)
- 3) 西垣和彦；フクダ電子社製 PTCA カテーテル『サイクロン』製品性能調査；平成 21-22 年度；840 千円：フクダ電子
- 4) 西垣和彦；フクダ電子社製 PTCA カテーテル『サイクロン』製品性能調査；平成 21-22 年度；1,260 千円：フクダ電子
- 5) 湊口信也；献血ベニロンー I 使用成績調査(チャージ・ストラウス症候群，アレルギー性肉芽腫性血管炎)；平成 22-26 年度；168 千円：帝人ファーマ(株)
- 6) 湊口信也；献血ベニロンー I 使用成績調査(チャージ・ストラウス症候群，アレルギー性肉芽腫性血

- 管炎)(追加分)；平成 22-26 年度；84 千円：帝人ファーマ(株)
- 7) 青山琢磨：リピトール錠特定使用成績調査(Protocol No.LIP003)；平成 22-23 年度；315 千円：アステラス製薬(株)
 - 8) 西垣和彦：クリアクター注特定使用成績調査「急性肺塞栓に関する全例調査」(第二期)；平成 20-22 年度；157.5 千円：エーザイ(株)
 - 9) 村田一知朗：エポジン注透析導入前の腎性貧血特定使用成績調査(JET-STREAM)(実施要綱 No.EPO0901)；平成 22-25 年度；787.5 千円：中外製薬(株)
 - 10) 村田一知朗：ネスブ注射液ブランシリンジ特定使用成績調査保存期慢性腎臓患者における腎性貧血；平成 23-27 年度；252 千円：協和発酵キリン(株)
 - 11) 青山琢磨：ノルバスク錠, ノルバスク OD 錠使用成績調査(プロトコール No:A0531097)；平成 23-24 年度；210 千円：ファイザー(株)
 - 12) 湊口信也：エリミン副作用詳細調査；平成 23 年度；21 千円：大日本住友製薬(株)
 - 13) 湊口信也：レボトミン錠副作用詳細調査；平成 23 年度；21 千円：田辺三菱製薬(株)

3) 共同研究

- 1) 藤原久義, 川崎雅規：IB-IVUS 研究ネットワーク；平成 21-25 年度；30,000 千円(6,000：6,000：6,000：6,000：6,000 千円)：財団法人日本心臓財団多施設共同研究助成

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

湊口信也：

- 1) 日本循環器学会評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本循環制御医学会評議員(～現在)
- 4) 日本心不全学会評議員(～現在)
- 5) 日本心臓病学会評議員(～現在)
- 6) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 7) 日本高血圧学会評議員(～現在)
- 8) 日本心臓リハビリテーション学会理事・評議員(～現在)
- 9) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)

竹村元三：

- 1) 日本循環器学会評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本心不全学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)
- 6) 心筋生検研究会幹事(～現在)

西垣和彦：

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会幹事：心臓移植委員会・心臓移植適応検討小委員会(～現在)
- 3) 日本循環器学会情報広報委員会委員(～現在)
- 4) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 5) 日本循環器学会正会員代表(～現在)
- 6) 日本心血管インターベンション治療学会評議員(～現在)
- 7) 日本心血管インターベンション治療学会東海北陸支部代議員(～現在)
- 8) 日本心血管インターベンション治療学会専門医試験問題策定委員会委員(～現在)
- 9) 日本心不全学会評議員(～現在)
- 10) 日本心臓病学会評議員(～現在)

- 11) 日本心臓リハビリテーション学会評議員(～現在)
- 12) 日本循環器学会「冠動脈疾患におけるインターベンション治療の適応ガイドライン—待機的 PCI—改訂版」班員・事務局(～現在)
- 13) 日本循環器学会『急性心不全ガイドライン改訂版』協力員(～現在)
- 14) 日本循環器学会『虚血性心疾患に対するバイパスグラフトと手術術式の選択ガイドライン改訂版』班員(～現在)
- 15) 日本心臓リハビリテーション学会『急性心筋梗塞の入院心臓リハビリテーション標準プログラム策定部会』委員(～現在)
- 16) 東海地区心臓移植適応症例検討会委員(～現在)
- 17) 心臓移植関連学会協議会委員(日本循環器学会代表)(～現在)
- 18) 心臓移植施設認定審議委員会委員(日本循環器学会代表)(～現在)
- 19) 冠動脈血行再建術協議会(循環器内科代表)委員(～現在)

川崎雅規：

- 1) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本心血管画像動態学会評議員(～現在)
- 4) 日本超音波医学会評議員(～現在)

青山琢磨：

- 1) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)

服部有博：

- 1) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)

2) 学会開催

湊口信也：

- 1) 第 209 回日本内科学会東海地方会(平成 21 年 10 月, 岐阜)
- 2) 第 46 回日本内科学会生涯教育講演会(平成 21 年 10 月, 岐阜)
- 3) 日本循環器学会第 138 回東海・第 123 回北陸合同地方会(平成 23 年 11 月, 名古屋)

3) 学術雑誌

- 1) 日本心血管インターベンション治療学会雑誌『CVIT the official journal of Cardiovascular Intervention and Therapeutics』編集顧問(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

湊口信也：

- 1) 第 74 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 22 年 3 月, 京都, Morning Lecture「大動脈炎症候群の診断と治療」座長)
- 2) 第 16 回日本心臓リハビリテーション学会学術集会(平成 22 年 7 月, 鹿児島, ランチョンセミナー「循環器疾患における血小板凝集抑制の意義と ARB の可能性」座長)

竹村元三：

- 1) 第 82 回日本薬理学会年会(平成 21 年 3 月, 横浜, シンポジウム 8「心疾患における細胞死の意義と治療応用への可能性」演者)
- 2) 第 72 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 21 年 3 月, 大阪, Symposium 9 : Morphological Characterization and Functional Significance of Starvation-Induced Autophagy in Cardiac Myocytes: Symposist 演者)
- 3) 第 72 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 21 年 3 月, 大阪, ファイアサイドディスカッション: 心臓血管病理 2009「心筋生検標本の読み方」演者)
- 4) 第 209 回日本内科学会東海地方会(平成 21 年 10 月, 岐阜, 生涯教育講演会「心筋生検の読み方と今

的意義」 演者)

- 5) 第 74 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 22 年 3 月, 京都, Morning Lecture「心内膜心筋生検—いつ・どのような患者に?—」 演者)

西垣和彦:

- 1) 第 73 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 21 年 3 月, 大阪, 第 5 回心臓移植セミナー特別講演「報告: わが国の心臓移植の現状—日本循環器学会心臓移植委員会予後継続調査結果から—」 演者)
- 2) 第 73 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 21 年 3 月, 大阪, シンポジウム 3 招待シンポジウム「PCI plus medical therapy reduces the incidence of acute coronary syndrome more effectively than initial medical therapy only」 演者)
- 3) 第 73 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 21 年 3 月, 大阪, APSC-JCS ジョイントシンポジウム招待シンポジウム「Good prognosis for Japanese heart transplant recipients - A statement from the Japanese Circulation Society Heart Transplant committee-」 演者)
- 4) CVIT2009 第 18 回日本心臓血管インターベンション治療学会学術集会(平成 21 年 6 月, 札幌, ランチオンセミナー(LS7), 「今, 新たに注目される冠攣縮—その診断と治療—」 座長)
- 5) 日本心臓血管インターベンション治療学会(CVIT)東海北陸地方会(平成 21 年 10 月, 愛知, ライブデモンストレーション, コメンテーター)
- 6) 第 74 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 22 年 3 月, 京都, 第 6 回心臓移植セミナー特別講演「改正臓器移植法施行後の心臓移植医療—システムの構築とその問題点— 報告: わが国の心臓移植の現状と問題点」 演者)
- 7) 第 74 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 22 年 3 月, 京都, Morning Lecture10 招待講演「改正臓器移植法によりわが国の移植医療はどのようにかわるか」 演者)
- 8) 第 16 回日本血管内治療学会総会(平成 22 年 7 月, 名古屋, シンポジウム 5 招待シンポジウム「Positioning of the DES in the JCS PCI Guideline—From the Evidences such as JCYPHER Registry—」 演者)
- 9) CVIT2010 第 19 回日本心臓血管インターベンション治療学会学術集会(平成 22 年 8 月, 仙台, 特別企画 NPO 法人日本心臓リハビリテーション学会企画セッション招待講演「虚血性心疾患の冠動脈血行再建と心臓リハビリテーション—循環器医として患者さんのために今できること—」 演者)
- 10) 第 58 回日本心臓病学会学術集会(平成 22 年 9 月, 東京, JCC-ACC ジョイントシンポジウム招待シンポジウム「Treatment for chronic coronary artery disease—intensive medical therapy alone vs. plus PCI—」 演者)
- 11) 第 58 回日本心臓病学会学術集会(平成 22 年 9 月, 東京, 特別企画 4 特別講演「日本循環器学会心臓移植委員会ならびに心臓移植実施施設審議会報告」 演者)
- 12) 第 4 回日本循環器学会プレスセミナー(平成 22 年 9 月, 東京, 特別講演「改正臓器移植法の改正点とわが国の心臓移植の現状」 演者)
- 13) 第 75 回日本循環器学会総会・学術集会(平成 23 年 8 月, 横浜, シンポジウム 2 招待シンポジウム「Characteristics of Patients with Urgent Vasospastic Angina」 演者)
- 14) 日本心臓血管インターベンション治療学会第 26 回東海北陸地方会(平成 23 年 10 月, 愛知, 招待講演「今, 再び注目されるエビデンス—EPA の冠動脈イベント抑制への役割—」 演者)
- 15) 日本心臓血管インターベンション治療学会第 26 回東海北陸地方会(平成 23 年 10 月, 愛知, パネルディスカッション特別講演「抗凝固薬による血栓対策」 演者)

川崎雅規:

- 1) The 60th International Medical Conference(2009.05, Seoul, Tissue Characterization of Coronary Plaques Using Integrated Backscatter Intravascular Ultrasound ; Lecture)
- 2) The 17th Asian Pacific Congress of Cardiology(2009.05, Kyoto, Symposium : Detection of vulnerable plaques using integrated backscatter intravascular ultrasound, 演者)
- 3) The 3rd Coronary Intravascular Ultrasound 2009(2009.06, Gwangju, Integrated Backscatter Intravascular Ultrasound ; Lecture)
- 4) 第 18 回日本心臓血管インターベンション治療学会学術集会(平成 21 年 6 月, 札幌, パネルディスカッション: IB-IVUS Update, 演者)
- 5) 日本心臓血管インターベンション治療学会東海北陸地方会(平成 21 年 10 月, 名古屋, Imaging 教育プログラム: Update of IB-IVUS, 演者)

- 6) The 8th International Congress on Coronary Artery Disease(2009.10, Prague, Plenary Session : Diagnostic accuracy of optical coherence tomography and integrated backscatter intravascular ultrasound images for tissue characterization of human coronary plaques, 演者)
- 7) International Congress of Cardiology(2009.12, Shanghai, Tissue Characterization of Coronary Plaques Using Integrated Backscatter Intravascular Ultrasound ; Lecture)
- 8) 第 73 回日本循環器学会総会(平成 21 年 3 月, 京都, シンポジウム : New image reconstruction methods of optical coherence tomography for the analysis of culprit lesion in acute coronary syndrome, 演者)
- 9) 第 73 回日本循環器学会総会(平成 21 年 3 月, 京都, ミート・ザ・エキスパート「Tissue Characterization of Coronary Plaque Using Integrated Backscatter Intravascular Ultrasound」演者)
- 10) 第 20 回日本心血管画像動態学会(平成 22 年 1 月, 東京, シンポジウム「IB-IVUS による冠動脈プラークの vulnerability 評価」演者)
- 11) 第 73 回日本循環器学会総会(平成 22 年 3 月, 京都, ランチョンセミナー「IB-IVUS 搭載 VISIWAVE IVUS の有用性と今後の展望」演者)
- 12) 第 73 回日本循環器学会総会(平成 22 年 3 月, 京都, シンポジウム「New image reconstruction methods of optical coherence tomography for the analysis of culprit lesion in acute coronary syndrome」演者)
- 13) 第 73 回日本循環器学会総会(平成 22 年 3 月, 京都, ミート・ザ・エキスパート「Tissue Characterization of Coronary Plaque Using Integrated Backscatter Intravascular Ultrasound」演者)
- 14) 第 83 回日本超音波医学会(平成 22 年 5 月, 京都, シンポジウム「超音波 integrated backscatter 三次元画像による冠動脈プラークの組織性状診断」演者)
- 15) The 4th. Coronary Intravascular Ultrtrasound(2010.06, Seoul, Panel discussion:Progression / regression of unstable / ruptured lesions; Chairperson)
- 16) The 4th. Coronary Intravascular Ultrtrasound(2010.06, Seoul: Tissue Characterization of Coronary Plaques Using IB-IVUS and OCT; Lecturer)
- 17) 日本心血管インターベンション治療学会(平成 22 年 8 月, 仙台, ランチョンセミナー「IB-IVUS 搭載型 Visiwave の評価と有用性」演者)
- 18) 第 24 回日本心臓血管内視鏡学会(平成 22 年 10 月, 東京, シンポジウム「Visiwave 対応型 Integrated Backscatter 血管内超音波の開発と OCT との比較による冠動脈プラーク繊維性被膜の厚みの測定」演者)
- 19) 第 21 回日本心血管画像動態学会学術集会(平成 23 年 1 月, 松山, シンポジウム「IB-IVUS による冠動脈プラークの vulnerability 評価」演者)
- 20) 平成 23 年度日本病態栄養学会教育セミナー(平成 23 年 6 月, 岐阜, 招聘講師「循環器疾患・腎疾患」演者)
- 21) The 5th Coronary Intravascular Ultrasound2011(平成 23 年 6 月, Gwangju, 招聘講演「Tissue Characterization of Coronary Plaques Using IB-IVUS and OCT」Lecturer)
- 22) 第 83 回日本動脈硬化学会学術集会(平成 23 年 7 月, 札幌, シンポジウム「超音波 integrated backscatter 三次元画像による冠動脈プラークの組織性状診断」演者)
- 23) 第 74 回日本循環器学会総会学術集会(平成 23 年 8 月, 横浜, ランチョンセミナー「IB-IVUS 搭載 VisiWave IVUS の臨床的有用性と今後の展望」演者)
- 24) 第 24 回日本心臓病学会学術集会(平成 23 年 10 月, 神戸, シンポジウム「VISIWAVE 対応型 Integrated Backscatter 血管内超音波装置の開発と三次元 IB-IVUS 画像の進歩」演者)
- 25) 第 25 回日本循環器病サミット最先端学会(平成 23 年 10 月, 京都, 招聘講演「超音波 Integrated backscatter による動脈硬化病変の組織性状診断と臨床応用」演者)

服部有博：

- 1) 日本心血管インターベンション治療学会(CVIT)第 23 回東海北陸地方会(平成 22 年 5 月, 岐阜, パネル講演「ステントの選択からオーダーメイド医療を考えるー当院でのステントセレクションー」演者)
- 2) CVIT 第 26 回東海北陸地方会(平成 23 年 10 月, 名古屋, ランチョンセミナー「冠動脈複雑病変に対する PCI 治療戦略」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 西垣和彦：日本心臓病学会 2009 年 Clinical Research Award 内科治療部門最優秀論文賞(平成 21 年度)
- 2) 川崎雅規：日本循環器学会 Circulation Journal Best Reviewers Awards of the Year 2009(平成 21 年度)
- 3) 湊口信也：公益財団法人福田記念医療技術振興財団共同研究助成(平成 22 年度)
- 4) 竹村元三：日本医師会医学研究助成(平成 22 年度)
- 5) 川崎雅規：財団法人地域医学研究基金研究助成奨励賞(平成 22 年度)
- 6) 川崎雅規：日本循環器学会 Circulation Journal Award Clinical Investigation 部門優秀賞(平成 22 年度)
- 7) 久保田知希：内科学会奨励賞(平成 22 年度)
- 8) 田中新一郎：第 7 回日本心臓リハビリテーション学会 Young Investigator Award(YIA)優秀賞(平成 22 年度)
- 9) 名和隆英：American Heart Association2011 最優秀ポスター賞(平成 23 年度)
- 10) 横山ちはる：日本循環器学会 AHA 年次学術集会の発表に対する国際交流助成(平成 23 年度)
- 11) 横山ちはる：American Heart Association-Funded Research(平成 23 年度)

9. 社会活動

湊口信也：

- 1) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 2) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)
- 3) 厚生労働省医政局研究開発振興課「ヒト幹細胞臨床研究に関する審査委員会」委員(～現在)
- 4) 内閣府社会還元加速プロジェクト「失われた人体機能を再生する医療の実現」のタスクフォース(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究が順調に進行し、AHA, ESC などの国際学会にも多くの演題が採択された。さらに、世界の一流のジャーナルに多くの論文が出版され、2009 年は英文論文数 22 でインパクトファクターが 85 点、2010 年は英文論文数 17 でインパクトファクターが 65.398 点、2011 年は英文論文数 20 でインパクトファクターが 73.301 点であった。

現状の問題点及びその対応策

多数の大学院生や研究者を抱えているため、デスクやスペースの確保、十分な研究費を確保することが課題である。臨床、教育、研究のいずれにも時間を費やすため、研究のみに十分な時間があるとは言いがたい。デスクやスペースの確保については工夫を行うことにより、また研究費確保についてはより質の高い研究成果を発信することにより科研費など多くの公的資金を獲得できるように努力する。

今後の展望

高齢化と生活様式の欧米化により、循環器疾患、腎疾患は増加の一途を辿っている。循環器疾患、腎疾患の発生メカニズムを動物実験、臨床研究を通じて解明し、その治療法を開発し臨床応用につなげていくことが重要であると思う。今後は、分子生物学的手法、遺伝子的手法を駆使し、当該領域における骨髄幹細胞、間葉系幹細胞、サイトカイン、DDS、ナノテクノロジーなどを用いた効率的な再生医療の開発、microRNA を利用した組織修復医療の開発などの translational research が益々重要になると予測され、時代の最先端を走るべくさらに活発な研究活動を行っていかなくてはならないと考えている。

(4) 呼吸病態学分野

1. 研究の概要

1. 再生医学・再生医療

- 1) Erythropoietin を用いた COPD モデルマウスおよび培養肺胞上皮細胞に対する再生医学的研究
- 2) PDE-4 阻害薬を用いた COPD モデルマウスに対する再生医学的検討
- 3) PDE-4 阻害薬を用いた気管支喘息モデルマウスに対する再生医学的検討
- 4) 肺癌移植モデルマウスの抗癌剤 (CDDP) 投与下における G-CSF の腫瘍増殖における影響についての検討

2. アポトーシス, オートファジー

- 1) 呼吸器疾患とアポトーシス: COPD における FAS の役割の解明
- 2) COPD における気道上皮, 肺血管上皮, 肺胞上皮細胞のオートファジーの役割の解明

3. 東洋医学的アプローチ

- 1) 気管支喘息患者, COPD 患者に対する鍼治療の有効性の評価
- 2) 癌化学療法後の副作用軽減療法としての鍼治療の有効性の評価
- 3) 気管支喘息モデル, ヒト花粉症患者, 気管支喘息患者におけるじゃばらみかんの抗アレルギー作用の解明, 抗アレルギー薬, 抗喘息薬の開発
- 4) 人工呼吸器装着患者のウィーニングに対する鍼治療の有効性の評価

4. 呼吸器内視鏡を用いた臨床研究

- 1) 肺癌手術症例における腫瘍組織の超音波内視鏡下 IB-IVUS による組織性状診断法の開発
- 2) 蛍光内視鏡: NBI (Narrow Banding Image 法) を用いて HRCT, 病理組織所見と対比し, 良性疾患 (サルコイドーシス等), 悪性疾患 (原発性肺癌, 転移性肺癌, 気管発生肉腫等) の鑑別および進達度診断法の開発
- 3) 超音波内視鏡, NBI 法および HRCT および病理組織と対比し食道癌の気管浸潤の有無, 手術適応の有無の評価法の開発
- 4) BALF (Broncho-aleveolar-fluid) による免疫機能測定による肺 MAC 症の病態の解明, 免疫応答および診断的意義の検討

5. MDCT による気道, 腫瘍病変の臨床研究

- 1) COPD 症例の MDCT における AZE 気道解析ソフトを用いた ICS /LABA による気道病変への有効性の検討
- 2) 肺 MAC 症例における MDCT による AZE 気道解析ソフトを用いた気道病変による重症度分類の開発
- 3) 肺線維症例における MDCT による AZE 気道解析ソフトを用いた牽引性気管支拡張末梢気道から肺胞病変の病態の解明
- 4) 肺癌, 良性肺腫瘍症例における MDCT による AZE 腫瘍解析ソフト, IB-IVUS を用いた腫瘍組織性状の検討

6. 肺癌治療法の開発

- 1) II, IIIA 期非小細胞肺癌術後化学療法における CDDP+VNB Bi-weekly 療法の意義の検討
- 2) IIIB, IV 期非小細胞肺癌症例における CBDCA+GEM Bi-weekly 療法の意義の検討
- 3) 肺癌患者における末梢リンパ球を用いた免疫治療法および予後予測法の開発
- 4) 進行期肺癌患者のプラチナ製剤を含む化学療法時における塩酸アザセトロンとグラニセトロンの有効性の無作為割り付け比較試験
- 5) 肺癌化学療法時の骨髄抑制と骨塩量の関係についての検討

7. 肺真菌感染症治療法の開発

- 1) 肺アスペルギル症患者におけるポリコナゾールとイトラコナゾールの有効性比較の無作為割り付け多施設共同研究

8. 気管支喘息治療法の開発

- 1) 気管支喘息患者の SABA レスキューユースにおける ADL の評価, 多施設共同研究

2. 名簿

教授:	湊口信也	Shinya Minatoguchi
臨床准教授:	大野 康	Yasushi Ohono
臨床講師:	舟口祝彦	Norihiko Funaguchi
医員:	伊藤文隆	Fumitaka Ito

医員： 遠渡純輝 Junki Endo
医員： 神谷文彦 Fumihiko Kamiya
医員： 柳瀬恒明 Koumei Yanase

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 大野 康. 胸腺腫瘍－浸潤性胸腺腫－, 日本臨床 2009年; 10巻: 443-445.
- 2) 大野 康. 肺は再生するか－気道系の形態変化を中心に－, THE LUNG perspectives 2009年; 17巻: 378-381.
- 3) 大野 康. 大学生向け 健康啓発本 呼吸器分野, 2009年.
- 4) 大野 康. 特別企画; ICS の普及に続き, BUD/FM 配合剤が開く気管支喘息の Next Stage, Medical Tribune 2010年.
- 5) 大野 康. 日本呼吸器学会 50周年記念誌「肺の幹細胞」, 日本呼吸器学会雑誌 2010年; 48巻.
- 6) 大野 康. 呼吸器とアレルギー疾患, 岐阜県医師会雑誌 2011年; 24巻: 53-57.
- 7) 大野 康. 気管支喘息のよりよい治療とは, Medical Tribune 2011年; 1-4.
- 8) 大野 康. 最新の COPD の診断と治療, 内科会だより 2011年; 1-3.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 森 秀法, 大野 康, 吉川武志, 伊藤文隆, 遠渡純輝, 舟口祝彦, 湊口信也. 椎体破壊を伴った Sarcoidosis-Lymphoma Syndrome の 1 例, 日本呼吸器学会雑誌 2009年; 47巻: 1057-1062.
- 2) 佐藤正夫, 清水克時, 森 秀法, 大野 康. 生物学製剤使用中に肺クリプトコッカス症を生じた関節リウマチの一例, 臨床リウマチ 2009年; 21巻: 396-398.
- 3) 松本 淳, 金子聡一郎, 村田一知朗, 鎌田 剛, 川久保勲, 赤尾清剛, 大野 康, 湊口信也, 藤原久義. 大学病院内科病棟における鍼灸治療の利用状況について－岐阜大学 循環・呼吸・腎臓内科における依頼状況を中心とした報告－, 全日本鍼灸学会雑誌 2009年; 59巻: 125-133.

原著（欧文）

- 1) Mori H, Tanaka H, Ohno Y, Ito F, Funaguchi N, Endo J, La BL, Minatoguchi S. Effect of intermittent systemic corticosteroid on bone metabolism in bronchial asthma patients. J Asthma. 2009;46:142-146. IF 1.330
- 2) Mori H, Ohno Y, Ito F, Funaguchi N, Yanase K, Endo J, Nakano M, Bai La BL, Minatoguchi S. Massive hematuria from the bilateral upper urinary tract in a patient treated for advanced lung cancer with gefitinib. Jpn J Clin Oncol. 2010;40:263-266. IF 1.856
- 3) Mori H, Ohno Y, Ito F, Endo J, Yanase K, Funaguchi N, Bai La BL, Minatoguchi S. Polymerase chain reaction positivity of pneumocystis jirovecii during primary lung cancer treatment. Jpn J Clin Oncol. 2010;40:658-662. IF 1.856
- 4) Mori H, Ohno Y, Tsuge Y, Kawasaki M, Ito F, Endo J, Funaguchi N, La BL, Kanematsu M, Minatoguchi S. Use of multidetector row CT to evaluate the need for bronchial arterial embolization in hemoptysis patients. Respiration. 2010;80:24-31. IF 2.543

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：大野 康, 研究分担者：湊口信也；科学研究費補助金基盤研究(C)：エリスロポイエチンによる COPD 再生治療；平成 22-24 年度；3,200 千円(1,900：700：600 千円)
- 2) 研究代表者：萩原弘一, 研究分担者：杉山幸比古, 貫和敏博, 岡崎康司, 田口善夫, 谷口博之, 本間栄, 吾妻安良太, 井上義一, 小林国彦, 桑野和義, 藤田結花, 稲瀬直彦, 林 龍二, 岸 一馬, 鈴木朋子, 千葉弘文, 今野 哲, 小暮啓人, 森 秀法；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業；薬剤性肺障害および特発性肺線維症急性増悪に関与する日本人特異的遺伝素因に関する研究；平成 22-23 年度；550 千円(300：250 千円)

2) 受託研究

- 1) 大野 康：アリムタ注射用 500 mg 特定使用成績調査；平成 19－21 年度；63 千円：日本イーライリリー(株)
- 2) 大野 康：アリムタ注射用 500 mg 特定使用成績調査(悪性胸膜中皮腫)(追加分)；平成 19－21 年度；63 千円：日本イーライリリー(株)
- 3) 大野 康：イトリゾール注 1% 使用成績調査；平成 20－22 年度；210 千円：ヤンセンファーマ(株)
- 4) 大野 康，舟口祝彦，遠渡純輝，森 秀法，伊藤文隆：ジュニナック錠 200 mg 使用成績調査；平成 20－21 年度；105 千円：大正富山医薬品(株)
- 5) 大野 康：ユーエフティ特定使用成績調査(非小細胞肺癌術後補助療法における服薬状況調査)；平成 20－23 年度；157.5 千円：大鵬薬品工業(株)
- 6) 大野 康，舟口祝彦，森 秀法，遠渡純輝：ピレスパ錠 200 mg 特定使用成績調査(全例調査)；平成 21－23 年度；1,575 千円：塩野義製薬(株)
- 7) 大野 康：レバチオ錠 20 mg 特定使用成績調査－長期使用に関する調査；平成 21 年度；63 千円：ファイザー(株)
- 8) 大野 康：気腫病変を有する慢性閉塞性肺疾患(COPD)患者を対象とした OPC-6535 の第Ⅱ相，国際共同，多施設，無作為化，二重盲検，プラセボ対照，並行群間容量検討試験；平成 21－24 年度；22,176 千円：大塚製薬(株)
- 9) 大野 康：ゾレア皮下注用特定使用成績調査(気管支喘息)；平成 21－23 年度；126 千円：ノバルティスファーマ(株)
- 10) 大野 康：ゾレア皮下注用特定使用成績調査(気管支喘息)；平成 21－23 年度；63 千円：ノバルティスファーマ(株)
- 11) 大野 康：ネクサバール錠副作用報告；平成 21 年度；231 千円：バイエル薬品(株)
- 12) 舟口祝彦：ペンタサ錠 500 mg による副作用調査；平成 21 年度；21 千円：杏林製薬株式会社
- 13) 大野 康：タダラフィル(アドシルカ錠)特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成 22－26 年度；94.5 千円：日本新薬(株)
- 14) 大野 康：グレースビット錠・細粒使用成績調査；平成 22 年度；105 千円：第一三共(株)
- 15) 伊藤文隆：ナバルピン注の副作用・感染症詳細調査；平成 22 年度；21 千円：協和発酵キリン(株)
- 16) 大野 康：ゾシン静注用 2.25, 4.5 使用成績調査；平成 22－23 年度；105 千円：大正富山医薬品(株)
- 17) 大野 康：トラクリア錠 62.5 mg 特定使用成績調査(長期)；平成 21－26 年度；157.5 千円：アクテリオン(株)
- 18) 大野 康：ペメトレキセド非小細胞肺癌特定使用成績調査；平成 21－24 年度；189 千円：日本イーライリリー(株)
- 19) 大野 康：タルセバ錠特定使用成績調査(追加分)；平成 20－22 年度；661.5 千円：中外製薬(株)
- 20) 大野 康：クリアクター注特定使用成績調査「急性肺塞栓症に関する全例調査」(第二期)；平成 20－22 年度；157.5 千円：エーザイ(株)
- 21) 大野 康：タルセバ錠特定使用成績調査；平成 20－22 年度；472.5 千円：中外製薬(株)
- 22) 大野 康：アズマネックスツイストヘラー特定使用成績調査(長期使用)；平成 22－26 年度；94.5 千円：シュERINGプラウ(株)
- 23) 大野 康：アズマネックスツイストヘラー使用成績調査；平成 22－25 年度；105 千円：シュERINGプラウ(株)
- 24) 大野 康：トラクリア錠 62.5 mg 特定使用成績調査(長期)；平成 21－26 年度；315 千円：アクテリオン(株)
- 25) 大野 康：リコモジュリン点滴静注用 12800 特定使用成績調査(固定癌 DIC に対する調査)；平成 23－25 年度；94.5 千円：旭化成ファーマシ(株)
- 26) 大野 康：オキシコチン錠 40 mg/日以上投与症例に関する特定使用成績調査；平成 23－24 年度；157.5 千円：塩野義製薬(株)
- 27) 大野 康：ヴォリブリス錠 2.5 mg 使用成績調査；平成 23－26 年度；315 千円：グラクソ・スミスクライン(株)
- 28) 舟口祝彦：リユープリン有害事象詳細調査；平成 23 年度；21 千円：武田薬品工業(株)
- 29) 大野 康：ペメトレキセド非小細胞肺癌特定使用成績調査；平成 23－24 年度；189 千円：日本イーライリリー(株)
- 30) 大野 康：ユーエフティ特定使用成績調査(非小細胞肺癌術後補助療法における服薬状況調査)；平成 21－23 年度；189 千円：大鵬薬品工業(株)

3) 共同研究

- 1) 大野 康 : Elastase 障害肺気腫モデルマウスに対する Montelukast による有効性の検討 ; 平成 20 - 22 年度 ; 1,788,743 円 : 万有製薬(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

大野 康 :

- 1) 日本呼吸器学会評議員・プログラム委員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本肺癌学会評議員・気管支鏡所見分類委員(～現在)
- 4) 日本呼吸器内視鏡学会幹事(～現在)

2) 学会開催

大野 康 :

- 1) 第 40 回日本呼吸器内視鏡学会中部支部会(平成 22 年 12 月, 愛知)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

大野 康 :

- 1) 第 40 回日本呼吸器内視鏡学会中部支部会(平成 22 年 12 月, 愛知, パネルディスカッション「呼吸器内視鏡学会の診断と画像」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

呼吸器領域の中でも肺癌, COPD, 気管支喘息, 感染症を中心に研究を行った。動物実験では再生医学を用いた治療薬の開発, ヒトでは新たな診断法の開発, 治療法の開発を行った。成果は国内, 海外雑誌に出版され, 国際学会でも発表し, 多くの研究費を獲得した。臨床研究として超音波内視鏡, 蛍光内視鏡等を用いた肺癌の診断を行い。県内外から依頼を受け, 症例の蓄積を行っている。

現状の問題点及びその対応策

呼吸病態学は小人数にて多くの研究を行っているが, デスクやスペースを確保することが困難な状態である。また, 臨床, 教育, 研究のいずれにも多くの時間を費やすため, 研究に十分な時間があるとは言いがたい。研究スペースの確保と研究者の増員が急務である。

今後の展望

急速な高齢化社会の到来により肺癌, COPD, 呼吸器感染症は増加の一途を辿っている。それぞれの病

気のメカニズム，病態を動物実験，臨床研究を通じて解明し，診断，治療に応用していくことが重要である。今後，呼吸器疾患分野において，細胞死（アポトーシス），細胞変性（オートファジー）および細胞，組織の再生を行うことがますます重要なテーマとなることが予測される。従って我々はこの点を十分認識し，細胞，分子生物学的手法を駆使し新しいデバイスを導入して，さらに活発な研究活動を行っていく。

(5) 高度先進外科学分野

1. 研究の概要

冠動脈バイパス術におけるグラフト選択は重要な課題であり、長期予後を決定する。内胸動脈は既に長期開存が良好であることが証明されているが、その使用には数の制限、年齢による制限がある。一方静脈グラフトの長期開存率は不良であるが、未だに有用なグラフトである。その静脈グラフトの長期開存の改善のために、内皮増殖、内膜増殖を抑制できれば画期的な研究になる。教室では動物バイパスモデルを作製し、抗癌剤、抗生物質の投与が、内膜増殖を抑制することを証明した。今後臨床応用への発展を図る。また冠動脈あるいは下肢動脈における血管新生医療は今後も重要なテーマである。教室では大網の VEGF に着目し、心筋梗塞モデルを作製し、G-CSF 全身投与と大網ラッピングによる血管新生の相乗効果を証明した。一方大動脈瘤の瘤拡大の制御は臨床においても重要であり、現在ラット腹部大動脈瘤モデルを作製し FGF 徐放シートによって制御できるか否か検討中である。

消化器外科では、肝切除後の肝再生促進に関する検討を多方面から行っている。ラット肝切除モデルを用いて漢方薬または PGI₂ の投与による肝再生促進効果を確認した。また、肝再生のメカニズムの解明のために LPS 耐性ラットの肝再生能を肝内サイトカインの profiling にて検討している。肝循環の効果的な制御により肝再生促進効果を検討している。一方、腸管穿孔による腹膜炎の制御のためにマイクロバブルの炎症制御のメカニズムを解明している。

肺葉切除後の肺動脈血管床減少による右心負荷はしばしば遭遇する合併症である。動物での肺葉切除モデルを作製し、G-CSF を用いた肺切除後の肺再生促進効果を検討した結果、右心負荷の軽減、右室心筋重量増加の抑制ができ、肺動脈新生の証明ができた。現在、大量肺切除後にエリスロポエチン投与により右心不全を改善するか否かを検討している。

以上、臨床上の課題に対して基礎実験を行いつつ、心臓血管外科、呼吸器外科、消化器外科の領域で臨床応用を目指した研究を行っている。

2. 名簿

教授：	竹村博文	Hirofumi Takemura
准教授：	岩田 尚	Hisashi Iwata
講師：	關野考史	Takafumi Sekino
講師：	島袋勝也	Katsuya Shimabukuro
助教：	村瀬勝俊	Katsutoshi Murase
助教：	白橋幸洋	Koyo Shirahashi
助教：	松野幸博	Yukihiro Matsuno
助教：	石田成史洋	Narihiro Ishida
助教：	木村真樹	Masaki Kimura
助教：	名知 祥	Sho Nachi
助教：	水野吉雅	Yoshimasa Mizuno
医員：	井原 頌	Sho Ihara
医員：	關野誠史郎	Seishiro Sekino
医員：	松井雅史	Masafumi Matsui
医員：	荒川友希	Yuki Arakawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 竹村博文. 冠血行再建術 - 術前・術中・術後管理 - : 龍野勝彦, 重松 宏, 幕内晴朗, 四津良平, 安達秀雄編. 心臓血管外科テキスト改訂 2 版, 東京: 中外医学社; 2011 年: 250-256.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 竹村博文. 動脈外科の術前リスク管理, 日本冠疾患学会雑誌 2009 年; 15 卷: 179-184.
- 2) 竹村博文. 心臓血管外科の最前線, 岐阜大学医学部記念会館だより 2009 年; 90 号: 15-18.
- 3) 岩田 尚, 白橋幸洋, 水野吉雅, 松本真介, 丸井 努, 竹村博文. 肺癌における FDG-PET の有用性とその問題点について, 臨床外科 2010 年; 65 卷: 200-206.
- 4) 關野考史. 結腸切除術にドレーンは必要か?, 外科治療 2010 年; 102 卷: 161-162.

- 5) 早川麻理子, 西村佳代子, 山田卓也, 岩田 尚, 竹村博文. 栄養アセスメントツールの対象患者と効果的な活用, 静脈経腸栄養 2010年; 25巻: 13-16.
- 6) 岩田 尚, 白橋幸洋, 竹村博文, 大野貴敏, 広瀬善信. 胸壁腫瘍, 最新医学・別冊新しい診断と治療の ABC 2010年; 68巻: 129-137.
- 7) 竹村博文. 橈骨動脈グラフト採取のコツ, 胸部外科 2010年; 63巻: 1123.
- 8) 加藤喜彦, 山田卓也, 關野考史, 木村真樹, 竹村博文. RS3PE 症候群の発症を契機に発見された早期 S 状結腸癌の 1 例, 手術 2011年; 65巻: 533-536.
- 9) 關野考史, 竹村博文. Merseburg の三主徴と Basedow 病(Graves 病), 外科 2011年; 73巻: 1298-1300.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 宮内忠雅, 島袋勝也, 村上栄司, 福本行臣, 石田成吏洋, 竹村博文. 胸肋鎖骨肥厚症により内胸動脈剥離が困難であった 1 例, 日本心臓血管外科学会雑誌 2009年; 38巻: 60-63.
- 2) 竹村博文. 最近の冠動脈バイパス術, 岐阜市医師会だより 2009年; 41巻: 8-11.
- 3) 小久保健太郎, 山田卓也, 木村真樹, 吉田直優, 關野考史, 竹村博文. 静脈瘤塞栓術が著効をみた人工肛門静脈瘤の 1 例, 日本臨床外科学会雑誌 2009年; 70巻: 147-150.
- 4) 島袋勝也, 石田成吏洋, 松野幸博, 竹村博文. 松葉杖による上肢動脈閉塞症に対して血栓除去術を施行した 1 例, 血管外科症例検討会雑誌 2009年; 28巻: 131-135.
- 5) 松本真介, 岩田 尚, 白橋幸洋, 水野吉雅, 松井雅史, 竹村博文. 転移リンパ節から主肺動脈内に進展した肺扁平上皮癌の 1 例, 日本呼吸器外科学会雑誌 2010年; 24巻: 52-57.
- 6) 竹村博文. 岐阜県医師会外科医部会の最近の活動について, 岐阜県医師会報 2010年; 700巻: 19.
- 7) 石田成吏洋, 島袋勝也, 松野幸博, 竹村博文. 左肺癌と高度内頸動脈狭窄を合併した左冠動脈主幹部病変に対して一期的に冠動脈バイパス術および左肺癌手術を施行した 1 例, 日本冠疾患学会雑誌 2010年; 16巻: 142-145.
- 8) 松本茂美, 奥村洋子, 清島真理子, 熊田恵介, 吉田隆浩, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 女性医師・女子医学生を意識調査と女性医師就労支援の会の設立, 月刊地域医学 2010年; 24巻: 674-681.
- 9) 石田成吏洋, 島袋勝也, 松野幸博, 竹村博文. 左椎骨動脈大動脈起始を伴う大動脈解離に対して別個の 1 本グラフトで弓部分枝を島状再建した上行弓部置換術の 1 例, 日本心臓血管外科学会雑誌 2010年; 39巻: 318-320.
- 10) 豊田和孝, 岡本 淳, 川村和也, 小林 洋, 竹村博文, 藤江正克. 心拍同期機能を有したマスタ・スレーブ型手術ロボットシステムの開発(位置同期性能および同期縫合操作性の評価), 日本機械学会論文集(C 編) 2011年; 77巻: 195-207.

原著 (欧文)

- 1) Sugimoto T, Yamada T, Iwata H, Sekino T, Matsumoto S, Ishida N, Manabe H, Kimura M, Takemura H. Two-stage portal vein ligation facilitates liver regeneration in rats. Eur Surg Res. 2009;42:181-188. IF 1.214
- 2) Murakami E, Iwata H, Imaizumi M, Takemura H. Prevention of arterial graft spasm by botulinum toxin: an in-vitro experiment. Interact Cardiovasc Thorac Surg. 2009;9:395-398.
- 3) Kimura M, Yamada T, Iwata H, Sekino T, Shirahashi K, Yoshida N, Kiyama S, Takemura H. Preoperative granulocyte-colony stimulating factor (G-CSF) treatment improves congested liver regeneration. J Surg Res. 2010;158:132-137. IF 2.239
- 4) Matsumoto S, Iwata H, Shirahashi K, Saio M, Umeda Y, Marui T, Ishida N, Kimura M, Sugimoto T, Manabe H, Takemura H. Suppression of right ventricular hypertrophy after extensive pulmonary resection in rats by granulocyte colony-stimulating factor. J Surg Res. 2010;162:153-159. IF 2.239
- 5) Ishida N, Iwata H, Shimabukuro K, Murakami E, Matsumoto S, Manabe H, Takemura H. Effects of omentopexy combined with granulocyte colony-stimulating factor in a rabbit heart model. Eur J Cardiothorac Surg. 2011;39:375-380. IF 2.293
- 6) Mizuno Y, Iwata H, Shirahashi K, Hirose Y, Takemura H. Pulmonary epithelioid emangioendothelioma. Gen Thorac Cardiovasc Surg. 2011;59:297-300.
- 7) Ishida N, Takemura H, Shimabukuro K, Matsuno Y. Complete resection of asymptomatic solitary right atrial metastasis from renal cell carcinoma without inferior vena cava involvement. J Thorac Cardiovasc Surg. 2011;142:142-144. IF 3.608
- 8) Ishida N, Takemura H, Shimabukuro K, Matsuno Y. Normothermic total arch replacement without hypothermic circulatory arrest to treat aortic distal arch aneurysm in a patient with cold agglutinin disease. Interact CardioVasc Thorac Surg. 2011;13:432-434.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 竹村博文; 研究分担者: 島袋勝也; 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究: 薬剤徐放ゲル

- シートを用いたアドリアマイシンによる血管吻合部新生内膜肥厚抑制の検討；平成 20-21 年度；3,400 千円(3,000：400 千円)
- 2) 研究代表者：松本真介；科学研究費補助金若手研究(B)：肺切除術前の常圧低酸素トレーニングの有有用性の検証；平成 20-21 年度；4,420 千円(3,770：650 千円)
 - 3) 研究代表者：石田成吏洋；科学研究費補助金若手研究(B)：慢性虚血性心疾患における再生医療を併施した外科的血管再建術の実験的検討；平成 20-21 年度；4,290 千円(3,250：1,040 千円)
 - 4) 研究代表者：山田卓也；研究分担者：岩田 尚， 關野考史， 木村真樹；科学研究費補助金基盤研究(C)：術前化学療法後脂肪性肝炎に対する抗ヒト TNF α モノクローナル抗体療法の開発；平成 20-22 年度；4,940 千円(4,420：390：130 千円)
 - 5) 研究代表者：名知 祥；科学研究費補助金若手研究(B)：カプトムシから単離・改変された抗菌ペプチドによる人工血管感染制御；平成 21-22 年度；3,770 千円(2,210：1,560 千円)
 - 6) 研究代表者：白橋幸洋；科学研究費補助金若手研究(B)：肺気腫に対する伸縮性コラーゲンのラッピング法の開発；平成 21-23 年度；4,160 千円(1,690：1,300：1,170 千円)
 - 7) 研究代表者：岩田 尚， 研究分担者：白橋幸洋， 水野吉雅；科学研究費補助金基盤研究(C)：肺気腫症に対する肺切除後の残存肺組織再生に関する実験的検討；平成 22-24 年度；4,820 千円(3,900：520：400 千円)
 - 8) 研究代表者：松野幸博；科学研究費補助金若手研究(B)：骨髄由来平滑筋細胞を標的とした病的血管リモデリングに対する遺伝子治療；平成 22-23 年度；4,030 千円(3,120：910 千円)
 - 9) 研究代表者：木村真樹；科学研究費補助金若手研究(B)：成人間生体部分肝移植におけるうっ血を伴うグラフト肝再生の改善；平成 22-23 年度；2,990 千円(2,210：780 千円)
 - 10) 研究代表者：水野吉雅；科学研究費補助金若手研究(B)：MRSA DNA ワクチンによる人工血管感染予防；平成 22-23 年度；4,030 千円(2,080：1,950 千円)
 - 11) 研究代表者：關野考史， 研究分担者：村瀬勝俊， 木村真樹， 關野誠史郎；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：細菌性腹膜炎に対するマイクロバブル生理食塩水による腹腔内灌流洗浄の有効性；平成 23-24 年度；3,120 千円(1,950：1,170 千円)

2) 受託研究

- 1) 山田卓也， 關野考史， 吉田直優， 木村真樹， 杉本琢也；ゼローダ[®]錠 300 特定使用成績調査「DukesC 結腸癌における術後補助化学療法」；平成 20-21 年度；225,225 円：中外製薬(株)
- 2) 山田卓也， 關野考史， 吉田直優， 木村真樹；アービタックス注射液 100 mg 使用成績調査；平成 20-21 年度；240,240 円：メルクセローノ(株)
- 3) 山田卓也， 岩田 尚， 島袋勝也， 關野考史， 白橋幸洋， 吉田直優， 水野吉雅， 梅田幸生， 木村真樹， 池庄治浩， 小久保健太郎；献血ベニロン-I 使用成績調査(低又は無ガンマグロブリン血症， 重症感染症における抗生物質との併用， 突発性血小板減少性紫斑病， 川崎病の急性期)；平成 20-22 年度；300,300 円：帝人ファーマ(株)
- 4) 山田卓也；デュロテップ MT パッチ 2.1 mg, 4.2 mg, 8.4 mg, 12.6 mg, 16.8 mg 使用成績調査；平成 20-22 年度；300,300 円：ヤンセンファーマ(株)
- 5) 竹村博文；アンプラーグ特定使用成績調査；平成 21-25 年度；375,375 円：田辺三菱製薬(株)
- 6) 竹村博文；耐穿刺性・潤滑性を有するカテーテルの開発；平成 21-23 年度；3,610,896 円(990,001：940,903：1,679,992 円)：文部科学省都市エリア産学官連携促進事業(発展型)
- 7) 竹村博文；超高耐久性を有する医療用刃物の開発；平成 21-23 年度；3,572,602 円(967,407：922,315：1,682,880 円)：文部科学省都市エリア産学官連携促進事業(発展型)
- 8) 竹村博文， 島袋勝也， 福本行臣， 松野幸博， 石田成吏洋；アンプラーグ特定使用成績調査；平成 21-25 年度；1,126,125 円：田辺三菱製薬(株)
- 9) 山田卓也， 關野考史， 木村真樹， 加藤喜彦；ベクティビックス特定使用成績調査-KRAS 遺伝子野生型の切除不能な進行・再発の結腸・直腸癌に関する調査-；平成 22-24 年度；225,225 円
- 10) 竹村博文， 島袋勝也， 福本行臣， 松野幸博， 石田成吏洋；人工血管置換術における炎症反応の多施設共同比較調査(使用成績調査)；平成 22 年度；300,300 円：テルモ(株)
- 11) 竹村博文， 島袋勝也；人工肺におけるガス交換性特性の使用成績調査；平成 22 年度；600,600 円：ソーリン・グループ(株)
- 12) 竹村博文；StageIIIb 大腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としての UFT/Leucovorin 療法と TS-1/Oxaliplatin 療法のランダム化比較第III相試験；平成 22-25 年度；787,500 円：大鵬薬品工業(株)

- 13) 竹村博文, 島袋勝也, 松野幸博, 石田成吏洋 : ゴア TAG 胸部大動脈ステントグラフトシステム使用成績調査(全例調査) ; 平成 23-27 年度 ; 1,651,650 円 : 日本ゴア(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

竹村博文 :

- 1) 日本外科学会代議員(～現在)
- 2) 日本胸部外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本心臓血管外科学会評議員(～現在)
- 4) 日本血管外科学会評議員(～現在)
- 5) 日本冠動脈外科学会評議員(～現在)
- 6) 日本冠疾患学会評議員(～現在)
- 7) 日本循環器学会評議員(～現在)
- 8) 日本脈管学会評議員(平成 21 年 10 月～現在)
- 9) 日本甲状腺外科学会評議員(～現在)
- 10) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 11) 関西胸部外科学会評議員(～現在)
- 12) 東海外科学会評議員(～現在)
- 13) 日本血管外科学会東海北陸地方会世話人(～現在)
- 14) 日本 Advanced Heart & Vascular Surgery/OPCAB 研究会幹事(～現在)
- 15) 日本外科学会地域医療安全管理委員(～現在)
- 16) 日本外科学会指定施設指定・指導医選定委員(～現在)

山田卓也 :

- 1) 日本胃癌学会評議員(～現在)
- 2) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)
- 3) 東海外科学会評議員(～現在)

岩田 尚 :

- 1) 日本胸部外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本呼吸器外科学会評議員(～現在)
- 3) 関西胸部外科学会評議員(～現在)
- 4) 東海外科学会評議員(～現在)

關野考史 :

- 1) 東海外科学会評議員(～現在)

島袋勝也 :

- 1) 日本血管外科学会東海北陸地方会世話人(～現在)
- 2) 東海外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本血管外科学会評議員(平成 21 年～現在)

2) 学会開催

竹村博文 :

- 1) 第 17 回日本血管外科学会東海北陸地方会(平成 21 年 3 月, 岐阜)
- 2) 第 8 回心臓血管外科手術手技セミナー(平成 21 年 11 月, 東京)

- 3) 第3回循環器治療：内科外科 Joint Forum(平成21年12月, 名古屋)
- 4) 第214回岐阜外科集談会(平成22年5月, 岐阜)
- 5) 第280回東海外科学会(平成22年10月, 岐阜)
- 6) 第215回岐阜外科集談会(平成22年11月, 岐阜)
- 7) 第46回東海血管外科研究会(平成22年11月, 名古屋)
- 8) 第25回心臓血管外科ウィンターセミナー(平成23年1月, 岐阜)
- 9) 第16回岐阜胸部疾患治療研究会(平成23年3月, 岐阜)
- 10) 第18回東海胸部人工臓器カンファレンス(平成23年7月, 名古屋)
- 11) 岐阜弁膜症ワークショップ(平成23年11月, 岐阜)

岩田 尚：

- 1) 第15回東海胸腔鏡研究会(平成23年3月, 名古屋)
- 2) 第10回東海呼吸器外科研究会(平成23年7月, 名古屋)
- 3) 第2回岐阜内視鏡下縫合結紮講習会(平成23年7月, 岐阜)
- 4) 第2回中部胸腔鏡セミナー(平成23年9月, 岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

竹村博文：

- 1) 1月内科会(平成21年1月, 岐阜, 講演「最近の冠動脈バイパス術」演者)
- 2) 第90回東海心臓外科懇話会(平成21年1月, 名古屋, ミニシンポジウム「心筋梗塞とその合併症に対する外科治療」座長)
- 3) 第16回東海セロトニン(5-HT₂)研究会(平成21年1月, 名古屋, 指定講演「歩くと痛くなる足の痛み～どう評価し, どう対処するか～」座長)
- 4) 第23回心臓血管外科ウィンターセミナー(平成21年1月, 軽井沢, 「心臓大血管手術手技ビデオフォーラム」座長)
- 5) 平成20年度ロボティック先端医療クラスター岐阜・大垣地域知的クラスター最終成果発表会(平成21年2月, 岐阜, 成果発表「研究概況報告」演者)
- 6) 第17回日本血管外科学会東海北陸地方会(平成21年3月, 岐阜, 特別講演「膝下動脈へのバイパス手術における戦略と戦術～手技, 工夫, そして落とし穴～」座長)
- 7) 第39回日本心臓血管外科学会学術総会(平成21年4月, 富山, ミニパネルディスカッション「僧帽弁形成術の限界」座長)
- 8) 第39回日本心臓血管外科学会学術総会(平成21年4月, 富山, ランチョンセミナー「Epi-aortic Echoを, 有効な手術 tool にするには…」演者)
- 9) 岐阜大学医学部同窓会(平成21年5月, 岐阜, 教育記念講演「心臓血管外科の最前線」演者)
- 10) 第212回岐阜外科集談会(平成21年5月, 岐阜, 特別講演「腹腔鏡下肝切除の現況と展望」司会)
- 11) 第24回山口県循環器画像診断研究会(平成21年6月, 山口, 特別講演「冠動脈外科における超音波画像診断の応用」演者)
- 12) 第1回東京医科歯科大学胸部外科手術手技研究会(平成21年6月, 横浜, 基調講演「冠動脈外科の高品質を目指して - 静脈グラフトと動脈グラフト -」演者)
- 13) 岐阜心臓血管外科 Amiodarone セミナー(平成21年7月, 岐阜, 特別講演「心房細動に対するメイズ手術と心室性頻拍に対する手術～外科治療とアミオダロンの使用経験～」座長)
- 14) 第2回循環器治療：内科外科 Joint Forum(平成21年7月, 名古屋, 教育講演「EBMに基づく感染性心内膜炎の診断と治療」座長)
- 15) 第14回日本冠動脈外科学会学術集会(平成21年7月, 熊本, ビデオシンポジウム「CABGにおけるグラフト選択とデザイン」座長)
- 16) 第14回日本冠動脈外科学会学術集会(平成21年7月, 熊本, ビデオシンポジウム「患者年齢からみたグラフト選択とグラフト採取法」演者)
- 17) 第62回日本胸部外科学会定期学術集会(平成21年10月, 横浜, ランチョンセミナー「Postoperative diagnosis utilizing next generation color imaging system as supplement to flow measurements during CABG surgery」演者)

- 18) 23rd EACTS ANNUAL MEETING(2009.10, Vienna, Scientific Sessions 「Hemi-clamshell approach to treat distal aortic arch aneurysm, Colanary-Pulmonary artery fistula and atrial tachycardia, combined with cold agglutination」 演者)
- 19) 19th ATCSA(2009.10, Seoul, Oral Presentation 「The measurement of distal LAD velocity by Doppler pulse meter was useful to detect ITA-LAD anastomosis problems」 演者)
- 20) 第 213 回岐阜外科集談会(平成 21 年 11 月, 岐阜, 特別講演「臍がん最新治療」 座長)
- 21) 医療の質・安全学会第 4 回学術集会(平成 21 年 11 月, 東京, パネルディスカッション「医療の質と安全対策の評価」 パネリスト)
- 22) 第 3 回循環器治療：内科外科 Joint Forum(平成 21 年 12 月, 名古屋, 教育講演「外科的側面から見た IMR のエビデンス」 演者)
- 23) 第 23 回日本冠疾患外科学会学術集会(平成 21 年 12 月, 大阪, 外科パネルディスカッション「心筋梗塞合併症の外科治療」 座長)
- 24) 第 40 回日本心臓血管外科学会学術総会(平成 22 年 2 月, 神戸, ランチョンセミナー「カラーイメージング機能搭載次世代超音波血流計の使用経験とその有用性」 演者)
- 25) 第 78 回岐阜循環器疾患研究会(平成 22 年 2 月, 岐阜, 特別講演「DES 時代における循環器外科の役割」 座長)
- 26) 第 15 回岐阜胸部疾患治療研究会(平成 22 年 3 月, 岐阜, 特別講演「肺癌診療 2010」 座長)
- 27) 第 4 回 GIFU Surgical Metabolic Club(平成 22 年 3 月, 岐阜, 招待講演「周術期の血糖管理」 座長)
- 28) 第 47 回新潟冠動脈治療研究会(平成 22 年 3 月, 新潟, 特別講演「冠動脈バイパス手術における高品質をめざして」 演者)
- 29) 第 110 回日本外科学会定期学術集会(平成 22 年 4 月, 名古屋, シンポジウム「OPCAB を第一選択とした CABG の遠隔成績の検討」 シンポジスト)
- 30) 第 24 回金沢大学医学部十全同窓会愛知県支部(平成 22 年 5 月, 名古屋, 招待講演「岐阜大学での心臓血管外科 6 年とこれから」 演者)
- 31) 第 53 回関西胸部外科学会学術集会(平成 22 年 6 月, 名古屋, 教育シンポジウム「冠動脈バイパス手術の基本と up to date」 座長)
- 32) 藤田保健衛生大学心臓血管外科市民公開講座(平成 22 年 6 月, 名古屋, 医学講演「胸(むね)の病を知る 狭心症, 心筋梗塞」 演者)
- 33) 第 16 回山形心臓外科懇話会(平成 22 年 7 月, 山形, 特別講演「冠動脈手術における品質管理」 演者)
- 34) 第 4 回循環器治療：内科外科 Joint Forum(平成 22 年 7 月, 名古屋, 招待講演「成人先天性心疾患の管理」 座長)
- 35) 第 1 回日本 Advanced Heart & Vascular Surgery/OPCAB 研究会(平成 22 年 7 月, 大阪, Live Transmission 「症例 1：僧帽弁形成術・症例 2：心拍動下冠動脈バイパス」 コーディネーター)
- 36) 第 15 回日本冠動脈外科学会学術大会(平成 22 年 7 月, 大阪, パネルディスカッション「冠動脈バイパスグラフトの術中, 術後評価」 座長)
- 37) 第 15 回日本冠動脈外科学会学術大会(平成 22 年 7 月, 大阪, モーニングセミナー「新しいカラーイメージングシステムを使用した CABG Innovation」 座長)
- 38) 長良川リバーサイドセミナー(平成 22 年 8 月, 岐阜, 特別講演「今日の心臓大血管疾患の手術適応と治療」 演者)
- 39) 岐阜心臓血管外科 Amiodarone セミナー(平成 22 年 10 月, 岐阜, 特別講演「心房細動の外科治療」 座長)
- 40) 第 63 回日本胸部外科学会定期学術集会(平成 22 年 10 月, 大阪, ハンズオン・セミナー「冠動脈バイパス手術の末梢吻合の基本」 講師)
- 41) 岐阜エリアワークショップ(平成 22 年 10 月, 岐阜, ケースディスカッション「僧帽弁の治療戦略」 演者)
- 42) 第 9 回心臓血管外科手術手技セミナー(平成 22 年 12 月, 東京, 招待講演「心臓外科医からの人工弁選択」 演者)
- 43) 第 24 回日本冠疾患学会学術集会(平成 22 年 12 月, 東京, 合同カンファレンス「この症例どうする？」 コメンテーター)
- 44) 第 24 回日本冠疾患学会学術集会(平成 22 年 12 月, 東京, パネルディスカッション「完全血行再建術がもたらす早期および遠隔期への影響」 パネリスト)
- 45) 第 34 回日本体外循環技術医学会東海地方会(平成 23 年 3 月, 岐阜, 教育講演「冠動脈外科の質向上を目指して」 演者)

- 46) 岐阜 SIRS/ALI 治療フォーラム(平成 23 年 3 月, 岐阜, 特別講演「重症肺炎治療に対する新しい治療戦略」座長)
- 47) 第 81 回岐阜循環器疾患治療研究会(平成 23 年 6 月, 岐阜, 特別講演「虚血性心筋症に対する外科治療: beyond 冠血行再建」座長)
- 48) 第 6 回循環器治療: 内科外科 Joint Forum(平成 23 年 6 月, 名古屋, 講演「AS 治療における EBM REVIEW」座長)
- 49) 第 6 回循環器治療: 内科外科 Joint Forum(平成 23 年 6 月, 名古屋, 講演「50 代の重症 AS 患者に対して大動脈弁置換術を行った 1 例」座長)
- 50) 第 18 回東海胸部人工臓器カンファレンス(平成 23 年 7 月, 名古屋, 特別講演「神戸大学病院における急性大動脈解離手術に対する人工心肺方法」座長)
- 51) 第 18 回東海胸部人工臓器カンファレンス(平成 23 年 7 月, 名古屋, 特別講演「open stent を用いた弓部全置換術」座長)
- 52) 津市医師会病院勉強会(平成 23 年 9 月, 岐阜, 講演「心臓大血管手術の最近の進歩 - 小切開手術とステント -」演者)
- 53) 第 3 回岐阜心臓血管外科 Amiodarone セミナー(平成 23 年 10 月, 岐阜, 特別講演「Maze 手術の pitfall と術後心房細動に対するアミオダロンへの位置付け」座長)
- 54) 第 60 回日本農村医学会学術集会(平成 23 年 11 月, 岐阜, ランチョンセミナー「静脈栄養時のビタミン B1・微量元素の必要性」座長)
- 55) 第 9 回岐阜胸部外科フォーラム(平成 23 年 11 月, 岐阜, 特別講演「僧帽弁形成術の実際」座長)
- 56) 第 10 回心臓血管外科手術手技セミナー (平成 23 年 11 月, 東京, ランチョンセミナー「AVR as Gold Standard」座長)
- 57) 第 10 回心臓血管外科手術手技セミナー (平成 23 年 11 月, 東京, サージカルビデオライブ「Comprehensive Aortic Root and Valve Repair」コメンテーター)
- 58) 第 125 回山陽循環器病談話会(平成 23 年 11 月, 神戸, 特別講演「冠動脈外科の高品質を求めて」演者)
- 59) 会津心臓病・心血管疾患研究会(平成 23 年 11 月, 福島, ランチョンセミナー「樹枝状グラフト使用による弓部大動脈全置換術」演者)
- 60) 会津心臓病・心血管疾患研究会(平成 23 年 11 月, 福島, 合同シンポジウム特別講演「Advanced MICS technique～現状と今後の展望～」座長)
- 61) 会津心臓病・心血管疾患研究会(平成 23 年 11 月, 福島, Session 「感染性心内膜炎の外科治療」コメンテーター)
- 62) 第 7 回循環器治療: 内科外科 Joint Forum(平成 23 年 12 月, 名古屋, 講演「短期 LVAD にて救命し得た重症心不全の一例」座長)

山田卓也:

- 1) 岐阜臨床腫瘍学セミナー(平成 21 年 2 月, 岐阜, 講演「大腸がん外来化学療法現在の現在と今後」座長)
- 2) 第 45 回日本腹部救急医学会総会(平成 21 年 3 月, 東京, ワークショップ「急性腹症での創閉鎖の工夫」演者)
- 3) 岐阜外科懇談会(平成 21 年 7 月, 岐阜, 講演「心疾患のあるがん患者さんの外科治療」演者)
- 4) 第 2 回消化器化学療法シンポジウム(平成 22 年 1 月, 岐阜, 講演「心疾患のあるがん患者さんの外科治療」演者)
- 5) 静岡県東部地区 XELOX+アバスチン療法適正使用カンファレンス(平成 22 年 4 月, 静岡, 特別講演「地方大学での外来化学療法の取り組み-XELOX+アバスチン療法について」演者)
- 6) 第 35 回日本外科系連合学会学術集会(平成 22 年 6 月, 千葉, パネルディスカッション「外科医師を増やすための岐阜大学高度先進外科の取り組み」パネリスト)

岩田 尚:

- 1) 第 67 回岐阜県肺癌研究会・第 77 回岐阜胸部疾患読影研究会(平成 21 年 1 月, 岐阜, 特別講演「機能温存を迫及した肺がん手術療法」座長)
- 2) ジョンソンエンドジョンソン胸腔鏡セミナー(平成 21 年 3 月, 福島, 講演「胸腔鏡下右上葉切除術」演者)
- 3) 17th ASCVTS (2009.3, Taipei, Oral Session 「Stapler procedure for the pulmonary artery, vein, and bronchus in video-assisted thoracoscopic lobectomy」演者)

- 4) 8th ISSS & 7th VATS(2009.3, New York, Movie Session 「VATS segmental resection indentifying the intersegmental plane by physiological function of oxygen absorption」 演者)
- 5) 第 52 回関西胸部外科学会学術集会(平成 21 年 6 月, 岡山, シンポジウム「胸腔鏡トレーニングの工夫」シンポジスト)
- 6) 第 6 回岐阜胸部外科フォーラム(平成 21 年 6 月, 岐阜, 特別講演「肺および心肺移植について」座長)
- 7) 岐阜肺癌 EGFR 講演会(平成 21 年 7 月, 岐阜, 特別講演「地方公立病院での肺癌治療における EGFR 遺伝子変異検査の意義」座長)
- 8) 19th ATCSA(2009.10, Seoul, Oral Presentation 「Second or third pulmonary resection for the relapsed or metachronous lung cancer」 演者)
- 9) 第 22 回日本内視鏡外科学会総会(平成 21 年 12 月, 東京, パネルディスカッション「I 期肺癌に対する胸腔鏡下区域切除術」パネリスト)
- 10) 第 11 回日本呼吸器外科学会中部・北陸地区胸腔鏡手術講習会(平成 22 年 3 月, 名古屋, 講義「胸腔鏡下手術に関する講義」 演者)
- 11) 第 35 回日本外科系連合学会学術集会(平成 22 年 6 月, 千葉, パネルディスカッション「原発性肺癌に対する当科の区域切除術」パネリスト)
- 12) 第 53 回関西胸部外科学会学術集会(平成 22 年 6 月, 名古屋, シンポジウム「当科における胸腔鏡下肺葉および区域切除術の検討」シンポジスト)
- 13) 第 10 回呼吸器胸腔鏡手術研究会(平成 22 年 10 月, 横浜, 講演「当科における安全なステープラー操作」 演者)
- 14) 第 2 回先進呼吸器外科ビデオフォーラム(平成 22 年 11 月, 広島, 特別講演「安全に施行する呼吸器外科手術を目指して～胸腔鏡をうまく使いこなすための私どもの工夫～」 演者)
- 15) 平成 22 年度東海動物実験動物研究会 2 月例会(平成 23 年 2 月, 岐阜, 講演「外科系臨床医の手術手技向上を目指した実験動物の利用 - 岐阜大学トレーニングセンターの紹介 - 」 演者)
- 16) 第 15 回東海胸腔鏡研究会(平成 23 年 3 月, 名古屋, 特別講演「胸腔鏡手術の位置づけと今後の展開」座長)
- 17) 第 4 回比較腫瘍学シンポジウム(平成 23 年 3 月, 岐阜, シンポジウム「ヒトの肺がん発生状況, 診断・治療・予後」シンポジスト)
- 18) 東海がんプロフェッショナル養成プラン市民公開講座(平成 23 年 7 月, 講演「がん治療・診断の最前線「肺がん」」 演者)
- 19) 第 15 回日本呼吸器外科学会中部・北陸地区胸腔鏡手術セミナー(平成 23 年 9 月, 講演「安全に胸腔鏡下手術を実施するための私どもの工夫」 演者)
- 20) 第 3 回肺区域切除術勉強会(平成 23 年 10 月, 東京, 講演「左 S3 区域切除術の 2 例」 演者)
- 21) 北陸呼吸器外科アーベント(平成 23 年 11 月, 金沢, 講演「だれでもできる胸腔鏡下手術を目指して～私どもの工夫～」 演者)
- 22) 第 5 回がん医療従事者研修会(平成 23 年 11 月, 岐阜, 講演「周術期リハビリテーション患者評価のポイント術前・術後「肺癌」」 演者)
- 23) 第 9 回岐阜胸部外科フォーラム(平成 23 年 11 月, 岐阜, 特別講演「The Role of Bronchial Sleeve Resection for Multimodal Treatment for Lung Cancer」座長)
- 24) 大阪基礎から学ぶ肺癌手術セミナーSTEP2(平成 23 年 12 月, 大阪, 講演「私どもが施行している胸腔鏡下肺葉切除と区域切除術」 演者)
- 25) 第 24 回日本内視鏡外科学会総会(平成 23 年 12 月, 大阪, パネルディスカッション「呼吸器外科における安全な stapler 操作～特に血管処理について～」パネリスト)

關野考史：

- 1) 平成 21 年度がん医療従事者研修会・キャンサーボード研修会(平成 22 年 3 月, 岐阜, 講演「大腸がん外科的アプローチ」 演者)
- 2) 第 39 回むねとおなかの医学を学ぶ会(平成 23 年 3 月, 岐阜, 講演「『進化する大腸癌外科治療』 - 胸腔鏡下大腸切除術を中心に - 」 演者)
- 3) 第 4 回がん医療従事者研修会(平成 23 年 10 月, 岐阜, 講演「周術期リハビリテーション患者評価のポイント術前・術後「下部消化器がん」」 演者)
- 4) 第 24 回日本内視鏡外科学会総会(平成 23 年 12 月, 大阪, パネルディスカッション「患者の左側に立って行なう結腸右半切除 3D リンパ節郭清」パネリスト)

島袋勝也：

- 1) 第3回循環器治療：内科外科 Joint Forum(平成21年12月, 名古屋, 講演「低左心機能, 中等度僧帽弁逆流症を合併した重症三枝病変の1例」 演者)
- 2) 第15回岐阜プライマリ・ケアカンファレンス(平成22年4月, 岐阜, 特別講演「プライマリ・ケアで遭遇する末梢血管病変の診断と治療～腹部動脈瘤, 閉塞性動脈硬化症, 下肢静脈瘤～」 演者)
- 3) 第38回日本血管外科学会学術総会(平成22年5月, 埼玉, シンポジウム「治療適応を有する頭頸部動脈疾患, 冠動脈病変を伴う腹部大動脈瘤手術症例の検討」 シンポジスト)
- 4) 第79回岐阜循環器疾患研究会(平成22年6月, 岐阜, 教育講演「腹部大動脈瘤治療の最前線」 演者)
- 5) 第46回東海血管外科研究会(平成22年11月, 名古屋, 招待講演「腹部大動脈瘤に対する治療戦略」 演者)
- 6) 第25回中濃臨床懇話会(平成23年9月, 岐阜, 講演「胸部・腹部大動脈瘤治療の最前線 - ステントグラフト治療の適応と限界 - 」 演者)

白橋幸洋：

- 1) 19th ATCSA(2009.10, Seoul, Oral Presentation 「Intersegmental plane detection by physiological function of oxygen absorption in VATS segmental resection」 演者)
- 2) 第23回日本内視鏡外科学会総会(平成22年10月, 横浜, ワークショップ「当科における胸腔鏡下肺葉切除術における工夫～血管処理と視軸のズレを利用した手術～」 演者)

松本真介：

- 1) CHEST2009(2009.11, San Diego, Session 「Suppression of right ventricular hypertrophy after extensive pulmonary resection in rats by granulocyte colony-stimulating factor」 演者)

石田成吏洋：

- 1) 4th Annual Academic Surgical Congress(2009.02, Fort Myers, Oral Paper Session 「Reduction of infarction area and improvement of left ventricular dysfunction by omentopexy combined with granulocyte colony-stimulating factor administration in a coronary occlusion and reperfusion rabbit model」 演者)
- 2) 第91回東海心臓外科懇話会(平成21年9月, 岐阜, パネルディスカッション「心臓血管外科医の臨床留学」 パネリスト)

木村真樹：

- 1) 8th ISSS & 7th VATS(2009.03, New York, Movie Session 「The introduce of VATS esophagectomy in our institution」 演者)

水野吉雅：

- 1) 第34回日本外科系連合学会学術集会(平成21年6月, 東京, ワークショップ「胸腔鏡手術の今後」 演者)

松野幸博：

- 1) 第5回循環器治療：内科外科 Joint Forum(平成22年12月, 名古屋, 招待講演「Afを合併した低心機能 IMR に対し maze+MVP を施行した一例」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

竹村博文：

- 1) 岐阜県医師会外科医部会部会長(～現在)
- 2) 岐阜県医師会労災指定医部会顧問(～現在)
- 3) 岐阜県身体障害者相談所厚生医療判断医(～現在)
- 4) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 5) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)

- 6) 文部科学省都市エリア産学官連携促進事業【発展型】(岐阜県南部エリア)「モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発」研究統括(平成 21~23 年度)
- 7) 地域イノベーションクラスタープログラム(都市エリア型) 岐阜県南部エリア「事業戦略会議」委員(平成 21~23 年度)
- 8) 地域イノベーションクラスタープログラム(都市エリア型) 岐阜県南部エリア「事業推進会議」委員(平成 21~23 年度)

關野考史：

- 1) 岐阜地域医師会連携パス大腸がん運営委員(平成 21 年~現在)

島袋勝也：

- 1) 岐阜県医師会糖尿病医療連携研究会委員(~現在)

10. 報告書

- 1) 宮内忠雅：冠動脈バイパス手術における心筋誘電特性による適正バイパス手術の決定に関する研究：平成 19-20 年度科学研究費補助金研究成果報告書：1-4(平成 21 年 3 月)
- 2) 松本真介：肺切除術前の常圧低酸素トレーニングの有用性の検証：平成 20-21 年度科学研究費補助金研究成果報告書(平成 22 年 4 月)
- 3) 石田成吏洋：慢性虚血性心疾患における再生医療を併施した外科的血行再建術の実験的検討：平成 20-21 年度科学研究費補助金研究成果報告書(平成 22 年 4 月)
- 4) 山田卓也：術前化学療法後脂肪性肝炎に対する抗ヒト TNF α モノクローナル抗体療法の開発：平成 20-22 年度科学研究費補助金研究成果報告書(平成 23 年 4 月)
- 5) 名知 祥：カプトムシから単離・改変された抗菌ペプチドによる人工血管感染制御：平成 21-22 年度科学研究費補助金研究成果報告書(平成 23 年 4 月)

11. 報道

- 1) 竹村博文：心拍に合わせて動くロボを公開：日経産業新聞(2009 年 3 月 27 日)
- 2) 竹村博文：早稲田大と岐阜大、「心拍補償ロボットシステム」を開発~心臓の拍動を追従、冠動脈バイパス手術での実用化を目指す：Robot Watch(2009 年 3 月 27 日)
- 3) 竹村博文：心臓の血管縫うロボ 岐阜大など開発：読売新聞(2009 年 3 月 30 日)
- 4) 竹村博文, 關野考史：「単孔式」傷口少ない腹腔鏡手術 岐大病院県内で初めて成功：中日新聞(2010 年 1 月 15 日)
- 5) 岩田 尚：内視鏡手術 技に磨き 岐大病院 トレーニング施設稼動：中日新聞(2010 年 2 月 12 日)
- 6) 岩田 尚：岐阜大学病院 内視鏡外科手術トレーニングセンター：メーテレ UP!(2010 年 5 月 7 日)
- 7) 岩田 尚：外科医の技 体感 岐阜大病院で高校生 30 人：朝日新聞(2010 年 8 月 22 日)
- 8) 岩田 尚：岐阜大医学部 高校生が模擬手術挑戦 メス握り外科医を体験 切開や縫合「難しい」：岐阜新聞(2010 年 8 月 22 日)
- 9) 竹村博文：低侵襲の新しい心臓手術法 最小限の切開岐阜大が導入 右脇の肋間 患者の負担軽減：岐阜新聞(2010 年 8 月 28 日)
- 10) 岩田 尚：高校生, 外科医を体験 鶏肉にメス, 人体模型にチューブ 岐阜大附属病院でセミナー：岐阜新聞(2011 年 8 月 7 日)
- 11) 岩田 尚：外科医志望増へ 高校生セミナー：中日新聞(2011 年 8 月 14 日)
- 12) 岩田 尚：内視鏡手術支援ロボット「ダヴィンチ」医師らデモ機体験 最新機器, 理解深める：中日新聞(2011 年 10 月 1 日)

12. 自己評価

評価

新研修医制度が原因の一つとは考えられるが、大学院進学希望が減少しているのが現状である。その中で心臓血管外科, 消化器外科, 呼吸器外科領域で研究が進んでいる。心臓血管外科領域では腹部動脈瘤発生機序からみた瘤拡大抑制, 縦隔炎に対する抗菌剤以外の治療法の模索を行ってきた。呼吸器領域では肺葉切除後の右心不全予防の研究が進んできた。消化器領域では拡大肝切除後の肝再生促進の研究も様々な要因を用いた研究が進んできた。これらの研究課題で科学研究費を含めて外部資金も獲得して

きた。

現状の問題点及びその対応策

社会人大学院の増加で研究は進んでいるが、大学院専属の学生による状況に比べて研究に費やせる時間が制限されるのは事実である。臨床系医師が研究するにあたっては基礎教室と十分な連携と協力を頂きながら研究を行っている。今後も大学院生数の確保が重要で、基礎教室ともさらなる連携を図り、内外に報告できる研究成果を上げていかなければならない。

今後の展望

これまでの教室の研究成果を踏まえつつ、新しい研究テーマに展開していきたい。動物実験施設は充実しており、自由な研究環境は整っていると考える。多くの大学院生が今後も集まり、心臓血管外科、消化器外科、呼吸器外科それぞれの領域がお互いに刺激し合い総合的外科教室としての研究を進めていきたい。

(6) 整形外科学分野

1. 研究の概要

1) EWS/Fli-1 と VEGF の関連の解明

EWS/Fli-1 は VEGF の発現を促進していることを示した。加えて RNA 干渉を用いて VEGF-A の発現を抑制することにより、ヒト Ewing 肉腫の担癌マウスモデルにおいて腫瘍増大抑制効果が得られることを示した。

2) EWS/Fli-1 を標的とした small interfering RNA (siRNA) の治療効果の解明

EWS/Fli-1 を標的とした siRNA を合成し、RNA 干渉を用いてヒト Ewing 肉腫細胞の EWS/Fli-1 の発現を抑制した。さらにヒト Ewing 肉腫細胞およびその担癌マウスモデルにおける抗腫瘍効果を示した。

3) Aurora kinase と CDK の抑制による抗腫瘍効果の検討

Aurora kinase 及び CDK の二重阻害剤である JNJ-7706621 (JNJ) は細胞周期を停止させることにより Ewing 肉腫細胞の増殖を抑制した。JNJ により分裂期の細胞は、チェックポイント機構の破綻をきたし、染色体分離が行われぬまま分裂期後期へと進んでいた。分裂期制御タンパクの細胞内局在の異常により細胞質分裂が障害されたと考えられた。

4) 歯髄細胞を用いた偽関節治療の研究

歯髄細胞を骨芽細胞に分化させ、コラーゲンを担体として偽関節部に移植することで、骨癒合を促進できることを示した。

5) EWS/ATF1 トランスジェニックマウスの作製と遺伝子機能の解析

明細胞肉腫に特異的に発現する EWS/ATF1 を組み込んだ EWS/ATF1 発現トランスジェニックマウスを作製し、軟部腫瘍を形成するモデルマウスの樹立に成功した。そしてモデルマウスの解析結果から c-FOS 蛋白が明細胞肉腫において特異的に過剰発現していることを明らかにした。

6) 遺伝性多発性外骨腫の実態把握と遺伝子多型に関する基盤研究

岐阜大学で新たに外骨腫外来を開設し、患者集約とともに遺伝子サンプルを採取し解析を行なった。

7) 多発性外骨腫と骨粗鬆症との相関に関する研究

外骨腫外来に訪れた患者を対象に、骨密度を測定し、疾患と骨粗鬆症に関する関係を解析中である。

8) 変形性膝関節症とコンドロイチン硫酸の相関に関する研究

コンドロイチン硫酸鎖長の相関関係およびコンドロイチン硫酸合成酵素群の遺伝子異常スクリーニングをおこなうシステムの確立を目指している。

9) 軟骨変性と微小超音波プローベを用いた軟骨の質の評価

変形性膝関節症の手術の際に採取した軟骨片を用い、微小超音波プローベにてグリコサミノグリカン、コンドロイチン硫酸、ヒアルロン酸、コラーゲン Type2 との相関を解析をおこなっている。

10) 肩関節疾患に於ける夜間痛と関節血流の相関に関する研究

夜間痛を有する患者に於ける関節血流と痛みの相関を解析した。超音波ドップラーを用いて血流を評価することにより、肩関節疾患の病態の一部を解明した。

11) 椎間板細胞外基質代謝におけるカルパインの役割と解明

ウシおよびヒトの椎間板を用い、炎症・椎間板変性という局面においてカルパインが椎間板基質分解にいかに関与するかについて研究を進めている。

12) ヒト腰椎荷重負荷における椎間板・椎間関節の形態変化に関する研究

ヒト腰椎の立位荷重状態をシミュレートする装置を使用し、CT 撮影によって得られた腰椎画像を 3 次元解析し、椎間板・椎間関節の 3 次元的形態変化を解析した。

13) 腰椎装具の体幹位置覚、スポーツパフォーマンスに与える影響の検討

腰椎装具がもつ体幹位置覚向上効果がスポーツパフォーマンス（ゴルフ、ウォーキング等）に及ぼす影響をあたえるかを 3 次元画像解析により検証した。

14) 腰椎変性側彎症に対する後方椎体間固定術による変形矯正の 3 次元解析

腰椎変性側彎症に対するブーメラン型スペーサーを用いた後方椎体間固定術による変形矯正が椎間板角、椎間関節形態に与える効果を 3 次元画像解析により検証している。

15) ヒト頸椎の屈曲伸張動態における硬膜管・頸部脊髄の 3 次元動態解析

脊髄造影検査後のファンクショナル CT を用い、ヒト頸椎の屈曲伸張動態における硬膜管・頸部脊髄の 3 次元動態解析を各種病態との関連にて検証している。

16) 椎間板のアンチエイジングを具現し得る新しい生物学的治療の開発

カルパインが椎間板細胞の細胞外マトリックス分解に関与することに着目し、その働きを制御することにより椎間板の老化予防を図る新しい生物学的治療を開発している。

17) 腰椎経椎間孔後方椎体間固定術前術後の椎間孔形態 3 次元解析

片側進入による腰椎経椎間孔後方椎体間固定術は低侵襲が特徴であるが、その術前術後の進入反対側椎間孔形態 3 次元解析を行い、椎間孔狭窄発生のリスクなど、合併症の軽減を図る尺度を検証している。

18) 腰椎低侵襲後方除圧術の中期長期成績に与える因子の検討

腰部脊柱管狭窄症に対する腰椎低侵襲後方除圧術（片側進入両側除圧）の中期長期成績について、椎間板変性、側弯、多椎間罹患、年齢等の多因子を対象に多変量解析による検証を行っている。

19) 超音波を用いた頸椎前方・後方除圧術後の脊髓形態変化

頸椎変性疾患における脊髓前方除圧法、後方除圧法の意義を術中超音波による脊髓形態観察および臨床成績との関連を調査し、検証している。

20) ゴルフスイングにおける体幹装具が腰椎挙動に与える影響の 3 次元解析

ゴルフスイングは非対称な腰椎回旋動作であり、椎間関節への過負荷による腰痛発症が問題となっている。体幹装具装着による腰椎 3 次元運動への影響の解析を行い、腰痛発症予防への効果の検証を行っている。

21) 頸椎前方除圧固定体位における頸椎形態の 3 次元解析

頸椎前方除圧固定体位における軸椎下の回旋挙動を頸椎変性疾患を有する臨床症例を対象に解析を行い、正確かつ安全な除圧術を施行するうえでの指標を作成している。

2. 名簿

教授：	清水克時	Katsuji Shimizu
教授(併任)：	西本 裕	Yutaka Nishimoto
准教授：	大野貴敏	Takatoshi Ohno
講師：	大野義幸	Yoshiyuki Ohno
講師：	伊藤芳毅	Yoshiki Itoh
臨床講師：	青木隆明	Takaaki Aoki
臨床講師：	大島康司	Koji Oshima
臨床講師：	伏見一成	Kazunari Fushimi
臨床講師：	松本 和	Kazu Matsumoto
医員：	平川明弘	Akihiro Hirakawa
医員：	寺林伸夫	Nobuo Terabayashi
医員：	瀧上伊織	Iori Takigami
医員：	日置 暁	Akira Hioki
医員：	山岸宏江	Hiroe Yamagishi
医員：	山内高雲	Koun Yamauchi
医員：	濱田 知	Tomo Hamada

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 細江英夫, 清水克時. 腰椎後方進入椎体間固定術(PLIF) : 越智隆弘, 糸満盛憲, 越智光夫, 高岸憲二, 戸山芳昭, 中村利孝, 三浪明男, 吉川秀樹編. 最新整形外科学大系 6 手術進入法と基本的手術手技, 東京: 中山書店; 2009 年: 171-180.
- 2) 鈴木直樹, 清水克時. 腰椎後方進入椎体間固定術(PLF)-腰仙椎: 越智隆弘, 糸満盛憲, 越智光夫, 高岸憲二, 戸山芳昭, 中村利孝, 三浪明男, 吉川秀樹編. 最新整形外科学大系 6 手術進入法と基本的手術手技, 東京: 中山書店; 2009 年: 192-198.
- 3) 清水克時. 顕微鏡視下頸椎前方除圧固定術(OPLL, 頸椎症): 馬場久敏編. OS NOW Instruction No.10 脊椎の低侵襲手術 患者負担を軽減手術のコツ, 東京: メジカルビュー社; 2009 年: 11-16.
- 4) 清水克時. 痛み・QOL 評価 Assessment of pain, QOL : 今日の整形外科治療指針 第 6 版, 東京: 医学書院; 2010 年: 11-13.
- 5) 清水克時. 背痛, 胸郭痛のとりえ方 / 診断手順 Recognition and diagnosis of pain on the back and the thoracic cage : 今日の整形外科治療指針 第 6 版, 東京: 医学書院; 2010 年: 628-629.
- 6) 清水克時, 野澤 聡. 脊椎分離すべり症: 脊椎整形外科専門医テキスト, 東京: 南工堂; 2010 年: 466-469.
- 7) 岩田 尚, 白橋幸洋, 竹村博文, 大野貴敏, 廣瀬善信. 第 4 章 胸膜・横隔膜疾患, 胸壁腫瘍: 下方 薫編. 新しい診断と治療の ABC 68, 胸膜・縦隔・横隔膜の疾患, 大阪: 最新医学社; 2010 年: 129-137.
- 8) 大野貴敏. 骨軟部腫瘍, 線維性骨異形成: 戸山芳昭監修, 矢部啓夫編. アトラス骨・関節画像診断 4, 東京: 中外医学社; 2010 年: 96-99.
- 9) 浅野昭裕. 青木隆明監修. 運動療法に役立つ単純 X 線像の読み方, 東京: メジカルビュー社; 2011 年.
- 10) 小川寛恭, 鷺見浩志, 鷺見靖彦, 清水克時. スノーボードの外傷・障害(疫学): 宗田 大編. 復帰をめざすス

ポーツ整形外科, 東京: メジカルビュー社; 2011年: 559-562.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 清水克時. 平成 20 年度日本脊椎脊髄病学会 JSSR-Medtronic Sofamor Danek Asian Traveling Fellowship, Visiting Scholar Program 韓国忠北大学校医科大学-医学生交流プログラム同時開催-, 日本脊椎脊髄病学会雑誌 2009年; 20巻: 883-885.
- 2) 中川泰彰, 吉田宗人, 向井直樹, 森北育宏, 山本利春, 加藤一人, 清水克時. 座談会 スポーツ選手の腰痛への対応, 臨床整形外科 2009年; 44巻: 919-928.
- 3) 川口敦司, 清水克時. 首下がり症候群, 脊椎脊髄ジャーナル 2009年; 22巻: 544-546.
- 4) 清水克時. 頰椎変性疾患の手術, 京都整形外科医会学術講演会報告 2010年; 75号: 2.
- 5) 大野貴敏. 悪性軟部腫瘍の治療, 臨床整形外科 2010年; 45巻: 235-240.
- 6) 清水克時. APOA Spine & Pediatric 2011 開催にあたって, Journal of Spine Research 別刷 2011年; 2巻: 811-812.
- 7) 清水克時. 第44回日本側彎症学会を主催して, Journal of Spine Research 別刷 2011年; 2巻: 1723-1724.

総説 (欧文)

- 1) Shimizu K. Orthopedic research in the final year of the Bone and Joint Decade. J Orth Sci. 2010; 15:610-611.
- 2) Matsumoto K. The Role of Hyaluronan in Cartilage. (Review) Trends in Glycoscience and Glycotechnology. 2010;22:57-67.

原著 (和文)

- 1) 西本 裕. 小中学校における「運動器」の問題—学校教員を対象とした質問紙調査結果の検討—, 岐阜県医師会医学雑誌 2009年; 22巻: 93-100.
- 2) 大野貴敏, 大島康司, 山口良大, 下川邦泰, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 広瀬善信. 病的骨折をきたした大腿骨骨腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2009年; 21巻: 31-32.
- 3) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 西本博文. 片側椎弓切除術の低侵襲性について, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 55-56.
- 4) 山口良大, 宮本 敬, 細江英夫, 鈴木直樹, 田中健一郎, 清水克時. 下位腰骨および腰仙移行部に発生した感染性脊椎炎に対する脊椎インスツルメンテーションを用いた外科的治療の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 563-564.
- 5) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対するサラズスルファピリジン単独療法, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 569-570.
- 6) 竹内健太郎, 宮本 敬, 細江英夫, 清水克時. 脊椎病変を呈した multiple myeloma と plasmacytoma に対する外科的治療の経験, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 817-821.
- 7) 佐藤正夫, 四戸隆基, 田中 領, 清水克時. 線維性筋痛症症例の背景因子の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 951-952.
- 8) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 岩井智守男. 輸血拒否患者に対する脊椎手術の経験, 日本整形外科学会雑誌 2009年; 83巻: S287.
- 9) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎. 頰椎前方固定に使用するプレートの特徴, 日本整形外科学会雑誌 2009年; 83巻: S296.
- 10) 福田 雅, 三宅 智, 長縄敏毅, 山中一輝, 寺林伸夫. 肩甲胸郭関節鏡視下手術を行った snapping scapula の1例, 肩関節 2009年; 33巻: 859-861.
- 11) 佐藤正夫, 竹村正男, 田中 領, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチの結核スクリーニングにおけるクオンティフェロンの有用性の検討, 臨床リウマチ 2009年; 21巻: 309-312.
- 12) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 長縄敏毅. 小皮切による胸椎前方手術, 脊椎・脊髄神経手術手技 2009年; 11巻: 26-29.
- 13) 中村正生, 清水克時. 腰下肢痛に関連した QOL に及ぼすプロスタグランジン E1 注射剤の効果, 整形・災害外科 2009年; 52巻: 203-208.
- 14) 中村正生, 清水克時. 腰痛症例における非ステロイド性鎮痛消炎剤ザルトプロフェンの QOL 改善効果—日本語版 Roland-Morris Disability Questionnaire, Visual Analogue Scale, 日本語版 MOS Short-Form 8-Item Health Survey: 24 時間版を用いた評価—, 臨床雑誌 整形外科 2009年; 60巻: 1143-1150.
- 15) 宮本 敬, 清水克時. 胸椎椎間板ヘルニアに対する外科的治療—当科の治療指針および最新の動向—, 脊椎脊髄ジャーナル 2009年; 22巻: 159-168.
- 16) 清水克時. Asia Visiting Scholar Program Report 韓国訪問の報告(JSSR-Medtronic Sofamor Danek Asian Traveling Fellowship), 日本脊椎脊髄病学会雑誌 2009年; 20巻: 143.
- 17) 山岸宏江, 青木隆明, 田中健一郎, 宮本 敬, 細江英夫, 清水克時. Os odontoidium に伴う環軸椎亜脱臼の手術前後の ADL の検討, 中部日本整形外科災害外科学会誌 2009年; 52巻: 899-900.
- 18) 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 小川寛恭, 清水克時. ケルプール型十字プレートをを使用した白蓋再置換術の治療成績,

Hip Joint 2009年;35巻:122-125.

- 19) 小川寛恭, 伊藤芳毅, 糸数万正, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 清水克時. 白蓋骨欠損に対しチップ状骨移植を併用した人工股関節置換術の成績, 日本人工関節学会誌 2009年;39巻:74-75.
- 20) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 清水克時. SL-Plus 型ステムの短期成績 Dorr 分類による比較, 日本人工関節学会誌 2009年;39巻:172-173.
- 21) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 寺林伸夫, 清水孝志, 清水克時. 人工膝関節置換術における膝蓋下脂肪体切除による膝蓋腱長に対する影響, 日本人工関節学会誌 2009年;39巻:332-333.
- 22) 加藤博基, 兼松雅之, 星 博昭, 山田南星, 久世文也, 青木光広, 水田啓介, 伊藤八次, 加藤恵三, 山下知巳, 柴田敏之, 大野貴敏. 液面形成(fluid-fluid level)を示す頭頸部腫瘍の画像所見, 臨床放射線 2009年;54巻:1741-1751.
- 23) 永野昭仁, 大野貴敏, 川井 豪, 齊藤 満, 瀧上伊織, 清水克時. Ewing 肉腫に対する血管内皮増殖因子(VEGF)を標的とした siRNA の検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年;53巻:1425-1426.
- 24) 河村真吾, 横井達夫, 鈴木 康, 棚橋宏行, 飯沼宣樹, 山田喜久, 野々村秀彦, 渡邊徳人, 佐竹崇志, 武内章二, 伊藤芳毅, 栄枝裕文. ONI transcondylar plate を使用した高齢者上腕骨遠位部骨折の治療経験, 骨折 2010年;32巻:274-277.
- 25) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術, J Spine Res 2010年;1巻:1838-1843.
- 26) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成. 後期高齢者後彎症に対して椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術の1例, J Spine Res 2010年;1巻:1986-1988.
- 27) 細江英夫, 飯沼宣樹, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 環軸椎固定術における環軸関節内癒合について, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年;53巻:1335-1336.
- 28) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術の有用性, 日本整形外科学会雑誌 2010年;84巻:S365.
- 29) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術 術後骨折と矢状面アライメント, J Spine Res 2010年;1巻:291.
- 30) 貞升 彩, 宮本 敬, 野澤 聡, 喜久生健太, 細江英夫, 清水克時. 腰椎分離症に対する分離部修復術の成績—スポーツ活動への復帰に着目して— Ripair of Pars Defects by Segmental Trasverse Wiring for Athletes with Symptomatic Spondylolysis, 日本整形外科学会雑誌 2010年;30巻:45-50.
- 31) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 田中優司, 塩入俊樹, 山本真由美, 清水克時. 大学生の健康に対する取り組みと生活環境に関する検討, CAMPUS HEALTH 2010年;47巻:97-102.
- 32) 山本真由美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 清水克時. 大学の禁煙推進の取り組みと学生の喫煙率変化—10年の取り組みを経過して, 学校保健研究 別刷 2010年;52:71-74.
- 33) 坂野真士, 須藤啓広, 長谷川正裕, 廣瀬士朗, 森 将恒, 森 敦幸, 清水孝志, 光山浩人, 小林正明, 水谷潤, 星野裕信, 中川雅人. 術後静脈血栓塞栓症の発生における季節変動—東海地区における多施設調査—, 日本整形外科学会雑誌 2010年;84巻:S590.
- 34) 光石直史, 鈴木直樹, 長縄敏毅, 和田栄二, 清水克時, 宮本 敬. 圧迫性頸髄症に対する頸椎前方手術, 後方手術による脊髄除圧効果の ultrasonography を用いた比較検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年;53巻:55-56.
- 35) 佐藤正夫, 四戸隆基, 田中 領, 清水克時. 生物学的製剤と悪性腫瘍の発生に関する検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年;53巻:177-178.
- 36) 角田 恒, 伊藤芳毅, 小川寛恭, 森 敦幸, 清水孝志, 清水克時. Ceramic on ceramic 人工股関節全置換術の中期成績, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年;53巻:533-534.
- 37) 吉岡大輝, 宮本 敬, 高澤 真, 伏見一成, 細江英夫, 清水克時. 腰椎変性疾患に対する多椎間(3椎間以上) TLIF の術後検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年;53巻:567-568.
- 38) 竹下克志, 藤原奈佳子, 星地亜都司, 横山 徹, 徳橋泰明, 遠藤健司, 加藤圭彦, 田中敏彦, 市村正一, 里見和彦, 平野 徹, 伊藤拓緯, 三上靖夫, 坂浦博伸, 松本守雄, 中原進之介, 松本嘉寛, 清水克時, 岡山忠樹, 川口善治, 木家哲郎, 馬場久敏, 井尻幸成, 椎名逸雄, 戸山芳明, 中村耕三. 圧迫性頸髄症の痛みとしびれ, 臨床整形外科 2010年;45巻:689-693.
- 39) 清水克時. スポーツ選手の腰椎分離症, 理学療法学 2010年;37巻:627-629.
- 40) 坂野真士, 須藤啓広, 長谷川正裕, 廣瀬士朗, 森 将恒, 森 敦幸, 清水孝志, 光山浩人, 小林正明, 水谷潤, 星野裕信, 中川雅人, 小崎直人, 内田淳正, 佐藤啓二, 清水克時, 大塚隆信, 山田治基, 石黒直樹. 東海地区における静脈血栓塞栓症に関する多施設調査, 臨床整形外科 2010年;45巻:827-834.
- 41) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対する生物学的製剤一次無効例の検討, 中部日本整形外科学会雑誌 2010年;53巻:1269-1270.
- 42) 河村真吾, 横井達夫, 鈴木 康, 棚橋宏行, 飯沼宣樹, 野々村秀彦, 山田喜久, 渡邊徳人, 佐竹崇志, 武内章二, 伊藤芳毅, 栄枝裕文. ONI transcondylar plate を使用した高齢者上腕骨遠位部骨折の治療経験, 骨折 2010年;32巻:274-277.
- 43) 角田 恒, 伊藤芳毅, 小川寛恭, 森 敦幸, 清水孝志, 清水克時. Ceramic on ceramic 人工股関節全置換術の中期成績, 中部日本整形外科学会雑誌 2010年;53巻:533-534.
- 44) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 小川寛恭, 清水克時. ProfemurZ スタムの短期成績, Hip Joint 2010年;36巻:277-279.
- 45) 角田 恒, 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 清水克時. Profemur Z スタムの CT 画像における固定様式の検討, 日本人工関節学会誌 2010年;40巻:352-353.

- 46) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 山田一成, 清水克時. Smith-Petersen アプローチと後腹膜アプローチを併用し白蓋再建を行った2例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:22-25.
- 47) 平尾純子, 加藤忠幸, 日石智紀, 服部 良, 尾藤貴宣, 渡辺 翼, 愛宕良彦, 青木隆明, 伊藤芳毅. 当院における MIS-THA と従来の THA の歩行能力と筋力に関する比較検討, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:26-28.
- 48) 坂口青耶, 徳野悦子, 山中多美子, 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水克時. 整形外科股関節手術の側臥位における体圧調査, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:38-41.
- 49) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 寺林伸夫, 清水孝志, 清水克時. TKA 後に鏡視下膝蓋下脂肪体切除を施行した一例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:56-58.
- 50) 白井之尋, 榮枝裕文, 篠崎昌人, 溝口隆司, 横田 治, 伊藤芳毅. 人工膝関節感染を繰り返し hinge 型人工膝関節にて再々置換術を施行した一例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:74-77.
- 51) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 清水孝志, 清水克時. Modified gap technique を用いた LCS TKA の経験, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:88-91.
- 52) 大西量一郎, 田中 薫, 伊藤芳毅, 永野昭仁, 角田 恒. PFNA 施行後にブレードが骨頭穿孔を起こし, 人工股関節置換術を必要とした1例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:98-101.
- 53) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 清水克時, 若山孝英. 両側 Vancouver 分類 TypeB3 ステム周囲骨折に対し一期的両側再置換術を行った1例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年;14巻:136-139.
- 54) 大野貴敏, 大島康司, 大野義幸, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 廣瀬善信. 第1中手骨骨腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2010年;22巻:9-10.
- 55) 青木隆明, 山岸宏江, 清水克時, 篠田信之, 浜田篤至, 林 典雄, 早川大輔. 短下肢装具の圧力による下腿半月の高さの検討, 日本義肢装具学会誌 2011年;27巻:171-173.
- 56) 松本正知, 青木隆明. 短内転筋の一触診法, 理学療法ジャーナル 2011年;45巻:809-810.
- 57) 青木隆明, 山岸宏江, 日置 暁, 伏見一成, 宮本 敬, 清水克時. 頸椎前方固定術後にえん下障害を生じた3症例の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2011年;54巻:1155-1156.
- 58) 林 典雄, 青木隆明. 尺骨遠位部の超音波動態観察よりみた前腕回外制限に関する一考察, 日本整形外科超音波研究会誌 2011年;22巻:201034-201039.
- 59) 毛利哲也, 西本 裕, 伊藤 聡, 川崎晴久. 手指リハビリテーション支援システムにおける実証実験, 日本ロボット学会誌 2011年;29巻:43-44.
- 60) 松本 和. 患者会を交えた他施設共同研究-遺伝性多発性外骨腫瘍, 臨床整形外科 別刷 2011年;46巻:542-544.
- 61) 日置 暁, 宮本 敬, 高澤 真, 伏見一成, 細江英夫, 清水克時. 頸椎外傷・疾患に対するハローベスト固定におけるピン刺入部に関連する重度合併症の検討, Journal of Spine Research 別刷 2011年;2巻:831-834.
- 62) 大野義幸, 平川明弘, 清水克時, 野々村秀彦, 大西量一郎. 指尖部組織欠損に対し中節背側より拳上した指動脈穿通枝皮弁の経験, 日本手外科学会雑誌 2011年;27巻:543-546.
- 63) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 清水孝志, 寺林伸夫, 角田 恒, 清水克時. 抗リン脂質抗体症候群患者に対して施行したTKAの経験, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年;15巻:21-23.
- 64) 角田 恒, 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 清水克時. Impaction bone grafting 法による大腿骨再置換術の検討, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年;15巻:53-57.
- 65) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 角田 恒, 清水克時. 当科における人工股関節再置換術の現況, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年;15巻:59-62.
- 66) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 松本 和, 寺林伸夫, 角田 恒. 大腿骨髄外ガイドを用いたTKAの経験, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年;15巻:79-81.
- 67) 伊藤芳毅, 寺林伸夫, 松本 和, 森 敦幸, 角田 恒, 清水克時, 前田雅人. 後腹膜アプローチにより白蓋コンポーネントを抜去し白蓋再建を行った1例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年;15巻:89-92.
- 68) 仙石昌也, 伊藤芳毅, 松本 和, 森 敦幸, 寺林伸夫, 角田 恒, 清水克時, 福田 雅. 股関節結核に対しTHAを行った3例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年;15巻:93-96.
- 69) 伏見一成, 宮本 敬, 細江英夫, 日置 暁, 清水克時. 腰部脊柱管狭窄症に対する片側進入両側除圧術の成績予測因子の検討, Journal of Spine Research 2011年;2巻:839-843.
- 70) 大島康司, 大野貴敏, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 廣瀬善信. 右前腕腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2011年;23巻:7-8.

原著 (欧文)

- 1) Kikuike K, Uemura S, Miyamoto K, Horiya Y, Shimizu K. Upper lumbar burst fracture due to recreational high jumping into a river: report of five cases. Arch Orthop Trauma Surg. 2009;129:87-90. IF 1.196
- 2) Hirakawa A, Shimizu K, Fukumitsu H, Furukawa S. Pyrroloquinoline quinone attenuates iNOS gene expression in the injured spinal cord. Biochem Biophys Res Commun. 2009;378:308-312. IF 2.595
- 3) Yamamoto T, Ohno T, Wakahara K, Nagano A, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Matsuhashi A, Yamada K, Shimizu K. Simultaneous inhibition of mitogen-activated protein kinase and phosphatidylinositol 3-kinase pathways augment the sensitivity to actinomycin D in Ewing sarcoma. J Cancer Res Clin Oncol. 2009;135:1125-1136. IF 2.485
- 4) Fukuta S, Miyamoto K, Iwata A, Hosoe H, Iwata H, Shirahashi K, Shimizu K. Unusual back pain

- caused by intervertebral disc degeneration associated with schmorl node at Th11/12 in a young athlete, successfully treated by anterior interbody fusion: a case report. *Spine (Phila Pa 1976)*. 2009;34:E195-198.
- 5) Kawaguchi A, Miyamoto K, Wakahara K, Hosoe H, Miura A, Hanamoto T, Shimizu K. Surgical treatment of multiple spinal canal stenoses associated with vitamin D-resistant rickets. *J Clin Neurosci*. 2009;16:717-719. IF 1.165
 - 6) Nakamura M, Miyamoto K, Shimizu K. Difference in evaluation of patients with low back pain using the Japanese Orthopaedic Association Score for Back Pain and the Japanese Version of the Roland-Morris Disability Questionnaire. *J Orthop Sci*. 2009;14:367-373. IF 0.839
 - 7) Nagano A, Miyamoto K, Nishimoto H, Hosoe H, Suzuki N, Shimizu K. Transforaminal lumbar interbody fusion for failed Graf ligamentoplasty: a report of two cases. *J Orthop Surg (Hong Kong)*. 2009;17:220-222.
 - 8) Miyamoto K, Sugiyama S, Hosoe H, Iinuma N, Suzuki Y, Shimizu K. Postsurgical recurrence of osteophytes causing dysphagia in patients with diffuse idiopathic skeletal hyperostosis. *Eur Spine J*. 2009;18:1652-1658. IF 1.994
 - 9) Nozawa S, Nozawa A, Kojima H, Shimizu K. Spontaneous disappearance of lumbar disk herniation within 3 months. *Orthopedic*. 2009;32:852. IF 1.098
 - 10) Kikuike K, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. One-staged combined cervical and lumbar decompression for patients with tandem spinal stenosis on cervical and lumbar spine: analyses of clinical outcomes with minimum 3 years follow-up. *J Spinal Disord Tech*. 2009;22:593-601. IF 1.333
 - 11) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Yamada K, Shimizu K. Extraskelatal osteosarcoma of the thigh: an autopsy case report. *Sarcoma*. 2009;186565.
 - 12) Kikuike K, Miyamoto K, Hosoe H, Kushima Y, Shimizu K. Double-level posterior spinal shortening for paralytic osteoporotic vertebral collapse of two vertebral bodies with a normal vertebra in between: a case report. *Arch Orthop Trauma Surg*. 2009;129:57-60. IF 1.196
 - 13) Nishida Y, Isu K, Ueda T, Nishimoto Y, Tuchiya H, Wada T, Sato K, Tsukushi S, Sugiura H. Osteosarcoma in the Elderly Over 60 Years: A Multicenter Study by the Japanese Musculoskeletal Oncology Group. *Surg Oncol*. 2009;100:48-54. IF 2.428
 - 14) Yano K, Hashimura J, Aoki T, Nishimoto Y. Flexion-extension motion assistance using an upper limb motion-assist robot based on trajectory estimation of reaching movement. *Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc*. 2009;4599-4602.
 - 15) Ohara E, Yano K, Horihata S, Aoki T, Nishimoto Y. Development of Tremor-Suppression Filter for Meal-Assist Robot. *Robotics & Automation Society*. 2009;238-243.
 - 16) Ogawa H, Itokazu M, Ito Y, Matsumoto K, Takigami I. Quality of life evaluated by Short Form-8 in patients with rheumatoid arthritis who were receiving infusion of infliximab. *Mod Rheumatol*. 2009;19:27-32. IF 1.800
 - 17) Hirakawa A, Shimizu K, Fukumitsu H, Soumiya H, Iinuma M, Furukawa S. 2-Decenoic acid ethyl ester, a derivative unsaturated medium-chain fatty acid, facilitates functional recovery of locomotor activity after spinal cord injury. *Neuroscience*. 2010;171:1377-1385. IF 3.215
 - 18) Fukuta S, Miyamoto K, Yoshida M, Kodama H, Kanamori Y, Hosoe H, Shimizu K. High-grade (Grade III) Degenerative spondylolisthesis at L4/5 Treated Successfully by Transforaminal Interbody Fusion (TLIF): A Case Report. *Quick Med Pub(peer-reviewed on-line journal)*. 2010.
 - 19) Nagano A, Ohno T, Shimizu K, Hara A, Yamamoto T, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Matsuhashi A, Yamada K, Takei Y. EWS/Fli-1 chimeric fusion gene upregulates vascular endothelial growth factor-A. *Int J Cancer*. 2010;126:2790-2798. IF 4.926
 - 20) Ogawa H, Ito Y, Itokazu M, Mori N, Terabayashi N, Shimizu K. Cementless total hip arthroplasty using a spongy metal surface hip prosthesis with a collarless, proximally porous-coated stem. *J Arthroplasty*. 2010;25:375-380. IF 2.207
 - 21) Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Skill level-specific differences in snowboarding-related injuries. *Am J Sports Med*. 2010;38:532-537. IF 3.821
 - 22) Takigami I, Ito Y, Ishimaru D, Ogawa H, Mori N, Shimizu T, Terabayashi N, Shimizu K. Two-stage revision surgery for hip prosthesis infection using antibiotic-loaded porous hydroxyapatite blocks. *Arch Orthop Trauma Surg*. 2010;130:1221-1226. IF 1.196
 - 23) Ogawa H, Sumi H, Shimizu K. Posterior cruciate ligament mediated avulsion fracture of the lateral tibial condyle: a case report. *J Orthop Surg Res*. 2010;5:67.
 - 24) Ogawa H, Shionyu M, Sugiura N, Hatano S, Nagai N, Kubota Y, Nishiwaki K, Sato T, Gotoh M, Narimatsu H, Shimizu K, Kimata K, Watanabe H. Chondroitin sulfate synthase-2/chondroitin polymerizing factor has two variants with distinct function. *J Biol Chem*. 2010;285:34155-34167. IF 5.328
 - 25) Takigami I, Ohara A, Matsumoto K, Fukuta M, Shimizu K. Functional bracing for delayed union of a femur fracture associated with Paget's disease of the bone in an Asian patient: a case report. *J Orthop Surg Res*. 2010;12:5:33.
 - 26) Terabayashi N, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Takigami I, Yasufuku Y, Shimizu K. Nonunion of a first rib fracture causing thoracic outlet syndrome in a basketball player: A case report. *J shoulder elb*

- surg. 2010;19:e20-23. IF 2.314
- 27) Tanaka R, Takemura M, Sato M, Yamada Y, Nakagawa T, Horibe T, Hoshi M, Otaki H, Ito H, Seishima M, Shimizu K. Comparison of chemiluminescence enzyme immunoassay (CLEIA) with ELISA for the determination of anti-cyclic citrullinated peptide antibodies. *Clin Chim Acta*. 2010;411:22-25.
- 28) Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Pelvic fractures resulting from snowboarding. *Am J Sports Med*. 2010;38:538-542. IF 3.821
- 29) Hirakawa A, Miyamoto K, Masuda T, Fukuta S, Hosoe H, Iinuma N, Iwai C, Nishimoto H, Shimizu K. Surgical outcome of 2-stage (posterior and anterior) surgical treatment using spinal instrumentation for tuberculous spondylitis. *J Spinal Disord Tech*. 2010;23:133-138. IF 1.333
- 30) Matsumoto M, Hasegawa T, Ito M, Aizawa T, Konno S, Yamagata M, Ebara S, Hachiya Y, Nakamura H, Yagi S, Sato K, Dezawa A, Yoshida M, Shinomiya K, Toyama Y, Shimizu K, Nagata K. Incidence of complications associated with spinal endoscopic surgery: nationwide survey in 2007 by the Committee on Spinal Endoscopic Surgical Skill Qualification of Japanese Orthopaedic Association. *J Orthop Sci*. 2010;15:92-96. IF 0.839
- 31) Yamauchi K, Wakahara K, Fukuta M, Matsumoto K, Sumi H, Shimizu K, Miyamoto K. Characteristics of upper extremity injuries sustained by falling during snowboarding: a study of 1918 cases. *Am J Sports Med*. 2010;38:1468-1474. IF 3.821
- 32) Ishimaru D, Ohno T, Maeda M, Nishimoto Y, Shimizu K. Chemotherapy-induced oesophageal stricture in a child with osteosarcoma: a case report. *Chemotherapy Research and Practice*. 2010; Article ID 240763, 3 pages.
- 33) Hioki A, Miyamoto K, Sakai H, Shimizu K. Lumbar axial loading device alters lumbar sagittal alignment differently from upright standing position: a computed tomography study. *Spine (Phila Pa 1976)*. 2010;35:995-1001.
- 34) Terabayashi N, Fukuta M, Ito Y, Takigami I, Nishimoto Y, Shimizu K. Shoulder impingement syndrome due to a ganglion cyst below the coracoacromial ligament: a case report. *J Bone Joint Surg Am*. 2011;93:e36. IF 2.967
- 35) Hioki A, Miyamoto K, Hosoe H, Sugiyama S, Suzuki N, Shimizu K. Cantilever transforaminal lumbar interbody fusion for upper lumbar degenerative diseases (minimum 2 years follow up). *Yonsei Med J* 2011;52:314-321. IF 1.020
- 36) Ogawa H, Ito Y, Shinozaki M, Matsumoto K, Shimizu K. Subtrochanteric transverse shortening osteotomy in cementless total hip arthroplasty achieved using a modular stem. *Orthopedics*. 2011;34:170. IF 1.098
- 37) Ishimaru D, Ogawa H, Ito Y, Shimizu K. Surgical treatment of an infant with Bacille Calmette-Guérin osteomyelitis extending across the growth plate. *Orthopedics*. 2011;34:55. IF 1.098
- 38) Ogawa H, Ito Y, Takigami I, Shimizu K. Revision total hip arthroplasty for a Vancouver type B3 periprosthetic fracture using an allograft-cemented stem composite by the telescoping technique. *J Arthroplasty*. 2011;26:665.e25-28. IF 2.207
- 39) Ito S, Kawasaki H, Ishigure H, Natsume M, Mouri T, Nishimoto Y. A design of fine motion assist equipment for disabled hand in robotic rehabilitation system. *Journal of the Franklin Institute*. 2011;348:79-89.
- 40) Ogura H, Miyamoto K, Fukuta S, Naganawa T, Shimizu K. Comparison of magnetic resonance imaging and computed tomography-myelography for quantitative evaluation of lumbar intracanal cross-section. *Yonsei Med J*. 2011;52:137-144. IF 1.020
- 41) Takigami I, Ohno T, Kitade Y, Hara A, Nagano A, Kawai G, M Saitou, Matsuhashi A, Yamada K, Shimizu K. Synthetic siRNA targeting the breakpoint of EWS/Fli-1 inhibits growth of Ewing sarcoma xenografts in a mouse model. *Int J Cancer*. 2011;128:216-226. IF 4.926
- 42) Masuda T, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. Comparative study on the efficacy of two-staged (posterior followed by anterior) surgical treatment using spinal instrumentation on pyogenic and tuberculous spondylitis. *Arch Orthop Trauma Surg*. 2011;131:765-772. IF 1.196
- 43) Kato Z, Kondo N, Kato H, Morita H, Teramoto T, Miyamoto K, Shimizu K. Selective pontine hypoplasia: A possible common feature in 5p monosomy syndrome. *Brain Dev*. 2011;33:702-703. IF 1.979
- 44) Komura S, Miyamoto K, Hosoe H, Fushimi K, Iwai C, Nishimoto H, Shimizu K. Anterior cervical multilevel decompression and fusion using fibular strut as revision surgery for failed cervical laminoplasty. *Arch Orthop Trauma Surg*. 2011;131:1177-1185. IF 1.196
- 45) Inoue T, Suzuki K, Maehara H, Shimizu K. Human growth plate contains aggrecan fragments that can be generated by m-calpain. *Connect Tissue Res*. 2011;52:235-241. IF 2.093
- 46) Naganawa T, Miyamoto K, Hosoe H, Suzuki N, Shimizu K. Hemilaminectomy for removal of extramedullary or extradural spinal cord tumors: medium to long-term clinical outcomes. *Yonsei Med J*. 2011;52:121-129. IF 1.020
- 47) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Hirose Y, Miyake S, Shimizu K. Lipoblastoma mimicking myxoid liposarcoma: a clinical report and literature review. *Tohoku J Exp Med*. 2011;223:75-78. IF 1.145
- 48) Fukuta S, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. Kidney-type intervertebral spacers should be located anteriorly in cantilever transforaminal lumbar interbody fusion: analyses of risk factors for spacer

- subsidence for a minimum of 2 years. J Spinal Disord Tech. 2011;24:189-195. IF 1.333
- 49) Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Glenohumeral dislocations in snowboarding and skiing. Injury. 2011;42:1241-1247.
- 50) Hioki A, Miyamoto K, Shimizu K, Inoue N. Test-retest repeatability of lumbar sagittal alignment and disc height measurements with or without axial loading: a computed tomography study. J Spinal Disord Tech. 2011;24:93-98. IF 1.333
- 51) Shimizu T, Wakitani S, Tanaka Y, Yonetani Y, Shiozaki Y, Shimizu K, Horibe S. Ultrasonic probe is useful for in vivo quantitative assessment of medial femoral condyle articular cartilage. Knee Surg Sports Traumatol Arthrosc. 2011;19:1895-1900. IF 1.857
- 52) Takigami I, Ohnishi K, Ito Y, Nagano A, Sumida H, Tanaka K, Shimizu K. Acetabular perforation after medial migration of the helical blade through the femoral head after treatment of an unstable trochanteric fracture with proximal femoral nail antirotation (PFNA): a case report. J Orthop Trauma. 2011;25:e86-89. IF 1.792
- 53) Ishimaru D, Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Lower extremity injuries in snowboarding. J Trauma. 2011;70:E48-52.
- 54) Fukuta S, Miyamoto K, Suzuki K, Maehara H, Inoue T, Kikuike K, Shimizu K. Abundance of Calpain and Aggrecan-Cleavage Products of Calpain in Degenerated Human Intervertebral Discs. Osteoarthritis Cartilage. 2011;19:1254-1262. IF 3.953
- 55) Naganawa T, Miyamoto K, Ogura H, Suzuki N, Shimizu K. Comparison of magnetic resonance imaging and computed tomogram-myelography for evaluation of cross sections of cervical spinal morphology. Spine (Phila Pa 1976). 2011;36:50-56.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：岩本幸英，研究分担者：西本 裕；厚生労働省がん臨床研究事業：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究；平成 21 年度；250 千円
- 2) 研究代表者：西本 裕；岐阜県医師会勤務医部会「医学医術の研鑽，医道の推進，勤務環境の向上のための調査・研究助成金」：軟骨マトリックス分解酵素としてのカルパインの研究；平成 21 年度；200 千円
- 3) 研究代表者：國貞隆弘，研究分担者：大野貴敏；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：遺伝子改変マウスによる疾患のメカニズム解明のための共同研究；平成 21 年度；2,000 千円
- 4) 研究代表者：岡野幸雄，研究分担者：大野貴敏；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：がん細胞のリン酸化を介した増殖と死の制御，がん細胞のオーロラによる分裂制御とスフィンゴ脂質による細胞死制御；平成 21 年度；2,000 千円
- 5) 研究代表者：清水克時，研究分担者：松本 和，松本嘉寛，高山真一郎，小崎里華，成松 久，木全弘治，高橋厚子；厚生労働省科学研究費補助金：難治性疾患克服研究事業：遺伝性多発性外骨腫の実態把握と遺伝子多型に関する基盤研究；平成 22 年度；15,000 千円
- 6) 松本 和；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：変形性関節症の重症度とコンドロイチン硫酸鎖長の相関関係およびコンドロイチン硫酸合成酵素群の遺伝子異常スクリーニング；平成 22 年度；1,000 千円
- 7) 松本 和；研究科長・医学部長裁量経費(国内外留学帰学者支援)；平成 22 年度；500 千円
- 8) 研究代表者：國貞隆弘，研究分担者：大野貴敏；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：遺伝子改変マウスによる疾患のメカニズム解明のための共同研究；平成 22 年度；2,000 千円
- 9) 研究代表者：木村正志，研究分担者：大野貴敏；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：がん細胞のリン酸化を介した増殖と死の制御，がん細胞のオーロラによる分裂制御とスフィンゴ脂質による細胞死制御；平成 22 年度；2,000 千円
- 10) 研究代表者：岩本幸英，研究分担者：大野貴敏；厚生労働省がん臨床研究事業：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究；平成 22-23 年度；500 千円(250：250 千円)
- 11) 研究代表者：松本嘉寛，研究分担者：松本 和；科学研究費補助金基盤研究(C)：軟骨肉腫幹細胞に注目した，新規軟骨肉腫治療法の開発；平成 23 年度；100 千円
- 12) 研究代表者：國貞隆弘，研究分担者：大野貴敏；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：遺伝子改変マウスによる疾患のメカニズム解明のための共同研究；平成 23 年度；2,000 千円
- 13) 研究代表者：瀧上伊織；科学研究費補助金研究活動スタート支援：骨粗鬆症に及ぼすヘパラン硫酸

の役割の解明；平成 23-24 年度；2,300 千円(1,200：1,100 千円)

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：矢野賢一，研究分担者：西本 裕；事業総括：柳瀬秀治；都市エリア産学官連携促進事業(発展型)「モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発」「上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発」；平成 21-22 年度；43,948,853 円(24,373,960：19,574,893 円)
- 2) 清水克時，西本 裕：上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発；平成 21 年度；366,280 円；885,259 円；財団法人岐阜県研究開発財団
- 3) 清水克時，西本 裕：上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発；平成 22 年度；1,192,393 円；1,039,385 円；財団法人岐阜県研究開発財団
- 4) 清水克時，西本 裕：上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発；平成 23 年度；2,000 千円；1,000 千円；財団法人岐阜県研究開発財団

3) 共同研究

- 1) 西本 裕：床上で利用可能な手指リハビリテーション支援システムの研究開発；平成 21 年度；19,677 千円；(株)丸富精工
- 2) 伊藤芳毅：人工股関節全置換術における表面酸化処理ジルコニウム合金(OXINIUM)の耐摩耗性に関する多施設共同研究；平成 23 年度；1,000 千円；スミス・アンド・ネフュー オーソペディックス(株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 川崎晴久，夏目昌寿，西本 裕，毛利哲也，石樽康彦：上肢手指機能回復訓練装置；平成 23 年 9 月 2 日(特許第 4811868 号)

6. 学会活動

1) 学会役員

清水克時：

- 1) 日本整形外科学会代議員(平成 21 年 4 月～現在)
- 2) 第 112 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会査読委員(平成 21 年度)
- 3) 第 9 回 ATST ミーティングエグゼクティブスーパーバイザー(平成 21 年度)
- 4) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会学術集会運営委員会委員(平成 21 年度)
- 5) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会国際委員会アドバイザー(平成 21 年度)
- 6) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会プログラム委員(平成 21 年度)
- 7) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員，国際事業委員会書面審査員(平成 21 年 8 月～平成 22 年度)
- 8) 第 83 回日本整形外科学会学術総会抄録査読委員(平成 21 年度)
- 9) 第 84 回日本整形外科学会学術総会抄録査読委員(平成 23 年度)
- 10) 整形外科災害外科学会研究財団理事(平成 21 年 5 月～現在)
- 11) 日本臨床スポーツ医学会評議医員(平成 21 年 11 月～現在)
- 12) 日本小児整形外科学会理事長(平成 21 年～現在)
- 13) WHO International Classification of Diseases (ICD) towards its 11th edition. TAG(Musculoskeletal Topic Advisory Group) Co-Chairman (平成 21 年 12 月～現在)
- 14) 国際整形外科学会(SICOT)日本代表(National Delegate of Japan)(～現在)
- 15) 第 5 回東海運動器フォーラム世話人(平成 22 年度)
- 16) 日本脊椎脊髄病学会国際委員会委員(平成 22 年度)
- 17) 日本整形外科学会第 23 回専門医試験口答試験委員(平成 22 年度)
- 18) The Annual Meeting of the Hungarian Orthopedic and Trauma Associations Honorary Membership(平成 22 年度)
- 19) 第 44 回日本整形外科学会 骨・軟部腫瘍学術集会査読委員(平成 23 年度)
- 20) 日本整形外科学会第 24 回専門医試験口答試験委員(平成 23 年度)
- 21) 第 26 回日本整形外科学会基礎学術集会抄録査読委員(平成 23 年度)
- 22) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 23 年 12 月～現在)

大野貴敏：

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本運動器移植・再生医学研究会幹事(～現在)
- 3) 日本骨軟部肉腫治療研究会幹事(～現在)
- 4) 東海骨軟部腫瘍研究会幹事(～現在)
- 5) 骨軟部腫瘍治療法検討会幹事(～現在)
- 6) SICOT 国際整形災害外科学会日本副代表(～平成 23 年度)

大野義幸：

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(平成 22 年度)

伊藤芳毅：

- 1) 東海足と靴の研究会幹事(～平成 22 年度)
- 2) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(平成 22 年度～現在)
- 3) 日本人工関節学会評議員(～現在)
- 4) 日本股関節学会評議員(～現在)
- 5) 東海関節外科研究会幹事(～現在)
- 6) 東海小児整形外科懇話会常任幹事(～現在)
- 7) 東海人工関節研究会常任世話人(～現在)
- 8) 関西膝関節鏡研究会幹事(～現在)
- 9) 東海股関節研究会代表幹事(～現在)
- 10) 岐阜人工関節フォーラム幹事(～現在)

西本 裕：

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本整形外科学会代議員(平成 22 年 12 月～現在)

青木隆明：

- 1) 日本リハビリテーション医学会中部・東海地方会幹事岐阜代表(平成 21 年～現在)
- 2) 整形外科リハビリテーション学会顧問(～現在)
- 3) 日本リハビリテーションネットワーク研究会理事(～現在)
- 4) 岐阜リハビリテーション研究会評議員(平成 22 年度)
- 5) 日本リハビリテーション医学会評議員(平成 22 年度～現在)
- 6) 日本リハビリテーション医学会代議員(平成 22 年度～現在)
- 7) 日本義肢装具学会会則検討委員(平成 22 年度～現在)
- 8) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(平成 22 年度～現在)
- 9) 日本義肢装具学会評議員(平成 22 年度～現在)
- 10) 岐阜リハビリテーション研究会代表幹事(平成 23 年度)
- 11) 日本リハビリテーション医学会国際委員(平成 23 年度)

松本 和：

- 1) 日本軟骨代謝学会評議員(平成 23 年度～現在)

伏見一成：

- 1) 日本整形外科学会情報システム委員会アドバイザー(平成 21 年度)

寺林伸夫：

- 1) 東海関節鏡研究会幹事(～現在)

2) 学会開催

清水克時：

- 1) 第 11 回岐阜整形外科卒後夏季セミナー2009(平成 21 年 7 月, 岐阜)
- 2) 第 12 回岐阜整形外科卒後夏季セミナー2010(平成 22 年 7 月, 岐阜)

- 3) 第7回国際整形外科基礎学術集会(平成22年10月, 京都)
- 4) 第44回日本側彎症学会(平成22年10月, 札幌)
- 5) 第8回アジア・太平洋整形外科学会 脊椎・小児整形外科合同学会(平成23年6月, 岐阜)
- 6) 第13回岐阜整形外科卒後夏季セミナー2011(平成23年7月, 岐阜)

伊藤芳毅 :

- 1) 第15回サンフロンティア股関節研究会(平成22年7月, 岐阜)
- 2) 第6回東海股関節研究会(平成23年6月, 岐阜)

3) 学術雑誌

清水克時 :

- 1) Orhopaedics International ; Editor(～現在)
- 2) Ourhopaedics Todai ; Editor(～現在)
- 3) Journal of Bone and Joint Surgery British Volume ; Reviewer(～現在)
- 4) 臨床整形外科 ; 編集委員(～現在)
- 5) 新 OS Now ; 編集委員(～現在)
- 6) 痛みと臨床 ; 編集同人(～現在)
- 7) Journal of Orthopaedic Science ; Editorial Board(～現在)

大野貴敏 :

- 1) Cancer ; Reviewer(～現在)
- 2) International Journal of Cancer Research ; Reviewer(～現在)
- 3) Molecular Cancer Therapeutics ; Reviewer(～現在)
- 4) J. Orthopaedic Science ; Reviewer(～現在)
- 5) Acta Biochimica et Biophysica Sinica ; Reviewer(～現在)
- 6) Clinical Orthopaedic Surgery and Related Reseach ; Reviewer(～現在)
- 7) Collegium Antropologicum ; Reviewer(～現在)

青木隆明 :

- 1) International Conference on Intelligent Robotics and Applications ; Editor(平成21年)

松本 和 :

- 1) Foot and Ankle International ; Associated Editor (～現在)
- 2) Current Ortopedic Practice ; Reviewer (～現在)
- 3) SPINE ; reviewer(平成22年～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

清水克時 :

- 1) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成21年1月, 岐阜, 特別講演「NSAIDs 潰瘍の病態と治療」座長)
- 2) 第24回日本リハビリテーション医学会中部・東海地方会(平成21年2月, 名古屋, 講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
- 3) 第100回下呂市医師会学術講演会(平成21年2月, 下呂, 講演「脊椎感染症の診断と治療」演者)
- 4) 岐阜県「抗リウマチ薬」学術講演会(平成21年3月, 岐阜, 特別講演「抗リウマチ薬を使いこなす～少量追加併用療法を中心に～」座長)
- 5) 痛みと炎症 2009(平成21年3月, 岐阜, 特別講演「変性性股関節症の診断と治療」座長)
- 6) 岐阜スプリングセミナー(平成21年4月, 岐阜, 特別講演「The protective effects of meniscal transplantation on cartilage」座長)
- 7) 第38回日本脊椎脊髄病学会(平成21年4月, 神戸, 特別講演「Surgical Strategy for Paediatric and Adolescent Vertebral Body Reconstruction for Tumour」座長)
- 8) 第11回岐阜大学整形外科教育研修会(平成21年5月, 岐阜, 特別講演「側彎症治療における問題点」座長)
- 9) 第39回東海地区整形外科教育研修会(平成21年5月, 名古屋, 特別講演「頸部外傷の痛みと痺れ」

- 座長)
- 10) 岐阜県静脈血栓塞栓症予防講演会(平成 21 年 6 月, 岐阜, 特別講演「整形外科手術における VTE 予防-改訂日整会ガイドラインに基づいて-」座長)
 - 11) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 21 年 6 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症の骨折予防と問題点」座長)
 - 12) 羽島メディカルカンファレンス(平成 21 年 6 月, 羽島, 講演「腰痛治療の病診連携」演者)
 - 13) 佐世保整形外科医会学術講演会(平成 21 年 6 月, 佐世保, 講演「頚椎の前方手術」演者)
 - 14) 6th Inspiration Meeting Asia-Pacific & Mea(2009.06, Ho Chi Minh, KeyNote Lecture: Herniated thoracic disc; Lecturer)
 - 15) 第 5 回岡山脊椎フォーラム(平成 21 年 7 月, 岡山, 講演「頚椎の前方手術」演者)
 - 16) ぎふ金華山整形外科セミナー(平成 21 年 9 月, 岐阜, 講演「整形外科医の知っておくべき医療訴訟とリスクマネジメントの知識-整形外科医と患者と安全と安心のために-」座長)
 - 17) 第 19 回北海道メイヨー・肩関節セミナー(平成 21 年 9 月, 札幌, 講演「脊椎のスポーツ障害」演者)
 - 18) 岐阜県 LBP 学術講演会(平成 21 年 9 月, 岐阜, 講演「診療ガイドラインに基づく非特異的腰痛のプライマリ・ケア」座長)
 - 19) The 19th Japanese-Korean Combined Orthopaedic Symposium(2009.09, Jeju, Anterior decompression and fusion for the treatment of cervical myelopathy; Lecturer)
 - 20) 岐阜 IL-6 阻害薬研究会(平成 21 年 10 月, 岐阜, 講演「関節リウマチ治療におけるトシリズマブの有効性と安全性」座長)
 - 21) 6th SICOT/SIROT Annual International Conference(2009.10, Pattaya, Two staged(Posterior and Anterior)surgical treatment for pyogenic and tuberculous spondylitis; Lecturer)
 - 22) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会(平成 21 年 11 月, 横浜, 講演「ヌーンタイムセミナー5 マトリックス分解酵素としてのカルパインの研究」演者)
 - 23) 平成 21 年東海・北陸地区リウマチの治療とケア研修会(平成 21 年 11 月, 岐阜, 講演「リウマチの治療とケア研修会の趣旨と関節リウマチ患者のトータルマネジメント」演者)
 - 24) 第 43 回日本側彎症学会(平成 21 年 11 月, 東京, 講演「Controversies and challenges in the treatment of neuromuscular scoliosis」演者)
 - 25) 岐阜県医師会労災指定医師会秋季総会(平成 21 年 12 月, 美濃, 講演「頚椎変性疾患の手術」演者)
 - 26) 15th Annual Meeting of SSHV combined with the Operative Spine Course(2009.12, Ho Chi Minh, Anterior Decompression and Fusion for the Treatment of Cervical Myelopathy; Lecturer)
 - 27) 第 13 回蔵王整形外科スポーツセミナー(平成 22 年 2 月, 山形, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
 - 28) 骨粗鬆症最新講演会(平成 22 年 2 月, 岐阜, 特別講演「脊骨粗鬆症治療薬併用のエビデンス」座長)
 - 29) 第 5 回東海運動器フォーラム(平成 22 年 2 月, 愛知, 特別講演「脊髄損傷モデル動物に対する細胞療法, 化学療法の開発」座長)
 - 30) 痛みと炎症 2010(平成 22 年 3 月, 岐阜, 特別講演「ロコモと運動器リハビリテーション」座長)
 - 31) 岐阜脊椎脊髄病特別セミナー(平成 22 年 3 月, 岐阜, 特別講演「脊椎手術 3000 例から得たもの-追想・展望-」座長)
 - 32) 第 37 回浜松整形外科セミナー(平成 22 年 4 月, 静岡, 特別講演「頚椎変性疾患の手術」演者)
 - 33) 京都整形外科医会学術講演会(平成 22 年 4 月, 京都, 特別講演「頚椎変性疾患の手術」演者)
 - 34) 第 23 回日本軟骨代謝学会(平成 22 年 4 月, 鹿児島, 特別講演「骨・軟骨代謝研究と先端医療への取り組み」座長)
 - 35) 第 39 回日本脊椎脊髄病学会(平成 22 年 4 月, 高知, 特別講演「Classification of Adolescent Idiopathic Scoliosis-How Good are They?」座長)
 - 36) 第 114 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会(平成 22 年 4 月, 愛知, 特別講演「脳脊髄液減少症(低髄液圧性頭痛)の診断と治療」座長)
 - 37) 第 12 回岐阜大学整形外科教育研修会(平成 22 年 5 月, 岐阜, 特別講演「静脈血栓塞栓症に対する予防の Strategy」座長)
 - 38) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成 22 年 6 月, 岐阜, 特別講演「脊椎脊髄手術を安全に行うための工夫」座長)
 - 39) 第 4 回夏季プライマリケア腰痛シンポジウム(平成 22 年 7 月, 東京, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
 - 40) 神奈川県臨床整形外科医会学術講演会(平成 22 年 7 月, 神奈川, 特別講演「頚椎変性疾患の手術」演

- 者)
- 41) 岐阜県医師会 外科医部会・労災指定医部会総会(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演「肘関節外傷の治療—スノーボードの上肢損傷—」座長)
 - 42) 岐阜スポーツ外傷治療・リハビリテーション研修会(平成 22 年 8 月, 岐阜, 特別講演「スポーツ膝損傷：外来での診断治療・リハビリテーション」座長)
 - 43) 海津市医師会勉強会(平成 22 年 9 月, 岐阜, 特別講演「腰痛：運動器の生活習慣病」演者)
 - 44) 21 世紀研究会(平成 22 年 9 月, 岐阜, 特別講演「整形外科の歴史と先端医療」演者)
 - 45) 第 115 回中部日本整形外科災害外科学会(平成 22 年 10 月, 大阪, 特別講演「手外科 10 年の進歩と将来への展望」座長)
 - 46) 第 25 回日本整形外科学会基礎学術集会(平成 22 年 10 月, 京都, 特別講演「Ferritin can be transferred from macrophages to NG2 cells in vivo and can induce new oligodendrocyte formation in the adult spinal cord」座長)
 - 47) 第 45 回日本脊髄障害医学会(平成 22 年 10 月, 長野, 特別講演「頸損麻痺手の機能再建」座長)
 - 48) 第 42 回東海地区整形外科教育研修会(平成 22 年 10 月, 愛知, 特別講演「足関節症の臨床」座長)
 - 49) 第 44 回日本側彎症学会(平成 22 年 10 月, 北海道, 特別講演「山田・井上メモリアルレクチャー 特発性脊柱側弯症手術療法における前方再建手術の役割—歴史的成績の検討から—」座長)
 - 50) 第 38 回日本関節病学会(平成 22 年 11 月, 京都, 特別講演「関節病セミナー9 骨粗鬆症とロコモティブシンドローム」座長)
 - 51) 整形外科フォーラム in Gifu(平成 22 年 11 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症治療の将来展望と新規 SERM の位置づけ」座長)
 - 52) 第 21 回日本小児整形外科学会学術集会(平成 22 年 11 月, 徳島, 特別講演「Management of congenital pseudoarthrosis of the tibia based on its pathology」座長)
 - 53) 愛知県整形外科医会教育研修講演会(平成 22 年 11 月, 愛知, 特別講演「頸椎変性疾患の手術」演者)
 - 54) 岐阜県フォルテオ発売記念講演会(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症治療の新たな展開」座長)
 - 55) 第 9 回岐阜リハビリテーション研究会(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「Closed Kinetic Chain と二関節筋のメカニズム」座長)
 - 56) 痛みの治療フォーラム 2010 in 岐阜(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「脊椎脊髄の痛みに対する保存療法」座長)
 - 57) 第 4 回岐阜県「抗リウマチ薬」学術講演会(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチの治療におけるタクロリムスと生物学的製剤の役割」座長)
 - 58) モーラステープ発売 15 周年記念講演会(平成 23 年 1 月, 岐阜, 講演「心に木を植える—森と心と体を癒してくれる—」座長)
 - 59) 第 88 回岐阜県整形外科集談会(平成 23 年 1 月, 岐阜, 教育研修講演「整形外科的救急?におけるピットフォールスポーツ外傷を含む—」座長)
 - 60) 第 87 回福岡リウマチ懇話会(平成 23 年 2 月, 福岡, 教育講演「リウマチの脊椎外科」演者)
 - 61) 第 13 回札幌スポーツ医学セミナー(平成 23 年 2 月, 北海道虻田郡, 講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
 - 62) 第 4 回岐阜県「抗リウマチ薬」学術講演会(平成 23 年 3 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチの治療におけるタクロリムスと生物学的製剤の役割」演者)
 - 63) 第 100 回岐阜手外科 C.C (平成 23 年 4 月, 岐阜, 特別講演「日常診療における手の痛み・しびれの診断と治療(リハビリを含む)」座長)
 - 64) 第 116 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会(平成 23 年 4 月, 高知, 招待講演「Minimal Access Surgery for Idiopathic Scoliosis: Present and Future.」座長)
 - 65) 第 116 回中部日本整形外科災害外科学会(平成 23 年 4 月, 高知, 招待講演「Minimal Access Surgery for Idiopathic Scoliosis: Present and Future」座長)
 - 66) 第 60 回日本理学療法学会(平成 23 年 5 月, 岐阜, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
 - 67) 第 13 回岐阜大学整形外科教育研修会(平成 23 年 5 月, 岐阜, 講演「イメージマッチング法による膝関節動態解析」座長)
 - 68) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 23 年 6 月, 岐阜, 講演「頸椎アライメントと上気道の関係」座長)
 - 69) The 8th Combined Congress of the Spine and Pediatric Sections, Asia Pacific Orthopaedic Association(2011.06, Gifu, Sponsored Lecture 「Surgical correction of Pediatric Spinal

Detormity : Approaches to better correction」 chairman)

- 70) 岐阜活性型ビタミン D3 講演会(平成 23 年 8 月, 岐阜, 特別講演「ビタミン D UP DATE -基礎・臨床における新たな展開-」 演者)
- 71) ボノテオ錠 Monthly 製剤一発売記念講演会-(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演「超高齢社会の骨粗鬆症治療戦略-新薬の登場-」 座長)
- 72) 岐阜県慢性疼痛講演会(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演「運動器の慢性疼痛-メカニズムと対策-」 座長)
- 73) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演「腰椎変性側弯症 Degenerative Lumbar Scoliosis」 座長)
- 74) 2011 岐阜骨粗鬆症セミナー(平成 23 年 10 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症の診断と治療-Update-」 座長)
- 75) 第 45 回宮崎県スポーツ学会(平成 23 年 10 月, 宮崎, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」 演者)
- 76) 第 46 回日本脊髄障害医学会(平成 23 年 11 月, 泉佐野市, 講演「脊椎感染症に対する二次的手術法」 演者)
- 77) 第 1 回岐阜運動器疾患の疼痛を考える会(平成 23 年 11 月, 岐阜, 特別講演「運動器疾患の痛みに関する私の研究-傑作選-」 座長)
- 78) モーラステープ効能追加記念講演会(平成 23 年 11 月, 岐阜, 講演「脳と健康」 座長)

大野貴敏 :

- 1) 岐阜大学公開講座 先端を行く連合創薬医療情報研究科(平成 22 年 6 月, 岐阜市, 講演「ユージング肉腫における siRNA」 演者)
- 2) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成 22 年 9 月, 岐阜, 特別講演「難治性疼痛の薬物療法」 座長)
- 3) 第 83 回岐北メディカルカンファレンス(平成 22 年 9 月, 山口市, 講演「軟部腫瘍の診療 要点と盲点」 演者)
- 4) 7th Combined Meeting of the Orthopaedic Research Societies(2010.10, Kyoto, Workshop9「The prospects of the molecular targeted therapy for sarcoma.」 Chairman)
- 5) 岐阜 GP 研究会(平成 23 年 9 月, 岐阜, 講演「骨軟部腫瘍の要点と盲点 一骨軟部腫瘍を見逃さないために-」 演者)
- 6) 岐阜地域医療連携セミナー(平成 23 年 10 月, 岐阜, 特別講演「大腿骨近位部骨折に対する地域連携パスの IT 化とその活用効果」 座長)

伊藤芳毅 :

- 1) 第 1 回岐阜県セラピスト資格継続研修会(平成 21 年 8 月, 岐阜, 講演「下肢のリハビリテーション」 演者)
- 2) 平成 21 年度東海・北陸地区リウマチケア研修会(平成 21 年 11 月, 岐阜, 講演「関節リウマチの病態からみた手術的治療について」 演者)
- 3) 第 25 回岐阜県接骨学会(平成 22 年 9 月, 大垣, 研修講演「股関節疾患の診断と治療」 演者)
- 4) 第 14 回東海足と靴の研究会(平成 22 年 10 月, 愛知, 特別講演「外反母趾治療 up to date」 座長)
- 5) 第 6 回東海股関節研究会(平成 23 年 6 月, 愛知, 教育研修講演「Chiari 手術による関節温存の選択意義」 座長)

青木隆明 :

- 1) 第 8 回皮膚リハビリテーション研究会(平成 21 年 12 月, 岐阜, 講演「ミノドロン酸水和物と運動法による骨粗鬆症への影響の調査プロトコール」 演者)
- 2) 日本障害者水泳連盟指導者講習会(平成 23 年 1 月, 神戸市, 講演「関節機能障害がある人への指導における留意事項」 演者)
- 3) 日本障害者スポーツ指導者講習会(平成 23 年 3 月, 岐阜市, 講演「リハビリテーション医学」 演者)
- 4) アステラス製薬株式会社開発研究会(平成 23 年 6 月, 岐阜市, 講演「骨粗鬆症の薬剤アンケート調査と展望」 演者)
- 5) 岐阜県障害者スポーツ協会 分野別研修会(平成 23 年 6 月, 岐阜市, 講演「切断と人工関節」 演者)
- 6) 第 13 回岐阜整形外科卒後夏期セミナー(平成 23 年 7 月, 岐阜市, 講演「運動器リハビリテーションの現状と可能性」 演者)

- 7) 全日本鍼灸学会中部地方会(平成 23 年 7 月, 岐阜市, 特別講演「運動器リハビリテーションと臨床解剖学」 演者)
- 8) ボノテオ錠 monthly 製剤新発売記念講演(平成 23 年 9 月, 岐阜市, 講演「ボノテオ錠と運動療法による骨粗鬆症への影響の調査報告」 演者)
- 9) 第 3 回岐阜県セラピスト資格継続研修会(平成 23 年 9 月, 岐阜市, 講演「講演 1 運動機能と生活評価」 演者)
- 10) 第 20 回整形外科リハビリテーション学会(平成 23 年 9 月, 岐阜市, 特別講演「解剖とリハビリテーション—アプローチへのヒント—」 演者)
- 11) 運動器 10 年・骨と関節の日記念事業公開講座(平成 23 年 10 月, 岐阜市, 特別講演「変形性膝関節症に対する運動療法」 演者)
- 12) 第 10 回岐阜リハビリテーション研究会(平成 23 年 11 月, 岐阜, 特別講演「前十字靭帯損傷と臨床」 座長)
- 13) 岐阜リハビリテーション研究会(平成 23 年 11 月, 岐阜市, 講演「認知症の薬物治療」 演者)
- 14) 平成 23 年度障害者スポーツ指導員養成講座(平成 23 年 11 月, 美濃加茂市, 講演「障害者のスポーツ(知的・身体障害)」 演者)

松本 和 :

- 1) 第 18 回プロテオグリカンフォーラム(平成 23 年 2 月, 東京, 招待講演「骨格形成におけるヘパラン硫酸の役割—*Ext1* コンディショナルノックアウトマウスの解析から—」 演者)
- 2) 第 24 回日本軟骨代謝学会(平成 23 年 3 月, 福岡, 「ヒアルロン酸欠損マウスによる四肢骨格形成異常」 シンポジスト)
- 3) 7th International Conference on Proteoglycans(2011.10, Sydney, Invited Speaker 「Nobel Mice Models Provide the New Insights for the Pathogenesis of Multiple Hereditary Exostoses」 Lecturer)

伏見一成 :

- 1) 7th Combined Meeting of the Orthopaedic Research Societies(2010.10, Kyoto, Session 8 「Cartilage, Meniscus, Synovium 2」 chairman)
- 2) The 8th Combined Congress of the Spine and Pediatric Sections, Asia Pacific Orthopaedic Association(2011. 06, 「lumbar spinal canal stenosis」 symposist)
- 3) The 8th Combined Congress of the Spine and Pediatric Sections, Asia Pacific Orthopaedic Association(2011.06, 「poster session, thoracic spine」 chairman)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 矢野賢一, 大原瑛一, 堀畑 聡, 青木隆明, 西本 裕 : 学会論文賞 2010 計測自動制御学会 SICE Annual Conference 2010 in Taiwan : 適応フィルタを用いた振戦抑制制御システムの開発と食事支援ロボットへの応用(平成 22 年度)
- 2) 瀧上伊織 : 岐阜県医師会勤務医部会学術奨励賞受賞 : コンドロイチン硫酸合成酵素群の遺伝子異常と変形性関節症の発症に関する基礎研究(平成 22 年 8 月)
- 3) 瀧上伊織 : New Investigator Recognition Award (NIRA) 7th Combined Meeting of the Orthopaedic Research Societies : Synthetic siRNA targeting the breakpoint of EWS/Fli-1 inhibits growth of Ewing sarcoma xenografts in a mouse model(平成 22 年 10 月)
- 4) 瀧上伊織 : 岐阜医学奨励賞受賞 : EWS/Fli-1 を標的とする化学合成 siRNA はユーイング肉腫のマウス皮下腫瘍モデルにおける腫瘍増大を抑制する(平成 23 年 5 月)

9. 社会活動

清水克時 :

- 1) WHO 国際病名分類(ICD-11), 筋骨格系 TAG ; Co-chair(平成 21 年度)
- 2) 財団法人愛知骨軟部組織移植振興財団理事(平成 22 年 6 月～現在)

西本 裕 :

- 1) 岐阜県社会保険診療報酬請求書審査委員会審査委員(平成 21 年度)
- 2) 岐阜県社会保険診療報酬支払基金診療報酬請求審査委員会委員(~現在)

- 3) 岐阜県スポーツドクター協議会理事(～現在)
- 4) 岐阜県体育協会スポーツ医科学委員(～現在)
- 5) 岐阜労働局労災保険診療協議会委員(～現在)
- 6) 損害保険料率算出機構顧問医(平成 21 年度)
- 7) 広州 2010 アジアパラ競技大会日本選手団帯同医(平成 22 年 12 月 7 日～21 日)

伊藤芳毅：

- 1) 岐阜県社会福祉審議会委員(平成 22 年度～現在)
- 2) 岐阜市社会福祉審議会委員(平成 22 年度～現在)
- 3) 愛知骨軟部組織移植振興財団評議員(～現在)

青木隆明：

- 1) 日本障害者水泳連盟顧問医師(～現在)
- 2) 日本アンチドーピング協会 DCO(～現在)
- 3) 西日本パワーリフティング選手権 ドーピングコントロール(平成 23 年 5 月 15 日)
- 4) 第 50 回全国教職員相撲選手権大会 ドーピングコントロール(平成 23 年 8 月 21 日)
- 5) パンパシフィック世界水泳選手権帯同医(平成 23 年 8 月 7 日～17 日)
- 6) 長良川ふれあいマラソン 競技役員(医務)(平成 23 年 10 月 2 日)
- 7) ジャパンパラリンピックアーチェリー選手権大会 競技役員(医務)(平成 23 年 10 月 8 日～9 日)
- 8) 関東障害者陸上選手権大会 ドーピングコントロール(平成 23 年 10 月 11 日)
- 9) 大分国際車椅子マラソン ドーピングコントロール(平成 23 年 10 月 30 日)
- 10) IPC パワーリフティング選手権大会 ドーピングコントロール(平成 23 年 12 月 11 日)

山岸宏江：

- 1) ジャパンパラリンピック水泳大会医務(平成 21 年度～現在)
- 2) アジアユース大会シャペロン(平成 21 年度)
- 3) 大分車いすマラソンシャペロン(平成 22 年 7 月 17 日～18 日)

10. 報告書

- 1) 清水克時, 細江英夫：低侵襲胸椎前方手術に関する研究：厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 脊柱靭帯骨化症に関する調査研究 平成 20 年度 総括・分担研究年度終了報告書(平成 21 年)
- 2) 大野貴敏：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究：厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業平成 21 年度 総括・分担研究報告書：78-80(平成 21 年)
- 3) 大野貴敏：高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究：厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業平成 22 年度 総括・分担研究報告書：94-99(平成 22 年)

11. 報道

- 1) 清水克時：「研究室から 大学はいま」脊椎感染症の新しい手術法：岐阜新聞(2010 年 8 月 17 日)
- 2) 大野貴敏：Cancer Journey ～がんとともに生きるということ～：岐阜テレビ(2011 年 5 月 31 日)
- 3) 清水克時：高齢化社会の新国民病 ロコモティブシンドローム～運動器生涯の進行を防ぎ、自立生活を送るために～：朝日新聞(2011 年 7 月 17 日)

12. 自己評価

評価

新入医局員が減少傾向にある中、各研究班の努力により、学会活動、論文発表などが概ね目標に達したと思われるが、より質の高い成果をあげるべく努力を続けたい。臨床業務においては、難易度の高い手術症例が増加しており、大学としての社会貢献を適切に果たしていると評価する。

現状の問題点及びその対応策

増加する患者数に対応するため、臨床業務の負担が増している一方で、大学院生の数が減少し、基礎研究の activity の低下が懸念される。より効率的な研究・診療体制を確立する必要がある。

今後の展望

徐々にではあるが新入医局員が増加しつつあり、今後の研究・診療体制の充実が期待される。関節研究分野では、変形性関節症の病態の解析を進め、新規治療法の開発を目指す。

背椎研究分野においては、椎間板変性のメカニズムを追究する。肉腫研究分野では、分子標的治療の多施設共同研究をスタートさせたい。

(7) 皮膚病態学分野

1. 研究の概要

1) 膿疱性乾癬におけるアフレスシス治療の奏功機序に関する研究

皮膚科稀少難治性疾患の一つである、膿疱性乾癬の新しい治療として、アフレスシス治療、特に好中球・単球吸着療法の臨床的研究およびその奏功機序を研究している。特にこのカラムを用いた治療の作用機序を白血球のサイトカイン産生能および接着因子発現レベルで検討し、欧州研究皮膚科学会、日本研究皮膚科学会、日本乾癬学会で報告している。また、欧文誌 (Ther Apher Dial) でも報告している。今後さらに臨床的および研究的観点から発展が望まれる。本研究は清島真理子教授、藤澤智美助教、守屋智枝医員を中心に行っている。

2) アトピー性皮膚炎におけるスフィンゴ脂質の生理活性脂質としての機能解明に関する研究

スフィンゴ脂質、とくにセラミド (Cer) は表皮角質層において皮膚バリア機能を担う。岐阜薬科大学との共同研究により、アトピー性皮膚炎の皮膚角質層のバリア機能を解析し、アトピー性皮膚炎 (AD) および尋常性乾癬の患者角層 Cer は短鎖脂肪酸 Cer が相対的に増加していること、培養ケラチノサイトでインターフェロン (INF) γ が脂肪酸伸長酵素の発現を抑制することを見出し、すでに米国研究皮膚科学会で報告している。ところで、Cer は細胞内でスフィンゴシン 1 リン酸 (S1P) に代謝され分化・増殖に深く関与することが知られているが皮膚では明らかではない。そこで角層 Cer の質的異常のメカニズムと意義を解明するとともに、炎症性皮膚疾患における新たな治療薬開発の基盤とすることを目的として、表皮ケラチノサイトにおけるスフィンゴ脂質 (Cer, S1P) の生理活性脂質としての役割を明らかにしている。この成果は、日本研究皮膚科学会で報告しており、現在欧文誌に投稿中である。本研究は加納宏行准教授、坂野喜子非常勤講師、太和田知里大学院生により行われている。

3) 皮膚悪性腫瘍細胞の薬剤耐性とスフィンゴ脂質代謝に関する研究

悪性黒色腫の治療において抗がん剤に対し抵抗性 (耐性) をもつことが大きな障害となる。抗がん剤耐性獲得機序には多くの因子が関与するが、最近ではがん幹細胞の存在が注目されている。がん幹細胞が悪性黒色腫の再発や転移において中心的役割を担っており、その生物学的特性を解明することは新規治療薬の開発につながると予想される。がん幹細胞における抗がん剤耐性とスフィンゴ脂質代謝との関連性に焦点を当て、がん幹細胞の増殖・分化のスフィンゴ脂質代謝による制御機構を明らかにし、新規治療薬の分子標的の基盤となる知見を得ることを目的として清島真理子教授、坂野喜子非常勤講師、渋谷佳直助教が研究している。

4) 皮膚筋炎特異的自己抗体と臨床病型の相関に関する研究

皮膚筋炎には抗アミノアシルトランスフェラーゼ抗体、抗 Mi-2 抗体、抗 p155/140 抗体、抗 CADM140 抗体など種々の自己抗体が検出され、自己抗体特異的な臨床像を呈することが近年明らかになってきた。金沢大学皮膚科などと共同研究を行っており、その成果の一部は既に Arch Dermatol で報告され、実際の臨床において診断および治療の選択に役立っている。さらに抗体価の経時的変化を測定し、その結果を考慮して、自己抗体と臨床病型との相関および適切な治療法の選択を現在検討している。本研究は清島真理子教授、加納宏行准教授、山中新也助教により行っている。

5) アクチン結合タンパク質 septin の表皮細胞機能に関する研究

愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所永田浩一部長との共同研究によりアクチン結合タンパク質である septin の表皮細胞増殖、接着、移動、形態変化における機能を研究している。創傷治癒機構、がん浸潤・転移機構の解明につながると考えており、加納宏行准教授、水谷陽子大学院生が行っている。

2. 名簿

教授：	清島真理子	Mariko Seishima
准教授：	加納宏行	Hiroyuki kanoh
助教：	藤澤智美	Tomomi Fujisawa
助教：	渋谷佳直	Yoshinao Shibuya
助教：	山中新也	Shinya Yamanaka
助教：	佐藤三佳	Mika Sato
医員：	太和田知里	Chisato Tawada
医員：	押谷陽子	Yoko Oshitani
医員：	大橋優文	Masafumi Ohhashi
医員：	守屋智枝	Chie Moriya
医員：	鈴木智子	Satoko Suzuki
医員：	山本真由美	Mayumi Yamamoto

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 清島真理子. 伝染性紅斑の的確な診断法: 宮地良樹編. 皮膚科診療最前線—うつる皮膚病最前線—, 東京: メディカルレビュー社; 2009年: 78-81.
- 2) 清島真理子. 急性発疹症と登校停止: 宮地良樹編. 皮膚科診療最前線—うつる皮膚病最前線—, 東京: メディカルレビュー社; 2009年: 82-83.
- 3) 清島真理子. アミロイドーシスの顔面病変: 宮地良樹編. 皮膚科診療最前線—顔の皮膚病最前線—, 東京: メディカルレビュー社; 2009年: 186-189.
- 4) 清島真理子. 毛孔性紅斑秕糠疹: 馬場直子, 大矢幸弘編. 小児臨床ピクシス7—アトピー性皮膚炎と皮膚疾患—, 東京: 中山書店; 2009年: 217-218.
- 5) 清島真理子. 毛孔性苔癬・線状苔癬・光沢苔癬: 馬場直子, 大矢幸弘編. 小児臨床ピクシス7—アトピー性皮膚炎と皮膚疾患—, 東京: 中山書店; 2009年: 219-221.
- 6) 清島真理子. サイトメガロウイルス感染症: 鈴木啓之, 神崎 保編. 皮膚科診療カラーアトラス大系 第4巻, 東京: 講談社; 2009年: 65.
- 7) 市來善郎. 蒙古斑: 鈴木啓之, 神崎 保編. 皮膚科診療カラーアトラス大系 第3巻, 東京: 講談社; 2009年: 45.
- 8) 市來善郎, 山口 徹編. 手湿疹, 汗疱: 今日の治療指針 2009年版, 東京: 医学書院; 2009年: 868.
- 9) 神谷秀喜. 基底細胞癌: 宮地良樹, 古川福実編. 皮膚疾患診療実践ガイド—皮膚悪性腫瘍— 改訂第2版, 東京: 文光堂; 2009年: 654-656.
- 10) 神谷秀喜. Paget's 病: 宮地良樹, 古川福実編. 皮膚疾患診療実践ガイド—皮膚悪性腫瘍— 改訂第2版, 東京: 文光堂; 2009年: 651-654.
- 11) 清島真理子. アトピー性皮膚炎: 中野 哲, 森 博美監修. 疾患別の漢方薬の使い方—実践漢方ガイドII臨床編2—, 東京: 医学書院; 2010年: 164.
- 12) 清島真理子. じん麻疹: 中野 哲, 森 博美監修. 疾患別の漢方薬の使い方—実践漢方ガイドII臨床編2—, 東京: 医学書院; 2010年: 166.
- 13) 清島真理子. 酒さ: 中野 哲, 森 博美監修. 疾患別の漢方薬の使い方—実践漢方ガイドII臨床編2—, 東京: 医学書院; 2010年: 167.
- 14) 清島真理子. 円形脱毛症: 中野 哲, 森 博美監修. 疾患別の漢方薬の使い方—実践漢方ガイドII臨床編2—, 東京: 医学書院; 2010年: 168.
- 15) 清島真理子. 皮膚癢痒症: 中野 哲, 森 博美監修. 疾患別の漢方薬の使い方—実践漢方ガイドII臨床編2—, 東京: 医学書院; 2010年: 169.
- 16) 清島真理子. 凍瘡(しもやけ): 中野 哲, 森 博美監修. 疾患別の漢方薬の使い方—実践漢方ガイドII臨床編2—, 東京: 医学書院; 2010年: 170.
- 17) 市來善郎. 疥癬, ケジラミ症: 山口 徹編集. 今日の治療指針 2010年版, 東京: 医学書院; 2010年: 980-981.
- 18) 市來善郎. 糖尿病患者の白癬: What's New in 臨床皮膚科学 2010-2011, 東京: メディカルレビュー社; 2010年: 124-125.
- 19) 清島真理子. Darier 病, Hailey-Hailey 病: 皮膚疾患最新の治療 2011-2012, 東京: 南江堂; 2011年: 157.
- 20) 清島真理子. Gloves and socks 症候群(パルボウイルス B19 感染): 皮膚で見つける全身疾患—頭のてっぺんからつま先まで—, 東京: メディカルレビュー社; 2011年: 107.
- 21) 清島真理子. ヒトパルボウイルス B19 感染症の多彩な臨床症状—III. 急性発疹症とウィルス—: 診る・わかる・治す皮膚科臨床アセット 3—ウィルス性皮膚疾患ハンドブック, 東京: 中山書店; 2011年: 184-188.
- 22) 清島真理子. liveo vasculopathy の診断と皮膚症状—皮膚の血行障害 33: 診る・わかる・治す皮膚科臨床アセット 5—皮膚の血管炎・血行障害, 東京: 中山書店; 2011年: 184-188.
- 23) 清島真理子. liveo vasculopathy の治療—皮膚の血行障害 34: 診る・わかる・治す皮膚科臨床アセット 5—皮膚の血管炎・血行障害, 東京: 中山書店; 2011年: 189-193.
- 24) 清島真理子. liveo vasculopathy の臨床経過—予後—皮膚の血行障害 35: 診る・わかる・治す皮膚科臨床アセット 5—皮膚の血管炎・血行障害, 東京: 中山書店; 2011年: 194-197.

著書 (欧文)

- 1) Kitajima Y, Aoyama Y. Desmosome assembly, disassembly and signaling in keratinocytes: Lessons from pemphigus, a desmosome-remodeling disease. In: Nicolla Cirillo, ed. Pathophysiology of the Desmosome, RESEARCH SIGNPOST; 2009:9-31.

総説 (和文)

- 1) 清島真理子. 皮膚血管炎のすべて—顕微鏡的多発血管炎, Monthly Book Derma 2009年; 156号: 22-28.
- 2) 神谷秀喜. 巨大色素性母斑: 若年性黒色腫子どもの良性・悪性腫瘍の実践診療—手術を考慮する腫瘍—, 診断と治療社; 2009年: 71-73.
- 3) 神谷秀喜. 乳房外 Paget 病の病期分類の定着と進行例に対する治療指針の検討—日本皮膚外科学会乳房外 Paget 病グループスタディーを顧みて, Skin Cancer 2009年; 23巻: 315-319.

- 4) 青山裕美. 水疱と膿疱が混じる疾患：角層下膿疱症と IgA 天疱瘡, *Monthly Book Derma* 2009 年；155 号：26-31.
- 5) 清島真理子. 続発疹とは？－肉眼所見の見方・記載法, *Visual Dermatology* 2010 年；9 卷：338-345.
- 6) 清島真理子. 展望－toxic shock syndrome, *皮膚病診療* 2010 年；32 卷：1274-1281.
- 7) 清島真理子. 内科医が知っておきたい皮膚病変, *岐阜県内科医会雑誌* 2010 年；24 卷：47-61.
- 8) 清島真理子. 最近の話題, *Clinical Derma* 2010 年；12 卷：1-2.
- 9) 清島真理子. 皮膚抗酸菌感染症の診断と治療, *和歌山県医報* 2010 年；669 卷：5-6.
- 10) 清島真理子. 質疑応答：伝染性紅斑の変容？, *皮膚病診療* 2010 年；32 卷：1140-1141.
- 11) 清島真理子. 診療研究：褥瘡治療の発展と今後の展望, *月刊保団連* 2010 年；1023 卷：48-52.
- 12) 清島真理子. 皮膚抗酸菌感染症, *皮膚科の臨床* 2010 年；52 卷：1827-1836.
- 13) 清島真理子. 診療ガイドラインは使うもの？使われるもの？－advisor の眼－, *皮膚病診療* 2011 年；33 卷：76.
- 14) 大西秀典, 寺本貴英, 久保田一生, 清島真理子, 近藤直実. 皮膚症状からみた自己炎症性症候群, *日本小児皮膚科学会雑誌* 2011 年；30 卷：11-16.
- 15) 奥村陽子, 清島真理子. サイトメガロウイルスによる多形紅斑－多様化するヘルペス感染症, *Monthly Book Derma* 2011 年；178 卷：29-34.
- 16) 高橋智子, 清島真理子. 網状皮斑－皮膚から内科疾患を疑う－IV. 紫斑, *Medicine* 2011 年；48 卷：56-59.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 神谷秀喜, 岩田浩明, 北島康雄, 師井洋一. 乳房外 Paget 病グループスタディー2008年度報告, *日本皮膚外科学会誌* 2009 年；13 卷：148-151.
- 2) 青山裕美, 加藤元一, 永井美貴, 伊佐保香, 村瀬香奈, 北島康雄. Peeling skin syndrome, *皮膚病診療* 2009 年；31 卷：179-182.
- 3) 青山裕美. 自己免疫性水疱症－天疱瘡, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：1413-1422.
- 4) 永井美貴, 奥村陽子, 青山裕美, 北島康雄. 痒疹型優性栄養障害型表皮水疱症, *皮膚病診療* 2009 年；31 卷：191-194.
- 5) 永井美貴, 青山裕美, 神谷秀喜, 市来善郎, 小嶋三佳, 北島康雄, 松永研吾, 笹岡郁乎. リンパ管型スポロトリコーシスの 1 例, *臨床皮膚科* 2009 年；63 卷：602-606.
- 6) 永井美貴, 村松幹司, 久野治人, 青山裕美, 北島康雄. 道化師様魚鱗癬, *Visual Dermatology* 2009 年；8 卷：1168-1169.
- 7) 加納宏行, 坂 義経. 米国製ニキビケア化粧品に含まれる過酸化ベンゾイルによる接触性皮膚炎, *皮膚病診療* 2009 年；31 卷：1307-1308.
- 8) 渋谷佳直, 荒川智佳子, 水谷陽子, 清島真理子. 外陰および右乳房に生じた Paget 病の男性例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：207-209.
- 9) 鈴木智子, 荒川智佳子, 渋谷佳直, 清島真理子. 13 年後に再発した syringomatous carcinoma の 1 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：215-218.
- 10) 佐藤三佳, 江崎智香子, 神谷秀喜, 北島康雄. 特異な外観を呈した胃癌の皮膚転移, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：219-221.
- 11) 荒川智佳子, 渋谷佳直, 水谷陽子, 清島真理子. ミゾリピンが著効した難治性尋常性天疱瘡の 1 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：273-276.
- 12) 平光裕子, 岩田浩明, 青山裕美, 北島康雄. 抗 p200 類天疱瘡の 1 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：305-309.
- 13) 平光裕子, 岩田浩明, 青山裕美, 神谷秀喜, 北島康雄, 青木美奈子. 表皮母斑症候群の 2 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：389-392.
- 14) 岩田浩明, 市来善郎, 北島康雄. Unilesional mycosis fungoides の 1 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：588-589.
- 15) 山中新也, 永井美貴, 神谷秀喜, 北島康雄. 転移をきたした眼瞼脂腺癌の治療, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：653-656.
- 16) 渡邊華奈, 鈴木智子, 渋谷佳直, 清島真理子, 小山賀継, 小杉浩史. 出産後に発症したシクロスボリンが有効であった成人 Still 病の 1 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：799-802.
- 17) 浅川絵理, 水谷陽子, 神谷秀喜, 北島康雄, 森 弘文. 腹部に生じたグロムス腫瘍の 1 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：933-936.
- 18) 清水 舞, 佐藤三佳, 和泉智子, 神谷秀喜, 北島康雄. Microcystic adnexal carcinoma の 3 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：1055-1059.
- 19) 加藤元一, 青山裕美, 岩田浩明, 神谷秀喜, 市来善郎, 北島康雄. 経過中に移植片対宿主病変様反応を生じた薬剤性過敏症候群の 1 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：1253-1257.
- 20) 佐藤三佳, 飴野 彩, 神谷秀喜, 北島康雄. 腋窩 Paget 病の 3 例, *皮膚科の臨床* 2009 年；51 卷：1895-1898.
- 21) 渋谷佳直, 荒川智佳子, 鈴木智子, 清島真理子. 低位鎖肛を伴った hypomelanosis of Ito の 1 例, *臨床皮膚*

- 科 2009年;63巻:111-113.
- 22) 渋谷佳直, 荒川智佳子, 鈴木智子, 清島真理子. Low dose FP療法が有効であった進行期乳房外パジェット病の1例, *Skin Cancer* 2009年;23巻:375-378.
 - 23) 鈴木智子, 荒川智佳子, 渋谷佳直, 清島真理子, 大音博之, 長縄吉幸. 舌病変を伴ったサルコイドーシス, *臨床皮膚科* 2009年;63巻:118-121.
 - 24) 平光裕子, 米田和史, 神谷秀喜. 肛囲に生じた基底細胞癌の1例, *Skin Cancer* 2009年;24巻:49-52.
 - 25) 藤掛真理子, 市来善郎, 北島康雄. 血管拡張性肉芽腫, *Visual Dermatol* 2009年;8巻:250-251.
 - 26) 野村昌代, 青山裕美, 永井美貴, 伊佐保香, 北島康雄. Vörner型掌跖角化症-ケラチン9遺伝子(KRT9)の2B領域に新規点突然変異(G1u450Lys)を認めた親子例, *皮膚病診療* 2009年;31巻:159-162.
 - 27) 守屋智枝, 竹尾友宏, 宮尾大樹, 青山裕美. Netherton症候群, *Visual Dermatology* 2009年;8巻:1182-1184.
 - 28) 清島真理子. 重症ブドウ球菌・溶連菌感染症-重要な皮膚感染症・性感染症, *日本皮膚科学会雑誌* 2010年;120巻:2907-2909.
 - 29) 高木 肇, 荒川智香子, 加藤元一, 渡邊華奈, 清島真理子. 紫斑を生じたヒトパルボウイルス B19 感染症, *皮膚病診療* 2010年;32巻:29-32.
 - 30) 松本茂美, 奥村陽子, 清島真理子, 熊田恵介, 吉田隆浩, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 女性医師・女子学生の意識調査と女性医師就労支援の会の設立, *月刊地域医学* 2010年;24巻:674-681.
 - 31) 神谷秀喜, 岩田浩明, 北島康雄, 師井洋一. 乳房外Paget病グループスタディ-2009年度報告, *日本皮膚外科学会誌* 2010年;14巻:130-133.
 - 32) 加藤元一, 渋谷佳直, 清島真理子, 浅野裕子, 大楠清文. 腋窩に皮下潰瘍を形成した *Mycobacterium avium* 皮膚感染症の1例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:171-174.
 - 33) 村瀬香奈, 小林 彩, 野村昌代, 太和田知里, 前田 学, 清島真理子, 青木 聡, 野田伸司. 型別判定を試みたツツガムシ病の3例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:589-593.
 - 34) 宮嶋佳苗, 加藤元一, 渋谷佳直, 清島真理子, 岩田晶子, 井川典克. 抜毛症から診断に至ったアスペルガー症候群の1例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:979-982.
 - 35) 佐藤三佳, 山田孝宏, 岩田啓之, 森 良雄, 高橋優三, 北島康雄. マムシ生食後に発症した creeping disease の2例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:987-991.
 - 36) 岩田浩明, 青山裕美, 神谷秀喜, 北島康雄, 市来善郎. 原発巣が完全消退したと思われる悪性黒色腫の2例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:1015-1018.
 - 37) 渋谷佳直, 鈴木智子, 清島真理子. 塩酸イリノテカンが有効であった進行期有棘細胞癌の1例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:1163-1165.
 - 38) 加藤元一, 渋谷佳直, 清島真理子, 加治賢三, 藤本 学. 肺癌転移に合併した抗 155/140kDa 蛋白抗体陽性皮膚筋炎の1例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:1217-1220.
 - 39) 渡邊華奈, 加藤元一, 渋谷佳直, 浅野裕子, 大楠清文, 江崎孝行, 清島真理子. Metastatic tuberculous abscess から診断に至った肺結核, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:1431-1435.
 - 40) 村瀬香奈, 岩田浩明, 市来善郎, 清島真理子. 筋周皮腫(Myopericytoma)の1例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:2047-2050.
 - 41) 奥村優香, 徳住正隆, 周 円, 岩田浩明, 青山裕美, 市来善郎, 清島真理子. Dermatitis papulosa alba の3例, *皮膚科の臨床* 2010年;52巻:2037-2040.
 - 42) 藤澤智美, 清島真理子, 浅野剛之, 安田貴彦, 小杉浩史. 皮膚症状がきっかけとなり診断に至った多発性骨髄腫, *臨床皮膚科* 2010年;64巻:323-327.
 - 43) 佐藤三佳, 山田孝宏, 三原昌弘, 森 良雄, 清島真理子. 胃梅毒を合併した第2期梅毒の1例, *Visual Dermatology* 2010年;9巻:1048-1049.
 - 44) 野村昌代, 村瀬香奈, 清島真理子. 潰瘍性大腸炎に合併した尋常性乾癬の膿疱化, *皮膚病診療* 2010年;32巻:1179-1182.
 - 45) 渡邊華奈, 高木 肇, 市原美里, 渋谷佳直, 清島真理子. Primary dermal melanoma, *皮膚病診療* 2010年;32巻:737-740.
 - 46) 清島真理子. 伝染性紅斑-多彩な臨床症状, *日本皮膚科学会雑誌* 2011年;121巻:2863-2865.
 - 47) 加納宏行, 坂 義経. ポケット切開した創の変形への対策の重要性を認識させられた仙骨部褥瘡の1例-陰圧閉鎖療法における工夫-, *日本褥瘡学会雑誌* 2011年;13巻:70-74.
 - 48) 藤澤智美. 膿疱性乾癬の新たな治療選択-顆粒球吸着療法, *日本皮膚科学会雑誌* 2011年;121巻:3004-3006.
 - 49) 渋谷佳直, 齋藤真理子, 河内桂子, 小川陽子, 加藤優佳, 岩田浩明, 神谷秀喜, 清島真理子. 外陰部悪性黒色腫の3例, *Skin Cancer* 2011年;26巻:148-152.
 - 50) 渋谷佳直, 鈴木智子, 水谷陽子, 神谷秀喜, 清島真理子. 下口唇に生じた有棘細胞癌4例の切除後再建法の検討, *日本皮膚科学会雑誌* 2011年;15巻:60-61.
 - 51) 松山かなこ, 青山裕美, 市来善郎, 清島真理子. アリルイソプロピルアセチル尿素による固定薬疹の1例, *皮膚科の臨床* 2011年;53巻:17-20.
 - 52) 浅野由祐子, 守屋智枝, 岩田浩明, 青山裕美, 清島真理子. エルロチニブによる皮膚障害の2例, *皮膚科の臨床* 2011年;53巻:259-263.
 - 53) 小川陽子, 加納宏行, 宮崎 崇, 太田浩敏, 大楠清文, 清島真理子. 遺伝子解析により早期に診断できたスポロトリコーシスの1例, *皮膚科の臨床* 2011年;53巻:573-576.

- 54) 渡邊華奈, 加藤元一, 松山かなこ, 高木 肇, 浅野裕子, 渋谷佳直, 清島真理子, 大楠清文. *Exophiala lecanii-corni* による黒色菌糸症の1例, 皮膚科の臨床 2011年; 53巻: 581-584.
- 55) 加藤元一, 渡邊華奈, 松山かなこ, 高木 肇, 渋谷佳直, 清島真理子. 肺癌の病勢と皮疹に相関がみられた *Erythema gyratum repens* の1例, 皮膚科の臨床 2011年; 53巻: 821-825.
- 56) 渋谷佳直, 加藤元一, 清島真理子, 加治賢三, 藤本 学. 抗 Ku 抗体陽性重複症候群の1例, 皮膚科の臨床 2011年; 53巻: 854-857.
- 57) 佐藤三佳, 岩田浩明, 高橋伸通, 望月清文, 清島真理子, 橋本 隆. ラミニン 332 γ 2 鎖が標的抗原であった粘膜炎天疱瘡の1例, 皮膚科の臨床 2011年; 53巻: 1007-1010.
- 58) 小川陽子, 藤澤智美, 市來善郎, 濱口儒人, 藤本 学, 清島真理子. TNF- α 阻害薬投与中に生じた Amyopathic dermatomyositis の1例, 皮膚科の臨床 2011年; 53巻: 1733-1737.

原著 (欧文)

- 1) Amagai M, Ikeda S, Shimizu H, Iizuka H, Hanada K, Aiba S, Kaneko F, Izaki S, Tamai K, Ikezawa Z, Takigawa M, Seishima M, Tanaka T, Miyachi Y, Katayama I, Horiguchi Y, Miyagawa S, Furukawa F, Iwatsuki K, Hide M, Tokura Y, Furue M, Hashimoto T, Ihn H, Fujiwara S, Nishikawa T, Ogawa H, Kitajima Y, Hashimoto K, for Pemphigus Study Group. A randomized double-blind trial of intravenous immunoglobulin for pemphigus. *J Am Acad Dermatol.* 2009;60:595-603. IF 4.274
- 2) Ichiki Y, Kitajima Y. Omphalith. *Clin Exp Dermatol.* 2009;34:421-422. IF 1.267
- 3) Ichiki Y, Kitajima Y. A case of frontal mucocele manifesting with subcutaneous forehead tumor. *Clin Exp Dermatol.* 2009;34:621-623. IF 1.267
- 4) Hayashi M, Ichiki Y, Kitajima Y. Coexistence of recurrent generalized morphea and systemic sclerosis. *Acta Derm Venereol.* 2009;89:329-330. IF 2.780
- 5) Aoyama Y, Nomura M, Yamanaka S, Ogawa Y, Kitajima Y. Subcutaneous phaeohyphomycosis caused by *Exophiala xenobiotica* in a non-Hodgkin lymphoma patient. *Med Mycol.* 2009;47:95-99. IF 2.329
- 6) Aoyama Y, Yamamoto Y, Yamaguchi F, Kitajima Y. Low to high Ca²⁺-switch causes phosphorylation and association of desmocollin 3 with plakoglobin and desmoglein 3 in cultured keratinocytes. *Exp Dermatol.* 2009;18:404-408. IF 4.159
- 7) Aoyama Y, Kouchi K, Hiramitsu Y, Iwata H, Kitajima Y. Generalized eruption with histopathologic toxic epidermal necrolysis caused by occupational exposure to thiourea dioxide. *Eur J Dermatol.* 2009;19:509-511. IF 2.421
- 8) Iwata H, Aoyama Y, Kamiya H, Ichiki Y, Kitajima Y. Spindle cell squamous cell carcinoma showing epithelial-mesenchymal transition. *J Eur Acad Dermatol Venereol.* 2009;23:214-215. IF 3.309
- 9) Iwata H, Kamio N, Aoyama Y, Yamamoto Y, Hirako Y, Owaribe K, Kitajima Y. IgG from patients with bullous pemphigoid depletes cultured keratinocytes of the 180-kDa bullous pemphigoid antigen (type XVII collagen) and weakens cell attachment. *J Invest Dermatol.* 2009;129:919-926. IF 6.270
- 10) Iwata H, Kamiya H, Ichiki Y, Kitajima Y. Extramammary Paget's disease: unique pathological characteristics showing epidermal proliferation of squamoid and basaloid cells. *J Eur Acad Dermatol Venereol.* 2009;23:1210-1212. IF 3.309
- 11) Iwata H, Hiramitsu Y, Aoyama Y, Kitajima Y. A Case of anti-p200 pemphigoid: evidence for a different pathway in neutrophil recruitment compared with bullous pemphigoid. *Br J Dermatol.* 2009;160:462-464. IF 4.353
- 12) Seishima M, Yuge M, Kosugi H, Nagasaka T. Extranodal NK/T-cell lymphoma, nasal type, possibly arising from chronic Epstein-Barr virus infection. *Acta Derm Venereol.* 2010;90:102-103. IF 2.780
- 13) Seishima M, Shibuya Y, Kato G, Watanabe K. Photoleukomelanoderma possibly caused by etretinate in a patient with psoriasis. *Acta Derm Venereol.* 2010;90:85-86. IF 2.780
- 14) Seishima M, Shibuya Y, Watanabe K, Kato G. Pericarditis and pleuritis associated with human parvovirus B19 infection in a systemic lupus erythematosus patient. *Mod Rheumatol.* 2010;20:617-620. IF 1.800
- 15) Oyama Z, Naoe Y, Kimura H, Masunaga T, Seishima M, Aoyama Y, Kitajima Y. A new non-invasive method for evaluation of the stratum corneum structure in diseases with abnormal keratinization by immunofluorescence microscopy of desmoglein 1 distribution in tape-stripped sample. *J Dermatol.* 2010;37:873-881. IF 1.355
- 16) Fujisawa T, Seishima M. Multiple dermatofibromas in a patient with systemic lupus erythematosus and Sjögren's syndrome. *Mod Rheumatol.* 2010;20:396-400. IF 1.800
- 17) Nomura M, Maeda M, Seishima M. Subcutaneous phaeohyphomycosis caused by *Exophiala jeanselmei* in collagen disease patient. *J Dermatol.* 2010;37:1046-1050. IF 1.355
- 18) Yamauchi A, Iwata H, Ohnishi H, Teramoto T, Kondo N, Seishima M. Interleukin-17 expression in the urticarial rash of familial cold autoinflammatory syndrome: a case report. *Br J Dermatol.* 2010;163:1351-1353. IF 4.353
- 19) Hamaguchi Y, Kuwana M, Hoshino K, Hasegawa M, Kaji K, Matsushita T, Komura K, Nakamura M, Koderia M, Suga N, Higashi A, Ogusu K, Tsutsui K, Furusaki A, Tanabe H, Sasaoka S, Muro Y, Yoshikawa M, Ishiguro N, Ayano M, Muroi E, Fujikawa K, Umeda Y, Kawase M, Mabuchi E, Asano Y, Sodemoto K, Seishima M, Yamada H, Sato S, Takehara K, Fujimoto M. Clinical correlations with

- dermatomyositis (DM)-specific autoantibodies in adult Japanese patients with dermatomyositis: a multicenter, cross-sectional study. Arch Dermatol. 2011;147:391-398. IF 4.231
- 20) Iwata H, Kamiya H, Kitajima Y. False-negative sentinel lymph node biopsy resulting from obstruction of lymphatic basin by nodal metastasis: a case report of malignant melanoma. J Dermatol. 2011;38:1121-1124. IF 1.355
- 21) Fujisawa T, Murase K, Okumura Y, Kanoh H, Doi T, Yoshida S, Ogura S, Seishima M. Generalized pustular psoriasis successfully treated with granulocyte and monocyte adsorption apheresis. Ther Apher and Dial. 2011;15:374-378. IF 1.098
- 22) Shibuya Y, Kato G, Watanabe K, Seishima M. Giant tufted angioma successfully treated with radiation. J Dermatol. 2011;38:942-944. IF 1.355
- 23) Mizutani Y, Shibuya Y, Takahashi T, Tsunoda T, Moriyama T, Seishima M. Major royal jelly protein 3 as a possible allergen in royal jelly-induced anaphylaxis. J Dermatol. 2011;38:1079-1081. IF 1.355
- 24) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Ogawa Y, Seishima M, Hirose Y, Moriwaki H. Myelofibrosis successfully treated with prednisolone in a patient with pachydermoperiostosis. Intern Med. 2011;50:2207-2211. IF 1.037
- 25) Murase K, Kanoh H, Ishii N, Hashimoto T, Nakano H, Sawamura D, Seishima M. Bullous dermolysis of the newborn and dystrophic epidermolysis bullosa pruriginosa within the same family: two phenotypes associated with a *COL7A1* mutation. Acta Derm Venereol. 2011;91:730-731. IF 2.780
- 26) Ohashi M, Shu E, Tokuzumi M, Fujioka K, Ishizuka T, Hara A, Fujimoto M, Kaji K, Seishima M. Anti-p155/140 antibody-positive dermatomyositis with metastasis originating from an unknown site. Acta Derm Venereol. 2011;91:84-85. IF 2.780
- 27) Ohashi M, Shu E, Nagai M, Murase K, Nakano H, Tamai K, Sawamura D, Hiroka T, Seishima M, Kitajima Y, Aoyama Y. Two cases of recessive dystrophic epidermolysis bullosa diagnosed as severe generalized. J Dermatol. 2011;38:893-899. IF 1.355
- 28) Aoyama Y, Moriya C, Kamiya H, Nagai M, Rubenstein D, Iwatsuki K, Kitajima Y. Catabolism of pemphigus foliaceus autoantibodies by high-dose IVIg therapy. Eur J Dermatol. 2011;21:58-61. IF 2.421
- 29) Murakami M, Ito H, Hagiwara K, Kobayashi M, Hoshikawa A, Takagi A, Kojima T, Tamiya-Koizumi K, Sobue S, Ichihara M, Suzuki M, Banno Y, Nozawa Y, Murate T. Sphingosine kinase 1/S1P pathway involvement in the GDNF-induced GAP43 transcription. J Cell Biochem. 2011;112:3449-3458. IF 3.122

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：石塚達夫，研究分担者：清島真理子；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：膵βcellにおけるp140Capのインスリン分泌における役割；平成21年度；1,000千円
- 2) 研究代表者：江崎孝行，研究分担者：清島真理子；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：敗血症における病原菌の迅速検出法と治療効果判定法の確立；平成21年度；500千円
- 3) 研究代表者：岩月啓氏，研究分担者：青山裕美；厚生労働省特定疾患稀少難治性皮膚疾患調査研究；平成21年度；2,500千円
- 4) 研究代表者：加納宏行；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：リポドミクスを利用した皮膚バリア機能障害研究；平成21年度；1,500千円
- 5) 研究代表者：永井美貴；科学研究費補助金基盤研究(C)；類天疱瘡抗体が表皮基底細胞表面結合後の水疱形成機序の解明；平成21年度；3,100千円
- 6) 研究代表者：周 円；科学研究費補助金若手研究(B)；天疱瘡水疱形成におけるデスモグレイン3とp120カテニンの結合性調節分子の同定；平成21-23年度；3,400千円(2,800：500：100千円)
- 7) 研究代表者：清島真理子；岐阜県医師会医学術の研鑽，医道の推進，勤務環境の向上のための調査研究助成金：非結核性抗酸菌皮膚感染症に対する抗菌薬選択法の確立；平成22年度；500千円
- 8) 研究代表者：磯貝善蔵，研究分担者：加納宏行；平成22年度厚生労働省長寿医療研究開発費：高齢者における褥瘡・皮膚障害等に対する効果的予防・治療法開発に関する研究；平成22年度；1,000千円
- 9) 研究者代表：藤澤智美；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：好中球性皮膚症における顆粒球吸着療法的作用機序を解明する；平成22年度；2,000千円
- 10) 研究代表者：渋谷佳直；山田養蜂場 みつばち研究助成基金助成金：健康成人の疲労度の科学的評価とミツバチ製品の疲労に対する効果；平成22年度；4,000千円
- 11) 研究者代表：大沢匡毅，研究分担者：清島真理子；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：新規アトピー性皮膚炎治療法開発のための共同研究；平成23年度；2,000千円

円

- 12) 研究者代表：加納宏行；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：炎症性皮膚疾患におけるスフィンゴ脂質の生理活性脂質としての役割；平成 23 年度；1,000 千円
- 13) 研究者代表：藤澤智美；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：好中球性皮膚症に対する顆粒球吸着療法の奏功機序の解明；平成 23 年度；1,000 千円
- 14) 研究者代表：渋谷佳直；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：皮膚悪性腫瘍転移におけるリンパ管新生を中心とした微小環境構築メカニズムの解明；平成 23 年度；1,000 千円
- 15) 研究者代表：坂野喜子；科学研究費補助金基盤研究(C)：スフィンゴ脂質代謝による抗癌剤耐性の制御機構解明；平成 21-23 年度；4,680 千円(2,470：1,300：910 千円)
- 16) 研究者代表：中村光浩，研究分担者：坂野喜子；科学研究費補助金基盤研究(C)：リポドミクスによる新規アトピー性皮膚炎バイオマーカーの探索と検証；平成 23 年度；450 千円

2) 受託研究

- 1) 清島真理子：(市販後調査)プロトピック軟膏 0.03%小児用 特定使用成績調査「長期の安全性に関する追跡調査」；平成 21-23 年度；63 千円：アステラス製薬
- 2) 清島真理子：(市販後調査)プロトピック軟膏 0.03%小児用 特定使用成績調査「小児におけるアトピー性皮膚炎」；平成 21-23 年度；31.5 千円：アステラス製薬
- 3) 清島真理子：(治験)慢性局面型皮疹を有する中等症又は重症の日本人乾癬患者(尋常性乾癬)を対象とした adalimumab(D2E7)の長期投与における安全性と有効性を検討する非盲検継続投与試験；平成 21-23 年度；553 千円：アボットジャパン
- 4) 清島真理子：(市販後調査)ステロイド療法により臨床症状の改善が認められなかった水疱性類天疱瘡患者を対象とした NPB-01 の第Ⅱ相探索試験；平成 21-23 年度；321.3 千円：日本製薬
- 5) 清島真理子：(市販後調査)献血グロベニン-I-ニチヤクの天疱瘡における使用成績調査(再審査用)；平成 21-23 年度；210 千円：日本製薬
- 6) 清島真理子：(市販後調査)ファムビル錠 250 mg 使用成績調査(帯状疱疹)；平成 21-23 年度；210 千円：マルホ
- 7) 清島真理子：(市販後調査)ネオーラル「アトピー性皮膚炎」特定使用成績調査(長期使用)；平成 21-23 年度；630 千円：ノバルティスファーマ
- 8) 清島真理子：(市販後調査)ヒュミラ皮下注 40 mg シリンジ 0.8 ml 特定使用成績調査(尋常性乾癬・関節症性乾癬における全例調査)；平成 21-23 年度；472.5 千円：エーザイ
- 9) 清島真理子：治験(医療機器)G-1 の膿疱性乾癬患者を対象とした多施設共同試験；平成 21-23 年度；201.6 千円：JIMRO
- 10) 清島真理子：(市販後調査)レミケード点滴静注用 100 特定使用成績調査(尋常性乾癬，関節症性乾癬，膿疱性乾癬，乾癬性紅皮症)；平成 21-23 年度；420 千円：田辺三菱
- 11) 清島真理子：(市販後調査)トラクリア錠 62.5 mg 特定使用成績調査(長期)全例調査；平成 21-23 年度；315 千円：アクテリオン ファーマシューティカルズジャパン
- 12) 清島真理子：(副作用)アンダーム軟膏 5%の副作用・感染症自発報告；平成 21-23 年度；21 千円：日医工
- 13) 清島真理子：(市販後調査)献血ヴェノグロブリン IH5%静注特定使用成績調査(多発筋炎・皮膚筋炎)；平成 21-23 年度；31.5 千円：ベネシス
- 14) 清島真理子：(市販後調査)ザイロリックの副作用報告；平成 21-23 年度；21 千円：グラクソ・スミスクライン
- 15) 清島真理子：(副作用)イスコチン有害事象詳細調査；平成 21-23 年度；21 千円：第一三共
- 16) 清島真理子：(市販後調査)プロトピック軟膏 0.03%小児用特別調査 特別調査(長期の安全性に関する追跡調査)；平成 21-23 年度；63 千円：マルホ
- 17) 清島真理子：(市販後調査)ステララ皮下注 45 mg シリンジ特定使用成績調査(全例)；平成 21-23 年度；630 千円：ヤンセンファーマ
- 18) 清島真理子：(治験)ステロイド療法により臨床症状の改善が認められなかった水疱性類天疱瘡患者を対象とした NPB-01 の第Ⅲ相検証試験；平成 21-23 年度；636.7 千円：日本製薬
- 19) 清島真理子：(副作用)ロキソニン錠有害事象詳細調査；平成 21-23 年度；21 千円：第一三共
- 20) 藤澤智美：(副作用)ペングッド錠 250 mg の副作用・感染症自発報告；平成 21-23 年度；21 千円：日医工

3) 共同研究

- 1) 清島真理子, 加納宏行: 皮膚筋炎関連自己抗体検出試薬の臨床的有用性の確認; 平成 23-25 年度; 442 千円; 株式会社医学生物学研究所

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

清島真理子:

- 1) 日本医真菌学会評議員(～現在)
- 2) 日本研究皮膚科学会評議員(～現在)
- 3) 日本皮膚科学会中部支部評議員(平成 22 年度～現在)
- 4) 日本乾癬学会評議員(平成 21 年 9 月～現在)
- 5) 日本皮膚科学会東海地方会評議員(～現在)
- 6) 日本レーザー医学会東海支部評議員(～現在)
- 7) 岐阜皮膚科医会会長(平成 21 年 6 月～現在)
- 8) 岐阜大学医学部・附属病院女性医師就労支援の会会長(平成 21 年 6 月～現在)
- 9) 日本皮膚悪性腫瘍学会評議員(～現在)
- 10) 日本皮膚科学会専門医制度資格認定・指導専門医制度委員会委員(平成 22 年度～現在)
- 11) 日本皮膚科学会東海地方会会長(平成 21 年 6 月～現在)
- 12) 日本皮膚脈管・膠原病研究会世話人(平成 22 年 1 月～現在)
- 13) 日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会評議員(平成 23 年 10 月～現在)
- 14) 日本医真菌学会優秀論文賞選考委員(平成 23 年度～現在)
- 15) 日本アフェレンス学会評議員(平成 23 年 10 月～現在)

加納宏行:

- 1) 日本褥瘡学会評議員(～現在)
- 2) 日本皮膚科学会東海地方会評議員(平成 21 年 8 月～現在)

青山裕美:

- 1) 日本研究皮膚科学会評議員(～現在)
- 2) 日本皮膚科学会東海地方会評議員(～平成 21 年 7 月)

2) 学会開催

北島康雄:

- 1) 第 247 回日本皮膚科学会東海地方会(平成 21 年 3 月, 名古屋)
- 2) International Symposium 2009 on Keratinocyte Biology and Diseases in Gifu Japan(2009, Gifu)

3) 学術雑誌

青山裕美:

- 1) Journal of Dermatology ; Section Editor(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

清島真理子:

- 1) 第 108 回日本皮膚科学会総会(平成 21 年 4 月, 福岡, 教育講演「Toxic Shock Syndrome」演者)
- 2) 第 30 回日本アフェレンス学会(平成 21 年 9 月, 札幌, ワークショップ「二重濾過血漿交換法(DFPP)による血液凝固第Ⅷ因子活性低下-難治性自己免疫性水疱症-」演者)
- 3) 第 249 回日本皮膚科学会東海地方会(平成 21 年 9 月, 名古屋, 教授就任記念講演「ヒトパルボウイルス B19 感染症-多彩な症状を遷延化」演者)
- 4) 日本皮膚科学会東海地区(愛知・岐阜・三重)合同皮膚科医会(平成 22 年 1 月, 名古屋, 生涯教育講演「皮膚疾患に対するアフェレンス-最近の話題」演者)
- 5) 第 17 回東海皮膚アレルギー研究会(平成 22 年 2 月, 名古屋, 特別講演「自己炎症性症候群の診断と

- 皮膚症状」演者)
- 6) 第 109 回日本皮膚科学会総会(平成 22 年 4 月, 大阪, 教育講演「重症ブドウ球菌・溶連菌感染症: 重要な皮膚感染症・性感染症」演者)
 - 7) 第 109 回日本皮膚科学会総会(平成 22 年 4 月, 大阪, 教育講演「皮膚科医に必要な救急医療」座長)
 - 8) 第 133 回日本皮膚科学会徳島地方会(平成 22 年 5 月, 徳島, ランチョンセミナー「皮膚抗酸菌感染症－診断へのアプローチ」演者)
 - 9) 第 31 回和歌山県皮膚科医会学術講演会(平成 22 年 6 月, 和歌山, 特別講演「皮膚抗酸菌感染症の診断と治療」演者)
 - 10) 第 89 回兵庫県皮膚科医会総会・学術集談会(平成 22 年 6 月, 神戸, 特別講演「皮膚抗酸菌感染症－診断のポイント」演者)
 - 11) 第 351 回日本皮膚科学会秋田地方会(平成 22 年 7 月, 秋田, 特別講演「自己炎症性症候群－診断と治療」演者)
 - 12) 第 25 回日本乾癬学会(平成 22 年 9 月, 宇部, シンポジウム「乾癬と脂質代謝異常: 乾癬と代謝」シンポジスト)
 - 13) 第 61 回日本皮膚科学会中部支部学会(平成 22 年 9 月, 大阪, Up-to-date 講演「皮膚感染症の迅速診断 up-to-date」演者)
 - 14) 第 31 回日本アフェレシス学会(平成 22 年 11 月, 浦安, ワークショップ「顆粒球吸着療法の奏功機序についての最近の研究」演者)
 - 15) 第 31 回日本アフェレシス学会(平成 22 年 11 月, 浦安, シンポジウム「皮膚科におけるサイタフェレシス－臨床応用への取り組みと問題点」シンポジスト)
 - 16) 第 39 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 1 月, 広島, ワークショップ「(女子)医学生に対するキャリア形成教育－医学教育ができること」演者)
 - 17) 第 74 回日本皮膚科学会東京支部学会(平成 23 年 2 月, 東京, シンポジウム「Livedo vasculopathy の診断と治療－血行障害の病態と治療」シンポジスト)
 - 18) 第 74 回日本皮膚科学会東京支部学会(平成 23 年 2 月, 東京, 教育講演「乾癬の病態: 表皮細胞と T 細胞の相互作用－尋常性乾癬」演者)
 - 19) 第 16 回京都皮膚科治療フォーラム(平成 23 年 3 月, 京都, 特別講演「難治性皮膚疾患に対するアフェレシス－顆粒球吸着療法を中心として」演者)
 - 20) 22nd World Congress of Dermatology(平成 23 年 5 月, Korea, シンポジウム「“Viral exanthemas” Exanthemas caused by human parvovirus B19 infection」演者)
 - 21) 第 27 回日本臨床皮膚科医会総会(平成 23 年 6 月, 大阪, イブニングセミナー「乾癬に対する生物学的製剤の臨床経験: 乾癬に対する生物学的製剤の使用経験と患者アンケート調査」演者)
 - 22) 第 26 回日本乾癬学会(平成 23 年 9 月, 大阪, ミニシンポジウム「顆粒球吸着療法－奏功機序の検討」演者)
 - 23) 第 32 回日本アフェレシス学会(平成 23 年 10 月, 東京, ワークショップ「難治性皮膚疾患に対する顆粒球吸着療法の実際と奏功機序」演者)
 - 24) 第 32 回日本アフェレシス学会(平成 23 年 10 月, 東京, SS 特別企画「G-1 の膿疱性乾癬患者を対象 25 とした多施設共同試験結果について」演者)
 - 25) 第 62 回日本皮膚科学会中部支部学会(平成 23 年 11 月, 四日市, スイーツセミナー「スキンケア治療にうるおいをプラスする」座長)
 - 26) 2011 年度日本皮膚科学会中部支部企画研究講習会(平成 23 年 11 月, 四日市, 特別講演「皮膚細菌感染症に強くなろう」演者)
 - 27) 第 15 回日本アフェレシス学会中部学会(平成 23 年 12 月, 名古屋, 教育講演Ⅱ「難治性皮膚疾患におけるアフェレシス」演者)

加納宏行:

- 1) 日本褥瘡学会第 1 回中部地方会セミナー(平成 22 年 2 月, 大府, 教育講演「褥瘡の局所治療」演者)
- 2) 在宅褥瘡研修会(平成 23 年 6 月, 名古屋, 特別講演「褥瘡が早く治る薬物療法」座長)

青山裕美:

- 1) 第 108 回日本皮膚科学会総会(平成 21 年 4 月, 福岡, 教育講演「天疱瘡における新しい知見」演者)
- 2) 第 61 回日本細胞生物学会(平成 21 年 4 月, 名古屋, シンポジウム「抗 Dsg3(Dsg3)3 抗体による p120catenin および Dsg3 関連細胞接着調節機構と天疱瘡病原性シグナル伝達の解析」演者)

永井美貴：

- 1) 第108回日本皮膚科学会総会(平成21年4月, 福岡, 教育講演「電頭がなくても見られる電頭写真」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 加納宏行：第39回日本皮膚アレルギー接触皮膚炎学会ポスター賞(平成21年度)
- 2) 加納宏行：第40回日本皮膚アレルギー接触皮膚炎ポスター賞(平成22年度)
- 3) 村瀬香奈：第35回日本小児皮膚科学会学術大会口演発表賞(平成23年度)

9. 社会活動

清島真理子：

- 1) 岐阜県医師会男女参画委員会副委員長(平成22年度)
- 2) 厚生労働省医師国家試験試験委員(平成23年度～現在)
- 3) 日本専門医制評価・認定機構(研修施設訪問調査) サurveyヤー(平成23年10月～現在)
- 4) 岐阜市生涯学習センター「長良川大学」講座 2011年ハートフルレクチャー「健康シリーズ」講演「肌の健康と日常ケア」(平成23年5月11日, 18日)
- 5) あいち乾癬患者友の会 第9回総会・学習懇談会 相談医(平成23年7月18日)
- 6) あいち乾癬患者友の会 第2回女性つどい 相談医(平成23年12月11日)

加納宏行：

- 1) 岐阜県特定疾患等対策協議会員(平成21年11月～現在)

青山裕美：

- 1) 厚生労働省稀少難治性皮膚疾患調査研究班班員(平成21年度)

藤澤智美：

- 1) あいち乾癬患者友の会 第2回女性つどい 講演「最近の乾癬治療・女性の立場に立って」(平成23年12月11日)

10. 報告書

- 1) 青山裕美：病原性抗デスマグレイン3抗体によるデスマグレイン3の分解機構の解析水疱形成への関与の検討：平成21年度厚生科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)分担研究報告書：28-32(平成21年3月)

11. 報道

- 1) 清島真理子：「研究室から 大学はいま」乾癬の病因解明に力注ぐ：岐阜新聞(2010年3月30日)
- 2) 清島真理子：「働きやすい環境づくり：仕事も子育ても」：中日新聞(2011年1月6日)
- 3) 清島真理子：「専門医に聞く乾癬治療のフロントライン」：乾癬net(2011年4月19日)
- 4) 清島真理子：「臨床医のための皮膚疾患診療最前線」：岐阜県保険医新聞(2011年8月10日)
- 5) 清島真理子, 高木 肇, 市來善郎, 加納宏行：座談会「皮膚疾患の痒みに対する治療戦略」：Medical Tribune(2011年12月22日)

12. 自己評価

評価

平成21年6月に研究体制が変わり, 研究内容も大きく変化するため研究室を新たに整備した。そのような状況下で, 研究費獲得, 学会活動, 論文作成, 社会活動, 報道面とも一定の成果を得ることができたと評価している。

現状の問題点及びその対応策

研究者が研究活動に費やす時間の確保が難しく, 十分な研究環境が整えられていない。したがって研究の質的および量的低下が重要な問題点である。この状況を改善すべく, 研究活動の効率化および研究補助員の確保により研究成果をあげたい。

今後の展望

膿疱性乾癬におけるアフェレシス治療の奏功機序に関する研究および皮膚筋炎特異的自己抗体と臨床病型の相関に関する研究は臨床研究の要素を多分に含んでおり、実際の診療に直結する研究と位置付け重要な課題として取り組みたい。一方、アトピー性皮膚炎におけるスフィンゴ脂質の生理活性脂質としての機能解明に関する研究、皮膚悪性腫瘍細胞の薬剤耐性とスフィンゴ脂質代謝に関する研究、およびアクチン結合タンパク質 **septin** の表皮細胞機能に関する研究は、臨床応用への第一歩となる基礎的研究である。十分な成果が得られるよう、全力を尽くしたい。

(8) 泌尿器科学分野

1. 研究の概要

1) 尿路生殖器腫瘍の治療と予後に関する基礎的・臨床的研究

①抗癌剤感受性, 抗癌剤耐性因子に関する研究

臨床材料を用いて, ATP 活性を用いた抗癌剤感受性試験成績と, 耐性遺伝子発現量との関連を研究している。

②尿路生殖器癌の予後予測因子に関する病理学的研究

癌組織における特定の遺伝子, 若しくは遺伝子産物の発現の, 予後予測因子としての可能性を研究し, 個々の症例での治療方針決定においてのその有用性を研究している。

③前立腺癌の抗癌剤耐性機序の基礎的研究

ホルモン療法耐性前立腺癌に対する抗癌剤治療の確立を目指し, 培養細胞及び実験動物を用いた抗癌剤耐性に関連した遺伝子の同定と, その発現阻止についての基礎研究を行っている。

④前立腺癌治療に関する臨床的研究

日本における前立腺癌に対するヨウ素 125 密封小線源永久挿入療法に関する前向きコホート研究および限局性前立腺癌に対するホルモン療法の有効性に関する観察研究を行っている。

2) 尿路感染症の基礎的・臨床的研究

①大規模調査による起因菌の臨床的研究

関連施設を含めて毎年複雑性尿路感染症の起因菌を収集し, また, 臨床背景や臨床病状との関連を研究している。さらに 4 年毎に女子急性単純性膀胱炎の総合調査を継続中である。

②薬剤耐性菌の出現状況, 耐性機序の解明

臨床例より得られた起因菌を用いて, 突然変異などの遺伝子レベルでの薬剤耐性機序を研究している。また, 抗菌剤の使用と遺伝子変異との関連も研究している。

③尿路感染症に対する薬物療法についての臨床的研究

関連病院と協力し尿路感染症に対する各種抗菌剤の有効性について検討を行っている。

3) 男子尿道炎の基礎的・臨床的研究

①分子生物学的手法を用いた起炎菌の検出法の開発

現在までに解明されていない非淋菌性尿道炎の起炎菌の同定と, その診断法の開発, 特に核酸増幅を用いた手法を研究している。

②薬剤耐性菌淋菌の疫学研究

関連施設を含めて年次的に臨床分離株を収集し, それらの抗菌剤感受性を測定し, 年次的な変移を研究している。

③薬剤耐性菌淋菌の薬剤耐性機序の解明

薬剤耐性菌淋菌の中で経口セフェム剤耐性淋菌に着目し, その耐性機序を遺伝子レベルで研究している。

④男子尿道炎に対する薬物療法についての臨床的研究

関連病院と協力し男子尿道炎に対する各種抗菌剤の有効性について検討を行っている。

4) 腎移植における臨床的研究

①免疫抑制剤の適正化

拒絶反応を防ぎ, 日和見感染症を引き起こさない適正な免疫抑制剤の投与方法に関する臨床的研究を行っている。

②移植腎の病理学的研究

移植腎に対して定期的な生検を施行して, 移植腎機能に及ぼす潜在的な拒絶反応, ウイルス感染を病理像から研究している。さらに, 病理組織像から移植腎の長期生着を目指したテーラーメイドな免疫抑制療法を行っている。

5) 鏡視下手術手技の開発研究

腹腔鏡下副腎摘出術, 腹腔鏡下腎摘出術は, すでに標準術式となりつつあるが, 県下で実施している施設は少ない。本手技を安全かつ確実に行うための手技および本術式を応用した新たな術式の開発, ならびに器具, 器材の開発研究を行っている。

6) 排尿障害分野における臨床的研究

男性前立腺肥大症患者の下部尿路症状に対する薬剤の効果について, 前立腺肥大症に伴う過活動膀胱症状, 前立腺肥大症患者に合併する夜間頻尿, 前立腺肥大症に対する治療抵抗性の不定愁訴に対する薬物療法を自覚的, 他覚的に評価し, 最適な投与方法を検討している。

2. 名簿

教授：	出口 隆	Takashi Deguchi
准教授：	仲野正博	Masahiro Nakano
講師：	伊藤慎一	Shin-ichi Ito
講師：	横井繁明	Shigeaki Yokoi
助教：	安田 満	Mitsuru Yasuda
助教：	土屋朋大	Tomohiro Tsuchiya
助教：	清家健作	Kensaku Seike
医員：	菅原 崇	Takashi Sugawara
医員：	山田佳輝	Yoshiteru Yamada
医員：	加藤 卓	Taku Kato
医員：	中根慶太	Keita Nakane
医員：	菊地美奈	Mina Kikuchi
医員：	豊田将平	Shohei Toyoda
医員：	亀山紘司	Koji Kameyama

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 出口 隆. 前立腺肥大症(膀胱下(尿道)閉鎖を含む)：山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編集. TODAY'S THERAPY 2009 今日の治療指針, 東京：医学書院；2009年：919.
- 2) 後藤百万, 小川 修, 笥 善行, 出口 隆, 鈴木孝治編集. EBM 泌尿器科疾患の治療, 東京：中外医学社；2009年.
- 3) 安田 満. 非クラミジア性非淋菌性尿道炎の起炎菌は何か？：後藤百万, 小川 修, 笥 善行, 出口 隆, 鈴木孝治編集. EBM 泌尿器科疾患の治療, 東京：中外医学社；2009年：472-477.
- 4) 安田 満. CASE 15 尿道分泌物を訴えて来院した20歳の男性：山口恵三, 館田一博編. New 専門医を目指すケース・メソッドアプローチ 感染症, 東京：日本医事新報社；2009年：180-188.
- 5) 安田 満. マイコプラズマ・ジェニタリウム感染症：本田まりこ, 宮地良樹, 清水 宏編集. 1冊でわかる性感染症, 東京：文光堂；2009年：226-229.
- 6) 出口 隆. 性感染症と男性性器感染症：診断と治療 男性性器感染症：日本泌尿器科学会 2010年卒後教育テキスト, 東京：日本泌尿器科学会；2010年：37-44.
- 7) 出口 隆. 性感染症：山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編集. TODAY'S THERAPY 2010 今日の治療指針, 東京：医学書院；2010年：919-920.
- 8) 三輪好生. 排尿困難・頻尿：森田浩之編. いきなり名医!見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京：日本医事新報社；2010年：147-150.
- 9) 出口 隆. 前立腺炎症候群：山口 徹, 北原光夫, 福井次矢総編集. TODAY'S THERAPY 2011 今日の治療指針, 東京：医学書院；2011年：988-989.
- 10) 出口 隆. 淋菌感染症, 性器クラミジア感染症：社団法人 日本感染症学会編集. 感染症専門医テキスト 第I部解説編, 東京：南江堂；2011年：707-713.
- 11) 出口 隆. 尿道分泌物と排尿時の尿道の灼熱感を訴える25歳男性：社団法人 日本感染症学会編集. 感染症専門医テキスト 第II部ケーススタディ編, 東京：南江堂；2011年：41-45.
- 12) 伊藤慎一, 石田健一郎, 安田 満, 出口 隆. レジオネラ肺炎を発症した献腎移植の1例：第44回日本臨床腎移植学会 腎移植症例集, 東京：日本医学館；2011年：35-38.

著書 (欧文)

- 1) Lenk S, Yasuda M. Urinary tuberculosis. In: Naber KG, Schaeffer AJ, Heyns CF, Matsumoto T, Shoskes DA, Johansen TEB ed. Urogenital Infections. International Consultation on Urological Diseases/European Association of Urology 2010.

総説 (和文)

- 1) 出口 隆, 安田 満, 前田真一. 性感染症(STD) 基礎・臨床の最前線 主な性感染症の病因, 病態, 診断, 治療 非クラミジア性非淋菌性尿道炎, 日本臨床 2009年；67巻：167-171.
- 2) 安田 満. 泌尿器科感染症の今日的課題 難治性要因と対応 尿路結核の最近の特徴, 化学療法の領域 2009年；25巻：472-478.
- 3) 三輪好生, 西野好則, 出口 隆. LUTS 新たなエビデンス α 1遮断薬と抗ムスカリン薬 2008 私はこう処方する(1), Urology View 2009年；7巻：25-30.
- 4) 伊藤慎一, 出口 隆, 山口 裕. 当科におけるプロトコル腎生検の臨床病理学的検討, 今日の移植 2009年；22巻：23-31.
- 5) 小野寺昭一, 北村唯一, 二木芳人, 戸塚恭一, 出口 隆, 河村信夫. フルオロキノロン(FQ)の新しい立場を考える, 泌尿器外科 2009年；22巻：157-169.
- 6) 松本哲朗, 荒川創一, 村谷哲郎, 安田 満, 高橋彰, 公文裕巳, 門田晃一, 渡辺豊彦, 上原慎也, 川原元司,

- 中川昌之, 速見浩士, 山根隆史, 石原 哲, 出口 隆, 菊池達也, 内藤誠二, 野村博之, 平賀紀行, 金丸聰淳, 小川 修, 守殿貞夫, 重村克巳, 田中一志, 中野雄造, 藤澤正人, 三浦徹也, 国島康晴, 高橋 聡, 塚本泰司, 松川雅則, 山田陽司, 赤坂聡一郎, 小野寺昭一, 清田 浩, 島 博基, 山本新吾, 繁田正信, 石川清仁, 星長清隆, 濱砂良一, 長田幸夫, 日本化学療法学会臨床評価法制定委員会. 尿路性器感染症に関する臨床試験実施のためのガイドライン 第1版 最終案, 日本化学療法学会雑誌 2009年; 57巻: 1-20.
- 7) 安田 満. 新人ナースに必要な泌尿器科疾患の知識 20 腎盂腎炎, 泌尿器ケア 2009年; 14巻: 326-327.
 - 8) 安田 満. 新人ナースに必要な泌尿器科疾患の知識 20 細菌性膀胱炎, 泌尿器ケア 2009年; 14巻: 328-329.
 - 9) 安田 満. 新人ナースに必要な泌尿器科疾患の知識 20 男子尿道炎(淋菌性・非淋菌性), 泌尿器ケア 2009年; 14巻: 336-338.
 - 10) 松本哲朗, 荒川創一, 高橋 聡, 濱砂良一, 山本新吾, 矢内原仁, 石川 悟, 石川清仁, 石原 哲, 上原慎也, 江田晋一, 小野寺昭一, 金丸聰淳, 守殿貞夫, 菊池達也, 清田 浩, 公文裕巳, 栗村雄一郎, 島 博基, 高橋 彰, 田中一志, 谷村正信, 塚本泰司, 出口 隆, 内藤誠二, 中野雄造, 速見浩士, 平賀紀行, 藤澤正人, 三浦徹也, 村谷哲郎, 門田晃一, 安田 満, 安福富彦, 渡辺豊彦, 和田耕一郎, 日本泌尿器科学会泌尿器科領域における感染制御ガイドライン作成委員会. 泌尿器科領域における感染制御ガイドライン, 日本泌尿器科学会雑誌 2009年; 100巻: 1-27.
 - 11) 安田 満. 氾濫する性感染症(STI)を再考する 淋菌・クラミジアの咽頭感染, Urology View 2009年; 7巻: 87-92.
 - 12) 松本哲朗, 高橋 聡, 清田 浩, 安田 満, 石川清仁, 高橋 彰, 山本新吾, 荒川創一, 門田晃一, 村谷哲郎, 濱砂良一, 速水浩士, 公文裕巳, 渡辺豊彦, 上原慎也, 川原元司, 中川昌之, 山根隆史, 石原 哲, 出口 隆, 菊池達也, 内藤誠二, 野村博之, 平賀紀行, 金丸聰淳, 小川 修, 守殿貞夫, 重村克巳, 田中一志, 中野雄造, 藤澤正人, 三浦徹也, 国島康晴, 塚本泰司, 松川雅則, 山田陽司, 赤坂聡一郎, 小野寺昭一, 島 博基, 繁田正信, 星長清隆, 長田幸夫, 和田耕一郎, 日本化学療法学会 UTI 薬効評価基準見直しのための委員会. 尿路性器感染症に関する臨床試験実施のためのガイドライン 第1版, 日本化学療法学会雑誌 2009年; 57巻: 511-525.
 - 13) 横井 明. 「第97回日本泌尿器科学会総会」印象記, 臨床泌尿器科 2009年; 63巻: 830-831.
 - 14) 打田和治, 伊藤慎一, 北田秀久, 原田 浩. 腎移植 腎移植医療の現場から ここまできた腎移植成績, 腎不全を生きる 2010年; 42巻: 25-383.
 - 15) 横井繁明, 出口 隆. 腎・泌尿器癌 基礎・臨床研究のアップデート 腎尿管癌 臨床研究 治療 腎尿管癌の手術療法 尿管全摘除術, 日本臨床 2010年; 68巻増刊号: 407-410.
 - 16) 金山博臣, 篠原英雄, 横井繁明. 日本におけるこれからの腎細胞癌治療とは Two-years later in Japan, Progress in Medicine 2010年; 30巻: 2158-2163.
 - 17) 安田 満, 出口 隆. 尿沈渣鏡検の問題と改善策, 日本医事新報 2010年; 4489号: 80-81.
 - 18) 安田 満. 性器感染症におけるマイコプラズマおよびウレアプラズマの役割 男子性器感染症における役割, 日本性感染症学会誌 2010年; 21巻: 22-27.
 - 19) 安田 満. 保存版 ナースのための泌尿器科のクスリ 2010 尿路感染症や周術期感染予防のクスリ, 泌尿器ケア 2010年; 15巻: 695-701.
 - 20) 安田 満. ここが聞きたい 尿路・性器感染症における抗菌薬の使い方 尿路・性器感染症における耐性菌の現状, 臨床泌尿器科 2010年; 64巻: 289-295.
 - 21) 安田 満. 性感染症(STI)診療のファーストステップ 性感染症治療の基本を知ろう 淋菌感染症の治療, 臨床研修プラクティス 2010年; 7巻: 48-52.
 - 22) 三輪好生. 今日からケアが変わる 排尿管理の技術 Q&A 127 膀胱留置カテーテル 膀胱留置カテーテルの基礎知識 カテーテル管理をマスターしよう! 泌尿器ケア 2010年; 2010 冬季増刊: 72-81.
 - 23) 安田 満, 出口 隆. 【尿細管間質障害】 感染性尿細管間質障害(腎盂腎炎), 腎と透析 2011年; 71巻: 35-40.
 - 24) 出口 隆. 【日常診療でよくみる症状・病態・診断の指針・治療の指針】 腎臓および泌尿器系の異常 膿尿・膿性分泌, 総合臨床 2011年; 60巻増刊: 1218-1221.
 - 25) 出口 隆. 腎疾患 尿路性器感染症, 岐阜県医師会医学雑誌 2011年; 24巻: 27-30.
 - 26) 黒田秀也, 出口 隆, 横川晃治. 【尿のトラブル 110 番 頻尿・出にくい・漏れる・血尿?患者さんの QOLを守るのはあなたです!】 本当は難しい女性の膀胱炎の診断と治療 たかが膀胱炎, されど膀胱炎, 治療 2011年; 93巻: 1364-1373.
 - 27) 出口 隆. 【不妊診療のすべて】 合併症 *Mycoplasma genitalium* 感染と妊娠, 産婦人科治療 2011年; 102巻増刊: 683-689.
 - 28) 出口 隆. Urosepsis. Urology Today 2011年; 18巻: 174-178.
 - 29) 仲野正博. 腎疾患 血尿を来す腎・尿路疾患, 岐阜県医師会医学雑誌 2011年; 24巻: 3-11.
 - 30) 田邊一成, 伊藤慎一, 乾政志, 奥見雅由, 渡井彦彦. 【移植医療の普及と症例増加の戦略 年間腎移植 2,000 例への挑戦】, 今日の移植 2011年; 24巻: 337-354.
 - 31) 伊藤慎一. 腎疾患 腎移植について, 岐阜県医師会医学雑誌 2011年; 24巻: 23-26.
 - 32) 伊藤慎一. 「腎移植四方山話 5」NPO 法人岐阜県腎臓病協議会機関誌 清流 2011年; 32: 11.
 - 33) 安田 満. 【骨盤内における感染症(消化管を除く)に対する治療戦略】 泌尿器科領域感染症 癌患者術後の感染症, 日本外科感染症学会雑誌 2011年; 8巻: 225-233.
 - 34) 安田 満. 診断の指針 治療の指針 性感染症の現状と治療上の問題点, 総合臨床 2011年; 60巻: 1455-1456.

- 35) 安田 満.【新版 感染症診療実践ガイド 有効な抗菌薬の使いかたのすべて】 主な感染症に対する実地医家の抗菌薬使用の実際 特殊な状態での抗菌薬使用のワンポイントアドバイス 無症候性尿中白血球増加症, 無症候性細菌尿, *Medical Practice* 2011年 28巻臨増: 592-593.
- 36) 安田 満.【ワンランク上の泌尿器科エマージェンシー】 気腫性腎盂腎炎, *臨床泌尿器科* 2011年; 65巻: 23-29.

総説 (欧文)

- 1) Deguchi T, Nakane K, Yasuda M, Maeda S. Emergence and spread of drug resistant *Neisseria gonorrhoeae*. *J Urol*. 2010;184:851-858.

原著 (和文)

- 1) 守山洋司, 土屋朋大, 伊藤慎一, 江原英俊, 出口 隆. 腎移植後のリンパ嚢腫にボルヒールによる硬化療法が有効であった2例, *腎移植・血管外科* 2009年; 20巻: 162-166.
- 2) 江原英俊, 加藤成一, 中根慶太, 加藤 卓, 高田俊彦, 小島圭太郎, 亀井信吾, 萩原徳康, 柚原一哉, 高橋義人, 藤本佳則, 藤広 茂, 蟹本雄右, 出口 隆. 内分泌療法再燃前立腺癌に対する酢酸クロルマジノンの有用性の検討, *泌尿器科紀要* 2009年; 55巻: 199-203.
- 3) 西野好則, 出口 隆. 女性の過活動膀胱に対する抗コリン薬 4 剤の比較検討, *泌尿器外科* 2009年; 22巻: 659-666.
- 4) 松本哲朗, 安田 満, 荒川創一, 門田晃一, 村谷哲郎, 堀 誠治. 複雑性尿路感染症に対する levofloxacin 500 mg 1日1回投与の臨床効果 7日および14日間投与による検討, *日本化学療法学会雑誌* 2009年; 57巻 Suppl.2: 34-46.
- 5) 伊藤 晋, 前田真一, 安田 満, 出口 隆. 男子初尿からの淋菌, *Chlamydia trachomatis* 検出における APTIMA Combo 2 と AMPLICOR STD-1 の比較. *日本性感染症学会誌* 2009年; 20巻: 122-126.
- 6) 伊藤 晋, 島田康司, 落合 晋, 前田真一, 安田 満, 出口 隆. *Ureaplasma urealyticum*(biovar 2)の男子非淋菌性尿道炎への関与は一定ではない, *日本性感染症学会誌* 2009年; 20巻: 140-146.
- 7) 堀江憲吾, 菊地美奈, 土屋朋大, 三輪好生, 南館 謙, 横井繁明, 仲野正博, 江原英俊, 出口 隆, 広瀬善信. 後腹膜原発の Mucinous cystadenocarcinoma の1例, *泌尿器科紀要* 2009年; 55巻: 405-408.
- 8) 西野好則, 菊地美奈, 増栄孝子, 三輪好生, 出口 隆, 守山洋司. 前立腺肥大症に合併した過活動膀胱患者への $\alpha 1$ 遮断薬と抗コリン薬の併用療法 シロドシンとイミダフェナシンの併用効果, *臨床泌尿器科* 2009年; 63巻: 719-726.
- 9) 皆川太郎, 出口 隆, 井上清明, 大熊俊男, 谷島進太郎, 後藤尚己, 橋本明憲, 平野高弘, 渡辺元博, 宇野裕巳. 実地医家における排尿に関する症状を有する患者の実態調査, *Progress in Medicine* 2009年; 29巻: 2097-2102.
- 10) 佐藤啓美, 後藤芳章, 小島 帯, 岩田 仁. 吐血後に心原性ショックを来たして死亡した 83 歳の男性, *岐阜県総合医療センター年報* 2009年; 30巻: 299-301.
- 11) 三輪好生, 増栄孝子, 菊地美奈, 出口 隆, 守山洋司, 藤広 茂, 西野好則. 膀胱癌患者における TVM 手術前後の排尿に関する検討, *日本女性骨盤底医学会誌* 2010年; 7巻: 179-182.
- 12) 西野好則, 出口 隆. $\alpha 1$ 遮断薬投与後に過活動膀胱が残存する前立腺肥大症患者における薬剤切替治療と抗コリン薬併用治療の比較検討, *泌尿器外科* 2010年; 23巻: 1435-1442.
- 13) 宇野裕巳, 豊田将平, 高田俊彦, 米田尚生, 仲野正博, 出口 隆. Stage C 前立腺がんの治療戦略 病期診断における MRI の役割, *泌尿器外科* 2010年; 23巻: 1037-1040.
- 14) 前田真一, 清家健作, 久保田恵章, 安田 満, 出口 隆. オーラルセックスにより男子マイコプラズマ性尿道炎およびウレアプラズマ性尿道炎は引き起こされるか? *日本性感染症学会誌* 2010年; 21巻: 115-119.
- 15) 宇野雅博, 藤本佳則, 服部慎一, 中根慶太, 萩原徳康, 濱本幸浩, 出口 隆. T stage からみた限局性腎細胞癌治療的切除後の再発危険因子の検討, *泌尿器外科* 2010年; 23巻: 1001-1006.
- 16) 久保田恵章, 清家健作, 水谷晃輔, 前田真一, 横井繁明, 高橋義人. トヨタ記念病院における泌尿器腹腔鏡手術の検討, *トヨタ医報* 2010年; 20巻: 26-30.
- 17) 松本哲朗, 濱砂良一, 石川清仁, 高橋 聡, 安田 満, 速見浩士, 田中一志, 清田 浩, 村谷哲郎, 門田晃一, 荒川創一, 山本新吾. 尿路感染症主要原因菌の各種抗菌薬に対する感受性, *日本化学療法学会雑誌* 2010年; 58巻: 466-482.
- 18) 濱砂良一, 高橋 聡, 清田 浩, 安田 満, 荒川創一, 菊池達也, 村谷哲郎, 速見浩士, 松本哲朗, 朝野和典, 岩澤昌彦, 広瀬崇興, 遠藤勝久, 細部高英, 尾上泰彦, 石原 哲, 伊藤雅康, 土井達朗, 彦坂幸治, 岡 伸俊, 山口秋人, 鷺山和幸, 加野資典, 高山一生, 黒住武史, 加治慎一, 伊東健治, 川井修一, 池井善彦, 高橋尚也, 蓑田国廣, 薬師寺和道, 今村厚志, 濱島寿充, 島田 剛, UTI 共同研究会. 男子非淋菌性尿道炎に対する gatifloxacin の臨床研究, *西日本泌尿器科* 2010年; 72巻: 224-236.
- 19) 三輪好生, 西野好則, 出口 隆. 夜間頻尿 Update: もう外来で困らない 夜間頻尿に対するナフトピジルとシロドシンの効果, *Urology View* 2010年; 8巻: 68-71.
- 20) 出口 隆. 性感染症 診断・治療 ガイドライン 2011. 非クラミジア性非淋菌性尿道炎. *日本性感染症学会誌* 2011年; 22巻: 92-94.
- 21) 石田健一郎, 土屋朋大, 近藤啓美, 中根慶太, 加藤 卓, 清家健作, 三輪好生, 安田 満, 横井繁明, 仲野正博, 出口 隆. 移植腎に生じた感染性腎嚢胞の1例, *泌尿器科紀要* 2011年; 57巻: 501-504.
- 22) 加藤 卓, 江原英俊, 高木公暁, 堀江憲吾, 服部慎一, 中根慶太, 清家健作, 菅原 崇, 後藤高広, 増栄成泰, 玉木正義, 伊藤康久, 出口 隆, 岐阜陰茎癌研究グループ. 陰茎癌 35 例の臨床的検討, *泌尿器科紀要*

- 2011年；57巻：363-366.
- 23) 山田 徹, 土屋邦洋, 河合篤史, 加藤成一, 亀井信吾, 谷口光宏, 玉木正義, 出口 隆. 膀胱 CIS に対する BCG 注入療法における, 東京株(イムノブラダー)とコンノート株(イムシスト)の比較, 泌尿器外科 2011年；24巻：325-327.
- 24) 堀江憲吾, 菊地美奈, 三輪好生, 南館 謙, 横井繁明, 仲野正博, 出口 隆, 江原英俊, 浅野奈美, 広瀬善信. Xp11.2 転座腎細胞癌の1例, 泌尿器科紀要 2011年；57巻：129-133.
- 25) 三輪好生. 【保存版 前立腺肥大症 治療・ケア・クスのアップデート】前立腺肥大症のクスリ 植物製剤・アミノ酸製剤, 泌尿器ケア 2011年；16巻：816-817.

原著 (欧文)

- 1) Maeda S, Yasuda M, Ito S, Seike K, Ito S, Deguchi T. Azithromycin treatment for nongonococcal urethritis negative for *Chlamydia trachomatis*, *Mycoplasma genitalium*, *Mycoplasma hominis*, *Ureaplasma parvum*, and *Ureaplasma urealyticum*. Int J Urol. 2009;16:215-216. IF 1.460
- 2) Takahashi A, Muratani T, Yasuda M, Takahashi S, Monden K, Ishikawa K, Kiyota H, Arakawa S, Matsumoto T, Shima H, Kurazono H, Yamamoto S. Genetic profiles of fluoroquinolone-resistant *Escherichia coli* isolates obtained from patients with cystitis: phylogeny, virulence factors, PAIusp subtypes, and mutation patterns. J Clin Microbiol. 2009;47:791-795. IF 4.220
- 3) Kikuchi M, Mizutani K, Miwa K, Yokoi S, Nakano M, Ehara H, Deguchi T. Images in clinical urology. Floating balls appearance in testicular cystic teratoma. Urology. 2009;74:71-72. IF 2.334
- 4) Ito S, Kobayashi A, Tsuchiya T, Moriyama Y, Kikuchi M, Deguchi T, Yamaguchi Y. Thyroidization in renal allografts. Clin Transplant. 2009;23 Suppl 20:6-9. IF 1.751
- 5) Niwa T, Suzuki A, Sakakibara S, Kasahara S, Yasuda M, Fukao A, Matsuura K, Goto C, Murakami N, Itoh Y. Retrospective cohort chart review study of factors associated with the development of thrombocytopenia in adult Japanese patients who received intravenous linezolid therapy. Clin Ther. 2009;31:2126-2133. IF 2.551
- 6) Deguchi T, Yasuda M, Yokoi S, Nakano M, Ito S, Ohkusu K, Ezaki T, Hoshina S. Failure to detect *Mycoplasma genitalium* in the pharynges of female sex workers in Japan. J Infect Chemother. 2009;15:410-413.
- 7) Kamihira O, Hattori R, Yamaguchi A, Kawa G, Ogawa O, Habuchi T, Kawauchi A, Uozumi J, Yokoi S, Tsujihata M, Hasui Y, Miyakoda K, Tada H, Ono Y, Naito S. Laparoscopic radical nephroureterectomy: a multicenter analysis in Japan. Eur Urol. 2009;55:1397-1407.
- 8) Shimada Y, Deguchi T, Yamaguchi Y, Yasuda M, Nakane K, Yokoi S, Ito S, Nakano M, Ito S, Ishiko H. *gyrB* and *parE* mutations in urinary *Mycoplasma genitalium* DNA from men with non-gonococcal urethritis. Int J Antimicrob Agents. 2010;36:477-478. IF 3.787
- 9) Terazawa R, Garud DR, Hamada N, Fujita Y, Itoh T, Nozawa Y, Nakane K, Deguchi T, Koketsu M, Ito M. Identification of organoselenium compounds that possess chemopreventive properties in human prostate cancer LNCaP cells. Bioorg Med Chem. 2010;18:7001-7008. IF 2.661
- 10) Kojima K, Fujita Y, Nozawa Y, Deguchi T, Ito M. MiR-34a attenuates paclitaxel-resistance of hormone-refractory prostate cancer PC3 cells through direct and indirect mechanisms. Prostate. 2010;70:1501-1512. IF 3.377
- 11) Shimada Y, Deguchi T, Nakane K, Masue T, Yasuda M, Yokoi S, Ito S, Nakano M, Ito S, Ishiko H. Emergence of clinical strains of *Mycoplasma genitalium* harbouring alterations in ParC associated with fluoroquinolone resistance. Int J Antimicrob Agents. 2010;36:255-258. IF 3.787
- 12) WHO Western Pacific Programme; South East Asian Gonococcal Antimicrobial Surveillance Programme, Tapsall JW, Limnios EA, Abu Bakar HM, Darussalam B, Ping YY, Buadromo EM, Kumar P, Singh S, Lo J, Bala M, Risbud A, Deguchi T, Tanaka M, Watanabe Y, Lee K, Chong Y, Noikaseumy S, Phouthavane T, Sam IC, Tundev O, Lwin KM, Eh PH, Goarant C, Goursaud R, Bathgate T, Brokenshire M, Latorre L, Velemu E, Carlos C, Leano S, Telan EO, Goh SS, Koh ST, Ngan C, Tan AL, Mananwatte S, Piyanoot N, Lokpichat S, Sirivongranson P, Fakahau M, Sitanilei H, Hung le V. Surveillance of antibiotic resistance in *Neisseria gonorrhoeae* in the WHO Western Pacific and South East Asian regions, 2007-2008. Commun Dis Intell. 2010;34:1-7.
- 13) Masue T, Wada K, Nagata C, Deguchi T, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K. Lifestyle and health factors associated with stress urinary incontinence in Japanese women. Maturitas. 2010;66:305-309. IF 2.286
- 14) Fujita Y, Kojima K, Ohhashi R, Hamada N, Nozawa Y, Kitamoto A, Sato A, Kondo S, Kojima T, Deguchi T, Ito M. MiR-148a attenuates paclitaxel resistance of hormone-refractory, drug-resistant prostate cancer PC3 cells by regulating MSK1 expression. J Biol Chem. 2010;285:19076-19084. IF 5.328
- 15) Deguchi T, Nakane K, Yasuda M, Shimizu T, Monden K, Arakawa S, Matsumoto T. Microbiological outcome of complicated urinary tract infections treated with levofloxacin: a pharmacokinetic/pharmacodynamic analysis. Int J Antimicrob Agents. 2010;35:573-577. IF 3.787
- 16) Yamada T, Tsuchiya K, Kato S, Kamei S, Taniguchi M, Takeuchi T, Yamamoto N, Ehara H, Deguchi T. A pretreatment nomogram predicting recurrence- and progression-free survival for nonmuscle invasive bladder cancer in Japanese patients. Int J Clin Oncol. 2010;15:271-279. IF 1.437
- 17) Kondo T, Hashimoto Y, Kobayashi H, Iizuka J, Nishikawa T, Nakano M, Tanabe K. Presurgical

- targeted therapy with tyrosine kinase inhibitors for advanced renal cell carcinoma: clinical results and histopathological therapeutic effects. *Jpn J Clin Oncol.* 2010;40:1173-1179. IF 1.024
- 18) Mori H, Ohno Y, Ito F, Funaguchi N, Yanase K, Endo J, Nakano M, Bai La BL, Minatoguchi S. Massive hematuria from the bilateral upper urinary tract in a patient treated for advanced lung cancer with gefitinib. *Jpn J Clin Oncol.* 2010;40:263-266. IF 1.024
- 19) Kobayashi A, Yamamoto I, Ito S, Akioka Y, Yamamoto H, Teraoka S, Hattori M, Tanabe K, Hosoya T, Yamaguchi Y. Medullary ray injury in renal allografts. *Pathol Int.* 2010;60:744-749. IF 1.481
- 20) Tsuchiya T, Ito S, Yamaguchi Y, Moriyama Y, Ehara H, Deguchi T. Tonsillectomy and steroid pulse therapy for recurrent IgA nephropathy in renal allograft. *Clin Nephrol.* 2010;73:68-71. IF 1.058
- 21) Akao Y, Nakagawa Y, Hirata I, Iio A, Itoh T, Kojima K, Nakashima R, Kitade Y, Naoe T. Role of anti-oncomirs miR-143 and -145 in human colorectal tumors. *Cancer Gene Ther.* 2010;17:398-408. IF 3.744
- 22) Wada K, Nakamura K, Masue T, Sahashi Y, Ando K, Nagata C. Soy intake and urinary sex hormone levels in preschool Japanese children. *Am J Epidemiol.* 2011;173:998-1003. IF 5.745
- 23) Akao Y, Noguchi S, Iio A, Kojima K, Takagi T, Naoe T. Dysregulation of microRNA-34a expression causes drug-resistance to 5-FU in human colon cancer DLD-1 cells. *Cancer Lett.* 2011;300:197-204. IF 4.864
- 24) Ishikawa K, Matsumoto T, Yasuda M, Uehara S, Muratani T, Yagisawa M, Sato J, Niki Y, Totsuka K, Sunakawa K, Hanaki H, Hattori R, Terada M, Kozuki T, Maruo A, Morita K, Ogasawara K, Takahashi Y, Matsuda K, Hirose T, Miyao N, Hayashi T, Takeyama K, Kiyota H, Tomita M, Yusu H, Koide H, Kimura S, Yanaoka M, Sato H, Ito T, Deguchi T, Fujimoto Y, Komeda H, Asano Y, Takahashi Y, Ishihara S, Arakawa S, Nakano Y, Tanaka K, Fujisawa M, Matsui T, Fujii A, Yamamoto S, Nojima M, Higuchi Y, Ueda Y, Kanamaru S, Monden K, Tsushima T, Seno Y, Tsugawa M, Takenaka T, Hamasuna R, Fujimoto N, Sho T, Takahashi K, Inatomi H, Takahashi N, Ikei Y, Hayami H, Yamane T, Nakagawa M, Kariya S, Arima T. The nationwide study of bacterial pathogens associated with urinary tract infections conducted by the Japanese Society of Chemotherapy. *J Infect Chemother.* 2011;17:126-138.
- 25) Kato H, Kanematsu M, Yokoi S, Miwa K, Horie K, Deguchi T, Hirose Y. Renal cell carcinoma associated with Xp11.2 translocation/TFE3 gene fusion: radiological findings mimicking papillary subtype. *J Magn Reson Imaging.* 2011;33:217-220. IF 2.749
- 26) Deguchi T, Seike K, Yasuda M, Matsumoto T. Evaluation by Monte Carlo simulation of levofloxacin dosing for complicated urinary tract infections caused by *Escherichia coli* or *Pseudomonas aeruginosa*. *J Infect Chemother.* 2011;17:726-730.
- 27) Imanishi Y, Matsui K, Ishida K, Ito S, Matsuura K, Deguchi T, Itoh Y. Pharmacokinetic properties of a once-daily formulation of tacrolimus in patients with renal transplantation. *Arzneimittelforschung.* 2011;61:191-196. IF 0.632
- 28) Ito S, Shimada Y, Yamaguchi Y, Yasuda M, Yokoi S, Ito S, Nakano M, Ishiko H, Deguchi T. Selection of *Mycoplasma genitalium* strains harbouring macrolide resistance-associated 23S rRNA mutations by treatment with a single 1 g dose of azithromycin. *Sex Transm Infect.* 2011;87:412-414. IF 3.029
- 29) WHO Western Pacific and South East Asian Gonococcal Antimicrobial Surveillance Programmes. Tapsall JW, Limnios EA, Lahra MM, Dorji D, Abu Bakar HM, Guillard B, Sopheak H, Yue Ping Y, Buadromo EM, Kumar P, Singh S, Lo J, Bala M, Deguchi T, Tanaka M, Watanabe Y, Lee K, Chong Y, Noikaseumy S, Phouthavane T, Sam IC, Tundev O, Lwin KM, Eh PH, Goarant C, Goursaud R, Bathgate T, Brokenshire M, Toliman P, Yoannes M, Latorre L, Velemu E, Carlos C, Lagrada M, Leano S, Telan EO, Goh SS, Koh ST, Ngan C, Tan AL, Mananwatte S, Piyanoor N, Lokpichat S, Sirivongranson P, Fakahau M, Sitanilei H, Hung le V. Surveillance of antibiotic resistance in *Neisseria gonorrhoeae* in the WHO Western Pacific and South East Asian Regions, 2009. *Commun Dis Intell.* 2011;35:2-7.
- 30) Hagiwara N, Yasuda M, Maeda S, Deguchi T. In vitro activity of azithromycin against *Mycoplasma genitalium* and its efficacy in the treatment of male *Mycoplasma genitalium*-positive nongonococcal urethritis. *J Infect Chemother.* 2011;17:821-824.
- 31) Shimada Y, Deguchi T, Nakane K, Yasuda M, Yokoi S, Ito S, Nakano M, Ito S, Ishiko H. Macrolide resistance-associated 23S rRNA mutation in *Mycoplasma genitalium*, Japan. *Emerg Infect Dis.* 2011;17:1148-1150. IF 6.859
- 32) Hamasuna R, Takahashi S, Kiyota H, Yasuda M, Hayami H, Arakawa S, Tomono K, Matsumoto T. Effect of gatifloxacin against *Mycoplasma genitalium*-related urethritis: an open clinical trial. *Sex Transm Infect.* 2011;87:389-390. IF 3.029
- 33) Yasuda M, Takahashi S, Kiyota H, Ishikawa K, Takahashi A, Yamamoto S, Arakawa S, Monden K, Muratani T, Hamasuna R, Hayami H, Matsumoto T. Japanese guideline for clinical research of antimicrobial agents on urogenital infections: the first edition. *J Infect Chemother.* 2011;17:579-594.
- 34) Matsumoto T, Hamasuna R, Ishikawa K, Takahashi S, Yasuda M, Hayami H, Tanaka K, Kiyota H, Muratani T, Monden K, Arakawa S, Yamamoto S. Nationwide survey of antibacterial activity against clinical isolates from urinary tract infections in Japan (2008). *Int J Antimicrob Agents.* 2011;37:210-218. IF 3.787
- 35) Itoh T, Terazawa R, Kojima K, Nakane K, Deguchi T, Ando M, Tsukamasa Y, Ito M, Nozawa Y. Cisplatin induces production of reactive oxygen species via NADPH oxidase activation in human

- prostate cancer cells. Free Radic Res. 2011;45:1033-1039. IF 2.805
- 36) Miwa K, Nishino Y, Kikuchi M, Masue T, Moriyama Y, Deguchi T. Efficacy of combination therapy with tamsulosin and zolpidem on nocturia in patients with benign prostatic hyperplasia. Central European J Urology. 2011;64:232-235.
- 37) Kubota Y, Seike K, Maeda S, Shinohara Y, Iwata M, Sugimoto N. Relationship between prostate-specific antigen and obesity in prostate cancer screening: analysis of a large cohort in Japan. Int J Urol. 2011;18:72-75. IF 1.460

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：小島圭太郎；科学研究費補助金若手研究(B)：前立腺癌細胞における薬剤耐性機序の解明；平成 20-21 年度；3,900 千円(2,600：1,300 千円)
- 2) 研究代表者：出口 隆，研究分担者：安田 満，中根慶太；科学研究費補助金基盤研究(C)：淋菌におけるアジスロマイシン耐性化の経時的変化および耐性化機序の解析；平成 22-24 年度；4,060 千円(1,040：1,820：1,200 千円)

2) 受託研究

- 1) 出口 隆：リュープリン SR 注射用 11.25 mg 特定使用成績調査；平成 19-21 年度；945,000 円：武田薬品工業(株)
- 2) 出口 隆：RAD001(第 3 相臨床試験)；平成 19-22 年度；1,990,800 円：ノバルティスファーマ(株)
- 3) 出口 隆：ベンシケア錠 使用成績調査；平成 20-22 年度；105,000 円：アステラス製薬(株)
- 4) 出口 隆：バップフォー特定使用成績調査-低用量 10 mg/日 開始例における有用性の検討；平成 20-21 年度；105,000 円：大鵬薬品工業(株)
- 5) 出口 隆：ネクサバル錠特定使用成績調査(長期使用)；平成 20-23 年度；157,000 円：バイエル薬品(株)
- 6) 出口 隆：スーテントカプセル 12.5 mg 特定使用成績調査-腎細胞癌に対する調査；平成 20-25 年度；378,000 円：ファイザー(株)
- 7) 出口 隆：RAD001(継続投与試験)第 3 相臨床試験；平成 20-24 年度；1,950,930 円：ノバルティスファーマ(株)
- 8) 出口 隆：プログラフカプセル有害事象詳細調査；平成 21 年度；21,000 円：アステラス製薬(株)
- 9) 出口 隆：スーテントカプセル 12.5 mg 特定使用成績調査-腎細胞癌に対する調査；平成 20-25 年度；630,000 円：ファイザー(株)
- 10) 出口 隆：ネクサバル錠特定使用成績調査(長期使用)；平成 20-23 年度；315,000 円：バイエル(株)
- 11) 出口 隆：献血グロベニン-I-ニチヤク(室温保存品)の使用成績調査；平成 21-23 年度；105,000 円：武田薬品工業(株)
- 12) 出口 隆：グレースビット錠細粒使用成績調査；平成 21-22 年度；210,000 円：第一三共(株)
- 13) 出口 隆：グラセプターカプセル 腎移植に対する特定使用成績調査；平成 21-22 年度；630,000 円：アステラス製薬(株)
- 14) 出口 隆：バリキサ錠 mg(固形臓器移植)使用成績調査(全例調査)；平成 21-22 年度；210,000 円：田辺三菱製薬(株)
- 15) 出口 隆：RAD001(継続投与試験)第 3 相臨床試験(変更契約)；平成 20-24 年度；535,500 円：ノバルティスファーマ(株)
- 16) 出口 隆：RAD001(継続投与試験)第 3 相臨床試験(変更契約)；平成 20-24 年度；995,400 円：ノバルティスファーマ(株)
- 17) 出口 隆：クラビット錠 500 mg 1 日 1 回投与の尿路性器感染症を対象とした臨床試験；平成 21-23 年度；1,764,000 円：第一三共(株)
- 18) 出口 隆：DC-159a の *Mycoplasma genitalium* に対する抗菌活性の評価；平成 20-21 年度；2,310,000 円：第一三共(株)
- 19) 出口 隆：フリバス錠使用成績調査；平成 20-22 年度；210,000 円：旭化成(株)
- 20) 出口 隆：ゾシン静注用 2.25, 4.5 使用成績調査；平成 22-24 年度；105,000 円：大正富山(株)
- 21) 出口 隆：アフィニツール錠 5mg 特定使用成績調査；平成 22-25 年度；472,500 円：ノバルティスファーマ(株)
- 22) 出口 隆：ベンシケア錠 2.5 mg・5 mg 特定使用成績調査；平成 22-23 年度；94,500 円：アステラス製薬(株)

23) 出口 隆：トーリセル点滴静注用 25 mg 特定使用成績調査；平成 22-24 年度；283,500 円：ファイザー(株)

24) 出口 隆：フリバス錠 特定使用成績調査；平成 22-24 年度；126,000 円：旭化成(株)

3) 共同研究

- 1) 出口 隆：全自動尿中有形成分分析装置 UF-1000i とアルカリ界面活性剤溶液を用いた、臨床細菌尿検体におけるグラム陽性・陰性菌の簡易鑑別法に関する研究開発；平成 23 年度；273,000 円：シスメックス(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

出口 隆：

- 1) 日本泌尿器科学会監事(～平成 21 年 4 月)
- 2) 日本泌尿器科学会ボーディングメンバー(～現在)
- 3) 日本泌尿器科学会専門医資格試験委員会口頭試験部会長(～平成 21 年 4 月)
- 4) 日本泌尿器科学会学会賞・坂口賞選考委員会委員(～平成 21 年 4 月)
- 5) 日本泌尿器科学会専門領域委員会尿路性器感染症副部会長(～現在)
- 6) 日本化学療法学会西日本支部幹事(～現在)
- 7) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 8) 日本性感症学会理事(～現在)
- 9) 日本感染症学会評議員(～現在)
- 10) 尿路感染症研究会幹事(～現在)
- 11) 日本泌尿器科学会東海地方会運営委員長(～現在)
- 12) 泌尿器科分子・細胞研究会世話人(～現在)
- 13) 東海ストーマリハビリテーション研究会世話人(～現在)
- 14) J-POPS 運営委員(～現在)
- 15) 日本ミニマム創泌尿器内視鏡外科学会評議員(～現在)
- 16) 日本泌尿器科学会評議員(～現在)

仲野正博：

- 1) 日本泌尿器科学会ボーディングメンバー(～現在)
- 2) 日本泌尿器内視鏡学会評議員(～現在)
- 3) 日本泌尿器科学会東海地方会運営委員(～現在)

伊藤慎一：

- 1) 日本泌尿器科学会ボーディングメンバー(～現在)
- 2) 日本移植学会評議員(～現在)
- 3) 腎移植血管外科研究会世話人(～現在)
- 4) 日本臓器移植ネットワーク中日本支部運営委員(平成 22 年～現在)

横井繁明：

- 1) 日本泌尿器科学会ボーディングメンバー(～現在)
- 2) 日本泌尿器内視鏡学会評議員(～現在)
- 3) 泌尿器腹腔鏡技術認定医審査委員(～現在)

安田 満：

- 1) 日本泌尿器科学会ボーディングメンバー(～現在)
- 2) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 3) 日本性感症学会評議員(～現在)
- 4) 日本化学療法学会抗菌薬臨床評価ガイドライン改定委員会委員(～現在)

- 5) 三学会合同サーベイランス実務委員会委員(～現在)
- 6) 三学会合同サーベイランス実務委員会調整委員(～現在)
- 7) 日本化学療法学会 UTI 薬効評価基準見直しのための委員会委員(～現在)
- 8) 日本泌尿器科学会東海地方会事務局長(～現在)

2) 学会開催

出口 隆：

- 1) 第 20 回尿路感染症研究会(平成 21 年 11 月, 東京)
- 2) 第 248 回日本泌尿器科学会東海地方会(平成 22 年 6 月, 名古屋)

3) 学術雑誌

出口 隆：

- 1) J Infect Chemother ; Editorial Board(～現在)
- 2) Int J Urol ; Editorial Board(～現在)
- 3) 泌尿器科紀要 ; 編集委員(～現在)

安田 満：

- 1) 日本性感染症学会 ; 編集委員(～現在)
- 2) 日本化学療法学会 ; 全国編集委員(～平成 22 年 6 月)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

出口 隆：

- 1) 第 599 回日本泌尿器科学会東京地方会(平成 21 年 7 月, 東京, 特別講演「尿路性器感染症における薬剤特性に基づくニューキノロン剤の使い方」演者)
- 2) 5th Congress of Asia Pacific Society for the Study of Aging Male(2009.10, Osaka, Luncheon seminar: Topics of male urethritis, including drug-resistant *Neisseria gonorrhoeae* and newly recognized pathogens causing non-gonococcal urethritis; Speaker)
- 3) 第 57 回日本化学療法学会西日本支部総会・第 52 回日本感染症学会中日本地方会学術集会(平成 21 年 11 月, 名古屋, ワークショップ 3「尿路性器感染症 ～EBM に基づいた治療戦略～」座長)
- 4) 日本性感染症学会第 22 回学術大会(平成 21 年 12 月, 京都, シンポジウム I「性器感染症におけるイコプラズマおよびウレアプラズマの役割」座長)
- 5) 第 98 回日本泌尿器科学会総会(平成 22 年 4 月, 盛岡, シンポジウム 5「泌尿器科領域における周術期感染症予防」座長)
- 6) 第 98 回日本泌尿器科学会総会(平成 22 年 4 月, 盛岡, 卒後教育プログラム「性感染症と男性性器感染症: 診断と治療 I. 男性性器感染症」演者)
- 7) 第 60 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 22 年 12 月, 名古屋, ランチョンセミナー4「重症腎盂腎の臨床像と適切な抗菌薬の選択について」座長)
- 8) 第 60 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 22 年 12 月, 名古屋, 教育講演「薬物動態-薬物力学(PK/PD)理論に基づいた抗菌薬の使い方」座長)
- 9) 第 99 回日本泌尿器科学会総会(平成 23 年 4 月, 名古屋, 次世代へのメッセージ「尿路・性器感染症に対する適正抗菌化学療法」演者)
- 10) 第 99 回日本泌尿器科学会総会(平成 23 年 4 月, 名古屋, シンポジウム 9「尿路性器感染症研究・診療における現状と課題」座長)
- 11) 第 99 回日本泌尿器科学会総会(平成 23 年 4 月, 名古屋, 教育セミナー41「新しい前立腺手術の実際-with VIO-」座長)
- 12) 第 2 回 東海 STI 研究会(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演 1「マイコプラズマ性感染症に関する最近の話題」演者)
- 13) 第 81 回日本感染症学会西日本地方会学術集会(平成 23 年 10 月, 北九州, ワークショップ「UTI・STI: 今後やるべきこと」座長)
- 14) 第 61 回日本泌尿器科学会中部総会(平成 23 年 11 月, 京都, ランチョンセミナー「性感染症ガイドラインと最近の話題」座長)
- 15) 日本性感染症学会第 24 回学術大会(平成 23 年 12 月, 東京, シンポジウム 淋菌感染症の診断と治療～性感染症 診断・治療ガイドライン 2011 で変更された点, これから解決すべき問題点～ 「淋菌

感染症治療薬の PK-PD」 演者)

伊藤慎一：

- 1) 第 25 回腎移植・血管外科研究会(平成 21 年 6 月, 三重, シンポジウム 腎移植におけるメタボリックシンドローム対策「移植外科医から見た腎移植患者のメタボリックシンドローム」 演者)
- 2) 第 45 回日本移植学会総会(平成 21 年 9 月, 東京, シンポジウム 長期生着のための臨床腎移植病理「岐阜大学における protocol biopsy の臨床病理学的検討」 演者)
- 3) 第 26 回腎移植血管外科研究会(平成 22 年 6 月, 犬山, ランチョンセミナー1「グラセプター時代における投与設計 ～プログラムとの違いをふまえて～」 演者)
- 4) 第 20 回日本腎不全外科研究会(平成 23 年 7 月, 横浜, ランチョンセミナー3「腎移植の尿路合併症とその対処法について」 演者)

横井繁明：

- 1) 第 99 回日本泌尿器科学会総会(平成 23 年 4 月, 名古屋, 教育セミナー38 「日本における進行性腎細胞がん治療の現状-Urologist の工夫-」 演者)

安田 満：

- 1) 第 97 回日本泌尿器科学会総会(平成 21 年 4 月, 岡山, 教育セミナー4 泌尿器科における性感染症の現状と課題「性感染症の現状と治療上の問題点」 演者)
- 2) 第 20 回尿路感染症研究会(平成 21 年 11 月, 東京, シンポジウム「尿路性器感染症 ～これから何をすべきか～」 座長)
- 3) 第 57 回日本化学療法学会西日本支部総会・第 52 回日本感染症学会中日本地方会学術集会(平成 21 年 11 月, 名古屋, ワークショップ 3 尿路性器感染症 ～EBM に基づいた治療戦略～「性感染症淋菌性尿道炎」 演者)
- 4) 日本性感染症学会第 22 回学術大会(平成 21 年 12 月, 京都, シンポジウム I 性器感染症におけるマイコプラズマおよびウレアプラズマの役割「男子性器感染症における役割」 演者)
- 5) 第 98 回日本泌尿器科学会総会(平成 22 年 4 月, 盛岡, シンポジウム 5「泌尿器科領域における周術期感染症予防」「検査等(上部尿路, 膀胱鏡, 前立腺生検)」シンポジスト)
- 6) 第 249 回日本泌尿器科学会東海地方会(平成 22 年 9 月, 名古屋, 特別企画「「性感染症 診断治療ガイドライン 2010」の概要と主な変更点について」 演者)
- 7) 第 1 回東海 STI 研究会(平成 22 年 11 月, 名古屋, 特別講演「淋菌・クラミジア感染症に関する最近の話題」 演者)
- 8) 第 109 回 ICD 講習会(平成 22 年 11 月, 大阪, 口腔領域における性感染症感染予防対策「口腔咽頭に診る性感染症」 講師)
- 9) 第 4 回日本化学療法学会抗菌化学療法認定薬剤師講習会(平成 22 年 11 月, 幕張, 「性・尿路感染症抗菌薬の使い方」 講師)
- 10) 日本性感染症学会第 23 回学術大会(平成 22 年 12 月, 博多, ランチョンセミナー「性感染症の現在の問題点とその対応」 演者)
- 11) 第 99 回日本泌尿器科学会総会(平成 23 年 4 月, 名古屋, 卒後教育プログラム「尿路性器感染症：診断と治療 尿路性器結核」 演者)
- 12) 第 99 回日本泌尿器科学会総会(平成 23 年 4 月, 名古屋, めざせ! 泌尿器科の星 3 「研究のススメ-研究で世界一になる必要があるのでしょうか? 臨床だけじゃダメなんのでしょうか?-」 司会)
- 13) 第 59 回日本化学療法学会総会(平成 23 年 6 月, 札幌, 教育講演「淋菌感染症 -現状と治療の問題点-」 演者)
- 14) 第 59 回日本化学療法学会総会(平成 23 年 6 月, 札幌, ISC&AAUS joint symposium, Symposium 2 Antimicrobial stewardship in UTI and STI 「Target parameter in treatment of UTI」 演者)
- 15) 第 29 回日本クラミジア研究会(平成 23 年 9 月, 岐阜, 教育セミナー2「クラミジア・トラコマティス感染症の疫学と診断」 演者)
- 16) 第 22 回尿路感染症研究会(平成 23 年 10 月, 岐阜, シンポジウム 臨床において今後注目すべき尿路感染症「尿道症候群の診断と治療」 演者)
- 17) 日本性感染症学会第 24 回学術大会(平成 23 年 12 月, 東京, シンポジウム 淋菌感染症の診断と治療～性感染症 診断・治療ガイドライン 2011 で変更された点, これから解決すべき問題点～「淋菌感染症治療における AZM および CVA/AMPC の位置付け」 演者)

- 18) 日本性感染症学会第 24 回学術大会(平成 23 年 12 月, 東京, ランチョンセミナー1「淋菌感染症の現状と今後」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 安田 満: 寺田洋子記念・性の健康医学財団賞/泌尿器科学分野(平成 23 年)

9. 社会活動

出口 隆:

- 1) 岐阜県身体障害者医学的判定嘱託医師(~現在)
- 2) 岐阜県感染症予防対策エイズ対策部会委員(~現在)
- 3) 岐阜県ジン・アイバンク協会副理事長(~現在)
- 4) 性の健康医学財団理事(~現在)

10. 報告書

- 1) 安田 満, 三嶋廣繁, 出口 隆: 平成 21 年度性感染症全数調査 岐阜県詳細解析: 厚生労働科学研究費補助金 新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業 性感染症に関する予防, 治療の体系化のに関する研究(H22-新興-一般-001) 平成 22 年度総括研究報告書(小野寺班): 175-179(平成 23 年 5 月)

11. 報道

- 1) 増栄孝子: めざせ! 会社の星「めざせ! 患者さんの星」: NHK(平成 22 年 6 月 10 日)
- 2) 出口 隆: マイコプラズマ性感染症に関する最近の話題: Medicament News 第 2071 号(平成 23 年 12 月 5 日)
- 3) 安田 満: 性感染症の現状と治療上の問題点: ラジオ NIKKEI 医学講座(平成 23 年 12 月 27 日)
- 4) 出口 隆: 尿路・性器感染症に対する適正抗菌化学療法: ラジオ NIKKEI 医学講座(平成 23 年 12 月 27 日)

12. 自己評価

評価

尿路性器感染症の分野では, 先進的な研究成果をあげることができており評価を受けている。また岐阜県国際バイオ研究所との共同研究により, 前立腺癌の関する基礎的研究で成果を得ることができた。しかしながら, 他の研究課題においては着実に研究が進行しているものの, 顕著な成果としてはあらわれておらずより一層の努力を要する。

現状の問題点及びその対応策

最大の問題点は関連施設も含めた人員不足である。さらに, 新病院への移転後の臨床活動のウェイトが増したことに伴って, 益々研究に割ける員数と時間に影響が出ている。

即効性のある対応策はなく, また, 当分野だけの問題ではないと考えている。当分野としては, 以前にも増して本学医学部生及び他大学の学生に積極的にアピールし, 留学生や学外企業からの社会人大学院生の積極的な受入を行なう。研究面の発展のために, 学内の他分野, さらに他大学および他の研究施設との共同研究を積極的に展開する。

今後の展望

- 1) 尿路生殖器腫瘍の治療と予後に関する臨床的研究

関連病院を含めて腫瘍患者の data base を構築し, 予後に係わる因子を検索する。

- 2) 前立腺癌の薬剤耐性機構の分子生物学的研究

タキサン系抗癌剤耐性に関する遺伝子の検索をする。

- 3) 尿路感染症の基礎的・臨床的研究

現在の研究を進め, また, 遺伝子解析による薬剤感受性判定法の開発を目指す。これらの基礎的研究成果と PK-PD 理論に基づいた適正な抗菌化学療法の確立を目指す。

- 4) 男子尿道炎の基礎的・臨床的研究

東京大学大学院新領域創成科学研究科情報生命科学との共同研究を行い, 尿道炎の病原微生物の解明をさらに進めるとともに, 尿道炎に対する適正な抗菌化学療法の確立を目指す。

5) 腎移植における臨床的研究

免疫抑制剤の適正使用の確立と移植腎の長期機能維持を目指す。

6) 鏡視下手術手技の開発研究

新たな技術および器具, 器材の開発により, 鏡視下手術の適応の拡大を目指す。

(9) 麻酔・疼痛制御学分野

1. 研究の概要

麻酔・疼痛制御学分野の主な研究課題は、周術期管理の問題点解明・安全性確立と術後痛を含む難治性疼痛治療の開発とを主眼に置いた研究である。脳脊髄の微小循環から周術期の脳脊髄保護に関する知見の収集（中枢神経系モニタリングを含む）や、酸化ストレスによる血管内皮障害に伴う病態・防御機構の解明、麻酔関連領域におけるシグナル伝達機能とその制御、難治性疼痛の対策を究明する研究を行っており、以下のようにまとめることができる。

- 1) 脳・脊髄循環に対する麻酔及びその関連薬に関する研究
- 2) 麻酔関連領域における（中枢神経系・気道等）におけるシグナル伝達機能を含む研究
- 3) 酸化ストレス障害等による血管内皮障害および血管保護に関する研究
- 4) 術後疼痛を含む難治性疼痛制御に関する研究

過去 10 年間以上にわたり科学研究費の配分を受け、頭蓋内及び脊髄腔内有窓法を用いて脳および脊髄の微小循環に対する麻酔薬・麻酔関連薬や生理学的刺激に対する反応の作用機序に関する活発な研究を行い、最近では脳脊髄保護の基礎的研究まで仕事の幅を広げてきた。臨床医から見た臨床現場での疑問・問題点をより詳細に解明すべく血管保護・神経保護等のシグナル分子機構への作用も検討し臨床応用の可能性を示した。

2. 名簿

教授：	飯田宏樹	Hiroki Iida
准教授：	竹中元康	Motoyasu Takenaka
講師：	田辺久美子	Kumiko Tanabe
講師：	山本拓巳	Takumi Yamamoto
講師：	長瀬 清	Kiyoshi Nagase
助教：	杉山陽子	Yoko Sugiyama
助教：	熊澤昌彦	Masahiko Kumazawa
助教：	福岡尚和	Naokazu Fukuoka
助教：	飯田美紀	Miki Iida
助教：	松本茂美	Shigemi Matsumoto
医員：	山田裕子	Yuko Yamada
医員：	吉村文貴	Noritaka Yoshimura
医員：	宮本真紀	Maki Miyamoto
医員：	加藤真有美	Mayumi Kato
医員：	堤 久美子	Kumiko Tsutsumi
医員：	飯田祐子	Yuko Iida
医員：	阪田耕治	Kouji Sakata
医員：	田中 緑	Midori Tanaka
医員：	横田 愛	Mana Yokota
医員：	操 奈美	Nami Misao
医員：	山内裕子	Yuko Yamauchi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 山口 忍, 飯田宏樹. 痛みの評価: 稲田英一編. 麻酔科研修ノート, 東京: 診断と治療社; 2010年: 430-432.
- 2) 飯田宏樹, 福岡尚和. 肺動脈カテーテルが肺動脈に入らない: 高崎真弓, 河本昌志, 川真田樹人, 岡本博嗣編. 麻酔科トラブルシューティング A to Z, 東京: 文光堂; 2010年: 406-407.
- 3) 飯田宏樹, 橈骨動脈穿刺ができない: 高崎真弓, 河本昌志, 川真田樹人, 岡本博嗣編. 麻酔科トラブルシューティング A to Z, 東京: 文光堂; 2010年: 408-409.
- 4) 竹中元康. 頭痛: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 15-19.
- 5) 山口 忍, 飯田宏樹. 会陰部痛: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 36-40.
- 6) 松本茂美, 飯田宏樹. 腰背部痛: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 41-45.

- 7) 飯田宏樹. 肩こり: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 50-54.
- 8) 飯田宏樹. しびれ: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 55-59.
- 9) 竹中元康. 鎮痛法とその適応: 周術期管理チームテキスト 2010, 東京: 日本麻酔科学会; 2010年: 498-503.
- 10) 杉山陽子. 疼痛の生理学: 周術期管理チームテキスト 2010, 東京: 日本麻酔科学会; 2010年: 493-497.
- 11) 飯田宏樹. 痛みの定義: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 2-3.
- 12) 飯田宏樹. 神経ブロックの意義: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 3.
- 13) 飯田宏樹. 痛みの評価法: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 4-6.
- 14) 竹中元康, 飯田宏樹. 使用する器具: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 11-17.
- 15) 飯田宏樹. 使用する薬物: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 18-21.
- 16) 飯田宏樹. 神経破壊・刺激法: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 20-21.
- 17) 山口 忍, 飯田宏樹. [コラム]星状神経節 Radiofrequency: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 61-62.
- 18) 鷺見和行, 飯田宏樹. 浅頸神経ブロック: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 63-65.
- 19) 松本茂美, 飯田宏樹. 腕神経叢ブロック: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 71-76.
- 20) 竹中元康, 飯田宏樹. 椎間関節ブロック・熱凝固(頸部・腰部): 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 200-206.
- 21) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法 消炎鎮痛薬(NSAIDs): 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 262-263.
- 22) 山口 忍, 飯田宏樹. アセトアミノフェン: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 264.
- 23) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法 抗うつ薬: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 265-267.
- 24) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法 抗てんかん薬: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 267-268.
- 25) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法 抗不安薬: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 269-270.
- 26) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法 抗不整脈薬: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 270.
- 27) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法 オピオイド: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 271-272.
- 28) 山口 忍, 飯田宏樹. 薬物療法 その他: 飯田宏樹, 福井弥己郎, 伊達 久, 安部洋一郎編. よくわかる神経ブロック法, 東京: 中外医学社; 2011年: 273-275.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 飯田宏樹. 喫煙の基礎医学 2-血管障害-1, 治療学 2009年; 43巻: 151-156.
- 2) 土肥修司, 南 公人, 鈴木友希, 中村好美, 宮本真紀, 吉野牧恵, 鬼頭和裕. 初期研修プログラムの問題点, Anesthesia 21 Century 2009年; 11巻: 13-15.
- 3) 飯田真美, 飯田宏樹. 生活習慣改善-禁煙指導を中心に, 総合臨床 2009年; 58巻: 331-336.
- 4) 中村好美, 土肥修司. 酸素マスク時の CO₂濃度, 日本医事新報 2009年; 4439巻: 77-78.
- 5) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 岩井智守男, 飯田宏樹. 輸血拒否患者(エホバの証人)に対する脊椎手術, 脊椎変形 2009年; 24巻: 100-103.
- 6) 田辺久美子. 神経障害性疼痛におけるグリアの役割, 医学のあゆみ 2010年; 233巻: 253-257.
- 7) 宮本真紀, 土肥修司. 術後疼痛, 術後嘔吐への対応, 薬局 2010年; 61巻: 103-107.
- 8) 福岡尚和, 飯田宏樹. 拘束性肺疾患, 麻酔 2010年; 59巻: 833-837.
- 9) 飯田宏樹. 喫煙, 麻酔 2010年; 59巻: 838-843.
- 10) 長瀬 清, 紀ノ定保臣. 急性期病院における手術部門システムの役割とその将来像, 新医療 2010年; 37巻: 137-140.
- 11) 長瀬 清. 米国の病院経営における手術部の立場, 日本手術医学会誌 2010年; 31巻: 12-15.
- 12) 紀ノ定保臣, 長瀬 清. 医療の質の可視化と病院経営-蓄積されたデータ活用を目指して-, 日刊ジャー

- マック 21 2010 年；21 巻：23-27.
- 13) 飯田宏樹. 安全面と効率面からみた難治性疼痛治療, ペインクリニック 2011 年；32 巻：317-318.
 - 14) 飯田宏樹. 脳脊髄循環からみた脊椎外科・大血管外科における脊髄保護, 日臨麻会誌 2011 年；31 巻：193-201.
 - 15) 飯田宏樹, 山口 忍. 慢性疼痛に対する新しい薬物 新しい薬物を含む治療法選択の考え方, 臨床整形外 2011 年；46 巻：311-316.
 - 16) 飯田宏樹. 脊髄保護のための麻酔法, Anet 2011 年；15 巻：22-26.
 - 17) 飯田宏樹, 加藤真有美. 周術期禁煙, 臨床麻酔 2011 年；35 巻：1095-1103.
 - 18) 土肥修司, 飯田美紀. 若い麻酔科医に聞かせたい私の失敗学「心配」は「失敗」を償うか, 日臨麻会誌 2011 年；31 巻：641-649.
 - 19) 飯田宏樹. ペインクリニック領域の最近の話題, 岐阜県保険医新聞 2011 年；395 巻：5.
 - 20) 飯田美紀. 全身麻酔下での人工膝関節置換術-フェンタニル持続静注を選択 呼吸抑制にも注意-, LiSA 2011 年；18 巻：258-261.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 早川洋子, 飯田宏樹, 鷺見和行, 田口佳広, 山口 忍, 吉村文貴, 竹中元康, 土肥修司. 交感神経ブロックおよびナトリウムチャンネル遮断薬が著効し, 長期経過で運動障害・骨脱灰が回復した CRPS の 1 症例, ペインクリニック 2010 年；31 巻：509-511.
- 2) 高田基志, 山本拓己, 南 公人, 村田哲哉, 井上智恵子, 酢谷朋子, 鈴木 照. 血液浄化療法が血糖に及ぼす臨床 影響の評価, 救急医学 2010 年；34 巻：619-623.
- 3) 加藤真有美, 山田裕子, 熊澤昌彦, 竹中元康, 飯田宏樹. ハンチントン舞踊病患者に対するスガマデクスの使用経験, 臨床麻酔 2011 年；35 巻：857-859.

原著 (欧文)

- 1) Tanahashi S, Iida H, Dohi S, Oda A, Osawa Y, Yamaguchi S. Comparative effects of ultra-short-acting β 1-blockers on voltage-gated tetrodotoxin-resistant Na^+ channels in rat sensory neurons. *Eur J Anaesth.* 2009;26:196-200. IF 1.679
- 2) Tanabe K, Nishimura K, Dohi S, Kozawa O. Mechanisms of interleukin-1 β -induced GDNF release from rat glioma cells. *Brain Res.* 2009;1274:11-20. IF 2.623
- 3) Yamaguchi S, Tanabe K, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Adachi S, Iida H, Kozawa O, Dohi S. Involvement of Rho-kinase in tumor necrosis factor- α -induced interleukin-6 release from C6 glioma cells. *Neurochem Int.* 2009;55:438-445. IF 3.601
- 4) Minami K, Iida H, Sakakibara I, Dohi S. A Case of Cesarean Section with a Preoperatively Undiagnosed Placenta Percreta. *Anesth Res.* 2009;45:69-70.
- 5) Fukuoka N, Iida H, Akamatsu S, Nagase K, Iwata H, Dohi S. The association between the initial end-tidal carbon dioxide difference and the lowest arterial oxygen tension value obtained during one-lung anesthesia with propofol or sevoflurane. *J Cardiothor Vasc An.* 2009;23:775-779. IF 1.596
- 6) Iida H, Sumi K, Yamaguchi S, Takenaka M, Dohi S. A case of cervicogenic ipsilateral shoulder pain after thoracic surgery. *J Cardiothor Vasc An.* 2009;23:853-854. IF 1.596
- 7) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Yamaguchi S, Iida H, Dohi S, Kozawa O. Mechanisms of tumor necrosis factor- α -induced interleukin-6 synthesis in glioma cells. *J Neuroinflamm.* 2010;7:16. IF 5.785
- 8) Tanabe K, Matsushima-Nishiwaki R, Dohi S, Kozawa O. Phosphorylation status of heat shock protein 27 regulates the interleukin-1 β -induced interleukin-6 synthesis in C6 glioma cells. *Neuroscience.* 2010;170:1028-1034. IF 3.215
- 9) Iida H, Iida M, Takenaka M, Fukuoka N, Dohi S. Comparative effects of cilostazol and aspirin on the impairment of endothelium-dependent cerebral vasodilation caused by acute cigarette smoking in rats. *J Thromb Thrombolys.* 2010;29:483-488. IF 1.539
- 10) Yamaguchi S, Iida H, Sumi K, Takenaka M, Yoshimura N, Dohi S. Preliminary study of the efficacy of radiofrequency lesions of stellate ganglion in chronic pain patients. *Pain Med.* 2010;11:142-144. IF 2.537
- 11) Akamatsu S, Kondo Y, Ueda N, Kojima A, Fukuoka N, Takada M, Dohi S, Hashimoto T. Continuous cardiac output measurement with a doppler-equipped pulmonary artery catheter. *Anesth Analg.* 2011;112:851-857. IF 3.274
- 12) Tanabe K, Kozawa O, Iida H. Midazolam suppresses interleukin1 β -induced interleukin-6 release from rat glial cells. *J Neuroinflamm.* 2011;8:68. IF 5.785

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 土肥修司, 研究分担者: 杉山陽子, 柳館富美, 田辺久美子; 科学研究補助金基盤研究(A): 麻酔薬シグナル伝達機構におけるナトリウムカリウムポンプの役割とその構造変化の解析; 平成 19

- ー21年度；21,760千円(8,660：6,200：6,900千円)
- 2) 研究代表者：長瀬 清；科学研究費補助金若手(B)：一過性全脳虚血モデルにおける Rho キナーゼ阻害薬フェスジルの脳微小循環への影響；平成 19ー21 年度；3,650 千円(1,750：1,000：900 千円)
 - 3) 研究代表者：飯田真美，研究分担者：飯田宏樹，土肥修司；科学研究費補助金基盤研究(C)：心肺蘇生時の脳保護における性ホルモンの意義と役割ー一過性全脳虚血モデルでの検討ー；平成 20ー22 年度；3,914 千円(1,814：1,100：1,000 千円)
 - 4) 研究代表者：大島博人；科学研究費補助金基盤研究(C)：グルタミン酸受容体作動薬の脳微小血管および AQP-4 に与える影響に関する検討；平成 20ー22 年度；2,450 千円(1,050：700：700 千円)
 - 5) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；科学研究費補助金基盤研究(C)：中枢神経系における神経保護作用の分子基盤の解析；平成 20ー22 年度；4,200 千円(2,500：1,000：700 千円)
 - 6) 研究代表者：飯田宏樹，研究分担者：飯田真美；科学研究費補助金基盤研究(C)：脊髄虚血モデルにおける性差および性ステロイドの意義・役割と臨床応用；平成 21ー23 年度；3,400 千円(1,100：1,200：1,100 千円)
 - 7) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；科学研究費補助金基盤研究(C)：心血管系における過大侵襲に対するストレス応答の分子基盤の解析；平成 20ー22 年度；3,500 千円(1,500：1,000：1,000 千円)
 - 8) 研究代表者：杉山陽子；科学研究費補助金若手研究(B)：人工呼吸中の気道上皮免疫機構における GABAB 受容体の役割；平成 21ー22 年度；1,800 千円(1,000：800 千円)
 - 9) 研究代表者：内田昌良，研究分担者：飯田宏樹，飯田真美；科学研究費補助金基盤研究(C)：脳虚血再灌流時の吸入麻酔薬による脳保護作用とアンドロジェンの役割；平成 22ー24 年度；3,100 千円(1,100：1,000：1,000 千円)
 - 10) 研究代表者：福岡尚和；科学研究費補助金若手研究(B)：敗血症モデルラットにおける脳血管内皮機能の検討；平成 22ー23 年度；1,700 千円(900：800 千円)
 - 11) 研究代表者：赤松 繁，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：過大侵襲に対する凝固線溶系におけるストレス応答の分子基盤の解析；平成 23ー25 年度；3,900 千円(1,700：1,100：1,100 千円)
 - 12) 研究代表者：田辺久美子，研究分担者：小澤 修；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：全身麻酔薬の中枢神経系に対する脳保護作用の分子機序の解析；平成 23ー25 年度；4,100 千円(2,200：1,100：800 千円)
 - 13) 研究代表者：熊澤昌彦，研究分担者：田辺久美子，飯田宏樹；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：血管平滑筋細胞における分化・増殖の分子基盤の解析；平成 23ー25 年度；4,000 千円(1,500：1,400：1,100 千円)
 - 14) 研究代表者：杉山陽子；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：人工呼吸管理中の肺保護における GABA 受容体の役割；平成 23ー25 年度；2,500 千円(1,000：800：700 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

飯田宏樹：

- 1) 日本麻酔科学会代議員(～現在)
- 2) 日本ペインクリニック学会評議員(～現在)
- 3) 日本臨床麻酔学会評議員(～現在)
- 4) 日本疼痛学会評議員(～現在)
- 5) 日本神経麻酔集中治療研究会評議員(～現在)

竹中元康：

- 1) 日本麻酔科学会評議員(～現在)
- 2) 日本ペインクリニック学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

飯田宏樹：

- 1) 日本ペインクリニック学会誌編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

土肥修司：

- 1) 第12回岐阜周術期管理研究会(平成21年1月, 岐阜, 特別講演「心臓血管疾患における最近の周術期管理」座長)
- 2) 第12回日本脳低温療法学会(平成21年7月, 札幌, 特別講演「知能障害を残さない脳低温療法のノウハウ」座長)
- 3) 第3回岐阜アルチバフォーラム(平成21年7月, 岐阜, 特別講演「麻酔管理と循環管理」座長)
- 4) 日本ペインクリニック学会第43回大会(平成21年, 名古屋, 会長講演「日本におけるペインクリニック治療の展望」座長)
- 5) 第10回緩和ケア・プラスティス(平成21年8月, 岐阜, 特別講演「緩和医療における地域連携」座長)
- 6) 第30回鎮痛薬・オピオイドペプチドシンポジウム(平成21年8月, 東京, 基調講演「包括的基礎研究による‘痛み’の統合的分子理解と次代の‘トランスレーショナルオピオイドリサーチ」座長)
- 7) 日本臨床麻酔学会第29回大会(平成21年10月, 浜松, 招請講演「光マイクロイメージングが切り拓く分子と細胞の新世界」座長)
- 8) 日本臨床麻酔学会第29回大会(平成21年10月, 浜松, 教育セミナー「解離性麻酔薬の誕生とNMDA受容体拮抗薬の依存・乱用」座長)
- 9) 日本蘇生学会第28回大会(平成21年11月, 佐賀, 教育講演「Advances in Cardiac Resuscitation for Prehospital medicine」座長)

飯田宏樹：

- 1) 第2回飛騨周術期研究会(平成21年3月, 高山, 特別講演「緩和ケアについて」座長)
- 2) 日本ペインクリニック学会第43回大会(平成21年7月, 名古屋, ランチョンセミナー「慢性疼痛治療における抗うつ薬, 心身医学から見た多面的な役割」座長)
- 3) 日本臨床麻酔学会第29回大会(平成21年10月, 浜松, 教育講演「脳脊髄循環からみた中枢神経保護」座長)
- 4) 第13回岐阜周術期循環管理研究会(平成22年1月, 岐阜, 特別講演「麻酔中の循環管理と反射性反応」座長)
- 5) 第21回日本ペインクリニック学会東海地方会(平成22年5月, 名古屋, ランチョンセミナー「痛みと性格」座長)
- 6) 日本麻酔科学会第57回学術集会(平成22年6月, 福岡, ポスター発表「緩和ケア01 癌性疼痛」座長)
- 7) 日本ペインクリニック学会第44回大会(平成22年7月, 京都, リフレッシュャーコース「神経ブロックと合併症」座長)
- 8) 日本ペインクリニック学会第44回大会(平成22年7月, 京都, ポスター発表「頭痛・顔面痛・顔面疾患」座長)
- 9) 日本臨床麻酔学会第30回大会(平成22年11月, 徳島, ポスター発表「気道管理・小児」座長)
- 10) 第1回慢性疼痛懇話会(平成22年12月, 岐阜, 特別講演「非癌性慢性疼痛に対する治療戦略」座長)
- 11) 第14回岐阜周術期循環管理研究会(平成23年1月, 岐阜, 特別講演「脳神経麻酔のup to date」, 座長)
- 12) 日本麻酔学会第58回学術集会(平成23年5月, 神戸, シンポジウム「喫煙の麻酔への影響と禁煙の意義」, 座長)
- 13) 日本麻酔学会第58回学術集会(平成23年5月, 神戸, 共催セミナー「麻薬性鎮痛薬, がんの痛みを

- どこまで緩和できるか？－痛みの原因論からのアプローチ－」，座長)
- 14) 日本ペインクリニック学会第 45 回大会(平成 23 年 7 月，愛媛，シンポジウム「慢性痛に対するオピオイド使用の課題」，座長)
 - 15) 第 15 回日本神経麻酔・集中治療研究会(平成 23 年 8 月，名古屋，ランチョンセミナー「新しい心臓蘇生法ガイドライン 2010」，座長)

竹中元康：

- 1) 岐阜地域医療連携・緩和ケア研究会(平成 21 年 3 月，岐阜，特別講演「ホスピス病棟における緩和ケアの実際」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 土肥修司：麻酔薬シグナル伝達機構におけるナトリウムカリウムポンプの役割とその構造変化の解析：平成 19－21 年度科学研究補助金基盤研究(A)研究成果報告書(平成 22 年 3 月)
- 2) 飯田真美：心肺蘇生時の脳保護における性ホルモンの意義と役割－過性全脳虚血モデルでの検討－：平成 20－22 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 23 年 3 月)
- 3) 大島博人：グルタミン酸受容体作動薬の脳微小血管および AQP-4 に与える影響に関する検討：平成 20－22 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 23 年 3 月)
- 4) 田辺久美子：中枢神経系における神経保護作用の分子基盤の解析：平成 20－22 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 23 年 3 月)
- 5) 赤松 繁：心血管系における過大侵襲に対するストレス応答の分子基盤の解析：平成 20－22 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 23 年 3 月)
- 6) 杉山陽子：人工呼吸中の気道上皮免疫機構における GABAB 受容体の役割：平成 21－22 年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書(平成 23 年 3 月)
- 7) 飯田宏樹：脊髄虚血モデルにおける性差および性ステロイドの意義・役割と臨床応用：平成 21－23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 24 年 3 月)
- 8) 福岡尚和：敗血症モデルラットにおける脳血管内皮機能の検討：平成 22－23 年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書(C)研究成果報告書(平成 24 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

大学病院はもとより関連病院の麻酔科の業務の増加などによるマンパワー不足に伴い，基礎研究に避ける時間が減ったことが制限因子となっているが，できるだけ臨床面を科学的に捉える臨床研究をすすめることによって，アメリカ麻酔学会・国際脳循環代謝学会等の外国および国際学会での発表，そして日本麻酔科学会・日本臨床麻酔学会・日本ペインクリニック学会への発表を通して，医局員のリサーチマインドの維持は出来ていると評価している。

現状の問題点及びその対応策

医学部および病院の全面移転から 5 年以上を経て診療体制並びに研究体制も整備されてきた。しかし，地方大学での麻酔科医のマンパワーの確保の困難さは当施設でも明らかである現状の中で附属病院の収入増加のためには手術数の増加が必要であり，また地域救急体制の中心として，またガン拠点病院としての機能から当病院で手術が必要となる患者数が増えることは必然であった。それを中央部門として支える麻酔科医としての臨床業務の負担が増加するために，研究業務に割ける人員・時間が限られていることが研究を遂行している上での最も重要な実際的な問題である。現在研究を希望して大学院に入学している医師にも学費を払いながら，臨床業務を義務化して遂行せざるを得ない。抜本的な改革は今後の

問題として残されている。研究費は幸いにも科学研究費の配分を受け、研究室の整備も段階的に進めてきたので当面は円滑な研究活動が期待できる。

今後の展望

現在進めている研究を少ない研究人員・時間でどのように発展させていくかが今後も続く課題である。地域医療の中心である当病院の社会的使命として優れた臨床医を関連する地域医療機関に派遣するという仕事があるだけに、当面は著明なマンパワーの増加は期待できないので、現在も行っている他の基礎部門との共同研究によって、より効率的に研究を遂行することが必要であると考えている。現在、グリア細胞におけるシグナル伝達を中心に成果も上がっているため、この分野での活発な成果が期待される。また、脳脊髄血管の研究においても、血管の反応性の研究を超えて組織保護に繋がるシグナル伝達を含めたメカニズムに迫る分野へ発展させていく予定である。

研究室での研究遂行の遂行に十分な人員・時間が割けないところは周術期管理において日々の臨床活動の中で、臨床研究を進め、臨床の安全性の検討を図るべき研究プロジェクトを推進している。また、術後痛や疼痛外来での患者治療を行いながら、難治性疼痛の制御に関する方法の解明を通じて臨床研究を維持し、社会のニーズに応えると共にリサーチマインドの維持に努め、科学的な思考のできる臨床医を育てていくことを目標に掲げている。

(10) 口腔病態学分野

1. 研究の概要

現在、当分野において展開中の研究課題を臨床研究と基礎研究に大別して述べる。

臨床研究：最近の分子生物学の発展により、多くの疾患において分子生物学的機序が明らかとされている。また、近年の再生医療研究の発展も著しく、口腔医療への応用も様々な面で進展して来ている。この現状を鑑み、当分野では、口腔病変（口腔がん、白板症、扁平苔癬、その他歯原性腫瘍など）の解析と、再生医療の臨床展開に軸足を置き以下の研究課題に取り組んでいる。

- 1) 口腔病変の分子疫学的解析
- 2) 口腔機能再建（移植・再生医療）
- 3) 口腔乾燥症の病態と治療
- 4) 口腔がんの集学的治療
- 5) ヒト歯胚・歯髄からの幹細胞採取と iPS 細胞化・バンク化事業

基礎研究：口腔がんの次世代治療法開発を目指し、発がん・悪性化進展プロセスにおける epigenetic 因子の関与とその制御の可能性および顎・口腔機能の改善・再生に対する細胞工学的検討を視野に以下の検討を行なっている。

- 1) がん悪性化進展機序における DNA メチル化異常の解析
- 2) 骨代謝・再生医療の新技术開発
- 3) 口腔がん化学予防法の開発
- 4) ヒト歯胚・歯髄からの幹細胞採取と iPS 細胞化・バンク化事業

2. 名簿

教授：	柴田敏之	Toshiyuki Shibata
講師：	牧田浩樹	Hiroki Makita
講師：	加藤恵三	Keizo Kato
助教：	米本和弘	Kazuhiro Yonemoto
助教：	島山大二郎	Daijiro Hatakeyama
助教：	玉置也剛	Naritaka Tamaoki
助教：	飯田一規	Kazuki Iida
医員：	川口知子	Tomoko Kawaguchi
医員：	後藤憂子	Yuko Goto

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 土井田 誠. 舌痛：森田浩之編. いきなり名医！見わけが肝心、不定愁訴 jmedmook09, 東京：日本事新報社；2010年：20-22.
- 2) 柴田敏之. 外歯瘻：朝波惣一郎, 王 宝禮編. 薬 '10/11 疾患名から治療薬と処方例がすぐわかる本 chapter 1, 東京：クインテッセンス出版；2010年：58-59.
- 3) 柴田敏之. 外来のガイドライン診療 12 口内炎：泉 孝英編. ガイドライン外来診療 2011, 東京：日経メディカル開発；2011年：115-119.
- 4) 柴田敏之. 隣接・関連分野の疾患の診断・治療：日本口腔外科学会編. 口腔外科専門医マニュアル, 東京：医歯薬出版社；2011年：310-319.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 米本和弘, 江崎友紀, 浅香雄一郎, 山下知巳, 土井田 誠, 柴田敏之. 唇顎口蓋裂患者の顎裂部に生じた nasal polyp の 1 例, 日本口腔外科学会雑誌 2009 年；55 卷：341-344.
- 2) 浅香雄一郎, 牧田浩樹, 米本和弘, 山下知巳, 加藤恵三, 柴田敏之. 外科的治療が有効であったビスフォスフォネート関連下顎骨壊死の 1 例, 日本口腔外科学会雑誌 2009 年；55 卷：354-358.

- 3) 柴田敏之. 診断力ですと 急速な骨の吸収, デンタルダイヤモンド 2010年; 35巻: 127-128.
- 4) 柴田敏之. ミクリツ病と IgG4 関連疾患, デンタルダイヤモンド 2010年; 35巻: 157-163.
- 5) 玉置也剛, 米本和弘, 宮崎康雄, 畠山大二郎, 加藤恵三, 牧田浩樹, 山下知己, 柴田敏之. 下顎智歯抜歯中に生じた広範な皮下気腫の1例, 日本口腔診断学会雑誌 2011年; 24巻: 165-169.

原著 (欧文)

- 1) Yamashita T, Toida M, Kato K, Nguyen KL, Miyazaki Y, Asaka Y, Hatakeyama D, Yonemoto K, Makita H, Kato Y, Shibata T. The effects of neoadjuvant therapy on the 5-fluorouracil metabolic and relative enzymes of oral squamous cell Carcinoma. *Oncol Rep.* 2009;22:501-507. IF 1.686
- 2) Baba S, Yamada Y, Hatano Y, Miyazaki Y, Mori H, Shibata T, Hara A. Global DNA hypomethylation suppresses squamous carcinogenesis in the tongue and esophagus. *Cancer Sci.* 2009;100:1186-1191. IF 3.846
- 3) Tanaka K, Mikamo H, Nakao K, Ichiishi S, Goto T, Yamagishi Y, Watanabe K. In vitro activity of tomopenem (CS-023/RO4908463) against anaerobic bacteria. *Antimicrob Agents Chemother.* 2009;53:319-322. IF 4.672
- 4) Toida M, Kato K, Makita H, Nguyen KL, Takeda T, Hatakeyama D, Yamashita T, Shibata T. Palliative effect of lafutidine on oral burning sensation. *J Oral Pathol Med.* 2009;38:262-268. IF 2.075
- 5) Baba S, Hara A, Kato K, Nguyen KL, Hatano Y, Kimura M, Okano Y, Yamada Y, Shibata T. Aberrant promoter hypermethylation of the CHFR gene in oral squamous cell carcinoma. *Oncol Rep.* 2009;22:1173-1179. IF 1.686
- 6) Nakao K, Tanaka K, Ichiishi S, Mikamo H, Shibata T, Watanabe K. Susceptibilities of 23 Desulfotribio isolates from humans. *Antimicrob Agents Chemother.* 2009;53:5308-5311. IF 4.672
- 7) Toida M, Nanya Y, Takeda-Kawaguchi T, Baba S, Iida K, Kato K, Hatakeyama D, Makita H, Yamashita T, Shibata T. Oral complaints and stimulated salivary flow rate in 1188 adults. *J Oral Pathol Med.* 2010;39:407-419. IF 2.075
- 8) Tamaoki N, Takahashi K, Tanaka T, Aoki H, Takeda-Kawaguchi T, Iida K, Kunisada T, Shibata T, Yamanaka S, Tezuka K. Dental pulp cells for induced pluripotent stem cell banking. *J Dent Res.* 2010;89:773-778. IF 3.773
- 9) Iida K, Takeda-Kawaguchi T, Tezuka Y, Kunisada T, Shibata T, Tezuka K. Hypoxia enhances colony formation and proliferation but inhibits differentiation of human dental pulp cells. *Arch Oral Biol.* 2010;55:648-654. IF 1.463
- 10) Okita K, Matsumura Y, Sato Y, Okada A, Morizane A, Okamoto S, Hong H, Nakagawa M, Tanabe K, Shibata T, Kunisada T, Takahashi M, Takahashi J, Saji H, Yamanaka S. A more efficient method to generate integration-free human iPS cells. *Nat Methods.* 2011;8:409-412. IF 20.721
- 11) Kato H, Kanematsu M, Toida M, Kawaguchi T, Shibata T, Kajita K, Hoshi H. Salivary gland function evaluated by diffusion-weighted MR imaging with gustatory stimulation: preliminary results. *J Magn Reson Imaging.* 2011;34:904-909. IF 2.749

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 柴田敏之, 研究分担者: 山下知己, 土井田 誠, 加藤恵三; 科学研究費補助金基盤研究(B): ヒト口腔粘膜病変における遺伝子メチル化異常の関与; 平成 18-21 年度; 13,200 千円(3,200 : 3,300 : 3,300 : 3,400 千円)
- 2) 研究代表者: 土井田 誠, 研究分担者: 加藤恵三, 牧田浩樹, 山下知己, 柴田敏之; 科学研究費補助金基盤研究(C): 口腔扁平上皮癌の頸部リンパ節転移に関する染色体・遺伝子異常の解析; 平成 19-21 年度; 3,100 千円(1,200 : 900 : 1,000 千円)
- 3) 研究代表者: 武田知子; 科学研究費補助金若手研究(B): ヒト歯髄組織幹細胞の樹立効率向上と iPS 細胞化の検討; 平成 20-21 年度; 2,540 千円(1,360 : 1,180 千円)
- 4) 研究代表者: 宮崎康雄; 科学研究費補助金若手研究(B): 低酸素環境によるヒト口腔がんの EMT 誘導; 平成 20-21 年度; 2,540 千円(1,340 : 1,200 千円)
- 5) 研究代表者: 山下知己, 研究分担者: 加藤恵三, 牧田浩樹, 畠山大二郎, 土井田 誠, 柴田敏之; 科学研究費補助金基盤研究(C): 口腔癌における血漿中のメチル化異常遺伝子断片の検索と臨床病態との相関; 平成 20-22 年度; 3,500 千円(1,700 : 900 : 900 千円)
- 6) 研究代表者: 畠山大二郎; 科学研究費補助金若手研究(B): ヒト歯胚組織幹細胞におけるオステオカルシン発現と血管内皮増殖因子誘導機構の解析; 平成 20-22 年度; 3,100 千円(1,100 : 1,000 : 1,000 千円)
- 7) 研究代表者: 牧田浩樹, 研究分担者: 加藤恵三, 山下知己, 土井田 誠, 柴田敏之, 米本和弘; 科学研究費補助金基盤研究(C): 4NQO 誘発ラット舌発癌モデルにおける遺伝子変異機構の解析; 平成 21-23 年度; 3,400 千円(1,200 : 1,100 : 1,100 千円)

- 8) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：畠山大二郎，牧田浩樹，加藤恵三；科学研究費補助金挑戦的萌芽：ヒト智歯由来組織幹細胞のステムネス性とiPS細胞誘導効率の検証；平成21-22年度；3,000千円(1,500：1,500千円)
- 9) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：牧田浩樹，山下知己，加藤恵三，原明；科学研究費補助金基盤研究(B)海外学術調査：東南アジアの噛みタバコ習慣が口腔粘膜の遺伝子メチル化異常に及ぼす影響；平成21-25年度；15,730千円(3,120：3,250：3,120：3,120：3,120千円)
- 10) 研究代表者：玉置也剛；科学研究費補助金研究活動スタート支援：ヒト歯髄細胞から良質なiPS細胞株を効率良く誘導するための基礎的検討；平成22-23年度；2,540千円(1,470：1,070千円)
- 11) 研究代表者：加藤恵三，研究分担者：牧田浩樹，山下知己，柴田敏之，原明；科学研究費補助金基盤研究(C)：4NQO誘発ラット舌発癌モデルによる早期メチル化異常と脱メチル化による影響の解析；平成22-24年度；3,200千円(1,200：700：1,300千円)
- 12) 研究代表者：米本和弘，研究分担者：柴田敏之，牧田浩樹，加藤恵三；科学研究費補助金基盤研究(C)：4NQO誘発ラット舌癌モデルにおけるヒストン修飾の解析；平成22-24年度；3,400千円(1,200：1,100：1,100千円)
- 13) 研究代表者：川口知子，研究分担者：柴田敏之，牧田浩樹，畠山大二郎；科学研究費補助金基盤研究(C)：動物由来物質・因子を使わない安全なヒト歯髄由来幹細胞の樹立とiPS細胞化の検討；平成22-24年度；3,200千円(1,200：1,000：1,000千円)
- 14) 研究代表者：柴田敏之，研究分担者：畠山大二郎，牧田浩樹，加藤恵三，長瀬朋子，川口知子；科学研究費補助金基盤研究(B)：ヒト歯髄由来組織幹細胞のステムネス性維持とiPS細胞の良質化；平成22-25年度；19,600千円(4,900：4,900：4,900：4,900千円)
- 15) 研究代表者：畠山大二郎，研究分担者：川口知子，玉置也剛，飯田一規，柴田敏之；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：ヒト歯髄細胞の遺伝子発現プロファイルとiPS細胞誘導効率の検証；平成23-25年度；3,800千円(1,400：1,200：1,200千円)
- 16) 研究代表者：飯田一規；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：高齢者のヒト歯髄細胞からiPS細胞を効率よく樹立するための基礎的検討；平成23-26年度；4,030千円(910：1,040：1,040：1,040千円)

2) 受託研究

- 1) 土井田 誠，柴田敏之：シェーグレン症候群の口腔乾燥症状に対するムスカリン受容体刺激薬の有効性/安全性に関する比較研究；平成21-22年度；500千円(250：250千円)；キッセイ薬品工業(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

柴田敏之：

- 1) 日本口腔外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本口腔科学会評議員(～現在)
- 3) 日本口腔腫瘍学会評議員(～現在)
- 4) 日本口腔顔面外傷学会理事(～現在)
- 5) 日本口腔外科学会雑誌編集査読委員会委員(～現在)
- 6) 日本口腔外科学会カリキュラム委員会副委員長(～平成21年8月)
- 7) 日本口腔外科学会タバコ対策委員会委員(～平成21年8月)
- 8) 日本口腔外科学会脱タバコ社会実現委員会委員長(平成21年9月～現在)
- 9) 日本口腔外科学会学術委員会委員(平成21年9月～現在)
- 10) 日本口腔外科学会理事(平成21年10月～現在)
- 11) 日本口腔外科学会倫理委員会委員長(平成23年9月～現在)
- 12) 日本口腔外科学会医療安全委員会委員長(平成23年9月～現在)
- 13) 日本口腔外科学会専門医制度委員会委員(平成23年9月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

柴田敏之：

- 1) 日本口腔外科学会雑誌；編集査読委員(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

柴田敏之：

- 1) 2008 年度口腔四学会合同研修会/第 31 回(社)日本口腔外科学会教育研修会(平成 21 年 2 月，東京，教育講演「ヒトパピローマウイルス(HPV)と口腔粘膜疾患」座長)
- 2) 2008 年度口腔四学会合同研修会/第 31 回(社)日本口腔外科学会教育研修会(平成 21 年 2 月，東京，教育講演「口腔に症状を呈するウイルス疾患と真菌感染症」座長)
- 3) 第 64 回日本口腔科学会総会(平成 22 年 6 月，札幌，シンポジウム I 「歯科医学における臨床と基礎の接点を探る」演者)
- 4) 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society(2010.08, Gifu, Workshop13 ; Chairperson)
- 5) 第 10 回日本再生医療学総会(平成 23 年 3 月，東京，シンポジウム 2 歯髄幹細胞の可能性「ヒト歯髄細胞のステムネス性維持と iPS 細胞リソース」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 玉置也剛：日本口腔外科学会メダルティス賞(平成 21 年度)
- 2) 川口(武田)知子：日本口腔科学会学会賞優秀発表賞(平成 22 年度)
- 3) 玉置也剛：日本口腔科学会学会賞優秀発表賞(平成 22 年度)

9. 社会活動

柴田敏之：

- 1) 日本学術振興会特別研究員審査会専門委員(～現在)
- 2) 岐阜県国保審査会審査委員(～現在)
- 3) 岐阜県歯科技工士試験委員(～現在)

牧田浩樹：

- 1) 岐阜県歯科技工士試験委員(平成 23 年度～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 岐阜大学：親知らずから「iPS 細胞」：中日新聞(2009 年 3 月 6 日)
- 2) 岐阜大学：親知らずから iPS 細胞作製：北日本新聞(2009 年 3 月 6 日)
- 3) 京都大学，岐阜大学：「遺伝子挿入のないヒト iPS 細胞のより簡便な樹立法の開発」：朝日新聞，京都新聞，産経新聞，中日新聞，日刊工業新聞，日本経済新聞，毎日新聞，読売新聞(2011 年 4 月 4 日)

12. 自己評価

評価

口腔病態学分野としての総合的評価として，概ね目標を達成していると考えている。

現状の問題点及びその対応策

活動を推進するために最も必要である資金面は，平成 15 年度以降現在まで連続して科学研究費 1,000 万以上の獲得目標を達成して来ている。また，研究材料（臨床材料）の集積も経時的に積み重なって来ている。これらの面においては，このままの努力を継続することにより確実に成果が得られると考えられる。しかしながら，科研費はその額・期間ともに研究を大きく展開するには小額かつ短期であり，更なる大型の外部研究資金を獲得する必要性も痛切に感じている。また，人材の確保・育成も重要な課題であ

り、新しい人材集めとともに現有人員のリサーチマインドを刺激することも非常に重要と考えている。さらに、学内外の研究室との連携も重要と考え、研究分担についての協議を重ねている。

今後の展望

現在、ヒト歯胚・歯髄からの組織幹細胞の集積・バンク化と iPS 細胞化を展開中であり、有望な結果を示しつつある。これを成長エンジンの柱の一つとして加え、関連分野との発展を模索している（大変有望な研究資源となる可能性が高く、進捗により多大なる成果を得ると期待している）。さらに、我々の教室のもうひとつのテーマであるヒト口腔がんの epigenetic factor の解析は、iPS 細胞の細胞初期化と深く関わっており、両者は相乗効果をもたらすものと期待している。

〔神経統御学講座〕

(1) 高次神経形態学分野

1. 研究の概要

高次神経形態学分野では, 2011年3月に伊藤和夫教授が定年退職し, 同年8月より山口瞬が分野主任教授に就任した。新たな体制では, 以下の研究を行っている。

- 1) 記憶・学習のメカニズムの解明
- 2) 蛍光蛋白質発現トランスジェニックマウス・ラットを用いた脳機能イメージング
- 3) 体内時計に関する研究
- 4) 視覚連合野神経回路の解明
- 5) 情動感覚連関のトレーサー法およびfMRIを用いた研究
- 6) 高次脳機能ネットワークを活性化する方策の開発

2. 名簿

教授： 山口 瞬 Shun Yamaguchi
准教授： 中村浩幸 Hiroyuki Nakamura
講師： 藤田雅文 Masafumi Fujita

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)

- 1) Nakamura H, Itoh K. Visual Cortex: Crosstalk and Concomitant Communications between Extrastriate Visual Areas. Neuroanatomy Research Advances. In: Flynn CE, Callaghan BR, ed. Nova Science Publishers, 2010:145-164.

総説 (和文)
なし

総説 (欧文)
なし

原著 (和文)
なし

原著 (欧文)

- 1) Takahashi T, Shirasu M, Shirasu M, Kubo K, Onozuka M, Sato S, Itoh K, Nakamura H. The locuscoeruleus projects to the mesencephalic trigeminal nucleus in rats. Neurosci Res. 2010;68: 103-106. IF 2.096
- 2) Shirasu M, Takahashi T, Yamamoto T, Itoh K, Sato S, Nakamura H. Direct projections from the central amygdaloid nucleus to the mesencephalic trigeminal nucleus in rats. Brain Res. 2011; 1400:19-30. IF 2.623

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：伊藤和夫, 研究分担者：中村浩幸；科学研究費補助金基盤研究(C)：ストレスにより惹起される口腔感覚異常の神経基盤の解明；平成20-22年度；4,810千円(2,860：1,170：780千円)
- 2) 研究代表者：中村浩幸, 研究分担者：白数真理, 白数正義, 伊藤和夫；生理学研究所磁気共鳴装置共同利用研究：視覚認識に基づく情動活動を実現している脳賦活部位の解明；平成21年度；100千円
- 3) 研究代表者：中村浩幸；京都大学霊長類研究所共同利用研究：マカクザル視覚皮質V2野から, 外側頭頂間溝野への直接投射の解明；平成21年度；48千円
- 4) 研究代表者：藤田雅文；科学研究費補助金基盤研究(C)：能動的視聴覚記憶トレーニングのもたらす知能向上効果の検証；平成20-22年度；4,420千円(2,470：780：1,170千円)
- 5) 研究代表者：中村浩幸, 研究分担者：伊藤和夫；生理学研究所磁気共鳴装置共同利用研究：視覚認識に基づく情動活動を実現している脳賦活部位の解明；平成22年度；130千円

- 6) 研究代表者：中村浩幸，研究分担者：定藤規弘；科学研究費補助金基盤研究(C)：ストレスに伴う脳活動は、噛み締めによって制御されるか？機能的MRIを用いた研究；平成22-24年度；3,903千円(2,103：700：1,100千円)

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：山口 瞬；科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業個人型研究(さきがけ)：脳内分子変化と電気生理学的・行動学的変化の統合解析；平成21-26年度；94,820千円(9,520：26,300：17,000：14,000：14,000：14,000千円)

3) 共同研究

- 1) 伊藤和夫，中村浩幸：顎・口腔機能に関わる三叉神経系の中枢機構の生後発達と可塑性を，標識法，fMRI等を用いて解析する；平成19-21年度；6,000千円(2,000：2,000：2,000千円)；神奈川歯科大学

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

伊藤和夫：

- 1) 日本解剖学会評議員(～平成22年度)

2) 学会開催

- 1) 日本解剖学会第70回中部支部学術集会(平成22年10月，岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

中村浩幸：

- 1) 第114回日本解剖学会総会・全国学術集会(平成21年3月，岡山，シンポジウム「最近の神経回路網解明の進歩」，演題「扁桃体と三叉神経中脳路核：情動感覚連関」招待シンポジスト)
2) The 32nd Annual Meeting of the Japanese Neuroscience Society (平成21年9月，Nagoya, Symposium：“The amygdala: at the crossroads of self and other” Chairperson & Invited Symposist)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

伊藤和夫：

- 1) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成22年度)

10. 報告書

- 1) 中村浩幸：視覚皮質 third tier visual cortex の視野再現とエリア区分：科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書：18-20(平成21年4月)
2) 中村浩幸：V3/V3A野に投射するV2野チトクロームオキシダーゼ構造の解明：霊長類研究所年報共同利用：20(平成21年9月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

医学部教育（神経解剖学，組織学）・全学教育および大学院教育においては，各教員とも多大の時間と労力を掛けて取り組んでおり，十分な貢献につながっていると思われる。研究面では，より一層の向上を目指したい。

現状の問題点及びその対応策

現状では大学院生の参加がなく，若い力が欠如している。分野が新体制になったのを機に，研究内容や基礎研究自体の面白さを積極的にアピールし，学内外から人材を集めるつもりである。

今後の展望

集めた人材には十分な教育を施し，世界で通用する研究者を育成していく。少数精鋭のチームで世界をリードする研究を目指す。

(2) 生理学分野

1. 研究の概要

起立時の動脈血圧調節における前庭系の役割を調べる。

2. 名簿

教授： 森田啓之 Hironobu Morita
講師： 安部 力 Chikara Abe

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 森田啓之, 安部 力. カラー図解 症状の基礎からわかる病態生理, 株式会社メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2011年.
- 2) 森田啓之, 安部 力. 心臓・循環の生理学, 東京; メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2011年.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 森田啓之. 宇宙医学と自律神経, Annual Review 神経 III. 各種疾患 10. 自律神経 2010年:251-258.

総説 (欧文)

- 1) Morita H, Abe C. Negative feedforward control of body fluid homeostasis by hepatorenal reflex. Hypertens Res. 2011;34:895-905.

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Abe C, Tanaka K, Awazu C, Morita H. Galvanic vestibular stimulation counteracts hypergravity-induced plastic alteration of vestibulo-cardiovascular reflex in rats. J Appl Physiol. 2009;107:1089-1094. IF 4.235
- 2) Tanaka K, Abe C, Awazu C, Morita H. Vestibular system plays a significant role in arterial pressure control during head-up tilt in young subjects. Auton Neurosci. 2009;148:90-96. IF 1.671
- 3) Abe C, Tashiro T, Tanaka K, Ogihara R, Morita H. A novel type of implantable and programmable infusion pump for small laboratory animals. J Pharmacol Toxicol Methods. 2009;59:7-12.
- 4) Bando N, Ymada H, Morita H, Tanaka K. Development of standing assist device based on the feature analysis of standing motion. Int Fed of Autom Cont. 2009;727-732. IF 0.890
- 5) Tanaka K, Abe C, Iwata C, Yamagata K, Murakami N, Tanaka M, Tanaka N, Morita H. Mobility of a gas-pressurized elastic gloves for extravehicular activity. Acta Astronautica. 2010;66:1039-1043. IF 0.612
- 6) Abe C, Shibata A, Iwata C, Morita H. Restriction of rear-up behavior-induced attenuation of vestibulo-cardiovascular reflex in rats. Neurosci Lett. 2010;484:1-5. IF 2.055
- 7) Abe C, Tanaka K, Iwata C, Morita H. Vestibular-mediated increase in central serotonin plays an important role in hypergravity-induced hypophagia in rats. J Appl Physiol. 2010;109:1635-1643. IF 4.235
- 8) Tanaka K, Tohnan M, Abe C, Iwata C, Yamagata K, Tanaka M, Tanaka N, Morita H. Development and evaluation of gas-pressurized elastic sleeves for extravehicular activity. Aviat Space Environ Med. 2010;81:671-676. IF 0.990
- 9) Iwata C, Abe C, Tanaka K, Morita H. Role of the vestibular system in the arterial pressure response to parabolic-flight-induced gravitational changes in human subjects. Neurosci Lett. 2011;495:121-125. IF 2.055
- 10) Matsuo O, Takahashi Y, Abe C, Tanaka K, Nakashima A, Morita H. Trial of integrated laboratory practice. Adv Physiol Educ. 2011;35:237-240. IF 1.382
- 11) Abe C, Iwata C, Shiina T, Shimizu Y, Morita H. Effect of daily linear acceleration training on the hypergravity-induced vomiting response in house musk shrew (*Suncus murinus*). Neurosci Lett. 2011;502:138-42. IF 2.055
- 12) Abe C, Kawada T, Sugimachi M, Morita H. Interaction between vestibulo-cardiovascular reflex and arterial baroreflex during postural change in rats. J Appl Physiol. 2011;111:1614-1621. IF 4.235
- 13) Seo Y, Satoh K, Watanabe K, Morita H, Takamata A, Ogino T, Murakami M. Mn-bishine: a low affinity chelate for manganese ion enhanced MRI. Magn Reson Med. 2011;65:1005-1012. IF 3.225
- 14) Seo Y, Takamata A, Ogino T, Morita H, Murakami M. Lateral diffusion of manganese in the rat brain determined by T₁ relaxation time measured by ¹H MRI. J Physiol Sci. 2011;61:259-266. IF 1.356

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：田中邦彦；科学研究費補助金基盤研究(C)：重力変化時の循環調節における内耳前庭系機能の解明と応用；平成 17-20 年度；2,800 千円(800：700：800：500 千円)
- 2) 研究代表者：森田啓之；科学研究費補助金基盤研究(C)：起立体性低下における前庭系の関与；平成 20-22 年度；4,680 千円(1,690：1,690：1,300 千円)
- 3) 研究代表者：安部 力；科学研究費補助金特別研究員奨励費：重力環境変化に対する生体適応・将来月面基地で生活するために；平成 20-21 年度；1,600 千円(800：800 千円)
- 4) 研究分担者：森田啓之；科学研究費補助金基盤研究(C)：視床下部における食欲中枢の MRI による 3 次元画像化に関する研究；平成 20 年度；650 千円
- 5) 研究代表者：田中邦彦；研究分担者：森田啓之；独立行政法人科学技術振興機構 シーズ発掘試験研究：高与圧かつ高可動性宇宙服要素の開発と検証；平成 21 年度；2,000 千円
- 6) 研究代表者：田中邦彦；研究分担者：青木光広；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)；経皮的内耳電気刺激が循環系に与える効果の評価と応用；平成 21 年度；1,000 千円
- 7) 研究分担者：森田啓之；科学研究費補助金基盤研究(C)：深部静脈血栓症を予防するための CPM を駆使した椅子の開発；平成 22 年度；2,000 千円
- 8) 研究代表者：安部 力；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：起立性低血圧における前庭-動脈血圧反射の定量的評価と飲水による改善方法；平成 23-25 年度；3,400 千円(1,400：1,000：1,000 千円)
- 9) 研究代表者：安部 力；公益財団法人ソルト・サイエンス研究財団一般公募研究助成：ダール食塩感受性高血圧発症ラットの飲水-昇圧反射ゲインと不整脈発症の相関関係；平成 23 年度；1,000 千円
- 10) 研究代表者：森田啓之；ライフサイエンス国際公募候補テーマ地上予備実験 JAXA：前庭-血圧反射の可塑性とその対策；平成 23 年度；1,441.44 千円
- 11) 研究分担者：森田啓之；科学研究費補助金基盤研究(C)：深部静脈血栓症を予防するための CPM を駆使した椅子の開発；平成 23 年度；2,000 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 森田啓之：車両内装品が人体に及ぼす影響；平成 18-21 年度；3,416 千円(710：836：935：935 千円)：トヨタ紡織(株)
- 2) 田中邦彦：次世代先端宇宙服要素技術の研究；平成 21 年度；566 千円：宇宙航空研究開発機構
- 3) 森田啓之：自動車用シート野長時間着座における疲労の解明；平成 22-23 年度；11,000 千円(5,500：5,500 千円)トヨタ自動車(株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 森田啓之，田中邦彦，後藤太郎，佐藤允男，中村久子：弾性着衣；平成 22 年度(特許第 4609923 号)
- 2) 山田宏尚，森田啓之，田中邦彦：起立補助椅子；平成 22 年度(特許公開 2010-1549)
- 3) 森田啓之，田中邦彦，安部 力，小栗成人：フットレスト装置；平成 22 年度(特許公開 2010-83300)

6. 学会活動

1) 学会役員

森田啓之：

- 1) 日本病態生理学会理事(~現在)
- 2) 日本生理学会評議員(~現在)
- 3) 日本航空宇宙環境医学会理事(平成 21 年 11 月~現在)

田中邦彦：

- 1) 日本生理学会評議員(~現在)
- 2) 日本病態生理学会評議員(~現在)
- 3) 日本宇宙航空環境医学会評議員(~現在)

- 4) 加速度脈波・脈波研究会世話人(～現在)

安部 力：

- 1) 日本病態生理学会評議員(平成 22 年 1 月～現在)
- 2) 日本生理学会評議員(平成 23 年 3 月～現在)

2) 学会開催

森田啓之：

- 1) 第 55 回日本航空宇宙環境医学会大会(平成 21 年 11 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森田啓之：

- 1) 30th.International Gravitational Physiology(2009.05, Xian, Symposium: Role of vestibular system in arterial pressure control during posture transition in human ; Symposiast)
- 2) 30th.International Gravitational Physiology(2009.05, Xian, Symposium: Arterial pressure response to short period of microgravity in rats ; Chairman, Symposiast)
- 3) 第 16 回日本航空医療学会総会(平成 21 年 11 月, 岐阜, 特別講演「宇宙環境下での環境調節」演者)
- 4) 第 56 回日本宇宙航空環境医学会大会(平成 22 年 11 月, 所沢, 「前庭-血圧反射の可塑性とその対策: Plastic alteration of vestibulo-cardiovascular reflex and its countermeasure」シンポジスト)

田中邦彦：

- 1) 第 79 回日本衛生学会(平成 21 年 3 月, 東京, シンポジウム「宇宙医学における衛生学の貢献」シンポジスト)
- 2) 第 24 回マイクログラビティ応用学会(平成 21 年 10 月, 那覇, 特別講演「可動性の高い宇宙服の実現へ向けて」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

安部 力：

- 1) 第 12 回 Neurocardiology workshop 奨励賞(平成 23 年度)

9. 社会活動

森田啓之：

- 1) ソルトサイエンス研究財団研究運営審議会委員(～現在)
- 2) 日本学術振興科学研究費委員会専門委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 田中邦彦：重力変化時の循環調節における内耳前庭系機能の解明と応用：平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)実績報告書(平成 21 年 4 月)
- 2) 田中邦彦：次世代先端宇宙服研究研究成果報告書(平成 21 年 3 月)

11. 報道

- 1) 田中邦彦：宇宙長期滞在を安全かつ快適に－衛生学の研究アプローチに期待：Medical Tribune (2009 年 6 月 25 日)

12. 自己評価

評価

生理学教室の目標である、①学会発表、②外部資金獲得、③論文発表を達成することができた。

現状の問題点及びその対応策

特に問題点は見当たらない。

今後の展望

①学会発表, ②外部資金獲得, ③論文発表の発展に努めることである。

(3) スポーツ医科学分野

1. 研究の概要

異なる環境下において運動を行うことにより、さまざまな生理的変化をもたらす。それらの変化についての研究を行っている。

おもな研究テーマは

- 1) 近赤外線分光法を用いて、高地または低酸素環境における運動が筋内酸素動態に及ぼす影響
- 2) 運動が自律神経に及ぼす影響
- 3) 高齢者の平衡機能に関する研究
- 4) 超音波装置の画像と電気生理的検査の関連性での検討を行い、スポーツや疾患による神経の形態学的変化について研究

2. 名簿

教授： 松岡敏男 Toshio Matsuoka
講師： 長崎幸雄 Sachio Nagasaki
助教： 渡邊恒夫 Tuneo Watanabe

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

- 1) Watanabe T. Sonographic Imaging of the Peripheral Nerves in Patients with Type 2 Diabetes Mellitus In: Zimering M. Recent Advances in the Pathogenesis, Prevention and Management of Type 2 Diabetes and its Complications. Croatia: INTECH. 2011:15-32.

総説（和文）

- 1) 渡邊恒夫. 末梢神経の超音波検査—超音波検査による糖尿病患者の正中神経計測の有用性について, 超音波テク 2009年; 21巻: 105-110.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 川瀬晴美, 加藤義弘, 横山明孝, 後藤 浩, 松岡敏男, 河合直樹, 久野保夫, 青木 靖, 小林 博. 高校1年生の心電図所見と中学時代の運動歴との関係, 医学書院 2009年; 57巻: 217-219.
- 2) 鈴木 壮, 岸 順治, 黒川淳一, 松岡敏男. スポーツ競技者の QOL(Quality of Life)に関する研究—QOLA尺度の作成, 及びその年代差, 性差との関係—, 臨床心理身体運動学研究 2009年; 11巻: 3-16.
- 3) 松岡敏男, 加藤義弘, 渡邊恒夫, 宮本 敬, 川地慎一, 杉森弘幸, 山田英徳, 長崎幸雄, 川瀬晴美, 藤本 元, 小栗和雄. 中・高齢者の健康増進を目的とした低酸素環境下の運動効果について, 登山医学 2009年; 29巻: 187-192.
- 4) 小栗和雄, 星川佳広, 富樫健二, 春日晃章, 館 俊樹, 藤井勝紀, 松岡敏男. メタボリックシンドロームを合併した肥満小児における動脈硬化の危険性と体脂肪分布, 発育発達研究 2010年; 46巻: 1-10.
- 5) 藪本 保, 西村正明, 岩越康真, 渡邊雄介, 菱川明季, 福富 悌, 古田善伯, 今井 一, 松岡敏男. 脳性麻痺児・者におけるスポーツ参加への意識調査について, 日本障害者スポーツ学会誌 2010年; 18巻: 38-42.
- 6) 横山明孝, 加藤義弘, 川瀬晴美, 牛越博昭, 後藤 浩, 松岡敏男. 高校男子ラグビー選手の心形態, 臨床スポーツ医学 2010年; 27巻: 451-456.
- 7) 黒川淳一, 杉浦 琢, 堀 義治, 井上真人, 松岡敏男. 全寮生活下にある高校生女子運動部員の精神健康度に関する縦断調査(1), スポーツ精神医学 2010年; 7巻: 24-33.
- 8) 照井裕美, 川瀬晴美, 金森寛充, 横山明孝, 加藤義弘, 松岡敏男, 清島 満. 呼吸機能検査中の不整脈の検討, 臨床検査 2011年; 60巻: 767-772.

原著（欧文）

- 1) Watanabe T, Ito H, Morita A, Uno Y, Nishimura T, Kawase H, Kato Y, Matsuoka T, Takeda J, Seishima M. Sonographic evaluation of the median nerve in diabetic patients- comparison with nerve conduction studies. J Ultrasound Med. 2009;28:727-734.
- 2) Yabumoto T, Fukutomi O, Watabnabe Y, Furuta Y, Imai H, Matsuoka T. Aceleed plethysmography assessment of the autonomous nervous system and activities to build self support in children with

IF 1.307

cerebral palsy. J Educ Health Sci. 2009;55:155-160.

- 3) Watanabe T, Ito H, Sekine A, Katano Y, Nishimura T, Kato Y, Takeda J, Seishima M, Matsuoka T. Sonographic evaluation of the peripheral nerve in diabetic patients: The relationship among nerve conduction studies, echo intensity, and cross sectional area. J Ultrasound Med. 2010;29:697-708. IF 1.307

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

松岡敏男：

- 1) 日本教育医学会評議員(～現在)
- 2) 日本登山医学会評議員(～現在)

長崎幸雄：

- 1) 日本生理学会評議員(～現在)
- 2) 日本運動生理学会評議員(～現在)
- 3) 日本教育医学会評議員(～現在)

渡邊恒夫：

- 1) 東海エコーカンファレンス役員(～現在)

2) 学会開催

松岡敏男：

- 1) 第7回 2009年岐阜アスレティックリハビリテーションフォーラム開催(平成21年2月, 岐阜)
- 2) 第8回 2010年岐阜アスレティックリハビリテーションフォーラム開催(平成22年2月, 岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

松岡敏男：

- 1) 平成21年高齢者交通安全大学校学長等研修会(平成21年4月, 多治見, 講演「高齢者の運動機能」演者)
- 2) 全国病理学療法学会(平成21年9月, 岐阜, 特別講演「老年期の機能と障害」演者)
- 3) 平成21年高齢者交通安全大学校学長等研修会(平成21年10月, 岐阜, 講演「高齢者の運動機能」演者)
- 4) 平成22年岐阜市老人クラブ連合会(平成22年3月, 岐阜, 講演「高齢者に必要な体力とは」演者)
- 5) 日本健康行動科学会第10回学術大会(平成23年10月, シンポジウム4「高所での運動・トレーニング」演者)

長崎幸雄：

- 1) 第60回岐阜県耳鼻咽喉科学会岐阜地区耳鼻咽喉科研修会(平成22年5月, 岐阜, 講演「立位時の身体動揺の新たな評価方法について」演者)

加藤義弘：

- 1) 第 29 回登山医学会(平成 21 年 5 月, シンポジウム「遭難事故防止への山岳診療所の役割－奥穂高診療所の歩みと将来展望－」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

松岡敏男：

- 1) 岐阜県体育協会スポーツ医科学委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜県トレーニング科学センター高地トレーニングスーパーバイザー(～平成 22 年)
- 3) 岐阜県体育協会評議員(～現在)
- 4) 日本ラグビーフットボール協会事業委員会委員(～現在)
- 5) 関西ラグビーフットボール協会評議員(～現在)
- 6) 岐阜県ラグビーフットボール協会理事長(～現在)
- 7) 岐阜アスレティックリハビリテーション研究会会長(～現在)
- 8) 岐阜東洋医学研究会世話人(～現在)
- 9) 日本学術振興科学研究費委員会専門委員 2 段審査員(平成 21～22 年)

長崎幸雄：

- 1) 岐阜県学生柔道連盟理事(～現在)
- 2) 岐阜県柔道協会医科学委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 長崎幸雄：姿勢制御, 脳の働き解明：岐阜新聞(2010 年 5 月 11 日)

12. 自己評価

評価

教育に関しては共通教育, 医学部教育に多大な貢献をしている。またテュトリアルコースも担当しており, 問題はないと思われる。

外部資金に関しては科学研究費はこのところ獲得できておらず, 目標が達成できていない。

大学の活性化経費等にも積極的に応募しているが獲得できていない。さらなる努力が必要かも知れない。奨学寄附金に関しては毎年同じところから頂いているが, 増加するまでには至っていない。

英文の論文数は以前より増加し, この点は改善されてきたように思える。

大学院生はここ数年入学しているが社会人入学生が多く, 余り指導をできておらず, 論文も書けていない。今後はしっかりした指導体制の下で指導することが必要と思われる。

現状の問題点及びその対応策

スタッフが少ないことである。奨学寄附金が多ければ, 臨時雇用することも可能であるが, その資金は不可能に近い。学振の外国人特別研究者などに応募をしているが, 人材確保は難しい。大学院生は昼間コースの人材確保(現在は 1 人)が重要であると思われるがなかなか該当者がいないのが現状である。

今後の展望

ここ数年はスポーツ医科学分野の研究はスポーツ選手の競技力向上を目指す研究から高齢者を対象としての運動による日常生活の健康増進, 障害・疾病予防に関する研究を進めており, 予防医学におけるスポーツ医科学の重要性を模索している。さらには社会的貢献すべき研究を進めていかなければと考えている。

(4) 神経内科・老年学分野

1. 研究の概要

- 1) メタロチオネイン (MT) の筋萎縮性側索硬化症 (ALS) 等神経変性疾患治療薬としての開発: MT-III cDNA 組み込みアデノウイルスの ALS モデルマウス筋肉内投与で、生存期間を有意に延長させ ALS 治療薬としての可能性を示した。ALS 患者の iPS 細胞の作製, MT の結合蛋白の検索, 結合蛋白との調節を利用した創薬の開発, 論理的創薬法を用いた低分子化合物による薬剤開発について共同研究を行っている。さらに MT の脳虚血に対する神経保護効果についても明らかにした。
- 2) ファール病 (特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症) の診断方法の確立と治療法の開発: 疫学的調査により家系例も含め症例の集積が進み, 病因遺伝子の検索に向けて準備を進めている。髄液蛋白のプロテオーム解析, ファール病患者の iPS 細胞作製について共同研究を行っている。
- 3) 自己免疫性神経疾患の病態機序の解明と診断・治療法の開発: 自己免疫性神経疾患患者血清・髄液を用いたプロテオーム解析による抗神経抗体検索システムを確立し, 疾患特異的な新たな抗体と認識抗原を同定した。また, 血管の透過性や感作リンパ球の侵入部として重要なヒト大脳微小血管内皮細胞に対する抗体検索を, 自己免疫介在性脳症や広範な大脳白質病変をもつ患者などで行い, 同定した自己抗体の特異性や機能の解析を行っている。
- 4) 神経変性疾患の自律神経系の機能障害に関する研究: ^{13}C 呼気試験法を用いた消化管機能検査をパーキンソン病はじめ神経変性疾患において行い, 疾患特異的自律神経系の障害病態を明らかにした。
- 5) IT 機器を活用した難病心のケアシステム構築の研究: ALS, パーキンソン病の患者さんの QOL 上を目指し, 多職種と共同で疾患に関する最新情報, 写真等の配信, 患者相互に情報交換を支援してきた。
- 6) 重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究: 厚労科研「重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班」に参加し, 重症難病患者の災害時支援の調査と啓発, 「在宅人工呼吸器装着患者の災害時支援事業」の支援, 難病患者のコミュニケーション支援の調査と支援を推進してきた。当院及び当科では難病拠点病院として重症難病対策を進めてきた。
- 7) スモンに関する調査研究: 厚労科研「スモンに関する調査研究班」に参加し, 岐阜県では保健所検診と訪問検診を行ってきた。スモンの風化に対して医療系学生のスモンに対する認識調査を行い啓発した。

2. 名簿

教授:	犬塚 貴	Takashi Inuzuka
臨床准教授:	木村暁夫	Kimura Akio
併任講師:	林 祐一	Yuichi Hayashi
臨床講師:	香村彰宏	Akihiro Koumura
臨床講師:	山田 恵	Megumi Yamada
医員:	原田斉子	Naoko Harada
医員:	吉倉延亮	Nobuaki Yoshikura

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 犬塚 貴. PSP の診断に有用な画像変化: 水野美邦編. パーキンソン病診療, 東京: 中外医学社; 2009 年: 46-48.
- 2) 田中優司, 犬塚 貴. 脂溶性ビタミン欠乏症治療のスタンダード: 岡本幸市, 棚橋紀夫, 水澤英洋編. EBM 神経疾患の治療 2009-2010, 東京: 中外医学社; 2009 年: 381-388.
- 3) 田中優司, 犬塚 貴. 傍腫瘍性神経症候群: 鈴木則宏編. 神経疾患・診療ガイドライン-最新の治療指針-, 東京: 総合医学社; 2009 年: 157-162.
- 4) 犬塚 貴. 意識障害: 金澤一郎, 永井良三編. 今日の診断指針第 6 版, 東京: 医学書院; 2010 年: 114-118.
- 5) 田中優司, 犬塚 貴. 悪性腫瘍に伴う神経障害: 田村 晃, 松谷雅生, 清水輝夫編. EBM に基づく脳神経疾患の基本治療指針改訂第 3 版, 東京: メジカルビュー社; 2010 年: 501-508.
- 6) 田中優司, 犬塚 貴. 薬物に伴う神経障害: 田村 晃, 松谷雅生, 清水輝夫編. EBM に基づく脳神経疾患の基本治療指針改訂第 3 版, 東京: メジカルビュー社; 2010 年: 625-632.
- 7) 香村彰宏, 保住 功. ふるえ: 森田浩之編. いきなり名医! 見分けが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010 年: 60-64.
- 8) 林 祐一, 保住 功. 物忘れ: 森田浩之編. いきなり名医! 見分けが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010 年: 65-70.
- 9) 犬塚 貴. 歩行障害と動作緩慢: 日本老年医学会編. 健康長寿診療ハンドブック, 東京: メディカルビュー社; 2011 年: 25-29.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 犬塚 貴. 傍腫瘍性辺縁系脳炎, 精神治療 2009年; 4巻: 315-320.
- 2) 犬塚 貴. 老化による身体的な変化, Modern Physician 2009年; 29巻: 1379-1381.
- 3) 犬塚 貴. 高齢期のパーキンソン病と類縁疾患, 老年医学 2009年; 48巻: 945-946.
- 4) 犬塚 貴, 栗山 勝, 藤田信也, 岩本俊彦. 高齢者のパーキンソン病-診断と治療-, 老年医学 2009年; 48巻: 1035-1045.
- 5) 安藤 喬. 高齢者の救急医療 make a successful landing その時医師にできること 高齢者をめぐる周辺状況 地域で診る高齢者 現状と問題点, Modern Physician 2009年; 29巻: 1483-1487.
- 6) 木村暁夫, 犬塚 貴. 膠原病における新たな抗神経抗体の検索, 日内会誌 2010年; 99巻: 1865-1870.
- 7) 犬塚 貴, 松田正之, 山田光則, 渡辺幸夫, 山田 恵. 膠原病に伴う神経障害の診療, 日内会誌 2010年; 99巻: 1878-1891.
- 8) 田中優司. 一般臨床における神経症候の診かた, 第30回岐阜県医師会メディカルセミナー -神経疾患-, 岐阜県医師会医学雑誌 2010年; 23巻: 23-32.
- 9) 林 祐一, 犬塚 貴. 後期高齢者診療ガイド各論: 後期高齢者に多い疾患 パーキンソン症候群, 治療 2010年; 92巻: 50-52.
- 10) 犬塚 貴. 老年症候群の見方 認知症, 日老会誌 2010年; 47巻: 534-536.
- 11) 林 祐一, 犬塚 貴. 認知症のCT・MRI診断, Mebio 2011年; 28巻: 77-83.
- 12) 林 祐一, 犬塚 貴. 細胞内抗原を認識する自己抗体が関連する傍腫瘍性神経症候群, Medical Science Digest 2011年; 37巻: 136-139.
- 13) 林 祐一, 犬塚 貴. 神経疾患 common disease の診かた 腫瘍および関連する神経障害, Medicina 2011年; 48巻: 1364-1367.

総説 (欧文)

- 1) Misasi R, Hozumi I, Inuzuka T, Capozzi A, Mattei V, Kuramoto Y, Shimeno H, Soeda S, Azuma N, Yamauchi T, Hiraiwa M. Biochemistry and neurobiology of prosaposin: a potential therapeutic neuro-effector. Cent Nerv Syst Agents Med Chem. 2009;9:119-131.

原著 (和文)

- 1) 櫻井岳郎, 田中優司, 木村暁夫, 保住 功, 犬塚 貴. 胃腸炎後に発症した抗GQ1b抗体陽性の小脳失調を伴わない急性一側性外転神経麻痺の1例, 神経内科 2009年; 71巻: 514-516.
- 2) 櫻井岳郎, 木村暁夫, 山田 恵, 林 祐一, 田中優司, 保住 功, 犬塚 貴. 特発性中脳水道狭窄症による閉塞性水頭症に対するV-Pシャント術の1年後から急速に進行するparkinsonismを呈した1例, 脳と神経 2010年; 62巻: 527-531.
- 3) 矢野大仁, 梅村 淳, 八十川雄図, 林 祐一, 中山則之, 大江直行, 野村悠一, 保住 功, 犬塚 貴, 岩間亨. GPi-DBSが奏功したハンチントン病の1例, 機能的脳神経外科 2010年; 49巻: 120-124.
- 4) 林 祐一, 山田 恵, 香村彰宏, 吉倉延亮, 原田斉子, 木村暁夫, 田中優司, 保住 功, 犬塚 貴. 終末期の筋萎縮性側索硬化症に対する呼吸苦緩和への取り組み, 岐阜県内科医会雑誌 2011年; 25巻: 85-89.

原著 (欧文)

- 1) Tanaka Y, Kato T, Nishida H, Araki H, Murase M, Nagaki M, Moriwaki H, Inuzuka T. Is there difference in gastric emptying of Parkinson's disease patients under long-term l-dopa therapy between with and without motor fluctuations? : An analysis using the 13C-acetate breath test. J Neurol. 2009;256:1972-1976. IF 3.853
- 2) Suzuki Y, Ohta K, Itoh M, Sumitomo YS, Mitsuda T, Ueda M, Hayakawa-Yano Y, Li S, Hida Y, Inuzuka T, Nakagawa T. An alternative spliced mouse presenilin-2 mRNA encodes a novel γ -secretase inhibitor. FEBS Lett. 2009;583:1403-1408. IF 3.601
- 3) Koumura A, Kakefuda K, Honda A, Ito Y, Tsuruma K, Shimazawa M, Uchida Y, Hozumi I, Satoh M, Inuzuka T, Hara H. Metallothionein-3 deficient mice exhibit abnormalities of psychological behaviors. Neurosci Lett. 2009;467:11-14. IF 2.055
- 4) Koumura A, Hamanaka J, Shimazawa M, Honda A, Tsuruma K, Uchida Y, Hozumi I, Satoh M, Inuzuka T, Hara H. Metallothionein-III knockout mice aggravates the neuronal damage after transient focal cerebral ischemia. Brain Res. 2009;1292:148-154. IF 2.623
- 5) Hashimoto K, Hayashi Y, Inuzuka T, Hozumi I. Exercise induces metallothioneins in mouse spinalcord. Neuroscience. 2009;29:244-251. IF 3.215
- 6) Hashimoto K, Honda A, Hayashi Y, Inuzuka T, Satoh M, Hozumi I. DNA microarray analysis of transcriptional responses of mouse spinal cords to physical exercise. J Toxicol Sci. 2009;34:445-448. IF 1.893
- 7) Ito Y, Yamada M, Tanaka H, Aida K, Tsuruma K, Shimazawa M, Hozumi I, Inuzuka T, Takahashi H, Hara H. Involvement of CHOP, an ER-stress apoptotic mediator, in both human sporadic ALS and ALS model mice. Neurobiol Dis. 2009;36:470-476. IF 5.121
- 8) Park YE, Hayashi YK, Goto K, Komaki H, Hayashi Y, Inuzuka T, Noguchi S, Nonaka I, Nishino I.

- Nuclear changes in skeletal muscle extend to satellite cells in autosomal dominant Emery-Dreifuss muscular dystrophy/limb-girdle muscular dystrophy 1B. *Neuromuscul Disord.* 2009;19:29-36. IF 2.764
- 9) Nonaka Y, Koumura A, Hyakkoku K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. Combination treatment with normobaric hyperoxia and cilostazol protects mice against focal cerebral ischemia-induced neuronal damage better than each treatment alone. *J Pharmacol Exp Ther.* 2009;330:13-22. IF 4.017
- 10) Tanaka Y, Kimura K, Kawachi I, Inuzuka T. No relapse of neuromyelitis optica during drug-induced B-lymphopenia with hypo-gammaglobulinemia. *Neurology.* 2010;75:1745-1747. IF 8.017
- 11) Kimura A, Kanoh Y, Sakurai T, Koumura A, Yamada M, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. Antibodies in patients with neuropsychiatric systemic lupus erythematosus. *Neurology.* 2010;74:1372-1379. IF 8.017
- 12) Kimura A, Sakurai T, Koumura A, Yamada M, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Yoshino H, Yuasa T, Inuzuka T. Motor-dominant chronic inflammatory demyelinating polyneuropathy. *J Neurol.* 2010; 257:621-629. IF 3.853
- 13) Kimura A, Sakurai T, Koumura A, Yamada M, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Tanaka R, Takemura M, Seishima M, Inuzuka T. High prevalence of autoantibodies against phosphoglycerate mutase 1 in patients with autoimmune central nervous system diseases. *J Neuroimmunol.* 2010;219:105-108. IF 2.901
- 14) Hayashi Y, Kato T, Tanaka Y, Yamada M, Koumura A, Kimura A, Hozumi I, Inuzuka T. Markedly ring-enhanced optic nerves due to metastasis of signet-ring cell gastric carcinoma. *Intern Med.* 2010; 49:517. IF 1.037
- 15) Hayashi Y, Kimura A, Watabane N, Yamada M, Sakurai T, Tanaka Y, Hozumi I, Inuzuka T. Seiral monitoring of basal metabolic rate for therapeutic evaluation in an Isaacs' syndrome patient with chronic fluctuating symptoms. *Intern Med.* 2010;49:475-477. IF 1.037
- 16) Nozaki I, Hamaguchi T, Sanjo N, Noguchi-Shinohara M, Sakai K, Nakamura Y, Sato T, Kitamoto T, Mizusawa H, Moriwaka F, Shiga Y, Kuroiwa Y, Nishizawa M, Kuzuhara S, Inuzuka T, Takeda M, Kuroda S, Abe K, Murai H, Murayama S, Tateishi J, Takumi I, Shirabe S, Harada M, Sadakane A, Yamada M. Prospective 10-year surveillance of human prion diseases in Japan. *Brain* 2010;133:3043-3057. IF 9.230
- 17) Honda A, Komuro H, Shimada A, Hasegawa T, Seko Y, Nagase H, Hozumi I, Inuzuka T, Hara H, Fujiwara Y, Satoh M. Attenuation of cadmium-induced testicular injury in metallothionein-III null mice. *Life Sci.* 2010;87:545-550. IF 2.451
- 18) Lancaster E, Lai M, Peng X, Hughes E, Constantinescu R, Raizer J, Friedman D, Skeen MB, Grisold W, Kimura A, Ohta K, Iizuka T, Guzman M, Graus F, Moss SJ, Balice-Gordon R, Dalmau J. Antibodies to the GABA(B) receptor in limbic encephalitis with seizures: case series and characterisation of the antigen. *Lancet Neurol.* 2010;9:67-76. IF 21.659
- 19) Honda A, Komuro H, Nagase H, Hozumi I, Inuzuka T, Hara H, Fujiwara Y, Satoh M. D Microarray analysis of the liver in metallothionein-III null mice treated with cadmium. *J Toxicol Sci.* 2010;35: 271-273. IF 1.893
- 20) Honda A, Komuro H, Hasegawa T, Seko Y, Shimada A, Nagase H, Hozumi I, Inuzuka T, Hara H, Fujiwara Y, Satoh M. Resistance of metallothionein-III null mice to cadmium-induced acute hepatotoxicity. *J Toxicol Sci.* 2010;35:209-215. IF 1.893
- 21) Hozumi I, Kohmura A, Kimura A, Hasegawa T, Honda A, Hayashi Y, Hashimoto K, Yamada M, Sakurai T, Tanaka Y, Satoh M, Inuzuka T. High levels of copper, zinc, iron and magnesium but not calcium, in the CSF of patients with 'Fahr's disease'. *Case Report in Neurology* 2010;2:46-51.
- 22) Tanaka Y, Hayashi Y, Kato J, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Kimura A, Hozumi I, Hatano Y, Hirose Y, Takami T, Nakamura H, Kawahara S, Tsurumi H, Moriwaki H, Inuzuka T. Diffuse skeletal muscles uptake of [(18)f] fluorodeoxyglucose on positron emission tomography in primary muscle peripheral T-cell lymphoma. *Intern Med.* 2011;50:2021-2024. IF 1.037
- 23) Hashimoto K, Hayashi Y, Watabe K, Inuzuka T, Hozumi I. Metallothionein-III prevents neuronal death and prolong life span in amyotrophic lateral sclerosis model mice. *Neuroscience* 2011;189:293-298. IF 3.215
- 24) Hozumi I, Hasegawa T, Honda A, Ozawa K, Hayashi Y, Hashimoto K, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Kimura A, Tanaka Y, Satoh M, Inuzuka T. Patterns of levels of biological metals in CSF differ among neurodegenerative diseases. *J Neurol Sci.* 2011;303:95-99. IF 2.167
- 25) Sakurai T, Kimura A, Yamada M, Koumura A, Hayashi Y, Tanaka Y, Hozumi I, Inuzuka T. Identification of antibodies as biological markers in serum from multiple sclerosis patients by immunoproteomic approach. *J Neuroimmunol.* 2011;233:175-180. IF 2.901
- 26) Tanaka Y, Kato T, Nishida H, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Araki H, Murase M, Nagaki M, Moriwaki H, Inuzuka T. Is there a delayed gastric emptying of patients with early-stage, untreated Parkinson's disease? An analysis using the 13C-acetate breath test. *J Neurol.* 2011;258:421-426. IF 3.853
- 27) Yoshida T, Sasayama H, Mizuta I, Okamoto Y, Yoshida M, Riku Y, Hayashi Y, Yonzuzu T, Tanaka Y, Ohnari K, Okuda S, Aiba I, Nakagawa M. Glial fibrillary acidic protein mutations in adult-onset Alexander disease: clinical features observed in 12 Japanese patients. *Acta Neurol Scand.*

- 2011;124:104-108. IF 2.153
- 28) Tanaka Y, Yoshikura N, Harada N, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Moriwaki H, Inuzuka T. Neuromyelitis optica in Japanese sisters. Intern Med. 2011;50:2829-2832. IF 1.037
- 29) Koumura A, Hamanaka J, Kawasaki K, Tsuruma K, Shimazawa M, Hozumi I, Inuzuka T, Hara H. Fasudil and ozagrel in combination show neuroprotective effects on cerebral infarction after murine middle cerebral artery occlusion. J Pharmacol Exp Ther. 2011;338:337-344. IF 4.107
- 30) Ohta K, Mizuno A, Li S, Itoh M, Ueda M, Ohta E, Hida Y, Wang MX, Furoi M, Tsuzuki Y, Sobajima M, Bohmoto Y, Fukushima T, Kobori M, Inuzuka T, Nakagawa T. Endoplasmic reticulum stress enhances γ -secretase activity. Biochem Biophys Res Commun. 2011;416:362-366. IF 2.595

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：保住 功；科学研究費補助金基盤研究(B)：老化、脳虚血およびメタボリック症候群におけるメタロチオネインの役割と創薬の研究；平成 19-21 年度；14,600 千円(9,800：2,700：2,100 千円)
- 2) 研究代表者：犬塚 貴；科学研究費補助金基盤研究(C)：プロテオミクスによる筋無力症・筋炎特異的自己抗体の検索とバイオマーカーの確立；平成 20-22 年度；3,400 千円(1,600：800：1,000 千円)
- 3) 研究代表者：木村暁夫；科学研究費補助金基盤研究(C)：多発性硬化症における大脳膜蛋白に対する新規自己抗体の検索とバイオマーカーの確立；平成 20-22 年度；3,500 千円(2,000：700：800 千円)
- 4) 研究代表者：木村暁夫；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：自己免疫介在性脳炎に関する新規抗神経抗体・抗血管内皮抗体の同定と診断・治療への応用；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,400；1,300；1,300 千円)
- 5) 研究代表者：林 祐一；科学研究費補助金若手研究(B)：筋萎縮性側索硬化症モデルマウスに対する運動療法と抗酸化物質の併用治療効果について；平成 19-21 年度；3,200 千円(1,600：700：900 千円)
- 6) 研究代表者：林 祐一；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：運動により変化するガングリオンド変換酵素種の同定とアルツハイマー病への応用；平成 23-25 年度；2,900 千円(1,000：1,000：900 千円)
- 7) 研究代表者：木村暁夫；厚生労働省科学研究費補助金こころの健康科学研究事業：プロテオーム解析を用いた高齢認知症患者における大脳白質病変と抗血管内皮細胞抗体の関連性に関する研究；平成 21-23 年度；11,500 千円(4,000：3,500：4,000 千円)
- 8) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班【糸山班】；平成 20-22 年度；2,800 千円(800：1,000：1,000 千円)
- 9) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：希少性難治性疾患患者に関する医療の向上及び患者支援のあり方に関する研究班【西澤班】；平成 23-25 年度；2,100 千円(700：700：700 千円)
- 10) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：スモンに関する研究班【小長谷班】；平成 20-22 年度；2,100 千円(700：700：700 千円)
- 11) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：スモンに関する研究班【小長谷班】；平成 23-25 年度；2,100 千円(700：700：700 千円)
- 12) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班【水澤班】；平成 20-21 年度；2,000 千円(1,000：1,000 千円)
- 13) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究班【水澤班】；平成 22-24 年度；3,000 千円(1,000：1,000 千円)
- 14) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金こころの健康科学研究事業：急性脳炎のグルタミン酸受容体自己免疫病態の解明から新たな治療法確立に向けた研究班(急性脳炎の自己免疫・治療研究班)【高橋班】；平成 20-22 年度；3,000 千円(1,000：1,000：1,000 千円)
- 15) 研究分担者：犬塚 貴；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：フェール病(特発性 両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の分子病態の解明【保住班】；平成 23 年度；1,000 千円
- 16) 研究代表者：保住 功；平成 21 年度岐阜大学技術交流研究会企画応募 東海メタロチオネイン研究

- 会；平成 21 年度；150 千円
- 17) 研究代表者：保住 功；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：メタロチオネインおよびメタルバイオサイエンス；平成 21 年度；1,500 千円
 - 18) 研究代表者：林 祐一；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：下位運動ニューロン逆行輸送系を用いた筋萎縮性側索硬化症モデルマウスへの遺伝子治療；平成 21 年度；1,000 千円
 - 19) 研究代表者：保住 功；厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：フェール病(特発性 両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の分子病態の解明；平成 22 年度；15,600 千円
 - 20) 研究代表者：保住 功；平成 22 年度新潟大学脳研究所共同利用・共同研究 プロジェクト型共同研究：神経変性疾患におけるメタロチオネイン関連蛋白と重金属の作用機序の解明と創薬への応用；平成 22 年度；1,000 千円
 - 21) 研究代表者：林 祐一；三井住友海上福祉財団研究助成：運動療法によるβアミロイド凝集抑制効果の分子メカニズムの解明と認知症予防法への応用；平成 22 年度；1,400 千円
 - 22) 研究代表者：保住 功；平成 22 年度岐阜大学技術交流研究会企画応募：東海メタロチオネイン研究会；平成 22 年度；150 千円
 - 23) 研究代表者：保住 功；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：筋萎縮性側索硬化症(ALS)の病態解明と治療薬開発；平成 22 年度；2,000 千円
 - 24) 研究代表者：木村暁夫；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：アルツハイマー型認知症の早期診断マーカーの確立を目的とした疾患特異的抗神経抗体の同定；平成 22 年度；1,000 千円
 - 25) 研究代表者：香村彰宏；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：マウス中大脳動脈閉塞(MCAO)モデルに対するメタロチオネイン導入アデノウイルスベクターの神経保護作用の検討；平成 22 年度；1,000 千円
 - 26) 研究代表者：木村暁夫；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：アルツハイマー型認知症の早期診断マーカーの確立を目的とした疾患特異的抗神経抗体の同定；平成 23 年度；1,000 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

犬塚 貴：

- 1) 日本神経学会代議員(～現在)
- 2) 日本神経学会教育委員(～現在)
- 3) 日本内科学会評議員(～現在)
- 4) 日本老年医学会監事(～現在)
- 5) 日本老年医学会代議員(～平成 22 年度)
- 6) 日本老年医学会教育委員(～現在)
- 7) 日本神経免疫学会理事(～現在)
- 8) 日本神経治療学会評議員(～現在)
- 9) 日本神経感染症学会評議員(～現在)
- 10) 日本難病ネットワーク研究会世話人(～現在)

保住 功：

- 1) 日本神経学会評議員(～現在)
- 2) 日本老年医学会代議員(～現在)
- 3) 日本老年医学会事例検討委員(～現在)
- 4) 日本内科学会病歴要約評価委員(～現在)
- 5) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)

- 6) メタロチオネイン研究会幹事(～現在)
- 7) 日本神経治療学会評議員(～現在)

2) 学会開催

犬塚 貴：

- 1) 平成 20 年度日本神経学会東海北陸地区生涯教育講演会(平成 21 年 3 月, 名古屋)
- 2) 平成 21 年度日本神経学会東海北陸地区生涯教育講演会(平成 22 年 3 月, 名古屋)
- 3) 第 51 回岐阜県内科医会(平成 22 年 4 月, 岐阜)
- 4) 第 52 回岐阜県内科医会(平成 22 年 11 月, 高山)
- 5) 平成 22 年度日本神経学会東海北陸地区生涯教育講演会(平成 23 年 3 月, 名古屋)
- 6) 全国難病センター研究会第 15 回研究大会(平成 23 年 3 月, 岐阜)
- 7) 第 53 回岐阜県内科医会(平成 23 年 4 月, 岐阜)
- 8) 第 54 回岐阜県内科医会(平成 23 年 11 月, 美濃加茂)

3) 学術雑誌

犬塚 貴：

- 1) 日本老年医学会；編集委員(～現在)
- 2) Geriatrics Gerontology International；Associate Editor(～現在)
- 3) 日本神経免疫学会；編集委員(～現在)
- 4) 日本内科学会雑誌；編集委員(～平成 22 年度)
- 5) 医学のあゆみ編集協力者(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

犬塚 貴：

- 1) 第 21 回日本神経免疫学会(平成 21 年 3 月, 大阪, シンポジウム「免疫性ニューロパチーの最近の話題」座長)
- 2) 第 46 回日本老年医学会総会(平成 21 年 6 月, 横浜, 講演会「認知症 2」座長)
- 3) 第 51 回日本神経学会総会(平成 22 年 5 月, 東京, 「多発性硬化症 6」座長)
- 4) 第 47 回日本老年医学会総会(平成 22 年 6 月, 神戸, 講演会「認知症 1」座長)
- 5) 第 47 回日本老年医学会総会(平成 22 年 6 月, 神戸, 教育講演「認知症」演者)
- 6) 第 52 回日本神経学会総会(平成 23 年 5 月, 名古屋, 「サルコイドーシス, 抗 GAD 抗体関連疾患など」座長)
- 7) 第 52 回日本神経学会総会(平成 23 年 5 月, 名古屋, 教育講演「傍腫瘍性神経症候群 update」演者)
- 8) 第 48 回日本老年医学会総会(平成 23 年 6 月, 東京, 教育講演「高齢期のパーキンソン病」演者)
- 9) 平成 23 年度日本内科学会生涯教育講演会 A セッション(平成 23 年 9 月, 山形, 教育講演会「認知症の理解と対応」演者)
- 10) 第 23 回日本神経免疫学会学術集会(平成 23 年 9 月, 東京, シンポジウム「受容体・チャネルに対する抗体を生じる神経疾患」座長)
- 11) 第 29 回日本神経治療学会総会(平成 23 年 11 月, 福井, 教育講演「自己免疫介在性脳炎」座長)

保住 功：

- 1) メタチオネインおよびメタルバイオサイエンス研究会 2009(平成 21 年 11 月, 東京, シンポジウム「神経疾患におけるメタロチオネイン・重金属の役割と治療への応用」演者)
- 2) 第 50 回日本神経学会総会(平成 21 年 5 月, 仙台, 「ALS③病理」座長)
- 3) 第 47 回日本老年医学会総会(平成 22 年 6 月, 神戸, 「神経分野」座長)
- 4) 日本薬学会東海支部(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演「神経変性疾患(ALS, ハンチントン病, Fahr 病)の治療戦略—メタロチオネインと iPS 細胞を活用して—」演者)

田中優司：

- 1) 第 7 回日本難病医療ネットワーク研究会(平成 22 年 10 月, 横浜, ワークショップ「難病患者のコミュニケーション IT 機器等支援に関するワークショップ」演者)

櫻井岳郎：

- 1) 第 21 回日本神経免疫学会(平成 21 年 3 月, 大阪, ワークショップ「プロテオミクス解析を用いた通常型多発性硬化症における疾患特異的抗神経抗体の検索」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 橋本和宜：メタロチオネインおよびメタルバイオサイエンス研究会 2009 ポスター賞(学生部門)(平成 21 年度)
- 2) 原田斉子：第 212 回日本内科学会東海地方会優秀演題賞(神経分野)(平成 22 年 10 月)
- 3) 岩崎 任：第 213 回日本内科学会東海地方会優秀演題賞(神経分野)(平成 23 年 2 月)
- 4) 林 祐一：岐阜県内科医会奨励賞 (平成 23 年 4 月)
- 5) 守田かんな：第 215 回日本内科学会東海地方会優秀演題(神経分野)(平成 23 年 10 月)

9. 社会活動

犬塚 貴：

- 1) 中部療護センター入院審査委員(～現在)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会副会長(～現在)
- 3) 岐阜県医師会介護福祉委員(～現在)
- 4) 岐阜県医師会代議員(～現在)
- 5) 岐阜県認知症地域支援体制構築等推進委員会委員(～現在)
- 6) 日本 ALS 協会岐阜県支部特別顧問(～現在)
- 7) クロイツフェルトヤコブ病サーベイランス委員(全国)(～現在)
- 8) クロイツフェルトヤコブ病サーベイランス委員(岐阜県担当)(～現在)
- 9) 岐阜県難病団体就労連絡協議会委員(～現在)
- 10) 岐阜県内科医会会長(～現在)
- 11) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)
- 12) 岐阜県認知症施策推進委員会(～現在)

保住 功：

- 1) 日本 ALS 協会岐阜県支部特別顧問(～現在)

田中優司：

- 1) 岐阜県国民健康保険団体連合会介護給付費審査委員(～現在)

林 祐一：

- 1) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 犬塚 貴, 田中優司, 山田 恵, 櫻井岳郎, 林 祐一, 木村暁夫, 保住 功, 堀田みゆき：岐阜県における在宅人工呼吸器装着患者の災害時支援体制の現状と課題－保健所および当事者の取り組み状況のアンケート調査－：厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班 平成 20 年度総括・分担研究報告書：51－52(平成 21 年 1 月)
- 2) 祖父江元, 服部直樹, 小池春樹, 池田修一, 嶋田 豊, 林 正男, 栗山 勝, 犬塚 貴, 橋本修二, 溝口功一, 鷺見幸彦, 寶珠山稔, 丸山晋二, 藤本眞一, 宮田和明, 小長谷正明, 久留 聡, 齊藤由扶子：平成 20 年度中部地区スモン患者の実態：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 スモンに関する研究班 平成 20 年度総括・分担研究報告書：32－34(平成 21 年 1 月)
- 3) 犬塚 貴：非ヘルペス性辺縁系脳炎患者髄液中における新規神経抗体の同定. 厚生労働科学研究費補助金 こころの健康科学研究事業 急性脳炎・脳症のグルタミン酸受容体自己免疫病態の解明から新たな治療法確立に向けた研究班 平成 20 年度総括・分担報告書；1/2：116－117(平成 21 年 1 月)
- 4) 木村暁夫：自己免疫性疾患に伴う中枢神経障害に関する抗神経抗体の検索と抗原機能の解析：病態の解明と治療法確立に向けて：厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業 平成 20 年度総括研究報告書：1－53(平成 21 年 1 月)
- 5) 木村暁夫：自己免疫性疾患に伴う中枢神経障害に関する抗神経抗体の検索と抗原機能の解析－病態の解明と治療法確立に向けて：厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業 平成 18－20

年度総合研究報告書：1-103(平成21年1月)

- 6) 犬塚 貴：非ヘルペス性辺縁系脳炎患者の髄液中における新規抗神経抗体の同定：厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業 急性脳炎のグルタミン酸受容体自己免疫病態の解明から新たな治療法確立に向けた研究班(急性脳炎の自己免疫・治療研究班)平成21年度総括・分担報告書：120-121(平成22年3月)
- 7) 祖父江元, 小池春樹, 池田修一, 嶋田 豊, 林 正男, 栗山 勝, 犬塚 貴, 橋本修二, 溝口功一, 鷺見幸彦, 寶珠山 稔, 吉田 宏, 五島 明, 宮田和明, 齋藤由扶子, 服部直樹, 小長谷正明, 久留聡：平成21年度中部地区スモン患者の実態：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 スモンに関する研究班 平成21年度総括・分担研究報告書：45-47(平成22年3月)
- 8) 犬塚 貴, 田中優司, 林 祐一, 木村暁夫, 保住 功, 堀田みゆき：岐阜県における災害時難病患者支援計画の現状と課題：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班 平成21年度総括・分担研究報告書：48-49(平成22年3月)
- 9) 犬塚 貴, 田中優司, 林 祐一, 木村暁夫, 保住 功, 堀田みゆき：岐阜県における在宅難病患者自身の災害時に対する備えの現状と課題：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班 平成21年度総括・分担研究報告書：103-105(平成22年3月)
- 10) 犬塚 貴：辺縁系脳炎患者における抗 Leuchine-rich, glioma-inactivated 1 (LGI1)抗体の検討：厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 急性脳炎のグルタミン酸受容体自己免疫病態の解明から新たな治療法確立に向けた研究班(急性脳炎の自己免疫・治療研究班)平成22年度総括・分担報告書：1/2：115-116(平成23年3月)
- 11) 犬塚 貴：非ヘルペス性辺縁系脳炎の新規抗神経抗体の探索：厚生労働省科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 急性脳炎・脳症のグルタミン酸受容体自己免疫病態の解明・早期診断・治療法確立に関する臨床研究平成20-22年度総合研究報告：1/2：218-220(平成23年3月)
- 12) 保住 功：フェール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の分子病態の研究：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 平成22年度総括・分担研究報告書：1-93(平成23年)
- 13) 木村暁夫：プロテオーム解析を用いた高齢認知症患者における大脳白質病変と抗血管内皮細胞抗体の関連性に関する研究：厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 平成21年度総括研究報告書：1-55(平成22年3月)
- 14) 木村暁夫：プロテオーム解析を用いた高齢認知症患者における大脳白質病変と抗血管内皮細胞抗体の関連性に関する研究：厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 平成22年度総括研究報告書：1-84(平成23年3月)
- 15) 犬塚 貴, 田中優司, 林 祐一, 木村暁夫, 保住 功, 堀田みゆき：岐阜県における重症難病患者の地域医療体制の現状と課題：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班 平成20-22年度総合研究報告書：61-64(平成23年3月)
- 16) 犬塚 貴, 田中優司, 林 祐一, 木村暁夫, 保住 功, 堀田みゆき：岐阜県における重症難病患者の地域医療体制の現状と課題：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班 平成22年度総括・分担報告書：59-60(平成23年3月)
- 17) 犬塚 貴, 田中優司, 林 祐一, 木村暁夫, 保住 功, 堀田みゆき：岐阜県における災害時難病患者支援に関する報告：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究班 平成22年度総括・分担報告書：112-113(平成23年3月)
- 18) 犬塚 貴, 林 祐一, 吉倉延亮, 原田斉子, 山田 恵, 香村彰宏, 櫻井岳郎, 木村暁夫, 田中優司, 保住 功. 岐阜県におけるプリオン病の実態：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 プリオン病のサーベイランスと感染予防に関する調査研究 平成22年度総括・分担研究報告書：51-52(平成23年3月)
- 19) 祖父江元, 小池春樹, 川頭祐一, 池田修一, 嶋田 豊, 菊池修一, 米田 誠, 犬塚 貴, 溝口功一, 橋本修二, 鷺見幸彦, 寶珠山 稔, 吉田 宏, 秋田祐枝, 田中千枝子, 齋藤由扶子, 服部直樹, 小長谷正明, 久留聡：中部地区スモン患者の実態-平成20-22年度における検診結果から-：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 スモンに関する研究班 平成20-22年度総合研究報告書：29-32(平成23年3月)

11. 報道

- 1) 犬塚 貴：神経難病の克服へ研究展開：岐阜新聞(2010年6月29日)
- 2) 犬塚 貴：認知症の理解と対応：岐阜県保険新聞(2010年9月10日)

- 3) 犬塚 貴：岐阜の難病を支える力：KNG (2011年7月号)
- 4) 犬塚 貴：神経内科(神経難病への取り組み)：岐阜県医師会報 No.713(2011年4月1日)
- 5) 犬塚 貴：家族の認知症の理解と対応に向けて：岐阜市内科会だより(2011年)

12. 自己評価

評価

メタロチオネインⅢ (MT-3) のクローニングから 10 余年、教室内外で本分子の筋萎縮性側索硬化症 (ALS) との関係を示唆する研究が積み上げられてきた。2011 年当教室において、MT-ⅢcDNA 組み込みアデノウイルスの ALS モデルマウス筋肉内投与で、生存期間を有意に延長させ、ALS 治療薬としての可能性を示したことは画期的なことであり、大きな成果である。MT の脳虚血に対する神経保護効果についても明らかにしており、MT の適応の広さを予測させるものである。研究費も文部科研基盤 (B) も含め順調に獲得できた。

ファール病 (特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症) の診断方法の確立と治療法の開発の展開は、保住を代表研究者とする厚労科研難治性疾患克服研究事業によるもので、急な立ち上げにも関わらず、全国的疫学調査では家系も含め症例の集積が進み、病因遺伝子の検索に向けて順調に進行している。ALS やファール病に関連して、変性疾患の病態解析や創薬に手がかりを与える iPS 細胞の、患者歯髄からの作製も共同研究として開始された。

自己免疫性神経疾患の病態機序の解明と診断・治療法の開発は、木村を代表研究者とする厚労科研こころの健康科学研究事業と文部科研による長期的な取り組みであるが、プロテオーム解析による抗神経抗体或いはヒト大脳微小血管内皮細胞に対する抗体の検索システムを確立し、いくつかの疾患特異的抗体を明らかにした。バイオマーカーとしての利用、認識抗原分子の解明と病態への関わりが検討されている。

¹³C 呼気試験法というユニークな方法を用い、神経変性疾患の自律神経系機能、特に消化管機能を調べた質の高い臨床研究である。パーキンソン病はじめその他の神経変性疾患の、疾患特異的自律神経系の障害病態を明らかにした。

IT 機器を活用した難病心のケアシステム構築の研究は多職種と共に、患者の視点に沿った情報提供、患者相互の情報交換支援を通して患者の QOL の上げるといふ試みであり進行している。

重症難病患者の地域医療体制の構築に関する研究、スモンに関する調査研究は、いずれも厚労科研によるものであるが、前者は災害時支援の調査と啓発が大きく進み、後者はスモンの風化に対する啓発アンケート調査や検診においては訪問検診を広げて対応してきた。

現状の問題点及びその対応策

メタロチオネイン、ファール病の研究を牽引してきた保住が、隣接する岐阜薬大の薬物治療学教授に転勤したが、引き続き共同研究を行っていく。¹³C 呼気試験法を駆使してきた田中ほか中堅スタッフが、地域の強い要請で学外勤務することになり、さらに学内でも増大する診療需要にも応えなくてはならず、研究のマンパワーの確保が最も大きな問題である。実習等での学生との緊密な接触とその継続、初期研修医に対して神経疾患対応スキルアップの催しを多く用意しコミュニケーションを図り、勧誘を強化していく。

今後の展望

メタロチオネイン、ファール病関連の研究については、岐阜薬科大学で発展されるが、共同研究を行っていく。MT の安全で有効なデリバリーの開発、ファール病疾患感受性遺伝子の解析や iPS 細胞による病態解析や創薬スクリーニング系の確立などが期待される。

免疫性神経疾患の病態機序解明と診断バイオマーカーの開発については、プロテオーム解析に加えプロテイン・アレー法も加えて、神経組織や血管内皮細胞をターゲットとする自己抗体をさらに検索し、認識抗原の機能解析、生体内分布、疾患モデルの開発を行っていく。

神経難病および認知症の医療・福祉体制の整備は、特に岐阜県では焦眉の的であり、専門医および関連職種の育成と共に、行政と協力しながら地域の実情を把握してしっかり取り組んでいく。

(5) 精神病理学分野

1. 研究の概要

当分野における研究は、2008年6月に第5代塩入俊樹教授が就任し、新たなスタートを迎えた。これまで二十数年間にわたり、一貫して臨床を重視し、そこに基盤を置いた研究を目指してきた。今後も当分野の伝統を生かしつつ、最新のニューロサイエンスの様々な手法を取り入れて、新たな研究を行ってゆく予定である。

臓器移植等に代表される高度先進医療が可能となった一方、価値観や生命倫理の多様化を背景としてより開かれた医療が求められている。また、高度情報化による過ストレス社会の出現、少子高齢化や過疎化、環境問題等といった諸問題に対し、医療は今まで以上に適切かつ十分な対応をすべきである。大学に籍を置く医療人の職務は、先端的生命科学に関する教育・研究に重きを置きつつも、臨床に直結した疾病の診断・治療に役立つ探索型研究を推進し、地域社会と世界の医療に貢献することである。一方、臨床講座での研究は、世界に通用する研究者を作ることだけが目的ではなく、そうした研究を通して臨床能力を研ぎ、結果的に患者様のためになるものでなければならない。従って、「まず初めに、臨床ありき」という、臨床重視の姿勢は最も重要である。当分野では、日常臨床の中に研究の閃きを感じ取れる医療人を輩出することを目標として、以下の研究を行っていく。

- 1) 精神疾患の Neuroimaging 研究 (PET, f-MRI, MRS, NIRS 等)
- 2) 精神疾患の自律神経研究 (Baroreflex, Papillary light reflex 等)
- 3) 精神科診断学に関する研究 (DSM-IV, ICD-10 等)
- 4) 精神疾患と生活習慣病に関する研究 (DM や虚血性心疾患 等)
- 5) 発達障害の疫学及び Neuroimaging 研究 (自閉性障害, Asperger 障害, ADHD 等)
- 6) 災害精神医学に関する研究
- 7) 精神疾患の遺伝子研究

2. 名簿

教授：	塩入俊樹	Toshiki Shioiri
准教授：	高岡 健	Ken Takaoka
准教授：	植木啓文	Hirofumi Ueki
臨床講師：	深尾 琢	Taku Fukao
臨床講師：	天野雄平	Yuhei Amano
臨床講師：	瀨瀬慎也	Shinya Kouketsu
臨床講師：	櫻庭 泰	Akira Sakuraba
医員：	松岡 司	Tsukasa Matsuoka
医員：	市川直樹	Naoki Ichikawa
医員：	徳丸淑江	Yoshie Tokumalu
医員：	水野峻太郎	Shuntaro Mizuno

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 塩入俊樹. 精神症状のアセスメントと対応 3 不安・強迫状態：精神科薬物ハンドブック，東京：照林社；2009年：126-138.
- 2) 高岡 健. うつ病論：浅野弘毅編，東京：批評社；2009年.
- 3) 高岡 健. 発達障害は少年事件を引き起こさない：東京：明石書店；2009年.
- 4) 高岡 健. やさしいうつ病論：東京：批評社；2009年.
- 5) 高岡 健. 発達障害と階層問題 発達障害ってなんだろう？：全国不登校新聞社編. Fonte ブックレット③，東京：NPO 法人 全国不登校新聞社；2009年：81-92.
- 6) 高岡 健. 16歳からの<こころ>学：東京：青灯社；2009年.
- 7) 高岡 健. うつ病：精神保健福祉白書編集委員会 精神保健福祉白書 2010年版，東京：中央法規出版；2009年：136.
- 8) 天野雄平. お酒と麻薬の害について：山本真由美編. 大学生の健康ナビーキャンパスライフの健康管理ー第2章 第5節，岐阜：岐阜新聞社；2009年：46-51.
- 9) 塩入俊樹. 神経科学からみた発生のメカニズムと病態：不安：下田和孝編集. 脳とこころのプライマリ・ケア 1：抑うつと不安，東京：シナジー出版；2010年：61-69.
- 10) 塩入俊樹. 脳幹における呼吸・循環制御とパニック障害：神庭重信，加藤忠史責任編集. 専門医のための精神科臨床リュミエール 16，東京：中山書店；2010年：122-124.
- 11) 塩入俊樹. 神経症性障害 ストレス関連障害(パニック障害，広場恐怖，全般性不安障害，社交不安障害，特

定の恐怖症, 心的外傷後ストレス障害, 適応障害): 樋口輝彦, 野村総一郎編. こころの科学増刊『こころの医学辞典』, 東京: 日本評論社; 2010年: 178-192, 208-210.

- 12) 高岡 健. 少年事件一心は裁判でどう扱われるかー: 東京: 明石書店; 2010年.
- 13) 高岡 健. 自閉症概念の成立と消滅: 小澤 勲著 自閉症論再考, 東京: 批評社; 2010年: 111-122.
- 14) 高岡 健, 宮台真司, 彦坂尚嘉. グローバリゼーションの中のアートはどこへ向かうのか: 彦坂尚嘉, 五十嵐太郎, 新堀 学編著. 空想皇居美術館, 東京: 朝日新聞出版; 2010年: 180-205.
- 15) 高岡 健. アスペルガー症候群と反社会的行動: 山崎晃資編著. 自閉症スペクトラムと特別支援教育, 東京: 金剛出版; 2010年: 219-227.
- 16) 高岡 健. 精神鑑定とは何か: 東京: 明石書店; 2010年.
- 17) 高岡 健. うつ病: 精神保健福祉白書編集委員会編. 精神保健福祉白書 2011年版, 東京: 中央法規出版; 2010年: 146.
- 18) 天野雄平, 塩入俊樹. RLAIにより夫婦の語らいを取り戻した1例: 村崎光邦編集. リスペリドン持続性注射剤(RLAI) 100の報告, 東京: 星和書店; 2010年: 136-137.
- 19) 天野雄平. お酒と麻薬の害について: 山本真由美編. 大学生の健康ナビーキャンパスライフの健康管理ー改訂版 第2章 第5節, 岐阜: 岐阜新聞社; 2010年: 46-51.
- 20) 天野雄平, 植木啓文, 塩入俊樹. SSRIで activation syndrome をきたした初老期うつ病にミルナシبرانが奏功した1例: 上島国利監修. うつ病薬物治療のエクセレンスーミルナシبرانの治療経験からみえてくるものー, 東京: アルタ出版; 2010年: 128-129.
- 21) 植木啓文. 2 精神科の立場から: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 7-14.
- 22) 植木啓文. 25 意欲低下, 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 131-136.
- 23) 植木啓文. 26 睡眠障害: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 137-141.
- 24) 塩入俊樹. 抗うつ薬の副作用: 今日の治療指針 2011年版ー私はこう治療しているー, 東京: 医学書院; 2011年: 867-868.
- 25) 塩入俊樹他. パニック障害: 朝日新聞 MOOK 新「名医」の最新治療 完全読本, 東京: 朝日新聞出版社; 2011年: 388-391.
- 26) 塩入俊樹. 診断基準, P 糖蛋白: 加藤敏他編集. 現代精神医学事典, 東京: 弘文堂; 2011年: 535-536, 879.
- 27) 塩入俊樹. Fear circuit モデル: 飛鳥井 望編. 新しい診断と治療の ABC 40 外傷後ストレス障害, 東京: 最新医学社; 2011年: 60-70.
- 28) 高岡 健. インタビューー児童精神科医・高岡 健医師に聴く: 川村百合著. 弁護士・付添人のための少年事件実務の手引き, 東京: ぎょうせい; 2011年: 276-314.
- 29) 芹沢俊介, 高岡 健. 「孤独」から考える秋葉原無差別殺傷事件: 東京: 批評社; 2011年.
- 30) 高岡 健. 自殺とパラスーサイド: 長野 功編著. 巧みな体のしくみ, 東京: 三恵社; 2011年: 120-123.
- 31) 高岡 健. 食物を拒否する, 食物に依存する: 長野 功編著. 巧みな体のしくみ, 東京: 三恵社; 2011年: 124-127.
- 32) 高岡 健. 子どもの権利条約: 加藤 敏, 神庭重信, 中谷陽二ほか編. 現代精神医学事典, 東京: 弘文堂; 2011年: 342.
- 33) 高岡 健. ヘルシンキ宣言: 加藤 敏, 神庭重信, 中谷陽二ほか編. 現代精神医学事典, 東京: 弘文堂; 2011年: 949.
- 34) 高岡 健. うつ病: 精神保健福祉白書編集委員会編. 精神保健福祉白書 2012年版, 東京: 中央法規; 2011年: 148.
- 35) 植木啓文, 塩入俊樹. 治療効果の判定: 山内俊雄, 小島卓也, 倉知正佳, 鹿島晴雄編集. 専門医をめざす人のための精神医学 第3版, 東京: 医学書院; 2011年: 269-275.
- 36) 松岡 司, 塩入俊樹. SSRIで activation syndrome をきたした初老期うつ病にミルナシبرانが奏功した1例: 樋口輝編. 実地医家のためのうつ病治療症例集, 東京: 医薬ジャーナル社; 2011年: 60-62.

著書 (欧文)
なし

総説 (和文)
なし

総説 (欧文)
なし

原著 (和文)

- 1) 塩入俊樹. 巻頭言「DSMについて」, 精神医学 2009年; 51巻: 208-209.
- 2) 塩入俊樹. プライマリ・ケアにおけるうつ病治療, 岐阜市医師会だより 2009年; 41巻: 12-16.
- 3) 塩入俊樹. ICD-11に向けてのアジア・日本からの提言:F 4 神経症性障害, ストレス関連障害および身体表現障害, 精神科診断学 2009年; 2巻: 37-46.
- 4) 塩入俊樹. 内科医がよく遭遇するうつ病の診断と治療, 岐阜県内科医会雑誌 2009年; 23巻: 39-47.

- 5) 高岡 健. アスペルガー症候群と就労, 精神療法 2009年; 35巻: 338-343.
- 6) 高岡 健, 川村百合. 少年の裁判員裁判と精神医学の役割(Letter), 精神医学 2009年; 51巻: 814-815.
- 7) 高岡 健. 司法をめぐる問題, 児精医誌 2009年; 50巻(50周年記念号): 217-221.
- 8) 高田知二, 高岡 健, 伊藤宗親, 金岡繁裕. 外国人に対する精神鑑定の諸問題, 精神医学 2009年; 51巻: 1013-1024.
- 9) 西尾彰泰, 植木啓文. レビー小体病認知症の幻視に対してプロナンセリンが著効した 1 例, 精神医学 2009年; 51巻: 561-564.
- 10) 植木啓文. 精神疾患-肥満・糖尿病との関連は. うつ病の薬物療法は?, 肥満と糖尿病 2009年; 8巻: 55-57.
- 11) 深尾 琢, 塩入俊樹. 抗不安薬, 心療内科 2009年; 13巻: 25-33.
- 12) 天野雄平, 塩入俊樹. 精神科のくすりと精神医療 精神科のくすりとのかきあい方, こころの科学 2009年; 143巻: 40-48.
- 13) 天野雄平, 塩入俊樹. 難治性うつ病への薬物療法, 医学と薬学 2009年; 61巻: 21-26.
- 14) 天野雄平, 塩入俊樹. ライフサイクルと治るうつ病 壮年期のうつ病, こころの科学 2009年; 146巻: 47-52.
- 15) 天野雄平, 塩入俊樹. 全般性不安障害(GAD)の生物学的基盤と薬物療法, 臨床精神薬理 2009年; 12巻: 1905-1914.
- 16) 田中生雅, 塩入俊樹. 妊娠中の向精神薬療法の継続と中止-気分障害と不安障害, 精神科治療学 2009年; 24巻: 539-548.
- 17) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 田中優司, 塩入俊樹, 山本真由美, 清水克時. 大学生の健康に関する取り組みと生活環境に関する検討, CAMPUS HEALTH 2010年; 47巻: 97-102.
- 18) 江川 純, 遠藤太郎, 染矢俊幸, 下田和孝, 塩入俊樹, 山田尚登, 高橋三郎. 精神科疾患の診断をめぐる諸問題-精神科医 327 名のアンケート調査から-, 精神医学 2010年; 52巻: 891-898.
- 19) 塩入俊樹. 脳機能画像による不安障害の病態解明 Stress-induced fear circuitry disorders を中心に, 日本神経精神薬理 2010年; 30巻: 135-139.
- 20) 塩入俊樹. 社交不安障害(SAD)の神経生物学的検討-Fear-circuitry dysfunction の観点から-, 臨床精神薬理 2010年; 13巻: 711-721.
- 21) 塩入俊樹. 災害時のこころのケア 新潟県中越震災の経験を通じて, 精神神経学雑誌 2010年; 112巻: 521-529.
- 22) 塩入俊樹. 災害時のこころのケア, 四国医学雑誌 2010年; 66巻: 13-18.
- 23) 塩入俊樹. 災害時のこころのケアとは何か 新潟県中越地震の経験を中心に, 日本社会精神医学会雑誌 2010年; 19巻: 42-48.
- 24) 高岡 健. 自傷-リストカット・オーバードーズ, 小児科臨床 2010年; 73巻: 85-88.
- 25) 高岡 健. 子どもの「うつ」とその背景, 児童心理 2010年; 64巻: 689-692.
- 26) 高岡 健, 櫻庭 泰, 松岡 司. 統合失調質パーソナリティ障害, 精神科治療学 2010年; 25巻(増刊号): 224-225.
- 27) 高岡 健. 資料・クロニクル 1968, 精神医療 2010年; 60巻: 34-39.
- 28) 高岡 健, 関 正樹. 自閉症スペクトラム障害のカタトニー様症状, 精神科治療学 2010年; 25巻: 1633-1637.
- 29) 井奈波良一, 堀 貴光, 堀内聖剛, 清水三矢, 広瀬万宝子, 井上真人, 植木啓文. 医学生の退学願望と睡眠時間 メンタルヘルス不調およびメランコリー親和型性格との関係, 日本職業・災害医学会誌 2010年; 58巻: 19-23.
- 30) 小川直志, 植木啓文. カフェイン依存, 日本臨床 2010年; 68巻: 1470-1474.
- 31) 植木啓文. 日本人のうつ病と外国のうつ病-日本人のうつ病患者と諸外国のうつ病患者の間には性格面と症状面における違いはあるのか-, 別冊・医学のあゆみ 最新うつ病のすべて 2010年: 47-51.
- 32) 深尾 琢, 松岡 司, 塩入俊樹. MRS, 臨床精神医学「精神科臨床評価検査法マニュアル [改訂版]」 2010年; 39巻(増刊号).
- 33) 天野雄平, 塩入俊樹. 薬剤抵抗性のため 100 回以上の修正型電気けいれん療法を施行している遅発緊張病の 1 例, 精神科 2010年; 17巻: 443-448.
- 34) 塩入俊樹. 精神疾患にみる不安障害の Comorbidity うつ病と不安障害, 不安障害研究 2011年; 3巻: 44-47.
- 35) 塩入俊樹. パニック障害の生物学的病態-Stress-induced fear circuitry disorders の概念から, Bulletin of Depression and Anxiety disorders 2011年; 8巻: 6-8.
- 36) 上島国利, 塩入俊樹, 大坪天平. パニック障害を再考する-Sertraline の国内臨床試験結果を受けて, 臨床精神薬理 2011年; 14巻: 543-552.
- 37) 塩入俊樹, 松岡 司. 強迫性障害の薬物療法, 医学のあゆみ 2011年; 236巻: 963-967.
- 38) 塩入俊樹. パニック障害の病態-Stress-induced fear circuitry disorders を中心に, 岐阜大学医学部記念会館だより 2011年; 95巻: 6-9.
- 39) 塩入俊樹. 我が国における災害時のこころのケア:その始まり, 最新精神医学 2011年; 16巻: 407-408.
- 40) 塩入俊樹, 松岡 司. 精神疾患の病態と診断・治療:パニック障害, 医学と薬学 2011年; 66巻: 589-601.
- 41) 桑原秀樹, 塩入俊樹. 「神経症性障害」の治療ガイドライン:特定の恐怖症, 精神科治療学 2011年; 26巻(増刊号): 47-55.
- 42) 塩入俊樹, 桑原秀樹, 川村 剛. 地震とメンタルヘルス-うつ病を含めて:新潟県中越地震を踏まえて-,

Depression Frontier 2011年；9巻：15-26.

- 43) 高岡 健, 木村一優. 自閉症を有する者の訴訟能力, 季刊 刑事弁護 2011年；65巻：175-177.
- 44) 高岡 健. ひきこもりという概念がどうして必要とされたのか, 臨床心理学 2011年；11巻：336-340.
- 45) 高岡 健. パーソナリティ・パーソナリティ障害・発達障害・病前性格の位置関係, 現代のエスプリ 2011年；527巻：73-78.
- 46) 関 正樹, 高岡 健. 自閉症スペクトラム障害と強迫性緩慢およびカタトニー様増悪, 精神科 2011年；19巻：292-295.
- 47) 井奈波良一, 井上真人, 植木啓文. 男子医学生への退学願望とメランコリー親和型性格, メンタルヘルス不調および睡眠時間との関係, 日本職業・災害医学会誌 2011年；59巻：49-52.

原著 (欧文)

- 1) Nishio A, Akazawa K, Shibuya F, Abe R, Nushida H, Ueno Y, Nishimura A, Shioiri T. Influence on the suicide rate two years after a devastating disaster: a report from the 1995 Great Hanshin-Awaji Earthquake. Psychiatry Clinical Neurosci. 2009;63:247-250. IF 1.559
- 2) Endo T, Shioiri T, Someya T. Posttraumatic symptoms among the children and adolescents two years after the 2004 Niigata-Chuetsu earthquake in Japan. Psychiatry Clin Neurosci. 2009;63:253. IF 1.559

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：前田 潤, 研究分担者：塩入俊樹；科学研究費補助金基盤研究(A)；災害時における効果的・心理的支援のための連携協力に関する研究；平成 19-21 年度；1,300 千円(800：500 千円)
- 2) 研究代表者：高岡 健；科学研究費補助金基盤研究(C)；発達障害児・者の精神・心理鑑定に関する研究；平成 20-22 年度；2,000 千円(700：500：800 千円)
- 3) 研究代表者：天野雄平；科学研究費補助金若手研究(B)；3T-MRS を用いたアルコール依存症患者の GABA, グルタミン酸異常に関する研究；平成 21-22 年度；3,300 千円(2,000：1,300 千円)

2) 受託研究

- 1) 塩入俊樹；映像刺激を用いた心理的負荷測定システムの開発に関するフイージビリティスタディ-映像負荷の生体影響に基づく分類及び計測項目の探索的選択-；平成 21 年度；1,000 千円：(社)電子情報技術産業協会

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

塩入俊樹：

- 1) 日本精神神経学会評議員(～現在)
- 2) 日本生物学的精神医学会評議員(～現在)
- 3) 日本精神科診断学会評議員(～現在)
- 4) 日本総合病院精神医学会評議員(～現在)
- 5) 日本統合失調症学会評議員(～現在)
- 6) 日本不安障害学会評議員(～現在)

高岡 健：

- 1) 日本精神神経学会評議員(～現在)
- 2) 日本精神神経学会法倫理関連委員会委員(～現在)
- 3) 日本児童青年精神医学会評議員・理事(～現在)
- 4) 日本児童青年精神医学会子どもの人権と法に関する委員会担当理事(～現在)
- 5) 日本児童青年精神医学会顕彰委員会担当理事(～現在)
- 6) 日本児童青年精神医学会法人化・専門医制度に関する委員会担当理事(～現在)
- 7) 日本総合病院精神医学会評議員(～現在)

- 8) 日本総合病院精神医学会医療問題委員会委員(～現在)
- 9) 日本精神病理学会評議員(～現在)

植木啓文：

- 1) 日本総合病院精神医学会評議員(～現在)
- 2) 日本精神科診断学会評議員(～現在)
- 3) 心理教育・家族教室ネットワーク運営委員(～現在)

深尾 琢：

- 1) 東海精神神経学会運営委員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

塩入俊樹：

- 1) 「最新精神医学」；編集同人(～現在)
- 2) 「分子精神医学」；編集同人(～現在)
- 3) 「精神科診断学」；編集委員長(～現在)
- 4) Editorial Board of the Scientific World JOURNAL(～現在)

高岡 健：

- 1) 精神医療；編集委員(～現在)

植木啓文：

- 1) 精神療法；編集同人(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

塩入俊樹：

- 1) 日本精神神経学会東海地方会(平成 21 年 2 月，愛知，特別講演「パニック障害の病態と治療」演者)
- 2) 第 105 回日本精神神経学会学術総会(平成 21 年 5 月，神戸，教育講演「災害時のこころのケア：新潟県中越地震の経験を通して」演者)
- 3) 第 26 回岐阜県病院協会医学会(平成 21 年 10 月，高山，特別講演「身体科に必要な精神医学の知識」演者)
- 4) 第 29 回日本社会精神医学会(平成 22 年 2 月，松江，教育講演「災害時のこころのケアとは何か：新潟県中越地震の経験を中心に」演者)
- 5) 第 106 回日本精神神経学会学術総会(平成 22 年 5 月，広島，教育講演「不安障害の病態について Stress-induced fear circuitry disorders を中心に」演者)

高岡 健：

- 1) 第 28 回日本社会精神医学会(平成 21 年 2 月，栃木，「精神科医療の地殻変動と精神病理学的な諸問題」シンポジウム司会)
- 2) 岐阜県自閉症協会 40 周年記念式典・シンポジウム(平成 21 年 10 月，岐阜，シンポジウム「総合支援を考える－自閉症児者の生活と医療－」演者)
- 3) 第 3 回非行臨床学会(平成 22 年 7 月，千葉「なぜ非行は 15－16 歳で多発するのか」ラウンドテーブルディスカッション話題提供者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

塩入俊樹：

- 1) 岐阜県精神保健福祉協会副会長(～現在)

- 2) 岐阜県認知症政策推進委員会委員(～現在)
- 3) 岐阜県自殺予防推進委員会委員(～現在)

高岡 健 :

- 1) 岐阜県精神医療審査会委員(～現在)
- 2) 厚生労働省職員メンタルヘルス相談医(～現在)
- 3) 岐阜県後期高齢者医療障害認定審査医(～現在)
- 4) 岐阜県国民年金障害認定審査医(～現在)
- 5) 岐阜県障害者職業センター医療情報助言者(～現在)
- 6) 岐阜県知的障害者育成室医学的専門相談員(～現在)
- 7) 岐阜県希望が丘学園嘱託医(～現在)

植木啓文 :

- 1) 岐阜市生活保護法医療扶助審議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県精神保健福祉協会医療専門委員会委員(～現在)
- 3) 岐阜労働局労災委員(～現在)

深尾 琢 :

- 1) 岐阜県希望が丘学園嘱託医(～現在)
- 2) 岐阜労働局労災委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 塩入俊樹：不安と恐怖のメカニズム：平成 21 年度(社)電子情報技術産業協会研究委託費 映像刺激を用いた心理的負荷測定システムの開発に関するフィージビリティスタディ報告書(要旨)：9-10(平成 22 年)
- 2) 塩入俊樹：不安と恐怖のメカニズム：平成 21 年度(社)電子情報技術産業協会研究委託費 映像刺激を用いた心理的負荷測定システムの開発に関するフィージビリティスタディ報告書(要旨)：19-24(平成 22 年)
- 3) 天野雄平：最近のストレス疾患の動向：平成 21 年度(財)機械システム振興協会研究委託費 映像刺激を用いた心理的負荷測定システムの開発に関するフィージビリティスタディ報告書(要旨)：16-18(平成 22 年)
- 4) 塩入俊樹：心理的負荷測定システムの必要性和応用—本 F/S の社会的役割と今後の展望—：平成 22 年度(社)電子情報技術産業協会研究委託費 映像刺激を用いた心理的負荷測定システムの開発に関するフィージビリティスタディ報告書(要旨)：43-45(平成 23 年)
- 5) 塩入俊樹：心理的負荷測定システムの必要性和応用—本 F/S の社会的役割と今後の展望—：平成 22 年度(社)電子情報技術産業協会研究委託費 映像刺激を用いた心理的負荷測定システムの開発に関するフィージビリティスタディ報告書：122-130(平成 23 年)
- 6) 植木啓文, 岩田弘敏, 井上真人, 黒川淳一, 小山田隆明, 井奈波良一：モラルハラスメントによる健康障害の一次予防のための調査研究：平成 22 年度労働者健康福祉機構・産業保健調査研究報告書(平成 23 年)

11. 報道

- 1) 塩入俊樹：不安や恐怖のメカニズムを探る：岐阜新聞(2009 年 3 月 17 日)
- 2) 高岡 健：精神鑑定で少年の心理理解明：岐阜新聞(2009 年 10 月 20 日)
- 3) 塩入俊樹：日常診療におけるうつ病：岐阜保険医新聞(2009 年 11 月 10 日)
- 4) 高岡 健：理解でサポート 1～5：山陰中央新報(2010 年 2 月 17 日・18 日・19 日・20 日・21 日朝刊)
- 5) 塩入俊樹：教えてホームドクター：正常なうつ状態：岐阜新聞(2010 年 8 月 16 日)
- 6) 塩入俊樹：教えてホームドクター：病的なうつ状態のいろいろ：岐阜新聞(2010 年 10 月 16 日)
- 7) 塩入俊樹：教えてホームドクター：うつ病の治療と家族のサポート：岐阜新聞(2010 年 12 月 27 日)
- 8) 塩入俊樹：精神科医が考えていること『うつ状態』：日本精神神経学会ホームページ(2011 年)
- 9) 塩入俊樹：社交不安障害：うつ病の“入り口”で注目：Japan Medicine MONTHLY(No.015 4 月号, p.5, 2011 年)
- 10) 塩入俊樹：パニック障害：毎日新聞ニュースサイト内, 医療ポータルサイト「ドクターズ・ファイル」

(2011年)

- 11) 塩入俊樹：うつ病の現状，問題点，うつ病リワークについて：日経BPWEBサイト「メンタルヘルスとリワーク：リワーク医療機関に聞く」(2011年)
- 12) 塩入俊樹：パニック障害 新名医の最新治療：週刊朝日 増刊号(p.66-69, 2011年)
- 13) 塩入俊樹：被災者支援に当たる救助者，支援者が知っておくべき「心のケア」：日経BP Good Doctor NET「被災者の方々へのお役立ち情報 掲示板」(2011年)
- 14) 塩入俊樹：教えてホームドクター：誰もがなる可能性 産後，人生の転機に注意：続・うつ病講座：岐阜新聞 2011年2月28日)
- 15) 天野雄平：始まりに季節に～病とともに歩む人に向けて：岐阜大学医学部附属病院広報誌「鵜舟」(2011年4月1日)
- 16) 塩入俊樹：教えてホームドクター：心の病休者増える 現実逃避の若者が多い うつ病：岐阜新聞(2011年5月2日)
- 17) 塩入俊樹他：パニック障害治療の最前線：専門医の診断を受け適切な治療を：日本経済新聞(2011年5月22日)
- 18) 塩入俊樹他：脳とこころのサイエンス：うつ，脳に認められる「機能」の不調：日本経済新聞(2011年6月17日)
- 19) 天野雄平：～こんな時だからこそ～：岐阜大学医学部附属病院広報誌「鵜舟」(2011年7月1日)
- 20) 塩入俊樹：教えてホームドクター：中越地震から支援「阪神」の反省から組織化：災害時のこころのケア活動：岐阜新聞(2011年7月4日)
- 21) 深尾 琢：こころのケア，石巻で活動. 震災を知る：岐阜新聞(2011年6月16日)
- 22) 深尾 琢：被災体験 聞き出すべきか. 震災を知る：岐阜新聞(2011年6月17日)
- 23) 深尾 琢：支援者の心や体にケアを. 震災を知る：岐阜新聞(2011年6月18日)
- 24) 塩入俊樹：教えてホームドクター：状況見極めケアを 必要に応じ専門家に相談 被災者の心の変化：岐阜新聞(2011年9月19日)
- 25) 塩入俊樹：教えてホームドクター：不安，恐怖感が表出 一緒に遊べる環境，構築を 災害時の子どもの変化：岐阜新聞(2011年11月21日)

12. 自己評価

評価

上記のように，様々な研究成果が上がってきている。それらは，日常臨床に直結するものであり，地域での精神医療の展開においても大きな刺激となっている。また，上記の報告の他に，積極的に司法精神鑑定を行っており，そういった点でも社会的貢献を果たしている。

現状の問題点及びその対応策

大学も人員不足のため，各スタッフが臨床，教育，研究と走り回っている。これらに関しては，抜本的な解決法を検討していくことが課題である。

今後の展望

現在の医師臨床研修制度では，精神科研修は必修となっている。そこで望まれているのは，プライマリ・ケアを重視した通常精神医療であり，この領域に焦点を据え研究を進めている大学は残念ながら少ない。それゆえ，当分野の存在意義は，国民のニーズといった点からも，今後ますます高まっていくものと期待できる。

(6) 脳神経外科学分野

1. 研究の概要

脳虚血に関する研究として、マウス脳虚血モデルを用いてフリーラジカルスカベンジャーであるエダラボンおよび抗血小板薬であるシロスタゾールと常圧高酸素療法の併用療法の急性期脳虚血保護作用の評価を行い、両薬剤とも高酸素療法との併用で有意な脳保護作用を示すことが明らかとなった（岐阜薬科大学薬効解析学講座との共同研究）。また同様にマウス脳虚血モデルを用いて脳虚血急性期の脂肪由来幹細胞の静脈投与における神経保護作用を検討した。脂肪由来幹細胞の静脈内投与群ではコントロール群ならびに骨髄由来幹細胞投与群と比較して有意な機能予後の改善がみられることが明らかとなった（細胞情報学講座との共同研究）。

動脈硬化性疾患の治療と予防に関する研究として、血小板から放出され動脈硬化との関連が注目されている sCD40L 等の炎症性サイトカインの放出機序と各種抗血小板薬の効果に関して解析を行なった結果、抗炎症効果を有するアスピリンは炎症性サイトカインの放出に対して著明な抑制効果を有するが、同じ抗血小板剤でもチエノピリジン系薬剤は抑制効果をもたないことが明らかとなった（薬理病態学講座との共同研究）。

悪性グリオーマに関する基礎研究として、ヒトグリオーマ標本を用いて悪性腫瘍内マクロファージと腫瘍の産生するケモカインの関係を免疫組織学的に評価した結果、腫瘍内へのマクロファージの遊走に関与するケモカインとして、これまでに指摘されてきた MCP-1 以外に MCP-3 も関与している可能性が見いだされた（免疫病理学講座との共同研究）。

ヒトグリオーマにおける臨床研究として、放射線治療後にみられる放射線壊死とグリオーマ再発とを PET 画像を用いて鑑別する方法を検討した。CHO(choline)-PET によって求められる血流成分を MET(methionine)-PET 画像から差し引いた変換画像により放射線壊死と腫瘍再発を視覚的に明瞭に識別できる可能性が示された（中部療護センターにおける研究）。

2. 名簿

教授：	岩間 亨	Toru Iwama
准教授：	吉村紳一	Shin-ichi Yoshimura
准教授：	矢野大仁	Hirohito Yano
講師：	大江直行	Naoyuki Ohe
講師：	中山則之	Noriyuki Nakayama
助教：	副田明男	Akio Soeda
助教：	石黒光紀	Mitsunori Ishiguro
助教：	榎本由貴子	Yukiko Enomoto
医員：	江頭裕介	Yusuke Egashira
医員：	田中嘉隆	Yoshitaka Tanaka
医員：	澤田重信	Shigenobu Sawada
医員：	野村悠一	Yuichi Nomura
医員：	植松幸大	Kodai Uematsu
医員：	宮居雅文	Masafumi Miyai

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 岩間 亨. 脳内血腫除去術-被殻出血：新井 一編. NS NOW No.8 脳神経外科基本手術，東京：メジカルビュー社；2009年：101-110.
- 2) 岩間 亨. 脳動静脈奇形：「小児内科」「小児外科」編集委員会共編. VI.神経疾患-20 小児疾患診療のための病態生理 第4版2号(小児内科 41増刊号)，東京：東京医学社；2009年：684-687.
- 3) 吉村紳一. 脳血管攣縮：江面正幸，佐伯直勝，伊達 勲，宝金清博，高安正和編. 脳神経外科エキスパート血管内治療，東京：中外医学社；2009年：174-180.
- 4) 吉村紳一. 内科的治療，CEA，CAS のエビデンス：伊莉裕二，坂井信幸編. エキスパートから学ぶ CAS 実践マニュアル，東京：南江堂；2009年：13-17.
- 5) 吉村紳一. ガイディングシステムの誘導留置法：伊莉裕二，坂井信幸編. エキスパートから学ぶ CAS 実践マニュアル，東京：南江堂；2009年：81-85.
- 6) 大江直行，矢野大仁，中山則之，吉村紳一，岩間 亨. 側脳室体部腫瘍に対する手術アプローチの検討-当施設における最近の治療成績-：河本圭司編. 脳腫瘍の外科，大阪：メディカ出版；2009年：216-221.
- 7) 山田清文，吉村紳一，岩間 亨. 内頸動脈狭窄に対する頸動脈ステントの適応は?：岡本幸市，棚橋紀夫，水

- 澤英洋編. 2009-2010EBM 神経疾患の治療, 東京: 中外医学社; 2009年: 98-101.
- 8) 高木俊範, 吉村紳一. クモ膜下出血の治療: 棚橋紀夫編. からだの科学 260 脳卒中のすべて, 東京: 日本評論社; 2009年: 100-103.
 - 9) 岩間 亨. 慢性硬膜下血腫: 金澤一郎, 永井良三編. 今日の診断指針, 東京: 医学書院; 2010年: 558-560.
 - 10) 岩間 亨. 頭痛: 橋本信夫編. ナースのための脳神経外科, 大阪: メディカ出版; 2010年: 107-114.
 - 11) 吉村紳一. 脳血管攣縮: 滝 和郎編. 脳動脈瘤コイル塞栓術ハンドブック, 東京: 診断と治療社; 2010年: 136-142.
 - 12) 吉村紳一. 手術手技の適応と禁忌: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 52-57.
 - 13) 吉村紳一. 応用手技を覚える: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 138-147.
 - 14) 吉村紳一. 大型・巨大脳動脈瘤に対する治療戦略. 応用手技を覚える: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 171-177.
 - 15) 吉村紳一. 未破裂脳動脈瘤の治療法: 開頭と IVR をどう使い分けるか?: 宮本 享, 新井 一, 鈴木倫保, 渋井壮一郎, 中瀬裕之編. EBM 脳神経外科疾患の治療 2011-2012, 東京: 中外医学社; 2010年: 46-49.
 - 16) 中山則之, 矢野大仁, 野村悠一, 大江直行, 岩間 亨. 顔面けいれんで発症した後頭蓋窩類上皮腫の1例: 原岡 襄編. 脳腫瘍の外科-Science, Art and Technology-, 東京: 編集室なるにあ; 2010年: 251-256.
 - 17) 石黒光紀, 吉村紳一. 放射線技師との連携プレー: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 80-86.
 - 18) 榎本由貴子. 知っておくべき薬剤の基礎知識: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 117-124.
 - 19) 江頭裕介. 基本手技を覚える: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 126-137.
 - 20) 江頭裕介. 破裂脳動脈瘤に対する治療戦略: 10 mm以下について: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 150-158.
 - 21) 田中嘉隆, 吉村紳一. 周術期管理: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 58-65.
 - 22) 山田清文, 吉村紳一. 困難な症例, 工夫を要した症例 5, 後交通動脈経路によるバルーンアシストを用いた脳底動脈瘤内塞栓術: 滝 和郎編. 脳動脈瘤コイル塞栓術ハンドブック, 東京: 診断と治療社; 2010年: 180-182.
 - 23) 山田清文, 吉村紳一. 解離性脳動脈瘤: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 178-183.
 - 24) 山田清文. ガイドラインの解説: 根來 眞監修. 中原一郎, 入江恵子, 吉村紳一編. 開頭手術と血管内治療の境界線 脳動脈瘤血管内治療のすべて 基本から最新治療まで, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 302-307.
 - 25) 岩間 亨. 日本脳卒中学会専門医試験認定試験委員会編. 脳卒中専門医試験 問題・解説集, 東京: 中山書店; 2011年.
 - 26) 岩間 亨. 第三脳室腫瘍 Trans-Iamina terminalis approach: 富永悌二編. ビジュアル脳神経外科 Anatomy&Surgical Approach 4 脳室・松果体, 東京: メジカルビュー社; 2011年: 44-49.
 - 27) 岩間 亨, 矢野大仁, 中山則之, 大江直行, 吉村紳一. Posterior interhemispheric approach(occipital transtentorial approach: OTA): 微小神経外科解剖 脳外誌 20(suppl 2), 東京: 三輪書店; 2011年: 201-206.
 - 28) 岩間 亨. 脳室内へのアプローチ: 河本圭司, 本郷一博, 栗栖 薫編. イラストレイテッド脳腫瘍外科学, 東京: 医学書院; 2011年: 84-87.
 - 29) 吉村紳一. rt-PA 静注療法における適応外症例・無効例の診断と治療: 坂井信幸, 瓢子敏夫, 松丸祐司, 宮地 茂, 吉村紳一編. 脳血管内治療の進歩 2011, 東京: 診断と治療社; 2011年: 77-85.
 - 30) 坂井信幸(司会), 瓢子敏夫, 松丸祐司, 宮地 茂, 吉村紳一(コメンテーター). 急性期再開通療法の今後: 坂井信幸, 瓢子敏夫, 松丸祐司, 宮地 茂, 吉村紳一編. 脳血管内治療の進歩 2011, 東京: 診断と治療社; 2011年: 116-123.
 - 31) 榎本由貴子. 抗血小板療法マスター講座: 坂井信幸, 瓢子敏夫, 松丸祐司, 宮地 茂, 吉村紳一編. 脳血管内治療の進歩 2011, 東京: 診断と治療社; 2011年: 124-129.
 - 32) 江頭裕介, 吉村紳一. 動脈解剖 椎骨動脈系, 後頭咽頭動脈系, 脊髄: 滝 和郎編. 硬膜動脈静脈塞栓術ハンドブック, 東京: 診断と治療社; 2011年: 43-51.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 岩間 亨. 遠位部前大脳動脈瘤のクリッピング術, 脳神経外科速報 2009年; 19巻: 148-153.
- 2) 岩間 亨. 小脳血管芽細胞腫の摘出術, 脳神経外科速報 2009年; 19巻: 634-640.
- 3) 副田明男, 國貞隆弘, 岩間 亨. 幹細胞の光と影-iPS細胞・癌幹細胞が脳腫瘍研究を変える-, 脳神経外科速報 2009年; 19巻: 1046-1053.
- 4) 山田清文, 吉村紳一. 血管内治療のフロントライン-脳血管内治療を支える最新の薬物療法-, 分子脳血管病 2009年; 8巻: 59-65.
- 5) 辻本真範, 吉村紳一, 岩間 亨. ステンットの適応-治療成績-. 脳と循環-特集 無症候性頸動脈狭窄症- 2009年; 1巻: 153-156.
- 6) 篠田 淳, 浅野好孝, 矢野大仁. グリオーマ診療における ^{11}C -methionine PET の有用性-, Current Organ Topics: Central Nervous System Tumor -IV 2010年; 37巻: 1027-1033.
- 7) 山田清文, 吉村紳一, 岩間 亨. 頸動脈狭窄症におけるプラーク診断 専門医に求められる最新の知識, 脳神経外科速報 2010年; 20巻: 1044-1049.
- 8) 山田清文, 吉村紳一, 岩間 亨. アトルバスタチンは頸動脈プラークを安定化させる, 脳と循環 2011年; 16巻: 73-78.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 岩間 亨, 吉村紳一, 矢野大仁, 大江直行, 榎本由貴子, 山田清文, 高木俊則. 脳動静脈奇形摘出術の基本戦略, 脳卒中の外科 2009年; 37巻: 390-394.
- 2) 國枝琢也, 内山良一, 原 武史, 藤田広志, 加藤博基, 浅野隆彦, 兼松雅之, 星 博昭, 岩間 亨, 紀ノ定保臣, 横山和俊, 篠田 淳. 脳MR画像におけるラクナ梗塞と血管周囲腔拡大の鑑別法, 医用画像情報学会雑誌 2009年; 26巻: 59-63.
- 3) 吉村紳一. 頸動脈狭窄症治療-最新情報-, Gifu journal of radiological technologists 2009年; 72巻: 41-43.
- 4) 岩瀬正顕, 島 克司, 奥寺 敬, 加藤庸子, 安心院康彦, 井水秀栄, 鹿野 恒, 亀山元信, 末廣栄一, 中村文洋, 名取良弘, 平山晃康, 本多 満, 松前光紀, 吉村紳一, 佐野公俊, 河本圭司. 脳MR画像におけるラクナ梗塞と血管周囲腔拡大の鑑別法, 医用画像情報学会雑誌 2009年; 26巻: 59-63.
- 5) 矢野大仁, 大江直行, 榎本由貴子, 磯貝光治, 廣瀬善信, 坂田佳子, 原 明, 岩間 亨. 1歳女児 脈絡叢乳頭癌の1例, 藤田学園医学会誌 2009年; 33巻: 143-148.
- 6) 矢野大仁, 大江直行, 榎本由貴子, 岩間 亨, 松永研吾, 廣瀬善信. Rhabdoid change を伴った atypical meningioma の1例, 藤田学園医学会誌 2009年; 33巻: 149-154.
- 7) 大宝和博, 林 真也, 中山則之, 大江直行, 矢野大仁, 水田啓介, 岩間 亨, 星 博昭. Micro-multileaf collimator を用いた dynamic conformal arc 定位照射における Paddick-Lippitz gradient index による標的外線量減衰の急峻度評価, 定位放射線治療 2009年; 13巻: 1-9.
- 8) 山田実貴人, 山田法顕, 豊田 泉, 吉村紳一, 鈴木明文, 坂本哲也, 岩間 亨, 奥寺 敬, 小倉真治. off-the-job training としての脳卒中初期診療(ISLS)コース開催の経験, 脳卒中 2009年; 31巻: 1-9.
- 9) 中山則之, 奥村 歩, 篠田 淳, 岩間 亨. 意識障害診断における機能画像の有用性について-慢性期び慢性脳損傷患者での検討-, 臨床神経生理学 2009年; 37巻: 249.
- 10) 中山則之, 篠田 淳, 矢野大仁, 加藤貴之, 三輪和弘, 大江直行, 岩間 亨. GliomaのPET解析-Astrocytic tumors と Oligodendrocytic tumors の鑑別について-, CI研究 2009年; 31巻: 83-90.
- 11) 塩川芳昭, 栗田浩樹, 藤井清孝, 集計参加施設. 急性期破裂脳動脈瘤の治療選択の現状(第一報)-2005年前向き集計-, 脳卒中の外科 2009年; 37巻: 1-6.
- 12) 岩間 亨. 手術用顕微鏡の構造と特性-脳神経外科医に必要な知識-, 脳神経外科ジャーナル 2010年; 19巻: 504-509.
- 13) 岩間 亨, 大江直行, 中山則之, 矢野大仁, 吉村紳一. 頭蓋咽頭腫の経頭蓋アプローチ, 脳神経外科ジャーナル 2010年; 19巻: 681-688.
- 14) 岩間 亨, 矢野大仁, 中山則之, 大江直行, 吉村紳一. Posterior interhemispheric approach(occipital transtentorial approach: OTA), 脳神経外科ジャーナル 2010年; 19巻: 817-822.
- 15) 浅野龍紀, 内山良一, 浅野隆彦, 加藤博基, 原 武史, 周 向栄, 岩間 亨, 星 博昭, 紀ノ定保臣, 藤田広志. MRA画像における脳動脈領域の抽出法-大規模データベースを用いた評価-, 医用画像情報学会雑誌 2010年; 27巻: 55-60.
- 16) 吉村紳一. 主幹動脈急性閉塞症治療の最新動向, 脳神経外科速報 2010年; 20巻: 682-686.
- 17) 山田法顕, 中野志保, 豊田 泉, 吉村紳一, 岩間 亨, 古井辰郎, 小倉真治. 妊娠39週に脳梗塞を発症し血栓溶解療法を行った1例, 救急医学会誌 2010年; 21巻: 191-197.
- 18) 矢野大仁, 梅村 淳, 八十川雄図, 林 祐一, 中山則之, 大江直行, 野村悠一, 保住 功, 犬塚 貴, 岩間 亨. GPI-DBSが奏功したハンチントン病の1例, 機能的脳神経外科 2010年; 49巻: 120-124.
- 19) 澤田元史, 八十川雄図, 岩間 亨. 未破裂脳動脈瘤手術のビットホルダー動脈硬化合併例での問題点と手

- 術対策一, 脳卒中の外科 2010年; 38巻: 348-352.
- 20) 三輪和弘, 篠田 淳, 松尾政之, 矢野大仁. 悪性神経膠腫に対する低分割大量放射線治療, 日本臨牀 2010年; 68巻: 396-401.
- 21) 坂井信幸, 植田敏浩, 早川幹人, 長畑守雄, 大田慎三, 中原一郎, 木村和美, 吉村紳一, 江面正幸, 山崎信吾, 松本康史, 西野和彦, 豊田真吾, 山崎弘幸, 恩田敏之, 山上 宏, 今村博敏. MERCI リトリーバーを用いた急性脳動脈再開通療法—我が国における初期周術期成績—, JNET 2011年; 5巻: 23-31.
- 22) 大江直行, 野中裕康, 船戸道徳, 小関道夫, 加藤久和, 矢野大仁, 吉村紳一, 高見 剛, 岩間 亨. 後頭部皮下に発生した限局性 Ewing sarcoma/PNET の 1 例, 小児の脳神経 2011年; 36巻: 26-30.
- 23) 石黒光紀, 原 英彰. 脳梗塞及び脳出血に対する抗血小板剤シロスタゾールの保護作用, 薬学雑誌 2011年; 131巻: 513-521.
- 24) 江頭裕介, 吉村紳一. 動脈とくも膜の位置, プレインナーシング 2011年; 27巻: 662-663.
- 25) 江頭裕介, 吉村紳一. ウィリス動脈輪と脳動脈瘤の好発部位, プレインナーシング 2011年; 27巻: 664-665.
- 26) 田中嘉隆, 吉村紳一, 江頭裕介, 山田清文, 榎本由貴子, 岩間 亨. 脳底動脈急性閉塞症に対する積極的血管内再開通療法, 脳外誌 2011年; 20巻: 678-685.

原著 (欧文)

- 1) Yoshimura S, Kitajima H, Enomoto Y, Yamada K, Iwama T. Staged angioplasty for carotid artery stenosis to prevent postoperative hyperperfusion. *Neurosurgery*. 2009;64:122-128. IF 3.298
- 2) Yano H, Ohe N, Shinoda J, Yoshimura S, Iwama T. Immunohistochemical study concerning the origin of neurocytoma— A case report. *Pathol Oncol Res*. 2009;15:301-305. IF 1.483
- 3) Yano H, Ohe N, Nakayama N, Shinoda J, Iwama T. Clinicopathological features from long-term observation of a papillary tumor of the pineal region(PTPR): a case report. *Brain Tumor Pathol*. 2009;26:83-88. IF 1.129
- 4) Yamakawa H, Yoshimura S, Iwama T. Anterior spinal artery as a collateral channel in patients with acute bilateral vertebral artery occlusions—Two case reports—. *Neurol Med Chir (Tokyo)*. 2009;49:354-358. IF 0.677
- 5) Kato M, Ikegame Y, Toyoda I, Ogura S, Kitajima H, Yoshimura S, Iwama T. Hemispheric laminar necrosis as a complication of traumatic carotid-cavernous sinus fistula—case report—. *Neurol Med Chir(Tokyo)*. 2009;49:26-29. IF 0.677
- 6) Soeda A, Park M, Lee D, Mintz A, Androutsellis-Theokis A, McKay RD, Engh J, Iwama T, Kunisada T, Kassam AB, Pollack IF, Park DM. Hypoxia promotes expansion of the CD133-positive glioma stem cells through activation of HIF-1alpha. *Oncogene*. 2009;28:3949-3959. IF 7.414
- 7) Nonaka Y, Koumura K, Hyakkoku K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. Combination treatment with normobaric hyperoxia and cilostazol protects mice against focal cerebral ischemia-induced neuronal damage better than each treatment alone. *J Pharmacol Exp Ther*. 2009;330:13-22. IF 4.017
- 8) Nonaka Y, Tsuruma K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara H. Cilostazol protects against hemorrhagic transformation in mice transient focal cerebral ischemia-induced brain damage. *Neurosci Lett*. 2009;452:156-161. IF 2.055
- 9) Yamashita K, Nakashima S, You F, Hayashi S, Iwama T. Overexpression of immediate early gene X-1 (IEX-1) enhances γ -radiation-induced apoptosis of human glioma cell line, U87-MG. *Neuropathology*. 2009;29:20-24. IF 1.605
- 10) Oka N, Soeda A, Noda S, Iwama T. Brain tumor stem cells from an adenoid glioblastoma multiforme. *Neurol Med Chir (Tokyo)*. 2009;49:146-151. IF 0.677
- 11) Enomoto Y, Adachi S, Mastushima-Nishiwaki R, Niwa M, Tokuda H, Akamatsu S, Doi T, Kato H, Yoshimura S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O. α B-crystallin extracellularly suppresses ADP-induced granule secretion from human platelets. *FEBS Lett*. 2009;583:2464-2468. IF 3.601
- 12) Doi T, Adachi S, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Minamitani C, Otsuka T, Tokuda H, Akamatsu S, Iwama T, Kozawa O, Ogura S. Antithrombin III suppresses ADP-induced platelet granule secretion: inhibition of HSP27 phosphorylation. *Arch Biochem Biophys*. 2009;489:62-67. IF 3.022
- 13) Hanai Y, Adachi S, Yasuda I, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Akamatsu S, Sakakibara S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O, Tokuda H. Collagen-induced p38 MAP kinase activation is a biomarker of platelet hyper-aggregation in patients with diabetes mellitus. *Life Sci*. 2009;85:386-394. IF 2.451
- 14) Okada M, Saio M, Kito Y, Ohe N, Yano H, Yoshimura S, Iwama T, Takami T. Tumor-associated macrophage/microglia infiltration in human gliomas is correlated with MCP-3, but not MCP-1. *Int J Oncol*. 2009;34:1621-1627. IF 2.571
- 15) Watarai H, Kaku Y, Yamada M, Kokuzawa J, Tnaka T, Andoh T, Iwama T. Follow-up study on in-stent thrombosis after carotid stenting using multidetector CT angiography. *Neuroradiology*. 2009;51:243-251. IF 2.870
- 16) Yamada K, Yoshimura S, Kawasaki M, Enomoto Y, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Effects of

- atorvastatin on carotid atherosclerotic plaques: a randomized trial for quantitative tissue characterization of carotid atherosclerotic plaques with integrated backscatter ultrasound. *Cerebrovasc Dis.* 2009;28:417-424. IF 2.987
- 17) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Yamada K, Yamakawa H, Iwama T, Hirose Y. Fluid–fluid level formation: a rare finding of extracranial head and neck schwannomas. *Am J Neuroradiol.* 2009; 30:1451-1453. IF 3.464
- 18) Hayashi S, Yamamoto A, You F, Yamashita K, Ikegame Y, Tawada M, Yoshimori T, Shimizu S, Nakashima S. The stent–eluting drugs sirolimus and paclitaxel suppress healing of the endothelium by induction of autophagy. *Am J Pathol.* 2009;175:2226-2234. IF 5.224
- 19) Hayashi S, Sato N, Yamamoto A, Ikegame Y, Nakashima S, Ogihara T, Morishita R. Alzheimer disease–associated peptide, amyloid beta40, inhibits vascular regeneration with induction of endothelial autophagy. *Arterioscler Thromb Vasc Biol.* 2009;29:1909-1915. IF 7.215
- 20) Matsuo M, Miwa K, Shinoda J, Kato N, Nishibori H, Sakurai K, Yano H, Iwama T, Kanematsu M. Target definition by C11–methionine–PET for the radiotherapy of brain metastasis. *Int J Radiat Oncol Biol Phys.* 2009;74:714-722. IF 4.503
- 21) Araki Y, Furuichi M, Nokura H, Iwata T, Iwama T. Prediction of stroke rehabilitation outcome with xenon-enhanced computed tomography cerebral blood flow study. *J Stroke Cerebrovasc Dis.* 2010;19:450-457.
- 22) Shinohara Y, Katayama Y, Uchiyama S, Yamaguchi T, Handa S, Matsuoka K, Ohashi Y, Tanahashi N, Yamamoto H, Genka C, Kitagawa Y, Kusuoka H, Nishimaru K, Tsushima M, Koretsune Y, Sawada T, Hamada C. CSPS 2 group: Cilostazol for prevention of secondary stroke (CSPS 2): an aspirin-controlled, double-blind, randomized non-inferiority trial. *Lancet Neurol.* 2010;9:959-968. IF 21.659
- 23) Yoshimura S, Egashira Y, Enomoto Y, Yamada K, Yano H, Iwama T. Superficial temporal artery to middle cerebral artery double bypass via a small craniotomy -Technical Note-. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2010;50:956-959. IF 0.677
- 24) Yoshimura S, Kawasaki M, Hattori A, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. Demonstration of intraluminal thrombus in the carotid artery by optical coherence tomography: technical case report. *Neurosurgery.* 2010;67:E305. IF 3.298
- 25) Ozeki M, Funato M, Teramoto T, Ohe N, Asano T, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Reversible cerebrospinal fluid edema and porencephalic cyst, a rare complication of ventricular catheter. *J Clin Neurosci.* 2010;17:658-661. IF 1.165
- 26) Ishiguro M, Mishiro K, Fujiwara Y, Chen H, Izuta H, Tsuruma K, Shimozawa M, Yoshimura S, Satoh M, Iwama T, Hara H. Phosphodiesterase-III inhibitor prevents hemorrhagic transformation induced by focal cerebral ischemia in mice treated with tPA. *PloS One.* 2010;5:e15178. IF 4.411
- 27) Enomoto Y, Yoshimura S, Yamada K, Iwama T. Convulsion during intra-arterial infusion of fasudil hydrochloride for the treatment of cerebral vasospasm following subarachnoid hemorrhage. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2010;50:7-11. IF 0.677
- 28) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Doi T, Niwa M, Akamatsu S, Tokuda H, Ogura S, Yoshimura S, Iwama T, Kozawa O. Thromboxane A2 promotes soluble CD40 ligand release from human platelets. *Atherosclerosis.* 2010;209:415-421. IF 4.086
- 29) Kato H, Adachi S, Doi T, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Akamatsu S, Enomoto Y, Tokuda H, Otsuka T, Iwama T, Kozawa S, Ogura S. Mechanism of collagen-induced release of 5-HT, PDGF-AB and sCD40L from human platelets: Role of HSP27 phosphorylation via p44/p42 MAPK. *Thromb Res.* 2010;126:39-43. IF 2.372
- 30) Doi T, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Natsume H, Kato K, Mizutani J, Otsuka T, Tokuda H, Akamatsu S, Iwama T, Kozawa O, Ogura S. Antithrombin III reduces collagen-stimulated granule secretion of PDGF-AB and the release of soluble CD40 ligand from human platelets. *Int J Mol Med.* 2010;26:387-392. IF 1.814
- 31) Yamada K, Kawasaki M, Yoshimura S, Enomoto Y, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Prediction of silent ischemic lesions after carotid artery stenting using integrated backscatter ultrasound and magnetic resonance imaging. *Atherosclerosis.* 2010;208:161-166. IF 4.086
- 32) Ikegame Y, Yamashita K, Hayashi S, Yoshimura S, Nakashima S, Iwama T. Neutrophil elastase inhibitor prevents ischemic brain damage via reduction of vasogenic edema. *Hypertens Res.* 2010;33:703-707. IF 2.353
- 33) Takagi T, Yoshimura S, Yamada K, Enomoto Y, Iwama T. Angioplasty and stenting of totally occluded common carotid artery at the chronic stage -Case report-. *Neurol Med Chir (Tokyo).* 2010;50:998-1000. IF 0.677
- 34) Yoshimura S, Kawasaki M, Yamada K, Hattori A, Nishigaki K, Minatoguchi S, Iwama T. OCT of human carotid plaques. *JACC Cardiovasc Imag.* 2011;4:432-436. IF 5.528
- 35) Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Asano T, Kanematsu M, Takamatsu M, Hara A, Iwama T. High-intensity signal on time-of-flight magnetic resonance angiography indicates carotid plaques at high risk for cerebral embolism during stenting. *Stroke.* 2011;42:3132-3137. IF 5.756
- 36) Ishiguro M, Suzuki Y, Mishiro K, Kakino M, Tsuruma K, Shimazawa M, Yoshimura S, Iwama T, Hara

- H. Blockade of phosphodiesterase-III protects against oxygen-glucose deprivation in endothelial cells by upregulation of VE-cadherin. *Curr Neurovasc Res.* 2011;8:86-94. IF 3.047
- 37) Enomoto Y, Adachi S, Doi T, Natsume H, Kato K, Matsushima- Nishiwaki R, Akamatsu S, Tokuda H, Yoshimura S, Otsuka T, Ogura S, Kozawa O, Iwama T. cAMP regulates ADP-induced HSP27 phosphorylation in human platelets. *Int J Mol Med.* 2011;27:695-700. IF 1.814
- 38) Enomoto Y, Yoshimura S, Egashira Y, Iwama T. Transarterial embolization for cervical hemangioma associated with kasabach-merritt syndrome-case report-. *Neurol Med Chir(Tokyo).* 2011;5:375-378. IF 0.677
- 39) Okada M, Yano H, Nakayama N, Ohe N, Shinoda J, Iwama T. Olig2 is useful in the differential diagnosis of oligodendrogliomas and extraventricular neurocytomas. *Brain Tumor Pathol.* 2011;28:157-161. IF 1.129
- 40) Takenaka S, Shinoda J, Asano Y, Aki T, Miwa K, Ito T, Yokoyama K, Iwama T. etabolic assessment of monofocal acute inflammatory demyelination using MR spectroscopy and 11C-methionine-, 11C-choline-, and 18F-fluorodeoxyglucose-PET. *Brain Tumor Pathol.* 2011;28:229-238. IF 1.129
- 41) Egashira Y, Takahashi JC, Ohnishi H, Kawasaki Y, Higashigawa M, Iihara K, Miyamoto S. Surgical treatment and perioperative management of moyamoya disease associated with glycogen storage disease Type 1a. *J Neurosurg Pediatrics.* 2011;7:11-14. IF 2.739
- 42) Yamada K, Kawasaki M, Yoshimura S, Enomoto Y, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Evaluation of symptomatic carotid plaques by tissue characterization using integrated backscatter ultrasound and magnetic resonance imaging. *Cerebrovasc Dis.* 2011;31:305-312. IF 2.987
- 43) Yamada K, Yoshimura S, Kawasaki M, Enomoto Y, Asano T, Hara A, Minatoguchi S, Iwama T. Embolic complications after carotid artery stenting or carotid endarterectomy are associated with tissue characteristics of carotid plaques evaluated by magnetic resonance imaging. *Atherosclerosis.* 2011;215:399-404. IF 4.086
- 44) Yamada K, Yoshimura S, Kawasaki M, Enomoto Y, Takano K, Asano T, Minatoguchi S, Iwama T. Prediction of silent ischemic lesions after carotid artery stenting using virtual histology intravascular ultrasound. *Cerebrovasc Dis.* 2011;32:106-113. IF 2.987
- 45) Ikegame Y, Yamashita K, Hayashi SI, Mizuno H, Tawada M, You F, Yamada K, Tanaka Y, Egashira Y, Nakashima S, Yoshimura SI, Iwama T. Comparison of mesenchymal stem cells from adipose tissue and bone marrow for ischemic stroke therapy. *Cytotherapy.* 2011;13:675-685. IF 2.925
- 46) Toyoshima Y, Asano Y, Shinoda J, Takenaka S, Aki T, Iwama T. A speech expression disorder in patients with severe diffuse brain injury who emerged from a vegetative or minimally conscious state. *Brain Injury.* 2011;25:1212-1220. IF 1.750

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：吉村紳一，研究分担者：岩間 亨，大江直行，榎本由貴子，山田清文；科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究：脂肪由来間葉系幹細胞を用いた脳虚血に対する移植再生療法の確立；平成 19-21 年度；3,200 千円(1,000：1,300：900 千円)
- 2) 研究代表者：吉村紳一，研究分担者：岩間 亨，中島 茂，國貞隆弘，林 真一郎，研究協力者：原英彰，池亀由香，田中嘉隆；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」：自家移植のためのヒト脂肪幹細胞移植の培養・移植法の確立；平成 21 年度；2,000 千円
- 3) 研究代表者：岡田 誠；科学研究費補助金若手研究(B)：ヒトグリオーマの産生するケモカインと腫瘍内浸潤マクロファージの分析；平成 21-22 年度；2,730 千円(2,080：650 千円)
- 4) 研究代表者：山田清文；科学研究費補助金若手研究(B)：脳腫瘍のルーツ；平成 20-21 年度；4,290 千円(2,210：2,080 千円)
- 5) 研究代表者：山田清文；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：超音波と Magnetic Resonance Image(MRI)による頸動脈プラーク診断と脳梗塞発症の予測予防；平成 21 年度；1,000 千円
- 6) 研究代表者：吉村紳一，研究分担者：岩間 亨，矢野大仁，榎本由貴子，山田清文，大江直行；科学研究費補助金基盤研究(B)：脳虚血への自家移植を目指したヒト脂肪組織由来幹細胞の分離培養法の確立；平成 22-24 年度；14,430 千円(4,550：4,680：5,200 千円)
- 7) 研究代表者：吉村紳一；財団法人先進医薬研究振興財団平成 22 年度(第 9 回) 循環医学分野一般研究助成：超急性期脳梗塞に対する血管内救済療法の効果に関する全国的前向き登録研究；平成 22-23 年度；1,000 千円
- 8) 研究代表者：原 英彰，研究分担者：吉村紳一，江頭裕介；臨床研究推進支援経費：脂肪組織由来幹細胞およびその分泌因子を用いた脳虚血および網膜変性疾患に対する治療法の開発；平成 23 年度；1,000 千円
- 9) 研究代表者：石黒光紀；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：tPA と塩酸ファスジル併用療法における脳梗塞，出血性梗塞に対する効果の検討；平成 23 年度；500 千円

- 10) 研究代表者：榎本由貴子；学術研究助成基金助成金若手研究（B）：血小板凝集能・血小板活性化マーカーを用いた抗体血小板療法モニタリング；平成 23-24 年度；4,030 千円(2,080：1,950 千円)
- 11) 研究代表者：副田明男；研究科長・医学部長裁量経費(国内外留学帰学者支援)；平成 23 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 岩間 亨, 吉村紳一, 矢野大仁, 山川春樹, 大江直行, 中山則之：シロスタゾールの市販後臨床試験—脳梗塞に対するアスピリンとの比較における検証的試験—；平成 17-21 年；1,390,389 円：大塚製薬(株)
- 2) 岩間 亨：テモダールカプセル全例調査特定使用成績調査；平成 18-27 年；0 円：シェリング・プラウ(株)
- 3) 岩間 亨：頸動脈用プリサイス・アンジオガード XP 使用成績調査；平成 20-22 年；0 円：ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
- 4) 吉村紳一, 榎本由貴子, 山田清文：頸動脈ステント留置術後の血管イベントの発症に関する前向き観察研究(IDEALCAST)；平成 20-23 年；945,000 円：財団法人先端医療振興財団
- 5) 岩間 亨：ガバペン錠使用成績調査；平成 20-27 年；900,900 円(600,600：300,300 円)：ファイザー(株)
- 6) 吉村紳一, 榎本由貴子, 山田清文：脳血管内治療の術後抗血栓療法に関する研究(ACCOUNT)；平成 21-22 年；787,500 円：財団法人先端医療振興財団
- 7) 大江直行, 吉村紳一, 矢野大仁, 中山則之：アートセレブ脳脊髄手術用洗浄灌流液使用成績調査(神経内視鏡手術症例)；平成 21-23 年；150,150 円：(株)大塚製薬工場
- 8) 矢野大仁, 大江直行, 中山則之：トピナ錠の部分てんかん患者を対象とした製造販売後臨床試験(漸増法比較試験)；平成 21-23 年；3,998,280 円(3,958,240：40,040 円)協和発酵キリン(株)
- 9) 大江直行：ギャバロン髄注シンクロメッドポンプシステム使用成績調査；平成 21-25 年；645,645 円(360,360：240,240：45,045 円)：第一三共(株)
- 10) 矢野大仁, 大江直行, 中山則之：トピナ錠 50 mg, 100 mg 使用成績調査；平成 22-23 年；150,150 円：協和発酵キリン(株)
- 11) 矢野大仁, 大江直行, 中山則之：トピナ錠 50 mg, 100 mg 特定使用成績調査；平成 22-24 年；225,225 円：協和発酵キリン(株)
- 12) 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介, 山田清文：頸動脈用ウォールステント モノレール/フィルターワイヤーEZ 使用成績調査；平成 22-24 年；300,300 円(150,150：150,150 円)：ボストン・サイエンティックジャパン(株)
- 13) 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介：ガードワイオヤ・プロテクションシステム使用成績調査；平成 22-24 年；150,150 円：日本メドトロニック(株)
- 14) 岩間 亨：アレピアチン副作用詳細報告；平成 22-24 年；30,030 円：大日本住友製薬(株)
- 15) 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介, 山田清文：脳 AVM における ONYX 液体塞栓システムの製造販売後使用成績調査；平成 22-25 年；150,150 円：イーヴィースリー(株)
- 16) 岩間 亨, 矢野大仁, 大江直行, 中山則之, 榎本由貴子, 江頭裕介, 田中嘉隆, 池亀由香, 船津奈保子：ラジカット特定使用成績調査(発症後 4.5 時間以内の脳梗塞急性期に対する調査)；平成 22-25 年；600,600 円：田辺三菱製薬(株)
- 17) 大江直行：ギャバロン髄注シンクロメッドポンプシステム特定使用成績調査；平成 22-25 年；90,090 円(45,045：45,045 円)：第一三共(株)
- 18) 吉村紳一, 榎本由貴子, 江頭裕介, 山田清文：Merci リトリーバーの使用成績調査；平成 22-25 年；600,600 円(300,300：300,300 円)：センチュリーメディカル(株)
- 19) 吉村紳一, 榎本由貴子：コッドマン エンタープライズ VRD 使用成績調査；平成 22-27 年；1,201,200 円(360,360：840,840 円)：ジョンソン・エンド・ジョンソン(株)
- 20) 吉村紳一, 江頭裕介, 榎本由貴子：頸動脈ステント留置術後の再狭窄に対するシロスタゾールの効果に関する多施設共同無作為化比較試験(CAS-CARE)；平成 23-26 年；84 千円：財団法人先端医療振興財団

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 横田廣志, 岩間 亨, 他 2 名 : 医用画像処理装置(発明) ; 平成 23 年(登録番号 4823204)

6. 学会活動

1) 学会役員

岩間 亨 :

- 1) 社団法人日本脳神経外科学会評議員(～現在)
- 2) 社団法人日本脳神経外科学会代議員(～現在)
- 3) 社団法人日本脳神経外科学会中部支部理事(～現在)
- 4) 日本脳卒中学会評議員(～現在)
- 5) 日本脳卒中の外科学会運営委員(～現在)
- 6) 日本脳腫瘍の外科学会評議員(～現在)
- 7) 日本小児神経外科学会世話人(～現在)
- 8) 日本脳ドック学会評議員(～現在)
- 9) 脳神経外科手術と機器学会運営委員(～現在)

吉村紳一 :

- 1) 日本脳神経血管内治療学会運営委員及び教育委員長(～現在)
- 2) 社団法人日本脳神経外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本脳神経外科コンgres運営委員(～現在)
- 4) Mt Fuji Workshop on CVD 運営委員(～現在)
- 5) 日本脳神経外科学会国際小委員会委員(～現在)
- 6) 日本脳卒中の外科学会代議員(～現在)

矢野大仁 :

- 1) 社団法人日本脳神経外科学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

岩間 亨 :

- 1) 脳神経外科 ; 編集同人(～現在)
- 2) 脳神経外科ジャーナル ; 編集委員(～平成 21 年 5 月)
- 3) Neurologia medico-chirurgica ; Review Board(～現在)
- 4) 脳と循環 ; 編集アドバイザー(～現在)

吉村紳一 :

- 1) Neurotrauma Research ; Editonal Board(～現在)
- 2) Journal of Neuroendovascular Therapy ; 副編集委員長(～現在)
- 3) Neurologia medico-chirurgica ; Review Board(～現在)
- 4) 脳神経外科ジャーナル ; 査読委員(～現在)
- 5) ブレインナーシング ; 編集同人(～現在)
- 6) Journal of Stroke and Cerebrovascular disease ; Review Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

岩間 亨 :

- 1) Stroke2009(第 34 回日本脳卒中学会総会 第 38 回日本脳卒中の外科学会 第 25 回スパズム・シンポジウム)(平成 21 年 3 月, 松江, 合同シンポジウム「脳動脈狭窄・閉塞の病態と治療」座長)
- 2) 第 18 回脳神経手術と機器学会(平成 21 年 4 月, 秋田, イブニングセミナー「バイパス術のすべて-基本から実践まで-」シンポジスト)
- 3) Swiss-Japanese Neurosurgical Joint Meeting 2009(平成 21 年 7 月, Zurich, Friday Morning「Vascular」)座長)

- 4) 第 25 回ブレイン・ファンクション・イメージング・カンファレンス(平成 21 年 9 月, 東京, 「脳血管障害における画像診断の進歩」座長)
- 5) 第 68 回社団法人日本脳神経外科学会学術総会(平成 21 年 10 月, 東京, ビデオシンポジウム「血栓化脳動脈瘤の治療戦略」座長)
- 6) 9th International Conference on Cerebrovascular Surgery(平成 21 年 11 月, 名古屋, Luncheon Video Seminar 「Tips and pitfalls of posterior circulation aneurysms surgery.」座長)
- 7) 第 60 回日本病院学会(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演「ミステリーで終わらない死因究明と画像診断」座長)
- 8) 第 69 回日本脳神経外科学会学術総会(平成 22 年 10 月, 福岡, ビデオシンポジウム「困難な脳動脈瘤の治療戦略」座長)
- 9) 第 16 回日本脳神経外科救急学会(平成 23 年 1 月, 名古屋, シンポジウム「脳神経治療/プレホスピタルケア・ドクターヘリ」座長)
- 10) 第 20 回日本脳ドック学会総会(平成 23 年 7 月, 東京, モーニングセミナー「未破裂脳動脈瘤に対する血管内治療-安全に coiling するための工夫」 「無症候性未破裂脳動脈瘤に対する外科治療」座長)
- 11) 第 70 回日本脳神経外科学会学術総会(平成 23 年 10 月, 横浜, シンポジウム「非出血性脳動脈解離の治療戦略と overall result」座長)

吉村紳一：

- 1) 9th International Conference on Cerebrovascular Surgery(平成 21 年 11 月, 名古屋, Tea-break Seminar 「Techno-engineering in neurovascular surgery」座長)
- 2) 第 27 回日本脳神経血管内治療学会学術総会(平成 23 年 11 月, 千葉, シンポジウム「虚血急性期治療:t-PA 静注療法, 機械的血栓除去術, 頸動脈の血栓溶解療法を駆使」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 吉村紳一：2009 Asian-Australasian Interventional Neuroradiology/Surgery Forum (INR Forum 2009)Poster Award(平成 21 年度)
- 2) 山田清文：平成 21 年度岐阜県脳神経外科懇話会優秀論文賞(平成 21 年度)
- 3) 吉村紳一：日本頸部脳血管治療学会学術総会賞(平成 22 年度)
- 4) 吉村紳一：日本脳神経血管内治療学会優秀論文賞(銅賞)(平成 22 年度)
- 5) 山田清文：平成 22 年度岐阜県脳神経外科懇話会優秀論文賞(平成 22 年度)
- 6) 田中嘉隆：第 78 回日本脳神経外科学会中部支部学術集会優秀論文賞(平成 22 年度)
- 7) 榎本由貴子：第 27 回日本脳神経血管内治療学会学術総会ポスター賞(銀賞)(平成 23 年度)
- 8) 江頭裕介：第 79 回日本脳神経外科学会中部支部学術集会優秀論文賞(平成 23 年度)
- 9) 江頭裕介：第 10 回日本頸部脳血管治療学会優秀ポスター賞(平成 23 年度)

9. 社会活動

岩間 亨：

- 1) 岐阜労働局地方労災医員(～現在)
- 2) 岐阜県医師会外科医部会顧問(～現在)
- 3) 岐阜県医師会労災指定医部会顧問(～現在)
- 4) 岐阜県成人病検診管理指導協議会循環器疾患等委員会委員(～現在)
- 5) 岐阜地方裁判所所属専門委員(～現在)
- 6) 中部療護センター入院審査委員会委員長(～現在)
- 7) 社団法人日本脳卒中協会岐阜県支部支部長(～現在)
- 8) 岐阜県立病院医療事故審査委員会委員(～現在)
- 9) 秋田県立脳血管研究センター研究外部評価委員(～現在)
- 10) 厚生労働省「脳死下での臓器提供事例に係る検証会議」医学的検証作業グループ(～現在)
- 11) 岐阜大学医師会会長(～現在)
- 12) 岐阜県難病医療連絡協議会会長(～現在)
- 13) 岐阜市救急医療体制協議会委員(平成 22 年 6 月～現在)
- 14) 岐阜県医療審議会委員(平成 22 年 7 月～現在)
- 15) 岐阜県社会保険診療報酬請求書審査委員会学識経験者審査委員選考協議会委員(平成 23 年度～現在)

吉村紳一：

- 1) 社団法人日本脳卒中協会岐阜県支部副支部長(～現在)
- 2) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(～現在)
- 3) 独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 山田清文：脳腫瘍のルーツ：平成 20-21 年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書(平成 21 年 3 月)
- 2) 岡田 誠：ヒトグリオーマの産生するケモカインと腫瘍内浸潤マクロファージの分析：平成 21-22 年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書(平成 22 年 3 月)

11. 報道

- 1) 吉村紳一：リアルタイムの特集 もやもや病のバイパス手術 脳動脈瘤の血管内治療：中京テレビ(2010 年 3 月 18 日)
- 2) 岩間 亨：診察室からこんにち話：岐阜新聞(2010 年 4 月 23 日)
- 3) 岩間 亨：病院長を拝命して：岐阜大学医学部記念会館だより第 92 号(2010 年 5 月 1 日)
- 4) 吉村紳一：教えてホームドクター 脳卒中予防のすすめ「くも膜下出血」：岐阜新聞(2010 年 5 月 3 日)
- 5) 吉村紳一, 村山雄一：知って得する！新名医の最新治療 Vol.131 脳動脈瘤(未破裂)：週刊朝日(2010 年 5 月 21 日)
- 6) 吉村紳一：教えてホームドクター 脳卒中予防のすすめ「脳梗塞」：岐阜新聞(2010 年 6 月 21 日)
- 7) 岩間 亨：病院長に就任して：鶴舟第 15 号(2010 年 6 月 30 日)
- 8) 岩間 亨：医療人としてのライトスタッフ：岐阜県病院時報第 54 号(2010 年 6 月 30 日)
- 9) 岩間 亨：よくある頭痛とまれな頭痛：岐阜県保険医新聞第 390 号(2010 年 8 月 10 日)
- 10) 岩間 亨：つなごう医療 34 中部の最前線「夏山診療所」：中日新聞(2010 年 8 月 24 日)
- 11) 吉村紳一：教えてホームドクター 脳卒中予防のすすめ「脳出血」：岐阜新聞(2010 年 8 月 30 日)
- 12) 岩間 亨：附属病院の現状と将来について：岐阜大学医学部記念会館だより第 93 号(2010 年 9 月 1 日)
- 13) 吉村紳一：前線第 7 回 頸動脈狭窄症に対するステント留置術 体にやさしい血管治療：日本脳神経財団ニュース BRAIN 101 P4-5(2010 年 10 月 10 日)
- 14) 吉村紳一：教えてホームドクター 脳卒中予防のすすめ「くも膜下出血」動脈瘤あれば手術 破裂率, 大きいほど高く：岐阜新聞(2010 年 11 月 1 日)
- 15) 吉村紳一, 塩川芳昭：脳梗塞：週刊朝日(2010 年 11 月 26 日)
- 16) 吉村紳一：岐阜大学医学部附属病院紹介 脳神経外科：岐阜県医師会報 P14-15(2010 年 12 月 1 日)
- 17) 吉村紳一：週刊☆コダワリタイム：中京テレビ(2010 年 12 月 19 日)
- 18) 吉村紳一：ラジオ健康情報番組「明日も元気」テーマ 脳卒中予防について：TBS ラジオ SBS ラジオ CBC ラジオ(2010 年 12 月 27 日～31 日)
- 19) 岩間 亨：附属病院の現状報告：岐阜大学医学部記念会館だより第 94 号(2011 年 1 月 1 日)
- 20) 吉村紳一：名医が太鼓判「わが町の腕利き 300 人図鑑」：プレジデント 2011 年 1.3 号
- 21) 吉村紳一：教えてホームドクター「脳卒中予防のすすめ 動脈瘤の治療法」：岐阜新聞(2011 年 1 月 10 日)
- 22) 吉村紳一：「日本の名医 2011」 「開頭手術と脳血管内治療の『二刀流』の達人」：週刊現代(2011 年 2 月 19 日号)
- 23) 吉村紳一：『手術数でわかる いい病院全国&地方別データブック 2011』：週刊朝日 MOOK(2011 年 2 月 25 日)
- 24) 吉村紳一：ラジオ「あったか応援団 元気な介護」：衛星放送デジタルラジオ ミュージックバー ドSPACE 他 全国コミュニティ FM61 局(2011 年 3 月 2 日, 3 月 9 日)
- 25) 吉村紳一：教えてホームドクター「脳卒中予防のすすめ 脳動脈瘤手術の進歩」：岐阜新聞(2011 年 3 月 14 日)
- 26) 吉村紳一：教えてホームドクター「脳動脈瘤の血管内治療」：岐阜新聞(2011 年 5 月 16 日)
- 27) 吉村紳一：教えてホームドクター「クリッピング術」：岐阜新聞(2011 年 7 月 25 日)
- 28) 岩間 亨：附属病院の現状と将来について：岐阜大学医学部記念会館だより第 96 号(2011 年 9 月 1

日)

29) 吉村紳一：教えてホームドクター「治療困難な脳動脈瘤」：岐阜新聞(2011年10月3日)

30) 吉村紳一：教えてホームドクター「ラクナ脳梗塞」：岐阜新聞(2011年12月5日)

12. 自己評価

評価

急性期脳虚血に対する各種薬剤ならびに脂肪組織由来幹細胞投与における脳保護効果に関して新たな知見が得られ、今後さらなる発展と臨床への応用が期待される。血小板放出因子と動脈硬化との関連、ならびに各種抗血小板剤の影響に関する研究においても臨床応用に直結する成果が得られている。

悪性脳腫瘍の再発と放射線壊死の鑑別に関する臨床研究において新たな診断法が開発されつつある。

現状の問題点及びその対応策

それぞれのテーマにおいて更なる研究の展開が期待される中で、現在の最大の問題点は研究人員の不足と研究体制の確立にある。

研究人員の増加を短期間に達成する事は困難であるため、長期的展望に立って研究者を育成していく必要がある。また、現在それぞれ異なった基礎講座との共同研究が主体となっているが、トランスレーショナルリサーチをさらに進めるためにも、脳神経外科に所属する臨床医、基礎研究者が常に顔を合わせて研究に関する討論が自然に生まれることが大切で、研究拠点を脳神経外科内に設立すべく整備を進めている。

今後の展望

現在なお治療成績が不良である悪性脳腫瘍と、ますますの増加が予想される脳虚血に対する新たな治療法の開発は、脳神経外科学領域において今後も重要な課題である。

悪性脳腫瘍の臨床的治療成績は統合的画像診断の応用で少しずつ進歩しているが、更なる治療効果を得るためには免疫療法、脳瘍幹細胞の分離を基にしたテーラーメイド治療などが必要であり、基礎研究とともに臨床応用を目指したトランスレーショナルリサーチをさらに進める必要がある。

脳虚血の治療に関しては、これまでの虚血に対する脳保護という受動的観点から、障害された機能を取り戻すという再生医療の導入、さらには、脳虚血の原因である脳動脈硬化を積極的に抑制するという戦略のシフトが予想される。脳虚血保護に関するこれまでの研究成果の臨床応用を進めると同時に、神経再生、脳動脈硬制御を目指した基礎的、臨床的研究に取り組んでいきたい。

(7) 耳鼻咽喉科学分野

1. 研究の概要

1) めまい・平衡障害に関するもの

めまい・平衡障害患者に各種平衡機能検査を行い、疾患の素因や病像、めまい平衡障害の臨床的病態をとらえ、その成果を治療にフィードバックしている。静的平衡機能検査の一つである重心動揺検査では平衡障害の病巣診断精度向上のため、マハラノビス・タグチ法や最大リアプノフ指数による解析評価を試みている。動的平衡機能検査の足踏み検査では、フォースプレートを導入し足底圧変化と踏み替えリズムの評価を可能とした。歩行制御機能解析にも応用可能である。

立位時の身体動揺を測定し、バイオメカニカルモデルを構築し、身体動揺の神経制御機構を PID (proportional integral derivative) 制御方式を採用して検証している。

メニエール病の病態である内リンパ水腫に関連性がある水代謝系ホルモンのバズプレッシンについて研究している。発症因子としての役割や、メニエール病の発症因子ならびに予後因子としての役割について、臨床および基礎研究を行っている。バズプレッシンをパラメーターとして、内耳圧制御を目的にした鼓膜チューブ留置術および中耳加圧治療を行い、良好な結果を得ている。

起立性循環調節には圧受容器反射によるネガティブフィードバック機構が重要であるが、前庭器によるフィードフォワード系制御である前庭交感神経反射が関与していることを報告した。また、めまい症例がしばしば訴える起立性調節障害における前庭交感神経反射の関与を検証するとともに、前庭電気刺激によるめまい治療の臨床応用を検討している。

老化促進マウスを用い、老人性難聴ならびに老化にともなう平衡障害の発生機序ならびに発生予防について内分泌ホルモンなどの観点から検討している。

めまい・平衡医学の効果的な卒前教育をチュートリアルコースと臨床実習において実現する方法を研究している。

2) 頭頸部腫瘍に関するもの

頭頸部癌に対する化学放射線治療の有効性、安全性に関して、ならびに機能温存に関して、臨床検討を行っている。頭頸部癌手術後の患者の QOL 低下の防止に関して、再建術式の臨床的検討を行っている。

頭頸部癌を腫瘍免疫の観点から研究している。大阪府立成人病センター研究所分子遺伝学部門の協力を得て進めている。臨床へのフィードバックを計画している。

3) 内耳再生に関するもの

内耳性難聴は治療に抵抗する非可逆的なものが多い。組織・器官形成分野の協力を得て内耳再生の研究を進めている。

2. 名簿

教授：	伊藤八次	Yatsuji Ito
准教授：	水田啓介	Keisuke Mizuta
講師：	青木光広	Mitsuhiro Aoki
講師：	久世文也	Bunya Kuze
講師：	加藤久和	Hisakazu Kato
臨床講師：	西堀丈純	Takezumi Nishihori
臨床講師：	山田南星	Nansei Yamada
臨床講師：	林 寿光	Hisamitsu Hayashi
医員：	出原啓一	Keiichi Izuhara
医員：	若岡敬紀	Takanori Wakaoka
医員：	滝脇正人	Masato Takiwaki
医員：	内藤裕介	Yusuke Naito
医員：	柴田博史	Hirofumi Shibata

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 伊藤八次, 出原啓一. 前庭系のリハビリテーション: 内野善生, 古屋信彦編. 日常臨床に役立つ めまいと平衡障害, 東京: 金原出版; 2009年: 156-161.
- 2) 水田啓介, 青木光広. 喉の違和感: 森田浩之編. いきなり名医! 見分けが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年; 9巻: 103-106.

- 3) 青木光広, 水田啓介. ふらつき・めまい: 森田浩之編. いきなり名医! 見分けが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社: 2010年; 9巻: 71-74.
- 4) 久世文也, 水田啓介. 味覚障害: 森田浩之編. いきなり名医! 見分けが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年; 9巻: 79-82.
- 5) 渡辺行雄, 池園哲郎, 伊藤寿一, 柿本章伸, 肥塚 泉, 鈴木 衛, 高橋克昌, 工田昌也, 武田憲昭, 土井勝美, 山下祐司, 青木光広, 宇佐美真一, 高橋正紘, 長沼英明. メニエール病診療ガイドライン 2011年度版 厚生労働省難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究班(2008-2010年度), 東京: 金原出版; 2011年.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 水田啓介. メニエール病に対する平衡リハビリテーション, JOHNS 2009年; 25巻: 857-860.
- 2) 伊藤八次. 予防医学からみた動揺病, JOHNS 2009年; 25巻: 1743-1746.
- 3) 伊藤八次. 特集/耳鼻咽喉科・頭頸部外科の検査マニュアルー方法・結果とその解釈. 重心動揺検査, 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2010年; 82巻増刊5号: 131-135.
- 4) 伊藤八次. 体平衡, 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 2010年; 82巻: 565-569.
- 5) 伊藤八次. 慢性期のめまいに対する平衡訓練の EBM とは?, EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療 2010-2011 2010年: 196-198.
- 6) 水田啓介. 子供の立ちくらみ, 大丈夫? お母さんへの回答マニュアル耳鼻咽喉科 Q&A 2010, JOHNS 2010年; 26巻: 1302-1303.
- 7) 水田啓介. めまい診療における重心動揺検査, 耳報 2010年; 381巻: 37-39.
- 8) 青木光広, 出原啓一. めまいリハビリテーションとカクテル療法 特集・めまいのカクテル療法ー使い方のポイント, MB ENTONI 2010年; 120巻: 61-67.
- 9) 伊藤八次. 耳科学領域 前庭神経炎, JOHNS 2011年; 27巻: 1331-1333.

総説 (欧文)

- 1) Aoki M. Book Review. Meniere's disease: evidence and outcomes. Int J Audiol. 2011;50:640.

原著 (和文)

- 1) 水田啓介, 藤垣 照, 大井益一, 服部彩樹, 棚橋聰子, 加藤洋治, 田中雄一, 横田 明, 柴田康成, 渡辺忠彦, 伊藤八次, 横山壽一, 竹内秀行, 山崎 太, 田中孝治, 小木曾正輝, 高橋広志, 北村泰宏. 岐阜県における2008年スギ・ヒノキ花粉飛散状況と2009年のスギ・ヒノキ花粉飛散予測, 東海花粉症 2009年; 20巻: 21-25.
- 2) 水田啓介, 青木香織, 浅井雅幸, 林 寿光, 山田南星, 久世文也, 青木光広, 伊藤八次. 中等・重症の急性咽頭・扁桃炎および急性副鼻腔炎・慢性副鼻腔炎急性増悪症例に対するガレノキサシン(ジェニナック)の有用性, 化学療法の領域 2009年; 25巻: 128-134.
- 3) 水田啓介, 藤井恵子, 山田南星, 久世文也, 青木光広, 伊藤八次. カルボプラチン, パクリタキセル併用化学療法が奏功した耳下腺癌肺転移例, 耳鼻臨床 2009年; 102巻: 737-741.
- 4) 水田啓介, 山田南星, 安藤健一, 久世文也, 加藤久和, 青木光広, 伊藤八次, 長尾成敏. 喉頭癌気管孔周囲再発症例に対する手術治療, 日気食会報 2009年; 60巻: 433-439.
- 5) 水田啓介, 時田 喬, 伊藤八次, 青木光広, 久世文也. 一側迷路障害例の重心動揺における最大リアプノフ指数の検討, 日耳鼻 2009年; 112巻: 791-800.
- 6) 水田啓介, 若岡敬紀, 久世文也, 加藤久和, 青木光広, 伊藤八次. 側頭下窩再発脊索腫症例に対する上顎スイング変法ー術後口蓋瘻孔への対策ー, 頭頸部外科 2009年; 19巻: 147-151.
- 7) 大宝和博, 林 真也, 中山則之, 大江直行, 矢野大仁, 水田啓介, 岩間 亨, 星 博昭. Micro-multileaf collimator を用いた dynamic conformal arc 定位照射における Paddick-Lippitz gradient index による標的外線量減衰の急峻度評価, 定位的放射線治療 2009年; 13巻: 1-9.
- 8) 青木光広, 水田啓介, 安藤健一, 山田南星, 伊藤八次, 二木良孝. 耳性髄液漏を伴った髄膜炎を発症した内耳奇形合併成人例, 耳鼻臨床 2009年; 102巻: 99-102.
- 9) 青木光広, 林 寿光, 安藤健一, 山田南星, 水田啓介, 伊藤八次, 加藤博基. 進行性難聴を呈した cochlear nerve deficiency の2症例, Otol Jpn 2009年; 19巻: 49-54.
- 10) 山田南星, 水田啓介, 加藤博基, 安藤健一, 久世文也, 青木光広, 伊藤八次. 石灰沈着性頸長筋炎の2例, 口咽科 2009年; 22巻: 205-210.
- 11) 加藤博基, 兼松雅之, 星 博昭, 山田南星, 久世文也, 青木光広, 水田啓介, 伊藤八次, 加藤恵三, 山下知巳, 柴田敏之, 大野貴敏. 液面形成(fluid-fluid level)を示す頭頸部腫瘍の画像所見, 臨床放射線 2009年; 54巻: 1741-1751.
- 12) 横山善至, 水田啓介, 浅井雅幸, 青木香織, 山田南星, 青木光広, 伊藤八次. 先天性後鼻孔狭窄に対する手術治療, 日鼻誌 2009年; 48巻: 8-11.
- 13) 青木香織, 水田啓介, 山田南星, 青木光広, 伊藤八次, 加藤博基. 耳下腺腫瘍のMRI画像および拡散係数による検討, 口咽科 2009年; 22巻: 199-203.
- 14) 水田啓介, 山田南星, 久世文也, 加藤久和, 青木光広, 伊藤八次. 翼口蓋窩・側頭下窩腫瘍に対するアプロ

- 一手法の検討, 耳鼻臨床 2010年; 103巻: 363-372.
- 15) 水田啓介, 藤垣 熙, 大井益一, 服部彩樹, 棚橋聰子, 安藤健一, 田中雄一, 横田 明, 柴田康成, 渡辺忠彦, 伊藤八次, 横山壽一, 竹内秀行, 山崎 太, 田中孝治, 小木曾正輝, 高橋広志, 北村泰宏. 岐阜県における2009年のスギ・ヒノキ花粉飛散状況と2010年のスギ・ヒノキ科花粉飛散予測, 東海花粉症 2010年; 21巻: 18-22.
 - 16) 水田啓介, 久世文也, 坂井田謙, 出原啓一, 林 寿光, 山田南星, 西堀丈純, 青木光広, 田中雄一, 安藤健一, 渡辺忠彦, 伊藤八次. 2009年の岐阜県におけるスギ花粉症治療に対する患者満足度調査, 耳鼻臨床 2010年; 103巻: 1063-1069.
 - 17) 青木光広, 西堀丈純, 浅井雅幸, 久世文也, 水田啓介, 伊藤八次, 宮田英雄. メニエール病に対するMeniettによる中耳加圧療法の臨床的検討, Equilibrium Res 2010年; 69巻: 418-423.
 - 18) 青木光広, 出原啓一. めまいのリハビリテーション, 耳鼻臨床 2010年; 103巻: 100-101.
 - 19) 青木光広, 山田南星, 林 寿光, 青木香織, 久世文也, 水田啓介, 伊藤八次. 当科における耳下腺癌症例の検討, 口腔咽喉頭科 2010年; 23巻: 97-103.
 - 20) 加藤久和. 脳神経外科手術後の頭蓋内感染を伴う頭皮潰瘍の治療経験, 日本頭蓋顎顔面外科学会誌 2010年; 26巻: 292-299.
 - 21) 久世文也, 水田啓介, 山田南星, 安藤健一, 青木光広, 伊藤八次. 当科における聴器癌症例の検討, Otol Jpn 2010年; 20巻: 79-85.
 - 22) 安藤健一, 水田啓介, 山田南星, 久世文也, 青木光広, 伊藤八次, 林 真也, 大宝和博. 定位放射線治療が著効した進行中耳癌例, 耳鼻臨床 2010年; 103巻: 305-310.
 - 23) 浅井雅幸, 水田啓介, 安藤健一, 青木光広, 伊藤八次. 上下肢麻痺を摘出術で改善させることができた巨大頸部神経鞘腫例, 耳鼻臨床 2010年; 103巻: 677-681.
 - 24) 水田啓介, 藤垣 熙, 大井益一, 服部彩樹, 棚橋聰子, 安藤健一, 田中雄一, 横田 明, 柴田康成, 渡辺忠彦, 伊藤八次, 横山壽一, 竹内秀行, 山崎 太, 田中孝治, 小木曾正輝, 高橋広志, 北村泰宏. 岐阜県における2010年のスギ・ヒノキ科花粉飛散状況と2011年のスギ・ヒノキ科花粉飛散予測, 東海花粉症 2011年; 22巻: 7-10.
 - 25) 水田啓介, 久世文也, 出原啓一, 林 寿光, 山田南星, 西堀丈純, 上田奈津子, 青木光広, 田中雄一, 安藤健一, 渡辺忠彦, 伊藤八次. プランルカスト水和物(オノン)によるスギ花粉症治療に対する患者満足度への効果, 新薬と臨牀 2011年; 60巻: 1020-1023.
 - 26) 水田啓介, 西堀丈純, 青木光広. 偏在性甲状腺舌管嚢胞例, 耳鼻臨床 2011年; 104巻: 542-543.
 - 27) 加藤久和, 水田啓介, 青木光広, 久世文也, 伊藤八次. 上顎癌切除後の整容的再建における工夫と限界, 頭頸部癌 2011年; 37巻: 470-477.
 - 28) 加藤俊徳, 伊藤八次, 中尾弘志, 角坂照貴. ダニによる耳鳴りーイヌミミヒゼンダニの迷入が疑われた症例とムギコナダニによる症例ー, Med. Entomol. Zool 2011年; 62巻: 199-204.
 - 29) 大江直行, 野中裕康, 船戸道徳, 小関道夫, 加藤久和, 矢野大仁, 吉村紳一, 高見 剛, 岩間 亨. 後頭部皮下に発生した限局性 Ewing sarcoma/PNET の1例, 小児の脳神経 2011年; 36巻: 26-30.

原著 (欧文)

- 1) Asai M, Aoki M, Hayashi H, Yamada N, Mizuta K, Ito Y. Subclinical deviation of the subjective visual vertical in patients affected by a primary headache. Acta Otolaryngol. 2009;129:30-35. IF 1.200
- 2) Kato H, Kanematsu M, Tanaka O, Mizuta K, Aoki M, Shibata T, Yamashita T, Hirose Y, Hoshi H. Head and neck squamous cell carcinoma: usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the prediction of a neoadjuvant therapeutic effect. Eur Radiol. 2009;19:103-109. IF 3.594
- 3) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Yamada K, Yamakawa H, Iwama T, Hirose Y. Fluid-Fluid level formation: A rare finding of extracranial head and neck schwannomas. Am J Neuroradiol. 2009; 30:1451-1453. IF 3.464
- 4) Aoki M, Mizuta K, Ueda N, Yamada N, Ito Y, Kato H, Hirose Y. Surgical Treatment by Partial Petrossectomy for a Middle-Ear Carcinoid with Progressive Extension: A Case Report and Review of the Literature. Int J Otolaryngol. 2010:1-5.
- 5) Aoki M, Hayashi H, Kuze B, Mizuta K, Ito Y. The association of the plasma vasopressin level during attacks with a prognosis of Meniere's disease. Int J Audiol. 2010;49:1-6. IF 1.266
- 6) Grantyn A, Kuze B, Brandi AM, Thomas MA, Quenech'du N. Direct projections of omnipause neurons to reticulospinal neurons: a double-labeling light microscopic study in the cat. J Comp Neurol. 2010;518:4792-4812. IF 3.774
- 7) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Kuze B, Ohno T, Oshima K, Hirose Y. "Flow-void" sign at MR imaging: a rare finding of extracranial head and neck schwannomas. J Magnetic Resonance Imaging. 2010;31:703-705. IF 2.749
- 8) Watanabe T, Ishihara M, Matsuura K, Mizuta K, Itoh Y. Polaprezinc prevents oral mucositis associated with radiochemotherapy in patients with head and neck cancer. Int J Cancer. 2010;127:1984-1990. IF 4.926
- 9) Shojaku H, Watanabe Y, Takeda N, Ikezono T, Takahashi M, Kakigi A, Ito J, Doi K, Suzuki M, Takumida M, Takahashi K, Yamashita H, Koizuka I, Usami S, Aoki M, Naganuma H. Clinical characteristics of delayed endolymphatic hydrops in Japan: a nationwide survey by the peripheral vestibular disorder research committee of Japan. Acta Otolaryngol. 2010;130:1135-1140. IF 1.200

- 10) Aoki M, Wakaoka Y, Hayashi H, Nishihori T, Kuze B, Mizuta K, Ito Y. The relevance of hypothalamus-pituitary-adrenocortical axis-related hormones to the cochlear symptoms in Meniere's disease. *Int J Audiol.* 2011;50:897-904. IF 1.266
- 11) Nishihori T, Aoki M, Aoki K, Yamada N, Kuze B, Mizuta K, Ito Y, Hirose N, Kato H. The Surgical Treatment for Recurrent Liposarcoma of the Hypopharynx in a Pregnant Woman. *J Med Case.* 2011;2:127-131.
- 12) Shojaku H, Watanabe Y, Mineta H, Aoki M, Tsubota M, Watanabe K, Goto F, Shigeno K. Long-term effects of the Meniett device in Japanese patients with Meniere's disease and delayed endolymphatic hydrops reported by the Middle Ear Pressure Treatment Research Group of Japan. *Acta Otolaryngol.* 2011;131:277-283. IF 1.200

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：青木光広；科学研究費補助金基盤研究(C)：サーカディアンリズムからみたメニエール病病態の解明；平成 20-22 年度；3,220 千円(1,820：800：600 千円)
- 2) 研究代表者：青木光広，共同研究者：久世文也，林 寿光；山田養蜂場 みつばち研究助成基金：蜂の子成分によるメニエール病に対する治療効果の臨床的検証；平成 21 年度；1,600 千円
- 3) 研究代表者：青木光広，共同研究者：西堀丈純，長崎幸雄，江 依法；三井住友海上福祉財団研究助成：高齢者におけるウォーキング中のバランス制御関連筋群の中枢制御機構からみた平衡能力評価～歩行中の転倒防止・ウォーキングの効果向上のために～；平成 21 年度；600 千円
- 4) 研究代表者：柿木章伸，分担研究者：青木光広；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：自己免疫性内耳障害の実態把握のための多施設研究；平成 21 年度；1,000 千円

2) 受託研究

- 1) 水田啓介：頭頸部扁平上皮癌根治治療後の TS-1 補助化学療法 of 検討；平成 18-24 年度；1,365 千円；財団法人先端医療振興財団

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

伊藤八次：

- 1) 日本耳鼻咽喉科学会評議員(～現在)
- 2) 日本めまい平衡医学会理事(平成 21 年 11 月～現在)
- 3) 日本気管食道科学会評議員(～現在)
- 4) 耳鼻咽喉科臨床学会運営委員(～現在)
- 5) 日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会評議員(～現在)
- 6) 日本口腔・咽頭科学会評議員(～現在)
- 7) 日本喉頭科学会評議員(～現在)
- 8) 日本嚥下医学会評議員(～現在)

水田啓介：

- 1) 日本耳鼻咽喉科学会評議員(～現在)
- 2) 日本めまい平衡医学会評議員(～現在)
- 3) 日本気管食道科学会評議員(～現在)
- 4) 日本めまい平衡医学会専門会員審査委員会委員(～現在)

青木光広：

- 1) 日本めまい平衡医学会評議員(～現在)

2) 学会開催

伊藤八次：

- 1) 第 136 回日本耳鼻咽喉科学会東海地方部会連合講演会(平成 21 年 3 月, 岐阜)
- 2) 第 34 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 21 年 5 月, 岐阜)
- 3) 第 35 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 22 年 5 月, 岐阜)
- 4) 第 143 回日本耳鼻咽喉科学会東海地方部会連合講演会(平成 22 年 12 月, 岐阜)
- 5) 第 36 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 23 年 5 月, 岐阜)

加藤久和：

- 1) 第 55 回日本形成外科学会中部支部東海地方会(平成 22 年 2 月, 岐阜)
- 2) 第 56 回日本形成外科学会中部支部東海地方会(平成 22 年 10 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

伊藤八次：

- 1) Equilibrium Research ; 編集担当理事(平成 23 年 12 月～現在)

青木光広：

- 1) 耳鼻咽喉科臨床 ; 編集委員(平成 21 年 1 月～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

伊藤八次：

- 1) 第 34 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会ならびに学術講演会(平成 21 年 5 月, 岐阜, 特別講演「ヒト乳頭腫ウイルスと頭頸部腫瘍」座長)
- 2) 第 35 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会並びに学術講演会(平成 22 年 5 月, 岐阜, 特別講演「内視鏡下副鼻腔手術—その基礎と応用—」座長)
- 3) 第 36 回日本耳鼻咽喉科学会岐阜県地方部会総会並びに学術講演会(平成 23 年 5 月, 岐阜, 特別講演「EB ウイルス発がんはどこまでわかったか」座長)

水田啓介：

- 1) 平成 20 年度大学病院情報マネジメント連絡会議(平成 21 年 1 月, 大分, シンポジウム「電子カルテと連動したクリニカルパス」演者)

青木光広：

- 1) 第 68 回日本めまい平衡医学会(平成 21 年 11 月, 徳島, 教育講演「自律神経とめまい」演者)
- 2) 第 70 回日本めまい平衡医学会(平成 23 年 11 月, 千葉, シンポジウム「前庭交感神経反射と起立性循環調節」演者)
- 3) 山田養蜂場みつばち研究助成基金健康セミナー(平成 23 年 12 月, 岡山, 「蜂の子の聴力改善・耳鳴への効果」演者)

久世文也：

- 1) 補聴器相談医更新講習会(平成 23 年 6 月, 愛知, 「補聴器相談医更新規則改定の案内と, 最近の補聴器販売におけるトラブル事例」演者)

加藤久和：

- 1) 第 35 回日本頭頸部癌学会(平成 23 年 6 月, 愛知, シンポジウム「上顎癌切除後の整容的再建の現状と課題」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

伊藤八次：

- 1) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)

- 2) 岐阜県新生児聴覚検査事業検討委員会委員(～現在)
- 3) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)

水田啓介：

- 1) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)

西堀丈純：

- 1) 岐阜市立幼稚園ことばの教室教育相談委員(～平成 21 年度)

出原啓一：

- 1) 岐阜市立幼稚園ことばの教室教育相談委員(平成 22 年度～現在)

10. 報告書

- 1) 青木光広, 浅井雅幸, 坂井田譲, 久世文也, 水田啓介, 伊藤八次：メニエール病の予後と発作期血漿バズプレッシン濃度の関連性：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究 平成 20 年度総括・分担研究報告書：152-154(平成 21 年 3 月)
- 2) 青木光広, 西堀丈純, 浅井雅幸, 久世文也, 水田啓介, 伊藤八次, 宮田英雄：メニエール病に対する Meniett による中耳加圧療法の検討：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究 平成 21 年度総括・分担研究報告書：182-185(平成 22 年 3 月)
- 3) 青木光広：自己免疫疾患関連性難聴および前庭障害に伴う循環調節障害に関する研究：厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 自己免疫性内耳障害の実態把握のための多施設研究 平成 21 年度研究報告書：8-10(平成 22 年 3 月)
- 4) 青木光広, 長崎幸雄, 西堀丈純, 江 依法：高齢者におけるウォーキング中のバランス制御関連筋群の中枢制御機構からみた平衡機能評価～歩行中の転倒防止・ウォーキングの効果向上のために～三井住友海上福祉財団 高齢者福祉部門 研究結果報告書：
http://www.ms-ins.com/welfare/shiryo2009/pdf/2_1_01.pdf (平成 23 年 1 月)
- 5) 青木光広, 若岡敬紀, 林 寿光, 久世文也, 水田啓介, 伊藤八次：メニエール病における神経内分泌ホルモン動態の検討：厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 前庭機能異常に関する調査研究 平成 22 年度総括・分担研究報告書：83-86(平成 23 年 3 月)

11. 報道

- 1) 水田啓介：病院の実力「頭頸部がん」：読売新聞(2009 年 1 月 11 日)
- 2) 水田啓介：花粉飛散関連記事：岐阜新聞(2009 年 2 月 8 日)
- 3) 水田啓介：ラジオ番組「すこやかモーニング」花粉症について：岐阜放送(2009 年 2 月 21, 28 日放送)
- 4) 伊藤八次：「耳の日」関連記事：岐阜新聞(2009 年 3 月 3 日)
- 5) 青木光広：紙上診察室：中日新聞(2009 年 4 月 24 日)
- 6) 青木光広：専門医に聞く「めまいのリハビリテーションに関する質問」：めまい疾患情報 Web サイト めまいナビ(2009 年 6 月 29 日～)
- 7) 伊藤八次：「鼻の日」関連記事：中日新聞(2009 年 8 月 7 日)
- 8) 伊藤八次：「耳の日」関連記事：岐阜新聞(2010 年 3 月 3 日)
- 9) 青木光広：バカ売れ「3D テレビ」は子供に見せると“バカ”になる！？：週刊新潮(2010 年 5 月 6・13 日号)
- 10) 青木光広：3D 映像は 2 歳児には見せるな：週刊朝日(2010 年 7 月 9 日号)
- 11) 青木光広：子供や妊婦, 高齢者は要注意？3D テレビで健康被害の警告：週刊文春「THIS WEEK 生活」(2010 年 7 月 29 日号)
- 12) 伊藤八次：「鼻の日」関連記事：中日新聞(2010 年 8 月 7 日)
- 13) 伊藤八次：「耳の日」関連記事：岐阜新聞(2011 年 3 月 3 日)
- 14) 伊藤八次：「鼻の日」関連記事：中日新聞(2011 年 8 月 7 日)

12. 自己評価

評価

国内では全国レベルの耳鼻咽喉科関連学会で積極的に参加発表した。

欧文原著も本誌前号期間よりは増加できたが、十分とは言えない。

現状の問題点及びその対応策

ローテート研修制度導入後の人員不足が解消できていない。研究は臨床と平行に行っており、癌患者などの重症な疾患の多い病棟の治療を進めながらの研究には時間的制約が多い。大学院生も社会人大学院生として臨床を維持しているので、基礎研究に必要な纏まった時間を確保できない現状である。

対応策として、基礎講座や他の研究機関との交流を密にして、人的物的資源の補完を図り学会・論文発表実績を増加させたい。

今後の展望

岐阜大学耳鼻咽喉科に蓄積されためまい平衡障害の研究成果を基礎に、めまい・平衡障害を中心とする研究を押し進める。メニエール病に代表される難治性めまい治療にフィードバックできる成果を挙げ、めまい平衡障害患者や高齢者の身体平衡機能改善に寄与する効果的平衡訓練方法開発を目標とする。また、頭頸部がんの治療戦略における機能温存を重点化し、関連する臨床研究を進める。

(8) 眼科学分野

1. 研究の概要

当教室は、緑内障をメインテーマとして据え、基礎および臨床研究を行っている。緑内障領域においては、その研究は多岐にわたっており、眼圧・視野・画像解析・薬物療法・手術療法・神経保護・網膜再生・遺伝子解析などに及ぶ。

1. VERIS を用いた多局所網膜電図，多局所視覚誘発電位による緑内障早期発見ならびに重症度判定。
2. ICare rebound tonometer, Dynamic contour tonometer (DCT) など新しい眼圧計の評価。
3. 光干渉断層計 (OCT) を用いた，緑内障における視神経ならびに網膜構造変化の解析。
4. 眼圧体位変動評価。
5. 様々な眼圧下降薬の臨床評価。
6. レーザーならびに手術療法の長期効果判定。
7. 緑内障遺伝子の同定。
8. ロービジョンケア。
9. 神経保護薬と目される薬物の評価 など

その他，網膜硝子体疾患，角膜疾患，感染症，ぶどう膜炎など幅広い眼疾患において，特殊と思われる症例では着実に学会発表ならびに論文報告を行っている。

2. 名簿

教授：	山本哲也	Tetsuya Yamamoto
准教授：	川瀬和秀	Kazuhide Kawase
准教授：	望月清文	Kiyofumi Mochizuki
講師：	青山裕美子	Yumiko Aoyama
助教：	澤田 明	Akira Sawada
助教：	末森晋典	Shinsuke Suemori
医員：	石澤聡子	Satoko Kokuzawa
医員：	宇土一成	Kazunari Udo
医員：	白木育美	Ikumi Shiraki
医員：	名倉章敏	Akitoshi Nagura
医員：	大家進也	Shinya Oie
医員：	山田博基	Hiroki Yamada
医員：	黒岩真友子	Mayuko Kuroiwa
医員：	諸戸尚也	Naoya Moroto

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 山本哲也. 時間軸で眼疾患を診ることの喜び：眼科研修ノート，東京：診断と治療社；2009年：139.
- 2) 山本哲也，谷原秀信. 緑内障：現代の眼科学 改訂第10版 第10章，東京：金原出版；2009年：212-227.
- 3) 山本哲也. 晩発性濾過胞感染：眼科プラクティス 28 眼感染症の謎を解く，東京：文光堂；2009年：188-189.
- 4) 望月清文. 内科的治療の総論：眼科研修医ノート，東京：診断と治療社；2009年：24-25.
- 5) 川瀬和秀. 発型発達緑内障：今日の眼科疾患治療指針，東京：医学書院；2009年：375-379.
- 6) 川瀬和秀. 遅発型発達緑内障：今日の眼科疾患治療指針，東京：医学書院；2009年：379-381.
- 7) 川瀬和秀. 緑内障 眼科研修医ノート，東京：診断と治療社；2009年：330-337.
- 8) 山本哲也. 術中リカバリー：新 ES Now 3 緑内障手術：これでバッチリ，東京：メジカルビュー；2010年：52-59.
- 9) 山本哲也. 緑内障：今日の診断指針 第6版，東京：医学書院；2010：1612-1613.
- 10) 山本哲也. 緑内障：診療ガイドライン UP-TO-DATE 2010-2011，大阪；メディカルレビュー；2010年：49-54.
- 11) 山本哲也，三村 治. 目で診る緑内障・視神経疾患 80，東京：メジカルビュー；2010年：11-14, 16-17, 34, 38, 52, 68-70.
- 12) 澤田 明. Standard Course Case 11-14：山本哲也，三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患，東京：メジカルビュー；2010年：22-29.
- 13) 澤田 明. Standard Course Case 16, 17：山本哲也，三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患，東京：メジカルビュー；2010年：32-35.

- 14) 澤田 明. Standard Course Case 25 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 50-51.
- 15) 澤田 明. Standard Course Case 28 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 56-57.
- 16) 澤田 明. Expert Course Case 34 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 70-71.
- 17) 澤田 明. Expert Course Case 38 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 78-79.
- 18) 澤田 明. Expert Course Case 56 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 114-115.
- 19) 澤田 明. Master Course Case 68-70 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 140-145.
- 20) 澤田 明. Master Course Case 79 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る 緑内障・視神経疾患, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 162-163.
- 21) 望月清文. ぶどう膜炎による緑内障 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る緑内障・視神経疾患 80, 東京 ; メジカルビュー ; 2010年 : 124-125.
- 22) 望月清文. 原田病・後部強膜炎による緑内障 : 山本哲也, 三村 治編. 目で診る緑内障・視神経疾患 80, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 134-134.
- 23) 望月清文. 感染性眼内炎, 今日の治療指針, 医学書院 ; 2010年 : 1170-1171.
- 24) 望月清文, 矢野啓子. 5) カンジダ眼内炎の治療～眼科的検査を含む～ : 河野 茂編. IDSA ガイドライン 真菌症治療の UP-TO-DATE, 医薬ジャーナル ; 2010年 : 156-162.
- 25) 望月清文. G. 眼科領域感染症. 4. ウイルス感染症 : 松田 暉, 荻原俊男, 難波光義, 鈴木久美, 林 直子編. 看護学テキスト NICE. 疾病と治療, 南江堂 ; 2010年 : 281-285.
- 26) 川瀬和秀. 毛様体手術 : 緑内障手術 これでバッチリ ! ES NOW, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 124-127.
- 27) 川瀬和秀. 隅角切開術 : 緑内障手術 これでバッチリ ! ES NOW, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 128-131.
- 28) 川瀬和秀. 目で診る 緑内障・視神経疾患 80, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : Case7, 15, 41, 55, 62, 64.
- 29) 川瀬和秀. 眼科検査のグーティ・セアウトン この検査ではここが見えない 4 緑内障 眼圧検査 : 眼圧測定に影響する因子と眼圧の自然変動, 東京 : シナジー ; 2010年 : 140-143.
- 30) 川瀬和秀. 眼のサイエンス 視覚の不思議 III 前房, 隅角, 水晶体 なぜステロイド薬で眼圧は上がるのか?, 東京 : 文光堂 ; 2010年 : 86-88.
- 31) 川瀬和秀. 緑内障 薬物療法 : 私はこう治療している 今日の治療指針, 医学書院 ; 2010年 : 1171-1173.
- 32) 澤田 明. V 緑内障手術 濾過手術 : 新 ES NOW6 きれいな小児眼科手術 これであなたも悩まない!, 東京 : メジカルビュー ; 2010年 : 32-35.
- 33) 山本哲也. 小児緑内障手術の特殊性 : 新 ES Now 6 きれいな小児眼科手術 これであなたも悩まない!, 東京 : メジカルビュー ; 2011年 : 110-111. (編集も担当)
- 34) 山本哲也, 近藤武久. 緑内障の隅角所見 : 眼科学 第2版, 東京 : 文光堂 ; 2011年 : 173-177.
- 35) 山本哲也. 緑内障の病型鑑別診断 : 眼科学 第2版, 東京 : 文光堂 ; 2011年 : 191-193.
- 36) 山本哲也. 緑内障の治療方針 : 眼科学 第2版, 東京 : 文光堂 ; 2011年 : 194-195.
- 37) 山本哲也. 隅角検査と前眼部画像解析 : 眼科学 第2版, 東京 : 文光堂 ; 2011年 : 932-933.
- 38) 澤田 明. V 緑内障手術 隅角切開術 : 新 ES NOW6 きれいな小児眼科手術 これであなたも悩まない!, 東京 : メジカルビュー ; 2011年 : 120-123.

著書 (欧文)

- 1) Yamamoto T, Rojanapongpun P, Park KH eds. Atlas of Angle Closure Glaucoma. Seoul, Korea: Newest Medicine Publications; 2010(編集担当).
- 2) Yamamoto T, Rojanapongpun P, Park KH: Preface. In: Yamamoto T, Rojanapongpun P, Park KH eds. Atlas of Angle Closure Glaucoma. iii, Seoul, Korea: Newest Medicine Publications; 2010(執筆担当).
- 3) Sawada A, Yamamoto T. Atlas of Angle Closure Glaucoma In: Yamamoto T, Rojanapongpun P, Park KH ed. II. Ultrasound Biomicroscopy (UBM). Seoul, Korea: Newest Medicine Publications; 2010: 29-37.

総説 (和文)

- 1) 山本哲也, 新家眞, 岩瀬愛子, 北澤克明, 日本緑内障学会多治見スタディグループ. 日本緑内障学会多治見市民眼科検診 一般検診対象研究の総括, 日眼会誌 2009年 ; 113巻 : 569-575.
- 2) 山本哲也. 日本緑内障学会による「緑内障診療ガイドライン(第2版)」の要点, あたらしい眼科 2009年 ; 26巻 : 895-898.
- 3) 山本哲也. 緑内障, からだの科学 2009年 ; 263巻 : 56-59.
- 4) 山本哲也. 緑内障患者の望ましい管理法, 日眼会誌 2009年 ; 113巻 : 949-950.
- 5) 山本哲也. 日本と諸外国の疫学調査結果の比較, 臨眼 2009年 ; 63巻(臨増) : 194-199.
- 6) 望月清文. 緑内障セミナー 107 濾過胞感染症の背景, あたらしい眼科 2009年 ; 26巻 : 645-646.
- 7) 澤田 明, 栗本康夫. 緑内障診療—グレーゾーンを越えて II, 治療編 4. 閉塞隅角緑内障と原発閉塞隅角

- 症《マイオピニオン》急性原発閉塞隅角症の治療選択, 臨床眼科 2009年; 11巻: 322-335.
- 8) 澤田 明. 視野が欠ける 緑内障による視野異常, あたらしい眼科 2009年; 12巻: 622-1626.
 - 9) 川瀬和秀. Summing Up 緑内障の手術. *Frontiers in Glaucoma* 2009年; 10巻: 28-143.
 - 10) 川瀬和秀. 【緑内障診療 グレーゾーンを越えて】, 治療編 開放隅角緑内障 手術 線維柱帯切除術のポイント, 臨床眼 2009年; 63巻: 280-286.
 - 11) 川瀬和秀. 【必読!眼科救急外来】 緑内障 濾過手術後の感染症, 眼科 2009年; 51巻: 1335-1339.
 - 12) 川瀬和秀. 【緑内障の遺伝要因(内的因子)と環境要因(外的因子)】 発達緑内障, 眼科 2009年; 51巻: 643-648.
 - 13) 山本哲也. 原発閉塞隅角緑内障のアジアの現状と日本, 医学のあゆみ 2010年; 234巻: 282-285.
 - 14) 山本哲也. 副腎皮質ステロイド薬の眼局所副作用, 日医雑誌 2010年; 139巻: 1636.
 - 15) 山本哲也. 正常眼圧緑内障, 総合臨牀 2010年; 59巻: 2477-2478.
 - 16) 大楠清文, 望月清文, 江崎孝行. 2. 眼感染症トピックス. 1) 眼感染症迅速診断のための遺伝子検査の適応と実践. *Medical Technology* 2010年; 38巻: 565-572.
 - 17) 望月清文. 巻頭言 緑内障治療と感染, 日眼会誌 2010年; 114巻: 573-575.
 - 18) 望月清文. 抗微生物薬, あたらしい眼科 2010年; 27巻: 1363-1370.
 - 19) 川瀬和秀. 【原発開放隅角緑内障(広義) 私の管理法】 原発開放隅角緑内障(狭義)の治療戦略 ケーススタディ あたらしい眼科 2010年; 27巻: 1045-1049.
 - 20) 川瀬和秀. 眼科の新しい検査法 IV 緑内障 18 視野解析ソフトについて教えてください あたらしい眼科 2010年; 27巻: 223-228.
 - 21) 山本哲也. 目の充血, 日本医師会雑誌 2011年; 140(S2): S253-S256.
 - 22) 川瀬和秀. 【光干渉断層計(OCT)の緑内障への応用】「Cirrus HD-OCT」, あたらしい眼科 2011年; 28巻: 785-793.
 - 23) 川瀬和秀. 【「緑内障研究の進歩」をより理解するために】「原発開放隅角緑内障(広義)への挑戦 臨床的諸問題とその科学的解決 原発開放隅角緑内障(広義)の臨床的諸問題と基礎研究」, 日本の眼科 2011年; 82巻: 284-289.
 - 24) 澤田 明. 緑内障セミナー緑内障術後の眼圧体位変動, あたらしい眼科 2011年; 28巻: 1437-1438.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 堀 暢英, 望月清文, 石田恭子, 山本哲也, 三鴨廣繁. 線維柱帯切除術後の濾過胞感染症の危険因子と治療予後, 日眼会誌 2009年; 113巻: 951-963.
- 2) 川上秀昭, 犬塚裕子, 中村 博, 高橋 健, 武藤敏弘, 望月清文, 澤村治樹, 大楠清文, 勝村直樹, 末松寛之. ノカルジアが起炎菌と思われた内因性眼内炎の2例, 眼科 2009年; 51巻: 1663-1669.
- 3) 堀由起子, 望月清文, 村瀬寛紀, 末松寛之, 山岸由佳, 三鴨廣繁. 外眼部感染症における検出菌とその薬剤感受性に関する検討(1998~2006年), 日眼会誌 2009年; 113巻: 583-595.
- 4) 鈴木 崇, 白石 敦, 宇野敏彦, 江口秀一郎, 勝海 修, 望月清文, 井上 康, 岡宮史武, 宮田和典. 大橋裕一. 洗面所における微生物汚染調査, あたらしい眼科 2009年; 26巻: 1387-1391.
- 5) 小森伸也, 小國 務, 末森晋典, 望月清文, 林 裕子, 高橋優三. 岐阜県内で感染したと推定される東洋眼虫のヒト結膜嚢内寄生例, あたらしい眼科 2009年; 26巻: 1401-1404.
- 6) 川瀬和秀, 山本哲也, 村松友幸, 小野純治, 中島 徹, 松久充子, 杉浦寅男, 右田雅義, 石川裕二. カルテオロール塩酸塩 2%持続性点眼液の第IV相試験-眼圧下降作用, 安全性および血漿中カルテオロール濃度の検討-, 日眼会誌 2010年; 114巻: 976-982.
- 7) 鶴岡三恵子, 安藤伸朗, 白木邦彦, 川瀬和秀, 西田朋美, 仲泊 聡. 全国の眼科教授におけるロービジョンに対する意識調査 眼科臨床紀要 2010年; 3巻: 1250-1254.
- 8) 末森晋典, 澤田 明, 小國 務, 小森伸也, 大江直行, 望月清文. 眼窩骨を貫通する形態を呈した類皮嚢胞の1例, 眼科臨床紀要 2010年; 6巻: 548-551.
- 9) 川上秀昭, 丹羽義明, 澤田 明, 望月清文, 山本哲也. 正常眼圧緑内障症例におけるカリジノゲナーゼ(カルナクリン®)の眼窩血流動態に及ぼす影響, 眼科臨床紀要 2011年; 4巻: 531-536.
- 10) 川上秀昭, 末森晋典, 望月清文, 堅田利彦. 白内障術後眼内炎の発症および予後に影響する因子の検討, 臨床眼科 2011年; 65巻: 63-69.

原著 (欧文)

- 1) Karim MZ, Sawada A, Mizuno K, Kawakami H, Ishida K, Yamamoto T. Neuroprotective effect of nipradilol [3,4-dihydro-8-(2-hydroxy-3-isopropylamino)propoxy-3-nitroxy-2H-1-benzopyran] in a rat model of optic nerve degeneration. *J Glaucoma*. 2009;18:26-31. IF 1.533
- 2) Mochizuki K, Kumada M, Suemori S, Kawakami H, Sawada A, Yamamoto T, Mikamo H. Streptococcus intermedius-associated late-onset endophthalmitis after trabeculectomy with adjunctive mitomycin C. *J Glaucoma*. 2009;18:79-80. IF 1.533
- 3) Murase H, Sawada A, Mochizuki K, Yamamoto T. Effects of corneal thickness on intraocular pressure measured with three different tonometers. *Jpn J Ophthalmol*. 2009;53:1-6. IF 1.054
- 4) Abe H, Shirakashi M, Tsutsumi T, Araie M, Tomidokoro A, Iwase A, Tomita G, Yamamoto T, Tajimi

- Study Group. Laser Scanning Tomography of Optic Discs of the Normal Japanese Population in a Population-Based Setting. *Ophthalmology*. 2009;116:223-230. IF 5.017
- 5) Muramatsu C, Nakagawa T, Sawada A, Fukuta K, Hatanaka Y, Yamamoto T, Fujita H. Determination of cup region in optic nerve head by use of stereo fundus image pairs for diagnosis of glaucoma. IEICE Technical Report. 2009;108:59-62. IF 4.004
 - 6) Muramatsu C, Hatanaka Y, Nakagawa T, Sawada A, Fujita H, Yamamoto T. Investigation of the glaucoma risk assessment based on the clinical data obtained in the screening exams. IEICE Technical Report. 2009;108:603-604. IF 4.004
 - 7) Kamio M, Meguro A, Ota M, Kashiwagi K, Mabuchi F, Iijima H, Kawase K, Yamamoto T, Nakamura M, Negi A, Sagara T, Nishida T, Inatani M, Tanihara H, Aihara M, Araie M, Fukuchi T, Abe H, Higashide T, Sugiyama K, Kanamoto T, Kiuchi Y, Iwase A, Ohno S, Inoko H, Mizuki N. Investigation of the association between the GLC3A locus and normal tension glaucoma in Japanese patients by microsatellite analysis. *Clin Ophthalmol*. 2009;3:183-188. IF 1.766
 - 8) Nakamura K, Ota M, Meguro A, Nomura N, Kashiwagi K, Mabuchi F, Iijima H, Kawase K, Yamamoto T, Nakamura M, Negi A, Sagara T, Nishida T, Inatani M, Tanihara H, Aihara M, Araie M, Fukuchi T, Abe H, Higashide T, Sugiyama K, Kanamoto T, Kiuchi Y, Iwase A, Ohno S, Inoko H, Mizuki N. Association of microsatellite polymorphisms of the GPDS1 locus with normal tension glaucoma in the Japanese population. *Clin Ophthalmol*. 2009;3:307-312. IF 1.766
 - 9) Lin W, Aoyama Y, Kawase K, Yamamoto T. Relationship between central corneal thickness and visual field defect in open-angle glaucoma. *Jpn J Ophthalmol*. 2009;53:477-481. IF 1.054
 - 10) Nakamura J, Meguro A, Ota M, Nomura E, Nishide T, Kashiwagi K, Mabuchi F, Iijima H, Kawase K, Yamamoto T, Nakamura M, Negi A, Sagara T, Nishida T, Inatani M, Tanihara H, Aihara M, Araie M, Fukuchi T, Abe H, Higashide T, Sugiyama K, Kanamoto T, Kiuchi Y, Iwase A, Ohno S, Inoko H, Mizuki N. Association of toll-like receptor 2 gene polymorphisms with normal tension glaucoma. *Mol Vis*. 2009;15:2905-2910. IF 2.511
 - 11) Sawada A, Mochizuki K, Katada T, Kawakami H, Yamamoto T, Mikamo H, Watanabe K. *Gemella* species-associated late-onset endophthalmitis after trabeculectomy with adjunctive mitomycin C. *J Glaucoma*. 2009;18:496-497. IF 1.533
 - 12) Shimazawa M, Suemori S, Inokuchi Y, Matsunaga N, Nakajima Y, Oka T, Yamamoto T, Hara H. A novel calpain inhibitor, ((1S)-1((((1S)-1-benzyl-3-cyclopylamino-2,3-di-oxopropyl) amino) carbonyl)-3-methylbutyl) carbamic acid 5-methoxy-3-oxapentyl ester (SNJ-1945), reduces murine retinal cell death in vitro and in vivo. *Journal of Pharmacology and Experimental Therapeutics (JPET)*. 2010;332:380-387. IF 4.017
 - 13) Muramatsu C, Hayashi Y, Sawada A, Hatanaka Y, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Detection of retinal nerve fiber layer defects on retinal fundus images for early diagnosis of glaucoma. *J Biomed Opt*. 2010;15: 1-10. IF 3.188
 - 14) Aoyama A, Ishida K, Sawada A, Yamamoto T. Target intraocular pressure for stability of visual field loss progression in normal-tension glaucoma. *Jpn J Ophthalmol*. 2010;54:117-123. IF 1.054
 - 15) Chi ZL, Akahori M, Obazawa M, Minami M, Noda T, Nakaya N, Tomarev S, Kawase K, Yamamoto T, Noda S, Sasaoka M, Shimazaki A, Takada Y, Iwata T. Overexpression of optineurin E50K disrupts Rab8 interaction and leads to a progressive retinal degeneration in mice. *Hum Mol Genet*. 2010 19:2606-2615. IF 8.058
 - 16) Writing Committee for the Normal Tension Glaucoma Genetic Study Group of Japan Glaucoma Society, Meguro A, Inoko H, Ota M, Mizuki N, Bahram S. Genome-wide association study of normal tension glaucoma: common variants in SRBD1 and ELOVL5 contribute to disease susceptibility. *Ophthalmology* 2010;117:1331-1338. IF 5.017
 - 17) Murakami K, Meguro A, Ota M, Shiota T, Nomura N, Kashiwagi K, Mabuchi F, Iijima H, Kawase K, Yamamoto T, Nakamura M, Negi A, Sagara T, Nishida T, Inatani M, Tanihara H, Aihara M, Araie M, Fukuchi T, Abe H, Higashide T, Sugiyama K, Kanamoto T, Kiuchi Y, Iwase A, Ohno S, Inoko H, Mizuki N. Analysis of microsatellite polymorphisms within the GLC1F locus in Japanese patients with normal tension glaucoma. *Mol Vis*.2010;16:462-466. IF 2.511
 - 18) Suzuki M, Meguro A, Ota M, Nomura E, Kato T, Nomura N, Kashiwagi K, Mabuchi F, Iijima H, Kawase K, Yamamoto T, Nakamura M, Negi A, Sagara T, Nishida T, Inatani M, Tanihara H, Aihara M, Araie M, Fukuchi T, Abe H, Higashide T, Sugiyama K, Kanamoto T, Kiuchi Y, Iwase A, Ohno S, Inoko H, Mizuki N. Genotyping HLA-DRB1 and HLA-DQB1 alleles in Japanese patients with normal tension glaucoma. *Mol Vis*. 2010;16: 1874-1879. IF 2.511
 - 19) Kawase K, Lin W, Aoyama Y, Yamamoto T, Shimazawa M, Hara H. Effects of timolol-related ophthalmic solutions on cultured human conjunctival cells. *Jpn J Ophthalmol* 2010;54:615-621. IF 1.054
 - 20) Mochizuki, K, Sawada A, Katsumura N. Case of Lacrimal Gland Inflammation Associated with Ulcerative Colitis. *Int Ophthalmol*. 2010;30:109-111.
 - 21) Kawakami H, Sawada A, Mochizuki K, Takahashi K, Muto T, Ohkusu K. Endogenous Nocardia farcinica endophthalmitis. *Jpn J Ophthalmol*. 2010;54:164-166. IF 1.054
 - 22) Komori S, Sawada A, Oguni T, Mochizuki K, Ohkusu K. Case of endophthalmitis following intravitreal

- injections of bevacizumab. Clin Ophthalmol. 2010;4:773-775. IF 1.766
- 23) Suemori S, Sawada A, Komori S, Mochizuki K, Ohkusu K, Takemura H. Case of endogenous endophthalmitis by caused Streptococcus equisimilis. Clin Ophthalmol. 2010;4:917-918. IF 1.766
- 24) Muramatsu C, Nakagawa T, Sawada A, Hatanaka Y, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Automated segmentation of optic disc region on retinal fundus photographs: comparison of contour modeling and pixel classification methods. Comput Methods Programs Biomed. 2011;101:23-32. IF 1.238
- 25) Yamamoto T, Kuwayama Y. The collaborative bleb-related infection incidence and treatment study group. Interim clinical outcomes in the collaborative bleb-related infection incidence and treatment study. Ophthalmology. 2011;118:453-458. IF 5.017
- 26) Yasumura R, Meguro A, Ota M, Nomura E, Uemoto R, Kashiwagi K, Mabuchi F, Iijima H, Kawase K, Yamamoto T, Nakamura M, Negi A, Sagara T, Nishida T, Inatani M, Tanihara H, Aihara M, Araie M, Fukuchi T, Abe H, Higashide T, Sugiyama K, Kanamoto T, Kiuchi Y, Iwase A, Ohno S, Inoko H, Mizuki N. Investigation of the association between SLC1A3 gene polymorphisms and normal tension glaucoma. Mol Vis. 2011;17:792-796. IF 2.511
- 27) Muramatsu C, Hatanaka Y, Sawada A, Yamamoto T, Fujita H. Computerized detection of peripapillary chorioretinal atrophy by texture analysis. Proceedings of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society. 2011:5947-5950.
- 28) Hatanaka Y, Noudo A, Muramatsu C, Sawada A, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Automatic measurement of cup to disc ratio based on line profile analysis in retinal images. Proceedings of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society. 2011:3387-3390.
- 29) Muramatsu C, Nakagawa T, Sawada A, Hatanaka Y, Yamamoto T, Fujita H: Automated determination of cup-to-disc ratio for classification of glaucomatous and normal eyes on stereo retinal fundus images. J Biomed Optics. 2011;16:096009-1-7. IF 3.188
- 30) Kiyofumi M, Shinsuke S, Kazunari U, Shinya K, Kiyofumi O, Noriaki Y, Shinji O. Intraocular Penetration of Micafungin in Patient with Candida albicans Endophthalmitis. J Ocul Pharmacol Ther. 2011;27:531-533. IF 1.609

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：山本哲也，研究分担者：川瀬和秀，澤田 明，望月清文；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：緑内障の治療予後改善による失明の予防；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,800：1,300：900 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

山本哲也：

- 1) 日本眼科学会理事(平成 23 年 6 月～現在)
- 2) 日本眼科学会戦略企画会議第四委員会委員長(平成 23 年 7 月～現在)
- 3) 日本眼科学会評議員(～現在)
- 4) 日本眼科学会専門医制度生涯教育委員会専門委員(平成 21 年度～現在)
- 5) 日本緑内障学会理事(～現在)
- 6) 日本緑内障学会評議員(～現在)
- 7) 日本緑内障学会データ解析委員会委員(～現在)
- 8) 日本緑内障学会将来計画検討委員会委員(～現在)
- 9) 日本眼科手術学会理事(～平成 22 年 1 月)
- 10) 日本眼薬理学会評議員(～現在)
- 11) Glaucoma Research Society, Executive Committee Member(～平成 22 年 4 月)

- 12) World Glaucoma Association, Cochairman of the WGA Committee on Global Research and Screening(～現在)
- 13) World Glaucoma Association, Member of the WGA Code of Practice Committee(～現在)
- 14) Asian Angle-closure Glaucoma Club, President(～現在)
- 15) South Asia Glaucoma Interested Group, board member(平成 21 年 7 月～現在)

川瀬和秀：

- 1) 日本緑内障学会評議員(～現在)
- 2) 日本ロービジョン学会評議員(～現在)
- 3) 日本眼薬理学会評議員(平成 23 年度～現在)

2) 学会開催

- 1) 第 423 回東海眼科学会(平成 23 年 6 月 23 日, 岐阜市)

3) 学術雑誌

山本哲也：

- 1) Japanese Journal of Ophthalmology ; Executive Editor (平成 21 年 7 月～現在)
- 2) Asian Journal of Ophthalmology ; Editor (～現在)
- 3) 日本眼科学会雑誌；編集委員(平成 21 年 6 月～現在)
- 4) あたらしい眼科；編集委員(～現在)
- 5) 岐阜県医師会医学雑誌；編集委員(～現在)
- 6) Korean Journal of Ophthalmology ; Advisory Editorial Board Member(平成 22 年 2 月～現在)
- 7) Taiwan Journal of Ophthalmology ; International Editorial Board Member(平成 23 年 5 月～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

山本哲也：

- 1) 第 32 回日本眼科手術学会(平成 21 年 1 月, 神戸, 教育セミナー17 トラベクトミー 難治例への対応と合併症対策. 「緑内障手術-トラブルシューティング」教育講演演者)
- 2) Taiwan Academy of Ophthalmology Spring Meeting 2009(2009.03, Taipei, Taiwan Clinical consensus toward glaucoma management : Japan Glaucoma Guidelines ; Invited speaker)
- 3) Taiwan Academy of Ophthalmology Spring Meeting 2009(2009.03, Taipei, Taiwan Japan experience of normal-tension glaucoma and its treatment ; Invited speaker)
- 4) APAO-AAO Joint Congress Bali 2009(2009.05, Bali, Indonesia Symposium : von Graefe Society - non-pressure dependent mechanisms in glaucoma : Does diurnal variation of IOP differ in NTG from the normal population? ; Invited speaker)
- 5) Fudan University 五官科病院特別講演会(2009.06, Shanghai, China, Normal-tension glaucoma: What we found and how to manage it ; Invited speaker)
- 6) World Glaucoma Congress(2009.07, Boston, USA, Japan-Taiwan Roundtable Discussion: Has change really occurred? PAS observation during the last 20 years. Primary angle closure -Asian perspectives ; Invited speaker)
- 7) World Glaucoma Congress(2009.07, Boston, USA, Japan-Taiwan Roundtable Discussion: Primary angle closure -Asian perspectives ; co-organizer, co-chairman)
- 8) World Glaucoma Congress(2009.07, Boston, USA, Didactic Session#6 ; co-organizer, co-chairman)
- 9) 第 30 回東海緑内障の会(平成 21 年 7 月, 名古屋, 30 周年記念シンポジウム「緑内障薬物治療の最前線」座長)
- 10) 第 20 回日本緑内障学会(平成 21 年 11 月, 沖縄県・宜野湾市, 会長企画シンポジウム「チャンブルー・グラウcoma」共同座長)
- 11) The 7th AACGC Meeting(2009.12, Kuala Lumpur, Malaysia, Key Address : Prof. Prin Rojanapongpun, chairman)
- 12) 第 114 回日本眼科学会総会(平成 22 年 4 月, 名古屋, 依頼講演「開放隅角緑内障のスクリーニング 2 眼圧と視野を中心に. 教育セミナー「緑内障のスクリーニング」演者)
- 13) 第 114 回日本眼科学会総会(平成 22 年 4 月, 名古屋, 依頼講演「サブスペシャリティサンデー「緑内

- 障・視神経症」緑内障診療（検査・診断）のアップデート」演者)
- 14) What is new about TAFLOTAN - Basic aspects and Non clinical studies-. Taflotan launching symposium(2010.06, Seoul, Korea, Invited speaker)
 - 15) 第 21 回日本緑内障学会(平成 22 年 9 月, 福岡, データ解析委員会特別セッション「濾過胞感染調査 2 研究の現状」)
 - 16) No. 2010 MSD Korea-Japan Glaucoma Symposium.(2010.09, Busan, Korea, Should blood flow concept be considered in the treatment of glaucoma in clinical settings? ; Invited speaker)
 - 17) APAO-AAO Joint Congress Beijing 2010(2010.09, Beijing, China, Subspecialty day program : GON & autoimmunity, and beyond ; Invited speaker)
 - 18) APAO-AAO Joint Congress Beijing 2010(2010.09, Beijing, China, Pfizer lunch symposium : Fundamentals of glaucoma management – The importance of early, accurate diagnosis ; Invited speaker)
 - 19) APAO-AAO Joint Congress Beijing 2010(2010.09, Beijing, China, SEAGIG Symposium : Imaging technology will replace gonioscopy’ Yes! ; Invited speaker)
 - 20) The 51st Annual Meeting of the Ophthalmological Society of Taiwan(2010.12, Taipei, Taiwan, Glaucoma Special Lectures : Relationship between central corneal thickness and visual field abnormality in open-angle glaucoma ; Invited speaker)
 - 21) Glaucoma in Japan. Asia-Pacific Joint Glaucoma Congress(2010.12, Taipei, Taiwan, Symposium 9 : Burden of Glaucoma Preventive Strategies ; Invited speaker)
 - 22) 第 34 回日本眼科手術学会(平成 23 年 1 月, 京都, 「シンポジウム 5 小児の緑内障手術. 適応と手術手技, 成績 : ゴニオトミー」シンポジスト)
 - 23) Asia-Pacific Academy of Ophthalmology Sydney 2011(2011.03, Sydney, Australia, Course 3 – Controversies in NTG: Pathogenesis and Treatment, Normal tension glaucoma: surgical vs. medical treatment; Invited speaker)
 - 24) Asia-Pacific Academy of Ophthalmology Sydney 2011(2011.03, Sydney, Australia, Course 3 – Controversies in NTG: Pathogenesis and Treatment; co-chairman)
 - 25) Asia-Pacific Academy of Ophthalmology Sydney 2011(2011.03, Sydney, Australia, AOGS symposium –Something old and something new, Trabeculectomy: Update on bleb related complications; Invited speaker)
 - 26) 第 115 回日本眼科学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, 「サブスペシャルサンディ緑内障・視神経症」ディレクター・モデレーター)
 - 27) World Glaucoma Congress 2011(2011.06-07, Paris, France, Symposium on Glaucoma progression, Should clinical therapy be advanced following optic disc hemorrhage?; Invited speaker)
 - 28) World Glaucoma Congress 2011(2011.06-07, Paris, France, Symposium on Normal tension glaucoma, Should NTG be treated differently than HTG? Pro; Invited speaker)
 - 29) World Glaucoma Congress 2011(2011.06-07, Paris, France, Symposium on Normal tension glaucoma; Co-chairman)
 - 30) 第 22 回日本緑内障学会(平成 23 年 9 月, 秋田, 「シンポジウム 4 隅角閉塞のメカニズムを考える プラトー虹彩と第 4 のメカニズム」指名討論者)
 - 31) 第 22 回日本緑内障学会(平成 23 年 9 月, 秋田, 「シンポジウム 4 隅角閉塞のメカニズムを考える」共同座長)
 - 32) The 52nd Annual Meeting of the Ophthalmological Society of Taiwan(2011.11, Taipei, Taiwan, Glaucoma Special Lectures : Bleb-related Infection. A serious complication of filtering surgery ; Invited speaker)

望月清文 :

- 1) 第 32 回日本眼科手術学会総会(平成 21 年 1 月, シンポジウム トラベクレクトミー後の眼内炎の診断と治療「術後眼内炎—診断と治療」シンポジスト)
- 2) 第 54 回日本臨床視覚電気生理学会(平成 21 年 10 月, シンポジウム・緑内障の視機能を電気生理で評価する「多局所 ERG で緑内障の視機能を評価する」シンポジスト)
- 3) 第 57 回日本化学療法学会西日本支部総会および第 52 回日本感染症学会中日本地方会学術集会(平成 21 年 11 月, 教育セミナー「眼科セッション」座長)

川瀬和秀：

- 1) 第 32 回日本眼科手術学会(平成 22 年 1 月, 東京, 教育セミナー「緑内障とロービジョンケア」 「視野障害と手術」シンポジスト)
- 2) 第 114 回日本眼科学会総会(平成 22 年 4 月, 名古屋, サブスペシャルサンデー「緑内障治療(病型別)のアップデート 原発開放隅角緑内障(広義)初期」シンポジスト)
- 3) 第 21 回日本緑内障学会(平成 22 年 9 月, 福岡, シンポジウム「アジアの緑内障疫学調査 Comparison of several glaucoma surveys 3 Miscellaneous issues」シンポジスト)
- 4) 第 21 回日本緑内障学会(平成 22 年 9 月, 福岡, シンポジウム「緑内障治療薬の科学」オーガナイザー)
- 5) 第 21 回日本緑内障学会(平成 22 年 9 月, 福岡, 「基礎研究 ポスター」座長)
- 6) 第 33 回日本眼科手術学会(平成 23 年 1 月, 京都, 教育セミナー「眼科術者にとって必要なロービジョンケアの知識」「末期緑内障のロービジョンケア」シンポジスト)
- 7) 第 423 回東海眼科学会(平成 23 年 6 月, 岐阜, 座長)
- 8) 第 22 回日本緑内障学会(平成 23 年 9 月, 秋田, 「ポスター7 症例報告」座長)
- 9) 第 65 回日本臨床眼科学会(平成 23 年 10 月, 東京, インストラクションコース「アッという間に迫る, 電子カルテ・部門システムリプレイスからのサバイバル」「電子カルテ・眼科部門システムリプレイス経験からの提案」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

山本哲也：

- 1) 日本失明予防協会研究助成選考委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜県社会福祉審議会委員(～現在)
- 3) 岐阜市社会福祉審議会委員(～現在)
- 4) 国民年金障害審査委員(～現在)
- 5) 岐阜県ジンアイバンク協会副理事長(平成 23 年度～現在), 理事(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 山本哲也：健康欄：中日新聞(2009 年 12 月 4 日)
- 2) 山本哲也：高眼圧症：読売新聞(2011 年 6 月 12 日)

12. 自己評価

評価

ここ数年間の最大の問題点であった医局員数の減少には歯止めがかかった。しかしながら、眼科学の進歩に伴う臨床業務量の増加に対して現在の医局員数は少ないと言わざるを得ない。その中で、臨床的活動、学会活動、論文作成など努力を十分に重ね一定の成果をあげていると自己評価する。

現状の問題点及びその対応策

医局員減少に伴う臨床業務時間の相対的増加により、医学研究に充てる時間が減少した。このため、臨床業務に制限を設け、相対的に研究時間の増加について模索している。また、岐阜大学のほかの基礎講座や他研究機関と共同研究の促進などを行っている。

今後の展望

よりよい研究成果を求める上で、医師ひとりひとりの臨床業務にゆとりを持たせることは絶対的に必要である。したがって新入医局員の誘致がそれを達成する上で必要不可欠であると考え。それが改善されない限り、人材を育成することを含め現状を打破することは難しい。

(9) 脳病態解析学（連携大学院）分野

1. 研究の概要

交通事故による脳損傷に起因する遷延性意識障害をはじめとする各種脳疾患の病態解析、診断、治療を目的とした研究領域において、国立大学法人岐阜大学、独立行政法人自動車事故対策機構、社会医療法人厚生会木沢記念病院はそれぞれが有する人材、機器、手法を有機的に融合させ国際的に先導できる学術的分野の開発を目指し、本連携大学院が中部療護センターに設置されました。医師を含めた医療関係者を対象に大学院生として医学博士取得を目的とした教育と研究（博士課程）を行ないます。PET (FDG, methionine, choline, DOPA, H₂O, CO₂, PIB 等のトレーサーを使用), 3T MRI (通常画像, MRS, fMRI, tensor image, ADC 等), SPECT を用いた画像の解析を主軸に、頭部外傷後遷延性意識障害および高次脳機能障害患者の脳の形態と脳代謝機能の評価、頭部外傷後遷延性意識障害および高次脳機能障害患者の治療（リハビリテーション, 薬物, 外科的介入）効果の評価, 脳腫瘍の画像診断, 脳腫瘍の治療効果の評価, 放射線壊死の診断と評価に関する研究を行います。

2. 名簿

教授： 篠田 淳 Jun Shinoda
准教授： 浅野好孝 Yoshitaka Asano

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 篠田 淳. 核医学検査：松谷雅生, 藤巻高光監修. 脳・神経・脊髄イラストレテッド ー病態生理とアセスメントー, 月刊ナーシング 4 増刊号, 東京：学研；2009 年：192-195.
- 2) 篠田 淳. 核医学検査：松谷雅生, 藤巻高光監修. 脳・神経・脊髄イラストレテッド ー病態生理とアセスメントー, 東京：学研；2010 年：184-187.
- 3) 篠田 淳, 浅野好孝, 竹中俊介, 秋 達樹. ¹¹C-methionine PET による脳腫瘍診断：米倉義晴編集主幹. 臨床医とコメディカルのための最新クリニカル PET. 先端医療シリーズ 41, 東京：寺田国際事務所・先端医療技術研究所；2010 年：147-151.
- 4) 三輪和弘, 篠田 淳, 松尾政之, 矢野大仁. 悪性神経膠腫に対する低分割大量放射線治療：V. 脳腫瘍の治療 脳腫瘍の放射線療法. 新時代の脳腫瘍学 ー診断・治療の最前線ー. 日本臨床 68 [増刊号], 大阪：日本臨床社；2010 年：396-401.
- 5) 浅野好孝. 開頭術：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：106-108.
- 6) 浅野好孝. 穿頭術：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：109.
- 7) 浅野好孝. 経蝶形骨洞手術：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：110.
- 8) 浅野好孝. 神経内視鏡手術：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：111.
- 9) 浅野好孝. 血管内治療：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：112-113.
- 10) 浅野好孝. 定位脳手術：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：114.
- 11) 浅野好孝. 脊椎・脊髄手術：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：115.
- 12) 浅野好孝. 放射線治療：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：116.
- 13) 浅野好孝. 化学療法：石山光枝監修. 今さら聞けない脳神経外科看護の疑問. ブレインナーシング 2011 年春季増刊号, 大阪：メディカ社；2011 年：117-118.
- 14) 浅野好孝, 篠田 淳. 頭部外傷の tractography とテンソル画像：宮野佐年, 三上真弘, 安保雅博編集・企画. 特集：脳疾患画像読影のコツと pitfall. Monthly Book Medical Rehabilitation No.132, 東京：全日本病院出版会；2011 年：107-115.

著書（欧文）

- 1) Shinoda J, Asano Y. Evaluation and management of coma patients. Essential Practice of Neurosurgery. In: Kalangu KKN, Kato Y, Dechambenoit G, eds. Nagoya: Access Publishing; 2009:51-66.

総説（和文）

- 1) 竹中俊介, 浅野好孝. 糖尿病ー脳血管障害につきものの周辺疾患の知識ー, ブレインナーシング 2009 年；25 巻：340-342.

- 2) 浅野好孝: 肥満-脳血管障害につきものの周辺疾患の知識-, *ブレインナーシング* 2009年; 25巻: 343-345.
- 3) 篠田 淳, 浅野好孝, 矢野大仁. *Current Organ Topics : Central Nervous System Tumor -IV. グリオーマ診療における ¹¹C-methionine PET の有用性-*, 癌と化学療法 2010年; 37巻: 1027-1033.
- 4) 松岡伸幸, 浅野好孝. びまん性軸索損傷に対する拡散テンソル画像および FDG-PET. 画像を活かした脳損傷のケーススタディ, *理学療法ジャーナル* 2010年; 44巻: 733-779.
- 5) 篠田 淳, 浅野好孝. 頭部外傷による高次脳機能障害とその画像診断, *No Shinkei Geka* 2011年; 39巻: 115-127.
- 6) 篠田 淳. 遷延性意識障害の病態, *Brain* 2011年; 1巻: 320-327.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 中山則之, 篠田 淳, 矢野大仁, 加藤貴之, 三輪和弘, 大江直行, 岩間 亨. *Glioma の PET 解析 -Astrocytic tumors と Oligodendrocytic tumors の鑑別について-*, *CI 研究* 2009年; 31巻: 83-90.
- 2) 奥村由香, 奥村 歩, 松本 淳, 門間陽子, 豊島義哉, 篠田 淳, 山田實紘. *Amnesic MCI に対する集団認知音楽療法の効果*, *日本音楽療法学会誌* 2010年; 10巻: 28-37.

原著 (欧文)

- 1) Yano H, Ohe N, Shinoda J, Yoshimura S, Iwama T. Immunohistochemical study concerning the origin of neurocytoma -A case report -. *Pathol Oncol Res.* 2009;15:301-305. IF 1.483
- 2) Matsuo M, Miwa K, Shinoda J, Kato N, Nishibori H, Sakurai K, Yano H, Iwama T, Kanematsu M. Target definition by C11-methionine-PET for the radiotherapy of brain metastasis. *Int J Radiat Oncol Biol Phys.* 2009;74:714-722. IF 4.503
- 3) Matsunaga M, Isowa T, Kimura K, Miyakoshi M, Kanayama N, Murakami H, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J, Konagaya T, Kaneko H, Ohira H. Associations among positive mood, brain, and cardiovascular activities in an affectively positive situation. *Brain Res.* 2009;1263:93-103. IF 2.633
- 4) Nakao T, Osumi T, Ohira H, Kasuya Y, Shinoda J, Yamada J. Neural bases of behavior selection without an objective correct answer. *Neurosci Lett.* 2009;459:30-34. IF 2.055
- 5) Ohira H, Fukuyama S, Kimura K, Nomura M, Isowa T, Ichikawa N, Matsunaga M, Shinoda J, Yamada J. Regulation of natural killer cell redistribution by prefrontal cortex during stochastic learning. *Neuroimage.* 2009;47:897-907. IF 5.923
- 6) Yano H, Ohe N, Nakayama N, Shinoda J, Iwama T. Clinicopathological features from long-term observation of a papillary tumor of the pineal region (PTPR): a case report. *Brain Tumor Pathol.* 2009;26:83-88. IF 1.129
- 7) Ohira H, Ichikawa N, Nomura M, Isowa T, Kimura K, Kanayama N, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J. Brain and autonomic association accompanying stochastic decision-making. *Neuroimage.* 2010;49:1024-1037. IF 5.923
- 8) Matsunaga M, Murakami H, Yamakawa K, Isowa T, Kasugai K, Yoneda M, Kaneko H, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J, Ohira H. Genetic variations in the serotonin transporter gene-linked polymorphic region influence attraction for a favorite person and the associated interactions between the central nervous and immune systems. *Neurosci Lett.* 2010;468:211-215. IF 2.055
- 9) Nakao T, Osumi T, Ohira H, Kasuya Y, Shinoda J, Yamada J, Northoff G. Medial prefrontal cortex-dorsal anterior cingulate cortex connectivity during behavior selection without an objective correct answer. *Neurosci Lett.* 2010;482:220-224. IF 2.055
- 10) Okada M, Yano H, Hirose Y, Nakayama N, Ohe N, Shinoda J, Iwama T. Olig2 is useful in the differential diagnosis of oligodendrogliomas and extraventricular neurocytomas. *Brain Tumor Pathol.* 2011;28:157-166. IF 1.129
- 11) Takenaka S, Shinoda J, Asano Y, Aki T, Miwa K, Ito T, Yokoyama K, Iwama T. Metabolic assessment of monofocal acute inflammatory demyelination using MR spectroscopy and (11)C-methionine-, (11)C-choline-, and (18)F-fluorodeoxyglucose-PET. *Brain Tumor Pathol.* 2011;28:229-238. IF 1.129
- 12) Matsunaga M, Murakami H, Yamakawa K, Isowa T, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J, Ohira H. Perceived happiness level influences evocation of positive emotions. *Natural Science.* 2011;8:723-727. IF 1.129
- 13) Ohira H, Matsunaga M, Kimura K, Murakami H, Osumi T, Isowa T, Fukuyama S, Shinoda J, Yamada J. Chronic stress modulates neural and cardiovascular responses during reversal learning. *Neuroscience* 2011;193:193-204. IF 3.215
- 14) Toyoshima Y, Asano Y, Shinoda J, Takenaka S, Aki T, Iwama T. A speech expression disorder in patients with severe diffuse brain injury who emerged from a vegetative or minimally conscious state. *Brain Injury.* 2011;25:1212-1220. IF 1.750

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：奥村由香，研究分担者：奥村 歩，篠田 淳，豊島義哉；2009年度音楽療法学会プロジェクト研究助成金：Amnesic MCI(Mild Cognitive Impairment)の中核症状に介入する音楽療法の認知症予防の効果の検討；平成19-21年度；3,000千円(1,000：1,000：1,000千円)
- 2) 研究代表者：浅野好孝，研究分担者：竹中俊介，秋 達樹；JA 共済交通事故医療研究助成金：交通事故による慢性期の軽度外傷性脳損傷（mild traumatic brain injury）患者の脳損傷部位の描出；平成23年度；1,000千円
- 3) 研究代表者：奥村由香；研究分担者：浅野好孝，竹中俊介，秋 達樹；JA 共済交通事故医療研究助成金：音楽は深く傷ついた脳に届くのかー健康者と遷延性意識障害患者の音と音楽刺激に対する反応のfMRIを用いた比較検討ー；平成23年度；1,000千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

篠田 淳：

- 1) 日本脳神経外科学会評議員(～現在)，同代議員(平成23年9月～現在)
- 2) 日本脳神経外科光線力学研究会幹事(～現在)
- 3) 日本意識障害学会理事(～現在)
- 4) 日本放射線外科学会世話人(平成21年1月～現在)
- 5) 日本ニューロリハビリテーション学会理事(平成21年10月～現在)
- 6) 日本音楽医療研究会役員(～現在)

浅野好孝：

- 1) 日本脳神経外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本意識障害学会世話人(平成23年9月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

篠田 淳：

- 1) 第12回岐阜県脳神経外科懇話会(平成21年5月，岐阜，教育講演「高次脳機能障害ー画像診断の進歩と岐阜県の現状ー」演者)
- 2) 第43回日本リハビリテーション医学会関東地方会(平成21年9月，東京，教育講演「最新の神経画像による頭部外傷後高次脳機能障害の評価とその有用性」演者)
- 3) 平成21年度第2回静岡県作業療法士会学術部研修会(平成21年10月，静岡，教育講演「高次脳機能障害ー最新の画像診断ー」演者)
- 4) 第1回日本放射線外科学会(平成21年11月，東京，教育講演「Glioma 診療における methionine-PET の有用性ーTomotherapy を用いた IMRT への応用他ー」演者)
- 5) 第1回日本ニューロリハビリテーション学会(平成22年1月，名古屋，指名講演「高次脳機能障害を呈する慢性期びまん性軸索損傷患者の神経画像的評価」演者)

- 6) 平成 22 年度厚生労働省科学研究「高次脳機能障害者の地域生活支援の推進に関する研究」東海ブロック連絡協議会(平成 22 年 9 月, 津, 指名講演「軽度外傷性脳損傷 ー受傷時, 意識障害が見られない高次脳機能障害(軽度外傷性脳損傷)患者の画像についてー」 演者)
- 7) 平成 23 年大阪弁護士会講演会(平成 23 年 2 月, 大阪, 教育講演「脳外傷の画像による鑑別診断, 画像で脳外傷はどこまで判明するか ーM-TBI を中心としてー」 演者)
- 8) 平成 23 年度第 1 回脳神経看護セミナー(平成 23 年 4 月, 名古屋, 教育講演「外傷性脳損傷と高次脳機能障害 ー最新の画像診断ー」 演者)
- 9) 第 13 回三重・大阪脳腫瘍カンファレンス(平成 23 年 6 月, 津, 特別講演「グリオーマ診療におけるメチオニン PET の役割 ー特にトモセラピーを用いた放射線治療との係わりについてー」 演者)
- 10) 平成 23 年度大阪府高次脳機能障がい支援普及事業高次脳機能障がい医療機関等職員研修会(平成 23 年 7 月, 大阪, 招待講演「脳外傷における高次脳機能障がいの画像診断について」 演者)
- 11) 第 20 回日本交通医学工学研究会(平成 23 年 9 月, 名古屋, 指名講演・シンポジウム「外傷性脳損傷による高次脳機能障害のメカニズムとその画像診断」 演者)
- 12) 第 16 回日本神経精神医学研究会(平成 23 年 12 月, 京都, 特別講演「高次脳機能障害を引き起こすびまん性軸索損傷の画像診断」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

浅野好孝:

- 1) 第 70 回日本脳神経外科学会学術会長賞(平成 23 年)

9. 社会活動

篠田 淳:

- 1) 岐阜県高次脳機能障害支援対策推進委員会委員長(～現在)
- 2) 岐阜県医師育成・確保コンソーシアムの企画調整委員会委員(平成 23 年 4 月～現在)

10. 報告書

- 1) 篠田 淳: 平成 20 年度岐阜県高次脳機能障害支援事業報告: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金「こころの健康科学研究事業 ー高次脳機能障害者に対する地域支援ネットワークの構築に関する研究(H18-こころ- 一般-008)」平成 20 年度総括・分担研究報告書(中島班): 164-172(平成 21 年 3 月)
- 2) 篠田 淳: 岐阜県高次脳機能障害支援事業報告: 厚生労働科学研究費補助金「こころの健康科学研究事業 ー高次脳機能障害者に対する地域支援ネットワークの構築に関する研究(H18-こころ- 一般-008)」平成 18～20 年度 総合研究報告書(中島班): 81-94(平成 21 年 3 月)
- 3) 篠田 淳: 岐阜県高次脳機能障がい者支援対策推進委員会: 高次脳機能障がい者支援に関するアンケート調査報告書: 厚生労働科学研究費補助金「こころの健康科学研究事業 ー高次脳機能障害者に対する地域支援ネットワークの構築に関する研究(H18-こころ- 一般-008)」(平成 22 年 4 月)

11. 報道

- 1) 篠田 淳他: 私たちはあきらめない ー遷延性意識障害 回復への挑戦ー: 企画: 独立行政法人自動車事故対策機構, 制作: 株式会社 NHK エンタープライズ: DVD(2009 年 3 月)
- 2) 篠田 淳他: 交通事故被害者に車いす ー廃車ドットコム合同会社, 中部療護センターに寄贈ー: 岐阜新聞(2009 年 8 月 7 日)
- 3) 篠田 淳他: NASVA 療護センター ー～重度後遺症からの回復に向けてー: 企画・制作: 独立行政法人自動車事故対策機構: DVD(2009 年 9 月)
- 4) 篠田 淳他: リハビリ病院紹介 中部療護センター: Koisyo News NPO 法人交通事故後遺障害者家族の会 No.32: 4: 雑誌取材(2009 年 9 月)
- 5) 篠田 淳他: 高次脳機能障害専門家が講演 ー岐阜ー: 中日新聞(2010 年 1 月 31 日)
- 6) 篠田 淳他: 高次脳機能障害, 理解を ー岐阜市でフォーラム, 大学教授ら症例解説ー: 岐阜新聞(2010 年 1 月 31 日)
- 7) 篠田 淳他: 重い後遺症, 救済遠く ー終日介護, 家族に負担ー: 日本経済新聞(2010 年 1 月 31 日)
- 8) 篠田 淳他: NASVA Medi-care Centers ーThe Challenges of Medi-care Centers, We shall never give upー: 企画, 制作: 独立行政法人自動車事故対策機構(2010 年 4 月)
- 9) 篠田 淳他: 交通事故減少の陰で ー交通事故専門の病院ー: 関西テレビ ースーパーニュースア

ンカー(2010年5月6日)

- 10) 篠田 淳他：患者を癒すセラピー犬 ―美濃加茂市の病院訪問―：岐阜新聞朝刊(2010年5月30日)
- 11) 篠田 淳他：脳放射線壊死に対するベバシズマブの有用性を確認：Medical Tribune(2011年4月21日)
- 12) 篠田 淳他：医療ルネサンス, 続・見えない脳外傷 ―損傷「見える」検査へ工夫―：読売新聞朝刊(2011年6月24日)

12. 自己評価

評価

65点(100点満点中)

現状の問題点及びその対応策

国内・国外でのアピールの不足, 外国語論文の不足が否めない。学会活動を活発に行い, 論文作成に力を入れる。

今後の展望

学内・学外他施設との共同研究の推進, てんかん, 認知症などこれまで手をつけていなかった分野へ研究領域を拡大する。

〔腫瘍制御学講座〕

(1) 腫瘍病理学分野

1. 研究の概要

病理学における研究は、遺伝子レベルの基礎的なものから人体摘出検体を材料とする臨床病的なものまでの広範な領域を占めています。教室の伝統的な主要テーマである、腫瘍の発生から予防までの病理学的研究を継続して研究するとともに、再生医療、幹細胞医学にも関連した新規病理学分野の研究を行っています。

(1) 遺伝子改変マウス作製技術を用いた大腸がんの分子機構解明

ES 細胞での相同組み換え技術を利用した、コンディショナルノックアウトマウス、遺伝子発現誘導マウスを作製しています。大腸がんのメカニズム解明を目指しています。遺伝子改変マウス作製技術に興味のある方、大歓迎です。

(2) がん細胞リプログラミングによるがんエピジェネティック異常の意義解明

Oct4, Sox2, Myc, Klf4 という 4 因子発現により、分化細胞の初期化が可能となりました。がん細胞にこの技術を応用し、がん細胞でのエピジェネティック状態を変化させ、がん細胞特異的な変化を同定することで、がん細胞でのエピジェネティック異常の意義を明らかにしようとしています。

(3) DNA メチル化機構と腫瘍発生の解明

遺伝子発現調節の要、エピジェネティクス制御機構の 1 つである DNA メチル化機構と腫瘍発生を二つの視点 [1] Site specific DNA hypermethylation [2] Global DNA hypomethylation に注目して研究しています。[1]は口腔扁平上皮癌を材料に癌抑制遺伝子の発現プロモーター部位における DNA メチル化と腫瘍発生の関係を研究し、[2]については、DNA 低メチル化マウス（維持メチル基転移酵素である Dnmt1 の低発現マウス）を用いて、各種腫瘍発生における DNA メチル化の意義解明に取り組んでいます。

(4) 再生医療、幹細胞医学に関連する腫瘍発生の解明とその予防

再生医学の臨床応用が進んでいない理由の一つに、*in vitro* での知見が必ずしも *in vivo* では実現できていないこと、そして、胚性幹細胞 (ES 細胞) を組織再生に利用した場合、しばしば奇形腫として正常組織まで破壊する腫瘍性増殖をきたすことがあげられます。当教室では腫瘍病理の知識をもとに再生医学の臨床応用の際に問題となる腫瘍発生を、がん幹細胞 (cancer stem cell) と関連させて研究しています。

(5) 神経再生研究のための神経障害動物モデルの開発

神経軸索内を断片化 DNA がダイナミックにシナプス部まで移動することを神経のアポトーシスに特異的現象として報告し、一過性脳虚血に伴う海馬 CA1 領域の遅発性細胞死がアポトーシスであることを証明しました。神経疾患モデルとしての扱いやすさから、マウス網膜に注目しています。神経細胞死とアポトーシスの関係を明らかにする一方、視細胞に対し選択的に傷害を与える新たなモデルを確立し、神経再生医学への応用としました。

2. 名簿

教授：	原 明	Akira Hara
准教授：	久野壽也	Toshiya Kuno
助教：	富田弘之	Hiroyuki Tomita
助教：	波多野裕一郎	Yuichiro Hatano

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)
なし

総説 (和文)

- 1) 山田泰広, 青木仁美, 國貞隆弘, 原 明. iPS 細胞と疾患解析: iPS 細胞作製技術の発癌研究への応用, 細胞工学 2009 年; 28 巻: 228-231.
- 2) 波多野裕一郎, 山田泰広, 原 明. 大腸多段階発癌と DNA メチル化の関連を探る - 疾患モデル動物を用いたエピジェネティクス研究の最新知見, G.I. Research 2009 年; 17 巻: 18-23.
- 3) 原 明. 幹細胞と腫瘍. 岐阜県内科医会雑誌 2010 年; 24 巻: 1-21.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 内村正史, 多羅尾信, 宮本康二, 大久保雄一郎, 原 明. 腸閉塞にて発症した乳癌小腸転移の 1 例, 日本臨床外科学会雑誌 2009 年; 70 巻: 1420-1424.
- 2) 内村正史, 多羅尾信, 宮本康二, 大久保雄一郎, 原 明. 腹腔内大量出血をきたした短胃動脈瘤破裂の 1 例, 日本臨床外科学会雑誌 2009 年; 70 巻: 1685-1689.
- 3) 矢野大仁, 大江直行, 榎本由貴子, 磯貝光治, 廣瀬善信, 坂田佳子, 原 明, 岩間 亨. 1 歳女兒, 脈絡叢乳頭癌の 1 例, 藤田学園医学会誌 2009 年; 33 巻: 143-148.
- 4) 川畑圭子, 原 明, 吉見直己. 嚢胞を伴った胸腺乳頭状腺癌の 1 例. 日本臨床細胞学会雑誌 2010 年; 49 巻: 30-35.
- 5) 波多野裕一郎, 鬼頭勇輔, 松永研吾, 廣瀬善信, 水野智子, 豊木 廣, 藤本次良, 森重健一郎, 原 明, 高見剛. 卵巣未熟奇形腫に peritoneal gliomatosis および nodal gliomatosis を合併した 1 例. 診断病理 2011 年; 28 巻: 62-68.

原著 (欧文)

- 1) Iwamoto N, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hara A, Taguchi A, Saito K, Takemura M, Imawari M, Moriwaki H, Seishima M. Upregulation of indoleamine 2,3-dioxygenase in hepatocyte during acute hepatitis caused by hepatitis B virus-specific cytotoxic T lymphocytes in vivo. *Liver Int.* 2009;29:277-283. IF 3.840
- 2) Hoshi M, Saito K, Murakami Y, Taguchi A, Fujigaki H, Tanaka R, Takemura M, Ito H, Hara A, Seishima M. Marked increases in hippocampal neuron indoleamine 2, 3-dioxygenase via IFN- γ -independent pathway following transient global ischemia in mouse. *Neurosci Res.* 2009;63:194-198. IF 2.096
- 3) Phutthaphadoong S, Yamada Y, Hirata A, Tomita H, Taguchi A, Hara A, Limtrakul PN, Iwasaki T, Kobayashi H, Mori H. Chemopreventive effects of fermented brown rice and rice bran against 4-(methylnitrosamino)-1-(3-pyridyl)-1-butanone-induced lung tumorigenesis in female A/J mice. *Oncol Rep.* 2009;21:321-327. IF 1.686
- 4) Aoki H, Yamada Y, Hara A, Kunisada T. Two distinctive types of melanocytes in the mouse body: differential signaling requirement for the maintenance of non-cutaneous and dermal melanocytes versus epidermal melanocytes. *Development* 2009;136:2511-2521. IF 6.898
- 5) Baba S, Yamada Y, Hatano Y, Miyazaki Y, Mori H, Shibata T, Hara A. Global DNA hypomethylation suppresses squamous carcinogenesis in the tongue and esophagus. *Cancer Sci.* 2009;100:1186-1191. IF 3.846
- 6) Aoki H, Hara A, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. In vitro and in vivo differentiation of human embryonic stem cells into retina-like organs and comparison with that from mouse pluripotent epiblast stem cells. *Dev Dyn.* 2009;238:2266-2279. IF 2.864
- 7) Baba S, Hara A, Kato K, Long NK, Hatano Y, Kimura M, Okano Y, Yamada Y, Shibata T. Aberrant promoter hypermethylation of the CHFR gene in oral squamous cell carcinomas. *Oncol Rep.* 2009;22:1173-1179. IF 1.686
- 8) Niwa M, Hara A, Taguchi A, Aoki H, Kozawa O, Mori H. Spatiotemporal expression of Hsp20 and its phosphorylation in hippocampal CA1 pyramidal neurons following transient forebrain ischemia. *Neurol Res.* 2009;31:721-727. IF 1.621
- 9) Otsuka S, Chousa M, Ohno T, Satoh G, Seishima M, Hatano Y, Hara A. A fetal case of delayed hemolytic transfusion reaction associated with anti-Diego B and anti-E antibodies. *Vox Sanguinis.* 2009;97:153-154. IF 3.292
- 10) Yamada Y, Aoki H, Kunisada T, Hara A. Rest promotes the early differentiation of mouse ESCs but is not required for their maintenance. *Cell Stem Cell* 2010;6:10-15. IF 25.943
- 11) Sakai H, Yamada Y, Shimizu M, Saito K, Moriwaki H, Hara A. Genetic ablation of TNF- α demonstrates no detectable suppressive effect on inflammation-related mouse colon tumorigenesis. *Chem Biol Interact.* 2010;184:423-430. IF 2.832
- 12) Hara A, Taguchi A, Aoki H, Hatano Y, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. Folate antagonist, methotrexate induces neuronal differentiation of human embryonic stem cells transplanted into nude mouse retina. *Neurosci Lett.* 2010;477:138-143. IF 2.055
- 13) Morikawa H, Tanaka T, Hamaji M, Ueno Y, Hara A. Papillary adenocarcinoma developed in a thymic cyst. *Gen Thorac Cardiovasc Surg.* 2010;58:295-297.
- 14) Tomita H, Hirata A, Yamada Y, Hata K, Oyama T, Mori H, Yamashita S, Ushijima T, Hara A. Suppressive effect of global DNA hypomethylation on gastric carcinogenesis. *Carcinogenesis* 2010;31:1627-1633. IF 5.402
- 15) Hoshi M, Saito K, Fujigaki H, Hara A, Taguchi A, Ohtaki H, Tanaka R, Osawa Y, Takemura M, Matsunami H, Ito H, Seishima M. The absence of indoleamine 2, 3-dioxygenase upregulates type I interferon production resulting in suppression of viral replication in retrovirus-infected mouse. *J Immunol.* 2010;185:3305-3312. IF 5.745

- 16) Ito H, Hoshi M, Ohtaki H, Taguchi A, Ando K, Ishikawa T, Osawa Y, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Ability of indoleamine 2,3-dioxygenase to attenuate liver injury in α -GalCer-induced-hepatitis model. *J Immunol.* 2010;185:4554-4560. IF 5.745
- 17) Nagano A, Ohno T, Shimizu K, Hara A, Yamamoto T, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Matsuhashi A, Yamada K, Takei Y. EWS/Fli-1 chimeric fusion gene up-regulates vascular endothelial growth factor-A. *Int J Cancer.* 2010;126:2790-2798. IF 4.926
- 18) Phutthaphadoong S, Yamada Y, Hirata A, Tomita H, Hara A, Limtrakul P, Iwasaki T, Kobayashi H, Mori H. Chemopreventive effect of fermented brown rice and rice bran (FBRA) on the inflammation-related colorectal carcinogenesis in ApcMin/+ mice. *Oncol Rep.* 2010;23:53-59. IF 1.686
- 19) Kuno T, Hirose Y, Yamada Y, Imaida K, Tatematsu K, Mori Y, Mori H. Chemoprevention of 1,2-dimethylhydrazine-induced colonic preneoplastic lesions in Fischer rats by 6-methylsulfinylhexyl isothiocyanate, a wasabi derivative. *Oncol Lett.* 2010;1:273-278.
- 20) Komori S, Osada S, Mori R, Matsui S, Sanada Y, Tomita H, Tokuyama Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Contribution of thymidylate synthase to gemcitabine therapy for advanced pancreatic cancer. *Pancreas.* 2010;39:1284-1292. IF 2.607
- 21) Matsui S, Osada S, Tomita H, Komori S, Mori R, Sanada Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Clinical significance of aggressive hepatectomy for colorectal liver metastasis, evaluated from the HGF/c-Met pathway. *Int J Oncol.* 2010;37:289-297. IF 2.571
- 22) Aoki H, Hara A, Motohashi T, Osawa M, Kunisada T. Functionally distinct melanocytes populations revealed by reconstitution of hair follicles in mice. *Pigment Cell Melanoma Res.* 2011;24:125-135. IF 4.750
- 23) Ohashi M, Shu E, Tokuzumi M, Fujioka K, Ishizuka T, Hara A, Fujimoto M, Kaji K, Seishima M. Anti-p155/140 Antibody-positive Dermatomyositis with Metastases Originating from an Unknown Site. *Acta Derm Venereol.* 2011;91:84-85. IF 2.780
- 24) Takigami I, Ohno T, Kitade Y, Hara A, Nagano A, Kawai G, Saitou M, Matsuhashi A, Yamada K, Shimizu K. Synthetic siRNA targeting the breakpoint of EWS/Fli-1 inhibits growth of Ewing sarcoma xenografts in a mouse model. *Int J Cancer.* 2011;128:216-226. IF 4.926
- 25) Satoh K, Niwa M, Goda W, Binh NH, Nakashima M, Takamatsu M, Hara A. Galectin-3 expression in delayed neuronal death of hippocampal CA1 following transient forebrain ischemia, and its inhibition by hypothermia. *Brain Res.* 2011;1382:266-274. IF 2.055
- 26) Yamada K, Yoshimura S, Kawasaki M, Enomoto Y, Asano T, Hara A, Minatoguchi S, Iwama T. Embolic complications after carotid artery stenting or carotid endarterectomy are associated with tissue characteristics of carotid plaques evaluated by magnetic resonance imaging. *Atherosclerosis.* 2011;215:399-404. IF 4.086
- 27) Hatano Y, Yamada Y, Hata K, Phutthaphadoong S, Aoki H, Hara A. Genetic ablation of a candidate tumor suppressor gene, Rest, does not promote mouse colon carcinogenesis. *Cancer Sci.* 2011;102:1659-1664. IF 3.846
- 28) Aoki H, Hara A, Motohashi T, Kunisada T. Protective Effect of Kit Signaling for Melanocyte Stem Cells against Radiation-Induced Genotoxic Stress. *J Invest Dermatol.* 2011;131:1906-1915. IF 6.270
- 29) Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Asano T, Kanematsu M, Takamatsu M, Hara A, Iwama T. High intensity signal on time-of-flight MR angiography indicates carotid plaques at high risk for cerebral embolism during stenting. *Stroke.* 2011;42:3132-3137. IF 5.756
- 30) Satoh K, Niwa M, Binh NH, Nakashima M, Kobayashi K, Takamatsu M, Hara A. Increase of Galectin-3 expression in microglia by hyperthermia in delayed neuronal death of hippocampal CA1 following transient forebrain ischemia. *Neurosci Lett.* 2011;504:199-203. IF 2.055
- 31) Hatano Y, Hirose Y, Matsunaga K, Kito Y, Yasuda I, Moriwaki H, Osada S, Yoshida K, Hara A. Combined adenomatoid tumor and well differentiated papillary mesothelioma of the omentum. *Pathol Int.* 2011;61:681-685. IF 1.481
- 32) Hata K, Kubota M, Shimizu M, Moriwaki H, Kuno T, Tanaka T, Hara A, Hirose Y. C57BL/KsJ-db/db-ApcMin/+ mice exhibit an increased incidence of intestinal neoplasms. *Int J Mol Sci.* 2011;12:8133-8145.
- 33) Fukuta S, Miyamoto K, Suzuki K, Maehara H, Inoue T, Hara A, Kikuike K, Taguchi A, Shimizu K. Bundance of calpain and aggrecan-cleavage products of calpain in degenerated human intervertebral discs. *Osteoarthritis Cartilage.* 2011;19:1254-1262. IF 3.953

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：山田泰広；科学研究費補助金若手研究(A)：体細胞における未分化性維持機構解明とその発癌メカニズム解明への応用；平成 19-21 年度；14,000 千円(6,000：4,300：3,700 千円)
- 2) 研究代表者：牛島俊和。研究分担者：山田泰広；厚生労働省科学研究費補助金：ヒト多段階発がん過程におけるエピジェネティックな異常の網羅的解明と臨床応用に関する研究；平成 19-21 年度；12,000 千円(4,000：4,000：4,000 千円)

- 3) 研究代表者：山田泰広；科学研究費補助金特定領域研究：腸管上皮の増殖・分化におけるエピジェネティック制御機構解明とその発がん研究への応用；平成 20-21 年度；10,200 千円(5,100：5,100 千円)
- 4) 研究代表者：山田泰広；科学技術振興機構(JST)さきがけ研究：リプログラミングによるがん細胞エピジェネティック異常の起源解明とその臨床応用に関する研究；平成 20-23 年度；39,900 千円(10,000：10,000：10,000：9,900 千円)
- 5) 研究代表者：高橋真美. 研究分担者：久野壽也；厚生労働省科がん研究開発費：肥満・高脂血症・糖尿病モデル動物の発がん感受性と発がん機構に関する研究；平成 22 年度；140 千円
- 6) 研究代表者：富田弘之；研究科長・医学部長裁量経費(国内外留学帰学者支援)；平成 22 年度；500 千円
- 7) 研究代表者：富田弘之；武田科学振興財団医学系研究奨励：胃癌における幹細胞と周囲微小環境に関連する FGF10/FGFR2 シグナル経路の役割の解明と治療への応用；平成 23 年度；3,000 千円
- 8) 研究代表者：富田弘之；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：消化器癌における幹細胞と周囲微小環境のメカニズムの解明；平成 23 年度；1,000 千円
- 9) 研究代表者：富田弘之；膵臓病研究財団研究奨励賞助成金：膵疾患における活性化膵星細胞のエピジェネティック修飾機構の関与の解明と治療への応用；平成 23 年度；1,000 千円
- 10) 研究代表者：富田弘之；内藤記念若手研究者海外派遣助成金：Suppressive effect of DNA hypomethylation on gastric carcinogenesis；平成 23 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 21 年度；4,665 千円；(株)保健科学研究所
- 2) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 21 年度；567 千円；(株)東海細胞研究所
- 3) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 22 年度；4,382 千円；(株)保健科学研究所
- 4) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 22 年度；588 千円；(株)東海細胞研究所
- 5) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 23 年度；4,001 千円；(株)保健科学研究所
- 6) 原 明：病理診断のコンサルタント；平成 23 年度；542 千円；(株)東海細胞研究所

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

原 明：

- 1) 日本病理学会評議員(～現在)
- 2) 日本脳神経外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本再生医療学会評議員(平成 21 年 3 月～現在)

久野壽也：

- 1) 日本病理学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

原 明：

- 1) Journal of Oncology ; Editorial Board (～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

原 明：

- 1) The spring international convention 2009, organized by The Pharmaceutical Society of Korea.

(2009.05, Daejeon, Korea, Symposium: Molecular pharmacological understandings of neurodegenerative disorders ; Symposist)

- 2) Seminar for indoleamine-2,3-dioxygenase (2009.05, Chunchon, Korea, Invited speaker)
- 3) 第24回発癌病理研究会(平成21年8月, 和倉「研究会9」座長)
- 4) 9th International Conference of The Asian Clinical Oncology Society (平成22年8月, Gifu, 「Cancer of the head and neck」座長)

山田泰広 :

- 1) 第98回日本病理学会総会(平成21年5月, 京都, ワークショップ「Role of epigenetic modifications in colon tumorigenesis」演者)
- 2) 第68回日本癌学会学術総会(平成21年10月, 横浜, シンポジウム「Role of epigenetic modifications in colon tumorigenesis」演者)

久野壽也 :

- 1) がん予防学術大会2010(平成21年7月, 札幌, クシヨップ「米由来物質のがん予防作用」演者)
- 2) 第100回日本病理学会総会(平成23年4月, 横浜, 学部学生示説4 座長)
- 3) 第4回比較腫瘍学シンポジウム(平成23年5月, 岐阜大学附属比較がんセンター主催「肺がん」座長)
- 4) 第70回日本癌学会学術総会 English Oral Sessions “Molecular modifications and carcinogenesis (3)” Chairperson (平成23年10月, 名古屋)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

原 明 :

- 1) 岐阜県成人病診断管理指導協議会がん登録評価部会委員(平成21年度～現在)

10. 報告書

- 1) 山田泰広 : ヒト多段階発がん過程におけるエピジェネティックな異常の網羅的解明と臨床応用に関する研究 : 平成20年度第3次対がん総合戦略研究事業 研究報告抄録集(牛島班) : (2009年)

11. 報道

- 1) 原 明 : ES細胞 分化促す遺伝子特定 岐阜大, 京大研究グループ : 中日新聞(2010年1月8日)
- 2) 原 明 : 「研究室から 大学はいま」再生医療とがん克服を目指す : 岐阜新聞(2011年4月19日)
- 3) 久野壽也 : 発酵玄米が肺がん抑制 : 北海道新聞(2010年8月20日)
- 4) 久野壽也 : 有機マグネシウムは, 炎症関連大腸がんを抑制する : マグネシア・ミュー(2011年7月)
- 5) 久野壽也 : 大腸がん, 水溶性マグネシウムが抑制 : 岐阜新聞(2011年10月5日)
- 6) 久野壽也 : 大腸がん 効果的抑制 : 中日新聞(2011年10月5日)
- 7) 久野壽也 : 水溶性マグネシウム マウスの大腸がん抑制 : 毎日新聞(2011年10月5日)
- 8) 久野壽也 : マグネシウムが大腸がん抑制? : 日本経済新聞(2011年10月5日)
- 9) 久野壽也 : 水溶性マグネシウム 大腸がん抑制の効果 : 読売新聞(2011年10月5日)
- 10) 久野壽也 : がん予防学会会報 NEWS LETTER No.70 「有機 Mg の炎症関連大腸発がんへの影響」(2011年11月)
- 11) 久野壽也 : ラジオ放送 FM わっち(78.5MHz)わっちアフタヌーンアワー ; 「岐阜大学からこんにちは」出演(2011年11月14日)

12. 自己評価

評価

医学研究の国際水準を維持しうるレベルの国際雑誌への研究発表は目標通りできていると思われる。病理学専攻の大学院生が平成22年度, 平成23年度にそれぞれ1名づつ入って来た事により, 将来的な若手研究者・病理医の育成が可能となった。

現状の問題点及びその対応策

平成 20 年 4 月 1 日より「医療法施行令の一部を改正する政令」および厚生労働省令により、病理診断科が医業に関して広告できる診療標榜科名となった。その後、病理診断業務の医療、社会に果たす責任がこれまで以上に増しており地域中核病院からの病理専門医、細胞診専門医の派遣要請も多い。病理専門医、細胞診専門医派遣による地域医療への貢献ができるよう若手病理医の育成を図っている。したがって国際レベルの病理研究と病理診断能力向上との両立を図るバランス感覚が重要となる。

今後の展望

教室の伝統的なテーマである、腫瘍の発生から予防までの病理学的研究体制を維持するとともに、再生医療、幹細胞医学にも関連した新規病理学分野を開拓する。単独分野での独立した研究体制には限界があるため、大学内での複数分野との協力体制を積極的に図る。また、病理学の基礎として人体病理（診断病理）を重視し、病院病理部と連携した上で地域医療に貢献できる病理医を育てる。

(2) 免疫病理学分野

1. 研究の概要

免疫反応の仕組みの解析を進めているが、特に下記のように、ヒトでは悪性リンパ腫を用い、実験系ではマウスの可移植腫瘍系を用いた研究を進めてきた。

- 1) 悪性リンパ腫の組織学的亜型の予後に関係する因子の解析；特に、組織内浸潤マクロファージの性格の解析と、予後との関連性の検討。
- 2) 抗腫瘍免疫反応の研究；これまでの解析結果を踏まえて、腫瘍組織内浸潤マクロファージの性格の解析を進め、分子生物学的手法を用いた抗腫瘍免疫反応の増強を研究。

2. 名簿

教授： 高見 剛 Tsuyoshi Takami
講師： 後藤尚絵 Naoe Goto
助教： 鬼頭勇輔 Yusuke Kitoh

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）
なし

原著（欧文）

- 1) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Shimizu M, Takami T, Moriwaki H. Serum-soluble interleukin-2 receptor (sIL-2R) is an extremely strong prognostic factor for patients with peripheral T-cell lymphoma, unspecified (PTCL-U). *J Cancer Res Clin Oncol.* 2009;135:53-59. IF 2.485
- 2) Iwashita T, Yasuda I, Tsurumi H, Goto N, Nakashima M, Doi S, Hirose Y, Takami T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration biopsy for splenic tumor: a case series. *Endoscopy.* 2009;41:179-182. IF 6.096
- 3) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Nakashima M, Tsurumi H, Hirose Y, Takami T, Enya M, Mukai T, Ohnishi T, Iwata K, Tomita E, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration in patients with lymphadenopathy suspected of recurrent malignancy after curative treatment. *J Gastroenterol.* 2009;44:190-196. IF 3.610
- 4) Okada M, Saio M, Kito Y, Ohe N, Yano H, Yoshimura S, Iwama T, Takami T. Tumor-associated macrophage/microglia in human gliomas is correlated with MCP-3, but not MCP-1. *Int J Oncol.* 2009;34:1621-1627. IF 2.571
- 5) Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Yamada T, Sawada M, Goto H, Kitagawa J, Yasuda I, Katsumura N, Takemura M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble Fas level determines clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP and R-CHOP. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2009;135:1421-1428. IF 2.485
- 6) Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kitagawa J, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Yasuda I, Katsumura N, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Phase II study of Rituximab combined with THP-COP as first-time therapy for patients younger than 70 years with diffuse large B cell lymphoma. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2010;136:65-70. IF 2.485
- 7) Takai S, Tokuda H, Matsushima-Nishiwaki R, Saio M, Takami T, Kozawa O. TGF- β superfamily enhances the antigen-induced IFN- γ production by effector/memory CD8+ T cells. *Int J Mol Med.* 2010;25:105-111. IF 1.814
- 8) Yoshikawa T, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Hoshi M, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Ito H, Takemura M, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum concentration of L-kynurenine predicts the clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Eur*

- J Haematol. 2010;84:304-309. IF 2.785
- 9) Kawasaki M, Hattori A, Ishihara Y, Okubo M, Nishigaki K, Takemura G, Saio M, Takami T, Minatoguchi S. Tissue characterization of coronary plaques and assessment of thickness of fibrous cap using integrated backscatter intravascular ultrasound. Comparison with histology and optical coherence tomography. *Circ J*. 2010;74:2641-2648. IF 3.225
- 10) Hara T, Tsurumi H, Kasahara S, Ogawa K, Takada J, Imai K, Takai K, Kitagawa J, Kiyama S, Imai N, Oyama M, Takami T, Moriwaki H. Long-term survival of a patient with splenic angiosarcoma after resection, high-dose chemotherapy, and autologous peripheral blood stem cell transplantation. *Intern Med*. 2010;49:2253-2257. IF 1.037
- 11) Nagashima T, Ichimiya S, Kikuchi T, Saito Y, Matsumiya H, Ara S, Koshiha S, Zhang J, Hatate C, Tonooka A, Kubo T, Ye RC, Hirose B, Shirasaki H, Izumi T, Takami T, Sato N. Arachidonate 5-lipoxygenase establishes adaptive humoral immunity by controlling primary B cells and their cognate T-cell help. *Am J Pathol*. 2011;178:222-232. IF 5.224
- 12) Kasahara S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kitagawa J, Kanemura N, Yoshikawa T, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Phase II study of the tetrahydropyranil adriamycin-cyclophosphamide, vincristine, and prednisolone regimen combined with rituximab as first-line treatment for elderly patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leuk Lymphoma*. 2011;52:629-634. IF 2.492
- 13) Kitoh Y, Saio M, Goto N, Umemura N, Nonaka K, Bai J, Vizkeleti L, Torocsik D, Balazs M, Adany R, Takami T. Combined GM-CSF treatment and M-CSF inhibition of tumor-associated macrophages induces dendritic cell-like signaling in vitro. *Int J Oncol*. 2011;38:1409-1419. IF 3.610
- 14) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Hoshi M, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Shimizu M, Ito H, Saito K, Hirose Y, Yamada T, Takahashi T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase in tumor tissue indicates prognosis in patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Ann Hematol*. 2011;90:409-416. IF 2.688
- 15) Goto N, Tsurumi H, Sawada M, Kanemura N, Hara T, Kasahara S, Kitoh Y, Takada K, Satoh Y, Yoshino T, Moriwaki H, Takami T. Follicular variant of peripheral T-cell lymphoma mimicking follicular lymphoma: a case report with a review of the literature. *Pathol Int*. 2011;61:326-330. IF 1.481
- 16) Goto N, Tsurumi H, Kasahara S, Kanemura N, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Sawada M, Yamada T, Takemura M, Seishima M, Kitoh Y, Takami T, Moriwaki H. Serum interleukin-18 level is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP or R-CHOP regimens. *Eur J Haematol*. 2011;87:217-227. IF 2.785
- 17) Tanaka Y, Hayashi Y, Kato J, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Kimura A, Hozumi I, Hatano Y, Hirose Y, Takami T, Nakamura H, Kasahara S, Tsurumi H, Moriwaki H, Izuzuka T. Diffuse skeletal muscles uptake of [18F] fluorodeoxyglucose on positron emission tomography in primary muscle peripheral T-cell lymphoma. *Intern Med*. 2011;50:2021-2024. IF 1.037

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：齊尾征直，研究分担者：高見 剛，大江直行；科学研究費補助金基盤研究(C)：再生医学的視点による腫瘍内マクロファージの樹状細胞への再分化法の確立；平成 21 年度；1,560 千円
- 2) 研究代表者：高見 剛，研究分担者：齊尾征直；科学研究費補助金基盤研究(C)：瘍内マクロファージは単球系の骨髄球由来抑制細胞を由来とするか？；平成 21-23 年度；4,810 千円(2,860：910：1040 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

高見 剛：

- 1) 日本病理学会評議委員(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

悪性リンパ腫の研究は後藤尚絵講師が中心となり血液病態学グループと連携して進められ、幾つかの血清マーカーが予後の予測に関連していることを示し、論文として発表することができた。また、予後を規定する重要な因子の一つとして、リンパ腫内浸潤マクロファージの解析が進行している。これは、マウスを用いた実験系で得られた成果を反映して進められ、実験結果がようやくヒトの疾患の解明に結実しつつあるものと評価している。マウス可移植腫瘍系を用いた研究は、鬼頭勇輔助教ならびに白俊丞大学院生により進められ、腫瘍内浸潤マクロファージには腫瘍増殖増強作用と抑制作用を有する細胞群が存在するだけでなく、両者が相互に移行する可能性を持つことを示すことができた。このことは、上記のようにヒト疾患の理解に役立つものとして、十分に評価に値すると考えている。このような一連の研究に興味を持ち、医学部5年生の向井崇貴君が本学部2人目のMD-PhDコースを選択してくれたことも特筆に価する。

現状の問題点及びその対応策

現状の大きな問題は、病理学を選択する人材を獲得できなかったことである。教授の退官が目前であることを考えると致し方ない点もあるが、学生の興味を喚起する講義や実習の努力や、高校生を対象とした「出前講義」など、長期的な活動を持続することが必要と考える。

今後の展望

悪性リンパ腫の研究では組織内浸潤マクロファージと、種々の予後因子との関連性を明らかにしたい。このためには実験系を用いた解析を進め、腫瘍内浸潤マクロファージの何が腫瘍増殖に影響を与えているのかを明らかにすることが肝要で、実験系の知見を参考にしたヒト疾患の解析を進めることが重要と考える。

(3) 腫瘍外科学分野

1. 研究の概要

岐阜大学腫瘍外科学分野は、食道・胃・十二指腸・小腸・大腸・肝臓・膵臓を中心とした消化器がんと乳がんの外科手術療法のみならず、化学療法を含めたがんの集学的治療を行う「がん治療・研究・専門分野」です。特に腹腔鏡・胸腔鏡を用いた低侵襲外科の実現と切除不能がんに対し抗癌剤治療施行したのち積極的に切除を行いさらなる生存率向上に貢献しております。

これらのがんに対する治療の根底となる研究においては、消化器がん・乳がんの発生に関わるがん遺伝子やがん抑制遺伝子の変異やそのメチル化などの変化を検討しています。また多くの増殖因子ががんの発育進展に関与することから、転移形成におけるこれらの役割を研究しています。更にこれらのがん特異的な変異をもとに低侵襲の分子診断の可能性を検索しています。一方、がんの集学的治療の一つとして、手術療法に加えて、抗がん剤治療や分子標的治療があげられ、これらの薬物療法についての **biochemical modulation** を用いたより効果的な治療法の開発やそのメカニズムの解析、さらには抗がん剤耐性に関するメカニズムの解析や関連する遺伝子の同定などの研究を積極的に行っています。

2. 名簿

教授：	吉田和弘	Kazuhiro Yoshida
准教授：	川口順敬	Yoshihiro Kawaguchi
准教授：	長田真二	Shinji Osada
講師：	山口和也	Kazuya Yamaguchi
講師：	高橋孝夫	Takao Takahashi
助教：	野中健一	Kenichi Nonaka
助教：	奥村直樹	Naoki Okumura
助教：	田中善宏	Yoshihiro Tanaka
助教：	名和正人	Masahito Nawa
助教：	斎藤史朗	Shiro Saito
助教：	今井 寿	Hisashi Imai
助教：	佐々木義之	Yoshiyuki Sasaki
医員：	太和田昌宏	Masahiro Tawada
医員：	棚橋利行	Toshiyuki Tanahashi
医員：	櫻谷卓司	Takuji Sakuratani
医員：	徳丸剛久	Yoshihisa Tokumaru
医員：	浅井竜一	Ryuichi Asai

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 吉田和弘. 胃がん perspective：東京：メディカルレビュー社；2009年；2巻：3.
- 2) 吉田和弘. 胃がん perspective：メディカルレビュー社；2009年；2巻：6.
- 3) 吉田和弘, 西田俊朗, 神田達夫, 今野弘之, 馬場秀夫, 平井敏弘. 日本消化器外科学会 座談会：再発 GIST における集学的治療の可能性：外科治療 11, 東京：永井書店；2009年；101巻：1-7.
- 4) 吉田和弘. 新たな規約とガイドラインでの胃がん治療の個別化療法-我が国の胃がん治療のグローバル化に向けて-胃がん「がん治療 up date」教育セッション：日本癌治療学会雑誌 Educational Book, 2010年；1185-1191.
- 5) 吉田和弘. 胃癌に対する治療法の選択-外科治療の個別化学療法：平成 21 年度後期日本消化器外科学会教育集会テキスト, 2010年；7-13.
- 6) 吉田和弘, 山口和也. 疾患と治療薬「胃癌」：病気と薬パーフェクトブック, 薬局；2011年；1644-1654.
- 7) 山口和也, 吉田和弘, 田中善宏. タキサン：消化器癌化学療法, 東京：南山堂；2011年；改訂第 3 版：39-45.
- 8) 高橋孝夫, 吉田和弘. 3. 抗癌剤【消化管】：消化器外科学レビュー2011, 東京：総合医学社；2011年；201-207.
- 9) 高橋孝夫, 吉田和弘. 消化器癌に対する分子標的治療薬：消化器疾患最新の治療 2011-2012, 東京：南江堂；2011年；12-16.

著書（欧文）

なし

総説 (和文)

なし

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 吉田和弘, 山口和也, 坂下文夫, 田中善宏, 眞田雄市, 高橋孝夫, 長田真二. 早期胃癌における自律神経温存完全腹腔鏡下胃切除術, 消化器外科 2009年; 32巻: 1-11.
- 2) 吉田和弘, 山口和也, 長田真二, 高橋孝夫, 田辺和照, 檜原 淳. 胃癌手術における超音波凝固切開装置を用いた郭清, 手術 2009年; 63巻: 361-367.
- 3) 吉田和弘. 消化器癌の分子標的治療の最前線, 岐阜県医師会医学雑誌 2009年; 22巻: 59-64.
- 4) 吉田和弘, 山口和也, 田中善宏, 眞田雄市, 奥村直樹, 高橋孝夫, 長田真二. 進行胃癌に対する個別的化学療法の効果判定, 消化器内視鏡 2009年; 21巻: 779-787.
- 5) 吉田和弘. 上部消化器癌治療の最前線, 岐阜県内科医会雑誌 2009年; 23巻: 1-21.
- 6) 吉田和弘. がん治療認定医機構のセミナーで, もう少し時間をかけて欲しかった領域を学ぶーがん治療における患者への対応長期合併症とその対策ー, 日本癌治療学会学術集会 Educational Book 2009年; 44巻: 1331-1344.
- 7) 細野芳樹, 高橋孝夫, 徳山泰治, 坂下文夫, 山口和也, 長田真二, 吉田和弘. 成人の肛門部に発生した奇形腫の1例, 日本外科系連合学会誌 2009年; 34巻: 243-246.
- 8) 高橋孝夫. ストーマは後腹膜経路が標準か. 外科の常識-素朴な疑問 50 医学書院 2009年; 177-179.
- 9) 田中秀典, 高橋孝夫, 太和田昌宏, 野中健一, 長田真二, 吉田和弘. プロテイン C およびプロテイン S 低下を認めた門脈・上腸間膜静脈血栓症の1例, 手術 2009年; 63巻: 1233-1238.
- 10) 徳山泰治, 長田真二, 眞田雄市, 井川愛子, 田中善宏, 奥村直樹, 坂下文夫, 高橋孝夫, 山口和也, 吉田和弘. 腹腔鏡下胆嚢摘出術の開腹移行症例の検討, 日本外科系連合学会誌 2009年; 34巻: 562-565.
- 11) 徳山泰治, 長田真二, 眞田雄市, 井川愛子, 田中善宏, 奥村直樹, 野中健一, 高橋孝夫, 山口和也, 吉田和弘. 術後18年経過して発症した腎癌膵転移の1例, 胆と膵 2009年; 30巻: 1013-1016.
- 12) 松井 聡, 長田真二, 長尾成敏, 浅野奈美, 小森充嗣, 坂下文夫, 山口和也, 吉田和弘. 食道多発扁平上皮癌に癌肉腫を合併した1例, 日本外科系連合学会誌 2009年; 34巻: 577-581.
- 13) 細野芳樹, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 川口順敬, 吉田和弘. 経カテーテル的動脈塞栓術 (transcatheter arterial embolization:TAE)など集学的治療が奏効した局所進行乳癌の1例, 日本外科系連合学会誌 2009年; 34巻: 765-770.
- 14) 太和田昌宏, 高橋孝夫, 奥村直樹, 徳山泰治, 野中健一, 細野芳樹, 山口和也, 長田真二, 川口順敬, 吉田和弘. 腹腔内遊離ガス像を契機に診断された強皮症に伴う腸管囊腫様気腫症の1例, 日本外科系連合学会誌 2009年; 34巻: 860-866.
- 15) 太和田昌宏, 高橋孝夫, 野中健一, 奥村直樹, 徳山泰治, 山口和也, 長田真二, 川口順敬, 吉田和弘. 大腸癌同時性卵巣転移の3例, 日本外科系連合学会誌 2009年; 34巻: 1079-1086.
- 16) 峠本純哉, 田辺和照, 鈴木崇久, 浜井洋一, 恵美 学, 檜原 淳, 吉田和弘, 岡田守人. 高度進行胃癌における Ajuvant Surgery の有用性に関する検討, 癌と化学療法 2010年; 37巻: 263-266.
- 17) 長田真二, 小森充嗣, 徳山泰治, 吉田和弘. 膵癌に対する免疫療法の試みーMUC4-DC 療法ー 進行膵癌に対する新しい治療戦略の確立, Biotherapy 2010年; 24巻: 144-150.
- 18) 山口和也, 吉田和弘, 長田真二, 高橋孝夫. GIST診断・治療の進歩 初発 GIST の外科治療 (腹腔鏡下手術を含む), 臨床消化器内科 2010年; 25巻: 687-692.
- 19) 山口和也, 吉田和弘, 長田真二, 高橋孝夫. 特集:外科医が気を使う高齢者手術の周術期管理 II 各論 4. 高齢者胃癌の周術期管理, 臨床雑誌 2010年; 72巻: 258-262.
- 20) 山口和也. アジアに於ける抗がん剤を用いた Global Inter-group Study の現況と展望に関する研究・第9回アジア臨床腫瘍学会での取り組み-, がん治療のあゆみ 2010年; 30巻: 53-58.
- 21) 高橋孝夫, 吉田和弘. 抗癌剤(消化管), 消化器外科学レビュー 2010年; 191-198.
- 22) 奥村直樹, 山口和也, 高橋孝夫, 長田真二, 吉田和弘. 特集 消化管再建法-合併症ゼロへの工夫- II. 胃切除後再建法 10. 胃全摘後 Roux-Y 再建〜サーキュラーステイプラー, 手術 2010年; 64巻: 1449-1454.
- 23) 奥村直樹, 吉田和弘. 胃癌における microRNA 発現と予後との関係. 胃がん perspective 2010年; 62-65.
- 24) 奥村直樹, 野中健一, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 広瀬善信, 吉田和弘. 7年後に後腹膜再発をきたした隆起性皮膚線維肉腫の1例, 日本臨床外科学会雑誌 2010年; 71巻: 3232-3236.
- 25) 奥村直樹, 吉田和弘. 遺伝子多型解析と抗癌剤感受性予測, Surgery Frontier 2010年; 17巻: 53-55.
- 26) 細野芳樹, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 川口順敬, 吉田和弘. 超音波エラストグラフィを用いた乳腺疾患に対する良悪性診断の検討, 日本外科系連合学会誌 2010年; 35巻: 831-837.
- 27) 徳山泰治, 長田真二, 眞田雄市, 井川愛子, 奥村直樹, 高橋孝夫, 山口和也, 土井晋平, 安田一朗, 吉田和弘. 膵管狭窄の経過観察中に認めた pTS1 膵癌症例, 胆と膵 2010年; 31巻: 507-511.
- 28) 吉田和弘, 山口和也, 奥村直樹, 田中善宏, 高橋孝夫, 長田真二. 転移・再発 GIST に対する外科的介入の意義, 消化器外科 2011年; 34巻: 201-208.
- 29) 吉田和弘, 山口和也, 高橋孝夫. 消化管がんの術前術後化学療法の新展開, 日本医師会雑誌 2011年; 140巻: 1691-1695.

- 30) 吉田和弘. 9th ACOS(第9回アジア臨床腫瘍学会)における胃癌治療のトピックス, 胃がん perspective 2011年; 4巻: 1.
- 31) 吉田和弘. 座談会 胃癌 Board Meeting 進行胃癌に対する外来化学療法レジメンドセタキセルの役割について考えるー, 外来癌化学療法 2011年; 6月号: 136-141.
- 32) 吉田和弘. START試験ーReview on Recent Clinical Trialsー, 胃癌 perspective 4 2011年: 63-68.
- 33) 長田真二, 今井 寿, 佐々木義之, 吉田和弘. 日本臨床 新領域別症候群シリーズ 肝・胆道系症候群(第2版) III 肝外胆道編ーその他の肝・胆道系疾患を含めてー, 日本臨床社; 2011年; 15巻: 66-69.
- 34) 山口和也, 吉田和弘, 奥村直樹. 消化管がん薬物療法 1)術前化学療法へのアプローチ, 臨床腫瘍プラクティス 2011年; 7巻: 47-53.
- 35) 大津 敦, 掛地吉弘, 小泉和三郎, 小寺泰弘, 小松嘉人, 笹子三津留, 瀧内比呂也, 竹内正弘, 藤井雅志, 時事谷和正, 吉田和弘. 進行胃癌に対する外来化学療法レジメンドセタキセルの役割について考えるー, 外来化学療法 2011年; 2巻: 62-69.
- 36) 長田真二, 今井 寿, 佐々木義之, 吉田和弘. 膵癌への挑戦ー臨床的・基礎的アプローチー, 岐阜県医師会医学雑誌 2011年; 24巻: 111-114.
- 37) 山口和也, 吉田和弘, 奥村直樹. 最新 胃・腸・食道手術 II. 胃 6. 胃癌に対する胃全摘術(鏡視下), 手術 2011年; 65巻: 779-784.
- 38) 山口和也, 吉田和弘, 奥村直樹, 齊藤史郎. 胃がんの最新知識 胃がんは今後どうなる?, 臨床看護 2011年; 37巻: 886-892.
- 39) 山口和也, 吉田和弘, 奥村直樹. 胃癌手術における術野の展開, 消化器外科 2011年; 34巻: 1453-1465.
- 40) 高橋孝夫, 吉田和弘. 転移性大腸癌における生存の改善は肝転移巣切除の増加と化学療法の進歩が関連する, *Frontiers in Gastroenterology* 2011年; 16巻: 56-57.
- 41) 高橋孝夫, 吉田和弘. 消化器癌の個別化医療ー分子標的治療薬を中心にー, 外科 2011年; 73巻: 1027-1032.
- 42) 奥村直樹, 徳山泰治, 山口和也, 長田真二, 岩田 尚, 広瀬善信, 吉田和弘. 胃カルチノイド, 空腸 GIST および肺癌を併発した von Recklinghausen 病の1例, 日本臨床外科学会雑誌 2011年; 72巻: 1297-1301.
- 43) 奥村直樹, 吉田和弘. 治療歴を有する再発胃癌患者におけるエベロリムス療法の多施設共同第II相臨床試験, *Frontiers in Gastroenterology* 2011年; 16巻: 52-53.
- 44) 奥村直樹, 吉田和弘. 大腸癌術後補助化学療法におけるカルシウム・マグネシウム経静脈投与とオキサリプラチン誘導末梢神経障害(NCCTGN04C8), *Frontiers in Gastroenterology* 2011年; 16巻: 54-55.
- 45) 野中健一, 吉田和弘. マイクロサテライトインスタビリティー陽性大腸癌の腫瘍浸潤 T 細胞とフレームシフト突然変異, *Frontiers in Gastroenterology* 2011年; 16巻: 58-59.
- 46) 野中健一, 吉田和弘. Bone morphogenetic protein 4 による大腸癌幹細胞分化誘導治療, *Frontiers in Gastroenterology* 2011年; 16巻: 60-61.
- 47) 田中善宏. がん化学療法の完遂を目指してー新しい支持療法の概念と実践ー, *Pharma Medica* 2011年; 29巻: 201-208.

原著 (欧文)

- 1) Osada S, Sanada Y, Tanaka Y, Ikawa A, Tokuyama Y, Okumura N, Hosono Y, Nonaka K, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Clinical evaluation of modified reconstruction method after pancreatoduodenectomy. *Hepato-Gastroenterology*. 2009;56:619-623. IF 0.677
- 2) Sanada Y, Yoshida K, Itoh M, Okita R, Okada M. Invasive ductal carcinoma of the pancreas showing exophytic growth. *Hepatobiliary-Pancreat Dis Int*. 2009;8:97-102. IF 1.514
- 3) Sanada Y, Osada S, Tanaka Y, Tokuyama Y, Yoshida K. A case report of intraductal papillary-mucinous neoplasm of the pancreas showing morphologic transformation during followup periods. *J Oncol*. 2009;373465:1-6.
- 4) Sanada Y, Osada S, Tokuyama Y, Tanaka Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Successful surgical resection for peritoneal implantation of hepatocellular carcinoma at the paracardial portion. *J Oncol*. 2009;231854:1-5.
- 5) Osada S, Yoshida K. A novel strategy for advanced pancreatic cancer-progression of molecular targeting therapy. *Anti-Cancer Agents in Medicinal Chemistry*. 2009;9:877-881. IF 3.144
- 6) Osada S, Yoshida K, Saji S. A novel strategy by cryoablation for advanced hepatoma. *Anticancer Res*. 2009;29:5203-5210. IF 1.656
- 7) Yoshida K, Yamaguchi K, Tanaka Y, Sanada Y, Okumura N, Takahashi T, Osada S. Complete laparoscopic distal gastrectomy(LDG) with Billroth I reconstruction. *Medimond*. 2009;137-140.
- 8) Ueda T, Volinia S, Okumura H, Shimizu M, Taccioli C, Rossi S, Alder H, Liu C-G, Oue N, Yasui W, Yoshida K, Sasaki H, Nomura S, Seto Y, Kaminishi M, Calin GA, Croce CM. Relationship between microRNA expression and progression and prognosis of gastric cancer: a microRNA expression analysis. *Lancet Oncol*. 2010;11:136-146. IF 17.764
- 9) Shigematsu H, Yoshida K, Sanada Y, Osada S, Takahashi T, Wada Y, Konishi K, Okada M, Fukushima M. Rapamycin enhances chemotherapy-induced cytotoxicity by inhibiting the expressions of TS and ERK in gastric cancer cells. *Int J Cancer*. 2010;126:2716-225. IF 4.926
- 10) Sakamoto N, Oue N, Noguchi T, Sentani K, Anami K, Sanada Y, Yoshida K, Yasui W. Serial analysis of gene expression of esophageal squamous cell carcinoma: ADAMTS16 is upregulated in esophageal

- squamous cell carcinoma. *Cancer Sci.* 2010;101:1038-1044. IF 3.846
- 11) Suzuki T, Tanabe K, Taomoto J, Yamamoto H, Tokumoto N, Yoshida K, Ohdan H. Preliminary trial of adjuvant surgery for advanced gastric cancer. *Oncol Lett.* 2010;1:743-747.
 - 12) Tanabe K, Suzuki T, Tokumoto N, Yamamoto H, Yoshida K, Ohdan H. Combination therapy with docetaxel and S-1 as a first-line treatment in patients with advanced or recurrent gastric cancer: a retrospective analysis. *World J Surg Oncol.* 2010;8:40. IF 1.116
 - 13) Osada S, Matsui S, Komori S, Yamada J, Sanada Y, Ikawa A, Tanaka Y, Tokuyama Y, Okumura N, Nonaka K, Hosono Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Effect of hepatocyte growth factor on progression of liver metastasis in colorectal cancer. *Hepato-Gastroenterology.* 2010;57:76-80. IF 0.677
 - 14) Osada S, Yoshida K. Application of biological study for met expression to cancer therapy. *Anticancer Agents Med Chem.* 2010;10:58-63. IF 3.144
 - 15) Hosono Y, Osada S, Nawa M, Takahashi T, Yamaguchi K, Kawaguchi Y, Yoshida K. Combination Therapy of 5-Fluorouracil with Rapamycin for Hormone Receptor-negative Human Breast Cancer. *Anticancer Res.* 2010;30:2625-2630. IF 1.656
 - 16) Tokuyama Y, Takahashi T, Okumura N, Nonaka K, Kawaguchi Y, Yamaguchi K, Osada S, Gazdar A, Yoshida K. Aberrant methylation of heparan sulfate glucosamine 3-O-sulfotransferase 2 genes as a biomarker in colorectal cancer. *Anticancer Res.* 2010;30:4811-4818. IF 1.656
 - 17) Tanaka Y, Yoshida K, Sanada Y, Osada S, Yamaguchi K, Takahashi T. Biweekly docetaxel, cisplatin and 5-fluorouracil (DCF) chemotherapy for advanced esophageal cell carcinoma: a phase I dose-escalation study. *Cancer Chem Pharm.* 2010;1159-1165. IF 2.759
 - 18) Sanada Y, Nonaka K, Takahashi T, Tanaka Y, Osada S, Yoshida K. A case delayed hemorrhage from the stump of the superior rectal artery after abdominoperineal resection of the rectum. *Case Reports in Medicine.* 2010;1-4.
 - 19) Sanada Y, Kondo H, Goshima S, Kanematsu M, Tanaka Y, Tokuyama Y, Osada S, Yoshida K. Liver abscess after common hepatic artery embolization for delayed hemorrhage following pancreaticoduodenectomy: Case Report. *Case Reports in Medicine.* 2010;1-9.
 - 20) Sanada Y, Osada S, Tokuyama Y, Sakashita F, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. A Case of nonalcoholic and juvenile pancreatic ductal stones to evaluate the most favorable strable strategy for pancreatic ductal stones. *Am Surg.* 2010;76:456-457. IF 1.363
 - 21) Sanada Y, Osada S, Tokuyama Y, Tanaka Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Critical role of c-Met and Ki67 in progress of biliary carcinoma. *Am Surg.* 2010;76:372-379. IF 1.363
 - 22) Sanada Y, Hirose Y, Osada S, Tanaka Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Immunohistochemical study of claudin 18 involvement in intestinal differentiation during the progression of intraductal papillary mucinous neoplasm. *Anticancer Res.* 2010;30:2995-3004. IF 1.656
 - 23) Komori S, Osada S, Tanaka Y, Takahashi T, Nagao N, Yamaguchi K, Asano N, Yoshida K. A case of esophageal adenocarcinoma arising from the ectopic gastric mucosa in the thoracic esophagus. *Rare Tumors.* 2010;12-15.
 - 24) Matsui S, Osada S, Tomita H, Komori S, Mori R, Sanada Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Clinical significance of aggressive hepatectomy for colorectal liver metastasis, evaluated from the HGF/c-Met pathway. *Int J Oncol.* 2010;37:289-297. IF 2.571
 - 25) Yoshida K, Yamaguchi K, Okumura N, Osada S, Takahashi T, Tanaka Y, Tanabe K, Suzuki T. The roles of surgical oncologists in the new era - minimally invasive surgery for early gastric cancer and adjuvant surgery for metastatic gastric cancer. *Pathobiology.* 2011;78:343-352. IF 2.291
 - 26) Fujii H, Iihara H, Yasuda K, Matsuura K, Takahashi T, Yoshida K, Itoh Y. Evaluation of efficacy and safety of generic levofolinate in patients who received colorectal cancer chemotherapy. *Med Oncol.* 2011;28:488-493. IF 2.210
 - 27) Hatano Y, Hirose Y, Matsunaga K, Kito Y, Yasuda I, Moriwaki H, Osada S, Yoshida K, Hara A. Combined adenomatoid tumor and well differentiated papillary mesothelioma of the omentum. *Pathol Int.* 2011;61:681-685. IF 1.481
 - 28) Tanaka Y, Yoshida K, Osada S, Yamaguchi K, Takahashi T. Docetaxel, Nedaplatin, and S-1(DGS) chemotherapy for advanced esophageal carcinoma: A phase I dose-escalation Study. *Anticancer Res.* 2011;31:4589-4598. IF 1.656
 - 29) Tokuyama Y, Osada S, Sanada Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Mucinous cystic neoplasm of the pancreas in a male patient. *Rare Tumors.* 2011;3:41-43.
 - 30) Imai H, Osada S, Sasaki Y, Ikawa A, Tanaka Y, Okumura N, Nonaka K, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K, Nakashima M, Hirose Y. Cholesterol granuloma in the pancreas accompanied by peritoneal disseminated lesions. *Pancreas.* 2011;40:795-796. IF 2.607
 - 31) Imai H, Osada S, Sasaki Y, Ikawa A, Takahashi T, Yamaguchi K, Hirose Y, Yoshida K. Gallbladder adenocarcinoma with extended intramural spread in adenomyomatosis of the gallbladder with the pearl necklace sign. *Am Surgeon.* 2011;77:E57-8. IF 1.363
 - 32) Komori S, Osada S, Yoshida K. Novel strategy with gemcitabine for advanced pancreatic cancer. *ISRN oncology.* 2011;936893.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：吉田和弘；厚生労働科学研究費補助金：消化管外科手術における合成吸収糸使用の手術部位感染抑制効果に関する多施設共同並行群間無作為化比較試験・肝切除および膵頭十二指腸切除における合成吸収糸使用の手術部位感染抑制効果に関する多施設共同並行群間無作為化比較試験；平成 21 年度；300 千円
- 2) 研究代表者：奥村直樹；科学研究費補助金基盤研究(C)：5-FU 耐性株を用いた耐性関連遺伝子の同定および耐性克服の臨床応用；平成 21-23 年度；3,400 千円(1,400：900：1,100 千円)
- 3) 研究代表者：眞田雄市；科学研究費補助金若手研究(B)：胆管癌発癌因子の臨床応用；平成 21-23 年度；2,400 千円(1,100：600：700 千円)
- 4) 研究代表者：吉田和弘；厚生労働科学研究費補助金：治癒切除後の再発リスクが高い進行胃がん(スキルス胃がんなど)に対する標準的治療の確立に関する研究；平成 23 年度；300 千円
- 5) 研究代表者：長田真二；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：凍結治療における抗腫瘍免疫賦活；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,100：1,200：1,600 千円)

2) 受託研究

- 1) 吉田和弘：StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法として UFT/Leucovorin 療法と TS-1 療法の第Ⅲ相比較臨床試験および遺伝子発現に基づく効果予測因子の探索的研究；平成 20-24 年度；1,102 千円：(財)先端医療振興財団
- 2) 吉田和弘：初回 TS-1 療法に治療抵抗性を示した進行・再発胃癌に対する二次化学療法-CPT-11 単独療法 vs TS-1+CPT-11 併用化学療法の無作為化比較第Ⅱ/Ⅲ相臨床試験-；平成 20-25 年度；1,160 千円：NPO 法人日本がん臨床試験推進機構
- 3) 吉田和弘：KRAS 変異型の切除不能進行・再発大腸癌に対する 3 次治療としての TS-1+Bevacizumab 併用療法第Ⅱ相試験；平成 21-23 年度；472 千円：(財)先端医療振興財団
- 4) 吉田和弘：StageⅢ結腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法として UFT/Leucovorin 療法と TS-1 療法の第Ⅲ相比較臨床試験および遺伝子発現に基づく効果予測因子の探索的研究；平成 20-24 年度；686 千円：(財)先端医療振興財団
- 5) 吉田和弘：初回 TS-1 療法に治療抵抗性を示した進行・再発胃癌に対する二次化学療法-CPT-11 単独療法 vs TS-1+CPT-11 併用化学療法の無作為化比較第Ⅱ/Ⅲ相臨床試験-；平成 20-25 年度；892 千円：NPO 法人日本がん臨床試験推進機構
- 6) 吉田和弘：KRAS 変異型の切除不能進行・再発大腸癌に対する 3 次治療としての TS-1+Bevacizumab 併用療法第Ⅱ相試験；平成 22 年度；363 千円：(財)先端医療振興財団
- 7) 吉田和弘：治癒切除結腸癌(StageⅢ)を対象としたフッ化ピリミジン系薬剤を用いた術後補助化学療法の個別化治療に関するコホート研究(研究略称：B-CAST)；平成 22 年度；355 千円：(財)先端医療振興財団
- 8) 吉田和弘：R05304020 の HER2 陽性の局所進行・再発又は転移性乳癌患者を対象とした第Ⅱ相臨床試験；平成 22-24 年度；3,884 千円：(財)先端医療振興財団
- 9) 吉田和弘：アブラキサン点滴静注用 100 mg 使用成績調査(全例調査)；平成 22-23 年度；60 千円
- 10) 吉田和弘：切除不能大腸癌に対する 5-FU/1-LV/oxaliplatin(FOLFOX)+bevacizumab と TS-1/oxaliplatin(SOX) + bevacizumab とのランダム化比較第Ⅲ相試験；平成 22 年度；1,184 千円：大鵬薬品工業(株)
- 11) 吉田和弘：切除不能又は転移性の消化管間質腫瘍(GIST)を有する成人患者を対象にニロチニブとイマチニブの有効性及び安全性を比較するランダム化、非盲検、多施設共同、第Ⅲ相臨床試験；平成 22-25 年度；2,580 千円：
- 12) 吉田和弘：ツムラ大建中湯エキス顆粒(医療用) 使用成績調査；平成 22-25 年度；600 千円：(株)ツムラ
- 13) 吉田和弘：ベクティビックス特定使用成績調査-KRAS 遺伝子野生型の切除不能な進行・再発の結腸癌に関する調査-；平成 22-24 年度；450 千円：武田薬品工業(株)
- 14) 吉田和弘：エルプラット注射用 50 mg, 同 100 mg・エルプラット点滴静注液 50 mg, 同 100 mg 特定使用成績調査(結腸癌における術後補助化学療法)；平成 22-26 年度；450 千円：(株)ヤクルト
- 15) 吉田和弘：StageⅢb 大腸癌治癒切除例に対する術後補助化学療法としての UFT/Leucovorin 療法と TS-1/Oxaliplatin 療法のランダム化比較第Ⅲ相試験；平成 22-26 年度；1,575 千円：大鵬薬品工業(株)

- 16) 吉田和弘：化学療法未治療の進行・再発胃癌に対する S-1/CDDP 療法と S-1/L-OHP 療法の無作為化比較第Ⅲ相臨床試験；平成 22－25 年度；9,029 千円：(株)ヤクルト
- 17) 吉田和弘：高齢者進行・再発大腸癌に対する TS-1+Bevacizumab 併用臨床第Ⅱ相試験；平成 22－23 年度；982 千円：大鵬薬品工業(株)
- 18) 吉田和弘：StageⅡ/ StageⅢ結腸癌治療切除例に対する術後補助化学療法としての mFOLFOX6 療法の認容性に関する検討；平成 23－28 年度；231 千円：財団法人がん就学的治療研究財団
- 19) 吉田和弘：切除不能進行・再発大腸癌に対する一次治療としての FOLFOX または FOLFIRI+panitumumab 併用療法の有効性・安全性に関する検討-第Ⅱ相試験-；平成 23－26 年度；157 千円：財団法人先端医療振興財団
- 20) 吉田和弘：HER2 陽性・測定可能病変を有する進行再発胃癌に対する TS-1+CDDP+Trastuzumab(SPT) 3 週間サイクル併用療法第Ⅱ相試験；平成 23－27 年度；210 千円：特定非営利活動法人臨床試験推進機構

3) 共同研究

- 1) 吉田和弘：大腸癌患者における抗癌剤効果予測因子の mRNA 発現分布調査；平成 20－23 年度；1,100 千円：大鵬薬品工業(株)
- 2) 吉田和弘：胃癌 5-FU 耐性株を用いた耐性機序および新規治療法の基礎的検討；平成 21－23 年度；8,000 千円：大鵬薬品工業(株)
- 3) 吉田和弘：大腸癌患者における抗癌剤効果予測因子の mRNA 発現分布調査；平成 22－23 年度；56 千円：大鵬薬品工業(株)
- 4) 吉田和弘：胃癌 5-FU 耐性株を用いた耐性機序および新規治療法の基礎的検討；平成 22－23 年度；4,579 千円：大鵬薬品工業(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

吉田和弘：

- 1) 日本外科学会代議員(～現在)
- 2) 日本消化器外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本外科学会臨床試験推進委員(～現在)
- 4) 日本癌治療学会教育委員(～現在)
- 5) 日本胃癌学会評議員(～現在)
- 6) 日本胃癌学会財務委員会(～現在)
- 7) 日本食道学会評議員(～現在)
- 8) 日本消化器癌発生学会評議員(～現在)
- 9) 日本消化器外科学会評議員選出委員(～現在)
- 10) 東海外科学会評議員(～現在)
- 11) 日本臨床外科学会評議員(～現在)
- 12) 日本バイオセラピー学会評議員(～現在)
- 13) 日本外科学会地域医療安全管理委員会委員(～現在)
- 14) 日本消化器病学会東海支部幹事(～現在)
- 15) 日本外科学会専門医認定委員会試験委員(～現在)
- 16) 日本肥満症治療学会理事(～現在)
- 17) 日本消化管学会評議員(～現在)
- 18) 社団法人日本外科学会臨床研究推進委員(平成 21 年度～現在)
- 19) 社団法人日本外科学会利益相反委員(平成 21 年度～現在)
- 20) 社団法人日本外科学会・医療安全管理委員(平成 21 年度～現在)
- 21) 日本消化器癌発生学会理事(平成 21 年度～現在)
- 22) 一般社団法人日本癌治療学会代議員(平成 21 年度～現在)
- 23) 日本消化器癌発生学会理事(～現在)
- 24) 日本癌治療学会代議員(～現在)

- 25) 日本内視鏡外科学会評議員(平成 22 年度～現在)
- 26) 社団法人日本外科学会英文誌編集委員(平成 22 年度～現在)
- 27) 日本胃癌学会プログラム委員(平成 22 年度～現在)
- 28) 日本外科系連合学会評議員(平成 22 年度～現在)

川口順敬：

- 1) 日本乳癌学会評議員(～現在)
- 2) 日本癌治療学会評議員(～現在)

長田真二：

- 1) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床外科学会評議員(～現在)
- 3) 日本低温医学学会評議員(～現在)
- 4) 日本外科系連合学会評議員(～現在)
- 5) 日本外科学会代議員(～現在)
- 6) 東海外科学会評議員(～現在)
- 7) 日本消化器外科学会評議員(～現在)
- 8) 日本消化器癌発生学会評議員(～現在)

山口和也：

- 1) 日本胃癌学会評議員(～現在)

2) 学会開催

吉田和弘：

- 1) 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society(平成 22 年 8 月, 岐阜)

長田真二：

- 1) 第 6 回岐阜手術手技研究会(平成 21 年 2 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

吉田和弘：

- 1) International Journal of Clinical Oncology ; Editorial Board Member(～現在)
- 2) Surgery Today ; Associate Editor(～現在)
- 3) 胃がん perspective ; 主幹(～現在)

長田真二：

- 1) Development of Surgical Technique ; Associate Chief Editor(～現在)
- 2) Hepatogastroenterology ; co-editor(～現在)
- 3) Anti-Cancer Agents in Medicinal Chemistry ; Editorial Board Member(～現在)
- 4) Drugs and Therapy Study ; Editorial Board Member(～現在)
- 5) Case Reports in Anesthesiology ; Editorial Member(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

吉田和弘：

- 1) 第 4 回消化器癌研究会(平成 21 年 2 月, 岐阜, パネルディスカッション 座長)
- 2) 第 64 回日本消化器外科学会総会(平成 21 年 7 月, 大阪, シンポジウム 2 「StageIV胃癌における adjuvant surgery の有用性.」 演者)
- 3) 第 64 回日本消化器外科学会総会(平成 21 年 7 月, 大阪, 「消化管 GIST に対する診断と治療 3」座長)
- 4) 第 47 回日本癌治療学会学術集会(平成 21 年 10 月, 横浜, 教育セミナー「がん治療認定医機構セミナーで、もう少し時間をかけて欲しかった領域を学ぶ:がん治療における患者への対応 長期合併症とその対策.」演者)
- 5) 第 71 回日本臨床外科学会総会(平成 21 年 11 月, 京都, ワークショップ 8 「外科医が行う癌化学療法はどのようにあるべきか」 座長)

- 6) 第 22 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 21 年 11 月, 大阪, ワークショップ 1-1「免疫・化学併用療法: その意義と根拠_1」座長)
- 7) 平成 21 年度後期日本消化器外科学会教育集会(平成 22 年 2 月, 大阪, 演者)
- 8) 第 82 回日本胃癌学会(平成 22 年 3 月, 新潟, ワークショップ 7 座長)
- 9) 第 110 回日本外科学会定期学術集会(平成 22 年 4 月, 名古屋, パネルディスカッション「StageIV胃癌における外科治療の有用性」座長)
- 10) 第 110 回日本外科学会定期学術集会(平成 22 年 4 月, 名古屋, ランチョンセミナー「癌と栄養」座長)
- 11) 第 65 回日本消化器外科学会(平成 22 年 7 月, 山口, ランチョンセミナー31「消化器癌化学療法における制吐療法の新戦略」座長)
- 12) 第 48 回日本癌治療学会学術集会(平成 22 年 10 月, 京都, 教育セッション 5「胃がん, 新たな規約とガイドラインでの胃がんの治療の個別化療法-我が国の胃がん治療のグローバル化に向けて-」演者)
- 13) 第 48 回日本癌治療学会学術集会(平成 22 年 10 月, 京都, ランチョンセミナー「胃がん化学療法の新たな展開-long survival に求められるもの」演者)
- 14) 第 21 回日本消化器癌発生学会(平成 22 年 11 月, 長野, ワークショップ 4「消化器癌における分子標的薬」座長)
- 15) 第 6 回国際消化器癌発生学会(平成 23 年 1 月, アメリカ, 「Session VI : MOLECULAR MECHANISMS OF CARCINOGENESIS AND TUMOR PROGRESSION」座長)
- 16) 第 83 回日本胃癌学会総会(平成 23 年 3 月, 青森, パネルディスカッション 3「胃癌治療の個別化は可能か」座長)
- 17) 第 83 回日本胃癌学会総会(平成 23 年 3 月, 青森, 特別企画シンポジウム 2「胃癌術後補助化学療法に BRM 製剤は必要か?」座長)
- 18) 第 83 回日本胃癌学会総会 (平成 23 年 3 月, 青森, ランチョンセミナー「胃癌薬物療法における基礎と臨床」演者)
- 19) 第 83 回日本胃癌学会総会 (平成 23 年 3 月, 青森, ビデオワークショップ 2「脾摘を伴う胃全摘術における Bursectomy のコツ」演者)
- 20) 第 9 回国際胃癌学会(平成 23 年 4 月, 韓国, INVITED VIDEO「STANDARD TOTAL GASTRECTOMY WITH D2 LYMPHNODE DISSECTION IN NEW JAPANESE GUIDE LINE」演者)
- 21) 第 114 回日本消化器病学会東海支部例会(平成 23 年 6 月, 岐阜, シンポジウム 1「消化管癌の診断と治療の最前線」座長)
- 22) 第 66 回日本消化器外科学会総会(平成 23 年 7 月, 名古屋, ランチョンセミナー1「胃癌治療の新たな展開」座長)
- 23) 第 66 回日本消化器外科学会総会(平成 23 年 7 月, 名古屋, ランチョンセミナー17「GIST 術後補助化学療法の新時代~ASCO plenary session:高リスク GIST に対する 1 年 vs3 年投与期間比較試験を受けて~」座長)
- 24) 第 66 回日本消化器外科学会総会(平成 23 年 7 月, 名古屋, ビデオシンポジウム 2「胃癌に対する腹腔鏡下手術の新たな考え方」座長)
- 25) 万国外科学会 International Surgical Week/ISW 2011(平成 23 年 8 月, 横浜, ISDS Main Session「Multimodality treatment of early gastric cancer」座長)
- 26) 万国外科学会 International Surgical Week/ISW 2011(平成 23 年 8 月, 横浜, ISDS Free Papers「Stomach 1: Oncology」座長)
- 27) 第 65 回ポーランド外科学会(平成 23 年 9 月, ポーランド, 「Free Paper Session」座長)
- 28) 第 65 回ポーランド外科学会(平成 23 年 9 月, ポーランド, 「Neoadjuvant and adjuvant chemotherapy for gastric cancer」演者)
- 29) 第 70 回日本癌学会学術総会(平成 23 年 10 月, 名古屋, 「細胞接着・浸潤 Cell adhesion and invasion (4)」座長)
- 30) 第 70 回日本癌学会学術総会(平成 23 年 10 月, 名古屋, ランチョンセミナー19「臨床試験サンプル解析に基づいた胃癌個別化治療の展開」座長)
- 31) 第 49 回日本癌治療学会学術集会(平成 23 年 10 月, 名古屋, フォーラム 2「バイオマーカー・リサーチ 1」座長)
- 32) 第 49 回日本癌治療学会学術集会(平成 23 年 10 月, 名古屋, ランチョンセミナー「上部消化器癌治療

- の進歩－化学療法時の Pit fall と栄養支持療法－」 演者)
- 33) 第 21 回国際外科消化器科腫瘍科学会総会(平成 23 年 11 月, 東京, 「STANDARD PROCEDURE OF COMPLETE LAPAROSCOPIC DISTAL GASTRECTOMY WITH D2 LYMPHNODE DISSECTION FOR GASTRIC CARCINOMA」 演者)
 - 34) 第 73 回日本臨床外科学会総会(平成 23 年 11 月, 東京, 「胃癌に対する化学療法の新展開」 座長)
 - 35) 第 73 回日本臨床外科学会総会(平成 23 年 11 月, 東京, ランチョンセミナー「イマチニブ治療における手術の役割」 演者)
 - 36) 第 22 回日本消化器癌発生学会総会(平成 23 年 11 月, 佐賀, ワークショップ 4「癌分子診断の臨床応用」 座長)
 - 37) 第 24 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 23 年 11 月, 和歌山, ワークショップ 5「癌免疫療法効果増強のための工夫」 座長)
 - 38) 第 24 回日本内視鏡外科学会総会(平成 23 年 12 月, 大阪, パネルディスカッション 21「腹腔鏡補助下胃癌手術の適応拡大(1)(手術既往)」 座長)

長田真二 :

- 1) 第 109 回日本外科学会定期学術集会(平成 21 年 4 月, 福岡, 教育セッション「スペシャリストに学ぶ日常診療」 座長)
- 2) 第 21 回日本肝胆膵外科学会学術集会(平成 21 年 6 月, 名古屋, ミニシンポジウム 5「転移性肝癌の治療戦略-外科切除に時期と術式に関する考察-」 演者)
- 3) 第 64 回本消化器外科学会総会(平成 21 年 7 月, 大阪, シンポジウム 4「同時性両葉多発転移性肝癌の治療戦略」 演者)
- 4) 第 3 回名古屋膵癌シンポジウム(平成 21 年 8 月, 名古屋, 「低侵襲膵切除」 座長)
- 5) 第 71 回日本臨床外科学会総会(平成 21 年 11 月, 京都, ビデオシンポジウム 5「安全で確実な膵頭十二指腸切除術後の膵吻合合法」 演者)
- 6) 第 110 回日本外科学会定期学術集会(平成 22 年 4 月, 名古屋, サージカルフォーラム 13「肝基礎 04」 座長)
- 7) 第 22 回日本肝胆膵外科学会学術集会(平成 22 年 5 月, 仙台, ビデオフォーラム EX1「高度技能医」 座長)
- 8) 第 22 回日本肝胆膵外科学会学術集会(平成 22 年 5 月, 仙台, ミニシンポジウム 15「膵癌における神経叢郭清の意義」 座長)
- 9) 第 48 回日本癌治療学会学術集会(平成 22 年 10 月, 京都, シンポジウム (キャンサーボード CB「岐阜大学附属がんセンターの現状と今後」 演者)
- 10) 第 21 回日本消化器癌発生学会(平成 22 年 11 月, 長野, シンポジウム「c-Met 発現状況からみた大腸癌肝転移メカニズム」 演者)
- 11) 第 721 回日本臨床外科学会総会(平成 22 年 11 月, 横浜, シンポジウム「膵頭十二指腸切除術後の膵吻合合法: 空腸による二重陥入法の改善」 演者)
- 12) 第 23 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 23 年 6 月, 東京, ミニシンポジウム 4「膵頭十二指腸切除術後の膵液漏防止対策」 演者)
- 13) 第 23 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 23 年 6 月, 東京, 要望ビデオセッション 9 座長)
- 14) 第 36 回日本外科系連合学会学術集会(平成 23 年 6 月, 東京, 「肝胆膵 5」 座長)
- 15) 第 24 回日本バイオセラピー学会学術集会総会(平成 23 年 12 月, 和歌山, 「一般演題 5 分子標的治療-1」 座長)

山口和也 :

- 1) 第 83 回日本胃癌学会総会(平成 23 年 3 月, 青森, ワークショップ 4「診断に難渋した幽門狭窄を伴う 4 型胃癌の 1 例」 演者)
- 2) 第 66 回日本消化器外科学会総会(平成 23 年 7 月, 名古屋, シンポジウム 2「高度進行胃癌に対する化学療法後の外科的治療に関する臨床試験」 演者)
- 3) 第 49 回日本癌治療学会学術集会(平成 23 年 10 月, 名古屋, ミニシンポジウム 6「StageIV 胃癌に対する化学療法後胃切除の検証に向けて」 演者)
- 4) 第 73 回日本臨床外科学会総会(平成 23 年 11 月, 東京, 「胃 17」 座長)
- 5) 第 24 回日本内視鏡外科学会総会(平成 23 年 12 月, 大阪, パネルディスカッション 10「完全鏡視下胃切除術における再建の定型化」 演者)

高橋孝夫：

- 1) 第 71 回日本臨床外科学会総会(平成 21 年 11 月, 京都, ワークショップ 8「切除不能進行再発大腸癌における外科医が行う癌化学療法」演者)
- 2) 第 2 回消化器癌化学療法(平成 22 年 1 月, 岐阜市, シンポジウム「大腸癌化学療法」演者)
- 3) 第 57 回国際外科学会日本部会総会(平成 23 年 6 月, 名古屋, Free Papers「Colon&Rectum 2」座長)
- 4) 第 70 回日本癌学会学術総会(平成 23 年 10 月, 名古屋, 「大腸がん Colorectal cancer (4)」座長)
- 5) 第 282 回東海外科学会(平成 23 年 10 月, 三重, 「大腸 2」座長)
- 6) 第 49 回日本癌治療学会学術集会(平成 23 年 10 月, 名古屋, ミニシンポジウム 11「当科における StageIV 大腸癌の治療成績—どのような因子が予後良好か?—」演者)
- 7) 第 60 回日本農村医学会学術総会(平成 23 年 11 月, 岐阜, ランチョンセミナー1「大腸癌の治療戦略」講演)
- 8) 第 66 回日本大腸肛門病学会学術集会(平成 23 年 11 月, 東京, ワークショップ 4「StageIV大腸癌に対する手術先行群および Adjuvant Surgery 群の治療成績」演者)

奥村直樹：

- 1) 第 21 回日本消化器癌発生学会(平成 22 年 11 月, 長野, ワークショップ「Cetuximab 投与患者での治療効果と大腸癌における BRAF および PIK3CA 変異の検討」演者)

井川愛子：

- 1) 第 23 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 23 年 6 月, 東京, ミニシンポジウム 7「当科における単孔式腹腔鏡下胆嚢摘出術の検討」演者)

斎藤史朗：

- 1) 第 24 回日本内視鏡外科学会総会(平成 23 年 12 月, 大阪, パネルディスカッション 23「進行胃癌に対する腹腔鏡下幽門側胃切除術の検討」演者)

佐々木義之：

- 1) 第 23 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 23 年 6 月, 東京, ミニシンポジウム 30「局所進行膵癌(stage4a)における導入化学放射線療法「TS-1+radiation」の臨床第 2 相試験(PerSeUS-GPO1)について(第 2 報)」演者)
- 2) 第 49 回日本癌治療学会学術集会(平成 23 年 10 月, 名古屋, ミニシンポジウム 4「腫瘍縮小速度に着目した大腸癌肝転移化学療法の効果」演者)

森龍太郎：

- 1) 第 21 回日本消化器癌発生学会(平成 22 年 11 月, 長野, ワークショップ「癌化学療法薬剤耐性メカニズムについて」演者)

八幡和憲：

- 1) 第 23 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 23 年 6 月, 東京, ミニシンポジウム 9「転移性肝癌における手術適応とタイミング」演者)
- 2) 第 22 回日本消化器癌発生学会総会(平成 23 年 11 月, 佐賀, ワークショップ 7「当科における進行再発大腸癌の Kras 遺伝子 codon13 変異に対する Cetuximab の有効性」演者)

山田敦子：

- 1) 第 23 回日本肝胆膵外科学会・学術集会(平成 23 年 6 月, 東京, ミニシンポジウム 16「進行膵癌治療に対する新たな分子標的治療」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 徳山泰治：第 47 回日本癌治療学会・優秀演題賞(平成 21 年度)
- 2) 眞田雄市：第 21 回日本肝胆膵外科学会・会長賞(平成 21 年度)
- 3) 井川愛子：第 81 回日本胃癌学会・優秀示説(平成 21 年度)
- 4) 森龍太郎：第 22 回日本消化器癌発生学会・優秀演題賞(平成 23 年度)
- 5) 八幡和憲：第 49 回日本癌治療学会・優秀示説(平成 23 年度)

- 6) 井川愛子：第 49 回日本癌治療学会・優秀示説(平成 23 年度)
- 7) 田中善宏：第 49 回日本癌治療学会・優秀示説(平成 23 年度)

9. 社会活動

吉田和弘：

- 1) 岐阜県生活習慣病検診管理指導協議会胃がん部会委員(～現在)
- 2) 岐阜県医師会外科医部会顧問(～現在)
- 3) (財)がん集学的治療研究財団試験調整委員・評議員(～現在)
- 4) 疾病・障害認定審査会委員(厚生労働省健康局)(～現在)
- 5) 原子爆弾被爆者医療分科会員(～現在)
- 6) 日本臨床試験推進機構(JACCRO)(～現在)
- 7) 日本臨床試験推進機構(JACCRO)理事(～現在)

長田真二：

- 1) Current Medicinal Chemistry Anti-Cancer Agents・Editorial Member(～現在)
- 2) International Surgical School・International Faculty Member(Professor Emeritus)(～現在)
- 3) 国保診療報酬審査委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 吉田和弘：「紙上診療室」：中日新聞(2009 年 1 月 16 日)
- 2) 長田真二：「紙上診療室」：中日新聞(2009 年 1 月 23 日)
- 3) 吉田和弘：「がん最前線 キャンサーボード TV 胃がん」：BS 朝日(2010 年 7 月)
- 4) 高橋孝夫：「病院の実力～岐阜編 35～ 大腸癌」：読売新聞(2010 年 10 月 6 日)
- 5) 長田真二：「研究室から 大学はいま」新規療法，岐阜から世界へ：岐阜新聞(2010 年 12 月 14 日)
- 6) 吉田和弘：「知って得する 新 名医の最新治療 胃癌」：週刊朝日(2011 年 10 月 21 日)

12. 自己評価

評価

臨床・研究・教育において極めて充実し優れた実績を残していると評価する。①当科における臨床実績について、2011 年(平成 23 年)での、がんの切除例を見ると、食道がん 31 例，胃がん 115 例，大腸がん 153 例，肝胆膵 56 例，乳がん 60 例といずれも年々増加傾向にある。特に早期がんについては、腹腔鏡や胸腔鏡を用いた低侵襲治療の実現を行っており，内視鏡外科学会の技術認定医 3 人，さらには審査員 1 名を排出している。また，肝臓がんの腹腔鏡切除に関しても保険適応認定施設としても認められるに至った。

②一方，転移を有する高度進行がんに関しては抗がん剤治療を先行し根治的な外科療法を加えるという新たな治療戦略を提唱し，補助手術療法(Adjuvant surgery)として，本領域でのオピニオンリーダーとして貢献している。また，当科から報告した新たな胃がん化学療法のレジメがわが国と韓国の国際共同第 3 相臨床試験として発展し，その結果がアメリカがん治療学会で報告された。このように，当科ではがんに関する標準治療を行うにとどまらず，標準治療を作り出す診療科として貢献している。実際に全国レベルでの臨床研究は，胃がんにつき 25 試験，大腸がん 28 試験など展開し，新薬開発の治験に関しては 5 つの試験を展開しており，がん治療の発展に大いに貢献している。

③研究面に関しては，上記の臨床試験の結果に関する発表や論文を作成することができた。また，胃がんの microRNA に関する研究が Lancet Oncology に掲載されたのをはじめ，抗がん剤治療に関する modulation や大腸がんの肝転移に関する研究論文など作成することができた。

現状の問題点及びその対応策

これらの臨床・研究・教育に関する展開を推進してきたが，大学としての人材確保は極めて困難な状況である。そこで 2011 年 4 月には，「乳腺・分子腫瘍学講座」，さらに 2012 年 4 月には「がん先端医療開発学講座」を新に設置し，人材の確保および研究の推進を行う対策を講じている。

今後の展望

- ① 医療を通じて社会貢献する事を目標に当科のかかげる臨床・研究・教育に関する目標に向かい一層努力邁進することが重要である。
- ② 標準治療確立のための臨床研究を当科から全国に発信する。
- ③ 外科治療に関しては更に多くの技術認定医の排出，がん薬物療法専門医などの排出を目指す。
- ④ これらの教育に関して大学院生，学部生を含めた研究を展開する。

(4) 消化器病態学分野

1. 研究の概要

発癌の機序とその制御, 肝不全の病態と治療, 消化器疾患の病態栄養と介入, 消化管疾患に対する内視鏡治療の開発が主要テーマである。

1. 発癌の機序とその制御については, とくに核内受容体を分子標的とした研究を進めている。肝癌における核内受容体 RXR に関する基礎研究はほぼ終了し, 大腸癌, 膵癌など他の癌種へ演繹を開始した。肝癌に対して RXR リガンドを用いた発癌制御 (予防) の大規模臨床試験第Ⅱ相に成功し, 2012年3月から第Ⅲ相に入る。
2. 肝不全のうち, 急性肝不全について肝細胞の生存と死亡を決定するメカニズムの解明を細胞内シグナル, 細胞外マトリックスの両面から進めている。
3. 慢性肝不全では宿主の栄養状態が肝不全の病態進展・発癌に有意な意義を有することを臨床的に証明し, 日米欧のガイドラインに採用された。今後, その普及や運動処方への展開をさらに図る。
4. 消化管疾患の内視鏡治療は, 最新のデバイスを用いた診療を進行しており, 臨床研究論文につなげている。

2. 名簿

教授:	森脇久隆	Hisataka Moriwaki
准教授:	鶴見 寿	Hisashi Tsurumi
准教授:	荒木寛司	Hiroshi Araki (光学医療診療部)
講師:	安田一朗	Ichiro Yasuda
臨床講師:	内木隆文	Takafumi Naiki (生体支援センター)
臨床講師:	原 武志	Takeshi Hara (臨床腫瘍学)
臨床講師:	清水雅仁	Masahito Shimizu (生体支援センター)
臨床講師:	白木 亮	Makoto Shiraki
臨床講師:	高井光治	Koji Takai (肝疾患診療支援センター)
臨床講師:	兼村信宏	Nobuhiro Kanemura (卒後臨床センター)
医員:	井深貴士	Takashi Ibuka
医員:	今井健二	Kenji Imai
医員:	小野木章人	Fumito Onogi
医員:	土井晋平	Shinpei Doi
医員:	北川順一	Junichi Kitagawa
医員:	中村 博	Hiroshi Nakamura
医員:	杉山智彦	Tomohiko Sugiyama
医員:	中西孝之	Takayuki Nakanishi
医員:	華井竜徳	Tatunori Hanai

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 森脇久隆. 劇症肝炎: 高久史麿, 尾形悦郎, 黒川 清, 矢崎義雄監修. 新臨床内科学 第9版, 東京: 医学書院; 2009年: 549-552.
- 2) 森脇久隆. 肝性昏睡 他: 伊藤正男, 井村裕夫, 高久史麿編. 医学大辞典 第2版, 東京: 医学書院; 2009年.
- 3) 森脇久隆. 肝硬変: 山口 徹, 北原光夫, 福井次矢編. 今日の治療指針 2009年版, 東京: 医学書院; 2009年: 399-401.
- 4) 森脇久隆. 2. 病状・病態: 河田純男, 佐々木裕編. 現場の疑問に答える肝臓病診療 Q&A, 東京: 中外医学社; 2009年: 98-105.
- 5) 森脇久隆. レチノイド: 沖田 極, 幕内雅敏編. インフォームド・コンセント「肝がん」, 東京: 医薬ジャーナル社; 2009年: 80-81.
- 6) 安田一朗. II. 各論「胆道」, ERCPによる胆道癌診断: 中島正継監修, 安田健次朗編集. 胆膵内視鏡診療の実際, 東京: 日本メディカルセンター; 2009年: 89-96.
- 7) 塩屋正道, 安田一朗, 岩田圭介. II. 各論「膵臓」, 膵癌に対する EUS-FNIによる腹腔神経叢ブロック: 中島正継監修, 安田健次朗編集. 胆膵内視鏡診療の実際, 東京: 日本メディカルセンター; 2009年: 227-232.
- 8) 安田一朗. 腹腔神経叢ブロック(EUS-CPN)の実際: 安田健次朗, 真口宏介, 花田敬士, 入澤篤志, 伊藤 啓, 木田光広, 良沢昭和銘, 安田一朗, 糸井隆夫監修. EUSを用いた胆膵疾患へのアプローチ~診断・治療の最

- 前線～，制作協力：オリンパスメディカルシステム株式会社；2009年：14-15.
- 9) 足立政治, I. Bernard Weinstein, 森脇久隆. 緑茶カテキンの大腸癌細胞増殖抑制の新規メカニズム～脂質ラフトでのEGFR pathwayの阻害～：消化器病学の進歩-原点から未来への情報発信-, 東京：医学書院；2009年：404-408.
 - 10) 清水雅仁, 森脇久隆. レチノイド核内受容体 RXR α を標的分子とした肝細胞癌化学予防-非環式レチノイドと clonal deletion-：日本消化器病学会編. 消化器病学の進歩-原点から未来への情報発信, 東京：医学書院出版サービス；2009年：232-238.
 - 11) 白木 亮, 福島秀樹, 森脇久隆. アミノ酸とその分画：Medical Practice 編集委員会編. 臨床検査ガイド 2009～2010, 東京：文光堂；212-217.
 - 12) 森脇久隆. 肝硬変の食事療法と生活指導：幕内雅敏, 菅野健太郎, 工藤正俊編. 今日の消化器治療指針 第3版, 東京：医学書院；2010年：605-606.
 - 13) 森脇久隆. 肝硬変：門脇 孝, 小室一成, 宮地良樹監. 診療ガイドライン UP-To-Date 2010-2011, 東京：メディカルレビュー社；2010年：347-352.
 - 14) 森脇久隆, 白木 亮. 6. 肝性脳症 1 Eck 瘵症候群：2010年別冊 新領域別症候群シリーズ 肝・胆道系症候群(第2版)I 肝臓編(上)-その他の肝・胆道系疾患を含めて-, 東京：日本臨床社；2010年：318-320.
 - 15) 安田一朗. 胆道出血：幕内雅敏, 菅野健太郎, 工藤正俊編. 今日の消化器疾患治療指針 第3版, 東京：医学書院；2010年：842-844.
 - 16) 福島秀樹, 森脇久隆. 4 臓器・疾患別 栄養管理計画 5 肝臓 慢性肝炎・肝硬変：東口高志編. JJN SPECIAL 「治る力を引き出す 実践! 臨床栄養」, 東京：医学書院；2010年：51212-51218.
 - 17) 安田一朗. VisiGlide 汎用性検討 Working Team 研究報告 汎用型 GW の限界を探る：真口宏介, 河上洋, 入澤篤志, 新戸禎哲, 糸井隆夫, 安田一朗, 有坂好史, 花田敬士, 良沢昭和銘, 岡部義信監. ERCP Technical Report 特別号, 東京：オリンパスメディカルシステム株式会社；2010年：14-15.
 - 18) 荒木寛司. 腹痛：森田浩之編. いきなり名医!見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京：日本医事新報社；2010年：31-35.
 - 19) 荒木寛司. 食欲不振：森田浩之編. いきなり名医!見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京：日本医事新報社；2010年：83-87.
 - 20) 荒木寛司. 腹部膨満：森田浩之編. いきなり名医!見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京：日本医事新報社；2010年：94-97.
 - 21) 荒木寛司. 排便困難：森田浩之編. いきなり名医!見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京：日本医事新報社；2010年：98-102.
 - 22) 笠原千嗣, 村上啓雄. 発汗・寝汗：森田浩之総編. いきなり名医!見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京：日本医事新報社；2010年：126-130.
 - 23) Sarah Harding Laidlaw, 森脇久隆. 栄養とがん生存者：中尾 豊, 渡邊 昌, 阪上 浩編. がん栄養療法ガイドブック 第2版, 東京：メディカルレビュー社；2011年：201-210.
 - 24) 森脇久隆. 11. ウイルス性肝硬変に対する包括的治療：泉 並木編. ガイドライン/ガイダンス慢性肝炎, 東京：医事新報社；2011年：64-68.
 - 25) 森脇久隆. 2. 肝硬変の診断と治療について よくある質問③④：日本消化器病学会編. 患者さんと家族のための肝硬変ガイドブック, 東京：南江堂；2011年：10-13.
 - 26) 森脇久隆. 1. 生化学検査/F. ビタミン関係(誘導体を含む)ビタミン A(レチノイド・カロテノイド分画を含む)：Medical Practice 編. 臨床検査ガイド 2011-2012, 東京：文光堂；2011年：276-279.
 - 27) 森脇久隆. 第5章 病態栄養療法 7. その他の疾患⑥がんと：日本病態栄養学会編. 認定 病態栄養専門師のための病態栄養ガイドブック, 東京：メディカルレビュー社；2011年：271-273.
 - 28) 白木 亮, 森脇久隆. 分岐鎖アミノ酸(BCAA)：西口修平編. 肝硬変のマネジメント 改訂版, 大阪：医薬ジャーナル社；2011年：85-91.
 - 29) 森脇久隆. 25. 肝硬変・肝癌：岡田 正, 馬場忠雄, 山城雄一郎編. 新臨床栄養学, 東京：医学書院；2011年：109-115.
 - 30) 森脇久隆. 25. 肝硬変・肝癌：岡田 正, 馬場忠雄, 山城雄一郎編. 新臨床栄養学, 東京：医学書院；2011年：508-513.
 - 31) 森脇久隆. PART1 細菌・ウイルス感染を避ける 肝炎ウイルス：若林敬二監. がんから身を守る予防と検診, 東京：文芸春秋；2011年：42-49.
 - 32) 森脇久隆. ビタミンA誘導体の開発：糸川嘉則監. ビタミンの科学と最新応用技術, 東京：シーエムシー出版；2011年：74-80.
 - 33) 森脇久隆. 4. 治療：日本肝臓学会編. 慢性肝炎・肝硬変の診療ガイド 2011, 東京：文光堂；2011年：55-63.
 - 34) 森脇久隆. 肝硬変：高橋信一編. 消化器疾患ガイドライン, 東京：総合医学社；2011年：163-167.
 - 35) 安田一朗, 森脇久隆. 総胆管良性隆起病変：別冊日本臨床. 新領域別症候群シリーズ No.15. 『肝・胆道系症候群(第2版). III 肝外胆道編』, 東京：日本臨床社；2011年：187-190.
 - 36) 建部英春, 安田一朗, 鶴見 寿, 森脇久隆. 合流部胆石：別冊日本臨床. 新領域別症候群シリーズ No.15. 『肝・胆道系症候群(第2版). III 肝外胆道編』, 東京：日本臨床社；2011年：401-404.
 - 37) 安田一朗. コンベックス型超音波内視鏡による解剖と走査：山雄健次, 入澤篤志編. 縦隔：EUS 下穿刺術-Interventional EUSの基礎と実践テクニック, 東京：南江堂；2011年：33-41.
 - 38) 安田一朗. 副腎・脾臓病変へのアプローチ：山雄健次, 入澤篤志編. EUS 下穿刺術-Interventional EUS

- の基礎と実践テクニック, 東京: 南江堂; 2011年: 106-110.
- 39) 安田一朗. 副腎腫瘍: 山雄健次, 入澤篤志編. EUS 下穿刺術-Interventional EUS の基礎と実践テクニック, 東京: 南江堂; 2011年: 138-139.
 - 40) 安田一朗. 副腎・脾臓病変に対する EUS-FNA: 山雄健次, 入澤篤志編. EUS 下穿刺術-Interventional EUS の基礎と実践テクニック, 東京: 南江堂; 2011年: 200-201.
 - 41) 安田一朗. ラジアル型 EUS とコンベックス型 EUS, 1台買うならどっち? -私はこう考える!: 山雄健次, 入澤篤志編. EUS 下穿刺術-Interventional EUS の基礎と実践テクニック, 東京: 南江堂; 2011年: 106-110.
 - 42) 安田一朗. 総胆管結石に対する内視鏡治療: 花田敬士企画. 消化器 BOOK 05『症状・画像から見抜く! 膵胆道系の鑑別診断』, 東京: 羊土社; 2011年: 174-179.
 - 43) 白木 亮, 村上啓雄, 森脇久隆. Chapter 7. 経腸栄養 経腸栄養に必要な消化管の運動, 消化・吸収の知識: 日本病態栄養学会編. 認定 NST ガイドブック 2011, 東京: メディカルレビュー社; 2011年: 44-48.
 - 44) 白木 亮, 森脇久隆. II. 臨床編 疾患と電解質異常 肝疾患と電解質異常: 循環器医のための知っておくべき電解質異常, 東京: メディカルレビュー社; 2011年: 110-113.
 - 45) 中島賢憲, 安田一朗, 河口順二, 山内貴裕, 土井晋平, 岩下拓司, 戸田勝久, 森脇久隆. 感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクトミー: 伊佐地秀司, 大原弘隆, 柳野正人, 廣岡芳樹, 堀口明彦, 安田一朗, 乾和郎編. 肝胆膵治療研究会誌 Vol.9 No.1 2011, 東京: アークメディア; 2011年: 17-21.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 森脇久隆. 特集にあたって, 栄養評価と治療 2009年; 26巻: 94-95.
- 2) 森脇久隆. Elastography, Rev Gastro CGH 2009年; 3巻: 66-69.
- 3) 荒木寛司, 森脇久隆. クロウン病の分枝標的治療の最前線, 岐阜県医師会医学雑誌 2009年; 22巻: 65-70.
- 4) 安田一朗. 特集「肝胆膵の Intervention-エキスパートからのメッセージ」内視鏡的アプローチ: 内視鏡的乳頭切開術・内視鏡的乳頭バルーン拡張術, 肝胆膵画像 2009年; 11巻: 175-181.
- 5) 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 岩田圭介, 向井 強, 富田栄一, 森脇久隆. 特集「Advanced Therapeutic Endoscopy」腹腔神経叢ブロック, 消化器内視鏡 2009年; 21巻: 953-957.
- 6) 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 岩田圭介, 向井 強, 富田栄一, 森脇久隆. 特集「胆膵疾患における US/EUS 診断・治療の最前線」EUS-guided celiac plexus neurolysis と direct celiac ganglia neurolysis, 胆と膵 2009年; 30巻: 759-764.
- 7) 安田一朗, 岩下拓司, 土井晋平, 中島賢憲, 森脇久隆. 特集「胆膵治療内視鏡のエキスパートテクニック」EPBD の原理と結石除去術, 胆と膵 2009年; 30巻(臨時増刊特大号): 1077-1081.
- 8) 向井 強, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 岩田圭介, 富田栄一, 森脇久隆. 特集「Interventional Oncology」閉塞性黄疸を伴う切除不能膵癌に対する化学療法と胆道ステントの検討, 消化器科 2009年; 48巻: 630-636.
- 9) 清水雅仁, 森脇久隆. 非環式レチノイド, 日本臨牀 2009年; 67巻(増刊): 240-244.
- 10) 清水雅仁, 森脇久隆. レチノイド核内受容体 RXR α を分子標的とした試み, 肝胆膵 2009年; 3巻: 379-388.
- 11) 白木 亮, 森脇久隆. 慢性疾患と運動療法 慢性肝疾患, 日本臨床増刊号 身体活動・運動と生活習慣病 2009年; 67巻 Suppl2: 406-409.
- 12) 白木 亮, 森脇久隆. TNF- α カケクチン, 栄養 評価と治療 2009年; 24巻: 73-75.
- 13) 岩下拓司, 安田一朗, 塩屋正道, 向井 強, 大西隆哉, 岩田圭介, 戸田勝久, 土井晋平, 中島賢憲, 杉原潤一, 富田栄一, 森脇久隆. 特集「胆膵内視鏡治療最前線-最近の技術とデバイスを使いこなす-」良性胆管狭窄に対する Covered Metallic Stent の有用性, 胆と膵 2009年; 30巻: 467-472.
- 14) 西村佳代子, 白木 亮, 森脇久隆. 肝炎患者の食事, 難病と在宅ケア 2009年; 14巻: 63-66.
- 15) 坪内博仁, 熊田博光, 清澤研道, 持田 智, 坂井田功, 田中榮司, 市田隆文, 溝上雅史, 鈴木一幸, 與芝真彰, 森脇久隆, 日比紀文, 林 紀夫, 國土典宏, 藤澤知雄, 石橋大海, 菅原寧彦, 八橋 弘, 井戸章雄, 滝川康裕, 井上和明, 桶谷 真, 宇都浩文, 中山伸朗, 内木隆文, 多田慎一郎, 木曾真一, 矢野公士, 遠藤龍人, 田中靖人, 梅村武司, 熊谷公太郎. 免疫抑制・化学療法により発症する B 型肝炎対策-厚生労働省「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」班 劇症肝炎分科会および「肝硬変を含めたウイルス性肝疾患の治療の標準化に関する研究」班合同報告一, 肝臓 2009年; 50巻: 38-42.
- 16) 森脇久隆. 非アルコール性脂肪性肝疾患における hedgehog を介した上皮細胞-間葉細胞移行と線維性損傷修復, Rev Gastro CGH 2010年; 5巻: 46-50.
- 17) 森脇久隆. 肝硬変診療ガイドライン, クリニシアン 2010年; 591号: 43-47.
- 18) 鶴見 寿. 造血管腫瘍のバイオマーカー ~特に悪性リンパ腫における血清マーカーを中心に~, 血液フロンティア 2010年; 20巻: 991-997.
- 19) 鶴見 寿. Frontier Discussion 非ホジキンリンパ腫の治療~ピラルピシンの位置づけ~, 血液フロンティア 2010年; 20巻: 1212-1219.
- 20) 鶴見 寿. 学会印象記 第 50 回日本リンパ網内系学会総会, 血液フロンティア 2010年; 20巻: 1914-1916.

- 21) 安田一朗, 藤田直孝, 真口宏介, 小松 裕, 長谷部修, 五十嵐良典, 村上晶彦, 向井秀一, 藤井常志, 山雄健次, 眞栄城兼清, 辻野 武, 多田知子. 特集「胆管結石に対する各種治療法の成績と選択」胆管結石に対する内視鏡的治療(EST, EPBD)の短期, 長期成績—JESED studyの結果—, 胆と膵 2010年; 31巻: 259—261.
- 22) 安田一朗, 土井晋平, 向井 強, 森脇久隆. 特集「やっぱり大切, 基本手技」胆管結石に対する EPBD の基本手技, 消化器内視鏡 2010年; 22巻: 703—705.
- 23) 安田一朗. 膵病変に対する EUS—FNA, Gastroenterological Endoscopy 2010年; 52巻: 1722—1732.
- 24) 向井 強, 安田一朗, 岩田圭介, 中島賢憲, 山内貴裕, 土井晋平, 富田栄一, 森脇久隆. 特集「Stenting Bible」胆管狭窄に対する Stenting Strategy: 悪性肝門部胆管狭窄 各種ステントの選択—Plastic か Metal か—, 胆と膵 2010年; 31巻(臨時増刊特大号): 969—977.
- 25) 安田一朗, 戸田勝久, 土井晋平, 山内貴裕, 中島賢憲, 馬淵正敏, 向井 強, 岩田圭介, 富田栄一, 大西隆哉, 大島靖広, 安藤暢洋, 河口順二, 森脇久隆. 特集「Stenting Bible」胆管狭窄に対する Stenting Strategy: 良性狭窄 Covered Metallic Stent を用いた治療, 胆と膵 2010年; 31巻(臨時増刊特大号): 1007—1010.
- 26) 向井 強, 安田一朗. 特集「膵の画像診断 update 2010」膵疾患の内視鏡および超音波内視鏡診断・治療の現状, 臨床画像 2010年; 26巻: 562—574.
- 27) 安田一朗, 戸田勝久, 土井晋平, 山内貴裕, 中島賢憲, 向井 強, 岩田圭介, 大西隆哉, 大島靖広, 安藤暢洋, 河口順二, 森脇久隆. 特集「胆膵 EUS—FNA のエビデンス 2010」EUS ガイド下腹腔神経叢/神経節ブロック, 胆と膵 2010年; 31巻: 1239—1243.
- 28) 白木 亮, 森脇久隆. II. 栄養評価 栄養評価の指標 静的栄養指標 静脈・経腸栄養(第3版)—基礎・臨床研究のアップデート—, 日本臨床 2010年; 68巻(増刊号3): 69—72.
- 29) 白木 亮, 森脇久隆. 特集 肝疾患における血液生化学検査, 肝炎ウイルスマーカー, 腫瘍マーカーの見方 肝疾患における血液生化学検査の臨床的意義 アミノ酸分析, アンモニア肝胆膵 特集, 肝胆膵 2010年; 60巻: 579—585.
- 30) 白木 亮, 森脇久隆. 1. 栄養管理中の遭遇するリスクとその対策—病態別リスクマネージメント— (2)肝不全(肝硬変), 栄養, 評価と治療 2010年; 27巻: 113—117.
- 31) 白木 亮, 森脇久隆. 肝臓病における食事療法, ヘルスケア・レストラン 2010年; 7巻: 15—17.
- 32) 白木 亮, 森脇久隆. 特集: 肝硬変に対する栄養サポートのエビデンス 肝硬変患者の肥満, 静脈経腸栄養 2010年; 25巻: 1069—1072.
- 33) 寺倉陽一, 白木 亮, 森脇久隆. PEG 造設患者の長期管理: 静脈・経腸栄養(第3版)基礎・臨床研究のアップデート, 日本臨床 2010年; 245—249.
- 34) 清水雅仁, 白木 亮, 高井光治, 永木正仁, 森脇久隆. 分岐鎖アミノ酸と肝細胞癌抑制, The Liver Cancer Journal 2010年; 2巻: 200—204.
- 35) 森脇久隆. なぜ栄養評価が必要なのか, medicina 2011年; 48巻: 362—365.
- 36) 森脇久隆. グルタミンナーゼ遺伝子多型との関連を証明, 毎日メディカルジャーナル 2011年; 7巻: 94—95.
- 37) 森脇久隆. 炎症性メディエーターと三大栄養素の代謝(総説), 栄養評価と治療 2011年; 28巻: 198—200.
- 38) 森脇久隆. タンパク・アミノ酸代謝, 肝胆膵 2011年; 63巻: 383—390.
- 39) 森脇久隆. 座談会 肝硬変における栄養治療—睡眠障害へのアプローチ—, Prog Med 2011年; 31巻: 2116—2121.
- 40) 鶴見 寿. 専門医へ紹介するタイミング リンパ腫・多発性骨髄腫の疑い, medicina 2011年; 48巻: 1758—1761.
- 41) 鶴見 寿. 悪性リンパ腫のバイオマーカー, 成人病と生活習慣病 2011年; 41巻: 1094—1098.
- 42) 鶴見 寿. 誰もが知っておくべき HIV/AIDS の基礎知識, HIV 感染者の手術. 治療 2011年; 93巻: 2262—2265.
- 43) 安田一朗, 森脇久隆. 特集「胆膵疾患診療の最前線—難治疾患のよりよいマネジメントのために—」胆膵画像診断の進歩 超音波内視鏡でどこまでわかるか, 内科 2011年; 107巻: 419—423.
- 44) 安田一朗. 特集「達人の技」—胆・膵—これが私の EUS—FNA—検体の採取と取扱い—, 消化器内視鏡 2011年; 23巻: 560—563.
- 45) 安田一朗, 向井 強, 大西隆哉, 岩田圭介, 大島靖広, 安藤暢洋, 土井晋平, 山内貴裕, 中島賢憲, 河口順二, 上村真也, 森脇久隆. 特集「EUS—FNA Now」腹腔神経叢・神経節ブロック, 消化器内視鏡 2011年; 23巻: 1393—1397.
- 46) 安田一朗. 特集「胆石症の病態・診断・治療」総胆管結石症に対する内視鏡治療, 消化器外科 2011年; 34巻: 1767—1775.
- 47) 清水雅仁, 岩砂淳平, 白木 亮, 森脇久隆. 分岐鎖アミノ酸製剤を用いた肥満関連大腸および肝発癌予防, 消化器内科 2011年; 52巻: 591—596.
- 48) 清水雅仁, 岩砂淳平, 今井健二, 高井光治, 白木 亮, 森脇久隆. インスリン抵抗性と IGF/IGF—1 受容体シグナルを標的とした肥満関連肝発癌予防, 消化器内科 2011年; 52巻: 308—313.
- 49) 清水雅仁, 森脇久隆. 大腸癌の予防(トビックス)(2)緑茶カテキン, 臨床消化器内科 2011年; 26巻: 213—218.
- 50) 白木 亮, 森脇久隆. 4. 生化学検査 (1)血清蛋白, 栄養 評価と治療 2011年; 28巻: 41—43.
- 51) 白木 亮, 森脇久隆. 特集「炎症と栄養」肝硬変における炎症性サイトカインとエネルギー代謝, 栄養 評価と治療 2011年; 28巻: 209—213.
- 52) 土井晋平, 安田一朗, 森脇久隆. 特集II「胆石症をめぐる新しいコンセンサスと展望」総胆管結石に対する

- EST と EPBD の長期予後の比較, 消化器内科 2011 年; 53 巻: 185-190.
- 53) 土井晋平, 安田一朗, 森脇久隆. EPBD の手技の実際と私の工夫, HIRATA NEWS DIGEST 2011 年; 1 巻.
- 54) 中島賢憲, 安田一朗, 河口順二, 山内貴裕, 土井晋平, 岩下拓司, 戸田勝久, 森脇久隆. 感染性膵壊死に対する内視鏡的ネクロセクトミー, 肝胆膵治研誌 2011 年; 9 巻: 17-21.

総説 (欧文)

- 1) Kimura K, Hayashi S, Nagaki M. Roles of CD44 in chemical-induced liver injury. *Curr Opin Drug Disc.* 2010;13:96-103.
- 2) Nishiwaki S, Hatakeyama H, Takada J, Watanabe N, Iwashita M, Araki H, Saito K. Transcystostomal colonic stent placement after US-guided percutaneous cecostomy. *Gastrointestinal Endoscopy* 2010;71:1097-1099.
- 3) Yasuda I. Management of the bile duct stone-Current situation in Japan-. *Dig Endosc.* 2010; 22:S76-S78.
- 4) Mukai T, Yasuda I, Isayama H, Nakashima M, Doi S, Iwashita T, Iwata K, Kato T, Tomita E, Moriwaki H. Comparison of axial force and cell width of self-expandable metallic stents: which type of stent is better suited for hilar biliary strictures? *J Hepatobiliary Pancreat Sci.* 2011;18:646-652.
- 5) Shimizu M, Adachi S, Masuda M, Kozawa O, Moriwaki H. Cancer chemoprevention with green tea catechins by targeting receptor tyrosine kinases. *Mol Nutr Food Res.* 2011;55:832-843.
- 6) Shimizu M, Sakai H, Moriwaki H. Chemoprevention of hepatocellular carcinoma by acyclic retinoid. *Front Biosci.* 2011;16:759-769.
- 7) Masuda M, Wakasaki T, Toh S, Shimizu M, Adachi S. Chemoprevention of Head and Neck Cancer by Green Tea Extract: EGCG-The Role of EGFR Signaling and "Lipid Raft". *J Oncol.* 2011;540148:1-7.

原著 (和文)

- 1) 清水雅仁, 福富 尉, ニノ宮三生, 名倉一夫, 加藤則廣, 荒木寛司, 菅沼雅美, 藤木博太, 森脇久隆. 緑茶抽出物による異時性大腸腺腫の予防: パイロット試験, 栄養評価と治療 2009 年; 26 巻: 150-151.
- 2) 岩田圭介, 安田一朗, 山田祥子, 福田和史, 永野淳二, 鈴木祐介, 山内貴裕, 川出尚史, 向井 強, 林 秀樹, 杉山昭彦, 西垣洋一, 名倉一夫, 加藤則廣, 富田栄一, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 塩屋正道, 森脇久隆. 膵の癌性疼痛に対する超音波内視鏡下腹腔神経叢ブロック(EUS-CPN)の検討, 肝胆膵治研誌 2009 年; 7 巻: 18-21.
- 3) 戸田勝久, 安田一朗, 中島賢憲, 土井晋平, 岩下拓司, 岩田圭介, 大西隆哉, 向井 強, 杉原潤一, 富田栄一, 森脇久隆. 膵病変に対する EUS-FNA の診断能と診断成績に影響を与える因子の検討, 肝胆膵治研誌 2009 年; 7 巻: 22-26.
- 4) 今井健二, 高井光治, 小木曾英介, 渡部直樹, 岩砂淳平, 清水雅仁, 内木隆文, 安田一朗, 荒木寛司, 鶴見寿, 永木正仁, 森脇久隆. 進行肝細胞癌に対する cisplatin 反復肝動注療法の治療成績, 岐阜県内科医会雑誌 2009 年; 23 巻: 59-63.
- 5) 山崎健路, 華井頼子, 河内隆宏, 尾辻健太郎, 三原昌弘, 勝村直樹, 奥村徳夫, 河合庸仁, 荒木寛司, 下條宏文, 森 良雄, 下川邦泰. 粘膜筋板由来胃 GIST の 1 例, 胃と腸 2009 年; 44 巻: 1037-1044.
- 6) 小野木章人, 荒木寛司, 木村祐子, 寺倉陽一, 井深貴士, 末次 淳, 白木 亮, 永木正仁, 森脇久隆, 廣瀬善信. ダブルバルーン小腸内視鏡と腹部造影 CT 検査が診断に有用であった小腸動静脈奇形の 1 例, *Gastroenterological Endoscopy* 2009 年; 51 巻: 1301-1308.
- 7) 後藤英子, 後藤尚絵, 兼村信宏, 笠原千嗣, 原 武志, 鶴見 寿, 森脇久隆, 福野賢二, 高橋 健, 富田栄一, 吉川武志, 大山正巳, 山田俊樹, 澤田道夫. 後天性血友病(後天性凝固因子インヒビターによる出血傾向)の臨床的検討, 岐阜県内科医会雑誌 2010 年; 24 巻: 93-99.
- 8) 荒木寛司, 小野木章人, 井深貴士, 森脇久隆. 周期的な腹痛・発熱を主訴とし MEFV 遺伝子変異を認めた家族性地中海熱の成人発症 1 親子例, 日本消化器病学会雑誌 2010 年; 107 巻: 427-431.
- 9) 井深貴士, 荒木寛司, 小野木章人, 森脇久隆. 進行食道癌に対する放射線化学療法中に発症した薬剤性肺臓炎の 1 例, 岐阜県医師会雑誌 2010 年; 23 巻: 93-97.
- 10) 高田 淳, 荒木寛司, 小野木章人, 井深貴士, 西脇伸二, 齋藤公志郎, 森脇久隆. 出血性多発小腸潰瘍を合併した Sweet 病の 1 例, 日本消化器病学会誌 2010 年; 107 巻: 1482-1489.
- 11) 徳山泰治, 長田真二, 眞田雄市, 井川愛子, 奥村直樹, 高橋孝夫, 山口和也, 土井晋平, 安田一朗, 吉田和弘. 膵管狭窄の経過観察中に認めた pT51 膵癌症例, 胆と膵 2010 年; 31 巻: 507-511.
- 12) 大洞昭博, 小島孝雄, 加藤隆弘, 橋本宏明, 堀江秀樹, 福田信宏, 高野幸彦, 奥田順一, 井田和徳, 安田一朗, 廣瀬善信. EUS-FNA が確定診断に有用であった自己免疫性膵炎の 1 症例, 肝胆膵治研誌 2010 年; 8 巻: 54-61.
- 13) 森脇久隆. Editorial 「慢性疾患における栄養障害を炎症として捉える」という視点は肝硬変にもあてはまるか?, 門脈圧亢進症学会誌 2010 年; 16 巻: 85-87.
- 14) 安田一朗, 中島賢憲, 山内貴裕, 土井晋平, 安藤暢洋, 岩下拓司, 戸田勝久, 岩田圭介, 大西隆哉, 向井 強, 富田栄一, 森脇久隆. 特集「胆膵内視鏡ルネサンス」自己免疫性膵炎と硬化性胆管炎, 消化器内視鏡 2010 年; 22 巻: 1949-1954.
- 15) 森脇久隆, 西川正彦, 伊藤 誠, 上崎利昭. 非代償性肝硬変症における合併症の発現に及ぼすリーバクト配合顆粒長期継続投与時の効果の検討〜リーバクト配合顆粒特別調査の結果より〜, 医薬ジャーナル

2011年; 47巻: 194-204.

- 16) 森脇久隆, 後藤秀実, 城 卓志, 吉岡健太郎, 竹井謙之, 米田政志. 肝臓栄養治療に関する医療従事者の意識調査 2010, 栄養評価と治療 2011年; 28巻: 244-248.
- 17) 持田 智, 滝川康裕, 中山伸朗, 桶谷 真, 内木隆文, 山岸由幸, 市田隆文, 坪内博仁. 我が国における「急性肝不全」の概念, 診断基準の確立: 厚生労働省科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)「難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究」班, ワーキンググループ-1, 研究報告, 肝臓 2011年; 52巻: 393-398.
- 18) 金子周一, 古瀬純司, 工藤正俊, 池田健次, 本多政夫, 中本安成, 恩地森一, 汐田剛史, 横須賀収, 坂井田功, 竹原徹郎, 上野義之, 廣石和正, 西口修平, 森脇久隆, 山本和秀, 佐田通夫, 小尾俊太郎, 宮山士朗, 今井幸紀. 肝がんに対する新規抗がん剤使用に関する指針 2010 年度版平成 22 年度厚生労働省科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業), 肝臓 2011年; 52巻: 532-551.
- 19) 山崎健路, 杉山智彦, 小澤範高, 小木曾英之, 華井頼子, 尾辻健太郎, 勝村直樹, 荒木寛司, 森 良雄, 下川邦泰. 潰瘍性大腸炎の治療中に発症した, サイトメガロウイルス感染による胃病変の 1 例, 消化器内視鏡 2011年; 23巻: 1147-1152.
- 20) 小野木章人, 荒木寛司, 寺倉陽一, 小川憲吾, 井深貴士, 白木 亮, 清水雅仁, 永木正仁, 森脇久隆. 残胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術に胃穿孔を合併し門脈ガス血症を来した 1 例, 日門亢会誌 2011年; 17巻: 19-25.

原著 (欧文)

- 1) Nagaki M, Shimizu M, Sugihara J, Tomita E, Sano C, Naiki T, Kimura K, Amano K, Sakai T, Ninomiya M, Kojima T, Katsumura N, Fujimoto M, Moriwaki H. Extended treatment duration of peginterferon- α -2b plus rebavirin for 72 and 96 weeks in hepatitis C genotype 1-infected late responders. *Aliment Pharm Therap.* 2009;30:343-351. IF 3.861
- 2) Yasuda I, Iwata K, Mukai T, Iwashita T, Moriwaki H. EUS-guided pancreatic pseudocyst drainage. *Dig Endosc.* 2009;21:S82-S86. IF 0.946
- 3) Yasuda I, Kato T, Asano F, Okubo K, Omar S, Kako N, Yasuda S, Sano K, Soehendra N, Moriwaki H. Mediastinal lymph node staging in potentially resectable non-small cell lung cancer: A prospective comparison of CT and EUS/EUS-FNA. *Respiration.* 2009;78:423-431. IF 2.543
- 4) Kimura K, Nagaki M, Saio M, Hosoi A, Saeki T, Okuda Y, Kuwata K, Moriwaki H, Kakimi K. Role of CD44 on CTL-induced acute liver injury in hepatitis B virus transgenic mice. *J Gastroenterol.* 2009;44:218-227. IF 3.610
- 5) Kimura K, Nagaki M, Matsuura T, Moriwaki H, Kakimi K. Pathological role of CD44 on NKT cells in carbon tetrachloride-mediated liver injury. *Hepatol Res.* 2009;39:93-105. IF 1.857
- 6) Ito H, Ando K, Ishikawa T, Saito K, Takemura M, Imawari M, Moriwaki H, Seishima M. Role of TNF- α produced by nonantigen-specific cells in a fulminant hepatitis mouse model. *J Immunol.* 2009;182:391-397. IF 5.745
- 7) Shimizu M, Takai K, Moriwaki H. Strategy and mechanism for the prevention of hepatocellular carcinoma: phosphorylated retinoid X receptor α is a critical target for hepatocellular carcinoma chemoprevention. *Cancer Sci.* 2009;100:369-374. IF 3.846
- 8) Shimizu M, Shirakami Y, Iwasa J, Shiraki M, Yasuda Y, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Supplementation with branched-chain amino acids inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in male C57BL/KsJ-*db/db* mice. *Clin Cancer Res.* 2009;15:3068-3075. IF 7.338
- 9) Adachi S, Shimizu M, Shirakami Y, Yamauchi J, Natsume H, Matsushima-Nishiwaki R, To S, Weinstein IB, Moriwaki H, Kozawa O. (-)-Epigallocatechin gallate downregulates EGF receptor via its phosphorylation at Ser1046/1047 mediated by p38 MAP kinase in colon cancer cells. *Carcinogenesis.* 2009;30:1544-1552. IF 5.402
- 10) Adachi S, Natsume H, Yamauchi J, Matsushima-Nishiwaki R, Joe AK, Moriwaki H, Kozawa O. p38 MAP kinase controls EGF receptor downregulation via phosphorylation at Ser1046/1047. *Cancer Lett.* 2009;277:108-113. IF 4.864
- 11) Tatebe H, Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Yasuda Y, Tsurumi H, Moriwaki H. Acyclic retinoid synergises with valproic acid to inhibit growth in human hepatocellular carcinoma cells. *Cancer Lett.* 2009;285:210-217. IF 4.864
- 12) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Nakashima M, Tsurumi H, Hirose Y, Takami T, Enya M, Mukai T, Ohnishi T, Iwata K, Tomita E, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration in patients with lymphadenopathy suspected of recurrent malignancy after curative treatment. *J Gastroenterol.* 2009;44:190-196. IF 3.610
- 13) Shirakami Y, Shimizu M, Adachi S, Sakai H, Nakagawa T, Yasuda Y, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate suppresses the growth of human hepatocellular carcinoma cells by inhibiting activation of the vascular endothelial growth factor-vascular endothelial growth factor receptor axis. *Cancer Sci.* 2009;100:1957-1962. IF 3.846
- 14) Yasuda Y, Shimizu M, Sakai H, Iwasa J, Kubota M, Adachi S, Osawa Y, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate prevents carbon tetrachloride-induced rat hepatic fibrosis by inhibiting the expression of the PDGFR β and IGF-1R. *Chem Biol Interact.* 2009;182:159-164.
- 15) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Saito K, Imawari M, Yokochi T, Moriwaki H, Seishima M.

- Valpha14 NKT cells activated by alpha-galactosylceramide augment lipopolysaccharide-induced nitric oxide production in mouse intra-hepatic lymphocytes. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009; 378:579-583. IF 2.595
- 16) Tsukada Y, Nagaki M, Suetsugu A, Osawa Y, Moriwaki H. Extracellular matrix is required for the survival and differentiation of transplanted hepatic progenitor cells. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009;381:733-737. IF 2.595
- 17) Nakagawa T, Shimizu M, Shirakami Y, Tatebe H, Yasuda I, Tsurumi H, Moriwaki H. Synergistic effects of acyclic retinoid and gemcitabine on growth inhibition in pancreatic cancer cells. *Cancer Lett.* 2009;273:250-256. IF 4.864
- 18) Ohtaki H, Ito H, Ando K, Ishikawa T, Hoshi M, Tanaka R, Osawa Y, Yokochi T, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Interaction between LPS-induced NO production andIDO activity in mouse peritoneal cells in the presence of activated Valpha14 NKT cells. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009;389:229-234. IF 2.595
- 19) Ohtaki H, Ohkusu K, Sawamura H, Ohta H, Inoue R, Iwasa J, Ito H, Murakami N, Ezaki T, Moriwaki H, Seishima M. First report of acute cholecystitis with sepsis caused by *Cellulomonas denverensis*. *J Clin Microbiol.* 2009;47:3391-3393. IF 4.220
- 20) Nishiwaki S, Araki H, Shirakami Y, Niwa Y, Iwashita M, Hatakeyama H, Saitoh K. Transgastrostomic endoscopy-assisted ESD. *Endoscopy.* 2009;41:E13. IF 6.096
- 21) Nishiwaki S, Araki H, Shirakami Y, Kawaguchi J, Asano T, Iwashita M, Tagami A, Hatakeyama H, Hayashi T, Maeda T, Saitoh K. Direct percutaneous endoscopic jejunostomy using transgastrostomic endoscope in patients with previous endoscopic gastrostomy. *Endoscopy.* 2009;41:E36-E37. IF 6.096
- 22) Nishiwaki S, Araki H, Shirakami Y, Kawaguchi J, Kawade N, Iwashita M, Tagami A, Hatakeyama H, Hayashi T, Maeda T, Saitoh K. Inhibition of Gastroesophageal Reflux by Semi-solid Nutrients in Patients with Percutaneous Endoscopic Gastrostomy. *J Parenter Enteral Nutr.* 2009;33:513-519.
- 23) Iwashita T, Yasuda I, Tsurumi H, Goto N, Nakashima M, Doi S, Hirose Y, Takami T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration biopsy for splenic tumor: a case series. *Endoscopy.* 2009;41:179-182. IF 6.096
- 24) Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Yamada T, Sawada M, Goto H, Fukuno K, Kitagawa JI, Yasuda I, Katsumura N, Takemura M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble Fas level determines clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP and R-CHOP. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2009;135:1421-1428. IF 2.485
- 25) Goto H, Hara T, Tsurumi H, Tanabashi S, Moriwaki H. Chronic neutrophilic leukemia with congenital robertsonian translocation successfully treated with allogeneic bone marrow transplantation in a young man. *Int Med.* 2009;48:563-567. IF 1.037
- 26) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Oyama M, Moriwaki H. Pure erythroid leukemia with hemophagocytosis. *Int Med.* 2009;48:1695-1698. IF 1.037
- 27) Moriwaki H, Shiraki M, Iwasa J, Terakura Y. Hepatic encephalopathy as a complication of liver cirrhosis: an Asian perspective. *J Gastroenterol Hepatol.* 2010;25:858-863. IF 2.410
- 28) Kato T, Araki H, Onogi F, Ibuka T, Sugiyama A, Tomita E, Nagaki M, Moriwaki H. Clinical trial: rebamipide promotes gastric ulcer healing by proton pump inhibitor after endoscopic submucosal dissection - a randomized controlled study. *J Gastroenterol.* 2010;45:285-290. IF 3.610
- 29) Ito H, Hoshi M, Ohtaki H, Taguchi A, Ando K, Ishikawa T, Osawa Y, Hara A, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. Ability of IDO to attenuate liver injury in α -galactosylceramide-induced hepatitis model. *J Immunol.* 2010;185:4554-4560. IF 5.745
- 30) Hara T, Tsurumi H, Kasahara S, Ogawa K, Takada J, Imai K, Takai K, Kitagawa J, Kiyama S, Imai N, Oyama M, Takami T, Moriwaki H. Long-term survival of a patient with splenic angiosarcoma after resection, high-dose chemotherapy, and autologous peripheral blood stem cell transplantation. *Intern Med.* 2010;49:2253-2257. IF 1.037
- 31) Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Yasuda Y, Kubota M, Adachi S, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits growth and activation of the VEGF/VEGFR axis in human colorectal cancer cells. *Chem Biol Interact.* 2010;185:247-252.
- 32) Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Yamauchi T, Moriwaki H, Kozawa O. HSP90 inhibitors induce down-regulation of EGF receptor via p38 MAPK-mediated phosphorylation at Ser1046/7 in human pancreatic cancer cells. *Oncol Rep.* 2010;23:1709-1714. IF 1.686
- 33) Osawa Y, Seki E, Adachi M, Suetsugu A, Ito H, Moriwaki H, Seishima M, Nagaki M. Role of acid sphingomyelinase of Kupffer cells in cholestatic liver injury in mice. *Hepatology* 2010;51:237-245. IF 10.885
- 34) Shiraki M, Terakura Y, Iwasa J, Shimizu M, Miwa Y, Murakami N, Nagaki M, Moriwaki H. Elevated serum tumor necrosis factor- α and soluble tumor necrosis factor receptors correlate with aberrant energy metabolism in liver cirrhosis. *Nutrition* 2010;26:269-275. IF 2.726
- 35) Yoshikawa T, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Hoshi M, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Ito H, Takemura M, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum concentration of L-kynurenine predicts the clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Eur J Haematol.* 2010;84:304-309. IF 2.785

- 36) Goto N, Hara T, Tsurumi H, Ogawa K, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Yamada T, Shimizu M, Nakamura M, Matsuura K, Moriwaki H. Efficacy and safety of micafungin for treating febrile neutropenia in hematological malignancies. *Am J Hematol.* 2010;85:872-876. IF 3.576
- 37) Iwasa J, Shimizu M, Shiraki M, Shirakami Y, Sakai H, Terakura Y, Takai K, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Dietary supplementation with branched-chain amino acids suppresses diethylnitrosamine-induced liver tumorigenesis in obese and diabetic C57BL/KsJ-db/db mice. *Cancer Sci.* 2010;101:460-467. IF 3.846
- 38) Yasuda Y, Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Kubota M, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Pitavastatin inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ-db/db obese mice. *Cancer Sci.* 2010;101:1701-1707. IF 3.846
- 39) Imai K, Takai K, Nishigaki Y, Shimizu S, Naiki T, Hayashi H, Uematsu T, Sugihara J, Tomita E, Shimizu M, Nagaki M, Moriwaki H. Insulin resistance raises the risk for recurrence of stage I hepatocellular carcinoma after curative radiofrequency ablation in HCV-positive patients: A prospective, case-series study. *Hepatol Res.* 2010;40:376-382. IF 1.857
- 40) Onogi F, Araki H, Ibuka T, Manabe Y, Yamazaki K, Nishiwaki S, Moriwaki H. "Transmural air leak": a computed tomographic finding following endoscopic submucosal dissection of gastric tumors. *Endoscopy* 2010;42:441-447. IF 6.096
- 41) Sakai H, Yamada Y, Shimizu M, Saito K, Moriwaki H, Hara A. Genetic ablation of TNF- α demonstrates no detectable suppressive effect on inflammation-related mouse colon tumorigenesis. *Chem Biol Interact.* 2010;184:423-430.
- 42) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kozawa O, Moriwaki H. Rho-kinase regulates negatively the epidermal growth factor-stimulated colon cancer cell proliferation. *Int J Oncol.* 2010;36:585-592. IF 2.571
- 43) Ninomiya S, Fukuno K, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Yamada T, Tsurumi H, Moriwaki H. IgG type multiple myeloma and concurrent IgA type monoclonal gammopathy of undetermined significance complicated by necrotizing skin ulcers due to type I cryoglobulinemia. *J Clin Exp Hematop.* 2010;50:71-74.
- 44) Kumada H, Okanoue T, Onji M, Moriwaki H, Izumi N, Tanaka E, Chayama K, Sakisaka S, Takehara T, Oketani M, Suzuki F, Toyota J, Nomura H, Yoshioka K, Seike M, Yotsuyanagi H, Ueno Y. The study group for the standardization of treatment of viral hepatitis including cirrhosis, Ministry of Health, Labor and Welfare of Japan. Guidelines for the treatment of chronic hepatitis and cirrhosis due to hepatitis B virus infection for the fiscal year 2008 in Japan. *Hepatol Res.* 2010;40:1-7. IF 1.857
- 45) Kumada H, Okanoue T, Onji M, Moriwaki H, Izumi N, Tanaka E, Chayama K, Sakisaka S, Takehara T, Oketani M, Suzuki F, Toyota J, Nomura H, Yoshioka K, Seike M, Yotsuyanagi H, Ueno Y. The study group for the standardization of treatment of viral hepatitis including cirrhosis, Ministry of Health, Labour and Welfare of Japan. Guidelines for the treatment of chronic hepatitis and cirrhosis due to hepatitis C virus infection for the fiscal year 2008 in Japan. *Hepatol Res.* 2010;40:8-13. IF 1.857
- 46) Komi Y, Sogabe Y, Ishibashi N, Sato Y, Moriwaki H, Shimokado K, Kojima S. Acyclic retinoid inhibits angiogenesis by suppressing the MAPK pathway. *Lab Invest.* 2010;90:52-60. IF 4.405
- 47) Nishiwaki S, Araki H, Takada J, Watanabe N, Asano T, Iwashita M, Tagami A, Hatakeyama H, Hayashi T, Maeda T, Saitoh K. Clinical investigation of upper gastrointestinal hemorrhage after percutaneous endoscopic gastrostomy. *Digestive Endosc.* 2010;22:180-185. IF 0.946
- 48) Yasuda I, Fujita N, Maguchi H, Hasebe O, Igarashi Y, Murakami A, Mukai H, Fujii T, Yamao K, Maeshiro K, Tada T, Tsujino T, Komatsu Y. Long-term outcomes after endoscopic sphincterotomy versus endoscopic papillary balloon dilation for bile duct stones. *Gastrointest Endosc.* 2010;72:1185-1191. IF 5.647
- 49) Sasaki T, Isayama H, Nakai Y, Ito Y, Kogure H, Togawa O, Toda N, Yasuda I, Hasebe O, Maetani I, Sasahira N, Hirano K, Tsujino T, Tada M, Omata M. Multicenter, phase II study of gemcitabine and S-1 combination chemotherapy in patients with advanced biliary tract cancer. *Cancer Chemother Pharmacol.* 2010;65:1101-1107. IF 2.759
- 50) Chayama K, Hayes CN, Yoshioka K, Moriwaki H, Okanoue T, Sakisaka S, Takehara T, Oketani M, Toyota J, Izumi N, Hiasa Y, Matsumoto A, Nomura H, Seike M, Ueno Y, Yotsuyanagi H, Kumada H. Accumulation of refractory factors for pegylated interferon plus ribavirin therapy in older female patients with chronic hepatitis C. *Hepatol Res.* 2010;40:1155-1167. IF 1.857
- 51) Suetsugu A, Osawa Y, Nagaki M, Moriwaki H, Saji S, Bouvet M, Hoffman RM. Simultaneous color-coded imaging to distinguish cancer "stem-like" and non-stem cells in the same tumor. *J Cell Biochem.* 2010;111:1035-1041. IF 3.122
- 52) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Shimizu M, Moriwaki H. Cell Cycle-Dependent Priming Action of Granulocyte Colony-Stimulating Factor (G-CSF) Enhances in vitro Apoptosis Induction by Cytarabine and Etoposide in Leukemia Cell Lines. *J Clin Exp Hematop.* 2010;50:99-105.
- 53) Yasuda I, Iwashita T, Doi S, Nakashima M, Moriwaki H. Role of EUS in early detection of small pancreatic cancer. *Dig Endosc.* 2011;23 (Suppl.1):22-25. IF 0.946

- 54) Yasuda I, Nakashima M, Moriwaki H. Cholangioscopic view of IgG4-related sclerosing cholangitis. *J Hepatobiliary Pancreat Sci.* 2011;18:122-124. IF 1.963
- 55) Tanaka Y, Kato T, Nishida H, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Hayashi Y, Kimura A, Hozumi I, Arakai H, Murase M, Nagaki M, Moriwaki H, Inuzuka T. Is there a delayed gastric emptying of patients with early-stage, untreated Parkinson's disease? An analysis using the (13)C-acetate breath test. *J Neurol.* 2011;258:421-426. IF 3.853
- 56) Tanaka Y, Hayashi Y, Kato J, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Kimura A, Hozumi I, Hatano Y, Hirose Y, Takami T, Nakamura H, Kasahara S, Tsurumi H, Moriwaki H, Inuzuka T. Diffuse skeletal muscles uptake of [18F] fluorodeoxyglucose on positron emission tomography in primary muscle peripheral T-cell lymphoma. *Intern Med.* 2011;50:2021-2024. IF 1.037
- 57) Shimizu M, Sakai H, Shirakami Y, Iwasa J, Yasuda Y, Kubota M, Takai K, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Acyclic retinoid inhibits diethylnitrosamine-induced liver tumorigenesis in obese and diabetic C57BLKS/J- +(db)/+Lepr(db) mice. *Cancer Prev Res.* 2011;4:128-136. IF 4.978
- 58) Shimizu M, Sakai H, Shirakami Y, Yasuda Y, Kubota M, Terakura D, Baba A, Ohno T, Hara Y, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of (-)-epigallocatechin gallate on diethylnitrosamine-induced liver tumorigenesis in obese and diabetic C57BL/KsJ- *db/db* Mice. *Cancer Prev Res.* 2011;4:396-403. IF 4.978
- 59) Shimizu M, Yasuda Y, Sakai H, Kubota M, Terakura D, Baba A, Ohno T, Kochi T, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Pitavastatin suppresses diethylnitrosamine-induced liver preneoplasms in male C57BL/KsJ- *db/db* obese mice. *BMC Cancer.* 2011;11:281. IF 3.153
- 60) Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Yamauchi T, Yoshioka T, Okano Y, Moriwaki H, Kozawa O. Rho-kinase inhibitor upregulates migration by altering focal adhesion formation via the Akt pathway in colon cancer cells. *Eur J Pharmacol.* 2011;650:145-150. IF 2.737
- 61) Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Yamauchi T, Kawaguchi J, Shimizu M, Itani M, Nakamura M, Nishii Y, Yoshioka T, Hirose Y, Okano Y, Moriwaki H, Kozawa O. Ultraviolet irradiation can induce evasion of colon cancer cells from stimulation of epidermal growth factor. *J Biol Chem.* 2011;286:26178-26187. IF 5.328
- 62) Adachi S, Yasuda I, Kawaguchi J, Yamauchi T, Nakashima M, Itani M, Nakamura M, Yoshioka T, Moriwaki H, Kozawa O. Ultraviolet enhances the sensitivity of pancreatic cancer cells to gemcitabine by activation of 5' AMP-activated protein kinase. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;414:53-59. IF 2.595
- 63) Iwata K, Yasuda I, Enya M, Mukai T, Nakashima M, Doi S, Iwashita T, Tomita T, Moriwaki H. Predictive factors for pain relief after endoscopic ultrasound-guided celiac plexus neurolysis. *Dig Endosc.* 2011;23:140-145. IF 0.946
- 64) Osawa Y, Kanamori H, Seki E, Hoshi M, Ohtani H, Yasuda Y, Ito H, Suetsugu A, Nagaki M, Moriwaki H, Saito K, Seishima M. L-tryptophan-mediated enhancement of susceptibility to nonalcoholic fatty liver disease is dependent on the mammalian target of rapamycin. *J Biol Chem.* 2011;286:34800-34808. IF 5.328
- 65) Osawa Y, Seki E, Kodama Y, Suetsugu A, Miura K, Adachi M, Ito H, Shiratori Y, Banno Y, Olefsky JM, Nagaki M, Moriwaki H, Brenner DA, Seishima M. Acid sphingomyelinase regulates glucose and lipid metabolism in hepatocytes through AKT activation and AMP-activated protein kinase suppression. *FASEB J.* 2011;25:1133-1144. IF 6.515
- 66) Kasahara S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kitagawa J, Kanemura N, Yoshikawa T, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Phase II study of the tetrahydropyranyl adriamycin-cyclophosphamide, vincristine, and prednisolone regimen combined with rituximab as first-line treatment for elderly patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leuk Lymphoma.* 2011;52:629-634. IF 2.492
- 67) Ohshima Y, Yasuda I, Kawakami H, Kuwatani M, Mukai T, Iwashita T, Doi S, Nakashima M, Hirose Y, Asaka M, Moriwaki H. EUS-FNA for suspected malignant biliary strictures after negative endoscopic transpapillary brush cytology and forceps biopsy. *J Gastroenterol.* 2011;46:921-928. IF 3.610
- 68) Goto N, Tsurumi H, Sawada M, Kanemura N, Hara T, Kasahara S, Kito Y, Takada K, Sato Y, Yoshino T, Moriwaki H, Takami T. Follicular variant of peripheral T-cell lymphoma mimicking follicular lymphoma: a case report with a review of the Literature. *Pathol Int.* 2011;61:326-330.
- 69) Goto N, Tsurumi H, Kasahara S, Kanemura N, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Sawada M, Yamada T, Takemura M, Seishima M, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum interleukin-18 level is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP or R-CHOP regimens. *Eur J Haematol.* 2011;87:217-227. IF 2.785
- 70) Hassanein MK, Suetsugu A, Saji S, Moriwaki H, Bouvet M, Moossa AR, Hoffman RM. Stem-like and non-stem human pancreatic cancer cells distinguished by morphology and metastatic behavior. *J Cell Biochem.* 2011;112:3549-3554. IF 3.122
- 71) Suetsugu A, Osawa Y, Nagaki M, Saji S, Moriwaki H, Bouvet M, Hoffman RM. Imaging the recruitment of cancer-associated fibroblasts by liver-metastatic colon cancer. *J Cell Biochem.* 2011;112:949-953. IF 3.122
- 72) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Ninomiya S, Ogawa K, Adachi S, Kanemura N, Kasahara S, Shimizu M, Moriwaki H. Synergistic growth inhibition in HL-60 cells by the combination of acyclic retinoid and vitamin K(2). *J Cancer Res Clin Oncol.* 2011;137:779-787. IF 2.485

- 73) Doi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Yamauchi T, Iwashita T, Toda K, Adachi S, Shimizu M, Tsurumi H, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration of lesions near the aortoiliac bifurcation via an upper gastrointestinal approach. *J Gastroenterol Hepatol.* 2011;26:1717-1720. IF 2.410
- 74) Doi S, Yasuda I, Nakashima M, Iwashita T, Toda K, Mukai T, Iwata K, Itoi T, Moriwaki H. Carbon dioxide insufflation vs. conventional saline irrigation for peroral video cholangioscopy. *Endoscopy.* 2011;43:1070-1075. IF 6.096
- 75) Yamauchi T, Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Yoshioka T, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Ultra-violet irradiation induces apoptosis via mitochondrial pathway in pancreatic cancer cells. *Int J Oncol.* 2011;39:1375-1380. IF 2.571
- 76) Yamauchi T, Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Nishii Y, Yoshioka T, Okano Y, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. UV-C irradiation induces downregulation of EGF receptor via phosphorylation at serine 1046/1047 in human pancreatic cancer cells. *Radiation Res.* 2011;176:565-574. IF 2.578
- 77) Ohnishi R, Yasuda I, Kato T, Tanaka T, Kaneko Y, Suzuki T, Yasuda S, Sano K, Doi S, Nakashima M, Hara T, Tsurumi H, Murakami N, Moriwaki H. Combined endobronchial and endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration for mediastinal nodal staging of lung cancer. *Endoscopy.* 2011;43:1082-1089. IF 6.096
- 78) Kubota M, Shimizu M, Sakai H, Yasuda Y, Ohno T, Kochi T, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Renin-angiotensin system inhibitors suppress azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ-*db/db* obese mice. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;410:108-113. IF 2.595
- 79) Terakura Y, Shiraki M, Nishimura K, Iwasa J, Nagaki M, Moriwaki H. Indirect calorimetry and anthropometry to estimate energy metabolism in patients with liver cirrhosis. *J Nutr Sci Vitaminol.* 2010;56:372-379. IF 1.228
- 80) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kawaguchi J, Hanamatsu T, Yoshioka T, Okano Y, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Inhibition of Rho-associated coiled-coil containing protein kinase enhances the activation of epidermal growth factor receptor in pancreatic cancer cells. *Mol Cancer.* 2011;10:79. IF 3.779
- 81) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kawaguchi J, Itani M, Yoshioka T, Matsushima-Nishiwaki R, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Phosphorylation status of heat shock protein 27 plays a key role in gemcitabine-induced apoptosis of pancreatic cancer cells. *Cancer Lett.* 2011;313:218-225. IF 4.864
- 82) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Hoshi M, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Shimizu M, Ito H, Saito K, Hirose Y, Yamada T, Takahashi T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase in tumor tissue indicates prognosis in patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Ann Hematol.* 2011;90:409-416. IF 1.867
- 83) Ninomiya S, Kanemura N, Tsurumi H, Kasahara S, Hara T, Yamada T, Moriwaki H. Coexistence of inversion 16 and the Philadelphia chromosome comprising P190 BCR/ABL in chronic myeloid leukemia blast crisis. *Int J Hematol.* 2011;93:806-810. IF 1.324
- 84) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Ogawa Y, Seishima M, Hirose Y, Moriwaki H. Myelofibrosis successfully treated with prednisolone in a patient with pachydermoperiostosis. *Int Med.* 2011;50:2207-2211. IF 1.037
- 85) Takata K, Okada H, Ohmiya N, Nakamura S, Kitadai Y, Tari A, Akamatsu T, Kawai H, Tanaka S, Araki H, Yoshida T, Okumura H, Nishisaki H, Sagawa T, Watanabe N, Arima N, Chayama K, Hayes CN, Yoshioka K, Moriwaki H, Okanoue T, Sakisaka S, Takehara T, Oketani M, Toyota J, Izumi N, Hiasa Y, Matsumoto A, Nomura H, Seike M, Ueno Y, Yotsuyanagi H, Kumada H. Factors predictive of sustained virological response following 72 weeks of combination therapy for genotype 1b hepatitis C. *J Gastroenterol.* 2011;46:545-555. IF 3.610
- 86) Tatsukawa H, Sano T, Fukaya Y, Ishibashi N, Watanabe M, Okuno M, Moriwaki H, Kojima S. Dual induction of caspase 3- and transglutaminase-dependent apoptosis by acyclic retinoid in hepatocellular carcinoma cells. *Mol Cancer.* 2011;10:4. IF 3.779
- 87) Hatano Y, Hirose Y, Matsunaga K, Kito Y, Yasuda I, Moriwaki H, Osada S, Yoshida K, Hara A. Combined adenomatoid tumor and well differentiated papillary mesothelioma of the omentum. *Pathology International.* 2011;61:681-685.
- 88) Takatsu N, Nakamura M, Yanai S, Kaya H, Morito T, Sato Y, Moriwaki H, Sakamoto C, Niwa Y, Goto H, Chiba T, Matsumoto T, Ennishi D, Kinoshita T, Yoshino T. Primary gastrointestinal follicular lymphoma involving the duodenal second portion is a distinct entity: a multicenter, retrospective analysis in Japan. *Cancer Sci.* 2011;102:1532-1536. IF 3.846
- 89) Hassanein MK, Suetsugu A, Saji S, Moriwaki H, Bouvet M, Moossa AR, Hoffman RM. Stem-like and non-stem human pancreatic cancer cells distinguished by morphology and metastatic behavior. *J Cell Biochem.* 2011;112:3549-3554. IF 3.122
- 90) Nishiwaki S, Araki H, Fang JC, Hayashi M, Takada J, Iwashita M, Tagami A, Hatakeyama H, Hayashi T, Maeda T, Saito K. Retrospective analyses of complications associated with transcutaneous

- replacement of the percutaneous gastrostomy and jejunostomy feeding devices. *Gastrointest Endosc.* 2011;74:784-791. IF 5.647
- 91) Nishiwaki S, Inamoto Y, Imamura M, Tsurumi H, Hatanaka K, Kawa K, Suzuki R, Miyamura K. Reduced-intensity versus conventional myeloablative conditioning for patients with Philadelphia chromosome-negative acute lymphoblastic leukemia in complete remission. *Blood.* 2011;117:3698-3699. IF 10.558
- 92) Kimura K, Sekiguchi S, Hayashi S, Hayashi Y, Hishima T, Nagaki M, Kohara M. Role of interleukin-18 in intrahepatic inflammatory cell recruitment in acute liver injury. *J Leukocyte Biol.* 2011;89:433-442. IF 4.695
- 93) Isayama H, Yasuda I, Ryozaawa S, Maguchi H, Igarashi Y, Matsuyama Y, Katanuma A, Hasebe O, Irisawa A, Itoi T, Mukai H, Arisaka Y, Okushima K, Uno K, Kida M, Tamada K. Results of a Japanese multicenter randomized trial of endoscopic stenting for non-resectable pancreatic head cancer (JM-TEST): Covered Wallstent versus Double layer stent. *Dig Endosc.* 2011;23:310-315. IF 0.946
- 94) Sun-Young Lee, Yasuda K, Yasuda I, Lawrence Ky Ho, Su-Young Ahn, Tae Yoon Lee, Chan Sup Shim. Different managements for esophageal epithelial neoplasms between the Japanese, Singaporean, and Korean endoscopists. *The Korean Journal of Helicobacter and Upper Gastrointestinal Research.* 2011;11:59-64.
- 95) Itoi T, Yasuda I, Doi S, Mukai T, Kurihara T, Sofuni A. Endoscopic hemostasis using covered metallic stent placement for uncontrolled post-endoscopic sphincterotomy bleeding. *Endoscopy.* 2011;43:369-372. IF 6.096

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：森脇久隆，研究分担者：岡野幸雄，田中卓二，小嶋聡一，西口修平，清水雅仁；科学研究費補助金特定領域研究：核内受容体蛋白を分子標的とした肝癌化学予防に関する研究：平成 17－21 年度；82,400 千円(16,300：16,300：16,300：17,100：16,400 千円)
- 2) 研究代表者：永木正仁，研究分担者：大澤陽介，末次 淳；科学研究費補助金基盤研究(C)：核内受容体および受容体型チロシンキナーゼを標的分子とした癌化学予防に関する研究：平成 20－22 年；3,500 千円(1,100：1,000：1,400 千円)
- 3) 研究代表者：足立政治；科学研究費補助金若手研究(B)；脂質ラフトを標的とした EGCG による大腸癌予防の研究；平成 20－21 年度；3,100 千円(1,600：1,500 千円)
- 4) 研究代表者：大澤陽介；科学研究費補助金若手研究(B)：慢性肝障害におけるクッパー細胞の役割に関する研究；平成 21－22 年度；3,100 千円(1,500：1,500 千円)
- 5) 研究代表者：坪内博仁，研究分担者：森脇久隆；厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業)：難治性の肝・胆道疾患に関する調査研究；平成 21－23 年度；1,300 千円(500：400：400 千円)
- 6) 研究代表者：本多政夫，研究分担者：森脇久隆；厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)：肝がんの新規治療法にかんする研究；平成 21－23 年度；6,000 千円(2,000：2,000：2,000 千円)
- 7) 研究代表者：鈴木一幸，研究分担者：森脇久隆；厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)：肝硬変を含めたウイルス性肝疾患の治療の標準化に関する研究；平成 21－22 年度；2,000 千円(1,000：1,000 千円)
- 8) 研究代表者：熊田博光，研究分担者：森脇久隆；厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)：肝硬変を含めたウイルス性肝疾患の治療の標準化に関する研究；平成 21 年度；2,000 千円
- 9) 研究代表者：玉井 浩，研究分担者：森脇久隆；脂溶性ビタミン脂溶性ビタミン総合研究委員会：核レチノイド受容体蛋白を分子標的としたがん化学予防に関する研究；平成 21－23 年度；450 千円(150：150：150 千円)
- 10) 研究代表者：中村祐輔，研究分担者：森脇久隆；科学研究費補助金新学術領域研究：がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動；平成 22－26 年度；31,400 千円(16,400：15,000 千円)
- 11) 研究代表者：森脇久隆，研究分担者：清水雅仁；科学研究費補助金基盤研究(C)：核内受容体 RXR を分子標的とした合成レチノイド併用肝発癌化学予防に関する研究；平成 21－23 年度；3,500 千円(1,300：1,100：1,100 千円)
- 12) 研究代表者：永木正仁，研究分担者：大澤陽介，森脇久隆；科学研究費補助金基盤研究(C)：転写制御因子 HNF-4 を応用した肝再生療法の確立と肝不全治療システムの構築；平成 20－22 年度；3,500 千円(1,100：1,000：1,400 千円)
- 13) 研究代表者：白鳥義宗，研究分担者：森脇久隆；科学研究費補助金基盤研究(C)：次世代型電子カルテシステムによる癌診療工程のプロセス解析とその最適化；平成 20－22 年度；3,500 千円(1,500：

1,100 : 900 千円)

- 14) 研究代表者：清水雅仁；科学研究費補助金若手研究(B)：肥満に関連した分子異常を標的とした消化器発癌予防に関する研究；平成 22-23 年度；3,000 千円(1,600 : 1,400 千円)
- 15) 研究代表者：熊田博光，研究分担者：森脇久隆；厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)：ウイルス性肝炎における最新の治療法の標準化を目指す研究；平成 22-23 年度；5,000 千円(2,500 : 2,500 千円)
- 16) 研究分担者：清水雅仁；厚生労働科学研究費補助金(第 3 次がん総合戦略研究事業)：がん化学予防の研究開発とその臨床応用に関する研究；平成 22-23 年度；5,000 千円(2,500 : 2,500 千円)
- 17) 研究代表者：白鳥義宗，研究分担者：森脇久隆；科学研究費補助金基盤研究(C)：次世代型電子カルテシステムを用いた医療の質改善のためのプロセス解析手法の開発；平成 23 年度；1,700 千円
- 18) 研究代表者：安田一郎，研究分担者：小澤 修，足立政治；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：膵がんに対する Gemcitabine の作用発現における HSP27 の役割；平成 23-25 年度；3,900 千円(1,500 : 1,400 : 1,000 千円)
- 19) 研究代表者：森脇久隆；厚生労働科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業)：ウイルス性肝疾患患者の食事・運動療法とアウトカム評価に関する研究；平成 23 年度；28,500 千円

2) 受託研究

- 1) 森脇久隆：核レチノイド受容体蛋白を分子標的としたがん化学予防に関する研究；平成 18-21 年度；600 千円；(150 : 150 : 150 : 150 千円)：脂溶性ビタミン
- 2) 森脇久隆，清水雅仁：肥満関連肝発癌における合成レチノイドの予防効果；平成 20-21 年度；200 千円(100 : 100 千円)：興和創薬
- 3) 森脇久隆，小嶋聡一：肝疾患の分子病態解明に基づく新規治療・予防法の確立；平成 18-21 年度；300 千円(100 : 100 : 100 千円)：理化学研究所
- 4) 森脇久隆：RXR α 遺伝子改変マウスを用いた非環式レチノイド標的遺伝子の解析；平成 22 年度；1,000 千円(内，230 千円間接経費)：興和(株)
- 5) 森脇久隆，小嶋聡一：肝疾患の分子病態解明に基づく新規治療・予防法の確立；平成 22-23 年度；220 千円 (110 : 110 千円) (内，10 千円間接経費)：理化学研究所

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

森脇久隆：

- 1) 日本内科学会評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会財団評議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会評議員(～現在)
- 4) 日本ビタミン学会理事(～現在)
- 5) 日本臨床代謝学会評議員(～現在)
- 6) 日本癌学会評議員(～現在)
- 7) 日本栄養食糧学会評議員(～現在)
- 8) 日本静脈経腸栄養学会監事(～現在)
- 9) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)

永木正仁：

- 1) 日本内科学会支部評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会評議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会評議員(～現在)
- 4) 日本人工臓器学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床分子医学会評議員(～現在)

- 6) 日本再生医療学会評議員(～現在)
- 7) 岐阜県内科医会監事(～現在)

鶴見 寿 :

- 1) 日本臨床血液学会評議員(～現在)
- 2) 日本血液学会代議員(～現在)
- 3) 日本輸血学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)
- 5) 日本内科学会支部評議員(～現在)

荒木寛司 :

- 1) 日本消化器病学会評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会支部評議員(～現在)
- 3) 日本消化器内視鏡学会学術評議員(～現在)
- 4) 日本門脈圧亢進症学会評議員(～現在)

安田一朗 :

- 1) 日本消化器内視鏡学会学術評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会評議員(～現在)
- 3) 日本胆道学会評議員(～現在)
- 4) 日本内科学会支部評議員(～現在)

清水雅仁 :

- 1) 日本消化器病学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本肝臓学会西部会評議員(～現在)

2) 学会開催

森脇久隆 :

- 1) 第2回日本静脈経腸栄養学会東海支部学術集会(平成21年3月, 岐阜)

3) 学術雑誌

森脇久隆 :

- 1) 日本内科学会誌(英文); 査読委員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会誌(英文); 編集委員(～現在)
- 3) 日本静脈経腸栄養学会誌; 編集委員(～現在)

永木正仁 :

- 1) 日本肝臓学会英文誌; 編集委員(～現在)

鶴見 寿 :

- 1) Trends in Hematological Malignancies; 編集アドバイザー(2009年～現在)
- 2) International Journal of Hematology; 査読委員(～現在)

安田一朗 :

- 1) 肝胆膵治療研究会誌; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森脇久隆 :

- 1) 第12回日本病態栄養学会学術集会(平成21年1月, 京都, シンポジウムI 司会)
- 2) 第24回日本静脈経腸栄養学会(平成21年1月, 鹿児島, 要望演題 座長)
- 3) 第45回日本肝臓学会総会(平成21年6月, 神戸, ハイライトレクチャー 司会)
- 4) 第110回日本消化器病学会東海支部例会(平成21年6月, 津, 教育講演(4) 司会)
- 5) DDW2009(肝臓学会・消化吸収学会)(平成21年10月, 岐阜, ワークショップ11「肝・胆道疾患に

における栄養療法－NSTのあり方」司会)

- 6) 第96回日本消化器病学会総会(平成22年4月, 新潟, シンポジウム 座長)
- 7) 第36回日本急性肝不全研究会(平成22年5月, 山形, ワークショップ2「休肝不全新規治療法の開発とその課題」司会)
- 8) 第46回日本肝臓学会総会ランチョンセミナー(平成22年5月, 山形, 特別講演「肝がん抑制をめざしたインスリン抵抗性へのアプローチ」司会)
- 9) 第60回日本病院学会(平成22年7月, 岐阜, 特別講演4 座長)
- 10) JDDW2010(平成22年10月, 横浜, パネルディスカッション「肝臓の再生機構を考える: 今後の肝再生医療への展望」司会)
- 11) JDDW2010 ブレックファーストセミナー 2010年度 OTSUKA Award 授与式(平成22年10月, 横浜, 特別講演「肝硬変の栄養アセスメントと栄養治療」演者)
- 12) 日本レチノイド研究会第21回学術集会(平成22年11月, 大阪, ランチョンセミナー「再生医療とレチノイド」演者)
- 13) 第21回日本レチノイド研究会(平成22年11月, 大阪, ランチョンセミナー 座長)
- 14) 第26回日本静脈経腸栄養学会(平成23年2月, 名古屋, ランチョンセミナー 司会)
- 15) 第97回日本消化器病学会総会(平成23年5月, 東京, ランチョンセミナー19 座長)
- 16) 第97回日本消化器病学会(平成23年5月, 東京, ミニシンポジウム「肝臓基礎」座長)
- 17) 第37回日本急性肝不全研究会(平成23年6月, 東京, ランチョンセミナー「栄養療法からのアプローチ」演者)
- 18) JDDW2011(第15回日本肝臓学会大会)(平成23年10月, 福岡, ランチョンセミナー「肝硬変症における分岐鎖アミノ酸療法のエビデンスとメカニズム」演者)
- 19) DDW Japan2011(平成23年10月, 福岡, シンポジウム 司会)

永木正仁:

- 1) 第16回肝細胞研究会(平成21年6月, 山形, シンポジウム「臨床応用をめざした肝細胞研究の展開」演者)
- 2) 第16回肝細胞研究会(平成21年6月, 山形, シンポジウム「肝幹細胞の分化・増殖と再生のメカニズム」演者)
- 3) 第36回日本急性肝不全研究会(平成22年5月, 山形, シンポジウム「急性肝不全新規治療法の開発とその課題」基調講演「急性肝不全の病態と肝再生療法」演者)

鶴見 寿:

- 1) 第207回日本内科学会東海地方会内科専門医部会(平成21年2月, 津, 内科専門医会ディスカッサント)
- 2) The 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society(平成22年8月, 岐阜, Mini-symposium「Recent advances in hematological malignancy 1」Chairman)

荒木寛司:

- 1) 第77回日本消化器内視鏡学会総会(平成21年5月, 名古屋, ビデオシンポジウム2「ESDの手技の工夫-胃癌」演者)
- 2) 第16回日本門脈圧亢進症学会総会(平成21年9月, 郡山, シンポジウム1「食道胃静脈瘤治療の標準化をめぐる」演者)
- 3) 第79回日本消化器内視鏡学会総会(平成22年5月, 東京, パネルディスカッション1「地域の病院と連携した胃ESDの安全な導入」演者)
- 4) 第79回日本消化器内視鏡学会総会(平成22年5月, 東京, ビデオシンポジウム1「食道静脈瘤に対するEVL標準化のための手技の工夫と治療前後の検査の重要性」演者)
- 5) 第60回日本病院学会(平成22年7月, 岐阜, ランチョンセミナー11「機能性消化管障害の診断と治療」座長)
- 6) JDDW2010(平成22年10月, 横浜, ワークショップ22「Barrett食道癌のサーベイランス・治療を巡って」ESD症例におけるバレット食道癌の頻度と特徴 演者)
- 7) 第113回日本消化器病学会東海支部例会(平成22年11月, 名古屋, シンポジウム2「消化管癌の診断と治療の進歩」演者)

安田一朗：

- 1) 第17回日本消化器内視鏡学会北陸セミナー(平成21年2月, 富山, ランチョンセミナー(オリンパスメディカルシステムズ株式会社共催)演者)
- 2) 第17回日本消化器内視鏡学会北陸セミナー(平成21年2月, 富山, 実技セミナー「EUS-FNA 実技セミナー」演者)
- 3) Asia Endoscopy Future Forum 2009(平成21年2月, 箱根, Current trend on pancreatobiliary and GI stenting 司会)
- 4) Endoscopy 2009 (Live Endoscopy Workshop)(平成21年3月, クアラルンプール, 講演「GIA course : GIA assistance-EUS」演者)
- 5) Endoscopy 2009 (Live Endoscopy Workshop)(平成21年3月, クアラルンプール, Endoscopy Live Demonstrations「ERCP&EUS&EUS-FNA」演者)
- 6) Endoscopy 2009(Live Endoscopy Workshop)(平成21年3月, クアラルンプール, 講演「Endoscopy with the Champions-EUS」演者)
- 7) Endoscopy Forum Japan 2009(平成21年8月, 小樽, 基調講演 Session 3 “Stone management of the bile duct” 演者)
- 8) JDDW2009(第78回日本消化器内視鏡学会総会)(平成21年10月, 京都, 基調講演 サテライトシンポジウム12「非切除悪性胆道閉塞に対する内視鏡的ドレナージ術のトラブルシューティング～その予防策から解決策まで～」(ボストン・サイエンティフィック ジャパン株式会社共催)演者)
- 9) 第19回日本消化器内視鏡学会中国支部セミナー(平成22年1月, 下関, 講演「膵胆道疾患に対する内視鏡治療」演者)
- 10) 第20回日本消化器内視鏡学会東海セミナー(平成22年1月, 名古屋, 司会)
- 11) 第29回日本臨床細胞学会東海連合会学術集会(平成22年3月, 岐阜, 特別講演「超音波内視鏡ガイド下吸引針生検・細胞診について～内視鏡医の立場から～」演者)
- 12) 第79回日本消化器内視鏡学会総会(平成22年5月, 東京, 国際シンポジウム2「Therapeutic and「Diagnostic EUS for Pancreatobiliary Diseases -Current Practices and New Frontiers-」Endoscopic ultrasound-guided celiac plexus neurolysis and direct celiac ganglia neurolysis for pancreato-biliary cancer pain」演者)
- 13) 日本超音波医学会第83回学術集会(平成22年5月, 京都, ワークショップ1「消化器疾患におけるInterventional Sonography」指定演題「当施設におけるInterventional EUSの現状」演者)
- 14) 第79回日本消化器内視鏡学会総会(平成22年5月, 東京, ビデオワークショップ2「エキスパートに学ぶERCP関連手技のコツ」司会)
- 15) 第33回日本呼吸器内視鏡学会学術集会(平成22年6月, 横浜, 特別シンポジウム「多分野の内視鏡最前線」指定講演「縦隔病変に対する経食道的超音波内視鏡下吸引針生検(EUS-FNA)診断」演者)
- 16) 第14回国際膵臓学会・第41回日本膵臓学会大会合同会議(平成22年7月, 福岡, JPS Video Symposium 1「Cutting edge endoscopic procedures for diagnosis and treatment of pancreatic diseases」指定演題「A novel technique for treating infected pancreatic necrosis : Endoscopic necrosectomy based on the NOTES approach」演者)
- 17) Asian Pacific Disease Week 2010 (APDW 2010)(平成22年9月, Kuala Lumpur, Symposium 33「Advanced endoscopy techniques」EUS-guided celiac plexus and ganglia neurolysis 演者)
- 18) 第46回日本胆道学会学術集会(平成22年9月, 広島, イブニングセミナー 1「胆道疾患に対する内視鏡～進歩とその役割～」(オリンパスメディカルシステムズ株式会社共催)ここまで可能な内視鏡診断 演者)
- 19) Asian Pacific Disease Week 2010 (APDW 2010)(平成22年9月, Kuala Lumpur, 「Live Endoscopy」Expert panel)
- 20) JDDW オリンパスメディカルシステムズ医学特別講演(平成22年10月, 横浜, 「VisiGlide 汎用性検討の意義～医師が求めるガイドワイヤーのポイント～」演者)
- 21) EUS 2010 (17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography) (平成22年11月, 上海, 「Hands-on Training」Hands-on Trainer)
- 22) EUS 2010 (17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography) (平成22年11月, 上海, 「Live Demonstration」Demonstrator)
- 23) EUS 2010 (17th International Symposium on Endoscopic Ultrasonography) (平成22年11月, 上海, State of the Art Lecture 「EUS-guided celiac plexus neurolysis and celiac ganglia neurolysis」演者)

- 24) 第 22 回日本消化器内視鏡学会甲信越セミナー(平成 23 年 1 月, 新潟, 演者)
- 25) The 10th Korea-Japan Joint Symposium on Gastrointestinal Endoscopy(平成 23 年 3 月, Seoul, Panel (PB)「Endoscopic treatment of benign biliary stricture」演者)
- 26) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム「自己免疫性膵炎: 病因・病態」座長)
- 27) Endoscopy Forum Japan 2011(平成 23 年 7 月, 東京, Session 1「How to manage the benign bile duct stenosis」演者)
- 28) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 23 年 8 月, 名古屋, シンポジウム 1-5「新規診断技術の有効性評価: 得られたエビデンスと今後の展望 5. EUS-FNA」演者)
- 29) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会附置研究会 第 1 回超音波内視鏡下治療研究会(平成 23 年 8 月, 名古屋, ミニレクチャー「腹腔神経叢破壊術/ブロック」演者)
- 30) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 23 年 8 月, 名古屋, VTR Symposium 3「Latest advances of Interventional EUS」Chairperson)
- 31) 第 47 回日本胆道学会学術集会(平成 23 年 9 月, 宮崎, 「日本胆道学会認定指導医養成講座 2 - エキスパートの実技を学ぶ-」演者)
- 32) Asian Pacific Disease Week 2011(APDW 2011)(平成 23 年 10 月, Singapore, 「Invited Faculty」演者)
- 33) Asian Pacific Disease Week 2011(APDW 2011)(平成 23 年 10 月, Singapore, 「Endoscopy Video Forum」演者)
- 34) JDDW2010(第 82 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 23 年 10 月, 福岡, ブラックファーストセミナー「総胆管はこう攻めろ!」演者)
- 35) Asian Pacific Disease Week 2011(APDW 2011)(平成 23 年 10 月, Singapore, Symposium 16「Advances in Pancreaticobiliary Endoscopy」Chairperson)

清水雅仁:

- 1) 第 95 回日本消化器病学会総会(平成 21 年 5 月, 札幌, ワークショップ 3「大腸癌の予防」演者)
- 2) 第 95 回日本消化器病学会総会(平成 21 年 5 月, 札幌, ワークショップ 4「肝細胞癌の予防」演者)
- 3) NCKU-NHRI Hepatoma Study Group, Lecture Series on HBV-associated HCC(平成 21 年 5 月, Tainan, Taiwan, 特別講演「Strategy and Mechanism for the Prevention of Hepatocellular Carcinoma (HCC)-Phosphorylated RXR α is a Critical Target for HCC Chemoprevention-」演者)
- 4) JDDW2009(肝臓学会・消化器病学会合同)(平成 21 年 10 月, 京都, パネルディスカッション 14「肝細胞癌の集学的治療の現状と近未来的治療(分子標的治療を含めて)」演者)
- 5) 第 68 回日本癌学会学術総会(平成 21 年 10 月, 横浜, ワークショップ 23-1「Cancer prevention/chemoprevention」演者)
- 6) 第 96 回日本消化器病学会総会(平成 22 年 4 月, 新潟, シンポジウム 2「消化器癌と栄養療法」分枝鎖アミノ酸製剤 (BCAA)を用いた肥満関連肝および大腸発癌の予防 演者)
- 7) 第 46 回日本肝臓学会総会(平成 22 年 5 月, 山形, ワークショップ 5「肝発癌・進展とインスリン抵抗性」インスリン抵抗性と IGF/IGF-1 受容体シグナルを標的とした肥満関連肝発癌予防 演者)
- 8) 第 38 回日本肝臓学会東部会(平成 22 年 12 月, 東京, ランチョンセミナー2「分岐鎖アミノ酸(BCAA)によるインスリン抵抗性改善と肝発癌抑制」演者)
- 9) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 新潟, ワークショップ 7「Steatohepatitis の病態〜その多様性と相同性〜」演者)
- 10) がん予防大会 2011 京都(平成 23 年 6 月, 京都, シンポジウム「がん予防戦略の最前線」演者)
- 11) JDDW2011(第 53 回日本消化器病学会大会)(平成 23 年 10 月, 福岡, ワークショップ 18「消化器疾患における probiotics と機能性食品の有用性」演者)
- 12) 第 70 回日本癌学会学術総会(平成 23 年 10 月, 名古屋, 「Hepatocellular cancer (2)」座長)

中島賢憲:

- 1) 第 38 回肝胆膵治療研究会(平成 21 年 3 月, 名古屋, シンポジウム「胆膵領域における生検診断」演者)
- 2) 第 77 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 21 年 5 月, 名古屋, シンポジウム 8「慢性膵炎に対する最新の治療」演者)

- 3) 第 77 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 21 年 5 月, 名古屋, ワークショップ 5「胆道における内視鏡観察の進歩」演者)
- 4) 第 45 回日本胆道学会学術集会(平成 21 年 9 月, 幕張, ワークショップ 3「胆道疾患における最新画像診断とその応用: 三次元画像診断から内視鏡まで」演者)
- 5) 第 14 回国際膵臓学会・第 41 回日本膵臓学会大会合同会議(平成 22 年 7 月, 福岡, JPS Symposium 2「Translational research for future therapy of pancreatic cancer」 「The function of Rho-kinase in human pancreatic cancer growth」演者)
- 6) 第 41 回肝胆膵治療研究会(平成 22 年 8 月, 名古屋, シンポジウム「肝胆膵疾患における診断と治療の工夫」感染性膵壊死に対する内視鏡治療-NOTES アプローチによる内視鏡的壊死巣除去術の実際 - 演者)
- 7) JDDW2010(第 80 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 22 年 10 月, 横浜, シンポジウム 18「NOTES -安全な臨床応用に向けての取り組み」感染性膵壊死に対する経消化管的内視鏡的ドレナージ・壊死巣除去術 演者)
- 8) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 23 年 8 月, 名古屋, ワークショップ 2 「NOTES 関連手技の開発と展望」演者)

白木 亮 :

- 1) 第 12 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 21 年 1 月, 京都, シンポジウム I「癌と栄養療法」演者)
- 2) JDDW2009(肝臓学会・消化吸収学会)(平成 21 年 10 月, 京都, ワークショップ 11「肝・胆道疾患における栄養療 -NST のあり方合同」演者)
- 3) 第 13 回日本病態栄養学会年次学術集会(平成 22 年 1 月, 京都, シンポジウム I「肥満と消化器がん」肥満を伴う肝細胞癌のアミノ酸療法の基礎と臨床 演者)
- 4) 第 3 回日本静脈経腸栄養学会中国支部学術集会(平成 22 年 12 月, 山口, ランチョンセミナー 演者)
- 5) 第 18 回日本門脈圧亢進症学会総会(平成 23 年 9 月, 福岡, ランチョンセミナー4「門脈圧亢進症と栄養管理」演者)
- 6) JDDW 2011(消化器病学会・肝臓学会・消化器外科学会・消化吸収学会合同)(平成 23 年 10 月, 福岡, シンポジウム 8「消化器疾患における栄養マネジメント」演者)

井深貴士 :

- 1) 第 77 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 21 年 5 月, 名古屋, シンポジウム 5 : 小腸微細病変の診断と治療)演者)
- 2) JDDW2010(第 80 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 22 年 10 月, 横浜, ワークショップ 36「小腸腫瘍性病変への内視鏡的アプローチ」当科におけるダブルバルーン小腸内視鏡検査と腫瘍性病変に関する検討(悪性リンパ腫を中心に) 演者)

岩田圭介 :

- 1) 第 38 回肝胆膵治療研究会(平成 21 年 3 月, 名古屋, シンポジウム「胆膵領域における生検診断」演者)
- 2) 第 95 回日本消化器病学会総会(平成 21 年 5 月, 札幌, ワークショップ 6「消化器癌と緩和医療」演者)
- 3) 第 77 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 21 年 5 月, 名古屋, ビデオシンポジウム 6「胆膵内視鏡治療の工夫」演者)
- 4) JDDW2009(第 78 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 21 年 10 月, 京都, ワークショップ 27「Interventional EUS のコツ」演者)
- 5) JDDW2010(第 80 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 22 年 10 月, 横浜, シンポジウム 25「Interventional EUS の評価」超音波内視鏡下腹腔神経叢ブロック(EUS-CPN)と腹腔神経節ブロック(EUS-CGN) 演者)
- 6) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム「膵疾患に対する内視鏡治療の工夫」演者)
- 7) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 23 年 8 月, 名古屋, パネルディスカッション 6「胆膵内視鏡の基本」演者)

向井 強 :

- 1) 第 45 回日本胆道学会学術集会(平成 21 年 9 月, 幕張, パネルディスカッション 3「悪性胆管狭窄に対する胆道ドレナージの新展開」 演者)
- 2) JDDW2009(第 78 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 21 年 10 月, 京都, パネルディスカッション 16「肝門部悪性胆道狭窄に対するステンティングの現状と工夫」 演者)
- 3) 第 96 回日本消化器病学会総会(平成 22 年 4 月, 新潟, パネルディスカッション 3「消化器ステント治療の進歩と現状」非切除肝門部悪性胆道狭窄に対する Metallic stent の Axial Force の違いによる治療成績の比較 演者)
- 4) 第 79 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 22 年 5 月, 東京, 特別シンポジウム コンセンサス 2010 ②「胆道ステントの適応と選択ー標準化を目指してー」現時点における非切除悪性胆道狭窄に対する胆道ステントの合理的な選択 演者)
- 5) 第 79 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 22 年 5 月, 東京, ビデオワークショップ 2「エキスパートに学ぶ ERCP 関連手技のコツ」胆道 Metallic stent を用いた内視鏡治療の実際ーMS 留置と閉塞時治療のコツー 演者)
- 6) 第 28 回日本 Metallic stent & Grafts 研究会(平成 22 年 5 月, 東京, シンポジウム 6「肝門部狭窄のステント留置: 経皮か? 経乳頭か?」非切除悪性肝門部胆道狭窄に対する胆道内瘻術の検討ー内視鏡的アプローチの利点についてー 演者)
- 7) 第 46 回日本胆道学会学術集会(平成 22 年 9 月, 広島, ビデオワークショップ 2「私が薦める胆道内視鏡のコツ~安全性を目指して~」切除不能肝門部悪性胆道狭窄に対する MS 留置と閉塞時治療のコツ 演者)
- 8) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム「胆道狭窄の治療」 演者)
- 9) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 23 年 8 月, 名古屋, シンポジウム 2-3 「治療内視鏡の有効性評価: 得られたエビデンスと今後の展望 3. EST, ERBD」 演者)
- 10) JDDW2010(第 53 回日本消化器病学会大会・第 82 回日本消化器内視鏡学会総会・第 9 回日本消化器外科学会合同)(平成 23 年 10 月, 福岡, パネルディスカッション 6「非切除胆道癌の治療のコンセンサス」 演者)

岩砂淳平 :

- 1) 第 95 回日本消化器病学会総会(平成 21 年 5 月, 札幌, シンポジウム 5「メタボリック症候群と消化器癌」 演者)

岩下拓司 :

- 1) 第 77 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 21 年 5 月, 名古屋, シンポジウム 4「EUS による診断・治療の新展開」 演者)

上村真也 :

- 1) 第 77 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 21 年 5 月, 名古屋, プレナリー7 演者)

小木曾富生 :

- 1) 第 35 回日本急性肝不全研究会(平成 21 年 6 月, 神戸, シンポジウム「肝炎劇症化と肝再生不全: 阻止は可能か?」 演者)
- 2) JDDW2010(第 80 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 22 年 10 月, 横浜, シンポジウム 20「EMR, ESD の課題ー安全確実な内視鏡医療の提供に向けてー」胃病変に対する内視鏡的粘膜下層剥離術における CO₂ 送気の安全性, 有効性についての検討 演者)

伊藤弘康 :

- 1) The 9th World Congress on Inflammation(平成 21 年 7 月, 東京, Workshop 4「Inflammatory Diseases Caused by Infection」 演者)

土井晋平 :

- 1) 第 45 回日本胆道学会学術集会(平成 21 年 9 月, 幕張, ビデオワークショップ 5「胆道疾患に対する内視鏡診断の進展」 演者)
- 2) 第 46 回日本胆道学会学術集会(平成 22 年 9 月, 広島, シンポジウム 1「総胆管結石治療の現状と問

題点－再発メカニズムとその対策－」総胆管結石截石後胆嚢摘出術施行例を対象とした EST/EPBD の長期予後 演者)

- 3) JDDW2010(第 80 回日本消化器内視鏡学会総会)(平成 22 年 10 月, 横浜, シンポジウム 26 「胆石症を巡る新しいコンセンサスと展望」総胆管結石に対する EST と EPBD の長期予後の比較 演者)
- 4) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 23 年 8 月, 名古屋, VTR シンポジウム 4 「悪性胆道狭窄に対する経乳頭的アプローチ」演者)
- 5) 第 81 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 23 年 8 月, 名古屋, VTR Symposium 3「Latest advances of Interventional EUS」演者)
- 6) 第 47 回日本胆道学会学術集会(平成 23 年 9 月, 宮崎, ランチョンセミナー5「経口胆道鏡の新時代～SpyGlass を用いた診療の可能性～」演者)
- 7) JDDW2010(第 53 回日本消化器病学会大会・第 82 回日本消化器内視鏡学会総会・第 9 回日本消化器外科学会合同)(平成 23 年 10 月, 福岡, パネルディスカッション 7 「EUS-FNA 関連の手技と工夫(ビデオ)」演者)

大澤陽介 :

- 1) JDDW2009(第 13 回日本肝臓学会大会)(平成 21 年 10 月, 京都, ワークショップ 3「免疫担当細胞異常からみた肝疾患の動態」演者)
- 2) JDDW2010(第 14 回日本肝臓学会大会)(平成 22 年 10 月, 横浜, パネルディスカッション「肝臓の再生機構を考える:今後の肝再生医療への展望」肝細胞死と肝再生・肝線維化連携機構における Kupffer 細胞の役割 演者)
- 3) JDDW2011(第 15 回日本肝臓学会大会)(平成 23 年 10 月, 福岡, シンポジウム 14 「代謝性・遺伝性肝疾患研究の進歩」演者)

大西隆哉 :

- 1) 第 79 回日本消化器内視鏡学会総会(平成 22 年 5 月, 東京, パネルディスカッション 5-2 「超高齢者に対する内視鏡治療-胆膵-」高齢者に対する ERCP 関連処置 演者)
- 2) JDDW2010(第 52 回日本消化器病学会大会)(平成 22 年 10 月, 横浜, パネルディスカッション 5 「自己免疫性膵炎の治療と予後」自己免疫性膵炎の治療と予後 演者)
- 3) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム 「自己免疫性膵炎:診断と治療」演者)

足立政治 :

- 1) 第 14 回国際膵臓学会・第 41 回日本膵臓学会大会合同会議(平成 22 年 7 月, 福岡, JPS Symposium 2 「Translational research for future therapy of pancreatic cancer」 「Heat shock protein 90 inhibitors as a possible new candidate for the treatment of human pancreatic cancer」演者)
- 2) JDDW2011(第 53 回消化器病学会大会)(平成 23 年 10 月, 福岡, パネルディスカッション 10 「消化器疾患における分子標的治療」演者)

大島靖弘 :

- 1) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム 「胆道疾患の診断」演者)

小野木章人 :

- 1) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム 演者)

寺倉陽一 :

- 1) JDDW2011(第 15 回日本肝臓学会大会)(平成 23 年 10 月, 福岡, シンポジウム 15 「肝硬変患者の栄養マネージメント, 治療」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 武藤泰敏, 森脇久隆 : [Hepatology Research] Highest Citation 賞(平成 22 年度)
- 2) 境 浩康 : 平成 22 年度 「Liver Forum in Kyoto」研究奨励金(平成 22 年度)
- 3) 清水雅仁 : 第 13 回 AJINOMOTO Award 優秀研究賞(平成 23 年度)

9. 社会活動

森脇久隆：

- 1) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会座長(～現在)
- 3) 岐阜県がん対策推進協議会座長(～現在)
- 4) 岐阜県エイズ対策推進協議会座長(～現在)
- 5) 岐阜県医療審議会委員(～現在)
- 6) 岐阜県人権懇話会委員(～現在)

永木正仁：

- 1) 岐阜県肝炎治療審査委員会委員(～現在)
- 2) 都道府県肝疾患診療連携拠点病院間連絡協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県社会福祉審議会委員(平成 21 年度～現在)
- 4) 岐阜市社会福祉審議会委員(平成 21 年度～現在)

鶴見 寿：

- 1) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県エイズ対策推進協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 森脇久隆, 永木正仁, 小木曾富生：肝 oval cell の分化と HNF-4：厚生労働科学研究費補助金「難治性の肝疾患調査研究班」平成 20 年度研究報告書：113-114(平成 21 年)
- 2) 森脇久隆, 永木正仁, 大澤陽介：肝細胞死と肝再生・肝線維化連携機構におけるクッパー細胞の役割：厚生労働科学研究費補助金「難治性の肝疾患調査研究班」平成 21 年度研究報告書：129-130(平成 22 年)
- 3) 森脇久隆, 永木正仁, 塚田良彦：劇症肝炎における Toll-like receptor を介した免疫応答に関する研究：厚生労働科学研究費補助金「難治性の肝疾患調査研究班」平成 22 年度研究報告書(平成 22 年)

11. 報道

- 1) 森脇久隆：病院の現状：記念会館だより(2009 年 1 月 1 日)
- 2) 白木 亮：C 型肝炎講演会：朝日新聞(2009 年 1 月 15 日)
- 3) 森脇久隆：C 型肝炎 市民公開講座：中日新聞(2009 年 3 月 7, 14 日, 6 月 20 日)
- 4) 森脇久隆：難病拠点病院：中日新聞(2009 年 3 月 23 日)
- 5) 森脇久隆：骨髄移植・植樹：中日新聞(2009 年 4 月 26 日)
- 6) 永木正仁：C 型慢性肝炎 1 型高ウイルススローレスポonderに対するペグインターフェロン+リバビリン併用 96 週投与の有用性：第 45 回日本肝臓学会総会学会速報(web 版)(2009 年 6 月 5 日)
- 7) 荒木寛司：この患者をどう診断するか 167 6 ヶ月続く原因不明の下痢, 低蛋白血症, 体重減少を呈した症例：クリニシアン 56 巻：50-51, 94-96(2009 年 8 月 1 日)
- 8) 森脇久隆：病院の現状：記念会館だより(2009 年 9 月 1 日)
- 9) 森脇久隆：肝疾患患者さんの栄養状態と補食の意義：メディカル朝日別冊(2009 年 9 月 1 日)
- 10) 永木正仁：“沈黙の臓器” 肝臓とウイルス性肝炎：岐阜ラジオ「ラジオホームドクター」(2009 年 10 月 8 日)
- 11) 永木正仁：インターフェロン治療と医療費助成制度：岐阜ラジオ「ラジオホームドクター」(2009 年 10 月 9 日)
- 12) 永木正仁：大丈夫と思っても, 一度は検査を受けよう：中日新聞「知ろう治そう C 型肝炎」(2009 年 10 月 12 日)
- 13) 森脇久隆：肝硬変：愛知県肝友会(2009 年 11 月 25 日)
- 14) 森脇久隆, 五島光子, 白鳥義宗：最先端医療の実現を目指し, 病院スタッフと複数ベンダーが一体となってプロジェクトを推進：ProVISION(IBM)(2009 年秋号 No.63：30-37)
- 15) 永木正仁：肝疾患診療支援センターの紹介：鶴舟第 11 号(2009 年)
- 16) 鶴見 寿：がん診療連携拠点病院レポート 岐阜県におけるがん医療提供体制の充実を目指して：Ocology Epoch 08, Summer(2009 年；12-17)

- 17) Hara T, et al. RESEARCH HIGHLIGHTS, Fas determines outcome in DLBCL : Nature Reviews 2009 ; 6 : 677.
- 18) 森脇久隆 : 病院の現状 : 記念会館だより(2010年1月1日)
- 19) 森脇久隆 : 700号記念 : 県医学会報 700号 : 48-49(2010年3月1日)
- 20) 森脇久隆 : 清談会「がん予防」 : 中日新聞(2010年5月17日)
- 21) 永木正仁 : C型肝炎の新しい治療と医療費助成制度 : 中京テレビ「DON」(2010年7月26日)
- 22) 森脇久隆 : C型肝炎進歩著しい治療法 : 中日新聞(2010年8月6日)
- 23) 永木正仁 : C型肝炎の診断と病態 : 中日新聞(2010年8月6日)
- 24) 安田一朗 : 「研究室から 大学はいま」超音波付き内視鏡で安全に : 岐阜新聞(2010年10月26日)
- 25) 安田一朗 : 胆管結石の内視鏡治療の基本-排石のコツ- : Digestive News : 1-3.(2010年)
- 26) 鶴見 寿 : 地方都市における HIV/AIDS 診療の現状 : Abbott NEWS アボットニュース中部(2010年11月)
- 27) 森脇久隆 : 第一内科/内視鏡治療 : 岐阜県医師会報 No.710 : 34-35(2011年1月1日)
- 28) 森脇久隆 : 肝硬変・・・日常生活 : 静岡肝友会だより No.1024 : 1-8(2011年1月27日 : 62 : 5-6)
- 29) 森脇久隆 : 肝硬変の栄養療法 : ラジオ NIKKEI(2011年4月7日)
- 30) 森脇久隆 : 日本肝臓学会市民公開講座 : 伊豆新聞(2011年6月15日)
- 31) 荒木寛司 : 講演録 平成 23 年 1 月 23 日難病ふれあい教室「炎症性腸疾患の学習会」潰瘍性大腸炎・クローン病の最近の治療 : KNG 371 号 : 9-13(2011年6月20日発行)
- 32) 森脇久隆 : 肝炎/市民公開講座 : 中日新聞(2011年8月7日・28日)
- 33) 鶴見 寿他 : 病院の実力 岐阜編 44 がん薬物療法専門医 : 読売新聞(2011年9月4日)

12. 自己評価

評価

研究実績は外部資金獲得, 論文刊行を含め順調にあがっている。これらを踏まえ平成 24 年度日本ビタミン学会大会, 平成 25 年度日本肝臓学会西部会の誘致に成功した。

現状の問題点及びその対応策

研究人員の相対的な不足が問題である。関連病院の臨床需要にこたえることを優先しているため, 研究人員の早急な増員は難しい。

今後の展望

「研究の概要」1.に記した第Ⅲ相臨床試験は 2015 年頃キーオープンの予定であり, これを最優先の課題として進める。

(5) 血液病態学分野

1. 研究の概要

悪性リンパ腫の予後因子解析と病態に応じた治療戦略の確立、高齢者白血病の治療ならびに白血病の分化誘導療法、骨髄異形成症候群、造血幹細胞移植などが主要テーマである。

1. 悪性リンパ腫の治療戦略、特にびまん性大細胞 B 細胞性リンパ腫の層別化治療を目標に、臨床的または病理学的に予後因子解析を行っている。特に予後因子解析は、各種 TNF superfamily に属する血清サイトカインやキヌレニンおよび組織中の Indoleamine 2,3-dioxygenase (IDO) 発現、腫瘍内微小環境における FOXP3 陽性抑制性 T 細胞の発現などを検索することにより予後不良群の適格な抽出し、この群に対しては、積極的に造血幹細胞移植術を取り入れるなどの層別化治療を行っている。また B 細胞リンパ腫のみならず T 細胞リンパ腫においても、各種治療を臨床試験として行っている。

2. 白血病の中でも急性前骨髄球性白血病に対する分化誘導療法としてのレチノイド療法の機序と耐性発現の解明を行い、耐性克服法を開発する研究を進めている。最近では、各種合成レチノイドのみならず、ビタミン K2 などにも注目している。高齢者白血病では、若年者とは異なる方法を用いて QOL を考慮した治療戦略を考案しているが、その基礎的メカニズムを含めて臨床研究を遂行している。

3. 骨髄異形成症候群の IDO 発現などを中心に免疫疫学的病態を解明し、各種免疫抑制剤や IDO 阻害剤による治療法の開発を行っている。

2. 名簿

教授(併任)： 森脇久隆 Hisataka Moriwaki
准教授： 鶴見 寿 Hisashi Tsurumi

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 鶴見 寿, 原 武志. 慢性好中球性白血病(CNL): 阿倍達生編. 造血器腫瘍アトラス-形態, 免疫, 染色体と遺伝子-第 4 版, 東京: 日本医事新報社; 2009 年: 231-234.
- 2) 鶴見 寿, 原 武志. 高齢者 AML に対する G-CSF 併用低用量 Ara-C/VP-16 療法(AVG 療法): 阿倍達生編. 造血器腫瘍アトラス-形態, 免疫, 染色体と遺伝子-第 4 版, 東京: 日本医事新報社; 2009 年: 461-464.
- 3) 鶴見 寿. 血液の病気: 山本眞由美監修. 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理, 岐阜: 岐阜新聞社; 2009 年: 118-123.
- 4) 鶴見 寿. 性感染症とエイズ: 山本眞由美監修. 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理, 岐阜: 岐阜新聞社; 2009 年: 178-185.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 鶴見 寿. 造血器腫瘍のバイオマーカー -特に悪性リンパ腫における血清マーカーを中心に-, 血液フロンティア 2010 年; 20 巻: 991-997.
- 2) 鶴見 寿. Frontier Discussion 非ホジキンリンパ腫の治療-ピラルビシンの位置づけ-, 血液フロンティア 2010 年; 20 巻: 1212-1219.
- 3) 鶴見 寿. 学会印象記 第 50 回日本リンパ網内系学会総会, 血液フロンティア 2010 年; 20 巻: 1914-1916.
- 4) 鶴見 寿. 専門医へ紹介するタイミング リンパ腫・多発性骨髄腫の疑い, medicina 2011 年; 48 巻: 1758-1761.
- 5) 鶴見 寿. 悪性リンパ腫のバイオマーカー, 成人病と生活習慣病 2011 年; 41 巻: 1094-1098.
- 6) 鶴見 寿. 誰もが知っておくべき HIV/AIDS の基礎知識, HIV 感染者の手術, 治療 2011 年; 93 巻: 2262-2265.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 今井健二, 高井光治, 小木曾英介, 渡部直樹, 岩砂淳平, 清水雅仁, 内木隆文, 安田一朗, 荒木寛司, 鶴見寿, 永木正仁, 森脇久隆. 進行肝細胞癌に対する cisplatin 反復肝動注療法の治療成績, 岐阜県内科医会雑誌 2009 年; 23 巻: 59-63.
- 2) 鶴見 寿他. A 56-year-old man with fever and backache persisting for 6 months. 東海支部教育セミナー

一(第6回)記録, 日本内科学会雑誌 2009年;98巻:2023-2030.

- 3) 後藤英子, 後藤尚絵, 兼村信宏, 笠原千嗣, 原 武志, 鶴見 寿, 森脇久隆, 福野賢二, 高橋 健, 富田栄一, 吉川武志, 大山正巳, 山田俊樹, 澤田道夫. 後天性血友病(後天性凝固因子インヒビターによる出血傾向)の臨床的検討, 岐阜県内科医会雑誌 2010年;24巻:93-99.

原著 (欧文)

- 1) Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Yamada T, Sawada M, Goto H, Fukuno K, Kitagawa JI, Yasuda I, Katsumura N, Takemura M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble Fas level determines clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP and R-CHOP. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2009;135:1421-1428. IF 2.485
- 2) Shimizu M, Shirakami Y, Iwasa J, Shiraki M, Yasuda Y, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Supplementation with branched-chain amino acids inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in male C57BL/KsJ-*db/db* mice. *Clin Cancer Res.* 2009;15:3068-3075. IF 7.338
- 3) Tatebe H, Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Yasuda Y, Tsurumi H, Moriwaki H. Acyclic retinoid synergises with valproic acid to inhibit growth in human hepatocellular carcinoma cells. *Cancer Lett.* 2009;285:210-217. IF 4.864
- 4) Shirakami Y, Shimizu M, Adachi S, Sakai H, Nakagawa T, Yasuda Y, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate suppresses the growth of human hepatocellular carcinoma cells by inhibiting activation of the vascular endothelial growth factor-vascular endothelial growth factor receptor axis. *Cancer Sci.* 2009;100:1957-1962. IF 3.846
- 5) Yasuda Y, Shimizu M, Sakai H, Iwasa J, Kubota M, Adachi S, Osawa Y, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate prevents carbon tetrachloride-induced rat hepatic fibrosis by inhibiting the expression of the PDGFR β and IGF-1R. *Chem Biol Interact.* 2009;182:159-164.
- 6) Goto H, Hara T, Tsurumi H, Tanabashi S, Moriwaki H. Chronic neutrophilic leukemia with congenital robertsonian translocation successfully treated with allogeneic bone marrow transplantation in a young man. *Int Med.* 2009;48:563-567. IF 1.037
- 7) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Oyama M, Moriwaki H. Pure erythroid leukemia with hemophagocytosis. *Int Med.* 2009;48:1695-1698. IF 1.037
- 8) Hara T, Tsurumi H, Kasahara S, Ogawa K, Takada J, Imai K, Takai K, Kitagawa J, Kiyama S, Imai N, Oyama M, Takami T, Moriwaki H. Long-term survival of a patient with splenic angiosarcoma after resection, high-dose chemotherapy, and autologous peripheral blood stem cell transplantation. *Int Med.* 2010;49:2253-2257. IF 1.037
- 9) Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Yasuda Y, Kubota M, Adachi S, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits growth and activation of the VEGF/VEGFR axis in human colorectal cancer cells. *Chem Biol Interact.* 2010;185:247-252.
- 10) Yoshikawa T, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Hoshi M, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Ito H, Takemura M, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum concentration of L-kynurenine predicts the clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Eur J Haematol.* 2010;84:304-309. IF 2.785
- 11) Goto N, Hara T, Tsurumi H, Ogawa K, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Yamada T, Shimizu M, Nakamura M, Matsuura K, Moriwaki H. Efficacy and safety of micafungin for treating febrile neutropenia in hematological malignancies. *Am J Hematol.* 2010;85:872-876. IF 3.576
- 12) Yasuda Y, Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Kubota M, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Pitavastatin inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ-*db/db* obese mice. *Cancer Sci.* 2010;101:1701-1707. IF 3.846
- 13) Iwasa J, Shimizu M, Shiraki M, Shirakami Y, Sakai H, Terakura Y, Takai K, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Dietary supplementation with branched-chain amino acids suppresses diethylnitrosamine-induced liver tumorigenesis in obese and diabetic C57BL/KsJ-*db/db* mice. *Cancer Sci.* 2010;101:460-467. IF 3.846
- 14) Ninomiya S, Fukuno K, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Yamada T, Tsurumi H, Moriwaki H. IgG type multiple myeloma and concurrent IgA type monoclonal gammopathy of undetermined significance complicated by necrotizing skin ulcers due to type I cryoglobulinemia. *J Clin Exp Hematop.* 2010;50:71-74.
- 15) Tanaka Y, Hayashi Y, Kato J, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Kimura A, Hozumi I, Hatano Y, Hirose Y, Takami T, Nakamura H, Kasahara S, Tsurumi H, Moriwaki H, Inuzuka T. Diffuse skeletal muscles uptake of [18F] fluorodeoxyglucose on positron emission tomography in primary muscle peripheral T-cell lymphoma. *Intern Med.* 2011;50:2021-2024. IF 1.037
- 16) Kasahara S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kitagawa J, Kanemura N, Yoshikawa T, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Phase II study of the tetrahydropyranyl adriamycin-cyclophosphamide, vincristine, and prednisolone regimen combined with rituximab as first-line treatment for elderly patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leuk Lymphoma.* 2011;52:629-634. IF 2.492
- 17) Goto N, Tsurumi H, Sawada M, Kanemura N, Hara T, Kasahara S, Kito Y, Takada K, Sato Y, Yoshino T,

- Moriwaki H, Takami T. Follicular variant of peripheral T-cell lymphoma mimicking follicular lymphoma: a case report with a review of the Literature. *Pathol Int.* 2011;61:326-330. IF 1.481
- 18) Goto N, Tsurumi H, Kasahara S, Kanemura N, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Sawada M, Yamada T, Takemura M, Seishima M, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum interleukin-18 level is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP or R-CHOP regimens. *Eur J Haematol.* 2011;87:217-227. IF 2.785
- 19) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Shimizu M, Moriwaki H. Cell Cycle-dependent priming action of granulocyte colony-stimulating factor (G-CSF) enhances in vitro apoptosis induction by cytarabine and etoposide in leukemia cell lines. *J Clin Exp Hematop.* 2010;50:99-105.
- 20) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Ninomiya S, Ogawa K, Adachi S, Kanemura N, Kasahara S, Shimizu M, Moriwaki H. Synergistic growth inhibition in HL-60 cells by the combination of acyclic retinoid and vitamin K(2). *J Cancer Res Clin Oncol.* 2011;137:779-787. IF 2.485
- 21) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Hoshi M, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Shimizu M, Ito H, Saito K, Hirose Y, Yamada T, Takahashi T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase in tumor tissue indicates prognosis in patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Ann Hematol.* 2011;90:409-416. IF 1.867
- 22) Ninomiya S, Kanemura N, Tsurumi H, Kasahara S, Hara T, Yamada T, Moriwaki H. Coexistence of inversion 16 and the Philadelphia chromosome comprising P190 BCR/ABL in chronic myeloid leukemia blast crisis. *Int J Hematol.* 2011;93:806-810. IF 1.324
- 23) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Ogawa Y, Seishima M, Hirose Y, Moriwaki H. Myelofibrosis successfully treated with prednisolone in a patient with pachydermoperiostosis. *Intern Med.* 2011;50:2207-2211. IF 1.037
- 24) Nishiwaki S, Inamoto Y, Imamura M, Tsurumi H, Hatanaka K, Kawa K, Suzuki R, Miyamura K. Reduced-intensity versus conventional myeloablative conditioning for patients with Philadelphia chromosome-negative acute lymphoblastic leukemia in complete remission. *Blood.* 2011;117:3698-3699. IF 10.558

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

- 1) 森脇久隆：平成 21 年度エイズ治療中核拠点病院整備事業；平成 21 年度；390 千円：岐阜県
- 2) 森脇久隆：HIV 感染者保健福祉相談事業；平成 21 年度；1,000 千円：エイズ予防財団
- 3) 森脇久隆：平成 22 年度エイズ治療中核拠点病院整備事業；平成 22 年度；350 千円：岐阜県
- 4) 森脇久隆：HIV 感染者保健福祉相談事業；平成 22 年度；1,000 千円：エイズ予防財団
- 5) 森脇久隆：平成 23 年度エイズ治療中核拠点病院整備事業；平成 23 年度；350 千円：岐阜県
- 6) 森脇久隆：HIV 感染者保健福祉相談事業；平成 23 年度；1,000 千円：エイズ予防財団

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

森脇久隆：

- 1) 日本内科学会評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会財団評議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会評議員(～現在)
- 4) 日本ビタミン学会理事(～現在)
- 5) 日本臨床代謝学会評議員(～現在)
- 6) 日本癌学会評議員(～現在)
- 7) 日本栄養食糧学会評議員(～現在)
- 8) 日本静脈経腸栄養学会監事(～現在)

- 9) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)

鶴見 寿 :

- 1) 日本臨床血液学会評議員(～現在)
- 2) 日本血液学会代議員(～現在)
- 3) 日本輸血学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)
- 5) 日本内科学会支部評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

森脇久隆 :

- 1) 日本内科学会誌(英文) ; 査読委員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会誌(英文) ; 編集委員(～現在)
- 3) 日本静脈経腸栄養学会誌 ; 編集委員(～現在)

鶴見 寿 :

- 1) Trends in Hematological Malignancies ; 編集アドバイザー(平成 21 年度～現在)
- 2) International Journal of Hematology ; 査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森脇久隆 :

- 1) 第 12 回日本病態栄養学会学術集会(平成 21 年 1 月, 京都, シンポジウム I 司会)
- 2) 第 24 回日本静脈経腸栄養学会(平成 21 年 1 月, 鹿児島, 要望演題 座長)
- 3) 第 45 回日本肝臓学会総会(平成 21 年 6 月, 神戸, ハイライトレクチャー 司会)
- 4) 第 110 回日本消化器病学会東海支部例会(平成 21 年 6 月, 津, 教育講演(4) 司会)
- 5) DDW2009(肝臓学会・消化吸収学会)(平成 21 年 10 月, 岐阜, ワークショップ 11「肝・胆道疾患における栄養療法-NST のあり方」司会)
- 6) 第 96 回日本消化器病学会総会(平成 22 年 4 月, 新潟, シンポジウム 座長)
- 7) 第 36 回日本急性肝不全研究会(平成 22 年 5 月, 山形, ワークショップ 2「体制肝不全新規治療法の開発とその課題」司会)
- 8) 第 46 回日本肝臓学会総会ランチョンセミナー(平成 22 年 5 月, 山形, 特別講演「肝がん抑制をめざしたインスリン抵抗性へのアプローチ」司会)
- 9) 第 60 回日本病院学会(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演 4 座長)
- 10) JDDW2010(平成 22 年 10 月, 横浜, パネルディスカッション「肝臓の再生機構を考える: 今後の肝再生医療への展望」司会)
- 11) JDDW2010 ブラックファーストセミナー 2010 年度 OTSUKA Award 授与式(平成 22 年 10 月, 横浜, 特別講演「肝硬変の栄養アセスメントと栄養治療」演者)
- 12) 日本レチノイド研究会第 21 回学術集会(平成 22 年 11 月, 大阪, ランチョンセミナー「再生医療とレチノイド」演者)
- 13) 第 21 回日本レチノイド研究会(平成 22 年 11 月, 大阪, ランチョンセミナー 座長)
- 14) 第 26 回日本静脈経腸栄養学会(平成 23 年 2 月, 名古屋, ランチョンセミナー 司会)
- 15) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ランチョンセミナー 19 座長)
- 16) 第 97 回日本消化器病学会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム「肝臓基礎」座長)
- 17) 第 37 回日本急性肝不全研究会(平成 23 年 6 月, 東京, ランチョンセミナー「栄養療法からのアプローチ」演者)
- 18) JDDW2011(第 15 回日本肝臓学会大会)(平成 23 年 10 月, 福岡, ランチョンセミナー「肝硬変症における分岐鎖アミノ酸療法のエビデンスとメカニズム」演者)
- 19) DDW Japan2011(平成 23 年 10 月, 岐阜, シンポジウム 司会)

鶴見 寿：

- 1) 第207回日本内科学会東海地方会内科専門医部会(平成21年2月, 津, 内科専門医会ディスカッション)
- 2) The 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society(平成22年8月, 岐阜, Mini-symposium 「Recent advances in hematological malignancy 1」 Chairman)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

森脇久隆：

- 1) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会座長(～現在)
- 3) 岐阜県がん対策推進協議会座長(～現在)
- 4) 岐阜県エイズ対策推進協議会座長(～現在)
- 5) 岐阜県医療審議会委員(～現在)
- 6) 岐阜県人権懇話会委員(～現在)

鶴見 寿：

- 1) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県エイズ対策推進協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(平成21年度～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 森脇久隆：病院の現状：記念会館だより(2009年1月1日)
- 2) 森脇久隆：C型肝炎 市民公開講座：中日新聞(2009年3月7, 14日, 6月20日)
- 3) 森脇久隆：難病拠点病院：中日新聞(2009年3月23日)
- 4) 森脇久隆：骨髄移植・植樹：中日新聞(2009年4月26日)
- 5) 森脇久隆：病院の現状：記念会館だより(2009年9月1日)
- 6) 森脇久隆：肝疾患患者さんの栄養状態と補食の意義：メディカル朝日別冊(2009年9月1日)
- 7) 森脇久隆：肝硬変：愛知県肝友会(2009年11月25日)
- 8) 森脇久隆, 五島光子, 白鳥義宗：最先端医療の実現を目指し, 病院スタッフと複数ベンダーが一体となってプロジェクトを推進：ProVISION(IBM)(2009年秋号 No.63：30-37)
- 9) 鶴見 寿：がん診療連携拠点病院レポート 岐阜県におけるがん医療提供体制の充実を目指して：Ocology Epoch 08, Summer(2009年；12-17)
- 10) 森脇久隆：骨髄移植・植樹：中日新聞(2009年4月26日)
- 11) 鶴見 寿：がん診療連携拠点病院レポート 岐阜県におけるがん医療提供体制の充実を目指して：Ocology Epoch 08, Summer(2009年；12-17)
- 12) Hara T, et al. RESEARCH HIGHLIGHTS, Fas determines outcome in DLBCL：Nature Reviews (2009;6:677)
- 13) 鶴見 寿：地方都市における HIV/AIDS 診療の現状：Abbott NEWS アボットニュース中部(2010年11月)

12. 自己評価

評価

1. 研究の概要：血液病態学1-3のいずれも、ほぼ順調に進行している。とくに下記の点を高く評価する。
 - (1) 悪性リンパ腫の予後因子解析として、新しいいくつかの予後因子を抽出できた。いずれも簡便な検査であり、再現性が高く、臨床的有用性が極めて高いと思われる。特にIDOに注目した予後因子解析は、治療ターゲットにもなる可能性があり、今後の検討が期待される。

- (2) 悪性リンパ腫に対する日本発の THP-COP 療法, R-THP-COP 療法に関する成績を国際的に公表した。
- (3) 高齢者急性骨髄性白血病や通常の標準的強力化学療法の遂行が困難な症例を対象に, 新規治療レジメンを立案, 報告した。特に G-CSF を併用するというユニークなデザインも含まれる。これらは, 全身状態不良の患者においても安全かつ有効な治療と言える。
3. 研究成果の発表: 上記(2), (3)の貢献が大きい。その他おおむね順調と評価する。
4. 研究費獲得状況: 今後, より一層の取得に向けて努力する。
5. 発明・特許出願状況: 上記治療法の開発という点で, fair と評価する。
- 6,7. 学会活動: おおむね順調と評価する。
11. 報道: おおむね順調に情報を公表できていると評価する。

現状の問題点及びその対応策

臨床の旺盛な需要に対応すべく, 人員を振り向けざるを得ない状況にある。研究スタッフとくに大学院生の充実を図る必要がある。また, 血液悪性腫瘍を含む Clinical Oncology は, 特に充実したエビデンスが望まれる分野であり, 新規治療などは単施設では限界があり, 治療の開発を目的とした臨床試験の立案には, 他施設との協力を密にした多施設共同試験が必要である。

今後の展望

1. 血液病態学: 治療抵抗性白血病および悪性リンパ腫の機序解明と, 新しい治療法開発の展開を期している。また, レベルの高い臨床試験を立案し, 多施設共同試験として積極的に進める。
3. 研究成果の発表: IF5 ならびに 10 以上を目安とし, それぞれを上回る業績の増加を目指す。
4. 研究費獲得状況: 十分な研究費獲得に向けて努力する。
5. 発明・特許出願状況: 次の展望は視野に入っていない。
- 6,7. 学会活動: 各種国際学会, 特に米国血液会議での継続的採択を目指す。

(6) 産科婦人科学分野

1. 研究の概要

癌治療における妊孕性温存が当面のテーマである。癌治療においては生命予後の改善が第一であり、従来はそのために安易に妊孕性が犠牲になってきた。しかし、近年では治療の根治性だけでなく、如何にADLを低下させないかが重要とされるようになってきている。さらに婦人科においてはもう一つ、生殖可能年齢の症例に対しては如何に妊孕性を温存し、将来の挙児希望を叶えられるかが問題となってきた。手術手技の改善と薬物による改善の可能性を追求している。

2. 名簿

教授：	森重健一郎	Ken-ichirou Morishige
講師：	伊藤直樹	Naoki Ito
講師：	古井辰郎	Tatsuro Furu
助教：	豊木 廣	Hiroshi Toyoki
助教：	早崎 容	You Hayasaki
助教：	矢野竜一朗	Ryuichirou Yano
助教：	小倉寛則	Tomonori Ogura
助教：	川島英理子	Eriko Kawashima
医員：	杉山三知代	Michiyo Sugiyama
医員：	操 暁子	Asako Misao
医員：	水野智子	Tomoko Mizuno
医員：	寺澤恵子	Keiko Terazawa
医員：	大塚祐基	Yuki Ohtsuka
医員：	市橋享子	Kyoko Ichihashi
医員	上田陽子	Yoko Ueda

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 藤本次良. 性ステロイドホルモン：永井良三，三橋直樹，綾部琢哉編. 産婦人科研修ノート，東京：診断と治療社；2009年：207-211.
- 2) 玉舎輝彦，藤本次良. 産婦人科：後藤元編. 最新・感染症治療指 2009年改訂版，大阪：医薬ジャーナル社；2009年；179-189.
- 3) 森重健一郎. D. 子宮内膜症. E. 子宮筋腫：松田暉他編. 疾病と治療Ⅲ，東京：南光堂；2010年：307-312.
- 4) 玉舎輝彦，藤本次良. 産婦人科：後藤元編. 最新・感染症治療指針 2011年改訂版，大阪：医薬ジャーナル社；2010年；203-213.

著書 (欧文)

- 1) Fujimoto J. Cervical cancers. In: Schwab M, ed. Encyclopedia of Cancer. 2nd ed. Heidelberg: Springer; 2009:594-596.

総説 (和文)

- 1) 藤本次良. 浸潤と転移，産科と婦人科 2011年；78巻：84-87.
- 2) 小倉寛則，古井辰郎，森重健一郎. 卵巣の機能性嚢胞・類腫瘍，臨床婦人科産科 2011年；65巻：603-607.
- 3) 小倉寛則，森重健一郎. 胚細胞腫瘍，臨床婦人科産科 2011年；65巻：908-913.
- 4) 森重健一郎. 更年期女性とエストロゲン，岐阜県内科医会雑誌 2011年；25巻：1-19.

総説 (欧文)

- 1) Fujimoto J. Novel strategy of anti-angiogenic therapy for uterine cervical carcinomas. Anticancer Res. 2009;29:2665-2669.
- 2) Fujimoto J, Sato E. Sex steroids in uterine endometrial cancers. Horm Mol Biol Clin Invest. 2011;5:143-151.

原著 (和文)

- 1) 丹羽憲司，操 暁子，二宮望祥，今井篤志. 化学療法前 M-CSF/G-CSF 併用療法の有用性，マクロファージフォーラム 2009年；45-47.
- 2) 丹羽憲司，玉舎輝彦. 子宮体癌治療における十全大補湯の長期予後に対する影響とMVD発現との関連，産婦人科漢方研究のあゆみ 2009年；26巻：91-92.
- 3) 山田法顕，中野志保，豊田 泉，吉村紳一，岩間 亨，古井辰郎，小倉真治. 妊娠 39週に脳梗塞を発症し血

栓溶解療法を行った1例, 日救急医学会誌 2010年; 21巻: 191-197.

- 4) 澤田健二郎, 木村 正, 森重健一郎. 卵巣刺激ホルモン(FSH), 日本臨床 2010年; 増刊第7版: 220-222.
- 5) 足立和繁, 渡辺正洋, 金山智子, 緒方誠司, 雨宮京夏, 横井 猛, 森重健一郎. 腹腔鏡手術下で腫瘍摘出を行った Growing teratoma syndrome の一例, 日本産科婦人科内視鏡学会雑誌 2011年; 26巻: 370-373.

原著 (欧文)

- 1) Alam SM, Fujimoto J, Jahan I, Sato E, Tamaya T. Coexpression of EphB4 and ephrinB2 in tumor advancement of uterine cervical cancers. *Gynecol Oncol.* 2009;114:84-88. IF 3.760
- 2) Fujimoto J, Sato E. Clinical implication of estrogen-related receptor (ERR) expression in uterine endometrial cancers. *J Steroid Biochem Mol Biol.* 2009;116:71-75. IF 2.886
- 3) Imai A, Ito N. Valid generic substitution of carboplatin for patients with gynecological cancer. *Eur J Gynaec Oncol.* 2009;4:435-436. IF 0.633
- 4) Maw MK, Fujimoto J, Tamaya T. Overexpression of inhibitor of DNA-binding (ID)-1 protein related to angiogenesis in tumor advancement of ovarian cancers. *BMC Cancer.* 2009;9:430. IF 3.153
- 5) Rong HL, Suzuki N, Imai A. A double nucleotide insertion-induced frame-shift mutation of the androgen receptor gene in a familial complete androgen insensitivity syndrome. *Eur J Obstet Gyn R B.* 2010;148:53-55. IF 1.764
- 6) Maw MK, Fujimoto J, Tamaya T. Role of inhibitor of DNA binding-1 protein is related to angiogenesis in the tumor advancement of uterine endometrial cancers. *Exp Ther Med.* 2010;1:351-356.
- 7) Suzuki N, Yamamoto A, Furui T, Imai A. GnRH receptor and peritoneal plasmin activity. *Gynecol Endocrinol.* 2010;29:669-672. IF 1.461
- 8) Suzuki N, Imai A. HMG-CoA reductase inhibitor lovastatin causes reversible cytoskeleton perturbation by RhoA signalling suppression in peritoneal cell line Met5A. *J Obstet Gynaecol.* 2010;30:404-407. IF 0.440
- 9) Kizaki R, Fujimoto J, Sato E, Tamaya T. Novel therapeutic strategy for uterine arteriovenous fistulas: case report. *Clin Exp Obstet Gyn.* 2010;37:158-160. IF 0.433
- 10) Hiei K, Takagi H, Matsunami K, Imai A. Ovarian torsion; early diagnosis by MRI to prevent irreversible damage. *Clin Exp Obstet Gyn.* 2010;37:233-234. IF 0.433
- 11) Kato H, Kanematsu M, Sato E, Ito N, Furui T, Hirose Y. Magnetic resonance imaging finding of fibroepithelial polyp of the vulva. radiological-pathological correlation. *Jpn J Radiol.* 2010;28:609-612. IF 0.487
- 12) Suzuki N, Imai A. Evidence that lack of ligand-binding domain correlates with nuclear distribution of unliganded human androgen receptor and loss of transactivation activity. *Gynecol Endocrinol.* 2011;27:940-943. IF 1.461
- 13) Kanematsu M, Watanabe H, Kondo H, Goshima S, Kato H, Furui T, Toyoki H, Morishige K. Postpartum hemorrhage in coagulopathic patients: preliminary experience with uterine arterial embolization with N-butyl cyanoacrylate. *J Vasc Interv Radiol.* 2011;22:1773-1776. IF 2.064

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 森重健一郎, 研究分担者: 伊藤直樹, 古井辰郎, 豊木 廣, 早崎 容; 学術研究助成基金助成金基盤研究(C): 卵巣癌における HIF による癌幹細胞誘導機構の解明と治療戦略への応用; 平成 23-25 年度; 4,200 千円(2,800 : 700 : 700 千円)
- 2) 研究代表者: 森重健一郎, 研究分担者: 永澤秀子, 奥田健介, 鈴木紀子; 臨床研究推進支援経費: 卵巣癌における HIF-1 をターゲットとした治療の開発; 平成 23 年度; 1,000 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

森重健一郎:

- 1) 日本産科婦人科学会代議員(平成 23 年度~現在)

- 2) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 3) 日本婦人科腫瘍学会評議員(～現在)
- 4) 東海産科婦人科学会理事(平成 22 年 3 月～現在)
- 5) 日本女性医学学会評議員(平成 23 年 11 月～現在)

伊藤直樹：

- 1) 日本婦人科腫瘍学会評議員(～現在)
- 2) 日本母性衛生学会評議員(～現在)
- 3) 東海産科婦人科学会評議員(～現在)

古井辰郎：

- 1) 日本生殖医学会中部支部評議員(～現在)
- 2) 日本生殖内分泌学会評議員(～現在)
- 3) 日本生殖医学会幹事(～平成 22 年 11 月)
- 4) 日本生殖医学会代議員(平成 22 年 11 月～現在)
- 5) 日本婦人科乳癌学会評議員(～現在)

2) 学会開催

森重健一郎：

- 1) 平成 22 年度岐阜産科婦人科学会学術集会(平成 22 年 12 月, 岐阜)
- 2) 平成 23 年度日本生殖医学会中部支部学術集会(平成 23 年 6 月, 岐阜)
- 3) 平成 23 年度岐阜産科婦人科学会学術集会(平成 23 年 12 月, 岐阜)

藤本次良：

- 1) 第 125 回東海産科婦人科学会(平成 21 年 9 月, 岐阜)
- 2) 第 126 回東海産科婦人科学会(平成 22 年 3 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森重健一郎：

- 1) 第 25 回日本更年期医学会学術集会(平成 22 年 10 月, 鹿児島, ランチョンセミナー「骨粗鬆症治療の新展開－更年期医療の立場から－」座長)
- 2) Ovarian Cancer Treatment Forum un Tokai(平成 23 年 5 月, 名古屋, 特別講演「再発卵巣癌治療における GEMZAR の位置付け」座長)
- 3) 第 124 回近畿産科婦人科学会(平成 23 年 6 月, 和歌山, アフタヌーンセミナー「卵巣癌の分子標的治療～実験室と臨床のはざままで～」演者)
- 4) 第 63 回日本産科婦人科学会学術講演会(平成 23 年 8 月, 大阪, ランチョンセミナー「インフルエンザの管理－2010～11 シーズンを振り返って－」座長)

藤本次良：

- 1) 第 18 回日本アポトーシス研究会学術集会(平成 21 年 8 月, 長崎, シンポジウム「子宮体癌の増殖進展とエストロゲン」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

森重健一郎：

- 1) 岐阜県周産期医療協議会委員(平成 22 年度～現在)
- 2) 岐阜県不妊治療者支援委員会委員長(平成 23 年度)

古井辰郎：

- 1) 岐阜県特定不妊治療助成事業施設審査担当委員(平成 21 年度～現在)
- 2) 岐阜県不妊治療者支援委員会委員(平成 23 年度)
- 3) 日本専門医制評価・認定機構研修施設訪問調査サーベイヤール(平成 23 年度)

豊木 廣：

- 1) 岐阜県医師会 STD(性感染症)実態調査委員会委員(平成 22 年度～現在)

市古 哲：

- 1) 岐阜県医師会 STD(性感染症)実態調査委員会委員(平成 21 年度)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 藤本次良：「研究室から 大学はいま」婦人科癌の新しい治療戦略：岐阜新聞(2010 年 7 月 27 日)
- 2) 森重健一郎：「研究室から 大学はいま」子宮頸がん治療後に出産を：岐阜新聞(2011 年 3 月 22 日)

12. 自己評価

評価

研究室の改変期にあたり、未だ準備段階にあるが基礎研究では、成果もあげつつある。業績では「数」より「質」を目指しているが、産科医療の危機が叫ばれている時点では「可」であろうと評価している。

現状の問題点及びその対応策

教室のマンパワーの不足が最大の問題点である。現状では、ほとんどの人手が臨床に忙殺され、研究室での作業が困難である。研修医制度がスタートして以来、年々大学院生の確保が難しくなっている。人員確保に尽力し、また現有勢力で能率的な研究時間の確保が出来るよう今まで以上に努力したい。

今後の展望

臨床科における研究は、臨床の場に還元することが前提である。そのためには、臨床家としての知識・技量に加えて、一定のレベルの基礎的な知識・手法が必要である。しかも、より高いレベルの基盤は、応用の範囲をより一層広げることが出来る。従って、大学院教育では、国際的な競争力のある研究者の養成を目指したい。

研究経験は問題解決型思考の滋養となり、ひいては高度専門職業人としての優れた臨床医を養成することに繋がろう。生命現象の根元に迫る基礎的・独創的な研究を目指したい。得られた成果や培われた思考過程・知識・手法は、医系大学の使命である難治性疾患の病因解明や新しい診断・治療方法の開発に直結し、臨床の現場への還元が期待できる。

試験管的な基礎研究の臨床応用のみならず、集積した症例の再考や他分野との共同研究にも積極的に参加したい。研究は未知へのチャレンジであるため、基礎研究・臨床研究を通じて従来の手技・手法を再考でき、より安全で確実な診断・治療を常に追求するシステム作りをしたい。

(7) 放射線医学分野

1. 研究の概要

- 1) 腹部臓器関連：腹部臓器悪性腫瘍の CT, MRI 診断, IVR 等を主な研究課題としている。特に肝がん, 膵がんの早期診断, 術前診断に関する研究ならびに緊急塞栓術, 術前塞栓術などのインターベンショナルラジオロジー (IVR) は, 特筆した業績をあげてきた。また, MDCT を駆使した仮想内視鏡 (Virtual endoscopy, CT colonography) による関する研究も成果を挙げている。
- 2) 頭頸部・中枢神経・核医学関連：耳鼻科, 口腔外科とともに頭頸部領域の悪性腫瘍鑑別診断や唾液腺機能の新しい診断法の開発を行ってきた。また, 脳神経外科学分野を主として全分野との共同の元, 脳 MRI, 脳血流 SPECT など中枢神経の画像診断・核医学の検討を行っており, 脳血流の SPECT の定量化など関する研究にも取り組んできた。
- 3) 放射線治療関連：平成 22 年に高精度放射線治療装置ノバリス Tx が導入され, 脳, 頭頸部, 体幹部の定位照射と前立腺を中心とし IMRT での照射が可能となり, 高精度照射件数も急増してきた。臨床研究とし脳, 頭頸部腫瘍の定位照射での線量分布改善を目指す照射方法の確立, 肺癌を中心とした体幹部定位照射の最適な線量分割法や有害事象軽減を目指す照射法の確立, 前立腺に対する IMRT での照射における CT-MRI 画像融合を用いた (イメージガイド放射線治療: IGRT) 最適な照射部位の設定などにつき研究, 発表を行ってきた。
- 4) CAD 関連：コンピュータによる画像診断支援システムであるコンピュータ診断支援システム (CAD) は, 再生分子統御学講座, 知能情報イメージ分野の得意とする研究分野であり, 各種臓器の機能診断, 悪性腫瘍の診断, 臨床応用に共同研究を行い, 高度な成果を挙げた。

2. 名簿

教授：	星 博昭	Hiroaki Hoshi
准教授：	兼松雅之	Masayuki Kanematsu
准教授：	林 真也	Shinya Hayashi
講師：	近藤浩史	Hiroshi Kondo
講師：	浅野隆彦	Takahiko Asano
臨床講師：	富松英人	Hideto Tomimastu
臨床講師：	加藤博基	Hiroki Kato
臨床講師：	五島 聡	Satoshi Goshima
臨床講師：	大宝和博	Kazuhiro Ohtakara
助教：	浅田修一	Syuichi Asada
医員：	櫻井幸太	Kota Sakurai
医員：	渡邊春夫	Haruo Watanabe
医員：	水野 希	Nozomi Mizuno
医員：	田中秀和	Hidekazu Tanaka
医員：	吉田麻里子	Mariko Yoshida
医員：	川田紘資	Hiroshi Kawata
医員：	大野裕美	Hiroimi Ono

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 兼松雅之編. 膵の画像診断 update2010 臨床画像, 東京: メジカルビュー社; 2010年: 26巻.
- 2) 加藤博基, 兼松雅之. 第1章肝臓: 桑鶴良平編. できる! 画像診断入門シリーズ, 腹部・骨盤画像診断のここが鑑別ポイント改訂版, 東京: 羊土社; 2011年: 42-59.
- 3) 渡邊春夫, 五島 聡, 梶田公博, 近藤浩史, 兼松雅之. 肝細胞癌治療後変化と偽病変: 特集 がん治療後変化の画像診断, 臨床画像 2011年; 27巻: 1468-1475.
- 4) 兼松雅之. 放射線画像診断と IVR 治療アップデートー小児診療を中心にー: 日本小児科医学会会報 2011; 42: 43-45.
- 5) 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. GHC カテーテルと離脱式コイル(InterlockTMFibered IDCTM Occlusion System): RadFan, 2011年; 9巻: 12-13.

著書 (欧文)

- 1) Federle, Goshima S. Use of imaging techniques to screen for hepatocellular carcinoma. In: Brian I. Carr, ed. Hepatocellular carcinoma. Diagnosis and Treatment. 2nd ed. Humana Press Inc. Oxford.

2010:349-368.

- 2) Kato H, Sakai O, ed. Cases Head and Neck Imaging (The McGraw-Hill Radiology Series). Columbus: Mc Graw-Hill Professional; 2011.
- 3) T Hayashi, H Chen, K Miyamoto, X Zhou, T Hara, R Yokoyama, M Kanematsu, H Hoshi, and H Fujita: A computerized scheme for localization of vertebral bodies on body CT scans. P in Medical Imaging 2011: Image processing, edited by Benoit M. Dawant, David R. Haynor, Proc of SPIE, 7962 (SPIE, Bellingham, WA 2011) 796238, 2011.
- 4) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. A decision support scheme for vertebral geometry on body CT scans. Proc. of SPIE Medical Imaging 2011;7962:796245-1

総説 (和文)

- 1) 柘植祐介, 近藤浩史, 五島 聡, 渡邊春夫, 兼松雅之, 梶田公博, 前田祥吾, 廣田 真, 横山龍二郎. EOB・プリモビスト造影 MRI が拓く肝腫瘍診断, 新医療 2009年; 3巻: 67-70.
- 2) 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. 造影 CT における至適造影剤投与方法を探る 肝臓における至適撮像法, 映像情報メディカル 2009年; 41巻: 732-736.
- 3) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 梶田公博, 北川輝彦, 美尾谷成貴, 周 向栄, 藤田廣志. MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用, Rad Fan 2009; 7巻: 20-22.
- 4) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 梶田公博, 北川輝彦, 美尾谷成貴, 周 向栄, 藤田廣志. MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用, INNERVISION 2009年; 24巻: 59-61.
- 5) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 梶田公博, 北川輝彦, 美尾谷成貴, 周 向栄, 藤田廣志. MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用, 映像情報メディカル 2009年; 41巻: 1012-1015.
- 6) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 加藤博基, 梶田公博, 北川輝彦, 美尾谷成貴, 周 向栄, 藤田廣志. Cine-tagging 画像を用いた肝の MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用, 断層映像研究会雑誌 2009年; 36巻: 141-148.
- 7) 近藤浩史, 五島 聡, 兼松雅之. 特集 2 基本に立ち戻って親カテーテル/ガイディングシステムを考えるーGHC カテーテルについて, Rad Fan 2009年; 7巻: 79-81.
- 8) 浅野隆彦, 兼松雅之. mnemonics(記憶術)を使おう! 頭部の記憶術, 臨床画像 2009年; 25巻: 1160-1164.
- 9) 加藤博基, 兼松雅之. mnemonics(記憶術)を使おう! 頭頸部の記憶術, 臨床画像 2009年; 25巻: 1300-1303.
- 10) 川口真平, 富松英人, 兼松雅之. mnemonics(記憶術)を使おう! 胸部の記憶術, 臨床画像 2009年; 25巻: 1422-1425.
- 11) 加藤博基, 兼松雅之, 星 博昭, 山田南星, 久世文也, 青木光広, 水田啓介, 伊藤八次, 加藤恵三, 山下知巳, 柴田敏之, 大野貴敏. 液面形成(fluid-fluid level)を示す頭頸部腫瘍の画像所見, 臨床放射線 2009年; 54巻: 1741-1751.
- 12) 五島 聡. 特集 2 RSNA2008 からトレンドをつかむ 検証! RSNA2008 私の〇と×, Rad Fan 2009年; 7巻: 71.
- 13) 兼松雅之. 肝細胞癌の診断と治療ー最新動向と将来展望ーMDCT, 臨床放射線 2009年; 54巻: 339-344.
- 14) 小島寿久, 五島 聡, 近藤浩史, 兼松雅之. 実践! 画像診断 Q&Aーこのサインを見落とすなー心窩部痛, 嘔吐にて来院した 11 歳男児, レジデントノート 2009年; 10巻: 1603-1604.
- 15) 兼松雅之. 腹部画像診断と IVR 治療アップデート, 岐阜県医師会医学雑誌 2009年; 22巻: 31-37.
- 16) 近藤浩史, 渡邊春夫, 梶田公博, 五島 聡, 兼松雅之. 上腹部領域における 3T MRI, 日本磁気共鳴医学会雑誌 2010年; 30巻: 190-197.
- 17) 五島 聡, 近藤浩史, 渡邊春夫, 兼松雅之. EOB・プリモビスト造影 MRIー肝血管腫の診断ー, 日獨医報 2010年; 55巻: 63-70.
- 18) 渡邊春夫, 五島 聡, 近藤浩史, 兼松雅之. 肝がん(肝細胞がん)の診断・治療におけるアルゴリズム 2) MRI を中心に, INNERVISION 2010年; 25巻: 5-8.
- 19) 渡邊春夫, 五島 聡, 梶田公博, 近藤浩史, 兼松雅之. 領域別に検証する 3T MRI である理由ー4. 上腹部領域 2) 睽, INNERVISION 2010年; 25巻: 27-29.
- 20) 近藤浩史, 五島 聡, 渡邊春夫, 兼松雅之. 造影 CT における至適造影剤量を探る, 映像情報メディカル 2010年; 42巻: 678-681.
- 21) 渡邊春夫, 五島 聡, 近藤浩史, 梶田公博, 兼松雅之. MRI による肝の画像診断, The Liver Cancer Journal 2010年; 2巻: 7-13.
- 22) 兼松雅之. 肝造影 CTー総体重規定を凌ぐロード負荷最適化の模索, Rad Fan 2010年; 8巻: 10-12.
- 23) 吉田麻里子, 柘植祐介, 西堀弘記, 近藤浩史, 加藤博基, 五島 聡, 兼松雅之. 画像による悪性腫瘍の病期診断, 臨床画像 2010年; 26巻: 75-96.
- 24) 近藤浩史, 兼松雅之. mnemonics(記憶術)を使おう! 上腹部の記憶術, 臨床画像 2010年; 26巻: 100-104.
- 25) 杉崎圭子, 兼松雅之. mnemonics(記憶術)を使おう! 婦人科疾患(乳腺疾患)の記憶, 臨床画像 2010年; 26巻: 218-221.
- 26) 金子 揚, 兼松雅之. mnemonics(記憶術)を使おう! FDG-PET の記憶術, 臨床画像 2010年; 26巻: 440-443.

- 27) 金子 揚, 近藤浩史, 五島 聡, 渡邊春夫, 兼松雅之. 嚢胞性膵疾患の画像診断, 臨床画像 2010 年; 26 巻: 518-529.
- 28) 近藤浩史, 渡邊春夫, 五島 聡, 兼松雅之, 白井邦博. 急性膵炎の診断と治療, 臨床画像 2010 年; 26 巻: 552-561.
- 29) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 北川輝彦, 藤田廣志. 新しい肝胆膵の画像診断 3. 新しい肝 MRI 診断(MR elastography), 臨床消化器内科 2010 年; 25 巻: 258-263.
- 30) 大宝和博, 林 真也, 田中秀和, 星 博昭, 北原将司, 松山勝哉, 岡田仁志. Novalis Tx を用いた frameless radiosurgery, Rad Fan 2011 年; 9 巻: 24-27.
- 31) 加藤博基. 頭蓋底疾患の診断: 炎症・腫瘍(良性・悪性)について, Head&Neck Radiology Imaging vol.14 2011 年; 14 巻: 1-19.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 大宝和博, 林 真也, 星 博昭. Micro-multileaf collimator を用いた dynamic conformal arc 定位照射による Paddick-Lippitz gradient index による標的外線量減衰の急峻度評価, 定位放射線治療 2009 年; 13 巻: 1-9.
- 2) 林 達郎, 周 向榮, 陳 華岳, 原 武史, 藤田廣志, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭. 軀幹部 X 線 CT 画像における骨格の位置情報を用いた側腹筋と大腰筋の自動認識: 電子情報通信学会技術報告, 信学技報 2009; MI2007-39 巻: 23-27.
- 3) 大宝和博, 林 真也, 星 博昭. 頭部定位放射線治療における線量評価についての考察-特に辺縁線量の定義による conformity index の差異について-Dosimetric consideration of intracranial stereotactic radiotherapy with a special emphasis on the variability of conformity indices related to marginal dose definition, 定位放射線治療 2009 年; 13 巻: 11-21.
- 4) 國枝琢也, 内山良一, 原 武史, 藤田廣志, 加藤博基, 浅野隆彦, 兼松雅之, 星 博昭, 岩間 亨, 紀ノ定保臣, 横山和俊, 篠田 淳. 脳 MR 画像におけるラクナ梗塞と血管周囲腔拡大の鑑別法, 医用画像情報学会雑誌 2009 年; 26 巻: 59-69.
- 5) 韓 明旭, 林 達郎, 周 向榮, 陳 華岳, 原 武史, 藤田廣志, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭. 体幹部 X 線 CT 画像における脊柱の正中矢状面を利用した椎体の骨密度と彎曲角度の自動計測法, 医用画像情報学会雑誌 2009 年; 26 巻: 52-58.
- 6) 奈良村五十志, 林 達郎, 周 向榮, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田廣志. X 線 CT 画像における骨盤腔形状を用いた前立腺の中心位置の自動推定, 医用画像情報学会雑誌 2009 年; 26 巻: 73-77.
- 7) 青木香織, 水田啓介, 山田南星, 青木光広, 伊藤八次, 加藤博基. 耳下腺腫瘍の MRI 画像および拡散係数による検討, 日本口腔・咽頭科学会雑誌 2009 年; 22 巻: 199-203.
- 8) 山田南星, 水田啓介, 加藤博基, 安藤健一, 久世文也, 青木光広, 伊藤八次. 石灰沈着性頸長筋炎の 2 例, 日本口腔・咽頭科学会雑誌 2009 年; 22 巻: 205-210.
- 9) 浅野龍紀, 内山良一, 浅野隆彦, 加藤博基, 原 武史, 周 向榮, 岩間 亨, 星 博昭, 紀ノ定保臣, 藤田廣志. MRA 画像における脳動脈領域の抽出法-大規模データベースを用いた評価, 医用画像情報学会雑誌 2010 年; 27 巻: 55-60.
- 10) 鈴木鷹也, 内山良一, 原 武史, 福岡大輔, 岩間 亨, 星 博昭, 木ノ定保臣, 藤田廣志. Visible Human 画像を用いたラクナ梗塞と血管周囲腔拡大の分類法, 電子情報通信学会技術報告 2010 年; 109 巻: 341-344.
- 11) 吉田麻里子, 加藤博基, 星 博昭, 兼松雅之, 柘植裕介, 西堀弘記, 藤原清香, 松永研吾. 卵巣腺線維腫の 1 例, 臨床放射線 2011 年; 56 巻: 1851-1854.
- 12) 藤田広志, 原 武史, 周 向榮, 林 達郎, 神谷直希, 張 学軍, 陳 華岳, 星 博昭. 医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化 計算解剖モデルの構築, Med Imag Tech 2011 年; 29 巻: 116-122.

原著 (欧文)

- 1) Zhang X, Kanematsu M, Fujita H, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Hoshi H. Application of an artificial neural network to the computer-aided differentiation of focal liver disease in MR imaging. Radiol Phys Technol. 2009;2:175-182.
- 2) Tsuge Y, Kanematsu M, Goshima S, Kondo H, Hoshi H, Yokoyama R, Miyoshi T, Onozuka M, Moriyama N, Bae KT. Optimal Scan Delays for Multiphasic Renal Multidetector Row Computed Tomography Performed With Fixed Injection Duration of Contrast Medium. J Comput Assist Tomogr. 2009;33:101-105. IF 1.358
- 3) Goshima S, Kanematsu M, Kondo H, Shiratori Y, Onozuka M, Moriyama N, Bae KT. Optimal acquisition delay for dynamic contrast-enhanced MRI of hypervascular hepatocellular carcinoma. Am J Roentgenol. 2009;192:686-692. IF 2.797
- 4) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Yamada K, Yamakawa H, Iwama T, Hirose Y. Fluid-fluid level formation: a rare finding of extracranial head and neck schwannomas. Am J Neuroradiol.

- 2009;30:1451-1453.
- 5) Goshima S, Chang S, Wang JH, Kanematsu M, Bae KT, Federle MP. Xanthogranulomatous cholecystitis: Diagnostic performance of CT to differentiate from gallbladder cancer. *Eur J Radiol.* 2009;74:79-83. IF 2.941
 - 6) Watanabe H, Kanematsu M, Kondo H, Goshima S, Tsuge Y, Onozuka M, Moriyama N. Preoperative T staging of urinary bladder cancer: does diffusion-weighted MRI have supplementary value? *Am J Roentgenol.* 2009;192:1361-1366. IF 2.797
 - 7) Goshima S, Kanematsu M, Kondo H, Tsuge Y, Watanabe H, Shiratori Y, Onozuka M, Moriyama N. Detection and grading for esophageal varices in patients with chronic liver damage: comparison of gadolinium-enhanced and unenhanced steady-state coherent MR images. *Magn Reson Imaging.* 2009;27:1230-1235. IF 2.042
 - 8) Zhou X, Hayashi T, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated measurement of bone-mineral-density (BMD) values of vertebral bones based on X-ray torso CT images. *Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc.* 2009;1:3573-3576.
 - 9) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Hara T, Hoshi H, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Automated recognition of the psoas major muscles on X-ray CT images. *Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc.* 2009;1:3557-3560.
 - 10) Matsuo M, Miwa K, Shinoda J, Kako N, Nishibori H, Sakurai K, Yano H, Iwama T, Kanematsu M. Target definition by C11-Methionine-PET for the Radiotherapy of Brain Metastases. *Int J Radiation Oncol Biol Phys.* 2009;74:714-722. IF 4.639
 - 11) Kato H, Kanematsu M, Tanaka O, Mizuta K, Aoki M, Shibata T, Yamashita T, Hirose Y, Hoshi H. Head and neck squamous cell carcinoma: usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the prediction of a neoadjuvant therapeutic effect. *Eur Radiol.* 2009;19:103-109. IF 3.594
 - 12) Funato M, Kato H, Sasai H, Kubota K, Ozeki M, Kato Z, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Diffuse large B-cell lymphoma presenting with osteolytic lesions in the bilateral femur. *Eur J Haematol.* 2009;83:502.
 - 13) Kondo H, Kanematsu M, Goshima S, Tomita Y, Kim MJ, Moriyama N, Onozuka M, Shiratori Y, Bae KT. Body size indexes for optimizing iodine dose for aortic and hepatic enhancement at multidetector CT: comparison of total body weight, lean body weight, and blood volume. *Radiology.* 2010;254:163-169.
 - 14) Kierans AS, Elazzazi M, Braga L, Leonardou P, Gerber DA, Burke C, Qureshi W, Kanematsu M, Semelka RC. Thermoablative treatments for malignant liver lesions: 10-year experience of MRI appearances of treatment response. *Am J Roentgenol.* 2010;194:523-529. IF 2.797
 - 15) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Kuze B, Ohno T, Oshima K, Hirose Y. "Flow-void" sign at MR imaging: A rare finding of extracranial head and neck schwannomas. *J Magn Reson Imaging.* 2010;31:703-705. IF 2.747
 - 16) Watanabe H, Kanematsu M, Kondo H, Kako N, Yamamoto N, Yamada T, Goshima S, Hoshi H, Bae KT. Preoperative detection of prostate cancer: a comparison with 11C-choline PET, 18F-fluorodeoxyglucose PET and MR imaging. *J Magn Reson Imaging.* 2010;31:1151-1156. IF 2.747
 - 17) Aoki M, Mizuta K, Ueda N, Yamada N, Yatsui I, Kato H, Hirose Y. Surgical treatment by partial petrosotomy for a middle-ear carcinoid with progressive extension: a case report and review of the literature. *Int J Otolaryngology.* 2010;Article ID 818673, 5 pages. IF 1.016
 - 18) Sanada Y, Kondo H, Goshima S, Kanematsu M, Tanaka Y, Tokuyama Y, Osada S, Yoshida K. Liver abscess after common hepatic artery embolization for delayed hemorrhage following pancreaticoduodenectomy: a case report. *Case Report Med.* 2010;13:280430.
 - 19) Goshima S, Kanematsu M, Watanabe H, Kondo H, Shiratori Y, Onozuka M, Moriyama N. Hepatic hemangioma and metastasis: differentiation with gadoxetate disodium-enhanced 3-T MRI. *Am J Roentgenol.* 2010;195:941-946. IF 2.797
 - 20) Watanabe H, Kanematsu M, Miyoshi T, Goshima S, Kondo H, Moriyama N, Bae KT. Improvement of image quality of low radiation dose abdominal CT by increasing contrast enhancement. *Am J Roentgenol.* 2010;195:986-992. IF 2.797
 - 21) Kato H, Kanematsu M, Sato E, Ito N, Furui T, Hirose Y. MR imaging findings of fibroepithelial polyp of the vulva: radiologic-pathologic correlation. *Jpn J Radiol.* 2010;28:609-612.
 - 22) Watanabe H, Kanematsu M, Kitagawa T, Suzuki Y, Kondo H, Goshima S, Kajita K, Bae KT, Hirose Y, Miotani S, Zhou X, Fujita H. MR elastography of the liver at 3 T with cine-tagging and bending energy analysis: preliminary results. *Eur Radiol.* 2010;20:2381-2389.
 - 23) Mori H, Ohno Y, Tsuge Y, Kawasaki M, Ito F, Endo J, Funaguchi N, La BL, Kanematsu M, Minatoguchi S. Use of multidetector row CT to evaluate the need for bronchial arterial embolization in hemoptysis patients. *Respiration.* 2010;80:24-31. IF 2.543
 - 24) X Zhou, S Wang, H Chen, X Zhang, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Rapid organ localization in 3D torso CT images based on ensemble learning, *Proc. of 2010 International Conference on Future Computer, Control and Communication(FCCC 2010)-International Forum on Computer Science-Technology and Applications(IFCSTA 2010)-.* 2010;2:312-315.
 - 25) Kamiya N, X Zhou, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi, Fujita H. A model based

- method for recognizing psoas major muscles in torso CT images, Proc. of SPIE Medical Imaging 2010: Computer-Aided Diagnosis. 2010:7624:76241X-1-76241X-6.
- 26) Hayashi T, X Zhou, Chen H, Hara T, Miyamoto K, Kobayashi T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated extraction method for the center line of spinal canal and its application to the spinal curvature quantification in torso X-ray CT images, Proc. of SPIE Medical Imaging 2010:Image Processing, 2010:7623:76233F-1-76233F-4.
 - 27) Fujita H, Hara T, X Zhou, Chen H, Hoshi H. Computational anatomy:Model construction and application for anatomical structures recognition in torso CT images, Proc. of the First International Symposium on the Project "Computational Anatomy". 2010:58-61.
 - 28) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, and Fujita H. Analysis on the bone-mineral-density distribution at trabecular bones in thoracic and lumbar vertebrae using X-ray CT images. *J Bone Miner Metab.* 2011;29:174-185. IF 2.238
 - 29) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara H, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated segmentation of recuts abdominis muscle using shape model in X-ray CT images. Proc. of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, 2011:7993-7996.
 - 30) Kanematsu M, Kato H, Kondo H, Goshima S, Tsuge Y, Kojima T, Watanabe H. Neurofibromatosis Type 1: Transcatheter Arterial: Transcatheter Arterial Embolization for Ruptured Occipital Arterial Aneurysms. *Cardiovasc Intervent Radiol.* 2011;34:S131-S135.
 - 31) Kato H, Kanematsu M, Yokoi S, Miwa K, Horie K, Deguchi T, Hirose Y. Renal cell carcinoma associated with Xp11.2 translocation/TFE3 gene fusion: radiological findings mimicking papillary subtype. *J Magn Reson Imaging.* 2011;33:217-220. IF 2.042
 - 32) Watanabe H, Kanematsu M, Goshima S, Kondo H, Onozuka M, Moriyama N, Bae KT. Staging Hepatic Fibrosis: Comparison of Gadoxetate Disodium-enhanced and Diffusion-weighted MR Imaging--Preliminary Observations. *Radiology.* 2011;259:142-150. IF 6.066
 - 33) Goshima S, Kanematsu M, Watanabe H, Kondo H, Mizuno N, Kawada H, Shiratori Y, Onozuka M, Moriyama N, Bae KT. Gadoxetate disodium-enhanced MR imaging: Differentiation between early-enhancing non-tumorous lesions and hypervascular hepatocellular carcinomas. *Eur J Radiol.* 2011;79:108-112. IF 2.941
 - 34) Nishihori T, Aoki M, Aoki K, Yamada N, Kuze B, Mizuta K, Ito Y, Hirose N, Kato H. The Surgical Treatment for Recurrent Liposarcoma of the Hypopharynx in a Pregnant Woman. *Journal of Medical Cases.* 2011;2:127-131.
 - 35) Goshima S, Kanematsu M, Nishihori H, Sakurai K, Miyazawa D, Watanabe H, Kondo H, Shiratori Y, Onozuka M, Moriyama N, Bae KT. CT of the pancreas: comparison of anatomic structure depiction, image quality, and radiation exposure between 320-detector volumetric images and 64-detector helical images. *Radiology.* 2011;260:139-147. IF 6.066
 - 36) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated segmentation of psoas major muscle in X-ray CT images by use of a shape model: preliminary study. *Radiol Phys Technol.* 2011;5:5-14.
 - 37) Kato H, Kanematsu M, Toida M, Kawaguchi T, Shibata T, Kajita K, Hoshi H. Salivary gland function evaluated by diffusion-weighted MR imaging with gustatory stimulation: Preliminary results. *J Magn Reson Imaging.* 2011;34:904-909. IF 2.747
 - 38) Kato H, Kanematsu M, Orii KE, Morimoto M, Kato Z, Kondo N. Apparition of iodinated contrast agents in twin neonatal gastrointestinal tracts after maternal contrast-enhanced computed tomography. *Jpn J Radiol.* 2011;29:521-523.
 - 39) Yoshimura S, Yamada K, Kawasaki M, Asano T, Kanematsu M, Takamatsu M, Hara A, Iwama T. High-Intensity Signal on Time-of-Flight Magnetic Resonance Angiography Indicates Carotid Plaques at High Risk for Cerebral Embolism During Stenting. *Stroke.* 2011;42:3132-3137. IF 5.756
 - 40) Kanematsu M, Watanabe H, Kondo H, Goshima S, Kato H, Furui T, Toyoki H, Morishige K. Postpartum hemorrhage in coagulopathic patients: preliminary experience with uterine arterial embolization with N-butyl cyanoacrylate. *J Vasc Interv Radiol.* 2011;22:1773-1776. IF 2.064
 - 41) Kato Z, Kondo N, Kato H, Morita H, Teramoto T, Miyamoto K, Shimizu K. Selective pontine hypoplasia: A possible common feature in 5p monosomy syndrome. *Brain Dev.* 2011;33:702-703. IF 1.979
 - 42) Ohtakara K, Hayashi S, Hoshi H. Dose gradient analyses in Linac-based intracranial stereotactic radiosurgery using Paddick's gradient index: Consideration of the optimal method for plan evaluation. *J Radiat Res (Tokyo).* 2011;52:592-599. IF 2.007
 - 43) Ohtakara K, Hayashi S, Tanaka H, Hoshi H. Dosimetric comparison of 2.5 mm vs. 3.0 mm leaf width micro-multileaf collimator-based treatment systems for intracranial stereotactic radiosurgery using dynamic conformal arcs: Implications for treatment planning. *Jpn J Radiol.* 2011;29:630-638.
 - 44) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Kondo N, Hirose Y, Hoshi H. MR imaging findings of cervical lymphadenopathy in patients with Kikuchi disease. *Eur J Radiol.* 2011;80:e576-e581 IF 2.941
 - 45) Tanaka H, Hayashi S, Ohtakara K, Hoshi H, Iida T. Usefulness of CT-MRI fusion in radiotherapy planning for localized prostate cancer. *J Radiat Res.* 2011;52:782-788.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：渡邊春夫，研究分担者：兼松雅之，近藤浩史，五島 聡，柘植裕介，藤田廣志；科学研究費補助金基盤研究(C)：cine-tagging 画像を用いた肝線維化評価；平成 20-22 年度；2,470 千円(1,430：650：390 千円)
- 2) 研究代表者：五島 聡，大学活性化経費(研究：科研採択支援)：MR spectroscopy を用いたウィルス性肝炎診断アルゴリズムの開発；平成 21 年度；1,000 千円
- 3) 研究代表者：加藤博基；科学研究費補助金若手研究(B)：3 テスラ MRI と人工知能を用いた慢性肝炎患診断のコンピュータ支援診断に関する研究；平成 21-22 年度；1,420 千円(1,040：380 千円)
- 4) 研究代表者：近藤浩史，研究分担者：兼松雅之，五島 聡，柘植裕介，渡邊春夫；科学研究費補助金基盤研究(C)：上腹部 MDCT におけるスカウト像を用いた患者体格自動測定プログラムの開発；平成 21-23 年度；2,390 千円(1,350：650：390 千円)
- 5) 研究代表者：小野塚 実，研究分担者：兼松雅之，富田美穂子，久保金弥，木本克彦，小野弓絵，丹羽雅美；科学研究費補助金基盤研究(B)：口腔ケアによる高齢者の認知機能回路の賦活と再生；平成 21-22 年度；15,860 千円(12,220：3,640 千円)
- 6) 研究代表者：兼松雅之，研究分担者：近藤浩史，五島 聡，渡邊春夫；科学研究費補助金基盤研究(C)：多列検出器時代の低被ばく高画質インテリジェント造影 CT システムの開発；平成 22-23 年度；2,600 千円(1,950：650 千円)
- 7) 研究代表者：加藤博基；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：頸部リンパ節腫脹を伴う川崎病における頸部 CT 所見に関する研究；平成 22 年度；500 千円
- 8) 研究代表者：五島 聡；研究科長・医学部長裁量経費(重点的配分)：MRI 画像を用いた肝表面性状解析による肝線維化診断コンピュータ支援診断アルゴリズムの構築；平成 23 年度；1,000 千円

2) 受託研究

- 1) 兼松雅之：FDG スキャン注の使用成績調査；平成 21 年度；315 千円：日本メジフィジックス(株)
- 2) 兼松雅之：ゼヴァリン使用成績調査；平成 21 年度；105 千円：バイエル薬品(株)
- 3) 林 真也：メタストロン注特定使用成績調査平成 19-23 年度；1,890 千円

3) 共同研究

- 1) 兼松雅之：CT・MRI を用いた腹部領域に対する検査方法の検討；平成 21 年度；1,000 千円：(株)フィリップスエレクトロニクスジャパン
- 2) 兼松雅之：CT colonography と CAD の臨床応用に関する研究；平成 21 年度；198 千円：メディックサイト(株)
- 3) 兼松雅之：生体インピーダンス法による体幹部脂肪量の推定；平成 21-22 年度；440 千円(440：0 千円)：(株)タニタ
- 4) 兼松雅之：造影剤自動注入器を用いた EOB 造影剤と生理食塩水の有効利用に関する基礎研究と注入法，及び安全な投与方法の研究；平成 21-22 年度；220 千円：(株)根本杏林堂
- 5) 兼松雅之：造影剤自動注入器を用いたヨード造影剤と生理食塩水の有効利用に関する基礎研究と注入法，及び安全な投与方法の研究；平成 21-22 年度；220 千円：(株)根本杏林堂

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

星 博昭：

- 1) 日本医学放射線学会代議員(～現在)
- 2) 日本医学放射線学会中部地方会世話人(～現在)
- 3) 日本核医学会評議員(～現在)
- 4) 日本核医学会中部地方会世話人(～現在)
- 5) 日本心臓核医学会評議員(～現在)
- 6) 日本画像医学会評議員(～現在)
- 7) 北関東医学会評議員(～現在)

- 8) 断層映像研究会世話人(～現在)
- 9) 中部マルチスライス CT シンポジウム世話人(平成 21 年 8 月～現在)

林 真也 :

- 1) 日本放射線腫瘍学会評議員(～現在)
- 2) 日本放射線腫瘍学会教育委員(～現在)
- 3) 日本高精度放射線外部照射研究会世話人(～現在)
- 4) 日本医学放射線学会中部地方会世話人(～現在)
- 5) 東海放射線腫瘍研究会世話人(～現在)
- 6) 東海放射線治療研究会世話人(～現在)
- 7) 日本医学放射線学会代議員(～現在)
- 8) 日本放射線腫瘍学会代議員(～現在)

兼松雅之 :

- 1) 日本インターベンショナルラジオロジー学会代議委員(～現在)
- 2) 日本磁気共鳴学会代議委員(～現在)
- 3) 日本核医学会評議委員(～現在)
- 4) 日本磁気共鳴学会教育委員(～現在)
- 5) 日本インターベンショナルラジオロジー国際学術委員(～現在)
- 6) 日本医学放射線学会代議員(～現在)
- 7) 日本肝動脈塞栓療法研究会世話人(～現在)
- 8) 腹部放射線研究会世話人(～現在)
- 9) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(～現在)
- 10) 日本インターベンショナルラジオロジー学会防護委員(～現在)

近藤浩史 :

- 1) 日本インターベンショナルラジオロジー学会代議員(～現在)
- 2) 日本インターベンショナルラジオロジー学会評議員(～現在)
- 3) 日本インターベンショナルラジオロジー学会防護委員(～現在)
- 4) 中部地区バスキュラーアクセス研究会世話人(～現在)

大宝和博 :

- 1) 日本脳神経外科学会評議員(～現在)

加藤博基 :

- 1) 頭頸部放射線研究会幹事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

星 博昭 :

- 1) 断層映像研究会雑誌 ; 編集委員(～現在)
- 2) 医用画像情報学会雑誌 ; 編集 Advisory board(～現在)
- 3) Acta Oto-Laryngologica ; 登録査読委員(～現在)
- 4) 日本核医学会雑誌 ; 登録査読委員(～現在)

兼松雅之 :

- 1) 臨床画像 ; 編集協力委員(～現在)
- 2) 消化器画像 ; 編集委員(～現在)
- 3) 腹部放射線研究会 ; 編集委員(～現在)
- 4) 日本医学放射線学会誌(～現在)
- 5) Japanese Journal of Radiology ; Assistant Editor(～現在)

6) Radiology 査読員(～現在)

近藤浩史：

- 1) 日本医学放射線学会；画像診断ガイドライン作成委員(平成 23 年 10 月～現在)

五島 聡：

- 1) 日本医学放射線学会；画像診断ガイドライン作成委員(平成 23 年 10 月～現在)
- 2) American College of Radiology LI-RADS Phase3；作成委員(平成 23 年 10 月～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

星 博昭：

- 1) 尾張耳鼻咽喉科冬季研修会(平成 21 年 3 月，名古屋，特別講演「各種画像診断法の進歩－CT, MRI, 核医学検査について」演者)
- 2) 第 33 回日本核医学技術学会東海地方会(平成 21 年 5 月，名古屋，特別講演「脳血流 SPECT－臨床的有用性と pitfall－」演者)
- 3) 岐阜県眼科医会談話会(平成 22 年 3 月，岐阜，特別講演「各種画像診断の最前線」演者)
- 4) 第 46 回日本医学放射線学会秋季臨床大会(平成 22 年 9 月，横浜，教育講演「核医学 3 明日からの臨床に役立つ PET 講座」座長)
- 5) 第 50 回日本核医学会総会(平成 22 年 11 月，さいたま，教育講演「PET/CT のための CT 読影講座」座長)
- 6) 第 18 回勤務医部会学術研修会(平成 23 年 8 月，岐阜，特別講演「人工および自然放射線と被曝について」演者)
- 7) 第 51 回日本核医学会総会(平成 23 年 10 月，シンポジウム「ガンマ線検出器の開発動向と臨床応用」座長)

林 真也：

- 1) 第 44 回日本放射線技術学会中部部会(平成 21 年 11 月，大垣，学会招待講演「肺定位照射の現状」演者)
- 2) 第 24 回日本放射線腫瘍学会学術集会(平成 23 年 11 月，神戸，教育講演「粒子線治療」座長)

兼松雅之：

- 1) MRI 最新機種導入記念講演会(平成 21 年 3 月，埼玉，「臨床 MRI アップデート」演者)
- 2) 第 21 回札幌肝胆膵研究会(平成 21 年 4 月，札幌，「肝 MRI の撮りかたと診かた－EOB 造影検査を含めて－」演者)
- 3) 茨城県技師会 CT 研究会主催 MDCT 講演会(平成 21 年 5 月，茨城「上腹部の造影 MDCT －究極の最適化を目指して－」演者)
- 4) The 2nd Asian Congress of Abdominal Radiology(2009.06, Seoul, Image Interpretation Session ; panellist)
- 5) The 2nd Asian Congress of Abdominal Radiology(2009.06, Seoul, Upper GI tract and Peritoneum ; speaker)
- 6) The 2nd Asian Congress of Abdominal Radiology(2009.06, Seoul, Invited lecture Diffusion-weighted MRI of the Liver ; speaker)
- 7) 第 16 回埼玉画像フォーラム(平成 21 年 8 月，埼玉，「肝 MRI の撮りかたと診かた－EOB 造影検査を含めて－」演者)
- 8) Enhancing the Enhancement Symposium 2009(2009.09, Seoul Invited lecture : Primovist-enhanced MRI of the Liver –Imaging Techniques, Diagnosis and Pitfalls ; speaker)
- 9) 第 45 回日本医学放射線学会秋期臨床大会(平成 21 年 10 月，和歌山，ランチョン講演，「肝造影 CT－総体重規定を凌ぐヨード負荷最適化の模索－」演者)
- 10) 第 247 回日本小児科学会東海地方会(平成 21 年 11 月，岐阜，特別講演，「小児科領域における画像診断と IVR 治療アップデート」演者)
- 11) 第 2 回中部放射線医療技術学術大会(平成 21 年 11 月，大垣，特別講演「肝の MRI－最近の話題を交えて－」演者)
- 12) RSNA 2009(平成 21 年 11 月，シカゴ，招待講演「RSNA との関わりと岐阜大学の工夫」演者)

- 13) International Expert Seminar in Chicago,(2009.12, Chicago, Invited Lecture : Liver CT: Optimal Iodine Load and Radiation Dose Reduction ; symposist)
- 14) “Liver CT:Optimal Iodine Load and Radiation Dose Reduction”, KSAR-GE Healthcare Grand Symposium 2010(2010.01, Korea ; Invited Symposium Lecture)
- 15) 第 13 回南阪神肝疾患病診連携セミナー(平成 22 年 2 月, 大阪, 特別講演「肝 MRI の撮りかたと診かたーEOB 造影検査を含めて」特別講演演者)
- 16) 第 69 回日本医学放射線学会総会(平成 22 年 4 月, 横浜, ワークショップ 1「体幹部における Functional Imaging の現状と将来展望」MRI による肝線維症の病期診断」シンポジスト)
- 17) The 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society(2010.08, Gifu, Moderator of Seesion O-9 Chemoradiotherapy ; Invited Symposium Lectur)
- 18) 第 14 回福島肝疾患勉強会(平成 22 年 10 月, 福島, 特別講演「肝 MRI の撮りかたと診かたー最近の話題を交えて」特別講演演者)
- 19) 第 43 回 Radiology Update 学術講演会(平成 22 年 11 月, 東京, ワークショップ「肝線維症の病期診断ーMRI を用いた様々な手法」シンポジスト)
- 20) 第 13 回 和み会ー臨床内科フォーラム(平成 22 年 11 月, 岐阜, 特別講演「画像診断と IVR 治療アップデートーヒアリハット症例を含めて」特別講演演者)
- 21) 第 16 回つくば MR 懇話会(平成 22 年 11 月, 特別講演「MRI による肝臓の画像診断ー最近の話題を交えて」特別講演演者)
- 22) 第 32 回佐賀 CT・MRI 研究会(平成 23 年 1 月, 佐賀, 特別講演「肝 MRI の撮りかたと診かたー最近の話題を交えて」演者)
- 23) 肝線維症診断のタベ ～MR Elastography を語ろう～(平成 23 年 2 月, 岐阜, 特別講演「肝線維症の病期診断ーMRI を用いた様々な手法(EOB・プリモビストを含む)～」演者)
- 24) 第 23 回日本消化器画像診断情報研究会(平成 23 年 2 月, 福島, ランチョンセミナー講演「肝臓の造影 MDCT ー究極の最適化を目指してー」演者)
- 25) 第 11 回 桜山イメージングセミナー会(平成 23 年 2 月, 名古屋, 特別講演「MRI による肝臓の画像診断 ー最近の話題を交えてー」演者)
- 26) 第 1 回 Advanced MR 研究会(平成 23 年 5 月, 大阪, ディベート「EOB プリモビスト MRI で肝画像診断は決まりか!? ー超音波で肝 SOL が検出されたとき, EOB のみで十分」演者)
- 27) 第 14 回中部 MAGNETOM 研究会(平成 23 年 6 月, 特別講演「肝の MRI ー最近の話題を交えてー」演者)
- 28) 第 22 回日本小児科医会総会フォーラム(平成 23 年 6 月, 岐阜, 教育講演「放射線画像診断と IVR 治療アップデートー小児診療を中心にー」演者)
- 29) 名古屋消化器画像勉強会(平成 23 年 6 月, 特別講演「肝 MRI の撮りかたと診かたー最近の話題を交えてー」演者)
- 30) 東海がんプロフェッショナル養成プラン市民公開講座(平成 23 年 7 月, 岐阜, 講演「PET 検査 ーがんを見つける魔法の検査!?ー」演者)
- 31) 第 39 回日本磁気共鳴医学会総会(平成 23 年 10 月, 小倉, シンポジウム「肝臓の Diffusion/Perfusion」演者)
- 32) 第 47 回日本医学放射線学会 秋期臨床大会(平成 23 年 10 月, ランチョン講演「腹部造影 CT ー最適検査の標準化に向けての今後の視点ー」演者)

近藤浩史 :

- 1) 東北 conference on contrast media(平成 23 年 2 月, 仙台, 招待講演「肝臓の MDCTー究極の最適化を目指して」演者)
- 2) 第 30 回画像医学会(平成 23 年 2 月, 東京, 招待講演「肝臓の MDCTー究極の最適化を目指して」演者)
- 3) 第 9 回愛知子宮筋腫塞栓療法検討会(平成 23 年 5 月, 愛知, 特別講演「産科出血に対する IVR」演者)
- 4) 第 8 回今日の放射線診療研究会(平成 23 年 8 月, 京都, 招待講演「肝 MDCT における至適撮像」演者)
- 5) 第 47 回日本医学放射線学会秋期臨床大会(平成 23 年 10 月, 下関, 教育講演「肝転移の画像診断 : 多血性肝転移」演者)
- 6) 第 39 回日本磁気共鳴医学会大会(平成 23 年 10 月, 小倉, 教育講演「胆膵疾患の MRI」座長)

- 7) 第 440 回日本医学放射線学会関東地方会定期大会(平成 23 年 12 月, 大宮, 特別講演「腹部領域における至適 CT 撮像法」 演者)

富松英人 :

- 1) 第 47 回日本医学放射線学会秋季大会(平成 23 年 10 月, 下関, 教育講演, 「リフレッシュコース 消化器 ~CT colonography」 演者)

加藤博基 :

- 1) 第 46 回日本医学放射線学会秋季臨床大会(平成 22 年 9 月, 横浜, 教育講演「頭頸部の感染症(舌骨下頸部)演者)
- 2) 第 56 回日本形成外科学会中部支部東海地方会(平成 22 年 10 月, 岐阜, 教育講演「軟部腫瘍の画像診断—画像診断できる疾患を中心に」 演者)
- 3) 第 40 回断層映像研究会(平成 23 年 9 月, 教育講演「唾液腺の画像診断」 演者)
- 4) 第 47 回日本医学放射線学会秋季臨床大会(平成 23 年 10 月, 教育講演「中咽頭領域の画像診断」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 兼松雅之 : Radiology Editor's Recognition Award for Reviewing with Special Distinction, December(平成 21 年度)
- 2) 五島 聡, 兼松雅之, 近藤浩史, 渡辺春夫, 柘植裕介 : Best Scientific Paper Award, "Gd-EOB-DTPA-enhanced MRI: Hemangioma vs Metastasis" The 2nd Asian Congress of Abdominal Radiology 2009(平成 21 年度)
- 3) 加藤博基 : 岐阜医学研究協議会平成 21 年度岐阜医学奨励賞(平成 21 年)
- 4) 浅野隆彦 : 医用画像情報学会金森奨励賞(平成 22 年度)
- 5) 加藤博基 : 医用画像情報学会金森奨励賞(平成 22 年度)
- 6) 加藤博基 : 日本医学放射線学会板井研究奨励賞(平成 22 年度)
- 7) 五島 聡, 兼松雅之, 近藤浩史, 渡辺春夫, 川田紘資, K.T.Bae : RSNA 優秀賞(平成 22 年度)
- 8) 五島 聡 : 第 38 回日本医学共鳴学会大会大会長賞(平成 22 年度)
- 9) 兼松雅之 : Radiology 特別優秀査読者賞(平成 23 年度)
- 10) 林 真也 : 第 49 回日本癌治療学会優秀示説賞(平成 23 年度)

9. 社会活動

林 真也 :

- 1) 岐阜県原子力防災専門委員(平成 23 年度)

10. 報告書

- 1) 兼松雅之 : Medical Tribune Vol. 44, No. 48, 第 39 回日本磁気共鳴医学会, —diffusion/perfusion MRI— DWI は悪性腫瘍で補足的に有用(平成 23 年 12 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

画像診断の研究は、画像診断のみならず機器を駆使した撮影技術、画像解析も網羅される。腹部臓器悪性腫瘍の研究では、CT, MRI の至適撮像法の開発や肝がん、膵がんを始めとする早期悪性腫瘍画像診断に関する各種画像診断に関する研究成果を挙げてきた。また、核医学による脳血統 SPECT も eZIS を始めとする認知症の解析や脳血管障害治療前後の Q-SPECT による定量化に関する研究に取り組み、臨床的に応用している。

放射線治療関連では、3次元照射の体幹部腫瘍への応用（特に IMRT の基礎的検討）、定位手術的放射線治療の脳腫瘍への応用、有痛性骨転移に対する至適照射法の検討を行ってきた。小線源治療については東海地区で初めて前立腺がん臨床応用され、良好な成果を挙げてきた。この至適線量を得るため新しい CT, MRI のソフトの開発も行ってきた。

画像診断用の新しいソフトとして臨床応用に向けて急速に進歩してきた CAD については、再生分子統御学講座、知能イメージ情報分野と共同研究を行いながら、特に乳癌、慢性肝疾患について研究成果を挙げてきている。

現状の問題点及びその対応策

現在の研究は臨床研究が主なものであり、内外を含めた各診療科、各分野、他施設との共同研究を更に充実させる必要がある。また、画像情報量の膨大化に伴いその後の画像処理、臨床業務に多くの負担がかかっていることに加え、慢性的なマンパワー不足が続いているため、将来に向けて臨床、教育、研究が十分行える人的充実が必要である。

今後の展望

2011年に電子カルテの機器更新があり、それに伴い放射線部画像情報ネットワークが強化されたため、画像解析の広範囲な応用が可能となり、症例の画像比較や解析が容易になった。2012年4月からは2台目の64列CTが導入され、新しくガンマカメラが更新される予定であり、CTと核医学検査の融合画像も可能となる。また、仮想内視鏡による消化管検診、乳癌診断、腹部画像診断などの精度がより一層高まることが期待される。最新の **Interventional Radiology** 技術による低侵襲治療に関する研究も盛んとなるであろう。

放射線治療関連では、今後は肺癌においては中枢側の腫瘍の安全な照射法の確立、定位照射での至的な線量分割法の確立をさらに目指す。また **IMRT** においては前立腺以外の臓器の臨床応用を試みる。小線源治療においては前立腺癌の適応拡大にての高リスク群に対する臨床応用を行っている。また遠隔高線量小線源照射装置 (**RALS**) が 2012年に機器更新される予定であり、子宮頸がんを中心とした **MRI**、**CT** を用いた画像融合技術での照射法 (イメージガイド小線源治療: **IGBT**) の確立を目指す。

(8) 疫学・予防医学分野

1. 研究の概要

疫学を方法論として用いたがんその他の生活習慣病のリスク要因を明らかにする研究をおこなっている。疫学は病態解明より関連性を評価する学問であり、対象も人間集団で、ライフスタイル・行動に重点をおいている。

1) がんの疫学研究

がんの疫学研究の中心は、平成4年に開始した高山市住民約3万人を対象としたコホート研究（高山スタディ）である。ベースライン時に食生活を中心とした健康と生活習慣に関する調査をおこなっており、その後のがん発生にどのような生活環境要因が関連するかを評価する。既然大腸がん、胃がん、膵臓がんのリスク要因について幾つか報告しているが、現在、その他の臓器の罹患情報も入手しつつあり、追跡終了を迎えている。今後解析を終えたものから順次、学術雑誌に報告する。また、国内における他のがんコホートとの共同研究によりプール解析をおこなっており、日本人におけるエビデンスの構築に貢献している。

乳がんに関しては、リスク要因候補として食習慣、大豆摂取やイソフラボン代謝物、夜間照明、メラトニンに着目し、これらの因子と乳がんのリスクマーカーであるエストロゲン値との関連性について、成人女性を対象にケース・コントロール研究や横断研究のデザインで評価してきた。最近では、乳がんリスクは幼少期において規定されるという仮説から、対象を幼児や学童に広げ、尿中エストロゲン、メラトニンに關与する生活環境要因を同定しようとしている。また、乳腺組織密度と乳がんについてハワイ癌センターと共同研究を行っている。

2) 生活習慣病等の疫学研究

がん以外に、心血管障害、脳卒中、糖尿病、高脂血症、高血圧症などの生活習慣病や白内障、耳鳴、花粉症、皮膚老化など生活習慣が關与すると考えられる疾患についても高山スタディや一般健康成人を対象とした横断研究で、リスク要因の同定と予防のあり方について研究をおこなっている。また、喘息、鼻炎、食物アレルギーについて幼児を対象に各種栄養素摂取量や生活環境因子の關与について横断研究、妊娠中からの追跡研究のデザインで研究を行っている。また、小学生を対象にコホート研究を開始し、食事、生活習慣と肥満、血中脂質、血糖値との関連を調査することで、成人期への肥満や生活習慣病の予防につなげようとしている。

3) 栄養疫学研究

食品、栄養素、特にイソフラボン摂取を中心にホルモンに關連する疾患や症状について関連性を研究してきた。海苔などの海藻摂取や食事から摂取されるメラトニンについても着目し、その健康影響を評価する研究を開始している。

2. 名簿

教授：	永田知里	Chisato Nagata
助教：	中村こず枝	Kozue Nakamura
助教：	和田恵子	Keiko Wada

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 永田知里. 保健統計：岡崎 勲、豊嶋英明、小林廉毅編. 標準公衆衛生・社会医学、東京：医学書院；2009年：63-75.
- 2) 永田知里. 大豆摂取と大腸がん・アレルギー性疾患：喜多村啓介編. 大豆のすべて、東京：サイエンスフォーラム；2010年：312-313.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

なし

原著 (欧文)

- 1) Oba S, Takatsuka N, Nagata C, Nagao Y, Yamamoto S, Shibuya C, Kashiki Y, Shimizu H. Causal attributions to epidemiological risk factors and their associations to later psychological adjustment among Japanese breast cancer patients. *Support Care Cancer* 2009;17:3-9. IF 2.058
- 2) Nakamura K, Nagata C, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Oba S, Shimizu H. Cigarette smoking and the adult onset of bronchial asthma in Japanese men and women. *Annals of Allergy, Asthma & Immunology* 2009;102:288-293. IF 2.801
- 3) Oba S, Nagata C, Nakamura K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Diet based on the Japanese Food Guide Spinning Top and subsequent mortality among men and women in a general Japanese population. *J Am Diet Assoc.* 2009;109:1540-1547. IF 3.244
- 4) Inoue M, Sasazuki S, Wakai K, Suzuki T, Matsuo K, Shimazu T, Tsuji I, Tanaka K, Mizoue T, Nagata C, Tamakoshi A, Sawada N, Tsugane S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Green tea consumption and gastric cancer in Japanese: a pooled analysis of six cohort studies. *Gut.* 2009;58:1323-1332. IF 10.614
- 5) Nagata C, Nakamura K, Oba S, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K. Association of intakes of fat, dietary fibre, soya isoflavones and alcohol with uterine fibroids in Japanese women. *Br J Nutr.* 2009; 101:1427-1431. IF 3.072
- 6) Nakamura K, Nagata C, Wada K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Association of farming with the development of cedar pollinosis in Japanese adults. *Ann Epidemiol.* 2010;20:804-810. IF 3.238
- 7) Oba S, Nagata C, Nakamura K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Dietary glycemic index, glycemic load, and intake of carbohydrate and rice in relation to risk of mortality from stroke and its subtypes in Japanese men and women. *Metabolism* 2010;59:1574-1582. IF 2.538
- 8) Oba S, Nagata C, Nakamura K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Consumption of coffee, green tea, oolong tea, black tea, chocolate snacks and the caffeine content in relation to risk of diabetes in Japanese men and women. *Br J Nutr.* 2010;103:453-459. IF 3.072
- 9) Nagata C. Factors to consider in the association between soy isoflavone intake and breast cancer risk. *J Epidemiol.* 2010;20:83-89. IF 2.111
- 10) Masue T, Wada K, Nagata C, Deguchi T, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K. Lifestyle and health factors associated with stress urinary incontinence in Japanese women. *Maturitas* 2010;66:305-309. IF 2.286
- 11) Nagata C, Nakamura K, Wada K, Oba S, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K. Association of dietary fat, vegetables and antioxidant micronutrients with skin ageing in Japanese women. *Br J Nutr.* 2010; 103:1493-1498. IF 3.072
- 12) Wada K, Nakamura K, Tamai Y, Tsuji M, Sahashi Y, Watanabe K, Ohtsuchi S, Yamamoto K, Ando K, Nagata C. Seaweed intake and blood pressure levels in healthy pre-school Japanese children. *Nutr J.* 2011;10:83. IF 2.560
- 13) Wada K, Nakamura K, Masue T, Sahashi Y, Ando K, Nagata C. Soy Intake and Urinary Sex Hormone Levels in Preschool Japanese Children. *Am J Epidemiol.* 2011;173:998-1003. IF 5.745
- 14) Nakamura K, Nagata C, Wada K, Tamai Y, Tsuji M, Takatsuka N, Shimizu H. Cigarette smoking and other lifestyle factors in relation to the risk of pancreatic cancer death: a prospective cohort study in Japan. *Jpn J Clin Oncol.* 2011;41:225-231. IF 1.856
- 15) Nagata C, Wada K, Nakamura K, Hayashi M, Takeda N, Yasuda K. Associations of body size and reproductive factors with circulating levels of sex hormones and prolactin in premenopausal Japanese women. *Cancer Causes Control.* 2011;22:581-588. IF 2.789
- 16) Wakai K, Matsuo K, Nagata C, Mizoue T, Tanaka K, Tsuji I, Sasazuki S, Shimazu T, Sawada N, Inoue M, Tsugane S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Lung cancer risk and consumption of vegetables and fruit: an evaluation based on a systematic review of epidemiological evidence from Japan. *Jpn J Clin Oncol.* 2011;41:693-708. IF 1.856
- 17) Oze I, Matsuo K, Wakai K, Nagata C, Mizoue T, Tanaka K, Tsuji I, Sasazuki S, Inoue M, Tsugane S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Alcohol drinking and esophageal cancer risk: an evaluation based on a systematic review of epidemiologic evidence among the Japanese population. *Jpn J Clin Oncol.* 2011;41:677-692. IF 1.856
- 18) Minami Y, Hirabayashi Y, Nagata C, Ishii T, Harigae H, Sasaki T. Intakes of vitamin B6 and dietary fiber and clinical course of systemic lupus erythematosus: a prospective study of Japanese female patients. *J Epidemiol.* 2011;21:246-254. IF 2.111
- 19) Fujii K, Nagata C, Nakamura K, Kawachi T, Takatsuka N, Oba S, Shimizu H. Prevalence of tinnitus in community-dwelling Japanese adults. *J Epidemiol.* 2011;21:299-304. IF 2.111
- 20) Sasazuki S, Inoue M, Tsuji I, Sugawara Y, Tamakoshi A, Matsuo K, Wakai K, Nagata C, Tanaka K, Mizoue T, Tsugane S; Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Body mass index and mortality from all causes and major causes in Japanese: results of a pooled analysis of 7 large-scale cohort studies. *J Epidemiol.* 2011;21:417-430. IF 2.111
- 21) Tamai Y, Wada K, Tsuji M, Nakamura K, Sahashi Y, Watanabe K, Yamamoto K, Ando K, Nagata C. Dietary intake of vitamin B12 and folic acid is associated with lower blood pressure in Japanese preschool children. *Am J Hypertens.* 2011;24:1215-1221. IF 3.129

- 22) Matsuo K, Ito H, Wakai K, Nagata C, Mizoue T, Tanaka K, Tsuji I, Tamakoshi A, Sasazuki S, Inoue M, Tsugane S: Research Group for the Development and Evaluation of Cancer Prevention Strategies in Japan. Cigarette smoking and pancreas cancer risk: an evaluation based on a systematic review of epidemiologic evidence in the Japanese population. *Jpn J Clin Oncol.* 2011;41:1292-1302. IF 1.856

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 中村こず枝; 第36回(平成20年度)集団検診研究開発助成金: 親の食生活と、子の成長・健康との関連についての研究; 平成20年度; 250千円
- 2) 研究代表者: 中村こず枝, 研究分担者: 永田知里; 科学研究費補助金基盤研究(C): 妊娠中の母親の脂質摂取と臍帯血 IgE 値, 乳児期のアレルギー発症に関する研究; 平成21-23年度; 3,700千円(1,800:1,200:700千円)
- 3) 研究代表者: 永田知里, 研究分担者: 清水弘之, 武田則之, 藤田広志; 科学研究費補助金基盤研究(B): 乳がんリスクとしてのエストロゲン, メラトニンとサーカディアンリズムに関する研究; 平成19-21年度; 14,800千円(5,200:4,800:4,800千円)
- 4) 研究代表者: 永田知里, 研究分担者: 清水弘之; 科学研究費補助金特定領域研究: 各種アミノ酸およびDNAメチル化に関する食事因子とがん罹患に関するコホート研究; 平成20-21年度; 8,800千円(4,400:4,400千円)
- 5) 研究代表者: 和田恵子; 科学研究費補助金研究活動スタート支援: 小児の血圧を規定する生活環境要因に関する研究; 平成21-22年度; 2,652千円(1,391;1,261千円)
- 6) 研究代表者: 菊地正悟, 研究分担者: 中村こず枝他; 厚生労働省がん研究助成金: 膵臓・胆道がんのリスク要因の分子疫学的分析のための検体セットの構築と仮説の設定; 平成21-23年度; 1,770千円(900;770;100千円)
- 7) 研究代表者: 津金昌一郎, 研究分担者: 永田知里他; 厚生労働科学研究費補助金: 第3次対がん総合戦略研究事業; 生活習慣改善によるがん予防法の開発と評価; 平成21-23年度; 15,000千円(6,000:5,000:4,000千円)
- 8) 研究代表者: 永田知里, 研究分担者: 服部淳彦; 科学研究費補助金基盤研究(B): 食事由来のメラトニン: 摂取量推定と閉経およびがん・循環器疾患との関連; 平成22-24年度; 14,700千円(5,100:4,900:4,700千円)
- 9) 研究代表者: 中村祐輔, 研究分担者: 永田知里他; 新学術領域研究(研究領域提案型)(計画研究)『生命科学系3分野支援活動』がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動; 平成22-23年度; 15,000千円(10,000:5,000千円)
- 10) 研究代表者: 廣田良夫, 研究分担者: 永田知里他; 厚生労働科学研究費補助金: 難治性疾患克服事業「難病の頻度と分布および規定要因に関する調査研究」分担研究班; 平成23年度; 800千円
- 11) 研究代表者: 和田恵子; 学術研究助成基金助成金若手研究(B): 小児期のサーカディアンリズム・メラトニンと成長や肥満に関する研究; 平成23-24年度; 4,290千円(2,210:2,080千円)

高塚直能:
医療経済分野参照

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 尿中イソフラボン代謝物測定のための共同研究; 平成21-22年; 大塚製薬(株)

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

永田知里:

- 1) 東海公衆衛生学会理事(~現在)
- 2) 日本公衆衛生学会評議員(~現在)

- 3) 日本疫学会評議員(～現在)
- 4) 日本疫学会理事(平成 22 年度～現在)
- 5) 日本癌学会評議員(平成 22 年度～現在)

高塚直能：
医療経済学分野参照

- 中村こず枝：
1) 東海公衆衛生学会評議員(～現在)

2) 学会開催

- 永田知里：
1) 第 56 回東海公衆衛生学会(平成 22 年 7 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

- 永田知里：
1) J. Epidemiol ; 編集委員(～平成 22 年度)
2) Epidemiology Research International ; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

- 永田知里：
1) NIH SOY PROTEIN/ISOFLAVONE RESEARCH Challenge in designing and Evaluating Intervention Studies Scientific Workshop(2009.07, Washington D.C, :Population exposure outside the U.S.—Asia; speaker)
2) 20th Asia Pacific Cancer Conference(2009.11, Tsukuba, ; “Cancer registry & Epidemiological study” Working Group Meeting; chairperson)
3) がん予防学術大会 2010 札幌(平成 22 年 7 月, 札幌, シンポジウム「高山コホート(Takayama Study)の結果から」 演者)
4) International symposium on breast cancer prevention: nutrition, communication, and public policy(2010.10, Purdue University: Soy intake and breast cancer risk in Japanese women; speaker)
5) がん予防大会 2011 京都(平成 23 年 6 月, 京都, ワークショップ「大腸がん」 座長)
6) 第 70 回日本癌学会学術総会 (平成 23 年 10 月, 名古屋, English Oral session, cancer and society, 座長)
7) International symposium on breast cancer prevention: nutrition, communication, and public policy(2011.10, Rennes, France, French School of Public Health : Diet and endogenous hormones: implications for breast cancer prevention in Japan; speaker)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

- 永田知里：
1) 内閣府食品安全委員会専門員(～現在)
2) 岐阜市保健医療審議会委員(～現在)
3) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
4) 岐阜県環境影響評価審査会委員(～現在)
5) 岐阜県環境審議会委員(～現在)
6) 岐阜県公害審議会委員(～現在)

高塚直能：
医療経済学分野参照

中村こず枝：

1) 母子生活支援施設「サンフラワー華陽」(～現在)

10. 報告書

- 1) 永田知里：生活習慣改善による乳がん予防法の開発に関する研究：平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 総括・分担研究報告書(主任研究者津金昌一郎)：83-90(平成 22 年 3 月)
- 2) 永田知里：科学研究費補助金基盤研究(B) 乳がんリスクとしてのエストロゲン、メラトニンとサーカディアンリズムに関する研究 成果報告書(平成 22 年 5 月)

高塚直能：医療経済学分野参照

11. 報道

- 1) 永田知里：コーヒーは糖尿病を抑制，共同通信社，神奈川新聞等(2011 年 12 月)

12. 自己評価

評価

論文数が少なく，研究費も獲得を目指す必要がある。

現状の問題点及びその対応策

論文化を進めるために，既にデータ収集が終了している研究の集計・解析を迅速化する。一方で，新しい仮説をもとにフィールドワークを展開していく。

今後の展望

疫学以外の分野でもコホート研究の必要性が認識されてきたが，実際には横断研究に過ぎない研究もみられ，コホート研究の方法論や実際が理解されていないものと考えられる。当分野は疫学の方法論に精通し，また実際に研究を遂行，指導できる専門家育成に努める。また，複数の大学や研究所の共同による大規模コホート研究も幾つか開始されるようになったが，一方で各大学は小規模であるが仮説性の高い研究や方法論に関わる研究など，独自色ある成果が要求されると考えられる。今後，ますますオリジナリティの高い研究を目指す。

(9) 臨床腫瘍学分野

1. 研究の概要

2008年11月に立ち上げた新しい分野であり、最近とみに重要性を増している臨床腫瘍学 Clinical Oncology を取り扱う。

- 1) 固形腫瘍について手術、内視鏡治療、化学療法、放射線治療など、集学的治療の構築と成績の分析を行なう。
- 2) 血液腫瘍について新しいレジメの開発と予後因子に基づいた層別化を行なう。
- 3) 1, 2 を達成する上で必要な臨床試験デザインの研究を行なう。

上記の研究を進めつつ、実際のがん化学療法の理論と実践を習得し、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医を取得する。

2. 名簿

教授(併任)：	森脇久隆	Hisataka Moriwaki
教授(併任)：	伊藤善規	Yoshiki Ito
准教授(併任)：	鶴見 寿	Hisashi Tsurumi
臨床講師：	原 武志	Takeshi Hara

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 鶴見 寿, 原 武志. 慢性好中球性白血病(CNL): 阿部達生編, 造血器腫瘍アトラス-形態, 免疫, 染色体と遺伝子-第4版, 東京: 日本医事新報社; 2009年: 231-234.
- 2) 鶴見 寿, 原 武志. 高齢者 AML に対する G-CSF 併用低用量 Ara-C/VP-16 療法(AVG 療法): 阿部達生編, 造血器腫瘍アトラス-形態, 免疫 染色体と遺伝子-第4版, 東京: 日本医事新報社; 2009年: 461-464.
- 3) 鶴見 寿. 血液の病気: 山本真由美監修, 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理, 岐阜: 岐阜新聞社; 2009年: 118-123.
- 4) Sarah Harding Laidlaw, 森脇久隆. 栄養とがん生存者: 中尾 豊, 渡邊 昌, 阪上 浩編. がん栄養療法ガイドブック 第2版, 東京: メディカルレビュー社; 2011年: 201-210.
- 5) 森脇久隆. 25. 肝硬変・肝癌: 岡田 正, 馬場忠雄, 山城雄一郎編. 新臨床栄養学, 東京: 医学書院; 2011年: 109-115.
- 6) 森脇久隆. 25. 肝硬変・肝癌: 岡田 正, 馬場忠雄, 山城雄一郎編. 新臨床栄養学, 東京: 医学書院; 2011年: 508-513.
- 7) 森脇久隆. ビタミン A 誘導体の開発: 糸川嘉則監修. ビタミンの科学と最新応用技術, 東京: シーエムシー出版; 2011年: 74-80.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 清水雅仁, 森脇久隆. 非環式レチノイド, 日本臨床 2009年; 67巻(増刊): 240-244.
- 2) 清水雅仁, 森脇久隆. レチノイド核内受容体 RXR α を分子標的とした試み, 肝胆膵 2009年; 3巻: 379-388.
- 3) 向井 強, 安田 一郎, 岩田圭介, 中島賢憲, 山内貴裕, 土井晋平, 富田栄一, 森脇久隆. 特集「Stenting Bible」胆管狭窄に対する Stenting Strategy: 悪性肝門部胆管狭窄 各種ステントの選択-Plastic か Metal か-, 胆と膵 2010年; 31巻(臨時増刊特大号): 969-977.
- 4) 鶴見 寿. 造血器腫瘍のバイオマーカー ~特に悪性リンパ腫における血清マーカーを中心に~, 血液フロンティア 2010年; 20巻: 991-997.
- 5) 鶴見 寿. Frontier Discussion 非ホジキンリンパ腫の治療~ピラルビシンの位置づけ~, 血液フロンティア 2010年; 20巻: 1212-1219.
- 6) 鶴見 寿. 学会印象記 第50回日本リンパ網内系学会総会, 血液フロンティア 2010年; 20巻: 1914-1916.
- 7) 鶴見 寿. 専門医へ紹介するタイミング リンパ腫・多発性骨髄腫の疑い, medicina 2011年; 48巻: 1758-1761.
- 8) 鶴見 寿. 悪性リンパ腫のバイオマーカー, 成人病と生活習慣病 2011年; 41巻: 1094-1098.

総説 (欧文)

- 1) Shimizu M, Adachi S, Masuda M, Kozawa O, Moriwaki H. Cancer chemoprevention with green tea catechins by targeting receptor tyrosine kinases. Mol Nutr Food Res. 2011;55:832-843.
- 2) Shimizu M, Sakai H, Moriwaki H. Chemoprevention of hepatocellular carcinoma by acyclic retinoid.

Front Biosci. 2011;16:759-769.

- 3) Masuda M, Wakasaki T, Toh S, Shimizu M, Adachi S. Chemoprevention of Head and Neck Cancer by Green Tea Extract: EGCG-The Role of EGFR Signaling and "Lipid Raft". J Oncol. 2011;540148:1-7.

原著 (和文)

- 1) 今井健二, 高井光治, 小木首英介, 渡部直樹, 岩砂淳平, 清水雅仁, 内木隆文, 安田一朗, 荒木寛司, 鶴見寿, 永木正仁, 森脇久隆. 進行肝細胞癌に対する cisplatin 反復肝動注療法の治療成績, 岐阜県内科医会雑誌 2009年; 23巻: 59-63.
- 2) 井深貴士, 荒木寛司, 小野木章人, 森脇久隆. 進行食道癌に対する放射線化学療法中に発症した薬剤性肺炎の1例, 岐阜県医師会雑誌 2010年; 23巻: 93-97.
- 3) 金子周一, 古瀬純司, 工藤正俊, 池田健次, 本多政夫, 中本安成, 恩地森一, 汐田剛史, 横須賀収, 坂井田功, 竹原徹郎, 上野義之, 廣石和正, 西口修平, 森脇久隆, 山本和秀, 佐田通夫, 小尾俊太郎, 宮山士朗, 今井幸紀. 肝がんに対する新規抗がん剤使用に関する指針 2010年度版平成22年度厚生労働省科学研究費補助金(肝炎等克服緊急対策研究事業), 肝臓 2011年; 52巻: 532-551.

原著 (欧文)

- 1) Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kanemura N, Yoshikawa T, Kasahara S, Yamada T, Sawada M, Goto H, Fukuno K, Kitagawa JI, Yasuda I, Katsumura N, Takemura M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Serum soluble Fas level determines clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP and R-CHOP. J Cancer Res Clin Oncol. 2009;135:1421-1428. IF 2.485
- 2) Shimizu M, Shirakami Y, Iwasa J, Shiraki M, Yasuda Y, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Supplementation with branched-chain amino acids inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in male C57BL/KsJ-*db/db* mice. Clin Cancer Res. 2009;15:3068-3075. IF 7.338
- 3) Tatebe H, Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Yasuda Y, Tsurumi H, Moriwaki H. Acyclic retinoid synergises with valproic acid to inhibit growth in human hepatocellular carcinoma cells. Cancer Lett. 2009;285:210-217. IF 4.864
- 4) Shirakami Y, Shimizu M, Adachi S, Sakai H, Nakagawa T, Yasuda Y, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate suppresses the growth of human hepatocellular carcinoma cells by inhibiting activation of the vascular endothelial growth factor-vascular endothelial growth factor receptor axis. Cancer Sci. 2009;100:1957-1962. IF 3.846
- 5) Yasuda Y, Shimizu M, Sakai H, Iwasa J, Kubota M, Adachi S, Osawa Y, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate prevents carbon tetrachloride-induced rat hepatic fibrosis by inhibiting the expression of the PDGFR β and IGF-1R. Chem Biol Interact. 2009;182:159-164.
- 6) Goto H, Hara T, Tsurumi H, Tanabashi S, Moriwaki H. Chronic neutrophilic leukemia with congenital robertsonian translocation successfully treated with allogeneic bone marrow transplantation in a young man. Int Med. 2009;48:563-567. IF 1.037
- 7) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Oyama M, Moriwaki H. Pure erythroid leukemia with hemophagocytosis. Int Med. 2009;48:1695-1698. IF 1.037
- 8) Yasuda I, Kato T, Asano F, Okubo K, Omar S, Kako N, Yasuda S, Sano K, Soehendra N, Moriwaki H. Mediastinal lymph node staging in potentially resectable non-small cell lung cancer: A prospective comparison of CT and EUS/EUS-FNA. Respiration. 2009;78:423-431. IF 2.543
- 9) Shimizu M, Takai K, Moriwaki H. Strategy and mechanism for the prevention of hepatocellular carcinoma: phosphorylated retinoid X receptor alpha is a critical target for hepatocellular carcinoma chemoprevention. Cancer Sci. 2009;100:369-374. IF 3.846
- 10) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Nakashima M, Tsurumi H, Hirose Y, Takami T, Enya M, Mukai T, Ohnishi T, Iwata K, Tomita E, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration in patients with lymphadenopathy suspected of recurrent malignancy after curative treatment. J Gastroenterol. 2009;44:190-196. IF 3.610
- 11) Nakagawa T, Shimizu M, Shirakami Y, Tatebe H, Yasuda I, Tsurumi H, Moriwaki H. Synergistic effects of acyclic retinoid and gemcitabine on growth inhibition in pancreatic cancer cells. Cancer Lett. 2009;273:250-256. IF 4.864
- 12) Iwashita T, Yasuda I, Tsurumi H, Goto N, Nakashima M, Doi S, Hirose Y, Takami T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration biopsy for splenic tumor: a case series. Endoscopy 2009;41:179-182. IF 6.096
- 13) Hara T, Tsurumi H, Kasahara S, Ogawa K, Takada J, Imai K, Takai K, Kitagawa J, Kiyama S, Imai N, Oyama M, Takami T, Moriwaki H. Long-term survival of a patient with splenic angiosarcoma after resection, high-dose chemotherapy, and autologous peripheral blood stem cell transplantation. Int Med. 2010;49:2253-2257. IF 1.037
- 14) Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Yasuda Y, Kubota M, Adachi S, Tsurumi H, Hara Y, Moriwaki H. (-)-Epigallocatechin gallate inhibits growth and activation of the VEGF/VEGFR axis in human colorectal cancer cells. Chem Biol Interact. 2010;185:247-252.
- 15) Yoshikawa T, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Hoshi M, Kitagawa J, Kanemura N, Kasahara S, Ito H, Takemura M, Saito K, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Serum concentration of L-kynurenine

- predicts the clinical outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Eur J Haematol.* 2010;84:304-309. IF 2.785
- 16) Yasuda Y, Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Kubota M, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Pitavastatin inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ-db/db obese mice. *Cancer Sci.* 2010;101:1701-1707. IF 3.846
- 17) Imai K, Takai K, Nishigaki Y, Shimizu S, Naiki T, Hayashi H, Uematsu T, Sugihara J, Tomita E, Shimizu M, Nagaki M, Moriwaki H. Insulin resistance raises the risk for recurrence of stage I hepatocellular carcinoma after curative radiofrequency ablation in HCV-positive patients: A prospective, case-series study. *Hepatol Res.* 2010;40:376-382. IF 1.857
- 18) Onogi F, Araki H, Ibuka T, Manabe Y, Yamazaki K, Nishiwaki S, Moriwaki H. "Transmural air leak": a computed tomographic finding following endoscopic submucosal dissection of gastric tumors. *Endoscopy* 2010;42:441-447. IF 6.096
- 19) Sakai H, Yamada Y, Shimizu M, Saito K, Moriwaki H, Hara A. Genetic ablation of Tnfa demonstrates no detectable suppressive effect on inflammation-related mouse colon tumorigenesis. *Chem Biol Interact.* 2010;184:423-430.
- 20) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kozawa O, Moriwaki H. Rho-kinase regulates negatively the epidermal growth factor-stimulated colon cancer cell proliferation. *Int J Oncol.* 2010;36:585-592. IF 2.571
- 21) Iwasa J, Shimizu M, Shiraki M, Shirakami Y, Sakai H, Terakura Y, Takai K, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Dietary supplementation with branched-chain amino acids suppresses diethylnitrosamine-induced liver tumorigenesis in obese and diabetic C57BL/KsJ-db/db mice. *Cancer Sci.* 2010;101:460-467. IF 3.846
- 22) Komi Y, Sogabe Y, Ishibashi N, Sato Y, Moriwaki H, Shimokado K, Kojima S. Acyclic retinoid inhibits angiogenesis by suppressing the MAPK pathway. *Lab Invest.* 2010;90:52-60. IF 4.405
- 23) Sasaki T, Isayama H, Nakai Y, Ito Y, Kogure H, Togawa O, Toda N, Yasuda I, Hasebe O, Maetani I, Sasahira N, Hirano K, Tsujino T, Tada M, Omata M. Multicenter, phase II study of gemcitabine and S-1 combination chemotherapy in patients with advanced biliary tract cancer. *Cancer Chemother Pharmacol.* 2010;65:1101-1107. IF 2.759
- 24) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Shimizu M, Moriwaki H. Cell Cycle-Dependent Priming Action of Granulocyte Colony-Stimulating Factor (G-CSF) Enhances in vitro Apoptosis Induction by Cytarabine and Etoposide in Leukemia Cell Lines. *J Clin Exp Hematop.* 2010;50:99-105.
- 25) Yasuda I, Iwashita T, Doi S, Nakashima M, Moriwaki H. Role of EUS in early detection of small pancreatic cancer. *Dig Endosc.* 2011;23 (Suppl. 1):22-25. IF 0.946
- 26) Tanaka Y, Hayashi Y, Kato J, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Kimura A, Hozumi I, Hatano Y, Hirose Y, Takami T, Nakamura H, Kasahara S, Tsurumi H, Moriwaki H, Inuzuka T. Diffuse skeletal muscles uptake of [18F] fluorodeoxyglucose on positron emission tomography in primary muscle peripheral T-cell lymphoma. *Intern Med.* 2011;50:2021-2024. IF 1.037
- 27) Shimizu M, Sakai H, Shirakami Y, Iwasa J, Yasuda Y, Kubota M, Takai K, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Acyclic retinoid inhibits diethylnitrosamine-induced liver tumorigenesis in obese and diabetic C57BLKS/J-+(db)/+Lepr(db) mice. *Cancer Prev Res.* 2011;4:128-136. IF 4.978
- 28) Shimizu M, Sakai H, Shirakami Y, Yasuda Y, Kubota M, Terakura D, Baba A, Ohno T, Hara Y, Tanaka T, Moriwaki H. Preventive effects of (-)-epigallocatechin gallate on diethylnitrosamine-induced liver tumorigenesis in obese and diabetic C57BL/KsJ-db/db Mice. *Cancer Prev Res.* 2011;4:396-403. IF 4.978
- 29) Shimizu M, Yasuda Y, Sakai H, Kubota M, Terakura D, Baba A, Ohno T, Kochi T, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Pitavastatin suppresses diethylnitrosamine-induced liver preneoplasms in male C57BL/KsJ-db/db obese mice. *BMC Cancer.* 2011;11:281. IF 3.153
- 30) Adachi S, Yasuda I, Kawaguchi J, Yamauchi T, Nakashima M, Itani M, Nakamura M, Yoshioka T, Moriwaki H, Kozawa O. Ultraviolet enhances the sensitivity of pancreatic cancer cells to gemcitabine by activation of 5' AMP-activated protein kinase. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;414:53-59. IF 2.595
- 31) Kasahara S, Hara T, Tsurumi H, Goto N, Kitagawa J, Kanemura N, Yoshikawa T, Goto H, Fukuno K, Yamada T, Sawada M, Takahashi T, Takami T, Moriwaki H. Phase II study of the tetrahydropyranyl adriamycin-cyclophosphamide, vincristine, and prednisolone regimen combined with rituximab as first-line treatment for elderly patients with diffuse large B-cell lymphoma. *Leuk Lymphoma.* 2011;52:629-634. IF 2.492
- 32) Ohshima Y, Yasuda I, Kawakami H, Kuwatani M, Mukai T, Iwashita T, Doi S, Nakashima M, Hirose Y, Asaka M, Moriwaki H. EUS-FNA for suspected malignant biliary strictures after negative endoscopic transpapillary brush cytology and forceps biopsy. *J Gastroenterol.* 2011; 46: 921-928. IF 3.610
- 33) Goto N, Tsurumi H, Sawada M, Kanemura N, Hara T, Kasahara S, Kito Y, Takada K, Sato Y, Yoshino T, Moriwaki H, Takami T. Follicular variant of peripheral T-cell lymphoma mimicking follicular lymphoma: a case report with a review of the Literature. *Pathol Int.* 2011;61:326-330.
- 34) Goto N, Tsurumi H, Kasahara S, Kanemura N, Hara T, Yasuda I, Shimizu M, Murakami N, Sawada M, Yamada T, Takemura M, Seishima M, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum interleukin-18 level is

- associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP or R-CHOP regimens. *Eur J Haematol.* 2011;87: 217-227. IF 2.785
- 35) Kitagawa J, Hara T, Tsurumi H, Ninomiya S, Ogawa K, Adachi S, Kanemura N, Kasahara S, Shimizu M, Moriwaki H. Synergistic growth inhibition in HL-60 cells by the combination of acyclic retinoid and vitamin K(2). *J Cancer Res Clin Oncol.* 2011;137:779-787. IF 2.485
- 36) Yamauchi T, Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Yoshioka T, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Ultra-violet irradiation induces apoptosis via mitochondrial pathway in pancreatic cancer cells. *Int J Oncol.* 2011;39:1375-1380. IF 2.571
- 37) Ohnishi R, Yasuda I, Kato T, Tanaka T, Kaneko Y, Suzuki T, Yasuda S, Sano K, Doi S, Nakashima M, Hara T, Tsurumi H, Murakami N, Moriwaki H. Combined endobronchial and endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration for mediastinal nodal staging of lung cancer. *Endoscopy.* 2011;43:1082-1089. IF 6.096
- 38) Kubota M, Shimizu M, Sakai H, Yasuda Y, Ohno T, Kochi T, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Renin-angiotensin system inhibitors suppress azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ-*db/db* obese mice. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;410:108-113. IF 2.595
- 39) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kawaguchi J, Itani M, Yoshioka T, Matsushima-Nishiwaki R, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Phosphorylation status of heat shock protein 27 plays a key role in gemcitabine-induced apoptosis of pancreatic cancer cells. *Cancer Lett.* 2011;313:218-225. IF 4.864
- 40) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Hoshi M, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Shimizu M, Ito H, Saito K, Hirose Y, Yamada T, Takahashi T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase in tumor tissue indicates prognosis in patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Ann Hematol.* 2011;90:409-416. IF 1.867
- 41) Ninomiya S, Kanemura N, Tsurumi H, Kasahara S, Hara T, Yamada T, Moriwaki H. Coexistence of inversion 16 and the Philadelphia chromosome comprising P190 BCR/ABL in chronic myeloid leukemia blast crisis. *Int J Hematol.* 2011;93:806-810. IF 1.324
- 42) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Ogawa Y, Seishima M, Hirose Y, Moriwaki H. Myelofibrosis successfully treated with prednisolone in a patient with pachydermoperiostosis. *Intern Med.* 2011;50:2207-2211. IF 1.037
- 43) Tatsukawa H, Sano T, Fukaya Y, Ishibashi N, Watanabe M, Okuno M, Moriwaki H, Kojima S. Dual induction of caspase 3- and transglutaminase-dependent apoptosis by acyclic retinoid in hepatocellular carcinoma cells. *Mol Cancer.* 2011;10:4. IF 3.779
- 44) Hatano Y, Hirose Y, Matsunaga K, Kito Y, Yasuda I, Moriwaki H, Osada S, Yoshida K, Hara A. Combined adenomatoid tumor and well differentiated papillary mesothelioma of the omentum. *Pathol Int.* 2011;61:681-685.
- 45) Takatsu N, Nakamura M, Yanai S, Kaya H, Morito T, Sato Y, Moriwaki H, Sakamoto C, Niwa Y, Goto H, Chiba T, Matsumoto T, Ennishi D, Kinoshita T, Yoshino T. Primary gastrointestinal follicular lymphoma involving the duodenal second portion is a distinct entity: a multicenter, retrospective analysis in Japan. *Cancer Sci.* 2011;102:1532-1536. IF 3.846
- 46) Hassanein MK, Suetsugu A, Saji S, Moriwaki H, Bouvet M, Moossa AR, Hoffman RM. Stem-like and non-stem human pancreatic cancer cells distinguished by morphology and metastatic behavior. *J Cell Biochem.* 2011;112:3549-3554. IF 3.122
- 47) Nishiwaki S, Inamoto Y, Imamura M, Tsurumi H, Hatanaka K, Kawa K, Suzuki R, Miyamura K. Reduced-intensity versus conventional myeloablative conditioning for patients with Philadelphia chromosome-negative acute lymphoblastic leukemia in complete remission. *Blood.* 2011;117:3698-3699. IF 10.558
- 48) Sun-Young Lee, Yasuda K, Yasuda I, Lawrence Ky Ho, Su-Young Ahn, Tae Yoon Lee, Chan Sup Shim. Different managements for esophageal epithelial neoplasms between the Japanese, Singaporean, and Korean endoscopists. *The Korean Journal of Helicobacter and Upper Gastrointestinal Research.* 2011; 11:59-64.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：玉井 浩，研究分担者：森脇久隆；脂溶性ビタミン脂溶性ビタミン総合研究委員会：核レチノイド受容体蛋白を分子標的としたがん化学予防に関する研究；平成 21-23 年度；450 千円（150：150：150 千円）
- 2) 研究代表者：中村祐輔，研究分担者：森脇久隆；科学研究費補助金新学術領域研究：がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動；平成 22-26 年度；31,400 千円（16,400：15,000 千円）
- 3) 研究代表者：森脇久隆，研究分担者：清水雅仁；科学研究費補助金基盤研究(C)：核内受容体 RXR を分子標的とした合成レチノイド併用肝発癌化学予防に関する研究；平成 21-23 年度；3,500 千円（1,300：1,100：1,100 千円）

2) 受託研究

- 1) 森脇久隆：核レチノイド受容体蛋白を分子標的としたがん化学予防に関する研究；平成 21－23 年度；450 千円；(150：150：150 千円)：脂溶性ビタミン
- 2) 森脇久隆, 清水雅仁：肥満関連肝発癌における合成レチノイドの予防効果；平成 20－21 年度；200 千円(100：100 千円)：興和創薬
- 3) 森脇久隆:RXR α 遺伝子改変マウスを用いた非環式レチノイド標的遺伝子の解析;平成 22 年度;1,000 千円(内, 230 千円間接経費)：興和(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

森脇久隆：

- 1) 日本内科学会評議員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会財団評議員(～現在)
- 3) 日本肝臓学会評議員(～現在)
- 4) 日本ビタミン学会理事(～現在)
- 5) 日本臨床代謝学会評議員(～現在)
- 6) 日本癌学会評議員(～現在)
- 7) 日本栄養食糧学会評議員(～現在)
- 8) 日本静脈経腸栄養学会監事(～現在)
- 9) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)

鶴見 寿：

- 1) 日本臨床血液学会評議員(～現在)
- 2) 日本血液学会代議員(～現在)
- 3) 日本輸血学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本臨床腫瘍学会評議員(～現在)
- 5) 日本内科学会支部評議員(～現在)

原 武志：

- 1) 日本血液学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

森脇久隆：

- 1) 日本内科学会誌(英文)；査読委員(～現在)
- 2) 日本消化器病学会誌(英文)；編集委員(～現在)
- 3) 日本静脈経腸栄養学会誌；編集委員(～現在)

鶴見 寿：

- 1) Trends in Hematological Malignancies；編集アドバイザー(平成 21 年度～現在)
- 2) International Journal of Hematology；査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

森脇久隆：

- 1) 第 12 回日本病態栄養学会学術集会(平成 21 年 1 月, 京都, シンポジウム I 司会)

- 2) 第 24 回日本静脈経腸栄養学会(平成 21 年 1 月, 鹿児島, 要望演題 座長)
- 3) 第 45 回日本肝臓学会総会(平成 21 年 6 月, 神戸, ハイライトレクチャー 司会)
- 4) 第 110 回日本消化器病学会東海支部例会(平成 21 年 6 月, 津, 教育講演(4) 司会)
- 5) DDW2009(肝臓学会・消化吸収学会)(平成 21 年 10 月, 岐阜, ワークショップ 11「肝・胆道疾患における栄養療法—NST のあり方」司会)
- 6) 第 96 回日本消化器病学会総会(平成 22 年 4 月, 新潟, シンポジウム 座長)
- 7) 第 36 回日本急性肝不全研究会(平成 22 年 5 月, 山形, ワークショップ 2「休肝不全新規治療法の開発とその課題」司会)
- 8) 第 46 回日本肝臓学会総会ランチョンセミナー(平成 22 年 5 月, 山形, 特別講演「肝がん抑制をめざしたインスリン抵抗性へのアプローチ」司会)
- 9) 第 60 回日本病院学会(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演 4 座長)
- 10) JDDW2010(平成 22 年 10 月, 横浜, パネルディスカッション「肝臓の再生機構を考える：今後の肝再生医療への展望」司会)
- 11) JDDW2010 ブラックファーストセミナー 2010 年度 OTSUKA Award 授与式(平成 22 年 10 月, 横浜, 特別講演「肝硬変の栄養アセスメントと栄養治療」演者)
- 12) 日本レチノイド研究会第 21 回学術集会(平成 22 年 11 月, 大阪, ランチョンセミナー「再生医療とレチノイド」演者)
- 13) 第 21 回日本レチノイド研究会(平成 22 年 11 月, 大阪, ランチョンセミナー 座長)
- 14) 第 26 回日本静脈経腸栄養学会(平成 23 年 2 月, 名古屋, ランチョンセミナー 司会)
- 15) 第 97 回日本消化器病学会総会(平成 23 年 5 月, 東京, ランチョンセミナー 19 座長)
- 16) 第 97 回日本消化器病学会(平成 23 年 5 月, 東京, ミニシンポジウム「肝臓基礎」座長)
- 17) 第 37 回日本急性肝不全研究会(平成 23 年 6 月, 東京, ランチョンセミナー「栄養療法からのアプローチ」演者)
- 18) JDDW2011(第 15 回日本肝臓学会大会)(平成 23 年 10 月, 福岡, ランチョンセミナー「肝硬変症における分岐鎖アミノ酸療法のエビデンスとメカニズム」演者)
- 19) DDW Japan2011(平成 23 年 10 月, 岐阜, シンポジウム 司会)

鶴見 寿：

- 1) 第 207 回日本内科学会東海地方会内科専門医部会(平成 21 年 2 月, 津, 内科専門医会ディスカッサント)
- 2) The 9th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society(平成 22 年 8 月, 岐阜, Mini-symposium「Recent advances in hematological malignancy 1」Chairman)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

森脇久隆：

- 1) 岐阜県身体障害者福祉協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県難病医療連絡協議会座長(～現在)
- 3) 岐阜県がん対策推進協議会座長(～現在)
- 4) 岐阜県エイズ対策推進協議会座長(～現在)
- 5) 岐阜県医療審議会委員(～現在)
- 6) 岐阜県人権懇話会委員(～現在)

鶴見 寿：

- 1) 岐阜県がん対策推進協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県エイズ対策推進協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県国民健康保険診療報酬審査委員会委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 森脇久隆：骨髄移植・植樹：中日新聞(2009年4月26日)
- 2) 鶴見 寿：がん診療連携拠点病院レポート 岐阜県におけるがん医療提供体制の充実を目指して：Oology Epoch 08, Summer(2009年；12-17)
- 3) Hara T, et al. RESEARCH HIGHLIGHTS, Fas determines outcome in DLBCL：Nature Reviews (2009;6:677)
- 4) 鶴見 寿 他：病院の実力 岐阜編 44 がん薬物療法専門医：読売新聞(2011年9月4日)

12. 自己評価

評価

立ち上げからちょうど5年を経過したが、従来の関連分野から実績を引き継ぐ形で、既に業績を挙げ始めており、良好との評価に値する。特に本講座を通して日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医を8名合格させたことは特筆できる。

現状の問題点及びその対応策

臨床腫瘍学という臓器横断的なテーマであり、人的に関連分野からのサポートが必須である。本講座独自の大学院生確保が緊急の課題である。

今後の展望

2012年度新規大学院入学生を4名確保した。研究の概要1, 2に各2名をあて、研究を推進する。

〔医療管理学講座〕

(1) 医療情報学分野

1. 研究の概要

医療情報学分野では、健康・医療・介護・福祉分野を横断する広範な領域で健康データや診療データ、あるいは関連データ（例えばレセプトデータ、医薬品有害事象報告データ）等を分析、社会に貢献できる成果を出すことを目標に実学的な研究を進めている。また、これまでの研究で培ってきた大規模データに対する分析手法は、そのまま生命科学分野におけるゲノム情報等の大規模データ分析に応用可能であることより、最近ではMR装置を用いた分子イメージング技術とシステムズ・バイオロジー分野でのダイナミクス分析技術を融合した領域に研究分野を拡大していきたいと、新しく挑戦を開始した。

そのため、非線形物理学およびネットワーク理論を用いて、多様な要素が複雑に絡まり合う生命現象を理解し、医学の発展の一助とすることを目指す。また、数学の持つ力を用いて、現在ではシミュレーションが困難な現象を計算機内で再現する新しい手法を構築することを目指している。

2. 名簿

教授： 紀ノ定保臣 Yasutomi Kinoshita
准教授： 一宮尚志 Takashi Ichinomiya

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 紀ノ定保臣. 注射に関するシステムの課題と検討事項—岐阜大学病院の場合:松村泰志編集. 医療情報システム実践シリーズ 1—注射に関するシステムの現状と課題—, 日本医療情報学会医療情報技師育成部会監修, 東京: 篠原出版新社; 2009年: 55—63.
- 2) 紀ノ定保臣. IV 医療経営管理体制構築・実施に関する知識 9. 医療経営管理論(3): 医療経営コンサルタント 21 年度指定講座・一次試験テキスト, 東京: 社団法人日本医療経営コンサルタント協会; 2009年: 317—357.
- 3) 紀ノ定保臣. 病院インテリジェント化で意識改革を: 岩堀幸司編. 病院のブランディング, 東京: ユーディ・シー; 2009年: 196—199.
- 4) 紀ノ定保臣. 情報分析・評価の目的と方法—病院管理のための情報分析—: 日本医療情報学会医療情報技師育成部会編集. 新版医療情報 医療情報システム編 第1版, 東京: 篠原出版新社; 2009年: 347—355.
- 5) 紀ノ定保臣, 岡部哲夫・藤田広志編集. 医用画像への応用(MRI): 新・医用放射線科学講座 医用画像工学, 東京: 医歯薬出版; 2010年: 155—170.
- 6) 紀ノ定保臣編著. 「医療情報セキュリティマネジメントシステム(ISMS)」: 医療経営士上級テキスト第7巻, 東京: 日本医療企画; 2010年.
- 7) 紀ノ定保臣. 次世代の医療情報システム: 医用画像ハンドブック 第10編 第5.1節, 東京: オーム社; 2010年: 1504—1507.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 紀ノ定保臣. 電子カルテ Cutting Edge 序説, 映像情報 Medical 2009年; 41巻: 485.
- 2) 紀ノ定保臣, 長瀬 清. 医療機関における ICT 戦略とマネジメントの調和を求めて, IT VISION 2009年; 18巻: 40—44.
- 3) 紀ノ定保臣, 藤岡 圭, 森田浩之, 石塚達夫. 内視鏡を含めた医療データベースの進歩, 消化器内視鏡 2009年; 21巻: 993—1001.
- 4) 紀ノ定保臣. 画像をより深く理解するために, 映像情報 Medical 2010年; 42巻: 354—355.
- 5) 紀ノ定保臣, 長瀬清. 医療の質の可視化と病院経営—蓄積されたデータの活用を目指して—, 月刊ジャーマック 2010年; 21巻: 23—27.
- 6) 紀ノ定保臣. 医療ICTの新たな挑戦分野と安全な運用をめざして, 映像情報 Medical 2010年; 42巻: 569.
- 7) 長瀬 清, 紀ノ定保臣. 急性期病院における手術部門システムの役割とその将来像, 月刊新医療 2010年; 37巻: 137—140.
- 8) 紀ノ定保臣. ヨーロッパ先進動向と日本での医療 IT 活用の課題と展望, 月刊新医療 2010年; 37巻: 122—127.
- 9) 荒井 迅, 一宮尚志, 浦本武雄, 西郷甲矢人, 蓮尾一郎, Piet Hut, 春名太一, 平岡裕章. 圏論と異分野協働, 数学セミナー 2011年; 50巻: 56—62.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 清水秀年, 宮村廣樹, 松島 秀, 村上政隆, 惠良聖一, 内山良一, 紀ノ定保臣. Equivalent Cross-Relaxation Rate Imaging を用いた耳下腺機能評価, 生体医工学 2009年; 47巻: 215-221.
- 2) 國枝琢也, 内山良一, 原 武史, 藤田広志, 加藤博基, 浅野隆彦, 兼松雅之, 星 博昭, 岩間 亨, 紀ノ定保臣, 横山和俊, 篠田 淳. 脳 MR 画像におけるラクナ梗塞と血管周囲腔拡大の鑑別法, 医用画像情報学会 2009年; 26巻: 59-63.
- 3) 浅野龍紀, 内山良一, 浅野隆彦, 加藤博基, 原 武史, 周 向荣, 岩間 亨, 星 博昭, 紀ノ定保臣, 藤田広志. MRA 画像における脳動脈領域の抽出法—大規模データベースを用いた評価—, 医用画像情報学会雑誌 2010年; 27巻: 55-60.

原著 (欧文)

- 1) Okayasu S, Nakamura M, Sugiyama T, Chigusa K, Sakurai K, Matsuura K, Yamamoto M, Kinoshita Y, Itoh Y. Development of computer-assisted biohazard safety cabinet for preparation and verification of injectable anticancer agents. *Chemotherapy*. 2009;55:234-240. IF 2.108
- 2) Shimoda H, Taniguchi K, Nishimura M, Matsuura K, Tsukioka T, Yamashita H, Inagaki N, Hirano K, Yamamoto M, Kinoshita Y, Itoh Y. Preparation of a fast dissolving oral thin film containing dexamethasone: a possible application to antiemesis during cancer chemotherapy, *Eur J Pharmaceut Biopharmaceut*. 2009;73:361-365. IF 4.304
- 3) Nakamura K, Sogami M, Era S, Matsushima S, Kinoshita Y. Comparative 1H NMR studies of saturation transfer in copolymer gels and mouse lenses. *NMR in biomedicine*. 2010;23:584-591. IF 3.064
- 4) Era S, Matsushima S, Sogami M, Kinoshita Y. In vitro and in vivo characterization of polymer-water interaction studied by an off-resonance MRI-synthetic copolymer gels and breast carcinoma. *WWMR 2010 Joint EUROMAR 2010 and 17th ISMAR Conference, Book of Abstracts*. 2010:282.
- 5) Era S, Sogami M, Uyesaka N, Kato K, Murakami M, Matsushima S, Kinoshita Y. Comparative intermolecular cross-relaxation studies of human hemoglobin in red blood cells and bovine serum albumin in solution, *NMR in Biomedicine*. 2011;24:483-491. IF 3.064

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 下村眞美, 研究分担者: 棟居快行, 藤本利一, 紀ノ定保臣; 科学研究費補助金基盤研究(C): 医療訴訟における医療情報システムのあり方に関する研究; 平成 20-22 年度; 3,500 千円 (1,200 : 1,100 : 1,200 千円)
- 2) 研究代表者: 前田利之, 研究分担者: 浅田孝幸, 伊佐田文彦, 歌代豊, 岡本直之, 紀ノ定保臣, 崔 英靖, 中田範夫, 松村真宏, 松本有二, 三浦徹志, 山本眞由美, 山本容正; 科学研究費補助金基盤研究(A): 医療組織での携帯端末の活用による医療リスク防止のための研究; 平成 19-21 年度; 32,000 千円(10,900 : 12,200 : 8,900 千円)
- 3) 研究代表者: 内山良一, 科学研究費補助金若手研究(B): ラクナ梗塞鑑別のためのコンピュータ支援診断; 平成 20-21 年度; 1,700 千円(900 : 800 千円)
- 4) 研究代表者: 一宮尚志; 科学技術振興機構『さきがけ』数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索; 数学を応用した新しい動力学シミュレーション法の開発; 平成 21-24 年度; 20,171 千円 (2,609 : 2,912 : 2,650 : 12,000 千円)
- 5) 研究代表者: 梶井英治, 研究分担者: 中村好一, 石川鎮清, 岡山雅信, 藍原雅一, 紀ノ定保臣, 関 庸一, 本多正幸, 小荒井衛, 古城隆雄; 科学研究費補助金基盤研究(A): 「地域医療データベースの活用による地域医療需要と医療資源から見た地域医療の効率化」; 平成 23-26 年度; 37,800 千円 (21,600 : 4,800 : 7,000 : 4,400 千円)

2) 受託研究

- 1) 紀ノ定保臣: 個人毎の体質に応じた個別化医療支援システムの開発; 平成 21 年度; 14,743 千円: 文部科学省
- 2) 内山良一: 大規模 MRA 画像を用いた未破裂動脈瘤検出技術の高度化とその実用化システムの開発; 平成 21 年度; 1,500 千円: 立石科学技術振興財団
- 3) 紀ノ定保臣: モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発(個人毎の体質に応じた個別化医療支援システムの開発); 平成 21-23 年度; 47,087 千円(14,743 : 16,401 : 15,943 千円): 文部科学省都市エリア産学官連携促進事業[発展型]

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 紀ノ定保臣, 亀山敦之, 速水 悟, 山本けい子, 山下広記, 武藤隆義: 健診データ処理法, 健診データ処理装置, 及び, プログラム; 平成 23 年(特許出願中)

6. 学会活動

1) 学会役員

紀ノ定保臣:

- 1) 日本磁気共鳴医学会教育委員会委員(～平成 22 年 3 月)
- 2) 日本磁気共鳴医学会代議員(～現在)
- 3) 日本生体医工学会代議員(～現在)
- 4) 日本医療情報学会評議員(～現在)
- 5) 日本医学放射線学会電子情報委員会委員(～現在)

一宮尚志:

- 1) 日本物理学会領域 11 運営委員(～現在)

2) 学会開催

紀ノ定保臣:

- 1) 患者データの 2 次利用と DWH に関する研究シンポジウム(平成 22 年 7 月, 東京)
- 2) 患者の視点に立った医療データ分析に関する研究シンポジウム(平成 23 年 7 月, 東京)

3) 学術雑誌

内山良一:

- 1) 医用画像情報学会誌; 編集委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

紀ノ定保臣:

- 1) 医業経営者セミナー(平成 21 年 2 月, 金沢, 講演「医療機関の IT 化戦略ー大規模データの活用とその効果ー」演者)
- 2) 日本ラジオロジー協会 Cyberrad2009(平成 21 年 4 月, 横浜, 講演「放射線部門を取り巻く病院内の患者動線」演者)
- 3) 特定非営利活動法人 新潟情報通信研究所 第四回通常総会(平成 21 年 5 月, 新潟, 講演「医療と健康, システムと運用, これまでとこれから」演者)
- 4) 第 13 回日本医療情報学会春季学術大会(シンポジウム 2009)(平成 21 年 6 月, 長崎, 「地域医療連携による情報蓄積と活用」座長)
- 5) 第 13 回日本医療情報学会春季学術大会(シンポジウム 2009)(平成 21 年 6 月, 長崎, 「患者動線の可視化と分析に関する考察」演者)
- 6) 第 13 回日本医業経営コンサルタント学会(平成 21 年 6 月, 金沢, 一般演題(情報化認定コンサルタント)座長)
- 7) 平成 21 年度医業経営コンサルタント指定講座(平成 21 年 7 月, 東京, 講演「医業経営管理論: 情報管理」演者)
- 8) 平成 21 年度認定看護管理者制度「セカンドレベル教育課程」(平成 21 年 9 月, 兵庫, 講演「看護管理を支援する情報技術」演者)
- 9) 第 37 回日本磁気共鳴医学会大会(平成 21 年 10 月, 横浜, 講演「それぞれの k-空間」座長)
- 10) 第 37 回日本磁気共鳴医学会大会(平成 21 年 10 月, 横浜, 「SWI の基礎」座長(教育講演))
- 11) 第 37 回日本磁気共鳴医学会大会(平成 21 年 10 月, 横浜, 「新しいパラメータ ECR」座長(教育講演))
- 12) 医療情報システムの革新と情報セキュリティ講演会(平成 21 年 10 月, 名古屋, 基調講演「電子カルテシステムとデータの有効活用, そして個人情報保護」演者)
- 13) 日本医療機器産業連合会企業倫理委員会講習会(平成 21 年 10 月, 東京, 講演「医療機関のコンプライアンス」演者)

- 14) 日本医学放射線学会秋季臨床大会 第22回電子情報学会(平成21年10月, 和歌山, 「遠隔画像診断」座長)
- 15) 情報化認定コンサルタント指定講座(平成21年10月, 東京, 講演「情報化資源調達支援: ベンダ選定手順提案」 演者)
- 16) 情報化認定コンサルタント指定講座(平成21年10月, 東京, 講演「情報化運用支援: 意思決定活用支援」 演者)
- 17) 日本医療情報学会(平成21年11月, 広島, 「アソシエーション分析: DWHからの関連ルールの生成」 演者)
- 18) 日本医療情報学会(平成21年11月, 広島, 「DWHに蓄積されたデータの活用ー業務支援型から意思決定支援型の病院情報システムへー」 演者)
- 19) 鈴木謙三記念財団法人医科学応用研究財団第56回学術講演会(平成21年11月, 名古屋, 講演「岐阜大学病院診療情報システムの誕生記」 演者)
- 20) (社)日本医業経営コンサルタント協会(平成21年12月, 東京, 講演「CIT継続研修 医療の質の可視化と病院経営ー蓄積されたデータの活用を目指してー」 演者)
- 21) 先端創薬医療シンポジウム(平成21年12月, 岐阜, 講演「大規模データの蓄積とデータマイニング」 演者)
- 22) 薬剤師キャリアアップレクチャー第3回(平成22年2月, 大阪, 特別講演「医薬品データベースと薬剤疫学」 演者)
- 23) 日本眼科医療機器協会平成21年度定時総会(平成22年3月, 東京, 講演「これからの医療機関と医療機器のあり方」 演者)
- 24) 国際医療福祉大学大学院公開講座 医療におけるデータマイニング技術の活用とその価値を知る(データマイニング講座)(平成22年5月, 東京, 講演「創薬におけるデータマイニング技術の活用事例」 演者)
- 25) 第14回日本医療情報学会春季学術大会(平成22年5月, 高松, 「口演セッション2」 座長)
- 26) 第49回日本生体医工学学会(平成22年6月, 大阪, 「福祉工学」 座長)
- 27) 株式会社帝国建設コンサルタント 第22回社内技術発表会(平成22年7月, 岐阜, 特別講演「スマートな都市の設計を目指して」 演者)
- 28) 患者データの2次利用とDWHに関する研究シンポジウム(平成22年7月, 東京, 講演「医療機関における外来患者動線の分析とその最適化」 演者)
- 29) 患者データの2次利用とDWHに関する研究シンポジウム(平成22年7月, 東京, パネルディスカッション「地域医療連携をスコープに入れたデータ活用のあり方について」 座長)
- 30) 平成22年度医業経営コンサルタント指定講座(平成22年度7月, 東京, 講演「医業経営管理論: 情報管理」 演者)
- 31) 国際モダンホスピタルショー2010 Yahgeeスペシャル・プライベート・セミナー(平成22年7月, 東京, 講演「これからの医療情報システムとヤギー社への期待」 演者)
- 32) 平成22年度公取協医器販協支部 九州ブロック研修会(平成22年9月, 福岡, 講演「医療機関におけるコンプライアンス」 演者)
- 33) トレーサビリティセミナー(平成22年10月, 神戸, 講演「医療機関における外来患者動線の分析とその最適化」 演者)
- 34) InterSystems in Healthcare Seminar 2010(平成22年10月, 東京, 基調講演「ヨーロッパ先進動向と日本での医療IT活用における課題と展望」 演者)
- 35) 日本医療情報学会(平成22年11月, 浜松, 「臨床経済/医療評価」 座長)
- 36) 第15回日本医療情報学会春季学術大会・シンポジウム「医療機関に求められるデータ2次利用の形態とその実現に必要な基盤」(平成23年6月, 東京, 講演「医療機関におけるプロセスデータの解析技術とその応用」 演者)
- 37) 第15回日本医療情報学会春季学術大会・シンポジウム「広域医療における情報の統合と活用」(平成23年6月, 東京, 講演「健診データを用いた将来の健康リスク予測と関連データのレコメンデーション」 演者)
- 38) 第15回日本医療情報学会春季学術大会・シンポジウム「広域医療における情報の統合と活用」(平成23年6月, 東京, 「広域医療における情報の統合と活用」 座長)
- 39) 製薬天城セミナー(平成23年7月, 静岡, 講演「医療情報利活用の最新動向」 演者)
- 40) 患者の視点に立った医療データ分析に関する研究シンポジウム(平成23年7月, 東京, 講演「大規模データの活用求められる人材の育成と環境の整備」 演者)

- 41) 患者の視点に立った医療データ分析に関する研究シンポジウム(平成 23 年 7 月, 東京, 「求められる技術・人材とスキルの育成」座長)
- 42) 平成 23 年度医業経営コンサルタント指定講座(平成 23 年 7 月, 東京, 講演「医業経営管理論(3)「情報管理の基本・情報システム等」演者」)
- 43) IBM サイエンス・シンポジウム「Healthcare in 2030」(平成 23 年 7 月, 東京, 講演「高齢者が元気で経済活動の重要なプレイヤーとなる社会を目指して」演者)
- 44) 平成 23 年度第一回病院経営管理研修会(平成 23 年 9 月, 東京, 基調講演「病院経営状況の視覚化」演者)
- 45) 平成 23 年度認定看護管理者制度「セカンドレベル教育課程」(平成 23 年 11 月, 兵庫, 講演「看護管理を支援する情報技術」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

紀ノ定保臣：

- 1) 岐阜県医師会勤務医部会 IT 委員会委員長(～現在)
- 2) 岐阜県医師会情報システム委員会委員(～現在)
- 3) 全国健康保険協会岐阜支部評議会議長(平成 21 年度～現在)
- 4) 岐阜県医師会勤務医部会学術委員(～現在)
- 5) 地域医療情報研究開発機構理事長(平成 23 年度～現在)

一宮尚志：

- 1) 独立行政法人科学技術振興機構研究開発戦略センター「電子情報通信分野俯瞰プロジェクト V」未来研究開発検討委員会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 紀ノ定保臣：学生支援における IT 化の将来について：全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会報告書：50-55(平成 21 年 1 月)
- 2) 紀ノ定保臣：医療分野における課題と提言：財団法人地球科学技術総合推進機構 新技術振興渡辺記念会 平成 21 年度科学技術(調査研究)助成事業「複合画像情報共有化技術に関する調査研究」成果報告書：27-36(平成 22 年 3 月)
- 3) 紀ノ定保臣：個人毎の体質に応じた個別化医療支援システムの開発：文部科学省地域イノベーションクラスタープログラム(都市エリア型)岐阜県南部エリア研究成果発表会「モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発」：41-50(平成 23 年 2 月)

11. 報道

- 1) 紀ノ定保臣：データマイニングで薬害予防：中部経済新聞(2009 年 12 月 23 日)
- 2) 紀ノ定保臣：最先端医療座談会「日進月歩の医用画像情報技術～秘められた魅力と可能性を語る」：科学新聞(2010 年 6 月 25 日)
- 3) 紀ノ定保臣：蓄積された医療情報を活用し、安全・安心な医療提供システムを構築：日経サイエンス第 40 巻第 7 号(2010 年 7 月 1 日)
- 4) 紀ノ定保臣：ヨーロッパ先進動向と日本での医療 IT 活用における課題と展望：株式会社インナービジョン インナビネット(2010 年 11 月 12 日)
- 5) 紀ノ定保臣：IT による医療構造改革には政府のイニシアティブと成果検証が必要：日経メディカルオンライン(2010 年 11 月 15 日)
- 6) 紀ノ定保臣：インターシステムズ・セミナー「世界の医療連携システムの現状と国内外の事例を紹介」：月刊新医療 第 37 巻第 12 号(No.432)(2010 年 12 月 1 日)
- 7) 紀ノ定保臣：「InterSystems in Healthcare Seminar 2010」セミナーレポート「医療現場を支援する IT 活用～接続連携された医療を目指して～」：日経ヘルスケア 2011 年 1 月号 (2011 年 1 月 5 日)

12. 自己評価

評価

研究分野をこれまでの古典的な医療情報分野の領域から、生命科学の発展を取り込んだ新しい医療情報学分野の領域にシフトさせるため、今後の発展が期待される分子イメージング分野、ゲノム・代謝パス・シグナルパス分野、生命現象のダイナミクスを扱うシステムズ・バイオロジーの融合領域に拡大しつつある途中であり、現時点では十分な研究成果を挙げるまでには至っていない。これまでの準備期間を経て、次年度以降は成果が出せる研究室に変身したい。

現状の問題点及びその対応策

古典的な医療情報学分野では、病院の電子カルテシステムの構築や運用、診療データの二次活用に関する研究が中心であった。一方、今後の診療にはゲノムデータやモリキュラー・イメージ、各種最先端のバイオマーカーが多用されることを念頭に、これらのデータを効率的・効果的に活用できる新しい医療情報学分野に変身する必要があると考えている。しかし、残念ながら研究室にはこのような新しい分野に精通した人材が充分いないことが理由で、研究成果の伸び悩みが起きている。

今後は、他研究室あるいは他研究機関との連携を積極的に推進し、活力があり、独自性のある新しい医療情報学分野に変身できるように邁進する予定である。

今後の対応策を以下に示す。

1) 平成 23 年度から 4 年間の科学研究費補助金基盤研究(A)：「地域医療データバンクの活用による地域医療需要と医療資源から見た地域医療の効率化」(研究代表者：梶井英治、研究分担者：中村好一、石川鎮清、岡山雅信、藍原雅一、紀ノ定保臣、関 庸一、本多正幸、小荒井衛、古城隆雄)を目的に、全国のレセプトデータを収集・データベース化・分析する研究を開始した。地域中核医療機関の再生を目的に、地理情報を活用した地域医療再生モデルの作成・実践・検証をする予定であり、社会に貢献する研究である。

2) 米国 FDA が有する医薬品有害事象報告書 (AERS : Adverse Event Reporting System) の大規模データを網羅的に分析できる環境が今年度末に完成することより、医薬品の有害事象情報、患者背景情報、薬理情報、代謝・信号パスウェイ情報等を統合的に分析する研究を推進する。このような研究環境は国内では初めてであり、世界的にも例が少ない。独創的な研究成果が出せると期待している。

3) 大阪大学を基幹校とする連合小児発達学研究所(大阪大学、金沢大学、浜松医科大学、福井大学、千葉大学等が構成校)が進める小児発達障害に関する大規模データ(ゲノムデータ、PET画像/MEGデータ、MR画像データ、各種観察データ)等の収集・データベース化・分析システムの構築と運用について本研究室が中心になって実施することを既に決定している。これらデータを統合的に研究することにより、本研究室の活動を活性化する予定である。また、新しい医療情報学分野の研究領域創設に繋げる予定である。

今後の展望

今後の展望として、医学系の他の領域と積極的に交流を持ち、共同研究を推進したい。特に次世代の医療情報学分野を創設するためにも、上述した今後の研究活動とともに、新たな非線形物理学やネットワーク理論と生命科学を融合させていく研究を立ち上げる予定である。

(2) 総合病態内科学分野

1. 研究の概要

1) Dehydroepiandrosterone (DHEA)の抗肥満・抗糖尿病効果に関する研究

DHEA がインスリン作用を伝達するシグナルとして必須な phosphatidyl inositol 3 kinase を活性化する事、更にその下流の protein kinase C- ζ を活性化する事、PPAR γ の発現を減少させる事などをこの頃報告したが、2009 年度には前脂肪細胞の増殖を抑制する事を見出した。また DHEA と testosterone の前脂肪細胞の増殖抑制に対する用量作用曲線がほぼ同等である事、androgen receptor (AR) をノックダウンするとこの作用が失われる事から、DHEA の作用は AR を介していると考えられるようになった。

2) 成熟脂肪細胞の増殖に関する研究

現在多くの研究者は“成熟脂肪細胞は終末分化を遂げた細胞で、増殖能はない”と考えている。しかしこの根拠となる明らかな証拠は報告されていない。梶田は成熟脂肪細胞も増殖すると考え、in vivo でのチミジンアナログである BrdU の取り込み、培養脂肪細胞での細胞数の増加、フローサイトメトリーによる cell cycle などの知見からこれを確かめた。更に pioglitazone により、特に皮下脂肪でこれが促進する事を見出した。そして pioglitazone により誘導される増殖因子をスクリーニングして、proliferin という、GH/prolactin family に属する蛋白に注目した。2010 年度には proliferin の下流に sphingosine 1 phosphate が関与しているのではないかとという仮説のもとに、検討をしている。

3) 旋毛虫感染による糖尿病改善機序に関する研究

多くの慢性炎症では耐糖能は悪化する事が多いが、寄生虫感染ではこれが改善した。その機序として、近年注目されている脂肪組織の炎症が、寄生虫感染により改善されたと考えられた。

4) p140-Cap の膵 β 細胞における役割、糖尿病発症への関与に関する研究

愛知県コロニーの永田浩一先生との共同研究で、もともと脳に多く発現している p140-Cap という蛋白が膵 β 細胞にも発現している事が見出され、この機能の解析を行っている。現在、主に糖尿病モデルである OLETF と GK ラットの膵 β 細胞において、p140-Cap がどのように発現されているかを検討している。

5) ステロイド糖尿病に対する治療に関する研究

グルココルチコイドは、肝での糖新生亢進、筋・脂肪細胞での糖取り込み低下、高グルカゴン血症などを介して耐糖能を低下させ、血糖値を上昇させる。このためしばしばインスリンを使用する必要が出てくるが、それをグルココルチコイド投与前に予測することが可能かどうかについて、またその因子とカットオフ値に関して研究を進めている。また、血糖依存性に血糖低下作用を発現し、グルカゴン分泌を抑制する GLP-1 アナログによるステロイド糖尿病治療の有用性もインスリン治療との比較で検討中である。

6) 腎機能障害とピロリ菌感染に関する研究

江南市の佐藤病院との共同研究で、糖尿病患者や血液透析患者で上部消化管内視鏡検査を行う機会がしばしばあるが、その際ピロリ菌感染率に健常者と差がみられないかについて継続的に研究している。透析患者では非透析患者に比べピロリ菌感染率が低いことは知られているが、その原因については良く知られていない。腎機能との関連で、ピロリ菌感染がどのように減少してゆくのかを検討している。

7) 発熱患者の鑑別診断に関する研究

発熱患者の原因は非常に多岐にわたり、診断にも難渋することが多い。発熱の 3 大疾患は、感染症、膠原病、腫瘍である。細菌感染症に注目し、血液培養陽性予測因子の解明についての研究を行っている。また、最近臨床応用されるようになったプロカルシトニンの発熱患者における臨床的意義についても研究している。

8) 携帯電話 EMA を用いた生活習慣病改善に関する研究

生活習慣病の治療は薬物療法によるところが大きいですが、同時に生活習慣の改善も重要である。しかし、月 1 回程度の外来通院では、その際に十分な生活指導を行っても、時が経ては忘れてしまったりして、自己管理を継続するのが困難になってくる。そこで、医師から患者の携帯電話に定期的に自動で電子メールを送り、それに返答してもらうという EMA システムを導入している。それによって行動変容の維持に繋がり、生活習慣病の改善や薬物の減量に結びつくかについて研究を行っている。

2. 名簿

教授：	石塚達夫	Tatsuo Ishizuka
准教授：	森田浩之	Hiroyuki Morita
講師：	梶田和男	Kazuo Kajita
助教：	池田貴英	Takahide Ikeda

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 石塚達夫. 脂肪肝を伴った 2 型糖尿病の薬物療法: 堀田 饒, 柏木厚典, 清野 裕, 中村二郎編. 糖尿病 UP・DATE 賢島セミナー25, 対糖尿病戦略のイノベーション 予知・予防から治療へ, 東京: 時事通信社; 2009 年; 110-123.
- 2) 石塚達夫. 感染症(その他の合併症): 河盛隆造, 岩本安彦編, 糖尿病最新の治療 2010-2012, 東京: 南江堂; 2009 年; 240-243.
- 3) 清野 裕, 加来浩平, 山田祐一郎, 石塚達夫, 荒木栄一. 糖尿病の危篤化を未然に防ぐ薬物療法: 堀田 饒, 柏木厚典, 清野 裕, 中村二郎編. 糖尿病 UP・DATE 賢島セミナー25, 対糖尿病戦略のイノベーション 予知・予防から治療へ, 東京: 時事通信社; 2009 年; 136-151.
- 4) 森田浩之. 日常生活のいろいろな症状: 山本真由美編. 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理, 岐阜: 岐阜新聞社; 2009 年; 54-59.
- 5) 森田浩之. 副腎皮質ステロイドホルモン抵抗症および過敏症: 島田 馨編. 内科学書, 改訂第 7 版, 東京: 中山書店; 2009 年; 173-175.
- 6) 森田浩之. 内科医の立場から: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010 年; 1-6.
- 7) 森田浩之. かゆみ・イライラ感: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 Jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010 年; 75-78.
- 8) 岡田英之. 嘔気・嘔吐: 森田浩之. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010 年; 88-93.
- 9) 藤岡 圭. 全身倦怠感: 森田浩之. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010 年; 120-125.
- 10) 石塚達夫, 森田浩之, 宇野嘉弘, 藤岡 圭, 岡田英之, 森 一郎. 糖尿病治療に必要な知識 3, ステロイド投与時および周術期の血糖管理: 日本糖尿病学会編. 糖尿病学の進歩 2010, 第 44 集, 東京: 診断と治療社; 2010 年; 71-75.
- 11) 森田浩之. ミズーリ大学への留学(アメリカ合衆国 コロンビア): 岐阜大学教養教育推進センター編. 日本脱出! 留学のすすめ教養 ブックレット Vol.3, 岐阜: (株)みらい; 2010 年; 84-85.
- 12) 石塚達夫, 池上博司, 内村 功, 佐倉 宏, 西川武志, 濱田洋司, 檜尾好徳, 森田浩之, 吉岡成人. 日本糖尿病学会編: 糖尿病学用語集 第 3 版, 東京: 文光堂; 2011 年.
- 13) 石塚達夫. BG 薬と α -GI 薬の効果的な使い方と留意点: 管理と治療からみた対糖尿病戦略, 糖尿病 UP・DATE 賢島セミナー27, 糖尿病治療薬のイノベーション 病態に応じた選択と治療のすすめ方, 東京: 時事通信社; 2011 年; 102-111.
- 14) 堀田 饒, 河盛隆造, 石塚達夫, 住田安弘, 荒木栄一. 管理と治療からみた対糖尿病戦略, 糖尿病 UP・DATE 賢島セミナー27, 糖尿病治療薬のイノベーション 病態に応じた選択と治療のすすめ方, 東京: 時事通信社; 2011 年; 132-151.

著書 (欧文)

- 1) Ishizuka T, Kajita K, Fujioka K, Hanamoto T, Ikeda T, Mori I, Yamauchi M, Okada H, Usui T, Takahashi N, Morita H, Uno Y, Miura A. Effect of dehydroepiandrosterone on insulin sensitivity and adipocyte growth in Otsuka Long-Evans Tokushima-Fatty Rats, In: Zimering MB, ed, Topics in the Prevention Treatment and Complications of Type 2 Diabetes, Rijeka, Croatia: InTech; 2011:127-144.

総説 (和文)

- 1) 石塚達夫. 第 61 回学術の集い, 肥満, 2 型糖尿病と脂肪肝-NAFLD・NASH の診断と治療-, 名古屋内科医会誌 2009 年; 132 号: 46-56.
- 2) 石塚達夫. インスリン注射に不安をもつ 2 型糖尿病患者のマネジメント, 治療 2009 年; 91 巻(臨増): 186-187.
- 3) 石塚達夫. 総合内科専門医とプライマリ・ケア現実をみつめ, 将来の展望へ-, 日本内科学会雑誌 2009 年; 98 巻: 182-186.
- 4) 森田浩之. JTTA 2008 in GIFU を終えて, 日本遠隔医療学会雑誌 2009 年; 5 巻: 44-45.
- 5) 石塚達夫. 2010 年度役員紹介, 理事挨拶, 日本遠隔医療学会雑誌 2010 年; 6 巻: 81.
- 6) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 岩砂和雄, 北村和也, 竹村洋典, 森田浩之, 保住 功, 宇野嘉弘, 加藤純大, 井上昌夫. 第 8 回東海支部内科専門医部会教育セミナー, プライマリ・ケアと総合医, 日本内科学会雑誌 2010 年; 99 巻: 176-182.
- 7) 石塚達夫, 杉本元信, 田妻 進, 内藤俊夫, 古庄憲浩. 座談会 大学病院における総合診療科/部はどうあるべきか, 臨牀と研究 2010 年; 87 巻: 166-177.
- 8) 石塚達夫. 症候からみた診断ロジック戦略的片頭痛診断・治療, 意識障害治療 2011 年; 93 巻: 67-73.
- 9) 石塚達夫. リウマチ診療の進歩, 内科会だより 2011 年.
- 10) 野方文雄, 河村洋子, 森田浩之, 宇野嘉弘. シリーズ 医工連携を歩く「第 17 回」頸動脈 4 次元画像化と硬化評価システムの開発, 映像情報 Industrial 2011 年; 43 巻: 50-53.
- 11) 野方文雄, 河村洋子, 森田浩之, 宇野嘉弘. シリーズ 医工連携を歩く「第 17 回」頸動脈 4 次元画像化と硬化評価システムの開発, 映像情報 Medical 2011 年; 43 巻: 909-912.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 池田貴英, 藤岡 圭, 森 一郎, 宮内ルミ子, 宇野嘉弘, 森田浩之, 梶田和男, 石塚達夫. 吸収不良症候群, 蛋白漏出性胃腸症を合併した関節リウマチの1例, 日本内科学会雑誌 2009年; 98巻: 138-140.
- 2) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 牛越博昭, 川田憲一, 長浜貴彦, 難波大夫, 宮崎 仁. 第5回東海支部内科専門医部会教育セミナー, プライマリ・ケアにおける疼痛疾患の診断, 日本内科学会雑誌 2009年; 98巻: 199-206.
- 3) 森田浩之, 宇野嘉弘, 石塚達夫, 松原健治. シリーズ: 考えてみようー持続性の右上腹部痛を主訴に来院した62歳の男性ー, 日本内科学会雑誌 2009年; 98巻: 207-208, 236-238.
- 4) 紀ノ定保臣, 藤岡 圭, 森田浩之, 石塚達夫. 内視鏡を含めた医療データベースの進歩, 消化器内視鏡 2009年; 21巻: 993-1001.
- 5) 藤岡 圭, 岡田英之, 藤掛貴敏, 森 一郎, 池田貴英, 宮内ルミ子, 松原健治, 宇野嘉弘, 梶田和男, 森田浩之, 石塚達夫. 中枢神経徴候で発症したACTH単独欠損症の2例, 日本内分泌学会雑誌 2009年; 85巻 (Suppl): 38-41.
- 6) 森 一郎, 梶田和男, 池田貴英, 藤岡 圭, 宇野嘉弘, 森田浩之, 石塚達夫. 副腎アンドロゲン, dehydroepiandrosterone のアンドロゲン受容体を介した脂肪細胞増殖抑制効果, 岐阜県内科医会雑誌 2009年; 23巻: 71-74.
- 7) 森田浩之, 宇野嘉弘, 吉川 新, 梶田和男, 藤岡 圭, 岡田英之, 山内雅裕, 花本貴幸, 石塚達夫. 在宅健康管理システムの活性化ー質問とメッセージによるユーザと管理者の双方向利用ー, 日本遠隔医療学会雑誌 2009年; 5巻: 238-240.
- 8) 森田浩之, 宇野嘉弘, 梶田和男, 藤岡 圭, 岡田英之, 山内雅裕, 花本貴幸, 石塚達夫. 携帯電話を利用したecological momentary assessmentは疾病をどの程度改善できるか? 日本遠隔医療学会雑誌 2009年; 5巻: 124-125.
- 9) 影山慎一, 井口光孝, 大曲貴夫, 鶴見 寿, 高木健裕, 佐藤元紀, 藤木 源, 牛田 宣, 保井光仁, 兼松孝好, 今泉貴広, 鈴木富雄, 袴田康弘, 石塚達夫, 草深裕光. 第6回東海支部内科専門医部会教育セミナー, 発熱・腰痛が半年間持続する56歳の男性, 日本内科学会雑誌 2009年; 98巻: 187-194.
- 10) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 朝田和博, 井本一郎, 高橋茂清, 渡辺宏久, 中川直樹, 宇野嘉弘, 森田浩之. 第7回東海支部内科専門医部会教育セミナー(まとめ), 最新の画像診断, 日本内科学会雑誌 2009年; 98巻: 167-175.
- 11) 岡田英之, 藤掛貴敏, 藤岡 圭, 森 一郎, 池田貴英, 森田浩之, 梶田和男, 石塚達夫, 長井孝太郎, 葛谷昭司. サイアザイド感受性Na⁺-CI共輸送体遺伝子に新規の変異を確認したGitelman症候群の1例. 日本内科学会雑誌 2010年; 99巻: 152-154.
- 12) 岡田浩之, 宇野嘉弘, 池田貴英, 岡田英之, 山内雅裕, 森 一郎, 高橋典子, 臼井太郎, 梶田和男, 石塚達夫. 携帯電話ecological momentary assessmentの肥満2型糖尿病に対する効果. 日本遠隔医療学会雑誌 2010年; 6巻: 123-124.
- 13) 宇野嘉弘, 森田浩之, 梶田和男, 岡田英之, 藤岡 圭, 山内雅裕, 花本貴幸, 石塚達夫. 心肺音シミュレータ「イチロー」による, 卒後研修医に対する心臓聴診における, 基本的臨床診察技能教育の検証. 日本病院総合診療医学会雑誌 2010年; 1巻: 46-47.
- 14) 森田浩之, 梶田和男, 藤岡 圭, 岡田英之, 山内雅裕, 花本貴幸, 石塚達夫, 宇野嘉弘. 在宅健康管理システムの利用活性化. 日本病院総合診療医学会雑誌 2010年; 1巻: 52-53.
- 15) 梶田和男, 森 一郎, 岡田英之, 花本貴幸, 山内雅裕, 藤岡 圭, 宇野嘉弘, 森田浩之, 石塚達夫. ケトアシドーシスとの鑑別を要した周期性嘔吐症合併2型糖尿病の1例. 日本病院総合診療医学会雑誌 2010年; 1巻: 71-72.
- 16) 奥村陽子, 松本茂美, 吉田隆浩, 熊田恵介, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 岐阜大学医学部地域医療医学センターにおける地域医療研修のとりくみと研修医及び指導医アンケート調査 地域医学 2011年; 25巻: 56-61.
- 17) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 村上啓雄, 橋本迪子, 坂部茂俊, 大曲貴夫, 玉川達雄. 第10回東海支部教育セミナーまとめ, 注目すべき感染症 日本内科学会雑誌 2011年; 100巻: 1434-1442.
- 18) 松本茂美, 奥村陽子, 清島真理子, 熊田恵介, 吉田隆浩, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 岐阜県における病院内保育所の現状 地域医学 2011年; 25巻: 558-562.
- 19) 田口皓一郎, 久保田一生, 伊藤裕子, 木村 豪, 寺本貴英, 加藤善一郎, 近藤直実. 小児の原発性皮膚ノカルジア症の1例, 小児科診療 2011年; 74巻: 322-326.
- 20) 森田浩之, 岡田宏基, 辻 正次, 郡 隆之, 柏木賢治, 斎藤勇一郎, 長谷川高志, 滝沢正臣, 太田隆正, 峰滝和典, 米澤麻子, 酒巻哲夫. 在宅脳血管疾患・がん患者を対象とした遠隔診療ー多施設後ろ向き症例対照研究ー在宅脳血管疾患・がん患者を対象とした遠隔診療ー多施設後ろ向き症例対照研究ー, 日本遠隔医療学会雑誌 2011年; 7巻: 39-44.
- 21) 岡 宏次, 鈴木晶子, 袴田康弘, 廣瀬武司, 香村彰宏, 池上 良, 尾辺利英, 宮崎晋一, 青沼宏深, 藤井恒宏, 鈴木富雄, 石塚達夫. 第11回東海支部専門医部会教育セミナー原因不明の頭痛・倦怠感で入院し, 入院後に胸痛と片麻痺を発症した81歳女性, 日本内科学会雑誌 2011年; 100巻: 2302-2311.
- 22) 長谷川高志, 酒巻哲夫, 辻 正次, 岡田宏基, 森田浩之, 郡 隆之, 柏木賢治, 斎藤勇一郎, 米澤麻子, 峰滝和典, 滝沢正臣, 太田隆正, 山口義正, 岩澤由子, 菅原英次, 東福寺幾夫. 厚生労働省科学研究費補助金研

究・遠隔医療研究班 2010 年度研究報告—遠隔診療の社会的進展, 日本遠隔医療学会雑誌 2011 年;7 卷: 132-135.

- 23) 梶田和男, 森 一郎, 岡田英之, 臼井太郎, 山内雅裕, 高橋典子, 宇野嘉弘, 森田浩之, 石塚達夫. ロサルタン, エナラプリルとアムロジピン投与による血小板凝集能への影響, 日本病院総合診療医学会雑誌 2011 年; 2 卷: 34-35.
- 24) 森田浩之, 池田貴英, 森 一郎, 岡田英之, 臼井太郎, 高橋典子, 山内雅裕, 藤岡 圭, 宇野嘉弘, 梶田和男, 石塚達夫. 当科における発熱患者, 日本病院総合診療医学会雑誌 2011 年; 2 卷: 49-50.
- 25) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 安藤貴文, 後藤秀実, 大野 康, 袴田康弘, 松本勝久, 臼井康臣, 森田浩之, 大野善太郎. 第 12 回東海支部内科専門医部会教育セミナー免疫異常による内科疾患, 日本内科学会雑誌 2011 年; 100 卷: 3373-3380.
- 26) 山内雅裕, 高橋典子, 臼井太郎, 岡田英之, 森 一郎, 池田貴英, 宇野嘉弘, 森田浩之, 梶田和男, 石塚達夫. タクロリムスが有効であった MPO-ANCA 陽性脊髄肥厚性硬膜炎の 1 例, 日本病院総合診療医学会雑誌 2011 年; 2 卷: 103-104.
- 27) 池田貴英, 臼井太郎, 高橋典子, 岡田英之, 森 一郎, 山内雅裕, 宇野嘉弘, 森田浩之, 梶田和男, 石塚達夫. 感染性心内膜炎術後に脾動脈瘤を発症した 1 例, 日本病院総合診療医学会雑誌 2011 年; 2 卷: 128-129.
- 28) 森田浩之. 発熱患者の診方・考え方, 岐阜県内科医会雑誌 2011 年; 25 卷: 29-57.
- 29) 池田貴英, 梶田和男, 森 一郎, 臼井太郎, 高橋典子, 岡田英之, 山内雅裕, 藤岡 圭, 宇野嘉弘, 梶田和男, 石塚達夫. 旋毛虫感染による耐糖能改善効果に関する検討, 岐阜県内科医会雑誌 2011 年; 25 卷: 77-80.

原著 (欧文)

- 1) Wu Z, Nagano I, Kajita K, Nishina M, Takahashi Y. Hypoglycaemia induced by Trichinella infection is due to the increase of glucose uptake in infected muscle cells. *Int J Parasitol.* 2009;39:427-434. IF 3.822
- 2) Ikeda T, Kajita K, Zhiliang W, Hanamoto T, Mori I, Fujioka K, Okada H, Fujikake T, Uno Y, Morita H, Nagano I, Takahashi Y, Ishizuka T. Effects of phorbol ester-sensitive PKC (c/nPKC) activation on the production of adiponectin in 3T3-L1 adipocytes. *IUBMB Life.* 2009;61:644-650. IF 4.251
- 3) Ohashi M, Shu E, Tokuzumi M, Fujioka K, Ishizuka T, Hara A, Fujimoto M, Kaji K, Seishima M. Anti-p155/140 antibody-positive dermatomyositis with metastasis originating from an unknown site. *Acta Derm Venereol.* 2011;91:84-85. IF 3.010

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 酒巻哲夫, 研究分担者: 原量 宏, 吉田晃敏, 辻 正次, 岡田宏基, 森田浩之, 本間聡起, 長谷川高志; 厚生労働科学研究費補助金: 在宅医療への遠隔医療実用実施手順の策定; 平成 21 年度; 5,000 千円
- 2) 研究代表者: 石塚達夫, 研究分担者: 清島 満, 清島真理子, 山内雅裕, 藤岡 圭, 村瀬香奈, 梶田和男, 永田浩一; 岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」: p140Cao のインスリン分泌における役割解明プロジェクト: 膵βcell における p140Cap のインスリン分泌における役割; 平成 21 年度; 1,000 千円
- 3) 研究代表者: 森田浩之, 研究分担者: 石塚達夫, 宇野嘉弘; 科学研究費補助金基盤研究(C): メタボリックシンドローム患者の行動変容—携帯電話 EMA の効果—; 平成 22-23 年度; 2,860 千円 (1,430 : 1,430 千円)
- 4) 研究代表者: 小島 至, 研究分担者: 梶田和男, 石塚達夫, 森 一郎, 梶田淑子; 成熟脂肪細胞の増殖因子としての, proliferin(PLF)の意義に関する検討; 群馬大学生体調節研究所内分泌・代謝学共同研究拠点共同研究; 平成 22-23 年度: 1,200 千円(900 : 300 千円)
- 5) 研究代表者: 梶田和男; 大学活性化経費(研究: 科研採択支援); 成熟脂肪細胞の増殖因子としてのプロリフェリンの意義; 平成 23 年度; 1,000 千円
- 6) 研究代表者: 酒巻哲夫, 研究分担者: 辻 正次, 岡田宏基, 森田浩之, 柏木賢治, 郡 隆之, 齋藤勇一郎, 石塚達夫; 厚生労働科学研究費補助金: 遠隔医療技術活用に関する諸外国と我が国の実態の比較調査研究; 平成 22-23 年度; 20,000 千円(10,000 : 10,000 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 石塚達夫, 森田浩之, 梶田和雄, 花本貴幸, 山内雅裕, 藤岡 圭, 岡田英之, 宮内ルミ子, 谷本真由実: 在宅血圧・心電図の長期データとイベント発症との関連; 平成 21 年度: 1,200 千円: イセツト(株)

- 2) 石塚達夫, 森田浩之, 梶田和男, 池田貴英:在宅血圧・心電図の長期データとイベント発症との関連;
平成 23 年度; 1,200 千円: イセツト(株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 野方文雄, 森田浩之, 宇野嘉弘: 発明の名称: 補正装置; 平成 18 年出願(特許第 4729706 号)平成 23 年登録

6. 学会活動

1) 学会役員

石塚達夫:

- 1) 日本内科学会評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本内科学会専門医部会東海支部長(～現在)
- 4) 日本内科学会専門医部会役員(～現在)
- 5) 日本糖尿病学会学術評議員(～現在)
- 6) 日本糖尿病学会「治療の手びき」編集委員会委員(～現在)
- 7) 日本糖尿病学会糖尿病用語集編集委員会委員長(～現在)
- 8) 日本糖尿病学会“糖尿病対策地域担当委員”(～現在)
- 9) 日本糖尿病学会中部支部専門医委員会委員(～現在)
- 10) 日本糖尿病協会国際委員(～現在)
- 11) 日本糖尿病療養指導士認定機構認定委員会委員(～現在)
- 12) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 13) 日本内分泌学会東海支部監事(～現在)
- 14) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 15) 日本遠隔医療学会理事(～平成 23 年 6 月)
- 16) 日本病院総合診療医学会理事(平成 21 年 10 月～現在)
- 17) 日本糖尿病療養指導士認定機構試験委員会委員(～現在)

宇野嘉弘:

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本病院総合診療医学会評議員(平成 21 年 12 月～現在)

森田浩之:

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本糖尿病学会評議員(～現在)
- 3) 日本糖尿病学会糖尿病用語集編集委員(～現在)
- 4) 日本糖尿病学会専門医認定委員会委員(平成 21 年 4 月～現在)
- 5) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 6) 日本ステロイドホルモン学会評議員(～現在)
- 7) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 8) 日本病院総合診療医学会評議員(平成 21 年 12 月～現在)
- 9) 日本内科学会認定内科医・総合内科専門医試験問題作成委員会世話人(～平成 22 年 11 月)
- 10) 日本遠隔医療学会理事(平成 23 年 7 月～現在)

梶田和男:

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 3) 日本病態栄養学会評議員(～現在)
- 4) 日本病院総合診療医学会評議員(平成 21 年 12 月～現在)

2) 学会開催

石塚達夫:

- 1) 第 207 回日本内科学会東海支部地方会併催第 6 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 21 年 2 月,

津)

- 2) 第 8 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 21 年 3 月, 岐阜)
- 3) 第 208 回日本内科学会東海支部地方会併催第 7 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 21 年 6 月, 名古屋)
- 4) 第 209 回日本内科学会東海支部地方会併催第 8 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 21 年 10 月, 岐阜)
- 5) 第 210 回日本内科学会東海地方会併催第 9 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 22 年 2 月, 名古屋)
- 6) 第 212 回日本内科学会東海地方会併催第 10 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 22 年 10 月, 名古屋)
- 7) 第 213 回日本内科学会東海地方会併催第 11 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 23 年 2 月, 津)
- 8) 第 214 回日本内科学会東海地方会併催第 12 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 23 年 6 月, 名古屋)
- 9) 第 215 回日本内科学会東海地方会併催第 13 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 23 年 10 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

石塚達夫:

- 1) 日本病院総合診療医学会雑誌; 編集委員(平成 22 年 10 月~現在)
- 2) 日本遠隔医療学会雑誌; 編集委員長(平成 23 年 10 月~現在)

森田浩之:

- 1) 日本遠隔医療学会雑誌; 編集委員(~現在)

森 一郎:

- 1) 日本遠隔医療学会雑誌; 編集委員(平成 23 年 10 月~現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

石塚達夫:

- 1) 第 43 回糖尿病学の進歩(平成 21 年 2 月, 松本, 「神経障害」座長)
- 2) 第 17 回日本総合診療医学会学術集会(平成 21 年 2 月, 福岡, 教育講演「総合診療の視点から見た胃食道逆流症(GERD)」座長)
- 3) 第 8 回日本内分泌学会東海支部学術集会(平成 21 年 3 月, 岐阜, ランチョンセミナー「コルチゾールの基礎と臨床」座長)
- 4) 第 52 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 21 年 5 月, 大阪, 教育講演「糖尿病性自律神経障害」座長)
- 5) 第 208 回日本内科学会東海支部地方会併催第 7 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 21 年 6 月, 名古屋, シンポジウム「最新の画像診断」座長)
- 6) 第 209 回日本内科学会東海支部地方会併催第 8 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 21 年 10 月, 岐阜, シンポジウム「プライマリ・ケアと総合医」座長)
- 7) 第 1 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 22 年 2 月, 福岡, 講演「総合診療医からみた糖尿病治療と現状と課題~DPP4 阻害薬への期待を含めて~」演者)
- 8) 第 44 回糖尿病学の進歩(平成 22 年 3 月, 大阪, 講演「糖尿病診療に必要な知識 3 ステロイド使用時及び周術期の血糖管理」演者)
- 9) 第 212 回日本内科学会東海地方会併催第 10 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 22 年 10 月, 名古屋, 教育セミナー「注目すべき感染症」座長)
- 10) 第 54 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 23 年 5 月, 札幌, 教育講演「インスリン療法の up to date」座長)
- 11) 第 214 回日本内科学会東海地方会併催第 12 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 23 年 6 月, 名古屋, 教育セミナー「免疫異常による内科疾患」座長)
- 12) 第 3 回日本病院総合診療医学会学術総会(平成 23 年 9 月, 東京, シンポジウム「総合診療科(部)における臨床研究」座長)

森田浩之：

- 1) 第 17 回日本総合診療医学会学術集会(平成 21 年 2 月, 福岡, 一般演題, 座長)
- 2) 第 52 回日本糖尿病学会年次学術集会(平成 21 年 5 月, 大阪, 一般演題「運動療法 1」座長)

宇野嘉弘：

- 1) 第 215 回日本内科学会東海地方会併催第 13 回東海支部専門医部会教育セミナー(平成 23 年 10 月, 岐阜, 教育セミナー「研修指導医のための心音教育セミナー」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 森田浩之：平成 21 年度日本遠隔医療学会優秀論文賞(平成 21 年度)

9. 社会活動

石塚達夫：

- 1) 岐阜県糖尿病対策推進協議会副会長(～現在)
- 2) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員(～現在)

森田浩之：

- 1) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 22 年度)

10. 報告書

- 1) 森田浩之：Skype を用いた遠隔診療の実際：在宅医療への遠隔医療実用実施手順の策定：平成 21 年度厚生労働省科学研究費補助金 総括・分担報告書(酒巻班)：29-37(平成 21 年 3 月)
- 2) 森田浩之：携帯電話を利用した ecological momentary assessment に関する研究：厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 平成 21 年度総合報告書(酒巻班) 在宅医療への遠隔医療実用実施手順の策定の研究(H20-医療-一般-034) 平成 20~21 年度 総合研究報告書：57-66(平成 22 年 3 月)
- 3) 森田浩之：携帯電話を利用した ecological momentary assessment に関する研究：厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 平成 21 年度分担研究年度終了報告書(酒巻班) 在宅医療への遠隔医療実用実施手順の策定の研究(H20-医療-一般-034) 平成 21 年度 総括・分担研究報告書：67-76(平成 22 年 3 月)
- 4) 野方文雄, 横田康成, 河村洋子, 森田浩之, 宇野嘉弘：心臓運動を見る計測技術-胸部微小振動にもとづく可視化-：平成 22 年度岐阜大学人間医工学研究開発センター成果報告書：イメージ&機能解析部門：9-10(平成 23 年 3 月)
- 5) 酒巻哲夫, 辻 正次, 岡田宏基, 森田浩之, 柏木賢治, 郡 隆之, 斎藤勇一郎, 滝沢正臣, 太田隆正, 峰滝和典, 東福寺幾夫, 田中志子, 長谷川高志, 岩澤由子：厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業) 遠隔医療技術活用に関する諸外国と我が国の実態の比較調査研究(H22-医療-指定-043)：平成 22 年度総括・分担研究報告書(平成 23 年 3 月)

11. 報道

- 1) 石塚達夫：～遠隔医療ガイドライン策定～JTTA2008 in Gifu 平成 20 年度日本遠隔医療学会記事, Medical Tribune (2009 年 1 月 1 日)
- 2) 石塚達夫：ステロイド使用時及び周術期野血糖管理：DITN, 387, 8 (2010 年 6 月 5 日)
- 3) 石塚達夫：特集=病院総合診療医による研究と臨床の最前線, 内分泌・代謝領域 ～糖尿病に関連して～, MEDICAMENT NEWS, 2018, 7-10(2010 年 6 月 15 日)
- 4) 梶田和男：「研究室から 大学はいま」：脂肪細胞, 限りない可能性 岐阜新聞(2011 年 3 月 8 日)
- 5) 森田浩之：先生こんにちは～ KNG(社団法人日本リウマチ友の会岐阜県支部特集)(2011 年 8 月号：12-13)

12. 自己評価

評価

2012 年 3 月で総合診療部開設 13 年となり, 総合病態内科学分野となつてからでも 8 年となる。医局も附属病院から医学部に 2006 年 4 月に移転し, ラボを持たたことによって基礎的研究が可能になった。現在では, 総合内科的な見地から特色のある研究を基礎・臨床の両面から行っている。少ない教室員の

人数を勘案すると、大学院生に対する研究指導、国際学会での発表等に関しては標準レベルであると考えている。しかし、総合病態内科学分野としての社会的な認知や独自性を考えると、外部資金、論文、特許、研究や発明に関する新聞報道はまだまだ少ない。

現状の問題点及びその対応策

人的余裕がなく、研究立案、研究費申請、データ収集・解析、論文記載など、研究に費やす時間がかなり不足しているのが現状である。役割分担を明確化し、仕事の重複が少なくなるように見直し、効率化を計って英語論文数を増やしてゆきたい。人的不足に対しては、臨床研修や臨床実習に力を入れることによって、総合内科の役割や魅力を研修医や医学生に認識してもらい、多くの入局者を迎えらるるよう努力してゆきたい。社会的な認知度不足に対しては、特に地域医療や臨床疫学について学会での発表や論文化とともに、新聞社への報道依頼も積極的に行ってゆきたい。また、ホームページによる情報提供は有効な手段であるため、是非充実させていきたい。

今後の展望

医局員も徐々にではあるが増えてきて、研究環境も整ってきている。臨床の場から生まれる疑問を発端とし、総合内科として特徴的な基礎研究と臨床研究を推進してゆきたい。基礎研究では思いがけない着想から発して、種々の研究手法を駆使して多面的に検討したレベルの高い研究を行ってゆきたい。臨床研究では、全国の総合内科医とネットワークを形成し、複数の施設で複数の共同研究を同時に行い、臨床的エビデンスを発信してゆきたい。

(3) 臨床薬学分野

1. 研究の概要

臨床薬学分野における研究項目は、1) 医薬品等の定量法の確立に関する研究、2) 薬物体内動態の解析に基づく医薬品適正使用推進に関する研究、3) 医薬品の新規剤型の開発とその臨床応用に関する研究、4) 医療情報システムを活用した医療安全確保に関する研究、5) 抗がん剤に対する耐性発現の細胞内メカニズムの解明に関する研究、6) 抗がん剤による副作用発現メカニズムの解明と予防・治療法の確立に関する研究、さらには7) 既存の医薬品から新規の作用を発見し医薬品開発に繋げる drug re-profiling 研究などである。医薬品等の定量に関する研究では、高速液体クロマトグラフィー (HPLC) と蛍光検出器、電気化学検出器、紫外吸光度計、エレクトロスプレー・タンデムマスマスペクトロメトリーやガスクロマトグラフィーなどの測定機器を駆使することにより、アセトアミノフェンやベンゾジアゼピンなどの中毒患者での定性ならびに血中濃度測定のみならず、生体内スフィンゴリン脂質の定量に活用している。また、薬物体内動態の解析に基づく医薬品適正使用推進に関する研究では、抗 MRSA 薬のバンコマイシンやテイコプラニンの初期不可投与設計に関する研究、救急領域における重症患者での腎機能の指標としてシスタチン C を用いた糸球体ろ過量の推測式から抗菌薬の TDM (投与量や投与法の決定) の確立などの研究を行っている。新規剤型の開発に関する研究では、岐阜県内の企業 (株) ツキオカとの共同研究で制吐剤のデキサメタゾンやプロクロルペラジンを含む超薄型口腔内速溶解フィルム製剤を開発し、これをがん化学療法時における悪心・嘔吐予防薬として適用するための研究を進めている。医療情報システムを活用した医療安全確保に関する研究では、コンピュータを内蔵した抗がん剤注射薬の混合調製のための安全キャビネットを世界で初めて開発し、抗がん剤の取り間違いや投与量間違いによる医療過誤の防止に役立っている。また、抗がん剤に対する耐性発現に関する研究では、医学部や岐阜薬科大学との共同研究において、大腸がん細胞でのオキサリプラチンに対する耐性に細胞内セラミド代謝酵素のスフィンゴシンキナーゼの過剰発現が関与することを見出し、セラミドに関連する細胞内シグナルと耐性発現との関連について研究を進めている。Drug re-profiling 研究では、がん患者での放射線化学療法による口内炎に対して亜鉛含有化合物であるポラプレジックが優れた予防効果を発揮することを見出し、口腔内貼付剤もしくは懸濁剤の剤型で「口内炎予防薬」として開発するプロジェクトを製薬企業および (株) ツキオカとの共同研究により進めている。

2. 名簿

教授： 伊藤善規 Yoshinori Itoh

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 伊藤達雄, 伊藤善規(分担執筆). モデル・コアカリキュラムに沿ったわかりやすい病院実務実習テキスト, 東京:じほう; 2009年.
- 2) 伊藤善規, 岡安伸二(分担執筆). 山本真由美監修. 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理, 岐阜:岐阜新聞社; 2009年.
- 3) 足立哲夫, 網岡克雄(分担執筆). 2009年版 実習に行く前の覚える医薬品集-服薬指導に役立つ-. 東京:廣川書店; 2009年.
- 4) 伊藤善規, 安田浩二(分担執筆). 福田 保, 他編集; 第5版 疾患と今日の処方, 東京:医歯薬出版; 2009年.
- 5) 伊藤善規(分担執筆). モデル・コアカリキュラムに沿ったわかりやすい病院実務実習テキスト, じほう; 2010年.
- 6) 足立哲夫, 網岡克雄(分担執筆). 2010年版 実習に行く前の覚える医薬品集-服薬指導に役立つ-. 廣川書店; 2010年.
- 7) 飯原大稔(分担執筆). 最新制吐対策. 月刊薬事, 東京:じほう; 2011年.
- 8) 飯原大稔(分担執筆). 外来患者の服薬支援: 支持療法(イメンド)の処方患者 調剤と情報, 東京:じほう; 2011年.
- 9) 伊藤善規, 安田浩二他(分担執筆). 松田重三, 他編集. 薬学生のための臨床実習マニュアル, 東京:医学評論社; 2011年.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 丹羽 隆, 伊藤善規. 感染制御トピックス [2] 医療関連感染サーベイランス, 月刊薬事 2009年; 51巻: 1849-1852.

- 2) 鈴木昭夫, 丹羽 隆, 伊藤善規. 患者の腎・肝・心機能を考慮した投与設計, 月刊薬事 2009年; 51巻: 1853-1857.
- 3) 丹羽 隆, 伊藤善規. 感染制御のテクニク②院内ラウンドでの介入, 抗MRSA薬 薬局 2009年; 60巻: 2559-2564.
- 4) 丹羽 隆, 伊藤善規. メカニズムから理解する疾患と薬物治療: 尿路感染症, ApoTalk 2009年; 8巻: 6-7.
- 5) 松田公子, 宮本 篤, 伊藤善規, 江口久恵, 大倉輝明, 加勢泰子, 下村光一, 白石 正, 丹原敏男, 仲村スイ子, 早狩 誠, 松原和夫, 源川奈穂, 堀内龍也. 医療の質向上のためのチーム医療への薬剤師の関与とその成果に関する論文実例集(1)がん化学療法領域における薬剤師の取り組みと成果, 日本病院薬剤師会雑誌 2011年; 47巻: 983-1002.
- 6) 松田公子, 宮本 篤, 伊藤善規, 江口久恵, 大倉輝明, 加勢泰子, 下村光一, 白石 正, 丹原敏男, 仲村スイ子, 早狩 誠, 松原和夫, 源川奈穂, 堀内龍也. 医療の質向上のためのチーム医療への薬剤師の関与とその成果に関する論文実例集(2)感染制御領域における薬剤師の取り組みと成果, 日本病院薬剤師会雑誌 2011年; 47巻: 1231-1240.
- 7) 松田公子, 宮本 篤, 伊藤善規, 江口久恵, 大倉輝明, 加勢泰子, 下村光一, 白石 正, 丹原敏男, 仲村スイ子, 早狩 誠, 松原和夫, 源川奈穂, 堀内龍也. 医療の質向上のためのチーム医療への薬剤師の関与とその成果に関する論文実例集(3)TDM領域, 日本病院薬剤師会雑誌 2011年; 47巻: 1373-1383.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 渡辺享平, 野村佳代, 大津史子, 後藤伸之, 須田範行, 松浦克彦, 宮崎靖則, 山川雅之, 山口雅也, 渡辺一宏, 中村敏明, 政田幹夫. センチネルリンパ節生検用色素製剤の市販化に向けた使用・調製実態調査, 医療薬学 2009年; 35巻: 722-728.
- 2) 下田浩欣, 松浦克彦, 伊藤善規. タダラフィル錠(アドシルカ[®]錠 20 mg) 粉碎時の安定性に関する試験, 日本病院薬剤師会 2010年; 46巻: 1374-1376.
- 3) 大林浩幸, 宮川武彦, 古井秀彦, 小林 博, 松浦克彦, 伊藤善規. 岐阜県病院薬剤師会登録の全施設における院内吸入指導の実態調査, 岐阜県医師会医学雑誌 2011年; 24巻: 83-90.

原著 (欧文)

- 1) Taguchi K, Iihara H, Ishihara M, Komori Y, Tanizawa K, Matsuura K, Itoh Y. Comparison of antiemetic efficacy between single and repeated treatments with a 5-HT₃ receptor antagonist in breast cancer patients with high-risk emetogenic chemotherapy. *Anticancer Res.* 2009;29:1721-1725. IF 1.656
- 2) Niwa T, Suzuki A, Sakakibara S, Kasahara S, Yasuda M, Fukao A, Matsuura K, Goto C, Itoh Y. Implication of body mass index and renal dysfunction in linezolid-induced thrombocytopenia. *Clin Ther.* 2009;31:2126-2133. IF 2.551
- 3) Okayasu S, Nakamura M, Chigusa K, Sakurai K, Matsuura K, Yamamoto M, Kinosada Y, Itoh Y. Development of computer-assisted biohazard safety cabinet for preparation and verification of injectable anticancer agents. *Chemotherapy.* 2009;55:234-240. IF 2.108
- 4) Nishimura M, Matsuura K, Tsukioka T, Yamashita H, Inagaki N, Sugiyama T, Itoh Y. In vitro and in vivo characteristics of prochlorperazine oral disintegrating film. *Int J Pharmac.* 2009;368:98-102. IF 3.607
- 5) Shimoda H, Taniguchi K, Nishimura M, Matsuura K, Tsukioka T, Yamashita H, Inagaki N, Hirano K, Yamamoto M, Kinosada Y, Itoh Y. Preparation of a fast dissolving oral thin film containing dexamethasone: a possible application to antiemesis during cancer chemotherapy. *Eur J Pharm Biopharm.* 2009;73:361-365. IF 4.304
- 6) Kawashiri T, Egashira N, Itoh Y, Shimazoe T, Ikegami Y, Yano T, Yoshimura M, Oishi R. Neurotropin reverses the paclitaxel-induced neuropathy without affecting anti-tumour efficacy. *Eur J Cancer.* 2009;45:154-163. IF 4.944
- 7) Ishihara M, Naoi K, Hashita M, Itoh Y, Suzui M. Growth inhibitory activity of ethanol extracts of Chinese and Brazilian propolis in four human colon carcinoma cell lines. *Oncol Rep.* 2009;22:349-354. IF 1.686
- 8) Nakamura M, Ohmori T, Itoh Y, Terashita M, Hirano K. Simultaneous determination of benzodiazepines and their metabolites in human serum by liquid chromatography-tandem mass spectrometry using a high-resolution octadecyl silica column compatible with aqueous compounds. *Biomed Chromatogr.* 2009;23:357-364. IF 1.545
- 9) Yano T, Itoh Y, Kawamura E, Maeda A, Egashira N, Nishida M, Kurose H, Oishi R. Amphotericin B-induced renal tubular cell injury is mediated by Na⁺ influx through ion-permeable pores and subsequent activation of MAP kinases and elevation of intracellular Ca²⁺. *Antimicrob Agents Chemother.* 2009;53:1420-1426. IF 4.672
- 10) Nemoto S, Nakamura M, Osawa Y, Kono S, Itoh Y, Okano Y, Murate T, Hara A, Ueda H, Nozawa Y, Banno Y. Sphingosine kinase isoforms regulate oxaliplatin sensitivity of human colon cancer cells through ceramide accumulation and Akt activation. *J Biol Chem.* 2009;284:10422-10432. IF 5.328
- 11) Ishihara M, Iihara H, Okayasu S, Yasuda K, Matsuura K, Suzui M, Itoh Y. Pharmaceutical

- interventions facilitate premedication and prevent opioid-induced constipation and emesis in cancer patients. *Support Care Cancer*. 2010;18:1531-1538. IF 2.058
- 12) Maeda A, Yano T, Itoh Y, Kakumori M, Kubota T, Egashira N, Oishi R. Down-regulation of RhoA is involved in the cytotoxic action of lipophilic statins in HepG2 cells. *Atherosclerosis* 2010;208:112-118. IF 4.086
- 13) Naoi K, Sunagawa N, Morioka T, Nakashima M, Ishihara M, Fukamachi K, Itoh Y, Tsuda H, Yoshimi N, Suzui M. Enhancement of tongue carcinogenesis in Hras128 transgenic rats treated with 4-nitroquinoline 1-oxide. *Oncol Rep*. 2010;23:337-344. IF 1.686
- 14) Niwa T, Imanishi Y, Ohmori T, Matsuura K, Murakami N, Itoh Y. Significance of individual adjustment of initial loading dosage of teicoplanin based on population pharmacokinetics. *Int J Antimicrob Agent*. 2010;35:507-510. IF 3.787
- 15) Watanabe T, Ishihara M, Matsuura K, Mizuta K, Itoh Y. Polaprezinc prevents oral mucositis associated with radiochemotherapy in patients with head and neck cancer. *Int J Cancer*. 2010;127:1984-1990. IF 4.926
- 16) Suzuki A, Imanishia Y, Nakano S, Niwa T, Ohmori T, Shirai K, Yoshida S, Furuta N, Takemura M, Ito H, Ieiri I, Seishima M, Ogura S, Itoh Y. Usefulness of serum cystatin C to determine the dose of vancomycin in critically ill patients. *J Pharm Pharmacol*. 2010;62:901-907. IF 1.918
- 17) Imanishi Y, Matsui K, Ishida K, Ito S, Matsuura K, Deguchi T, Itoh Y. Pharmacokinetic properties of once-daily oral formulation of tacrolimus in patients with renal transplantation. *Arzneimittel-Forsch*. 2011;61:191-196. IF 0.632
- 18) Ohmori T, Suzuki A, Niwa T, Ushikoshi H, Shirai K, Yoshida S, Ogura S, Itoh Y. Simultaneous determination of eight β -lactam antibiotics in human serum by liquid chromatography-tandem mass spectrometry. *J Chromatogr B*. 2011;879:1038-1042. IF 2.971
- 19) Fujii H, Iihara H, Matsuura K, Takahashi T, Yoshida K, Itoh Y. Evaluation of efficacy and safety of generic levofolinate in patients who received colorectal cancer chemotherapy. *Medical Oncol*. 2011;28:488-493. IF 2.210
- 20) Okayasu S, Matsuura K, Kondoh Y, Tsuruta E, Takashima E, Suzuki M, Nagai T, Yasuda K, Itoh Y. A survey of incidence of diarrhea associated with a single-dose azithromycin formulation in collaboration with hospital pharmacy and community pharmacies. *Pharmazie*. 2011;66:226-229. IF 0.869
- 21) Ishihara M, Kitaichi K, Matsuura K, Nakamura H, Tsurumi H, Moriwaki H, Itoh Y. Rikkunshi-to partially reverses cancer chemotherapy-induced decrease in plasma valproic acid concentration in a patient with malignant lymphoma. *Chinese Med*. 2011;2:58-61. IF 0.983
- 22) Takeshita M, Banno Y, Nakamura M, Otsuka M, Teramachi H, Tsuchiya T, Itoh Y. The pivotal role of intracellular calcium in oxaliplatin-induced inhibition of neurite outgrowth but not cell death in differentiated PC12 cells. *Chem Res Toxicol*. 2011;24:1845-1852. IF 4.148

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：飯原大稔；科学研究費補助金奨励研究：デキサメタゾン含有フィルム製剤の開発と抗がん剤投与時の制吐における有用性の研究；平成 21 年度；510 千円
- 2) 研究代表者：今西義紀；科学研究費補助金奨励研究：テイコプラニンの初期負荷投与設計の完全実施に向けた取り組み；平成 21 年度；600 千円
- 3) 研究代表者：鈴木昭夫；科学研究費補助金奨励研究：救急領域におけるシスタチン C を腎機能マーカーとした抗菌薬投与設計に関する研究；平成 21 年度；470 千円
- 4) 研究代表者：丹羽 隆；科学研究費補助金奨励研究：リネゾリドによる副作用の骨髄抑制発現における要因解析と対策に関する研究；平成 21 年度；510 千円
- 5) 研究代表者：伊藤善規；科学研究費補助金基盤研究(C)：新規デキサメタゾン含有口腔内溶解フィルム製剤の制吐薬としての臨床評価に関する研究；平成 22-24 年度；3,300 千円(2,100：700：500 千円)
- 6) 研究代表者：石原正志；科学研究費補助金奨励研究：頭頸部癌の放射線化学療法による口内炎に対するポラプレジンの予防効果に関する研究；平成 22 年度；480 千円
- 7) 研究代表者：鈴木昭夫；科学研究費補助金奨励研究：救急領域における血清シスタチン C を用いた抗菌薬投与設計への応用に関する研究；平成 22 年度 500 千円
- 8) 研究代表者：山内恵太；科学研究費補助金奨励研究：非代償性肝硬変患者におけるシスタチン C を用いた抗菌薬投与設計の確立；平成 22 年度；540 千円
- 9) 研究代表者：西垣美奈子；科学研究費奨励研究：抗がん剤による味覚障害に対する補中益気湯とポラプレジンの比較研究；平成 23 年度；400 千円
- 10) 研究代表者：岡安伸二；科学研究費奨励研究：メトホルミン塩酸塩による下痢発現を回避するための薬剤師の積極的介入の評価；平成 23 年度；400 千円

- 11) 研究代表者：飯原大稔；科学研究費奨励研究：肺癌患者における 5HT₃受容体拮抗薬の経口剤および点滴剤の有効性と安全性の検討；平成 23 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 伊藤善規：薬剤含有フィルム製剤の開発に関する研究；平成 21 年度；800 千円；ツキオカ(株)
- 2) 伊藤善規：薬剤含有フィルム製剤の開発に関する研究；平成 22 年度；800 千円；ツキオカ(株)
- 3) 伊藤善規：薬剤含有フィルム製剤の開発に関する研究；平成 23 年度；800 千円；ツキオカ(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

伊藤善規：

- 1) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 2) 日本医療薬学会評議員(～現在)
- 3) 日本病院薬剤師会代議員(～平成 21 年)
- 4) 日本病院薬剤師会理事(平成 21 年～現在)
- 5) 日本薬学会東海支部会幹事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

伊藤善規：

- 1) 日本病院薬剤師会雑誌地域編集委員(～平成 22 年)

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

伊藤善規：

- 1) 第 25 回東海医療薬学シンポジウム(平成 21 年 7 月，名古屋，シンポジウム「安心・安全の薬物治療に向けた新たな業務」座長)
- 2) 第 19 回日本医療薬学会(平成 21 年 10 月，長崎，ランチョンセミナー「喘息と COPD の病態の違いとそれに基づく治療方法の勘案」座長)
- 3) 第 42 回東海薬剤師学術大会(平成 21 年 11 月，岐阜，ランチョンセミナー「直接的レニン阻害剤の構造と機能－アリスキレンへの期待－」座長)
- 4) 第 13 回中国病院薬学研究会(平成 22 年 2 月，岡山，特別講演「がん化学療法への薬剤師の取り組みと評価」講演)
- 5) 日本薬学会第 130 年会(平成 22 年 3 月，岡山，シンポジウム「専門薬剤師介入による薬剤業務のアウトカム評価」座長)
- 6) 日本薬学会第 130 年会(平成 22 年 3 月，岡山，シンポジウム「DRUG REPROFILING 研究 (エコファーマ)－既存薬の新しい薬効の発見－基礎ならびに臨床知見に基づくパクリタキセル過敏症予防薬としてのペミロラストの有用性」シンポジスト)
- 7) 日本薬学会第 130 年会(平成 22 年 3 月，岡山，シンポジウム「外来がん化学療法へのがん専門薬剤師の関与による診療効率の改善および安全性対策の推進」共同演者)
- 8) 医療薬学フォーラム 2010(平成 22 年 7 月，広島，シンポジウム「病院薬剤師の業務を臨床研究にするための方策：抗菌薬の適正使用の推進」共同演者)
- 9) 第 60 回日本病院学会(平成 22 年 7 月，ワークショップ「喘息治療への医・薬・薬・薬学・連携の取り組み」オーガナイザー/座長)
- 10) 医療薬学フォーラム 2010(平成 22 年 7 月，広島；「病院薬剤師の業務を臨床研究にするための方策：抗菌薬の適正使用の推進」)

- 11) 9th International Conference of The Asian Clinical Oncology Society(2010.08, Gifu, 「The role of Pharmacist for Team Oncology in Japan」 共同演者)
- 12) 日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2010 (平成 22 年 11 月, 静岡, シンポジウム「救急・集中治療領域における腎機能評価法の確立に向けた取り組み」 共同演者)
- 13) 第 4 回日本薬局学会学術総会(平成 22 年 11 月, 岐阜, 基調講演「保険薬剤師の新たななるチャレンジ」座長)
- 14) 日本病院薬剤師会東海ブロック・日本薬学会東海支部合同学術大会 2010 (平成 22 年 11 月, 静岡;「救急・集中治療領域における腎機能評価法の確立に向けた取り組み」)
- 15) 経済産業省平成 22 年度地域新成長産業創出促進委託事業 医療・福祉機器の新産業創出セミナー (平成 22 年 12 月, 岐阜;「医療現場のニーズ: 薬剤師の立場から」)
- 16) 日本薬学会東海支部特別講演会(平成 23 年 1 月, 愛知, シンポジウム「これからの薬剤師業務—救急領域における業務に基づく研究—」)
- 17) 第 26 回日本環境感染学会総会(平成 23 年 2 月, 横浜, シンポジウム「抗菌薬適正使用推進と薬剤師の役割」)
- 18) 文部科学省 GP 「6 年制薬学教育を主軸とする薬系・医系・看護系大学による広域総合教育連携」事業(平成 23 年 2 月, 名古屋, 特別講演「これからの病院薬剤師の業務」)
- 19) 第 58 回北海道薬学大会(平成 23 年 5 月, 札幌, 特別講演「今後の病院薬剤師業務～薬剤業務に基づく研究のすすめ～」)
- 20) 第 28 回岐阜県精神科病院協会薬剤師会研修会(平成 22 年 5 月, 岐阜, 特別講演「病院薬剤師の将来～専門性を活かしチーム医療へ貢献～」)
- 21) 第 27 回東海医療薬学シンポジウム(平成 23 年 6 月, 名古屋, パネルディスカッション「薬学生実務実習委員会の取り組み」)
- 22) 医療薬学フォーラム 2011 クリニカルファーマシーシンポジウム(平成 23 年 7 月, 旭川, シンポジウム「病院薬剤師によるドラッグ・リプロファイリング」; シンポジスト「高用量デキサメタゾン含有口腔内速溶解フィルムの開発と臨床応用」)
- 23) 第 73 回九州山口薬学大会(平成 23 年 11 月, 沖縄, 基調講演「医薬連携の具体例とアウトカム評価」)
- 24) 岡山県病院薬剤師会北地区研修会(平成 23 年 11 月, 津山, 特別講演「病院薬剤師の今後の業務展開を考える～専門性を活かした薬剤適正使用の推進～」)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

伊藤善規:

- 1) 岐阜県病院薬剤師会会長(～現在)
- 2) 岐阜県薬剤師会副会長(～現在)
- 3) 岐阜県糖尿病対策推進委員(～現在)
- 4) 日本病院薬剤師会理事・薬剤業務委員(平成 21 年～現在)
- 5) 日本麻酔学会週術期管理チームプロジェクト委員(平成 22 年～平成 23 年)

10. 報告書

- 1) 伊藤善規: 薬剤による血管障害の発現機序解明と予防・治療策の確立に関する研究: 平成 20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)総括・研究代表者報告書(平成 21 年 5 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

臨床薬学分野の教員は教授のみであり、大学院生もいないことから、病院薬剤部職員(技官)が主体となってこれまで研究に取り組んできた。したがって、研究内容は医療現場での薬剤業務に関連する臨床研究や診療科との共同研究が中心となっている。こういった状況の下でも年間平均 7 報のペースで英文原著論文を報告した。特に、最近では院内での研究のみならず、4 県 35 病院での多施設共同研究の研

究計画立案, 各施設からのデータ収集, データ解析, 投稿論文作成 (Clinical J Pain. in press), 学会報告の一切を中心に展開できたことは意義深いと考える。さらに, 日本病院薬剤師会理事に就任し, 委員会活動において全国の施設から報告された臨床研究に関する投稿論文を抽出し, その中でがん領域については中心となってまとめ, 全国病院薬剤部において今後のがん領域における薬剤業務を展開するための資料となるよう, 総説として報告した (日本病院薬剤師会雑誌 2011 年; 47 巻: 983-1002)。以上のことから, 劣悪な環境のもとでも研究面では十分な成果を上げられたと評価する。

現状の問題点及びその対応策

研究スタッフ, 特に教員が教授以外にいないことは研究を実施する上で致命的な問題である。教育面では大学院生への教育にとどまり, 医学生に対して薬剤学や処方学の教育を行う必要性は感じているものの, それを実現するには教育スタッフの充実を待たねばならない。

今後の展望

今後も臨床研究を主体に研究を推進することを考えている。さらに, 岐阜薬科大学との連携を強化するとともに, 他の薬科大学との共同研究も推進し, 薬剤部-薬科大学-診療科の共同臨床研究実施体制を構築し, 研究の推進を図る予定である。

(4) 医療経済学分野

1. 研究の概要

行動科学及び経済学等社会科学の手法に基づく医療評価研究や患者行動、医師・患者関係に関する研究をおこなっている。

1)患者の行動医学研究

がん患者の治療や薬剤に対する患者の意思決定やそれに及ぼす要因の分析を行っている。

2)医療における生産性及び効率性に関する研究

医療における生産性指標及び効率性指標の算出を行い、その影響要因を明らかにするとともに、医療のパフォーマンス指標への応用を研究している。特に、急性期病院に求められる在院日数の短縮化と医療における質を反映できるパフォーマンス指標の開発を目標としている。

3)HPV ワクチン、遺伝子診断の需要分析研究

今後普及が見込まれる HPV ワクチン、各種遺伝子診断について、その需要に影響する要因について研究している。

2. 名簿

教授(併任)：永田知里

Chisato Nagata

准教授：高塚直能

Naoyoshi Takatsuka (在籍：平成23年3月31日まで)

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 高塚直能. 第7章 日本の医療・福祉制度：山本真由美編. 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理, 岐阜：岐阜新聞社；2009年：186-190.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 高塚直能. 血清脂質および動脈硬化性疾患に対する大豆の影響, オレオサイエンス 2009年；9巻：293-296.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Oba S, Takatsuka N, Nagata C, Nagao Y, Yamamoto S, Shibuya C, Kashiki Y, Shimizu H. Causal attributions to epidemiological risk factors and their associations to later psychological adjustment among Japanese breast cancer patients. *Support Care Cancer*. 2009;17:3-9. IF 2.058
- 2) Nakamura K, Nagata C, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Oba S, Shimizu H. Cigarette smoking and the adult onset of bronchial asthma in Japanese men and women. *Ann Allergy Asthma Immunol*. 2009;102:288-293. IF 2.801
- 3) Oba S, Nagata C, Nakamura K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Diet based on the Japanese Food Guide Spinning Top and subsequent mortality among men and women in a general Japanese population. *J Am Diet Assoc*. 2009;109:1540-1547. IF 3.244
- 4) Nakamura K, Nagata C, Wada K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Association of farming with the development of cedar pollinosis in Japanese adults. *Ann Epidemiol*. 2010;20:804-810. IF 3.238
- 5) Matsumoto K, Oki A, Furuta R, Maeda H, Yasugi T, Takatsuka N, Hirai Y, Mitsuhashi A, Fujii T, Iwasaka T, Yaegashi N, Watanabe Y, Nagai Y, Kitagawa T, Yoshikawa H. Japan HPV and Cervical Cancer (JHACC) Study Group. Tobacco smoking and regression of low-grade cervical abnormalities. *Cancer Sci*. 2010;101:2065-2073. IF 3.846
- 6) Oba S, Nagata C, Nakamura K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Dietary glyceic index, glyceic load, and intake of carbohydrate and rice in relation to risk of mortality from stroke and its subtypes in Japanese men and women. *Metabolism*. 2010;59:1574-1582. IF 2.538
- 7) Oba S, Nagata C, Nakamura K, Fujii K, Kawachi T, Takatsuka N, Shimizu H. Consumption of coffee, green tea, oolong tea, black tea, chocolate snacks and the caffeine content in relation to risk of diabetes in Japanese men and women. *Br J Nutr*. 2010;103:453-459. IF 3.072

- 8) Fujii K, Nagata C, Nakamura K, Kawachi T, Takatsuka N, Oba S, Shimizu H. Prevalence of tinnitus in community-dwelling Japanese adults. J Epidemiol. 2011;21:299-304.

IF 2.111

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：今井博久，研究分担者：高塚直能；厚生労働科学研究費補助金循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業：特定保健指導プログラムの成果を最大化及び最適化する保健指導介入方法に関する研究；平成 20-22 年度；27,700 千円(15,000：12,700：0 千円)
- 2) 研究代表者：高塚直能，研究分担者：長瀬 清；科学研究費補助金基盤研究(C)：乳がん手術待機期間からみた医療資源適正配分に関する研究；平成 22-24 年度；3,500 千円(1,500：500：1,500 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

永田知里：
疫学・予防医学分野参照

高塚直能：

- 1) 東海公衆衛生学会理事(平成 21 年 4 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

永田知里：
疫学・予防医学分野参照

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

高塚直能：

- 1) 岐阜県保険者協議会(医療費分析相談)(～現在)
- 2) 岐阜県国保連合会生活習慣病予防対策検討委員会アドバイザー(～現在)
- 3) 岐阜県後期高齢者医療広域連合運営懇話会委員(～現在)
- 4) 厚生労働省特定健診・特定保健指導に関する検討会 治療中の者に対する保健指導の効果に関する WG 委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 福田吉治，中尾裕之，八幡裕一郎，高塚直能：特定保健指導プログラムの成果を最大化及び最適化する保健指導介入方法に関する研究；平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 総括・分担研究報告書(今井班)：18-27(平成 21 年 3 月)

- 2) 高塚直能：特定保健指導プログラムの成果を最大化及び最適化する保健指導介入方法に関する研究：平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 総括・分担研究報告書(今井班)：18-27(平成 22 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

特殊性のある研究を続けているが論文数が少ない。

現状の問題点及びその対応策

論文文化を迅速に進める。共同研究の形も模索する。

今後の展望

小規模であるが応用性の高い研究や方法論に関わる研究などを行い、独自色ある成果を求めていく。薬剤疫学の分野も包括する。

(5) 救急・災害医学分野

1. 研究の概要

外的侵襲制御について基礎研究，臨床研究を通じて，国際的に通用する自立した研究者を育成することを目的とする。具体的なテーマとしては，外傷，ショック（含む敗血症），高気圧酸素治療，救急搬送，救急医療情報などについての臨床専門分野における診断，治療に関するものや，救急医学領域における外傷，敗血症などの外的侵襲の実験モデルを作成して基礎的な知見を得る。

2. 名簿

教授：	小倉真治	Shinji Ogura
准教授：	豊田 泉	Izumi Toyoda
講師：	白井邦博	Kunihiro Shirai
講師：	牛越博昭	Hiroaki Ushikoshi (循環病態学)
助教：	金田英己	Hidemi Kanada
助教：	吉田省造	Shouzo Yoshida
助教：	熊田恵介	Keisuke Kumada
助教：	中野通代	Michiyo Nakano
助教：	吉田隆浩	Takahiro Yoshida
助教：	川井 豪	Go Kawai (整形外科学)
助教：	土井智章	Tomoaki Doi
助教：	名知 祥	Shou Nachi (高度先進外科学)
助教：	森下健太郎	Kentarou Morishita (循環病態学)
助教：	中島靖浩	Yasuhiro Nakajima
助教：	谷崎隆太郎	Ryutaro Tanizaki
医員：	井原 頌	Shou Ihara (高度先進外科学)
医員：	大野智彦	Tomohiko Oono (消化器病態学)
医員：	山口良大	Yoshihiro Yamaguchi (整形外科学)
医員：	山田法顕	Noriaki Yamada
医員：	田中香織	Kaori Tanaka (腫瘍病理学)
医員：	南 公人	Kimito Minami (麻酔科・疼痛治療学)
医員：	船津奈保子	Nahoko Hunatu (脳神経外科学)
医員：	今井 一	Hajime Imai (循環病態学)
医員：	三宅喬人	Takahito Miyake
医員：	東賢 志	Kenshi Azuma (循環病態学)
医員：	田中義人	Yoshihito Tanaka
医員：	橋本孝治	Kouji Hashimoto (整形外科学)

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 小倉真治，吉田隆浩，加藤久晶，山田法顕，中野志保，竹田 啓，名知 祥. 第 3 章 大学生のけがや病氣 第 5 節 救急時の対応について：大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理，岐阜：岐阜新聞社；2009 年：73-83.
- 2) 土井智章，小倉真治. 【救命救急スタッフにすぐに役立つ検査データの取り方読み方使い方】症状に対する検査の進め方 ショック：EMERGENCY CARE 2009 年夏季増刊，大阪：メディカ出版；2009 年：188-194.
- 3) 土井智章，吉田省造，小倉真治. II ショック治療の実際 Q12. 血管作動薬には，何を選ぶべきか？：ショック管理 Q&A-迅速で，的確な対応のために-，東京：総合医学社；2009 年：892-897.
- 4) 高田忠敬，天野穂高，荒田慎寿，伊佐地秀司，伊藤鉄英，片岡慶正，角谷眞澄，蒲田敏文，北村伸哉，木村康利，桐山勢生，四方 哲，白井邦博，関本美穂，武田和憲，竹山宜典，廣田衛久，廣田昌彦，平田公一，服部貴行，真弓俊彦，山内榮五郎，横田正道，吉田雅博，和田慶太. 急性肺炎診療ガイドライン 2010[第 3 版]，東京：金原出版；2009 年：1-160.
- 5) 土井智章，小倉真治. V.各都道府県の取り組み状況 7 岐阜 DMAT 1. 医療チームの現場から：プレホスピタル Mook シリーズ 9 DMAT，大阪：永井書店；2009 年：243-247.
- 6) 熊田恵介，吉田隆浩，豊田 泉，小倉真治，村上啓雄，福田充宏. 1 章 救急医療機関の現状と問題と今後のあり方 5) 地域医療の現状と大学病院を中心とした支援のあり方：あたらしい救急医療体制の構築 救急医療体制改善のための提言，東京：へるす出版；2009 年：39-47.

- 7) 小倉真治. 救急医療支援情報流通システム(GEMITS): クリニシアン 56 12, 東京: エーザイ株式会社; 2009年: 109-116.
- 8) 豊田 泉. 脳卒中の救急搬送体制: 臨床研修プラクティス, 東京: 文光堂; 2009年: 62-63.
- 9) 牛越博昭. 特集 心臓病の臨床 3-5 疾患のマネージメント 弁膜症: レジデント, 東京: 医学出版; 2009年: 121-135.
- 10) 吉田省造, 権田正樹. 呼吸療法認定士: たしかめドリル, 名古屋: 日総研出版; 2009年: 1-196.
- 11) 大畑雅典, 牛越博昭, 仁科拓也, 中嶋秀人. メディチナーアレルギー疾患を疑ったらこう診る! -目で見るトレーニング, 東京: 医学書院; 2010年: 340-345.
- 12) 小倉真治. 一般医・研修医のための災害医療トレーニング, 東京: へるす出版; 2010年: 1-48.
- 13) 小倉真治. 素描集-小倉真治集-196集: 岐阜, 岐阜新聞; 2010年: 15-24.
- 14) 土井智章. 第2章集中治療法-急性血液浄化: 図説臨床看護医学デジタル版-21集中治療, 東京: エディターシップ; 2010年: 1-7.
- 15) 吉田省造, 権田正樹. 呼吸療法認定士たしかめドリル, 名古屋: 日総研出版; 2010年: 1-296.
- 16) 土井智章, 小倉真治. 多数傷病者対応: 大友康裕編. プレホスピタル MOOK シリーズ4-多数傷病者対応, 大阪: 永井書店; 2010年: 237-238.
- 17) 吉田省造. 呼吸器&循環器ケア-SIRSと密接にかかわるDISの仕組みと治療・患者ケアの実際, 名古屋: 日総研出版; 2010年: 71-78.
- 18) 豊田 泉. 臨床研修プラクティス-脳卒中診療のミニマムエッセンス脳卒中治療ガイドライン 2009 準拠-脳卒中の救急搬送体制, 東京: 文光堂; 2010年: 62-63.
- 19) 牛越博昭. 胸痛・胸部不快感: 森田浩之編. いきなり名医! 見わけが肝心, 不定愁訴 jmedmook09, 東京: 日本医事新報社; 2010年: 26-30.
- 20) 吉田省造, 小倉真治. 救急・集中医療-Q67 ALI/ARDSの予後予測は?, 東京: 総合医学社; 2010年: 1353-1359.
- 21) 小倉真治. 新たな取り組み GEMITSの概要と今後: 救急医療ジャーナル, 東京: 2011年: 32-33.
- 22) 土井智章, 森 博美. 既吸収毒物の除去: 山口 均編. 急性中毒ハンドファイル, 東京: 2011年: 69-76.
- 23) 加藤久晶, 森 博美. 未吸収毒物の除去: 山口 均編. 急性中毒ハンドファイル, 東京: 2011年: 63-68.
- 24) 豊田 泉. 県ドクターヘリ運航スタートかつてない機動力で地域医療に貢献!: 名古屋: 日総研出版; 2011年: 63-65.
- 25) 小倉真治. ドクターヘリ, 高い機動力-東日本大震災ぎふ支援の記録: 岐阜: 岐阜新聞社; 2011年: 203-205.
- 26) 橋本孝治. 別名「空飛ぶ診療所」としての役目を発揮-東日本大震災ぎふ支援の記録: 岐阜: 岐阜新聞社; 2011年: 2-30.
- 27) 小倉真治, 松本 尚, 小倉真治, 勝見 敦, 高山隼人, 谷川巧一, 中野 実, 奈良 理. 消防防災ヘリコプターの救急ヘリとしての能力評価に関する検討: 東京: 日本救急医学会; 2011年: 758-764.
- 28) 谷崎隆太郎, 山田法顕, 土井智章, 吉田省造, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治. 岐阜県で経験したヒメハブ咬傷の1例: 東京: へるす出版; 2011年: 241-242.
- 29) 小倉真治. 医師と患者との最適化を目指して: 東京: 東京法令出版株式会社; 2011年: 12-13.
- 30) 豊田 泉. 岐阜県におけるドクターヘリの運用の現状と課題: 岐阜: 社団法人岐阜県病院協会; 2011年: 3-4.
- 31) 白井邦博. 蛋白分解酵素阻害薬に関する pro/con: 東京: MEDISI; 2011年: 645-651.
- 32) 小倉真治. 救急医療の全体最適化を担うシステム GEMITS: 東京: 株式会社プラネット; 2011年: 24-30.
- 33) 小倉真治, 豊田 泉. 先進システムを搭載した岐阜県ドクターヘリの全国初の取り組み: 東京: NPO 法人救急ヘリ病院ネットワーク; 2011年: 9-12.
- 34) 小倉真治. 医療改革で社会を元気に: 東京: 日経 BP 社; 2011年: 50-51.
- 35) 吉田省造, 小倉真治. 敗血症: 東京: 医学書院; 2011年: 557-558.
- 36) 小倉真治. ITを活用して, 救急搬送の時間を短縮: 東京: 医学通信社; 2011年: 34-35.
- 37) 小倉真治, 田口博一, 平出 敦. 蘇生教育: 東京: へるす出版; 2011年: 1657-1660.
- 38) 名知 祥. JRC 蘇生ガイドライン 2010: 東京: へるす出版; 2011年: 92-94.
- 39) 豊田 泉. JRC 蘇生ガイドライン 2010: 東京: へるす出版; 2011年: 297-298.

著書 (欧文)

- 1) Yasuda S, Kobayashi H, Iwasa M, Kawamura I, Sumi S, Narentuoya B, Yamaki T, Ushikoshi H, Nishigaki K, Nagashima K, Takemura G, Fujiwara T, Fujiwara H, Minatoguchi S. Antidiabetic drug pioglitazone protects the heart via activation of PPAR-gamma receptors, PI3-kinase, Akt, and eNOS pathway in a rabbit model of myocardial infarction In: 296th ed. America: HighWire Press; 2009:1558-1565.

総説 (和文)

- 1) 土井智章, 小澤 修, 加藤久晶, 足立政治, 小倉真治. 血小板に対するアンチトロンビンⅢの抗炎症作用の分子機序の解説: 血小板に対する直接作用の可能性について, Coagulation&Inflammation 2010年; 4巻: 19-21.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 小倉真治. 救急医療と IT, 救急・集中治療医学レビュー2010, 2010年; 1-30.
- 2) 竹田 啓, 土井智章, 加藤久晶, 長屋聡一郎, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治. 頸部仮性動脈瘤破裂により気道詰閉塞を来した von Recklinghausen 病の 1 症例, 日本救急医学会雑誌 2010年; 21 巻: 84-90.
- 3) 山田法顕, 中野志保, 豊田 泉, 吉村紳一, 岩間 亨, 古井辰郎, 小倉真治. 妊娠 39 週に脳梗塞を発症し血栓溶解療法を行った 1 例, 日本救急医学会雑誌 2010年; 21 巻: 191-197.
- 4) 小倉真治, 熊田恵介, 土井智章, 豊田 泉, 吉田隆浩, 加藤久晶, 山田法顕. 救急医学, IT(intelligence technology)を活用したプレホスピタル情報のネットワーク, 2010年; 34 巻: 503-506.
- 5) 白井邦博, 豊田 泉, 村上哲雄, 吉田省造, 加藤久晶, 土井智章, 中野志保, 竹田 哲, 山田法顕, 小倉真治. 外傷患者における ICT の介入前後での抗菌薬投与の比較検討, 日本臨床救急医学会雑誌 2010年; 13 巻: 334-340.
- 6) 白井邦博, 小倉真治. 腹部救急の指導をどのように行うかー救命救急センター長の立場から腹部救急診療の問題点と外科系救急医の育成, 日本腹部救急医学会雑誌 2010年; 30 巻: 539-544.
- 7) 熊田恵介, 小倉真治. 救急医療と IT, 救急・集中治療医学レビュー2011 2011年; 24-29.
- 8) 山田実貴人, 森 洋子, 熊田恵介, 八田善明, 豊田 泉, 横山和俊, 小倉真治, 山田實紘. MEDICA™ カードを利用した患者情報収集と病院前救護, 日本病院会雑誌 2011年; 58 巻: 63-67.
- 9) 名知 祥, 山田法顕, 土井智章, 加藤久晶, 吉田隆浩, 熊田恵介, 吉田省造, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治. 岐阜県におけるメディカルコントロール体制下の事後検証医の現状と対策, 日本臨床救急医学会雑誌 2011年; 14 巻: 38-44.
- 10) 小倉真治. 救急医療の全体最適化を目指して, 日本病院会雑誌 2011年; 58 巻: 24-48.
- 11) 土井智章, 加藤久晶, 小倉真治. 外傷に伴う出血性ショックへの岐阜大学医学部附属病院の取り組み, へるす出版 2011年; 35 巻: 452-455.
- 12) 熊田恵介, 豊田 泉, 小倉真治, 有賀 徹, 福田充宏. 救急告示医療機関数の推移と救急隊現場滞在時間の推移からみた今後の救急医療体制のあり方に対する一考案, 日本臨床救急医学会雑誌 2011年; 14 巻: 431-436.
- 13) 森村尚登, 奥寺 敬, 山本時彦, 遠藤重厚, 小倉真治, 高橋正彦, 島崎修次. 救急医療の構築, 日本病院会雑誌 2011年; 58 巻: 16-63.
- 14) 熊田恵介, 豊田 泉, 小倉真治, 小濱啓次, 福田充宏. 大学病院の救急医療体制における役割 現状分析と今後のあり方, 日本医事新報 2011年; 26-31.
- 15) 白井邦博, 加藤久晶, 土井智章, 谷崎隆太郎, 村上哲雄, 小倉真治. 熱傷患者における感染症の原因と特徴についての検討, 日本熱傷学会 2011年; 22-30.
- 16) 白井邦博. 消化器疾患(9)重症急性膵炎, へるす出版 2011年; 1361-1365.
- 17) 谷崎隆太郎, 加藤久晶, 土井智章, 白井邦博, 豊田 泉, 小倉真治. 鼓膜穿孔を合併した蟻酸による化学熱傷の 1 例, 日本熱傷学会機関誌 2011年; 37 巻: 31-37.

原著 (欧文)

- 1) Kato M, Ikegame Y, Toyoda I, Ogura S, Kitajima H, Yoshimura S, Iwama T. Hemispheric laminar necrosis as a complication of traumatic carotid-cavernous sinus fistula. *Neurologia medico-chirurgica*. 2009;49:26-29. IF 0.677
- 2) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Niwa M, Tokuda H, Akamatsu S, Doi T, Kato H, Yoshimura S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O. α B-crystallin extracellularly suppresses ADP-induced granule secretion from human platelets. *FEBS Lett*. 2009;583:2464-2468. IF 3.601
- 3) Doi T, Adachi S, Takai S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Minamitani C, Otsuka T, Tokuda H, Akamatsu S, Iwama T, Kozawa O, Ogura S. Antithrombin III suppresses ADP-induced platelet granule secretion: Inhibition of HSP27 phosphorylation. *Arch Biochem Biophys*. 2009;489:62-67. IF 3.022
- 4) Matsushashi N, Yawata K, Ogura S. Divided PE and HDF saved a patient with acute pancreatitis caused by hyperlipidemia in the final stage of gestation. *Journal of Japanese College of Surgeons*. 2009;34:1110-1114.
- 5) Suzuki A, Imanishi Y, Nakano S, Niwa T, Ohmori T, Shirai K, Yoshida S, Seishima M, Ogura S, Itoh A. Usefulness of serum cystatin C to determine the dose of vancomycin in critically ill patients. *J Pharmacol*. 2010;62:901-907. IF 1.918
- 6) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Doi T, Niwa M, Akamatsu S, Tokuda H, Ogura S, Yoshimura S, Iwama T, Kozawa O. Thromboxane A2 promotes soluble CD40 ligand release from human platelets. *Atherosclerosis*. 2010;209:415-421. IF 4.086
- 7) Doi T, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Kato H, Enomoto Y, Natsume H, Kato K, Mizutani J, Otsuka T, Tokuda H, Akamatsu S, Iwama T, Kozawa O, Ogura S. Antithrombin III reduces collagen-stimulated granule secretion of PDGF-AB and the release of soluble CD40 ligand from human plates. *Int J Mol Med*. 2010;26:387-392. IF 1.814
- 8) Enomoto Y, Adachi S, Doi T, Natsume H, Kato K, Matsushima-Nishiwaki R, Akamatsu S, Tokuda H,

- Yoshimura S, Otsuka T, Ogura S, Kozawa O, Iwama T. cAMP regulates ADP-induced HSP27 phosphorylation in human platelets. *Int J Mol Med*. 2011;27:695-700. IF 1.814
- 9) Ohmori T, Suzuki A, Niwa T, Ushikoshi H, Shirai K, Yoshida S, Ogura S, Itoh Y. Simultaneous determination of eight β -lactam antibiotics in human serum by liquid chromatography-tandem mass spectrometry. *Journal of Chromatography B*. 2011;879:1038-1042. IF 2.971
- 10) Mochizuki K, Suemori S, Udo K, Komori S, Ohkusu K, Yamada N, Ogura S. Intraocular penetration of micafungin in patient with candida albicans endophthalmitis. *J Ocul Pharmacology TH*. 2011;27:531-533. IF 1.609
- 11) Doi T, Fujisawa T, Murase K, Okumura Y, Kanoh H, Yoshida S, Ogura S, Seishima M. Generalized pustular psoriasis successfully treated with granulocyte and monocyte adsorption apheresis. *Ther Apher Dial*. 2011;15:374-378. IF 1.098

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：小倉真治：平成 21 年度産業技術研究開発「車載 IT を活用した緊急医療体制の構築」；平成 21 年度；200,000 千円；経済産業省
- 2) 研究代表者：白井邦博：敗血症モニタの開発；平成 21-23 年度；40,480,528 円；財団法人岐阜県研究開発財団
- 3) 小倉真治：リコモジュリン点滴静注用 12800 特定使用成績調査(産婦に対する調査)；平成 22-24 年度；63 千円；旭化成ファーマ(株)
- 4) 小倉真治：緊急医療体制の構築に資する車載 IT システムの導入における課題抽出・分析のための調査研究；平成 22-23 年度；3,780,567 円；三菱総合研究所(株)
- 5) 小倉真治：G-1 の膿疱性乾癬患者を対象とした多施設共同試験；平成 22-23 年度；80,640 円；JIMRO(株)
- 6) 小倉真治：ジェイスの重症熱傷に対する使用成績調査；平成 22-26 年度；105 千円；ジャパンエンジニアリング(株)
- 7) 小倉真治：ゾシン静注用 2.25, 4.5 使用成績調査；平成 22-24 年度；105 千円；大正富山医薬品(株)
- 8) 小倉真治：ラジカット注 30 mg 詳細報告；平成 22-23 年度；42 千円；田辺三菱製薬(株)
- 9) 小倉真治：ラピアクタ点滴用バイアル 150 ml 使用成績調査；平成 22-23 年度；10.5 千円；塩野義製薬(株)
- 10) 小倉真治：平成 23 年度「医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出実証事業(緊急医療体制の構築に資する車載 IT システムの導入における課題抽出・分析のための調査事業)」；平成 23-24 年度；3,960,449 円；経済産業省
- 11) 白井邦博：モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発の一部「敗血症モニタの開発」；平成 23-24 年度；7,643,113 円；財団法人岐阜県研究開発財団
- 12) 小倉真治：感染症に伴い発症した汎発性血管内凝固症候群(DIC)患者を対象とした KW-3357 と血漿由来アンチトロンビン製剤の非盲検比較試験；平成 23-25 年度；1,852,200 円；協和発酵キリン(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

小倉真治：

- 1) ICLS コース企画運営委員会委員長・メディカルコントロール体制検討委員・評議員・編集委員会委員・航空機による救急搬送検討委員会担当理事・航空機による救急搬送検討委員会委員・中部地方会理事・指導医認定委員(~現在)
- 2) 日本集中治療医学会評議員(~現在)
- 3) 日本 Shock 学会評議員(~現在)

- 4) 日本航空医療学会評議員・査読委員(～現在)
- 5) 日本外傷学会評議員・将来計画委員会委員・専門医認定委員(～現在)
- 6) 日本救急医学会東海地方会理事(～現在)
- 7) 日本臨床救急医学会評議員・編集委員会委員・搬送等の業務に関する検討委員会委員・将来計画検討委員・トリアージナース育成検討小委員会委員・会則検討委員・研究倫理委員(～現在)
- 8) 日本集団災害医学会 秋葉原事件調査特別委員会委員(～現在)

豊田 泉：

- 1) 日本救急医学会評議員・中部地方会幹事(～現在)
- 2) 日本脳神経外傷学会編集幹事(～現在)
- 3) 日本脳神経外科救急医学会幹事(～現在)
- 4) 日本臨床救急医学会 ACEC 委員会委員(～現在)
- 5) 日本航空医療学会評議員(～現在)

熊田恵介：

- 1) 日本臨床救急医学会評議員(～現在)
- 2) 日本航空医療学会評議員(～現在)

吉田省造：

- 1) 日本救急医学会関東地方会幹事(～現在)
- 2) 日本集中医学会東海北陸地方会評議員(～現在)

土井智章：

- 1) 医真菌学会・侵襲性カンジダ症の診療ガイドライン作成委員会委員(～現在)

2) 学会開催

小倉真治：

- 1) JATEC 岐大コースⅢ(平成 21 年 5 月, 岐阜)
- 2) 第 16 回日本航空医療学会(平成 21 年 11 月, 岐阜)
- 3) 第 5 回病院前救急診療研究会(平成 22 年 12 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

小倉真治：

- 1) 日本救急医学会；編集委員会委員(～現在)
- 2) 日本臨床救急医学会；編集委員会委員(～現在)
- 3) 日本航空医療学会誌；査読委員(～現在)

豊田 泉：

- 1) 日本航空医療学会査読委員(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

小倉真治：

- 1) 岐阜救急・災害医療セミナー 研修医セミナーシリーズ(1)(平成 21 年 4 月, 岐阜, 特別講演「病院前からの脳卒中治療」座長)
- 2) 第 6 回岐阜県救急医療研究会総会・学術集会/第 2 回ドクターヘリ研究会(平成 21 年 7 月, 岐阜, 特別講演「岐阜県の地域医療対策」座長)
- 3) 第 4 回岐阜救急集中治療セミナー(平成 21 年 7 月, 岐阜, 特別講演「急性期 DIC 診断基準と ATⅢ—外傷研究部門の研究活動を含めて—」座長)
- 4) 第 2 回岐阜外傷カンファレンス(平成 21 年 8 月, 岐阜, 特別講演「重症病態における栄養管理」座長)
- 5) 第 11 回岐阜市救急症例研究発表会(平成 21 年 9 月, 岐阜, 特別講演(教育)「救急医療における情報の重要性」演者)
- 6) 第 5 回岐阜 SFI 研究会(平成 21 年 9 月, 岐阜, 特別講演「深在性真菌症の診断と治療戦略—各々の有用性をいかに引き出すか—」座長)

- 7) 9月内科会(平成21年9月, 岐阜, 特別講演「一般医の知っておきたい救急医療」演者)
- 8) 第3回東海救命救急SBMN研究会学術講演会(平成21年10月, 名古屋, 特別講演「外科侵襲時の病態とImmunonutrition」座長)
- 9) 第25回マルチビューセミナー(平成21年10月, 丸亀, 特別講演「ITが支援する新しい救急医療体制」演者)
- 10) 学術講演会(平成21年10月, 瀬戸, 特別講演「災害医療の新しい考え方」演者)
- 11) 第16回日本航空医療学会総会(平成21年11月, 岐阜, 座長「特別講演「宇宙環境への挑戦」」座長)
- 12) 第15回日本集団災害医学会総会・学術集会(平成22年2月, 千葉, 特別講演「災害時の遠隔通信手段の確保」座長)
- 13) 第37回日本集中治療医学会(平成22年3月, 広島, シンポジウム「プレホスピタル救急医療・災害医療へのモバイルテレメディシンの活用」座長)
- 14) 第60回日本病院学会(平成22年7月, 岐阜, 特別講演「救急医療の問題点の解決に向けた具体的戦略」講師)
- 15) 第29回日本自然災害学会オープンフォーラム(平成22年9月, 岐阜, 基調講演「孤立集落と救急・災害医療～救急医療支援情報流通システム(GEMITS)による医療全体の最適化に向けて」演者)
- 16) 第38回日本救急医学会総会・学術集会(平成22年10月, 東京, 座長「救急医療体制の全体最適化に向けた情報活用」座長)
- 17) 第38回日本救急医学会総会・学術集会(平成22年10月, 東京, 基調講演「救急医療を支援する情報システムの展望」講師)
- 18) 第21回日本急性血液浄化学会学術集会(平成22年10月, 横浜, 座長「多臓器不全に対する血液浄化戦略」座長)
- 19) 岡山救急医療研究会・第12回学術集会(平成22年11月, 岡山, 特別講演「救急医療全体最適化を目指して」演者)
- 20) 地域医療福祉情報連携協議会発足記念シンポジウム(平成23年1月, 東京, 基調講演「地域医療情報ネットワークの取り組み 地域医療情報連携システム GEMITS」)
- 21) 市民フォーラム医療崩壊への処方箋(平成23年3月, 岐阜, 基調講演「救急医療崩壊を食い止める情報支援」演者)
- 22) 第34回日本体外循環技術医学会東海地方会(平成23年3月, 岐阜, 教育講演「救急医療の全体最適化」演者)
- 23) 第25回日本外傷学会(平成23年5月, 大阪, 座長「輸血・輸血療法」座長)
- 24) とやまICTフォーラム2011—ICTの利活用とこれからの医療・福祉—(平成23年6月, 富山, 基調講演「救急医療の全体最適化」演者)
- 25) 第47回日本交通科学協議会総会・学術講演会(平成23年6月, 東京, 特別講演「救急医療の全体最適化」演者)
- 26) 第32回日本アフェレシス学会(平成23年10月, 東京, ワークショップ「サイトカイン除去療法の展開」司会)
- 27) 第39回日本救急医学会総会・学術集会(平成23年10月, 東京, 教育セミナー「エンドトキシンを通して学んだこと」司会)
- 28) 第14回日本救急医学会地方会総会・学術集会「プロを育てる！」(平成23年11月, 松本, パネルディスカッション「地方におけるドクターヘリ救命救急システム」座長)
- 29) 救急災害医療の全体最適化について特別講演(平成23年12月, 仙台, 特別講演「救急災害医療の全体最適化について」演者)

豊田 泉：

- 1) 第14回日本脳神経外科救急学会(平成21年1月, さいたま, シンポジウム「災害医療における脳神経外科救急」座長)
- 2) 第4回東濃西部脳血管障害研究会(平成21年11月, 多治見, 特別講演「脳卒中の病院前救護」演者)

牛越博昭：

- 1) 紀北・紀南医師会特別講演会(平成21年5月, 尾鷲, 特別講演「救命センターの医師の立場からみた高血圧治療について」演者)
- 2) 第16回日本航空医療学会総会(平成21年11月, 岐阜, 座長「一般演題 臨床「循環器」」座長)
- 3) 第2回岐阜循環器先端治療セミナー(平成21年11月, 岐阜, 座長「C型肝炎・B型肝炎における最

新の治療戦略—ウイルス学的治療効果・病態予測はここまで進化した—」座長)

- 4) 第40回岐阜心臓病研究会(平成21年11月,岐阜,座長「一般講演」座長)
- 5) 日本循環器学会 第138回東海・第123回北陸合同地方会(平成23年11月,名古屋,「ECC(心停止・緊急治療など)」座長)

吉田省造:

- 1) 第31回日本呼吸療法医学会学術総会(平成21年7月,天童,シンポジウム「(救急の立場から)人工呼吸器離脱困難例に対する陽・陰圧体外式人工呼吸器(RTX)の効果」演者)
- 2) 東海RST協力会第2回セミナー(平成21年8月,名古屋,シンポジウム「当院のRST活動と医師(研修医)への呼吸療法教育」演者)

熊田恵介:

- 1) へき地・離島救急医療研究会 第13回学術集会(平成21年10月,和歌山,シンポジウム「大学病院を中心とした地域医療支援 救急医療の視点から 岐阜県の場合」演者)

竹田 啓:

- 1) 第52回日本感染症学会・第57回日本化学療法学会(平成21年11月,名古屋,シンポジウム「感染症学と化学療法学のクロストーク」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

小倉真治:

- 1) 岐阜県国民保護協議会委員(～現在)
- 2) 岐阜県メディカルコントロール協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県広域災害・救急医療情報システム運営委員会委員(～現在)
- 4) 岐阜市救急業務対策協議会委員(～現在)
- 5) NPO 法人岐阜救急災害医療研究開発機構常務理事(～現在)
- 6) 岐阜東洋医学研究会世話人(～現在)
- 7) 岐阜県地震防災行動計画フォローアップ委員会委員(～現在)
- 8) 高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部企画委員会医療情報化に関するタスクフォース構成員(～現在)
- 9) 救急・周産期医療情報ネットワーク構築実証事業システム開発検討WG委員(～現在)
- 10) 岐阜県消防・医療連携協議会作業部会委員(～現在)
- 11) 岐阜県消防・医療連携協議会救急搬送に係る広域化最適化専門部会委員(～現在)
- 12) 岐阜県震災対策検証委員会委員(～現在)
- 13) 岐阜県震災対策災害医療分科会(～現在)
- 14) 名古屋市地震対策専門委員(～現在)
- 15) 地域医療福祉情報連携協議会幹事会委員(～現在)
- 16) 財団法人岐阜県ジン・アイバンク協会理事(～現在)
- 17) 社団法人中部航空宇宙技術センター中部地域航空宇宙関連成長産業振興発展対策活動事業「ヘリコプター活用研究会」委員(～現在)
- 18) 救急医療情報連携地域協議会委員(～現在)
- 19) 救急医療情報連携地域協議会・救急医療情報連絡専門委員会委員(～現在)
- 20) 歯科医療安全管理体制推進特別事業医療安全推進委員会委員(～現在)
- 21) 社会全体で共有するトリアージ体系のあり方検討会構成員(～現在)
- 22) 日本版EHR事業推進委員会委員(～現在)
- 23) 医学的検証作業班(～現在)
- 24) 医療情報化に関するタスクフォース構成員(～現在)

豊田 泉:

- 1) 岐阜市救急業務高度化検討委員会委員(～現在)

- 2) 岐阜地域メディカルコントロール協議会委員(～現在)
- 3) NPO 法人岐阜救急災害医療研究開発機構理事(～現在)
- 4) 岐阜地域メディカルコントロール体制係る検証医師(～現在)

白井邦博：

- 1) 岐阜県南部エリア「事業戦略会議」委員(～現在)

牛越博昭：

- 1) 関市小金田中学校 CPR&AED プロジェクト「未来を作ろう子どもの手でプロジェクト」講師(平成 21 年 6 月)

吉田隆浩：

- 1) 岐阜地域メディカルコントロール体制係る検証医師(～現在)

熊田恵介：

- 1) 日本救急医学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床救急医学会評議員(～現在)

名知 祥：

- 1) 日本救急医学会 ICLS コース企画運営委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜地域メディカルコントロール体制係る検証医師(～現在)
- 3) 日本臨床救急医学会学校 BLS 教育導入についての普及に関する委員会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 小倉真治：平成 21 年度産業技術研究開発 車載 IT システムを活用した緊急医療体制の構築事業：経済産業省(平成 22 年 3 月)
- 2) 小倉真治：平成 22 年度経済産業省委託事業 医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業：経済産業省(平成 22 年 3 月)
- 3) 小倉真治：平成 22 年度「医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業」緊急医療体制の構築に資する車載 IT システムの導入における課題抽出・分析のための調査研究：経済産業省(平成 22 年 3 月)
- 4) 小倉真治：平成 23 年度「医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出実証事業」(緊急医療体制の構築に資する車載 IT システムの導入における課題抽出・分析のための実証事業)：経済産業省(平成 23 年 3 月)

11. 報道

- 1) 小倉真治：救急医療への理解深める ソロプチ岐阜ー長良 岐阜市で講演会：岐阜新聞(2009 年 7 月 16 日)
- 2) 小倉真治：救急医療再生を迫る 救命救急に IT をフル活用岐阜大病院が担う「革命」：週刊東洋経済, (2009 年 7 月 18 日号)
- 3) 小倉真治：救急医療の新たな局面 岐阜大など GEMITS 開発へ(救急患者を最適な病院へ迅速に)：Japan Medicine CLINICAL & MANAGEMENT NEWS(2009 年 7 月 29 日)
- 4) 小倉真治：事故防止へ誘導や警備 警察や消防など：岐阜新聞(2009 年 8 月 18 日)
- 5) 小倉真治：ITS で救急たらい回しを防ぐ岐阜プロジェクト：WEDGE(2009 年 9 月号)
- 6) 小倉真治：関市、IC カード導入実験へ高齢者の医療情報登録 電波で居場所発信市内一部で配布 来秋 本格運用目指す：岐阜新聞(2009 年 9 月 12 日)
- 7) 小倉真治：病院情報システム 救急患者搬送最適に 岐阜大今年度の実証実験：日本経済新聞(2009 年 10 月 7 日)
- 8) 小倉真治：推進委員会：NHK(2009 年 10 月 13 日)
- 9) 小倉真治：救急医療の質向上を目指す「車載 IT 活用搬送システム構築」事業 岐阜大で推進委初会合 たらい回しを解消実用化へ意見交換：岐阜新聞(2009 年 10 月 14 日)
- 10) 小倉真治：全国運用目指す 岐大救急搬送システム 第 1 回推進委員会：中日新聞(2009 年 10 月 15 日)

- 11) 小倉真治：救急搬送の強い味方 退院時発行医療情報カード「メディカ」1100枚突破 美濃加茂・木沢記念病院 外来患者にも配布へ：中日新聞(2009年10月15日)
- 12) 小倉真治：日本航空医療学会総会 岐阜市：岐阜新聞(2009年11月15日)
- 13) 小倉真治：県議会「仕分け、議論不十分」意見書 民主系会派賛成へ 岐阜大医療 IT 化事業予算確保求める：岐阜新聞(2009年12月17日)
- 14) 小倉真治：仕分け「廃止」岐阜の救急IT化：朝日新聞(2009年12月29日)
- 15) 小倉真治：報道ステーション：テレビ朝日(2009年12月)
- 16) 小倉真治：岐阜大の救急医療IT化「事業復活で“重責”」：岐阜新聞(2009年12月29日)
- 17) 小倉真治：県 ドクターヘリ導入へ 県内の救急医療充実：岐阜新聞(2009年12月31日)
- 18) 小倉真治：岐阜市長選 立候補予定3氏 本社討論会⑤：岐阜新聞(2010年1月23日)
- 19) 小倉真治：救急医療専門家招きセミナー(県ビルメンテナンス協会)：岐阜新聞(2010年1月25日)
- 20) 小倉真治：病歴カードで救命率アップ：中日新聞(2010年1月31日)
- 21) 小倉真治：素描 歩んできた道：岐阜新聞 (2010年3月2日)
- 22) 小倉真治：素描 時間には密度があるのはご存知だろうか？：岐阜新聞(2010年3月9日)
- 23) 小倉真治：素描 おとうちゃんの命の恩人なんや：岐阜新聞(2010年3月16日)
- 24) 小倉真治：岐阜大の車載IT活用緊急医療事業：岐阜新聞(2010年3月16日)
- 25) 小倉真治：岐阜大の緊急医療体制整備ドクターヘリも連携：日本経済新聞(2010年3月16日)
- 26) 小倉真治：成果報告で有望アピール：中日新聞(2010年3月16日)
- 27) 小倉真治：救急搬送5～10分短縮 新医療システム開発成果：読売新聞(2010年3月16日)
- 28) 小倉真治：岐阜ウイークと関市実証実験 メディカ：名古屋テレビ(2010年3月16日)
- 29) 小倉真治：岐阜ウイークと関市実証実験メディカ：中京テレビ(2010年3月16日)
- 30) 小倉真治：岐阜ウイーク：NHK(2010年3月16日)
- 31) 小倉真治：救急搬送先瞬時に探索：東奥日報(2010年3月17日)
- 32) 小倉真治：ネットで救急搬送サポート：千葉日報(2010年3月17日)
- 33) 小倉真治：ICカードで患者情報、居場所把握市民対象に実証実験関市と岐阜搬送時間を短縮：岐阜新聞(2010年3月17日)
- 34) 小倉真治：患者の位置や情報確認 メディカカード実験：毎日新聞(2010年3月17日)
- 35) 小倉真治：患者情報 受信できた！メディカハイブリッドカード：中日新聞(2010年3月17日)
- 36) 小倉真治：車載ITで救急隊と病院運ぶ システム開発進行中：朝日新聞(2010年3月17日)
- 37) 小倉真治：ICカードで救急搬送支援岐阜大がシステム開発：中国新聞(2010年3月18日)
- 38) 小倉真治：素描 ラグビーというスポーツ：岐阜新聞 (2010年3月23日)
- 39) 小倉真治：素描 ノスタルジア：岐阜新聞(2010年3月30日)
- 40) 小倉真治：素描 桜：岐阜新聞(2010年4月6日)
- 41) 小倉真治：素描 たまにはいい絵を：岐阜新聞 (2010年4月13日)
- 42) 小倉真治：素描 サンディエゴ：岐阜新聞 (2010年4月20日)
- 43) 小倉真治：岐阜大学の真価：朝日新聞(2010年4月26日)
- 44) 小倉真治：素描 生きるということ：岐阜新聞 (2010年4月27日)
- 45) 小倉真治：患者搬送にIT駆使：中日新聞(2010年5月30日)
- 46) 小倉真治：患者搬送にIT駆使 岐阜で講演会 救急医療モデル説明：中日新聞(2010年5月30日)
- 47) 小倉真治：救急医療の現場から-GEMITSについて-：岐阜県保険医新聞(2010年7月10日)
- 48) 小倉真治：災害時の態勢づくり急げ：中日新聞(2010年9月16日)
- 49) 小倉真治：中山間地の防災考える：岐阜新聞(2010年9月16日)
- 50) 小倉真治：Up in the Clouds：株式会社 日本航空(2010年10月1日)
- 51) 小倉真治：たらい回し解消へ搬送先検索システム開発 病歴カードを併用し救命率引き上げ：日本経済新聞社 産業地域研究所(2010年10月4日)
- 52) 小倉真治：救急搬送 全県的に調整：読売新聞(2010年11月5日)
- 53) 小倉真治：ドクターヘリ広域連携カギ 県境越え出動 実績：朝日新聞(2010年11月27日)
- 54) 小倉真治：血圧、脈拍ヘリから送信：中日新聞(2011年1月1日)
- 55) 小倉真治：電子医療健康情報を本人に渡す：経済産業新報(2011年1月5日)
- 56) 小倉真治：患者情報「最短で」実証：中日新聞(2011年2月2日)
- 57) 小倉真治：救命率向上に期待：読売新聞(2011年2月2日)
- 58) 小倉真治：岐阜大学医学部救急医療システム構築：毎日新聞(2011年2月2日)
- 59) 小倉真治：救命活動に強い味方：中日新聞(2011年2月9日)

- 60) 小倉真治：県ドクターヘリ運航：岐阜新聞(2011年2月9日)
- 61) 小倉真治：日本の医療を創生する鍵に：日本経済新聞(2011年2月21日)
- 62) 小倉真治：医療資源の活用法専門家が意見交換：中日新聞(2011年3月21日)
- 63) 小倉真治：ドクターヘリ運航管理システム研究開発：航空プログラムニュース(2011年4月1日)
- 64) 小倉真治：救急医療に向けた情報流通の仕組みを全国区に、GEMITSの拡大に向けたアライアンスが発足：TechOn デジタルヘルス on! (2011年5月26日)
- 65) 小倉真治：岐阜の病院命救う最後のとりで：中日新聞(2011年6月19日)
- 66) 小倉真治：東海総合通信局、救急医療に情報技術小倉岐大教授を表彰：中日新聞(2011年6月24日)
- 67) 小倉真治：小倉教授(岐阜大学大学院)に表彰状：岐阜新聞(2011年6月24日)
- 68) 小倉真治：救急医療の現場が開発した「GEMITS」ICTを活用し、短時間での決断を支援：日経エレクトロニクス (2011年6月27日)
- 69) 小倉真治：1分で知る豆医学食中毒3家族不調なら疑う：朝日新聞(2011年6月28日)
- 70) 小倉真治：救急医療IT活用進化：日本経済新聞(2011年6月30日)
- 71) 小倉真治：物言えぬ患者の代理人となる医療情報カード「MEDICA」：TechTarget ジャパン医療IT(2011年7月29日)
- 72) 小倉真治：災害救急医療体制を最適化する取り組み：TechTarget ジャパン医療IT(2011年8月1日)
- 73) 小倉真治：救急医療を効率化するIT活用プロジェクト「GEMITS」：TechTarget ジャパン医療IT(2011年8月3日)
- 74) 小倉真治：救急医療情報連携地域協議会が発足：岐阜新聞(2011年8月18日)
- 75) 小倉真治：救急医療情報流通システム実用化へ協議会設立：中日新聞(2011年8月18日)
- 76) 豊田 泉：ドクターヘリにズームイン！：ぷらざ(2011年9月1日)
- 77) 小倉真治：ドクターヘリ協賛100万円：岐阜新聞(2011年10月6日)
- 78) 小倉真治：救急搬送先県全域で調整：岐阜新聞(2011年10月19日)
- 79) 小倉真治：最適な病院へ患者搬送：中日新聞(2011年10月19日)
- 80) 小倉真治：迅速な搬送、治療 県がシステム構築：読売新聞(2011年10月19日)
- 81) 小倉真治：防災強化へ討論：岐阜新聞(2011年10月19日)
- 82) 小倉真治：岐阜県が中心の救急医療圏の中核専従医と最先端設備で「英才教育」：メディカルプリンシプル社(2011年10月20日)
- 83) 小倉真治：いびがわマラソンランナー急病に即対応：中日新聞(2011年11月13日)
- 84) 小倉真治：復興における医療ITの役割と将来：朝日新聞(2011年11月23日)
- 85) 小倉真治：トップインタビュー：岐阜放送(2011年11月29日)
- 86) 小倉真治：ドクターヘリ、エンジンスタート：岐阜県立下呂温泉病院(2011年12月1日)
- 87) 小倉真治：JAXA 航空 PG シンポジウム開催 D-NET は防災ヘリによる実証運航へ：酣燈社(2011年12月1日)

12. 自己評価

評価

前述の目的に沿った研究を、それぞれの分野において少しずつではあるが、結果は出している。

現状の問題点及びその対応策

臨床業務が多忙であり、研究のための時間を取りづらいのが現状である。今後は臨床面をおろそかにしない範囲で、スタッフを増加して研究を展開したい。

今後の展望

前記のような現状であるが、徐々に教育スタッフが増加しており今後はさらに基礎講座とコラボレートして研究を促進したい。

(6) 法医学分野

1. 研究の概要

これまでと同様。法医病理学的な研究としては、従来は死後の角膜混濁のため、眼球を剔出しなければ観察できなかった眼内所見を眼科手術的に開発された先端径が 0.9 mm の内視鏡を用いて解剖時に観察し、眼底出血等の発生と死因や受けた損傷との関係、その意義等について検討し、眼底出血は頭蓋内出血や頸部圧迫による窒息死例等に高頻度に認められるのに対し、うっ血乳頭は頭蓋内出血死例では認められるが、頸部圧迫による窒息死例では認められないことを明らかにし、また、溺死例においても高頻度に眼底出血が認められることを新知見として報告することができた。また、突然死の原因としての冠動脈奇形の意義や致命的不整脈における心臓の組織学的変化について等の研究を行った。DNA 多型に関する研究では、ミトコンドリア DNA 高変異領域の塩基配列解析ならびに STR (short tandem repeat) 多型の出現頻度や多型構造の解析を行い、DNA 鑑定において必要となる、岐阜県在住の日本人集団を対象としたデータベースを構築することができた。また、ミトコンドリア DNA HVIII 領域に存在する length heteroplasmy の構造を解析し、その法医学的応用について研究したほか、X染色体上の STR 座位の日本人集団における高度な構造多型を明らかにし、その人類遺伝学的解析も行った。

2. 名簿

教授： 武内康雄 Yasuo Bunai
助教： 永井 淳 Atsushi Nagai

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)
なし

総説 (和文)

- 1) 永井 淳. 法医学における検査の役割—DNA 型判定の基礎から死後画像診断まで—, 医用画像情報学会雑誌 2011年; 66-71.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 武内康雄, 辻中正壮, 赤座香予子, 永井 淳. 眼科用内視鏡を用いての法医剖検例における眼底所見の観察とその意義について, 法医病理 2009年; 15巻: 55-60.
- 2) 永井 淳, 武内康雄. X-STR 3 座位の塩基配列解析. DNA 多型 2009年; 17巻: 161-164.
- 3) 永井 淳, 武内康雄, 原 正昭, 木戸 啓. アジア人 3 集団における DXS6789 座位の構造多型. DNA 多型 2010年; 18巻: 191-193.
- 4) 永井 淳, 原 正昭, 木戸 啓, 武内康雄. DXS10135 および DXS10146 の構造多型, DNA 多型 2011年; 19巻: 155-158.

原著 (欧文)

- 1) Nagai A, Hara M, Kido A, Takada A, Saito K, Bunai Y. Sequence polymorphisms at the DXS6789, DXS8377 and DXS101 loci in three Asian populations. Forensic Sci Int:Gene. Supplement Series 2, 2009;2:49-50.
- 2) Hayashi T, Ago K, Ago M, Yamanouchi H, Bunai Y, Ogata M. The infiltration of 'primed' neutrophils into multiple organs due to physical abuse to the elderly: An immunohistochemical study. Forensic Sci Int. 2010;202:17-25. IF 1.821
- 3) Chen H, Zhou X, Shoumura S, Emura S, Bunai Y. Age- and gender-dependent changes in three-dimensional microstructure of cortical and trabecular bone at the human femoral neck. Osteoporos Int. 2010;21:627-636. IF 4.859
- 4) Hayashi T, Bunai Y, Ago K, Ago M, Ogata M. Thymus and adrenal glands in elder abuse. Am J Forensic Med Pathol. 2011;32:368-371. IF 0.646
- 5) Nagai A, Bunai Y. Insertion/deletion polymorphisms at the X-STR DXS10146 and DXS10147 flanking regions. Forensic Sci Int: Gene. Supplement Series 3, 2011;129-130.
- 6) Nagai A, Bunai Y. Structural polymorphisms at the X-chromosomal short tandem repeat loci DXS10134, DXS10135, DXS10146 and DXS10148. Forensic Sci Int: Gene 3, 2011;343-344.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

- 1) 武内康雄：薬毒物検査等受託事業費；平成 21-23 年度；20,029 千円(6,100：8,229：5,700(以上)千円)；岐阜県警察本部

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

武内康雄：

- 1) 日本法医学会評議員(～現在)
- 2) 法医病理研究会運営委員(～平成 22 年 3 月)
- 3) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会評議員(～現在)
- 4) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会症例検討委員(～現在)
- 5) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会診断基準検討委員(～現在)
- 6) 日本 SIDS・乳幼児突然死予防学理事(～現在)

永井 淳：

- 1) 日本 DNA 多型学会評議員(平成 23 年 12 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

武内康雄：

- 1) 法医病理；編集委員長(～現在)
- 2) Legal Medicine；Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

武内康雄：

- 1) 第 17 次日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会シンポジウム(平成 23 年 3 月，島根，「SIDS の原因に迫る」座長)
- 2) 第 95 次日本法医学会全国集会(平成 23 年 6 月，福島，特別講演「死後の眼底所見の観察と法医病理学的な 2, 3 の問題点」演者)

永井 淳：

- 1) 医用画像情報学会平成 23 年度年次(第 160 回)大会(平成 23 年 5 月，岐阜，教育講演「法医学における検査の役割～DNA の基礎から死後画像診断まで～」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

武内康雄：

- 1) 岐阜県公害審査会委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 武内康雄：眼科用内視鏡を用いての法医剖検例における眼底所見の意義の検討：平成 19-20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書：1-6(平成 21 年 5 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

年間 60~80 体の法医解剖の鑑定を嘱託されており、解剖やその後の検査、鑑定書作成等のため研究のための時間が制約されているが、それなりの成果をあげられたと思っている。

現状の問題点及びその対応策

法医学分野では、現在 2 名の教員が教育・研究・実務に従事しており、研究などの面では国内外から相応の評価を受けている。しかしながら、研究領域がやや固定化してきていることは否めず、また、人事が固定化しつつあるという問題点もある。そこで、今後は学外との共同研究を目指しながら、学問の進歩に則し新しい研究手法を取り入れ、時代の傾向に則して研究分野を広げる必要があると考えられる。また、本分野に新しい息吹を引き起こすために、大学院生が入学しやすい環境と設備を整えることが急務であると考えられる。

今後の展望

法医病理学的な研究として、今後外傷の病理、特に、受傷後早期に起こる変化について、分子病理学的研究を始めたい。DNA 多型に関する研究では、引き続き日本人集団における DNA 多型のデータベースを進めるとともに、個人識別に有用な DNA 多型領域の検討ならびに DNA 多型のより効率的な検出法の開発等、世界の趨勢に遅れず、研究を推進していきたい。

(7) 産業衛生学分野

1. 研究の概要

衛生学は広い意味での環境とヒトの関わりを解析し、ヒトの健康の保持・増進に寄与することを目的とした実学である。衛生学は包括的な応用科学であって、基礎医学に属するものではなく、社会医学の一分野である。従って、社会の要請に積極的に答えていかなくてはならない宿命にある。現在の産業衛生学分野の研究内容は、職場における実践活動を通じたもので、以下のような研究を行っている。

(1) 建設労働者、浄化槽法定検査業務従事者などの屋外労働者を対象に健康問題、作業環境、労働条件の検討を行い、快適職場づくりのための研究、(2) 熱中症、振動障害、騒音性難聴の予防の研究、(3) 各種職場における腰痛をはじめとした筋骨格系障害予防の研究、(4) 職場のメンタルヘルス対策の研究、(5) 医師をはじめとした医療従事者および医療系学生の健康障害予防の研究を行っている。

2. 名簿

准教授： 井奈波良一 Ryoichi Inaba

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 宮下和久, 森岡郁晴, 井奈波良一. 複合曝露：彼末和之監修. からだと温度の事典, 東京：朝倉書店；2010年：484-485.
- 2) 井奈波良一. 職場の熱中症予防対策(改訂版), 東京：労働調査会；2011年：1-14.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 井奈波良一, 広瀬万宝子. 民間埋蔵文化財発掘調査会社における労働安全衛生管理の実態, 日本職業・災害医学会会誌 2009年；57巻：11-16.
- 2) 井奈波良一, 広瀬万宝子, 小野桂子, 黒川淳一, 井上真人. 建物解体作業者の夏期の自覚症状と暑熱対策, 日本職業・災害医学会会誌 2009年；57巻：66-72.
- 3) 黒川淳一, 井上真人, 井奈波良一, 岩田弘敏. メンタルヘルス不調者に対する職場復帰支援の取り組みと事業場外資源に期待されること, 日本職業・災害医学会会誌 2009年；57巻：73-85.
- 4) 黒川淳一, 井上真人, 井奈波良一, 岩田弘敏. メンタルヘルス不調者に対し職場復帰に向けて求められること, 日本職業・災害医学会会誌 2009年；57巻：92-108.
- 5) 井奈波良一, 黒川淳一, 井上真人. 新医師臨床研修制度における1年目研修医の職業性ストレスと対処特性, 日本職業・災害医学会会誌 2009年；57巻：161-167.
- 6) 近藤針次, 下山一郎, 山田守正, 竹田 清, 浦野博秀, 井奈波良一, 榊原規彰. 手術時における容積脈派法とカテーテル法との血圧反応, 医工学治療 2009年；21巻：259-263.
- 7) 井奈波良一, 吉安裕樹, 堀 貴光, 堀内聖剛, 清水三矢, 広瀬万宝子, 井上真人, 植木啓文. 医学生の退学願望と睡眠時間, メンタルヘルス不調およびメランコリー親和型性格との関係, 日本職業・災害医学会会誌 2010年；58巻：19-23.
- 8) 近藤針次, 下山一郎, 増田和実, 井奈波良一, 春名芳郎, 榊原規彰. 非観血容積脈派連続血圧測定法と観血式連続血圧測定法による血圧および心拍出量評価, 医工学治療 2010年；22巻：3-10.
- 9) 井奈波良一, 広瀬万宝子. パスガイドの靴のヒール高と職業性ストレスおよび疲労蓄積度の関係, 日本職業・災害医学会会誌 2010年；58巻：70-75.
- 10) 井奈波良一, 井上真人. 1年目研修医のバーンアウトと職業性ストレスおよび対処特性の関係, 日本職業・災害医学会会誌 2010年；58巻：101-108.
- 11) 井垣通人, 阪本一朗, 井奈波良一. 寒冷環境下の生活協同組合女性従業員を対象とした蒸気温熱シートの適用効果 第2報, 日本職業・災害医学会会誌 2010年；58巻：128-134.
- 12) 井奈波良一, 長縄 孝. 一国立大学法人医学部における職場巡視結果の経年的分析, 日本職業・災害医学会会誌 2010年；58巻：180-183.
- 13) 井奈波良一, 井上真人, 日置敦巳. 大規模自治体病院の男性勤務医のバーンアウトと勤務状況, 職業性ストレスおよび対処特性の関係, 日本職業・災害医学会会誌 2010年；58巻：220-227.
- 14) 広瀬万宝子, 井奈波良一, 井上真人, 黒川淳一. 日韓女子大学生における携帯電話依存傾向と心理的ストレスの関係, 民族衛生 2011年；77巻：19-25.

- 15) 小野桂子, 城 憲秀, 吉田英世, 唐沢 泉, 兵藤博行, 日置久視, 井上真人, 井奈波良一. 病院看護師のタイプ A 行動とバーンアウトとの関連性について, 日本職業・災害医学会会誌 2011 年; 59 巻: 1-7.
- 16) 井奈波良一, 井上真人, 広瀬万宝子, 植木啓文. 男子医学生 of 退学願望とメラニコリー親和型性格, メンタルヘルス不調および睡眠時間との関係, 日本職業・災害医学会会誌 2011 年; 59 巻: 49-52.
- 17) 井奈波良一, 広瀬万宝子. ゴルフ場コース管理従事者の夏期の自覚症状と暑熱対策, 日本職業・災害医学会会誌 2011 年; 59 巻: 63-68.
- 18) 井奈波良一, 井上真人. 女子看護学生バーンアウトと携帯電話依存傾向および SOC の関係, 日本健康医学会雑誌 2011 年; 20 巻: 3-8.
- 19) 井奈波良一, 井上真人: 女性看護師のバーンアウトと職業性ストレスの関係ー経験年数 1 年未満と 1 年以上の看護師の比較ー, 日本職業・災害医学会会誌 2011 年; 9 巻: 129-136.

原著 (欧文)

- 1) Hyodo H, Murata K, Murata S, Kurokawa J, Inaba R. Factors influencing the vitality of elderly women undergoing long-term medical treatment. JJOMT. 2009;57:17-23.
- 2) Inaba R, Kurokawa J, Mirbod SM. Comparison of subjective symptoms and cold prevention measures in winter between traffic control workers and construction workers in Japan. Ind Health. 2009;47:283-291. IF 0.950
- 3) Hyodo H, Inaba R, Murata K, Ohta K, Takahashi T, Hioki H, Ono K, Kanada Y. Study on emotional support for patients with dysphagia. Medicine and Biology 2009;153:134-142.
- 4) Inaba R, Mirbod SM. Subjective musculoskeletal symptoms in winter and summer among indoor working construction electricians. Ind Health. 2010;48:29-37. IF 0.950
- 5) Inaba R, Okumura M, Mirbod SM. Subjective symptoms of female workers sorting goods in summer. Ind Health. 2011;49:464-474. IF 0.950
- 6) Inaba R, Inoue M, Hioki A. Working conditions and coping profiles relating to job satisfaction in Japanese physicians allied with medical and surgical departments in large scale municipal hospitals. JJOMT. 2011;59:193-201.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 横山和仁, 研究分担者: 井奈波良一; 厚生労働科学研究費補助金: 労働者のメンタルヘルス不調の予防と早期支援・介入のあり方に関する研究; 平成 20-22 年度; 2,050 千円(600:600:850 千円)
- 2) 研究代表者: 井奈波良一; 科学研究費補助金基盤研究(C): 医療従事者の職業性ストレスとその対策に関する研究; 平成 21-23 年度; 2,300 千円(800:700:800 千円)
- 3) 研究代表者: 横山和仁, 研究分担者: 井奈波良一; 厚生労働科学研究費補助金: 職場におけるメンタルヘルス対策の有効性と費用対効果に関する研究; 平成 23 年度; 500 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

井奈波良一:

- 1) 日本衛生学会評議員(~現在)
- 2) 日本産業衛生学会代議員(~現在)
- 3) 日本民族衛生学会評議員(~現在)
- 4) 日本温泉気候物理医学会評議員(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

井奈波良一：

- 1) 日本温泉気候物理医学会雑誌；編集委員(～平成 23 年 5 月)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

井奈波良一：

- 1) 第 83 回日本産業衛生学会(平成 22 年 6 月, 福井, シンポジウム「病院勤務医師の労働条件の課題と展望：ディーセントワークの実現に向けて」シンポジスト)
- 2) 第 84 回日本産業衛生学会(平成 23 年 5 月, 東京, シンポジウム「運輸業務従事者の労働衛生管理－健康管理, 労務管理を踏まえて－」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

井奈波良一：

- 1) 岐阜市環境審議会委員(～現在)
- 2) 産業保健相談員(岐阜産業保健推進センター)(～現在)
- 3) 労働衛生指導医(岐阜労働局)(～現在)
- 4) 岐阜県環境影響評価審査会委員(～現在)
- 5) 岐阜県土壌・地下水汚染対策検討会委員(平成 21 年 5 月～平成 23 年 5 月)
- 6) 岐阜県産業廃棄物処理施設等意見調整委員会委員(平成 22 年 2 月～現在)

10. 報告書

- 1) 井奈波良一：メンタルヘルス不調労働者が欲する事業所, 産業医, 医療機関による早期支援に関する調査：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金総括・分担研究報告書(横山班)：93－101(平成 21 年 3 月)
- 2) 井奈波良一：メンタルヘルス不調労働者および管理監督者が欲する労働者のメンタルヘルス問題への事業所, 産業医, 医療機関による早期支援に関する調査：平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金総括・分担研究報告書(横山班)：86－108(平成 22 年 3 月)
- 3) 井奈波良一：メンタルヘルス不調労働者および管理監督者が欲する労働者のメンタルヘルス問題への事業所, 産業医, 医療機関による早期支援に関する調査：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金総括・分担研究報告書(横山班)：130－135(平成 23 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

概要に示した当分野の研究を実施し, 論文を作成した。論文については, 全体の数は十分だと考えられるが, 欧文論文をさらに増やすべく努力が必要である。外部資金については, 科学研究費補助金, 厚生労働科学研究費補助金, 奨学寄付金を得たが, 今後も継続して獲得する必要がある。社会活動については十分行われていると考えている。

現状の問題点及びその対応策

教員が 1 名でマンパワーの面で問題があり, また研究室が手狭のため実験的な研究がほとんどできないという問題点がある。これを打開するために他分野, 他施設との共同研究に力を入れている。

今後の展望

今後とも, 職場の実践活動を通じた研究を行い, その成果を職場に還元したい。当面, 教員数の増員は望めないで, 産業衛生の重要性を強く訴え, また大学院生, 研究生の受け入れや他分野, 他施設との共同研究で当分野の発展の活路を見いだしたい。

(8) 医学教育学分野

1. 研究の概要

平成20年度(2008年4月)より岐阜大学大学院医学系研究科医療管理学講座に「医学教育学」分野が開講された。医学教育学は、医学・医療教育分野における多面的な課題を究明し、効果的な教育方法を研究する学問領域であり、医学・医療教育を行うための具体的な知識やスキルの習得を目指している。本課程を修了した者は、医学教育学の専門家として、教員・医師・学生等を指導する能力を有し、教育システムを自ら構築・改善し、研究を遂行できることを目標とする。医学教育開発研究センターは全国共同利用施設として活動しており、今後、全国からの大学院教育希望者の受け皿としても機能していきたいと考えている。

2. 名簿

教授(併任)：鈴木康之	Yasuyuki Suzuki
教授(併任)：藤崎和彦	Kazuhiko Fujisaki
教授(併任)：丹羽雅之	Masayuki Niwa
助教(併任)：若林英樹	Hideki Wakabayashi
助教(併任)：西城卓也	Takuya Saiki

3. 研究成果の発表

著書(和文)

- 1) 鈴木康之. 発語の遅れと特有の顔貌を指摘された2歳6ヶ月男児：症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京：診断と治療社；2009年：168-171.
- 2) 下澤伸行, 鈴木康之, 折居忠夫. 出生時からの著明な筋緊張低下, 哺乳不良に特異な顔貌を認めた生後2ヶ月男児：症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京：診断と治療社；2009年：220-223.
- 3) 加藤智美, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09冬-第31回医学教育セミナーとワークショップの記録-, 名古屋：三恵社；2009年：1-167.
- 4) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鹿島晴雄編. 新しい医学教育の流れ'09春-第32回医学教育セミナーとワークショップの記録-, 名古屋：三恵社；2009年：1-171.
- 5) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09夏-第33回医学教育セミナーとワークショップの記録-, 名古屋：三恵社；2009年：1-239.
- 6) 阿部恵子, 鈴木康之, Gibbs T, Evans P, 宮田良平, 横地律子, 棚橋裕吉, 中田由紀子, 飯田啓太郎, 伊藤真理子, 阿部妃名子. Professor Gibbs' History Taking & Physical Examination Gibbs教授の英国流診察スキル-医療面接と系統的身体診察-, 名古屋：三恵社；2009年：1-50.
- 7) 阿部恵子, 若林英樹, Evans P, 鈴木康之, 岩田佳久. Practical English Conversation in the Medical Interview Lower back Pain 英語で学ぶ医療面接の基礎-コミュニケーションと異文化理解-, 名古屋：三恵社；2009年：1-42.
- 8) 藤崎和彦. 医療コミュニケーションの特徴と実証研究の現状:橋本英樹編著. 医療コミュニケーション-実証研究への多面的アプローチ, 東京：篠原出版新社；2009年：11-28.
- 9) 藤崎和彦. 医療コミュニケーションの実践に当たっての注意:橋本英樹編著. 医療コミュニケーション-実証研究への多面的アプローチ, 東京：篠原出版新社；2009年：147-156.
- 10) 藤崎和彦. 中川米造先生の仕事をふりかえってみて:「資料展示会『医の倫理』の先駆者 中川米造回顧著作展-”医”とは何かを問い続けて-記念誌」, 大津：滋賀医科大学附属図書館；2009年：5-6.
- 11) 藤崎和彦. 出発点は『患者の求める良医』でした:日本医学教育学会編「人間学入門」, 東京：南山堂；2009年：115.
- 12) 藤崎和彦. 医療社会学について:黒田裕子監修. 看護診断のためのよくわかる中範囲理論, 東京：学習研究社；2009年：90-96.
- 13) 石川ひろの, 阿部恵子, 野呂幾久子, 高山智子. 藤崎和彦. 機能的アプローチ:橋本英樹編著. 医療コミュニケーション研究会編集. 医療コミュニケーション-実証研究への多面的アプローチ, 東京：篠原出版新社；2009年：54-63.
- 14) 鈴木康之, 錦織 宏監訳. 丹羽雅之ら分担翻訳. 医学教育の理論と実践(A practical guide for medical teachers, 原著第2版), 東京：篠原出版新社；2010年：1-498.
- 15) 阿部恵子, 若林英樹, Evans P, 鈴木康之, 岩田佳久編. Practical English Conversation in the Medical Interview : Lower back Pain 英語で学ぶ医療面接の基礎-コミュニケーションと異文化理解-, 名古屋：三恵社；2010年：1-50.
- 16) 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09秋. 第34回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2010年：1-233.
- 17) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 藤代健太郎編. 新しい医学教育の流れ'10春. 第36回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋：三恵社；2010年：1-104.
- 18) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'10夏. 第37回医学教育セミナーとワ

- ークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-359.
- 19) 鈴木康之. 医学教育の学位課程: 医学教育白書 2010年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 191-195.
 - 20) 鈴木康之. 医学教育ユニットの会: 医学教育白書 2010年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 123-125.
 - 21) 丹羽雅之. 教務事務研修: 医学教育学会編. 医学教育白書 2010年版 医学教育別冊, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 250-256.
 - 22) 藤崎和彦. SP養成: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2010年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 52-54.
 - 23) 藤崎和彦. 医学教育専門家育成検討委員会: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2010年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 278.
 - 24) 阿部恵子. 医療面接技能: 日本医学教育学会編集. 医学教育白書 2010年版(07~10), 東京: 篠原出版新社; 2010年: 37-40.
 - 25) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会「平成22年度歯科衛生士専任教員講習会Iテキスト」, 愛知: 全国歯科衛生士教育協議会; 2010年: 4-12.
 - 26) 鈴木康之. ハーラー/シャイエ症候群: 症候群ハンドブック, 東京: 中山書店; 2011年: 387.
 - 27) 鈴木康之. ライソゾームのムコ多糖症代謝. ライソゾーム病-最新の病態, 診断, 治療の進歩, 東京: 診断と治療社; 2011年: 19-21.
 - 28) 鈴木康之. ムコ多糖症(MPS)III型: ライソゾーム病-最新の病態, 診断, 治療の進歩, 東京: 診断と治療社; 2011年: 197-200.
 - 29) 鈴木康之. 副腎白質ジストロフィー: 先天代謝異常症 Diagnose at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 149-151.
 - 30) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之, 植村和正. 新しい医学教育の流れ'10秋. 第38回医学教育セミナーとワークショップの記録. 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-180.
 - 31) 藤崎和彦, 鈴木康之, 丹羽雅之, 井内康輝編. 新しい医学教育の流れ'11冬. 第39回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-232.
 - 32) 加藤智美, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'11春. 第40回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-159.
 - 33) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'11夏. 第41回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-214.
 - 34) 丹羽雅之, 鈴木康之, 高橋優三. 7・4 インターネットチュートリアル/楽位置楽 The Tutorial の開発と実践: 日本薬学会編. 問題解決型学習ガイドブック-薬学教育に適した PBL チュートリアルの進め方, 東京: 東京化学同人; 2011年: 81-88.
 - 35) 植松俊彦, 滝口祥令, 丹羽雅之編著. 新体系看護学全書 疾病の成り立ちと回復の促進 3-薬理学, 東京: メヂカルフレンド社; 2011年: 1-283.
 - 36) 川上ちひろ. 異性ともうまくつきあえる-対 PDD 男児の対異性行動の問題点と援助-: 辻井正次編著. 特別支援教育実践のコツ-発達障害のある子どもの<苦手>を<得意>にする, 東京: 金子書房; 2011年: 130-135.
 - 37) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会「平成23年度歯科衛生士専任教員講習会IIテキスト」, 岐阜: 全国歯科衛生士教育協議会; 2011年: 17-28.
 - 38) 藤崎和彦. シミュレーション医学教育とは何か: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 2-12.
 - 39) 藤崎和彦, 尾関俊紀. ロールプレイによるシミュレーション教育: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 107-113.
 - 40) 藤崎和彦, 尾関俊紀. 模擬患者参加のシミュレーション教育: 日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編. シミュレーション医学教育入門, 東京: 篠原出版新社; 2011年: 114-119.
 - 41) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之, 植村和正. 新しい医学教育の流れ'10秋. 第38回医学教育セミナーとワークショップの記録. 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-180.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 鈴木康之. 小児科における OSCE, 小児科 2009年; 50巻: 85-92.
- 2) 藤崎和彦. 地域をまもる医師をどう育てるか-新医師臨床研修制度見直しについて, 月刊国民医療 2009年; 262巻: 2-6.
- 3) 藤崎和彦. あなたは変われる タバコ編, G ニュースレター 2009年; 33巻: 4.
- 4) 藤崎和彦. あなたは変われる アルコール編, G ニュースレター 2009年; 34巻: 4.
- 5) 藤崎和彦. あなたは変われる 間食編, G ニュースレター 2009年; 35巻: 2-3.
- 6) 藤崎和彦. 医療関係職種教育における FD のシステム, 理学療法ジャーナル 2010年; 44巻: 317-324.
- 7) 鈴木康之. シミュレーション医学教育, 小児科臨床 2010年; 63巻: 55-57.
- 8) 鈴木康之, 下澤伸行. 日本先天代謝異常学会学会賞受賞論文「ペルオキシソーム病との30年: 二人三脚の旅」, 日本先天代謝異常学会雑誌 2010年; 26巻: 2-12.
- 9) 鈴木康之. ALD の造血幹細胞移植療法, Clinical Neuroscience 2011年; 29巻: 958-959.
- 10) 川上ちひろ, 辻井正次. 思春期広汎性発達障害男児への性教育プログラムの検討, 小児保健研究 2011

年；70巻：402-411.

- 11) 井内康輝, 藤崎和彦. 第39回医学教育セミナーとワークショップ, 医学教育 2011年；42巻：45-46.

総説 (欧文)

- 1) Shimozawa N, Honda A, Kajiwara N, Kozawa S, Nagase T, Takemoto Y, Suzuki Y. Diagnostic and follow-up system of patients with X-linked adrenoleukodystrophy in Japan. *J Hum Genet.* 2011;56:106-109.
- 2) Tomatsu S, Montaña AM, Oikawa H, Smith M, Barrera L, Chinen Y, Thacker MM, Mackenzie WG, Suzuki Y, Orii T. Mucopolysaccharidosis type IVA (Morquio A disease): clinical review and current treatment. *Curr Pharm Biotechnol.* 2011;12:931-945.
- 3) Morita M, Shimozawa N, Kashiwayama Y, Suzuki Y, Imanaka T. ABC subfamily D proteins and very long chain fatty acid metabolism as novel targets in adrenoleukodystrophy. *Curr Drug Targets.* 2011;12:694-706.

原著 (和文)

- 1) 升野光雄, 黒木良和, 松浦公美, 福嶋義光, 山内泰子, 河村理恵, 高田史男, 丹羽雅之, 鈴木康之. インターネットを利用した大学連携・問題基盤型遺伝カウンセラー教育の試み, 日本遺伝カウンセリング学会誌 2009年；30巻：9-17.
- 2) 鈴木康之, 吉岡俊正, 吉田素文, 田川まさみ, 錦織 宏, 西城卓也, 守屋利佳, 大谷 尚, 渡邊洋子. 次世代の医学教育者の育成に向けて, 医学教育 2009年；40巻：235-236.
- 3) 鈴木康之, 吉岡俊正, 吉田素文, 田川まさみ, 錦織 宏, 西城卓也, 守屋利佳, 大谷 尚, 渡邊洋子. 医学・医療教育学の専門家養成に関するニーズ調査結果, 医学教育 2009年；40巻：237-241.
- 4) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 加藤智美, 阿部恵子, 若林秀樹, 高橋優三, 鈴木康之. 医学教育セミナーとワークショップ-30回開催を振り返って, 医学教育 2009年；40巻：367-374.
- 5) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Emotional Intelligence (EI) と Physician Empathy Scale (PES)(日本語訳), 医学教育 2009年；40巻：439-440.
- 6) 阿部恵子, 奥野友香. ASPE (Association of Standardized Patient Educators) Annual Conference 2008に参加して, 医学教育 2009年；40巻：129-131.
- 7) 高橋優三, 長野 功, 呉 志良, 加藤智美, 鈴木康之, 早川大輔. PBLのコアタイム省察用ポートフォリオ, 医学教育 2010年；41巻：207-209.
- 8) 村岡千種, 藤崎和彦. 医療職が模擬患者を演じるということ-SPになるまでのプロセスと功罪-, 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会誌 2010年；8巻：21-30.
- 9) 川上ちひろ, 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 保育園児・妊婦との継続的交流体験の教育的効果-医療系学生の気づきと学び, 日本小児科学会雑誌 2011年；115巻：132-137.
- 10) 川瀬基子, 半谷眞七子, 亀井浩行, 松葉和久, 大橋 均, 藤崎和彦. 調剤薬局におけるがん患者と薬剤師のコミュニケーションに関するパイロット研究, 医療薬学 2011年；37巻：559-566.
- 11) 志村俊郎, 吉井文均, 吉村明修, 阿部恵子, 高橋優三, 佐伯晴子, 藤崎和彦, 阿曾亮子, 井上千鹿子. 医学部・医科大学における模擬患者・標準模擬患者養成および参加型教育に関する実態調査, 医学教育 2011年；42巻：29-35.
- 12) 若林英樹, 鈴木康之. 英国グラスゴー大学のカリキュラムに学ぶ~総合診療/プライマリ・ケアをコアとする地域基盤型の卒前医学教育~, 医学教育 2011年；42巻：371-374.

原著 (欧文)

- 1) Aoki H, Hara A, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. In vitro and in vivo differentiation of human embryonic stem cells into retina-like organs and comparison with that from mouse pluripotent epiblast stem cells. *Dev Dyn.* 2009;583:2464-2468. IF 2.864
- 2) Niwa M, Hara A, Taguchi A, Aoki H, Kozawa O, Mori H. Spatiotemporal expression of Hsp20 and its phosphorylation in hippocampal CA1 pyramidal neurons following transient forebrain ischemia. *Neurol Res.* 2009;31:721-727. IF 1.621
- 3) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Niwa M, Tokuda H, Akamatsu S, Doi T, Kato H, Yoshimura S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O. α B-crystallin extracellularly suppresses ADP-induced granule secretion from human platelets. *FEBS Lett.* 2009;583:2464-2468. IF 3.601
- 4) Shimizu A, Takahashi Y, Suzuki Y, Lefor AT. Preparing students for overseas rotations. *Medical Education (Japan).* 2009;40:47-53.
- 5) Rethans JJ, Ban N, Suzuki Y. Future use of skills laboratories at Medical Schools in Japan-how to transform these into effective educational departments? *Medical Education (Japan).* 2009;40:341-346.
- 6) Kuratsubo I, Suzuki Y, Krii KO, Kato T, Orii T, Kondo N. Psychological status of patients with mucopolysaccharidosis type II and their parents. *Pediatr Intl.* 2009;50:41-47. IF 0.755
- 7) Suzuki Y, Aoyama A, Kato T, Shimozawa N. Retinitis pigmentosa and mucopolysaccharidosis type II-an extremely attenuated phenotype. *J Inher Metab Dis.* 2009;32:582-583. IF 3.808
- 8) Wakabayashi H, Diaz LA, Rubenstein D, Lefor A, Kitajima Y, Aoyama Y, Suzuki Y, Takahashi Y, Ban N. Three essential conditions to cultivate physician scientists. *Medical Education (Japan).* 2009;40:433-437.

- 9) Abe K, Suzuki T, Fujisaki K, Ban N. A national survey to explore the willingness of Japanese standardized patient to participate in teaching physical examination skills to undergraduate medical students. *Teaching and Learning in Medicine*. 2009;21:240-247. IF 0.679
- 10) Cleland J, Abe K, Rethans J. The use of simulated patients in medical education- AMEE Guide No 42. *Medical Teacher*. 2009;31:477-486. IF 1.494
- 11) Okuyama T, Tanaka A, Suzuki Y, Ida H, Tanaka T, Cox GF, Eto Y, Orii T. Japan Elaprase Treatment (JET) study: idursulfase enzyme replacement therapy in adult patients with attenuated Hunter syndrome (Mucopolysaccharidosis II, MPS II). *Mol Genet Metab*. 2010;99:18-25. IF 3.539
- 12) Tomatsu S, Montaña AM, Oguma T, Dung VC, Oikawa H, Guitiérrez ML, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Barrera L, Orii T. Validation of disaccharide composition derived from dermatan sulfate and heparan sulfate in mucopolysaccharidoses and mucolipidoses II and III by tandem mass spectrometry. *Mol Gene Metab*. 2010;99:124-131. IF 3.539
- 13) Tomatsu S, Montaña AM, Oguma T, Dung VC, Oikawa H, de Carvalho TG, Gutiérrez ML, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Sakura N, Barrera L, Kida K, Kubota M, Orii T. Dermatan sulfate and heparan sulfate as a biomarker for mucopolysaccharidosis I. *J Inherit Metab Dis*. 2010;33:141-150. IF 3.808
- 14) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Doi T, Niwa M, Akamatsu S, Tokuda H, Ogura S, Yoshimura S, Iwama T, Kozawa O. Thromboxane A2 promotes soluble CD40 ligand release from human platelets. *Atherosclerosis*. 2010;209:415-421. IF 4.086
- 15) Hara A, Taguchi A, Aoki H, Hatano Y, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. Folate antagonist, methotrexate induces neuronal differentiation of human embryonic stem cells transplanted into nude mouse retina. *Neurosci Lett*. 2010;477:138-143. IF 2.055
- 16) Abe K, Sato J, Wakabayashi H, Ban N. Knowing the patient better: how facilitated sharing of diabetes patients' life stories enhances patient/physician relationships but not metabolic control. *General Medicine*. 2010;11:79-86.
- 17) Hintze JP, Tomatsu S, Fujii T, Montaña AM, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Ishimaru T, Orii T. Comparison of liquid chromatography-tandem mass spectrometry and sandwich ELISA for determination of keratan sulfate in plasma and urine. *Biomark Insights*. 2011;6:69-78.
- 18) Satoh K, Niwa M, Binh NH, Nakashima M, Takamatsu M, Hara A. Galectin-3 expression in hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia, and its inhibition by hypothermia. *Brain Res*. 2011;1382:266-274. IF 2.623
- 19) Satoh K, Niwa M, Binh NH, Nakashima M, Kobayashi K, Takamatsu M, Hara A. Increase of galectin-3 expression in microglia by hyperthermia in delayed neuronal death of hippocampal CA1 following transient forebrain ischemia. *Neurosci Lett*. 2011;504:199-203. IF 2.055

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 衛藤義勝, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業: ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班; 平成 19-21 年度; 6,500 千円(2,000 : 2,000 : 2,500 千円)
- 2) 研究代表者: 山口清次, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業: タンデムマス等の新技術を導入した新しいマススクリーニング体制の確立に関する研究班; 平成 19-21 年度; 500 千円(200 : 150 : 150 千円)
- 3) 研究代表者: 森 秀樹, 推進責任者: 鈴木康之; 文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(テーマ 6): 臨床医学教育を強化向上させる ICT; 平成 19-21 年度; 67,849 千円(23,993:21,980:21,876 千円)
- 4) 研究代表者: 古田善伯, 研究分担者: 鈴木康之; 経済産業省平成 21 年度体系的な社会人基礎力育成・評価システム開発・実証事業: 全学的な社会人基礎力育成をめざす教育システムの開発(岐阜大学); 平成 21 年度; 1,091 千円
- 5) 研究代表者: 加藤智美, 共同研究者: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 阿部恵子, 若林英樹; 大学活性化経費(教育)「学士力の育成を目指す教育プログラム」: 医療面接実習～動画を用いた振り返りの促進～; 平成 21 年度; 490 千円
- 6) 研究代表者: 西澤正豊, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業: 運動失調症に関する調査研究班; 平成 20-22 年度; 3,600 千円(1,200 : 1,200 : 1,200 千円)
- 7) 研究代表者: 奥山虎之, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金医療技術実用化総合研究事業: 新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立; 平成 20-22 年度; 6,000 千円(2,000 : 2,000 : 2,000 千円)
- 8) 研究代表者: 鈴木康之; 科学研究費補助金基盤研究(C): 小児科領域における客観的臨床能力評価システムの開発; 平成 20-22 年度; 3,500 千円(2,300 : 700 : 500 千円)

- 9) 研究代表者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：コバルトクロライド誘発網膜神経障害モデルを用いた再生治療に関する基礎的研究；平成 22-24 年度；4,160 千円(1,690：1,560：910 千円)
- 10) 研究代表者：河野健一，研究分担者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：6 年一貫プロフェッショナルリズム教育における e-ポートフォリオの開発と実践；平成 22-24 年度；3,640 千円(1,300：1,170：1,170 千円)
- 11) 研究代表者：衛藤義勝，研究分担者：鈴木康之；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班；平成 22-24 年度；7,800 千円(2,600：2,600：2,600 千円)
- 12) 研究代表者：伴信太郎，研究分担者：植村和正，西城卓也；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：スキルラボ教育を活性化させる非常勤医師再教育プログラム開発；平成 21-23 年度；4,576 千円(2,226：1,360：990 千円)
- 13) 研究代表者：伴信太郎，研究分担者：六反一仁，西城卓也；科学研究費補助金基盤研究(B)：慢性疲労症候群に対する漢方治療と認知行動療法を融合した集学的な治療戦略の確立；平成 21-23 年度；17,810 千円(9,620：5,330：2,860 千円)
- 14) 研究代表者：鈴木富雄，研究分担者：伴信太郎，佐藤寿一，西城卓也；科学研究費補助金基盤研究(C)：患者中心のコミュニケーション教育プログラム(PEAC)の開発とその評価；平成 21-23 年度；4,550 千円(1,560：1,430：1,560 千円)
- 15) 研究代表者：樫田美雄，研究分担者：若林英樹；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：在宅医療文化のビデオエスノグラフィー～生活と医療の相互浸透関係の探究～；平成 23 年度；360 千円
- 16) 研究代表者：阿部恵子，研究分担者：若林英樹，川上ちひろ；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医学生の情動能力育成のための 6 年間継続的コミュニケーション教育プログラムの開発；平成 23-25 年度；5,200 千円(2,340：1,430：1,430 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

鈴木康之：

- 1) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 2) 日本医学教育学会理事，評議員(～現在)
- 3) 日本小児科学会代議員，教育委員会(～現在)
- 4) 日本先天代謝異常学会理事，評議員(～現在)
- 5) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 6) 東海臨床遺伝・代謝懇話会世話人(～現在)

藤崎和彦：

- 1) 日本医学教育学会理事，評議員(～現在)
- 2) 日本医学教育学会教材開発 SP 養成委員会同顧問(～現在)
- 3) 日本医学教育学会医学教育専門家育成検討委員会委員長(～現在)
- 4) 医療コミュニケーション研究会会長(～現在)
- 5) RIAS 研究会日本支部(RIAS Japan)代表(～現在)
- 6) 日本医療経済学会幹事(～現在)

丹羽雅之：

- 1) 日本医学教育学会広報委員会委員(平成 21 年 1 月～現在)
- 2) 日本炎症・再生医学会評議員(～現在)

- 3) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 4) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)
- 6) 日本医学教育学会情報基盤委員会委員(平成 21 年 1 月～現在)
- 7) 日本医学教育学会特別領域情報基盤開発委員会委員(平成 22 年 1 月～現在)
- 8) 日本 M&S 医学教育研究会幹事・評議員(平成 22 年 11 月～現在)
- 9) 医療系 e-learning 全国交流会 副会長(平成 23 年 10 月～現在)

阿部恵子：

- 1) Association of Standardized Patient Educators, International committee member (～現在)
- 2) RIAS 研究会委員(～現在)
- 3) 日本医学教育学会, 教材開発・SP 委員会委員(平成 21 年 4 月～現在)

若林英樹：

- 1) 日本医学教育学会準備教育・行動科学教育委員会委員(平成 21 年 1 月～現在)
- 2) 日本医学教育学会・行動科学準備教育委員会委員(平成 21 年 4 月～現在)
- 3) 家族志向のヘルスケア研究会設立代表(平成 20 年～現在)

西城卓也：

- 1) 日本医学教育学会医学教育専門家育成検討委員会委員(～現在)
- 2) 日本医学教育学会国際関係委員会委員(～現在)

2) 学会開催

鈴木康之：

- 1) 第 31 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 1 月, 岐阜)
- 2) 第 32 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 5 月, 東京)
- 3) 第 33 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 8 月, 岐阜)
- 4) 第 10 回国公私立大学医学部・歯学部教務事務職員研修(平成 21 年 10 月, 岐阜)
- 5) 第 34 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 11 月, 札幌)
- 6) 第 35 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 1 月, 岐阜)
- 7) 第 36 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 5 月, 東京)
- 8) 第 37 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 8 月, 岐阜)
- 9) 第 11 回国公私立大学医学部・歯学部教務事務職員研修(平成 22 年 10 月, 岐阜)
- 10) 第 38 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 11 月, 名古屋)
- 11) 医学教育研究指導者向けのワークショップ～研究と論文発表の道案内をするには～(平成 22 年 12 月, 岐阜)
- 12) 第 1 回医学教育研究大学院生向けのワークショップ～研究着手から論文発表までのプロセスに必要なこと～(平成 22 年 12 月, 名古屋)
- 13) 第 39 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 1 月, 岐阜)
- 14) 第 40 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 5 月, 岐阜)
- 15) 第 41 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 8 月, 岐阜)

藤崎和彦：

- 1) 第 18 回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成 22 年 6 月, 名古屋)
- 2) 第 19 回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成 22 年 12 月, 名古屋)
- 3) 第 20 回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成 23 年 6 月, 名古屋)
- 4) 第 21 回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成 23 年 12 月, 名古屋)

阿部恵子：

- 1) 第 4 回 RIAS ワークショップ(平成 21 年 7 月～8 月, 名古屋)

藤崎和彦・阿部恵子：

- 1) 第 5 回 RIAS トレーニングワークショップ(平成 22 年 8 月, 東京)

- 2) 第6回 RIAS トレーニングワークショップ(平成23年7月, 名古屋)

若林英樹:

- 1) 第2回家族志向のヘルスケア研究会ワークショップ「メディカルファミリーセラピー」, テーマ: 患者・家族中心の医療で鍵となるものは?(平成22年11月, 東京)

3) 学術雑誌

鈴木康之:

- 1) Medical Education ; Editor(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

鈴木康之:

- 1) International Seminar for Medical Education(2009.01, Seoul, Medical Education in Gifu University School of Medicine; performer)
- 2) WONCA Asia Pacific Regional Conference(2009.06, Hong-Kong, Developing Family Medicine: the importance of modern medical education; performer)
- 3) 第41回日本医学教育学会(平成21年7月, 大阪, 岐阜大学医学部における学生定員増への対応. シンポジスト)
- 4) 第51回日本先天代謝異常学会(平成21年11月, 東京, 日本先天代謝異常学会学会賞受賞講演「ペルオキシソーム病との30年: 二人三脚の旅」演者)
- 5) 札幌市立大学看護学部(平成22年2月, 札幌, 「看護 OSCE」助言者)
- 6) 第113回日本小児科学会学術集会(平成22年4月, 盛岡, 小児科医育成の目標と戦略. シンポジウム2「小児科学の卒後教育: 世界トップレベルの小児科医を育成するために」シンポジスト)
- 7) 第9回北陸小児救急・集中治療研究会(平成22年5月, 金沢, 「小児医療教育: 最近の考え方と取組」演者)
- 8) 滋賀医科大学 FD 研修会(平成22年7月, 大津, 「少人数能動学習ワークショップ」演者)
- 9) 日本外来小児科学会第14回実習指導者研究会(平成22年7月, 西宮, 「小児科医と医学教育」演者)
- 10) 第52回日本先天代謝異常学会(平成22年10月, 大阪, Intrathecal Enzyme Replacement Therapy in Hunter Syndrome (MPS II) by Muenzer J 座長)
- 11) 平成22年度弘前大学 FD シンポジウム(平成22年12月, 弘前, 「岐阜大学におけるポートフォリオ活用の試み - 1年次地域体験実習と5年次医療面接実習における振り返りの促進と教員からのフィードバック -」シンポジスト)
- 12) 岐阜地区女医会(平成23年1月, 岐阜, 「最近の医学教育のトピックス」演者)

藤崎和彦:

- 1) 現代 GP 「双方向型医療コミュニケーション教育の展開」(平成21年3月, 札幌, 「医療系大学における実践的コミュニケーション教育について」シンポジスト)
- 2) 模擬患者参加型教育フォーラム in 岡山(平成22年2月, 岡山, 基調講演「我が国の医療教育における模擬患者の役割」演者)
- 3) 大阪大谷大学薬学部 SP 研修会(平成22年4月, 大阪, 特別講演「OSCE だけで終わらない SP 参加型コミュニケーション教育」演者)
- 4) 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会ワークショップ(平成22年6月, 薬学部模擬患者交流会&ファシリテーター養成講座基調講演「全国薬学部の SP 会の状況と維持発展の知恵」演者)
- 5) 第4回九州地区医療コミュニケーション教育ワークショップ(平成22年6月, タスクフォース)
- 6) 全国歯科衛生士教育協議会教員研修会(平成22年7月, 基調講演「世界的な医学教育の動向と学習方法の考え方」演者)
- 7) 第42回日本医学教育学会大会(平成22年7月, 東京, シンポジウムII 市民の参加する医学教育のあり方 「我が国における SP の標準化の現状と課題」シンポジスト)
- 8) 共用試験実施機構医科 OSCE 模擬患者標準化に関するワークショップ(平成22年8月-9月, 基調講演「日本での SP 育成の歴史や課題」演者)
- 9) 第2回共用試験実施機構医科 OSCE 外部評価者認定講習会(平成22年10月, 「医療面接」座長)
- 10) 香川模擬患者フォーラム基調講演(平成22年10月, 高松市, 「模擬患者(SP)の医療人教育における役割-その現状と将来-」演者)

- 11) 第1回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会(平成22年10月, 岐阜, チーフタスクフォース)
- 12) 島根県立大学看護短期大学部FD研修会(平成22年11月, 島根, 特別講演「シミュレーション教育とSP参加型教育の最新事情」演者)
- 13) 第5回医療コミュニケーション教育研究セミナー(平成22年11月, 広島, 教育講演「医療現場に必要なコミュニケーション教育」演者)
- 14) 札幌市立大学看護学部模擬患者特別研修会(平成22年11月, 札幌, 特別講演「模擬患者に求められているフィードバックとは」演者)
- 15) 模擬患者参加型教育フォーラム in 岡山(平成23年2月, 岡山, 基調講演「我が国の医療教育における模擬患者の役割」演者)
- 16) シンポジウム 歯士教育課程でのプロフェッショナルリズム教育の構築(平成23年5月, 北九州, 特別講演「医療人育成のためのプロフェッショナルリズム教育」演者)
- 17) 名城大学薬学部平成23年度卒後教育講座(平成23年5月, 名古屋, 特別講演「薬剤師に必要なコミュニケーションスキル」演者)
- 18) 岐阜大学じゅうろく銀行産学連携くるるセミナー(平成23年7月, 大垣, セミナー「病気になるということ」演者)
- 19) 第43回日本医学教育学会大会(平成23年7月, 広島, シンポジウム「医学教育専門家認定制度を考える」座長)
- 20) 第43回日本医学教育学会大会(平成23年7月, 広島, シンポジウム 医学教育専門家認定制度を考える「医学教育専門家認定制度とは」シンポジスト)
- 21) 第43回日本医学教育学会大会(平成23年7月, 広島, プレコングレスワークショップ「医学教育ポートフォリオを体感する」ファシリテーター)
- 22) 第3回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会(平成23年9月, 福岡, ワークシップ3「医療コミュニケーション関連演題」座長)
- 23) 第35回日本医療経済学会研究大会(平成23年9月, 岐阜, シンポジウム「低成長時代の医療保障の動向」座長)
- 24) 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会医療コミュニケーション(平成23年10月, 東京, シンポジウム特別講演「医療コミュニケーション研究の現状とチーム医療」演者)
- 25) 第21回日本医療薬学会年会ワークショップ2「SP参加型研修でコミュニケーション能力を高めようー『がんサバイバー』を題材として」(平成23年10月, 神戸, 特別講演「なぜSP参加型研修なのか」演者)

丹羽雅之：

- 1) 1st Asia-pacific joint PBL conference 2010, Joint conference of APC PBL and APA PHS(2010.10, Taipei, Taiwan, Symposium 5:E-PBL:Internet-PBL for postgraduate life science education; シンポジスト)
- 2) 第12回薬事フォーラム52(平成22年11月, 京都, 「細胞死と病気, その再生」演者)

阿部恵子：

- 1) 東京薬科大学模擬患者養成セミナー(平成21年3月, 東京, 「フィードバックの基本」演者)
- 2) 東京理科大学薬学部模擬患者養成セミナー(平成21年3月, 千葉, 「世界の模擬患者とフィードバックの基本」演者)
- 3) 埼玉県立大学看護学部第3回模擬患者養成セミナー(平成21年10月, 埼玉, 「SPからのフィードバック」演者)
- 4) The 9th Annual Association of Standardized Patient Educators Conference, International Committee Presentation and Workshop 2010(2010, Volunteer patients, real patients and simulated patients:Participants around the world-how ethnically diverse are we? 「Simulated/Standardized Patients in Japan」Presenter)
- 5) 第42回日本医学教育学会(平成22年7月, シンポジウムII 市民の参加する医学教育のあり方 「国内外の身体診察に参加する模擬患者の現状」シンポジスト)
- 6) 埼玉県立大学看護学部看護学科, 第4回模擬患者養成セミナー(平成22年9月, 埼玉, 「SPのフィードバック」演者)
- 7) 東京大学医学教育国際協力研究センター アフガニスタン研修会(平成22年10月, Teaching medical

interview collaboration with SP ; 演者)

若林英樹 :

- 1) 第3回秋田大学医学部附属病院臨床研修指導医養成講習会(平成21年10月, 秋田, 「家族・患者への説明～シミュレーションとしてのロールプレイの効果を考える～」, 演者および座長)
- 2) 第1回家庭医療指導医養成ワークショップ(平成21年11月, 名古屋, 「家族志向のプライマリケアをどう教えるか」 演者および座長)
- 3) 第1回家族志向のヘルスケアワークショップ(平成21年12月, 名古屋, 「家族志向のプライマリ・ケア」 演者および座長)
- 4) 第27回日本家族研究家族療法学会(平成22年6月, 郡山, ワークショップ「医療のための家族の知識」パネリスト)
- 5) 第42回日本医学教育学会(平成22年7月, 東京, ポスターセッション13「地域医療教育, その他」座長)
- 6) 家庭医療サマーフォーラム in 福島(平成22年8月, 福島県南会津郡只見町, 「福島県立医科大学・地域家庭医療学講座 2010」 演者)
- 7) 第43回日本医学教育学会大会. パネル・ディスカッション「準備教育をアウトカム基盤型で考える～その可能性と課題～」(平成23年7月, 広島, パネリスト「地域での継続的交流から体験学習するプログラム: 岐阜大学での新しい取り組み」 演者)
- 8) 恵寿総合病院, 能登地域総合診療強化委員会主催 能登家庭医療道場(平成23年10月, 七尾, 「地域医療で役立つ家族志向のケア」 演者)

西城卓也 :

- 1) 第43回日本医学教育学会(平成23年7月, 広島, シンポジウム「医学教育専門家認定制度を考える」シンポジスト)
- 2) 第43回日本医学教育学会(平成23年7月, 広島, 「インターナショナルセッション」座長)
- 3) 信大病院を中心とした医師卒後教育ワークショップ2011(平成23年10月, 信州, タスクフォース)
- 4) 東京大学医学教育国際協力研究センター アフガニスタン研修会(2011.10, Tokyo, Effective Ambulatory Teaching ; 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 鈴木康之, 下澤伸行: 日本先天代謝異常学会賞(平成21年度)

9. 社会活動

鈴木康之 :

- 1) 医師国家試験委員(～現在)
- 2) 日本ムコ多糖症親の会顧問(～現在)
- 3) ALD 親の会顧問(～現在)
- 4) 東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター運営委員(～現在)
- 5) 共用試験 CBT モニター委員(平成21年度)
- 6) 社団法人日本専門医制評価・認定機構チーフサーベイヤー(～現在)

藤崎和彦 :

- 1) 医師国家試験委員(～現在)
- 2) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 事後評価解析小委員会委員(～現在)
- 3) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 学習・評価項目等改訂専門部会委員(～現在)
- 4) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 課題改訂専門部会委員(～現在)
- 5) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 SP 標準化小委員会委員(～現在)
- 6) 新城市健康づくり計画策定会議アドバイザー(～現在)

丹羽雅之 :

- 1) 共用試験 CBT モニター委員(平成21年度)

若林英樹：

- 1) 名古屋大学総合診療科家族志向のプライマリ・ケアカンファレンス指導医(～現在)
- 2) 名古屋大学招へい教員(総合診療科)大学院授業「行動科学と家族志向のケア」主催(～現在)
- 3) 日本プライマリ・ケア連合学会東日本大震災震災支援チーム(PCAT)研修・教育部リーダー(平成 23 年 3-5 月)
- 4) 日本プライマリ・ケア連合学会東日本大震災震災支援チーム(PCAT)こころのケアチームリーダー(平成 23 年 6 月～現在)
- 5) 日本家族研究・家族療法学会震災支援委員会委員(平成 23 年 6 月～現在)

10. 報告書

- 1) 鈴木康之, 倉坪和泉, 折居忠夫, 折居恒治, 加藤智美：イソフラボンによるムコ多糖症の試験的治療：厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班 平成 20 年度研究報告書：35-36(平成 21 年 3 月)
- 2) 鈴木康之, 下澤伸行：副腎白質ジストロフィー克服への取組に関する研究-発症前診断に関するガイドライン作成に向けて-：厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 20 年度研究報告書：111-113(平成 21 年 3 月)
- 3) 鈴木康之, 奥山虎之, 田中あけみ：ムコ多糖症 IV 型に対する疫学調査：厚生労働科学研究費(臨床研究・予防・治療技術開発研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成 20 年度総括分担報告書：15-16(平成 21 年 3 月)
- 4) 加藤俊一, 奥山虎之, 田中あけみ, 酒井規夫, 鈴木康之, 矢部普正, 高倉広充：造血幹細胞移植を受けたムコ多糖症患者の長期予後調査：厚生労働科学研究費(臨床研究・予防・治療技術開発研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成 20 年度総括分担報告書：17-20(平成 21 年 3 月)
- 5) 鈴木康之, 倉坪和泉：ムコ多糖症患者・家族の意識調査：厚生労働科学研究費(子ども家庭総合研究事業)タンデムマス等の新技術を導入した新しいマスキング体制の確立に関する研究班 平成 20 年度総括・分担研究報告書：49-50(平成 21 年 3 月)
- 6) 山口清次, 松原洋一, 長谷川有紀, 福士 勝, 大浦敏博, 高柳正樹, 佐倉伸夫, 但馬 剛, 虫本雄一, 深尾敏幸, 坂本 修, 田中あけみ, 鈴木康之, 小熊敏広, 北川照男, 奥山虎之, 新宅治夫, 大和田操：新しい新生児マスキング体制の検討：厚生労働科学研究費子ども家庭総合研究事業；タンデムマス等の新技術を導入した新しいマスキング体制の確立に関する研究班 平成 20 年度総括・分担研究報告書：11-16(平成 21 年 3 月)
- 7) 藤崎和彦：SP(standardized patient)について：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業「試験問題プール制の推進等国家試験の改善に関わる研究」分担研究「OSCE の実施に関する研究」報告書「医師国家試験 OSCE 実施概要」：10(平成 21 年 3 月)
- 8) 藤崎和彦：医師国家試験 OSCE での標準模擬患者 SP について：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業「試験問題プール制の推進等国家試験の改善に関わる研究」分担研究「OSCE の実施に関する研究」報告書「医師国家試験 OSCE 実施概要」：35-36(平成 21 年 3 月)
- 9) 丹羽雅之：コバルトクロライド誘発視細胞選択的障害モデルの発現機序解明ならびにその防御・治療：平成 19-20 年度 科学研究費補助金基盤(C)研究成果報告書：5(平成 21 年 5 月)
- 10) 阿部恵子：第 33 回医学教育セミナーとワークショップ：ニュース, 医学教育 40：395(平成 21 年 10 月)
- 11) 野呂幾久子, 阿部恵子, 伴信太郎：客観的臨床能力試験(OSCE)医療面接におけるジェンダーとコミュニケーション・スタイルの関係：医学教育 41：1-62(平成 22 年 2 月)
- 12) 鈴木康之, 戸松俊治, アドリアナ・モンタノ：ムコ多糖症 II 型の乳児期早期の身体発育について：厚生労働科学研究費(子ども家庭総合研究事業)タンデムマス等の新技術を導入した新しいマスキング体制の確立に関する研究班 平成 21 年度総括・分担研究報告書：56-57(平成 22 年 3 月)
- 13) 山口清次, 長谷川有紀, 虫本雄一, 佐倉伸夫, 但馬 剛, 高柳正樹, 松原洋一, 深尾敏幸, 坂本 修, 大浦敏博, 福士 勝, 鈴木康之, 田中あけみ, 北川照男, 新宅治夫, 大和田操, 奥山虎之, 小熊敏広, 戸松俊治, 折居忠夫：新しい新生児マスキング体制の検討：厚生労働科学研究費(子ども家庭総合研究事業)タンデムマス等の新技術を導入した新しいマスキング体制の確立に関する研究班 平成 19-21 年度総合研究報告書：17-25(平成 22 年 3 月)

- 14) 鈴木康之, 下澤伸行: 副腎白質ジストロフィー日本人家系解析と発症前診断と取組: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 21 年度研究報告書: 83-85(平成 22 年 3 月)
- 15) 辻 省次, 後藤 順, 高橋祐二, 市川弥生子, 松川敬志, 下澤伸行, 鈴木康之: 副腎白質ジストロフィーの生体資料収集及び臨床病型修飾因子についての研究: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 21 年度研究報告書: 81-82(平成 22 年 3 月)
- 16) 鈴木康之, 折居忠夫, 奥山虎之, 田中あけみ, 知念安紹, 戸松俊治, Wegrzyn G: イソフラボンによるムコ多糖症の試験的治療: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班 平成 21 年度研究報告書: (平成 22 年 3 月)
- 17) 鈴木康之, 奥山虎之, 田中あけみ, 折居忠夫, 戸松俊治: 厚生労働科学研究費(医療技術実用化研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成 21 年度総括分担報告書(平成 22 年 3 月)
- 18) 鈴木康之: 臨床医学教育を強化向上させる ICT -e-Learning で培う医の心と技-: 現代的教育ニーズ取組支援プログラム報告集 平成 21 年度補助期間終了取組: 1-89(平成 22 年 3 月)
- 19) 丹羽雅之: 第 35 回医学教育セミナーとワークショップ: 医学教育 41: 110(平成 22 年 4 月)
- 20) 丹羽雅之: 全国ユニット機関名簿: 医学教育 41: 226-232(平成 22 年 6 月)
- 21) 鈴木康之, 藤代健太郎: 第 36 回医学教育セミナーとワークショップ: 医学教育 41: 272(平成 22 年 8 月)
- 22) 若林英樹: 米国大学院への留学経験~異文化の中で学んだ家族療法: 家族療法研究 27: 75-79(平成 22 年 8 月)
- 23) 藤崎和彦: 世界的な医学教育改革の動向と日本の医学教育: 第 3 回医学教育ワークショップ記録集 愛知医科大学: 3-34(平成 22 年 9 月)
- 24) 藤崎和彦: 岐阜大学における医学生の態度・人間性教育の試み: 第 28 回「関西医科大学医学教育ワークショップ」記録: 33-42(平成 22 年 10 月)
- 25) 藤崎和彦: 医療現場に必要なコミュニケーション教育: 日本コミュニケーション学会中国四国支部「医療コミュニケーション 2010」: 25-37(平成 22 年 11 月)
- 26) 鈴木康之: 6 年一貫の徹底した職業人養成教育が, おのずと社会人基礎力を育てる: 経済産業省 社会人基礎力育成の手引き -日本の将来を託す若者を育てるために: 478-487(平成 22 年 12 月)
- 27) 鈴木富雄, 阿部恵子, 桑島 愛, 河野直子, 伴信太郎: 研修医の抱える問題から示唆された卒前行動科学教育の課題 - グループインタビューによる質的分析: 日本保健医療行動科学学会年 25: 209-224(平成 22 年)
- 28) 鈴木康之, 下澤伸行: 副腎白質ジストロフィーの早期診断・治療に関する研究: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 20-22 年度総括研究報告書: 11-14(平成 23 年 3 月)
- 29) 鈴木康之, 下澤伸行: 副腎白質ジストロフィーの早期診断・治療に関する研究(平成 22 年度): 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 22 年度総括研究報告書: 85-87(平成 23 年 3 月)
- 30) 辻 省次, 松川敬志, 後藤 順, 鈴木康之, 下澤伸行, 高野弘基, 小野寺理, 西澤正豊: 副腎白質ジストロフィー患者における PEX5 遺伝子の全塩基配列解析及び表現型における関連解析: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 22 年度研究報告書: 83-84(平成 23 年 3 月)
- 31) 鈴木康之, 奥山虎之, 田中あけみ, 折居忠夫, 戸松俊治: ムコ多糖症 IV 型に対する疫学調査. 厚生労働科学研究費(臨床研究・予防・治療技術開発研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成 22 年度総括・分担報告書: 12-14(平成 23 年 3 月)
- 32) 丹羽雅之: 全国ユニット機関名簿: 医学教育 42: 181-189(平成 23 年 6 月)
- 33) 丹羽雅之: 第 41 回医学教育セミナーとワークショップ: 医学教育 42: 276(平成 23 年 10 月)

11. 報道

- 1) 藤崎和彦: 「黒岩祐治メディカルレポート 59 シリーズ医療教育を問う 2~コミュニケーション教育の挑戦!!」スタジオ解説: スカイパーフェクト TV 医療福祉チャンネル(2009 年 2 月 14 日)
- 2) 藤崎和彦: 臨床研修制度 見直しに賛否教育: 日本経済新聞(2009 年 3 月 8 日)
- 3) 藤崎和彦: 模擬患者で診断力磨く: 日本経済新聞(2009 年 4 月 12 日)

- 4) 藤崎和彦：医師と患者のコミュニケーションをより円滑に：まにわ@タウン 06 号(2009 年 5 月 30 日)
- 5) 藤崎和彦：『『模擬患者』問診で対話力磨く』：中日新聞(2010 年 11 月 9 日)
- 6) 鈴木康之：書評「ワシントン小児科マニュアル」：医学界新聞 2923 号(2011 年 4 月 4 日)
- 7) 藤崎和彦：「医療者に求められるコミュニケーションスキルと教育の現状」：薬事日報(2011 年 4 月 4 日)

12. 自己評価

評価

2008 度に 1 名, 2011 年度に 3 名の社会人大学院生を日本各地から受け入れることができ、本分野の認知度と必要性は高まっていると判断される。入学者はいずれも指導医クラスであり、今後それぞれの専門分野で指導者として活躍することが期待される。研究成果は、これからであるが、以下のようなテーマで教育研究を推進している。

- 1) カリキュラム開発と学生評価法
- 2) コミュニケーション教育と Professionalism 教育
- 3) より効果的な能動的問題基盤型学習
- 4) シミュレーション教育・臨床スキル教育と E-learning の融合
- 5) 地域基盤型医学教育と総合医の育成方法
- 6) より効果的な臨床教育法・指導法の開発
- 7) 日本における医学教育学研究の推進と専門家育成
- 8) 適切な学生・研修医選抜方法の開発
- 9) 専門医・指導医のアウトカム・コンピテンシーに関する研究
- 10) 緩和医療, 死の教育に関する研究

現状の問題点及びその対応策

医学教育学の研究の歴史は浅く、また研究手法も一般的な医学生物学領域の研究と大きく異なるが、欧米では 1 つの研究分野として定着している。本邦においても医学教育学分野の存在に関して認識を広める必要がある。また研究手法を確立し普及する役割も担っていると考えている。現状では医学教育研究分野に関心を示す医師・医療関係者はまだ少ないが潜在的ニーズは大きいと期待されるので、その発掘に努めたい。

今後の展望

医学教育学が大学院の一分野として確立することが当面の目標であり、着実な研究成果の発信と人材育成を通して、日本における医学教育学の確立に貢献することが中長期的な目標である。さらに国際交流を通じて、日本の医学教育を世界に発信していきたいと考えている。

7. 学位の授与状況と研究成果

医科学専攻において過去5年間に博士(医学)の学位を授与した数は、次表のとおりである。

区分	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
課程博士	29	37	25	27	25
論文博士	10	11	9	5	6

8. 学生生活支援

(1) 奨学金の申請・採択状況

○日本学生支援機構奨学生出願・採用状況

年 度	第1種		第2種	
	出願者数	採用者数	出願者数	採用者数
平成18年度	1	1	0	0
平成19年度	2	2	0	0
平成20年度	2	2	0	0
平成21年度	1	1	1	1
平成22年度	1	1	0	0
平成23年度	0	0	0	0

(2) 授業料免除実施状況

年 度	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成18年度	171	16	0	15	11	0	11
平成19年度	173	14	10	4	15	11	4
平成20年度	184	18	6	9	15	7	8
平成21年度	173	19	10	7	18	12	5
平成22年度	169	18	6	9	14	4	9
平成23年度	193	19	10	7	11	7	4

9. 自己評価・課題と展望

「教育活動」の項で述べたいくつかの改編・改革の特徴、あるいはそれらの基盤ともなる、本研究科が掲げる教育・研究の理念や目標をより明確化するために、平成23年に、本学に先駆けて3つのポリシー(ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー)を明文化した。今後はこれらのポリシーひとつひとつを実のあるものとするために、現実を検証しながら進めなければならない。

本研究科における具体的な到達実績として「学位論文」があるが、近年いずれもピアレビューのしっかりした国際誌(英文)に掲載されたものが多く、個々の研究の水準は非常に高いものが担保されている点で、定性的にみて高い質的評価が得られている。しかし一方で、論文数という定量的な観点からみれば、年々論文数の減少という現実をみないわけにはいかない。いくつかの原因による複合的な結果の現れと思われるが、新臨床研修医制度によって、MD-PhDの制度新設やスカラシップの創設もまったく役に立たないくらい、医学部出身者の大学院志願者の大幅な減少、基礎医学系分野は言わずもがな、臨床医学系分野への大学院進学者の減少は、一大学の問題ではなく全国的レベルの問題となってきた。これらはこれまで継続的な検討課題とはいえ、運営上もとても悩まされるところであろう。これらのことの解決には学内の小手先だけの改編ではすまず、大学間で解決されなければならない重大な問題にも発展してきている。

いずれにせよ現時点では、量的には問題もあるものの、とりあえず質的なレベルは保たれているので、今後この点は維持しながらも、さらに量的な面を充実できるように一丸となって努力していかなければならないと思われる。

[医学系研究科再生医科学専攻]

1. 教育・研究の理念, 目標

ヒト全遺伝子の塩基配列の解読が終了した 21 世紀における医学・医療の中心課題の一つは、間違いなく再生医学・医療である。2006 年 8 月にマウスから、2007 年 11 月にはヒトから、受精卵を使わずに体細胞から分化多能性を持つ細胞 (iPS 細胞) が樹立され、この領域に大きな進歩が見られた。

再生医科学専攻は医学、生命・情報工学並びに生命倫理学とのユニークな連携の下、細胞生物学・分子遺伝医工学的の学問体系に加え、これを臨床に応用するための再生工学・再生応用・倫理学の学問体系からなる。医学部、工学部等の出身者に先端的再生医科学の研究とユニークなインターネット大学院教育 New Research Oriented Bidirectional Education Linkage (NOBEL) を行い、分子生物学、医用生命・情報工学、臨床医学および社会医学の各分野で再生医科学を中心的に担うことのできる知的創造性・専門性と共に倫理性・人間性・社会性の豊かな人材を育成することを目標としている。

2. 再生医科学専攻の構成

生物学的再生医科学を目指す独立専攻系再生医科学には社会的ニーズ、本学の実績と現状を考慮して 3 つの領域からなる組織を置いている。すなわち、分子生物学、発生学、遺伝子工学をベースとした再生分子統御学、最新の生命工学・情報工学をベースとした再生工学及びこれらをベースとした臨床応用とそれに伴う倫理的問題を扱う再生応用・倫理学である。そこで、本専攻は、以下の 3 つの講座で構成し、高度の研究能力がある研究者を分野別に 1 つの有機的統一体となるよう組織している。

平成 23 年 4 月には、本研究科の教育目標に沿って組織の見直しを行い、「循環病態学」及び「呼吸病態学」の 2 分野を医科学専攻に移設し、本専攻に「循環呼吸制御学」を設置した。

(1) 再生分子統御学講座

再生分子統御学講座は 3 つの教育研究分野からなる。幹細胞から組織・器官形成の分子制御を担当する組織・器官形成分野、本学における反射研究施設の伝統を踏まえた神経系の再生を担当する神経生物分野、再生における微生物の役割を担当する病原体制御学分野である。さらに、組織・器官形成分野には、その重要性を考慮して連携講座として岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所発生生物学研究系が参加している。

(2) 再生工学講座

再生工学講座は、2 つの教育研究分野からなる。遺伝子・タンパクの分子構造解析と、それに基づく再生医療に創薬や分子プローブの開発・応用を担当する生命機能分子設計分野と、細胞から組織・器官が形成されるプロセスの 3 次元構築コンピュータによるイメージ化を主に中枢神経系で担当する知能イメージ情報分野である。

(3) 再生応用学講座

再生応用学講座は、2 つの教育研究分野からなる。主に循環器・呼吸器系の再生医科学の臨床応用を担当する循環呼吸制御学、ならびに医学系倫理・社会医学である。

これらの組織は、単に並列する硬直化した組織ではなく、患者並びに学生、企業を含む社会的ニーズに応える新しい再生医療の教育・研究を目指した 1 つの有機的統一体として組織されている。これにより、研究をオープンにすることができ、研究者間の相互チェック体制を整え、研究のレベルアップを図るものである。また、大学院生は自分の研究ばかりではなく、様々なプロジェクトの研究に接触することができ、倫理を含めた広い視野と独創的な思考過程を持つ医科学研究者を養成することが可能となる。

3. 学生定員と入学状況

再生医科学専攻の入学定員、収容定員及び過去5年間の入学状況は次表のとおりである。

博士前期課程はほぼ毎年定員を充足しているが、博士後期課程にあつては、定員充足が減少傾向あり、今後の努力が必要である。

再生医科学専攻の学生定員及び収容定員

研究科	専攻	課程	入学定員	収容定員
医学系研究科	再生医科学専攻	博士前期課程	11	22
		博士後期課程	6	18
		計	17	40

再生医科学専攻の入学状況

過去5年間の入試統計(博士前期課程)

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
		()	< >	()	< >	()	< >	()	< >
平成19年度	11	20	<0>	19	<0>	17	<0>	17	<0>
			《1》		《1》		《1》		《1》
平成20年度	11	16	<0>	16	<0>	13	<0>	13	<0>
			《2》		《2》		《1》		《1》
平成21年度	11	14	<0>	13	<0>	12	<0>	12	<0>
			《0》		《0》		《0》		《0》
平成22年度	11	18	<0>	18	<0>	17	<0>	16	<0>
			《0》		《0》		《0》		《0》
平成23年度	11	13	<1>	12	<1>	11	<1>	10	<1>
			《1》		《1》		《1》		《1》

()は女子、< >は社会人、《 》は外国人留学生をすべて内数で表します。

過去5年間の入試統計(博士後期課程)

年度	事項 募集 人員	志願者数		受験者数		合格者数		入学者数	
平成19年度	6	10	(2) <6> 《0》	10	(2) <6> 《0》	10	(2) <6> 《0》	10	(2) <6> 《0》
平成20年度	6	15	(3) <12> 《2》	15	(3) <12> 《2》	14	(3) <11> 《2》	14	(3) <11> 《2》
平成21年度	6	4	(1) <3> 《0》	4	(1) <3> 《0》	4	(1) <3> 《0》	4	(1) <3> 《0》
平成22年度	6	10	(4) <8> 《1》	10	(4) <8> 《1》	10	(4) <8> 《1》	10	(4) <8> 《1》
平成23年度	6	2	(2) <0> 《1》	2	(2) <0> 《1》	2	(2) <0> 《1》	2	(2) <0> 《1》

()は女子, < >は社会人, 《 》は外国人留学生をすべて内数で表します。

4. カリキュラムの編成方針

本専攻は、生命倫理・医学並びに生命・情報工学両分野が融合した新たな視点からの再生医学に関する問題解決型能動教育を行い、高邁な生命倫理・社会性、再生医学・医療の発展に貢献する判断力、実行力及び独創性に富む人間性豊かな研究者(博士後期課程)並びに高度専門職業人(前期課程、後期課程)を育成することを目標として教育課程を編成している。

このカリキュラム編成方針に基づき、生命倫理・再生医療の基本的教養を身に付け、かつ、再生医学の基礎・臨床並びに再生工学についての最先端の技術を有し、新たな再生医学を先駆的に取り組む能力を有する研究者・高度専門職業人を育成する。

(1) 履修基準

① 博士前期課程

2年間の間に合計30単位以上を修得し学位論文審査に合格しなければならない。ただし、特に優れた研究業績を上げた者は、1年以上在学し所定の要件を満たした場合は2年未満であっても学位を授与することがある。

科目区分	最低履修単位数	備考
共通科目	6	(注)卒業した学部により履修方法が異なる。
学際科目	2	
専門科目	14	専攻分野から必修科目10単位を含め、14単位以上
特別研究	8	
合計	30	

注) 1. 医学又は歯学を履修する課程を卒業した者は、共通科目の履修単位に生命工学及び情報工学の2単位を履修しなければならない。

2. 前項に該当する者以外の者は、共通科目の履修単位に生命工学又は情報工学のいずれか1単位を含めなければならない。

② 博士後期課程

3年間に最低限10単位を取得しなければならない。ただし、特に優れた研究業績を上げた者は、2年以上在籍し所定の要件を満たした場合、3年未満でも学位を授与することがある。

科目区分	最低履修単位数	備考
共通科目	2	(注) 卒業した学部により履修方法が異なる。
学際科目	2	(注) 卒業した学部により履修方法が異なる。
専門科目	2	専攻分野から必修科目10単位を含め、14単位以上
特別研究	4	
合計	10	

- 注) 1. 医学又は歯学を履修する課程を卒業した者は、共通科目の生命工学又は情報工学を含めなければならない。
 2. 前項に該当する者以外の者は、共通科目の分子生物科学又は構造病態医学を含めなければならない。
 3. 再生医科学専攻博士前期課程から進学した者は、共通科目及び学際科目の履修を免除する。

(2) 教育研究分野、指導教員

再生医科学専攻における各領域別の教育研究分野、指導教員、主な研究内容は次の表のとおりである。

○再生分子統御学領域(講座)

分野	指導教員	研究内容
組織・器官形成	國貞 隆弘	胚性幹細胞(ES細胞)・iPS細胞を含む幹細胞から組織・器官形成に至る細胞の増殖・分化のメカニズムについて、細胞生物学的手法と分子生物学的手法を用いて研究を行う。特定の細胞・組織・臓器にとらわれることなく、幹細胞からの組織・臓器の形成過程と幹細胞自身の分化・増殖・自己再生機構の解析を通して、再生現象の分子制御機構の最終的な解明に向けて教育・研究を行う。ヒトES細胞・iPS細胞から組織・臓器を誘導し再生医療へ適用する研究も進めている。
神経生物	中川 敏幸	神経科学領域において、神経幹細胞の増殖・分化誘導・アポトーシス(変性)機構の解明は神経疾患の治療法の開発にとり重要な課題である。神経生物分野では神経変性(アポトーシス)の分子制御機構に関与する遺伝子群を網羅的に同定する方法を確立し、神経変性関連遺伝子の細胞から固体レベルでの作用機構につき、分子生物学、細胞生物学、及びマウス遺伝学を駆使した研究を行う。さらに、アルツハイマー病に代表される神経変性疾患の病態の解明についても取り組む。
病原体制御学	江崎 孝行	疾病及び高齢化により免疫系が破壊されていく中で、1,000種類を越す微生物病原体に対する個々の宿主の抵抗性のレベルを予測し定量化する方法を研究開発する。これにより高度の臓器再生医療が実行される場合に遭遇する感染を予測し、微生物を使用した個々の個体独自の感染抵抗性の再生を行う治療法の確立を目指す。

○ 再生工学領域 (講座)

分野	指導教員	研究内容
生命機能分子設計	大沢 匡毅	再生医療の実現には、幹細胞の基本的特性を理解し、幹細胞を主体的に制御する技術が必要です。我々は、研究対象として皮膚や血液の幹細胞を選び、分子生物学、細胞生物学、発生工学、遺伝子工学等の手法を用いて、幹細胞制御の分子的基盤を解明し幹細胞生物学を理解することを目的に研究を進めます。同時に、得られた成果を元に、再生医療、癌治療、抗老化といった新たな医療の発展に貢献することを目指します。博士後期課程では、生命科学研究遂行に必要な技術の習得と論理的思考法を学習し、自立した生命科学研究者を育成することを目指します。
知能イメージ情報	藤田 廣志	コンピュータを駆使して、医用画像情報をいろいろな角度から処理・加工し、再生医科学をはじめ様々な医療分野における画像情報を取り扱った教育・研究を行う。例えば、コンピュータ支援診断(CAD)と呼ばれているが、画像上のがん病変の位置をコンピュータで指摘したり、病変部位のコンピュータ分析による結果を医師に提供することによって、より正確で確実な医師の画像診断が行えるように支援するシステムの開発である。画像情報処理技術、バーチャルリアリティ (VR, 仮想現実), 人工知能などの最先端の医療画像情報学に関する基礎研究を行い、また、医工学分野の各種の学際領域の画像研究に応用する。

○ 再生応用学領域 (講座)

分野	指導教員	研究内容
循環呼吸制御学	湊口 信也 竹村 元三	本分野では培養系、動物モデル並びにヒトの疾患を用いて、心・血管・腎・肺の各種疾患における病態生理解明ならびに新しい治療法の開発を目指して教育と研究を行う。主に再生医科学的アプローチをとるが、幹～前駆細胞による細胞治療のみならず細胞死や変性の制御、組織修復の制御も方法論として重視する。医学系に限らず、工学、農学、理学、薬学系等と幅広く連携しかつ各分野の学生に広く門戸を開く。
医学系倫理・社会医学	塚田 敬義	1978年に「バイオエシックス百科事典」が出版されており、その頃に「生命倫理学」が成立したといわれている。もとより医の倫理学は、安楽死、脳死・臓器移植、人工妊娠中絶など、従来の医療行為の中では禁止されていた行為の許容基準を明らかにする目的で集約されてきたと解される。ところが、昨今クローン個体問題が浮上し、生命倫理の重心が個人の自己決定から公共選択に移動してきており、そこにはアメリカ型とヨーロッパ型の対立も近年しだいに明らかになってきている。医学・医療の実際を知る者が、再生医科学に伴う全ての倫理的、社会医学的な問題をターゲットとして、日本での然るべき生命倫理を考究すべくその教育・研究を行う。

(3) 基礎技術トレーニングコース

医科学専攻4の(3)で示した基礎技術トレーニングコースにおいて修得した単位は、平成24年度から共通科目として修了に必要な単位に加えることができることとなった。

(4) 大学院特別講義

各講座の研究発表・特別講演からなる先端再生医科学セミナーを年6回、再生医科学専攻の全講座が参加して行っている。また大学院特別講義は、各講座を中心に随時実施している。

5. 教育活動

(1) 教育活動の実施内容与方法

再生医科学専攻が開講している講義科目を以下に示す。

① 博士前期課程

	授 業 科 目	単位数	選択・必修の別
共 通 科 目	生命工学	1	選 択
	情報工学	1	選 択
	構造生物医学	1	選 択
学 際 科 目	生物医学倫理	1	必 修
	生物医学倫理演習	1	必 修
主 な 専 門 科 目	組織・器官発生	2	選択必修
	神経生物学	2	選択必修
	病原体制御学	2	選択必修
	遺伝情報創薬	2	選択必修
	医用情報処理	2	選択必修
	臨床再生医学	2	選択必修
	医学系倫理・社会医学	2	選択必修

② 博士後期課程

	授 業 科 目	単位数	選択・必修の別
共 通 科 目	基礎臨床再生医学	1	選 択
学 際 科 目	再生医療倫理	1	必 修
	再生医療倫理演習	1	必 修
専 門 科 目	幹細胞組織工学演習	2	選択必修
	分子神経細胞生物学演習	2	選択必修
	微生物バイオインフォマティクス演習	2	選択必修
	知能イメージ情報応用演習	2	選択必修
	細胞・組織・器官移植・遺伝子治療演習	2	選択必修
	医学系倫理演習	2	選択必修

学生は、予め指導教員の指示を受けて履修する授業科目を決定する。また、指導教員が必要と認める時は、学部の授業科目、他の専攻・研究科等の授業科目を履修することができる。学生は指導教員の指導の下で研究計画書を作成の上、学位論文作成に必要な研究活動を行う。

再生医科学専攻では、教室での講義、実験室での実験指導、セミナー室での実験データの討論、論文の詳細会を毎週行っている。

博士前期課程及び後期課程の教育は、インターネット・ホームページ“NOBEL”を通じて行っている。開講期間中、各科目を選択した学生はインターネット上のホームページ及びメーリングリストを通じて教員と意見交換を行い、与えられた課題に関して教員及び学生が議論を積み重ねる。科目の修了時にはレポートを提出し、学習成果を、各科目を選択した学生と教員に対して講演し各科目を修了する。

1) 前期：4月～7月、NOBEL法にてインターネット上で課題を学習

9月に最終レポート提出と発表講演

2) 後期：10月～1月、NOBEL法にてインターネット上で課題を学習

2月に最終レポート提出し発表講演

また、内外の大学・研究機関との共同研究並びに留学生交換も積極的に押し進め、学際的・総合的研究の推進とともに国際的通用性・共通性の確保にも力を注いでいる。

このほか、本専攻の教育・研究活動の特徴として以下のものを挙げることができる。

① 講座単位で学生の教育・研究指導に当たっているが、当専攻が学際的分野であることもあり、講座の枠にとらわれず医学基礎系・臨床系・工学系が共同して学生の研究指導を行うなど、柔軟な指導体制を採用

② 大学院設置基準第14条特例の昼夜開講制を実施

- ③ 生命・医療倫理を重視し，前期課程では生物医学倫理を，後期課程では再生医療倫理の履修を必修化
- ④ 前期課程では細胞生物学，分子発生学，分子生物学等の基礎生命科学の教育・研究を，後期課程では再生応用等の応用生命科学の教育・研究を実施

6. 研究活動

〔再生分子統御学講座〕

(1) 組織・器官形成分野

1. 研究の概要

幹細胞の分化・増殖・自己再生の分子機構の解明を目標とし、その成果に基づいて各種幹細胞から細胞・組織・器官を分化誘導し再生医療に適用するための基礎研究にも力を入れている。本分野が開設された2000年以降マウスES細胞からレンズ、網膜細胞を含む眼様構造を試験管内で誘導する技術の開発に成功し、この前例のない培養系を利用した網膜疾患の再生医療モデルの作成に成功した。2003年にヒトES細胞の使用許可を受け（日本で5番目の使用機関）、網膜色素細胞・心筋・血液細胞などの誘導に成功した。現在、岐阜大学ヒト歯髄細胞株コレクションより樹立したヒトiPS細胞を用いて再生医療実現化を視野に入れた皮膚疾患の再生治療モデルの確立を目指している。

幹細胞の化・増殖・自己再生の分子機構の解明の一端として神経堤細胞に注目している。神経堤細胞は神経管から発生する外胚葉由来の細胞であり、非常に多様な細胞（色素細胞、平滑筋、骨・軟骨などの間葉系細胞、神経細胞、グリア細胞などの末梢神経系細胞、内分泌器官構成細胞など）に分化増殖する多分化能を有している。我々はES細胞から神経堤細胞を誘導することに成功し、さらにこの培養系から神経堤幹細胞を単離することにも成功した。この神経堤幹細胞の分化・増殖・自己再生に必要な各因子を詳細に解析することで、神経堤細胞の発生及び分化のメカニズムを明らかにしつつある。今後、神経堤細胞の異常によって発症する重篤な末梢神経破綻であるHirschsprung diseaseやWaardenburg syndromeなどの神経堤症の細胞治療に結びつけたいと考えている。また、神経堤細胞に由来する色素細胞は、表皮に移動して色素細胞への運命が決定された後も環境に応じて神経細胞への分化能力を維持していること、生体内では色素細胞は表皮型と真皮型の二種類に分類されること、白髪は毛包内の色素細胞幹細胞を活性化することで予防可能であることなどを明らかにした。

神経幹細胞・ES細胞の分化に必要な多数の遺伝子を制御しているREST転写因子の機能に関する研究を進め、RESTがES細胞の初期分化を促進する作用があるがこれまで考えられていた未分化維持には関与しないことを明らかにし、現在神経分化におけるRESTの機能の詳細を明らかにしつつある。

2006年から、口腔病態学との共同で親知らずから間葉系幹細胞を採取し、現在までに約200人分の歯髄幹細胞バンクを樹立している。この細胞を利用した骨あるいは神経の再生医療に関して分野横断的な共同研究を進めている。この歯髄細胞コレクションを充実させ、この細胞からiPS細胞バンクを構築する研究を行うとともに、医学部附属病院と連携し各種再生医療・細胞療法の臨床応用をめざす基礎実験を行うために、2011年に岐阜大学大学院医学系研究科・医学部先端医療セルプロセッシングセンターが設立された。他の細胞バンクに比べ安全・安価・効率良く細胞バンクが構成できる利点を生かし、世界で初めての実用的な幹細胞バンクに発展させたい。

口腔病態学、京都大学iPS細胞研究所との共同研究によりヒト歯髄幹細胞は他のヒト細胞に比べて人工多能性幹細胞(iPS細胞)に効率よく誘導されることを明らかにした。この成果を基に、JST山中iPS特別プロジェクトの岐阜大学サテライトチームとしてヒト歯髄由来iPS細胞のコレクションの充実と効率的なiPS細胞誘導を目指す研究が2008年度より開始された。iPSを利用した再生医療の実用化にはiPS細胞を組織適合性抗原に基づいてバンク化することが必須であることを京都大学iPS細胞研究所との共同研究により主張している。また、学内外の研究機関との共同研究により発がんの危険性の少ないiPS細胞誘導法の確立、難病患者や希少動物からのiPS細胞の樹立も行っている。

2. 名簿

教授：	國貞隆弘	Takahiro Kunisada
准教授：	手塚建一	Ken-ichi Tezuka
講師：	本橋 力	Tsutomu Motohashi
助教：	青木仁美	Hitomi Aoki

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 青木仁美, 國貞隆弘. 幹細胞の分化誘導と応用 -ES細胞・iPS細胞・体性幹細胞研究最前線-, 東京: NTS; 2009年: 575-590.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 山田泰広, 青木仁美, 國貞隆弘, 原 明. iPS 細胞と疾患解析: iPS 細胞作成技術の発癌研究への応用, 細胞工学 2009 年; 28 巻: 228-231.
- 2) 副田明男, 國貞隆弘, 岩間 亨, 幹細胞の光と陰-iPS 細胞・ガン幹細胞が脳腫瘍研究を変える, 脳神経外科速 2009 年; 19 巻: 1046-1053.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Motohashi T, Yamanaka K, Chiba K, Aoki H, Kunisada T. Unexpected multipotency of melanoblasts isolated from murine skin. *Stem Cells*. 2009;27:888-897. IF 7.871
- 2) Aoki H, Yamada Y, Hara A, Kunisada T. Two distinct types of mouse melanocyte: differential signaling requirement for the maintenance of non-cutaneous and dermal versus epidermal melanocytes. *Development*. 2009;136:2511-2521. IF 6.898
- 3) Aoki H, Hara A, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. In vitro and in vivo differentiation of human embryonic stem cells into retina-like organs and comparison with that from mouse pluripotent epiblast stem cells. *Dev Dyn*. 2009;238:2266-2279. IF 2.864
- 4) Tsuji Y, Yoshimura N, Aoki H, Sharov AA, Ko MS, Motohashi T, Kunisada T. Maintenance of undifferentiated mouse embryonic stem cells in suspension by the serum- and feeder-free defined culture condition. *Dev Dyn*. 2009;237:2129-2138. IF 2.864
- 5) Shimada H, Yoshimura N, Tsuji A, Kunisada T. Differentiation of dopaminergic neurons from human embryonic stem cells: modulation of differentiation by FGF-20. *J Biosci Bioeng*. 2009;107:447-454. IF 1.707
- 6) Soeda A, Park M, Lee D, Mintz A, Androutsellis-Theotokis A, McKay RD, Engh J, Iwama T, Kunisada T, Kassam AB, Pollack IF, Park DM. Hypoxia promotes expansion of the CD133-positive glioma stem cells through activation of HIF-1alpha. *Oncogene*. 2009;28:3949-3959. IF 7.414
- 7) Iida K, Takeda-Kawaguchi T, Tezuka Y, Kunisada T, Shibata T, Tezuka K. Hypoxia enhances colony formation and proliferation but inhibits differentiation of human dental pulp cells. *Arch Oral Biol*. 2010;55:648-654. IF 1.463
- 8) Hara A, Taguchi A, Aoki H, Hatano Y, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. Folate antagonist, methotrexate induces neuronal differentiation of human embryonic stem cells transplanted into nude mouse retina. *Neurosci Lett*. 2010;477:138-143. IF 2.180
- 9) Tamaoki N, Takahashi K, Tanaka T, Ichisaka T, Aoki H, Takeda-Kawaguchi T, Iida K, Kunisada T, Shibata T, Yamanaka S, Tezuka K. Dental Pulp Cells for Induced Pluripotent Stem Cell Banking. *J Dent Res*. 2010;89:773-778. IF 3.773
- 10) Aoki H, Hara A, Motohashi T, Osawa M, Kunisada T. Functionally distinct melanocyte populations revealed by reconstitution of hair follicles in mice. *Pigment Cell Melanoma Res*. 2010;24:125-135. IF 4.750
- 11) Yamada Y, Aoki H, Kunisada T, Hara A. Rest promotes the early differentiation of mouse ESCs but is not required for their maintenance. *Cell Stem Cell*. 2010;6:10-15. IF 25.943
- 12) Okita K, Matsumura Y, Sato Y, Okada A, Morizane A, Okamoto S, Hong H, Nakagawa M, Tanabe K, Tezuka K, Shibata T, Kunisada T, Takahashi M, Takahashi J, Saji H, Yamanaka S. A more efficient method to generate integration-free human iPS cells. *Nat Methods*. 2011;8:409-412. IF 20.717
- 13) Motohashi T, Yamanaka K, Chiba K, Miyajima K, Aoki H, Hirobe T, Kunisada T. Neural crest cells retain their capability for multipotential differentiation even after lineage-restricted stages. *Dev Dynam*. 2011;240:1681-1693. IF 2.864
- 14) Walker GJ, Soyer HP, Handoko HY, Ferguson B, Kunisada T, Khosrotehrani K, Box NF, Muller HK. Superficial spreading-like melanoma in *Arf(-/-)::Tyr-Nras(Q61K)::K14-Kitl* mice: keratinocyte Kit ligand expression sufficient to "translocate" melanomas from dermis to epidermis. *J Invest Dermatol*. 2011;131:1384-1387. IF 6.270
- 15) Aoki H, Hara A, Motohashi T, Kunisada T. Protective effect of Kit signaling for melanocyte stem cells against radiation-induced genotoxic stress. *J Invest Dermatol*. 2011;131:1906-1915. IF 6.270

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 本橋 力; 科学研究費補助金基盤研究(C): ES 細胞を利用した神経堤症治療モデルの確立・神経堤細胞の分化機構の解析; 平成 20-22 年度; 4,680 千円(1,950 : 1,820 : 910 千円)

- 2) 研究代表者：高橋淑子，研究分担者：國貞隆弘，本橋 力，青木仁美；戦略的創造研究推進事業 CREST：研究領域「人工多能性幹細胞(iPS 細胞)作製・制御等の医療基盤技術」，研究課題「神経堤細胞をモデルとした生体内での細胞リプログラミング法の開発」，研究項目：「生体内における神経堤細胞リプログラミング法に向けた基盤作り(神経堤細胞分化制御因子の検証)」；平成 21-26 年度；49,000 千円(11,500：7,500：7,500：7,500：7,500：7,500 千円)
- 3) 研究代表者：國貞隆弘，研究分担者：手塚建一，本橋 力，青木仁美；JST・山中 iPS 特別プロジェクト (JST・岐阜大学サテライトチーム)：歯胚幹細胞からの iPS 細胞の誘導効率の確認とヒト iPS 細胞の誘導因子減少化の検討；平成 20-24 年度；90,000 千円(10,000：20,000：20,000：20,000：20,000 千円)
- 4) 研究代表者：國貞隆弘；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：動物由来成分を排除した完全合成培地によるヒト iPS 細胞樹立法の確立；平成 21-22 年度；3,000 千円(1,500：1,500 千円)
- 5) 研究代表者：小財健一郎，研究分担者：國貞隆弘；厚生労働省科学研究費補助金・第 3 次対がん総合戦略研究事業：独自 m-CRA ベクターによる癌幹細胞の同定・標的治療の開発と革新的な遺伝子治療の実現；平成 22 年度；1,250 千円
- 6) 研究代表者：青木仁美；科学研究費補助金若手研究(B)：神経幹細胞，神経堤細胞の発生における Rest の機能解析；平成 22-23 年度；3,770 千円(1,950：1,820 千円)
- 7) 研究代表者：國貞隆弘；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」；遺伝子改変マウスによる疾患のメカニズム解明のための共同研究；平成 22 年度；2,000 千円
- 8) 研究代表者：手塚建一；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：センダイウイルスベクターを利用した歯髄細胞からの人工多能性幹細胞誘導方法の検討；平成 23-25 年度；4,810 千円(2,470：1,170：1,170 千円)
- 9) 研究代表者：本橋 力；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：神経堤細胞発生をモデルとした上皮-間葉系転換(EMT)メカニズムの解明；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,300：1,800：900 千円)

2) 受託研究

- 1) 國貞隆弘，大森良幸，吉村滋弘；幹細胞の凍結保存における凍害保護剤および凍結方法の開発；平成 22 年度；909 千円：太陽日酸(株)

3) 共同研究

- 1) 國貞隆弘，手塚建一，柴田敏之；iPS 細胞等幹細胞産業応用促進基盤技術開発；平成 22 年度；2,183 千円
- 2) 國貞隆弘，本橋 力；神経堤細胞発生をモデルとした上皮-間葉系転換(EMT)メカニズムの解明；平成 23 年度；2,000 千円：独立行政法人産業技術総合研究所
- 3) 國貞隆弘；メラニンおよびその周辺物質に関する研究；平成 23 年度；1,520 千円：花王(株)ビューティケア研究センター；

5. 発明・特許出願状況

- 1) Tezuka K, Shibata T, Kunisada T, Tamaoki N, Takeda T, Yamanaka S, Takahashi K : Efficient method for establishing induced pluripotent stem cells. (Entry) ; 2011(PCT/JP2008/068320) Canadian National Phase of International PCT Application / Korean National Phase of International PCT Application (Canadian Patent No.:2732401) / U.S. National Phase of PCT/JP2008/068320 (U.S. Patent Application 13/056,526) / Australian National Phase of PCT/JP2008/068320.

6. 学会活動

1) 学会役員

國貞隆弘：

- 1) 日本色素細胞学会理事(~現在，平成 22 年~会長)
- 2) 日本再生医療学会評議員(~現在)
- 3) International Federation of Pigment Cell Research Council Member(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

國貞隆弘 :

- 1) 日本臨床検査医学会東海北陸支部総会(平成 21 年 3 月, 岐阜, 特別講演「幹細胞・iPS 細胞と再生医療」演者)
- 2) 第 8 回日本再生医療学会総会(平成 21 年 3 月, 東京, 招待シンポジスト「ES 細胞の浮遊培養法:動物由来物質はどこまで排除できるか?」演者)
- 3) 15th Meeting of the Pan American Society for Pigment Cell Research(2009.06, Memphis, USA, Differential signaling requirement for the maintenance of non-cutaneous and dermal melanocytes versus epidermal melanocytes; Speaker)
- 4) 再生医療の実現化プロジェクト第 2 回夏のワークショップ(平成 21 年 7 月, 箱根, 招待講演「JST 山中 iPS 細胞特別プロジェクト研究要旨」演者)
- 5) 第 22 回日本色素細胞学年次学術大会(平成 21 年 12 月, 博多, シンポジウム「紫外線による色素沈着メカニズム」共同座長)
- 6) 16th Meeting of the European Society for Pigment Cell Research(2010.09, Hinxton, UK, Development biology of pigment cells and MSCs; Co-chairman)
- 7) 第 23 回日本色素細胞学年次学術大会(平成 22 年 10 月, 東京慈恵会医科大学, 平成 21 年度, 日本色素細胞学会奨励賞受賞講演, 座長)
- 8) 第 23 回日本色素細胞学年次学術大会(平成 22 年 10 月, 東京慈恵会医科大学, 平成 21 年度, 教育講演「分かりやすいメラニンの生化学とメラノサイトの生物学」, 共同座長)
- 9) 21st International Pigment Cell Conference(2011.09, Bordeaux, France, Invited Lecture 2: Cellular origin of melanocytes: newly resolved routes to melanocyte cell lineages; Speaker)
- 10) 21st International Pigment Cell Conference(2011.09, Bordeaux, France, Concurrent Session 1, Developmental Biology; Co-chairman)
- 11) 21st International Pigment Cell Conference(2011.09, Bordeaux, France, Fitzpatrick Lecture SL5: Functionally distinct melanocyte populations revealed in mice; Speaker)

手塚建一 :

- 1) 第 8 回日本再生医療学会総会(平成 21 年 3 月, 東京, 招待シンポジスト「歯胚幹細胞からの iPS 細胞誘導とバンク化への展望」演者)

本橋 力 :

- 1) 第 8 回日本再生医療学会総会(平成 21 年 3 月, 東京, 「各種の幹細胞」座長)

青木仁美 :

- 1) 第 44 回日本発生生物学会年会(平成 23 年 5 月, 沖縄, 招待講演「Rest is dispensable for the proper intrinsic regulations of neuronal gene expression in the specification of cell fate during neurogenesis in vivo. SW-02-12」演者)
- 2) 21st International Pigment Cell Conference(2011.09, Bordeaux, France, C36: Protective effect of Kit signaling for melanocyte stem cells against radiation-induced genotoxic stress; Speaker)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 手塚建一 : 第 28 回日本骨代謝学会学術集会高得点演題賞(平成 22 年度)
- 2) 青木仁美 : 第 2 回日本色素細胞学会奨励賞(平成 22 年度)
- 3) 本橋 力 : 第 22 回岐阜医学奨励賞(平成 22 年度)
- 4) 青木仁美 : The Johnson & Johnson Global Career Award(平成 23 年度)
- 5) 國貞隆弘 : Thomas B. Fitzpatrick Medal for Pigment Cell & Melanoma Research (2011 年)

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 手塚建一：2 遺伝子でヒト iPS 作製 親知らず，神経細胞を利用：47NEWS(共同通信)，岐阜新聞，熊本日日新聞，山陰中央新報他(2009 年 3 月 5 日)
- 2) 手塚建一：親知らずから「iPS 細胞」岐阜大，2 遺伝子のみ使用：中日新聞(2009 年 3 月 6 日)
- 3) 手塚建一：岐阜大，歯胚幹細胞で iPS 細胞の樹立に成功：日刊工業新聞(2009 年 3 月 9 日)
- 4) 手塚建一：iPS 細胞を効率よく作成：中日新聞(2011 年 4 月 4 日)
- 5) 本橋 力：「研究室から 大学はいま」再生能力ある幹細胞を追う：岐阜新聞(2011 年 11 月 22 日)

12. 自己評価

評価

業績に関しては 3 年間の研究論文の数，インパクトに関しては十分とはいえないまでも不足はない。高インパクトファクターの雑誌はいずれも他分野・機関との共同研究であるが実際に個々の論文において当分野のスタッフが重要な役割を担っている。ただ，研究発表に関しては，国内外の学会での発表を増やし，直接専門家から直接評価を受ける必要がある。競争的研究費の獲得は iPS 細胞やマウスを材料にした研究のコストを考えると十分とは言えないが，共同研究・共同利用により経費の節減を図ってもおり，深刻な不足には陥っていない。大型研究費が継続的に獲得できる保証はなく，教室員全員が少額の研究費を確実に得る努力が今後とも必要であろう。社会活動に関しては，記入対象ではないが國貞が 3 年間で 30 報以上の専門誌の査読，文部科学省科学研究費の評価委員，海外の研究チームの業績評価 (1 件)，海外のグラント選考委員 (1 件)，国際学会の運営委員 (1 件) をこなした。

手塚を中心に歯髄細胞からの効率の良い iPS 細胞誘導法に関する米国，カナダ，韓国，オーストラリアに国債特許出願，プラスミド法およびセンダイウイルスを用いた遺伝子挿入の無い iPS 細胞樹立法の確立，ヒト白血球抗原 (HLA) ハプロタイプホモ歯髄細胞を利用した日本人人口の約 20%をカバーする iPS ラインの樹立はいずれも特筆すべき業績である。

現状の問題点及びその対応策

研究テーマが拡散気味ではあるが，幹細胞研究と再生医学への応用という観点では統一されている。相変わらず厳しい研究費獲得状況が続いており (当分野の科学研究費採択率が低い)，ある程度資金の提供先に合わせた研究をせざるを得ないという状況は変わっていない。

岐阜大学医学部全体における研究従事者の急減と，より良い研究環境を求めての優秀な学内研究者の流失 (これ自体は良いことであるが，優秀な研究差の継続的な供給が前提である) は，当分野に限らず基礎各分野における研究の総量と質の両方に悪影響をもたらす可能性があり，最終的に岐阜大学医学部における基礎研究を壊滅させる恐れもある。岐阜大学医学部の研究能力を維持し，後継者を育成するための具体的なプランの作製と実行が急務と考える。

今後の展望

楽観的な要素は皆無ではあるが，社会的なインパクトの大きい iPS 細胞を中心にした新しい研究テーマを従来の再生医療研究に取り込み，研究分野の選択および研究の質と量のバランスに配慮した独自の研究を行うことで有望な若手研究者のリクルートと研究費の安定的な獲得を目指したい。学内で効果的な共同研究を行い，リソースと情報を有効に活用することも一層積極的に行いたい。

(2) 神経生物分野

1. 研究の概要

再生医学専攻 再生分子統御学講座 神経生物分野では、分子生物学および細胞生物学における最新の技術を駆使し、神経変性疾患の病態解明、さらに治療法の開発を目指した教育と研究を行っている。神経変性疾患の多くは難治性であり、治療法の開発が急務である。そのためには病態の解明が最優先課題であり、医学のみならず細胞生物学、分子生物学、生化学など各専門分野を融合した Interdisciplinary Research and Education (学際的研究および教育) が必要である。本分野の教育と研究は研究室のホームページ (<http://www1.gifu-u.ac.jp/~neurobio/>) に記載しているが、以下に最新の(平成 23 年現在) 研究と教育内容を示す。

A. 研究

1. 難治性神経変性疾患における小胞体ストレスの役割の解明

小胞体は細胞内小器官であり、細胞内カルシウム濃度調節およびタンパク質の修飾を行い、生命現象における細胞機能維持および情報伝達に重要な役割を果たしている。その機能が障害されると小胞体ストレスと呼ばれる現象がおこり、小胞体内に折り畳み異常を起こしたタンパク質が蓄積する。細胞は機能を正常な状態に戻すように小胞体膜上に存在するタンパク質を活性化(小胞体ストレス応答)するが、その破綻により細胞死が誘導される(中川等, *Nature* 2000)。本分野では、小胞体ストレス制御因子およびアルツハイマー病におけるアミロイド-ベータ産生に関与するガンマ-セクレターゼ制御因子をゲノムワイドにスクリーニングする方法を確立し、アルツハイマー病、ハンチントン病の治療法開発を目指した教育と研究を行っている。

(ア) ハンチントン病: 常染色体優性遺伝様式を示し、不随意運動と精神神経症状を特徴とする神経変性疾患である。遺伝子変異によりグルタミンが多数連続し、神経変性をきたすと考えられているが、その機構の詳細は不明のままである。本分野では、ハンチントン病モデルマウスにおいて、小胞体の形態異常を明らかにし、その異常から病態の解明を目指している。

(イ) アルツハイマー病: 日本国内だけでも 205 万人 (2005 年)、30 年後の 2035 年には約 2.2 倍の 445 万人の患者数に達すると予想される認知症をきたす代表的な疾患である。家族性アルツハイマー病の研究から、アミロイド-ベータ産生に関わるガンマ-セクレターゼの病態への関与が示唆されている。しかし、90 パーセント以上は遺伝子変異を認めないため、原因も不明のままである。一方、糖尿病・肥満などのメタボリック症候群がその危険因子として注目されている。そこで、本分野では、メタボリック症候群とガンマ-セクレターゼ活性との関連性の解明からアルツハイマー病の病態解明を目指した研究を行っている。

2. 神経細胞特異的な細胞死関連遺伝子の同定と機能解析

カスパーズ (システインプロテアーゼ) は線虫から哺乳類まで相同遺伝子が存在し、アポトーシス (細胞死) を誘導するプロテアーゼとして中心的な役割を果たしている。本分野では、カスパーズの役割、特に難治性神経疾患 (脊髄小脳変性症) への関与を解明するため、スモールプール cDNA ライブラリーを使った遺伝子のクローニング法による遺伝子の同定と機能解析を行っている。この解析にて、神経疾患の原因遺伝子を同定し、機能および病態の解析から治療法開発に向けた教育と研究を行っている。

3. 大脳皮質運動連合野および前庭神経系の中核機序の研究

電気生理学的手法を用い、神経機能の解析を行っている。

B. 教育

大学院生 (博士前期および後期) は、将来 (次世代) の研究者になるために、諸外国で行われているプログラムを参考にした教育と研究指導が必要だと考えている。そのため、本分野では以下の能力を修得することを目指した教育指導を行っている。

- 個々の実験結果を考察する能力
- 自分の研究成果をまとめる能力
- 研究成果を発表する能力
- 討論する能力
- 英語能力 (英語力を身につけるため、大学院生が中心となり Molecular Biology of THE CELL, Cell Biology を毎週読んでいます。また、ラボミーティングを含め、可能な限り英語でのコミュニケーションを行っている。)

2. 名簿

教授： 中川敏幸 Toshiyuki Nakagawa
准教授： 川島 卓 Takashi Kawashima
講師： 佐竹裕孝 Hirotaka Satake
助教： 太田和徳 Kazunori Ohta

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)
なし

総説 (和文)

- 1) 太田和徳, 認知症, *Functional Food* 2011年; 5巻: 47-51.
- 2) 太田和徳, ケルセチンとアルツハイマー病, *Functional Food* 2011年; 5巻: 135-138.

総説 (欧文)
なし

原著 (和文)
なし

原著 (欧文)

- 1) Suzuki Y, Ohta K, Itoh M, Sakoh-Sumitomo Y, Mitsuda T, Ueda M, Hayakawa-Yano Y, Li S, Hida Y, Inuzuka T, Jung YK, Nakagawa T. An alternative spliced mouse presenilin-2 mRNA encodes a novel gamma-secretase inhibitor. *FEBS Lett.* 2009;583:1403-1408. IF 3.601
- 2) Ohta K, Mizuno A, Ueda M, Li S, Suzuki Y, Hida Y, Hayakawa-Yano Y, Itoh M, Ohta E, Kobori M, Nakagawa T. Autophagy impairment stimulates PS1 expression and gamma-secretase activity. *Autophagy.* 2010;6:345-352. IF 6.643
- 3) Itoh M, Li S, Ohta K, Yamada A, Hayakawa-Yano Y, Ueda M, Hida Y, Suzuki Y, Ohta E, Mizuno A, Banno Y, Nakagawa T. Cayman Ataxia-Related Protein is a Presynapse-Specific Caspase-3 Substrate, *Neurochem Res.* 2011;36:1304-1313. IF 2.608
- 4) Li S, Itoh M, Ohta K, Ueda M, Mizuno A, Ohta E, Hida Y, Wang MX, Takeuchi K, Nakagawa T. The expression and localization of Prune2 mRNA in the central nervous system. *Neurosci Lett.* 2011; 503:208-214. IF 2.055
- 5) Ohta K, Mizuno A, Li S, Itoh M, Ueda M, Ohta E, Hida Y, Wang MX, Furoi M, Tsuzuki Y, Sobajima M, Bohmoto Y, Fukushima T, Kobori M, Inuzuka T, Nakagawa T. Endoplasmic reticulum stress enhances γ -secretase activity. *Biochem Biophys Res Commun.* 2011;416:362-366. IF 2.595

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：中川敏幸；科学研究費補助金萌芽研究：転写因子 ATF4 によるガンマーセクレターゼ活性化の制御機構の解明；平成 19-21 年度；3,100 千円(1,500：900：700 千円)
- 2) 研究代表者：中川敏幸；科学研究費補助金基盤研究(B)：脳内アミノ酸バランス異常による認知症発症機構の解明；平成 20-22 年度；14,200 千円(7,800：3,600：2,800 千円)
- 3) 研究代表者：太田和徳；アルツハイマー病の発症を抑制する新規機能分子の探索；岐阜大学活性化経費(科研採択支援)；平成 22 年度；1,000 千円
- 4) 研究代表者：東 華岳，研究分担者：中川敏幸，太田和徳，李 詩沫，上田昌史，桑田一夫，周 向榮，山口圭一，松本友治；岐阜大学大学院医学系研究科多分野共同研究「プロジェクトチーム」；ハンチントン病における小胞体微細構造からの病態解明；平成 22 年度；1,500 千円
- 5) 研究代表者：村瀬 忍，研究分担者：川島 卓；科学研究費補助金基盤研究(C)：言語指導のための事象関連電位記録による吃音児者の言語処理特性の解明；平成 22-23 年度；2730 千円(1,820 千円：910 千円)
- 6) 研究代表者：中川敏幸；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：発症予防を目指したアルツハイマー病の病態解明；平成 23-25 年度；4200 千円(2,100：1,000：1,100 千円)
- 7) 研究代表者：太田和徳；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：生活習慣病によるアルツハイマー病発症機構の解明；平成 23-24 年度；3,200 千円(1,800：1,400 千円)

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：中川敏幸, 太田和徳；農林水産物・食品の機能性を解析・評価するための基盤技術の開発(ケルセチン・イソフラボンの生活習慣予防機能の科学的エビデンス強化と高含有農作物の作出), 平成 23 年度；7,000 千円：農林水産省.

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

中川敏幸：

- 1) サイエンスワールド(岐阜県)事業『高校生のための「夢のたまご」を育てるサイエンスキャンプ』(平成 21 年度：4 名)

10. 報告書

- 1) 中川敏幸：転写因子 ATF4 によるガンマーセクレターゼ活性化の制御機構の解明：平成 21 年度科学研究費補助金 萌芽研究実績報告書(平成 21 年 3 月)
- 2) 中川敏幸：脳内アミノ酸バランス異常による認知症発症機構の解明：平成 21 年度科学研究費補助金 総括実績報告書(平成 21 年 3 月)
- 3) 村瀬 忍, 川島 卓, 佐竹裕孝, 恵良聖一：事象関連電位記録を用いた吃音者の言語処理の特性に関する予備的研究：A preliminary study of stutterers' language processing using event - related potentials：岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 58 巻：209-214 (平成 21 年)
- 4) 中川敏幸：脳内アミノ酸バランス異常による認知症発症機構の解明：平成 21 年度科学研究費補助金 総括実績報告書(平成 22 年 3 月)
- 5) 中川敏幸：脳内アミノ酸バランス異常による認知症発症機構の解明：平成 22 年度科学研究費補助金 総括実績報告書(平成 23 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

科研費(萌芽研究, 基盤研究)および受託研究費を獲得し, オリジナルな研究を広く行っている。博士後期課程および博士前期課程の大学院生に対しては, 国際・国内学会の発表等により目標を明確にした教育活動を行っている。これら研究および大学院教育に関しての進捗状況は, 総じて順調に発展している。

現状の問題点およびその対応策

2011年現在、本分野の研究は、教員2名（教授、助教）と大学院生5名（博士後期課程：5名）で研究を行っている。現在の大学院生は、薬学系・工学系・医学系の他大学出身者が多く、本学医学部出身者の本分野への大学院入学は今のところない。研究を広く展開するためには、様々な専門分野出身者の集合（融合）体が必要である。そのため今後は他大学・他分野出身者のみならず本学医学部出身の優秀な学生の確保に努力したい。

科研費取得と論文発表は、大学院生のみならず医学部学生の教育・研究指導にとって極めて重要である。そのため、学生の教育と研究は教授と助教の2名で行っている。より細かな指導と世界に通用する研究者育成を効率よく達成するためにも優秀なスタッフの確保と補充が望まれる。また、大学院生教育の時間的な充実と国際化を目指し、毎週木曜日の午前中にラボミーティングを行い、発表および質疑応答を全て英語で行っている。今後外国人研究者との交流やセミナーの充実をはかりたい。

研究成果に関して、国際・国内学会で毎年発表している。

今後の展望

分子生物学および細胞生物学を駆使しながら神経変性疾患の病態解明を行っているが、着実に成果が現れてきているため、治療法開発への応用（トランスレーショナルリサーチ）を目指した研究も取り入れたいと考えている。

教育・研究を通して、グローバルな視野で、独創的な思考が出来る大学院生・医学生を育成したい。

(3) 病原体制御学分野

1. 研究の概要

病原体制御では研究室で半世紀以上継続してきた分子系統進化の研究を基軸に、細胞内寄生細菌の感染機構の研究、病原微生物感染症の迅速診断、環境や食品の安全性を担保する安全性モニタリングシステムの開発、文科省の微生物遺伝子資源の基盤整備事業 National Bioresource Project に参加し、わが国の研究基盤と医療を支える活動を行っている。特に感染症医療の在りかたを根本から変えるために、外来診察で診察を待つ 30 分以内に感染症病原体を特定する新規技術開発に成功し、実用化を図るための展開を行っている。

2. 名簿

教授：	江崎孝行	Takayuki Ezaki
准教授：	大楠清文	Kiyofumi Ohkusu
助教：	甲畑俊郎	Syunro Kohbata

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 大楠清文, 江崎孝行. 病原微生物の分類: 新・カラーアトラス微生物検査, 東京: 医歯薬出版; 2009 年: 190-206.
- 2) 大楠清文, 江崎孝行訳. 第 146 章 サルモネラ症: ハリソン内科学 第 3 版, 東京: メディカル・サイエンス・インターナショナル; 2009 年: 1002-1008.
- 3) 大楠清文, 江崎孝行訳. 第 147 章 細菌性赤痢: ハリソン内科学 第 3 版, 東京: メディカル・サイエンス・インターナショナル; 2009 年: 1008-1012.
- 4) 江崎孝行. 病原微生物のバイオセーフティ分類: バイオセーフティ指針, 東京: 医歯薬出版; 2010 年: 9-21.
- 5) 江崎孝行, 大楠清文. WHO および CDC の病原微生物取扱いガイドライン: バイオセーフティ指針, 東京: 医歯薬出版; 2010 年: 23-28.
- 6) 江崎孝行. 発熱外来のバイオセーフティ: バイオセーフティ指針, 東京: 医歯薬出版; 2010 年: 99-105.
- 7) 江崎孝行. 付表 バイオセーフティ指針: バイオセーフティ指針, 東京: 医歯薬出版; 2010 年: 107-150.
- 8) 大楠清文. 学ぼう細菌と遺伝子, 兵庫: シスメックス株式会社; 2010 年.
- 9) 大楠清文. 感染症診断のための遺伝子検査の適応と実践, 兵庫: シスメックス株式会社; 2010 年.
- 10) 大楠清文. 遺伝子検査—その活用のコツとノウハウ: 臨床感染症ブックレット 3, 東京: 文光堂; 2011 年: 98-106.
- 11) 大楠清文. 医療従事者が知っておきたい微生物学の基礎: INFECTION CONTROL 感染対策に役立つ臨床微生物らしくらく完全図解マニュアル, 大阪: メディカ出版; 2011 年: 17-27.
- 12) 大楠清文. Q 熱, クアミジア・トラコマティス, オウム病クラミジア, 肺炎クラミジア, レプトスピラ凝集反応, 梅毒血清反応, ライム病ボレリア, リケッチア: パーフェクトガイド 検査値事典, 東京: 総合医学社; 2009 年: 520, 527-533.

著書 (欧文)

- 1) Ezaki T. Family VI. *Peptococcaceae* Rogosa 1971, 235 Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol. 3. S967-971. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 2) Ezaki T. Genus Ruminococcus Sijpesteijn 1948, 152 Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol. 3. S1016-1018. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 3) Ezaki T. Family *Peptostreptococcaceae fam.nov.* Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol. 3. S1008-1009. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 4) Ezaki T. Genus VII. *Coproccoccus*. Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol. 3. S940-941. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 5) Ezaki T, Kawamura Y. *Peptoniphilus*. Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol. 3. S1136-1137. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 6) Ezaki T. *Parvimonas*. Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol.3. S1135-1136. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 7) Ezaki T. *Gallicola*. Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol. 3. S1132. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 8) Ezaki T. *Finegoldia*. Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol.3. S1131-1132. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 9) Ezaki T, Ohkusu K. Genus I. *Anaerococcus*. Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol.3. p1130-1131. 2nd. Ed. Springer. 2009.
- 10) Ezaki T, Kawamura Y. *Abiotrophia*. Bergey's Manual of Systematic Bacteriology. Vol. 3. S536-538. 2nd. Ed. Springer. 2009.

総説 (和文)

- 1) 江崎孝行. 食中毒細菌の検出・同定システムの新展開—カクテル増幅法を使った食品中の生きた菌の網羅的な遺伝子検査法—, 日本食品微生物学会雑誌 2009年; 26巻: 150—157.
- 2) 江崎孝行. 病原微生物の危険度分類, 臨床と微生物 2009年; 35巻: 279—292.
- 3) 江崎孝行. 病原細菌, 微生物資源国際戦略ガイドブック 2009年; 172—185.
- 4) 大楠清文, 江崎孝行. 分子系統解析に基づいた細菌の分類と同定, *Sysmex Journal* 2009年; 32巻: 44—55.
- 5) 大楠清文, 江崎孝行. 迅速遺伝子解析技術の感染制御への適応と今後の展望, 医学のあゆみ 2009年; 231巻: 63—73.
- 6) 江崎孝行. 感染症法下での高度病原体の分譲活動と輸送方法の課題, *Microbiol Cult Col.* 2009年; 26巻: 127—129.
- 7) 江崎孝行. ブルセラ症と炭疽, 公衆衛生 2010年; 75巻: 19—22.
- 8) 江崎孝行, 中山哲夫, 松本哲哉. ゲノム医学の将来, 微生物学はどう変わる, モダンメディア 2010年; 56巻: 1—22.
- 9) 大楠清文, 江崎孝行. 核酸増幅法による感染症の診断, 日本臨床 増刊号 遺伝子診療学 (第2版) 2010年; 68巻: 501—505.
- 10) 大楠清文, 望月清文, 江崎孝行. 眼感染症迅速診断のための遺伝子検査の適応と実践, 眼感染症トピックス, *Medical Technology* 2010年; 38巻: 565—572.
- 11) 大楠清文. 感染症迅速診断のための遺伝子検査, 日本医事新報 2010年; 4518号: 36—38.
- 12) 大楠清文, 江崎孝行. 肺炎 臨床と研究の最新動向 遺伝子解析技術を用いた肺炎の起炎菌診断の実践, 医学のあゆみ 2011年; 237巻: 193—199.
- 13) 江崎孝行, 水野卓也, 林 将大, 吉田 滋, 張 継偉, 大楠清文. 【新たなゲノムベースの感染症診断・開発の現状, 応用と展望】 臨床所見から原因病原体を絞り込めない不明感染症の検査, 化学療法の領域 2011年; 29巻: 2006—2020.
- 14) 大楠清文, 江崎孝行. 遺伝子解析技術の新たな潮流と感染制御への適応, 日本化学療法学雑誌 2011年; 59巻: 441—453.
- 15) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12・珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授します・① *Helicobacter cinaedi*, *Medical Technology* 2011年; 39巻: 719—724.
- 16) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12・珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授します・② *Capnocytophaga canimorsus*, *Medical Technology* 2011年; 39巻: 836—842.
- 17) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12・珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授します・③ *Mycoplasma hominis*, *Medical Technology* 2011年; 39巻: 932—938.
- 18) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12・珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授します・④ *Corynebacterium kroppenstedtii*, *Medical Technology* 2011年; 39巻: 1072—1078.
- 19) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12・珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授します・⑤ *Neisseria meningitidis*, *Medical Technology* 2011年; 39巻: 1201—1208.
- 20) 大楠清文. 最近話題の細菌トップ 12・珍しい細菌とめぐり逢うコツとノウハウを伝授します・⑥ *Mycobacterium ulcerans*, *Medical Technology* 2011年; 39巻: 1315—1321.
- 21) 大楠美佐子, 大楠清文. “殺人カビ” *Cryptococcus gattii* がすでに日本にも上陸!?, *Medical Technology* 2011年; 39巻: 1341—1346.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 上野健太郎, 水流由美子, 西順一郎, 大楠清文, 川畑了大, 河野嘉文. BCG 骨髄炎の2幼児例—早期診断のための遺伝子検査の有用性—, 小児感染免疫 2009年; 21巻: 7—12.
- 2) 佐藤延子, 大楠清文, 佐々木裕子, 勝見真琴, 加藤真帆, 阿部裕子, 遠藤真知子, 長沢光章, 柴田 近, 矢野寿一, 山本夏男, 國島広之, 平潟洋一, 佐々木巖, 江崎孝行, 賀来満夫. 新種の *Capnocytophaga leadbetteri* を胸水から分離・同定できた胃食道接合部癌手術後の膿胸の1例, 日本臨床微生物学雑誌 2009年; 19巻: 171—176.
- 3) 川上秀昭, 犬塚裕子, 中村 博, 高橋 健, 武藤敏弘, 望月清文, 澤村治樹, 大楠清文, 勝村直樹, 末松寛之. ノカルジアが起炎菌と思われた内因性眼内炎の2例, 眼科 2009年; 51巻: 1663—1669.
- 4) 竹澤理子, 小野由可, 鶴原日登美, 油井明美, 大楠清文, 江崎孝行. *Corynebacterium amycolatum* による人工弁心内膜炎の1例, 日本臨床微生物学雑誌 2009年 19巻: 236—240.
- 5) 加藤元一, 渋谷佳直, 清島真理子, 浅野裕子, 大楠清文. 腋窩に皮下膿瘍を形成した *Mycobacterium avium* 皮膚感染症の1例, 皮膚科の臨床 2010年; 52巻: 171—174.
- 6) 冷牟田浩人, 鶴田伸子, 松山友美, 佐竹真理恵, 大楠清文. 樋口和行. *Rothia aeria* による初の呼吸器感染症, 日呼吸会誌 2010年; 48巻: 219—223.
- 7) 小林祐介, 松浦眞彦, 葉山譲, 加藤恵利奈, 中村晃和, 青木洋一, 浅沼亜紀, 佐々木重胤, 宮川康司, 山本樹生, 大楠清文. 帝王切開後に手術創皮下膿瘍を形成したマイコプラズマ感染の1例, 日本産科婦人科学会東京地方部会誌 2010年; 59巻: 126—129.
- 8) 熊川真樹子, 稲田紀子, 庄司 純, 矢越美智子, 大楠清文, 澤 充. *Kingella kingae* が検出されたコンタク

- トレンズ関連角膜感染症の1例, 眼科 2010年; 52巻: 319-323.
- 9) 千田澄江, 明壁 均, 大楠清文, 江崎孝行. 嫌気性スピロヘータ *Brachyspira pilosicoli* による菌血症の1例, 日本臨床微生物学雑誌 2010年; 20巻: 44-49.
 - 10) 福川陽子, 岡崎充宏, 大楠清文, 西山宏幸, 日暮芳己, 田内絢子, 奥山貴洋, 米谷正太, 牧野 博, 澤田範子, 荒木光二, 高山信之, 江崎孝行, 大西宏明, 渡邊 卓. 急性骨髄性白血病の化学療法中における *Rothia mucilaginosa* (*Stomatococcus mucilaginosus*) による菌血症の1症例および本菌種における同定キットの同定性能の検討, 日本臨床微生物学雑誌 2010年; 20巻: 50-55.
 - 11) 澤本良子, 日高 大, 肥山淳一郎, 藤井亜希子, 三角幸広, 宮川洋介, 富満信二, 林 明宏, 小野 研, 有馬文統, 入江康司, 大楠清文. 播種型 *Mycobacterium avium* 症に非ホジキンリンパ腫を合併した1例, 日呼吸学会誌 2010年; 48巻: 397-403.
 - 12) 野上侑哉, 藤井多久磨, 有澤奈良, 奥村典子, 平尾薫丸, 田中京子, 阪埜浩司, 青木大輔, 吉村泰典, 大楠清文. 妊孕能温存手術を施行して *Mycoplasma hominis* による膿瘍感染を起こした2例, 日本産科婦人科学会東京地方部会誌 2010年; 59巻: 254-259.
 - 13) 望月清文, 堅田利彦, 大楠清文, 金子久俊. 医療従事者に生じたアデノウイルス結膜炎の3例, 感染症学雑誌 2010年; 84巻: 469-473.
 - 14) 中山麻美, 濱岸真奈美, 新谷知世, 早川 敏, 石井潤一, 大楠清文. *Capnocytophaga* 属菌による敗血症の2例, 医学検査 2010年; 59巻: 1171-1175.
 - 15) 渡邊華奈, 加藤元一, 渋谷佳直, 浅野裕子, 大楠清文, 江崎孝行, 清島真理子. *Metastatic Tuberculous Abscess* から診断に至った肺結核, 皮膚科の臨床 2010年; 52巻: 1431-1435.
 - 16) 古谷明子, 吉田里美, 久保 綾, 山下麻衣子, 伊藤達章, 鈴木道雄, 今岡浩一, 大楠清文. 自動血液培養で陽性シグナルを呈しなかった *Capnocytophaga canimorsus* による敗血症の一症例, 日本臨床微生物学雑誌 2010年; 20巻: 182-187.
 - 17) 榎園恭子, 村上日奈子, 大楠清文, 彦坂あゆみ, 福澤 滋, 前原千佳子, 安井久美子, 湯本重雄, 岩田守弘, 青池 望, 館田一博, 鷺澤尚宏, 江崎孝行, 山口恵三. 在宅中心静脈栄養患者にみられた *Gordonia sputi* 敗血症の1例—原因菌の分離・同定・鑑別を中心に—, 日本臨床微生物学雑誌 2010年; 20巻: 188-194.
 - 18) 田澤庸子, 佐々木裕美, 古畑由紀江, 菊池勇治, 堀内 啓, 大楠清文. 本邦で初めて分離された *Paracoccus yeei* の1例, 日本臨床微生物学雑誌 2010年; 20巻: 233-238.
 - 19) 田寺加代子, 下中秋子, 大楠清文, 森井大一, 下花純一, 道中智映, 谷山清巳. *Shewanella haliotis* による右下肢蜂窩織炎および敗血症の1症例, 日本臨床微生物学雑誌 2010年; 20巻: 239-244.
 - 20) 稲角麻衣, 曾木美佐, 井本一也, 山本舜悟, 細川直登, 大塚喜人, 大楠清文. 嫌気性菌感染症 大腸癌の精査中に発症した *Desulfovibrio* 菌血症の1例, 日本嫌気性菌感染症研究会雑誌 2010年; 40巻: 86-92.
 - 21) 國吉保孝, 田代 実, 大楠清文. *Campylobacter jejuni* 腸炎の経過虫に発症した一過性菌血症の1症, 小児感染免疫 2010年; 22巻: 327-330.
 - 22) 中村幸嗣, 宮地悠輔, 大楠清文, 加藤達夫. 遺伝子解析によって診断された *Campylobacter fetus* subsp. *fetus* による髄膜炎・脳膿瘍の1新生児例, 小児感染免疫 2010年; 22巻: 357-361.
 - 23) 新野大介, 松木 啓, 田中健之, 柳原克紀, 大楠清文, 林徳真吉, 今泉芳孝, 宮崎泰司, 有吉紅也, 大島孝一. AIDS患者における播種性非結核性抗酸菌症 (*Mycobacterium genavense*) の1例, 診断病理 2011年; 28巻: 18-20.
 - 24) 口広智一, 坂田好史, 大楠清文. *Moraxella osloensis* による敗血症の1例, 日本臨床微生物学雑誌 2011年; 21巻: 45-50.
 - 25) 竹川啓史, 江藤正明, 崎園賢治, 野上美由紀, 小谷陽子, 富永悦二, 三木寛二, 大楠清文. イヌ, ネコの咬傷・搔傷による *Capnocytophaga canimorsus* 敗血症の4症例, 医学検査 2011年; 60巻: 205-208.
 - 26) 小川陽子, 加納宏行, 宮崎崇, 太田浩敏, 大楠清文, 清島真理子. 遺伝子解析により早期に診断できたスピロトリコーシスの1例, 皮膚科の臨床 2011年; 53巻: 573-576.
 - 27) 渡邊華奈, 加藤元一, 松山かなこ, 高木肇, 浅野裕子, 渋谷佳直, 清島真理子, 大楠清文. *Exophiala lecanii-corni* による黒色菌血症の1例, 皮膚科の臨床 2011年; 53巻: 581-584.
 - 28) 磯崎将博, 金子 優, 松下久美子, 大楠清文. 迅速発育性抗酸菌 *Mycobacterium farcinogenes* による骨髄炎の1症例, 日本臨床微生物学雑誌 2011年; 21巻: 134-137.
 - 29) 宮地康高, 橋本英樹, 柳 富子, 武田泰明, 北村成大, 大楠清文. 遺伝子解析が有用であった HIV 関連赤痢アメーバ性脳膿瘍の救命例, 日本エイズ学会 2011年; 13巻: 92-98.
 - 30) 伊藤亜希子, 竹尾直子, 片桐一元, 藤原作平, 加藤愛子, 安倍いとみ, 前島圭佑, 石井宏治, 中野忠男, 大楠清文. 全身性エリテマトーデスに併発した *Nocardia niigatensis* による皮下膿瘍—なぜ細菌検査室に情報提供が必要か—, 西日本皮膚科 2011年; 73巻: 378-382.
 - 31) 羽田野義郎, 大曲貴夫, 鈴木 純, 河村一郎, 沖中敬二, 倉井華子, 富岡寛行, 絹笠祐介, 大楠清文. グラム染色で迅速に診断に至った *Nocardia cyriacigeorgica* による肺ノカルジア症の1例, 日本呼吸器学会雑誌 2011年; 49巻: 592-596.
 - 32) 菅野進一, 青野益美, 杵渕貴洋, 山口香織, 宮本 潤, 大楠清文. *Aggregatibacter actinomycetemcomitans* による感染性心内膜炎の1例, 北海道臨床検査技師誌 2011年; 9巻: 3-6.
 - 33) 和田直樹, 林 光昭, 新田久美子, 斎藤和司, 大楠清文. 血液培養から *Aggregatibacter aphrophilus* が分離された1症例, 北海道臨床検査技師誌 2011年; 9巻: 7-11.

原著 (欧文)

- 1) Ikewaki J, Imaizumi M, Nakamuro T, Motomura Y, Ohkusu K, Shinoda K, Nakatsuka K. Peribulbar

- fungal abscess and endophthalmitis following posterior subtenon injection of triamcinolone acetonide. *Acta Ophthalmol.* 2009;87:102-104. IF 1.848
- 2) Monju A, Shimizu N, Yamamoto M, Oda K, Kawamoto Y, Ohkusu K. First case report of sepsis due to *Rothia aeria* in a neonate. *J Clin Microbiol.*2009;47:1605-1606. IF 3.708
 - 3) Okazaki M, Ohkusu K, Hata H, Ohnishi H, Sugawara K, Kawamura C, Fujiwara N, Matsumoto S, Nishiuchi Y, Toyoda K, Saito H, Yonetani S, Fukugawa Y, Yamamoto M, Wada H, Sejimo A, Ebina A, Goto H, Ezaki T, Watanabe T. *Mycobacterium kyorinense* sp. nov., a novel slowly growing Mycobacterium sp. related to *Mycobacterium celatum* isolated from human clinical specimens. *Int J Syst Evol Microbiol.* 2009;59:1336-1341. IF 2.384
 - 4) Yamaguchi M, Kikuchi A, Ohkusu K, Akashi M, Takakuwa K, Tanaka K. Abscess formation due to *Mycoplasma hominis* infection after cesarean section. *J Obstet Gynaecol Res.* 2009;35:593-596. IF 0.833
 - 5) Baba H, Nada T, Ohkusu K, Ezaki T, Hasegawa Y, Paterson DL. First case of bloodstream infection caused by *Rhodococcus erythropolis*. *J Clin Microbiol.* 2009;47:2667-2669. IF 3.708
 - 6) Ohtaki H, Ohkusu K, Sawamura H, Ohta H, Inou R, Iwasa J, Ito H, Murakamai N, Ezaki T, Moriwaki H, Seishima M. First case report of acute cholecystitis with sepsis caused by *Cellulomonas denverensis*. *J Clin Microbiol.* 2009;47:3391-3393. IF 3.708
 - 7) Deguchi T, Yasuda M, Yokoi S, Nakano M, Ito S, Ohkusu K, Ezaki T, Hoshina S. Failure to detect *Mycoplasma genitalium* in the pharynges of female sex workers in Japan. *J Infect Chemother.* 2009;15:410-413.
 - 8) Kohbata S, Emura S, Kadoya C. Filterable forms of *Nocardia*: a preferential site of infection in the mouse brain. *Microbes Infect.* 2009;11:744-752. IF 2.801
 - 9) Mimura M, Maenishi O, Ito H, Ohkusu K. Unique histological characteristics of *Scedosporium* that could aid in its identification. *Pathol Int.* 2010;60:131-136. IF 1.521
 - 10) Shah M M ,Yamamoto Y, Yamada Y, Yamashita H, Tanaka H, Ezaki T, Nagai H, Inagaki N, Orally supplemented *Lactobacillus acidophilus* strain L-92 inhibits passive and active cutaneous anaphylaxis as well as 2,4-dinitrofluobenzene and mite fecal antigen induced atopic dermatitis-like skin lesions in mice. *Microbiol Immunol.* 2010;54:523-533. IF 1.562
 - 11) Takei Y, Yokoyama K, Katano H, Tsukiji M, Ezaki T. Molecular epidemiological analysis of methicillin-resistant staphylococci in a neonatal intensive care unit. *Biocontrol Sci.* 2010;15:129-138. IF 0.684
 - 12) Kawakami K, Sawada A, Mochizuki K, Takahashi K, Muto T, Ohkusu K. Endogenous *Nocardia farcinica* endophthalmitis. *Jpn J Ophthalmol.* 2010;54:164-166. IF 1.272
 - 13) Komiri S, Sawada A, Oguni T, Mochizuki K, Ohkusu K. Case of endophthalmitis following intravitreal injections of bevacizumab. *Clin Ophthalmol.* 2010;4:773-775.
 - 14) Watanabe T, Ohkusu K, Nakanaga K, Ishii N, Nakashima K, Shindo M, Yoshida Y, Yamamoto O. Buruli ulcer caused by "*Mycobacterium ulcerans* subsp. *shinshuense*". *Eur J Dermatol.* 2010;20:809-810. IF 2.251
 - 15) Suemori S, Sawada A, Komori S, Michizuki K, Ohkusu K, Takemura H. Case of endogenous endophthalmitis caused by *Streptococcus equisimilis*. *Clin Ophthalmol.* 2010;4:773-775.
 - 16) Nagai M, Hirayama K, Ohishi T, Ohkusu K, Kobayashi M. Pleuritis Caused by *Campylobacter jejuni* subspecies *jejuni* in a Patient Undergoing Long-Term Hemodialysis. *Inter Med.* 2010;49:2481-2486. IF 1.040
 - 17) Pham Van Hung, Jiwei Zhang, Hayahi M, Yoshida S, Ohkusu K, Ezaki T. Genetic relatedness and identification of clinical strains of genus *Campylobacter* based on *dnaJ*, 16SrDNA, *groEL*, and *rpoB* gene sequences. *Microbiol Cult Coll.* 2011;27:1-12.
 - 18) Kawamura I, Yagi T, Hatakeyama K, Ohkura T, Ohkusu K, Takahashi Y, Kojima S, Hasegawa Y. Recurrent vascular catheter-related bacteremia caused by *Delftia acidovorans* with different antimicrobial susceptibility profiles. *Journal of Infection and Chemotherapy.* 2011;17:111-113.
 - 19) Doi A, Nakajo K, Kamiya T, Ohkusu K. Splenic abscess caused by *Lactobacillus paracasei*. *Journal of Infection and Chemotherapy.* 2011;17:122-125.
 - 20) Nakayama A, Takahashi H, Ohkusu K, Shintani C, Hayakawa S, Ishii J, Watanabe H. A case of sepsis and meningitis caused by probable travel-related *Neisseria meningitidis* serogroup B infection: First report of N. meningitidis ST-4893 in Japan isolated from a returning traveler from France. *Jap Infect Dis.* 2011;64:61-62. IF 1.367
 - 21) Nomura M, Shin M, Ohta M, Nukui Y, Ohkusu K, Saito N. Atypical Osteomyelitis of the Skull Base and Craniovertebral Junction Caused by *Actinomyces* Infection. *Neurol Med Chir.* 2011;51:64-66. IF 0.667
 - 22) Zhang J, van Hung P, Hayashi M, Yoshida S, Ohkusu K, Ezaki T. *DnaJ* sequences of *Bacillus cereus* strains isolated from outbreaks of hospital infection are highly similar to *Bacillus anthracis*. *Diagn Microbiol Infect Dis.* 2011;70:307-315. IF 2.426
 - 23) Yamada Y, Ohkusu K, Yanagihara M, Tsuneoka H, Ezaki T, Tsuboi J, Okabayashi H, Suwabe A. Prosthetic valve endocarditis caused by *Bartonella quintana* in a patient during immunosuppressive therapies for collagen vascular diseases. *Diagn Microbiol Infect Dis.* 2011;70:395-398. IF 2.426
 - 24) Saito H, Iwamoto T, Ohkusu K, Otsuka Y, Akiyama Y, Sato S, Taguchi O, Sueyasu Y, Kawabe Y, Fujimoto H, Ezaki T, Butler R. *Mycobacterium shinjukuense* sp. nov.: a slowly growing, nonchromogenic species isolated from human clinical specimens. *Int J Syst Evol Microbiol.*

- 2011;61:1927-1932. IF 1.930
- 25) Funato M, Kaneko H, Ohkusu K, Sasai H, Kubota K, Ohnishi H, Kato Z, Hukao T, Kondo N. Refractory Chronic Pleurisy Caused by *Helicobacter equorum*-like bacterium in a Patient with X-linked Agammaglobulinemia. *J Clinical Microbiol.* 2011;49:3432-3435. IF 4.220
- 26) Kaneko T, Murotani M, Ohkusu K, Sugita T, Makimura K. Genetic and biological features of catheter-associated *Malassezia furfur* from hospitalized adults. *Med Mycol.* 2011;50:75-80. IF 2.329
- 27) Mochizuki K, Suemori S, Udo K, Komori S, Ohkusu K, Yamada N, Ogura S. Intraocular Penetration of Micafungin in Patient with *Candida albicans* Endophthalmitis. *J Ocul Pharmacol Ther.* 2011;27:531-533. IF 1.609

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：吉田真一，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：グローバル化する細菌性下痢症を制圧するための多角的研究；平成 21 年度；600 千円
- 2) 研究代表者：江崎孝行；科学研究費補助金基盤研究(B)：裁定委員会に高度病原体の新分類法を提案するための根拠とする遺伝情報の収集；平成 20-22 年度；12,610 千円(6,240：3,640：2,730 千円)
- 3) 研究代表者：牧野壮一，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：テロの可能性のある病原体等の早期検知・迅速診断法の開発とその評価法の確立に関わる研究；平成 20-22 年度；9,730 千円(3,000：2,800：3,930 千円)
- 4) 研究代表者：吉田真一，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：多様化・ボーダーレス化する細菌性下痢症を阻止するためのフロンティア研究；平成 22 年度；650 千円
- 5) 研究代表者：西沢光昭，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：変容するアジアにおける細菌性下痢症を阻止するためのフロントライン研究；平成 23 年度；650 千円
- 6) 研究代表者：江崎孝行；科学研究費補助金基盤研究(B)：裁定委員会に高度病原体の新分類法を提案するための根拠とする遺伝情報の収集；平成 20-23 年度；15,470 千円(6,240：3,640：2,730：2,860 千円)
- 7) 研究代表者：倉園久生，研究分担者：江崎孝行；厚生労働科学研究費補助金：テロの可能性のある病原体等の早期検知・迅速診断法の開発とその評価法の確立に関わる研究；平成 20-23 年度；13,230 千円(3,000：2,800：3,930：3,500 千円)

2) 受託研究

- 1) 江崎孝行：PCR とプローブ固定基板を用いた簡易迅速微生物検査技術の開発；平成 20-21 年度；18,695 千円(11,660：7,035 千円)：特定非営利活動法人 資源リサイクルシステムセンター
- 2) 江崎孝行：感染症の病態別，迅速多項目診断システムの開発；平成 20-21 年度；5,599 千円(3,499：2,100 千円)：株式会社トラスト
- 3) 江崎孝行：食の機能性・安全性に関する高度な技術開発とその事業化によるアグリ・バイオクラスターの形成；平成 21 年度；16,024 千円：(財)十勝圏振興機構
- 4) 江崎孝行：次亜塩素酸精製水の細菌に対する抗菌活性の測定及び pH 測定；平成 21 年度；500 千円：株式会社イージャパン
- 5) 江崎孝行：環境中の病原性微生物の変動を把握するための手法に関する基礎調査；平成 21 年度；1,575 千円：(財)バイオインダストリー協会
- 6) 江崎孝行：腸内細菌の *dnaJ* 遺伝子塩基配列の決定及び評価；平成 20-21 年度；3,575 千円(2,000：1,575 千円)：(独)製品評価技術基盤機構
- 7) 江崎孝行：病原微生物の収集・保存・提供体制整備事業；平成 20-22 年度；11,600 千円(3,900：3,900：3,800 千円)：(独)科学技術振興機構
- 8) 江崎孝行：食の機能性・安全性に関する高度な技術開発とその事業化によるアグリ・バイオクラスターの形成；平成 21-22 年度；15,001 千円(8,024：6,977 千円)：(財)十勝圏振興機構
- 9) 江崎孝行：バイレメ利用株の合理的な安全性評価手法の開発；平成 22 年度；9,900 千円：(独)新エネルギー・産業技術総合開発機構
- 10) 江崎孝行：食の機能性・安全性に関する高度な技術開発とその事業化によるアグリ・バイオクラスターの形成；平成 21-23 年度；21,501 千円(8,024：6,977：6,500 千円)：(財)十勝圏振興機構
- 11) 江崎孝行：病原微生物の収集・保存・提供体制整備事業；平成 20-23 年度；15,400 千円(3,900：3,900：3,800：3,800 千円)：(独)科学技術振興機構

3) 共同研究

- 1) 江崎孝行：迅速肺炎診断を目的としたカセット式簡易診断機器の開発；平成 20-22 年度；6,655 千円(165：173：6,317 千円)；有限会社山口ティール・エル・オー
- 2) 江崎孝行：黄色ブドウ球菌の DnaJ を使用した CycleavePCR 検出系の構築；平成 21 年度；540 千円；タカラバイオ株式会社
- 3) 江崎孝行：土壌汚染対策のための技術開発 VOC の微生物等を利用した環境汚染物質浄化技術開発「次世代型バイオレメディエーション普及のためのセーフバイオシステムの研究開発」微生物の安全性評価のための情報基盤の開発；平成 23 年度；3,500 千円；(独)製品評価技術基盤機構

5. 発明・特許出願状況

- 1) 江崎孝行：核酸クロマトグラフ法を利用した肺炎原因菌の検出方法(PCT/JP2011/001934)平成 23 年(国際公開日平成 23 年 10 月 6 日)

6. 学会活動

1) 学会役員

江崎孝行：

- 1) 日本微生物資源学会理事(~現在)
- 2) 日本臨床微生物学会副会長(~現在)
- 3) 日本微生物系統分類研究会会長(~現在)
- 4) 国際微生物連盟裁定委員(~現在)
- 5) 国際微生物連盟ブドウ球菌, レンサ球菌命名委員(~現在)

大楠清文：

- 1) 日本臨床微生物学会評議員(~現在)
- 2) 日本臨床微生物学会編集委員会・副委員長(~現在)

2) 学会開催

江崎孝行：

- 1) 第 17 回日本微生物資源学会総会(平成 22 年 6 月, 岐阜)

大楠清文：

- 1) 第 23 回臨床微生物迅速診断研究会総会(平成 22 年 6 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

江崎孝行：

- 1) Microbiology and Immunology ; Associate Editor(~現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

江崎孝行：

- 1) Annual Meeting Korean Society for Clinical Microbiology (2009.06, Seoul, DnaJ sequence as a hypervariable genetic marker to define bacterial species and the application to detect multiple targets in clinical specimens)
- 2) 岐阜微生物シンポジウム(平成 21 年 7 月, 岐阜, 「21 世紀の社会と地球を支える立役者: 病原微生物」演者)
- 3) 第 56 回日本臨床検査医学会学術集会(平成 21 年 8 月, 札幌, 「気道感染症の網羅的遺伝子検査法の新展開」演者)
- 4) 食品微生物学会(平成 21 年 10 月, 東京, 「食品や衛生管理における遺伝子迅速検出(SYBR グリーン)」演者)
- 5) 日本感染症学会総会(平成 22 年 4 月, 京都, 「保菌者レベルの少数の糞便内病原体の迅速な遺伝子検査法の作成」演者)
- 6) 第 84 回日本感染症学会総会(平成 22 年 4 月, 京都, 「遺伝子解析技術を用いた感染症迅速診断の実践」演者)
- 7) 第 17 回日本微生物資源学会総会(平成 22 年 6 月, 岐阜, 「感染症法に伴う病原体の取扱い及び輸送

- の問題点」演者)
- 8) 第 17 回日本微生物資源学会総会(平成 22 年 6 月, 岐阜, 「全ゲノム解析・多型解析からみた独立菌種の遺伝子多形」演者)
 - 9) 12th International congress on culture collection(2010.09, Brazil, Influence of different set of variable gene cluster analysis on the phylogenetic definition of bacterial species ; Speaker)
 - 10) 14th U.S. Japan Cooperative medical Science program(2010.10, Malaysia, Rapid genetic screening of live food pathogens with a single enrichment culture and multiplex cocktail amplification method-Next Generation Diagnostics for infectious Diseases ; Speaker)
 - 11) 3rd International Symposium on Bacterial genomics (2010.11, China, Shuffling Classification of high Risk pathogens after complete genome sequencing evolution and pathogenesis ; Speaker)
 - 12) 第 31 回日本食品微生物学会総会(平成 22 年 11 月, 大津, 「遺伝子検査用増菌培地およびカクテルブライマーを組み合わせた食品中の生菌のスクリーニングシステムの構築」演者)
 - 13) 第 3 回日本カンピロバクター研究会総会(平成 22 年 12 月, 宮崎, 「dnaJ 遺伝子を用いた食中毒起炎菌の検査法. Campylobacter の検査・診断の最前線」演者)
 - 14) The 30th anniversary symposium of the Japan Society for Microbial Systematics(2010.12, Tokyo, History and future of taxonomists to unzip chromosomal information to define bacterial species ; Speaker)
 - 15) バイオセーフティ学会(平成 22 年 12 月, 横浜, 「感染症法下での病原体の系統保存・分譲活動と教育」演者)
 - 16) 1st Harbin international Symposium on Salmonella and enteric pathogens(2011.05, Harbin, China : Survival strategy of Salmonella enterica serovar. Typhi during human infection. The first harbin international symposium on Salmonella and other enteric bacteria: genomes and biology ; Speaker)
 - 17) 微生物検査法の新しい潮流(平成 23 年 6 月, 東京「多項目スクリーニング検査法の最近の世界の潮流と技術的進歩」演者)
 - 18) IUMS 2011(2011.09, Sapporo, Symposium: Quick respiratory panel assay for screening of bacterial and viral pneumonia; Speaker)
 - 19) IUMS 2011(2011.09, Sapporo, Symposium: Shall We Spin out Classical Taxonomy of High Risk Pathogens Even after Complete Genome Era?; Speaker)
 - 20) 2011 International Conference on Environmental OMICS Guangzhou(2011.11, Guangdong Province China, Screening of Environmental Human, Animal and Plant Pathogens in Soil and Water; Speaker)
 - 21) US-Japan Cooperative Medical Science Program(2011.12, Kolkata, India: A new blood free enrichment broth for Campylobacter - Arcobacter detection from food and stool. Cholera & Other Bacterial Enteric Infections; Speaker)
 - 22) US-Japan Cooperative Medical Science Program(2011.12, Kolkata, India: Shuffling Classification of genus Escherichia and Shigella for better Identification of E. coli and Shigella spp. after complete Genome Era. Cholera & Other Bacterial Enteric Infections; Speaker)
 - 23) バイオチップコンソーシアム(平成 23 年 12 月, 東京「DNA チップのとの戦いと新しい利用法の展開」演者)

大楠清文：

- 1) 2008 年度 JICA 臨床検査技術研修会(平成 21 年 1 月, 東京, 特別講演「血液・髄液検査法」演者)
- 2) 第 20 回日本臨床微生物学会総会(平成 21 年 2 月, 仙台, シンポジウム「進化するウイルス検査の現状と将来展望 ウイルス検査の最新情報」演者)
- 3) 平成 21 年度社会保険病院等検査技師長研修会(平成 21 年 7 月, 東京, 特別講演「感染症遺伝子検査をめぐる最近の動向」演者)
- 4) 日本臨床微生物学会 第 1 回地区研修会(平成 21 年 7 月, 広島, 特別講演「感染症診断における遺伝子解析技術の適応：耐性遺伝子検出と分子疫学解析を中心として」演者)
- 5) 茨城県臨床検査技師会微生物検査分野研修会(平成 21 年 9 月, 土浦, 特別講演「難しくない！遺伝子検査：遺伝子の用語・基礎から菌株同定・応用まで」演者)
- 6) 第 3 回新宿肺感染症研究会(平成 21 年 9 月, 東京, 特別講演「遺伝子検査による呼吸器感染症の迅速診断」演者)

- 7) シスメックス細菌セミナー(平成 21 年 9 月, 札幌, 特別講演「”時々の遺伝子検査 忘れるべからず” : 遺伝子解析技術を用いた細菌同定と感染症迅速診断の実践」 演者)
- 8) 第 18 回日本感染症研究会(IDATEN)インタラクティブケースカンファレンス(平成 21 年 9 月, 東京, 招聘講演「感染症診断における遺伝子解析技術の適応」 演者)
- 9) 第 11 回東海病原微生物研究会(平成 21 年 9 月, 名古屋, 特別講演「臨床微生物検査って素晴らしい! : 臨床微生物検査技師は患者の命を救う」 演者)
- 10) 第 2 回静岡感染症研究会(平成 21 年 9 月, 掛川, 特別講演「感染症診断における日常検査と遺伝子解析技術の融合」 演者)
- 11) 第 2 回静岡感染症研究会(平成 21 年 10 月, 掛川, 特別講演「論文作成のコツ」 演者)
- 12) 第 22 回 SCANIC 学術研究会(平成 21 年 10 月, 大阪, 教育講演「臨床微生物検査 ひらめき&トキメキ : 遺伝子検査活用のノウハウ」 演者)
- 13) BD 社 DS Operations Kick off(平成 21 年 11 月, 福島, 教育講演「感染症検査の現状と今後の展開」 演者)
- 14) 平成 21 年度東北地区感染制御部門研修会(平成 21 年 11 月, 仙台, 特別講演「微生物検査における遺伝子検査技術の適応」 演者)
- 15) 平成 21 年度岐阜県臨床検査技師会微生物検査研究班研修会(平成 21 年 12 月, 仙台, 特別講演「菌は嘘つかない! : 菌種からみた実践臨床細菌学のススメ」 演者)
- 16) 2009 年度 JICA 臨床検査技術研修会(平成 22 年 1 月, 東京, 特別講演「血液・髄液検査法」 演者)
- 17) 第 21 回日本臨床微生物学会総会(平成 22 年 1 月, 東京, 教育講演「遺伝子検査のピットホール」 演者)
- 18) シスメックス ウィンターフォーラム(平成 22 年 2 月, 熊本, 「感染制御における迅速遺伝子検査の適応」 演者)
- 19) 平成 22 年度岐阜県臨床検査技師会微生物検査研究班研修会(平成 22 年 3 月, 岐阜, 特別講演「菌は嘘つかない! : 菌種からみた実践臨床細菌学のススメ その 2」 演者)
- 20) 第 11 回北陸病原微生物研究会(平成 22 年 3 月, 金沢, 特別講演「菌は嘘つかない! -実践臨床細菌学のススメ-」 演者)
- 21) 第 166 回沖縄臨床微生物検査研究会(平成 22 年 3 月, 那覇, 教育講演「日常検査で同定が難しい細菌とその感染症 : 最近, こんな細菌が話題です!」 演者)
- 22) 第 84 回日本感染症学会総会(平成 22 年 4 月, 京都, 教育講演「遺伝子解析技術を用いた感染症迅速診断の実践」 演者)
- 23) 第 58 回日本化学療法学会総会(平成 22 年 6 月, 長崎, シンポジウム「薬剤耐性菌に関する最近の話題 耐性菌と遺伝子診断」シンポジスト)
- 24) 第 23 回臨床微生物迅速診断研究会(平成 22 年 6 月, 岐阜, ランチョンセミナー「最近 話題の細菌 Top 10」 演者)
- 25) 日本臨床微生物学会 第 2 回地区研修会(平成 22 年 7 月, 熊本, 教育講演「簡易キット・自動機器で同定できなかった細菌の遺伝子学的同定の実際」 演者)
- 26) 平成 22 年度岐阜県臨床検査技師会微生物検査研究班研修会(平成 22 年 8 月, 岐阜, 特別講演「学会発表&論文発表のエッセンス Part.1」 演者)
- 27) 平成 22 年度新潟県臨床検査技師会 感染制御部門研修会(平成 22 年 9 月, 新潟, 特別講演「臨床微生物学的な思考法のすすめ」 演者)
- 28) 日経ラジオ アボット感染症アワー(平成 22 年 9 月, 東京, ラジオ講演「培養による診断が困難な感染症の遺伝子検査」 演者)
- 29) 第 9 回神奈川小児血液・感染症フォーラム(平成 22 年 9 月, 横浜, 特別講演「感染症診断のための遺伝子検査の適応と実践」 演者)
- 30) 第 49 回中部医学検査学会(平成 22 年 9 月, 金沢, 教育講演「一般病院技師を対象とした遺伝子検査の知識について」 演者)
- 31) マイクロスキャンセミナー in 和歌山(平成 22 年 9 月, 和歌山, 特別講演「臨床微生物学的な思考法のすすめ」 演者)
- 32) 第 3 回湾岸感染症セミナー(平成 22 年 10 月, 浦安, 特別講演「感染症の遺伝子診断」 演者)
- 33) 第 20 回南九州臨床微生物研究会(平成 22 年 10 月, 那覇, 特別講演「菌は嘘つかない! -実践臨床微生物学のススメ-」 演者)
- 34) 第 43 回中国四国医学検査学会(平成 22 年 11 月, 松江, ランチョンセミナー「臨床微生物学的な思考法のすすめ」 演者)

- 35) 第 43 回中国四国医学検査学会(平成 22 年 11 月, 松江, シンポジウム「微生物検査の流儀 培養の難しい菌の検出と遺伝子検査の活用法」シンポジスト)
- 36) 平成 22 年度岐阜県臨床検査技師会微生物検査研究班研修会(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「学会発表&論文発表のエッセンス Part.2」演者)
- 37) 平成 22 年度静岡県微生物検査研究班 第 3 回研修会(平成 22 年 12 月, 静岡, 特別講演「臨床微生物学的な思考法のすすめ」演者)
- 38) 平成 22 年度兵庫県微生物検査研究班研修会別講演(平成 22 年 12 月, 神戸, 「感染症診断における遺伝子検査技術の活用」演者)
- 39) 2010 年度 JICA 臨床検査技術研修会(平成 23 年 1 月, 東京, 特別講演「血液・髄液検査法」演者)
- 40) 日経ラジオ アボット感染症アワー(平成 23 年 1 月, 東京, ラジオ講演「細菌感染症の遺伝子診断について」演者)
- 41) 第 10 回新都心感染症研究会(平成 23 年 2 月, 東京, 特別講演「感染症の起炎病原体検索の重要性」演者)
- 42) シスメックスセミナー in 札幌(平成 23 年 2 月, 札幌, 特別講演「学会発表&論文発表のエッセンス」演者)
- 43) 平成 22 年度鹿児島県感染・免疫検査部門第 3 回研修会(平成 23 年 3 月, 鹿児島, 特別講演「臨床微生物学的な思考法のすすめ」演者)
- 44) 第 85 回日本感染症学会総会(平成 23 年 4 月, 東京, シンポジウム「基礎と臨床の融合; 感染症診断における基礎解析技術の動向とその臨床への応用」演者)
- 45) 平成 23 年度兵庫県微生物検査初級者講習会(平成 23 年 5 月, 神戸, 特別講演「学会発表&論文執筆のエッセンス」演者)
- 46) 第 86 回日本結核病学会総会(平成 23 年 6 月, 東京, シンポジウム「抗酸菌検査の進歩; 抗酸菌の同定に関する新たな潮流」演者)
- 47) 第 60 回日本医学検査学会総会(平成 23 年 6 月, 東京, 教育講演「あなたの検査室でもできる遺伝子検査ー臨床微生物検査への貢献」演者)
- 48) 第 3 回九州臨床感染症セミナー(平成 23 年 6 月, 福岡, 招請講演「症例から学ぶ感染症診断: Learning by Case Closed Episodes」演者)
- 49) 第 48 回沖縄県医学検査学会(平成 23 年 6 月, 沖縄, 教育講演「学会発表&論文執筆のコツとノウハウ」演者)
- 50) 平成 23 年度広島県臨床検査技師会 感染制御部門研修会(平成 23 年 6 月, 広島, 特別講演「菌は嘘つかないよ! : 臨床微生物学的な思考法のすすめ」演者)
- 51) シスメックス 細菌検査セミナー(平成 23 年 7 月, 旭川, 「臨床微生物学的な思考法のすすめ」演者)
- 52) 平成 23 年度千葉県臨床検査技師会微生物検査研修会(平成 23 年 9 月, 千葉, 特別講演「最近話題の細菌 Top 12 プラスα」演者)
- 53) 平成 23 年度四国地区微生物検査研修会(平成 23 年 9 月, 松山, 特別講演「これからの臨床微生物検査の話をしようー塗抹鏡検所見と遺伝子解析技術の融合ー」演者)
- 54) 第 26 回 PCR 感染症検査研究会(平成 23 年 9 月, 東京, 特別講演「遺伝子解析技術の新たな潮流と感染制御への適応」演者)
- 55) 亀田メディカルセンター感染対策教育講演会(平成 23 年 9 月, 千葉, 特別講演「あなたの周りのバイ菌たち」演者)
- 56) 平成 23 年度新潟臨床微生物研究会(平成 23 年 10 月, 新潟, 特別講演「これからの臨床微生物検査の話をしようー血液から分離される最近話題の細菌を含めてー」演者)
- 57) 日本臨床微生物学会 第 3 回地区研修会(平成 23 年 10 月, 神戸, 特別講演「MALDI-TOF MS による同定」演者)
- 58) 第 12 回シーメンス感染症研究会(平成 23 年 10 月, 東京, 特別講演「臨床微生物検査の新たな潮流」演者)
- 59) 岐阜眼感染症カンファレンス(平成 23 年 11 月, 岐阜, 特別講演「眼感染症診断の深い話」演者)
- 60) 第 5 回医師・臨床検査技師・薬剤師・看護師のための感染症学セミナー(平成 23 年 11 月, 東京, 基調講演「中枢神経系感染症の診断 Up-to-Date」演者)
- 61) 第 54 回日本感染症学会中日本地方会集会(平成 23 年 11 月, 奈良, ワークショップ「臨床微生物検査の Up-to-Date ; 日常の臨床微生物検査と遺伝子検査の融合」演者)
- 62) 岐阜県臨床検査技師会 第 3 回微生物検査研究班研修会(平成 23 年 12 月, 岐阜, 特別講演「質量分析計を用いた同定と最新の検査事情」演者)

- 63) 平成 23 年度結核研究所臨床検査技師研修 抗酸菌検査実習コース(平成 23 年 12 月, 東京, 特別講演「抗酸菌の菌種同定(シークエンス法)」演者)
- 64) 平成 23 年度兵庫県微生物検査研究班研修会(平成 23 年 12 月, 神戸, 特別講演「これからの臨床微生物検査の話をしようー同定検査を極めようー」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 大楠清文: 第 44 回小島三郎記念技術賞(平成 21 年度)

9. 社会活動

江崎孝行:

- 1) 日本学術振興科学研究費委員会専門委員(~現在)
- 2) 日本学術会議微生物研究連絡委員(~現在)
- 3) 沖縄先端科学技術大学組換え DNA 委員長(~現在)
- 4) 製品技術評価機構遺伝子組換え生物等の検出技術検討委員(~現在)
- 5) 経済産業省産業構造審議会 化学・バイオ部会 組換え DNA 技術小委員(~現在)
- 6) 経済産業省 GILSP 告示案作成委員(~現在)
- 7) 経済産業省産業構造審議会バイオ部会・微生物開放系利用技術小委員(~現在)

10. 報告書

- 1) 江崎孝行: グローバル化する細菌性下痢症を制圧するための多角的研究: 平成 21 年度厚生労働省科学研究費補助金 地球規模保健課題推進研究事業(国際医学協力研究事業) 分担報告書: 117(平成 21 年 3 月)
- 2) 江崎孝行: 一般微生物の開放系利用に係る評価手法マニュアル: 平成 21 年度 経済産業省委託事業 分担報告書: 113(平成 21 年 3 月)
- 3) 江崎孝行: 環境対応技術開発: 平成 21 年度 経済産業省委託事業 バイオインダストリー協会 分担報告書: 204(平成 21 年 3 月)
- 4) 江崎孝行: グローバル化する細菌性下痢症を制圧するための多角的研究: 平成 22 年度厚生労働省科学研究費補助金 地球規模保健課題推進研究事業(国際医学協力研究事業) 分担報告書: 10(平成 22 年 3 月)
- 5) 江崎孝行: 「ナショナルバイオリソースプロジェクト」中核的拠点整備プログラム成果報告: 平成 23 年度文部科学省研究費補助金 分担報告書: 11(平成 23 年 3 月)
- 6) 江崎孝行: 平成 20 年度大学発事業創出実用化研究開発事業費助成金に係る事業実績報告書: 「迅速肺炎診断を目的としたカセット式簡易診断機器の開発」 分担報告書: 41(平成 23 年 3 月)
- 7) 江崎孝行: 平成 20 年度 NEDO 環境安心イノベーションプログラム/土壌汚染対策のための技術開発 VOC 物等を利用した環境汚染物質浄化技術開発: 次世代バイオレメディエーション普及のためのセーフバイオシステムの研究開発 分担報告書: 79(平成 23 年 3 月)
- 8) 江崎孝行: 炭疽, ブルセラ, 野兔病菌等の網羅的細菌迅速診断法の確立 分担報告書: 11(平成 23 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

- 1) 研究室が課題としている目標である感染症医療の変革として“外来で 30 分の待ち時間で咽頭炎, STD, 下痢症を診断する迅速診断システム”の構築は達成した(100%)。
- 2) 文科省の生物資源プロジェクト NBRP の実務の一部は P3 施設の故障で実験ができず, 凍結乾燥が実施できなかった。しかし, 岐阜大学医学部で病原微生物遺伝子資源センターとして環境整備をしていたが, ネットワーク情報の整備に努め, 独自のホームページでデータベースの状況を世界に公開した。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 感染症医療の変革のための基盤研究の目的は達成したが, 今後は実用化と普及を図る必要があり, 臨床部局との連携しデータを取得する必要がある, 臨床, および国内の病院との連携を模索している。

2) 文部省 NBRP プロジェクトではわが国の病原微生物遺伝子資源の在り方を国際的規模に高めることを要求されており、情報の公開と収集、サービスを国際的視野で再構築することが求められている

今後の展望

1) 感染症医療を変えるために外来で 30 分の待ち時間で咽頭炎, STD, 下痢症を診断する迅速診断システムの実用化をはかる。さらにこの方法は今後 15 分で完了する超高速診断法として改良を加え、感染症医療を根本から変えるシステムとして実用化を図る。

2) 文科省の生物資源プロジェクト NBRP の岐阜大学の委託事業を国家的レベルの事業規模に拡大し、国際的要求に耐えるグローバル化が要求されており、対応策を文部省、通産省に提案した。今後 4 年間で個々の展望を実現化に持っていく。その際岐阜大学の病原微生物遺伝子資源センターは時限つきであるので 5 年後には閉鎖し、国が準備する施設に移管する対応を行う計画でいる。

〔再生工学講座〕

(1) 生命機能分子設計分野

1. 研究の概要

1) 研究の背景

①幹細胞生物学と研究と再生医学への応用

当分野では、私たちの体の多くの組織や臓器は、幹細胞システムによって支えられている。幹細胞とは、組織や臓器にごく僅かに存在する未分化な細胞のことであり、①分化して組織を形成する能力（分化能）と、②新たに幹細胞自身を作り出す能力（自己複製能）、の2つの能力を兼ね備えた細胞であると定義される。すなわち、幹細胞は、組織・臓器を作り出す大元となる細胞であって、個体の一生にわたって未分化な状態で存在する細胞である。体の中の組織や臓器は、常に新陳代謝を行っている。組織は、古くなった細胞が新しい細胞に絶え間なく置き換えられることによって、常に健康な状態に保たれている。幹細胞システムは、このような組織の新陳代謝を可能にするために存在するのである。幹細胞は、それ自身が持つ自己複製能と分化能を使い分け、個体の一生にわたり、組織に分化した細胞を供給し続けることができる。また、組織が損傷を受ければ、幹細胞システムは新陳代謝のスピードを変え、速やかに組織の修復と再生を行う。このように、組織や臓器に対し、柔軟性を与え、さまざまな外的環境変化に対応する能力を持たせることこそが、幹細胞システムの重要な役割であると言える。

幹細胞の重要な特性の一つに、組織を再生する能力がある。例えば、血液の幹細胞（造血幹細胞）は骨髄から分取することが可能であるが、たった一個の造血幹細胞を移植するだけで、数十億個からなる全ての血液系の細胞を再生することができる。再生医療は、幹細胞が持つこのような驚異的な再生能力を、医療的に応用しようとするものである。例えば、癌化やさまざまな傷害により機能を失ってしまった組織や臓器を、新しく正常な幹細胞を使って、正常な状態に再生させることができれば、再び健康を取り戻すことができる。これまでの医療は、薬物を使った対処療法が主であったが、再生医療が可能になれば、病気の根絶療法が可能になる。このような、再生医療を確実に行うためには、幹細胞の特性を詳しく理解し、幹細胞を自由自在にコントロールする技術を開発する必要がある。

幹細胞は再生医療実現のために有用な細胞であるが、一方で、癌化の原因になる危険性をはらんだ細胞でもある。幹細胞は自己複製能によって永遠に増殖生存する能力を持っている。このことは、仮に幹細胞自身に遺伝子変異が起こった場合には、その変異が生涯に渡り幹細胞に固定化されてしまうことを意味している。その結果、幹細胞には、多数の遺伝子の変異が蓄積してしまう危険性がある。従って、永遠生存能を持つ幹細胞においては、他の細胞に比して、癌化に必要な遺伝子の多重変異が起こる可能性が高いのである。このような推論に基づいて、近年、“癌幹細胞説”が提唱されている。つまり、この説に従えば、癌化は、正常な幹細胞制御機構が遺伝子の多重変異により破綻した結果起こると考えられ、正常な制御を逸脱した癌幹細胞が、異常に増殖分化し、癌組織を形成した状態であるといえる。全ての癌が“癌幹細胞説”によって説明されるのかは、議論が分かれるところであるが、一部の白血病や乳がんでは癌幹細胞の存在が実証されている。これまでの癌治療では、分化した癌組織細胞を標的にして死滅させることを目指していたが、頻繁に癌が再発することがあった。“癌幹細胞説”に従えば、このような癌の再発は、癌幹細胞がもつ再生能力による癌組織再生として説明できる。“癌幹細胞説”が正しいとすると、今後は、癌幹細胞を標的とした、新たな癌の根絶治療法を開発することが必要になる。そのためには、正常な幹細胞の分子的制御機構を理解し、その破綻がどのようにして癌幹細胞を生み出すのかを理解することが重要になる。

近年の研究から個体の加齢とともに幹細胞の性質に変化が生じ、このことが組織・臓器の老化と密接な関連性があることがわかってきた。若い幹細胞と加齢した幹細胞を比較すると、加齢とともに、さまざまな質的な変化が起こっていることがわかった。このような変化は、幹細胞の増殖や分化に影響を与えると考えられ、その結果、新陳代謝の低下による組織の老化現象が起こるのではないかと推測されている。現時点で、加齢によるこのような幹細胞の変化がなぜ起こるかは解明されていないが、今後、加齢による幹細胞制御機構の変化が詳細に理解され、それを修復できるようになれば、老化の予防が可能になるかもしれない。

以上のように、幹細胞の特性を理解し、その応用方法を開発することは、再生医療、癌治療、および、抗老化といった、次世代の医療的を実現する上で欠かすことができないことである。我々は、幹細胞学と称し、発生生物学、分子生物学、遺伝学、生化学的手法を駆使して、幹細胞に関する基礎生物学的研究を推進し、幹細胞の生物学的特性や分子的制御基盤を総合的に理解することを目的に研究を進める。また、幹細胞を用いた医療の実現には、医学的、薬学的、工学的、および、産業的な学際的なアプロー

チが必須であり、産・官・学、さまざまな、研究者との共同研究を積極に行う。

②生体内における生命現象を可視化のための化合物合成と新規創薬研究

我々の研究の目的は、体の中で起こっている生命現象を可視化し解析することで、生理的な分子機能情報を解明するとともに、これまでよりもより効能を持った治療薬や診断薬を開発することである。これまでの生命医科学研究から、人の病気に関与する沢山のシグナル分子が発見されているが、これらの分子が、実際に、人の体の中でどのように働き、病気に至るのかは、十分に明らかにされていない。我々は、このようなシグナル分子について、体の中での作用機序を可視化し、生体内での病態の分子的解析や病態の制御を行うことを可能にするために、高機能低分子プローブの創製研究を行っている。いずれの研究も人への応用（創薬）を視野に入れた学際的・学融的共同研究を展開している。

2) 研究内容

①皮膚上皮幹細胞制御機構の解明

皮膚上皮は、外部からの有害物質の進入から体を守るとともに体内からの体液の漏洩防ぎ役割を担っている大変重要な臓器である。正常な皮膚上皮の機能の破綻は、さまざまな皮膚疾患を引き起こす。皮膚の異常は美容上または精神上の大きな問題を引き起こし、人間として健康な生活を営む上で大きな障害となる。皮膚上皮は常に新陳代謝を行っており、適切な新陳代謝を保つことは皮膚の健康を維持するために極めて重要である。皮膚上皮の新陳代謝は幹細胞システムによって維持されている。皮膚上皮基底膜上に存在する幹細胞は、緻密な制御のもとに増殖分化し、皮膚の上方に移動しながら、バリア機能を担う分化した角化細胞を供給する。近年、幹細胞の制御機構に関する研究は飛躍的に進んだが、皮膚上皮幹細胞の制御機構の分子的基盤については未だ不明な点が多い。このような現状を踏まえ、我々は、皮膚上皮幹細胞の制御の分子的基盤を解明し、さまざまな皮膚疾患の原因解明に貢献することを目的とする。我々はこれまでに、皮膚の遺伝子発現解析を行い、Notch および Ephrin シグナル系が上皮幹細胞の増殖分化に重要な役割を果たしていることを証明した (JID 2009, Dev Cell 2008)。これら従来の研究を遂行している過程で bHLH 型転写因子である Ascl2 が皮膚上皮細胞に発現していることを新たに同定した (Dev Cell 2008)。bHLH 型転写因子はさまざまな組織や臓器で細胞の増殖分化や機能維持に重要な役割を果たしているが、皮膚上皮細胞に発現する bHLH 型転写因子はこれまでに発見されてはいなかった。我々は、遺伝子変異マウスを用いて Ascl2 転写因子の予備的機能解析を行い、Ascl2 が上皮細胞の分化や機能維持に関与することを示す結果を得た。今後は、Ascl2 転写因子がマスター制御因子として働き、上皮細胞の分化や機能制御に中心的な役割を演じているという新たな仮説を考え、Ascl2 のマウスおよびヒト皮膚上皮細胞における生理的機能を解明することを目的に研究を進める。また、ヒト皮膚疾患との関連性について調べ、皮膚疾患治療法の新たな手がかりを提示することを目指す。

②色素幹細胞の維持機構の解明

生体内における幹細胞の制御には、周囲の特殊な環境（幹細胞ニッチ）との相互作用が必要である。しかし、幹細胞ニッチを同定することは難しく、どのような仕組みで幹細胞が制御されているのかは不明である。ニッチによる幹細胞の制御機構を解明する目的で、組織の中で幹細胞を同定することが可能な色素幹細胞に注目した。我々は、色素細胞再生の過程を詳しく観察し、毛包内のバルジと呼ばれる部位に色素幹細胞が存在することを発見した (Nishimura et al. Nature 2002)。さらに色素細胞を特異的に標識できるトランスジェニックマウスを作成し、このマウスから色素幹細胞を単離してその遺伝子発現解析を行なった (Osawa et al. Development 2005)。この遺伝子解析の結果、色素幹細胞において Notch シグナル系が活性化していることを見いだした。Notch シグナル系の役割を明らかにする目的で、色素細胞特異的に Notch シグナル系を破壊したノックアウトマウスを作成したところ、毛色に異常が生じる事を見出し、Notch シグナル系が色素幹細胞の生存維持に必要な不可欠な作用を担っていることを証明した (Moriyama et al., J Cell Biol. 2006)。また、未分化な色素前駆細胞を培養する方法を開発するとともに、培養した細胞を移植し、色素幹細胞を再構築させる移植アッセイ系を構築した (Yonetani et al., J. Invest. Dermatol, 2008)。これにより、今後、色素幹細胞において、さまざまな、機能解析を行うことが容易になった。現在、色素細胞特異的に遺伝子を阻害した多数のマウスを作成しており、体毛色変化を指標とした表現型スクリーニングを行うことによって、色素細胞幹細胞の制御に関わる分子を同定するプロジェクトを進めている。

③造血幹細胞の分子的制御機構の解明

造血幹細胞は、全ての血液細胞の源となる細胞であり、血液の恒常性の維持のために重要な機能を果たしている。現在、血液系疾患の治療のために造血幹細胞移植が行われていますが、造血幹細胞の生物学的特性は十分に明らかにされていない。私は、造血幹細胞移植をより安全に行うとともに、造血幹細胞の増殖分化を主体的に制御できる技術を開発することを目的に、造血幹細胞の分子的な制御基盤

を解明することを目指す。我々は、造血幹細胞の機能を調べるために、それを効率的に評価できるアッセイ系を構築した (Osawa et al. *J. Immunol* 1996)。このアッセイ系を用いて、最も未分化な造血幹細胞を単離し、単一の造血幹細胞が全ての血液の細胞に分化できることを実証した (Osawa et al. *Science* 1996)。次に、我々は、造血幹細胞制御の分子的基盤を明らかにするために、純化した造血幹細胞を用いて遺伝子発現解析を行い、増殖シグナル伝達に関わる新規の分子を発見した (Masuhara et al., *BBRC* 2000)。また、マイクロアレー法を用いて、より詳細な遺伝子発現解析を行い、Necdin という分子が造血幹細胞特異的に発現しているところを発見した。Necdin 遺伝子のノックアウトマウスの解析を行い Necdin が造血幹細胞の増殖制御に必要な不可欠な役割を果たしていることを証明した (Kubota et al, *Blood* 2010)。今後、さらに多数のノックアウトマウスを作成し、造血幹細胞の制御に関わる分子を同定する。

④簡便な遺伝子操作マウス作成法の開発

幹細胞の制御は、周囲の細胞や環境との相互作用によって行われており、これを体の外で再現することはできない。このような高次元な生命現象の探索研究には、遺伝子変異マウスを活用することが必要不可欠である。遺伝子変異マウスは基礎科学分野ばかりでなく、疾患モデルマウスとして疾患の診断や治療法・治療薬の開発にも大変有用である。従来の変異マウスの作製方法は、多くのステップを含むため、その作成に多大な時間と労力を要することが問題点である。我々は、ES 細胞を用いた遺伝子操作技術と胚操作技術を駆使することで、迅速かつ容易に組織特異的遺伝子ノックダウンマウスを作成する方法を開発した。この新規変異マウス作成法は、さまざまな組織細胞系譜にも応用することができ、広範囲な高次生命現象を解明するための有用な研究基盤技術になる。この方法により、今後、我々の幹細胞研究の加速化を図ることが可能になった。

⑤神経障害性疼痛の発症・維持機構解明と治療・診断薬開発に向けた特異的分子プローブの創製

アロディニアなどを主症状とする神経障害性疼痛は消炎鎮痛剤やモルヒネなどが効かない難治性の病態であり、治療薬の開発には病態にかかわる受容体やシグナル分子の同定など、分子メカニズムの解明が不可欠である。毒キノコの成分でアロディニア誘発作用を示すアミノ酸の構造を基に分子プローブを設計・合成し、その活用によりアロディニアにかかわる新規受容体の同定と機能解析を行っている。また、神経障害性疼痛モデルにおいて鎮痛効果を示す化合物の創製に成功し、新たな機序に基づく神経障害性疼痛治療薬の開発に向けた研究を進めている。

⑥神経細胞死抑制化合物の創製

パーキンソン病やアルツハイマー病などの神経変性疾患治療薬の開発をめざして、神経細胞死抑制作用を示す低分子化合物の設計・合成研究を行っている。これまでに、神経細胞死の要因となる酸化ストレスおよび小胞体ストレスに対して強力な神経細胞死抑制効果を示す化合物を合成することに成功している。また、マウスパーキンソン病モデルにおいて神経細胞死とドーパミンレベルの低下を抑制することを確認した。創薬に向けて、作用機序の解析と化合物の最適化を進めている。

⑦神経保護作用を示すプロスタグランジン分子プローブの創製

神経突起進展促進作用と酸化ストレスによる神経細胞死抑制効果を示す人工シクロペンテン型プロスタグランジン NEPP や GDNF 誘導促進作用を示すフェニルスルフェニル型化合物の創製に成功し、DP1, PPAR γ などを分子標的としていることを明らかにした。パーキンソン病モデルでの有効性の実証に向けた化合物の最適化と、PET による動態解析をめざした分子プローブの設計・合成を行っている。

⑧新規プロスタミド合成酵素阻害剤の創製

最近同定されたプロスタミド/プロスタグランジン F2 α 合成酵素の脳・神経系における役割を解明するため、特異的阻害剤の設計・合成研究を行っている。既に構造の異なる 3 種のリード化合物を見いだしており、阻害活性の増強と選択性の向上に向けた設計・合成を進めている。

2. 名簿

教授：	大沢匡毅	Masatake Osawa
准教授：	古田享史	Kyoji Furuta
助教：	古山浩子	Hiroko Koyama

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)

- 1) Suzuki M, Koyama H, Takashima-Hirano M, Doi H. Pd⁰-Mediated Rapid C-[¹³C]Methylation and

C-¹⁸F]Fluoromethylation: Revolutionary Advanced Methods for General Incorporation of Short-Lived Positron-Emitting ¹¹C and ¹⁸F Radionuclides in an Organic Framework. In *Positron Emission Tomography*; Ed. Chia-Hung Hsieh; InTech; open access publisher; 2011.

総説 (和文)
なし

総説 (欧文)
なし

原著 (和文)
なし

原著 (欧文)

- 1) Suzuki M, Sumi K, Koyama H, Siqin, Hosoya T, Takashima-Hirano M, Doi H. Pd⁰-mediated rapid coupling between methyl iodide and heteroarylstannanes: an efficient and general method for the incorporation of a positron-emitting ¹¹C radionuclide into heteroaromatic frameworks. *Chem Eur J*. 2009;15:12489-12495. IF 5.476
- 2) Shibata S, Maeda M, Furuta K, Suzuki M, Oh-hashii K, Kiuchi K, Hirata Y. Neuroprotective effects of (arylthio)cyclopentenone derivatives on manganese-induced apoptosis in PC12 cells. *Brain Res*. 2009;1294:218-225. IF 2.623
- 3) Thura M, Hokamura K, Yamamoto S, Maeda M, Furuta K, Suzuki M, Ibaraki K, Umemura K. GIF-0173 protects against cerebral infarction through DPI receptor activation. *Exp Neurol*. 2009;219:481-491. IF 4.436
- 4) Shibata S, Furuta K, Maeda M, Suzuki M, Oh-hashii K, Kiuchi K, Hirata Y. (Arylthio)cyclopentenones derivatives prevent glutamate-induced HT22 cell death through a PPAR γ -dependent pathway. *Brain Res*. 2009;1296:196-202. IF 2.623
- 5) Kohta R, Kotake Y, Hosoya T, Hiramatsu T, Otsubo Y, Koyama H, Hirokane Y, Yokoyama Y, Ikeshoji H, Oofusa K, Suzuki M, Ohta S. 1-Benzyl-1,2,3,4-tetrahydroisoquinoline binds with tubulin β , a substrate of parkin, and reduces its polyubiquitination. *J Neurochem*. 2010;114:1291-1301. IF 2.623
- 6) Ohnaka M, Okuda-Ashitaka E, Kaneko S, Ando A, Maeda M, Furuta K, Suzuki M, Takahashi K, Ito S. Induction of arginase II mRNA by nitric oxide using in vitro model of glaucoma atrophy of choroid and retina. *Inv Ophthalmol Vis Sci*. 2011;52:1493-1500. IF 3.466
- 7) Kanazawa M, Furuta K, Doi H, Mori T, Minami T, Ito S, Suzuki M. Synthesis of an acromelic acid A analog-based ¹¹C-labeled PET tracer for exploration of the site of action of acromelic acid A in allodynia induction. *Bioorg Med Chem Lett*. 2011;21:2017-2020. IF 2.661
- 8) Koyama H, Siqin, Zhang Z, Sumi K, Hatta Y, Nagata H, Doi H, Suzuki M. Highly efficient syntheses of [methyl-¹¹C]thymidine and its analogue 4'-[methyl-¹¹C]thiothymidine as nucleoside PET probes for cancer cell proliferation by Pd⁰-mediated rapid C-[¹¹C]methylation. *Org Biomol Chem*. 2011;4287-4294. IF 3.451
- 9) Suzuki M, Takashima-Hirano M, Watanabe C, Ishii H, Sumi K, Koyama H, Doi H. Synthesis of [¹¹C]all-*trans*-retinoic acid via an alkenylboron precursor by Pd(0)-mediated rapid C-[¹¹C]methylation. *J Labelled Compd Radiopharm*. 2011;54:S92. IF 0.690
- 10) Anwar A, Hosoya T, Leong K M, Onogi H, Okuno Y, Hiramatsu T, Koyama H, Suzuki M, Hagiwara M, Garcia-Blanco MA. The kinase inhibitor SFV785 dislocates dengue virus envelope protein from the replication complex and blocks virus assembly. *Plos One*. 2011;6:e23246, 1-12. IF 4.411

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：古田享史；科学研究費補助金基盤研究(B)：アロディニア誘発にかかわる新規受容体の探索プローブの創製；平成 20-22 年度；13,900 千円(5,300：4,800：3,800 千円)
- 2) 研究代表者：若林俊彦，研究分担者：古山浩子；科学研究費補助金基盤研究(B)：新規抗腫瘍効果判定を目指した分子標的イメージング診断薬の開発と臨床応用；平成 21-22 年度；265 千円(200：65 千円)
- 3) 研究代表者：夏目敦至，研究分担者：古山浩子；科学研究費補助金基盤研究(B)：悪性脳腫瘍の根治に向けたエビジェネティクスによるプログラミング創薬の開発；平成 21-22 年度；85 千円(20：65 千円)
- 4) 研究代表者：大沢匡毅；科学研究費補助金研究活動スタート支援：迅速かつ簡便な組織特異的遺伝子ノックダウンマウス作成法の開発；平成 23-24 年度；2,500 千円(1,300：1,200 千円)
- 5) 研究代表者：大沢匡毅；内藤記念科学振興財団：研究助成；平成 23 年度；3,000 千円
- 6) 研究代表者：大沢匡毅；National Institute of Health, USA, RO1 Research Grant: 1R01

AR056255-01A1: Role of Notch signaling in the maintenance of melanocyte stem cells. 平成 23
-24 年度 ; \$108,666(\$54,283 : \$54,283)

2) 受託研究

- 1) 古山浩子 : 脳腫瘍のアルキル化抗癌剤耐性タンパク活性の PET イメージング診断の開発 ; 平成 20
-21 年度 ; 3,055 千円(975 千円 : 2,080 千円) : JST
- 2) 古田享史 : 新規な神経障害性疼痛治療薬の合成技術の開発とその初期安全性の評価 ; 平成 21-22 年
度 ; 1,720 千円(1,310 千円 : 410 千円) : JST

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 古山浩子 : アイソトープ標識化合物及びアイソトープ標識化合物前駆体 : 平成 21 年(特願
2009-218247)
- 2) 古田享史 : オキシインドール誘導体及び神経細胞死抑制剤 : 平成 21 年(特願 2009-146429)
- 3) 古山浩子 : 抗 RNA ウイルス作用を有するアニリン誘導体 : Aniline derivative having anti-RNA
viral activity : 平成 23 年(WO2009-JP52253)
- 4) 古山浩子 : ヘテロ芳香環型アールの高速メチル化法及び PET トレーサー調整用キット : Method
for rapidly methylating heteroaromatic ring aryl and method for producing PET tracer : 平成 23
年(WO2010/074272)

6. 学会活動

1) 学会役員

古田享史 :

- 1) 第 40 回中部化学関係学協会支部連合秋季大会実行委員(~平成 21 年度)

古山浩子 :

- 1) 第 40 回中部化学関係学協会支部連合秋季大会実行委員(~平成 21 年度)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

古田享史 :

- 1) 第 40 回中部化学関係学協会支部連合秋季大会(平成 21 年 10 月, 岐阜, 特別討論会「環境負荷低減を
志向した有機合成」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

大沢匡毅 :

- 1) National Institute of Health, USA, ACTS RO1 Study Section, Ad Hoc Member(平成 22 年~現在)
- 2) Swiss National Science Foundation, Switzerland, Interdisciplinary PhD Project Grant, Ad Hoc
Member(平成 22 年~現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

大沢は、平成 23 年 4 月 1 日付けで、本分野に教授として赴任した。赴任時には、アメリカのハーバード大・マサチューセッツ一般病院の研究室の首謀者として、岐阜大学教授職とを兼任をしていたが、平成 23 年 8 月 31 日をもってアメリカの研究室を閉じて、本分野に研究室を完全に移転させた。国をまたいだ研究室の移転は、予想以上の労力を伴い、半年以上も研究を中断せざるを得なかった。また、アメリカからの科学研究費の移転の手続きについても、予想以上の遅れが生じ、平成 23 年 12 月 10 日をもって、NIH に正式に研究費の移転が認可された（交渉に 1 年ほどの時間を費やした）。結果として、本年度は、未だかつて無いほどの、苦悩を味わった一年になってしまった。しかし、反面、数多くの競争的資金に応募する機会と時間を得ることができたとともに、それを通じて、これまでの自分の研究を見直し、将来への研究シーズを見つけることができた。この期間を、今後の研究の発展のための重要な充電期間であると捉え、この間に学んだことを活かし、次のステージにジャンプアップする。

古田、古山らは、科学研究費および JST の受託研究費を獲得し、創薬に向けた基礎研究を中心に研究を行っている。研究成果は学会発表や学術論文による公表の他に特許出願も行っており、社会への還元を努めている。本学工学部研究室との共同研究による成果として有望な薬剤候補化合物の特許出願を予定しており、企業等との共同研究や外部資金の獲得に向けて、さらに研究を進める計画である。学生の研究指導・教育面では学会発表の他、他大学や理化学研究所との共同研究に参加させるなど、学際・国際的研究・技術者の育成に向けて努力している。

現状の問題点及びその対応策

現状の問題点は、研究体制の早急な整備と、人材の確保である。そのためには、これまで蓄積してきたデータをまとめ早急に論文化し、自身の存在価値を高める努力をするとともに、本学研究科外部や岐阜薬科大学と共同研究を行い、人材を集める必要がある。また、今後は、企業に対しても積極的に共同研究提案をしていくつもりであり、産・学共同研究体制を構築する。

研究科設立時の医工連携の趣旨に基づき、古田、古山の 2 名は医学系研究科博士前期課程の学生と工学研究科の大学院生および工学部生命工学科の卒研生の研究指導を行っている。また、古田は創薬医療情報研究科の博士後期課程の担当でもある。大沢は工学部および創薬医療情報研究科担当ではなく、また研究内容も大きく異なることから、研究・教育は独立して行っている。研究室・実験室を二分して使用しているため手狭であり、学生数が増えた場合は対処が難しい。安全面からも改善が望まれる。

今後の展望

（大沢）現状に、不満はない。今後、どのように研究室が発展していくかは、自身の身の振り方一つで決まらと思う。あらゆるチャンスを活かして、世界から認知される研究室へと発展させていくつもりである。

（古田、古山）神経変性疾患治療薬としての開発に向けて、創製した化合物の特許出願を急ぐとともに、論文や学会発表等を積極的に行い、共同研究の推進や外部資金の獲得をめざす。また、理化学研究所との PET 研究による最先端創薬研究を推進したい。教育面でも、工学系の学生が求める専門知識・技術の習得に応えられるようきめ細やかな指導を行い、創薬研究の基盤となる合成技術と十分な基礎学力を備えた学生を育成したい。

(2) 知能イメージ情報分野

1. 研究の概要

再生医科学専攻再生工学講座知能イメージ情報分野では、コンピュータを駆使して医用画像情報をいろいろな角度から処理・加工し、再生医学をはじめ様々な医療分野における画像情報を取り扱った教育・研究を行っている。例えば、コンピュータ支援診断 (computer-aided diagnosis, 以下 CAD) と呼ばれるが、画像上の病変の位置をコンピュータ処理で指摘し、あるいは病変部位のコンピュータによる定量的な分析情報を医師に提供することによって、より正確で確実な医師の画像診断が行えるように支援するシステムの開発である。理工学系研究者と医師やコ・メディカルスタッフとの有機的な共同研究が特徴である。画像情報処理、バーチャルリアリティ (VR, 仮想現実)、人工知能などの最先端の工学技術の教育を行い、また医工学的な学際領域の画像研究に応用する。なお、研究室の詳細や研究内容などについては、研究室のホームページに掲載してある (<http://www.fjt.info.gifu-u.ac.jp/>)。本分野の最近の重点的な研究課題である CAD 研究の概要について、以下に簡単に説明する。

1) 3つの画像診断領域における CAD システムの実用化研究

本研究は、2004年(平成16年)度から5年計画で採用され岐阜・大垣地域で始まった文部科学省の知的クラスター創成研究による研究(ロボティック先端医療クラスター)である(<http://www.cluster-g.jp/what.html>)。知的クラスター創成事業とは、地方自治体の主体性を重視し、知的創造の拠点たる大学、公的研究機関等を核とした関連研究機関、研究開発型企業等による国際的な競争力のある技術革新のための集積の創成を目指す文部科学省の事業である。本学においても、中期計画で取り上げられた重要研究プロジェクトである。3つのメインプロジェクト(低侵襲微細手術支援・教育訓練システムの開発、医療診断支援システムの開発、および医療介護支援システムの開発)があり、本分野では、「医療診断支援システムの開発」の中で、『画像診断支援システムの開発』に取り組んだ。

具体的には、脳MR画像、乳腺超音波画像、および眼底画像のためのCADシステムの開発を行ったが、これらは本学附属病院(脳外科、放射線科、眼科)を初めとした県内外の医学系関係者(岐阜市民病院、大垣市民病院、下呂温泉病院、木沢記念病院、名古屋医療センター、中日病院、静岡がんセンター、獨協医科大学)、本学の教育学部、県内外の技術系大学(滋賀県立大学、岐阜高専)、および県内外の計4社の企業(タック、コニカミノルタエムジー、アロカ(現 日立アロカメディカル)、興和)との共同研究であった。目標を遙かに上回る特許化や論文文化が順調に進み、複数のシステムで事業化(商品化)が達成でき、外部評価委員会からはプロジェクトの中で最高の評価をいただいた。具体的な5年間の成果の累計は、特許申請71件(企業単独のものも含む)、論文128編、受賞16件、報道4件であり、その後もさらなる成果が出ている。一部の研究については、事業終了後も企業との共同研究が継続中で、これらの中からも商用化に成功している。なお、眼底CAD関係のテーマについては、2006年6月より、経済産業省・地域新生コンソーシアム研究開発事業に一部移行され、「眼科健康診断支援システムの開発」を開始し、2007年度中に事業化を達成し、大きな評価を得た。

2) 歯科領域における画像診断支援システムの実用化研究

このプロジェクトは、前項の知的クラスタープロジェクトの後継プロジェクト研究である「文部科学省地域イノベーションクラスタープログラム、都市エリア型、岐阜県南部エリア モノづくり技術とITを活用した高度医療機器の開発:「医療・福祉機器分野への発展」を目指して」の6つの研究プロジェクトの中の一つである。2009年6月から3年度にわたる研究プロジェクトであり、当分野では、『歯科領域における画像診断支援システムの開発』に従事している。岐阜県研究開発財団、朝日大学歯学部、本学の歯科口腔外科、愛知学院大学、日本大学松戸歯学部などとの産官学体制に共同研究であり、企業は地元のタック(株)が参画している。また、岐阜県歯科医師会の協力を得て、県内の10の歯科クリニックで実証実験を行っている。2012年3月末までの実用化を目指している。

3) 医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化に関する研究

このプロジェクトでは、体幹部領域における人体臓器等の正常構造の自動解析の開発を推進しており、正常構造の理解・認識の観点からのアプローチに着目したCAD研究である。このテーマは、平成15年度発足の文部科学省の科学研究費補助金・特定研究領域「多次元医用画像の知的診断支援」(平成15年度ー平成18年度)における計画研究テーマに採用され、4年間にわたって論文文化を中心に多大な成果を挙げた。本研究で開発した各臓器の自動認識・抽出手法は、CADへの応用のみならず、各種研究プロジェクトへの今後の展開も可能である。なお、同特定領域テーマは、平成19年度に行われた終了評価で、最高位の評価を受けた。

以上の研究成果を踏まえて、人体解剖構造の自動認識の高度化の試みを継続的に行っている。具体的にはCT画像から得られた大量な解剖学的構造を集約し、モデル化することによって、他の医用画像から解

剖学的構造をより高速で、より高精度で認識することを目指している。この研究テーマは、平成 21 年度から発足した文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化」（平成 21 年度－25 年度）における計画研究テーマに採用され、本分野では研究プロジェクトの中心である「計算解剖モデル」の構築を担当している。なお、平成 23 年 9 月に実施された中間評価の結果は A+（最高評価：研究領域の設定目的に照らして、期待以上の進展が認められる）であった。

これらの研究は、本学の放射線医学分野、解剖学分野、整形外科分野等との医工連携による共同研究でもある。

4) 乳がん画像診断のための CAD システムの実用化研究

このプロジェクトはすでに 1995 年から 10 年間以上にわたり企業との共同研究を行っており、マンモグラフィ CAD システムとして、2010 年春に薬事認可を得て企業より商品された（位相イメージング画像用の CAD としては世界初の CAD）。本 CAD では、集団検診や精密検査で乳がんの画像診断で利用される乳房 X 線画像におけるがん候補陰影の位置をコンピュータの解析結果により矢印などで画像上に指摘し、医師の読影の正確度との向上や診断結果のバラツキの減少、さらに生産性の向上（診断時間の短縮）などを目的としている。また、検出された候補の良悪性の鑑別処理、候補陰影の解析結果提示機能、ディストーション病変の検出追加機能などについても、継続的に開発を続けている。なお、デンスブレストが多い本邦女性乳房の検診のためには、超音波画像も良く利用されているため、上記 1) の知的クラスタープロジェクトでは、乳腺 3 次元超音波画像のための CAD システムやリアルタイム乳腺超音波画像 CAD システムの開発も行い、現在も企業と開発を継続中である。

5) 類似症例に関する基礎研究

この研究は過去に蓄積された臨床症例を有効利用し、新しい病巣の鑑別診断を支援することを目的としている。PACS の普及により、医用画像の保存・呼び出しが容易になったが、現在ではこれらは同患者の過去の症例を参照する以外には日常的に使用されていない。そこで本研究では、膨大なデータの中から参考となる類似症例を自動選択する技術の開発を行っている。これまでにマンモグラフィでの腫瘍陰影を対象として研究を続けており、今後、他のモダリティ等にも発展させる予定である。

6) 核医学画像分野における CAD システム開発研究

体幹部 CT 画像のための CAD システム開発においては、人体構造の自動解析が重要な技術として開発された。これは、人体の形態情報を正確にコンピュータ上に記述することを目的としており、要素技術としての価値が高い。核医学画像は、機能分子のイメージングを可能としており、形態情報の解析技術と融合することによって、様々な CAD システムを構築できる。そのため、これまでの技術で培った画像認識技術を利用した分子イメージング関連の画像解析に関連する研究課題へも取り組みを始めている。主に PET 画像のための画像解析システム、シンチグラムのための画像解析システムに取り組んでいる。これらのいずれの研究も、近隣の施設との連携を行っており、文部科学省科学研究費補助金、岐阜大学活性化経費、都市エリアプロジェクトによる経費を利用して研究活動を行っている。

PET 画像においては、FDG-PET 像に着目し、体幹部領域の解剖学的標準化手法の開発、抗がん剤治療および人間ドックのための経時変化の自動解析法の開発を行っている。特にこのテーマは、平成 23 年度地域イノベーションクラスタープログラム（都市エリア型）プロジェクトの一部として可能性試験事業に採択され（平成 23 年度単年度）、実用化に向けたデータベースの構築法の一般化に取り組んでいる。

7) その他

上記以外にも、MRI 画像における肝臓疾患の自動検出や解析のための CAD 研究、救急医療のための画像支援診断のための CAD 研究、PET/CT における肺がん病変検出のための CAD 研究などなど、学内外の多くの共同研究者とともに研究開発を行っている。なお、乳がん画像診断のための CAD については厚生労働省のがん研究助成金・石橋班研究プロジェクト（デジタルマンモグラフィによる乳がん検診の効率及び精度向上・評価に関する研究）と連携した。また、各種のがん画像診断のための CAD システムの開発は、同省のがん研究助成金・飯沼班研究プロジェクト「デジタル画像処理によるがん診断支援システムの開発と利用に関する研究」と連携して研究活動を行った。

2. 名簿

教授： 藤田広志* Hiroshi Fujita
准教授： 原 武史* Takeshi Hara
助教： 周 向荣* Xiangrong Zhou
助教： 村松千左子* Chisako Muramatsu

*人間医工学研究開発センター併任

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 藤田広志. 分担執筆. 診療放射線技術(上巻)改訂第12版, 東京:南江堂;2009年:279-280, 297-304, 307-328.
- 2) 藤田広志. 分担執筆. 医用画像工学:岡部哲夫, 藤田広志編. 新医用放射線科学講座, 東京:医歯薬出版;2010年:49-87, 293-304.
- 3) 石田隆行, 桂川茂彦, 藤田広志監修(および編集幹事). 医用画像ハンドブック, 東京:オーム社;2010年.
- 4) 畑中裕司, 藤田広志. 分担執筆. 医用画像ハンドブック, 東京:オーム社;2010年:1515-1521.
- 5) 原 武史. 日本核医学技術学会編. 核医学画像処理, 京都:山代印刷株式会社出版部;2010年:111-115.
- 6) 原 武史. 分担執筆, 医用画像ハンドブック, 東京:オーム社;2010年:1072-1081.
- 7) 周 向栄. 分担執筆, 医用画像ハンドブック, 東京:オーム社;2010年:294-299, 777-780.
- 8) 村松千左子. 分担執筆, 医用画像ハンドブック, 東京:オーム社;2010年:608-612.
- 9) 藤田広志. 分担執筆. 岐阜大学教養教育推進センター編. 教養ブックレット Vol.3, 「日本脱出! 留学のすすめ」, 岐阜:みらい;2010年:56-57.

著書 (欧文)

- 1) Lee Y, Hara T, Tsai DY, Fujita H. Concept and practice of genetic algorithm template matching (GATM) and higher order local autocorrelation schemes in automated detection of lung nodules, in Lung Imaging and Computer-Aided Diagnosis, eds. El-Baz A and Suri JS, Chap. 12, Florida, USA: CRC Press; 2011:267-295.

総説 (和文)

- 1) 藤田広志. 医用画像診断領域におけるコンピュータ支援診断(CAD)システム, WEB Journal 2009年; No.100:29-32.
- 2) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 梶田公博, 北川輝彦, 美尾谷成貴, 周 向栄, 藤田広志. MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用-, Rad Fan 2009年;7巻:20-22.
- 3) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 梶田公博, 北川輝彦, 美尾谷成貴, 周 向栄, 藤田広志. MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用-, 映像情報メディカル 2009年;41巻:1012-1015.
- 4) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 梶田公博, 北川輝彦, 美尾谷成貴, 周 向栄, 藤田広志. MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用, INNERVISION 2009年;24巻:59-61.
- 5) 福岡大輔, 藤田広志. 乳腺超音波コンピュータ支援診断(CAD)システム開発が目指すもの, 新医療 2009年;36巻:112-115.
- 6) 渡邊春夫, 兼松雅之, 近藤浩史, 五島 聡, 加藤博基, 梶田公博, 北川輝彦, 見尾谷成貴, 周 向栄, 藤田広志. Cine-tagging 画像を用いた肝の MR エラストグラフィ-肝線維症診断への応用-, 総説, 断層映像研究会雑誌 2009年;36巻:141-148.
- 7) 藤田広志. より輝ける画像情報の高度利用へ, 映像情報 Medical 2010年;42巻:364-365.
- 8) 福岡大輔, 藤田広志. 乳腺超音波画像のためのコンピュータ支援診断システム, 特集:超音波と可視化〜目で見る超音波〜, 超音波 TECHNO 2010年;22巻:31-34.
- 9) 藤田広志. 21世紀の診断と治療に関わる画像技術, 次の10年の進歩は? CADについて, 企画特集号, 医用画像情報学会雑誌 2010年;27巻:81-84.
- 10) 林 直樹, 村松千左子. 教育講座 第1回 国際学会紹介 まず発表先を決めましょう!(総纂, 田中利恵) - American Association of Physicists in Medicine, 日本放射線技術学会雑誌 2010年;66巻:85.
- 11) 村松千左子. 教育講座 第2回 投稿区分, 発表形式, アブストラクトのフォーマットについて(総纂, 田中利恵) - American Association of Physicists in Medicine, 日本放射線技術学会雑誌 2010年;66巻:165.
- 12) 村松千左子. 教育講座 第6回 効果的な参加の仕方は? スケジュール, イベント&サービス&食事情報(総纂, 田中利恵) - American Association of Physicists in Medicine, 日本放射線技術学会雑誌 2010年;66巻:1353.
- 13) 藤田広志. 医工連携・産学官連携によるコンピュータ支援診断(CAD)システムの開発, 映像情報インダストリアル 2011年;43巻:64-72.
- 14) 藤田広志. 医工連携・産学官連携によるコンピュータ支援診断(CAD)システムの開発, 映像情報 Medical 2011年;43巻:339-347.
- 15) 内山良一, 張 学軍, 藤田広志. <小特集>「医療用画像処理」:形態情報における画像診断-脳と肝臓のMRIによる診断支援技術, 映像情報メディア学会誌 2011年;65巻:436-439.
- 16) 藤田広志, 原 武史, 周 向栄, 林 達郎, 神谷直希, 張 学軍, 陳 華岳, 星 博昭. 計算解剖モデルの構築, MIT(日本医用画像工学会)誌 2011年;29巻:116-122.
- 17) 藤田広志, 原 武史, 周 向栄, 福岡大輔, 村松千左子, 林 達郎. コンピュータ支援画像診断技術の最先端, 非破壊検査 2011年;60巻:686-693.

総説 (欧文)

- 1) Lee GN, Fukuoka D, Morita T, Fujita H. Whole-breast ultrasound brings significant screening benefits. Diagnostic Imaging Asia-Pacific. 2010;WINTER 2010:7-15.

- 2) Fujita H, You J, Li Q, Arimura H, Tanaka R, Sanada S, Niki N, Lee G, Hara T, Fukuoka D, Muramatsu C, Katafuchi T, Inuma G, Miyake M, Arai Y, Moriyama N. State-of-the-art of computer-aided detection/diagnosis (CAD): Medical Biometrics. In: Zhang D, Sonka M, eds. Proceedings of Second International Conference on Medical Biometrics 2010, ICMB2010, LNCS. 2010;6165:296-305.
- 3) Fujita H, Zhang X, Kido S, Hara T, Zhou X, Hatanaka Y, Xu T. An introduction and survey of computer-aided detection/diagnosis. Proc of 2010 International Conference on Future Computer, Control and Communication (FCCC 2010) - International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010). 2010;2:200-205.
- 4) Matsuo S, Fujita H, Morishita J, Katafuchi T. Introducing a novel image quality measure for digital phase-contrast-image evaluation. In: Marti J, Oliver A, Freixenet J, Marti R, eds. Digital Mammography. Springer Lectures Notes in Computer Science (LNCS) series: LNCS6136, Springer; 2010:137-144.
- 5) Lee GN, Okada T, Fukuoka D, Muramatsu C, Hara T, Morita T, Takada E, Endo T, Fujita H. Classifying breast masses in volumetric whole breast ultrasound data: A 2.5-dimensional approach. In: Marti J, Oliver A, Freixenet J, Marti R, eds. Digital Mammography. Springer Lectures Notes in Computer Science (LNCS) series: LNCS6136, Springer; 2010:636-642.
- 6) Hatanaka Y, Noudo A, Muramatsu C, Sawada A, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Automatic measurement of vertical cup-to-disc ratio on retinal fundus images. In: Zhang D, Sonka M, eds. Medical Biometrics (Proceedings of Second International Conference on Medical Biometrics 2010, ICMB2010), LNCS. 2010;6165:54-72.

原著 (和文)

- 1) 韓 明旭, 林 達郎, 周 向榮, 陳 華岳, 原 武史, 藤田広志, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭. 体幹部 X 線 CT 画像における脊柱の正中矢状面を利用した椎体の骨密度と彎曲角度の自動計測法, 医用画像情報学会雑誌 2009 年; 26 卷: 52-58.
- 2) 國枝琢也, 内山良一, 原 武史, 藤田広志, 加藤博基, 浅野隆彦, 兼松雅之, 星 博昭, 岩間 亨, 紀ノ定保臣, 横山和俊, 篠田 淳. 脳 MR 画像におけるラクナ梗塞と血管周囲腔拡大の鑑別法, 医用画像情報学会雑誌 2009 年; 26 卷: 59-63.
- 3) 奈良村五十志, 林 達郎, 周 向榮, 陳 華岳, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. X 線 CT 画像における骨盤腔形状を用いた前立腺の中心位置の自動推定, 医用画像情報学会雑誌 2009 年; 26 卷: 73-77.
- 4) 浅野龍紀, 内山良一, 浅野隆彦, 加藤博基, 原 武史, 周 向榮, 岩間 亨, 星 博昭, 紀ノ定保臣, 藤田広志. MRA 画像における脳動脈領域の抽出法 - 大規模データベースを用いた評価 -, 医用画像情報学会雑誌 2010 年; 27 卷: 55-60.
- 5) 寺本篤司, 尾崎香帆, 宮下真梨子, 大野智之, 津坂昌利, 藤田広志, 小原 健. 放射線技師教育用コーンビーム CT システムの開発, 日本放射線技術学会雑誌 2011 年; 67 卷: 1200-1208.

原著 (欧文)

- 1) Ikedo Y, Morita T, Fukuoka D, Hara T, Lee G, Fujita H, Takada E, Endo T. Automated analysis of breast parenchymal patterns in whole breast ultrasound images: Preliminary experience. Int J Comp Assis Radiol Surg. 2009;4:299-306.
- 2) Zhang X, Kanematsu M, Fujita H, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Hoshi H. Application of an artificial neural network to the computer-aided differentiation of focal liver disease in MR imaging. Radiol Phys Technol. 2009;2:175-182.
- 3) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Hara T, Hoshi H, Yokoyama R, Kanematsu M, Fujita H. Automated recognition of the psoas major muscles on X-ray CT images. Proc. of the 31st Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society. 2009;3557-3560.
- 4) Zhou X, Hayashi T, Chen H, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated measurement of bone-mineral-density (BMD) values of vertebral bones based on X-ray torso CT images. Proc. of the 31st Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society. 2009;3573-3576.
- 5) Dalal P, Ju L, McLaughlin M, Zhou X, Fujita H, Wang S. 3D open-surface shape correspondence for statistical shape modeling: Identifying topologically consistent landmarks. Proc. of 2009 IEEE 12th International Conference on Computer Vision (ICCV). 2009;1857-1864.
- 6) Zhang X, Fujita H, Chen J, Zhnag Z. Effect of training artificial neural networks on 2D image: An example study on mammography. Proc. of 2009 International Conference on Artificial Intelligence and Computational Intelligence. 2009;214-218.
- 7) Muramatsu C, Li Q, Schmidt RA, Shiraishi J, Doi K. Determination of similarity measures for pairs of mass lesions on mammograms by use of BI-RADS lesion descriptors and image features. Acad Radiol. 2009;16:443-449.
- 8) Niemeijer M, van Ginneken B, Cree MJ, Mizutani A, Quellec G, Sanchez CI, Zhang B, Hornero R, Lamard M, Muramatsu C, Wu X, Cazuguel G, You J, Mayo A, Li Q, Hatanaka Y, Cochener B, Roux C,

IF 2.195

- Karray F, Garcia M, Fujita H, Abramoff MD. Retinopathy online challenge: Automatic detection of microaneurysms in digital color fundus photographs. *IEEE T Med Imaging*. 2010;29:185-195. IF 3.639
- 9) Muramatsu C, Hayashi Y, Sawada A, Hatanaka Y, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Detection of retinal nerve fiber layer defects on retinal fundus images for early diagnosis of glaucoma. *J Biomed Opt*. 2010;15:016021-1-016021-7. IF 3.188
- 10) Muramatsu C, Schmidt RA, Shiraishi J, Li Q, Doi K. Presentation of similar images as a reference for distinction between benign and malignant masses on mammograms: Analysis of initial observer study. *J Digit Imaging*, 2010;23:592-602. IF 1.421
- 11) Van Ginneken B, Armato III SG, de Hoop B, van A.de Vorst S, Duindam T, Niemeijer M, Murphy K, Schilham A, Retico A, Fantacci ME, Camarlinghi N, Bagagli F, Gori I, Hara T, Fujita H, Gargano G, Bellotti R, Carlo FD, Tangaro S, Bolanos L, Cerello P, Cheran SC, Torres EL, Prokop M. Comparing and combining algorithms for computer-aided detection of pulmonary nodules in computed tomography scans: the ANODE09 study. *Med Image Anal*. 2010;14:707-722. IF 4.364
- 12) Watanabe H, Kanematsu M, Kitagawa T, Suzuki Y, Kondo H, Goshima S, Kajita K, Bae KT, Hirose Y, Miotani S, Zhou X, Fujita H. MR elastography of the liver at 3 T with cine-tagging and bending energy analysis: Preliminary results. *Eur Radiol*. 2010;20:2381-2389. IF 3.594
- 13) Hara T, Katafuchi T, Kobayashi T, Zhou X, Itoh S, Fujita H. Automated analysis of standard uptake value for torso FDG-PET images. *Proc. of 2010 International Conference on Future Computer, Control and Communication (FCCC 2010) - International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010) -*, 2010;2:277-279.
- 14) Zhou X, Wang S, Chen H, Zhang X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Rapid organ localization in 3D torso CT images based on ensemble learning. *Proc. of 2010 International Conference on Future Computer, Control and Communication (FCCC 2010) - International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010) -*, 2010;2:312-315.
- 15) Zhang X, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Qin T, Fujita H. Computer-aided detection and diagnosis on hepatic MR and CT images. *Proc. of 2010 International Conference on Future Computer, Control and Communication (FCCC 2010) - International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010) -*, 2010;2:323-326.
- 16) Hatanaka Y, Muramatsu C, Hara T, Fujita H. Automated detection arteriovenous crossing phenomenon on retinal images. *Proc. of 2010 International Conference on Future Computer, Control and Communication (FCCC 2010) - International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010) -*, 2010;2:340-343.
- 17) Zhou X, Yoshimoto S, Wang S, Cheng H, Hara T, Yokoyama R, Fujita H. Automated localization of solid organs in 3D CT images: A majority voting algorithm based on ensemble learning, *Proc. of International Workshop on Machine Learning in Medical Imaging (MLMI) in conjunction with International Conference for Medical Image Computing and Computer-Assisted Intervention - MICCAI 2010*, 2010;01:1-8.
- 18) Muramatsu C, Nakagawa T, Sawada A, Hatanaka Y, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Automated segmentation of optic disc region on retinal fundus photographs: Comparison of contour modeling and pixel classification methods. *Comput Meth Prog in Bio*. 2011;101:23-32. IF 1.238
- 19) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Analysis of bone mineral density distribution at trabecular bones in thoracic and lumbar vertebrae using X-ray CT images. *J Bone Miner Metab*. 2011;29:174-185. IF 2.238
- 20) Li F, Hara T, Shiraishi J, Engelmann R, MacMahon H, Doi K. Improved detection of subtle lung nodules by use of chest radiographs with bone suppression imaging: Receiver operating characteristic analysis with and without localization. *Am J Roentgenol*. 2011;196:W535-W541. IF 2.797
- 21) Teramoto A, Kajihara T, Suzuki S, Kinoshita K, Tsuzaka M, Fujita H. Development of quality control system for flat panel detectors. *Radiological Physics and Technology*. 2011;4:164-172.
- 22) Muramatsu C, Hatanaka Y, Iwase T, Hara T, Fujita H. Automated selection of major arteries and veins for measurement of arteriolar-to-venular diameter ratio on retinal fundus images. *Computerized Med Imag Grap*. 2011;35:472-480. IF 1.110
- 23) Gao X, Uchiyama Y, Zhou X, Hara T, Asano T, Fujita H. A fast and fully automatic method for cerebrovascular segmentation on time-of-flight (TOF) MRA image. *J Digit Imaging*. 2011;24:609-625. IF 1.413
- 24) Hatanaka Y, Noudo A, Muramatsu C, Sawada A, Hara T, Yamamoto T, Fujita H. Automatic measurement of cup to disc ratio based on line profile analysis in retinal images. *Proc. of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society*. 2011:3387-3390.
- 25) Muramatsu C, Hatanaka Y, Sawada A, Yamamoto T, Fujita H. Computerized detection of peripapillary chorioretinal atrophy by texture analysis. *Proc. of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society*. 2011:5947-5950.
- 26) Sawagashira T, Hayashi T, Hara T, Katsumata A, Muramatsu C, Zhou X, Iida Y, Katagi K, Fujita H. An automatic detection method for carotid artery calcifications using top-hat filter on dental panoramic radiographs. *Proc. of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in*

- Medicine and Biology Society. 2011:6208-6211.
- 27) Kamiya N, Zhou X, Chen H, Muramatsu C, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Automated segmentation of recuts abdominis muscle using shape model in X-ray CT images. Proc. of the 33rd Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society. 2011:7993-7996.
- 28) Yamada A, Hara T, Li F, Fujinaga Y, Ueda K, Kadoya M, Doi K. Quantitative evaluation of liver function with use of gadoxetate disodium-enhanced MR Imaging. Radiology. 2011;260:727-733. IF 6.066
- 29) Muramatsu C, Nakagawa T, Sawada A, Hatanaka Y, Yamamoto T, Fujita H. Automated determination of cup-to-disc ratio for classification of glaucomatous and normal eyes on stereo retinal fundus images. J Biomed Opt. 2011;16:096009-1-096009-7. IF 3.188

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：藤田廣志，研究分担者：原 武史，周 向栄；科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型):計算解剖学モデルの構築;平成 21-25 年度;105,950 千円(14,690:23,140:23,010:23,660:21,450 千円)
- 2) 研究代表者：原 武史，研究分担者：片渕哲朗，藤田廣志；科学研究費補助金基盤研究(C):複数 PET 核種の集積分布の定量化による人体代謝アトラスの構築に関する研究；平成 19-22 年度；4,550 千円(1,170 : 1,430 : 1,040 : 910 千円)
- 3) 研究代表者：石橋忠司，研究分担者：植松孝悦，内山菜智子，大貫幸二，原 武史，松本政雄；厚生労働省がん研究助成金(石橋班):デジタルマンモグラフィによる乳癌検診の効率および精度向上・評価に関する研究；分担研究課題(デジタルマンモグラフィを用いた乳がん検診における CAD に関する研究)；平成 20-21 年度；分担金額 2,400 千円(1,200 : 1,200 千円)
- 4) 研究代表者：原 武史；立石科学技術振興財団研究助成金：脳 X 線 CT 画像の標準化による救急医療のための脳画像解析システムに関する研究；平成 20-22 年度；2,500 千円(2,500 : 0 : 0 千円)
- 5) 研究代表者：周 向栄；栢森情報科学振興財団研究助成金：高精細な 3 次元体幹部 CT 画像における人体の解剖学的構造の自動認識；平成 19-21 年度；900 千円(900 : 0 : 0 千円)
- 6) 研究代表者：村松千左子；科学研究費補助金若手研究(B)：乳癌診断支援のための類似症例検索システムの開発；平成 21-24 年度；3,250 千円(672 : 1408 : 520 : 650 千円)
- 7) 研究代表者：村松千左子；日本学術振興会国際学会等派遣事業：Computerized detection of retinal nerve fiber layer defects in retinal fundus images by modified polar transformation and Gabor filtering；平成 21 年 9 月；World Congress on Medical Physics and Biomedical Engineering 渡航費用 283,760 円
- 8) 研究分担者：小畑秀文，研究分担者：増谷佳孝，佐藤嘉伸，藤田廣志，仁木 登，森 健策，清水昭伸，木戸尚治，橋爪 誠，目加田慶人，縄野 繁，井宮 淳，鈴木直樹；科学研究費補助金新学術領域(研究領域提案型)：医用画像に基づく計算解剖学の創成と診断・治療支援の高度化；平成 21-23 年度；分担金額 111 千円(39 : 26 : 26 千円)
- 9) 研究代表者：飯沼 元，研究分担者：長谷川純一，仁木 登，藤田廣志，清水昭伸，森 健策，縄野 繁，森 雅樹，篠崎賢治，松迫正樹，三澤一成；厚生労働省がん研究助成金(機械研究) デジタル画像処理によるがん診断支援システムの開発と利用に関する研究；分担研究課題(体幹部画像における異常陰影に自動検出システムの開発)；平成 21-22 年度分担金額 2,600 千円(1,500 : 1,100 千円)
- 10) 研究代表者：片渕哲朗，研究分担者：原 武史；分担研究課題(マルチカメラシンチグラムにおける集積部位の距離計測と高解像度撮影に関する研究)；平成 23 年度分担金額 200 千円
- 11) 研究代表者：原 武史；大学活性化経費(研究：若手研究支援)；平成 23 年度；2,000 千円
- 12) 研究代表者：周 向栄；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：大規模医用画像データベースの学習と類似画像検索に基づく汎用臓器抽出手順の開発；平成 23-25 年度；4,810 千円(2,470 : 1,690 : 650 千円)
- 13) 研究代表者：村松千左子；大学活性化経費(研究：研究グループ形成支援)；平成 23 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 藤田廣志：都市エリア産学官連携促進事業(発展型)ー岐阜県南部エリアー：モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発における「歯科領域における画像診断支援システムの開発」；平成 21-23 年度；49,738,440 円(15,098,440 : 15,960,000 : 18,680,000 円)
- 2) 原 武史：可能性試験事業ー岐阜県南部エリアー：平成 23 年度地域イノベーションクラスタープロ

グラム(都市エリア型)「FDG-PET 画像の読影支援システム実用化に向けたデータベース構築」;平成 23 年度;1,900 千円

3) 共同研究

- 1) 藤田廣志:医療診断支援システムの開発;平成 21-23 年度;6,600 千円(2,200:2,200:2,200 千円);日立アロカメディカル(株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 藤田廣志, 村松千左子, 他 1 名:眼底画像解析システム, 及び眼底画像解析プログラム(緑内障の判定方法)(発明);平成 21 年(特願 2009-710)
- 2) 藤田廣志, 村松千左子, 他 1 名:眼底画像解析システム, 及び眼底画像解析プログラム(毛細血管瘤の強調方法)(発明);平成 21 年(特願 2009-22986)
- 3) 藤田廣志, 原 武史, 林 達郎, 他 1 名:パノラマエックス線写真を利用した診断支援システム, 及びパノラマエックス線写真を利用した診断支援プログラム(発明);平成 23 年(特願 2011-60256)
- 4) 藤田廣志, 福岡大輔, 原 武史:医用動画像による画像診断システム(発明);平成 23 年(登録番号 4701397)
- 5) 藤田廣志, 他 2 名:画像撮影装置及び画像解析プログラム(発明);平成 23 年(登録番号 4817184)
- 6) 藤田廣志, 岩間 亨, 他 2 名:医用画像処理装置(発明);平成 23 年(登録番号 4823204)
- 7) 藤田廣志, 他 2 名:画像解析装置及び画像解析プログラム(発明);平成 23 年 9 月 16 日(登録番号 4822527)
- 8) 藤田廣志, 他 5 名:画像診断支援装置および画像診断支援方法(発明);平成 23 年(特願 2011-250043)
- 9) 藤田廣志, 原 武史, 林 達郎, 他 1 名:パノラマエックス線写真を利用した診断支援システム, 及びパノラマエックス線写真を利用した診断支援プログラム(発明);平成 23 年(特願 2011-未定)

6. 学会活動

1) 学会役員

藤田廣志:

- 1) 日本医用画像工学会幹事(~現在)
- 2) 日本乳腺・甲状腺超音波診断会議幹事(~現在)
- 3) 日本乳癌画像研究会デジタル分科会委員(~現在)
- 4) 医用画像情報学会会長(~現在)
- 5) 日本スカンジナビア放射線医学協会幹事(~現在)
- 6) 電子情報通信学会医用画像研究専門委員会委員長(~平成 21 年 5 月)
- 7) 電子情報通信学会医用画像研究専門委員会顧問(平成 21 年 5 月~現在)
- 8) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS 2009), Program Committee member(~平成 21 年 6 月)
- 9) 8th Symposium of the Scandinavian Japan Radiological Society and 11th Nordic Japan PACS Symposium, Scientific Advisory Board member (~現在)
- 10) 日本生体医工学会代議員(~現在)
- 11) 岐阜東洋医学研究会世話人(~現在)
- 12) SPIE Medical Imaging, Program committee member (~現在)
- 13) 呼吸機能イメージング研究会世話人(~現在)
- 14) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2009 プログラム委員(平成 21 年 1 月~平成 21 年 8 月)
- 15) International Forum on Medical Imaging in Asia 2009, Advisory Board member(~平成 21 年 1 月)
- 16) International Symposium on the Project “Computational Anatomy” funded by MEXT Grand-in-Aid for Scientific Research on Innovative Areas, Steering Committee member(~現在)
- 17) 大腸 3 次元 CT 研究会顧問(平成 21 年 7 月~現在)
- 18) Computer Assisted Radiology and Surgery(CARS 2010), Program Committee member (~平成 22 年 6 月)
- 19) Computer Assisted Radiology and Surgery(CARS 2011), Program Committee member(~平成 23 年 6 月)
- 20) International Workshop on Digital Mammography 2010, Scientific Committee member(~平成

22年6月)

- 21) International Forum on Medical Imaging in Asia 2011, Advisory Board member(～平成23年1月)
- 22) International Conference on Medical Biometrics (ICMB2010), Program Committee member (平成21年10月～平成22年6月)
- 23) 日本生体医工学会東海支部理事・評議員(平成22年10月～現在)
- 24) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2011 プログラム委員(平成23年1月～平成23年8月)
- 25) MICCAI 2011 (Toronto) Workshop on Breast Image Analysis, Scientific Committee member(平成23年1月～平成23年9月)
- 26) MICCAI 2011 (Toronto) Workshop on Computational and Clinical Applications in Abdominal Imaging, Program Committee member(平成23年1月～平成23年9月)
- 27) 公益社団法人日本放射線技術学会倫理規定・倫理ガイドライン作成特別委員会委員(平成23年4月～現在)
- 28) The 25th International Symposium on Computer-Based Medical System, Special track on Image processing for ophthalmology: Challenges in retinal analysis and related fields, Program Committee member (平成23年11月～現在)
- 29) 第28回国際コンピュータ支援放射線医学・外科学会議 医用画像工学系学術委員会委員(平成23年12月～現在)

原 武史：

- 1) 医用画像情報学会理事(～現在)
- 2) 日本放射線技術学会画像分科会委員(～現在)
- 3) 電子情報通信学会医用画像研究専門委員会委員(～現在)
- 4) 日本生体医工学会東海支部学術大会プログラム委員長(平成22年10月～平成23年10月)
- 5) 日本生体医工学会東海支部評議員(平成22年10月～現在)
- 6) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2011 プログラム委員(平成23年1月～平成23年8月)

周 向榮：

- 1) International Forum on Medical Imaging in Asia 2009, Program Committee Member(～平成21年1月)
- 2) International Forum on Medical Imaging in Asia 2011, Program Committee Member(～平成23年1月)
- 3) MLMI 2011 - International Workshop on Machine Learning in Medical Imaging, Program Committee Member(平成23年1月～平成23年9月)

2) 学会開催

藤田廣志：

- 1) 平成23年度日本生体医工学会東海支部学術集会大会長(平成23年10月15日)

原 武史：

- 1) 医用画像情報学会平成23年度年次(第160回)大会大会長(平成23年5月28日)

3) 学術雑誌

藤田廣志：

- 1) 日本放射線技術学会英語論文誌；編集委員(～現在)
- 2) Diagnostic Imaging Asia-Pacific；Editorial Advisory Board(平成21年4月～現在)
- 3) 電子情報通信学会医用画像小特集号(和文誌D&英文論文誌D合同)編集委員会委員長(平成23年12月～現在)

原 武史：

- 1) 日本放射線技術学会英語論文誌；編集委員(平成21年6月～現在)
- 2) 電子情報通信学会医用画像小特集号(和文誌D&英文論文誌D合同)編集委員会委員(平成23年12月～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

藤田廣志 :

- 1) 第 28 回日本画像医学会(平成 21 年 2 月, 東京, ワークショップ「乳癌検診の現状と今後の展望」コンピュータ支援診断(CAD)の現状と今後の可能性, 演者)
- 2) 日本乳癌画像研究会第 11 回デジタルマンモグラフィ分科会(平成 21 年 8 月, 名古屋, 特別講演「超高精細モニタの開発と物理特性」座長)
- 3) メディカルイメージング連合フォーラム 2010(平成 22 年 1 月, 沖縄, パネル討論「新学術領域「計算解剖学」何をめざすか?何を期待するか?」座長)
- 4) 第 15 回京滋乳腺画像・病理カンファレンス(平成 22 年 4 月, 京都, 特別講演「マンモグラフィ CAD(コンピュータ支援診断)とその周辺」演者)
- 5) International Conference on Medical Biometrics(ICMB)2010(2010.06, Hong Kong, China, Keynote Speech : The state-of-art of CAD (computer aided diagnosis); Speaker)
- 6) IEEE 1st International Conference on Medical Image Analysis and Clinical Applications(2010.06, Guangzhou, China, Plenary lecture : The state of the art of computer-aided diagnosis/detection (CAD) ; Speaker)
- 7) IEEE 1st International Conference on Medical Image Analysis and Clinical Applications(2010.06, Guangzhou, China, Expert Report: Recent Research and Development in MRI Coil Technology; Chair)
- 8) International Conference on Medical Biometrics (ICMB) 2010(2010.06, Hong Kong, China, Special Session on State-of art CAD : The state-of-art of CAD (computer aided diagnosis) ; Chair)
- 9) Joint meeting of the 8th Symposium of the Scandinavian Japanese Radiological Society and 11th Nordic Japan PACS Symposium(2010.09, Vejle, Denmark, Special invited session on CAD : Recent CAD projects in Japan; Speaker)
- 10) 平成 22 年度第 1 回予防医療研究会(平成 22 年 9 月, 千葉, 招待講演「知的クラスターと都市エリアプロジェクトにおけるコンピュータ支援診断(CAD)システムの研究開発」演者)
- 11) Joint meeting of the 8th Symposium of the Scandinavian Japanese Radiological Society and 11th Nordic Japan PACS Symposium(2010.09, Vejle, Denmark, Special invited session on CAD : Chair)
- 12) International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010)(2010.12, Nanning, China, Keynote speeches: Comparison of Prediction Methods with Few Observations – A Case : Aircraft Failure Rate Forecasting; Chair, Research on Self-Evolution Softman and Network Trust Management; Chair, and Multi-core Computing ; Chair)
- 13) 平成 22 年度みえメディカル研究会第 1 回電子システム研究会(平成 22 年 10 月, 三重, 招待講演「コンピュータ支援診断システムの開発ー基礎から実用化までー」演者)
- 14) International Forum on Computer Science-Technology and Applications (IFCSTA 2010)(2010.12, Nanning, China, Keynote speech: The state-of-art of CAD (computer-aided detection/diagnosis) ; Speaker)
- 15) The International Forum on Medical Imaging in Asia(IFMIA)(平成 23 年 1 月, 沖縄, 招待講演「Invited talks from China」座長)
- 16) 日本医用画像工学会 JAMIT 大会 2011(平成 23 年 8 月, 大田原, ワークショップ「CT Image Wisely」座長)
- 17) 平成 23 年度全国私立歯科大・歯学部附属病院診療放射線技師代表者会議(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演「コンピュータ支援診断(CAD)の現状と将来」演者)
- 18) 平成 23 年度日本生体医工学会東海支部学術集会(平成 23 年 10 月, 名古屋, 特別招聘シンポジウム「文部科学省地域イノベーション戦略支援プログラム(都市エリア型)岐阜県南部エリア「モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発」プロジェクト最新成果報告, 座長)
- 19) The 1st International Conference on Radiological Science and Technology(平成 23 年 10 月, 神戸, 招待講演「Examining the future of breast imaging」座長)
- 20) 中国・東北大学・招聘講演(平成 23 年 11 月, 招聘講演「The state of the art of computer-aided diagnosis/detection (CAD)」演者)

原 武史 :

- 1) 日本核医学会(平成 22 年 11 月, 大宮, シンポジウム「核医学画像における定量性の向上と処理・認

識技術」において、「統計的正常画像を用いた体幹部 FDG-PET 画像の定量解析」シンポジスト)

- 2) Asian Society of Nuclear Medicine and Technology(2011.10, Tsukuba, Japan, Special Lecture: Computer-aided diagnostic system for torso FDG-PET scan by using statistical normal models; Speaker)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 原 武史, 周 向栄, 藤田廣志 : 2009 年欧州放射線会議(ECR2009)において Certificate of Merit 賞を受賞(平成 21 年度)
- 2) 村松千左子, 藤田広志 : 第 65 回日本放射線学術学会総会学術大会において電子ポスターで金賞を受賞(平成 21 年度)
- 3) 藤田廣志 : 岐阜大学創立 60 周年記念日行事において職員表彰(平成 21 年度)
- 4) 藤田広志, 他 : 日本放射線技術学会第 66 回総会学術大会にて電子ポスター(CyPos)銀賞 受賞(平成 22 年度)
- 5) 原 武史, 藤田廣志, 岩間 亨, 星 博昭, 紀ノ定保臣, 他 : 2010 年第 13 回アジア・オセアニア放射線会議(AOCR2010)において「The Best Scientific Paper Award」受賞(平成 21 年度)
- 6) 原 武史, 藤田広志, 他 : 2010 年度画像電子学会・最優秀論文賞 受賞(平成 22 年度)
- 7) 原 武史, 他 : The Best Poster Award, the Advances in Neuroblastoma, 2010 (平成 22 年度)
- 8) 村松千左子 : 日本放射線技術学会・技術新人賞画像分野 受賞(平成 22 年度)
- 9) 周 向栄, 原 武史, 横山龍二郎, 渡邊春夫, 兼松雅之, 藤田廣志, 他 : 2011 医用画像アジア国際フォーラム(IFMIA2011)において「The Best Poster Award」受賞(平成 22 年度)
- 10) 原 武史, 藤田廣志, 他 : SPIE Medical Imaging 2011 において「Honorable Mention Poster Award 受賞(平成 22 年度)
- 11) 藤田広志 : 電子情報通信学会フェロー(平成 23 年度)
- 12) 藤田廣志, 他 : アジアオセアニア医学物理学会において「ポスター賞」受賞(平成 23 年度)
- 13) 藤田廣志, 福岡大輔, 原 武史 : 小野木科学技術振興財団において「優秀発表賞」(優れた発明品を対象)受賞(平成 23 年度)
- 14) 松迫正樹, 白石順二, 福岡大輔, 原 武史, 阿部裕之, 山田 哲, 杉本勝俊, 森進太郎, 松本拓也, 周向栄, 村松千左子, 藤田広志 : 2011 年北米放射線学会(RSNA2011)において Certificate of Merit 賞を受賞(平成 23 年度)

9. 社会活動

藤田廣志 :

- 1) 都市エリア産学官連携促進事業(発展型)ー岐阜県南部エリアーに係る医工連携推進本部「事業戦略会議」委員(平成 21 年度)
- 2) 地域イノベーションクラスタープログラム(都市エリア型)岐阜県南部エリアに係る医工連携推進本部「事業戦略会議」委員(平成 22-23 年度)
- 3) 画像診断分野・コンピュータ診断支援装置開発ワーキンググループ委員(独立行政法人 産業技術総合研究所・同人間福祉医工学研究部門医療機器開発ガイドライン検討実務委員会)(平成 21-23 年度)
- 4) NEDO 技術委員(独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構)(平成 22-23 年度)
- 5) NEDO 「がん超早期診断・治療機器の総合研究開発/超早期高精度診断システムの研究開発 : 病理画像等認識技術の研究開発」プロジェクトにおける「1 粒子蛍光ナノイメージングによる超高精度がん組織診断技術」および「1 粒子蛍光ナノイメージングによる超高精度がん組織診断システムの研究開発」テーマにおける開発委員会及びテーマ別開発委員会における登録委員(平成 23 年 2 月 1 日~現在)
- 6) 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 23 年 12 月~現在)
- 7) 公益財団法人コニカミノルタ科学技術振興財団 コニカミノルタ画像科学奨励賞選考委員会委員(~現在)

原 武史 :

- 1) 岐阜県立岐山高等学校・サイエンスフォーラム「サイエンスレクチャー」講師(平成 23 年 12 月 13 日)

10. 報告書

- 1) 石橋忠司：厚生労働省がん研究助成金による「デジタルマンモグラフィによる乳がん検診の効率及び精度向上・評価に関する研究」(石橋忠司, 植松孝悦, 内山菜智子, 大貫幸二, 原 武史, 松本政雄, 他)(平成 21 年 3 月)
- 2) 石橋忠司：デジタルマンモグラフィによる乳がん検診の効率及び精度向上・評価に関する研究(石橋忠司, 大貫幸二, 植松孝悦, 松本政雄, 内山菜智子, 原 武史)：厚生労働省がん研究助成金による研究報告集(平成 20 年度)：240-243(平成 21 年 12 月)
- 3) 長谷川純一：デジタル画像処理によるがん診断支援システムの開発と利用に関する研究(長谷川純一, 仁木 登, 藤田廣志, 清水昭伸, 森 健策, 縄野 繁, 森 雅樹, 篠崎賢治, 村松幸男, 飯沼 元, 松迫正樹)：厚生労働省がん研究助成金による研究報告集(平成 20 年度)：379-385, 659-661(平成 21 年 12 月)
- 4) 藤田広志, 内山良一, 畑中裕司, 福岡大輔：知的クラスター創成事業(岐阜・大垣地域)「ロボティック先端医療クラスター」における画像診断支援システムの開発, 医用画像情報学会雑誌, 27 巻, 42-49(平成 22 年)
- 5) 医療機器評価指標ガイドライン 画像診断分野(コンピュータ診断支援装置)開発 WG 報告書. 平成 21 年度経済産業省委託事業 平成 21 年度戦略的技術開発委託費 医療機器開発ガイドライン策定事業(医療機器に関する開発ガイドライン作成のための支援事業), 独立行政法人 産業技術研究所(平成 22 年 3 月および平成 23 年 3 月)
- 6) 林 達郎, 陳 華岳, 宮本 敬, 周 向榮, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. X 線 CT 画像を用いた椎体の微細形態計測による新規骨折の予測能の調査(中間報告), 第 6 回(平成 22 年度)リリー研究助成成果報告, Osteoporosis Japan (日本骨粗鬆症学会雑誌), 19 巻, 97-102(平成 23 年 7 月)
- 7) 原 武史. 脳 X 線 CT 画像の標準化による救急医療のための脳画像解析システムに関する研究, 立石科学技術振興財団助成研究成果集, 第 20 号(平成 23 年 9 月)
- 8) 東 華岳, 久保金弥, 鷺見雄希, 林 達郎, 周 向榮, 藤田広志, 小野塚實. 腰椎の外部形状と内部構造の統合解析による骨粗鬆症の病態解明, Osteoporosis Japan, 平成 22 年度骨粗鬆症財団研究助成, 19 巻, 101(665)-104(668) (平成 23 年 11 月)

11. 報道

- 1) 藤田廣志：都市エリア研究成果発表会「モノづくり技術で未来の医療機器を」：岐阜新聞(2010 年 2 月 10 日)
- 2) 藤田廣志：「研究室から 大学はいま」画像診断の支援装置を開発：岐阜新聞(2011 年 4 月 5 日)

12. 自己評価

評価

科研費による基礎研究, 産官学による大型研究, および企業との産学共同による実用化研究を幅広く行っている。これらのすべてにおいて研究の進捗状況は, 外部評価の結果も高く, 総じて極めて順調である。今後もこのペースで, さらに医工連携を基調とした共同研究を進める計画であり, 医用画像情報処理分野における世界的レベルの学術研究の推進, およびその社会への還元而努力していきたい。学生の研究指導・教育面では, 年間 100 件を超す国内外の学会等における研究発表などによる育成過程を通じて, 高いレベルの教育・研究活動を行っており, 主な就職企業先からの評判も概して良好であり, 高く評価されている。

現状の問題点及びその対応策

現在, 本分野の教員 3 名が, 工学部応用情報学科に出向き, 多くの講義や実験を担当し, かつ卒業研究の指導(毎年学部 3 年次の秋から学生配属(毎年 7 名程度)が始まり, 4 年次卒業までの間の 1 年半の期間)を行っている。これらの学生が大学院進学時に再生医科学専攻の博士前期課程に入学し, 一部は後期課程にまで進学しているが, 他大学からの入学者数は極めて少ない現状である。今後は他大学にも広く広報を行い, 幅広く全国規模で優秀な学生の募集に務めたい。

問題点としては, 主に工学系からの多くの学生を受け入れているが(2011 年末で, 博士後期課程 4 名, 博士前期課程 14 名, 学部 4 年生 8 名, 学部 3 年生 7 名: 計 33 名), これらの学生の教育・研究には, 教員 4 名が中心となって行っているのが現状で, きめ細かな指導をするにはスタッフ不足は否めない状態である。また, 研究室として利用できる研究室・実験室の規模が工学部に比べて小さく, これらが改善さ

れることが望まれる。

医工学系あるいは医学系の国際会議における発表演題数は年間 30 件を超えており、展示等では複数の賞を毎年受賞しているが、これらの国際誌への論文文化が少し遅れている状況であり、改善に努める。

今後の展望

新学術領域研究、知的クラスタープロジェクト、都市エリアプロジェクト研究をはじめ、取り組んで来ている各種研究におけるコンピュータ支援診断 (CAD) システムの基礎開発、及びその実用化をさらに進展させる。また、現在は、放射線医学で取り扱われる診断用の画像領域を対象の中心として研究を進めているが、今後は、再生医科学関係の画像処理・解析・認識に関する研究テーマへのさらなる積極的な取り組みを検討する。教育面ではさらにきめ細かな指導体制を確立し、自主性、創造性、チャレンジ精神に富んだ学生の育成を目指す。

〔再生応用学講座〕

(1) 循環呼吸制御学分野

1. 研究の概要

1. 再生医学・再生医療

- 1) G-CSF(顆粒球コロニー刺激因子)を用いた狭心症, 心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する再生療法
- 2) Erythropoietinを用いた心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症, に対する再生療法の開発
- 3) Gelatin hydrogel sheet あるいは粒子の Drug Delivery System を用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞・心不全・閉塞性動脈硬化症に対する心臓組織再生あるいは血管再生療法の開発
- 4) ナノリポソームを用いた G-CSF と erythropoietin による心筋梗塞後心筋組織修復再生療法の開発, 下肢閉塞性動脈疾患に対する血管再生療法に関する研究
- 5) ホーミング分子で修飾された内皮前駆細胞あるいは筋芽細胞による心血管再生治療法の開発
- 6) 骨髄細胞移植ならびに G-CSF を用いた COPD 等の肺疾患に対する再生療法
- 7) LOX 遺伝子改変マウスを用いた下肢虚血モデルにおける LOX-1 の血管新生血における LOX の関与に関する研究
- 8) Erythropoietin を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究
- 9) Erythropoietin と gelatin hydrogel 粒子を用いた重症下肢閉塞性動脈硬化症に対する臨床研究
- 10) Erythropoietin を用いた COPD モデルマウスおよび培養肺胞上皮細胞に対する再生医学的研究
- 11) PDE-4 阻害薬を用いた COPD モデルマウスに対する有効性の検討

2. 遺伝子治療

- 1) 心不全に対する HGF, sFas, 可溶性 TGF- β II 型受容体, Decorin の遺伝子治療
- 2) 糖尿病性腎症に対する sFas, HGF 遺伝子治療

3. アポトーシス, オートファジー

- 1) 循環器疾患とアポトーシス
筋線維芽細胞のアポトーシスのブロックによる左室リモデリング予防
- 2) 腎疾患とアポトーシス
糖尿病性腎症の発症メカニズムにおけるアポトーシスの役割の解明
- 3) 呼吸器疾患とアポトーシス
COPD における FAS の役割の解明
- 4) 循環器疾患とオートファジー
心筋梗塞・心不全の際のオートファジーの病態生理解明と治療法の開発

4. 虚血心筋保護のメカニズム解明と new drug の開発

- 1) 抗糖尿病薬 miglitol, acarbose, voglibose など α -glucosidase 阻害薬, ピオグリタゾン, ナテグリニド, グリクラジドによる虚血心筋保護作用のメカニズム解明とその臨床応用
- 2) 抗高脂血症薬スタチンの pleiotropic effect としての虚血心筋保護作用のメカニズム解明
- 3) 各種心血管薬 (ARB, Ca 拮抗薬, 抗血小板薬, β 遮断薬) の虚血心筋保護作用のメカニズム解明

5. 心不全

- 1) 不全心筋における angiotensin II type 2 受容体の病態生理学的意義の解明
- 2) 心筋細胞変性の分子病理
- 3) アシアロエリスロポエチンの抗心不全作用の解明
- 4) LOX-1 遺伝子改変マウスを用いた左室圧負荷モデルでの LOX-1 の心筋肥大への関与に関する研究
- 5) LOX-1 遺伝子改変マウスを用いたドキシビシン誘導性心筋症による心不全に対する LOX-1 関与に関する研究
- 6) インスリン抵抗性改善薬, 食後高血糖改善薬の心不全に対する保護効果

6. 高血圧についての基礎的および臨床的研究

- 1) SHR において塩分負荷が心臓・腎臓組織レニン, プロレニンに与える影響に関する研究
- 2) 高血圧症患者におけるレニン, プロレニンの関与に関する研究
- 3) 家庭血圧測定の重要性和降圧薬の評価に関する臨床研究
DOHSAM 研究, GAIN 研究, GIFT 研究

7. 閉塞性動脈硬化症に対する治療法の開発

- 1) エリスロポエチン， G-CSF 注射による下肢閉塞性動脈疾患の治療
- 2) エリスロポエチン含浸ゲラチンハイドロゲル筋注による下肢閉塞性動脈疾患の治療

8. 肺癌治療法の開発

- 1) 肺がん患者における末梢リンパ球を用いた免疫治療および予後予測法の開発

2. 名簿

教授： 湊口信也 Shinya Minatoguchi
准教授： 竹村元三 Genzou Takemura

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

なし

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 竹村元三. 「循環器病理Ⅱ」3. 循環器疾患をめぐるカレントトピックス・アポトーシスとオートファジー, 病理と臨床 2011年; 29巻: 263-269.
- 2) 小室一成, 竹村元三, 森田啓行, 山岸正和. 「心筋症-発症原因から新しい治療法を考える」, CARDIAC PRACTICE 2011年; 22巻: 243-251.

総説 (欧文)

- 1) Takasugi N, Kubota T, nishigaki K, Verrier RL, Kawasaki M, Takasugi M, Ushikoshi H, Hattori A, Ojio S, Aoyama T, Takemura G, Minatoguchi S. QRS and T-Wave alternans in acute coronary syndrome: Do they provide complementary insights? *Europace*. 2011;13:908.
- 2) Takasugi N, Kubota T, nishigaki K, Verrier RL, Kawasaki M, Takasugi M, Ushikoshi H, Hattori A, Ojio S, Aoyama T, Takemura G, Minatoguchi S. Relationship between T-wave alternans magnitude and T-wave amplitude before the onset of ventricular tachyarrhythmias during emergent reperfusion in acute coronary syndrome patients. *Europace*. 2011;13:1511-1512.
- 3) Takasugi N, Kubota T, nishigaki K, Verrier RL, Kawasaki M, Takasugi M, Ushikoshi H, Hattori A, Ojio S, Aoyama T, Takemura G, Minatoguchi S. Should T-wave alternans magnitude be corrected with T-wave amplitude in the ultra-short-term prediction of life-threatening cardiac arrhythmias? *Europace*. 2011;13:1512-1513.

原著 (和文)

なし

原著 (欧文)

- 1) Onoue K, Zaima N, Sugiura Y, Isojima T, Okayama S, Horii M, Akai Y, Uemura S, Takemura G, Sakuraba H, Sakaguchi Y, Setou M, Saito Y. Using Imaging Mass Spectrometry to Accurately Diagnose Fabry's Disease. *Circ J*. 2011;75:221-223. IF 3.225
- 2) Kawamura I, Takemura G, Tsujimoto A, Watanabe T, Kanamori H, Esaki M, Kobayasu H, Takeyama T, Kawaguchi T, Goto K, Maruyama R, Fujiwara T, Fujiwara H, Tabata Y, Minatoguchi S. Treatment of leg ischemia with biodegradable gelatin hydrogel microspheres incorporating granulocyte colony-stimulating factor. *J Cardiovasc Pharmacol*. 2011;57:416-423. IF 2.406
- 3) Takasugi N, Kubota T, Nishigaki K, Verrier RL, Kawasaki M, Takasugi M, Ushikoshi H, Hattori A, Ojio S, Aoyama T, Takemura G, Minatoguchi S. Continuous T-wave alternans monitoring to predict impending life-threatening cardiac arrhythmias during emergent coronary reperfusion therapy in patients with acute coronary syndrome. *Europace*. 2011;13:708-715. IF 1.842
- 4) Iwasa M, Yamada Y, Kobayashi H, Yasuda S, Kawamura I, Sumi S, Shiraki T, Ushikoshi H, Hattori A, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Fujiwara H, Minatoguchi S. Both stimulation of GLP-1 receptors and inhibition of glycogenolysis additively contribute to a protective effect of oral miglitol against ischaemia-reperfusion injury in rabbits. *Br J Pharmacol*. 2011;164:119-131. IF 4.925
- 5) Kanamori H, Takemura G, Maruyama R, Goto K, Ono K, Nagao K, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Kawasaki M, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. Autophagy limits acute myocardial infarction induced by permanent coronary artery occlusion. *Am J Physiol Heart Circ Physiol*. 2011;300:2261-2271. IF 3.881
- 6) Kanamori H, Takemura G, Goto K, Maruyama R, Tsujimoto A, Ogino A, Takeyama T, Kawaguchi T, Watanabe T, Fujiwara T, Fujiwara H, Seishima M, Minatoguchi S. The role of autophagy emerging in

- posinfarction cardiac remodeling. *Cardiovasc Res.* 2011;91:330-339. IF 6.051
- 7) Yoshida M, Ohkusa T, Nakashima T, Takanari H, Yano M, Takemura G, Honjo H, Kodama I, Mizukami Y, Matsuzaki M. Alterations in adhesion junction precede gap junction remodeling during the development of heart failure in cardiomyopathic hamster. *Cardiovasc Res.* 2011;92:95-105. IF 6.051
- 8) Bai Y, Muqier, Murakami H, Iwasa M, Sumi S, Yamada Y, Ushikoshi H, Aoyama T, Nishigaki K, Takemura G, Uno B, Minatoguchi S. Cilostazol protects the heart against ischaemia reperfusion injury in a rabbit model of myocardial infarction: Focus on adenosine, nitric oxide and mitochondrial KATP channels. *Clin Exp Pharmacol Physiol.* 2011;38:658-665. IF 1.960
- 9) Kawashima T, Inuzuka Y, Okada J, Kato T, Niizuma S, Tamaki Y, Iwanaga Y, Kawamoto A, Narazaki M, Matsuda T, Adachi S, Takemura G, Kita T, Kimura T, Shioi T. Constitutive SIRT1 overexpression impairs mitochondria and reduces cardiac function in mice. *J Mol Cell Cardiol.* 2011;51:1026-1036. IF 5.499

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

- 1) 竹村元三：リプレガル特定使用成績調査(長期使用に関する調査)；平成23年度；63千円；大日本住友製薬(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

竹村元三：

- 1) 日本循環器学会評議員(～現在)
- 2) 日本循環器学会東海支部評議員(～現在)
- 3) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 4) 日本心不全学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)
- 6) 心筋生検研究会幹事(～現在)
- 7) アメリカ心臓病学会 Fellow(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

竹村元三：

- 1) 第4回 Cardio-Lipidology(平成23年2月，名古屋，教育講演「心筋細胞オートファジー」演者)
- 2) The 2nd Meeting of Molecular Cardiology Seminar 23-MCS23-(平成23年7月，千葉，特別講演「心臓の細胞死と変性」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

各分野での研究が順調に進行し、一流のジャーナルに出版され、国際学会での発表も多かった。2011年は英文論数9でインパクトファクターの合計35.836であった。

現状の問題点及びその対応策

多数の大学院生や研究者を抱え、デスクやスペースを確保することに困難している。また臨床、教育、研究のいずれにも時間を費やすため、研究に十分な時間があるとは言い難い。

今後の展望

高齢化ならびに生活様式の欧米化に伴い、循環器疾患、呼吸器疾患、腎臓疾患は増加の一途を辿っている。それぞれの病気のメカニズムを動物実験、臨床研究を通じて解明し、治療に応用していくことが重要である。今後、循環器疾患、呼吸器疾患、腎臓疾患の分野において細胞死ならびに細胞変性（アポトーシス、オートファジー等）、細胞を再生する再生医学などがますます重要な研究テーマとなることが予想される。従って我々はこの点を十分認識し、細胞生物学的手法を駆使し新しいデバイスを導入して、さらに活発な研究活動を行っていかなくてはならないと考える。

(2) 医学系倫理・社会医学分野

1. 研究の概要

当分野では、再生医科学を含む医学全般に関する倫理的諸問題について継続して研究してきた。生命科学・医療・看護の各領域に著作等を通じて情報発信を行い、さらに大学院および学部教育においても最新の生命倫理に関するトピックを講義し、教育活動に努めてきた。

本点検・評価報告に係る当該年度の研究の概要としては、先ず、医事法領域に関する研究として、終末期医療に関する問題を取り上げた。最高裁判決が下された「川崎協同病院事件」を事例に安楽死・尊厳死や治療の中止・差控えの問題を考察した。次に、医療政策領域に関する研究として、がん診療連携拠点病院制度に関する問題を考察した。がん診療連携拠点病院の施設長に質問用紙を送付し、臨床現場の状況とがん医療政策に必要な政策的課題を把握するべく検討を行った。当該研究については、財団法人がん集学的治療研究財団研究助成金（平成20・21年度；1,000千円）を受けた。続いて、医療社会学・生命倫理学の理論に関する研究として、医療を共有地とみなすコモンズ理論に着目し、医療提供の在り方や意思決定判断の在り方を検討する研究を行った。当該研究については、科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（平成21・22年度；600千円）の助成を受けて実施した。大別して3の領域に分けて実施したが、一貫して倫理的・法的・社会的問題（ELSI: ethical, legal and social issues）の視点に立って研究を進めることができた。今後も継続して研究活動を行っていく。

2. 名簿

教授： 塚田敬義 Yukiyoshi Tsukata
助教： 谷口泰弘 Yasuhiro Taniguchi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 塚田敬義. アメリカ大統領委員会, 違法性阻却事由, コントラクト・アウト, コントラクト・イン, 臓器移植法, 脳死体, 脳死臨調: 酒井明夫, 中里 巧, 藤尾 均, 森下直貴, 盛永審一郎編集. 生命倫理事典(新版増補), 東京: 太陽出版; 2010年: 14, 76, 340, 341, 599-600, 722, 723.
- 2) 塚田敬義. 臓器移植と倫理委員会: 町野 朔, 山本輝之, 辰井聡子編. 移植医療のこれから 第1版, 東京: 信山社; 2011年: 105-120.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 塚田敬義. 新しい次元に入る臨床研究-臨床研究に関する倫理指針の改正を受けて, 医学のあゆみ 2009年; 228巻: 787-788.
- 2) 塚田敬義, 谷口泰弘. がん集学的治療体制の整備と拡充に関する研究-生命倫理・社会医学の視点から-, がん治療のあゆみ 2010年; 29巻: 13-19.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 谷口泰弘. コモンズとしての医療制度の必要性, 社会医療研究 2009年; 7巻: 5-12.
- 2) 谷口泰弘. バイオエシックスにおける公共政策の視座の必要性-ELSIプロジェクトの展開から-, 岐阜大学医学部紀要 2010年; 56巻: 9-15.
- 3) 谷口泰弘. PBL教育システムを導入した生命倫理教育の実践, 社会医療研究 2010年; 8巻: 15-24.
- 4) 谷口泰弘. がん医療の均てん化に係る政策支援に関する研究-がん診療連携拠点病院の課題から-, 社会医療研究 2011年; 9巻: 3-11.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 谷口泰弘; 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究: 医療におけるコモンズ理論を応用した解決モデルの構築に向けた研究; 平成21-22年度; 600千円(300:300千円)

- 2) 研究代表者：塚田敬義, 研究分担者：谷口泰弘；財団法人がん集学的治療研究財団研究助成金：がん集学的治療体制の整備と拡充に関する研究－生命倫理・社会医学の視点から－；平成 20－21 年度；1,000 千円(1,000：0 千円)
- 3) 研究代表者：谷口泰弘；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：がん集学的治療体制の構築からみるコモンズ理論の発展と応用に関する研究；平成 23－24 年度；520 千円(260：260 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

塚田敬義：

- 1) 日本社会医療学会理事(～現在)
- 2) 日本再生医療学会評議員(～現在)
- 3) 日本移植学会評議員(～現在)
- 4) 日本生命倫理学会評議員(～現在)
- 5) 日本 DNA 多型学会評議員(～平成 23 年 12 月 1 日)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

塚田敬義：

- 1) 再生医療－日本再生医療学会誌；編集同人(～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

塚田敬義：

- 1) GAM 生涯教育研修会(平成 21 年 7 月，岐阜，講演「医の倫理」演者)
- 2) 平成 21 年度岐阜県ソーシャルワーカー協会研修会(平成 21 年 9 月，岐阜，講演「臓器移植法案可決までの経緯」演者)
- 3) 日本社会医療学会第 10 回記念学術大会(平成 21 年 11 月，延岡，シンポジウム「地方の医療・福祉をどう立て直すか」コーディネーター)
- 4) 平成 22 年度京都府立医科大学人権研修会(平成 22 年 1 月・2 月，京都，講演「医学・医療をめぐる人権を再考する」演者)
- 5) 鹿児島大学歯学総合研究科ヒト ES 細胞の取扱いにかかる講習会(平成 22 年 1 月・10 月，鹿児島，講演「ヒト ES 細胞の取扱いにかかる倫理的事項」演者)
- 6) 第 46 回日本腹部救急医学会総会(平成 22 年 3 月，富山，教育講演「日本の腹部救急医学に求められる医学研究の視点」演者)
- 7) 日本生命倫理学会第 22 回年次大会(平成 22 年 11 月，愛知，大会企画シンポジウム「終末期の意思決定」座長)
- 8) 平成 22 年度千葉労災病院倫理講演会(平成 22 年 12 月，千葉，講演「医療をめぐる人権についての新動向」演者)
- 9) 第 43 回医学系大学倫理委員会連絡会議(平成 22 年 12 月，群馬，シンポジウム「医療倫理学教育の再検討」(重層化カリキュラムでの取り組みについて)演者)
- 10) 第 14 回中部出生前医療研究会(平成 23 年 3 月，名古屋，特別講演「出生前医療と生命倫理」演者)
- 11) 岐阜医療科学大学臨床研究等に関する倫理研修会(平成 23 年 3 月，岐阜，講演「臨床研究等に関する倫理について」演者)

- 12) 鹿児島大学医歯学総合研究科ヒト ES 細胞の取扱いにかかる講習会(平成 23 年 9 月, 鹿児島, 講演「ヒト ES 細胞の取扱いにかかる倫理的事項－指針の改正を受けて－」 演者)

谷口泰弘 :

- 1) 平成 23 年度岐阜大学出前講義(平成 23 年 9 月, 岐阜, 講演「ライフサイエンスと生命倫理の交差点」 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

塚田敬義 :

- 1) 日本遺伝子診療学会倫理問題委員会委員(～現在)
- 2) 日本移植学会倫理委員会委員(～現在)
- 3) 日本膝・膝蓋移植研究会世話人・倫理委員会委員(～現在)
- 4) 近畿膝移植検討会世話人(～現在)
- 5) 京都大学再生医科学研究所医の倫理委員会委員(～平成 22 年 12 月 31 日)
- 6) 財団法人柔道整復研修試験財団国家試験委員(～平成 22 年 5 月 31 日)
- 7) 財団法人がん集学的治療研究財団評議員・倫理委員会委員長(～現在)
- 8) 滋賀医科大学動物生命科学研究倫理委員会委員(～現在)
- 9) 独立行政法人産業技術総合研究所医工学応用実験倫理委員会副委員長(～現在)
- 10) 岐阜県保健所等倫理審査委員会委員長(～現在)
- 11) 日本法医学会医の倫理審査委員会委員(～現在)
- 12) 東洋療法研修試験財団第 8 期あん摩マッサージ指圧師, はり師及びきゅう師試験委員(～現在)
- 13) 日本 DNA 多型学会倫理審査委員会委員長(～平成 23 年 12 月 1 日)
- 14) 岐阜県医師会治験審査委員会委員(～現在)
- 15) 岐阜東洋医学研究会世話人(～現在)
- 16) 日本手の外科学会倫理委員会アドバイザー(～現在)
- 17) 社団法人日本整形外科学会脊椎内視鏡下手術・技術認定制度委員会アドバイザー(～現在)
- 18) 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科ヒト ES 細胞研究倫理委員会委員(平成 21 年 11 月～現在)
- 19) 京都大学再生医科学研究所物質・細胞統合システム拠点及び iPS 細胞研究所合同医の倫理委員会委員(平成 23 年 1 月～現在)
- 20) 日本医学教育学会医学教育のあり方特別委員会倫理委員会委員(平成 23 年 3 月～現在)
- 21) 医学系大学倫理委員会連絡会議－あり方検討委員会委員(平成 23 年 3 月 1 日～現在)

10. 報告書

- 1) 塚田敬義 : 「臓器移植と倫理委員会－日本を中心にして－」 臓器移植法の研究 : 平成 21 年度厚生労働省科学研究費補助金[免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業] 総括・分担報告書(町野班) : 303－355(平成 22 年 3 月)
- 2) 谷口泰弘 : 医療におけるcommons理論を応用した解決モデルの構築に向けた研究 : 平成 21－22 年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究報告書(総括) : 1(平成 23 年 3 月)

11. 報道

- 1) 塚田敬義 : 遠隔医療ガイドライン策定－倫理的, 社会的認識の統一が必要 : Medical Tribune(2009 年 1 月 1 日)

12. 自己評価

評価

研究概要に示したとおり, 当分野で掲げた目標に向かって分野スタッフ各自が研究テーマ毎に継続して研究活動に取り組むことができた。学問的背景から共同研究形式で進める機会が少ないため, 著作数は少ないが, 継続して活字媒体で発信できるように当該分野として心掛けている。2 人という少ないマンパワーながら, 当該領域としては大きな競争的外部資金を獲得して成果物にまとめたこと, さらに科学研究費補助金を 2 件獲得できたことは, 現状に満足するわけではないがある程度達成できていると自己

点検・評価する。

現状の問題点及びその対応策

当分野が行う研究は、分野スタッフの専門領域を反映して人文社会科学の視点から生命倫理に係る諸問題にアプローチしている。所属研究機関が医学系研究科ということもあり、直接的に研究面で他の領域に関わることは困難なことから研究機関内での発信力は強くはないと言える。しかし、医学研究における生命倫理の視点は社会一般からも重要課題として挙げられていることから、間接的ではあるが何らかの形でコミュニケーションを図って情報発信をしていく必要がある。その対策として、倫理講習会の開催や、大学院講義・学部教育において常に新しい知識情報を提供できるように配慮している。

今後の展望

ライフサイエンスの進展はめざましい。生命倫理領域の学問的進歩もその流れに遅れることのないように、しっかりと研鑽を積んでいきたい。そして新しく得られた知見を所属機関や社会一般に還元できるように継続して研究と大学院・学部教育に取り組んでいく。そのためにも、学会活動や倫理委員会などの社会活動、さらに講演や出前講義などを継続的かつ精力的に取り組んでいく所存である。それが社会的責任を果たすこと、つまり貢献につながると考えている。

7. 学位の授与状況と研究成果

再生医科学専攻において過去5年間に博士(再生医科学)の学位を授与した数は、次表のとおりである。

区分	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
課程博士	11	12	8	3	6
論文博士	0	1	0	0	1

8. 学生生活支援

(1) 奨学金の申請・採択状況

○日本学生支援機構奨学生出願・採用状況

年 度	課 程	第1種		第2種	
		出願者数	採用者数	出願者数	採用者数
平成18年度	博士前期	5	5	2	2
	博士後期	1	1	0	0
平成19年度	博士前期	7	7	2	2
	博士後期	1	1	0	0
平成20年度	博士前期	1	1	0	0
	博士後期	0	0	0	0
平成21年度	博士前期	2	2	0	0
	博士後期	1	1	1	1
平成22年度	博士前期	6	6	4	4
	博士後期	2	2	0	0
平成23年度	博士前期	4	4	0	0
	博士後期	1	1	0	0

(2) 授業料免除実施状況

年 度	課 程	在籍者数	前学期			後学期		
			申請	免除		申請	免除	
				全額	半額		全額	半額
平成18年度	博士前期	41	9	0	5	7	0	6
	博士後期	52	10	1	8	8	0	8
平成19年度	博士前期	34	8	4	4	8	4	4
	博士後期	53	9	7	2	8	7	1
平成20年度	博士前期	31	6	0	6	6	0	6
	博士後期	55	9	4	3	8	4	4
平成21年度	博士前期	25	1	0	0	0	0	0
	博士後期	46	9	3	6	10	3	7
平成22年度	博士前期	28	2	0	2	2	0	2
	博士後期	51	9	3	6	8	3	4
平成23年度	博士前期	27	6	1	3	4	1	3
	博士後期	22	9	5	2	7	4	2

9. 自己評価・課題と展望

① 教員組織の強化と自己評価の徹底

平成16年6月に新築された医学部・附属病院への移転に伴い、再生医科学専攻の全教員が同一フロアに集まり、密接な協力が実施可能な態勢もできた。一方、医学系研究科における教員数の絶対的不足は深刻であり、教員数の増員が必要である。

また、自己点検を基礎としつつ、修了生の活動状況等の検証を行い、再生医科学専攻としての自己点検・評価を行わねばならない。

② 研究機能の充実

課題と解決方策については以下のとおりである。

- 1) 若手教員の育成：若手教員が先見性をもってユニークな研究に取り組む体制を作る。そのため、国内並びに国外の研究機関と共同研究を行い、かつ積極的に人事の交流を行う。
- 2) 大学院学生の研究機能の充実：再生医科学専攻の研究機能はかなり充実してきており、国際的一流誌への投稿を目指す。
- 3) 研究費の充実、大型設備の整備：現在も文部科学省、厚生労働省等から大型研究費を得ている教員もいるが、より一層の獲得を目指し、大型設備等の充実を図る。平成 23 年度には先端医療セルプロセッシングセンター及び微生物遺伝資源保存センターを設置した。

また、学部長裁量経費により共通機器センターが設置され、導入された大型機器が再生医科学及び医科学専攻を問わず多くの研究者や大学院生によって活用されている。

③ 教育機能の充実

大学院教育はグローバル化の時代にあわせた人材教育が必要になっている。インターネット・ホームページを介した新しい 21 世紀的大学院教育の開発と充実を行う一方、国際的な研究者との交流だけでなく、在学期間中に国際会議への参加を支援し、かつ義務化させるために、下記のような具体的な教育体制の改革を進めている。

- 1) 英語による専門家の講演を聴講させる機会を増やし、履修単位として取り組む。
病原体制御，神経生物，組織・器官発生，遺伝情報創薬，医用情報処理の各分野でコースの専門教育の 2・3 回を英語による講義を組みこみ，全員が聴講するシステムを構築する。
- 2) 大学院修了までに国際学会での発表を推進し，かつ旅費の一部を支援する体制を構築する。

[医学系研究科看護学専攻]

1. 教育の理念、目標

看護学専攻では、近年の医療への社会的要請が多様化するなかで、専門性が高く質のよいサービスを提供するために、高い倫理観や科学的思考力を育てるとともに、学際的視野を広げ、看護学と看護実践場面での課題を自発的に・具体的に研究し、質の高い看護の実践能力を有する看護専門職業人を育成することを目的としている。

教育目標としては、次の4項目を掲げている。

- 1) 看護学教育及び実践看護学に関する問題を研究課題とし、看護研究を継続していける基礎的研究能力をもった人材を育成する。
- 2) あらゆる人々の健康と福祉の充実を目指した実践科学としての看護学を探究し、高度な看護実践能力を有する人材を育成する。
- 3) 看護学における理論と応用を教育・研究し、看護学分野における教育者として活躍できる人材を育成する。
- 4) 看護専門職としてリーダー的役割を担い、保健医療福祉の変化に対し変革的に行動する指導者となりうる人材を育成する。

2. 看護学専攻の構成

看護学専攻の教育理念のもとに、看護学専攻には「看護学教育」と「実践看護学」の2領域を設け、看護学教育領域には継続看護学教育分野を、実践看護学領域には母子看護学分野、成人看護学分野、地域健康援助学分野の3分野を設けている。

(1) 看護学教育領域

看護学教育領域では、質の高い看護実践者が求められている中で、看護専門職の育成における教育理論と方法を探求し、高度な教育実践能力を育成するために必要な知識、技術、態度の探求を中心とした教育・研究を行う。

本領域では看護学教育分野を置き、望ましい看護基礎教育、看護技術教育及び継続教育のあり方を探求する。

(2) 実践看護学領域

実践看護学領域では、生殖医療や高次救命治療の高度先進医療が進む中で、患者主体の医療・看護とは何かを考察しながら、エビデンスに基づいた質の高い看護援助論について探求する。また、地域の人々に対する保健活動や在宅療養者とその家族を対象とした、広領域な看護分野における看護援助論について探求する。

本領域では、母子看護学分野、成人看護学分野、地域健康援助学分野の3分野を置き、様々な環境にある患者やその家族に対する看護援助、地域や職場の人々のヘルスケア等について探求する。

3. 学生定員と入学状況

看護学専攻の入学定員、収容定員及び過去5年間の入学状況は、次表のとおりである。平成22年度より1名ではあるが定員割れが続いており、今後もこの現象が続くことが予想され、学生確保の対応が急務である。

看護学専攻の入学定員と収容定員

研究科	専攻	課程	入学定員	収容定員
医学系研究科	看護学専攻	修士課程	8	16

看護学専攻の入学状況

年 度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
入 学 定 員	8	8	8	8
志 願 者 数	19	16	10	8
受 験 者 数	18	16	10	8
合 格 者 数	12	11	8	7
入 学 者 数	12	11	7	7

4. カリキュラムの編成方針

看護学専攻(修士課程)の教育課程は、生涯を通じ専門職業人として看護学への追究心や創造性、応用性を重視した看護活動ができるように、臨地実践能力をもった看護職及び基礎的研究能力をもった看護職、看護教育能力をもった看護職を育成することを目指して編成されている。

授業科目は、共通科目と専門科目から成り、学生が主体的に看護活動の実践・教育に必要な基礎的能力を体得していくために必要な科目が修得できるように科目設定を行っている。

共通科目は、看護専門領域研究の基礎となる科目として、看護学研究方法論、看護理論の2科目を必修として設定し、さらに看護学の基本となる科目として生命倫理・医療倫理学、医療・福祉の経済論、看護マネジメント論など12科目を選択として設定している。専門科目は看護学教育、実践看護学の各領域の専門にかかわる理論・研究・実践の諸概念に関する科目として特論、特別演習、特別研究を設定している。

また、実践活動に携わっている看護職が、専門職業人として生涯にわたり看護学への追究ができるように、昼夜開講制を実施し、長期履修にも対応できるようにカリキュラム編成を行い、多様な人材育成の目的に対応している。

(1) 履修基準

本専攻における授業科目は必修科目及び選択科目としており、修了に必要な単位数は、30単位以上となっている。

また、共通科目、専門科目の最低履修単位数は次表のように規定されている。

課程修了に必要な単位数

科 目 区 分		最低履修単位数	備 考
共 通 科 目		12 単位	必修科目 4 単位 選択科目 8 単位以上
専 門 科 目	専攻する分野の 開 講 科 目	14 単位	専門分野の必修科目 12 単位 選択科目 2 単位以上
	自 由 選 択 科 目	4 単位	専攻する分野を問わず、4 単位以上 ただし、特別演習及び特別研究 I・II を除く
合 計		30 単位	

(2) 教育研究分野、指導教員

看護学専攻における各領域別の教育研究分野、指導教員、主な研究内容は次表のとおりである。

研究指導教員及び研究内容

平成 21 年度

分 野	氏 名	指 導 内 容
継続看護学教育	滝 内 隆 子	看護基礎教育及び看護継続教育における教育プログラムの開発研究を行う。また、看護技術教育について理解し、看護専門職の看護実践能力育成に対する効果的な技術教育の方法について開発・研究を行う。
	塚 原 節 子	看護職者の離職問題に焦点を当て、離職原因の追求、離職防止のための現任教育のあり方、離職防止に向けての、大学における看護教育のあり方等に関する研究を行う。

分野	氏名	指導内容
継続看護学教育	小松 妙子	看護学教育・看護活動において、より安全で根拠に基づいた看護技術を修得・実践できるよう、安全性や根拠に課題のある看護技術の適切な教育内容・方法に関する研究を行う。
	江村 正一	主に看護教育機関の教員を対象に生体の構造と機能との関係を、電子顕微鏡を使用したミクロの世界に関する研究指導を行う。
	武藤 吉徳	細胞分裂や細胞周期制御タンパク質の遺伝子レベルでの機能解析を行い、各種遺伝子病との関連を考察するための研究指導を行う。また、これらの研究の手順や成果を、看護の基礎領域の教育に資するための指導を行う。
母子看護学	杉浦 太一	新生児から思春期までの子どもと家族を対象に、主に慢性的な健康障害をもつまたは健康障害の可能性の高い子どもとその家族がより良い生活を送るための看護援助に関する研究指導を行う。
成人看護学	松田 好美	救急看護、手術療法や集学的治療を受ける癌患者とその家族を対象とした看護、及びクリティカルケアに関する研究指導を行う。
	西本 裕	スポーツ看護の役割と機能に関する研究、特に障害者スポーツにおける医療上の問題を対象とした研究を指導する。
	足立 久子	慢性病をもつ者や自己管理を継続しなければならない患者を対象に、看護師として求められる望ましいケアのあり方などをテーマにした研究の指導を行う。
地域健康援助学	後閑 容子	地域看護における保健師の活動に関する研究、特に市町村及び保健所における保健師の役割と機能、保健活動のあり方に関する研究を行う。また、訪問看護師の機能、リスクマネジメントに関する研究指導を行う。
	牧野 茂徳	作業関連疾患(高血圧症、虚血性心疾患、脳血管疾患、高脂血症、糖尿病、ストレス関連疾患等)の予防、職業性疾患の予防、健康の保持推進に関する課題について研究指導を行う。
	石原 多佳子	地域に住む高齢者の保健、福祉領域における地域看護活動に関する研究、特に高齢者やその家族を対象とした研究指導を行う。
	奥村 太志	メンタルヘルス、精神保健医療の領域において看護職として適切なケアを提供するための基礎となる研究指導を行う。
	箕浦 とき子	地域で生活する元気な高齢者、入院や通院を余儀なくされている高齢者、あるいは認知症および認知機能に問題がある高齢者など、様々な状況にある高齢者およびその家族への看護活動に関して研究指導を行う。

平成 22 年度

分野	専門分野	氏名	指導内容
継続看護学教育	看護学教育	滝内 隆子	看護基礎教育及び看護継続教育における教育プログラムの開発研究を行う。また、看護技術教育について理解し、看護専門職の看護実践能力育成に対する効果的な技術教育の方法について開発・研究を行う。
		塚原 節子	看護職者の離職問題に焦点を当て、離職原因の追求、離職防止のための現任教育のあり方、離職防止に向けての、大学における看護教育のあり方等に関する研究を行う。

分野	専門分野	氏名	指導内容
継続看護学教育	看護学教育	小松 妙子	看護学教育・看護活動において、より安全で根拠に基づいた看護技術を修得・実践できるよう、安全性や根拠に課題のある看護技術の適切な教育内容・方法に関する研究を行う。
	生体システム学	江村 正一	主に看護教育機関の教員を対象に生体の構造と機能との関係について、電子顕微鏡を使用したミクロの世界に関する研究指導を行う。
		武藤 吉徳	細胞分裂や細胞周期制御タンパク質の遺伝子レベルでの機能解析を行い、各種遺伝子病との関連を考察するための研究指導を行う。また、これらの研究の手順や成果を、看護の基礎領域の教育に資するための指導を行う。
母子看護学	母性看護学	大原 良子	周産期周辺的女性・家族への看護援助、リプロダクティブヘルスや助産師教育に関する研究を行う。
	小児看護学	杉浦 太一	新生児から思春期までの子どもと家族を対象に、主に慢性的な健康障害をもつまたは健康障害の可能性の高い子どもとその家族がより良い生活を送るための看護援助に関する研究指導を行う。
成人看護学	成人急性期看護学	松田 好美	救急看護、手術療法や集学的治療を受ける癌患者とその家族を対象とした看護、及びクリティカルケアに関する研究指導を行う。
		西本 裕	スポーツ看護の役割と機能に関する研究、特に障害者スポーツにおける医療上の問題を対象とした研究を指導する。
	成人慢性期看護学	足立 久子	慢性病をもつ者や自己管理を継続しなければならない患者を対象に、看護師として求められる望ましいケアのあり方などをテーマにした研究の指導を行う。
地域健康援助学	地域看護学	後閑 容子	地域看護における保健師の活動に関する研究、特に市町村及び保健所における保健師の役割と機能、保健活動のあり方に関する研究を行う。また、訪問看護師の機能、リスクマネジメントに関する研究指導を行う。
		牧野 茂徳	作業関連疾患(高血圧症、虚血性心疾患、脳血管疾患、高脂血症、糖尿病、ストレス関連疾患等)の予防、職業性疾患の予防、健康の保持推進に関する課題について研究指導を行う。
		石原 多佳子	地域に住む高齢者の保健、福祉領域における地域看護活動に関する研究、特に高齢者やその家族を対象とした研究指導を行う。
	精神看護学	奥村 太志	メンタルヘルス、精神保健医療の領域において看護職として適切なケアを提供するための基礎となる研究指導を行う。
		杉浦 浩子	メンタルヘルスの諸問題やそれらに対する看護介入に関して、コミュニケーションや対人関係の視点から課題を捉えて、研究指導を行う。
	老年看護学	箕浦 とき子	地域で生活する元気な高齢者、入院や通院を余儀なくされている高齢者、あるいは認知症および認知機能に問題がある高齢者など、様々な状況にある高齢者およびその家族への看護活動に関して研究指導を行う。
		松波 美紀	高齢者とその家族の健康、心、生活のあり方について理解し、看護職に求められているケアに関する研究指導を行う。

平成 23 年度

分野	専門分野	氏名	指導内容
継続看護学教育	看護学教育	滝内 隆子	看護基礎教育及び看護継続教育における教育プログラムの開発研究を行う。また、看護技術教育について理解し、看護専門職の看護実践能力育成に対する効果的な技術教育の方法について開発・研究を行う。
		小松 妙子	看護学教育・看護活動において、より安全で根拠に基づいた看護技術を修得・実践できるよう、安全性や根拠に課題のある看護技術の適切な教育内容・方法に関する研究を行う。
	生体システム学	江村 正一	主に看護教育機関の教員を対象に生体の構造と機能との関係について、電子顕微鏡を使用したミクロの世界に関する研究指導を行う。
		武藤 吉徳	細胞分裂や細胞周期制御タンパク質の機能解析や、バイオインフォマティクス (Bioinformatics) による分子進化の解析などについて研究指導を行う。
母子看護学	母性看護学	大原 良子	周産期周辺的女性・家族への看護援助、リプロダクティブヘルスや助産師教育に関する研究を行う。
	小児看護学	杉浦 太一	新生児から思春期までの子どもと家族を対象に、主に慢性的な健康障害をもつまたは健康障害の可能性の高い子どもとその家族がより良い生活を送るための看護援助に関する研究指導を行う。
成人看護学	急性期看護学	松田 好美	救急看護、手術療法や集学的治療を受ける癌患者とその家族を対象とした看護、及びクリティカルケアに関する研究指導を行う。
		西本 裕	スポーツ看護の役割と機能に関する研究、特に障害者スポーツにおける医療上の問題を対象とした研究を指導する。
	慢性期看護学	足立 久子	慢性病をもつ者や自己管理を継続しなければならない患者を対象に、看護師として求められる望ましいケアのあり方などをテーマにした研究の指導を行う。
地域健康援助学	地域看護学	後閑 容子	地域看護における保健師の活動に関する研究、特に市町村及び保健所における保健師の役割と機能、保健活動のあり方に関する研究を行う。また、訪問看護師の機能、リスクマネジメントに関する研究指導を行う。
		石原 多佳子	地域に住む高齢者の保健、福祉領域における地域看護活動に関する研究、特に高齢者やその家族を対象とした研究指導を行う。
	精神看護学	奥村 太志	メンタルヘルス、精神保健医療の領域において看護職として適切なケアを提供するための基礎となる研究指導を行う。
		杉浦 浩子	メンタルヘルスの諸問題やそれらに対する看護介入に関して、コミュニケーションや対人関係の視点から課題を捉えて、研究指導を行う。
	老年看護学	松波 美紀	高齢者とその家族の健康、心、生活のあり方について理解し、看護職に求められているケアに関する研究指導を行う。

5. 教育活動

(1) 教育活動の実施内容と方法

看護学専攻では、実践科学としての看護学を探究する高い能力とともに、全人的医療を担い得る豊かな感性と人間性を備えた高度な臨地実践能力をもった看護職及び、看護教育能力をもった看護職を育成することを目指して次のような教育活動を行っている。

① 看護学教育領域においては、看護専門職の育成における教育理論と方法を探究し、高度な教育実践能

力を育成するために必要な知識、技術、態度の探求を中心とした教育・研究を行い、望ましい看護基礎教育、看護技術教育及び継続教育のあり方を探求している。

- ② 実践看護学領域においては、患者主体の医療・看護とは何かを考察しながら、エビデンスに基づいた質の高い看護援助論について探求している。また、地域の人々に対する保健活動や在宅療養者とその家族を対象とした、広領域な看護分野における看護援助論について探求し、様々な環境にある患者やその家族に対する看護援助、地域や職場の人々のヘルスケア等について探求している。
- ③ 教育方法は、各看護学分野の内容を深め、幅広い知識を修得させるために、専任教員及び非常勤講師によるオムニバス形式を多く採用し講義を実施している。また、講義で修得した知識をもとに、応用・展開・評価し得る高度な専門職業人を育成するために、学内及び地域社会、臨床の場で演習を行い、専門技術や態度を教授している。
- ④ 入学後にオリエンテーションを実施し、カリキュラムの概要、履修などの諸手続、学生生活、学生保険、健康診断、各種相談窓口、図書館等について説明し、学習への動機づけを図り、履修指導を行っている。併せて各専門領域の教員紹介を行い研究内容について説明している。また、特別研究指導は、原則として学生が選択した該当研究分野担当の教授等が行うが、より効果的な研究指導ができるように学生と面接の上、指導教員を決定している。
- ⑤ 大学院学生がより質の高い修士論文を作成するために、「研究構想発表会」として年に2回、研究計画を発表する場を設けている。その後に「看護学専攻修士論文倫理審査小委員会」において研究倫理の視点から審査を行い、研究計画書の質をより一層高め、研究に取り組めるように助言・指導を行っている。
- ⑥ 社会人学生の修学を可能にするために長期履修学生制度を導入している。希望する者には、長期履修申請書及び長期履修計画書を提出させ、各分野において面接等により長期履修を希望する理由を聞き指導している。その後看護学専攻学務委員会・看護学専攻教授会議の審議を経て、許可している。
現在、長期履修の許可を受けている大学院学生の人数は、次表のとおりである。

長期履修制度の申請者数及び許可者数

	申請者数	許可者数	備 考
平成 21 年度入学生	11	11	看護師 3, 保健師 2, 大学教員 2, 短期大学教員 1, 専門学校教員 3
平成 22 年度入学生	7	7	看護師 3, 保健師 2, 専門学校教員 2
平成 23 年度入学生	6	6	看護師 2, 保健師 2, 准看護師養成所教員 1, 訪問看護 (管理者) 1

6. 学位の授与状況と研究成果

看護学専攻における学位の授与は、本研究科に2年以上(標準)在学し、修士論文を作成・提出し、審査に合格した学生に修士(看護学)の学位を授与することになっている。22年度までに、32名に対し学位を授与した。

区 分	20 年度	21 年度	22 年度	備 考
修士(看護学)	3 (2)	8 (5)	8 (6)	()は長期履修学生を内数で示す。

7. 学生生活支援

(1) 奨学金の申請・採択状況

ほとんどの学生が社会人ということもあり、申請はなかった。

(2) 授業料免除実施状況

ほとんどの学生が社会人ということもあり、申請件数は少ないが、22年度に2名申請し、1名採択された。

(3) 学生の保険加入

日本看護学校共済会の看護学校総合補償制度に、各学生が任意で加入している。研究や授業で、賠償責任を負うようなことが考えられる場合は、加入を勧めている。

8. 自己評価・課題と展望

看護を含めた医療技術の発展に伴って、より高度な看護の知識や技術が求められている現在、実践科学としての看護学を探究する高い能力を有する看護専門職業人の育成が急務である。しかしながら、これまで看護学専攻への入学者のほとんどが、短期大学、専修学校、各種学校等の卒業生で、本研究科において個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同程度の学力があると認められた者である。こうした人たちへの再教育の場としての必要性もあるが、看護系4年制大学を卒業と同時に大学院に入学し、さらに高度な看護の知識や技術を学ぶことも大切なことである。したがって、看護系4年制大学および本看護学科卒業生の確保が今後の課題である。さらに、本看護学専攻設置以来、平成23年度入試まで募集人員8名に対して何とか入学者を確保してきたが、最近受験者が減少し平成24年度入試は7名の応募に対して5名の合格者であった。また、平成24年度入試は初めての2次募集を実施することとなった。したがって、今後の対策としてこれまで以上に魅力ある教育内容に改善すると共に、看護学専攻を修了することによりどのようなメリットを生み出せるか、そのために新たな資格を含めどのようなことが必要であるか検討しなければならない(専門看護師等)。

各分野の自己評価・課題と展望は次のとおりである。

(1) 看護学教育領域

① 継続看護学教育分野

継続看護学教育分野では、看護専門職育成に必要な教育理論と方法の探求をめざし、高度な看護教育実践能力の育成と、看護基礎教育や看護継続教育に貢献できる人材の育成を目標としている。そこで、看護基礎教育と看護継続教育の関連性をふまえて、看護教育のあり方を検討してきた。

最近この分野への応募者の傾向は、看護継続教育に関心を持つ看護職の応募よりは、すでに看護基礎教育に携わっている専門学校や短期大学の看護系教員や、看護基礎教育に携わろうとしている看護職者が増加している。そのため看護学教育分野では看護専門職を育成するための教育理論と教育方法および教育評価を含めた看護学教育の体系的探求の充実が求められている。また、医療機関からは看護管理に焦点を当てた教育・研究の促進も求められている。今後はこれらをふまえて看護継続教育に関心を示す看護職者の応募も鑑み、看護教育の質の追究や、看護管理を含む高度な看護実践能力を備えた看護職の育成をも包含した看護学教育に関する教育・研究活動を進めていくことを課題としている。

(2) 実践看護学領域

① 母子看護学分野

母性看護学専門分野では平成21年度に2名が修了し、現在1名が在籍(現在休学中)している。平成21年度以降、新たな院生は受け入れていない。小児看護学専門分野では、平成21年度に1名と平成22年度には2名の院生を受け入れたことで3名が在籍している。3名全員が働いているため長期履修を選択し、2名は研究にとりかかることができている。また、平成21年度には科目履修生1名の受け入れも行った。

平成20年度までの修了者の中からは、専門学校や大学の教員となり教育・研究に携わる者や岐阜大学医学部看護学科の非常勤講師として教育に携わる者もいて、大学院での学びを活かすことができていると考える。現在在籍している院生も臨床現場では教育や研究の指導的立場を担っており、大学院での学びを活かしていることが研究指導場面で語られている。

今後の課題として、長期履修以外の院生を確保していくことと、教員の指導力をさらに高めることで教育の質を高めていくことが挙げられる。

② 成人看護学分野

成人看護学分野は、急性期及びスポーツ関連看護学、慢性期看護学の分野から構成されている。当分野は、修士学位授与者を3名送り出し、現在5名の大学院生が就学中である。修了生はいずれも長期履修学生であり、修了後も引き続き看護職として或いは看護学教員として活躍していることから、各職場における指導的役割や教育に修士課程の学びが寄与していると思われる。

急性期及びスポーツ関連看護学には現在3名の大学院生が在籍している。急性期には、多くの医療機器、薬剤が使われる中で、患者、家族、医療職の接点に立つ看護職が、病態、治療内容、治療環境に精通し、説明できる実践看護が要求されている。多領域との連携も大切であり、今後とも他学部、他大学の多くの職種、研究者との連携を保ちつつ、教育・研究を進めていく。また、救急看護では、年々進歩し変更されるガイドラインに習熟することにとどまらず、その根拠を探究し更に有用な対応方法を検討する能力を期待されている。救急看護のレベルアップのためには、救急看護アセスメントの知識と技術、

患者及び家族の心理的なアセスメントとケア，救急看護における人材育成・リーダーシップ能力の向上が必要であると考えている。

成人病，障害者にとってスポーツはリハビリテーションとしての意義があり，スポーツ医学は健康増進から競技スポーツまで幅広く関与しているが，スポーツ一般には看護の関与は非常に薄く，現状ではスポーツ現場での救護，スポーツ医学研究のサポートに止まっている。しかし現場では，医療を必要とする場合でも医療職がいないためにトレーナーなど他の職種に頼ることが多く，医学的知識・技術を持ち現場の近くで見守る医療職は必要と考えられる。成人看護学分野では，多くのスポーツ関連職種とともに，スポーツをする人の立場に立った医療者として，説明できる医療を展開する看護師を養成すべく，その基礎となる看護の理論的検討の準備を始めた。この方面の前例はなく，やはり体育学，運動生理学，栄養学，心理学，医学の学際的取り組みが必要と考えている。

慢性期看護学分野では，現在2名の大学院生が在籍しており，生活習慣病を持つ人の自己管理を促す家族支援に関する研究を行っている。いずれも社会人のため長期履修生であり，研究に取り組む時間の確保が難しいなか，研究の質の向上を図るために論文掲載や学会発表なども行っている。

治癒が難しく憎悪と寛解を繰り返すという特徴をもつ慢性疾患の患者数は増加傾向にある。医療提供体制も，病院から地域中心の医療と変わってきている。今後は，益々，外来や在宅との関連から，慢性的な病とともに長期間過ごす生活者としての疾病コントロールやセルフケアマネジメントの方法などに関する教育・研究が課題となる。

③ 地域健康援助学分野

地域健康援助学分野では，地域看護学分野，精神看護学分野，老年看護学分野の3つの専門分野で構成されている。平成17年度に3名，18年度に3名，19年度に5名，20年度に5名が入学し，全員が修了し，そのほとんどが看護職として活躍している。さらに21年度に5名，22年度に3名，23年度に3名が入学しており，その全員が長期履修学生であり，病院，地方自治体，訪問看護ステーション，教育機関など非常勤などで働いており多彩な背景を持っている。

老年看護学分野では，老年看護のすすむべき方向性は明らかにされているが，現実的には，高齢者自身の心身の状況や，周囲の環境により課題が多い。現場で矛盾を感じている看護職も多い。大学院生は，看護の現場の実情に応じた具体的なケアを考える研究テーマをもち，取り組んでいる。在籍している3名ともに社会人であり，継続して考える時間をもつことが難しく，研究を進めていくにはそれぞれ課題を抱えているが，状況をふまえて今後もサポートしていきたいと考える。

精神看護学分野では，精神障害者施策が地域生活支援を中心とする方向に移行してきていることや，学校・家庭・職場などにおいてのメンタルヘルス問題が増加してきていることなど，多くの取り組むべき課題を抱えている。大学院生は臨床家や教育者といった社会人であるため，それぞれの立場からそれらの課題を捉え，解決の糸口となるような研究テーマに取り組んでいる。いずれの研究も精神看護の発展に貢献できる内容であり，積極的に学会や誌上に公表するようサポートしている。

地域看護学分野は，公衆衛生看護や在宅看護を中心とした研究分野である。公衆衛生看護では，市町村合併を機に，保健師の分散配置や保健師の削減が行われている中で，評価を見据えた保健活動の展開が期待されているところである。さらに保健師教育の質を担保するための様々な課題を残している。大学院生の研究テーマは感染症や精神保健，介護予防，児童虐待等の現在関わっている保健活動について取り上げている。また在宅看護では，小規模訪問看護ステーションが閉鎖し，経営上の問題や訪問看護師の質やバーンアウトの問題，法律や制度の変化の中で多くの課題がある。大学院生の研究テーマは訪問看護師ストレスやアイデンティティ，グリーフケア，業務分析，高齢者虐待など多岐にわたっている。院生がこのような多様な研究を共有することも重要な機会とし，月2回の自主ゼミを開催し，卒業生の参加もあり活発な討議の機会となっている。今後さらに積極的に研究課題に取り組めるような環境を作ることが重要であると考えている。

[その他関連施設等研究活動]

(1) 附属病院輸血部

1. 研究の概要

輸血療法は現代医療に不可欠な治療手段であるが、その実態は最も普及した「移植医療」である。他人の臓器（造血・免疫系・幹細胞）を最小限の検査で移入するので、致死的な副作用・合併症や難治性（致死性）新興・再興感染症の伝搬など、なお今後も引き続いて克服すべき新たな課題は出現すると予想される。既知のウイルス感染症のウインドウ期献血，スクリーニング法が未開発，あるいは問診の無効性の故に，他方では，最小量の輸血療法あるいは安全な代替療法を模索せざるをえない。自己血輸血療法やサイトカインの利用，人工血液などの開発である。

当院では手術患者のうち受血者のおよそ 89%は自己血貯血し，貯血した患者のおよそ 90%が同種血を回避でき，安全な輸血療法の一つとして確立しており，輸血療法の一画として代替不能にまで定着した。この事は適正な，最小限の輸血療法を推進する上で基礎となっている。当輸血部では特に致死性輸血副作用である輸血後移植片対宿主病の発症メカニズムについて研究を行ってきたが，現在もなおこの致死的な合併症に対する有効な治療法は確立できず，血液照射という予防以外に対処方法はなく，総ての細胞製剤に照射して予防している。

2. 名簿

講師： 大塚節子 Setsuko Otsuka

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

なし

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的外部資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

大塚節子：

- 1) 日本輸血・細胞治療学会評議員(～現在)
- 2) 日本輸血・細胞治療学会倫理委員会(～現在)
- 3) 日本輸血・細胞治療学会適正委員会 I&A 小委員会(～現在)
- 4) 日本輸血・細胞治療学会輸血療法委員会 I&A 小委員会(～現在)
- 5) 輸血・細胞治療学会危機管理・大量出血・産科出血委員会(産科危機的出血への対応ガイドライン作成のための5学会合同委員会(～現在))
- 6) 輸血・細胞治療学会東海支部会幹事(～現在)
- 7) 輸血・細胞治療学会東海支部会 I&A 委員会(～現在)
- 8) 日本アフエレーシス学会中部地方会世話人(～現在)
- 9) 日本血液代替物学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

大塚節子：

- 1) 骨髄移植推進財団の調整医師(～現在)
- 2) 岐阜県輸血懇話会(療法委員会合同委員会)委員(～現在)
- 3) 岐阜臨床輸血研究会事務局&世話人(～現在)
- 4) 認定輸血検査技師制度指定施設(～現在)
- 5) 輸血医学認定医制度認定施設(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

講師1名の定員にて、輸血治療の安全、適正、有効性の担保のために診療・教育・研究を担ってきたが、研究面では十分な時間がとれなかった。

現状の問題点及び対応策

致死的な反応を含む輸血による即時型反応の90%以上が、今日でも原因不明のままである。また、輸血による遅延型副作用・合併症の追跡、被輸血患者の適切なるフォローアップは輸血医療において例外的にしか為されていないのが現状である。歴史的には輸血を原因とする重篤かつ致死的な副作用を他の既知疾患と誤診し見逃してきた可能性がある。しかし、一方で、ヒトでは移植を左右するヒト組織適合抗原(HLA)が輸血の副作用の原因抗原として発見された経緯があることから判るように、有害な副作用を看過せず、研究対象とすることが依然として重要と考えられる。2002年7月に成立した通称「血液新法」によって輸血による副作用報告が義務化した。(致死)非溶血性輸血副作用のうち、少数ながら一

部では、TRALI (transfusion-related acute lung injury) や類似反応において、抗 HLA 抗体や抗顆粒球抗体が原因として検出されるようになってきたが、依然としてその詳細は未解明である。古典的輸血副作用である溶血反応を最近、立続けに経験した ABO 型や Rho (D) 型以外の抗原抗体反応による即時型及び遅延型溶血反応は、共に輸血前の不規則抗体陽性結果を得ながら抗体の特異性（と臨床的重要性）を同定できず、不適合輸血を防ぎ得ず、後者では致死的転帰を取った。経済的理由による業務の統合によって血液センターの Reference Laboratory 機能は著しく衰退し、検査結果は 2 週間後（患者死亡後 2 週間後）であり、実効性に欠く。市販されている細胞試薬は主に USA 製（白人用）であり、遺伝的な背景の異なる日本人用の細胞試薬を常時必要としているにもかかわらず、法的バリアーのため入手不能が数十年続いている。そのため、学会発表や論文でその必要性を今後も訴えていくことが重要であると考えている。

今後の展望

近年、癌患者の再発に対して DLT (donor lymphocyte transfusion) などの細胞治療が有効な手段となってきた。輸血医療の安全性に対する国民の強い懸念と関心の高まりに加え、今後は DNA レベルで HLA (human leukocyte antigens) を一致させたドナーのリンパ球輸注による固形癌治療など、更なる治療法の開発、研究の必要性は高い。

当院は非血縁間骨髄採取・移植病院の認定を受けた結果、同種造血幹細胞移植や自己骨髄幹細胞を移植する血管新生治療等の細胞治療が今後増加することが見込まれる。

更には、再生医科学専攻・組織器官形成分野および口腔外科に若年者の知歯髄より抽出された間葉系幹細胞が保存され、将来の臨床応用 (iPS 細胞バンク) を目指して、輸血部にはバンク業務への関与を要請されている。実現には、将来的には細胞プロセッシングセンター運営のガイドラインに従い、細胞療法士 (仮称) 相当の人材が必要であり、かつ 保存にさいして、感染症のチェックのみならず、血液型の一つである組織適合性検査が不可欠であるため、輸血部における人材の確保、検査遂行能力の向上が必須である。

(2) 附属病院病理部

1. 研究の概要

1) モデル動物を用いた固形癌発生のメカニズム解析

実験的化学発癌モデル（大腸・肝など）を用いて、特に肥満・糖尿病・高脂血症関連因子に注目した発癌感受性試験およびそのメカニズム解析を行った。

2) 高度先進医療に対する病理診断

臨床各科の高度先進医療（進行癌の個別化医療，EUS-FNA 検体など）に対応するため，immunohistochemistry, in situ hybridization などの検査内容拡大と質的改善を行った。

2. 名簿

教授(併任)： 高見 剛 Tsuyosi Takami
准教授： 廣瀬善信 Yoshinobu Hirose
臨床講師(併任)： 浅野奈美 Nami Asano

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 廣瀬善信. 骨軟骨腫瘍の病理学的概要(医学), アニテックス 2009年; 21巻: 5-8.
- 2) 安田一朗, 小野木章人, 中島賢憲, 土井晋平, 井深貴士, 岩下拓司, 荒木寛司, 森脇久隆, 廣瀬善信, 高見剛. 化学・放射線療法後のリンパ節に対する EUS-FNA による効果判定, 胃と腸 2009年; 44巻: 1908-1914.
- 3) 岩田 尚, 白橋幸洋, 竹村博文, 大野貴敏, 広瀬善信. 胸壁腫瘍 最新医学別冊, 新しい診断と治療の ABC - 胸膜・縦隔・横隔膜の疾患 -. 2010年: 129-137.
- 4) 齊郷智恵美, 山田泰広, 廣瀬善信. 病理診断医になじみのある疾患関連分子 OCT3/4・NANOG 診断編 病理と臨床, 病理診断に役立つ分子生物学 2011年; 29巻臨増: 359-362.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 小野木章人, 荒木寛司, 木村祐子, 寺倉陽一, 井深貴士, 末次 淳, 白木 亮, 永木正仁, 森脇久隆, 廣瀬善信. ダブルバルーン小腸内視鏡と腹部造影 CT 検査が診断に有用であった小腸動静脈奇形の 1 例, Gastroenterological Endoscopy 2009年; 51巻: 1301-1308.
- 2) 堀江憲吾, 菊地美奈, 土屋朋大, 三輪好生, 南館 謙, 横井繁明, 仲野正博, 江原英俊, 出口 隆, 広瀬善信. 後腹膜原発の Mucinous cystadenocarcinoma の 1 例, 泌尿器科紀要 2009年; 55巻: 405-408.
- 3) 大野貴敏, 大島康司, 山口良大, 下川邦泰, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 廣瀬善信. 病的骨折をきたした大腿骨骨腫瘍の 1 例, 東海骨軟部腫瘍 2009年; 21巻: 31-32.
- 4) 奥村直樹, 野中健一, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 広瀬善信, 吉田和弘. 7年後に後腹膜再発をきたした隆起性皮膚線維肉腫の 1 例, 日本臨床外科学会雑誌 2010年; 71巻: 3232-3236.
- 5) 大洞昭博, 小島孝雄, 加藤隆弘, 橋本宏明, 堀江秀樹, 福田信宏, 高野幸彦, 奥田順一, 井田和徳, 安田一朗, 広瀬善信. EUS-FNA が確定診断に有用であった自己免疫性膵炎の 1 症例, 肝胆膵治療研究会誌 2010年; 8巻: 54-61.
- 6) 鬼頭勇輔, 後藤尚絵, 廣瀬善信, 白橋幸洋, 岩田 尚, 高見 剛. 胸腺原発 MALT リンパ腫の 1 例, 診断病理 2011年; 28巻: 44-48.
- 7) 波多野裕一郎, 鬼頭勇輔, 松永研吾, 廣瀬善信, 水野智子, 豊木 廣, 藤本次良, 森重健一郎, 原 明, 高見剛. 卵巣未熟奇形腫に peritoneal gliomatosis および nodal gliomatosis を合併した 1 例, 診断病理 2011年; 28巻: 62-68.
- 8) 堀江憲吾, 菊地美奈, 三輪好生, 南館 謙, 横井繁明, 仲野正博, 出口 隆, 江原英俊, 浅野奈美, 広瀬善信. Xp11.2 転座腎細胞癌の 1 例, 泌尿器科紀要 2011年; 57巻: 129-133.
- 9) 鈴木綾乃, 高見和久, 若松 亮, 吉野雅文, 酒井勝央, 山田明子, 成毛良治, 水野吉雅, 岩田 尚, 廣瀬善信. 再々発時に初めて低血糖を呈した孤立性胸膜線維性腫瘍の 1 例, 日本内科学会雑誌 2011年; 100巻: 1375-1378.
- 10) 奥村直樹, 徳山泰治, 山口和也, 長田真二, 岩田 尚, 広瀬善信, 吉田和弘. 胃カルチノイド, 空腸 GIST および肺癌を併発した von Recklinghausen 病の 1 例, 日本臨床外科学会雑誌 2011年; 72巻: 1297-1301.

- 11) 大島康司, 大野貴敏, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 広瀬善信. 右前腕腫瘍の 1 例, 東海骨軟部腫瘍 2011 年 ; 23 卷 : 7-8.

原著 (欧文)

- 1) Kato H, Kanematsu M, Tanaka O, Mizuta K, Aoki M, Shibata T, Yamashita T, Hirose Y, Hoshi H. Head and neck squamous cell carcinoma: usefulness of diffusion-weighted MR imaging in the prediction of a neoadjuvant therapeutic effect. *Eur Radiol.* 2009;19:103-109. IF 3.594
- 2) Iwashita T, Yasuda I, Doi S, Nakashima M, Tsurumi H, Hirose Y, Takami T, Enya M, Mukai T, Ohnishi T, Iwata K, Tomita E, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine-needle aspiration in patients with lymphadenopathy suspected of recurrent malignancy after curative treatment. *J Gastroenterol.* 2009;44:190-196. IF 3.610
- 3) Iwashita T, Yasuda I, Tsurumi H, Goto N, Nakashima M, Doi S, Hirose Y, Takami T, Moriwaki H. Endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration biopsy for splenic tumor: a case series. *Endoscopy.* 2009;41:179-182. IF 6.096
- 4) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Yamada K, Yamakawa H, Iwama T, Hirose Y. Fluid-fluid level formation: a rare finding of extracranial head and neck schwannomas. *Am J Neuroradiol.* 2009;30:1451-1453. IF 3.464
- 5) Shimizu M, Shirakami Y, Iwasa J, Shiraki M, Yasuda Y, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Supplementation with branched-chain amino acids inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in male C57BL/KsJ-db/db mice. *Clin Cancer Res.* 2009;15:3068-3075. IF 7.338
- 6) Kato H, Kanematsu M, Mizuta K, Aoki M, Kuze B, Ohno T, Oshima K, Hirose Y. "Flow-void" sign at MR imaging: a rare finding of extracranial head and neck schwannomas. *J Magn Reson Imaging.* 2010;31:703-705. IF 2.749
- 7) Yasuda Y, Shimizu M, Shirakami Y, Sakai H, Kubota M, Hata K, Hirose Y, Tsurumi H, Tanaka T, Moriwaki H. Pitavastatin inhibits azoxymethane-induced colonic preneoplastic lesions in C57BL/KsJ/db/db obese mice. *Cancer Sci.* 2010;101:1701-1710. IF 3.846
- 8) Watanabe H, Kanematsu M, Kitagawa T, Suzuki Y, Kondo H, Goshima S, Kajita K, Mae KT, Hirose Y, Miotani S, Zhou X, Fujita H. MR elastography of the liver at 3 T with cine-tagging and bending energy analysis: preliminary results. *Eur Radiol.* 2010;20:2381-2389. IF 3.594
- 9) Sanada Y, Hirose Y, Osada S, Tanaka Y, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K. Immunohistochemical study of claudin 18 involvement in intestinal differentiation during the progression of intraductal papillary mucinous neoplasm. *Anticancer Res.* 2010;30:2995-3003. IF 1.656
- 10) Kato H, Kanematsu M, Sato E, Ito N, Furui T, Hirose Y. Magnetic resonance imaging findings of fibroepithelial polyp of the vulva: radiological-pathological correlation. *Jpn J Radiol.* 2010;28:609-612. IF 0.487
- 11) Niwa K, Nonaka-Shibata M, Satoh E, Hirose Y. Cervical large cell neuroendocrine carcinoma with cytologic presentation: a case report. *Acta Cytol.* 2010;54:977-980. IF 0.647
- 12) Kato H, Kanematsu M, Yokoi S, Miwa K, Horie K, Deguchi T, Hirose Y. Renal cell carcinoma associated with Xp11.2 translocation/TFE3 gene fusion: radiological findings mimicking papillary subtype. *J Magn Reson Imaging.* 2011;33:217-220. IF 2.749
- 13) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Hoshi M, Kanemura N, Goto N, Kasahara S, Shimizu M, Ito H, Saito K, Hirose Y, Yamada T, Takahashi T, Seishima M, Takami T, Moriwaki H. Indoleamine 2,3-dioxygenase in tumor tissue indicates prognosis in patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with R-CHOP. *Ann Hematol.* 2011;90:409-416. IF 2.688
- 14) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Hirose Y, Miyake S, Shimizu K. Lipoblastoma mimicking myxoid liposarcoma: a clinical report and literature review. *Tohoku J Exp Med.* 2011;223:75-78. IF 1.145
- 15) Okada M, Yano H, Hirose Y, Nakayama N, Ohe N, Shinoda J, Iwama T. Olig2 is useful in the differential diagnosis of oligodendrogliomas and extraventricular neurocytomas. *Brain Tumor Pathol.* 2011;28:157-161. IF 1.129
- 16) Imai H, Osada S, Sasaki Y, Ikawa A, Takahashi T, Yamaguchi K, Hirose Y, Yoshida K. Gallbladder adenocarcinoma with extended intramural spread in adenomyomatosis of the gallbladder with the pearl necklace sign. *Am Surg.* 2011;77:E57-58. IF 1.363
- 17) Kato K, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Minamitani C, Natsume H, Katagiri Y, Hirose Y, Mizutani J, Tokuda H, Kozawa O, Otsuka T. Regulation by heat shock protein 27 of osteocalcin synthesis in osteoblasts. *Endocrinology.* 2011;152:1872-1882. IF 4.993
- 18) Mizuno Y, Iwata H, Shirahashi K, Hirose Y, Takemura H. Pulmonary epithelioid hemangioendothelioma. *Gen Thorac Cardiovasc Surg.* 2011;59:297-300.
- 19) Ohshima Y, Yasuda I, Kawakami H, Kuwatani M, Mukai T, Iwashita T, Doi S, Nakashima M, Hirose Y, Asaka M, Moriwaki H. EUS-FNA for suspected malignant biliary strictures after negative endoscopic transpapillary brush cytology and forceps biopsy. *J Gastroenterol.* 2011;46:921-928. IF 3.610
- 20) Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Yamauchi T, Kawaguchi J, Shimizu M, Itani M, Nakamura M, Nishii Y, Yoshioka T, Hirose Y, Okano Y, Moriwaki H, Kozawa O. Ultraviolet irradiation can induce evasion of colon cancer cells from stimulation of epidermal growth factor. *J Biol Chem.* 2011;286:26178-26187. IF 5.328

- 21) Imai H, Osada S, Sasaki Y, Ikawa A, Tanaka Y, Okumura N, Nonaka K, Takahashi T, Yamaguchi K, Yoshida K, Nakashima M, Hirose Y. Cholesterol granuloma in the pancreas accompanied by peritoneal disseminated lesions. *Pancreas*. 2011;40:795-796. IF 2.607
- 22) Yamauchi T, Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Nishii Y, Yoshioka T, Okano Y, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. UVC Radiation induces downregulation of EGF receptor via phosphorylation at serine 1046/1047 in human pancreatic cancer cells. *Radiat Res*. 2011;176:565-574. IF 2.578
- 23) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kawaguchi J, Hanamatsu T, Yoshioka T, Okano Y, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Inhibition of Rho-associated coiled-coil containing protein kinase enhances the activation of epidermal growth factor receptor in pancreatic cancer cells. *Mol Cancer*. 2011;10:79. IF 1.481
- 24) Yamauchi T, Adachi S, Yasuda I, Nakashima M, Kawaguchi J, Yoshioka T, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Ultra-violet irradiation induces apoptosis via mitochondrial pathway in pancreatic cancer cells. *Int J Oncol*. 2011;39:1375-1380. IF 2.571
- 25) Tanaka Y, Hayashi Y, Kato J, Yamada M, Koumura A, Sakurai T, Kimura A, Hozumi I, Hatano Y, Hirose Y, Takami T, Nakamura H, Kasahara S, Tsurumi H, Moriwaki H, Inuzuka T. Diffuse skeletal muscles uptake of [(18)f] fluorodeoxyglucose on positron emission tomography in primary muscle peripheral T-cell lymphoma. *Intern Med*. 2011;50:2021-2024. IF 1.037
- 26) Ninomiya S, Hara T, Tsurumi H, Kanemura N, Kasahara S, Ogawa Y, Seishima M, Hirose Y, Moriwaki H. Myelofibrosis successfully treated with prednisolone in a patient with pachydermoperiostosis. *Intern Med*. 2011;50:2207-2211. IF 1.037
- 27) Kato H, Kanematsu M, Kato Z, Teramoto T, Kondo N, Hirose Y, Hoshi H. MR imaging findings of cervical lymphadenopathy in patients with Kikuchi disease. *Eur J Radiol*. 2011;80:e576-581. IF 2.941
- 28) Nakashima M, Adachi S, Yasuda I, Yamauchi T, Kawaguchi J, Itani M, Yoshioka T, Matsushima-Nishiwaki R, Hirose Y, Kozawa O, Moriwaki H. Phosphorylation status of heat shock protein 27 plays a key role in gemcitabine-induced apoptosis of pancreatic cancer cells. *Cancer Lett*. 2011;313:218-225. IF 4.864
- 29) Hatano Y, Hirose Y, Matsunaga K, Kito Y, Yasuda I, Moriwaki H, Osada S, Yoshida K, Hara A. Combined adenomatoid tumor and well differentiated papillary mesothelioma of the omentum. *Pathol Int*. 2011;61:681-685. IF 1.481
- 30) Hata K, Kubota M, Shimizu M, Moriwaki H, Kuno T, Tanaka T, Hara A, Hirose Y. C57BL/KsJ-db/db-Apc mice exhibit an increased incidence of intestinal neoplasms. *Int J Mol Sci*. 2011;12:8133-8145. IF 2.279

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：高橋真美，研究分担者：廣瀬善信；厚生労働省がん研究助成金：肥満・高脂血症・糖尿病モデル動物の発がん感受性と発がん機構に関する研究；平成 21 年度；1,500 千円
- 2) 研究代表者：高橋真美，研究分担者：廣瀬善信；厚生労働省がん研究助成金：肥満・糖尿病モデル動物における大腸・肝発がん感受性及び修飾因子の検索；平成 22 年度；1,400 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

廣瀬善信：

- 1) 日本病理学会中部支部幹事(～現在)
- 2) 日本臨床細胞学会東海連合会幹事(～現在)
- 3) 日本臨床細胞学会岐阜県支部幹事(～現在)
- 4) 日本病理学会評議員(～現在)

2) 学会開催

廣瀬善信：

- 1) 第134回日本臨床細胞学会東海連合会例会(平成21年9月, 名古屋)
- 2) 第65回日本病理学会中部支部交見会(平成22年7月, 岐阜)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

廣瀬善信：

- 1) 第29回日本臨床細胞学会東海連合会学術集会(平成21年3月, 名古屋, 症例検討座長)
- 2) 第30回日本臨床細胞学会東海連合会学術集会(平成22年3月, 岐阜, 症例検討座長)
- 3) 第18回国立病院臨床検査技師協会東海北陸支部春期学術研修会(平成22年5月, 名古屋, 特別講演「EBM 総論」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 高橋真美, 廣瀬善信, 今井俊夫, 久野壽也, 落合雅子, 亀井康富：肥満・高脂血症・糖尿病モデル動物の発がん感受性と発がん機構に関する研究(高橋班)：平成20年度厚生労働省がん研究助成金による研究報告書集：195-199(平成21年12月)

11. 報道

- 1) 廣瀬善信：病院の実力 病理診断 主治医と緊密連携：読売新聞(2011年1月9日)

12. 自己評価

評価

固形がん(特に大腸癌)における肥満関連因子などの発癌修飾作用について、コンスタントに知見を蓄積し、業績発表あるいは外部研究費獲得につなげることができた。

IHCやISH検査の自動染色装置更新・内容拡充を行い、胃癌のHER2検査に代表されるような個別化医療の適用拡大に速やかに対応することができた。

現状の問題点及びその対応策

着実な業績発表ができるようになったが、病理部が発信元になる業績が少ない点が問題として挙げられる。今後は、症例報告レベルから臨床研究に至るまで、病理部オリジナルの幅広い研究活動を行うことが必要と思われる。

今後の展望

発癌における肥満関連因子等による修飾作用については、引き続き動物モデルを用いてその原因因子の特定に迫ることができるよう展開していく。

今後も引き続き個別化医療の発展に伴い、それに対応した新規検査の導入・報告内容の改善が求められると予想され、不断の準備と臨床サイドとの協調関係を継続していく。

(3) 地域医療医学センター（内科系分野）

1. 研究の概要

① 地域医療を担う医師不足対策に関する研究

岐阜県内の地域医療の実態調査とそれに基づく問題点および課題の抽出を行い、医師不足地域での医療確保の方策に関する研究を推進した。その成果を提言としてまとめ、学会（特別推薦枠（地域枠）医学生卒前教育をどうするか？～問題点の抽出と対策に関するシンポジウム，2009，東京）等で公表し、岐阜県地域医療対策協議会の方向性に大きな影響を与えた。また、経済産業省、他県、他大学等からもモデル事業として高い評価を得た。

② 地域医療の活性化に関する研究

とくに地域医療研修を医師不足の2次医療圏の拠点病院を中心に研修医教育を行い、研修医のみならず指導医を派遣するシステムによって地域医療機関活性化に結び付くか否かの解析研究を行った。この研究により研修医教育を通じた当該地域医療機関活性化および医師派遣による地域医療確保をもたらした（岐阜大学医学部地域医療医学センター地域医療研修 Booklet 2010）。研究成果を専門誌（新しい救急医療体制の構築，39-47，へるす出版，東京，2009）等で発表し、地域医療の活性化のための政策提言とした。結果として、岐阜県南部の比較的医師数が多い地域の研修指定病院から医師不足が深刻な北部（飛騨・郡上地区等）へ研修医・指導医を派遣して教育と同時に医師数確保～医療を確保できるこのシステムを基礎にして、地域医療再生基金による「医師共有・コンソーシアム構想」を立ち上げるに至った。

③ 医療の地域連携推進に関する研究

患者のたらい回しなどの救急医療の問題に対応するために、出動した救急隊と救急病院の間での情報をリアルタイムで統合し、患者の最適な搬送先を瞬時に判断することを目指した救急医療情報を共有するシステムづくりを進めている。この成果を基に平成21年度の経済産業省の公募事業「車載ITを活用した緊急医療体制の構築」に採択され、「GEMITS」と名付けられたドクターヘリやドクターカーとの連携や病院間での救急医療情報の共有システムは地域より高く評価されている（日本経済新聞，平成22年3月16日，朝日新聞，同年3月17日ほか，中京テレビ，東海テレビ，名古屋テレビ，NHK，中京テレビ）。これら研究成果については、学会（第12回へき地離島救急医療研究会，2009，鹿児島），専門誌（救急医学33(7)，792-96，807-11，821-25，2009；日本医事新報4669，93-96，2009），著書（脳卒中の救急搬送体制，臨床研修プラクティス，62-63，文光堂，2009）で公表している。

④ 岐阜大学医学部・同附属病院女性医師就労支援の会を通じた医師就労環境の実態調査および改善支援に関する研究

岐阜大学医学部・同附属病院女性医師就労支援の会を発足させ、その会の業務の一環として、女子医学生および女性医師の意識調査を実施するとともに、女性のみならず広く医師の就労環境について調査研究し、保育所の実態調査を行って、いずれも「月刊地域医学」に投稿した。

⑤ 岐阜県内の地域医療の実態調査とそれに基づく問題点および課題の抽出を行い、医師不足地域での医療確保の方策を明確化した。

⑥ 研修医教育，とくに地域医療研修を医師不足の2次医療圏の拠点病院を中心に行い、研修医のみならず指導医を派遣するシステムによって地域医療機関活性化に結び付くか否かの研究を行い、実際に現場で教育をキーワードにした医療機関活性化および地域医療確保をもたらした。

⑦ 地域連携の具体的研究として、ドクターヘリを運用した地域救急搬送システム構築に関する研究を行い、平成22年度からの本格的ドクターヘリ運用にこぎつけた。

⑧ 地域医療を担う医師不足対策に関する研究

岐阜県内の地域医療の実態調査とそれに基づく問題点および課題の抽出を行い、医師不足地域での医療確保の方策に関する研究を推進した。その成果を提言としてまとめ、学会（特別推薦枠（地域枠）医学生卒前教育をどうするか？～問題点の抽出と対策に関するシンポジウム，2009，東京），専門誌（日本医事新報4364，80-85，2007）等で公表し、岐阜県地域医療対策協議会の方向性に大きな影響を与えた。また、経済産業省、他県、他大学等からもモデル事業として高い評価を得た。

⑨ 地域医療の活性化に関する研究

とくに地域医療研修を医師不足の2次医療圏の拠点病院を中心に研修医教育を行い、研修医のみならず指導医を派遣するシステムによって地域医療機関活性化に結び付くか否かの解析研究を行った。この研究により研修医教育を通じた当該地域医療機関活性化および医師派遣による地域医療確保をもたらした（岐阜大学医学部地域医療医学センター地域医療研修 Booklet 2010）。研究成果を学会（第29回医学教育セミナーとワークショップ，2008，岐阜），専門誌（新しい救急医療体制の構築，39-47，へるす出版，東京，2009）等で発表し、地域医療の活性化のための政策提言とした。結果として、岐阜県南部の比較的医師数

が多い地域の研修指定病院から医師不足が深刻な北部（飛騨・郡上地区等）へ研修医・指導医を派遣して教育と同時に医師数確保～医療を確保できるこのシステムを基礎にして、地域医療再生基金による「医師共有・コンソーシアム構想」を立ち上げるに至った。

⑩ 医療の地域連携推進に関する研究

患者のたらい回しなどの救急医療の問題に対応するために、出動した救急隊と救急病院の間での情報をリアルタイムで統合し、患者の最適な搬送先を瞬時に判断することを目指した救急医療情報を共有するシステムづくりを進めている。この成果を基に平成 21 年度の経済産業省の公募事業「車載 IT を活用した緊急医療体制の構築」に採択され、「GEMITS」と名付けられたドクターヘリやドクターカーとの連携や病院間での救急医療情報の共有システムは地域より高く評価されている（日本経済新聞、平成 22 年 3 月 16 日、朝日新聞、同年 3 月 17 日ほか、中京テレビ、東海テレビ、名古屋テレビ、NHK、中京テレビ）。これら研究成果については、学会（第 12 回へき地離島救急医療研究会、2009、鹿児島）、専門誌（救急医学 33(7)、792-96、807-11、821-25、2009；日本医事新報 4669、93-96、2009）、著書（脳卒中の救急搬送体制、臨床研修プラクティス、62-63、文光堂、2009）で公表している。

⑪ 地域医療の崩壊と再生の取り組みについて

平成 19 年 4 月から、本学が独自に立ち上げた「地域医療医学センター」を中心とした様々な取り組みにより、医師不足が深刻な県内地域の医療確保・補填に務めてきたところであるが、さらに、初期臨床研修医や後期研修医等に対して魅力的な研修プログラムを提供することにより、医師の県内定着と育成を図るとともに、後期研修プログラムの中に一定期間の医師不足地域での勤務を含めることにより、医師不足の解消に資するため、平成 22 年度に岐阜大学医学部附属病院と岐阜県内の中核病院が中心となり、「岐阜県医師共有・育成コンソーシアム」を組織した。

⑫ いわゆる医師不足地域への支援策の取り組みについて

上述したコンソーシアムの取組みに加え、従前から本学地域医療医学センターが中心となって、医師不足が深刻な地域（病院）に定期的に医師を派遣し、岐阜県内の医療確保に務めている。また、平成 22 年度には「岐阜大学医学部附属病院医師会・女性医師支援の会」を立ち上げ、女性医師就労支援や女子学生の進路相談等様々な課題に対応し、今後の地域医療の一翼を担う女性医師の立場から様々な提言・活動を繰り広げている。このほか、岐阜県が導入したドクターヘリの基幹病院として、救命救急を通して地域医療を支援している。

⑬ 医師の地域間偏在の解決策の取り組みについて

⑧、⑨の取組みを通じて、継続的に取り組んでいる。

2. 名簿

教授： 村上啓雄 Nobuo Murakami

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 村上啓雄. II 章 主要疾患の栄養管理 7. 特殊な病態での栄養管理 D. 敗血症：中村 豊編. 病態栄養専門医ガイドブック、東京：南光堂；2009 年：218-223.
- 2) 熊田恵介、吉田隆浩、豊田 泉、小倉真治、村上啓雄、福田充宏. 1 章 救急医療機関の現状と問題と今後のあり方 5) 地域医療の現状と大学病院を中心とした支援の在り方-救急医療の視点から：小濱啓次編. 新しい救急医療体制の構築 救急医療体制改善のための提言、東京：へるす出版；2009 年：39-47.
- 3) 白木 亮、村上啓雄、森脇久隆、伊東七奈子. 第 3 章 栄養補給法 7. 経腸栄養：清野 裕、門脇 隆、中村丁次、本田佳子編. NST 臨床栄養療法スタッフマニュアル、東京：医学書院；2009 年：45-50.
- 4) 白木 亮、村上啓雄、森脇久隆、伊東七奈子. 第 3 章 栄養補給法 8. 経皮内視鏡的胃瘻造設(PEG)：清野裕、門脇 隆、中村丁次、本田佳子編. NST 臨床栄養療法スタッフマニュアル、東京：医学書院；2009 年：52-58.
- 5) 村上啓雄. 3. 感染症 その他 予防接種の安全性と有効性：山口 徹、北原光夫、福井次矢編. 今日の治療指針 2010 年版、東京：医学書院；2010 年：198-200.
- 6) 笠原千嗣、村上啓雄. その他の症状 訴えの見極め方と治療の極意ケーススタディー-24. 発汗・寝汗：森田浩之編. いきなり名医！見極めが肝心、不定愁訴 jmedmook09、東京：日本医事新報社；2010 年：126-130.
- 7) 村上啓雄. 第 VI 章 感染症 ウイルス感染症-肝炎：松田 輝、萩原俊男、難波光義、鈴木久美、林 直子編. Nursing 看護学テキスト NiCE 疾病と治療 I、東京：南江堂；2010 年：278-281.
- 8) 中村 豊、村上啓雄、鈴木壱和、菅野丈夫、坂本八千代. 2 章 栄養評価と栄養スクリーニング：中村 豊編. 認定 NST ガイドブック、南江堂；2011 年：13-18.
- 9) 白木 亮、村上啓雄、森脇久隆. 7 章 経腸栄養法 A 経腸栄養必要な消化管の運動、消化・吸収の知識：中村 豊編. 認定 NST ガイドブック、南江堂；2011 年：44-48.

- 10) 村上啓雄. 7章 経腸栄養 B 経腸栄養材の適応・禁忌: 中村 豊編. 認定 NST ガイドブック, 南江堂; 2011年: 49-52.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 熊田恵介, 金田英巳, 吉田隆浩, 豊田 泉, 小倉真治, 村上啓雄, 福田充宏. 特集 へき地・離島の救急医療 VI へき地・離島のある都道府県から学ぶことー岐阜県, 救急医学 2009年; 33巻: 821-825.
- 2) 村上啓雄. OVERSEAS UPDATE 海外レポート APIC2009に参加して, Carlisle 2009年; 14巻: 11.
- 3) 村上啓雄. 国立大学附属病院感染対策協議会病院感染対策ガイドライン完成へ, INFECTION CONTROL 2010年; 19巻: 1228-1233.
- 4) 村上啓雄. 食欲・味覚の評価と各種病態の影響ー慢性閉塞性肺疾患(COPD)にみられる味覚・食欲異常, 栄養ー評価と治療 2010年; 27巻: 255-258.
- 5) 村上啓雄. 新型インフルエンザの診療体制と感染対策ーワクチン接種を含めてー, 岐阜県医師会雑誌 2010年; 23巻: 49-55.
- 6) 村上啓雄. 日常遭遇する感染症への対処法ー高齢者感染症の初期対応, Modern Physician 2010年; 30巻: 657-661.
- 7) 山岸由佳, 村上啓雄, 三鴨廣繁. 職員と患者の安全を守るー抗体検査とワクチンプログラムー 抗体検査の結果を管理する工夫, INFECTION CONTROL 2011年; 20巻: 585-590.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 松本茂美, 奥村陽子, 清島真理子, 熊田恵介, 吉田隆浩, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 女性医師・女子医学生を意識調査と女性医師就労支援の会の設立, 月刊地域医学 2010年; 24巻: 674-681.
- 2) 奥村陽子, 松本茂美, 吉田隆浩, 熊田恵介, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 岐阜大学医学部地域医療医学センターにおける地域医療研修のとりくむと研修医及び指導医アンケート調査. 月刊地域医学 2011年; 25巻: 56-61.
- 3) 石塚達夫, 福沢嘉孝, 村上啓雄, 橋本迪子, 坂部茂俊, 大曲貴夫, 玉川達雄. 第10回東海支部教育セミナーまとめ 注目すべき感染症, 日本内科学会雑誌 2011年; 100: 1434-1442.
- 4) 松本茂美, 奥村陽子, 清島真理子, 熊田恵介, 吉田隆浩, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 岐阜県における病院内保育所の現状. 月刊地域医学 2011年; 25巻: 558-562.
- 5) 一山 智, 森澤雄司, 村上啓雄, 國島広之, 三鴨廣繁. 医療関連感染対策のあり方を考える これまでにかかったこと, これから解決すべきこと. 日本病院会雑誌 2011年; 58巻: 804-847.

原著 (欧文)

- 1) Niwa T, Suzuki A, Sakakibara S, Yasuda M, Fukao A, Matsuura K, Goto C, Murakami N, Itoh Y. Retrospective cohort chart review study of factors associated with the development of thrombocytopenia in adult Japanese who received intravenous linezolid therapy. Clinical Therapeutics. 2009;31:2126-2133. IF 2.551
- 2) Ohtaki H, Ohkusu K, Sawamura H, Ohta H, Inoue R, Iwasa J, Ito H, Murakami N, Ezaki T, Moriwaki H, Seishima M. First report of acute cholecystitis with Sepsis casued by Cellulomonas denverensis. J Clin Microbiol. 2009;47:3391-3393. IF 4.162
- 3) Shiraki M, Terakura Y, Iwasa J, Shimizu M, Miwa Y, Murakami N, Nagaki M, Moriwaki H. Eleveved serum tumor necrosis factor- α and soluble tumor necrosis factor receptors correlate with aberrant energy metabolism in liver cirrhosis. Nutrition. 2010;26:269-275. IF 2.726
- 4) Niwa T, Imanishi Y, Ohmori T, Matsura K, Murakami N, Itoh Y. Significance of individual adjustment of initial loading dosage od teicoplanin based on population pharmacokinetics. Int J Antimicrob Agents. 2010;35:507-510. IF 3.787
- 5) Ohnishi R, Yasuda I, Kato T, Tanaka T, kaneko Y, Suzuki T, Yasuda S, Doi S, Nakashima M, Turumi H, Murakami N, Moriwaki H. Combined endobronchial and endoscopic ultrasound-guided fine needle aspiration for mediastinal nodal staging of lung cancer. Endoscopy. 2011;43:1082-1089. IF 6.096
- 6) Goto N, Tsurumi H, Kasahara S, Kanemura N, Hara T, Shimizu M, Murakami N, Sawada M, Yamada T, Takemura M, Seishima M, Kito Y, Takami T, Moriwaki H. Serum interleukin-18 level is associated with the outcome of patients with diffuse large B-cell lymphoma treated with CHOP or R-CHOP regimens. Eur J Haematol. 2011;87:217-227. IF 2.785

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

- 1) 村上啓雄, 深尾亜由美: 院内感染対策研究事業(平成 17 年度~); 平成 18-23 年度; 3,000 千円(500 : 500 : 500 : 500 : 500 千円); 岐阜県医療整備課受託研究費
- 2) 村上啓雄, 寺本貴英: 岐阜県予防接種センター委託事業(平成 20 年度~); 平成 20-23 年度; 4000 千円(1,000 : 1,000 : 1,000 : 1,000 千円); 岐阜県医療整備課受託研究費
- 3) 熊田恵介, 小倉真治, 村上啓雄, 小濱啓次, 福田充宏: 大学病院の救急医療体制における役割 現状分析と今後のあり方; 平成 22 年度; 926 千円; 平成 22 年度(財)救急進行財団調査研究助成事業

3) 共同研究

- 1) 村上啓雄: 国立大学医学部附属病院共通ソフト“感染症管理システム”を用いた全自動全面電子化医療関連感染サーベイランスに関する研究; 平成 12 年~現在; 0 円; 群馬大学

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

村上啓雄:

- 1) 日本感染症学会評議員(~現在)
- 2) 日本病態栄養学会評議員(~現在)
- 3) 日本環境感染症学会評議員(~現在)
- 4) 日本病態栄養学会 NST 実施委員会委員, 病態栄養専門師認定資格検討委員会委員(~現在)
- 5) 日本内科学会東海支部評議員(~現在)
- 6) 日本感染症学会施設内感染対策相談窓口回答者(~現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

村上啓雄:

- 1) 第 3 回岐阜県感染症・化療フォーラム(平成 21 年 1 月, 岐阜, 特別教育講演「抗菌薬体制菌の広がりとその対策」座長)
- 2) 特別推薦卒(地域卒)医学生の卒前教育をどうするか?~問題点の抽出と対策に関するシンポジウム(平成 21 年 2 月, 東京「岐阜大学医学部地域医療医学センター(CRM)の取り組み」演者)
- 3) 適正抗菌化学療法研究会~感染症治療におけるパラダイム・シフト~(平成 21 年 3 月, 愛知, シンポジウム「感染対策上適切な抗菌薬使用とは?」演者)
- 4) 第 82 回日本細菌学会 第 81 回 ICD 講習会(平成 21 年 3 月, 愛知「新興・再興感染症による院内感染と対策」司会)
- 5) 第 2 回日本静脈経腸栄養学会東海支部学術集会(平成 21 年 3 月, 岐阜, 特別講演「高齢者の栄養管理とその問題点」座長)
- 6) 国立大学附属病院感染対策協議会 平成 21 年度感染管理担当ブロック別研修会(東海・北陸・関西)(平成 21 年 6 月, 神戸, 全職種合同研修 I 新型インフルエンザ対策「自施設の新型インフルエンザマニュアルについて~岐阜大学医学部附属病院」司会 演者)
- 7) 第 7 回救急領域感染対策セミナー(平成 21 年 7 月, 岐阜, 特別講演「新型インフルエンザにどう立ち向かうか? 救急医療現場における対策」演者)
- 8) 第 20 回日本老年医学会東海地方会(平成 21 年 10 月, 愛知「冬場に備える感染対策」司会)

- 9) 第 20 回日本老年医学会東海地方会(平成 21 年 10 月, 愛知, パネリスト「予防接種」演者)
- 10) 適正抗菌化学療法研究会～感染症治療におけるパラダイム・シフト～(平成 21 年 11 月, 愛知, シンポジウム「感染対策」演者)
- 11) 第 16 回日本航空医療学会(平成 21 年 11 月, 岐阜, パネリスト「緊急討論 ドクターヘリ運航における新型インフルエンザ対策」演者)
- 12) 第 57 回日本化学療法学会西日本支部総会・第 52 回日本感染症学会中日本地方会(平成 21 年 11 月, 愛知, 教育講演「薬剤耐性菌電子化サーベイランスによる高精度の医療関連感染対策」演者)
- 13) 第 13 回日本病態栄養学会(平成 22 年 1 月, 東京, 「適切な経口摂取のすすめ方」司会)
- 14) 第 210 回日本内科学会東海地方会教育講演会(平成 22 年 2 月, 名古屋, 教育講演「内科医抗菌薬適正使用」演者)
- 15) 第 83 回日本細菌学会(平成 22 年 3 月, 横浜, 「院内感染症抑止に細菌学者が果たす役割」司会)
- 16) Fifth Decennial International Conference on Healthcare-Associated Infection 2010(平成 22 年 3 月, アトランタ, ポスターセッション「Usefulness of internet-based surveillance system for real-time detection of influenza outbreaks in Japan」演者)
- 17) 第 60 回日本病院学会(平成 22 年 7 月, 岐阜, シンポジウム「病院機能評価から学んだこと, 新しい基準における受審に向けて」演者)
- 18) 平成 22 年度日本病態栄養学会(平成 22 年 8 月, 仙台, 招待講演「5 補助食品 6 経腸栄養の種類 投与ルート 管理 7 経腸栄養の合併症対策」演者)
- 19) 平成 22 年度日本病態栄養学会(平成 22 年 9 月, 福岡, 招待講演「5 補助食品 6 経腸栄養の種類 投与ルート 管理 7 経腸栄養の合併症対策」演者)
- 20) 平成 22 年度日本病態栄養学会(平成 22 年 9 月, 東京, 招待講演「5 補助食品 6 経腸栄養の種類 投与ルート 管理 7 経腸栄養の合併症対策」演者)
- 21) 日本内科学会第 10 回東海支部専門医部会(平成 22 年 10 月, 名古屋, 特別講演「今後注目される感染症」演者)
- 22) 第 7 回岐阜県感染症セミナー(平成 22 年 11 月, 岐阜, 特別講演「新型インフルエンザと抗インフルエンザ薬の最近の話題」座長)
- 23) 第 38 回医学教育セミナー&ワークショップ(平成 22 年 11 月, 名古屋, シンポジウム「地域医療教育カリキュラム作成: 何を, どこまで, 学習すべきか?」演者)
- 24) 第 14 回日本病態栄養学会(平成 23 年 1 月, 横浜, シンポジウム「NST を始めるために必要な栄養管理の知識-3, 静脈栄養剤の種類とその特徴」演者)
- 25) 日本獣医公衆衛生学会(平成 23 年 2 月, 岐阜, 教育講演「感染症対策と電子化サーベイランスによる迅速な情報収集・共有」演者)
- 26) 岐阜県医師会女性医師就労継続支援講演会(平成 23 年 2 月, 岐阜, パネルディスカッション「岐阜大学医学部・同付属病院女性医師就労支援の会の活動」演者)
- 27) 第 26 回日本環境感染学会(平成 23 年 2 月, 横浜, 司会「診療報酬改定と感染対策～平成 22 年度診療報酬改定「感染防止対策加算」新設の与える影響」演者)
- 28) 岐阜県医師会勤務医部会(平成 23 年 3 月, 岐阜, パネルディスカッション「適切な栄養管理を考える」演者)
- 29) 第 24 回岐阜院内感染対策検討会(平成 23 年 4 月, 岐阜, 座長「薬剤耐性菌対策を見直す」演者)
- 30) 平成 23 年度日本病態栄養学会(平成 23 年 5 月, 東京, 招待講演「4 講義 5 経腸栄養の種類, 投与ルート, 管理 6 経腸栄養の合併症対策」演者)
- 31) 平成 23 年度日本病態栄養学会(平成 23 年 6 月, 京都, 招待講演「4 講義 5 経腸栄養の種類, 投与ルート, 管理 6 経腸栄養の合併症対策」演者)
- 32) 第 19 回日本集中治療医学会東海北陸地方会(平成 23 年 6 月, 名古屋, 教育講演「抗菌薬適正使用と薬剤耐性菌制御」演者)
- 33) 第 25 回岐阜院内感染対策検討会(平成 23 年 11 月, 岐阜, 座長「急性期病院の感染対策はどの施設でも同様にすべきか?」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

村上啓雄：

- 1) 国立大学医学部附属病院感染対策協議会委員(～現在)
- 2) 同協議会常任委員・ガイドライン作業部会委員長(～現在)
- 3) 岐阜地方裁判所専門員(～現在)
- 4) 岐阜県感染症予防委員会情報対策部会解析小委員会委員(～現在)
- 5) 岐阜県感染症予防委員会予防接種部会委員(～現在)
- 6) 岐阜県予防接種健康被害調査専門医師集団専門医師(～現在)
- 7) 岐阜県院内感染対策協議会委員(～現在)
- 8) 岐阜県院内感染対策相談窓口回答者(～現在)
- 9) 岐阜県国民健康保険診療審査委員会委員(～平成 21 年 6 月)
- 10) 岐阜県新型インフルエンザ対策委員会委員長(～現在)
- 11) (社)地域医療振興協会シニアプログラム「地域医療のすすめ」専門指導医(平成 21 年 4 月～現在)
- 12) 岐阜県へき地地域医療対策委員会委員(平成 21 年 7 月～現在)
- 13) 岐阜県立下呂温泉病院整備事業設計プロポーサル委員会委員(平成 21 年 10 月～平成 22 年 3 月)
- 14) 羽島市民病院改革プラン評価委員会委員(平成 22 年 4 月～現在)
- 15) 岐阜県立病院医療事故検討会委員(平成 22 年 4 月～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 村上啓雄：岐阜大・地域医療医学センター幅広い臨床能力を備えた医師養成 地域医療施設活用した研修プログラム：Japan Medicine 第 1568 号(2009 年 1 月 19 日)
- 2) 村上啓雄：岐阜大学 CRM の地域医療研修：中部日本放送テレビ(2009 年 1 月 19 日)
- 3) 村上啓雄：地域医療確保のための岐阜大学 CRM の取り組み：岐阜放送テレビ(2009 年 3 月 28 日)
- 4) 村上啓雄：高度救命救急のスタッフたち～生体支援の立場から感染対策等の経験をいかし、医療安全サポート～：月刊 GIFUTO(2009 年 4 月 20 日)
- 5) 村上啓雄：新型インフル ハイリスク者対策検討 県医療保健福祉協議会が初会合 来月上旬に答申：中日新聞(2009 年 5 月 28 日)
- 6) 村上啓雄：マスク、手洗い徹底を：岐阜大の村上教授 ハイリスク者対策重要 新型インフルエンザ対策 岐阜県初発生：岐阜新聞(2009 年 6 月 17 日)
- 7) 村上啓雄：新型感染予防の徹底 基本は手洗い・うがい ウイルスを洗い流す 新型インフルエンザ対策：岐阜新聞(2009 年 6 月 18 日)
- 8) 村上啓雄：医師不足解消を一医療現場「地域医療充実に不可欠」選択の夏 09 ぎふ衆院選：岐阜新聞(2009 年 8 月 23 日)
- 9) 村上啓雄：新型インフル解説 じゅうろくプラザ 岐阜大がシンポ 来月 1 日 岐阜大学シンポジウムの紹介「新型インフルエンザを科学する」：読売新聞(2009 年 9 月 29 日)
- 10) 村上啓雄：新型インフル予防対策を「接触感染に注意」「早期ワクチン接種」岐阜大でシンポ 教授らがアドバイス 岐阜大学シンポジウムの紹介「新型インフルエンザを科学する」：岐阜新聞(2009 年 10 月 2 日)
- 11) 村上啓雄：正しい知識と予防 市民らに呼び掛け 岐大シンポ 岐阜大学シンポジウムの紹介 新型インフルエンザを科学する：中日新聞(2009 年 10 月 2 日)
- 12) 村上啓雄：病院の実力～岐阜編 23 新型インフルエンザ 重症治療の整備急務電話連絡後に受診を岐阜大学医学部附属病院と新型インフルエンザ対策：読売新聞(2009 年 10 月 4 日)
- 13) 村上啓雄：新型インフルエンザ対策：岐阜放送(2009 年 12 月 6 日)
- 14) 村上啓雄：多剤耐性菌に立ち向かう：NHK 総合テレビ(2010 年 10 月 20 日)
- 15) 村上啓雄：多剤耐性菌～NDM-1 の脅威：NHK 教育テレビ(2010 年 11 月 13 日)
- 16) 村上啓雄：医師の育成・確保(コンソーシアム)、救急医療体制の充実・強化：岐阜放送(2010 年 12 月 19 日)

12. 自己評価

評価

平成19年度に発足した地域医療医学センター（Center for Regional Medicine：CRM）の業務を継続した。すなわち、地域枠推薦入試、岐阜県医学生修学資金受給学生指導・支援（第1種；地域枠、第2種とも）、地域医療と触れ合う医学科カリキュラム作成、初期臨床研修における「CRM 地域医療研修」の運営、岐阜県医師育成・確保コンソーシアムの運営、とくに岐阜県医学生修学資金受給者の初期臨床研修および指定勤務期間内の教育・ルールに基づいた適正勤務の管理、岐阜大学医学部・同附属病院女性医師就労支援の会の立ち上げおよび運営、岐阜県地域医療対策協議会など社会的活動、地域医療振興協会・自治医科大学卒業生との連携などを行ってきた。これらにより、岐阜大学医学部医学科の定員増後の学生確保、在学中の地域医療の重要性の教育、卒業後の地域医療現場での育成、医療の確保、医師の確保等に貢献できたものと思われる。また、女性医師就労支援の会の発足とともに、岐阜県の女子医学生および女性医師の意識調査や保育所実態調査を行い、女性医師のみならず医師の就労環境改善に寄与できたと考えられる。

現状の問題点及びその対応策

CRM 発足時に存在した外科系分野、小児系分野、産科系分野の各教授が相次いで退職し、内科系分野の教授（兼任）および専任助教2名のみとなっている。このほか兼任助教も在籍しているが、母体講座の仕事にほぼ専従している実態である。また寄附講座も平成23年度いっぱいまで廃止が予定されており、今後地域枠卒業生を多数輩出予定の現状を考慮すると、人員および組織面で教育、研究とも質の低下が懸念される。したがって、CRM 発足から5年経過後の平成24年度からは、新しくCRMを再結成し、教育職員がより専従業務を遂行できるように新たな気持ちで取り組みたい。

今後の展望

地域枠および岐阜県医学生第2種修学資金受給後に卒業する多数の研修医が、より適切に教育を受けられる体制、すなわち岐阜県内の全医師が一丸となって研修医を育成する体制を整備し、安心してキャリアアップおよび地域定着できるとともに、結果的に医師不足圏域の中核拠点病院を中心とした医療の確保、また医師の確保につながるよう、岐阜県医師育成・確保コンソーシアム体制も強化しつつCRMとしても最大限の努力をして、全国の地域医療確保のモデルとなるような業務展開をしなければならない。

★CRMの主な役割

- (1) 入試（地域枠推薦）
- (2) 岐阜県医学生修学資金受給者支援（1種；地域枠、2種）
- (3) 地域医療と触れ合うカリキュラム作成・学生指導
- (4) 初期臨床研修における「CRM 地域医療研修」の運営
- (5) 岐阜県医師育成・確保コンソーシアム
～修学資金受給者の初期臨床研修および指定勤務期間内の教育・適正勤務の管理
- (6) 岐阜大学医学部・同附属病院女性医師就労支援の会運営(2009～)
- (7) その他：岐阜県地域医療対策協議会など社会的活動

★コンソーシアム補足説明と課題

- (1) コンソーシアム登録（利用）の対象者
⇒地域枠（＝岐阜県医学生第1種修学資金受給者）卒業生全員
⇒第2種修学資金受給者は希望者が利用するが、第2種も指定勤務があるため、コンソーシアム登録がなくてもコンソーシアム事務局で個別に連絡をとり専門診療科や勤務先の確認および記録作業を行う。
⇒修学資金受給者以外の者も、希望者は登録を可能とする。
- (2) 初期臨床研修研修病院マッチングの問題（地域枠卒業生分）－現在構成病院に提案中
⇒地域枠の初期臨床研修は、岐阜県内の研修指定病院に限られるため、従来のマッチングではその他の希望者との調整が非常に難しい。
⇒善後策として、岐阜大学病院を管理病院とし、最低8カ月間を大学病院で研修スタート。その後構成病院を含め県内の研修指定病院をローテートする方式を、卒後臨床研修センターから提案し、現在調整中。
⇒これを実現させる（＝適切かつ確実に地域枠卒業生を地域に定着させる）ための必須の前提条件

として岐阜県全体のマッチング枠（140名）とは別に、大学病院に地域枠専用のマッチング枠を配置（最大25名）していただくことが必要である。医学部長病院長会議、岐阜県とともに厚労省に対して繰り返し交渉しなければならない。

(4) 地域医療医学センター（外科救急系分野）

1. 研究の概要

地域医療医学センターでは、地方における救急医療体制の現状と問題点、中間地域をささえるヘリコプター搬送の重要性、腹部大動脈瘤破裂救命のための救急搬送の重要性、地域枠入試学生のキャリアアップのための専門研修アンケート調査等を研究報告している。

また、消化器外科の研究分野では障害肝の治療や術後肝再生に関する研究を中心に進めている。LPS感作による術後肝不全予防、大建中湯による大量肝切除後肝再生改善、PG12による閉塞性大腸炎の治療、抗菌ペプチドによる体内人工物感染の治療を研究中である。

2. 名簿

教授： 山田卓也 Takuya Yamada
助教： 中野道代 Michiyo Nakano

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 土井智章. 第2章 集中治療法—急性血液浄化：小倉真治, 加藤久晶, 熊田恵介, 白井邦博, 土井智章, 豊田 泉, 長屋聡一郎, 吉田省造編. 図説臨床看護医学 デジタル版—21 集中治療, 東京：エディターシブ；2010年：1-7.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 熊田恵介, 豊田 泉, 小倉真治, 福田充宏. 中山間地域を支えるヘリコプター救急, 日本航空医療学会誌 2009年；10：5-10.
- 2) 山田卓也, 竹村博文. 冠動脈外科の術前リスク管理, 日本冠疾患学会雑誌 2009年；15巻：179-184.
- 3) 早川麻理子, 西村佳代子, 山田卓也, 岩田 尚, 竹村博文. 栄養アセスメントツールの対象患者と効果的な活用, 静脈経腸栄養 2010年；25巻：13-16.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 熊田恵介, 金田英巳, 吉田隆浩, 豊田 泉, 小倉真治, 福田充宏. へき地・離島における救急医療の改善に向けて—へき地・離島の救急医療と消防防災ヘリ 救急医学 2009年；33巻：792-796.
- 2) 熊田恵介, 金田英巳, 吉田隆浩, 豊田 泉, 小倉真治, 村上啓雄, 福田充宏. へき地・離島のある都道府県から学ぶこと—岐阜県 救急医学 2009年；33巻：821-825.
- 3) 熊田恵介, 豊田 泉, 小倉真治, 福田充宏. 電子カルテシステムを利用した救急医療の質の評価, 日本臨床救急医学誌 2009年；12巻：323-328.
- 4) 熊田恵介, 豊田 泉, 小倉真治, 福田充宏, 小濱啓次, 小関一英. 広域救急搬送体制の構築の必要性, 日本医事新報 2009年；4469：93-96.
- 5) 熊田恵介, 吉田隆浩, 豊田 泉, 小倉真治, 山田卓也, 村上啓雄, 福田充宏. へき地における救急搬送体制の構築—必要とされるへき地医療と救急医療の連携のあり方, へき地・離島救急医療研究会誌 2009年；9巻：74-77.
- 6) 小久保健太郎, 山田卓也, 木村真樹, 吉田直優, 關野考史, 竹村博文. 静脈瘤塞栓術が著効をみた人工肛門静脈瘤の1例, 日本臨床外科学会雑誌 2009年；70巻：147-150.
- 7) 松本茂美, 奥村洋子, 清島真理子, 熊田恵介, 吉田隆浩, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 女性医師・女子医学生の意識調査と女性医師就労支援の会の設立, 月刊地域医学 2010年；24巻：674-681.
- 8) 小倉真治, 熊田恵介, 土井智章, 豊田 泉, 吉田隆浩, 加藤久晶, 山田法頭. IT(intelligence technology)を活用したプレホスピタル情報のネットワーク, 救急医学 2010年；503-506.

原著（欧文）

- 1) Sugimoto T, Yamada T, Iwata H, Sekino T, Matsumoto S, Ishida N, Manabe H, Kimura M, Takemura H. Two-stage portal vein ligation facilitates liver regeneration in rats. Eur Surg Res. 2009;42:181-188. IF 1.214
- 2) Kimura M, Yamada T, Iwata H, Sekino T, Shirahashi K, Yoshida N, Kiyama S, Takemura H. Preoperative granulocyte-colony stimulating factor (G-CSF) treatment improves congested liver regeneration. J Surg Res. 2010;158:132-137. IF 2.239

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：山田卓也，研究分担者：岩田 尚，關野考史，木村真樹；科学研究費補助金基盤研究(C)：術前化学療法後脂肪性肝炎に対する抗ヒト TNF α モノクローナル抗体療法の開発；平成 20-22 年度；4,940 千円(4,420 : 390 : 130 千円)

2) 受託研究

- 1) 山田卓也，關野考史，吉田直優，木村真樹，杉本琢也：ゼロダ[®]錠 300 特定使用成績調査「DukesC 結腸癌における術後補助化学療法」；平成 21 年度；225,225 円：中外製薬(株)
- 2) 山田卓也，關野考史，吉田直優，木村真樹：アービタックス注射液 100 mg 使用成績調査；平成 21 年度；240,240 円：メルクセローノ(株)
- 3) 山田卓也，岩田 尚，島袋勝也，關野考史，白橋幸洋，吉田直優，水野吉雅，梅田幸生，木村真樹，池庄浩治臣，小久保健太郎：献血ベニロン - I 使用成績調査(低又は無ガンマグロブリン血症，重症感染症における抗生物質との併用，突発性血小板減少性紫斑病，川崎病の急性期)；平成 21-22 年度；600,600 円(300,300 : 300,300 円)：帝人ファーマ(株)
- 4) 山田卓也：デュロテップ MT パッチ 2.1 mg, 4.2 mg, 8.4 mg, 12.6 mg, 16.8 mg 使用成績調査；平成 21-22 年度；600,600 円(300,300 : 300,300 円)：ヤンセンファーマ(株)
- 5) 山田卓也，關野考史，木村真樹，加藤喜彦：バクティビックス特定使用成績調査-KRAS 遺伝子野生型の切除不能な進行・再発の結腸・直腸癌に関する調査-；平成 22 年度；225,225 円
- 6) 熊田恵介，小倉真治，村上啓雄，小濱啓次，福田充宏：大学病院の救急医療体制における役割現状分析と今後のあり方；平成 22 年度；500 千円：(財)救急振興財団調査研究助成事業

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

山田卓也：

- 1) 日本胃癌学会評議員(～現在)
- 2) 日本肝胆膵外科学会評議員(～現在)
- 3) 東海外科学会評議員(～現在)

熊田恵介：

- 1) 日本臨床救急医学会評議員(～現在)
- 2) 日本航空医療学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

山田卓也：

- 1) 岐阜臨床腫瘍学セミナー(平成 21 年 2 月，岐阜，講演「大腸がん外来化学療法の現在と今後」座長)
- 2) 第 45 回日本腹部救急医学会総会(平成 21 年 3 月，東京，ワークショップ「急性腹症での創閉鎖の工夫」演者)
- 3) 岐阜外科懇談会(平成 21 年 7 月，岐阜，講演「心疾患のあるがん患者さんの外科治療」演者)
- 4) 第 2 回消化器化学療法シンポジウム(平成 22 年 1 月，岐阜，講演「心疾患のあるがん患者さんの外科治療」演者)

- 5) 静岡県東部地区 XELOX+アバスチン療法適正使用カンファレンス(平成 22 年 4 月, 静岡, 特別講演「地方大学での外来化学療法の取り組み-XELOX+アバスチン療法について」演者)
- 6) 第 35 回日本外科系連合学会学術集会(平成 22 年 6 月, 千葉, パネルディスカッション「外科医師を増やすための岐阜大学高度先進外科の取り組み」パネリスト)
- 7) 第 3 回岐阜 DIF 研究会(平成 23 年 2 月, 東京, 講演「Special Lecture」座長)
- 8) 第 111 回日本外科学会(平成 23 年 3 月, 東京, 講演「大建中湯/Synbiotics 併用経腸栄養法は, 膵頭十二指腸切除術後の SIRS 期間を短縮する」演者)
- 9) 第 23 回日本肝胆膵外科学会(平成 23 年 6 月, 東京, 講演「膵頭十二指腸切除術後の大建中湯/Synbiotics 併用経腸栄養法の効果」演者)
- 10) 消化器外科学会(平成 23 年 7 月, 名古屋, 講演「大建中湯/Synbiotics 併用経腸栄養法と適切な糖尿管理は膵頭十二指腸切除時の術後合併症を低下させる」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 熊田恵介, 福田充宏: 地域における救命救急センターと地域の救急医療機関との連携と機能強化の方策に関する研究: 平成 20 年度厚生労働省科学研究費補助金 分担報告書(代表研究者 小濱啓次): 36-42(平成 21 年 3 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

- ・岐阜大学医学部地域枠入試説明会, 岐阜大学一次試験監督, 地域枠入試面接を行った
- ・第 20 回年度共用試験医学系 CBT 問題 地域医療分野を作成した。

現状の問題点及びその対応策

- ・下呂温泉病院に 1 ヶ月に 1 回の手術協力を定期的に行った。
- ・M4, M5, M6 の学生と研修医を対象とした外科手術手技セミナー(ドライラボ, ウエットラボ)を開催した。

今後の展望

- ・教育活動は, 全体として順調に行ったと考える。
- ・研究活動は, 母体分野の研究のみでなく, 地域医療医学センターとして鏡視下手術等も広めていく必要がある。
- ・学内活動, 社会活動もさらに積極的に参加する必要がある。

(5) 地域医療医学センター（小児系分野）

1. 研究の概要

地域医療医学センター小児系分野は、小児の地域医療に関する、教育・診療・研究を行う。岐阜県全域が対象であり、また、担当する。教育に関しては、高校生、医学部生、研修医に対して、地域医療の魅力・重要性を説明し、理解してもらえるように、常に情報を発信続ける。さらに、情熱を持って地域医療に取り組める医師の育成を行う。同時に、リサーチマインドを持ち続けられるような教育を行う。診療に関しては、限られた小児科医師の数を最大限に効率よく活用し、小児医療確保のための新たなシステム作りを目指す。研究は、疾患に及ぼす遺伝的要因と環境要因を明らかにする。比較的均一な地域を選び比較し検討する。疾患としては、感染症、アレルギー、免疫、生活習慣病、悪性腫瘍などを対象とする。

教育活動

医学部生の合宿に参加し、岐阜県の地域医療についての現状について説明し、さらに、その魅力について講演を行った。臨床研修医への説明会で、地域医療医学センターの役割について説明した。

岐阜高校の学生を対象に、岐阜県の地域医療の現状と、その重要性について講義をした。

岐阜大学医学部地域枠入試説明会、入試関連業務等に参加した。

小児科医師を確保するため、初期臨床研修の周産期プログラムの研修プログラムの具体的な内容を策定した。また、小児科後期研修医のサブスペシャリティを養成するためのプログラムを策定している（図1）。

地域医療医学センター運営委員会に出席し、地域医療の在り方について提言した。また、CRM スタッフ会議に参加し、小児系分野の地域医療の現状と課題、その対応策について提言している。

診療活動

より幅広く、専門性を深めた小児科研修を行うため、岐阜県総合医療センター、岐阜市民病院、国立病院機構長良医療センターと連携して、各病院で十分に研修ができにくい分野に関して、小児科後期研修医が各病院をローテイトするシステムを確立した。さらに、小児病態学と共同で、これらの施設を相互に有機的に連携させることで、機能的岐阜県小児医療センターを構築する試みを推進した（図2）。

夜間、休日の小児救急について、各圏域の実情に応じた体制で、その整備を行っている。岐阜圏域では、勤務医の負担を軽減するために、開業の先生の協力を得て、岐阜市民病院、岐阜県総合医療センターの外來にて、開業の先生が、一次救急をおこなうシステムが整備された。

研究活動

遺伝性の高発癌性疾患の一つである Bloom 症候群について、研究をすすめてきていたが、平成 22 年から厚生労働省難治性疾患克服研究事業として「Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査、早期診断法の確立に関する研究」が認められた。研究班を組織して、全国における実態調査を行っている。さらに、アレルギー疾患、血液疾患、先天性の免疫不全症の病態を解析し、論文発表を行った（J Investg Allergol Clin Immunol. 2010, J Clin Microbiol. 2011 等）。これらの疾患研究を通して、地域をフィールドとして行う小児の免疫、アレルギー、血液、悪性腫瘍の研究につなげている。

（記載内容の期間は、主に平成 21 年 1 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日までである。小児系分野は平成 19 年 5 月 1 日から平成 23 年 3 月 31 日まで担当）

2. 名簿

教授： 金子英雄 Hideo Kaneko (在籍；平成 23 年 3 月 31 日まで)

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 金子英雄. 食物アレルギー：宇理須厚雄, 向山徳子, 森川昭廣, 近藤直実, 相原雄幸, 有田昌彦, 伊藤浩明, 伊藤節子, 海老澤元宏, 柴田瑠美子編. 経口負荷試験ガイドライン 2009, 東京：協和企画；2009 年.
- 2) 金子英雄. Wiskott-Aldrich 症候群：和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第 2 版, 東京：医学書院；2010 年：310.
- 3) 金子英雄. 新生児ループス：和田 攻, 南 裕子, 小峰光博編. 看護大辞典 第 2 版, 東京：医学書院；2010 年：1573.

著書（欧文）

- 1) Kondo N, Matsui E, Kaneko H, Fukao T, Teramoto T, Kato Z, Ohnishi H, Nishimura A. Genetics of Pediatric Asthma. In: Pawankar R, Holgate S.T, Rosenwasser L.J, eds. Allergy Frontiers: Epigenetics, Allergens and Risk Factors. pt1. Tokyo: Springer; 2009:189-203.

総説 (和文)

- 1) 近藤直実, 大西秀典, 徳見哲司, 金子英雄, 加藤善一郎. 感染症・免疫異常の臨床遺伝学, 小児科診療 2009年; 72巻: 77-82.
- 2) 近藤直実, 金子英雄, 渡邊倫子, 加藤善一郎. 原発性(先天性)免疫不全症の分類, 小児科診療 2009年; 72巻: 178-187.
- 3) 近藤直実, 大西秀典, 徳見哲司, 金子英雄, 加藤善一郎. 【小児科医に役立つ臨床遺伝学】臨床遺伝学のトピックス 感染症・免疫異常の臨床遺伝学, 小児科診療 2009年; 72巻: 77-82.
- 4) 森田秀行, 金子英雄, 大西秀典, 加藤善一郎, 松井永子, 深尾敏幸, 中埜 拓, 近藤直実. 食物アレルギー寛容誘導に向けた抗原エピトープの解析と治療戦略, *Visual Dermatology* 2009年; 8巻: 966-969.
- 5) 徳見哲司, 大西秀典, 金子英雄, 加藤善一郎, 近藤直実. 自然免疫系の障害による原発性免疫不全症の最近の動向-Toll様受容体シグナル伝達経路異常, 特に MyD88 欠損症の最新情報も含めて-, アレルギー 2009年; 58巻: 19-28.
- 6) 松井永子, 川本典生, 金子英雄, 深尾敏幸, 近藤直実. 小児喘息の関連遺伝子, アレルギーの臨床 2009年; 29巻: 221-226.
- 7) 金子英雄, 近藤直実. 分類不能型免疫不全症候群および免疫グロブリンサブクラス欠損症, 臨床検査 2009年; 53巻: 569-574.
- 8) 近藤直実, 大西秀典, 加藤善一郎, 松井永子, 木村 豪, 徳見哲司, 森田秀行, 金子英雄, 寺本貴英. 免疫不全とアレルギー-特に, 自然免疫系の分子のタンパク構造生物学的視点から-, 日本小児アレルギー学会誌 2009年; 23巻: 203-211.
- 9) 金子英雄, 鈴木啓子, 近藤直実. IgA・IgA サブクラスと IgA 欠損症の病態, 日本臨床免疫学会誌 2009年; 32巻: 142-148.
- 10) 大西秀典, 加藤善一郎, 寺本貴英, 船戸道徳, 金子英雄, 深尾敏幸, 近藤直実. 自然免疫の分子構造に基づいた自己炎症性症候群の診断へのアプローチ, アレルギー 2009年; 58巻: 1502-1512.
- 11) 近藤直実, 大西秀典, 川本美奈子, 森田秀行, 加藤善一郎, 金子英雄, 松井永子, 寺本貴英. シンポジウム 2 乳幼児アトピー性皮膚炎の悪化因子と予防 母乳とその成分, 日本小児皮膚科学会誌 2009年; 28巻: 49-55.
- 12) 近藤直実, 金子英雄. 母乳とアレルギー, 小児科 2010年; 51巻: 923-928.
- 13) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 加藤善一郎, 折戸万紀子. 疾患群の遺伝学的検査(Genetic Testing)と遺伝子検査(Gene-Based Testing). アレルギー疾患-Allergic disorders-, 日本臨床 遺伝子診療学(第2版) 2010年; 68巻(増刊号): 388-396.
- 14) 川本美奈子, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 近藤直実. 食物アレルギーの感作と発症. 臨床免疫・アレルギー科 2010年; 54巻: 558-563.

総説 (欧文)

- 1) Kondo N, Matsui E, Nishimura A, Kaneko H. Pharmacogenetics of asthma in children. *Allergy Asthma Immunol Res.* 2010;2:14-19.

原著 (和文)

- 1) 松井永子, 近藤直実, 金子英雄, 川本美奈子, 折居建治, 佐々木聖, 中野康伸, 花岡康彦. 小児気管支喘息患児におけるトシル酸スプラスタの有用性の検討, 小児科診療 2009年; 12巻: 2379-2392.
- 2) 松本茂美, 奥村陽子, 清島真理子, 熊田恵介, 吉田隆浩, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 女性医師・女子医学生の意識調査と女性医師就労支援の会の設立, 月刊地域医学 2010年; 24巻: 674-681.
- 3) 奥村陽子, 松本茂美, 吉田隆浩, 熊田恵介, 川口順敬, 宇野嘉弘, 山田隆司, 山田卓也, 金子英雄, 村上啓雄, 犬塚 貴. 岐阜大学医学部地域医療医学センターにおける地域医療研修のとりくみと研修医及び指導医アンケート調査, 月刊地域医学 2011年; 25巻: 56-61.

原著 (欧文)

- 1) Ozeki M, Kato Z, Sasai H, Kubota K, Funato M, Orii K, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Congenital inner ear malformations without sensorineural hearing loss in children. *Int J Pediatr Otorhinolaryngol.* 2009;73:1484-1487. IF 1.067
- 2) Kato Z, Okuda M, Okumura Y, Arai T, Teramoto T, Nishimura M, Kaneko H, Kondo N. Oral administration of the thyrotropin-releasing hormone (TRH) analogue, taltireline hydrate, in spinal muscular atrophy. *J Child Neurol.* 2009;24:1010-1012. IF 1.668
- 3) Funato M, Fukao T, Sasai H, Hori T, Terazawa D, Ozeki M, Orii K, Teramoto T, Kaneko H, Kondo N. Translocation (1;10)(p34;p15) in infant acute myeloid leukemia with extramedullary infiltration in multiple sites. *Cancer Genet Cytogenet.* 2009;192:86-89. IF 1.551
- 4) Funato M, Kato H, Sasai H, Kubota K, Ozeki M, Kato Z, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Diffuse large B-cell lymphoma presenting with osteolytic lesions in the bilateral Femur. *Eur J Haematol.* 2009;83:502. IF 2.785
- 5) Morimoto M, Matsui E, Kawamoto N, Sakurai S, Kaneko H, Fukao T, Iwasa S, Shiraki M, Kasahara K, Kondo N. Age-Related changes of Transforming Growth Factor β 1 in Japanese children. *Allergol Int.* 2009;58:97-102.

- 6) Suzuki H, Kaneko H, Fukao T, Jin R, Kawamoto N, Asano T, Matsui E, Kasahara K, Kondo N. Various Expression patterns of $\alpha 1$ and $\alpha 2$ genes in IgA Deficiency. *Allergol Int.* 2009;58:111-117.
- 7) Ozeki M, Kunishima S, Kasahara K, Funato M, Teramoto T, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. A family having type 2B von Willebrand disease with an R1306W mutation: Severe thrombocytopenia leads to the normalization of high molecular weight multimers. *Thromb Res.* 2010;125:e17-e22. IF 2.372
- 8) Ozeki M, Funato M, Teramoto T, Ohe N, Asano T, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Reversible cerebrospinal fluid edema and porencephalic cyst, a rare complication of ventricular catheter: Case report and literature review. *J Clin Neurosci.* 2010;17:658-661. IF 1.165
- 9) Matsui E, Shinoda S, Fukutomi O, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Relationship between the benefits of suplatast tosilate, a Th2 cytokine inhibitor, and gene polymorphisms in children with bronchial asthma. *Exp Thera Med.* 2010;1:977-982.
- 10) Kaneko H, Teramoto T, Kondo M, Morita H, Ohnishi H, Orii KE, Matsui E, Kondo N. Efficacy of the slow dose-up method for specific oral tolerance induction in children with cow's milk allergy: comparison with reported protocols. *J Investg Allergol Clin Immunol.* 2010;20:538-539. IF 1.489
- 11) An Y, Ohnishi H, Matsui E, Funato M, Kato Z, Teramoto T, Kaneko H, Kimura T, Kubota K, Kasahara K, Kondo N. Genetic variations in MyD88 adaptor-like are associated with atopic dermatitis. *Int J Mol Med.* 2011;27:795-801. IF 1.814
- 12) Kaneko H, Fukao T, Kasahara K, Yamada T, Kondo N. Augmented cell death with Bloom syndrome helicase deficiency. *Mol Med Rep.* 2011;40:607-609. IF 0.307
- 13) Funato M, Fukao T, Sasai H, Hori T, Terazawa D, Kubota K, Ozeki M, Orii K, Kaneko H, Kondo N. Successful treatment of pediatric immune thrombocytopenic purpura associated with ulcerative colitis. *Pediatr Int.* 2011;53:771-773. IF 0.755
- 14) Funato M, Kaneko H, Kubota K, Ozeki M, Kanda K, Orii K, Kato Z, Fukao T, Kondo N. Pediatric acute lymphoblastic leukemia mimicking Henoch-Schönlein purpura. *Pediatr Int.* 2011;53:766-768. IF 0.755
- 15) Funato M, Kaneko H, Ohkusu K, Sasai H, Kubota K, Ohnishi H, Kato Z, Fukao T, Kondo N. Refractory chronic pleurisy caused by *Helicobacter equorum*-like bacterium in a patient with X-linked agammaglobulinemia. *J Clin Microbiol.* 2011;49:3432-3435. IF 4.220
- 16) Morita H, Kaneko H, Ohnishi H, Kato Z, Kubota K, Yamamoto T, Matsui E, Teramoto T, Fukao T, Kasahara K, Kondo N. Structural property of soybean protein P34 and specific IgE response to recombinant P34 in patients with soybean allergy. *Int J Mol Med.* 2011;29:153-158. IF 1.814
- 17) Morita H, Kaneko H, Ohnishi H, Kato Z, Kondo N. Antigen-specific immune response to endotoxin-free recombinant P34. *Allergy.* 2011;66:985-986. IF 6.297

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：金子英雄；科学研究費補助金基盤研究(C)：抗体産生不全症における新たな病態の解明と臨床像との関連；平成 20－22 年度；4,680 千円(2,210：1,300：1,170 千円)
- 2) 研究代表者：金子英雄；研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査，早期診断法の確立に関する研究；平成 22 年度；19,500 千円
- 3) 研究代表者：水谷修紀；研究分担者：金子英雄；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：毛細血管拡張性小脳失調症の実態調査，早期診断法確立と，病態評価に関する研究；平成 22 年度；1,000 千円
- 4) 研究代表者：金子英雄；独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業：食物アレルギーの病因病態の遺伝子学およびタンパク質構造学的解明；平成 17－21 年度；85,500 千円(19,000：19,000：19,000：14,500：14,000 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 近藤直実，金子英雄：先天性免疫不全症の原因遺伝子同定および病態形成機序の解明；平成 17－22 年度；独立行政法人理化学研究所

5. 発明・特許出願状況

- 1) 近藤直実，金子英雄，大西秀典，森田秀行，栗本森義：大豆アレルギー免疫寛容誘導剤(特許)；平成 22 年(特願 2010-026557)
- 2) 中埜 拓，加藤晴彦，近藤直実，金子英雄，大西秀典，森田秀行：経口免疫寛容を誘導するペプチド組成物及びその製造方法(特許)；平成 22 年(特開 2008-195618)

- 3) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄: アトピー素因を規定する遺伝子の検出方法(発明); 平成 22 年(特願 2004-532780) (特許第 4547492)
- 4) 中埜 拓, 加藤晴彦, 近藤直実, 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行: 経口免疫寛容を誘導するペプチド組成物およびその調製方法(特許); 平成 22 年(特願 2010-36982)

6. 学会活動

1) 学会役員

金子英雄:

- 1) 日本アレルギー学会代議員(～現在)
- 2) 日本アレルギー協会評議員(～平成 22 年 8 月)
- 3) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 4) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 5) 東海小児がん研究会幹事(～現在)
- 6) 中部小児がんトータルケア研究会 幹事(～現在)
- 7) 東海小児アレルギー談話会幹事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

金子英雄:

- 1) 第IV期アレルギー大学開講記念講演会&アレルギーっ子防災の集い(平成 21 年 3 月, 名古屋, 記念講演「アレルギーで困らない社会に&私たちは災害にどう立ち向かうか 将来のアレルギー治療の方向 -アレルギーにならない時代はやってくるか?-」演者)
- 2) 第 145 回東三河小児科医会総会・学術講演会(平成 21 年 4 月, 豊橋, 特別講演 1「岐阜県における小児地域医療の取り組み」演者)
- 3) 保育所保健・安全に関する研修会(平成 21 年 6 月, 岐阜, 講演「幼児の疾病」演者)
- 4) 平成 21 年アレルギー大学岐阜会場基礎・初級(平成 21 年 7 月, 岐阜, 講演「医学 基礎-食物アレルギーの基本-」演者)
- 5) 平成 21 年アレルギー大学岐阜会場基礎・初級(平成 21 年 7 月, 岐阜, 講演「医学 1-アレルギー別の症状と対応-」演者)
- 6) 岐阜高校フィールドワーク(平成 21 年 8 月, 岐阜, 講演「現在の産婦人科・小児科の現状を知る 岐阜高校フィールドワーク」演者)
- 7) 平成 21 年度 4 年生合宿(平成 21 年 9 月, 岐阜, 講演「地域医療について」演者)
- 8) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, ミニシンポジウム「食物アレルギー・薬物アレルギー 病態生理と治療 経口免疫療法を中心に 牛乳アレルギーにおける特異的経口免疫寛容の誘導法(岐大方式)」演者)
- 9) 第 59 回日本アレルギー学会秋季学術大会(平成 21 年 10 月, 秋田, ミニシンポジウム「食物アレルギー・薬物アレルギー 病態生理と治療 経口免疫療法を中心に 牛乳アレルギーにおける BLG による経口免疫寛容誘導の検討」演者)
- 10) つばさの会(先天性免疫不全症の患者の会)(平成 21 年 11 月, 大阪, 講演「PID(primary immunodeficiency)合併症との付き合い方について」演者)
- 11) 第 17 回岐阜アレルギー疾患治療研究会(平成 21 年 11 月, 岐阜, 世話人)
- 12) 第 18 回小児臨床薬理・アレルギー・免疫研究会(平成 22 年 1 月, 四日市, ランチョンセミナー3「乳幼児喘息コントロール評価のコツ」座長)
- 13) 第 20 回国際喘息学会日本・北アジア部会(平成 22 年 7 月, 東京, 講演「新型インフルエンザによる肺炎合併症例におけるサイトカインプロファイルと遺伝子多型の解析」演者)
- 14) The 14th International Congress of Immunology(平成 22 年 8 月, Kobe, Workshop Various expression patterns of alpha1 and alpha2 genes in IgA deficiency. -Primary immunodeficiency-; 演者)

- 15) The 8th Asia Pacific Congress of Allergy, Asthma and Clinical Immunology(APCAACI) / Asia Pacific Association of Pediatric Allergy, Respiriology and Immunology (APAPARI) (平成 22 年 11 月, Singapore, Expression and purification of recombinant soybean protein P34 and its clinical application ; 演者)
- 16) 第 60 回日本アレルギー学会秋季臨床大会(平成 22 年 11 月, 東京, シンポジウム「小児喘息の新型インフルエンザによる肺炎合併症の発症機序－新型インフルエンザと喘息について多面的に考える－」演者)
- 17) 第 47 回日本小児アレルギー学会(平成 22 年 11 月, 横浜, シンポジウム「食物アレルギーの発症・増悪を修飾する因子－食べて治す食品(2005 岐阜)開発への展開－, アレルギー疾患の経過を修飾する因子」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 金子英雄：小児医学川野賞(平成 21 年)

9. 社会活動

金子英雄：

- 1) 岐阜地域小児救急医療体制連絡会議委員(～現在)
- 2) 岐阜地域小児救急医療協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜圏域小児救急医療協議会(～現在)

10. 報告書

- 1) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 岩砂眞一, 白木 誠：アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(海老澤班)：17(平成 21 年 2 月)
- 2) 近藤直実, 大西秀典, 川本美奈子, 森田秀行, 松井永子, 深尾敏幸, 金子英雄：アトピー性皮膚炎発症と母乳の関連, 特に母乳成分の解析に関する研究：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(河野班)：33(平成 21 年 2 月)
- 3) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠：アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー性疾患の発症・進展・重症化の予知に関する研究 分担研究報告書(海老澤班)：8-11(平成 21 年 3 月)
- 4) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠：アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究：平成 18-20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究 総合研究報告書(海老澤班)：14-17 (平成 21 年 3 月)
- 5) 大西秀典, 加藤善一郎, 木村 豪, 名田匡利, 徳見哲司, 長屋聡一郎, 金子英雄, 近藤直実：化膿性細菌感染に関与する Toll 様受容体の細胞内シグナル伝達機構の構造生物学的解析：平成 20 年度 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 分担研究報告書(原班)：134-137(平成 21 年 3 月)
- 6) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄：アレルギー疾患の自己管理と個別化医療を目指した早期診断基準と早期治療法の確立及びその有効性と有害事象の評価に関する研究：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 分担研究報告書(大田班)：41-43(平成 21 年 3 月)
- 7) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠：アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究：平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 分担研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第 1 分冊(海老澤班)：146-149(平成 21 年 3 月)
- 8) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行, 加藤善一郎：食物アレルギーの感作発症予知と免疫療法の開発 -積極的治療法(経口免疫寛容誘導)-：平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(海老澤班)：124(平成 22 年 2 月)
- 9) 金子英雄, 篠田紳司, 福富 悧, 近藤直実：気管支喘息発症のテーラーメイド的予知予防に有用な遺伝子多型の検討：平成 21 年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 報告書(近藤班)：49-

56(平成 22 年 2 月)

- 10) 近藤直実, 金子英雄, 松井永子: 新型インフルエンザによる肺炎合併症例におけるサイトカインプロフィールの解析: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業 小児喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及びガイドラインに関する研究 総括・分担研究報告書(インフルエンザ班): 55-59(平成 22 年 3 月)
- 11) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄: 新型インフルエンザによる肺炎合併症例における遺伝子多型の解析: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 厚生労働科学特別研究事業 小児喘息患児における新型インフルエンザの重症化機序分析のための全国調査及びガイドラインに関する研究 総括・分担研究報告書(インフルエンザ班): 61-64(平成 22 年 3 月)
- 12) 大西秀典, 寺本貴英, 加藤善一郎, 木村 豪, 金子英雄, 近藤直実: 当科で経験した CIAS1 遺伝子異常症 5 例の分子生物学的解析(特に IL-18 の関与について): 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 分担研究報告書(原班): 81-84(平成 22 年 3 月)
- 13) 金子英雄, 船戸道徳, 久保田一生, 大西秀典, 寺本貴英, 加藤善一郎, 深尾敏幸, 近藤直実: X 連鎖無ガンマグロブリン血症にみられた高エンドトキシン血症を伴った慢性胸膜炎の病態解析: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 分担研究報告書(原班): 90-92(平成 22 年 3 月)
- 14) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行, 加藤善一郎: 食物アレルギーの感作発症予知と免疫療法の開発: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 食物アレルギーの発症要因の解明および耐性化に関する研究 分担研究報告書(免疫アレルギー疾患分野)第 3 分冊(海老澤班): 144-146(平成 22 年 3 月)
- 15) 近藤直実, 松井永子, 金子英雄, 大西秀典, 森田秀行, 加藤善一郎: 食物アレルギーの感作発症予知と免疫療法の開発: 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 食物アレルギーの発症要因の解明および耐性化に関する研究 分担研究報告書(海老澤班): 16-18(平成 22 年 4 月)
- 16) 金子英雄: Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査, 早期診断法の確立に関する研究: 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査, 早期診断法の確立に関する研究 総括研究報告書(金子班): 1-14(平成 23 年 3 月)
- 17) 金子英雄: Bloom 症候群の二次アンケート調査の解析: 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査, 早期診断法の確立に関する研究 分担研究報告書(金子班): 19-23(平成 23 年 3 月)
- 18) 金子英雄: Bloom 症候群の診断指針の作製: 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業 Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査, 早期診断法の確立に関する研究 分担研究報告書(金子班): 35-37(平成 23 年 3 月)

11. 報道

- 1) 金子英雄: 病児・病後児対応で議論: 岐阜新聞(2011 年 3 月 8 日)

12. 自己評価

評価

教育活動

高校生, 医学部生, 研修医に対して, 岐阜県の地域医療についての現状, 地域医療医学センターの役割について説明し, さらに, その魅力について講演を行うことで, 地域医療医学センターの役割を正しく認識してもらい, 地域医療の重要性についての理解が得られた。岐阜大学医学部地域枠入試説明会, 入試関連業務等に参加し, 地域医療を選択する学生の入試に関して役割を果たした。

小児科医師を確保するため, 初期臨床研修の周産期プログラムの研修プログラムの具体的な内容を策定した。そのプログラムに従い, 初期研修が行われている。また, 小児科後期研修医のために, サブスペシャリティ養成のためのプログラムを策定し, 初期臨床研修医に説明することで, 一貫した教育の重要性が研修医に理解されたと考える。

地域医療医学センター運営委員会に出席し, 地域医療の在り方について提言した。CRM スタッフ会議に参加し, 小児系分野の地域医療の現状と課題とその対応策について提言ができた。小児科の特徴を他科の先生に知ってもらうことができた。

診療活動

よりよい小児科研修を行うため、岐阜県総合医療センター、岐阜市民病院、国立病院機構長良医療センターと連携して、各病院で十分に研修できない分野に関して、後期研修医が各病院をローテートするシステムを確立した。これは、研修医、研修病院の双方にとって有益であったと考えられる。さらに、機能的岐阜県小児医療センターの構築を推進した。

夜間、休日の小児救急について、各圏域の実情に応じた体制を整備した。岐阜圏域では、岐阜市民病院、岐阜県総合医療センターの外来にて、開業の先生が、一次救急を担当することで、勤務医の負担を軽減することができた。

小児科医師の配置に関しては、小児科の医局と連携を密に行い、本人の希望を基にして、小児科医としてのキャリアパスを十分考慮した上で、勤務先の選定が行われた。

研究活動

遺伝性の高発癌性疾患の一つである Bloom 症候群について、平成 22 年から厚生労働省難治性疾患克服研究事業として「Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査、早期診断法の確立に関する研究」が認められた。研究班を組織して、全国における実態調査、早期診断法の確立を行い、平成 22 年の成果として報告書を作製することができた。先天性の免疫不全症、アレルギーの病態を解析し、論文発表を行った (J Investg Allergol Clin Immunol. 2010, J Clin Microbiol. 2011)。地域の小児科における、免疫、アレルギー、悪性腫瘍の病態解明を行うことができた。

小児系分野として、教育・診療・研究の各領域とも、ほぼ、良好な結果が得られたと考えている。

現状の問題点及びその対応策

岐阜県における小児地域医療を確保し、質の高い医療を提供するためには、地域医療に情熱をもって従事し、その一方で、リサーチマインドを持ち続けられる医師の育成が必要である。そのためには、研修医を集められる岐阜県の病院と、岐阜大学の各医局、地域医療医学センターが連携して、医師の教育にあたることを求められる。

今後の展望

今後、地域枠を選択し入学した学生、岐阜県からの奨学金を貸与された学生が、初期研修を終え、後期研修を開始する。地域医療医学センターの小児系分野は、小児科研修医師、大学病院、関連病院の間をコーディネートし、個々の医師のキャリアパスを考えた勤務先の選定を行うセンターとしての役割を果たすために、益々、重要になってくると考えられる。今後、小児科系、産科系など、特に医師不足が著しい分野において、引き続き地域医療の教育・診療・研究の継続が望まれる。

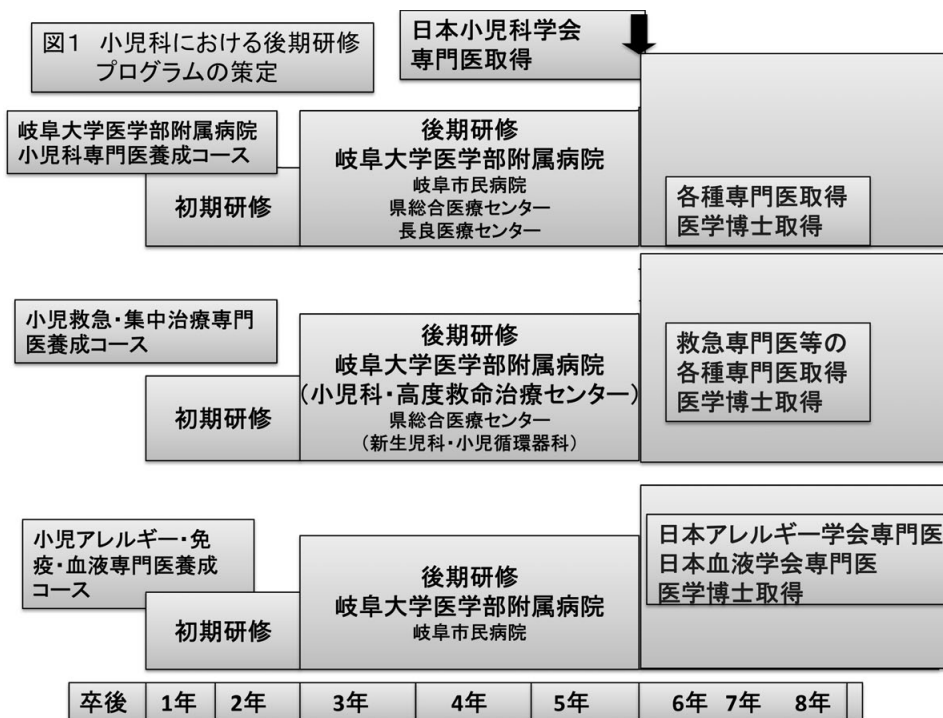
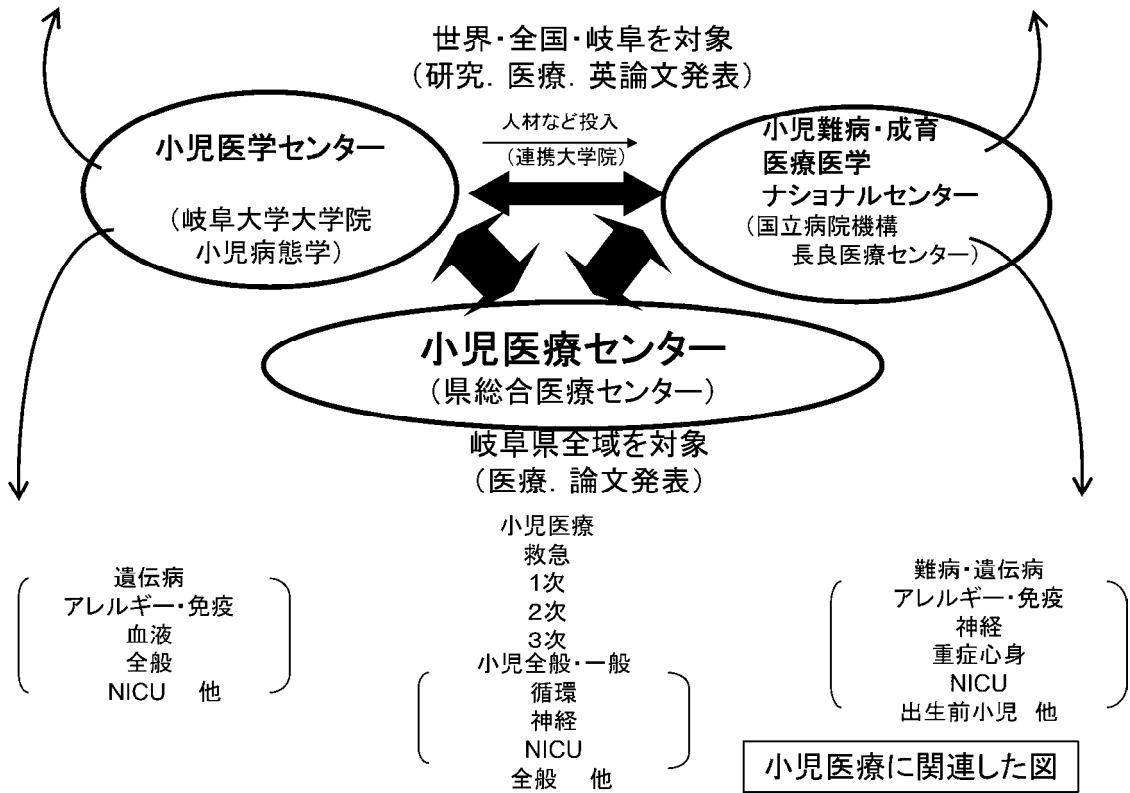


図2 機能的統合岐阜小児医療医学センター(案)
 岐阜大学小児病態学教室と共同で策定



(6) 地域医療医学センター（総合臨床系分野）

1. 研究の概要

地域（特に僻地）医療における大学の役割（地域のニーズと大学の関与方法など）について検討する。
また、実務的な指導（地域における救急医療のあり方）の方法についても検討する。

2. 名簿

助教： 吉田隆浩 Takahiro Yoshida

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）
なし

総説（欧文）
なし

原著（和文）
なし

原著（欧文）
なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金
なし

2) 受託研究
なし

3) 共同研究
なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員
なし

2) 学会開催
なし

3) 学術雑誌
なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

学会活動など、教員としての評価では救急災害教員としての、外傷教育を行うなどしている。地域医療としては岐阜県内の地域（へき地）救急医療の啓蒙を積極的に行なっている。また、高山、下呂など実務については月 6 日程度行っており、これは大学での活動と平行しておこなうことは、かなり大変であり、評価されるべきものとする。

現状の問題点及びその対応策

学会活動・評論などが十分に行えていないので、そちらについては、教育活動のアンケート結果や地域医療の現状をデータ化し、いずれかの場面で発表したい。

今後の展望

総合臨床系が現在一人での活動であり、人材増加ならばもう少し色々なことができると考えるが、現状では、実状報告程度の活動しかできないため、地道に取り組むしかない。

(7) 地域医療医学センター（地域へき地総合医療分野）

1. 研究の概要

本部門は岐阜県が設置する寄付講座「地域医療学」と連携しへき地等における医療の確保に関する下記の調査研究を行っている。

1. へき地を含む地域における医療ニーズに関する調査研究
2. 相互的な診療能力を持った医師を養成するための教育に関する研究
3. へき地医療を支援するためのシステムに関する研究

《研究等の具体的内容》

現在本県のみならず全国各地で医療崩壊が呼ばれ、地域によって必要な医療が受けられない状況が生まれている。そんな中で地域ごとに限られた医療資源を活用して効率的に医療サービスを提供する仕組み作りが急がれている。本研究では地域医療という視点から具体的な方策を提言することを目指している。

1. へき地を含む地域における医療ニーズに関する調査研究

(1) 目的

へき地等を含む地域における必要な医療提供システムを構築するためどのような医療ニーズがあるかを調査する。

(2) 内容と手法

①へき地等における健康問題の頻度調査

へき地等において日常的に発生する健康問題について、へき地等の医療機関受診する患者の受診理由、疾病等を調査する。

②へき地を含む地域の二次医療機関の入院患者の疾病調査

地域の二次病院での入院患者の診療記録等を調査する。

(3) 期待される効果

地域で完結すべき医療ニーズを調査することによって、地域に必要な医療提供のレベルとサービス量を確認する。

2. 総合的な診療能力を持った医師を養成するための教育に関する研究

(1) 目的

へき地等で少ない医師数で多様な医療ニーズに応えるためには一人の医師が総合的に対応することが必要で、そういった医師を養成するための方策について研究する。

(2) 内容と手法

①へき地診療医師の実態調査

現在へき地診療に勤務する医師から、へき地医療を担うための必要な技能、知識について調査する。

②総合的な診療能力を持つ医師を育成する教育研修に関する調査研究

全国で取り組まれている、総合的な診療能力を持つ医師のための卒前教育や卒後研修について実態調査する。

③総合医育成プログラムの策定

本学において実行できる卒前教育における地域医療実習、卒後研修における地域医療研修、総合医を目指す後期研修プログラムを策定する。

④海外における総合医育成システムの調査、研究

海外（北米、欧州、アジア等）における総合医育成システムを調査研究し、優れた総合医育成のあり方を検討する。

(3) 期待される効果

将来県内の地域医療を積極的に担おうとする医師を養成することが可能となる。

2. 名簿

特任教授： 山田隆司 Takashi Yamada

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説 (和文)

- 1) 山田隆司. 新たなカリキュラムによる生涯教育制度の導入をめぐって, 日本医師会雑誌 2010 年; 139 巻: 1201-1215.
- 2) 山田隆司. どう発展させる 病院総合医, 病院 2011 年; 70 巻: 13-18
- 3) 山田隆司. 地域医療振興協会と女川町支援, 月刊地域医学 2011 年; 25 巻: 12-16.
- 4) 山田隆司. 地域医療再生計画書を検証する, 病院 2011 年; 70 巻: 13-18
- 5) 山田隆司. 診療所の医師とは?, 診療所マニュアル 2011 年; 3 巻: 8-12.
- 6) 山田隆司. 地域医療と総合医, 地域医療は, 今 2011 年; 1 巻: 176-194.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 山田隆司. 三学会統合の展望—地域医療の充実のための家庭医・総合医の養成を目指して, プライマリ・ケア 2010 年; 33 巻: 16-17.
- 2) 山田隆司. 日本に医療が抱える問題に対して学会専門医・認定医が果たす役割は?, 日本プライマリケア連合学会誌 2011 年; 34 巻: 48-49.

原著 (欧文)

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

山田隆司:

- 1) 日本家庭医療学会代表理事(～現在)
- 2) 日本プライマリ・ケア学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

山田隆司:

- 1) 月刊地域医学; 編集長(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

山田隆司:

- 1) 東京都病院学会(平成 22 年 2 月, 東京, ランチョンセミナー「地域医療再生と地域病院の役割—区立台東病院と総合医療—」招待シンポジスト)
- 2) 川崎病院総合診療科・教育指導部(平成 23 年 1 月, 神奈川県, 講演「地域医療と総合医」演者)
- 3) 関市国保年金課(平成 23 年 2 月, 岐阜, 講演「安全・安心な地域医療体制を目指して 地域医療の現状と課題」演者)
- 4) 台東区老人クラブ連合会事務局(平成 23 年 3 月, 東京, 講演「元気な高齢者のための介護予防について 健やかに老いる」演者)

- 5) 浅草法人会事務局(平成 23 年 4 月, 東京, 講演「地域医療のこれから」演者)
- 6) 順天堂大学医学部(平成 23 年 4 月, 東京, 講演「地域医療」演者)
- 7) 第 2 回日本プライマリケア学会(平成 23 年 7 月, 札幌, シンポジウム「予防医療 健康増進」座長)
- 8) 第 5 回へき地・地域医療学会(平成 23 年 8 月, 東京, シンポジウム「震災と地域医療～課題と展望～」座長)
- 9) 第 14 回浅草医学会(平成 23 年 10 月, 東京, 教育講演「震災と地域医療」講演)
- 10) 全国自治体病院学会第 50 回記念大会(平成 23 年 10 月, 東京, シンポジウム「医療の現場から総合医の必要性を考えるー地域医療再生の観点からー」シンポジスト)
- 11) 韓国 家庭医療学会(平成 23 年 11 月, ソウル, シンポジウム「Primary Care in Japan 2011 –New and Futureー」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 山田隆司：蘇れ医療「揺らぐ安全網」頼れる「かかりつけ医」：日本経済新聞(2009 年 3 月 27 日)
- 2) 山田隆司：どうなる総合医「現場不在の総合医論議」「現場不在の総合医論議」：日経メディカル(2009 年 5 月 10 日)
- 3) 山田隆司：病院トップ訪問「危機感やコスト意識の徹底化が公務員体質を変えた」：集中(2009 年 6 月 1 日)
- 4) 山田隆司：特集/徹底ルポ 病院・診療所 診療科を超えて診る総合医・日本医師会の変心で迷走の「総合医構想」：週刊東洋経済(2009 年 6 月 1 日)
- 5) 山田隆司：質問「なるほど」「家庭医ってどんな仕事？」：毎日新聞(2009 年 7 月 31 日)
- 6) 山田隆司：特集 I 地域医療「破壊」から「再生」へ[2]公設民営による都内初の区立病院としての再スタート：月刊保険診療(2009 年 8 月 10 日)
- 7) 山田隆司：らいふプラス「高齢者もずっと自宅で」：日本経済新聞(2009 年 11 月 10 日)
- 8) 山田隆司：一望千里～豊かな医療の提供をめざして へき地で培った能力は都市部でも欠かせない：医療経営情報(2009 年 12 月 1 日)
- 9) 山田隆司：医療の道先案内人である開業医. 地域の一次医療を担う存在として「家庭医療」という概念はかかせない：MEDICAL NETWORK(2010 年 1 月 1 日)
- 10) 山田隆司：育成進む家庭医・総合医：日本経済新聞(2010 年 5 月 13 日)
- 11) 山田隆司：動き出した区立台東病院 山田隆司病院長に聞く：病院新聞(2010 年 6 月 4 日)
- 12) 山田隆司：現在のわが国の家庭医療をめぐる現状と課題：医師のための経営情報(2010 年 8 月 1 日)
- 13) 山田隆司：高齢者の慢性期医療拠点. 老健を併設し, 在宅医療の拠点病院に：ふれあいの輪(2010 年 8 月 1 日)
- 14) 山田隆司：望ましい医療のカタチと, 家庭医の育成：医師のための経営情報(2010 年 9 月 1 日)
- 15) 山田隆司：10 年後の医療のかたち 超高齢社会に対応した地域医療のあるべき姿とは：医療情報経営(2011 年 2 月 1 日)
- 16) 山田隆司：へき地医療から, かかりつけ医を考える：TeTe(2011 年 6 月 20 日)
- 17) 山田隆司：東日本大震災から考える, 地域医療における医療健康情報：映像情報メディカル(2011 年 7 月 1 日)
- 18) 山田隆司：復興日本第 5 部 待ちかねた槌音 病院再生と震災支援一体：産経新聞(2011 年 9 月 17 日)

12. 自己評価

評価

前年度に引き続き正規カリキュラム外で以下の活動を行っている。

①地域医療ゼミナールの開催

毎回主に県内のへき地等で活躍する医師に自らの活動を紹介してもらっているが、将来関わるであろう学生への動機づけや、地域枠以外の学生に関心を持たせることに有用であった。

②学外での地域医療関連集会への参加

本年もへき地・地域医療学会へ医学生数名が参加し、他大学の地域枠学生と交流し、地域医療に関する情報を共有した。

③県内でのへき地医療体験学習

県内のへき地医療機関の研修を実施し、その後の反省会を行ったが、実際の地域の現場に関わることで、興味が深まった学生が多かった。

④総合医海外研修の参加

医学生 4 名がアメリカ、オレゴン健康科学大学家庭医療学講座の短期研修に参加したが、学生にとって海外の地域で働く総合医の実態や、その研修に興味、関心が深まった。

現状の問題点及びその対応策

現在は主に課外での教育に関与することが主体であるが、やはり対象が地域枠学生のみに偏りやすい傾向は否めない。今後は一般学生、看護学生、他学部学生にも対象を広げ広報し、多くの多職種が参加する研修等を提案したい。

今後の展望

現在は課外での活動が主体であるが、今後は正規カリキュラムに対しても提案し、初期の学年から継続的に地域医療に関心を持ち、地域や多職種と関わりができる研修・教育を構築したい。また岐阜大学以外の大学の地域医療関連講座とネットワークを広げ、学生間交流を深めることが期待される。さらに海外の地域医療に関する組織とも連携を持つことによって、学生に幅広い視野を持たせ、質の高い地域医療の担い手の育成につなげたい。

(8) 医学教育開発研究センター（チュートリアル部門）

1. 研究の概要

2010年4月に文部科学省から全国唯一の医学教育共同利用拠点として認定され、(1) 新しい医学教育の開発研究と普及、(2) 医学教育に貢献できる人材育成、(3) 国内外の医学教育機関との連携・共同研究、を大きなミッションとして取り組んでいる。

①PBL チュートリアル教育：外部に向けた PBL に関するセミナー・ワークショップを企画するとともに、岐阜大学におけるチュートリアル教育 10 年の経験を検証し、より進化した PBL チュートリアル教育システムの構築を目指している。

②インターネット PBL：大学や学部の垣根を超え、いつでも、どこからでも参加できる能動的双方向性 Web-PBL システムを、全国の教員・学生と協力しながら開発し、実用化の段階に入っている。学部生コースの他に、英語コース、大学院コース、臨床コースなど、多彩なプログラムを用意している。

③医療コミュニケーション・プロフェッショナルズ教育：模擬患者による医療面接教育法の研究と実践を進めている。4 年生・5 年生に対する医療面接実習、外部に向けたセミナー・ワークショップを実施している。平成 20 年度から 1 年生に対する地域体験実習（8 週間）、21 年度から 2 年生に対するライフサイクル、医師患者関係の授業、23 年度から 4 年生に対する臨床推論の授業など、系統的な行動科学教育の導入を目指している。

④臨床シミュレーション教育とバーチャル教材の開発：臨床入門から卒後教育に至る幅広い時期に、効果的なシミュレーション教育が行えるように、ハード・ソフト両面からモデルとなりうる臨床スキル・シミュレーションセンターの構築を目指している。また身体診察や面接が可能な患者ロボット、メディカル・イラスト、Web 自己学習教材等の開発を進めている。平成 19～21 年度には文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム「臨床医学教育を強化向上させる ICT」が採択され、研究事業を促進させた。

⑤医療英語教育の充実：医学生の国際交流と海外臨床実習を促進するために、系統的な医療英語教育カリキュラム（課外授業）を構築し、多数の医学生を海外に派遣した。

⑥医学教育セミナー&ワークショップ：年 4 回、通算 42 回開催し、のべ参加者数は 5000 名を超えている。医学教育分野の全国 FD として定評を得、共同研究の推進にも大きな役割を果たしている。

⑦医学教育ユニットの会：各大学の医学教育部門（ユニット）の連携組織を形成し、情報交換・共同研究の促進を図っている。医学教育学研究と大学院レベルの教育のコンソーシアム形成を目指している。

⑧情報発信：ホームページをリニューアルし、英語版ホームページも構築した。セミナー&ワークショップ、インターネット PBL、医療面接実習、スキルスラボ、医療英語教育、国際交流、学務事務情報などの最新情報を発信している。

⑨大学院「医学教育学分野」の開設：平成 20 年度（2008 年 4 月）より岐阜大学大学院医学系研究科医療管理学講座に「医学教育学」分野が開設され、現在、大学院生 4 名が在籍し、研究を推進している。

⑩国際交流：毎年 1 名の外国人客員教授を招聘し、国内における医学教育研究の推進と国際交流に貢献している。平成 21 年度：Jennifer Cleland 先生（Aberdeen 大学）、平成 22 年度：Peter Barton 先生（Monash 大学）、平成 23 年度：劉克明先生（高雄医学大学）。

⑪多職種連携医療教育の推進：平成 23 年度から多職種連携医療教育を柱とした医学教育共同利用拠点の予算措置があり、人員と研究体制の充実を図った。

なお、上記の研究はすべて医学教育開発研究センター・チュートリアル部門と一致協力して推進した。

2. 名簿

教授： 鈴木康之 Yasuyuki Suzuki
教授(併任)： 丹羽雅之 Masayuki Niwa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 鈴木康之. 発語の遅れと特有の顔貌を指摘された 2 歳 6 ヶ月男児：症例から学ぶ先天代謝異常症，東京：診断と治療社；2009 年：168-171.
- 2) 下澤伸行, 鈴木康之, 折居忠夫. 出生時からの著明な筋緊張低下, 哺乳不良に特異な顔貌を認めた生後 2 ヶ月男児：症例から学ぶ先天代謝異常症，東京：診断と治療社；2009 年：220-223.
- 3) 加藤智美, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09 冬-第 31 回医学教育セミナーとワークショップの記録一, 名古屋：三恵社；2009 年：1-167.
- 4) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鹿島晴雄編. 新しい医学教育の流れ'09 春-第 32 回医学教育セ

- ミナーとワークショップの記録一, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-171.
- 5) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09 夏一第 33 回医学教育セミナーとワークショップの記録一, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-239.
 - 6) 阿部恵子, 鈴木康之, Gibbs T, Evans P, 宮田良平, 横地律子, 棚橋裕吉, 中田由紀子, 飯田啓太郎, 伊藤真理子, 阿部妃名子. Professor Gibbs' History Taking & Physical Examination Gibbs 教授の英国流診察スキルー医療面接と系統的身体診察一, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-50.
 - 7) 阿部恵子, 若林英樹, Evans P, 鈴木康之, 岩田佳久. Practical English Conversation in the Medical Interview Lower back Pain 英語で学ぶ医療面接の基礎ーコミュニケーションと異文化理解一, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-42.
 - 8) 鈴木康之, 錦織 宏監訳. 丹羽雅之ら分担翻訳. 医学教育の理論と実践(A practical guide for medical teachers, 原著第 2 版), 東京: 篠原出版新社; 2010年: 1-498.
 - 9) 阿部恵子, 若林英樹, Evans P, 鈴木康之, 岩田佳久編. Practical English Conversation in the Medical Interview: Lower back Pain 英語で学ぶ医療面接の基礎ーコミュニケーションと異文化理解一, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-50.
 - 10) 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09 秋. 第 34 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-233.
 - 11) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 藤代健太郎編. 新しい医学教育の流れ'10 春. 第 36 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-104.
 - 12) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'10 夏. 第 37 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-359.
 - 13) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之, 植村和正編. 新しい医学教育の流れ'10 秋. 第 38 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-180.
 - 14) 鈴木康之. 医学教育の学位課程: 医学教育白書 2010 年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 191-195.
 - 15) 鈴木康之. 医学教育ユニットの会: 医学教育白書 2010 年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 123-125.
 - 16) 丹羽雅之. 教務事務研修: 医学教育学会編. 医学教育白書 2010 年版 医学教育別冊, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 250-256.
 - 17) 鈴木康之. ハーラー/シャイエ症候群: 症候群ハンドブック, 東京: 中山書店; 2011年: 387.
 - 18) 鈴木康之. ライソゾームのムコ多糖症代謝. ライソゾーム病ー最新の病態, 診断, 治療の進歩, 東京: 診断と治療社; 2011年: 19-21.
 - 19) 鈴木康之. ムコ多糖症(MPS)III 型: ライソゾーム病ー最新の病態, 診断, 治療の進歩, 東京: 診断と治療社; 2011年: 197-200.
 - 20) 鈴木康之. 副腎白質ジストロフィー: 先天代謝異常症 Diagnose at a Glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 149-151.
 - 21) 藤崎和彦, 鈴木康之, 丹羽雅之, 井内康輝編. 新しい医学教育の流れ'11 冬. 第 39 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-232.
 - 22) 加藤智美, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'11 春. 第 40 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-159.
 - 23) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'11 夏. 第 41 回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2011年: 1-214.
 - 24) 丹羽雅之, 鈴木康之, 高橋優三. 7・4 インターネットテュートリアル/楽位置楽 The Tutorial の開発と実践: 日本薬学会編. 問題解決型学習ガイドブックー薬学教育に適した PBL テュートリアルの進め方一, 東京: 東京化学同人; 2011年: 81-88.
 - 25) 植松俊彦, 滝口祥令, 丹羽雅之編著. 新体系看護学全書 疾病の成り立ちと回復の促進 3ー薬理学, 東京: メヂカルフレンド社; 2011年: 1-283.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 鈴木康之. 小児科における OSCE, 小児科 2009年; 50 巻: 85-92.
- 2) 鈴木康之. シミュレーション医学教育, 小児科臨床 2010年; 63 巻: 55-57.
- 3) 鈴木康之, 下澤伸行. 日本先天代謝異常学会学会賞受賞論文「ペルオキシゾーム病との 30 年: 二人三脚の旅」, 日本先天代謝異常学会雑誌 2010年; 26 巻: 2-12.
- 4) 鈴木康之. ALD の造血幹細胞移植療法, Clinical Neuroscience 2011年; 29 巻: 958-959.

総説 (欧文)

- 1) Shimozawa N, Honda A, Kajiwara N, Kozawa S, Nagase T, Takemoto Y, Suzuki Y. Diagnostic and follow-up system of patients with X-linked adrenoleukodystrophy in Japan. J Hum Genet. 2011;56:106-109.
- 2) Tomatsu S, Montaño AM, Oikawa H, Smith M, Barrera L, Chinen Y, Thacker MM, Mackenzie WG, Suzuki Y, Orii T. Mucopolysaccharidosis type IVA (Morquio A disease): clinical review and current treatment. Curr Pharm Biotechnol. 2011;12:931-945.
- 3) Morita M, Shimozawa N, Kashiwayama Y, Suzuki Y, Imanaka T. ABC subfamily D proteins and very

IF 3.455

long chain fatty acid metabolism as novel targets in adrenoleukodystrophy. *Curr Drug Targets*. 2011;12:694-706.

IF 3.061

原著 (和文)

- 1) 升野光雄, 黒木良和, 松浦公美, 福嶋義光, 山内泰子, 河村理恵, 高田史男, 丹羽雅之, 鈴木康之. インターネットを利用した大学連携・問題基盤型遺伝カウンセラー教育の試み, 日本遺伝カウンセリング学会誌 2009年; 30巻: 9-17.
- 2) 鈴木康之, 吉岡俊正, 吉田素文, 田川まさみ, 錦織 宏, 西城卓也, 守屋利佳, 大谷 尚, 渡邊洋子. 次世代の医学教育者の育成に向けて, 医学教育 2009年; 40巻: 235-236.
- 3) 鈴木康之, 吉岡俊正, 吉田素文, 田川まさみ, 錦織 宏, 西城卓也, 守屋利佳, 大谷 尚, 渡邊洋子. 医学・医療教育学の専門家養成に関するニーズ調査結果, 医学教育 2009年; 40巻: 237-241.
- 4) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 加藤智美, 阿部恵子, 若林秀樹, 高橋優三, 鈴木康之. 医学教育セミナーとワークショップ-30回開催を振り返って, 医学教育 2009年; 40巻: 367-374.
- 5) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Emotional Intelligence (EI) と Physician Empathy Scale (PES)(日本語訳), 医学教育 2009年; 40巻: 439-440.
- 6) 高橋優三, 長野 功, 呉 志良, 加藤智美, 鈴木康之, 早川大輔. PBLのコアタイム省察用ポートフォリオ, 医学教育 2010年; 41巻: 207-209.
- 7) 川上ちひろ, 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 保育園児・妊婦との継続的交流体験の教育的効果-医療系学生の気づきと学び, 日本小児科学会雑誌 2011年; 115巻: 132-137.

原著 (欧文)

- 1) Aoki H, Hara A, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. In vitro and in vivo differentiation of human embryonic stem cells into retina-like organs and comparison with that from mouse pluripotent epiblast stem cells. *Dev Dyn*. 2009;583:2464-2468. IF 2.864
- 2) Niwa M, Hara A, Taguchi A, Aoki H, Kozawa O, Mori H. Spatiotemporal expression of Hsp20 and its phosphorylation in hippocampal CA1 pyramidal neurons following transient forebrain ischemia. *Neurol Res*. 2009;31:721-727. IF 1.621
- 3) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Niwa M, Tokuda H, Akamatsu S, Doi T, Kato H, Yoshimura S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O. α B-crystallin extracellularly suppresses ADP-induced granule secretion from human platelets. *FEBS Lett*. 2009;583:2464-2468. IF 3.601
- 4) Shimizu A, Takahashi Y, Suzuki Y, Lefor AT. Preparing students for overseas rotations. *Medical Education (Japan)*. 2009;40:47-53.
- 5) Rethans JJ, Ban N, Suzuki Y. Future use of skills laboratories at Medical Schools in Japan-how to transform these into effective educational departments? *Medical Education (Japan)*. 2009;40:341-346.
- 6) Kuratsubo I, Suzuki Y, Krii KO, Kato T, Orii T, Kondo N. Psychological status of patients with mucopolysaccharidosis type II and their parents. *Pediatr Intl*. 2009;50:41-47. IF 0.755
- 7) Suzuki Y, Aoyama A, Kato T, Shimozawa N. Retinitis pigmentosa and mucopolysaccharidosis type II-an extremely attenuated phenotype. *J Inher Metab Dis*. 2009;32:582-583. IF 3.808
- 8) Wakabayashi H, Diaz LA, Rubenstein D, Lefor A, Kitajima Y, Aoyama Y, Suzuki Y, Takahashi Y, Ban N. Three essential conditions to cultivate physician scientists. *Medical Education (Japan)*. 2009;40:433-437.
- 9) Okuyama T, Tanaka A, Suzuki Y, Ida H, Tanaka T, Cox GF, Eto Y, Orii T. Japan Elaprase Treatment (JET) study: idursulfase enzyme replacement therapy in adult patients with attenuated Hunter syndrome (Mucopolysaccharidosis II, MPS ID). *Mol Genet Metab*. 2010;99:18-25. IF 3.539
- 10) Tomatsu S, Montaña AM, Oguma T, Dung VC, Oikawa H, Gutiérrez ML, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Barrera L, Orii T. Validation of disaccharide composition derived from dermatan sulfate and heparan sulfate in mucopolysaccharidoses and mucopolipidoses II and III by tandem mass spectrometry. *Mol Gene Metab*. 2010;99:124-131. IF 3.539
- 11) Tomatsu S, Montaña AM, Oguma T, Dung VC, Oikawa H, de Carvalho TG, Gutiérrez ML, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Sakura N, Barrera L, Kida K, Kubota M, Orii T. Dermatan sulfate and heparan sulfate as a biomarker for mucopolysaccharidosis I. *J Inher Metab Dis*. 2010;33:141-150. IF 3.808
- 12) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Doi T, Niwa M, Akamatsu S, Tokuda H, Ogura S, Yoshimura S, Iwama T, Kozawa O. Thromboxane A2 promotes soluble CD40 ligand release from human platelets. *Atherosclerosis*. 2010;209:415-421. IF 4.086
- 13) Hara A, Taguchi A, Aoki H, Hatano Y, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. Folate antagonist, methotrexate induces neuronal differentiation of human embryonic stem cells transplanted into nude mouse retina. *Neurosci Lett*. 2010;477:138-143. IF 2.055
- 14) Hintze JP, Tomatsu S, Fujii T, Montaña AM, Yamaguchi S, Suzuki Y, Fukushi M, Ishimaru T, Orii T. Comparison of liquid chromatography-tandem mass spectrometry and sandwich ELISA for determination of keratan sulfate in plasma and urine. *Biomark Insights*. 2011;6:69-78.
- 15) Satoh K, Niwa M, Goda W, Binh NH, Nakashima M, Takamatsu M, Hara A. Galectin-3 expression in hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia, and its inhibition by hypothermia. *Brain Res*. 2011;1382:266-274. IF 2.623

- 16) Satoh K, Niwa M, Binh NH, Nakashima M, Kobayashi K, Takamatsu M, Hara A. Increase of galectin-3 expression in microglia by hyperthermia in delayed neuronal death of hippocampal CA1 following transient forebrain ischemia. *Neurosci Lett*. 2011; 504:199-203. IF 2.055

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 衛藤義勝, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業: ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班; 平成 19-21 年度; 6,500 千円(2,000 : 2,000 : 2,500 千円)
- 2) 研究代表者: 山口清次, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金子ども家庭総合研究事業: タンデムマス等の新技術を導入した新しいマスマスクリーニング体制の確立に関する研究班; 平成 19-21 年度; 500 千円(200 : 150 : 150 千円)
- 3) 研究代表者: 森 秀樹, 推進責任者: 鈴木康之; 文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(テーマ 6): 臨床医学教育を強化向上させる ICT; 平成 19-21 年度; 67,849 千円(23,993:21,980:21,876 千円)
- 4) 研究代表者: 古田善伯, 研究分担者: 鈴木康之; 経済産業省平成 21 年度体系的な社会人基礎力育成・評価システム開発・実証事業: 全学的な社会人基礎力育成をめざす教育システムの開発(岐阜大学); 平成 21 年度; 1,091 千円
- 5) 研究代表者: 加藤智美, 共同研究者: 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 阿部恵子, 若林英樹; 大学活性化経費(教育)「学士力の育成を目指す教育プログラム」: 医療面接実習～動画をを用いた振り返りの促進～; 平成 21 年度; 490 千円
- 6) 研究代表者: 西澤正豊, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業: 運動失調症に関する調査研究班; 平成 20-22 年度; 3,600 千円(1,200 : 1,200 : 1,200 千円)
- 7) 研究代表者: 奥山虎之, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金医療技術実用化総合研究事業: 新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立; 平成 20-22 年度; 6,000 千円(2,000 : 2,000 : 2,000 千円)
- 8) 研究代表者: 鈴木康之; 科学研究費補助金基盤研究(C): 小児科領域における客観的臨床能力評価システムの開発; 平成 20-22 年度; 3,500 千円(2,300 : 700 : 500 千円)
- 9) 研究代表者: 丹羽雅之; 科学研究費補助金基盤研究(C): コバルトクロライド誘発網膜神経障害モデルを用いた再生治療に関する基礎的研究; 平成 22-24 年度; 4,160 千円(1,690 : 1,560 : 910 千円)
- 10) 研究代表者: 河野健一, 研究分担者: 丹羽雅之; 科学研究費補助金基盤研究(C): 6 年一貫プロフェシヨナリズム教育における e-ポートフォリオの開発と実践; 平成 22-24 年度; 3,640 千円(1,300 : 1,170 : 1,170 千円)
- 11) 研究代表者: 衛藤義勝, 研究分担者: 鈴木康之; 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業: ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班; 平成 22-24 年度; 7,800 千円(2,600 : 2,600 : 2,600 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

鈴木康之:

- 1) 日本医学教育学会理事, 評議員(～現在)
- 2) 日本小児科学会代議員, 教育委員会(～現在)
- 3) 日本先天代謝異常学会理事, 評議員(～現在)
- 4) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)

- 5) 東海臨床遺伝・代謝懇話会世話人(～現在)

丹羽雅之：

- 1) 日本薬理学会評議員(～現在)
- 2) 日本炎症・再生医学会評議員(～現在)
- 3) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 4) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)
- 5) 日本医学教育学会情報基盤委員会委員(平成 21 年 1 月～現在)
- 6) 日本医学教育学会広報委員会委員(平成 22 年 1 月～現在)
- 7) 日本医学教育学会特別領域情報基盤開発委員会委員(平成 22 年 1 月～現在)
- 8) 日本 M&S 医学教育研究会幹事・評議員(平成 22 年 11 月～現在)
- 9) 医療系 e-learning 全国交流会 副会長(平成 23 年 10 月～現在)

2) 学会開催

鈴木康之：

- 1) 第 31 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 1 月, 岐阜)
- 2) 第 32 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 5 月, 東京)
- 3) 第 33 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 8 月, 岐阜)
- 4) 第 10 回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修(平成 21 年 10 月, 岐阜)
- 5) 第 34 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 21 年 11 月, 札幌)
- 6) 第 35 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 1 月, 岐阜)
- 7) 第 36 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 5 月, 東京)
- 8) 第 37 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 8 月, 岐阜)
- 9) 第 11 回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修(平成 22 年 10 月, 岐阜)
- 10) 第 38 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 11 月, 名古屋)
- 11) 医学教育研究指導者向けのワークショップ～研究と論文発表の道案内をするには～(平成 22 年 12 月, 岐阜)
- 12) 第 1 回医学教育研究大学院生向けのワークショップ～研究着手から論文発表までのプロセスに必要なこと～(平成 22 年 12 月, 名古屋)
- 13) 第 39 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 1 月, 広島)
- 14) 第 40 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 5 月, 岐阜)
- 15) 第 41 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 8 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

鈴木康之：

- 1) Medical Education ; Editor(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

鈴木康之：

- 1) International Seminar for Medical Education(2009.01, Seoul, Medical Education in Gifu University School of Medicine; performer)
- 2) WONCA Asia Pacific Regional Conference(2009.06, Hong-Kong, Developing Family Medicine: the importance of modern medical education; performer)
- 3) 第 41 回日本医学教育学会(平成 21 年 7 月, 大阪, 岐阜大学医学部における学生定員増への対応. シンポジスト)
- 4) 第 51 回日本先天代謝異常学会(平成 21 年 11 月, 東京, 日本先天代謝異常学会学会賞受賞講演「ペルオキシソーム病との 30 年：二人三脚の旅」演者)
- 5) 札幌市立大学看護学部 (平成 22 年 2 月, 札幌, 「看護 OSCE」助言者)
- 6) 第 113 回日本小児科学会学術集会(平成 22 年 4 月, 盛岡, 小児科医育成の目標と戦略. シンポジウム 2 「小児科学の卒後教育：世界トップレベルの小児科医を育成するために」シンポジスト)
- 7) 第 9 回北陸小児救急・集中治療研究会(平成 22 年 5 月, 金沢, 「小児医療教育：最近の考え方と取組」演者)
- 8) 滋賀医科大学 FD 研修会(平成 22 年 7 月, 大津, 「少人数能動学習ワークショップ」演者)

- 9) 日本外来小児科学会第14回実習指導者研究会(平成22年7月, 西宮, 「小児科医と医学教育」演者)
- 10) 第52回日本先天代謝異常学会(平成22年10月, 大阪, Intrathecal Enzyme Replacement Therapy in Hunter Syndrome (MPS II) by Muenzer J 座長)
- 11) 平成22年度弘前大学FDシンポジウム(平成22年12月, 弘前, 「岐阜大学におけるポートフォリオ活用の試み - 1年次地域体験実習と5年次医療面接実習における振り返りの促進と教員からのフィードバック -」シンポジスト)
- 12) 岐阜地区女医会(平成23年1月, 岐阜, 「最近の医学教育のトピックス」演者)

丹羽雅之:

- 1) 1st Asia-pacific joint PBL conference 2010, Joint conference of APC PBL and APA PHS(2010.10, Taipei, Taiwan, Symposium 5:E-PBL:Internet-PBL for postgraduate life science education; シンポジスト)
- 2) 第12回薬事フォーラム52(平成22年11月, 京都, 「細胞死と病気, その再生」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 鈴木康之, 下澤伸行: 日本先天代謝異常学会賞(平成21年度)

9. 社会活動

鈴木康之:

- 1) 医師国家試験委員(～現在)
- 2) 日本ムコ多糖症親の会顧問(～現在)
- 3) ALD親の会顧問(～現在)
- 4) 東京医科歯科大学医歯学教育システム研究センター運営委員(～現在)
- 5) 共用試験CBTモニター委員(平成21年度)
- 6) 社団法人日本専門医制評価・認定機構チーフサーベイヤー(～現在)

丹羽雅之:

- 1) 共用試験CBTモニター委員(平成21年度)

10. 報告書

- 1) 鈴木康之, 倉坪和泉, 折居忠夫, 折居恒治, 加藤智美: イソフラボンによるムコ多糖症の試験的治療: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班 平成20年度研究報告書: 35-36(平成21年3月)
- 2) 鈴木康之, 下澤伸行: 副腎白質ジストロフィー克服への取組に関する研究-発症前診断に関するガイドライン作成に向けて-: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成20年度研究報告書: 111-113(平成21年3月)
- 3) 鈴木康之, 奥山虎之, 田中あけみ: ムコ多糖症IV型に対する疫学調査: 厚生労働科学研究費(臨床研究・予防・治療技術開発研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成20年度総括分担報告書: 15-16(平成21年3月)
- 4) 加藤俊一, 奥山虎之, 田中あけみ, 酒井規夫, 鈴木康之, 矢部普正, 高倉広充: 造血幹細胞移植を受けたムコ多糖症患者の長期予後調査: 厚生労働科学研究費(臨床研究・予防・治療技術開発研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成20年度総括分担報告書: 17-20(平成21年3月)
- 5) 鈴木康之, 倉坪和泉: ムコ多糖症患者・家族の意識調査: 厚生労働科学研究費(子ども家庭総合研究事業)タンデムマス等の新技術を導入した新しいマススクリーニング体制の確立に関する研究班 平成20年度総括・分担研究報告書: 49-50(平成21年3月)
- 6) 山口清次, 松原洋一, 長谷川有紀, 福士 勝, 大浦敏博, 高柳正樹, 佐倉伸夫, 但馬 剛, 虫本雄一, 深尾敏幸, 坂本 修, 田中あけみ, 鈴木康之, 小熊敏広, 北川照男, 奥山虎之, 新宅治夫, 大和田操: 新しい新生児マススクリーニング体制の検討: 厚生労働科学研究費子ども家庭総合研究事業; タンデムマス等の新技術を導入した新しいマススクリーニング体制の確立に関する研究班 平成20年度総括・分担研究報告書: 11-16(平成21年3月)
- 7) 丹羽雅之: コバルトクロライド誘発視細胞選択的障害モデルの発現機序解明ならびにその防御・治療: 平成19-20年度 科学研究費補助金基盤(C)研究成果報告書: 5(平成21年5月)

- 8) 鈴木康之, 戸松俊治, アドリアナ・モンタノ: ムコ多糖症 II 型の乳児期早期の身体発育について: 厚生労働科学研究費(子ども家庭総合研究事業)タンデムマス等の新技術を導入した新しいマスキリーニング体制の確立に関する研究班 平成 21 年度総括・分担研究報告書: 56-57(平成 22 年 3 月)
- 9) 山口清次, 長谷川有紀, 虫本雄一, 佐倉伸夫, 但馬 剛, 高柳正樹, 松原洋一, 深尾敏幸, 坂本 修, 大浦敏博, 福士 勝, 鈴木康之, 田中あけみ, 北川照男, 新宅治夫, 大和田操, 奥山虎之, 小熊敏広, 戸松俊治, 折居忠夫: 新しい新生児マスキリーニング体制の検討: 厚生労働科学研究費(子ども家庭総合研究事業)タンデムマス等の新技術を導入した新しいマスキリーニング体制の確立に関する研究班 平成 19-21 年度総合研究報告書: 17-25(平成 22 年 3 月)
- 10) 鈴木康之, 下澤伸行: 副腎白質ジストロフィー日本人家系解析と発症前診断と取組: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 21 年度研究報告書: 83-85(平成 22 年 3 月)
- 11) 辻 省次, 後藤 順, 高橋祐二, 市川弥生子, 松川敬志, 下澤伸行, 鈴木康之: 副腎白質ジストロフィーの生体資料収集及び臨床病型修飾因子についての研究: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 21 年度研究報告書: 81-82(平成 22 年 3 月)
- 12) 鈴木康之, 折居忠夫, 奥山虎之, 田中あけみ, 知念安紹, 戸松俊治, Wegrzyn G: イソフラボンによるムコ多糖症の試験的治療: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)ライソゾーム病(ファブリー病含む)に関する調査研究班 平成 21 年度研究報告書: (平成 22 年 3 月)
- 13) 鈴木康之, 奥山虎之, 田中あけみ, 折居忠夫, 戸松俊治: 厚生労働科学研究費(医療技術実用化研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成 21 年度総括分担報告書(平成 22 年 3 月)
- 14) 鈴木康之: 臨床医学教育を強化向上させる ICT-e-Learning で培う医の心と技-: 現代的教育ニーズ取組支援プログラム報告集 平成 21 年度補助期間終了取組: 1-89(平成 22 年 3 月)
- 15) 丹羽雅之: 第 35 回医学教育セミナーとワークショップ: 医学教育 41: 110(平成 22 年 4 月)
- 16) 丹羽雅之: 全国ユニット機関名簿: 医学教育 41: 226-232(平成 22 年 6 月)
- 17) 鈴木康之, 藤代健太郎: 第 36 回医学教育セミナーとワークショップ: 医学教育 41: 272(平成 22 年 8 月)
- 18) 鈴木康之: 6 年一貫の徹底した職業人養成教育が, おのずと社会人基礎力を育てる: 経済産業省 社会人基礎力育成の手引き -日本の将来を託す若者を育てるために: 478-487(平成 22 年 12 月)
- 19) 鈴木康之, 下澤伸行: 副腎白質ジストロフィーの早期診断・治療に関する研究: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 20-22 年度総括研究報告書: 11-14(平成 23 年 3 月)
- 20) 鈴木康之, 下澤伸行: 副腎白質ジストロフィーの早期診断・治療に関する研究(平成 22 年度): 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 22 年度総括研究報告書: 85-87(平成 23 年 3 月)
- 21) 辻 省次, 松川敬志, 後藤 順, 鈴木康之, 下澤伸行, 高野弘基, 小野寺理, 西澤正豊: 副腎白質ジストロフィー患者における PEX5 遺伝子の全塩基配列解析及び表現型における関連解析: 厚生労働科学研究費(難治性疾患克服研究事業)運動失調症に関する調査研究班 平成 22 年度研究報告書: 83-84(平成 23 年 3 月)
- 22) 鈴木康之, 奥山虎之, 田中あけみ, 折居忠夫, 戸松俊治: ムコ多糖症 IV 型に対する疫学調査. 厚生労働科学研究費(臨床研究・予防・治療技術開発研究事業)新規治療法が開発された小児稀少難病の疫学調査と長期フォローアップ体制の確立に関する研究班 平成 22 年度総括・分担報告書: 12-14(平成 23 年 3 月)
- 23) 丹羽雅之: 全国ユニット機関名簿: 医学教育 42: 181-189(平成 23 年 6 月)
- 24) 丹羽雅之: 第 41 回医学教育セミナーとワークショップ: 医学教育 42: 276(平成 23 年 10 月)

11. 報道

- 1) 鈴木康之: 書評「ワシントン小児科マニュアル」: 医学界新聞 2923 号(2011 年 4 月 4 日)

12. 自己評価

評価

2001 年に医学部として初の全国共同利用施設として設置され, 2010 年 4 月には文部科学省から全国唯一の医学教育共同利用拠点として認定され, 全国的に認知, 評価されたと自己評価している。2010 年

度には外部評価を受け、高い評価を得た。また外国人客員教授や研究者を積極的に招聘し、国際学会活動、国際共同研究を推進することによって、国際的にも当センターの存在が知られるようになった（ヨーロッパ医学教育連合のウェブサイトにも、国際的な医学教育センターの一つとして情報が掲載されている）。近年、各大学に医学教育部門設置の動きが広まっているが、これらの組織との連携も強まりつつある。平成 20 年度から大学院が設置され、人材育成、研究体制が整いつつある。

現状の問題点及びその対応策

より優れた医学教育方法を開発し、これらを有機的に統合し、新たな医学教育カリキュラムを提案することが今後の課題である。平成 20 年度から導入された新カリキュラムの中で、その実現に努力するとともに、国内外へ発信していく予定である。医学部学生定員が急増しているが、教育の人的・経済的な裏づけは極めて重要な課題となっており、教育を担当する立場から提言していきたい。人材育成に関しては、教職員スタッフに対する FD の推進と、将来の医学教育学を支える人材育成を平行して進める必要がある。後者については、大学院が設置され基盤が整備されたが、国内外の医学教育部門との連携を一層強化させる必要がある。

今後の展望

医学教育分野で解決すべき課題は山積している。教育の重要性は誰もが認識しているが、実際には種々の制約によって、それが実現できない現状がある。医学・医療界全体が自己革新を続けながら、教育の重要性を社会に対して発信し、望ましい教育の実現が可能となるよう努力してゆきたい。

(9) 医学教育開発研究センター（バーチャルスキル部門）

1. 研究の概要

医学教育開発研究センターではバーチャルスキル部門とテュートリアル部門が一致協力して各種の研究事業を推進している。その概要についてはテュートリアル部門，医学教育学分野の項を参照されたい。

2. 名簿

教授：	藤崎和彦	Kazuhiko Fujisaki
助教：	若林英樹	Hideki Wakabayashi
助教：	西城卓也	Takuya Saiki
助教：	川上ちひろ	Chihiro Kawakami

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 藤崎和彦. 医療コミュニケーションの特徴と実証研究の現状:橋本英樹編著. 医療コミュニケーション-実証研究への多面的アプローチ, 東京: 篠原出版新社; 2009年: 11-28.
- 2) 藤崎和彦. 医療コミュニケーションの実践に当たっての注意:橋本英樹編著. 医療コミュニケーション-実証研究への多面的アプローチ, 東京: 篠原出版新社; 2009年: 147-156.
- 3) 藤崎和彦. 中川米造先生の仕事をふりかえてみて:「資料展示会『医の倫理』の先駆者 中川米造回顧著作展-“医”とは何かを問い続けて-記念誌」, 大津: 滋賀医科大学附属図書館; 2009年: 5-6.
- 4) 藤崎和彦. 出発点は『患者の求める良医』でした:日本医学教育学会編「人間学入門」, 東京: 南山堂; 2009年: 115.
- 5) 藤崎和彦. 医療社会学について:黒田裕子監修. 看護診断のためのよくわかる中範囲理論, 東京: 学習研究社; 2009年: 90-96.
- 6) 阿部恵子, 鈴木康之, Gibbs T, Evans P, 宮田良平, 横地律子, 棚橋裕吉, 中田由紀子, 飯田啓太郎, 伊藤真理子, 阿部妃名子. Professor Gibbs' History Taking & Physical Examination Gibbs 教授の英国流診察スキル-医療面接と系統的身体診察-, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-50.
- 7) 石川ひろの, 阿部恵子, 野呂幾久子, 高山智子. 藤崎和彦. 機能的アプローチ:橋本英樹編著. 医療コミュニケーション研究会編集. 医療コミュニケーション-実証研究への多面的アプローチ, 東京: 篠原出版新社; 2009年: 54-63.
- 8) 阿部恵子, 若林英樹, Evans P, 鈴木康之, 岩田佳久. Practical English Conversation in the Medical Interview Lower Back Pain 英語で学ぶ医療面接の基礎-コミュニケーションと異文化理解-, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-42.
- 9) 加藤智美, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09 冬-第31回医学教育セミナーとワークショップの記録-, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-167.
- 10) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鹿島晴雄編. 新しい医学教育の流れ'09 春-第32回医学教育セミナーとワークショップの記録-, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-171.
- 11) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09 夏-第33回医学教育セミナーとワークショップの記録-, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-239.
- 12) 阿部恵子, 若林英樹, Evans P, 鈴木康之, 岩田佳久編. Practical english conversation in the medical interview: Lower back pain 英語で学ぶ医療面接の基礎-コミュニケーションと異文化理解-, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-50.
- 13) 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09 秋. 第34回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-233.
- 14) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 藤代健太郎編. 新しい医学教育の流れ'10 春. 第36回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-104.
- 15) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'10 夏. 第37回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-359.
- 16) 藤崎和彦. SP 養成: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2010年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 52-54.
- 17) 藤崎和彦. 医学教育専門教育成検討委員会: 日本医学教育学会編. 医学教育白書 2010年版, 東京: 篠原出版新社; 2010年: 278.
- 18) 阿部恵子. 医療面接技能: 日本医学教育学会編集. 医学教育白書 2010年版('07~'10), 東京: 篠原出版新社; 2010年: 37-40.
- 19) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会「平成 22 年度歯科衛生士専任教員講習会 I テキスト」, 愛知: 全国歯科衛生士教育協議会; 2010年: 4-12.
- 20) 川上ちひろ. 異性とまうまくつきあえる-対 PDD 男児の対異性行動の問題点と援助-: 辻井正次編著. 特別支援教育実践のコツ-発達障害のある子どもの<苦手>を<得意>にする, 東京: 金子書房; 2011年: 130-135.
- 21) 藤崎和彦. 学習方法: 全国歯科衛生士教育協議会「平成 23 年度歯科衛生士専任教員講習会 II テキスト」,

岐阜：全国歯科衛生士教育協議会；2011年：17-28.

- 22) 藤崎和彦. シミュレーション医学教育とは何か：日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編. シミュレーション医学教育入門，東京：篠原出版社；2011年：2-12.
- 23) 藤崎和彦，尾関俊紀. ロールプレイによるシミュレーション教育：日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編. シミュレーション医学教育入門，東京：篠原出版社；2011年：107-113.
- 24) 藤崎和彦，尾関俊紀. 模擬患者参加のシミュレーション教育：日本医学教育学会教材開発・SP小委員会編. シミュレーション医学教育入門，東京：篠原出版社；2011年：114-119.
- 25) 阿部恵子，丹羽雅之，藤崎和彦，鈴木康之，植村和正. 新しい医学教育の流れ'10 秋. 第38回医学教育セミナーとワークショップの記録. 名古屋：三恵社；2011年：1-180.
- 26) 藤崎和彦，鈴木康之，丹羽雅之，井内康輝. 新しい医学教育の流れ'11 冬. 第39回医学教育セミナーとワークショップの記録. 名古屋：三恵社；2011年：1-232.
- 27) 加藤智美，鈴木康之，藤崎和彦，丹羽雅之. 新しい医学教育の流れ'11 春. 医学教育開発研究センター10周年記念式典・シンポジウム 第40回医学教育セミナーとワークショップの記録. 名古屋：三恵社；2011年：1-159.
- 28) 藤崎和彦，鈴木康之，田川まさみ，守屋利佳，西城卓也編. 新しい医学教育の流れ'11 夏. 第41回医学教育セミナーとワークショップの記録. 名古屋：三恵社；2011年：1-214.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 藤崎和彦. 地域をまもる医師をどう育てるかー新医師臨床研修制度見直しについて，月刊国民医療 2009年；262巻：2-6.
- 2) 藤崎和彦. あなたは変われる タバコ編，G ニュースレター 2009年；33巻：4.
- 3) 藤崎和彦. あなたは変われる アルコール編，G ニュースレター 2009年；34巻：4.
- 4) 藤崎和彦. あなたは変われる 間食編，G ニュースレター 2009年；35巻：2-3.
- 5) 藤崎和彦. 医療関係職種教育におけるFDのシステム，理学療法ジャーナル 2010年；44巻：317-324.
- 6) 川上ちひろ，辻井正次. 思春期広汎性発達障害男児への性教育プログラムの検討，小児保健研究 2011年；70巻：402-411.
- 7) 井内康輝，藤崎和彦. 第39回医学教育セミナーとワークショップ，医学教育 2011年；42巻：45-46.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 丹羽雅之，藤崎和彦，加藤智美，阿部恵子，若林秀樹，高橋優三，鈴木康之. 医学教育セミナーとワークショップー30回開催を振り返って，医学教育 2009年；40巻：367-374.
- 2) 阿部恵子，藤崎和彦，丹羽雅之，鈴木康之. Emotional Intelligence (EI) と Physician Empathy Scale (PES)(日本語訳)，医学教育 2009年；40巻：439-440.
- 3) 阿部恵子，奥野友香. ASPE (Association of Standardized Patient Educators) Annual Conference 2008に参加して，医学教育 2009年；40巻：129-131.
- 4) 村岡千種，藤崎和彦. 医療職が模擬患者を演じるということーSPになるまでのプロセスと功罪ー，日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会誌 2010年；8巻：21-30.
- 5) 川瀬基子，半谷眞七子，亀井浩行，松葉和久，大橋均，藤崎和彦. 調剤薬局におけるがん患者と薬剤師のコミュニケーションに関するパイロット研究，医療薬学 2011年；37巻：559-566.
- 6) 志村俊郎，吉井文均，吉村明修，阿部恵子，高橋優三，佐伯晴子，藤崎和彦，阿曾亮子，井上千鹿子. 医学部・医科大学における模擬患者・標準模擬患者養成および参加型教育に関する実態調査，医学教育 2011年；42巻：29-35.
- 7) 川上ちひろ，阿部恵子，藤崎和彦，丹羽雅之，鈴木康之. 保育園児・妊婦との継続的交流体験の教育効果ー医療系学生の気づきと学び，日本小児科学会雑誌 2011年；115巻：132-137.
- 8) 若林英樹，鈴木康之. 英国グラスゴー大学のカリキュラムに学ぶー総合診療/プライマリ・ケアをコアとする地域基盤型の卒前医学教育ー，医学教育 2011年；42巻：371-374.

原著 (欧文)

- 1) Abe K, Suzuki T, Fujisaki K, Ban N. A national survey to explore the willingness of Japanese standardized patient to participate in teaching physical examination skills to undergraduate medical students. Teach Learn Med. 2009;21:240-247. IF 0.679
- 2) Cleland J, Abe K, Rethans J. The use of simulated patients in medical education. AMEE Guide No 42. Med Teach. 2009;31:477-486. IF 1.494
- 3) Wakabayashi H, Diaz LA, Rubenstein D, Lefor A, Kitajima Y, Aoyama Y, Suzuki Y, Takahashi Y, Ban N. Opinion: Three essential conditions to cultivate physician scientists. Medical Education (Japan). 2009;40:433-437.
- 4) Abe K, Sato J, Wakabayashi H, Ban N. Knowing the patient better: how facilitated sharing of diabetes

patients' life stories enhances patient/physician relationships but not metabolic control. General Medicine. 2010;11:79-86.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：伴信太郎，研究分担者：植村和正，西城卓也；科学研究費補助金挑戦的萌芽：スキルスラボ教育を活性化させる非常勤医師再教育プログラム開発；平成 21-23 年度；4,576 千円(2,226：1,360：990 千円)
- 2) 研究代表者：伴信太郎，研究分担者：六反一仁，西城卓也；科学研究費補助金基盤(B)：慢性疲労症候群に対する漢方治療と認知行動療法を融合した集学的な治療戦略の確立；平成 21-23 年度；17,810 千円(9,620：5,330：2,860 千円)
- 3) 研究代表者：鈴木富雄，研究分担者：伴信太郎，佐藤寿一，西城卓也；科学研究費補助金基盤研究(C)：患者中心のコミュニケーション教育プログラム(PEAC)の開発とその評価；平成 21-23 年度；4,550 千円(1,560：1,430：1,560 千円)
- 4) 研究代表者：檜田美雄，研究分担者：若林英樹；学術研究助成基金助成金挑戦的萌芽研究：在宅医療文化のビデオエスノグラフィー～生活と医療の相互浸透関係の探究～；平成 23 年度；360 千円
- 5) 研究代表者：阿部恵子，研究分担者：若林英樹，川上ちひろ；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医学生の情動能力育成のための 6 年間継続的コミュニケーション教育プログラムの開発；平成 23-25 年度；5,200 千円(2,340：1,430：1,430 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

藤崎和彦：

- 1) 日本医学教育学会理事，評議員(～現在)
- 2) 日本医学教育学会教材開発 SP 養成委員会同顧問(～現在)
- 3) 日本医学教育学会医学教育専門家育成検討委員会委員長(～現在)
- 4) 医療コミュニケーション研究会会長(～現在)
- 5) RIAS 研究会日本支部(RIAS Japan)代表(～現在)
- 6) 日本医療経済学会幹事(～現在)

阿部恵子：

- 1) Association of Standardized Patient Educators, International committee member (～現在)
- 2) RIAS 研究会委員(～現在)
- 3) 日本医学教育学会，教材開発・SP 委員会委員(平成 21 年 4 月～現在)

若林英樹：

- 1) 日本医学教育学会・行動科学準備教育委員会委員(平成 21 年 4 月～現在)
- 2) 家族志向のヘルスケア研究会設立代表(平成 20 年～現在)

西城卓也：

- 1) 日本医学教育学会医学教育専門家育成検討委員会委員(～現在)
- 2) 日本医学教育学会国際関係委員会委員(～現在)

2) 学会開催

医学教育開発研究センター：

- 1) 第31回医学教育セミナーとワークショップ(平成21年1月, 岐阜)
- 2) 第32回医学教育セミナーとワークショップ(平成21年5月, 東京)
- 3) 第33回医学教育セミナーとワークショップ(平成21年8月, 岐阜)
- 4) 第10回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修(平成21年10月, 岐阜)
- 5) 第34回医学教育セミナーとワークショップ(平成21年11月, 札幌)

藤崎和彦：

- 1) 第18回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成22年6月, 名古屋)
- 2) 第19回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成22年12月, 名古屋)
- 3) 第20回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成23年6月, 名古屋)
- 4) 第21回医療コミュニケーション研究会例会開催(平成23年12月, 名古屋)

藤崎和彦・阿部恵子：

- 1) 第5回RIASトレーニングワークショップ(平成22年8月, 東京)
- 2) 第6回RIASトレーニングワークショップ(平成23年7月, 名古屋)

阿部恵子：

- 1) 第4回RIASワークショップ(平成21年7月-8月, 名古屋)

若林英樹：

- 1) 第2回家族志向のヘルスケア研究会ワークショップ「メディカルファミリーセラピー」, テーマ: 患者・家族中心の医療で鍵となるものは?(平成22年11月, 東京)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

藤崎和彦：

- 1) 現代GP「双方向型医療コミュニケーション教育の展開」(平成21年3月, 札幌, 「医療系大学における実践的コミュニケーション教育について」シンポジスト)
- 2) 模擬患者参加型教育フォーラム in 岡山(平成22年2月, 岡山市, 基調講演「我が国の医療教育における模擬患者の役割」演者)
- 3) 大阪大谷大学薬学部SP研修会(平成22年4月, 大阪, 特別講演「OSCEだけで終わらないSP参加型コミュニケーション教育」演者)
- 4) 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会ワークショップ(平成22年6月, 薬学部模擬患者交流会&ファシリテーター養成講座基調講演「全国薬学部のSP会の状況と維持発展の知恵」演者)
- 5) 第4回九州地区医療コミュニケーション教育ワークショップ(平成22年6月, タスクフォース)
- 6) 全国歯科衛生士教育協議会教員研修会(平成22年7月, 基調講演「世界的な医学教育の動向と学習方法の考え方」演者)
- 7) 第42回日本医学教育学会大会(平成22年7月, 東京, シンポジウムII 市民の参加する医学教育のあり方「我が国におけるSPの標準化の現状と課題」シンポジスト)
- 8) 共用試験実施機構医科OSCE模擬患者標準化に関するワークショップ(平成22年8月-9月, 基調講演「日本でのSP育成の歴史や課題」演者)
- 9) 第2回共用試験実施機構医科OSCE外部評価者認定講習会(平成22年10月, 「医療面接」座長)
- 10) 香川模擬患者フォーラム基調講演(平成22年10月, 高松市, 「模擬患者(SP)の医療人教育における役割-その現状と将来-」演者)
- 11) 第1回岐阜県医師育成・確保コンソーシアム臨床研修指導医講習会(平成22年10月, 岐阜, チーフタスクフォース)
- 12) 島根県立大学看護短期大学部FD研修会(平成22年11月, 島根, 特別講演「シミュレーション教育とSP参加型教育の最新事情」演者)
- 13) 第5回医療コミュニケーション教育研究セミナー(平成22年11月, 広島市, 教育講演「医療現場に

- 必要なコミュニケーション教育」演者)
- 14) 札幌市立大学看護学部模擬患者特別研修会(平成 22 年 11 月, 札幌市, 特別講演「模擬患者に求められているフィードバックとは」演者)
 - 15) 模擬患者参加型教育フォーラム in 岡山(平成 23 年 2 月, 岡山市, 基調講演「我が国の医療教育における模擬患者の役割」演者)
 - 16) シンポジウム 歯学士教育課程でのプロフェッショナルリズム教育の構築(平成 23 年 5 月, 北九州市, 特別講演「医療人育成のためのプロフェッショナルリズム教育」演者)
 - 17) 名城大学薬学部平成 23 年度卒後教育講座(平成 23 年 5 月, 名古屋市, 特別講演「薬剤師に必要なコミュニケーションスキル」演者)
 - 18) 岐阜大学じゅうろく銀行産学連携くるるセミナー(平成 23 年 7 月, 大垣, セミナー「病気になるということ」演者)
 - 19) 第 43 回日本医学教育学会大会(平成 23 年 7 月, 広島, シンポジウム「医学教育専門家認定制度を考える」座長)
 - 20) 第 43 回日本医学教育学会大会(平成 23 年 7 月, 広島, シンポジウム 医学教育専門家認定制度を考える「医学教育専門家認定制度とは」シンポジスト)
 - 21) 第 43 回日本医学教育学会大会(平成 23 年 7 月, 広島, プレコングレスワークショップ「医学教育ポートフォリオを体感する」ファシリテーター)
 - 22) 第 3 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会(平成 23 年 9 月, 福岡, ワークショップ 3「医療コミュニケーション関連演題」座長)
 - 23) 第 35 回日本医療経済学会研究大会(平成 23 年 9 月, 岐阜, シンポジウム「低成長時代の医療保障の動向」座長)
 - 24) 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会医療コミュニケーション(平成 23 年 10 月, 東京, シンポジウム特別講演「医療コミュニケーション研究の現状とチーム医療」演者)
 - 25) 第 21 回日本医療薬学会年会ワークショップ 2「SP 参加型研修でコミュニケーション能力を高めようー『がんサバイバー』を題材として」(平成 23 年 10 月, 神戸, 特別講演「なぜ SP 参加型研修なのか」演者)

阿部恵子 :

- 1) 東京薬科大学模擬患者養成セミナー(平成 21 年 3 月, 東京, 「フィードバックの基本」演者)
- 2) 東京理科大学薬学部模擬患者養成セミナー(平成 21 年 3 月, 千葉, 「世界の模擬患者とフィードバックの基本」演者)
- 3) 埼玉県立大学看護学部第 3 回模擬患者養成セミナー(平成 21 年 10 月, 埼玉, 「SP からのフィードバック」演者)
- 4) The 9th Annual Association of Standardized Patient Educators Conference, International Committee Presentation and Workshop 2010(2010, Volunteer patients, real patients and simulated patients: Participants around the world-how ethnically diverse are we? 「Simulated/Standardized Patients in Japan」Presenter)
- 5) 第 42 回日本医学教育学会(平成 22 年 7 月, シンポジウム II 市民の参加する医学教育のあり方「国内外の身体診察に参加する模擬患者の現状」シンポジスト)
- 6) 埼玉県立大学看護学部看護学科, 第 4 回模擬患者養成セミナー(平成 22 年 9 月, 埼玉, 「SP のフィードバック」演者)
- 7) 東京大学医学教育国際協力研究センター アフガニスタン研修会(平成 22 年 10 月, Teaching medical interview collaboration with SP ; 演者)

若林英樹 :

- 1) 第 3 回秋田大学医学部付属病院臨床研修指導医養成講習会(平成 21 年 10 月, 秋田, 「家族・患者への説明～シミュレーションとしてのロールプレイの効果を考える～」, 演者および座長)
- 2) 第 1 回家庭医療指導医養成ワークショップ(平成 21 年 11 月, 名古屋, 「家族志向のプライマリケアをどう教えるか」演者および座長)
- 3) 第 1 回家族志向のヘルスケアワークショップ(平成 21 年 12 月, 名古屋, 「家族志向のプライマリ・ケア」演者および座長)
- 4) 第 27 回日本家族研究家族療法学会(平成 22 年 6 月, 郡山, ワークショップ「医療のための家族の知識」パネリスト)

- 5) 第 42 回日本医学教育学会(平成 22 年 7 月, 東京, ポスターセッション 13「地域医療教育, その他」座長)
- 6) 家庭医療サマーフォーラム in 福島(平成 22 年 8 月, 福島県南会津郡只見町, 「福島県立医科大学・地域家庭医療学講座 2010」 演者)
- 7) 第 43 回日本医学教育学会大会. パネル・ディスカッション「準備教育をアウトカム基盤型で考える～その可能性と課題～」(平成 23 年 7 月, 広島, パネリスト「地域での継続的交流から体験学習するプログラム: 岐阜大学での新しい取り組み」 演者)
- 8) 恵寿総合病院, 能登地域総合診療強化委員会主催 能登家庭医療道場(平成 23 年 10 月, 七尾, 「地域医療で役立つ家族志向のケア」 演者)

西城卓也:

- 1) 第 43 回日本医学教育学会(平成 23 年 7 月, 広島, シンポジウム「医学教育専門家認定制度を考える」シンポジスト)
- 2) 第 43 回日本医学教育学会(平成 23 年 7 月, 広島, 「インターナショナルセッション」 座長)
- 3) 信大病院を中心とした医師卒後教育ワークショップ 2011(平成 23 年 10 月, 信州, タスクフォース)
- 4) 東京大学医学教育国際協力研究センター アフガニスタン研修会(2011.10, Tokyo, Effective Ambulatory Teaching ; 演者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

藤崎和彦:

- 1) 医師国家試験委員(～現在)
- 2) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 事後評価解析小委員会委員(～現在)
- 3) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 学習・評価項目等改訂専門部会委員(～現在)
- 4) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 OSCE 課題改訂専門部会委員(～現在)
- 5) 医療系大学間共用試験実施評価機構医学系 SP 標準化小委員会委員(～現在)
- 6) 新城市健康づくり計画策定会議アドバイザー(～現在)

若林英樹:

- 1) 名古屋大学総合診療科家族志向のプライマリ・ケアカンファレンス指導医(～現在)
- 2) 名古屋大学招へい教員(総合診療科)大学院授業「行動科学と家族志向のケア」主催(～現在)
- 3) 日本プライマリ・ケア連合学会 東日本大震災震災支援チーム(PCAT)研修・教育部リーダー(平成 23 年 3～5 月)
- 4) 日本プライマリ・ケア連合学会 東日本大震災震災支援チーム(PCAT)こころのケアチームリーダー(平成 23 年 6 月～現在)
- 5) 日本家族研究・家族療学会 震災支援委員会委員(平成 23 年 6 月～現在)

10. 報告書

- 1) 藤崎和彦: SP(standardized patient)について: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業「試験問題プール制の推進等国家試験の改善に関わる研究」 分担研究「OSCE の実施に関する研究」 報告書「医師国家試験 OSCE 実施概要」: 10(平成 21 年 3 月)
- 2) 藤崎和彦: 医師国家試験 OSCE での標準模擬患者 SP について: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業「試験問題プール制の推進等国家試験の改善に関わる研究」 分担研究「OSCE の実施に関する研究」 報告書「医師国家試験 OSCE 実施概要」: 35-36 (平成 21 年 3 月)
- 3) 阿部恵子: 第 33 回医学教育セミナーとワークショップ: ニュース, 医学教育 40: 395(平成 21 年 10 月)
- 4) 野呂幾久子, 阿部恵子, 伴信太郎: 客観的臨床能力試験(OSCE)医療面接におけるジェンダーとコミュニケーション・スタイルの関係: 医学教育 41: 1-62(平成 22 年 2 月)
- 5) 若林英樹: 米国大学院への留学経験～異文化の中で学んだ家族療法: 家族療法研究 27: 75-79(平成 22 年 8 月)

- 6) 藤崎和彦：世界的な医学教育改革の動向と日本の医学教育：第3回医学教育ワークショップ記録集 愛知医科大学：3-34(平成22年9月)
- 7) 藤崎和彦：岐阜大学における医学生への態度・人間性教育の試み：第28回「関西医科大学医学教育ワークショップ」記録：33-42(平成22年10月)
- 8) 藤崎和彦：医療現場に必要なコミュニケーション教育：日本コミュニケーション学会中国四国支部「医療コミュニケーション2010」：25-37(平成22年11月)
- 9) 鈴木富雄, 阿部恵子, 桑島愛, 河野直子, 伴信太郎：研修医の抱える問題から示唆された卒前行動科学教育の課題 - グループインタビューによる質的分析: 日本保健医療行動科学会年 25:209-224(平成22年)

11. 報道

- 1) 藤崎和彦：「黒岩祐治メディカルレポート 59 シリーズ医療教育を問う 2～コミュニケーション教育の挑戦!!～」スタジオ解説：スカイパーフェクトTV 医療福祉チャンネル(2009年2月14日)
- 2) 藤崎和彦：臨床研修制度 見直しに賛否教育：日本経済新聞(2009年3月8日)
- 3) 藤崎和彦：模擬患者で診断力磨く：日本経済新聞(2009年4月12日)
- 4) 藤崎和彦：医師と患者のコミュニケーションをより円滑に：まにわ@タウン 06号(2009年5月30日)
- 5) 藤崎和彦：『模擬患者』問診で対話力磨く：中日新聞(2010年11月9日)
- 6) 藤崎和彦：「医療者に求められるコミュニケーションスキルと教育の現状」：薬事日報(2011年4月4日)

12. 自己評価

評価

医療コミュニケーション教育の実習方法は確立されてきたが、より学習者中心で、より効果的な実習となるよう、教員指導スキルの向上、模擬患者の演技やフィードバックスキルの改善を図ってきた。医療英語教育に関しては、1年生対象（英語B）での基本医療英会話講座、4～6年生対象の臨床実践的なレベルの教育セッション（課外授業）を10回シリーズで構築することができ、6年生の海外臨床実習経験者は飛躍的に増加した。シミュレータを用いた身体診察実習のプログラムは、これまで数回のトライアルセッションを行い、教員間で振り返りを行いながら議論してきた。平成23年度から専任のスキルスラボ管理者を配置することができ、充実が期待される。これらの取り組みはいずれも、マーストリヒト大学（オランダ）、グラスゴー大学（英国）、自治医科大学、日本大学、聖路加国際病院など国内外の客員教員との交流・議論を重ねながら行ってきた。

現状の問題点及びその対応策

近年、国際的な医学教育分野では、教育のアウトカムを客観的に評価すること、エビデンスに基づいた教育がなされることが重視されている。当センターで開発してきた新しい流れの医学教育は軌道に乗ってきたところであるが、国際的なレベルの評価がまだ十分に公表できていない。これに対してはリサーチの方法論に力点を置くなどの対応が可能である。

また、臨床実践に直結する部分の共通教育、すなわち、医療面接から身体診察、臨床推論、診断治療法の立案にいたる一連の基本的臨床能力は、カリキュラムに部分的に導入することができたが、まだ十分な状況には至っていない。これについては、今後も学内外の臨床教育者との連携を図りたい。

今後の展望

現代社会のニーズに応えられるような医師・医学研究者を養成するために、1) より効果的な医学教育を開発しその効果を客観的に評価していく、2) 指導力と人間味のある医学教育の後継者を育成する、3) 国内外の医学教育に関わる教員、指導医との交流をさらに深める、ということが今後の展望である。

(10) 寄附講座「脊椎骨関節再建外科学講座（整形外科領域）」

1. 研究の概要

- 1) 椎間板細胞外基質代謝におけるカルパインの役割と解明
ウシおよびヒトの椎間板を用い、炎症・椎間板変性という局面においてカルパインが椎間板基質分解にいかに関与するかについて研究を進めている。
- 2) ヒト腰椎荷重負荷における椎間板・椎間関節の形態変化に関する研究
ヒト腰椎の立位荷重状態をシミュレートする装置を使用し、CT撮影によって得られた腰椎画像を3次元解析し、椎間板・椎間関節の3次元形態変化を解析した。
- 3) 腰椎装具の体幹位置覚、スポーツパフォーマンスに与える影響の検討
腰椎装具がもつ体幹位置覚向上効果がスポーツパフォーマンス(ゴルフ、ウォーキング等)にいかなる影響をあたえるかを3次元画像解析により検証した。
- 4) 腰椎変性側彎症に対する後方椎体間固定術による変形矯正の3次元解析
腰椎変性側彎症に対するブーメラン型スペーサーを用いた後方椎体間固定術による変形矯正が椎間板角、椎間関節形態に与える効果を3次元画像解析により検証している。
- 5) ヒト頸椎の屈曲伸展動態における硬膜管・頸部脊髓の3次元動態解析
脊髓造影検査後のファンクショナルCTを用い、ヒト頸椎の屈曲伸展動態における硬膜管・頸部脊髓の3次元動態解析を各種病態との関連にて検証している。
- 6) 椎間板のアンチエイジングを具現し得る新しい生物学的治療の開発
カルパインが椎間板細胞の細胞外マトリックス分解に関与することに着目し、その働きを制御することにより椎間板の老化予防を図る新しい生物学的治療を開発している。
- 7) 腰椎経椎間孔後方椎体間固定術前術後の椎間孔形態3次元解析
片側進入による腰椎経椎間孔後方椎体間固定術は低侵襲が特徴であるが、その術前術後の進入反対側椎間孔形態3次元解析を行い、椎間孔狭窄発生のリスクなど、合併症の軽減を図る尺度を検証している。
- 8) 腰椎低侵襲後方除圧術の中期長期成績に与える因子の検討
腰部脊柱管狭窄症に対する腰椎低侵襲後方除圧術(片側進入両側除圧)の中期長期成績について、椎間板変性、側弯、多椎間罹患、年齢等の多因子を対象に多変量解析による検証を行っている。
- 9) 超音波を用いた頸椎前方・後方除圧術後の脊髓形態変化
頸椎変性疾患における脊髓前方除圧法、後方除圧法の意義を術中超音波による脊髓形態観察および臨床成績との関連を調査し、検証している。
- 10) ゴルフスイングにおける体幹装具が腰椎挙動に与える影響の3次元解析
ゴルフスイングは非対称な腰椎回旋動作であり、椎間関節への過負荷による腰痛発症が問題となっている。体幹装具装着による腰椎3次元運動への影響の解析を行い、腰痛発症予防への効果の検証を行っている。
- 11) 頸椎前方除圧固定体位における頸椎形態の3次元解析
頸椎前方除圧固定体位における軸椎下の回旋挙動を頸椎変性疾患を有する臨床症例を対象に解析を行い、正確かつ安全な除圧術を施行するうえでの指標を作成している。
- 12) 関節リウマチの薬物治療において、生物学的製剤の効果判定を多彩な血液マーカーより行う試みを行っている。
- 13) 関節リウマチの治療骨関節破壊抑制に対する生物学的製剤の役割を検証している。
- 14) 関節リウマチに対する生物学的製剤を用いた治療において、長期使用による安全性等の検討を行っている。

2. 名簿

准教授： 宮本 敬 Kei Miyamoto
助教： 佐藤正夫 Masao Sato

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 宮本 敬. 椎間関節固定術：越智隆弘，糸満盛憲，越智光夫，高岸憲二，戸山芳昭，中村利孝，三浪明男，吉川秀樹編. 最新整形外科学大系 6 手術進入法と基本的手術手技，東京：中山書店；2009年：199-203.
- 2) 宮本 敬，清水克時. 胸椎椎間板ヘルニアに対する外科的治療－当科の治療指針および最新の動向：脊椎脊髓ジャーナル，東京：三輪書店；2009年：22巻；159-168.

- 3) 宮本 敬, 清水克時. 骨粗鬆症性椎体骨折: 総合リハビリテーション, 東京: 医学書院; 2009年: 37巻; 505-508.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 佐藤正夫. 早期リウマチに対する抗リウマチ薬治療, 整形・災害外科 2009年; 52巻: 1163-1168.
- 2) 佐藤正夫. サラズスルファピリジン, リウマチ科 2010年; 44巻: 641-648.
- 3) 竹村正男, 斎藤邦明, 佐藤正夫, 清島 満. インターロイキン2, 日本臨床 2010年; 68巻 増刊号5: 110-114.
- 4) 竹村正男, 斎藤邦明, 佐藤正夫, 清島 満. 可溶性 TNF レセプターI, II(sTNF-RI, RII), 日本臨床 2010年; 68巻 増刊号7: 183-186.
- 5) 佐藤正夫. 関節リウマチの早期診断と最新治療, 岐阜県医師会医学雑誌 2011年; 24巻: 43-48.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 西本博文. 片側椎弓切除術の低侵襲性について, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 55-56.
- 2) 山口良大, 宮本 敬, 細江英夫, 鈴木直樹, 田中健一郎, 清水克時. 下位腰骨および腰仙移行部に発生した感染性脊椎炎に対する脊椎インスツルメンテーションを用いた外科的治療の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 563-564.
- 3) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対するサラズスルファピリジン単独療法, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 569-570.
- 4) 四戸隆基, 熊澤慎志, 馬場岳士, 佐藤正夫. 地域医療としての高齢者大腿骨近位部骨折治療, 一般病院における入院医療費, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 613-614.
- 5) 竹内健太郎, 宮本 敬, 細江英夫, 清水克時. 脊椎病変を呈した multiple myeloma と plasmacytoma に対する外科的治療の経験, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 817-821.
- 6) 佐藤正夫, 四戸隆基, 田中 領, 清水克時. 線維性筋痛症症例の背景因子の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 951-952.
- 7) 四戸隆基, 熊澤慎志, 馬場岳士, 佐藤正夫. 入院医療費が高額になる理由は何か?, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 1455-1456.
- 8) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 岩井智守男. 輸血拒否患者に対する脊椎手術の経験, 日本整形外科学会雑誌 2009年; 83巻: S287.
- 9) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎. 頸椎前方固定に使用するプレートの特徴, 日本整形外科学会雑誌 2009年; 83巻: S296.
- 10) 佐藤正夫, 竹村正男, 田中 領, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチの結核スクリーニングにおけるクオンティフェロンの有用性の検討, 臨床リウマチ 2009年; 21巻: 309-312.
- 11) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 長縄敏毅. 小皮切による胸椎前方手術, 脊椎・脊髄神経手術手技 2009年; 11巻: 26-29.
- 12) 宮本 敬, 清水克時. 胸椎椎間板ヘルニアに対する外科的治療-当科の治療指針および最新の動向-, 脊椎脊髄ジャーナル 別刷 2009年; 22巻: 159-168.
- 13) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 岩井智守男, 飯田宏樹. 輸血拒否患者(エホバの証人)に対する脊椎手術, 脊柱変形 2009年; 24巻: 100-102.
- 14) 山岸宏江, 青木隆明, 田中健一郎, 宮本 敬, 細江英夫, 清水克時. Os odontoideumに伴う環軸椎亜脱臼の手術前後のADLの検討, 中部整形外科災害外科学会誌 2009年; 52巻: 899-900.
- 15) 後藤元久, 岡村秀人, 田垣敦朗, 枇杷田奈七, 三輪晃敬, 四戸隆基, 佐藤正夫. 外来リウマチ患者における当院のQOLの実態調査, 本RAのリハビリ研究誌 2009年; 23巻: 34-37.
- 16) 四戸隆基, 佐藤正夫. 関節リウマチに対する first choice としてのブシラミンによる治療, 中部リウマチ 2009年; 40巻: 20-21.
- 17) 佐藤正夫, 清水克時, 森 秀法, 大野 康. 生物学的製剤使用中に肺クリプトコッカス症を生じた関節リウマチの一例, 臨床リウマチ 2009年; 21巻: 396-398.
- 18) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後弯症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術, J Spine Res 2010年; 1巻: 1838-1843.
- 19) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成. 後期高齢者後弯症に対して椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術の1例, J Spine Res 2010年; 1巻: 1986-1988.
- 20) 光石直史, 鈴木直樹, 長縄敏毅, 和田栄二, 清水克時, 宮本 敬. 圧迫性頸髄症に対する頸椎前方手術, 後方手術による脊髄除圧効果の ultrasonography を用いた比較検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 55-56.
- 21) 佐藤正夫, 四戸隆基, 田中 領, 清水克時. 生物学的製剤と悪性腫瘍の発生に関する検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 177-178.

- 22) 四戸隆基, 熊澤慎志, 馬場岳士, 佐藤正夫. 高齢者の大腿骨近位部骨折の退院基準達成の実際, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 617-618.
- 23) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対する生物学的製剤一次無効例の検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 1269-1270.
- 24) 細江英夫, 飯沼宣樹, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 環軸椎固定術における環軸関節内癒合について, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 1335-1336.
- 25) 貞升 彩, 宮本 敬, 野澤 聡, 喜久生健太, 細江英夫, 清水克時. 腰椎分離症に対する分離部修復術の成績—スポーツ活動への復帰に着目して— Ripair of pars defects by segmental trasverse wiring for athletes with symptomatic spondylolysis, 日本整形外科学会雑誌 2010年; 30巻: 45-50.
- 26) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術の有用性, 日本整形外科学会雑誌 2010年; 84巻: S365.
- 27) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術 術後骨折と矢状面アライメント, J Spine Res 2010年; 1巻: 291.
- 28) 四戸隆基, 熊澤慎志, 佐藤正夫. 農村部での高齢者大腿骨近位部骨折症例の動向(2000~2008年), 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 1409-1410.
- 29) 吉岡大輝, 宮本 敬, 高澤 真, 伏見一成, 細江英夫, 清水克時. 腰椎変性疾患に対する多椎間(3椎間以上) TLIF の術後検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 567-568.
- 30) 増田剛宏, 若原和彦, 小倉真治, 田中健一郎, 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬. スノーボードによる脊椎外傷に対する手術治療成績, 東海脊椎外科 2010年; 24巻: 33-35.
- 31) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 生物学的製剤使用中に施行された手術症例の検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2011年; 54巻: 259-260.
- 32) 佐藤正夫, 四戸隆基, 竹村正男, 田中 領, 清水克時. 関節リウマチに対するアダリムマブの使用経験, 中部リウマチ 2011年; 41巻: 18-19.
- 33) 佐藤正夫, 四戸隆基, 竹村正男, 田中 領, 清水克時. エタネルセプトで加療中にニューモシスティス肺炎を生じた一例, 中部リウマチ 2011年; 41巻: 24-25.
- 34) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 生物学的製剤使用中に上肢の軟部腫瘍として発見された悪性リンパ腫の1例, 関節の外科 2011年; 38巻: 81-84.
- 35) 日置 暁, 宮本 敬, 高澤 真, 伏見一成, 細江英夫, 清水克時. 頸椎外傷・疾患に対するハローベスト固定におけるピン刺入部に関連する重度合併症の検討, Journal of Spine Research 別刷 2011年; 2巻: 831-834.
- 36) 青木隆明, 山岸宏江, 日置 暁, 伏見一成, 宮本 敬, 清水克時. 頸椎前方固定術後にえん下障害を生じた3症例の検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2011年; 54巻: 1155-1156.
- 37) 伏見一成, 宮本 敬, 細江英夫, 日置暁, 清水克時. 腰部脊柱管狭窄症に対する片側進入両側除圧術の成績予測因子の検討, Journal of Spine Research 2011年; 2巻: 839-843.
- 38) 宮本 敬, 山口良大, 日置 暁, 伏見一成, 清水克時. 下位腰椎および腰仙移行部に発生する感染性脊椎炎に対する脊椎インスツルメンテーションを用いた外科的治療, 日本外科感染症学会雑誌 2011年; 18巻: 207-212.
- 39) 宮本 敬, 赤澤 努, 山崎正志, 竹本 充, 川口善治. 脊椎外科 Q&A, THE SPINE perspectives 2011年; 18巻: 8-10.
- 40) 細江英夫, 飯沼宣樹, 山田喜久, 伏見一成, 宮本 敬, 清水克時. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術の留意点, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2011年; 54巻: 841-842.
- 41) 林 達郎, 陳 華岳, 宮本 敬, 周 向榮, 原 武史, 横山龍二郎, 兼松雅之, 星 博昭, 藤田広志. X線CT画像を用いた椎体の微細形態計測による新規骨折の予測能の調査(中間報告)平成23年第3号(7月発刊)第6回(平成22年度)リリー研究助成成果報告, Osteoporosis Japan(日本骨粗鬆症学会雑誌) 2011年; 19巻: 97-102.

原著(欧文)

- 1) Kikuike K, Uemura S, Miyamoto K, Horiya Y, Shimizu K. Upper lumbar burst fracture due to recreational high jumping into a river:report of five cases. Arch Orthop Trauma Surg. 2009;129:87-90. IF 1.196
- 2) Fukuta S, Miyamoto K, Iwata A, Hosoe H, Iwata H, Shirahashi K, Shimizu K. Unusual back pain caused by intervertebral disc degeneration associated with schmorl node at Th11/12 in a young athlete, successfully treated by anterior interbody fusion: a case report. Spine (Phila Pa 1976). 2009; 34:E195-198.
- 3) Kawaguchi A, Miyamoto K, Wakahara K, Hosoe H, Miura A, Hanamoto T, Shimizu K. Surgical treatment of multiple spinal canal stenoses associated with vitamin D-resistant rickets. J Clin Neurosci. 2009;16:717-719. IF 1.165
- 4) Nakamura M, Miyamoto K, Shimizu K. Difference in evaluation of patients with low back pain using the Japanese Orthopaedic Association Score for Back Pain and the Japanese Version of the Roland-Morris Disability Questionnaire. J Orthop Sci. 2009;14:367-373. IF 0.839
- 5) Nagano A, Miyamoto K, Nishimoto H, Hosoe H, Suzuki N, Shimizu K. Transforaminal lumbar interbody fusion for failed Graf ligamentoplasty: a report of two cases. J Orthop Surg (Hong Kong). 2009;17:220-222.
- 6) Miyamoto K, Sugiyama S, Hosoe H, Iinuma N, Suzuki Y, Shimizu K. Postsurgical recurrence of

- osteophytes causing dysphagia in patients with diffuse idiopathic skeletal hyperostosis. *Eur Spine J.* 2009;18:1652-1658. IF 1.994
- 7) Kikuike K, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. One-staged combined cervical and lumbar decompression for patients with tandem spinal stenosis on cervical and lumbar spine: analyses of clinical outcomes with minimum 3 years follow-up. *J Spinal Disord Tech.* 2009;22:593-601. IF 1.333
- 8) Kikuike K, Miyamoto K, Hosoe H, Kushima Y, Shimizu K. Double-level posterior spinal shortening for paralytic osteoporotic vertebral collapse of two vertebral bodies with a normal vertebra in between: a case report. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2009;129:57-60. IF 1.196
- 9) Fukuta S, Miyamoto K, Yoshida M, Kodama H, Kanamori Y, Hosoe H, Shimizu K. High-grade (Grade III) degenerative spondylolisthesis at L4/5 treated successfully by transforaminal interbody fusion (TLIF): A case report. *Quick Med Pub(peer-reviewed on-line journal).* 2010;16.
- 10) Hirakawa A, Miyamoto K, Masuda T, Fukuta S, Hosoe H, Inuma N, Iwai C, Nishimoto H, Shimizu K. Surgical outcome of 2-stage (posterior and anterior) surgical treatment using spinal instrumentation for tuberculous spondylitis. *J Spinal Disord Tech.* 2010;23:133-138. IF 1.333
- 11) Yamauchi K, Wakahara K, Fukuta M, Matsumoto K, Sumi H, Shimizu K, Miyamoto K. Characteristics of upper extremity injuries sustained by falling during snowboarding: A study of 1918 cases. *Am J Sports Med.* 2010;38:1468-1474. IF 3.821
- 12) Tanaka R, Takemura M, Sato M, Yamada Y, Nagaoka T, Horibe T, Hoshi M, Otaki H, Seishima M, Shimizu K. Comparison of chemiluminescence enzyme immunoassay (CLEIA) with ELISA for the determination of anti-cyclic citrullinated peptide antibodies. *Clin Chim Acta.* 2010;411:22-25.
- 13) Hioki A, Miyamoto K, Sakai H, Shimizu K. Lumbar axial loading device alters lumbar sagittal alignment differently from upright standing position: a computed tomography study. *Spine.* 2010;35:995-1001.
- 14) Hioki A, Miyamoto K, Hosoe H, Sugiyama S, Suzuki N, Shimizu K. Cantilever transforaminal lumbar interbody fusion for upper lumbar degenerative diseases (minimum 2 years follow up). *Yonsei Med J* 2011;52:314-321. IF 1.020
- 15) Ogura H, Miyamoto K, Fukuta S, Naganawa T, Shimizu K. Comparison of magnetic resonance imaging and computed tomography-myelography for quantitative evaluation of lumbar intracanalicular cross-section. *Yonsei Med J.* 2011;52:137-144. IF 1.020
- 16) Masuda T, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. Comparative study on the efficacy of two-staged (posterior followed by anterior) surgical treatment using spinal instrumentation on pyogenic and tuberculous spondylitis. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2011;131:765-772. IF 1.196
- 17) Kato Z, Kondo N, Kato H, Morita H, Teramoto T, Miyamoto K, Shimizu K. Selective pontine hypoplasia: A possible common feature in 5p monosomy syndrome. *Brain Dev.* 2011;33:702-703. IF 1.979
- 18) Komura S, Miyamoto K, Hosoe H, Fushimi K, Iwai C, Nishimoto H, Shimizu K. Anterior cervical multilevel decompression and fusion using fibular strut as revision surgery for failed cervical laminoplasty. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2011;131:1177-1185. IF 1.196
- 19) Naganawa T, Miyamoto K, Hosoe H, Suzuki N, Shimizu K. Hemilaminectomy for removal of extramedullary or extradural spinal cord tumors: medium to long-term clinical outcomes. *Yonsei Med J.* 2011;52:121-129. IF 1.020
- 20) Fukuta S, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. Kidney-type intervertebral spacers should be located anteriorly in cantilever transforaminal lumbar interbody fusion: analyses of risk factors for spacer subsidence for a minimum of 2 years. *J Spinal Disord Tech.* 2011;24:189-195. IF 1.333
- 21) Hioki A, Miyamoto K, Shimizu K, Inoue N. Test-retest repeatability of lumbar sagittal alignment and disc height measurements with or without axial loading: a computed tomography study. *J Spinal Disord Tech.* 2011;24:93-98. IF 1.333
- 22) Fukuta S, Miyamoto K, Suzuki K, Maehara H, Inoue T, Kikuike K, Shimizu K. Abundance of Calpain and Aggrecan-Cleavage Products of Calpain in Degenerated Human Intervertebral Discs. *Osteoarthritis Cartilage.* 2011;19:1254-1262. IF 3.953
- 23) Hayashi T, Chen H, Miyamoto K, Zhou X, Hara T, Yokoyama R, Kanematsu M, Hoshi H, Fujita H. Analysis on The Bone-Mineral-Density Distribution at Trabecular Bones in Thoracic and Lumbar Vertebrae Using X-Ray CT Images. *J Bone Miner Metab.* 2011;29:174-185. IF 2.238
- 24) Naganawa T, Miyamoto K, Ogura H, Suzuki N, Shimizu K. Comparison of magnetic resonance imaging and computed tomogram-myelography for evaluation of cross sections of cervical spinal morphology. *Spine.* 2011;36:50-56.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：林 達郎，共同研究者：陳 華岳，宮本 敬，周 向榮，原 武司，横山龍二郎，兼松雅之，星 博昭，藤田広志；第6回リリー研究助成プログラム(骨領域研究)：X線CT画像を用いた椎体の微細形態計測による新規骨折の予測能の調査；平成22年：800千円

- 2) 研究代表者：宮本 敬；学術研究助成基金助成金：椎間板のアンチエイジングを具現し得る新しい生物学的治療の開発；平成 23-25 年度：3,400 千円(1,400：1,200：800 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

宮本 敬：

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)

佐藤正夫：

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
2) 日本リウマチ学会評議員(～現在)
3) 中部リウマチ学会評議員(～現在)
4) 日本画像医学会評議員(～現在)
5) 日本線維筋痛症学会評議員(～現在)
6) 日本臨床リウマチ学会評議員(～現在)
7) リウマチの外科研究会評議員(～現在)

2) 学会開催

佐藤正夫：

- 1) 第 59 回東海膠原病研究会(平成 23 年 7 月, 名古屋)

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

宮本 敬：

- 1) 脊椎骨関節再建セミナー市民公開講座(平成 21 年 2 月, 岐阜, 招待講演「背骨の病気の治療～過去, 現在, 未来～」演者)
2) 第 13 回脊椎と神経を語る会(平成 21 年 3 月, 横浜, 招待講演「椎間板組織の in vitro 生体力学特性の解析」演者)
3) 第 1 回東京脊椎脊髄フォーラム(平成 21 年 5 月, 東京, 特別講演「脊椎外科に必要なバイオメカニクスの基礎」演者)
4) 第 9 回 ATST ミーティング(平成 21 年 7 月, 神戸, 招待講演「サルベージ手術としての頸椎前方多椎体亜全摘前方固定」演者)
5) 第 11 回岐阜整形外科卒後夏期セミナー2009(平成 21 年 7 月, 岐阜, 講演「脊椎疾患の基本」演者)
6) Osteoporotic Spine 研究会(平成 21 年 8 月, 大阪, 招待講演「骨粗鬆症性椎体骨折に対する手術治療」演者)
7) 脊椎骨関節再建セミナー市民公開講座(平成 21 年 9 月, 岐阜, 招待講演「腰部脊柱管狭窄症の最新の診断と治療」演者)
8) 脊椎インスツルメンテーションセミナー(平成 21 年 9 月, 名古屋, 招待講演「脊椎インスツルメンテーションのプリンシプル」演者)
9) 第 8 回東濃・可茂脊椎セミナー(平成 22 年 2 月, 多治見, 特別講演「腰部脊柱管狭窄症とその関連疾患の診断と治療ーリハビリテーションアプローチを基盤とした治療展開ー」演者)
10) GAR アスレティックリハビリテーションフォーラム The 8th (平成 22 年 2 月, 岐阜, 特別講演「ア

- スリートにおける腰痛, 及びリハビリテーションアプローチによる治療」演者)
- 11) 第 15 回岐阜脊椎セミナー(平成 22 年 2 月, 岐阜, 招待講演「LSCS に対するリマプロストを用いた保存的治療の中期～長期成績(中間報告)」演者)
 - 12) 第 8 回アスレティックリハビリテーションフォーラム(平成 22 年 2 月, 岐阜, 特別講演「腰痛の病態と保存療法」演者)
 - 13) 椎間板リサーチフォーラム(平成 22 年 3 月, 岐阜, 招待講演「三重大学椎間板再生プロジェクトー臨床前研究としての試みー」座長)
 - 14) 第 8 回からだ向上セミナー(平成 22 年 4 月, 尾張旭市, 特別講演「腰のケガ・障害のメカニズム」演者)
 - 15) 永寿会せぼねの病気セミナー(平成 22 年 5 月, 岐阜, 招待講演「足のしびれー原因いろいろー」演者)
 - 16) 医療研究会 FORM(For Open Real Medical)第 29 回講演会(平成 22 年 5 月, 岐阜, 特別講演「背骨の修理屋としてー私の脊椎外科修行記ー」演者)
 - 17) 第 2 回東京脊椎脊髄フォーラム(平成 22 年 5 月, 東京, 招待講演「頸椎(4 椎間以上)椎体亜全摘前方除圧固定術の実際」演者)
 - 18) 健康講演会誠広会セミナー(平成 22 年 7 月, 岐阜, 招待講演「せぼねの圧迫骨折-治療と予防-」演者)
 - 19) DePuy Spine Product セミナー in 名古屋(平成 22 年 7 月, 名古屋, 招待講演「私の腰椎椎体間固定術」演者)
 - 20) 第 12 回岐阜整形外科卒後夏季セミナー2010(平成 22 年 7 月, 岐阜, 講演「脊椎疾患の基本」演者)
 - 21) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 22 年 8 月, 岐阜, 招待講演「腰部脊柱管狭窄症ー足のしびれの原因ー」演者)
 - 22) 健康講演会誠広会セミナー(平成 22 年 9 月, 岐阜, 招待講演「坐骨神経痛について」演者)
 - 23) 背骨の病気勉強会(平成 22 年 10 月, 郡上, 招待講演「手のしびれー原因いろいろー」演者)
 - 24) Chungbuk-Gifu univ. Orthopedic Symposium (平成 22 年 10 月, 岐阜, 講演「Corrective Osteotomy for Kyphotic Deformity of the Spine -Surgical outcomes and Complications-」演者)
 - 25) 下呂 背骨の病気セミナー(平成 22 年 11 月, 岐阜, 招待講演「せぼねの圧迫骨折について」演者)
 - 26) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 22 年 11 月, 岐阜, 招待講演「手のしびれー原因いろいろー」演者)
 - 27) 永寿会せぼねの病気セミナー(平成 23 年 2 月, 岐阜, 招待講演「坐骨神経痛について」演者)
 - 28) 第 2 回インストゥルメンテーションフォーラム(平成 23 年 2 月, 東京, 招待講演「腰椎変性側彎・後彎症に対する手術治療」演者)
 - 29) 第 118 回下呂市医師会学術講演会(平成 23 年 2 月, 下呂, 特別講演「危険な腰痛の見分け方ー知って得をする腰痛のプライマリケアー」演者)
 - 30) 健康講演会かなめ会セミナー市民公開講座(平成 23 年 2 月, 岐阜, 招待講演「背骨の圧迫骨折の治療と予防」演者)
 - 31) 健康講演会誠広会セミナー市民公開講座(平成 23 年 3 月, 岐阜, 招待講演「注意すべき肩こり, 腰痛, 手足のしびれについて」演者)
 - 32) ー市民講演会ー背骨の病気勉強会(平成 23 年 4 月, 岐阜, 招待講演「坐骨神経痛の最新の治療」演者)
 - 33) ー市民講演会ー背骨の病気勉強会(平成 23 年 4 月, 高山, 招待講演「腰部脊柱管狭窄症について知ろうー足がしびれる病気ー」演者)
 - 34) 第 40 回日本脊椎脊髄病学会共催セミナー ランチョンセミナー(9)(平成 23 年 4 月, 東京, 招待講演「Kidney 型スペーサーを用いた腰椎椎間孔進入椎体間固定術(TLIF)ー各種病態への応用, 手技上の留意点, ピットフォールとトラブル回避法ー」演者)
 - 35) 第 5 回岐阜脊椎脊髄手術手技研究会(平成 23 年 4 月, 岐阜, 招待講演「頸椎前方固定術の Advantage」座長)
 - 36) 第 159 回飛騨臨床医会(平成 23 年 5 月, 高山, 特別講演「背骨の老化と QOL 障害に我々がどこまでできるか? すべきか? ー生活習慣病としての骨粗鬆症対策ー」演者)
 - 37) 下呂温泉せぼねセミナー(平成 23 年 5 月, 岐阜, 招待講演「背骨の病気の手術」演者)
 - 38) 岐阜バイオメカカンファレンス 2011 (平成 23 年 6 月, 岐阜, 特別講演「画像ベース 3 次元モデルを用いた生体内 3 次元形状・運動解析」座長)
 - 39) 第 1 回 Spine Forum in Gifu(平成 23 年 6 月, 岐阜, 招待講演「脊椎手術の成績不良例の検討ー整形外科医の視点からー」演者)
 - 40) 永寿会せぼねの病気セミナー市民公開講座(平成 23 年 6 月, 岐阜, 招待講演「背骨の病気の手術治療」演者)

- 41) 健康講演会誠広会セミナー市民公開講座(平成 23 年 7 月, 岐阜, 招待講演「背骨の病気の手術治療ー聞いてトクをする話ー」 演者)
- 42) 下呂温泉せぼねセミナー(平成 23 年 8 月, 岐阜, 招待講演「背骨の病気の手術」 演者)
- 43) 瀬戸旭医師会講演会(平成 23 年 9 月, 瀬戸, 特別講演「高齢者における脊椎疾患に対する病診連携」 演者)
- 44) 永寿会せぼねの病気セミナー(平成 23 年 10 月, 岐阜, 招待講演「腰痛難民にならないために」 演者)
- 45) 第 37 回日本臨床バイオメカニクス学会(平成 23 年 11 月, 京都, 招待講演「椎間板のバイオニクス・椎間板再生評価に必要な指標」 演者)
- 46) 第 54 回岐阜県内科医会講演会(平成 23 年 11 月, 美濃加茂, 招待講演「腰痛と足のしびれの病診連携」 演者)
- 47) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 23 年 11 月, 岐阜, 招待講演「せぼねの変形について～老化・そくわん・こうわん～」 演者)
- 48) 健康講演会かなめ会セミナー(平成 23 年 11 月, 岐阜, 招待講演「腰痛難民にならないために」 演者)
- 49) 兵庫県整形外科医会学術講演会(平成 23 年度第 5 回)(平成 23 年 12 月, 神戸, 特別講演「脊椎老化への major operation による挑戦ー後彎症に対する矯正固定術の功罪ー」 演者)
- 50) 健康講演会誠広会セミナー市民公開講座(平成 23 年 12 月, 岐阜, 招待講演「脊柱後弯(ねこぜ)の治療」 演者)

佐藤正夫：

- 1) 第 48 回日本臨床検査医学会東海・北陸支部総会(平成 21 年 3 月, 岐阜, ランチョンセミナー「関節リウマチの早期診断と治療法の進歩」 座長)
- 2) 岐阜 Biologics conference (平成 21 年 3 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチに対する新しい治療戦略」 座長)
- 3) IL-6 阻害薬研究会(平成 21 年 5 月, 沼津, 特別講演「関節リウマチに対する生物学的製剤の治療」 演者)
- 4) 第 9 回岐阜地区生活習慣病研究会(平成 21 年 6 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチの病態, 診断, 治療」 演者)
- 5) 第 8 回岐阜整形外科セミナー(平成 21 年 7 月, 岐阜, 特別講演「足部・足関節周辺のスポーツ傷害」 座長)
- 6) 第 2 回岐阜 Biologics conference(平成 21 年 10 月, 岐阜, 特別講演「実地医家における生物学的製剤 4 剤の使い分けとアダリムマブの位置付け」 座長)
- 7) 第 20 回東三河リウマチ研究会(平成 21 年 11 月, 豊橋, 特別講演「関節リウマチに対する生物学的製剤の治療」 演者)
- 8) 第 219 回もとす医師会研究会(平成 22 年 3 月, 岐阜, 特別講演「最新の関節リウマチ治療」 演者)
- 9) 第 2 回中濃地区アクテムラセミナー(平成 22 年 6 月, 岐阜, 特別講演「生物学的製剤治療におけるトシリズマブの位置づけ」 演者)
- 10) 第 83 回西濃ブロック研修会(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演「リウマチの最新治療について」 演者)
- 11) 岐阜県オレンシア適正使用セミナー(平成 22 年 9 月, 岐阜, 特別講演「特別講演 Lecture」 座長)
- 12) 岐阜 IL-6 阻害薬研究会(平成 22 年 9 月, 岐阜, パネルディスカッション「トシリズマブのベストユースを目指して」 司会)
- 13) 日本医師会生涯教育講座(平成 22 年 10 月, 岐阜, 講演「関節リウマチの早期診断と最新治療」 演者)
- 14) 岐阜 Nurse Biologics Conference (平成 22 年 10 月, 岐阜, 講演「リウマチ治療と生物学的製剤について」 演者)
- 15) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 23 年 1 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチ治療における早期診断と tight control の重要性」 座長)
- 16) Infliximab Seminar (平成 23 年 1 月, 岐阜, 特別講演「レミケードを上手に使う工夫」 座長)
- 17) 第 5 回岐阜 GP 研究会(平成 23 年 1 月, 岐阜, 講演「関節リウマチの治療目標と生物学的製剤」 演者)
- 18) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 23 年 1 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチ治療における早期診断と tight control の重要性」 座長)
- 19) RA クリニカルカンファレンス(平成 23 年 2 月, 関市, 特別講演「関節リウマチの治療目標と生物学的製剤」 演者)
- 20) Infliximab Meeting (平成 23 年 2 月, 下田, 特別講演「私の RA 治療戦略」 演者)
- 21) 第 4 回岐阜県抗リウマチ薬学術講演会(平成 23 年 3 月, 岐阜, パネルディスカッション「生物学的製

剤とタクロリムスのポジショニング」座長)

- 22) 第10回岐阜大学皮膚科研究セミナー(平成23年3月, 岐阜, 講演「生物学的製剤使用とサイトカイン」演者)
- 23) 岐阜 GOAL 研究会(平成23年4月, 岐阜, 講演「T2T リコメンデーションを深く理解する」演者)
- 24) 岐阜県病院薬剤師会岐阜ブロック研修会(平成23年4月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチ治療における MTX」演者)
- 25) 第44回日本リウマチ友の会岐阜県支部大会(平成23年5月, 岐阜, 医療講演「関節リウマチの治療目標と薬物療法」演者)
- 26) 平成23年度第2回薬剤師会大垣支部研修会(平成23年6月, 大垣, 特別講演「関節リウマチ治療における MTX」演者)
- 27) Infliximab Meeting(平成23年6月, 多治見, 特別講演「私の RA 治療戦略」演者)
- 28) 第2回岐阜リウマチフォーラム(平成23年7月, 岐阜, 特別講演「強力な抗リウマチ薬使用下の必須の注目点」座長)
- 29) リウマチクリニカルカンファレンス(平成23年8月, 郡上, 講演「RA 診断・治療の動向と生物学的製剤の使用経験について」演者)
- 30) 岐阜ナース GOAL 研究会(平成23年8月, 岐阜, 講演「T2T 患者向けリコメンデーションについて」演者)
- 31) 揖斐郡医師会講演会(平成23年9月, 揖斐川町, 特別講演「リウマチ治療が目指す新たな GOAL」演者)
- 32) 飛騨リウマチセミナー(平成23年9月, 高山, 特別講演「私の RA 治療戦略」演者)
- 33) 西濃 RA 懇話会(平成23年10月, 大垣, 特別講演「Infliximab Clinical Update 2011」演者)
- 34) 岐阜・西濃 GOAL 研究会(平成23年10月, 大垣, 講演「T2T リコメンデーションを深く理解する」演者)
- 35) 西濃リウマチセミナー(平成23年10月, 大垣, 特別講演「リウマチ治療の新時代における生物学的製剤の役割」演者)
- 36) 尾張北部リウマチセミナー(平成23年11月, 名古屋, 特別講演「Treat to Target を考慮した私の RA 治療戦略」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) Tanahashi H, Miyamoto K, Hioki A, Inuma N, Hosoe H, Shimizu K : Best Poster Presentation Award The 8th Combined Congress of the Spine and Pediatric Sections, Asia Pacific Orthopaedic Association ; Alteration of Sagittal, Axial, and Coronal Curvatura of the Cervical Spine in a Conventional Neck Position for Cervical Anterior Approach(平成23年6月)

9. 社会活動

宮本 敬 :

- 1) 岐阜県ラグビーフットボール協会医務委員会副委員長(~現在)

佐藤正夫 :

- 1) 日本リウマチ友の会岐阜支部, 医療相談・療養相談会(平成21年4月, 岐阜大学医学部附属病院)
- 2) 日本リウマチ友の会岐阜支部, 医療講演・療養相談会(平成21年9月, 西美濃厚生病院)
- 3) 日本リウマチ友の会岐阜支部, 医療相談・療養相談会(平成22年4月, 岐阜大学医学部附属病院)
- 4) 日本リウマチ友の会岐阜支部, 医療講演・療養相談会(平成22年9月, 西美濃厚生病院)
- 5) 日本リウマチ友の会岐阜支部, 医療相談・療養相談会(平成23年4月, 岐阜大学医学部附属病院)
- 6) 日本リウマチ友の会岐阜支部, 医療講演・療養相談会(平成23年11月, 西美濃厚生病院)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

スタッフの努力により、学会活動、論文発表などは概ね目標に達したと思われる。特に基礎研究において、科学研究費によって行われた椎間板変性に関する研究の論文成果が軟骨基礎関連のトップジャーナルに掲載されたことは意義のある業績となったと思われる。また、地域住民に対する脊椎疾患とその治療に関する地道な講演活動を繰り返し行っている(宮本敬)ことが、我々の行っている脊椎疾患に対する治療・研究に関するアピールとなり、ひいては岐阜大学医学部、医学部附属病院を公に親しみ深いものとして位置付けることに寄与していると思われる。また、岐阜脊椎脊髄手技研究会を立ち上げ、地域の専門臨床グループにおける技術向上を目指す試みのリーダーシップをとっており、地域医療のレベルアップを目指し、この試みが軌道にのりつつある。結果として、臨床業務においては、難易度の高い手術症例が増加しており、大学としての社会貢献を適切に果たしていると評価する。また、慢性関節リウマチ患者の臨床経過フォロー例が600例を超え(佐藤正夫)た。これは県内はもちろんのこと、全国クラスでも有数の患者数である。今後も努力を重ね、臨床・研究の両輪による地域貢献に尽力していきたい。

現状の問題点及びその対応策

スタッフ二人で業務を行っているため、マンパワーの不足が否めない。研究生、大学院生の参加を募り、アクティビティの増加を図りたい。また、システムティックな方法を考えてデータの解析等を行う必要があると考えている。また、他分野との共同研究をさらに活発に行っていきたい。

今後の展望

この4年間に蓄積したデータが膨大であり、検証・吟味を重ね、学会、論文等にて公表し、脊椎疾患患者、リウマチ疾患患者のQOL向上に役立てることが目標である。脊椎疾患及びリウマチ疾患の研究・臨床において、岐阜県、日本、世界をリードできる情報発信源となるよう、今後も努力を重ねていきたい。

(11) 寄附講座「地域医療学講座（岐阜県）」

1. 研究の概要

本講座は、以下の背景のもと、岐阜県が総務省の同意を得て支出する寄附金により設置され、下記内容について調査・研究・実践を行っている。

【背景】

平成16年度から義務化された医師臨床研修制度導入以降、都市部の病院で研修を受ける医師が増加し、大学病院で研修を受けるものが減少した。このため、本県においても大学医学部から地方の病院への医師派遣機能が低下し、地域医療に従事する医師の不足が進み、地域の医療提供体制に深刻な影響が出てきた。このため、限られた医療資源を有効に活用し、医療機関相互の機能分担と連携により医師の効果的な配置を行うとともに、一方で地域医療に熱意を持った医師を養成することが急務となっている。

1) 二次医療圏における医療提供体制の課題と解決策に関する調査研究

1) 目的

地域の基幹的病院を中心とした医療機関相互の機能分担と連携による効率的な医療提供体制と医師の効果的な配置システムを構築することを目的とする。

2) 内容と手法

二次医療圏ごとに次の手法により、課題と解決策を研究する。

- ① 疾病動向調査と住民ニーズの把握
- ② 基幹的病院を中心とした地域医療連携体制の構築
- ③ 適正な医療専門職種配置システムの開発

3) 期待される効果

効率的な医療提供体制と効果的な医師配置システムなどにより、限りある医療資源を最大限に有効活用されることにより、地域医療の充実につながる。

2) 地域の基幹的病院をフィールドとした地域医療学の研究と地域医療を担う医師の養成

1) 目的

- ① 地域特有の疾病対策の促進と包括医療の提供を目的とした地域医療学の研究を実施する。
- ② 地域医療を担う医師の養成を目的として、地域医家学の研究を含めた魅力的な総合臨床医育成プログラムを策定する。

2) 内容と手法

- ① 地域医家学の研究
 - 地域特有の疾病発生要因に関する地域疫学研究
- ② 地域医療を担う医師の養成
 - 総合臨床医育成カリキュラムの策定
 - 前記カリキュラムを統合し、都市部の大規模病院での高度専門医療と地域・へき地の医療機関での双方が研修可能な岐阜県方式の総合医育成カリキュラムを策定する。
 - 上記により、臨床研修医等に地域医療・医学の重要性を認識させ興味を持たせる。

3) 期待される効果

地域特有の疾病予防対策と包括医療の提供が促進されるとともに、充実した総合臨床医育成カリキュラムの策定により、地域医療を担う医師の養成の促進につながる。

2. 名簿

教授：	宇野嘉弘	Yoshihiro Uno
准教授：	川口順敬	Yoshihiro Kawaguchi
特任教授：	山田隆司	Takashi Yamada

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 石塚達夫, 森田浩之, 宇野嘉弘, 藤岡 圭, 岡田英之, 森 一郎. 糖尿病治療に必要な知識3, ステロイド投与時および周術期の血糖管理: 日本糖尿病学会編. 糖尿病学の進歩 2010 第44集, 東京: 診断と治療社; 2010年: 71-75.

著書（欧文）

なし

総説 (和文)

- 1) 山田隆司. 特集 これからのジェネラリスト, 動き出した日本プライマリ・ケア連合学会の専門医・認定医制度, 日本プライマリ・ケア連合学会誌 2011年;1巻:48.
- 2) 山田隆司. 地域医療振興協会と女川町支援, 月刊地域医学 2011年;25巻:12-16.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 池田貴英, 藤岡 圭, 森 一郎, 宮内ルミ子, 宇野嘉弘, 森田浩之, 梶田和男, 石塚達夫. 吸収不良症候群, 蛋白漏出性胃腸症を合併した関節リウマチの1例, 日本内科学会雑誌 2009年;98巻:138-140.
- 2) 森 一郎, 梶田和男, 池田貴英, 藤岡 圭, 宇野嘉弘, 森田浩之, 石塚達夫. 副腎アンドロゲン, dehydroepiandrosterone のアンドロゲン受容体を介した脂肪細胞増殖抑制効果, 岐阜県内科医会雑誌 2009年;23巻:71-74.
- 3) 藤岡 圭, 岡田英之, 藤掛貴敏, 森 一郎, 池田貴英, 宮内ルミ子, 松原健治, 宇野嘉弘, 梶田和男, 森田浩之, 石塚達夫. 中枢神経徴候で発症した ACTH 単独欠損症の2例, 日本内分泌学会雑誌 2009年;85巻:38-41.
- 4) 名和正人, 土屋十次, 立花 進, 熊沢伊和生, 川口順敬, 吉田和弘. 針生検の MIB-1 index より血管肉腫との鑑別に難渋した乳腺血管腫の1例, 日本臨床外科学会雑誌 2009年;70巻:993-997.
- 5) 細野芳樹, 高橋孝夫, 山口和也, 長田真二, 川口順敬, 吉田和弘. 経カテーテル的動脈塞栓術 (transcatheter arterial embolization:TAE) など集学的治療が奏功した局所進行乳がんの1例, 日本外科学系連合会雑誌 2009年;34巻:765-770.
- 6) 名和正人, 細野芳樹, 川口順敬, 吉田和弘, 杉崎圭子, 齊尾征直. 男性乳房顆粒細胞腫の1例, 乳癌の臨床 2009年;24巻:109-112.
- 7) 森田浩之, 宇野嘉弘, 池田貴英, 岡田英之, 山内雅裕, 森 一郎, 高橋典子, 臼井太朗, 梶田和男, 石塚達夫. 携帯電話 ecological momentary assessment の肥満 2 型糖尿病に対する効果. 日本遠隔医療学会雑誌 2010年;6巻:123-124.
- 8) 宇野嘉弘, 森田浩之, 梶田和男, 岡田英之, 藤岡 圭, 山内雅裕, 花本貴幸, 石塚達夫. 心肺音シミュレータ「イチロー」による, 卒後研修医に対する心臓聴診における, 基本的臨床診察技能教育の検証. 日本病院総合診療医学会雑誌 2010年;1巻:46-47.
- 9) 森田浩之, 梶田和男, 藤岡 圭, 岡田英之, 山内雅裕, 花本貴幸, 石塚達夫, 宇野嘉弘. 在宅健康管理システムの利用活性化. 日本病院総合診療医学会雑誌 2010年;1巻:52-53.
- 10) 梶田和男, 森 一郎, 岡田英之, 花本貴幸, 山内雅裕, 藤岡 圭, 宇野嘉弘, 森田浩之, 石塚達夫. ケトアシドーシスとの鑑別を要した周期性嘔吐症合併 2 型糖尿病の1例. 日本病院総合診療医学会雑誌 2010年;1巻:71-72.

原著 (欧文)

- 1) Ikeda T, Kajita K, Zhiliang W, Hanamoto T, Mori I, Fujioka K, Okada H, Fujikake T, Uno Y, Morita H, Nagano I, Takahashi Y, Ishizuka T. Effects of phorbol ester-sensitive PKC (c/nPKC) activation on the production of adiponectin in 3T3-L1 adipocytes. IUBMB Life. 2009;61:644-650.

IF 3.524

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 森田浩之, 研究分担者: 石塚達夫, 宇野嘉弘; 科学研究費補助金基盤研究(C): メタボリックシンドローム患者の行動変容-携帯電話 EMA の効果-: 平成 22-24 年度; 4,290 千円 (1,430 ; 1,430 ; 1,430 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

山田隆司：

- 1) 日本プライマリ・ケア連合学会副理事長(平成 22 年 4 月～現在)

宇野嘉弘：

- 1) 日本内科学会東海支部評議員(～現在)
- 2) 日本病院総合診療医学会評議員(平成 22 年 12 月～現在)

川口順敬：

- 1) 日本乳癌学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

宇野嘉弘：

- 1) 第 13 回東海支部専門医部会(平成 23 年 10 月, 岐阜,特別講演「研修指導医のための心音教育セミナー」演者)

山田隆司：

- 1) 日本プライマリ・ケア連合学会(平成 23 年 3 月, 東京,「特集 これからのジェネラリスト 動き出した日本プライマリ・ケア連合学会の専門医・認定医制度」シンポジスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 川口順敬：乳がん検診 ピンクで啓発：岐阜新聞(2009 年 10 月 10 日)
- 2) 川口順敬：乳がん検診に行こう：OLEILE(2009 年 10 月 10 日)
- 3) 山田隆司：(夕刊)らいふプラス「育成進む家庭医・総合医」：日本経済新聞(2010 年 5 月 13 日)
- 4) 山田隆司：「動き出した区立台東病院」「山田隆司院長に聞く」：(週刊)病院新聞(2010 年 6 月 4 日)
- 5) 山田隆司：家庭医, プライマリ・ケアの現状「現在のわが国の家庭医療をめぐる現状と課題」：医師のための経営情報(2010 年 8 月)
- 6) 山田隆司：家庭医, プライマリ・ケアの現状「望ましい医療のカタチと, 家庭医の育成」：医師のための経営情報(2010 年 9 月)
- 7) 山田隆司：特集 新カリキュラム<2009>の導入にあたり「医師の生涯教育を再考する」, [座談会] 新たなカリキュラムによる生涯教育制度の導入をめぐる：日本医師会雑誌(2010 年 9 月)
- 8) 山田隆司：特集 10 年後の地域医療のかたち 超高齢社会に対応した地域医療のあるべき姿とは：医療経営情報(2011 年 2 月)
- 9) 山田隆司：特集 どう発展させる 病院総合医：病院(2011 年 2 月)

12. 自己評価

評価

平成 19 年 11 月に発足した当講座は、へき地診療応援が主任務となり当講座オリジナルの業績は少ないが、高山、下呂、金山地区の医療支援では実績はあがってきている。今年で寄附講座としては最後となるが、来年度より改組される組織で引き続き学生の指導を続けていく体制は出来ている。

また、平成 20 年より開始した、地域医療を担う医師の養成を目的として「岐阜大学医学部“地域枠推薦入試選抜”受験希望者向け公開授業」は計 5 回実施され、出席者数も毎回増加し、第 5 回では 150 名以上にまで増えてきている。

現状の問題点及びその対応策

へき地診療応援が主任務となっている状況で、研究立案、データ収集・解析、論文記載など研究に費やす時間がかなり不足しているのが現状である。来年度より改組される組織では、社会的な認知度不足に対しては、今後学会での発表や論文文化とともに、岐阜県と協力して地域医療活動に積極的に活動してゆく。

今後の展望

2008 年 4 月から、医学部地域枠入学生 10 人が入学、2009 年 4 月からは同新入生が 15 人、また 2010 年 4 月からは同新入生が 25 人に増員され入学してくることより、ますます当講座の教育における重要性が求められてくると考え、学生教育を中心に地域支援・臨床研究を推進してゆきたい。

また、全国的に新設されてきている各県の寄附講座である地域医療学講座と来年度より改組される組織でタイアップして多施設での共同研究を行い、全国的に地域医療の改善・発展に関与してゆきたい。

(12) 寄附講座「乳腺・分子腫瘍学講座」

1. 研究の概要

乳腺・分子腫瘍学講座は平成 23 年 (2011 年) 度から岐阜大学医学部腫瘍外科学講座の寄附講座として開設された。現代外科学は手術一辺倒から、腫瘍学としての集学的治療分野へと進化しており、乳癌分野ではその傾向が特に顕著である。当講座は乳癌を中心とした診断・治療法の開発、腫瘍 (消化器癌・乳癌) の発癌・治療に関連した研究を行うことを主目標においており、腫瘍学としてのエビデンスを岐阜で蓄積・発信し、外科を中心とした腫瘍学の発展に貢献したいと考えている。臨床面では 1) 乳癌の早期診断法の確立、2) 抗癌剤や分子標的薬を有効に組み合わせた新規乳癌治療法の確立、3) 地域における有効な乳癌健診システムの構築、を目指している。研究面では乳癌・消化器癌の臨床検体 (腫瘍組織、血液等) の解析から分子生物学的・病理学的・生化学的手法を織り交ぜ基礎的解析を行い、発癌のメカニズム解明あるいは治療法の確立を目指している。

2. 名簿

准教授相当： 二村 学 Manabu Futamura
助教相当： 森光華澄 Kasumi Morimitu

3. 研究成果の発表

著書 (和文)
なし

著書 (欧文)
なし

総説 (和文)
なし

総説 (欧文)
なし

原著 (和文)
なし

原著 (欧文)
なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

1) 研究代表者：二村 学；臨床研究推進支援経費：乳癌患者における可溶性膜蛋白 (GPNMB/Osteoactivin) の予後因子・治療標的の可能性評価に関する研究；平成 23 年度；1,000 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

二村 学:

- 1) ピンクリボンフェスタ 2011「乳がん超音波診断・・・新たな戦力・・・」講師(平成 23 年 10 月 25 日)
- 2) Translational Research Conference (岐阜)(企画・運営) (平成 23 年 11 月 22 日)

森光華澄:

- 1) JABTS 主催乳房超音波講習会グループ講習腫瘍像形成性疾患准講師(平成 23 年 11 月 5-6 日)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

臨床・研究・教育の各方面での基盤整備に要する時間が必要であったが順調に経緯したと評価する。

1. 乳腺手術症例 55 例 (良性 1 例), 新規化学療法導入 35 例 (術前 8 例, 術後 14 例, 非切除 6 例, 再発 7 例), と前年より増加傾向にあった。このうち新規乳癌診断法である MRI-超音波融合画像システムを用いた 1 cm 以下の超早期微小乳癌診断例は 3 例であった。新規抗癌剤を用いた乳癌化学療法の新規プロトコルを立ち上げ, PhaseII 試験を計画中である。また健診機関と共同しながら乳癌検診精度向上に努めている。
2. 研究面では臨床研究推進支援経費獲得でき, 新規乳癌マーカーの開発のための岐阜薬科大学との共同研究を開始した。さらに国立がん研究センターとの新規癌抑制遺伝子に関する共同研究を開始した。

現状の問題点及びその対応策

臨床面においては, 全国的に乳癌患者数が増加する中, 乳癌手術症例数の伸び悩みが挙げられる。この一因として当科の乳癌診療における臨床・研究面でのアピール不足が考えられる。患者サイドへの啓蒙・宣伝, 地域医療施設や検診施設との連携強化, 学会・研究会での研修・発表を活発化させていくことが重要と考えている。

研究面ではまだ具体的成果を出すには至っていない。臨床例を詳細に検討し, 研究資財の収集・解析を綿密に行うことでデータの収集を行っていく。また, 学外施設との積極的な共同研究も推進していく。

今後の展望

1. 症例数 (手術症例, 化学療法症例) を増やし, 臨床活動を活発化し地域の乳癌診療を牽引していく。
2. 乳癌の標準治療の確立のための臨床研究を当講座から発信していく。
3. 乳癌診療のスペシャリスト (認定医, 専門医) を育成していく。
4. 講座スタッフ, 大学院生, 学部生を含め, 腫瘍学の臨床・基礎研究を推進し全国・世界に発信していく。

(13) 保健管理センター（学内施設）

1. 研究の概要

学内の教育支援施設として、学生と職員の健康管理を主たる業務として遂行している。特に、学生の「生涯健康教育の推進と健康支援の充実」を組織目標に掲げ目指している。これらの業務を発展させるために、さらなる科学的根拠を提供できるような研究を目指している。これは、本学のみならず、我が国、ひいては世界の大学生の健康管理業務におけるニーズであり、本学が貢献できる分野であると認識している。

(1) 学生の身体に関する研究

大学生の年代における生活習慣病の実態を各種調査（採血検査、体力テストなど）から明らかにしている。これは、世界的にも調査データが少なく若年成人の健康政策提言にも役立つデータとして、貴重である。

また、近年は日本人学生と留学生の比較という研究の視野を広げ、若年成人の健康実態に関する新知見報告を進めている。

(2) 学生の心の健康に関する研究

大学生の心の健康について、各種評価テスト（GHQ；General Health Questionnaire など）を実施し、学生支援に役立つデータを提供している。また、学生のセルフケアやその実態についても調査を継続している。これは、他に類似の調査がほとんどなく、ユニークな研究として、評価されている。

また、学生の心の健康度を知る方法や、心の支援を必要とする学生をスクリーニングする方法（描写法、バウムテストなど）についても検討をすすめている。

(3) 職員の健康管理に関する研究

職場のストレスと職員の健康度については、深い関係が示唆されながらも、具体的な予防策や政策提言につながる研究成果は少ない。そこで、職場の各種環境と、職員のストレス度（唾液中コルチゾール濃度測定など）の関係について調査をすすめている。ストレス度調査にホルモン測定値を用いるなど具体的な数値指標を示す点は、ユニークかつ科学的で価値があるため、発展的に進めている。

2. 名簿

教授(併任)：	清水克時	Katsuji Shimizu
教授：	山本真由美	Mayumi Yamamoto
准教授：	田中生雅	Mika Tanaka
助教：	浅田修市	Syuichi Asada
助教：	加納亜紀	Aki Kanoh
助教：	佐渡忠洋	Tadahiro Sado

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 細江英夫, 清水克時. 腰椎後方進入椎体間固定術(PLIF)：越智隆弘, 糸満盛憲, 越智光夫, 高岸憲二, 戸山芳昭, 中村利孝, 三浪明男, 吉川秀樹編. 最新整形外科学大系 6 手術進入法と基本的手術手技, 東京：中山書店；2009年：171-180.
- 2) 鈴木直樹, 清水克時. 腰椎後方進入椎体間固定術(PLF)－腰仙椎：越智隆弘, 糸満盛憲, 越智光夫, 高岸憲二, 戸山芳昭, 中村利孝, 三浪明男, 吉川秀樹編. 最新整形外科学大系 6 手術進入法と基本的手術手技, 東京：中山書店；2009年：192-198.
- 3) 清水克時. 顕微鏡視下頸椎前方除圧固定術(OPLL, 頸椎症)：馬場久敏編. OS NOW Instruction No.10 脊椎の低侵襲手術 患者負担を軽減手術のコツ, 東京：メジカルビュー社；2009年：11-16.
- 4) 山本真由美. 健康診断とは、定期健康診断について、メタボリック症候群・動脈硬化症・肥満とやせ：岐阜県大学保健管理研究会企画, 山本真由美監修. 大学生の健康ナビキャンペーンパスライフの健康管理－, 岐阜：岐阜新聞社；2009年：8-14, 139-142.
- 5) 佐渡忠洋. メンタルヘルス：岐阜県大学保健管理研究会企画, 山本真由美監修. 大学生の健康ナビキャンペーンパスライフの健康管理－, 岐阜：岐阜新聞社；2009年：90-94.
- 6) 田中生雅. こころの病気：岐阜県大学保健管理研究会企画, 山本真由美監修. 大学生の健康ナビキャンペーンパスライフの健康管理－, 岐阜：岐阜新聞社；2009年：95-100.
- 7) 清水克時. 痛み・QOL 評価 Assessment of pain, QOL：今日の整形外科治療指針 第6版, 東京：医学書院；2010年：11-13.
- 8) 清水克時. 背痛, 胸郭痛のとらえ方 / 診断手順 Recognition and diagnosis of pain on the back and the thoracic cage：今日の整形外科治療指針 第6版, 東京：医学書院；2010年：628-629.
- 9) 清水克時, 野澤 聡. 脊椎分離すべり症：脊椎整形外科専門医テキスト, 東京：南工堂；2010年：466-469.
- 10) 山本真由美. 健康診断とは、定期健康診断について、メタボリック症候群、動脈硬化症、肥満とやせ：岐阜

県大学保健管理研究会企画, 山本眞由美監修. 大学生の健康ナビ—キャンパスライフの健康管理—, 岐阜: 岐阜新聞社; 2010年: 8-14, 139-142.

- 11) 山本眞由美. 南フロリダ大学留学: 岐阜大学教育推進センター編. 教養ブックレット Vol. 3 日本脱出! 留学のすすめ, 岐阜: みらい; 2010年: 76-77.
- 12) 山本眞由美. II-8 糖尿病: 分子予防環境医学研究会編. 分子予防環境医学, 東京: 本の泉社; 2010年: 483-494, 819-826.
- 13) 小川寛恭, 鷺見浩志, 鷺見靖彦, 清水克時. スノーボードの外傷・障害(疫学): 宗田 大編. 復帰をめざすスポーツ整形外科, 東京: メジカルビュー社; 2011年: 559-562.
- 14) 山本眞由美. 各論 37 月経異常: 新版 学生と健康—若者のためのヘルスリテラシー—, 東京: 南江堂; 2011年: 134-137.
- 15) 佐渡忠洋. バウムテスト研究の可能性: 岸本寛史編. 臨床バウム 治療的媒体としてのバウムテスト, 東京: 誠信書房; 2011年: 28-43.
- 16) 佐渡忠洋. 付録 日本のバウムテスト文献一覧(1958~2010年): 山中康裕, 岸本寛史編. コッホの『バウムテスト第三版』を読む, 大阪: 創元社; 2011年: 220-266.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 清水克時. 平成 20 年度日本脊椎脊髄病学会 JSSR-Medtronic Sofamor Danek Asian Traveling Fellowship, Visiting Scholar Program 韓国忠北大学校医科大学—医学生交流プログラム同時開催—, 日本脊椎脊髄病学会雑誌 2009年; 20巻: 883-885.
- 2) 中川泰彰, 吉田宗人, 向井直樹, 森北育宏, 山本利春, 加藤一人, 清水克時. 座談会 スポーツ選手の腰痛への対応, 臨床整形外科 2009年; 44巻: 919-928.
- 3) 川口敦司, 清水克時. 首下がり症候群, 脊椎脊髄ジャーナル 2009年; 22巻: 544-546.
- 4) 田中生雅, 塩入俊樹. 妊娠中の向精神薬療法の継続と中止—気分障害と不安障害, 精神科治療学 2009年; 24巻: 539-548.
- 5) 清水克時. 頸椎変性疾患の手術, 京都整形外科医会学術講演会報告 2010年; 75号: 2.
- 6) 清水克時. APOA Spine & Pediatric 2011 開催にあたって, Journal of Spine Research 別刷 2011年; 2巻: 811-812.
- 7) 清水克時. 第 44 回日本側彎症学会を主催して, Journal of Spine Research 別刷 2011年; 2巻: 1723-1724.
- 8) 田中生雅. 大学生に生じがちな精神的な問題(気分障害, 不安障害を中心に), 大学と学生 2011年; 89号: 9-16.

総説 (欧文)

- 1) Shimizu K. Orthopedic research in the final year of the bone and joint decade. J Orth Sci. 2010; 15:610-611.

原著 (和文)

- 1) 大野貴敏, 大島康司, 山口良大, 下川邦泰, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 広瀬善信. 病的骨折をきたした大腿骨骨腫瘍の 1 例, 東海骨軟部腫瘍 2009年; 21巻: 31-32.
- 2) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 西本博文. 片側椎弓切除術の低侵襲性について, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 55-56.
- 3) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対するサラズルファピリジン単独療法, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 569-570.
- 4) 竹内健太郎, 宮本 敬, 細江英夫, 清水克時. 脊椎病変を呈した multiple myeloma と plasmacytoma に対する外科的治療の経験, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 817-821.
- 5) 佐藤正夫, 四戸隆基, 田中 領, 清水克時. 線維性筋痛症症例の背景因子の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 951-952.
- 6) 山口良大, 宮本 敬, 細江英夫, 鈴木直樹, 田中健一郎, 清水克時. 下位腰骨および腰仙移行部に発生した感染性脊椎炎に対する脊椎インスツルメンテーションを用いた外科的治療の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2009年; 52巻: 563-564.
- 7) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 岩井智守男. 輸血拒否患者に対する脊椎手術の経験, 日本整形外科学会雑誌 2009年; 83巻: S287.
- 8) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎. 頸椎前方固定に使用するプレートの特徴, 日本整形外科学会雑誌 2009年; 83巻: S296.
- 9) 佐藤正夫, 竹村正男, 田中 領, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチの結核スクリーニングにおけるクオンティフェロンの有効性の検討, 臨床リウマチ 2009年; 21巻: 309-312.
- 10) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 田中健一郎, 長縄敏毅. 小皮切による胸椎前方手術, 脊椎・脊髄神経手術手技 2009年; 11巻: 26-29.
- 11) 中村正生, 清水克時. 腰下肢痛に関連した QOL に及ぼすプロスタグランジン E1 注射剤の効果, 整形・災害外科 2009年; 52巻: 203-208.

- 12) 中村正生, 清水克時. 腰痛症例における非ステロイド性鎮痛消炎剤ザルトプロフェンの QOL 改善効果—日本語版 Roland-Morris Disability Questionnaire, Visual Analogue Scale, 日本語版 MOS Short-Form 8-Item Health Survey : 24 時間版を用いた評価—, 整形外科 2009 年 ; 60 卷 : 1143—1150.
- 13) 宮本 敬, 清水克時. 胸椎椎間板ヘルニアに対する外科的治療—当科の治療指針および最新の動向—, 脊椎脊髄ジャーナル 別刷 2009 年 ; 22 卷 : 159—168.
- 14) 清水克時. Asia Visiting Scholar Program Report 韓国訪問の報告 (JSSR-Medtronic Sofamor Danek Asian Traveling Fellowship), 日本脊椎脊髄病学会雑誌 2009 年 ; 20 卷 : 143.
- 15) 山岸宏江, 青木隆明, 田中健一郎, 宮本 敬, 細江英夫, 清水克時. Os odontoideum に伴う環軸椎亜脱臼の手術前後の ADL の検討, 中部整形災害外科学会誌 2009 年 ; 52 卷 : 899—900.
- 16) 伊藤芳毅, 瀧上伊織, 小川寛恭, 清水克時. ケルプール型十字プレートを使用した白蓋再置換術の治療成績, Hip Joint 2009 年 ; 35 卷 : 122—125.
- 17) 小川寛恭, 伊藤芳毅, 糸数万正, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 清水克時. 白蓋骨欠損に対しチップ状骨移植を併用した人工股関節置換術の成績, 日本人工関節学会誌 2009 年 ; 39 卷 : 74—75.
- 18) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 清水克時. SL-Plus 型システムの短期成績 Dorr 分類による比較, 日本人工関節学会誌 2009 年 ; 39 卷 : 172—173.
- 19) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 寺林伸夫, 清水孝志, 清水克時. 人工膝関節置換術における膝蓋下脂肪体切除による膝蓋腱長に対する影響, 日本人工関節学会誌 2009 年 ; 39 卷 : 332—333.
- 20) 山本眞由美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 白井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 長瀬江利, 加納晃子, 浅田修市, 清水克時. 岐阜県内の大学・短大等学生の喫煙実態調査—岐阜県大学保健管理研究会の調査結果より—, CAMPUS HEALTH 2009 年 ; 46 卷 : 199—201.
- 21) 田中生雅, 佐渡忠洋, 梶川幸世, 清水克時, 山本眞由美. 大学生の精神的健康度と QOL, CAMPUS HEALTH 2009 年 ; 46 卷 : 327—329.
- 22) 佐渡忠洋, 田中生雅, 清水克時, 山本眞由美. 集団スクリーニングへのバウムテストの導入可能性—個別法と集団法の描線比較から—, CAMPUS HEALTH 2009 年 ; 46 卷 : 392—394.
- 23) 佐渡忠洋, 伊藤宗親, 田中生雅, 山本眞由美. わが国の身体像境界得点の文献展望, 岐阜大学カリキュラム開発研究 2009 年 ; 27 卷 : 100—108.
- 24) 佐渡忠洋. 南フロリダ大学における学生相談体制の視察報告—カウンセラー養成課程の視察報告も合わせて—, 岐阜大学心理教育相談室紀要 2009 年 ; 8 卷 : 91—100.
- 25) 佐渡忠洋, 坂本佳織, 伊藤宗親. バウムテストにおける幹先端処理の基礎的研究—大学生のバウム画より—, 心理臨床学研究 2009 年 ; 29 卷 : 95—100.
- 26) 萩原可奈, 佐渡忠洋, 鈴木 壯. 実力発揮と風景構成法の特徴—中程度の競技レベルの大学スポーツ競技者を対象として—, 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2009 年 ; 58 卷 : 187—196.
- 27) 永野昭仁, 大野貴敏, 川井 豪, 齊藤 満, 瀧上伊織, 清水克時. Ewing 肉腫に対する血管内皮増殖因子 (VEGF) を標的とした siRNA の検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010 年 ; 53 卷 : 1425—1426.
- 28) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術, J Spine Res 2010 年 ; 1 卷 : 1838—1843.
- 29) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成. 後期高齢者後彎症に対して椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術の 1 例, J Spine Res 2010 年 ; 1 卷 : 1986—1988.
- 30) 細江英夫, 飯沼宣樹, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 環軸椎固定術における環軸関節内癒合について, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010 年 ; 53 卷 : 1335—1336.
- 31) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術の有用性, 日本整形外科学会雑誌 2010 年 ; 84 卷 : S365.
- 32) 細江英夫, 清水克時, 宮本 敬, 伏見一成, 高澤 真. 骨粗鬆症を伴う後彎症に対する椎弓下ワイヤーを使用した骨切り術 術後骨折と矢状面アライメント, J Spine Res 2010 年 ; 1 卷 : 291.
- 33) 貞升 彩, 宮本 敬, 野澤 聡, 喜久生健太, 細江英夫, 清水克時. 腰椎分離症に対する分離部修復術の成績—スポーツ活動への復帰に着目して— Ripair of Pars Defects by Segmental Trasverse Wiring for Athletes with Symptomatic Spondylolysis, 日本整形外科学会スポーツ医学会雑誌 2010 年 ; 30 卷 : 45—50.
- 34) 光石直史, 鈴木直樹, 長縄敏毅, 和田栄二, 清水克時, 宮本 敬. 圧迫性頸髄症に対する頸椎前方手術, 後方手術による脊髄除圧効果の ultrasonography を用いた比較検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010 年 ; 53 卷 : 55—56.
- 35) 佐藤正夫, 四戸隆基, 田中 領, 清水克時. 生物学的製剤と悪性腫瘍の発生に関する検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010 年 ; 53 卷 : 177—178.
- 36) 角田 恒, 伊藤芳毅, 小川寛恭, 森 敦幸, 清水孝志, 清水克時. Ceramic on ceramic 人工股関節全置換術の中期成績, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010 年 ; 53 卷 : 533—534.
- 37) 吉岡大輝, 宮本 敬, 高澤 真, 伏見一成, 細江英夫, 清水克時. 腰椎変性疾患に対する多椎間 (3 椎間以上) TLIF の術後検討, 中部日本整形災害外科学会雑誌 2010 年 ; 53 卷 : 567—568.
- 38) 竹下克志, 藤原奈佳子, 星地亜都司, 横山 徹, 徳橋泰明, 遠藤健司, 加藤圭彦, 田中敏彦, 市村正一, 里見和彦, 平野 徹, 伊藤拓緯, 三上靖夫, 坂浦博伸, 松本守雄, 中原進之介, 松本嘉寛, 清水克時, 岡山忠樹, 川口善治, 木家哲郎, 馬場久敏, 井尻幸成, 椎名逸雄, 戸山芳明, 中村耕三. 圧迫性頸髄症の痛みとしびれ, 臨床整形外科 2010 年 ; 45 卷 : 689—693.
- 39) 清水克時. スポーツ選手の腰椎分離症, 理学療法学 別刷 2010 年 ; 37 卷 : 627—629.
- 40) 坂野真士, 須藤啓広, 長谷川正裕, 廣瀬士朗, 森 将恒, 森 敦幸, 清水孝志, 光山浩人, 小林正明, 水谷潤, 星野裕信, 中川雅人, 小崎直人, 内田淳正, 佐藤啓二, 清水克時, 大塚隆信, 山田治基, 石黒直樹. 東海

- 地区における静脈血栓塞栓症に関する多施設調査, 臨床整形外科 別刷 2010年; 45巻: 827-834.
- 41) 佐藤正夫, 四戸隆基, 清水克時. 関節リウマチに対する生物学的製剤一次無効例の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 1269-1270.
 - 42) 角田 恒, 伊藤芳毅, 小川寛恭, 森 敦幸, 清水孝志, 清水克時. Ceramic on ceramic 人工股関節全置換術の中期成績, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2010年; 53巻: 533-534.
 - 43) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 瀧上伊織, 寺林伸夫, 小川寛恭, 清水克時. ProfemurZ ステムの短期成績, Hip Joint 2010年; 36巻: 277-279.
 - 44) 角田 恒, 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 清水克時. Profemur Z ステムの CT 画像における固定様式の検討, 日本人工関節学会誌 2010年; 40巻: 352-353.
 - 45) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 山田一成, 清水克時. Smith-Petersen アプローチと後腹膜アプローチを併用し白蓋再建を行った2例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年; 14巻: 22-25.
 - 46) 坂口青耶, 徳野悦子, 山中多美子, 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水克時. 整形外科股関節手術の側臥位における体圧調査, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年; 14巻: 38-41.
 - 47) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 寺林伸夫, 清水孝志, 清水克時. TKA 後に鏡視下膝蓋下脂肪体切除を施行した一例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年; 14巻: 56-58.
 - 48) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 清水孝志, 清水克時. Modified gap technique を用いた LCS TKA の経験, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年; 14巻: 88-91.
 - 49) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 清水克時, 若山孝英. 両側 Vancouver 分類 TypeB3 ステム周囲骨折に対し一期の両側再置換術を行った1例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2010年; 14巻: 136-139.
 - 50) 大野貴敏, 大島康司, 大野義幸, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 廣瀬善信. 第1中手骨骨腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2010年; 22巻: 9-10.
 - 51) 山本眞由美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 臼井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 岩田美知絵, 野口佳代, 野田智子, 清水克時. 岐阜県大学保健管理研究会の活動から—大学生のための健康啓発教育冊子出版—, CAMPUS HEALTH 2010年; 47巻(1): 301-303.
 - 52) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 山本眞由美, 清水克時. 大学生の健康に対する取り組みと生活環境に関する検討, CAMPUS HEALTH 2010年; 47巻(1): 321.
 - 53) 佐渡忠洋, 田中生雅, 宮地幸雄, 磯村有希, 臼井るり子, 高井郁恵, 端元加奈子, 岩田美知絵, 野口佳代, 野田智子, 山本眞由美, 清水克時. 回答方法がUPI結果へ与える影響 —自己記入式とWeb回答との比較—, CAMPUS HEALTH 2010年; 47巻(1): 340-342.
 - 54) 山本眞由美. 内部障害をかかえる学生の支援, CAMPUS HEALTH 2010年; 47巻(2): 36-41.
 - 55) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 田中優司, 塩入俊樹, 山本眞由美, 清水克時. 大学生の健康に対する取り組みと生活環境に関する検討, CAMPUS HEALTH 2010年; 47巻(2): 97-102.
 - 56) 山本眞由美, 田中生雅, 佐渡忠洋, 清水克時. 大学の禁煙推進の取り組みと学生の喫煙率変化—10年の取り組みを経過して—, 学校保健研究 2010年; 1巻: 71-74.
 - 57) 山本眞由美. 大学生の肥満に関する実態調査—将来の健康生涯を防ぐための青年期の健康サポートはどうかあるべきか—, 岐阜県医師会医学雑誌 2010年; 3巻: 67-73.
 - 58) 山本眞由美. 糖尿病にみられる味覚・食欲異常, 栄養—評価と治療 2010年; 27巻: 29-32.
 - 59) 佐渡忠洋, 坂本佳織, 田中生雅, 山本眞由美, 緒賀郷志. 個別法と集団法で行ったバウムテスト結果の印象の相違—マッチング法と印象評定, 検査者体験から—, 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 2010年; 1巻: 139-146.
 - 60) 佐渡忠洋, 田中生雅, 山本眞由美, 緒賀郷志. ソンディ・テストの本邦における文献一覧表(1950-2009年), 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 2010年; 1巻: 147-158.
 - 61) 佐渡忠洋, 坂本佳織, 岸本寛史, 伊藤宗親. 日本におけるバウムテストの文献一覧(1958-2009), 岐阜大学カリキュラム開発研究 2010年; 1巻: 33-57.
 - 62) 佐渡忠洋, 坂本佳織, 伊藤宗親. 日本におけるバウムテスト研究の変遷, バウムテスト文献レビュー(第一報), 岐阜大学カリキュラム開発研究 2010年; 1巻: 12-20.
 - 63) 佐渡忠洋. 実施法と評定間信頼性からみたバウムテスト研究の精度, バウムテスト文献レビュー(第二報), 岐阜大学カリキュラム開発研究 2010年; 1巻: 21-32.
 - 64) 佐渡忠洋. 日本におけるバウムテストの研究, 臨床心理学 2010年; 5巻: 674-679.
 - 65) 佐渡忠洋, 鈴木 壯. 吉川公雄のバウムテスト研究に関する一考察, バウムテスト文献レビュー(第三報), 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2010年; 1巻: 217-229.
 - 66) 仲原千恵, 佐渡忠洋, 鈴木 壯. 風景構成法における用紙のサイズに関する研究, 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2010年; 1巻: 211-216.
 - 67) 大野義幸, 平川明弘, 清水克時, 野々村秀彦, 大西量一郎. 指尖部組織欠損に対し中節背側より拳上した指動脈穿通枝皮弁の経験, 日本手の外科学会雑誌 2011年; 27巻: 543-546.
 - 68) 青木隆明, 山岸宏江, 清水克時, 篠田信之, 浜田篤至, 林 典雄, 早川大輔. 短下肢装具の圧力による下腿半月の高さの検討, 日本義肢装具学会誌 2011年; 27巻: 171-173.
 - 69) 青木隆明, 山岸宏江, 日置 暁, 伏見一成, 宮本 敬, 清水克時. 頸椎前方固定術後にえん下障害を生じた3症例の検討, 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 2011年; 54巻: 1155-1156.
 - 70) 日置 暁, 宮本 敬, 高澤 真, 伏見一成, 細江英夫, 清水克時. 頸椎外傷・疾患に対するハローベスト固定におけるピン刺入部に関連する重度合併症の検討, Journal of Spine Research 別刷 2011年; 2巻: 831-834.
 - 71) 森 敦幸, 伊藤芳毅, 清水孝志, 寺林伸夫, 角田 恒, 清水克時. 抗リン脂質抗体症候群患者に対して施行

- したTKAの経験, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年; 15巻: 21-23.
- 72) 角田 恒, 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 清水克時. Impaction bone grafting 法による大腿骨再置換術の検討, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年; 15巻: 53-57.
- 73) 伊藤芳毅, 森 敦幸, 清水孝志, 寺林伸夫, 角田 恒, 清水克時. 当科における人工股関節再置換術の現況, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年; 15巻: 59-62.
- 74) 伊藤芳毅, 寺林伸夫, 松本 和, 森 敦幸, 角田 恒, 清水克時, 前田雅人. 後腹膜アプローチにより白蓋コンポーネントを抜去し白蓋再建を行った1例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年; 15巻: 89-92.
- 75) 仙石昌也, 伊藤芳毅, 松本 和, 森 敦幸, 寺林伸夫, 角田 恒, 清水克時, 福田 雅. 股関節結核に対しTHAを行った3例, 岐阜人工関節フォーラム誌 2011年; 15巻: 93-96.
- 76) 伏見一成, 宮本 敬, 細江英夫, 日置 暁, 清水克時. 腰部脊柱管狭窄症に対する片側進入両側除圧術の成績予測因子の検討, *Journal of Spine Research* 2011年; 2巻: 839-843.
- 77) 大島康司, 大野真敏, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 廣瀬善信. 右前腕腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍2011年; 23巻: 7-8.
- 78) 磯村有希, 佐渡忠洋, 田中生雅, 臼井るり子, 高井郁恵, 岩田美知絵, 野口佳代, 大森弘美, 大島由美子, 加納亜紀, 浅田修市, 宮地幸雄, 清水克時, 山本真由美. 大学生を対象とした健康啓発セミナーの経験と評価, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(1): 138-140.
- 79) 田中生雅, 佐渡忠洋, 磯村有希, 宮地幸雄, 臼井るり子, 加納亜紀, 大森弘美, 野口佳代, 山本真由美, 清水克時. 大学生の健康に対する取り組みと効果に関する検討, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(1): 141-143.
- 80) 高橋裕子, 守山敏樹, 藤本繁雄, 山本真由美, 川村 孝, 小西郁生. 大学における子宮頸がん予防教育の普及に関する連携研究の試み, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(1): 160-162.
- 81) 山本真由美, 飯塚勝美, 田中生雅, 加納亜紀, 臼井るり子, 野口佳代, 岩田美知絵, 大森弘美, 高井郁恵, 佐渡忠洋, 浅田修市, 清水克時, 武田 純. 事後指導で抽出し, 生活指導のみで正常化した若年境界型糖尿病の一例, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(1): 223-225.
- 82) 臼井るり子, 野口佳代, 野田智子, 稲垣都亘子, 高井郁恵, 大森弘美, 佐渡忠洋, 浅田修市, 加納亜紀, 田中生雅, 清水克時, 山本真由美. 流行性ウイルス感染症調査票による自主的予防接種実施効果について, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(1): 237-238.
- 83) 佐渡忠洋, 田中生雅, 磯村有希, 加納亜紀, 宮地幸雄, 臼井るり子, 野口佳代, 大森弘美, 稲垣都亘子, 清水克時, 山本真由美. 大学学部新入生のUPI結果と体格指数(BMI)の関係についての検討, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(1): 458-460.
- 84) 窪田泰三, 春日晃章, 長屋和将, 山本真由美, 佐渡忠洋, 福富恵介, 小藪博史. 大学生の体力における生活習慣の複合的関連, 岐阜大学教育学部研究報告=自然科学= 2011年; 35巻: 141-146.
- 85) 小藪博史, 春日晃章, 山本真由美, 福富恵介, 窪田泰三, 佐渡忠洋, 山脇恭二. 岐阜大学1年生における肥満度と血液検査および生活習慣の関連, 岐阜大学教育学部研究報告=自然科学= 2011年; 35巻: 153-159.
- 86) 山本真由美, 福重八恵, 仲村渠砂絵子, 安藤憂紀, 浅田孝幸, 前田利之. モバイルコミュニケーションシステムを利用した大学生の体重コントロール指導, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(2): 97-101.
- 87) 山本真由美. American College Health Association (米国大学保健管理協会)の紹介, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(2): 228-230.
- 88) 山本真由美. 南フロリダ大学のStudent Health Service(保健管理センター)とThe Counseling Center(カウンセリングセンター)を視察して, *CAMPUS HEALTH* 2011年; 48巻(2): 231-236.
- 89) 福重八恵, 佐藤希代巳, 樽見智美, 山本真由美. 教育情報と健康情報の統合化に関する研究 -大学生の学業成績と定期健康診断の受診との関係に関する調査結果を中心として-, 教育システム情報学会第36回全国大会講演論文集 2011年; 22-23.
- 90) 佐渡忠洋, 中島郁子, 別府 哲. 風景構成法の本邦における文献一覧(1970-2010年), 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2011年; 59巻: 151-167.
- 91) 佐渡忠洋, 別府 哲. バウムテストの変法に関する一考察 バウムテスト文献レビュー(第四報), 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 2011年; 59巻: 169-182.

原著 (欧文)

- 1) Kikuike K, Uemura S, Miyamoto K, Horiya Y, Shimizu K. Upper lumbar burst fracture due to recreational high jumping into a river: report of five cases. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2009;129:87-90. IF 1.196
- 2) Hirakawa A, Shimizu K, Fukumitsu H, Furukawa S. Pyrroloquinoline quinone attenuates iNOS gene expression in the injured spinal cord. *Biochem Biophys Res Commun.* 2009;378:308-312. IF 2.595
- 3) Yamamoto T, Ohno T, Wakahara K, Nagano A, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Matsuhashi A, Yamada K, Shimizu K. Simultaneous inhibition of mitogen-activated protein kinase and phosphatidylinositol 3-kinase pathways augment the sensitivity to actinomycin D in Ewing sarcoma. *J Cancer Res Clin Oncol.* 2009;135:1125-1136. IF 2.485
- 4) Fukuta S, Miyamoto K, Iwata A, Hosoe H, Iwata H, Shirahashi K, Shimizu K. Unusual back pain caused by intervertebral disc degeneration associated with schmorl node at Th11/12 in a young athlete, successfully treated by anterior interbody fusion: a case report. *Spine (Phila Pa 1976).* 2009; 34:E195-198.
- 5) Kawaguchi A, Miyamoto K, Wakahara K, Hosoe H, Miura A, Hanamoto T, Shimizu K. Surgical

- treatment of multiple spinal canal stenoses associated with vitamin D-resistant rickets. *J Clin Neurosci.* 2009;16:717-719. IF 1.165
- 6) Nakamura M, Miyamoto K, Shimizu K. Difference in evaluation of patients with low back pain using the Japanese Orthopaedic Association Score for Back Pain and the Japanese Version of the Roland-Morris Disability Questionnaire. *J Orthop Sci.* 2009;14:367-373. IF 0.839
- 7) Nagano A, Miyamoto K, Nishimoto H, Hosoe H, Suzuki N, Shimizu K. Transforaminal lumbar interbody fusion for failed Graf ligamentoplasty: a report of two cases. *J Orthop Surg (Hong Kong).* 2009;17:220-222.
- 8) Miyamoto K, Sugiyama S, Hosoe H, Inuma N, Suzuki Y, Shimizu K. Postsurgical recurrence of osteophytes causing dysphagia in patients with diffuse idiopathic skeletal hyperostosis. *Eur Spine J.* 2009;18:1652-1658. IF 1.994
- 9) Nozawa S, Nozawa A, Kojima H, Shimizu K. Spontaneous disappearance of lumbar disk herniation within 3 months. *Orthopedic.* 2009;32:852. IF 1.098
- 10) Kikuike K, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. One-staged combined cervical and lumbar decompression for patients with tandem spinal stenosis on cervical and lumbar spine: analyses of clinical outcomes with minimum 3 years follow-up. *J Spinal Disord Tech.* 2009;22:593-601. IF 1.333
- 11) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Yamada K, Shimizu K. Extraskelatal osteosarcoma of the thigh: an autopsy case report. *Sarcoma.* 2009;186565.
- 12) Kikuike K, Miyamoto K, Hosoe H, Kushima Y, Shimizu K. Double-level posterior spinal shortening for paralytic osteoporotic vertebral collapse of two vertebral bodies with a normal vertebra in between: a case report. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2009;129:57-60. IF 1.196
- 13) Okayasu S, Nakamura M, Sugiyama T, Chigusa K, Sakurai K, Matsuura K, Yamamoto M, Kinoshita Y, Itoh Y. Development of Computer-Assisted Biohazard Safety Cabinet for Preparation and Verification of Injectable Anticancer Agents. *Chemotherapy.* 2009;55:234-240. IF 2.108
- 14) Shimoda H, Taniguchi K, Nishimura M, Matsuura K, Tsukioka T, Yamashita H, Inagaki N, Hirano K, Yamamoto M, Kinoshita Y, Itoh Y. Preparation of a fast dissolving oral thin film containing dexamethasone: A possible application to antiemesis during cancer chemotherapy. *Eur J Pharm Biopharm.* 2009;73:361-365. IF 4.304
- 15) Hirakawa A, Shimizu K, Fukumitsu H, Soumiya H, Inuma M, Furukawa S. 2-Decenoic acid ethyl ester, a derivative unsaturated medium-chain fatty acid, facilitates functional recovery of locomotor activity after spinal cord injury. *Neuroscience.* 2010;171:1377-1385. IF 3.215
- 16) Fukuta S, Miyamoto K, Yoshida M, Kodama H, Kanamori Y, Hosoe H, Shimizu K. High-grade (Grade III) Degenerative spondylolisthesis at L4/5 treated successfully by transforaminal interbody fusion (TLIF): a case report. *Quick Med Pub(peer-reviewed on-line journal).* 2010;16.
- 17) Nagano A, Ohno T, Shimizu K, Hara A, Yamamoto T, Kawai G, Saitou M, Takigami I, Matsushita A, Yamada K, Takei Y. EWS/Fli-1 chimeric fusion gene upregulates vascular endothelial growth factor-A. *Int J Cancer.* 2010;126:2790-2798. IF 4.926
- 18) Ogawa H, Ito Y, Itokazu M, Mori N, Terabayashi N, Shimizu K. Cementless total hip arthroplasty using a spongy metal surface hip prosthesis with a collarless, proximally porous-coated stem. *J Arthroplasty.* 2010;25:375-380. IF 2.207
- 19) Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Skill level-specific differences in snowboarding-related injuries. *Am J Sports Med.* 2010;38:532-537. IF 3.821
- 20) Takigami I, Ito Y, Ishimaru D, Ogawa H, Mori N, Shimizu T, Terabayashi N, Shimizu K. Two-stage revision surgery for hip prosthesis infection using antibiotic-loaded porous hydroxyapatite blocks. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2010;130:1221-1226. IF 1.196
- 21) Ogawa H, Sumi H, Shimizu K. Posterior cruciate ligament mediated avulsion fracture of the lateral tibial condyle: a case report. *J Orthop Surg Res.* 2010;8:5:67.
- 22) Ogawa H, Shionyu M, Sugiura N, Hatano S, Nagai N, Kubota Y, Nishiwaki K, Sato T, Gotoh M, Narimatsu H, Shimizu K, Kimata K, Watanabe H. Chondroitin sulfate synthase-2/chondroitin polymerizing factor has two variants with distinct function. *J Biol Chem.* 2010;285:34155-34167. IF 5.328
- 23) Takigami I, Ohara A, Matsumoto K, Fukuta M, Shimizu K. Functional bracing for delayed union of a femur fracture associated with Paget's disease of the bone in an Asian patient: a case report. *J Orthop Surg Res.* 2010;5:33.
- 24) Terabayashi N, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Takigami I, Yasufuku Y, Shimizu K. Nonunion of a first rib fracture causing thoracic outlet syndrome in a basketball player: A case report. *J Shoulder Elb Surg.* 2010;19:e20-23. IF 2.314
- 25) Tanaka R, Takemura M, Sato M, Yamada Y, Nakagawa T, Horibe T, Hoshi M, Otaki H, Ito H, Seishima M, Shimizu K. Comparison of chemiluminescence enzyme immunoassay (CLEIA) with ELISA for the determination of anti-cyclic citrullinated peptide antibodies. *Clin Chim Acta.* 2010;411:22-25.
- 26) Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Pelvic fractures resulting from snowboarding. *Am J Sports Med.* 2010;38:538-542. IF 3.821
- 27) Hirakawa A, Miyamoto K, Masuda T, Fukuta S, Hosoe H, Inuma N, Iwai C, Nishimoto H, Shimizu K. Surgical outcome of 2-stage (posterior and anterior) surgical treatment using spinal instrumentation

- for tuberculous spondylitis. *J Spinal Disord Tech.* 2010;23:133-138. IF 1.333
- 28) Matsumoto M, Hasegawa T, Ito M, Aizawa T, Konno S, Yamagata M, Ebara S, Hachiya Y, Nakamura H, Yagi S, Sato K, Dezawa A, Yoshida M, Shinomiya K, Toyama Y, Shimizu K, Nagata K. Incidence of complications associated with spinal endoscopic surgery: nationwide survey in 2007 by the Committee on Spinal Endoscopic Surgical Skill Qualification of Japanese Orthopaedic Association. *J Orthop Sci.* 2010;15:92-96. IF 0.839
- 29) Yamauchi K, Wakahara K, Fukuta M, Matsumoto K, Sumi H, Shimizu K, Miyamoto K. Characteristics of upper extremity injuries sustained by falling during snowboarding: a study of 1918 cases. *Am J Sports Med.* 2010;38:1468-1474. IF 3.821
- 30) Ishimaru D, Ohno T, Maeda M, Nishimoto Y, Shimizu K. Chemotherapy-induced oesophageal stricture in a child with osteosarcoma: a case report. *Chemotherapy Research and Practice.* 2010:Article ID 240763, 3 pages.
- 31) Hioki A, Miyamoto K, Sakai H, Shimizu K. Lumbar axial loading device alters lumbar sagittal alignment differently from upright standing position: a computed tomography study. *Spine.* 2010;35:995-1001.
- 32) Terabayashi N, Fukuta M, Ito Y, Takigami I, Nishimoto Y, Shimizu K. Shoulder impingement syndrome due to a ganglion cyst below the coracoacromial ligament: a case report. *J Bone Joint Surg Am.* 2011;93:e36. IF 2.967
- 33) Hioki A, Miyamoto K, Hosoe H, Sugiyama S, Suzuki N, Shimizu K. Cantilever transforaminal lumbar interbody fusion for upper lumbar degenerative diseases (minimum 2 years follow up). *Yonsei Med J* 2011;52:314-321. IF 1.020
- 34) Ogawa H, Ito Y, Shinozaki M, Matsumoto K, Shimizu K. Subtrochanteric transverse shortening osteotomy in cementless total hip arthroplasty achieved using a modular stem. *Orthopedics.* 2011;34:170. IF 1.098
- 35) Ishimaru D, Ogawa H, Ito Y, Shimizu K. Surgical treatment of an infant with Bacille Calmette-Guérin osteomyelitis extending across the growth plate. *Orthopedics.* 2011;34:55. IF 1.098
- 36) Ogawa H, Ito Y, Takigami I, Shimizu K. Revision total hip arthroplasty for a Vancouver type B3 periprosthetic fracture using an allograft-cemented stem composite by the telescoping technique. *J Arthroplasty.* 2011;26:665.e25-28.
- 37) Ogura H, Miyamoto K, Fukuta S, Naganawa T, Shimizu K. Comparison of magnetic resonance imaging and computed tomography-myelography for quantitative evaluation of lumbar intracanal cross-section. *Yonsei Med J.* 2011;52:137-144. IF 1.020
- 38) Takigami I, Ohno T, Kitade Y, Hara A, Nagano A, Kawai G, M Saitou, Matsuhashi A, Yamada K, Shimizu K. Synthetic siRNA targeting the breakpoint of EWS/Fli-1 inhibits growth of Ewing sarcoma xenografts in a mouse model. *Int J Cancer.* 2011;128:216-226. IF 4.926
- 39) Masuda T, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. Comparative study on the efficacy of two-staged (posterior followed by anterior) surgical treatment using spinal instrumentation on pyogenic and tuberculous spondylitis. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2011;131:765-772. IF 1.196
- 40) Kato Z, Kondo N, Kato H, Morita H, Teramoto T, Miyamoto K, Shimizu K. Selective pontine hypoplasia: A possible common feature in 5p monosomy syndrome. *Brain Dev.* 2011;33:702-703. IF 1.979
- 41) Komura S, Miyamoto K, Hosoe H, Fushimi K, Iwai C, Nishimoto H, Shimizu K. Anterior cervical multilevel decompression and fusion using fibular strut as revision surgery for failed cervical laminoplasty. *Arch Orthop Trauma Surg.* 2011;131:1177-1185. IF 1.196
- 42) Inoue T, Suzuki K, Maehara H, Shimizu K. Human growth plate contains aggrecan fragments that can be generated by m-calpain. *Connect Tissue Res.* 2011;52:235-241. IF 2.093
- 43) Naganawa T, Miyamoto K, Hosoe H, Suzuki N, Shimizu K. Hemilaminectomy for removal of extramedullary or extradural spinal cord tumors: medium to long-term clinical outcomes. *Yonsei Med J.* 2011;52:121-129. IF 1.020
- 44) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Hirose Y, Miyake S, Shimizu K. Lipoblastoma mimicking myxoid liposarcoma: a clinical report and literature review. *Tohoku J Exp Med.* 2011;223:75-78. IF 1.145
- 45) Fukuta S, Miyamoto K, Hosoe H, Shimizu K. Kidney-type intervertebral spacers should be located anteriorly in cantilever transforaminal lumbar interbody fusion: analyses of risk factors for spacer subsidence for a minimum of 2 years. *J Spinal Disord Tech.* 2011;24:189-195. IF 1.333
- 46) Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Glenohumeral dislocations in snowboarding and skiing. *Injury.* 2011;42:1241-1247.
- 47) Hioki A, Miyamoto K, Shimizu K, Inoue N. Test-retest repeatability of lumbar sagittal alignment and disc height measurements with or without axial loading: a computed tomography study. *J Spinal Disord Tech.* 2011;24:93-98. IF 1.333
- 48) Shimizu T, Wakitani S, Tanaka Y, Yonetani Y, Shiozaki Y, Shimizu K, Horibe S. Ultrasonic probe is useful for in vivo quantitative assessment of medial femoral condyle articular cartilage. *Knee Surg Sports Traumatol Arthrosc.* 2011;19:1895-1900. IF 1.857
- 49) Takigami I, Ohnishi K, Ito Y, Nagano A, Sumida H, Tanaka K, Shimizu K. Acetabular perforation after medial migration of the helical blade through the femoral head after treatment of an unstable

- trochanteric fracture with proximal femoral nail antirotation (PFNA):a case report. J Orthop Trauma. 2011;25:e86-89. IF 1.792
- 50) Ishimaru D, Ogawa H, Sumi H, Sumi Y, Shimizu K. Lower extremity injuries in snowboarding. J Trauma. 2011;70:E48-52.
- 51) Fukuta S, Miyamoto K, Suzuki K, Maehara H, Inoue T, Kikuike K, Shimizu K. Abundance of Calpain and Aggrecan-Cleavage Products of Calpain in Degenerated Human Intervertebral Discs. Osteoarthritis Cartilage. 2011;19:1254-1262. IF 3.953
- 52) Naganawa T, Miyamoto K, Ogura H, Suzuki N, Shimizu K. Comparison of magnetic resonance imaging and computed tomogram-myelography for evaluation of cross sections of cervical spinal morphology. Spine. 2011;36:50-56.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：前田利之，研究分担者：山本眞由美；科学研究費補助金基盤研究(A)：医療組織で携帯端末の活用による医療リスク防止のための研究；平成 19-21 年度；15,860 千円
- 2) 研究代表者：佐渡忠洋；科学研究費補助金若手研究(スタートアップ)：バウムテストにおける実施法の要因に関する研究；平成 21-22 年度；1,963 千円(1,209：754 千円)
- 3) 研究代表者：清水克時，研究分担者：松本 和，松本嘉寛，高山眞一郎，小崎里華，成松 久，木全弘治，高橋厚子；厚生労働省科学研究費補助金：難治性疾患克服研究事業：遺伝性多発性外骨腫の実態把握と遺伝子多型に関する基盤研究；平成 22 年度；15,000 千円
- 4) 研究代表者：山本眞由美；大学活性化経費(教育)：キャンパスライフの健康科学-生涯健康のために-(全学共通教育，健康科学・スポーツ演習)；平成 18-23 年度；3,000 千円(500：500：500：500：500：500 千円)
- 5) 主研究担当者：武田 純，研究分担者：山本眞由美；厚生労働科学研究費補助金循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業：循環器リスクと耐糖能障害の効率的な健診マーカーの探索；平成 20-22 年度；18,945 千円
- 6) 研究代表者：大庭志野，研究分担者：山本眞由美；科学研究費補助金基盤研究(C)：能動及び受動喫煙と糖代謝能の指標に関する研究；平成 20-22 年度；4,680 千円(1,950：1,820：910 千円)
- 7) 研究代表者：山本眞由美，研究分担者：田中生雅；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生の生涯健康指導必要性の科学的根拠を示す～肥満と将来の糖尿病発症の関係から～；平成 21-25 年度；4,520 千円(1,430：1,170：520：900：500 千円)
- 8) 研究代表者：田中生雅，研究分担者：山本眞由美；科学研究費補助金基盤研究(C)：大学生のセルフメディケーション及び補完代替医療の利用実態とコストパフォーマンス；平成 22-24 年度；2,540 千円(1,330：910：300 千円)
- 9) 研究代表者：山本容正，研究分担者：山本眞由美；科学研究費補助金挑戦的萌芽研究：本邦健常人における薬剤耐性腸内細菌蔓延の実態解明；平成 22-23 年度；3,090 千円(1,400：1,690 千円)
- 10) 研究代表者：佐渡忠洋；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：日本におけるロールシャッハ法の輸入過程と発展過程の検討；平成 23-25 年度；2,080 千円(1,600 千円：480 千円)
- 11) 研究代表者：加納亜紀；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：ホルモン測定と質問票による大学女性職員のストレス実態調査と評価；平成 23 年度；854 千円

2) 受託研究

- 1) 清水克時，西本 裕：上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発；平成 21 年度；366,280 円：885,259 円：財団法人岐阜県研究開発財団
- 2) 清水克時，西本 裕：上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発；平成 22 年度；1,192,393 円：1,039,385 円：財団法人岐阜県研究開発財団
- 3) 清水克時，西本 裕：上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発；平成 23 年度；2,000 千円：1,000 千円：財団法人岐阜県研究開発財団

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

清水克時：

- 1) 日本整形外科学会代議員(平成 21 年 4 月～現在)
- 2) 第 112 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会査読委員(平成 21 年度)
- 3) 第 9 回 ATST ミーティングエグゼクティブスーパーバイザー(平成 21 年度)
- 4) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会学術集会運営委員会委員(平成 21 年度)
- 5) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会国際委員会アドバイザー(平成 21 年度)
- 6) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会プログラム委員(平成 21 年度)
- 7) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員, 国際事業委員会書面審査員(平成 21 年 8 月～平成 22 年度)
- 8) 第 83 回日本整形外科学会学術総会抄録査読委員(平成 21 年度)
- 9) 整形外科災害外科学会研究財団理事(平成 21 年 5 月～現在)
- 10) 日本臨床スポーツ医学会評議医員(平成 21 年 11 月～現在)
- 11) 日本小児整形外科学会理事長(平成 21 年度～現在)
- 12) WHO International Classification of Diseases (ICD) towards its 11th edition. TAG(Musculoskeletal Topic Advisory Group) Co-Chairman (2009.12～現在)
- 13) 国際整形外科学会(SICOT)日本代表(National Delegate of Japan)(～現在)
- 14) 第 5 回東海運動器フォーラム世話人(平成 22 年度)
- 15) 日本脊椎脊髄病学会国際委員会委員(平成 22 年度)
- 16) The Annual Meeting of the Hungarian Orthopedic and Trauma Associations Honorary Membership(平成 22 年 6 月 15 日～6 月 19 日)
- 17) 日本整形外科学会第 23 回専門医試験口答試験委員(平成 22 年度)
- 18) The Annual Meeting of the Hungarian Orthopedic and Trauma Associations Honorary Membership(平成 22 年度)
- 19) 第 44 回日本整形外科学会骨・軟部腫瘍学術集会査読委員(平成 23 年度)
- 20) 日本整形外科学会第 24 回専門医試験口答試験委員(平成 23 年度)
- 21) 第 26 回日本整形外科学会基礎学術集会抄録査読委員(平成 23 年度)
- 22) 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員(平成 23 年 12 月～現在)
- 23) 第 84 回日本整形外科学会学術総会抄録査読委員(平成 23 年度)

山本眞由美：

- 1) 日本内科学会東海地方会評議員(～現在)
- 2) 日本内科学会研修指導医(平成 21 年 9 月～現在)
- 3) 日本糖尿病学会学術評議員(～現在)
- 4) 日本内分泌学会代議員(～現在)
- 5) 日本臨床栄養学会評議員(～現在)
- 6) 日本病態栄養学会学術評議員(～現在)
- 7) 日本油化学会東海支部常任幹事(～現在)
- 8) 日本油化学会東海支部代議員(平成 21 年 3 月～現在)
- 9) 日本内分泌学会女性医師専門医育成・再教育委員会委員(平成 21 年 4 月～現在)
- 10) 日本油化学会 第 48 回年会 実行委員(平成 21 年 9 月)
- 11) 全国大学保健管理協会評議員(～現在)

田中生雅：

- 1) 東海北陸地区メンタルヘルス研究協議会実行委員(～現在)

佐渡忠洋：

- 1) 日本臨床心理身体運動学会研修委員(～現在)

2) 学会開催

清水克時：

- 1) 第 11 回岐阜整形外科卒後夏季セミナー2009(平成 21 年 7 月, 岐阜)

- 2) 第 12 回岐阜整形外科卒後夏季セミナー2010(平成 22 年 7 月, 岐阜)
- 3) 第 7 回国際整形外科基礎学術集会(平成 22 年 10 月, 京都)
- 4) 第 44 回日本側彎症学会(平成 22 年 10 月, 札幌)
- 5) 第 8 回アジア・太平洋整形外科学会脊椎・小児整形外科合同学会(平成 23 年 6 月, 岐阜)
- 6) 第 13 回岐阜整形外科卒後夏季セミナー2011(平成 23 年 7 月, 岐阜)

3) 学術雑誌

清水克時 :

- 1) Orhopaedics International ; Editor(～現在)
- 2) Ourhopaedics Today ; Editor(～現在)
- 3) Journal of Bone and Joint Surgery British Volume ; Reviewer(～現在)
- 4) 臨床整形外科 ; 編集委員(～現在)
- 5) 新 OS Now ; 編集委員(～現在)
- 6) 痛みと臨床 ; 編集同人(～現在)
- 7) Journal of Orthopaedic Science ; Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

清水克時 :

- 1) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 21 年 1 月, 岐阜, 特別講演「NSAIDs 潰瘍の病態と治療」座長)
- 2) 第 24 回日本リハビリテーション医学会中部・東海地方会(平成 21 年 2 月, 名古屋, 講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
- 3) 第 100 回下呂市医師会学術講演会(平成 21 年 2 月, 下呂, 講演「脊椎感染症の診断と治療」演者)
- 4) 岐阜県「抗リウマチ薬」学術講演会(平成 21 年 3 月, 岐阜, 特別講演「抗リウマチ薬を使いこなす～少量追加併用療法を中心に～」座長)
- 5) 痛みと炎症 2009(平成 21 年 3 月, 岐阜, 特別講演「変性性股関節症の診断と治療」座長)
- 6) 岐阜スプリングセミナー(平成 21 年 4 月, 岐阜, 特別講演「The protective effects of meniscal transplantation on cartilage」座長)
- 7) 第 38 回日本脊椎脊髄病学会(平成 21 年 4 月, 神戸, 特別講演「Surgical Strategy for Paediatric and Adolescent Vertebral Body Reconstruction for Tumour」座長)
- 8) 第 11 回岐阜大学整形外科教育研修会(平成 21 年 5 月, 岐阜, 特別講演「側彎症治療における問題点」座長)
- 9) 第 39 回東海地区整形外科教育研修会(平成 21 年 5 月, 名古屋, 特別講演「頸部外傷の痛みと癒れ」座長)
- 10) 岐阜県静脈血栓塞栓症予防講演会(平成 21 年 6 月, 岐阜, 特別講演「整形外科手術における VTE 予防-改訂日整会ガイドラインに基づいて-」座長)
- 11) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 21 年 6 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症の骨折予防と問題点」座長)
- 12) 羽島メディカルカンファレンス(平成 21 年 6 月, 羽島, 講演「腰痛治療の病診連携」演者)
- 13) 佐世保整形外科医会学術講演会(平成 21 年 6 月, 佐世保, 講演「頸椎の前方手術」演者)
- 14) 第 5 回岡山脊椎フォーラム(平成 21 年 7 月, 岡山, 講演「頸椎の前方手術」演者)
- 15) ぎふ金華山整形外科セミナー(平成 21 年 9 月, 岐阜, 講演「整形外科医の知っておくべき医療訴訟とリスクマネジメントの知識-整形外科医と患者と安全と安心のために-」座長)
- 16) 第 19 回北海道メイヨー・肩関節セミナー(平成 21 年 9 月, 札幌, 講演「脊椎のスポーツ障害」演者)
- 17) 岐阜県 LBP 学術講演会(平成 21 年 9 月, 岐阜, 講演「診療ガイドラインに基づく非特異的腰痛のプライマリ・ケア」座長)
- 18) 岐阜 IL-6 阻害薬研究会(平成 21 年 10 月, 岐阜, 講演「関節リウマチ治療におけるトシリズマブの有効性と安全性」座長)
- 19) 第 24 回日本整形外科学会基礎学術集会(平成 21 年 11 月, 横浜, 講演「ヌーンタイムセミナー5 マトリックス分解酵素としてのカルパインの研究」演者)
- 20) 平成 21 年東海・北陸地区リウマチの治療とケア研修会(平成 21 年 11 月, 岐阜, 講演「リウマチの治療とケア研修会の趣旨と関節リウマチ患者のトータルマネジメント」演者)
- 21) 第 43 回日本側彎症学会(平成 21 年 11 月, 東京, 講演「Controversies and challenges in the

- treatment of neuromuscular scoliosis」 演者)
- 22) 岐阜県医師会労災指定医部会秋季総会(平成 21 年 12 月, 美濃, 講演「頸椎変性疾患の手術」 演者)
 - 23) 6th Inspiration Meeting Asia-Pacific & Mea (2009.06, Ho Chi Minh, KeyNote Lecture: Herniated thoracic disc; Lecturer)
 - 24) The 19th Japanese-Korean Combined Orthopaedic Symposium (2009.09, Jeju, Anterior decompression and fusion for the treatment of cervical myelopathy; Lecturer)
 - 25) 6th SICOT/SIROT Annual International Conference (2009.10, Pattaya, Two staged(Posterior and Anterior)surgical treatment for pyogenic and tuberculous spondylitis; Lecturer)
 - 26) 15th Annual Meeting of SSHV combined with the Operative Spine Course (2009.12, Ho Chi Minh, Anterior Decompression and Fusion for the Treatment of Cervical Myelopathy; Lecturer)
 - 27) 第 13 回蔵王整形外科スポーツセミナー(平成 22 年 2 月, 山形, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」 演者)
 - 28) 骨粗鬆症最新講演会(平成 22 年 2 月, 岐阜, 特別講演「脊骨粗鬆症治療薬併用のエビデンス」 座長)
 - 29) 第 5 回東海運動器フォーラム(平成 22 年 2 月, 愛知, 特別講演「脊髄損傷モデル動物に対する細胞療法, 化学療法の開発」 座長)
 - 30) 痛みと炎症 2010(平成 22 年 3 月, 岐阜, 特別講演「ロコモと運動器リハビリテーション」 座長)
 - 31) 岐阜脊椎脊髄病特別セミナー(平成 22 年 3 月, 岐阜, 特別講演「脊椎手術 3000 例から得たもの-追想・展望-」 座長)
 - 32) 第 37 回浜松整形外科セミナー(平成 22 年 4 月, 静岡, 特別講演「頸椎変性疾患の手術」 演者)
 - 33) 京都整形外科医会学術講演会(平成 22 年 4 月, 京都, 特別講演「頸椎変性疾患の手術」 演者)
 - 34) 第 23 回日本軟骨代謝学会(平成 22 年 4 月, 鹿児島, 特別講演「骨・軟骨代謝研究と先端医療への取り組み」 座長)
 - 35) 第 114 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会(平成 22 年 4 月, 愛知, 特別講演「脳脊髄液減少症(低髄液圧性頭痛)の診断と治療」 座長)
 - 36) 第 39 回日本脊椎脊髄病学会(平成 22 年 4 月, 高知, 特別講演「Classification of Adolescent Idiopathic Scoliosis-How Good are They?」 座長)
 - 37) 第 12 回岐阜大学整形外科教育研修会(平成 22 年 5 月, 岐阜, 特別講演「静脈血栓症に対する予防の Strategy」 座長)
 - 38) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成 22 年 6 月, 岐阜, 特別講演「脊椎脊髄手術を安全に行うための工夫」 座長)
 - 39) 第 4 回夏季プライマリケア腰痛シンポジウム(平成 22 年 7 月, 東京, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」 演者)
 - 40) 神奈川県臨床整形外科医会学術講演会(平成 22 年 7 月, 神奈川, 特別講演「頸椎変性疾患の手術」 演者)
 - 41) 岐阜県医師会 外科医部会・労災指定医部会総会(平成 22 年 7 月, 岐阜, 特別講演「肘関節外傷の治療-スノーボーダーの上肢損傷-」 座長)
 - 42) 岐阜スポーツ外傷治療・リハビリテーション研修会(平成 22 年 8 月, 岐阜, 特別講演「スポーツ膝損傷: 外来での診断治療・リハビリテーション」 座長)
 - 43) 海津市医師会勉強会(平成 22 年 9 月, 岐阜, 特別講演「腰痛: 運動器の生活習慣病」 演者)
 - 44) 21 世紀研究会(平成 22 年 9 月, 岐阜, 特別講演「整形外科の歴史と先端医療」 演者)
 - 45) 第 115 回中部日本整形外科災害外科学会(平成 22 年 10 月, 大阪, 特別講演「手外科 10 年の進歩と将来への展望」 座長)
 - 46) 第 25 回日本整形外科学会基礎学術集会(平成 22 年 10 月, 京都, 特別講演「Ferritin can be transferred from macrophages to NG2 cells in vivo and can induce new oligodendrocyte formation in the adult spinal cord」 座長)
 - 47) 第 45 回日本脊髄障害医学会(平成 22 年 10 月, 長野, 特別講演「頸損麻痺手の機能再建」 座長)
 - 48) 第 42 回東海地区整形外科教育研修会(平成 22 年 10 月, 愛知, 特別講演「足関節症の臨床」 座長)
 - 49) 第 44 回日本側彎症学会(平成 22 年 10 月, 北海道, 特別講演「山田・井上メモリアルレクチャー 特発性脊柱側弯症手術療法における前方再建手術の役割-歴史的成績の検討から-」 座長)
 - 50) 第 38 回日本関節病学会(平成 22 年 11 月, 京都, 特別講演「関節病セミナー9 骨粗鬆症とロコモティブシンドローム」 座長)
 - 51) 整形外科フォーラム in Gifu(平成 22 年 11 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症治療の将来展望と新規

- SERM の位置づけ」座長)
- 52) 第 21 回日本小児整形外科学会学術集会(平成 22 年 11 月, 徳島, 特別講演「Management of congenital pseudoarthrosis of the tibia based on its pathology」座長)
 - 53) 愛知県整形外科医会教育研修講演会(平成 22 年 11 月, 愛知, 特別講演「頸椎変性疾患の手術」演者)
 - 54) 岐阜県フォルテオ発売記念講演会(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症治療の新たな展開」座長)
 - 55) 第 9 回岐阜リハビリテーション研究会(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「Closed Kinetic Chain と二関節筋のメカニズム」座長)
 - 56) 痛みの治療フォーラム 2010 in 岐阜(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「脊椎脊髄の痛みに対する保存療法」座長)
 - 57) 第 4 回岐阜県「抗リウマチ薬」学術講演会(平成 22 年 12 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチの治療におけるタクロリムスと生物学的製剤の役割」座長)
 - 58) モーラステープ発売 15 周年記念講演会(平成 23 年 1 月, 岐阜, 講演「心に木を植えるー森と心と体を癒してくれるー」座長)
 - 59) 第 88 回岐阜県整形外科集談会(平成 23 年 1 月, 岐阜, 教育研修講演「整形外科的救急?におけるピットフォールスポーツ外傷を含むー」座長)
 - 60) 第 87 回福岡リウマチ懇話会(平成 23 年 2 月, 福岡, 教育講演「リウマチの脊椎外科」演者)
 - 61) 第 13 回札幌スポーツ医学セミナー(平成 23 年 2 月, 北海道虻田郡, 講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
 - 62) 第 4 回岐阜県「抗リウマチ薬」学術講演会(平成 23 年 3 月, 岐阜, 特別講演「関節リウマチの治療におけるタクロリムスと生物学的製剤の役割」演者)
 - 63) 第 100 回岐阜手外科 C.C (平成 23 年 4 月, 岐阜, 特別講演「日常診療における手の痛み・しびれの診断と治療(リハビリを含む)」座長)
 - 64) 第 116 回中部日本整形外科災害外科学会・学術集会(平成 23 年 4 月, 高知, 招待講演「Minimal Access Surgery for Idiopathic Scoliosis: Present and Future.」座長)
 - 65) 第 116 回中部日本整形外科災害外科学会(平成 23 年 4 月, 高知, 招待講演「Minimal Access Surgery for Idiopathic Scoliosis: Present and Future」座長)
 - 66) 第 60 回日本理学療法学会(平成 23 年 5 月, 岐阜, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
 - 67) 第 13 回岐阜大学整形外科教育研修会(平成 23 年 5 月, 岐阜, 講演「イメージマッチング法による膝関節動態解析」座長)
 - 68) 整形外科リバーサイドフォーラム(平成 23 年 6 月, 岐阜, 講演「頸椎アライメントと上気道の関係」座長)
 - 69) The 8th Combined Congress of the Spine and Pediatric Sections, Asia Pacific Orthopaedic Association(2011.06, Gifu, Sponsored Lecture 「Surgical correction of Pediatric Spinal Detormity : Approaches to better correction」 chairman)
 - 70) 岐阜活性型ビタミン D3 講演会(平成 23 年 8 月, 岐阜, 特別講演「ビタミン D UP DATE -基礎・臨床における新たな展開ー」演者)
 - 71) ボノテオ錠 Monthly 製剤ー発売記念講演会ー(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演「超高齢社会の骨粗鬆症治療戦略ー新薬の登場ー」座長)
 - 72) 岐阜県慢性疼痛講演会(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演「運動器の慢性疼痛ーメカニズムと対策ー」座長)
 - 73) 整形外科長良リバーサイドフォーラム(平成 23 年 9 月, 岐阜, 特別講演「腰椎変性側弯症 Degenerative Lumbar Scoliosis」座長)
 - 74) 2011 岐阜骨粗鬆症セミナー(平成 23 年 10 月, 岐阜, 特別講演「骨粗鬆症の診断と治療ーUpdateー」座長)
 - 75) 第 45 回宮崎県スポーツ学会(平成 23 年 10 月, 宮崎, 特別講演「スポーツ選手の腰椎分離症」演者)
 - 76) 第 46 回日本脊髄障害医学会(平成 23 年 11 月, 泉佐野市, 講演「脊椎感染症に対する二期的手術法」演者)
 - 77) 第 1 回岐阜運動器疾患の疼痛を考える会(平成 23 年 11 月, 岐阜, 特別講演「運動器疾患の痛みに関する私の研究ー傑作選ー」座長)
 - 78) モーラステープ効能追加記念講演会(平成 23 年 11 月, 岐阜, 講演「脳と健康」座長)

山本眞由美：

- 1) 国立大学法人保健管理施設協議会第 11 回フィジカルヘルス・フォーラム(平成 21 年 3 月, 岐阜, 「学生に対する指導の重要性」シンポジスト)
- 2) 日本静脈経腸栄養学会 第 8 回 TNT 岐阜研修会(平成 21 年 5 月, 岐阜, 「症例検討・糖尿病」演者)
- 3) 大学教育・学生支援推進事業 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム 意見交換会(東海・北陸地区)(平成 22 年 3 月, 名古屋, 報告講演「生涯健康を目指した学生健康支援プログラム」演者)
- 4) 日本静脈経腸栄養学会 TNT 岐阜研修会(平成 22 年 5 月, 岐阜, 講演「症例検討 5・II 型糖尿病」演者)
- 5) 第 48 回全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会研究集会(平成 22 年 7 月, 静岡, 基調講演「健康管理における大学での危機管理」演者)
- 6) 第 48 回全国大学保健管理研究集会(平成 22 年 10 月, 千葉, 「教育講演 II」座長)
- 7) 第 5 回日本禁煙学会学術総会日韓ジョイント記念シンポジウム(平成 22 年 11 月, 徳島, 招聘講演「岐阜大学の敷地内禁煙」シンポジスト)
- 8) Japan-Korea Joint Symposium in Tokushima(2010.11, Tokushima, Total smoking ban in Gifu University; Symposist)
- 9) The Korean Society for Research on Nicotine and Tobacco, Japan-Korea Joint Symposium, Smoke-free Campus(2011.06, Seoul, Smoke Free Campus in Japan –Changes in Students Smoking Rate and the Total Smoking Ban–; Symposist)
- 10) 第 49 回全国大学保健管理研究集会(平成 23 年 11 月, 下関, 招聘講演「留学生の健康管理支援について」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 田中生雅：優秀演題賞(平成 21 年度第 47 回全国大学保健管理研究集会)

9. 社会活動

清水克時：

- 1) WHO 国際病名分類(ICD-11), 筋骨格系 TAG ; Co-chair (平成 21 年度)
- 2) 財団法人愛知骨軟部組織移植振興財団理事(平成 22 年 6 月～現在)

山本眞由美：

- 1) 岐阜県大学保健管理研究会会長(～現在)
- 2) 恵那地域糖尿病協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県保健医療推進協議会委員(～現在)
- 4) 岐阜県保健医療推進協議会地域保健計画部会委員(～平成 21 年度)
- 5) 岐阜県医師会糖尿病対策委員会委員長(～現在)
- 6) 岐阜県医師会男女共同参画委員会委員(平成 21 年度)
- 7) 岐阜医学研究協議会 専務理事(平成 22 年度～現在)
- 8) 岐阜県糖尿病対策推進協議会平成 22 年度世界糖尿病デー記念事業「糖尿病県民セミナー」ワーキンググループ委員(平成 21 年度～平成 22 年度)
- 9) 岐阜県糖尿病対策推進協議会幹事(平成 22 年度)
- 10) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員(平成 23 年度～現在)
- 11) 国立大学法人保健管理施設協議会保健管理業務の情報処理に関する特別委員会委員(平成 21 年度～23 年 11 月)
- 12) 国立大学法人保健管理施設協議会国際交流特別委員(～平成 23 年 11 月)
- 13) 国立大学法人保健管理施設協議会国際交流特別委員会委員長(平成 23 年 11 月～現在)
- 14) 国立大学法人保健管理施設協議会禁煙対策の推進に関する特別委員会(平成 23 年 11 月～現在)
- 15) 国立大学法人保健管理施設協議会食と心身の健康に関する調査研究班委員(平成 23 年 11 月～現在)

田中生雅：

- 1) 岐阜労働局セクハラカウンセラー(～現在)
- 2) 岐阜県障害者施策推進協議会委員(～現在)
- 3) 岐阜県家庭における暴力防止協議会配偶者暴力等防止専門部会委員(～現在)

佐渡忠洋：

- 1) 岐阜県スクールカウンセラー(平成 23 年度)

10. 報告書

- 1) 清水克時, 細江英夫: 低侵襲胸椎前方手術に関する研究, 厚生労働科学研究費補助金: 難治性疾患克服研究事業 脊柱靭帯骨化症に関する調査研究: 平成 20 年度総括・分担研究年度終了報告書(平成 21 年)
- 2) 野方文雄, 石塚達夫, 森田浩之, 宇野嘉弘, 山本眞由美: 動画で学ぶ頸動脈エコー検査アトラス(CD 版): ロボティック先端医療クラスター技術シーズ集: 27-28, CD(全 25 ページ)(平成 21 年 1 月)
- 3) 山本眞由美: 生涯健康を目指した学生健康支援プログラム: 平成 19 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」意見交換会実施報告書: 107-126(平成 21 年 2 月)
- 4) 山本眞由美: はじめに, ラウンドテーブルディスカッション「薬剤師の医療マネジメント教育に求めること」: 情報発信型 特別講演会 医療専門職のための医療マネジメント教育発展のために～創薬医療情報研究科に期待すること～: 1, 17-22(平成 21 年 2 月)
- 5) 山本眞由美: (日本語訳監修)「オーストラリアにおけるジェネリック医薬品の現状とその政策」「意見交換」, (執筆)「さいごに」: 特別講演および意見交換会記録集「オーストラリアにおけるジェネリック医薬品の現状とその政策」: 6-17, 18-21, 23(平成 21 年 3 月)
- 6) 山本眞由美: SP さんから教えていただきました: 岐阜大学模擬患者の会 10 周年記念誌: 47-48(平成 21 年 3 月)
- 7) 山本眞由美: Doctor's view vol.17, 特定健康診査・特定保健指導について, 新たな健診・保健指導について: 岐阜の国保 No.293: 6-17(平成 21 年 5 月)
- 8) 山本眞由美: 東海支部企画特集「平成 18 年度油科学講演会-機能性食品の科学と展望」の総説の企画にあたって: オレオサイエンス No.9: 2(平成 21 年 7 月)
- 9) 山本眞由美: Doctor's view vol.18, 特定健康診査・特定保健指導について, 新たな健診・保健指導について(第 2 回): 岐阜の国保 No.294: 16-17(平成 21 年 8 月)
- 10) 山本眞由美: 学生に対する指導の重要性: 第 11 回フィジカルヘルス・フォーラム報告書: 61-66(平成 21 年 9 月)
- 11) 山本眞由美: Doctor's view vol.19, 特定健康診査・特定保健指導について, 生活習慣病改善は薬より予防効果あり: 岐阜の国保 No.295: 10-11(平成 21 年 10 月)
- 12) 田中生雅: 学生相談からみた大学生世代のメンタルヘルス: 平成 21 年度東海北陸地区学生指導研修会報告書: 25-27(平成 21 年 12 月)
- 13) 山本眞由美: Doctor's view vol.20, 特定健康診査・特定保健指導について, 病気の“ゼロ次予防”の重要性: 岐阜の国保 No.296: 16-17(平成 22 年 1 月)
- 14) 田中生雅: 学生のメンタルヘルス: 第 10 回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修報告書: 39-44(平成 22 年 1 月)
- 15) 田中生雅, 小川豊昭: 治療困難あるいは深く関わったケースの検討-相談事例の内, 学生との関わり方や学生の心の状態について理解を深めた事例-: メンタルヘルス研究協議会平成 21 年度報告書: 97-98(平成 22 年 3 月)
- 16) 山本眞由美: 岐阜大学「生涯健康を目指した学生健康支援プログラム」: 平成 21 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」・「大学教育・学生支援推進事業(学生支援推進プログラム)」意見交換会(東海・北陸地区)日本学生支援機構ホームページ: 全 8 ページ(平成 22 年 4 月)
- 17) 山本眞由美: Doctor's view vol.21, 生活習慣病予防に関して, 第 1 回糖尿病発症のしくみについて: 岐阜の国保 No.297: 14-17(平成 22 年 5 月)
- 18) 山本眞由美: Doctor's view vol.22, 生活習慣病予防に関して, 第 2 回糖尿病について: 岐阜の国保 No.298: 20-21(平成 22 年 8 月)
- 19) 山本眞由美: Doctor's view vol.23, 生活習慣病予防に関して, 第 3 回世界糖尿病デーについて: 岐阜の国保 No.299: 12-13(平成 22 年 10 月)
- 20) 山本眞由美: 健康管理における大学での危機管理: 全国大学保健管理協会東海・北陸地方部会報告書平成(22 年度): 39-42(平成 22 年)
- 21) 佐渡忠洋: 日本臨床心理身体運動学会第 12 回大会に参加して: SPACE(日本臨床心理身体運動学会会報)25 号: 5(平成 22 年)
- 22) 山本眞由美: Doctor's view vol.24, 生活習慣病予防に関して, 第 4 回糖尿病との上手な付き合い方: 岐阜の国保 No.300: 18-19(平成 23 年 1 月)

- 23) 仲村渠砂絵子, 前田利之, 福重八恵, 浅田孝幸, 安藤憂紀, 山本眞由美: モバイルコミュニケーションシステムを利用した体重コントロール指導の経験: 第 48 回全国大学保健管理研究集会報告書: 124(平成 23 年)
- 24) 山本眞由美: 禁煙指導, 新入生全員を対象とした「健康科学特別講義」の開催, 健康診断管理システムの導入と健康診断の質の向上, 啓発冊子「大学生の健康ナビ」の出版, 南フロリダ大学の健康支援の取り組み, American College Health Association の紹介, American College Health Association での研究発表, 生涯健康を目指した学生健康支援プログラム 活動報告書: 23-25, 26-30, 34-35, 36-38, 60-67, 68-71, 72-73(平成 23 年)
- 25) 福重八恵, 三浦徹志, 前田利之, 山本眞由美, 安藤憂紀, 浅田孝幸: モバイルコミュニケーションシステムを利用した大学におけるインフルエンザ予防: シンポジウム「モバイル 11」: 10-11(平成 23 年 3 月)
- 26) 田中生雅, 太田裕一: 日常の実践をふりかえる: メンタルヘルス研究協議会平成 22 年度報告書: 102-103(平成 23 年 3 月)
- 27) 佐渡忠洋: バウムテストにおける実施法の要因に関する研究: 平成 21-22 年科学研究費補助金研究(研究活動スタート支援)成果報告書: 1-5(平成 23 年 3 月)
- 28) 山本眞由美: 労働者の糖尿病管理に関する最近の話題: 恵那医師会だより(平成 23 年 9 月)
- 29) 佐渡忠洋: 資格認定委員会主催第 11 回講習会と第 58 回 SPACE 研究会に参加して: SPACE28 号: 2(平成 23 年 11 月)

11. 報道

- 1) 山本眞由美: 平成 20 年度「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」意見交換会(学生相談及び健康・メンタルヘルス支援)報告: 日本学生支援機構ホームページ(2009 年 4 月)
- 2) 田中 生雅: 「研究室から 大学はいま」メンタルサポート体制拡充: 岐阜新聞(2009 年 6 月 30 日)
- 3) 山本眞由美: 事業報告 平成 21 年度恵那地域産業保健活動推進協議会総会及び夏期研修会並びに岐阜県医師会産業医研修会: 恵那医師会だより No.61: P10-11(2009 年 9 月)
- 4) 山本眞由美: 学術研究助成受賞者の軌跡「日本女医会学術研究助成を授与された後について」: 日本女医会 <http://jmwa.or.jp/kiseki/post-130.html>.(2010 年 1 月)
- 5) 山本眞由美: 「大学生の健康ナビ」 広告: 岐阜新聞(2010 年 6 月 1 日)
- 6) 清水克時: 「研究室から 大学はいま」脊椎感染症の新しい手術法: 岐阜新聞(2010 年 8 月 17 日)
- 7) 清水克時: 高齢化社会の新国民病 ロコモティブシンドローム～運動器生涯の進行を防ぎ, 自立生活を送るために～: 朝日新聞(2011 年 7 月 17 日)

12. 自己評価

評価

教員 5 人という少人数体制であるが, 3 名が研究代表者として科学研究補助金を獲得, 1 名は学内研究活性化経費を獲得している。それぞれの研究を充実させており, 研究の activity は, 十分に評価できる。

現状の問題点及びその対応策

International Peer Reviewed Journal への掲載数が十分でない。日常業務を効率化させ, また, 論文執筆の優先順位を高くして, 成果を公表すべく精進したい。

今後の展望

エビデンス性の高い研究成果を上げるために, 本学内だけでなく国家的プロジェクトに参加すべく全国大学保健管理協会, ならびに国立大学法人保健管理施設協議会で活動し, 調査研究班の委員としての立場を継続する。

また, 国際共同研究を推進させるために, 米国大学保健管理協会(American College Health Association)ならびに英国大学保健管理協会(the Student Health Association)との交流を進める。

そして, 大学の保健管理の分野において, 本邦および世界のリーディングポジションをめざす。

(14) 生命科学総合研究支援センター（ゲノム研究分野）

1. 研究の概要

遺伝性代謝疾患の病態解明（下澤）：細胞内小器官の1つであるペルオキシソームの代謝異常症の研究に長年携わり、国内唯一のペルオキシソーム病診断センターとして国内外より多くの患者解析依頼を受け、いくつかの新規遺伝子病や温度感受性現象の発見、ペルオキシソーム欠損症では岐阜大学の分類を世界に提唱しています。ペルオキシソームの生体内における機能自体、未解明の部分が多くゲノミクス、プロテオミクスにGC/MS, LC-MS/MSを中心とした生体の代謝産物を解析する“メタボロミクス”も加えた解析システムを構築して単一遺伝子病から生活習慣病にいたるペルオキシソーム代謝疾患の総合研究分野を確立し、将来的には代謝病全体を網羅的に解析（オーミクス）できる疾病研究へと発展できればと考えています。ペルオキシソームは酵母から植物、動物にいたるまで広く存在し、共通の生理的機能を有しており、学内外の多くの先生と協力して大型の研究プロジェクトを企画したいと思っています。

植物病原性糸状菌における病原性機構の解明（須賀）：近年、食料の安全性や世界規模で見た場合の食糧不足、農薬の環境への影響が問題化しています。それらを解決するためには作物病害を適切に防ぐことが重要で、特に病原菌の性状について深く理解していることが求められています。本研究室では植物病原菌として良く知られたフザリウム菌のゲノム、プロテオーム解析により植物病原性糸状菌における病原性の分子機構ならびにゲノムの進化機構の解明をめざしています。

多能性幹細胞を用いた難治性神経疾患の病因解明（長瀬）：最近、多能性幹細胞（ES細胞・iPS細胞）に関する研究が大変注目を集めています。特に再生医療領域においてこれらから分化させた細胞あるいは組織を用いた移植医療や薬剤スクリーニングへの応用が期待されていますが、初期発生メカニズムの研究という基礎的な領域においても重要なツールとして認識されています。この多能性幹細胞からの分化系を用いて、モデル動物や実際の組織を用いるような従来の方法では研究が困難であった難治性神経疾患のin vitro 研究モデルを確立し、病態解明・治療法開発につなげたいと考えています。

2. 名簿

教授： 下澤伸行 Nobuyuki Shimosawa
准教授： 須賀晴久 Haruhisa Suga
助教： 長瀬朋子 Tomoko Nagase

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 下澤伸行. ペルオキシソーム病：日本先天代謝異常学会編. Meet the Expert 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京：診断と治療社；2009年：212-215.
- 2) 菊地正広, 下澤伸行. 成績低下, 行動異常から心療内科を受診していた11歳男児：日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京：診断と治療社；2009年：216-219.
- 3) 下澤伸行, 鈴木康之, 折居忠夫. 出生時からの著明な筋緊張低下, 哺乳不良に特異な顔貌を認めた生後2ヶ月男児：日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京：診断と治療社；2009年：220-223.
- 4) 下澤伸行. 極長鎖脂肪酸測定：小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京：中山書店；2010年：112-115.
- 5) 下澤伸行. ペルオキシソーム病：小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京：中山書店；2010年：214-217.
- 6) 下澤伸行. 脳肝腎症候群(ツェルウェーガー症候群)：症候群ハンドブック, 東京：中山書店；2011年：126-127.
- 7) 下澤伸行. Zellweger 症候群：日本先天代謝異常学会編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京：診断と治療社；2011年：146-148.
- 8) 鈴木康之, 小関道夫, 下澤伸行. 副腎白質ジストロフィー：日本先天代謝異常学会編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京：診断と治療社；2011年：149-151.
- 9) 下澤伸行. RCDP type1：日本先天代謝異常学会編. 先天代謝異常症 Diagnosis at a Glance, 東京：診断と治療社；2011年：152-153.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 下澤伸行. 日本人が発見に関わった疾患遺伝子 ペルオキシソーム病, 小児科 特集「小児疾患における臨床遺伝学の進歩」 2009年；50巻 増刊号：907-913.

- 2) 下澤伸行. ペルオキシソーム病, 小児内科 小児疾患診療のための病態生理 2 2009年; 41巻 増刊号: 479-486.
- 3) 下澤伸行. ペルオキシソーム病(副腎白質ジストロフィー, Zellweger 症候群), 小児科診療 2010年: 515-517.
- 4) 下澤伸行. ペルオキシソーム病を見逃していませんか?, 小児内科 2010年; 42巻: 1167-1173.
- 5) 鈴木康之, 下澤伸行. 日本先天代謝異常学会 学会賞受賞論文「ペルオキシソーム病との30年: 二人三脚の旅」, 日本先天代謝異常学会雑誌 2010年; 26巻: 2-12.
- 6) 下澤伸行. ペルオキシソーム形成異常症 -Zellweger 症候群-, 別冊日本臨床 新領域別症候群シリーズ No13 肝・胆道系症候群(第2版) 2010年: 515-518.
- 7) 三善陽子, 酒井規夫, 池田佳世, 長谷川泰浩, 橋真紀子, 清原由起, 山田寛之, 近藤宏樹, 濱田悠介, 木村志保子, 里 龍晴, 峰 淳史, 神尾範子, 鈴木保宏, 塩見正司, 太田秀明, 下澤伸行, 大園恵一. 副腎白質ジストロフィーの日本人男児 11例に置ける副腎機能解析, 日本内分泌学会雑誌 2011年; 87巻 suppl: 83-85.

総説 (欧文)

- 1) Morita M, Shimozawa N, Kashiwayama Y, Suzuki Y, Imanaka T. ABC subfamily D proteins and very long chain fatty acid metabolism as novel targets in adrenoleukodystrophy. *Curr Drug Targets*. 2011;12:694-706.
- 2) Shimozawa N, Honda A, Kajiwarana N, Kozawa S, Nagase T, Takemoto Y, Suzuki Y. X-linked adrenoleukodystrophy: Diagnostic and follow-up system in Japan. *J Hum Genet*. 2011;56:106-109.
- 3) Shimozawa N. Molecular and clinical findings and diagnostic flowchart of peroxisomal diseases. *Brain Dev*. 2011;33:770-776.

原著 (和文)

- 1) 福原 忍, 水江伸夫, 坂井拓郎, 稲澤奈津子, 池本 亘, 足立憲昭, 下澤伸行. 同一遺伝子異常を持ちながら臨床型が異なる ALD 兄弟例. *小児科臨床* 2009年; 62巻: 457-461.
- 2) 外側正之, 須賀晴久. 静岡県西部地域のススキから分離された *Fusarium graminearum*, 関西病虫研報 2009年; 51巻: 55-56.

原著 (欧文)

- 1) Al-Dirbashi OY, Shaheen R, Al-Sayed M, Al-Dosari M, Makhseed N, Safieh LA, Santa T, Meyer BF, Shimozawa N, Alkuraya FS. Zellweger syndrome caused by PEX13 deficiency: Report of two novel mutations. *Am J Med Genet*. 2009;149A:1219-1223. IF 2.505
- 2) Suzuki Y, Aoyama A, Kato T, Shimozawa N, Orii T. Retinitis pigmentosa and mucopolysaccharidosis type II: an extremely attenuated phenotype. *J Inher Metab Dis*. 2009;32:582-583. IF 3.808
- 3) Yin-Ling, Zhou W, Motohashi K, Suga H, Fukui H, Kageyama K. Development of microsatellite markers for *Pythium helicoides*. *FEMS Microbiol Lett*. 2009;293:85-91. IF 2.040
- 4) Suzuki F, Suga H, Tomimura K, Fuji S, Arai M, Koba A, Nakajima T. Development of simple sequence repeat markers for Japanese isolates of *Magnaporthe grisea*. *Mol Ecol Resour*. 2009; 9:588-590. IF 1.631
- 5) Senda M, Kageyama K, Suga H, Lévesque CA. Two new species of *Pythium*, *P. senticosum* and *P. takayamanum*, isolated from cool-temperate forest soil in Japan. *Mycologia*. 2009;101:439-448. IF 1.641
- 6) Karugia G, Suga H, Gale L, Nakajima T, Tomimura K, Hyakumachi M. Population Structure of the *Fusarium graminearum* Species Complex from a Single Japanese Wheat Field Sampled in Two Consecutive Years. *Plant Disease*. 2009;93:170-174. IF 2.387
- 7) Karugia G, Suga H, Gale L, Nakajima T, Ueda A, Hyakumachi M. Population structure of *Fusarium asiaticum* from two Japanese regions and eastern China. *J Gen Plant Pathol*. 2009;110-118. IF 0.687
- 8) Nagase T, Ueno M, Matsumura M, Muguruma K, Ohgushi M, Kondo N, Kanematsu D, Kanemura Y, Sasai Y. Pericellular matrix of decidua-derived mesenchymal cells: a potent human-derived substrate for the maintenance culture of human ES cells. *Dev Dyn*. 2009;238:1118-1130. IF 2.864
- 9) Miyoshi Y, Sakai N, Hamada Y, Tachibana M, Hasegawa Y, Kiyohara Y, Yamada H, Murakami M, Kondou H, Kimura-Ohba S, Mine J, Sato T, Kamio N, Ueda H, Suzuki Y, Shiomi M, Ohta H, Shimozawa N, Ozono K. Clinical aspects and adrenal functions in eleven Japanese children with X-linked adrenoleukodystrophy. *Endocr J*. 2010;57:965-972. IF 1.952
- 10) Asano T, Senda M, Suga H, Kageyama K. Development of multiplex PCR to detect five *Pythium* species related to turfgrass diseases. *J Phytopathol*. 2010;158:609-615. IF 0.937
- 11) Li M, Senda M, Komatsu T, Suga H, Kageyama K. Development of realtime PCR technique for the estimation of population density of *Pythium intermedium* in forest soils. *Microbiol Res*. 2010;165:695-705. IF 1.958
- 12) Shaheen R, Al-Dirbashi OY, Al-Hassnan ZN, Al-Owain M, Makhseed N, Basheeri F, Seidahmed MZ, Salih MAM, Faqih E, Zaidan H, Al-Sayed M, Rahbeeni Z, Al-Sheddi T, Hashem M, Kurdi W, Shimozawa N, Alkuraya FS. Clinical biochemical and molecular characterization of peroxisomal diseases in Arabs. *Clin Genet*. 2011;79: 60-70. IF 2.942
- 13) Matsukawa T, Asheuer M, Takahashi Y, Goto J, Suzuki Y, Shimozawa N, Takano H, Onodera O,

- Nishizawa M, Aubourg P, Tsuji S. Identification of novel SNPs of ABCD1, ABCD2, ABCD3, and ABCD4 genes in patients with X-linked adrenoleukodystrophy (ALD) based on comprehensive resequencing and association studies with ALD phenotypes. *Neurogenetics*. 2011;12:41-50. IF 3.488
- 14) Kozawa S, Honda A, Kajiwara N, Takemoto Y, Nagase T, Nikami H, Okano Y, Nakashima S, Shimozawa N. Induction of peroxisomal lipid metabolism in mice fed a high-fat diet. *Mol Med Rep*. 2011;4:1157-1162. IF 0.307
- 15) Suga H, Nakajima T, Kageyama K, Hyakumachi M. The genetic profile and molecular diagnosis of thiophanate-methyl resistant strains of *Fusarium asiaticum* in Japan. *Fungal Biol*. 2011;115:1244-1250. IF 2.259
- 16) Pu Y, Kikuchi A, Moriyasu Y, Tomaru M, Jin Y, Suga H, Hagiwara K, Akita F, Shimizu T, Netsu O, Suzuki N, Uehara-Ichiki T, Sasaya T, Wei T, Li Y, Omura T. Rice dwarf viruses with dysfunctional genomes generated in plants are filtered out in vector insects: implications for the origin of the virus. *J Virol*. 2011;85:2975-2979. IF 5.189
- 17) Li M, Asano T, Suga H, Kageyama K. A multiplex PCR for the detection of *Phytophthora nicotianae* and *P. cactorum*, and a survey of their occurrence in strawberry production areas of Japan. *Plant Dis*. 2011;95:1270-1278. IF 2.387

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：下澤伸行；科学研究費補助金基盤研究(C)：温度感受性に基づく代謝機能回復因子の網羅的探索と新規治療法の開発；平成 21-23 年度；4,420 千円(2,080：1,170：1,170 千円)
- 2) 研究代表者：須賀晴久；科学研究費補助金基盤研究(C)：カビ毒汚染の原因となっている植物病原菌の宿主内進展遺伝子の解明；平成 21-23 年度；5,070 千円(2,990：1,170：910 千円)
- 3) 研究代表者：長瀬朋子；科学研究費補助金若手研究(B)：幹細胞を用いたペルオキシソーム病の病因解明・治療法開発；平成 21-23 年度；4,160 千円(2,080：910：1,170 千円)
- 4) 分担研究者：下澤伸行；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業：ライソゾーム病(ファブリ病含む)に関する調査研究；平成 21-23 年度；9,100 千円(2,500：2,800：3,800 千円)
- 5) 分担研究者：下澤伸行；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業；ペルオキシソーム病：副腎白ジストロフィーの生体試料収集及び、臨床病型修飾因子についての研究；平成 21 年度；2,500 千円
- 6) 分担研究者：下澤伸行；厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業；フェール病(特発性両側性大脳基底核・小脳歯状核石灰化症)の診断方法の確立と治療法の開発；平成 23 年度；1,000 千円
- 7) 研究代表者：下澤伸行；小野医学研究助成金：極長鎖脂肪酸代謝異常症の病態解明と治療法の開発；平成 23 年度；2,000 千円

2) 受託研究

- 1) 下澤伸行：先天代謝異常症の診断ネットワークを介した長期予後追跡システムの構築；平成 21-22 年度；2,000 千円(1,000：1,000 千円)：成育医療研究委託事業研究
- 2) 下澤伸行：Dravet 症候群の Na チャネル遺伝子異常の研究；平成 20-21 年度；1,000 千円：国立病院機構静岡てんかん・神経医療センター
- 3) 須賀晴久：薬剤耐性を持つ麦類赤かび病菌の遺伝子診断と伝播抑制技術の開発；生産・流通・加工工程における体系的な危害要因の特性解明とリスク低減技術の開発；平成 21 年度プロジェクト研究；4,000 千円：農業・食品産業技術総合研究機構
- 4) 須賀晴久：薬剤耐性を持つ麦類赤かび病菌の遺伝子診断と伝播抑制技術の開発；生産・流通・加工工程における体系的な危害要因の特性解明とリスク低減技術の開発；平成 22 年度プロジェクト研究；3,116 千円：農業・食品産業技術総合研究機構
- 5) 須賀晴久：薬剤耐性を持つ麦類赤かび病菌の遺伝子診断と伝播抑制技術の開発；生産・流通・加工工程における体系的な危害要因の特性解明とリスク低減技術の開発；平成 23 年度プロジェクト研究；2,648 千円：農業・食品産業技術総合研究機構
- 6) 須賀晴久：イチゴ健全種苗生産のための病害検査プログラムの構築；イチゴ萎黄病菌検出プライマーの作製；平成 21-23 年度；8,000 千円(3,000：2,750：2,250 千円)：新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

下澤伸行：

- 1) 日本小児神経学会評議員(～現在)
- 2) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 3) 日本先天代謝異常学会評議員(～現在)

須賀晴久：

- 1) 植物病原菌類談話会幹事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

下澤伸行：

- 1) Journal of Human Genetics ; Editorial Board (～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

下澤伸行：

- 1) 第 51 回日本先天代謝異常学会, 第 8 回アジア先天代謝異常症シンポジウム(平成 21 年 11 月, 東京, ペルオキシソーム病との 30 年: 二人三脚の旅, 学会賞受賞講演)
- 2) International Symposium on Epilepsy in Neurometabolic Diseases (2010.03, Taipei, Clinical findings and diagnostic flowchart of peroxisomal disease ; Plenary Lecture)

須賀晴久：

- 1) 第 20 回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム(平成 22 年 4 月, 京都, 「ムギ類赤かび病菌におけるチオフェネートメチル耐性化と伝播機構の分子遺伝学的研究」)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 下澤伸行：日本先天代謝異常学会賞(平成 21 年度)
- 2) 下澤伸行：小児医学川野賞(平成 23 年度)

9. 社会活動

下澤伸行：

- 1) 岐阜県児童福祉審議会児童処遇専門部会委員(～現在)
- 2) 独立行政法人医薬基盤研究所基礎的研究評価委員会専門委員(～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

- 1) 下澤伸行：「DNA 鑑定」「ゲノム」生命科学の世界へ招待：中日新聞(2009 年 6 月 25 日)
- 2) ゲノム研究分野：「DNA 鑑定に挑戦!!」：中日新聞(2009 年 8 月 12 日)
- 3) ゲノム研究分野：「遺伝子って興味深い」：中日新聞(2010 年 8 月 4 日)
- 4) ゲノム研究分野：「中学生のための生命科学体験」：岐阜チャンネル・ニュース 5 プラス(2011 年 8 月 9 日)
- 5) ゲノム研究分野：「中学生が DNA 鑑定」：中日新聞(2011 年 8 月 17 日)
- 6) ゲノム研究分野：「高校生のための生命科学体験」：岐阜チャンネル・ニュース 5 プラス(2011 年 8 月 17 日)
- 7) ゲノム研究分野：「高校生のための生命科学体験」：NHK 総合 ほっとイブニングぎふ(2011 年 8 月)

17日)

12. 自己評価

評価

全学的な教育研究支援業務としては生命科学総合研究支援センターとして、岐阜大学における教育研究の基盤的設備の整備を行うとともに、生命科学における基礎と臨床の融合を視野に、研究基盤の提供を進めている。研究面では全国唯一のペルオキシソーム病診断研究センターとして診断システム、患者長期フォローアップシステムを確立し、国内外の研究機関と共同で病態解明、治療法の開発に繋がる研究を行っている。

- 1) ゲノム研究分野における生命科学基盤整備：システムバイオロジー研究基盤整備事業として、平成21年度には新型DNAシーケンサー2台、定量PCR、LC、LC-MS/MS、フローサイトメーター、共焦点レーザー顕微鏡、22年度にはDNAマイクロアレイスキャナ、バイオインフォマティクス支援システム、発光イメージングシステムを導入し、生命科学研究拠点形成に向けてさらなる基盤整備を行っている。23年度は各機器の説明会、講習会を開催しながら学内利用を拡大し、より多くの研究者への研究基盤の提供を図っている。
- 2) 医学地区での利用拡大：岐阜薬科大学の利用も鑑み、医学部棟5階の医学系研究科共通機器センターにDNAシーケンス受託サンプル保管用の冷蔵庫を設置し、医学地区研究者の利便性の向上を図るとともに、新規利用者へのキャンペーンも展開し、全学的な利用拡大に努めている。
- 3) ゲノム研究分野RI施設では、「災害時も想定した学内自然放射線測定システムの構築」としてゲルマニウム検出器によるγ線量の測定を開始し、県内に1ヶ所しかない測定施設の補完機能として社会貢献を果たすと同時に、将来的には流域や森林等の環境から人体や動物への影響、食品、工業製品に至るまで、幅広い研究分野で自然放射線測定を用いた新たな研究シーズの開拓をめざしている。
- 4) ペルオキシソーム病の国内診断システムを確立し、迅速な診断から最新の医療情報を主治医に提供し、早期治療に結びつけるとともに、様々なバイオリソースを用いて病因、病態解明、治療法の開発に関する独自、ならびに共同研究を展開し、その成果を国内外に発信している。
- 5) 研究成果の国際協力ならびに社会貢献として、ベトナムハノイ小児病院における副腎白質ジストロフィー患者診断を開始するとともに、アラブ地域におけるペルオキシソーム病診断支援システムもサウジアラビア国立病院と共同で継続している。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 生命科学技術の進歩とともにシステムバイオロジー関連解析機器の進歩も目覚ましく、学内における生命科学の教育研究水準を高度に維持するためには、集約化した施設に設備や大型機器を設置して更新して利用を広げ、学内におけるソフトやハード面での研究情報システムを整備して部局の垣根を越えた全学的な教育研究の推進が望まれる。
- 2) RI施設に関しては、蛍光物質等による近年の代替技術の進歩とともに、利用頻度が減少傾向にある。将来的な薬大との共同利用も鑑み、より広い分野での需要拡大を目指して、学生教育や教員養成コースにおける実習の導入も視野に自然放射線の観測・測定分野や環境科学分野への発展を図る。さらに本来の生命科学分野におけるRI実験の新技术の導入や指導、安全管理の面からもRIに精通した専任教員の配属を引き続き求めて行く。
- 3) 研究支援センターの運営に従事しながら研究者としてのモチベーションを保つためには、自らが率先して研究テーマを設定して学内外との共同研究を展開し、大学院も含めた研究者の教育・育成に関わる姿勢が必要と思われる。

今後の展望

- 1) 岐阜大学、岐阜薬科大学による、医・薬・工・応用生物・獣医が集結した生命科学分野の拠点形成に向け、施設、設備、組織を含めて研究しやすい環境を整備しつつ、学内外の共同研究を支援して基礎と臨床の架け橋を目指す。
- 2) ペルオキシソーム病をはじめとする遺伝性代謝病の診断研究の拠点として単一遺伝子病から生活習慣病までより広い領域における病態解明、治療法の開発を行い、岐阜大学より「ペルオキシソーム」を発信していく。

(15) 生命科学総合研究支援センター（嫌気性菌研究分野）

1. 研究の概要

当分野は平成15年の改組により前身の医学部附属嫌気性菌実験施設から学内研究支援を主たる業務とする生命科学総合研究支援センターの嫌気性菌研究分野に移行した。支援内容としてはその特殊性から学内外を問わず嫌気性菌の培養、菌株提供、嫌気性菌感染症に関する相談、診断支援、院内感染に関する調査などの支援を行っている。研究面では、臨床微生物学の立場から、嫌気性菌・嫌気性菌感染症に関する基礎的・臨床的研究を進めている。具体的には破傷風、ガス壊疽、ボツリヌス症など毒素産生性の嫌気性菌による外因性の感染症、おもに術後に見られる嫌気性菌と通性菌が相乗的に病原性を発揮する内因性の複数菌感染症、芽胞をもつ嫌気性菌による院内感染症などの嫌気性菌が関係する多種多様の感染症の診断、治療、そして予防に役だつような研究を細菌学的な立場から行っている。嫌気性菌の分離培養同定法の改良、嫌気性菌の病原因子、嫌気性菌の抗菌薬感受性の測定とその測定法の改良、抗嫌気性菌作用を有する物質の探索とそれらの抗菌力の評価、嫌気性菌の抗菌薬に対する耐性現象の解明、そして、嫌気性菌が優勢なヒト固有細菌叢の異常化が原因となっておこる種々の「21世紀病」についての研究などを展開している。

2. 名簿

教授： 渡邊邦友 Kunitomo Watanabe
准教授： 田中香お里 Kaori Tanaka
助教： 後藤隆次 Takatsugu Goto

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 渡邊邦友. 感染症検査 感染症遺伝子検査 クロストリジウム・ディフィシル遺伝子検査 微生物産生物・代謝産物 ボツリヌス毒素, CD トキシン, テタノスパスミン: 高久久磨監修. 臨床検査データブック 2009-2010, 東京: 医学書院; 2009年: 491-492, 524-528.
- 2) 渡邊邦友. E. 嫌気性菌感染症 1. 破傷風, 2. ガス壊疽, 3. 無芽胞嫌気性菌が関与する複数菌感染症: 高久久磨, 尾形悦郎, 黒川 清, 矢崎義雄監修. 新臨床内科学 第9版, 東京: 医学書院; 2009年: 1333-1335.
- 3) 渡邊邦友. Part7 感染症 Section7 その他の細菌感染症 157. 嫌気性菌を含む複数菌感染症: 福井次矢・黒川 清日本語版監修. ハリゾン内科学 第3版 1巻, 大阪: メディカルサイエンスインターナショナル; 2009年: 1046-1054.
- 4) 渡邊邦友. 第2章 A. 細菌学各論 VIII. 嫌気性菌臨床検査学講座: 微生物学・臨床微生物学 第三版, 東京: 医歯薬出版株式会社; 2010年: 219-253.
- 5) 渡邊邦友. 嫌気性菌感染症: 松本哲哉監修. 図説臨床看護学医学 デジタル版 8 感染症, 東京: 株式会社エディターシップ; 2010年.
- 6) 田中香お里, 渡邊邦友. 耐性嫌気性菌: *Bacteroides*, *C. difficile*: 一山 智, 山口恵三監修. 飯沼由嗣, 館田一博編. 感染症診療の基礎と臨床-耐性菌の制御に向けて-, 大阪・東京: 医薬ジャーナル社; 2010年: 64-70.
- 7) 田中香お里, 渡邊邦友. 35. バクテロイデス・フラジリス(*Bacteroides fragilis*): 松本慶蔵編. 病原菌の今日的意義 改訂4版, 大阪医薬ジャーナル社; 2011年: 613-624.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 市石 卓, 田中香お里, 渡邊邦友. 最近注目される微生物-その臨床的意義と検査法 嫌気性菌 *Desulfovibrio*, 臨床と微生物 2009年: 36巻; 55-61.
- 2) 川村千鶴子, 北村英夫, 渡邊邦友. 顕微鏡検査のこつ ~臨床に役立つ形態学~ 感染症と微生物検査の所見 5. 皮膚軟部組織感染症, 検査と技術 2009年: 37巻; 955-962.
- 3) 田中香お里, 渡邊邦友. 薬剤感受性測定と耐性菌 2. 特殊微生物の抗微生物薬感受性測定法, 嫌気性菌臨床と微生物 2009年: 36巻; 554-559.
- 4) 渡邊邦友, 後藤隆次, 田中香お里. グラム陽性嫌気性球菌群, モダンメディア 2010年; 56巻: 320-328.
- 5) 渡邊邦友, 田中香お里. *Clostridium perfringens*, *Clostridium septicum* などのガス壊疽菌群 緊急報告すべき検査結果のすべて - すぐに使えるパニック値事典 IV 微生物 6 検出された場合に医師に緊急に報告すべき微生物, 検査と技術 2011年: 39巻; 854-858.

総説（欧文）

なし

原著 (和文)

- 1) 田中香お里, 渡邊邦友. Tebipenem の嫌気性菌に対する *in vitro* 抗菌作用, 日本化学療法学会雑誌 2009年: 57巻: 30-37.
- 2) 石黒 卓, 高柳 昇, 田中香お里, 米田紘一郎, 杉田 裕, 渡邊邦友. *Capnocytophaga* と *Actinomyces israelii* による膿胸の1例, 日本呼吸器学雑誌 2009年: 47巻: 906-911.
- 3) 大門康志, 田中香お里, 渡邊邦友, 嫌気性グラム陰性桿菌として見逃されやすいフットボール型 *Clostridium* の同定に関する検討, 日本臨床微生物学雑誌 2010年: 20巻: 9-19.
- 4) 河元宏史, 野村伸彦, 満山順一, 山岡一清, 浅野裕子, 澤村治樹, 末松寛之, 寺地真弓, 橋渡彦典, 松川洋子, 松原茂規, 宮部高典, 三鴨廣繁, 渡邊邦友. 血液材料より分離された肺炎球菌に対する各種抗菌薬の抗菌活性及びモンテカルロシミュレーションを用いたレスピラトリーキノロン薬の有効性評価, *The Japanese Journal of Antibiotics* 2010年: 63巻: 1-10.
- 5) 阿久澤和彦, 山田理恵, 果 長暁, 定也秀貴, 松原京子, 土田裕三, 渡邊邦友, 二ノ宮真之, 額瀨 守, 村山次哉. クマザサ含有成分によるヒトサイトメガロウイルスの増殖抑制効果, 日本補完代替医療学会雑誌 2010年: 7巻: 171-177.
- 6) 木村国男, 山岸由佳, 寺田道徳, 大木恵美子, 田中香お里, 渡邊邦友, 三鴨廣繁. *Bifidobacterium* および *Clostridium difficile* に対する経口キノロン系薬の抗菌活性, *The Japanese Journal of Antibiotics* 2010年: 63巻: 171-177.
- 7) 山岸由佳, 田中香お里, 藤巻 愛, 森 稔高, 木下伸吾, 渡辺員支, 若槻明彦, 渡邊邦友, 三鴨廣繁. 卵巣癌末期の癌性腹膜炎に合併した *Clostridium sordellii* によるまれな菌血症の一例報告および文献的考察, 日本外科感染症学雑誌 2010年: 7巻: 155-160.
- 8) 松川洋子, 山岸由佳, 三鴨廣繁, 澤村治樹, 松原茂規, 山岡一清, 浅野裕子, 石郷潮美, 末松寛之, 武藤敏弘, 寺地真弓, 橋渡彦典, 寺田浩史, 佐伯浩和, 宮部高典, 田中香お里, 渡邊邦友, 秋田茂樹, 岡田雅子, 竹本靖彦, 佐久間孝. 岐阜県下における肺炎球菌の疫学解析, *The Japanese Journal of Antibiotics* 2010年: 63巻: 224-241.

原著 (欧文)

- 1) Tanaka K, Mikamo H, Nakao K, Ichiishi T, Goto T, Yamagishi Y, Watanabe K. In vitro activity of tompopenem (CS-023/RO4908463) against anaerobic bacteria. *Antimicrob Agents Chemother.* 2009;53:319-322. IF 4.672
- 2) Sugisaki H, Yamanaka K, Kakeda M, Kitagawa H, Tanaka K, Watanabe K, Gabazza EC, Kurokawa I, Mizutani H. Increased interferon-gamma, interleukin-12p40, and IL 8 production in *Propionibacterium acnes*-treated perioral blood mononuclear cells from patients with acne vulgaris: host response but not bacterial species is the determinant factor of the diseases. *J Dermatol Sci.* 2009;55:47-52. IF 3.712
- 3) Furukawa A, Uchida K, Ishige Y, Ishige I, Kobayashi I, Takemura T, Yokoyama T, Iwai K, Watanabe K, Shimizu S, Ishida N, Suzuki Y, Suzuki T, Yamada T, Ito T, Eishi Y. Characterization of *Propionibacterium acnes* isolates from sarcoidosis and non-sarcoidosis tissues with special reference to cell invasiveness, serotype, and trigger factor gene polymorphism. *Microb Pathog.* 2009;46:80-87.
- 4) Sawada A, Mochizuki K, Katada T, Kawakami H, Yamamoto T, Mikamo H, Watanabe K. *Gemella* species-associated late-onset endophthalmitis after trabeculectomy with adjunctive mitomycin C. *J Glaucoma.* 2009;18:496-497. IF 1.533
- 5) Oyama T, Yasui Y, Sugie S, M Koketsu, Watanabe K, Tanaka T. Dietary tricin suppress inflammation-related colon carcinogenesis in male Crj:CD-1 mice. *Cancer Prev Res.* 2009;2:1031-1038.
- 6) Nakao K, Tanaka K, Ichiishi S, Mikamo H, Shibata T, Watanabe K. Susceptibilities of 23 *Desulfovibrio* Isolates from Humans. *Antimicrob Agents Chemother.* 2009;53:5308-5311. IF 4.672
- 7) Ichiishi S, Tanaka K, Nakao K, Izumi K, Mikamo H, Watanabe K. First isolation of *Desulfovibrio* from human vaginal flora. *Anaerobe.* 2010;16:229-233. IF 2.448
- 8) Yamagishi Y, Mikamo H, Tanaka K, Watanabe K. A case of uterine endometritis caused by *Atopobium vaginae*. *J Infect Chemother.* 2011;17:119-121.
- 9) Ninomiya M, Tanaka K, Tsuchida Y, Muto Y, Koketsu M, Watanabe K. Increased bioavailability of rtricin - amino acid derivatives via a prodrug approach. *J Med Chem.* 2011;54:1529-1536. IF 5.207
- 10) Tran CM, Tanaka K, Yamagishi Y, Goto T, Hirose M, Watanabe K. In vitro antimicrobial activity of Razupenem (SMP-601, PTZ601) against anaerobic bacteria. *Antimicrob Agents Chemother.* 2011;55:2398-2402. IF 4.672
- 11) Yazawa K, Kurokawa M, Obuchi M, Yamada R, Sadanari H, Marsubara K, Watanabe K, Motetsu M, Tsuchida Y, Murayama T. Anti-influenza virus activity of tricin, 4', 5, 7-trihydroxy-3',5'-dimethoxyflavone. *Antivir Chem Chemotherapy.* 2011;2:1-11. IF 1.901
- 12) Akuzawa k, Yamada R, Li Z, Li Y, Sadanari H, Matsubara K, Watanabe K, Koketsu M, Tsuchida T, Maruyama T. Inhibitory effects of tricin derivative from *Sasa albo-marginata* on replication of human cytomegalovirus. *Antivir Res.* 2011;91:296-303. IF 4.439

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：後藤隆次；大学活性化経費(研究：科研採択支援)：*Bacteroides fragilis* の新規イミペネム排出ポンプの同定；平成 21 年度；900 千円

2) 受託研究

- 1) 田中香お里：骨盤内炎症性疾患に対するアジスロマイシン注射剤からアジスロマイシン経口剤への切り替え療法の多施設共同、非盲検、非対照試験における微生物学的検査；平成 22-23 年度；1,774 千円；ファイザー(株)
- 2) 渡邊邦友：オウバクエキスの抗菌作用に関する研究；平成 22 年度；315 千円；日野製薬(株)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

渡邊邦友：

- 1) 臨床腸内微生物学会理事(～現在)
- 2) 日本感染症学会評議員(～現在)
- 3) 日本感染症学会中日本地方会理事(～平成 22 年 4 月)
- 4) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 5) 日本臨床微生物学会評議員(～現在)
- 6) 日本嫌気性菌感染症研究会運営委員(～現在)
- 7) 臨床微生物迅速診断研究会幹事(～現在)
- 8) 日本細菌学会中部支部評議員(～現在)
- 9) 日本臨床微生物学会嫌気性菌検査マニュアル作業委員会委員(平成 21 年 8 月～現在)
- 10) 日本細菌学会評議員(～現在)

田中香お里：

- 1) 日本化学療法学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床微生物学会評議員(～現在)
- 3) 日本細菌学会中部支部評議員(～現在)
- 4) 日本嫌気性菌感染症研究会運営委員(～現在)
- 5) 日本臨床微生物学会 嫌気性菌検査マニュアル作業委員会委員(平成 21 年 8 月～現在)

2) 学会開催

渡邊邦友：

- 1) 第 12 回日本臨床腸内微生物学会総会学術集会(平成 21 年 9 月，岐阜)

3) 学術雑誌

渡邊邦友：

- 1) 臨床微生物迅速診断研究会雑誌；編集委員(～現在)
- 2) *Anaerobe*；Editorial board(平成 22 年～現在)

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

渡邊邦友：

- 1) 第 84 回日本感染症学会総会(平成 22 年 4 月，京都，特別講演「嫌気性菌の薬剤耐性の現状」演者)
- 2) 第 10 回日本臨床中医薬学会(平成 22 年 9 月，富山，シンポジウム「高齢者疾患に向けた新しい創薬シーズとしてのクマザサ」シンポジスト)

田中香お里：

- 1) 第 39 回日本嫌気性菌感染症研究会(平成 21 年 3 月, 岐阜, 教育講演「学会報告 Anaerobe2008」, 演者)
- 2) 第 12 回日本臨床腸内微生物学会総会(平成 21 年 9 月, 岐阜, 教育講演「ヒトと硫酸還元細菌—*Desulfovibrio* を中心に—」演者)
- 3) 第 84 回日本感染症学会総会(平成 22 年 4 月, 京都, 感染症レビュー「嫌気性菌感染症レビュー」演者)
- 4) 第 23 回臨床微生物迅速診断研究会(平成 22 年 6 月, 岐阜, シンポジウム「感染症の診断と治療そして予防 Up-to-Date : 嫌気性菌感染症」シンポジスト)
- 5) 第 59 回日本化学療法学会総会(平成 23 年 6 月, 札幌, シンポジウム「嫌気性菌感染症診断・治療ガイドライン 2007 改訂に向けてのコンセンサス・ミーティング—現行ガイドラインの問題点と改訂ガイドラインのポイントを明らかにする—」シンポジスト)

後藤隆次：

- 1) 第 39 回日本嫌気性菌感染症研究会(平成 21 年 3 月, 岐阜, 教育講演 1「グラム陽性嫌気性球菌の全ゲノム解析」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 渡邊邦友他：臨床迅速診断研究会優秀論文賞(平成 22 年度)

9. 社会活動

渡邊邦友：

- 1) 岐阜県院内感染症対策協議会委員(平成 22 年度)

田中香お里：

- 1) 岐阜県建築審査会委員(平成 21 年度～現在)

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

前身の医学部附属嫌気性菌実験施設の時代から、臨床嫌気性菌学中心とした研究、診断支援を主体とし、医学教育においては微生物分野のサポートを行っている。組織が移行したことで教室員の減少により、以前に比べ臨床細菌学領域での共同研究が後退している点是否めないが、臨床細菌学の視点からの研究は持続している。センター移行後は医学領域以外への研究サポート、共同研究も少しずつではあるが進んでいる。

現状の問題点及びその対応策

当分野は学内研究支援センターに所属しているが、特殊な分野であるため実質的な研究、診断支援の需要は学内よりも学外に多い。支援業務はセンターの他分野で主に行っている機器、施設の提供による支援とは性質が異なり、知識、技術、作業を提供する支援が主体となっており、スタッフの経験と作業に従事できる態勢が必須である。これらの支援業務は研究に繋がりにくいことから経験のあるスタッフが少ない状況で支援と研究、教育のいずれも不足なく行っていくのは容易ではなく、限られた範囲でしか対応できていない。専門性の高い技術職員の育成と確保が必要である。

今後の展望

臨床嫌気性菌学を行っている国内では希な基礎の講座として、対外的にはレファレンスセンターとしての機能を期待されているが、現状ではその体制にない。当面は、支援・研究・教育においては現状を維持しながら、トランスレーショナルリサーチに寄与できる体制作りを進めていきたい。

(16) 人獣感染防御研究センター（プリオン研究部門）

1. 研究の概要

本センターでは、プリオン病やウイルス感染症を含む人獣共通感染症を標的として、タンパク質の立体構造に基づく論理的創薬法の開発、及び創薬開発を行っている。また、論理的創薬法を感染症以外の難治性疾患、例えば、悪性腫瘍などの治療薬開発に応用している。

まず、論理的創薬法の方法論の開発の一環として、

1. 分子に配位した銅イオンの酸化還元電位を求めめるため、密度汎関数法を用いる手法を開発した。
2. また、プリオンタンパク質に配位している銅の酸化還元電位を求めた。
3. さらに、神経毒性を有するプリオンタンパク質部位の銅の酸化還元電位を求めた。
4. RI-MP2 法によるフラグメント分子軌道 (FMO) プログラムを作成した。
5. 分子動力学計算により、低分子化合物によるタンパク質の立体構造安定化現象を明らかにした。
6. フラグメント分子軌道法 (FMO) により、プリオンタンパク質の安定性を計算した。
7. 同法 (FMO) によりエネルギー勾配を計算し、立体構造の最適化を行うプログラムを構築した。
8. 同法 (FMO) により、プリオンに結合する低分子化合物の立体構造計算を行った。

また、論理的創薬法の具体的応用として、

1. p53 の立体構造を安定化させることにより、抗がん作用を発揮する分子を見出した。
2. 発がんに関与する AKR1B10 のインヒビター (K_D : ~ 6 nM) を見出した。
3. 種々の抗プリオン物質を見出し、プリオンタンパク質に対する結合との相関を調べた。
4. ラットとイヌを用いて、抗プリオン化合物 GN8 の毒性を調べた。
5. GN8 の類縁体を作成し、抗プリオン作用に関して、その化学構造を最適化した。
6. GJP14 の類縁体を作成し、抗プリオン作用に関して、その化学構造を最適化した。
7. PA を標的とし、抗インフルエンザ作用を有する化合物を、既存薬剤の中から見出した。

さらに、論理的創薬法に対する補完実験として、

1. 温度ジャンプ法により、プリオンタンパク質の超高速立体構造形成過程の検出に成功した。
 2. プリオンタンパク質と神経膜表面の GM1 ガングリオシドとの結合構造を決定した。
 3. アミロイド線維形成に対する超音波の影響を定量的に調べた。
 4. カフェオイルキナ酸に抗インフルエンザ・ウイルス作用があることを、見出した。
 5. カフェオイルキナ酸が、TRAIL の発現を高めることを見出した。
- を行った。

これらは、それぞれ独立した paper として既に publish されている。これら以外にも、

1. FMO と古典動力学計算との結合プログラムの作成。
 2. プリオンタンパク質の立体構造形成過程の詳細解析。
 3. イヌやカニクイザルを用いた新規抗プリオン化合物の非臨床安全性試験。
 4. PB2 を標的とする抗インフルエンザ化合物の開発。
 5. FOP などの希少難病に対する治療薬の開発。
 6. Kinetic NMR 装置の開発。
 7. 論理的形態制御学 (分子デザイン (ミクロ), 及び外科手術 (マクロ)) の理論構築。
- を推進しているところである。

2. 名簿

教授：	桑田一夫	Kazuo Kuwata
クレスト研究員：	石川岳志	Takeshi Ishikawa
学振 PD：	山口圭一	Keiichi Yamaguchi

3. 研究成果の発表

著書 (和文)

- 1) 桑田一夫. プリオン病の論理的創薬開発: 山田正仁編. ガイドライン完全解説 アミロイドーシス診療のすべて, 東京: 医歯薬出版; 2011 年: 190-196.

著書 (欧文)

なし

総説 (和文)

- 1) 桑田一夫. 患者に利する創薬, 日本医事新報 2009年; 4453号: 1.
- 2) 桑田一夫. 論理的創薬法による抗プリオン物質の設計と開発(Rational design and development of anti-prion compounds), 化学工業 2010年; 61巻: 46-50.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 石川 岳志, 石倉 孝一, 桑田 一夫. フラグメント分子軌道法プログラム「PAICS」と統合創薬プログラム「NAGARA」, Molecular Science 2011年; 5: NP0015.
- 2) 桑田 一夫. “量子ロボット”, 生物物理 2011年; Vol.51: 205.

原著 (欧文)

- 1) Yamamoto N, Kuwata K. DFT studies on redox properties of copper-chelating cuprizone: Unusually high-valent copper(III) state. *Theochem.* 2009;895:52-56. IF 1.288
- 2) Ishikawa T, Kuwata K. Fragment molecular orbital calculation using the RI-MP2 method. *Chem. Phys. Lett.* 2009;474:195-198. IF 2.282
- 3) Okuda Y, Nakamura HK, Kuwata K. Novel anti-cancer compounds : structure-based discovery of chemical chaperons for p53. *Oncol. Rep.* 2009;22:739-744. IF 1.686
- 4) Yamamoto N, Kuwata K. Regulating the conformation of prion protein through ligand binding. *J. Phys. Chem. B.* 2009;113:12853-12856. IF 3.603
- 5) Yamamoto N, Kuwata K. Difference in redox behaviors between copper-binding octarepeat and nonoctarepeat sites in prion protein. *J. Biol. Inorg. Chem.* 2009;14:1209-1218. IF 3.287
- 6) Matsumoto T, Nakagawa T, Kuwata K. Cold destabilization and temperature jump of the murine prion protein mPrP(23-231). *BBA-Proteins Proteomics.* 2009;1794:669-673. IF 2.773
- 7) Ishikawa T, Ishikura T, Kuwata K. Theoretical study of the prion protein based on the fragment molecular orbital method. *J. Comput. Chem.* 2009;30:2594-2601. IF 4.050
- 8) Era S, Sogami M, Kuwata K. Comparative H-1 NMR studies on the structural looseness of the aged (A) and non-aged (N) bovine mercaptalbumin in the alkaline region. *Int. J. Biol. Macromol.* 2009;44: 37-42. IF 2.502
- 9) Hosokawa-Muto J, Kamatari YO, Nakamura HK, Kuwata K. A variety of anti-prion compounds discovered through an in silico screen based on PrP^C structure: a correlation between anti-prion activity and binding affinity. *Antimicrob. Agents Chemother.* 2009;53:765-771. IF 4.672
- 10) Ishikawa T, Kuwata K. Acceleration of monomer self-consistent charge process in fragment molecular orbital method. *CBI journal.* 2010;10:24-31.
- 11) Endo S, Matsunaga T, Kuwata K, Zhao H-T, El-Kabbani O, Kitade Y, Hara A. Chromene-3-carboxamide derivatives discovered from virtual screening as potent inhibitors of the tumor maker, AKR1B10. *Bioorg. Med. Chem.* 2010;18:2485-2490. IF 2.978
- 12) Yamamoto N, Kuwata K. Redox behaviors of the neurotoxic portion in human prion protein, HuPrP(106-126). *Chem. Phys. Lett.* 2010;498:184-187. IF 2.282
- 13) Ishikawa T, Yamamoto N, Kuwata K. Partial energy gradient based on the fragment molecular orbital method: application to geometry optimization. *Chem. Phys. Lett.* 2010;500:149-154. IF 2.282
- 14) Ishikawa T, Kuwata K. Interaction Analysis of the Native Structure of Prion Protein with Quantum Chemical Calculations. *J. Chem. Theory Comput.* 2010;6:538-547. IF 5.138
- 15) Fukuoka M, Minakuchi M, Kawaguchi A, Nagata K, Kamatari Y, Kuwata K. Structure-based discovery of anti-influenza virus A compounds among medicines. *BBA-General Subjects.* 2011;1820: 90-95. IF 4.663
- 16) Kimura T, Hosokawa-Muto J, O.Kamatari Y, Kuwata K. Synthesis of GN8 derivatives and evaluation of their antiprion activity in TSE-infected cells. *Bioorg Med Chem Lett.* 2011;21:1502-1507. IF 2.661
- 17) Kimura T, Hosokawa-Muto J, Asami K, Murai T, Kuwata K. Synthesis of 9-substituted 2,3,4,9-tetrahydro-1H-carbazole derivatives and evaluation of their anti-prion activity in TSE-infected cells. *Eur J Med Chem.* 2011;46:5675-5679. IF 3.193
- 18) Urushisaki T, Takemura T, Tazawa S, Fukuoka M, Hosokawa-Muto J, Araki Y, Kuwata K. Caffeoylquinic acids are major constituents with potent anti-influenza effects in brazilian green propolis water extract. *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine.* 2011;Vol.2011: Article ID 254914,7Pages. IF 2.964
- 19) Takemura T, Urushisaki T, Fukuoka M, Hosokawa-Muto J, Hata T, Okuda Y, Hori S, Tazawa S, Araki Y, Kuwata K. 3,4-Dicaffeoylquinic acid, a major constituent of brazilian propolis, increases TRAIL expression and extends the lifetimes of mice infected with the influenza A virus. *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine.* 2011;Vol. 2012:Article ID 946867,7pages. IF 2.964
- 20) Yamaguchi K, Matsumoto T, Kuwata K. Proper calibration of ultrasonic power enabled the quantitative analysis of the ultrasonication-induced amyloid formation process. *Prot Sci.* 2011;21:

- 21) Sanghera N, Correia BE, Correia JR, Ludwig C, Agarwal S, Nakamura HK, Kuwata K, Samain E, Gill AC, Bonev BB, Pinheiro TJ. Deciphering the molecular details for the binding of the prion protein to main ganglioside GM1 of neuronal membranes. Chem Biol. 2011;18:1422-1431.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：桑田一夫；科学研究費補助金特定領域研究；細胞内プリオンタンパク質の立体構造、ダイナミクス、及び立体構造変換反応の解明：平成 20-21 年度；6,900 千円(4,000 千円：2,900 千円)
- 2) 研究代表者：石川岳志；科学研究費補助金若手研究(スタートアップ)；FMO 法による体内揺らぎを考慮した相互作用解析法の構築とプリオンタンパクへの応用：平成 21 年度；480 千円
- 3) 研究代表者：水澤英洋，研究分担者：桑田一夫；厚生労働省難治性疾患克服研究事業；プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究：平成 18-22 年度；10,000 千円(2,000：2,000：2,000：2,500：1,500 千円)
- 4) 研究代表者：桑田一夫；科学研究費補助金新学術領域；プリオン天然変性部位の異常立体構造変換における役割：平成 22-23 年度；9,500 千円(4,700：4,800 千円)
- 5) 研究代表者：桑田一夫；独立行政法人科学技術振興機構；研究成果最適展開支援事業フィジビリティスタディ【FS】ステージ探索タイプ；Aβレセプターを標的とするアルツハイマー病治療薬シーズの開発：平成 22 年度；1,000 千円
- 6) 研究代表者：山本典史；科学研究費補助金若手研究(B)；プリオン病発症メカニズムの解明：プリオン蛋白質・銅イオン複合体の構造と性質：平成 20-22 年度；1,800 千円(600：600：600 千円)
- 7) 研究代表者：鎌足雄司；科学研究費補助金基盤研究(C)；圧力によるタンパク質解離・会合の制御技術の開発：平成 21-23 年度；3,700 千円(1,500：1,600：600 千円)
- 8) 研究代表者：武藤淳二；科学研究費補助金若手研究(B)；デュアルピンポイント蛍光標識プリオン蛋白質を用いた FRET による立体構造解析：平成 21-22 年度；3,300 千円(1,700：1,600 千円)
- 9) 研究代表者：桑田一夫；科学研究費補助金基盤研究(B)；カイネティック NMR によるプリオン体立体構造進化過程の解明；平成 23-25 年度；15,400 千円(5,400：5,000：5,000 千円)

2) 受託研究

- 1) 萩原正敏，桑田一夫；平成 19 年度科学技術試験研究委託事業「難治感染症に対する新規治療薬開発のためのイメージング研究」平成 19-21 年度；19,500 千円(6,500：6,500：6,500 千円)
- 2) 桑田一夫；論理的創薬による蛋白質立体構造制御法の確立とプリオン病治療薬開発への応用：平成 18-22 年度；361,000 千円(80,000：80,000：67,000：67,000：67,000 千円)；独立行政法人医薬基盤研究所
- 3) 北尾彰朗，桑田一夫；平成 19 年度戦略的創造研究推進事業(CREST タイプ)研究領域「マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション」研究課題「バイオ分子間相互作用形態の階層的モデリング」；平成 19-24 年度；43,421 千円(3,000：9,421：10,000：10,000：8,000：3,000 千円)；独立行政法人科学技術振興機構
- 4) 喜田 宏，桑田一夫；人獣共通感染症の診断・予防・治療法の開発研究：平成 22-23 年度；18,000 千円；北海道大学人獣共通リサーチセンター

3) 共同研究

- 1) 桑田一夫；プロポリスのインフルエンザ・ウイルスに対する抑制効果の研究；平成 20-22 年度；2,862 千円(1,881：981 千円)；アピ (株)

5. 発明・特許出願状況

- 1) 桑田一夫；プリオンタンパク質構造変換抑制剤及びその利用；平成 22 年度(出願番号 PCT/JP2010/58129)
- 2) 桑田一夫；プリオンタンパク質構造変換抑制剤及びその利用；平成 23 年度(特願 2011-513378)

6. 学会活動

1) 学会役員

桑田一夫：

- 1) 日本生理学会評議員(~現在)

- 2) 日本磁気共鳴医学会評議員(～現在)
- 3) 臨床ストレス応答学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

桑田一夫:

- 1) 第147回日本獣医学会学術集会(平成21年4月, 宇都宮, 低分子化合物による難治感染症克服ーケミカルバイオロジーから創薬ー 異常プリオンを抑える物質の発見とそのメカニズムの解明, 座長, 演者)
- 2) 第2回長崎プリオン研究会(平成21年4月, 長崎, 低分子化合物によるタンパク質のコンフォーメーション, 演者)
- 3) 第120回日本薬理学会市民公開講座(平成21年7月, 東京, プリオンの立体構造を制御する低分子化合物の開発, 演者)
- 4) International Symposium on Multi-Scale Dynamic of Protein Complex Formation and Function(2009.07, The University of Tokyo, Regulation of protein conformation by rationally designed drugs. Organizer)
- 5) Prion2009(2009.09, Thessaloniki-Chalkidiki Greece, Rational design of anti-prion compounds targeting the PrP characteristic sites. Invited Speaker)
- 6) 日本生物物理学会第47回年会(平成21年10月ー11月, アスティとくしま, プリオン病ー感染メカニズムとダイナミクスに基づく創薬, 演者)
- 7) 平成21年度富山大学大学院生命融合科学教育部シンポジウム「富山発医療・創薬イノベーションに向けて」(平成22年3月, 富山, 特別講演「構造生物学的アプローチによる抗プリオン化合物の開発」演者)
- 8) 第84回日本感染症学会総会(平成22年4月, 京都, 教育講演「論理的創薬による人獣共通感染症の治療薬開発」演者)
- 9) 第14回創薬情報研究会(平成22年5月, 大阪, 特別講演「プリオン立体構造変換機構の解明と医薬シヤペロンの論理的開発」演者)
- 10) Asia-Oceania Symposium on Prion Diseases(AOSPD2010) (2010.07, Hokkaido, Biochemistry& Biophysics ; Chairmen)
- 11) 第56回日本薬学会東海支部大会(平成22年7月, 岐阜, 特別講演「プリオン病と理論的創薬」演者)
- 12) 生物物理第48回年会(平成22年9月, 仙台, 招待講演 素数と生物その2「21世紀の新パラダイム」数論, ダイナミクス, プリオン 演者)
- 13) 大阪大学蛋白質研究所セミナー(平成23年7月, 大阪, 招待講演「立体構造進化と論理的創薬を担う岐阜大 NMR 拠点」演者)
- 14) Asian Pacific Prion Symposium 2011(2010.07, Nagano, Invited lecture: Regulating the Prion Conformation by Logical Drug Design; Performer)
- 15) 味の素株式会社イノベーション研究所(平成23年9月, 東京, 招待講演「量子ロボット医薬品の設計」演者)
- 16) Israel-Japan Joint Symposium on Biophysics “Protein Dynamics: From single molecules to whole cell”(2011.09, Hyogo, Invited lecture: Prion Dynamics and Logical Drug Design; Performer)
- 17) 第4回タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会(平成23年11月, 大阪, 招待講演「プリオン蛋白質のコンホメーションスイッチ」演者)
- 18) 知的財産高等裁判所(平成23年12月, 東京, 招待講演「専門委員としての事件関与の在り方」演者)
- 19) 大学院連合創薬医療情報研究科公開講座(平成23年12月, 岐阜, 特別講演「プリオンは、何故、自己複製するか？」演者)

鎌足雄司：

- 1) 生物物理第 48 回年会(平成 22 年 9 月, 仙台, 招待講演「プリオンタンパク質への結合様式による抗プリオン化合物の分類と作用機構の解明」演者)
- 2) 第 49 回 NMR 討論会(平成 22 年 11 月, 東京, 招待講演「プリオンタンパク質への結合様式による抗プリオン化合物の分類と作用機構の解明」演者)
- 3) 第 11 回日本蛋白質科学会年会(平成 23 年 6 月, 大阪, 招待講演「SPR スクリーニングによる抗プリオン化合物探索のヒット率向上」演者)
- 4) The International Symposium on Nuclear Magnetic Resonance 2011 & 第 50 回 NMR 討論会(平成 23 年 11 月, 横浜, 招待講演「Low-lying excited state of prion protein directly linked to pathogenic conversion」演者)

石川岳志：

- 1) 生物物理第 48 回年会(平成 22 年 9 月, 仙台, 招待講演「Fragment molecular orbital method and number theory」演者)
- 2) 大阪大学蛋白研究所セミナー(平成 22 年 9 月, 大阪, 招待講演「フラグメント分子軌道法による正常化プリオンタンパク質の内部相互作用の解析」演者)

武藤淳二：

- 1) 第 149 回日本獣医学会学術集会(平成 22 年 3 月, 東京, 「蛍光共鳴エネルギー移動 (FRET) による構造解析に向けたデュアルピンポイント蛍光標識プリオン蛋白質の合成」演者)

福岡万佑子：

- 1) 第 58 回日本ウイルス学会学術集会(平成 22 年 11 月, 徳島, 「既存薬剤のインフルエンザ治療薬効果」パネリスト)
- 2) 第 59 回日本ウイルス学会学術集会(平成 23 年 9 月, 北海道, 「DISCOVERY OF ANTI-INFLUENZA VIRUS COMPOUNDS FROM MEDICINES ON THE MARKET」パネリスト)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

桑田一夫：

- 1) 東京高等裁判所, 東京地方裁判所及び大阪地方裁判所所属専門委員(~現在)

10. 報告書

- 1) 桑田一夫：プリオン立体構造変換初期過程の解析：平成 20 年度厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服事業：総括・分担報告書(研究代表者：水澤英洋)50-58 (平成 21 年 3 月)
- 2) 桑田一夫：正常および異常プリオン蛋白質の構造：平成 21 年度厚生労働省科学研究費補助金難治性疾患克服事業：総括・分担報告書(研究代表者：水澤英洋)29-36 (平成 22 年 7 月)
- 3) 桑田一夫：プリオン立体構造変換初期過程の解析：厚生労働省科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業) プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班 分担研究報告書：24(平成 23 年 1 月)
- 4) 桑田一夫：人獣共通感染症の診断・予防・治療法の開発研究：北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 特定共同研究 平成 22 年度経過報告書(平成 23 年 3 月)
- 5) 桑田一夫：論理的創薬による蛋白質立体構造制御法の確立とプリオン病治療薬開発への応用：独立行政法人医薬基盤研究所保健医療分野における基礎研究推進事業 平成 22 年度総括・分担報告書(平成 23 年 4 月)
- 6) 桑田一夫：Aβレセプターを標的とするアルツハイマー病治療薬シーズの開発：独立行政法人科学技術振興機構 研究成果最適展開支援事業 フィージビリティスタディ【FS】ステージ探索タイプ 完了報告書(平成 23 年 4 月)
- 7) 桑田一夫：バイオ分子間相互作用形態の階層的モデリング：独立行政法人 科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業(チーム型研究・CREST)「マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション」平成 22 年度実績報告書(平成 23 年 4 月)

- 8) 桑田一夫：論理的創薬技術開発及びプリオン病への応用研究：独立行政法人医薬基盤研究所 委託業務 実績報告書(平成 23 年 4 月)
- 9) 桑田一夫：プリオン天然変性部位の異常立体構造変換における役割：科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)「天然変性タンパク質の分子認識と機能発現」平成 22 年度実績報告書(平成 23 年 4 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

論理的創薬法は、本センターが世界で初めて提唱し、その構築と応用を推進しているものである。本センターでは特に、人獣共通感染症であるプリオン病やインフルエンザ・ウイルス感染症、及びがんなどの難治性疾患に対する治療薬候補化合物の開発を行っている。本センターの研究業績は、ほぼ全てこれに関わるものであり、岐阜大学における独自の成果とあってよい。本センターは、「構造生物」、「創薬計算」、「有機合成」、「生物試験」の4分野からなるが、医学、理学、工学、農学などの異分野の研究者が一体となって論理的創薬法の技術開発に当たるといふ画期的な創薬研究のモデル機関であり、世界的に見ても非常に大きな意義がある。

この過程で、タンパク質を安定化させる「化学シャペロン」のデザイン法開発、20万行のCプログラムからなるフラグメント分子軌道法の開発、約200種類の新規抗プリオン物質の合成などの創薬に関わる技術革新が進んでいる。これらは、創薬の世界に根本的な影響を及ぼすと考えられる。

また研究過程を通じ、プリオン専用P3施設の構築とその運用、医学研究科初の800 MHz NMR(総額約4億円)の導入とその運用、高分解能X線回折装置(総額約1億円)の導入とその運用、クライオ電子顕微鏡(200 kV, CCD 搭載、空間分解能 1.5 Å 総額約1億円)設備の導入とその運用、など構造生物学に関わる世界でトップクラスの研究環境を岐阜大学大学院医学研究科に整備する事が出来た。これらは、現在、岐阜大学生命科学総合研究支援センター機器分析分野医学施設として運用・管理されており、全て医学部キャンパスに設置されている。現在、医学的に治療が困難な疾患の多くは、分子レベルでの構造異常が問題となっており、これを解決するには、新薬の開発が必須である。本センターにおいて導入されたこれらの最先端技術は、将来、医学研究の強力な武器になる、と考えられる。

現状の問題点及びその対応策

NMR, 電顕, X線回折装置, クラスター計算機(300コア)は汎用機器であり、医学部キャンパスに設置してあるが、医学研究科におけるユーザーが未だ少ない。医学研究における構造生物学を広める必要がある。対応策としては、例えば医学部内で、定期的に説明会やシンポジウム等を開催し、宣伝効果を高め、医学研究科におけるユーザー数を増やすなどする必要があるだろう。

今後の展望

岐阜大学において考案され、推進された技術を育てることが、岐阜大学の独自性を高める上で極めて重要である。今後、論理的創薬法を、理論的・技術的にさらに完成させると同時に、重要な内科疾患に対する創薬研究を実際に推進する。また、これまで研究開発を行ってきた抗プリオン化合物、抗インフルエンザ・ウイルス化合物、抗がん化合物の実用化を一層推進する計画である。

(17) 大学院連合創薬医療情報研究科（医療情報学専攻）

1. 研究の概要

本研究科では、近年、急速に新興しつつある疾病への対応や予防医学などの国家的課題、個別化医療といった広範囲な研究領域を背景とする社会ニーズに対し、その一つの中心的課題である創薬をテーマとして、創薬を取り巻く、生体分子化学、生体制御、生体応答、生物学的創薬、薬効情報、患者情報までの全ての情報を広義の医療情報と捉え、これを数理的・情報科学的手法を駆使して研究を実施する。すなわち、「創薬」の分野をメタボリックパスウェイに代表される生体データや代謝情報、患者情報などの広義の「医療情報」の解析をとおして、解明、創造（開発）、検証、応用に展開しようとする研究体系である。以下、本研究科医療情報学専攻のうち、専任教員、医学部所属教員について記す。

①先天性ケトン体代謝異常症の診断、分子病態解明

ケトン体利用障害をきたすミトコンドリアアセトアセチル-CoA チオラーゼ (T2) 欠損症、サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ(SCOT)欠損症について、cDNA、遺伝子クローニング、蛋白遺伝子解析、蛋白 3 次構造、臨床的研究を含めておこなってきて、これら疾患の世界での酵素遺伝子診断センターでもある。世界的教科書 *Metabolic and Molecular Bases of Inherited Disease* の第 8 版に先天性ケトン体代謝異常症の項目があらたにできて執筆。スプライシング異常やアミノ酸置換による変異蛋白の性質、構造変化に興味をもって解析している。

②先天性免疫不全症候群の診断、分子病態解明

Ataxia telangiectasia の患者遺伝子解析、その病因遺伝子 ATM の発現に関する研究（筆頭著者で Blood や Oncogene）、また選択的 IgG2 欠損症や IgA 欠損症の病態解析。選択 IgG2 欠損症では世界ではじめて病因となる変異を同定している。

③アレルギー疾患の分子病態解明

小児アレルギーの発症に関与する遺伝子多型の解析、イヌ、ネコ飼育とアレルギーの関連、アレルギー発症の予知予防のための出生コホート研究などを行っている。

④神経細胞障害の発現機序解明、並びにその防御に関する研究

1) 遅発性神経細胞死：一過性前脳虚血後海馬 CA1 細胞に特異的に発現する遅発性神経細胞死は実験的脳虚血モデルとして汎用されているがその発現機序は解明されていない。我々はその機序を明らかにするとともに、創薬の観点から、その発現予防・治療を試みている。

2) 網膜神経細胞死：虚血再灌流にともなう網膜細胞死モデルの開発を手がけ、最近では化学物質を用いた視細胞選択的細胞死モデル創製も開発した。これらのモデルを用い、網膜神経細胞死のメカニズムを明らかにするとともに、予防・治療薬の開発に取り組んでいる。

⑤ES 細胞による神経障害再生に関する研究

再生医療の基礎的研究の一環として、網膜神経細胞障害モデルにマウス由来 ES 細胞やヒト由来 ES 細胞を移植し、その生着率の亢進、ガン化の抑制、神経への分化の促進をめざした研究を行っている。今後、ヒト由来人工多能性幹細胞 (iPS 細胞) での検討も行う。

⑥好中球の活性化ならびにアポトーシス発現機序の解明

好中球は活性酸素種を産生し、生体防御能を有するとともに組織障害性を併せ持つ。好中球の活性化機構・アポトーシス形成能を解明し病態との関連、創薬への応用に取り組んでいる。

⑦医療系大学生・大学院生の新たな教育法の研究・開発・実践

岐阜大学医学部が先駆的に取り組んできた、問題解決型学習である PBL テュートリアル長の長所を生かし、欠点を補う新たな教育法の開発を手がけている。既にインターネットを活用した双方向型学習法「楽位置楽 The Tutorial」を開発・実践してきたが、この大学院教育でも実践していく。

⑧論理的創薬手法を用いた抗プリオン化合物の開発

1. アミロイド線維形成に対する超音波の影響を定量的に調べた。
2. ラットとイヌを用いて、抗プリオン化合物 GN8 の毒性を調べた。
3. GN8 の類縁体を作成し、抗プリオン作用に関して、その化学構造を最適化した。
4. GJP14 の類縁体を作成し、抗プリオン作用に関して、その化学構造を最適化した。

⑨論理的創薬手法を用いた抗インフルエンザ・ウイルス化合物の開発

1. カフェオイルキナ酸に抗インフルエンザ作用があることを、見出した。
2. カフェオイルキナ酸が、Trail の発現を高めることを見出した。
3. 抗インフルエンザ作用を有する薬を、既存薬剤の中から見出した。

2. 名簿

教授：	丹羽雅之	Masayuki Niwa
教授：	深尾敏幸	Toshiyuki Fukao
教授：	桑田一夫	Kazuo Kuwata

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 深尾敏幸, 笹井英雄, 近藤直実. 低身長精査の際の肝機能障害を指摘された1歳4ヶ月女児: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集委員. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 7-10.
- 2) 浦澤林太郎, 久保徹夫, 深尾敏幸. 急性胃腸炎を契機に急激な意識障害を起こした9ヶ月男児: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸編集委員. 日本先天代謝異常学会編. 症例から学ぶ先天代謝異常症, 東京: 診断と治療社; 2009年: 100-102.
- 3) 加藤智美, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09冬. 第31回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-167.
- 4) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鹿島晴雄編. 新しい医学教育の流れ'09春. 第32回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-171.
- 5) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09夏. 第33回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2009年: 1-239.
- 6) 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'09秋. 第34回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-233.
- 7) 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 藤代健太郎編. 新しい医学教育の流れ'10春. 第36回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-104.
- 8) 若林英樹, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'10夏. 第37回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-359.
- 9) 阿部恵子, 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之, 植村和正編. 新しい医学教育の流れ'10秋. 第38回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-180.
- 10) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'10冬. 第39回医学教育セミナーとワークショップの記録, 名古屋: 三恵社; 2010年: 1-178.
- 11) 丹羽雅之. 教務事務研修: 医学教育学会編. 医学教育白書 2010年版 医学教育別冊, 東京: 篠原出版; 2010年: 250-256.
- 12) 深尾敏幸. ケトン体: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 93-95.
- 13) 深尾敏幸. ケトース: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 14-17.
- 14) 深尾敏幸. ケトン体利用異常症: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 218-221.
- 15) 深尾敏幸. β -ケトチオラーゼ欠損症: 五十嵐隆編. 高柳正樹専門編. 小児科臨床ピクシス 23 見逃せない先天代謝異常, 東京: 中山書店; 2010年: 260-262.
- 16) 藤崎和彦, 鈴木康之, 丹羽雅之, 井内康輝編. 新しい医学教育の流れ'11冬. 第39回医学教育セミナーとワークショップの記録, 三恵社; 2011年.
- 17) 加藤智美, 鈴木康之, 藤崎和彦, 丹羽雅之編. 新しい医学教育の流れ'11春. 第40回医学教育セミナーとワークショップの記録, 三恵社; 2011年.
- 18) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 鈴木康之編. 新しい医学教育の流れ'11夏. 第41回医学教育セミナーとワークショップの記録, 三恵社; 2011年.
- 19) 丹羽雅之, 鈴木康之, 高橋優三. インターネットチュートリアル/楽位置楽 The Tutorial の開発と実践; 日本薬学会編. 問題解決型学習ガイドブック-薬学教育に適した PBL チュートリアルの進め方-7・4, 2011年: 81-88.
- 20) 植松俊彦, 滝口祥令, 丹羽雅之編著. 新体系看護学全書 疾病の成り立ちと回復の促進 3 薬理学, 東京: メヂカルフレンド社; 2011年.
- 21) 石川岳志, 石倉孝一, 桑田一夫. フラグメント分子軌道法プログラム「PAICS」と統合創薬プログラム「NAGARA」, Molecular Science, 2011年; 5巻: 15.
- 22) 桑田一夫. 量子ロボット: 生物物理, 2011年; 51巻: 205.
- 23) 深尾敏幸, 近藤直実. リジン尿性蛋白不耐症: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編集委員. 先天代謝異常症 Diagnosis at a glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 70-71.
- 24) 深尾敏幸, 近藤直実. イソ吉草酸血症: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編集委員. 先天代謝異常症 Diagnosis at a glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 105-106.
- 25) 深尾敏幸, 堀 友博. CPT2欠損症: 遠藤文夫, 山口清次, 高柳正樹, 深尾敏幸, 酒井規夫編集委員. 先天代謝異常症 Diagnosis at a glance, 東京: 診断と治療社; 2011年: 136-137.

著書（欧文）

- 1) Kondo N, Matsui E, Kaneko H, Fukao T, Teramoto T, Kato Z, Ohnishi H, Nishimura A. Genetics of

pediatric asthma. In: Pawankar R, Holgate S.T, Rosenwasser L.J, eds. Allergy Frontiers: Epigenetics, Allergens and Risk Factors. pt1. Tokyo: Springer; 2009:189-203.

総説 (和文)

- 1) 森田秀行, 金子英雄, 大西秀典, 加藤善一郎, 松井永子, 深尾敏幸, 中埜 拓, 近藤直実. 食物アレルギー寛容誘導に向けた抗原エピトープの解析と治療戦略, *Visual Dermatology* 2009年; 8巻: 966-969.
- 2) 松井永子, 川本典生, 金子英雄, 深尾敏幸, 近藤直実. 小児喘息の関連遺伝子, *アレルギーの臨床* 2009年; 29巻: 221-226.
- 3) 深尾敏幸. 質疑応答 ケトン体とケトアシドーシス, *日本医事新報* 2009年; 4441号: 144-146.
- 4) 深尾敏幸. アシル-CoA 脱水素酵素欠損症, *小児内科* 2009年; 41巻 増刊号: 390-394.
- 5) 深尾敏幸, 近藤直実. 出生コホート研究による発症要因分析の可能性, *アレルギーの臨床* 2009年; 29巻: 605-611.
- 6) 川本美奈子, 大西秀典, 川本典生, 森田秀行, 松井永子, 金子英雄, 深尾敏幸, 寺本貴英, 笠原貴美子, 白木誠, 岩砂眞一, 近藤直実. 母乳栄養とアレルギー疾患発症との関連について, *日本小児アレルギー学会誌* 2009年; 23巻: 49-55.
- 7) 大西秀典, 近藤直実. 自然免疫の分子機構に基づいた自己炎症症候群の診断へのアプローチ, *アレルギー* 2009年; 72巻: 1319-1326.
- 8) 大西秀典, 加藤善一郎, 寺本貴英, 船戸道徳, 金子英雄, 深尾敏幸, 近藤直実. 自然免疫の分子構造に基づいた自己炎症症候群の診断へのアプローチ, *アレルギー* 2009年; 58巻: 1502-1512.
- 9) 深尾敏幸. 診断へのアプローチ 2. First line 検査 2) アシドーシス・ケトosis, *小児内科* 2010年; 42巻: 1093-1096.
- 10) 川本美奈子, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 近藤直実. 食物アレルギーの感作と発症, *臨床免疫・アレルギー科* 2010年; 54巻: 558-563.
- 11) 福富 悌, 寺本貴英, 小関道夫, 安藤恵美子, 久保田一生, 森本将敬, 深尾敏幸, 近藤直実. 小児インフルエンザ治療における麻黄湯の有用性についての検討, *日本小児東洋医学会誌* 2010年; 24巻: 11-15.
- 12) 深尾敏幸. 診療の秘訣 小児の診療における尿ケトン, *Modern Physician* 2011年; 31巻: 1126.

総説 (欧文)

なし

原著 (和文)

- 1) 升野光雄, 黒木良和, 松浦公美, 福嶋義光, 山内泰子, 河村理恵, 高田史男, 丹羽雅之, 鈴木康之. インターネットを利用した大学連携・問題基盤型遺伝カウンセラー教育の試み, *日本遺伝カウンセリング学会誌* 2009年; 30巻: 9-17.
- 2) 丹羽雅之, 藤崎和彦, 加藤智美, 阿部恵子, 若林秀樹, 高橋優三, 鈴木康之. 医学教育セミナーとワークショップ: 30 回開催を振り返って, *医学教育* 2009年; 40巻: 367-374.
- 3) 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. Emotional Intelligence(EI)と Physician Empathy Scale (PES)(日本語訳), *医学教育* 2009年; 40巻: 439-440.
- 4) 平林詩子, 嶋井真奈美, 荒川典子, 垣ヶ原昭美, 岩越浩子, 福富 悌, 久保田一生, 笹井英雄, 安藤恵美子, 深尾敏幸. 病児保育園で行った 5 年間の地域保健活動, *保健と保育* 2009年; 15巻: 40-42.
- 5) 川上ちひろ, 阿部恵子, 藤崎和彦, 丹羽雅之, 鈴木康之. 保育園児・妊婦との継続的交流体験の教育効果: 医療系学生の気づきと学び, *日本小児科学会雑誌* 2011年; 115巻: 132-137.
- 6) 久保田一生, 深尾敏幸, 堀 友博, 小林弘典, 船戸道徳, 長谷川有紀, 山口清次, 近藤直実. カルニチンパルミトイルトランスフェラーゼ 2 欠損症のろ紙血血清のアシルカルニチンプロファイルの経時的変化, *日本小児科学会雑誌* 2011年; 115巻: 956-960.

原著 (欧文)

- 1) Aoki H, Hara A, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. In vitro and in vivo differentiation of human embryonic stem cells into retina-like organs and comparison with that from mouse pluripotent epiblast stem cells. *Dev Dyn.* 2009;583:2464-2468. IF 2.864
- 2) Niwa M, Hara A, Taguchi A, Aoki H, Kozawa O, Mori H. Spatiotemporal expression of Hsp20 and its phosphorylation in hippocampal CA1 pyramidal neurons following transient forebrain ischemia. *Neurol Res.* 2009;31:721-727. IF 1.621
- 3) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Niwa M, Tokuda H, Akamatsu S, Doi T, Kato H, Yoshimura S, Ogura S, Iwama T, Kozawa O. α B-crystallin extracellularly suppresses ADP-induced granule secretion from human platelets. *FEBS Lett.* 2009;583:2464-2468. IF 3.601
- 4) Ozeki M, Kato Z, Sasai H, Kubota K, Funato M, Orii K, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Congenital inner ear malformations without sensorineural hearing loss in children. *Int J Pediatr Otorhinolaryngol.* 2009;73:1484-1487.
- 5) Funato M, Fukao T, Sasai H, Hori T, Terazawa D, Ozeki M, Orii K, Teramoto T, Kaneko H, Kondo N. Translocation (1;10)(p34;p15) in infant acute myeloid leukemia with extramedullary infiltration in multiple sites. *Cancer Genet Cytogenet.* 2009;192:86-89. IF 1.551
- 6) Funato M, Kato H, Sasai H, Kubota K, Ozeki M, Kato Z, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Diffuse large

- B-cell lymphoma presenting with osteolytic lesions in the bilateral Femur. *Eur J Haematol.* 2009;83:502. IF 2.785
- 7) Teramoto T, Fukao T, Hirayama K, Asano T, Aoki Y, Kondo N. Escherichia coli O-157-induced hemolytic uremic syndrome: Usefulness of SCWP score for the prediction of neurological complication. *Pediatr Int.* 2009;51:107-109. IF 0.755
 - 8) Purevsuren J, Kobayashi H, Hasegawa Y, Mushimoto Y, Li H, Fukuda S, Shigematsu Y, Fukao T, Yamaguchi S. A novel molecular aspect of Japanese patients with medium-chain acyl-CoA dehydrogenase deficiency (MCADD): c.449-452delCTGA is a common mutation in Japanese patients with MCADD. *Mol Genet Metab.* 2009;96:77-79. IF 3.539
 - 9) Morimoto M, Matsui E, Kawamoto N, Sakurai S, Kaneko H, Fukao T, Iwasa S, Shiraki M, Kasahara K, Kondo N. Age-Related changes of Transforming Growth Factor β 1 in Japanese children. *Allergol Int.* 2009;58:97-102.
 - 10) Suzuki H, Kaneko H, Fukao T, Jin R, Kawamoto N, Asano T, Matsui E, Kasahara K, Kondo N. Various Expression patterns of α 1 and α 2 genes in IgA Deficiency. *Allergol Int.* 2009;58:111-117.
 - 11) Fukao T, Kondo M, Yamamoto T, Orii KE, Kondo N. Comparison of mitochondrial A3243G mutation load in easily accessible samples in a family with maternally inherited diabetes and deafness. *Mol Med Rep.* 2009;2:69-72. IF 0.307
 - 12) Macdonald MJ, Longacre MJ, Langberg EC, Tibell A, Kendrick MA, Fukao T, Ostenson CG. Decreased levels of metabolic enzymes in pancreatic islets of patients with type 2 diabetes. *Diabetologia.* 2009;52:1087-1091. IF 6.973
 - 13) Otomo T, Muramatsu T, Yorifuji T, Okuyama T, Nakabayashi H, Fukao T, Ohura T, Yoshino M, Tanaka A, Okamoto N, Inui K, Ozono K, Sakai N. Mucopolipidosis II and III alpha/beta: mutation analysis of 40 Japanese patients showed genotype-phenotype correlation. *J Hum Genet.* 2009;54:145-151. IF 2.496
 - 14) Purevsuren J, Fukao T, Hasegawa Y, Fukuda S, Kobayashi H, Yamaguchi S. Clinical and molecular investigations of 5 Japanese patients with mitochondrial trifunctional protein deficiency. *Mol Genet Metab.* 2009;98:372-377. IF 3.539
 - 15) Enomoto Y, Adachi S, Matsushima-Nishiwaki R, Doi T, Niwa M, Akamatsu S, Tokuda H, Ogura S, Yoshimura S, Iwama T, Kozawa O. Thromboxane A2 promotes soluble CD40 ligand release from human platelets. *Atherosclerosis.* 2010;209:415-421. IF 4.086
 - 16) Hara A, Taguchi A, Aoki H, Hatano Y, Niwa M, Yamada Y, Kunisada T. Folate antagonist, methotrexate induces neuronal differentiation of human embryonic stem cells transplanted into nude mouse retina. *Neurosci Lett.* 2010;477:138-143. IF 2.065
 - 17) Fukao T, Zhang G, Matsuo N, Kondo N. CpG islands around exon 1 in the succinyl-CoA:3-ketoacid CoA transferase (SCOT) gene are hypomethylated even in human and mouse hepatic tissues where SCOT gene expression is completely suppressed. *Mol Med Rep.* 2010;3:355-359. IF 0.307
 - 18) Fukao T, Nguyen HT, Nguyen NT, Vu DC, Can NT, Pham AT, Nguyen KN, Kobayashi H, Hasegawa Y, Bui TP, Niezen-Koning KE, Wanders RJ, de Koning T, Nguyen LT, Yamaguchi S, Kondo N. A common mutation, R208X, identified in Vietnamese patients with mitochondrial acetoacetyl-CoA thiolase (T2) deficiency. *Mol Genet Metab.* 2010;100:37-41. IF 3.539
 - 19) Ozeki M, Kunishima S, Kasahara K, Funato M, Teramoto T, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. A family having type 2B von Willebrand disease with an R1306W mutation: Severe thrombocytopenia leads to the normalization of high molecular weight multimers. *Thromb Res.* 2010;125:e17-e22. IF 2.372
 - 20) Ozeki M, Funato M, Teramoto T, Ohe N, Asano T, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Reversible cerebrospinal fluid edema and porencephalic cyst, a rare complication of ventricular catheter: Case report and literature review. *J Clin Neurosci.* 2010;17:658-661. IF 1.165
 - 21) Hori T, Fukao T, Kobayashi H, Teramoto T, Takayanagi M, Hasegawa Y, Yasuno T, Yamaguchi S, Kondo N. Carnitine palmitoyltransferase 2 deficiency: The time-course of blood and urinary acylcarnitine levels during initial L-carnitine supplementation. *Tohoku J Exp Med.* 2010;221:191-195. IF 1.145
 - 22) Adachi S, Sakaguchi H, Kuwahara T, Uchida Y, Fukao T, Kondo N. High regression rate of coronary aneurysms developed in patients with immune globulin-resistant Kawasaki disease treated with steroid pulse therapy. *Tohoku J Exp Med.* 2010;220:285-290. IF 1.145
 - 23) Fukao T, Horikawa R, Naiki Y, Tanaka T, Takayanagi M, Yamaguchi S, Kondo N. A novel mutation (c.951C>T) in an exonic splicing enhancer results in exon 10 skipping in the human mitochondrial acetoacetyl-CoA thiolase gene. *Mol Genet Metab.* 2010;100:339-344. IF 3.539
 - 24) Aoki Y, Fukao T, Zhang G, Ohnishi H, Kondo N. Mutation in the Q(28)SDD(31)SD site, but not in the two SQ sites of the survival of motor neuron protein, affects its foci formation. *Int J Mol Med.* 2010;26:667-671. IF 1.814
 - 25) Matsui E, Shinoda S, Fukutomi O, Kaneko H, Fukao T, Kondo N. Relationship between the benefits of suplatast tosilate, a Th2 cytokine inhibitor, and gene polymorphisms in children with bronchial asthma. *Exp Therap Med.* 2010;1:977-982.
 - 26) Thummler S, Dupont D, Acquaviva C, Fukao T, de Ricaud D. Different clinical presentation in siblings with mitochondrial acetoacetyl-CoA thiolase deficiency and identification of two novel mutations. *Tohoku J Exp Med.* 2010;220:27-31. IF 1.145

- 27) Dai J, Kim OH, Cho TJ, Schmidt-Rimpler M, Tonoki H, Takikawa K, Haga N, Miyoshi K, Kitoh H, Yoo WJ, Choi IH, Song HR, Jin DK, Kim HT, Kamasaki H, Bianchi P, Grigelioniene G, Nampoothiri S, Minagawa M, Miyagawa SI, Fukao T, Marcelis C, Jansweijer MC, Hennekam RC, Bedeschi F, Mustonen A, Jiang Q, Ohashi H, Furuichi T, Unger S, Zabel B, Lausch E, Superti-Furga A, Nishimura G, Ikegawa S. Novel and recurrent TRPV4 mutations and their association with distinct phenotypes within the TRPV4 dysplasia family. *J Med Genet.* 2010;47:704-709. IF 7.037
- 28) Hasan NM, Longacre MJ, Seed Ahmed M, Kendrick MA, Gu H, Ostenson CG, Fukao T, MacDonald MJ. Lower succinyl-CoA:3-ketoacid-CoA transferase (SCOT) and ATP citrate lyase in pancreatic islets of a rat model of type 2 diabetes: knockdown of SCOT inhibits insulin release in rat insulinoma cells. *Arch Biochem Biophys.* 2010;499:62-68. IF 3.022
- 29) Fukao T, Ishii T, Amano N, Kursula P, Takayanagi M, Murase K, Sakaguchi N, Kondo N, Hasegawa T. A neonatal-onset succinyl-CoA:3-ketoacid CoA transferase (SCOT)-deficient patient with T435N and c.658-666dupAACGTGATT p. N220_I222dup mutations in the OXCT1 gene. *J Inherit Metab Dis.* 2010;33:636. IF 3.808
- 30) Satoh K, Niwa M, Goda W, Binh NH, Nakashima M, Takamatsu M, Hara A. Galectin-3 expression in hippocampal CA1 injury following transient forebrain ischemia, and its inhibition by hypothermia. *Brain Res.* 2011;1382:266-74. IF 2.623
- 31) Satoh K, Niwa M, Binh NH, Nakashima M, Kobayashi K, Takamatsu M, Hara A. Increase of galectin-3 expression in microglia by hyperthermia in delayed neuronal death of hippocampal CA1 following transient forebrain ischemia. *Neurosci Lett.* 2011;504:199-203. IF 2.065
- 32) Fukuoka M, Minakuchi M, Kawaguchi A, Nagata K, Kamatari Y, Kuwata K. Structure-based discovery of anti-influenza virus A compounds among medicines. *BBA-General Subjects.* 2011;1820:90-95. IF 4.663
- 33) Kimura T, Hosokawa-Muto J, O.Kamatari Y, Kuwata K. Synthesis of GN8 derivatives and evaluation of their antiprion activity in TSE-infected cells. *Bioorganic & Medicinal Chemistry Letters.* 2011;21:1502-1507. IF 2.661
- 34) Kimura T, Hosokawa-Muto J, Asami K, Murai T, Kuwata K. Synthesis of 9-substituted 2,3,4,9-tetrahydro-1H-carbazole derivatives and evaluation of their anti-prion activity in TSE-infected cells. *Eur. J. Med. Chem.* 2011;46:5675-5679. IF 3.193
- 35) Urushisaki T, Takemura T, Tazawa S, Fukuoka M, Hosokawa-Muto J, Araki Y, Kuwata K. Caffeoylquinic Acids Are Major Constituents with Potent Anti-Influenza Effects in Brazilian Green Propolis Water Extract. *Hindawi Publishing Corporation Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine.* 2011;Vol.2011:Article ID 254914, 7Pages. IF 2.964
- 36) Takemura T, Urushisaki T, Fukuoka M, Hosokawa-Muto J, Hata T, Okuda Y, Hori S, Tazawa S, Araki Y, Kuwata K. 3,4-Dicaffeoylquinic Acid, a Major Constituent of Brazilian Propolis, Increases TRAIL Expression and Extends the Lifetimes of Mice Infected with the Influenza A Virus. *Evidence-Based Complementary and Alternative Medicine.* 2011;Vol. 2012:Article ID 946867, 7pages. IF 2.964
- 37) Yamaguchi K, Matsumoto T, Kuwata K. Proper calibration of ultrasonic power enabled the quantitative analysis of the ultrasonication-induced amyloid formation process. *Protein Science.* 2011;21:38-49. IF 2.741
- 38) Sanghera N, Correia BE, Correia JR, Ludwig C, Agarwal S, Nakamura HK, Kuwata K, Samain E, Gill AC, Bonev BB, Pinheiro TJ. Deciphering the Molecular Details for the Binding of the Prion Protein to Main Ganglioside GM1 of Neuronal Membranes. *Chem Biol.* 2011;18:1422-1431. IF 5.838
- 39) Ozeki M, Fukao T, Kondo N. Propranolol for intractable diffuse lymphangiomatosis. *N Engl J Med.* 2011;364:1380-1382. IF 52.363
- 40) Fukao T, Sass JO, Kursula P, Thimm E, Wendel U, Ficicioglu C, Monastiri K, Guffon N, Varic I, Zobot M-T, Kondo N. Clinical and molecular characterization of five patients with Succinyl-CoA:3-ketoacid CoA transferase (SCOT) deficiency *Biochimica Biophysica Acta Molecular Basis of Disease* 2011;1812:619-624. IF 5.211
- 41) Kaneko H, Fukao T, Kasahara K, Yamada T, Kondo N. Augmented cell death with Bloom syndrome helicase deficiency. *Mol Med Report.* 2011;4:607-609. IF 0.307
- 42) Macdonald MJ, Longacre MJ, Stoker SW, Kendrick MA, Thonpho A, Brown LJ, Hasan NM, Jitrapakdee S, Fukao T, Hanson MS, Fernandez LA, Odorico J. Differences between human and rodent pancreatic islets: low pyruvate carboxylase, ATP citrate lyase and pyruvate carboxylation; high glucose-stimulated acetoacetate in human pancreatic islets. *J Biol Chem.* 2011;286:18383-18396. IF 5.328
- 43) Funato M, Kaneko H, Ohkusu K, Sasai H, Kubota K, Ohnishi H, Kato Z, Fukao T, Kondo N. Refractory Chronic Pleurisy caused by *Helikobacter equorum*-like bacterium in a patient with X-linked agammaglobulinemia. *J Clin Microbiol.* 2011;49:3432-3435. IF 4.220
- 44) Funato M, Fukao T, Sasai H, Hori T, Terazawa D, Kubota K, Ozeki M, Orii K, Kaneko H, Kondo N. Successful treatment of pediatric immune thrombocytopenic purpura associated with ulcerative colitis. *Pediatr Int.* 2011;53:771-773. IF 0.755
- 45) Funato M, Kaneko H, Kubota K, Ozeki M, Kanda K, Orii K, Kato Z, Fukao T, Kondo N. Pediatric acute lymphoblastic leukemia mimicking Henoch-Schönlein purpura. *Pediatr Int.* 2011;53:766-768. IF 0.755

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：山口清次，研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：タンデムマス等の新技術を導入した新しい新生児マススクリーニング体制の確立に関する研究；平成 20-22 年度；500 千円(300：200 千円)
- 2) 研究代表者：深尾敏幸，研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症，サクシニル-CoA:3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症形態と患者数の把握，診断指針に関する研究；平成 21 年度；12,500 千円
- 3) 研究代表者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：コバルトクロライド誘発網膜神経障害モデルを用いた再生治療に関する基礎的研究；平成 22-24 年度；4,160 千円(1,690：1,560：910 千円)
- 4) 研究代表者：河野健一，研究分担者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(C)：6 年一貫プロフェシヨナリズム教育における e-ポートフォリオの開発と実践；平成 22-24 年度；3,640 千円(1,300：1,170：1,170 千円)
- 5) 研究代表者：深尾敏幸；科学研究費補助金基盤研究(C)：ケトン体代謝異常症の分子病態とその原因酵素遺伝子の発現調節機構の解明；平成 21-23 年度；4,550 千円(1,820：1,690：1,040 千円)
- 6) 研究代表者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症，HMG-CoA リアラーゼ欠損症， β -ケトチオラーゼ欠損症，SCOT 欠損症)の発症形態と患者数の把握，診断治療指針に関する研究；平成 22-23 年度；32,500 千円(19,500：13,000 千円)
- 7) 研究代表者：金子英雄；研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：Bloom 症候群とその類縁疾患の実態調査，早期診断法の確立に関する研究；平成 22 年度；9,200 千円(代表者一括計上)
- 8) 研究代表者：金子英雄；研究分担者：深尾敏幸；厚生労働省難治性疾患克服研究事業：遺伝子修復異常症(Bloom 症候群，Rothmund-Thomson 症候群，RAPADILINO 症候群，Baller-Gerold 症候群)の実態調査，早期診断法の確立に関する研究；平成 23 年度；500 千円
- 9) 研究代表者：桑田 一夫；科学研究費補助金新学術領域研究；プリオン天然変性部位の異常立体構造変換における役割；平成 22 -23 年度；9,500 千円(4,700：4,800 千円)
- 10) 研究代表者：桑田 一夫；科学研究費補助金基盤研究(B)；カイネティック NMR によるプリオン体立体構造進化過程の解明；平成 23-25 年度；15,400 千円(5,400：5,000：5,000 千円)
- 11) 研究代表者：阿部恵子；研究分担者：丹羽雅之；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：医学生の情動能力育成のための 6 年間継続的コミュニケーション教育プログラムの開発；平成 23-25 年度；4,000 千円(1,800：1,100：1,100 千円)
- 12) 研究代表者：鈴木康之；研究分担者：丹羽雅之；科学研究費補助金基盤研究(B)：医学・医療教育指導者の育成システム構築に関する研究；平成 23-25 年度；19,500 千円(7,500：6,500：5,500 千円)

2) 受託研究

- 1) 研究代表者：北尾彰朗，研究分担者：桑田一夫；平成 19 年度戦略的創造研究推進事業(CREST タイプ)研究領域「マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション」研究課題「バイオ分子間相互作用形態の階層的モデリング」平成 19-23 年度；40,421 千円(3,000：9,421：10,000：10,000：8,000 千円)
- 2) 研究代表者：喜田 宏，研究分担者：桑田 一夫；研究課題「人獣共通感染症の診断・予防・治療法の開発研究」平成 22-23 年度；22,000 千円(18,000：4,000 千円)

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) 桑田一夫：プリオンタンパク質構造変換抑制剤及びその利用(特許)；平成 23 年(特願 2011-513378)

6. 学会活動

1) 学会役員

丹羽雅之：

- 1) 日本薬理学会評議員(~現在)
- 2) 日本炎症・再生医学会評議員(~現在)

- 3) 日本医学教育学会評議員(～現在)
- 4) 日本臨床薬理学会評議員(～現在)
- 5) 日本医学教育学会 情報基盤委員会委員(～現在)
- 6) 日本医学教育学会 広報委員会委員(平成 22 年 1 月～現在)
- 7) 日本医学教育学会特別領域情報基盤開発委員会委員(平成 22 年 1 月～現在)
- 8) 日本 M&S 医学教育研究会幹事・評議員(平成 22 年 11 月～現在)
- 9) 医療系 e-learning 全国交流会 副会長(平成 23 年 10 月～現在)

深尾敏幸：

- 1) 日本先天代謝異常学会評議員(～現在)
- 2) 日本人類遺伝学会評議員(～現在)
- 3) 日本小児科学会東海地方会幹事(～現在)
- 4) 日本人類遺伝学会指導医(～現在)
- 5) 日本先天代謝異常学会教育担当幹事(～現在)
- 6) 日本先天代謝異常学会理事(～現在)
- 7) 日本小児科学会代議員(～現在)
- 8) 日本マスキリーニング学会評議員(～現在)
- 9) 日本アレルギー学会代議員(～現在)

桑田一夫：

- 1) 日本生理学会評議員(～現在)
- 2) 日本磁気共鳴医学会評議員(～現在)
- 3) 臨床ストレス応答学会評議員(～現在)

2) 学会開催

丹羽雅之：

- 1) 第 35 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 1 月, 岐阜)
- 2) 第 36 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 5 月, 東京)
- 3) 第 37 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 8 月, 岐阜)
- 4) 第 11 回国公立大学医学部・歯学部教務事務職員研修(平成 22 年 10 月, 岐阜)
- 5) 第 38 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 22 年 11 月, 名古屋)
- 6) 第 39 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 1 月, 広島)
- 7) 第 40 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 5 月, 岐阜)
- 8) 第 41 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 8 月, 岐阜)
- 9) 第 42 回医学教育セミナーとワークショップ(平成 23 年 11 月, 千葉)

3) 学術雑誌

深尾敏幸：

- 1) Case Reports in Medicine ; Editorial Board (平成 21 年度～現在)
- 2) Intractable & Rare Diseases Research ; Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

丹羽雅之：

- 1) 1st Asia-pacific joint PBL conference 2010, Joint conference of APC PBL and APA PHS(2010.10, Taipei, Taiwan, Symposium 5:E-PBL:Internet-PBL for postgraduate life science education;シンポジスト)
- 2) 第 12 回薬事フォーラム 52(平成 22 年 11 月, 京都, 細胞死と病気, その再生 演者)

深尾敏幸：

- 1) 11th International Congress of Inborn Errors of Metabolism(2009.08-2009.09, San Diego, USA, An exonic splicing mutation identified in a beta-ketothiolase-deficient patient, 演者)
- 2) 11th International Congress of Inborn Errors of Metabolism(2009.08-2009.09, San Diego, USA, The Time-course of blood and urinary acylcarnitine levels during initial L-carnitine

supplementation to a CPT2-deficient patient, 演者)

- 3) 第 51 回日本先天代謝異常学会総会(平成 21 年 11 月, 東京, 教育講演 2「フローチャート式 低カルシウム血症の鑑別診断 大菌恵一」座長)
- 4) 第 4 回大分メディエーター研究会(平成 22 年 6 月, 大分, 特別講演「小児アレルギー疾患の予知?」演者)
- 5) 第 21 回三重県小児内分泌代謝研究会(平成 22 年 7 月, 三重, 特別講演「ケトン体代謝とその異常症」演者)
- 6) 第 52 回日本先天代謝異常学会総会(平成 22 年 10 月, 大阪, 講演「脂肪酸代謝(1)」座長)

桑田一夫:

- 1) Asian Pacific Prion Symposium 2011(2010.07, Nagano, Invited lecture: Regulating the Prion Conformation by Logical Drug Design; Performer)
- 2) 大阪大学蛋白質研究所セミナー(平成 23 年 7 月, 大阪, 招待講演「立体構造進化と論理的創薬を担う岐阜大 NMR 拠点」演者)
- 3) 味の素株式会社イノベーション研究所(平成 23 年 9 月, 東京, 招待講演「量子ロボット医薬品の設計」演者)
- 4) Israel-Japan Joint Symposium on Biophysics “Protein Dynamics: From single molecules to whole cell”(2011.09, Hyogo, Invited lecture: Prion Dynamics and Logical Drug Design; Performer)
- 5) 第 4 回タンパク質の異常凝集とその防御・修復機構に関する研究会(平成 23 年 11 月, 大阪, 招待講演「プリオン蛋白質のコンホメーションスイッチ」演者)
- 6) 知的財産高等裁判所(平成 23 年 12 月, 東京, 招待講演「専門委員としての事件関与の在り方」演者)
- 7) 大学院連合創薬医療情報研究科公開講座(平成 23 年 12 月, 岐阜, 特別講演「プリオンは、何故、自己複製するか?」演者)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 深尾敏幸: 小児医学川野賞(平成 22 年)

9. 社会活動

丹羽雅之:

- 1) 共用試験 CBT モニター委員(～現在)

深尾敏幸:

- 1) 岐阜県小児保健協会常任理事(～現在)
- 2) 岐阜県予防接種健康被害調査専門医師集団専門医師(～現在)
- 3) 岐阜市保育所児童の健康を考える会委員(委員長)(～現在)
- 4) 岐阜県小児救急医療協議会委員(～現在)
- 5) 岐阜市保健医療審議会委員(～現在)

桑田一夫:

- 1) 東京高等裁判所, 東京地方裁判所及び大阪地方裁判所所属専門委員(平成 23 年～現在)

10. 報告書

- 1) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 岩砂眞一, 白木 誠: アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(海老澤班): 17(平成 21 年 2 月)
- 2) 近藤直実, 大西秀典, 川本美奈子, 森田秀行, 松井永子, 深尾敏幸, 金子英雄: アトピー性皮膚炎発症と母乳の関連, 特に母乳成分の解析に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 研究報告会抄録集(河野班): 33(平成 21 年 2 月)
- 3) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠: アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究: 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー性疾患の発症・進展・重症化の予知に関する研究 総括・分担研究報告書(海老澤班): 8-11(平成 21 年 3 月)

- 4) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠 : アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究 : 平成 18-20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患等予防・治療研究事業 アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究 総合研究報告書(海老澤班) : 14-17(平成 21 年 3 月)
- 5) 近藤直実, 川本典生, 深尾敏幸, 松井永子, 金子英雄, 川本美奈子, 近藤 應, 岩砂眞一, 白木 誠 : アレルギー性疾患の発症・重症化の予知に関する研究 : 平成 20 年度厚生労働科学研究費補助金 免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業 分担研究報告書(免疫アレルギー医療分野)第 1 分冊(海老澤班) : 146-149(平成 21 年 3 月)
- 6) 丹羽雅之 : コバルトクロライド誘発視細胞選択的障害モデルの発現機序解明ならびにその防御・治療 : 平成 19-20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書(平成 21 年 5 月)
- 7) 深尾敏幸, 川本典生 : 問診による遺伝要因と環境要因に基づく予知に関する研究 : 平成 21 年度独立行政法人環境再生保全機構委託業務 気管支喘息のテーラーメイド的予知に基づく発症予防法と QOL 調査票を導入した独創的評価法の確立 報告書(近藤班) : 39-48(平成 22 年 2 月)
- 8) 金子英雄, 船戸道徳, 久保田一生, 大西秀典, 寺本貴英, 加藤善一郎, 深尾敏幸, 近藤直実 : X 連鎖無ガンマグロブリン血症にみられた高エンドトキシン血症を伴った慢性胸膜炎の病態解析 : 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業 原発性免疫不全症候群に関する調査研究 総括・分担研究報告書(原班) : 90-92(平成 22 年 3 月)
- 9) 深尾敏幸 : 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA : 3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 : 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA : 3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班) : 1-5(平成 22 年 3 月)
- 10) 深尾敏幸 : ケトン体代謝異常症 患者数把握のための全国調査. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA : 3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班) : 7-8(平成 22 年 3 月)
- 11) 深尾敏幸 : 酵素, 遺伝子診断(典型例, 非典型例, 海外の症例も含めて) : 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(β -ケトチオラーゼ欠損症, サクシニル-CoA : 3-ケト酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断指針に関する研究 総括・分担研究報告書(深尾班) : 25-29(平成 22 年 3 月)
- 12) 丹羽雅之 : AIMS-Gifu 研修会「Gifu Medical Education: e-learning system/e-ポータルフォリオ」 : (平成 22 年 11 月)
- 13) 桑田一夫 : プリオン立体構造変換初期過程の解析 : 厚生労働省科学研究費補助金(難治性疾患克服研究事業) プリオン病及び遅発性ウイルス感染症に関する調査研究班 分担研究報告書 : 24(平成 23 年 1 月)
- 14) 深尾敏幸 : 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β -ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β -ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究. 総括・分担研究報告書(深尾班) : 1-5(平成 23 年 3 月)
- 15) 深尾敏幸 : ケトン体代謝異常症に関するアンケート調査に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β -ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究. 総括・分担研究報告書(深尾班) : 7-9(平成 23 年 3 月)
- 16) 深尾敏幸 : T2 欠損症の遺伝子診断に関する研究 MLPA 法の確立 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服事業 先天性ケトン体代謝異常症(HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β -ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症携帯と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究. 総括・分担研究報告書(深尾班) : 27-30(平成 23 年 3 月)
- 17) 桑田一夫 : 人獣共通感染症の診断・予防・治療法の開発研究 : 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター 特定共同研究 平成 22 年度経過報告書(平成 23 年 3 月)
- 18) 桑田一夫 : 論理的創薬による蛋白質立体構造制御法の確立とプリオン病治療薬開発への応用 : 独立行政法人医薬基盤研究所保健医療分野における基礎研究推進事業 平成 22 年度総括・分担報告書(平成 23 年 4 月)

- 19) 桑田一夫：Aβレセプターを標的とするアルツハイマー病治療薬シーズの開発：独立行政法人科学技術振興機構 研究成果最適展開支援事業 フィージビリティスタディ【FS】ステージ探索タイプ 完了報告書(平成 23 年 4 月)
- 20) 桑田一夫：バイオ分子間相互作用形態の階層的モデリング：独立行政法人 科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業(チーム型研究・CREST)「マルチスケール・マルチフィジックス現象の統合シミュレーション」平成 22 年度実績報告書(平成 23 年 4 月)
- 21) 桑田一夫：論理的創薬技術開発及びプリオン病への応用研究：独立行政法人医薬基盤研究所 委託業務 実績報告書(平成 23 年 4 月)
- 22) 桑田一夫：プリオン天然変性部位の異常立体構造変換における役割：科学研究費補助金新学術領域研究(研究領域提案型)「天然変性タンパク質の分子認識と機能発現」平成 22 年度実績報告書(平成 23 年 4 月)

11. 報道

- 1) 小関道夫, 深尾敏幸, 近藤直実：リンパ管腫, 高血圧薬で抑制 岐阜大が世界初確認：岐阜新聞(2011 年 4 月 16 日)
- 2) 深尾敏幸：遺伝カウンセリング：読売新聞(2011 年 12 月 4 日)

12. 自己評価

評価

研究成果はある程度の結果を示せている。

現状の問題点及びその対応策

連合創薬医療情報研究科は 2007 年の 4 月に発足し、既に 5 年を経過しようとしている。2010 年 4 月からは岐阜大学キャンパス内の岐阜薬科大学の建物の 8 階に本研究科が入り、実質的な研究が本研究科内でも可能となっている。2011 年からは桑田一夫教授が本研究科専任教員となり、理化学研究所からの客員教員が 4 名に増え、新たに看護学科から武藤教授も本研究科を担当することになり、着実に教員は充実してきている。現在の大きな問題点は大学院の充足率であり、大学院生の確保が最重要課題となっている。教育研究の充実とともに大学院生の出口戦略の検討が必要である。

論理的創薬法は、未だ連合創薬内においても充分普及していない。論理的創薬法を多くの研究者が実践し、新薬開発に向けた取り組みが前進することが肝要である。そのためには、論理的創薬法に関する授業や実習体制を構築し、学生のみならず、多くの研究者にツールを利用していただく場を提供することが必要である。

今後の展望

2012 年度 PMDA との連携大学院が発足する予定であり、レギュラトリーサイエンス分野での発展が期待される。

論理的創薬法をさらに発展させると共に、開発してきた抗プリオン化合物、及び抗インフルエンザ・ウイルス化合物を実用化する。

2 教員組織

1. 専任教員と非常勤講師等の配置状況

(1) 専任教員の配置状況等

平成 17 年度以降、本学では従来の定数制度からポイント制度（総ポイントの範囲内なら、職種（教授＝100P、准教授＝78P、講師＝73P、助教＝60P）、人数は学部判断に委ねられている。）が導入され、また、本研究科では、18 年度途中から外部資金により雇用する教員（当初は助教のみであったが、19 年度途中から講師・准教授まで拡大した。）制度が導入された。

各分野（部門）の配置状況は、次のとおりである。

分野（部門）等別専任教員・非常勤講師の配置状況

（各年度とも 4 月 1 日現在）

講座	区分／年度		平成 18 年度		平成 19 年度		平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度		平成 23 年度	
	分野（部門）等	旧講座等	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤
分子・構造学	細胞情報学	生化学	3	1	3	1	3	2	3	2	3	2	3	2
	分子生理学	生理学第 2	3	1	3	1	3	1	3	1	3	1	3	2
	薬理病態学	薬理学	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1
	寄生虫学	寄生虫学	4	1	4	1	3	0	3	0	3	1	3	1
	遺伝発生物学	—	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	内分泌代謝病態学	内科学第 3	3	4	3	4	3	5	3	5	2	7	3	7
	小児病態学	小児科学	3	2	2	2	2	2	3	2	2	2	2	1
病態情報解析医学	臨床検査医学	3	1	3	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3
病態制御学	解剖学	解剖学第 1	3	1	2	1	2	0	2	0	2	0	2	0
	分子病態学	分子病態学	3	1	3	1	3	0	3	0	2	0	2	1
	循環病態学	内科学第 2	3	6	2	8	3	4	2	8	2	7	2	8
	呼吸病態学	—	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
	高度先進外科学	外科学第 1	4	5	3	4	2	4	2	3	2	3	3	3
	整形外科学	整形外科学	3	5	3	5	3	5	3	4	3	4	3	4
	皮膚病態学	皮膚科学	4	5	4	3	4	3	1	3	2	3	2	2
	泌尿器科学	泌尿器科学	4	7	3	7	3	9	3	8	3	8	3	9
	麻酔・疼痛制御学	麻酔・蘇生学	4	7	4	7	4	7	3	7	2	7	3	7
	蘇生・集中治療学	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
口腔病態学	口腔外科学	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	
神経統御学	高次神経形態学	解剖学第 2	3	1	3	1	3	1	3	1	3	1	2	0
	生理学	生理学第 1	3	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1
	スポーツ医科学	スポーツ医・科学	3	1	3	1	3	1	3	1	3	1	3	2
	神経内科・老年学	高齢医学	3	1	3	1	4	1	4	1	4	1	4	1
	精神病理学	神経精神医学	4	0	3	0	2	0	3	0	3	0	3	0
	脳神経外科学	脳神経外科学	3	4	3	4	3	3	3	3	4	3	4	2
	耳鼻咽喉科学	耳鼻咽喉科学	3	4	3	4	3	4	3	5	3	6	3	8
	眼科学	眼科学	3	7	3	7	3	7	3	6	3	5	3	4
腫瘍制御学	腫瘍病理学	病理学第 1	2	0	2	0	2	0	3	0	3	0	4	1
	免疫病理学	病理学第 2	4	1	3	1	3	0	3	1	2	0	3	0
	腫瘍外科学	外科学第 2	4	0	2	0	4	0	3	0	3	0	4	0
	消化器病態学	内科学第 1	3	4	4	4	3	4	3	3	2	3	2	3
	血液病態学	—	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
	産科婦人科学	産科婦人科学	3	5	2	7	1	7	1	7	3	7	3	7
	放射線医学	放射線医学	3	3	4	4	3	4	3	3	3	4	3	3
	疫学・予防医学	公衆衛生学	1	1	2	1	2	1	3	1	3	1	3	1
臨床腫瘍学	—	-	-	-	-	1	0	1	0	1	0	1	0	

講座	区分/年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度		平成23年度	
	分野(部門)等	旧講座等	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤	専任	非常勤
医療管理 学	医療情報学	医療情報部	1	0	2	0	2	0	2	0	1	0	2	0
	総合病態内科学	総合診療部	3	2	3	2	3	2	3	1	3	1	3	2
	臨床薬剤学	薬剤部	0	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0
	医療経済学	—	1	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0	0
	救急・災害医学	—	3	8	4	9	3	8	3	4	3	6	3	7
	法医学	法医学	3	0	2	0	2	0	2	0	2	0	2	0
	産業衛生学	衛生学(2)	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
再分 子統 御学	組織・器官形成	衛生学(1)	3	2	3	2	3	3	4	2	4	1	4	0
	神経生物	反射研究施設	4	1	4	1	3	1	4	0	4	1	4	1
	病原体制御学	微生物学	3	0	3	0	3	0	3	0	3	0	3	0
再 工 学	生命機能分子設計	(工)生体物質工学	3	0	3	0	2	1	2	0	2	0	3	0
	知能イメージ情報	(工)画像情報	3	0	3	0	3	1	4	0	4	0	4	0
再 生 応 用 学	循環呼吸制御学	—	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2
	医学系倫理・社会医	—	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1
地域医療医学センター・地域医学部門			-	-	-	-	6	4	6	5	7	4	4	5
小計			130	98	124	104	125	104	126	96	123	99	127	105

医学教育開発研究センター	6	1	4	2	5	1	5	1	5	2	4	2
連合創薬医療情報研究科	-	-	2	9	2	10	1	9	1	9	2	13

看護学科 基礎看護学講座	10	12	10	7	9	5	9	3	7	5	7	11
母子看護学講座	7	1	8	3	8	19	9	5	8	6	8	10
成人・老年看護学講座	13	4	14	3	11	3	14	2	14	3	14	3
地域・精神看護学講座	8	8	9	5	7	3	9	2	9	6	9	7
小計	38	25	41	18	35	30	41	12	38	20	38	31

合計	174	124	171	133	167	145	172	109	166	121	169	138
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

※平成19年度以降の専任教員には、外部資金雇用教員を含む。

平成23年度(12月1日現在)の大学院医学系研究科・医学部・医学教育開発研究センター及び附属病院の総ポイント、使用ポイント及び充足率は次のとおりである。

区 分	総ポイント	使用ポイント	充足率
医学系研究科	10,038	10,014	99.8%
看護学科	3,187	2,843	89.2%
医学教育開発研究センター	498	420	84.3%
附属病院	5,905	5,545	93.9%

(2) 非常勤講師の配置状況

本学部医学科及び看護学科に毎年二百数十名の非常勤講師を配置しており、分野(部門)、各コースによっては配置数にばらつきがある。

なお、平成23年度の総数は、205名1,308時間である。

医学部医学科テュートリアル等のコース別非常勤講師の配置状況

コース名	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
プレテュートリアル	3	2	2	2	1
テュートリアル					
人体構造学	1	2	2	1	4
代謝・機能学	7	8	7	7	6
遺伝・発生・発達学	4	4	0	0	0
病原生物学	5	4	4	4	3

コース名	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
薬理・中毒学	5	5	5	5	5
病理学	1	1	0	0	2
神経・精神・行動学	9	7	8	8	7
循環器・呼吸器学	11	11	11	-	-
血液学	1	1	1	0	-
消化器・検査医学	1	1	1	2	-
内分泌代謝医学	4	4	4	4	4
腎・尿路学	5	5	6	-	-
運動器学	6	6	5	5	5
皮膚科学	2	2	1	0	0
感覚器医学	3	4	5	5	4
免疫・応答学	3	3	3	4	4
産科婦人科学	4	4	5	5	0
麻酔・救急・疼痛学	6	5	4	5	3
放射線医学	1	1	1	1	0
地域・産業保健	4	1	4	4	4
臨床実習入門	1	1	1	1	1
循環器・呼吸器・尿路学	-	-	-	12	-
循環・呼吸・腎尿路学	-	-	-	-	13
成育学	-	-	-	3	7
東洋医学	-	-	4	-	1
消化器検査・血液腫瘍学	-	-	-	-	1
合 計	87	82	79	78	75

(3) 客員臨床系医学教授等

医療現場で活動されている学外の医師に、豊富な臨床経験を臨床系医学分野の教育(学内)に協力を依頼するため、平成 8 年度から「客員臨床系医学教授及び客員臨床系医学准教授」の制度を、また、平成 10 年度から 6 年次学生の学外臨床実習を開始したことに伴い、学外実習を対象とする客員臨床系医学教授等制度を設けた。

また、平成 19 年度に地域医療医学センターが設置され、地域医療に特化した臨床教育を行うため、同センターにも地域医療医学系客員臨床教授等制度を設けた。

(4) 臨床教授等

本研究科(医学教育開発研究センター及び附属病院含む。)では、臨床・研究・教育について、優秀な人材を確保するとともに、活性化を図るため、平成 17 年度途中から臨床教授及び臨床准教授の称号付与制度を設けた。

2. 教育補助者と研究補助者の配置状況

(1) ティーチング・アシスタントの実施及び活用状況

本研究科におけるティーチング・アシスタント制度は、平成 5 年 3 月開催の研究科委員会において、博士課程の優秀な学生に対し教育的配慮の下に教育補助業務を行わせることが承認され、実施されている。

また、平成 22 年度に「ティーチング・アシスタント(TA)の採用指針」を策定し、資格、業務の範囲、運用基準などの明確なルールに沿って運用している。

なお、看護学専攻(修士)にあってはほとんどが社会人入学者であるため、本務の都合上、担当できない状況にあるが、再生医科学専攻(博士前期)は約 2~3 割の学生が TA として学部教育の充実を担っている。

(単位：人)

区 分	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
医科学専攻 (博士)	21	18	22	16	18
再生医科学専攻 (博士前期)	5	8	7	10	6
再生医科学専攻 (博士後期)	14	9	9	8	7
看護学専攻 (修士)	4	2	1	1	-
計	44	37	39	35	31

(2) リサーチ・アシスタントの配置状況

リサーチ・アシスタント制度は平成 8 年に設けられ、研究プロジェクト等に優れた大学院生を研究補助者として参画させ、研究活動の効果的推進、研究体制の充実及び若手研究者の育成に成果を上げている。

また、平成 22 年度に「リサーチ・アシスタント (RA) の採用指針」を策定し、資格、業務の範囲、運用基準などの明確なルールに沿って運用している。

次表に示すとおり最近 5 年間の従事者数に大きな変化はない。

(単位：人)

区 分	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度
医科学専攻 (博士)	11	9	13	9	9
再生医科学専攻 (博士後期)	8	5	5	5	5
計	19	14	18	14	14

3. 採用、昇任等の方法

(1) 採用、昇任の選考基準と選考方法

大学院医学系研究科教員の採用・昇任の基準については、岐阜大学職員採用規程の中に定められており、これを受けて、岐阜大学大学院医学系研究科教授選考規程、岐阜大学大学院医学系研究科教授選考規程に関する申合せ及び岐阜大学職員採用規程大学院医学系研究科内規等の規程が定められている。

教授の採用・昇任については、全国の関係機関に対し公募を行い、岐阜大学大学院医学系研究科教授選考規程に基づく教授選考委員会で、教授候補者について必要な諸事項を調査し、教授会議に報告することが定められている。

教授会議は、教授選考委員会の報告を参考として教授候補者を選考する。

准教授、講師、助教の採用・昇任については、岐阜大学職員採用規程大学院医学系研究科内規に基づき当該分野の主任教授の推薦した候補者について、履歴事項、業績等を参考とし、教授会議で選考する。

また、看護学科の教員については、岐阜大学医学部看護学科教育職員選考取扱規程、同規程実施細則、岐阜大学医学部看護学科教育職員選考基準及び同選考基準に関する申合せを定めて、公募により候補者を選考している。

(2) 非常勤講師の選考基準と選考方法

非常勤講師の選考基準と選考方法については、岐阜大学職員採用規程等を準用し、教務厚生委員会等で審議の上、教授会議で選考する。

4. 兼業・兼職の基準と状況

(1) 兼業・兼職の基準

職員が報酬を得て、本学以外の事業の団体の役員、顧問若しくは評議員の職を兼ね、その他いかなる事業に従事し、若しくは事務を行うにも、あらかじめ部局長の許可を得て従事することができる。

また、次に掲げる基準のすべてに該当する場合には、勤務時間内に職務として従事(兼職)することができる。

- ① 国、国立大学法人又は地方公共団体におかれる審議会委員又は教育、学術、文化、スポーツの振興を図ることを目的とする特殊法人、公益法人等の各種委員等の業務で特に公益性が高いと認められるものであること。
- ② 無報酬であること。
- ③ 従事回数が年間数回程度であること。など

(2) 兼業・兼職の状況

過去5年間の兼業・兼職の状況は、次表のとおりである。

年 度	非常勤講師	非常勤医師	各種審議会委員等	治験関係	兼 職	合 計
平成 18 年度	103	400	134	6	44	687
平成 19 年度	111	431	140	5	41	728
平成 20 年度	150	442	142	4	31	769
平成 21 年度	156	473	131	5	50	815
平成 22 年度	150	369	138	3	21	681

3 施設・設備

1. 施設・設備の現状・整備状況

(1) 医学部・附属病院の移転整備の経緯

長年の懸案であり、悲願でもあった医学部・同附属病院の移転整備については、昭和 62 年 5 月に医学部教授会・附属病院科長会議において、統合移転を基本構想とする「岐阜大学医学部・同附属病院長期計画」が承認され、平成 4 年 9 月第 35 回将来計画委員会において、医学部・同附属病院整備検討専門委員会が取りまとめた「岐阜大学医学部・同附属病院の整備について」の最終報告書が承認され、第 655 回評議会において、上記最終報告書が承認された。

その後、平成 8 年 8 月に文部省の了解を得て、平成 10 年 4 月本学、岐阜県、岐阜市、岐阜市土地開発公社の 4 者による「岐阜大学医学部・同附属病院及び医療技術短期大学の移転に関する覚書」を取り交わし、医学部・同附属病院の移転整備計画が具体化した。

このように、移転整備は非常に長い歴史と多くの人々のたゆまない努力により実現した。

○ 医学部・同附属病院の移転整備の経緯

昭和 62 年 5 月	医学部教授会において「医学部・同附属病院の長期計画」を策定
平成 4 年 9 月	岐阜大学評議会において「医学部・同附属病院の整備について」の報告書を承認
平成 8 年 8 月	文部省から移転整備計画の承認
平成 12 年 5 月	附属病院棟 工事着工
平成 14 年 7 月	医学部臨床研究棟 工事着工
平成 14 年 8 月	医学部総合研究棟 工事着工
平成 15 年 12 月	附属病院棟 竣工
平成 16 年 1 月	医学部本館（臨床研究棟、総合研究棟）竣工
平成 16 年 4 月	医学部・同附属病院移転開始
平成 16 年 5 月	医学部・同附属病院移転完了
平成 16 年 6 月	附属病院開院
平成 16 年 12 月	医学部教育・福利棟 工事着工
平成 16 年 12 月	医学部記念会館 工事着工
平成 18 年 3 月	医学部教育・福利棟 竣工
平成 18 年 3 月	医学部記念会館 竣工
平成 18 年 8 月	医学図書館 工事着工
平成 19 年 2 月	医学図書館 竣工

(2) 医学研究科・医学部新施設の特徴

平成 16 年 4 月に大学院医学研究科を部局化した医学研究科・医学部は、同年 6 月附属病院と共に柳戸地区に移転・新築した。

医学部本館は、高度化・多様化する教育・研究に対応できるように、平面計画は 4 つのブロックで構成した大部屋方式とし、設備計画においても将来の拡充・変化及び発展にも柔軟に対応できる構造であり、各

階にリフレッシュスペースを配置し、ゆとりと潤いのある空間を積極的に取り入れ、研究室と廊下の間仕切壁をすりガラスとすることで開放的な中廊下とした。また、医学部各施設へは移動しやすいように、デッキ状の連絡通路（インテリジェントモール）を設け、医学部本館内における臨床研究部門はできる限り病棟に近接させ、病棟との渡り廊下を介してより連続性を確保した。1年遅れで移転することとなった解剖実習施設、動物実験施設、RI施設は、医学部本館の南隣りに平成17年3月に移転・新築した医学部生命科学棟に配置され、デッキ状の連絡通路で繋がっている。

教育・福利棟は、閑静な屋外交流空間であるホスピタルパークに面して設け、人とのコミュニケーションを通じ医療人としての人間性を養えるよう福利施設も取り込んだ複合施設として平成18年3月に完成した。1階には医学部食堂と岐阜大学生協医学部店があり、多くの学生や教職員に利用されている。

同じく平成18年3月には、医学部記念会館が医学部同窓会からの寄付金により医学部本館に隣接して建設された。1階に事務局、2階には400人収容のホールを備えており、ホールは学会、講演及び授業などに利用されている。

一連の移転統合の最後として、平成19年2月に医学図書館が完成した。3階建ての建物は連絡通路により2階部分で医学部本館とつながっている。収容可能冊数約178,000冊、座席数158席、検索コーナー、AVコーナーのほか、グループ学習室2室と研究個室を備えている。e-learningや電子コンテンツの利用への対応、収容効率の増強、利用者増への対応及び医学系関連施設からの利用の便を重視された作りとなっている。

また、平成21年10月に岐阜薬科大学が医学部本館に隣接して新築された。医学部本館からはデッキ状の連絡通路を通して行き来しやすくなっている。

(3) 附属病院の特徴等

附属病院は、平成16年6月に移転・新築し開院した。病院施設は、12万5千㎡の医学部・同附属病院の敷地内に、バリアフリーに配慮した免震構造地上9階建てで、病棟・中央診療部・外来が棟として一体化した複合施設であり、約500台が収容できる患者用駐車場が設置されている。また、1階アトリウム（床暖房）や多目的ホール（医療ガス等設備）は、大規模災害時の治療スペースとして活用できる構造で、屋上に設置したヘリポートは、ヘリコプターによる救急患者の搬送に活用している。

病院開院と同時に医療情報システム（電子カルテを含む。）を稼働させ、診療科・部門の枠を越えた1患者1カルテにより診療情報の共有を図るとともに、完全電子カルテ化によるペーパーレス・フィルムレスを実現した。また、全国最大規模の高次救命治療センターを設置し、24時間体制で高度な救命救急医療を提供している。診療体制としては、臓器別診療体制の確立、地域医療との連携強化、予約センターの設置などを行った。その後、セカンド・オピニオン外来の導入、外来化学療法室の設置など、診療機能の強化を図った。

当病院は、病院の理念・基本方針、患者の権利宣言、個人情報保護方針及び職業倫理綱領を制定し、患者中心のより良い医療の提供に力を注ぐとともに、高度先進医療の研究開発や特徴ある先進医療の導入について予算措置をするなど積極的に取り組んでいる。

(4) 医学部看護学科新施設の特徴

既に柳戸地区に移転していた医学部看護学科及び医学系研究科看護学専攻の施設は、建設中の医学部教育・福利棟に面したホスピタルパークの東に近接し、平成15年3月には、既設校舎の東側に南北に配置し、連絡通路で繋いだ総合研究棟を新築した。

総合研究棟は、セミナー室、実験・実習室、教官研究室等を配置した一体型建物で、各フロアー共既設の建物との動線を図っている。

2階から6階にリフレッシュコーナーを設置し、また、5階は全学で共用できるプロジェクト的な教育研究活動に供するスペースを有する共同教育研究室等を配置している。

4 国際交流

1. 留学生の受入れ体制と状況

岐阜大学では国際交流を重点課題の一つとして取り上げており、医学系研究科、医学部においても外国人留学生を積極的に受け入れている。過去5年間の外国人留学生の受け入れ状況は次表のとおりであり、

受入学生数に大きな変動はないが、平成 18 年度から、本学の学術交流協定大学に在籍する大学院生を特別研究学生として受け入れた。

過去 5 年間の外国人留学生数

区分	平成 19 年度				平成 20 年度				平成 21 年度				平成 22 年度				平成 23 年度			
	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計	国費	県費	私費	計
学部生			2	2			4	4			5	5			5	5			3	3
大学院生	3		17	19	2		18	20	3		16	19	2		14	16	1		14	15
研究生	1	1	5	7	1		3	4			3	3			2	2			2	2
特別聴講学生																				
特別研究学生			1	1			1	1							1	1			1	1

国別内訳

大韓民国			1	1			4	4	1		3	4			3	3			2	2
台湾																				
中華人民共和国	1		22	22			20	20			20	20			17	17			16	16
タイ王国			1	1			1	1							1	1			1	1
ミャンマー			1	1			1	1												
シリア																				
バングラデシュ																				
ベトナム	3			3	3			3	2		1	3	2		1	3	1		1	2
アメリカ合衆国																				
ブラジル		1		1																
計	4	1	25	29	3		26	29	3		24	27	2		22	24	1		20	21

2. 留学生の教育・研究指導の方法と体制

(1) 留学生センター

岐阜大学には、日本語教育と留学生指導のために留学生センターが設置されており、大学生活に必要な日本語能力を伸ばすことを目的とした日本語補講や、日本語研修コース、日本語・日本文化研修コースなどが実施されている。

(2) チューター

留学生の個別指導に関してはチューター制が採られており、チューターによる留学生特別指導により、日本語、専門教育補充の両面から効果的な指導が行われている。医学部、医学系研究科における留学生の専門教育に関しては、基本的には日本人学生の場合と異なることなく、学部においては授業を通じて各教員が教育・指導を行い、医学系研究科においては各研究科の指導教員が研究を指導している。

3. 在学生の海外留学・研修の状況

医学部学生の海外留学は、医学部の特殊性から基本的に休学により留学することとなるが、英語能力が一定の基準をクリアしている場合には 6 年時の臨床クラークシップ (12 週間) を外国で受けることができ、毎年数名が、アジア、オセアニア、北米の病院で実習を受けている。大学院学生については、2 年以内に限り、外国における研究指導を在学期間に算入することが認められている。

4. 教員の在外研究の状況

岐阜大学在外研究員派遣制度による海外での調査研究の他に、教員の海外研修も盛んである。

在外研究員の状況（平成20年度～平成22年度）

氏名	主滞在国内 派遣研究機関	派遣期間	調査研究課題	備考
若林英樹	イギリス グラスゴー大学	H22.9.4～ H22.9.18	地域・家庭医療を担う総合医養成のための 卒前・卒後教育カリキュラム開発	岐阜大学

過去5年間の海外渡航状況

区分	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
外国出張	179	163	141	155	160
海外研修	31	34	54	36	32
計	210	197	195	191	192

5. 外国人研究者の招致の状況

国際社会の中で経済大国であり、しかも高度先進国として評価の高い我が国での研究や研究協力を希望する外国人研究者は非常に多く、本研究科においても次のとおり関連領域の研究者が専門分野での希望する研究技術修得あるいは情報交換等を目的として来学している。

外国人研究者招致状況（平成20年度～平成22年度）

氏名	国籍(所属・職名)	目的	期間
エスコ アラサレア	フィンランド オウル大学・教授	情報収集・視察等	H20.4.8～4.8
ノルム アルペリン	アメリカ合衆国 イリノイ大学シカゴ校・准教授	講演・討論	H20.4.9～4.9
Nicola Cirillo	イタリア University of Naples・教授	講演・討論	H20.5.19～5.21
ステファン ジェフリー ルリー	アメリカ合衆国 ロチェスター大学・助教	講演・討論	H20.4.11～4.11
Jens Waschke	ドイツ University of Wurzburg・教授	講演・討論	H20.5.19～5.21
Marek Haltek	フランス Pavillon R.E. Harriot-Hospital・ 教授	講演・討論	H20.5.19～5.21
Soo-Chan Kim	韓国 Yonsei University College of Naples・教授	講演・討論	H20.5.19～5.22
Hamm-Ming Shue	台湾 National Cheng Kung University Hospital・教授	講演・討論	H20.5.19～5.30
Tsung-Mao Huang	台湾 National Cheng Kung University Hospital・医師	研修	H20.5.19～5.30
Tae-Won Kang	韓国 Yonsei University College of Medicine・医師	研修	H20.5.19～6.4
ハンヌ エスコラ	フィンランド タンペレ工科大学・教授	情報収集・視察等	H20.5.26～5.26

氏名	国籍(所属・職名)	目的	期間
陸 新良	中国 浙江大学附属第二病院・副教授	研修	H20.5.26～6.13
Su, Yun-Ting	台湾 National Cheng Kung University Hospital・医師	研修	H20.6.24～6.27
Wu, Meng-Chi	台湾 National Cheng Kung University Hospital・学生	研修	H20.6.26～7.10
Hsu, Chai-Chi	台湾 National Cheng Kung University Hospital・学生	研修	H20.6.26～7.10
ユン セン リー	韓国 ソウル大学・教授	講演・討論	H20.7.28～7.28
ハオ ジイチェン	中国 東北大学・学長	情報収集・視察等	H20.10.6～10.6
姜 慧研	中国 東北大学・准教授	情報収集・視察等	H20.10.6～10.6
マイケル ルビン	アメリカ合衆国 エモリー大学・教授	講演・討論	H20.10.9～10.9
デニス ノバック	アメリカ合衆国 ドレクセル大学・教授	講演・討論	H20.10.25～10.26
祝 建波	中国 湖北民族学院附属医院・院長	研修	H20.12.1～12.19
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・准教授	講演・討論	H20.12.22～12.22
占 強	中国 南京医科大学附属無錫市第一人民 医院・副部长	研修	H21.1.5～1.23
ピーター パートン	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H21.1.23～1.26
カーラギルバート	オーストラリア モナッシュ大学・講師	講演・討論	H21.1.24～1.26
トーマス ヨンソン	スウェーデン メディコン・バレイ・不明	情報収集・視察等	H21.1.26～1.26
キャサリン グリーン	アメリカ合衆国 Northwestern University・教授	講演・討論	H21.3.27～3.29
Detlef Zillikens	ドイツ Universitat zu Lubeck・教授	講演・討論	H21.3.27～3.30
ジョン スタンレイ	アメリカ合衆国 University of Pennsylvania School of Medicine・教授	講演・討論	H21.3.28～3.29
ジョン マクグラス	イギリス St Thomas'Hospital' Med School・ 教授	講演・討論	H21.3.28～3.29
ジョシュア ジェイコブ	アメリカ合衆国 ハワイ大学・教授	講演・討論	H21.5.16～5.16
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H21.5.16～5.17

氏名	国籍(所属・職名)	目的	期間
アラン トーマス	イギリス アバディーン大学・准教授	講演・討論	H21.7.13～7.13
レイモンド タバタ	アメリカ合衆国 ハワイ大学・教授	講演・討論	H21.11.14～11.14
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H21.12.11～12.11
フィリップ エバンス	イギリス グラスゴー大学・教授	講演・討論	H21.12.18～12.18
キム ムンユング	韓国 kong eye clinic・眼科医師	情報収集・視察等	H22.1.4～1.15
トド シュタウト	アメリカ合衆国 東京女子医科大学・非常勤講師	講演・討論	H22.1.29～1.29
ガウタム デシュバンド	アメリカ合衆国 ハワイ大学・聖路加国際病院・助教・研究員	講演・討論	H22.2.19～2.19
ケネス ミュレン	イギリス グラスゴー大学・講師	講演・討論	H22.3.23～3.23
ローザ アダニー	ハンガリー デブレツェン大学医学部・教授	研究・共同研究	H22.3.29～4.10
ラツロ モディス	ハンガリー デブレツェン大学医学部・教授	研究・共同研究	H22.3.29～4.10
デシュパンデ ゴーダム ア Nil	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H22.8.28～8.28
デシュパンデ ゴーダム ア Nil	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H22.10.15～10.15
デシュパンデ ゴーダム ア Nil	アメリカ合衆国 聖路加国際病院・客員研究員	講演・討論	H22.12.10～12.10
ブレスラウ ジョシュア	アメリカ合衆国 カリフォルニア大学デービス校・准教授	講演・討論	H22.12.27～12.27
エリザベス ミラー	アメリカ合衆国 カリフォルニア大学デービス校・准教授	講演・討論	H22.12.27～12.27
ジャン ホウイエン	中国 東北大学・副教授	情報収集・視察等	H23.1.21～1.22
コウ シーホウ	中国 東北大学・学生	情報収集・視察等	H23.1.21～1.22
ワン ウェンハン	中国 遼寧工程技術大学・学生	情報収集・視察等	H23.1.21～1.22
Jin Wook Jeoung	韓国 ソウル大学眼科・講師	研修	H23.1.31～2.4
ユ リ	中国 江蘇大学附属病院・医師	情報収集・視察等	H23.2.22～2.26

6. 海外の大学との学術交流協定の締結状況

医学系研究科・医学部では20数年前から学外・海外協力委員会が国際交流の役割を担ってきたが、岐阜大学国際交流委員会、留学生センターの設置に伴い、現在では岐阜大学国際交流委員会、留学生交流委員会、留学生センター運営委員会に委員を派遣している。

大学間での学術交流協定は 15 カ国 41 大学 (平成 23 年 6 月現在) と、医学系研究科・医学部としての部局間交流は中華人民共和国の浙江大学医学部、タイ王国のコンケン大学医学部及び米国コロラド州立大学と締結 (その後、コロラド州立大学とは平成 22 年 8 月 13 日大学間協定を締結) していたが、新たに平成 21 年 4 月 17 日に韓国の忠北大学医学部と、平成 23 年 4 月 20 日に英国のグラスゴー大学と締結し、留学生の受入れ、本学学生の派遣、研究者の交流、共同研究などが行われている。今後もより一層部局間交流を推進していく予定である。

5 社会との連携

1. 公開講座の開設の方針と状況

公開講座は地域社会との連携・協力、地域住民との相互理解などを得る上でひとつの有益な方法であり、本学部及び附属病院に蓄積された医学の知識を広く地域社会に開放することにより、地域住民の医学知識の向上に資することを目的としている。

本学部公開講座は、一般社会人を対象に昭和 59 年度から毎年開講しており、平成 14 年度からは地域住民の更なる理解を得るため公開講座を医学市民講座と称して無料開講している。募集人員に対する受講者数は、無料開講を始めて以来ほぼ 100% (平成 19 年度は大幅に募集人員を増やしたため若干下回っている) であり、本学部の公開講座が地域住民に浸透し理解を得られて来たことを示している。また、年齢構成は中・高年層に集中しているため、アンケートなどを参考に、テーマや開講日等に工夫をして、より一層、幅広く、地域社会に受け入れられる公開講座を目指している。

公開講座の実施状況

	テ ー マ	募集人員	申 込 者 数			年 齢 構 成						
			男	女	計	10 歳代	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳代
平成 13 年度	生活習慣病～ならないために、 なったらどうする～	70	27	24	51	—	3	4	6	15	15	8
			52.90%	47.10%			5.90%	7.80%	11.80%	29.40%	29.40%	15.70%
平成 14 年度	心身ともに健やかな子供に～ 親の願い～	70	16	60	76	3	11	11	24	17	8	2
			21.10%	78.90%		3.90%	14.50%	14.50%	31.60%	22.40%	10.50%	2.60%
平成 15 年度	心の健康と病気	70	28	56	84	1	5	6	14	30	20	8
			33.3%	66.7%		1.2%	6.0%	7.1%	16.7%	35.7%	23.8%	9.5%
平成 16 年度	身につけたい救急応急手当	70	22	47	69	1	9	3	7	16	22	11
			31.9%	68.1%		1.4%	13.0%	4.4%	10.2%	23.2%	31.9%	15.9%
平成 17 年度	糖尿病	70	27	44	71	1	4	2	7	14	31	12
			38.0%	62.0%		1.4%	5.6%	2.8%	9.9%	19.7%	43.7%	16.9%
平成 18 年度	がん	90	41	49	90	-	7	4	14	20	27	15
			45.5%	54.5%			7.8%	4.4%	15.6%	22.2%	30%	16.7%
平成 19 年度	メタボリックシンドローム	150	72	69	141	-	7	6	22	23	49	32
			51.1%	48.9%			5.0%	4.3%	15.6%	16.3%	34.8%	22.7%
平成 20 年度	認知症	150	78	88	166	-	1	8	24	28	56	45
			47.0%	53.0%			0.6%	4.8%	14.5%	16.9%	33.7%	27.1%
平成 21 年度	心臓病 (狭心症・心筋梗塞) を 知る	150	90	82	172	1	-	4	14	25	61	59
			52.3%	47.7%		0.6%		2.3%	8.1%	14.5%	35.5%	34.3%
平成 22 年度	精神疾患・うつ病	150	79	99	178	1	3	7	29	28	54	47
			44.4%	55.6%		0.6%	1.7%	3.9%	16.3%	15.7%	30.3%	26.4%
平成 23 年度	成人に多い目の病気	150	73	83	156	-	3	6	9	26	54	51
			46.8%	53.2%			1.9%	3.8%	5.8%	16.7%	34.6%	32.7%

※注 年齢構成は未回答者及び四捨五入してあるため合計しても100%にならない場合があります。

2. 地域社会での活動状況

他大学等の非常勤講師及び病院、診療所の非常勤医師として活動している。

また、岐阜県や他県の看護協会の教育に関する企画や病院の看護職などへの現任者教育に講師として活動及び病院の看護職に対する研究指導を行っている。

3. 生涯学習への対応状況

医療を取り巻く背景が急速に進歩している中で、一般人の健康に対する関心の高まりと共に、医学・看護は社会人教育の重要なテーマの一つとなっており、これに対して、地域や各種団体等における生涯学習への協力について積極的に対応している。

《平成 23 年度における講師としての対応状況》

(医学)

○研究会(千葉県救急医療研究会, 岐阜神経薬理研究会, 愛知脊椎脊髄疾患研究会, 岐阜県医師会, 皮膚筋炎関連自己抗体研究会, 岐阜県保険医協会, 成人再生不良性貧血治療研究会, 岐阜ドブラ・心エコー研究会, 岐阜小児アレルギー・喘息研究会, 岐阜心臓病研究会, 岐阜健康寿命を考える会, 岐阜腎不全研究会, 岐阜循環器疾患研究会, 日本急性肝不全研究会, 岐阜産科婦人科研究会, 前立腺癌密封小線源永久挿入治療研究会, 岐阜排尿障害研究会, 岡山インスリン治療を考える会, 岐阜癌研究懇話会, 循環器疾患とリハビリテーション懇話会, 茨城医真菌・皮膚感染症研究会, ベセルナ研究会, 肝細胞研究会, 大垣市 PTA 連合会定期研究会, 美濃認知行動療法研究会, 東海アダリムマブ学術講演会研究会, 岐阜バソプレシン心不全研究会, 岐阜心不全研究会, 岐阜 CVD 外科研究会, 糖尿病地域医療研究会, 循環器高度先進医療研究会, 岐阜呼吸器内科研究会, 札幌脳血管内手術手技研究会, アテロジェネシス研究会, 日本神経麻酔・集中治療研究会, 岐阜総合内科研究会, 脳梗塞 t-PA 研究会, 佐賀県循環器診療ネットワーク研究会, 岐阜膀胱癌化学療法研究会, 大阪 UTI 化学療法研究会, 東海 STI 研究会, 循環・代謝研究会, 循環器高度先進医療研究会, 岐阜 VSA 研究会, 総合臨床医学研究会, 岐阜伝統医学研究会, 岐阜循環器核医学研究会, 京都産婦人科医会, SVF 研究会, 北九州糖尿病最新治療研究会, 岐阜エピレプシー研究会, 愛知心身医学研究会, Renin-Angiotensin 研究会, CIO 研究会, 東海不整脈研究会, 岐阜慢性肝疾患病態治療研究会, 知多半島耳鼻咽喉科会, 岐阜不整脈研究会, 愛媛めまい・難聴研究会, 秋田頸動脈研究会, 糖尿病治療座談会, 能登地域総合診療強化研究会, 岐阜県糖尿病看護研究会, 東海頭頸部癌化学療法研究会, 神奈川皮膚アレルギー疾患研究会, ニコランジル研究会, 岐阜血液疾患研究会, 喘息 Early Intervention 研究会, 岐阜県 MR 技術研究会, 恵那市防災研究会, 東海 MODS 研究会, 岐阜ナース GOAL 研究会, 西濃 GOAL 研究会, 岐阜 SFI 研究会, 岐阜 GP 研究会, 岐阜性感染症研究会, 岐阜県 N 型カルシウムチャンネル研究会, 岐阜泌尿器科手術手技研究会, 食とがんの予防研究会, 婦人科骨粗鬆症研究会, Midland Seminar of Ophthalmology 研究会)

○講演会(岐阜県眼科医会, 日本産科婦人科学会, 和歌山県医師会, 日本糖尿病学会, 日本生物学的精神医学会, 岐阜県防災課, 藤田保険衛生大学, 急性期脳卒中ネットワークの会, 日本アレルギー学会, 島田市医師会, 島田薬剤師会, 岐阜市皮膚科医会, 富山県高度情報通信ネットワーク社会推進協議会, 順天堂大学, 日本内科学会東海支部, 社団法人日本糖尿病協会岐阜県支部, 藤田保健衛生大学, 日本泌尿器科学会, 社団法人日本麻酔科学会, 岐阜県健康福祉部, 岐阜市内科会, 岐阜薬科大学, 東海情報通信懇談会, 薬剤師会大垣支部, 日本消化器病学会北陸支部, 尼崎糖尿病協会, 郡上市役所健康福祉部社会福祉課, ぎふ・発達障害フォーラム, ギンナン皮膚科懇話会, 運動器疾患の新しい疼痛治療を考える会, 日本臨床皮膚科医会, 武儀医師会, 岐阜腎癌フォーラム, 朝日大学, 日本頸部脳血管治療学会, 日本精神科抑うつ不安ネットワーク, 南大阪循環器懇話会, 尾北医師会, 鳥取県眼科フォーラム, チーム医療としての肝臓病栄養治療を考える会, 東海緑内障の会, 一宮市木曾川市民病院, 日本心臓リハビリテーション学会, 兵庫医科大学病院, 岐阜地区外科懇話会, 羽島市医師会, 羽島郡医師会, 滋賀医科大学, 松坂地区医師会, 消火器疾患フォーラム, 日本病院脳神経外科学会, 横浜市総合リハビリテーションセンター, 志摩市教育委員会, 大阪市北部精神科医懇話会, 日本脳卒中の外科学会, 特定非営利活動法人アスペ・エルデの会, 九州・沖縄喘息フォーラム, 日本循環器学会総会・学術集会, 島根県病院事業, 中部小児科学会, 日本小児科学会, 長野県看護大学, 岐阜商工会議所女性会, 四国管区警察学校, 滋賀県立総合保健専門学校, 各務原市医師会, NPO 法人日本高血圧協会, 飛騨市医師会, 飛騨市, 岡山肝疾患懇話会, 山県医師会, 中濃ブロック薬剤師会, 岐阜県薬剤師会関支部, 瀬戸旭医師会, 揖斐郡医師会, 岐阜県総合医療センター, 和歌山県精神科部会, 和歌山市精神科部会, 大垣内科会, 熊本県救急医療連絡協議会, 西濃 RA 懇話会, 公益社団法人経済同友会国家情報基盤改革委員会, 日本臨床眼科学会, 財団法人横山臨床薬理研究助成基金, 社団法人日本脳卒中協会, 岐阜外科集談会, 旭川医科大学, 日本糖尿病学会九州地方会, 公立大学法人福島県立医科大学)

○学術講演会(岐阜県医師会, 大牟田医師会, 大牟田内科小児科医会, 大牟田精神科医会, 高山市医師会)

○研修会(カルチャーアカデミー岐阜新聞, 岐阜県薬剤師会, 岐阜県病院薬剤師会, 岐阜大学整形外科教室同門会, 岐阜県医師会, 岐阜市医師会, 日本肝臓学会, 岐阜癌研究懇話会, 日本静脈経腸栄養学会 TNT プロジェクト委員会, 岐阜県警察本部, 社団法人もとす医師会, 大垣市 PTA 連合会, 薬剤師会大垣支部, 愛知教育大学附属特別支援学校, 下呂市役所, 岐阜県立希望が丘学園, 岐阜県弁護士会, 岐阜市社会福祉

事業団，高機能広汎性発達障害児親の会，社団法人日本病院会，病院経営管理者協議会，海津市医師会，海津市医師会病院，岐阜県総合医療センター，財団法人福島県文化振興事業団，学校法人生蘭学園生蘭高等専修学校，朝日大学歯学部附属村上記念病院，東京大学医学教育国際協力研究センター，岐阜県精神科病院協会薬剤師会）

○講習会（社団法人神奈川県看護協会，岐阜県医師育成・確保コンソーシアム，岐阜県消防学校，岐阜県眼科医会，岐阜県スポーツ科学トレーニングセンター，岐阜市保健所，鹿児島大学）

○公開講座・市民講座（日本肝臓学会，高山市役所市民保健部健康推進課，関市役所，中日新聞大阪支社，朝日大学，社団法人日本補綴歯科学会，全日本建設交運一般労働組合岐阜農林建設連合支部）

○実地指導（岐阜県健康福祉部）

（看護）

○研修会（特別養護老人ホーム光の園）

4. 奥穂高岳夏山診療所

奥穂高岳夏山診療所は，岐阜県立医科大学時代の 1958 年 7 月に開設され，今年で 51 回目の診療班を派遣したことになる。初年度は資金面での苦勞もあったが，9 班編成で 7 月 10 日から 8 月末まで海拔 3,000 m の雲の上で多くの患者の手当てを行った。

この夏山診療所は，今田重太郎氏（平成 5 年 8 月 31 日逝去 94 歳）の冬季避難小屋であり，無償で提供していただいた。夏山診療所の活動は，NHK の日本まんなか紀行「雲の上の診療所～北アルプス奥穂高岳～」に取り上げられるなど，その活動は学内外に知られるところとなり，本学にとって一つの重要な社会貢献事業となっている。

このように診療活動の功績が認められ，現在，資金面では，GM 会（岐阜大学医学部医学科後援会），財団法人誠仁会，岐阜県山岳遭難対策協議会，長野県山岳遭難対策協議会，奥穂高岳山荘及び高山市からの援助が得られるようになった。

診療所の運営については，1976 年に「奥穂高岳夏山診療所運営に関する申合せ」を制定，さらに，2001 年には「岐阜大学医学部奥穂高岳夏山診療所規程」を制定して，同年設置したスポーツ医・科学分野による高山病の実態追跡調査など，学部を上げて取り組んでいる。

診療班は，医師 2 人，看護師 1 人，学生 4 人を 1 班とする 8 班を編成して 7 月 20 日から 8 月 20 日まで診療活動を行ってきた。また，西日本医科学学生体育大会に参加する学生の都合等により，1992 年からは 7 班編成で 7 月 25 日から実施していたが，7 月 21 日の休日前後を境に入山者が増加する状況もあり，2000 年からは，8 班編成による 7 月 20 日からの派遣に戻している。

夏山診療所として利用している冬季避難小屋は，1995 年に総絵造りで建て替えられ，広さも従来の 1.5 倍となり北アルプス随一の施設となった。

今後も，職員，学生の協力を得て地元，登山者等の希望に応じて継続していきたい。

なお，1998 年 11 月 25 日に（財）ソロプチミスト日本財団より，「平成 10 年度青少年ボランティア賞」を受賞している。また，2008 年 11 月 30 日には，開設 50 周年（2007 年）を記念して，岐阜都ホテルにおいて関係者及び一般の方々を対象に，今田英雄氏（奥穂高岳山荘オーナー）による記念講演会を開催した。

6 岐阜薬科大学との連携

2010 年 4 月の岐阜薬科大学の柳戸地区移転に伴い，より相互連携・共同研究を進めるため，お互いの研究内容を理解しあうことを目的とし相互研究発表会を開催した。2010 年 5 月 12 日より 8 月を除く 12 月 1 日まで全 19 回，毎週水曜日，時間は午後 6：00 - 7：00 の一時間で，会場は医学部本館小会議室で開催した。岐阜大学大学院医学系研究の 44 分野と岐阜薬科大学の 19 分野が参加した。

岐阜大学大学院医学系研究科・岐阜薬科大学相互研究発表会

開催年月日	大学名	分野等	演題
H22.5.12	岐阜大学	細胞情報学	がん細胞死を制御する代謝酵素の解明と阻害剤による制御機構
		分子生理学	蛋白質-水分子間相互作用と NMR 情報
	岐阜薬科大学	生薬学	ポリフェノールと代替医療への展開

開催年月日	大学名	分野等	演題
H22.5.19	岐阜大学	薬理病態学	上皮増殖因子レセプター (EGFR) のセリン残基のリン酸化を分子標的とした大腸発癌予防薬の開発をめざして
		寄生虫学	寄生虫の機能蛋白質の合成と利用
		内分泌代謝病態学	膝島トランスクリプトームを活用した液性因子探索と臨床応用
	岐阜薬科大学	薬理学	アトピー性皮膚炎の病態モデルの作成
H22.6.2	岐阜大学	小児病態学	小児病態学の研究：全体像と自然免疫疾患の病態解析
		病態情報解析医学	サイトカインの動脈硬化に及ぼす影響について
	岐阜薬科大学	薬品分析化学	DNAの損傷を高感度に検出する計測技術の開発と応用
H22.6.9	岐阜大学	解剖学	骨の三次元構造解析と骨粗鬆症
		分子病態学	オーロラキナーゼの細胞分裂における機能とがんにおける異常
		高度先進外科学	作用機序の異なる薬剤による動脈グラフト攣縮予防の実験的検討 - ボツリヌストキシンを中心に -
	岐阜薬科大学	衛生学	胎児期におけるエストロゲンシグナルの gain of function
H22.6.23	岐阜大学	医学教育開発研究センター	医学教育におけるプロフェッショナルリズム教育の開発
		皮膚病態学	皮膚バリア機能研究：角層脂質リピドミクス分析とタイトジャンクション蛋白機能解析
	岐阜薬科大学	生化学	癌マーカーのアルドーケト還元酵素を標的とする制癌剤の開発研究
H22.6.30	岐阜大学	泌尿器科学	尿路・性器感染症：起炎菌と抗菌薬耐性
		麻酔・疼痛制御学	中枢神経系における $\alpha 2$ agonist の作用
		口腔病態学	ヒト歯髄細胞からの iPS 細胞誘導と口腔がんのDNAメチル化異常の解析
	岐阜薬科大学	微生物学	微生物感染が関連する疾患に関する研究 - 潰瘍性大腸炎の発症における腸内細菌の関与について -
H22.7.7	岐阜大学	高次神経形態学	大脳皮質における神経回路の形態学的解析
		生理学	重力生理学：起立性低血圧、酔い
	岐阜薬科大学	薬剤学	アクアポリンのメンブランチラフィッキング制御
H22.7.14	岐阜大学	スポーツ医科学	低酸素環境下における運動について
		神経内科・老年学	メタロチオネインと iPS 細胞を活用した、神経変性疾患 (ALS, アルツハイマー病, パーキンソン病等) の治療薬の開発
		精神病理学	精神疾患におけるニューロイメージング研究
	岐阜薬科大学	臨床薬剤学	活性酸素消去酵素の発現と病態の発症・進展との関連性の解明

開催年月日	大学名	分野等	演題
H22.7.28	岐阜大学	脳神経外科学	頸動脈狭窄症患者における至適抗血小板療法の確立を目指して
		耳鼻咽喉科学	身体平衡制御のメカニズムと障害の研究
	岐阜薬科大学	製剤学	薬物送達システム (DDS) の目指すところとそれを支える製剤研究
H22.9.1	岐阜大学	眼科学	緑内障の機能評価—電気生理学的手法からのアプローチ
		腫瘍病理学	再生医療と腫瘍
		免疫病理学	抗腫瘍免疫
H22.9.15	岐阜大学	実践薬学	降圧剤服用患者の血圧管理に関する意識調査
		腫瘍外科学	最新の癌治療：臨床応用を目指した基礎系研究
H22.9.15	岐阜薬科大学	腫瘍外科学	最新の治療：臨床応用を目指した基礎系研究
		消化器病態学	肝がん予防臨床開発の現況
H22.9.15	岐阜薬科大学	放射化学	食品・嗜好品による環境発がん物質の代謝的活性化に対する修飾作用
H22.9.22	岐阜大学	医療情報学	統合バイオバンクの構築とデータマイニングを用いた医薬品の適正使用支援
		放射線医学	画像診断による悪性腫瘍の早期診断・治療後の評価
		産業衛生学	病院勤務医の勤務状況、日常生活習慣および職業性ストレス
	岐阜薬科大学	薬草園	日本薬局方と薬用植物
H22.9.29	岐阜大学	産科婦人科学	婦人科腫瘍に対する分子標的治療
		総合病態内科学	脂肪増殖と長寿因子
	岐阜薬科大学	薬化学	がんの低酸素微小環境を標的とする創薬研究
H22.10.6	岐阜大学	臨床薬剤学	臨床薬剤業務に基づく研究(がん支持療法, 抗菌薬適正使用)
		救急・災害医学	救急医療情報連携システム
	岐阜薬科大学	薬品化学	重水素標識化合物の触媒的合成法開発とその応用
H22.10.13	岐阜大学	法医学	X染色体上の STR における構造多型について
		疫学・予防医学	大豆イソフラボンの健康影響
	岐阜薬科大学	合成薬品製造学	環境負荷低減を目指す有機合成反応の開発
H22.10.27	岐阜大学	組織・器官形成	幹細胞と再生医療
		神経生物	小胞体ストレスと神経変性疾患
	岐阜薬科大学	分子生物学	神経栄養因子の細胞内シグナル伝達を活用した疾患治療
H22.11.10	岐阜大学	病原体制御学	細菌のゲノム系統分類情報の医療分野への展開
		生命機能分子設計	生体機能探索分子の創製研究
	岐阜薬科大学	薬効解析学	神経細胞死の機序解明並びにその治療薬開発

開催年月日	大学名	分野等	演題
H22.11.24	岐阜大学	知能イメージ情報	医用画像のためのコンピュータ支援診断に関する研究
		循環病態学	心血管再生医学と医療
H22.12.1	岐阜大学	薬品物理化学	低温プラズマ加工技術を利用するバイオマテリアル表面の設計と開発
		医学系倫理・社会医学	医学系倫理の動向について
	岐阜薬科大学	整形外科学	脊髄損傷に対する不飽和脂肪酸の治療効果についての研究
	岐阜薬科大学	薬用資源学	天然フェノール化合物の chemodiversity について

7 管理運営，財政

1. 教授会(教授会議)，各種委員会の構成と活動状況

(1) 教授会(教授会議)の構成員，任務，意志決定方法，意志伝達方法

教授会(教授会議)

教育研究機関としての医学部の管理・運営に関する重要事項を審議・決定する最高審議機関として、また本学部の自主的自律的意思形成すなわち自治の基礎をなす審議機関として医学部教授会が置かれていたが、看護学科の設置(平成12年10月)、医学科の大学院部局化(講座化)による医学研究科の改組(平成16年4月)、更に、看護学専攻修士課程の設置(平成17年4月)及び同専攻の設置に伴い医学研究科を医学系研究科に改称し、医学系研究科・医学部それぞれの自主性を尊重して、岐阜大学運営組織規則第18条第6項の規定に基づき、医学系研究科及び医学部教授会に代議員会等の位置づけとして医学研究科・看護学専攻教授会議並びに医学科・看護学科教授会議を置き、それぞれの専攻・学科の最高審議機関としている。

なお、教授会は、必要が生じた場合に医学系研究科教授会は医学系研究科長が、医学部教授会は医学部長がそれぞれ招集し、開催することとした。

組織運営等については、岐阜大学運営組織規則、岐阜大学大学院医学系研究科・医学部運営組織規程、岐阜大学大学院医学系研究科教授会規程及び岐阜大学医学部教授会規程により明文化している。

教授会議では、中期計画及び年度計画、予算配分及び決算、教育系職員人事、教育研究戦略、教育研究方法及び教育研究組織、教育課程の編成、学生の入学、卒業又は課程の修了、在籍及び学位の授与及び教育又は研究に関する重要事項を中心とした管理運営上必要な事項が審議される。また、教授会議で審議される事項の中の重要な案件については、岐阜大学並びに医学系研究科・医学部に常置されている各種委員会で審議された内容の報告を受け、さらに、医学研究科教授会議においては、必要に応じ准教授・講師会(准講会)及び助教会に諮問し、その答申を受け、それらを参考としてそれぞれの教授会議で審議し、医学系研究科・医学部としての意志を決定し、かつ、決定された案件については、それぞれ各分野・講座等に伝達されている。

組織

1. 教授会議

- (1) 研究科長・専攻長及び学科長が招集する。
- (2) 教授会規程第3条に規定する審議事項のうち、教授会が定める事項については、教授会議で審議した結果をもって教授会の議決とすることができるものとする。
- (3) 構成員：医学研究科教授会議(医学系研究科及び医学教育開発研究センターの専任の教授)看護学科教授会議(看護学科の専任の教授)
- (4) 成立要件：構成員の3分の2以上
- (5) 議決要件：出席者の過半数。ただし、重要な事項(主に教員人事)にあつては出席者の3分の2以上

人事

1. 医学系研究科長と医学科長の兼任について
医学系研究科長は、医学科長を兼任し、医学系研究科教授会の議長となる。
2. 教員選考

- (1) 医学研究科及び看護学科の自主性を尊重するため、教授以下全ての教員選考をそれぞれの教授会議の審議事項とする。
- (2) 選考規程等については、医学研究科及び看護学科で独自に制定する。

(2) 各種委員会の設置年度、任務(運営方針)、意志決定方法、意志伝達方法

教授会議の意志決定を円滑にし、医学系研究科及び看護学科の組織の機能を十分に果たすため、岐阜大学大学院医学系研究科・医学部常置委員会規程により、それぞれ及び共通の各種委員会が組織されている。各種委員会の運営等は部局内細則等により明文化され、各委員会の審議結果等は、各教授会議に諮られた後、各分野・講座等に伝達されている。

各種委員会一覧

(医学系研究科・医学部)

名称	任期	人数	審議事項等	設置年度
企画委員会	—	9人	医学系研究科・医学部の円滑な管理運営に関する事。	平成16年度
自己評価委員会	2年	11人	中期目標及び中期計画に関する事。	平成16年度
情報委員会	2年	9人	情報ネットワークシステムの利用、広報活動及び国際交流等に関する事。	平成16年度
環境設備・共通スペース委員会	2年	5人	環境保全の実施及び施設設備の活用に関する事。	平成16年度
学務委員会	1年	10人	学生の教務・厚生及び学位授与に関する事。	平成16年度
動物実験審査委員会	2年	10人	動物実験施設の利用及び環境保全に関する事。	平成16年度
医学研究等倫理審査委員会	2年	12人	研究の目的及び計画について、倫理的・社会的観点から審査する事。	平成16年度
ヒトES細胞に関する倫理審査委員会	2年	7人	ヒトES細胞に関する研究の目的及び計画について、倫理的・社会的観点から審査する事。	平成16年度
医学部・同附属病院合同防災管理委員会	2年	13人	防災管理に関する事。	平成16年度
教務厚生委員会	1年	9人	学生の教務及び厚生に関する事。	平成16年度
入学試験委員会	1年	7人	入学者選抜と実施方針に関する事。	平成16年度
カリキュラム委員会	2年	8人	教育課程に関する事。	平成16年度
兼業審査委員会	2年	6人	職員の兼業の取扱いに関する事。	平成16年度
医学研究科・医学部オープンラボラトリー利用審査委員会	2年	7人	オープンラボラトリー使用者の評価選考方針に基づく審査に関する事。	平成16年度
医学教育開発研究センター運営協議会	2年	11人	事業の基本方針、研究計画及び共同利用に関する事。	平成16年度
医学教育開発研究センター運営委員会	2年	13人	医学教育開発研究センターの組織運営等及び人事に関する事。	平成16年度
医学系研究科・医学部安全衛生管理委員会	2年	8人	職員の安全衛生の確保及び改善に関する事。	平成17年度
医学系研究科遺伝子治療臨床研究倫理審査委員会	2年	10人以上 20人以内	遺伝子治療臨床検査について生命倫理及び医療の倫理に関する事項が法令等を遵守しているか審査する事。	平成19年度

名称	任期	人数	審議事項等	設置年度
医学系研究科・医学部地域医療医学センター運営委員会	2年	15人	地域医療医学センターの業務・運営及び人事に関する事。	平成19年度
医学系研究科・医学部将来計画委員会	—	7人	中期目標計画と将来構想及び分野等の新設・整備に関する事。	平成20年度

(看護学専攻・看護学科)

名称	任期	人数	審議事項等	設置年度
学務委員会	2年	5人	学生の教務・厚生及び学位授与に関する事。	平成17年度
教務厚生委員会	2年	10人	学生の教務及び厚生に関する事。	平成13年度
入学試験委員会	2年	8人	入学者選抜に関する事。	平成12年度
実習委員会	2年	11人	臨地実習に関する事。	平成14年度
将来計画委員会	2年	6人	将来構想に関する事。	平成13年度
広報・情報処理委員会	2年	6人	広報・情報処理に関する事。	平成13年度
予算配分委員会	2年	8人	予算配分に関する事。	平成15年度
機種選定委員会	2年	7人	物品の仕様、規格と教育・研究目的との関連に関する事。	平成15年度
修士論文倫理審査小委員会	1年	5人以上 6人以内	学生の研究計画の審査、実施中の研究等についての研究計画の変更、研究中止等の意見の進言等に関する事。	平成17年度
ファカルティ・ディベロップメント委員会	2年	5人	FDに関する活動の企画、実施、支援、推進及び情報収集に関する事。	平成19年度

2. 教育・研究に関する意志決定方法と体制

(1) 教育に関する意志決定システム

教育内容については、入学試験、教育カリキュラムの基礎構成や将来計画について医学系研究科又は看護学科で組織するそれぞれの将来計画委員会、教務厚生委員会、入学試験委員会、及び医学系研究科・医学部企画委員会、看護学科実習委員会等の審議に基づいて、各教授会議で最終的に決定している。

(2) 研究に関する意志決定システム

研究内容については、各分野・講座・診療科・教育研究施設等で検討し、決定している。

なお、医学系研究科・医学部全体に共通する事項は、医学系研究科・医学部企画委員会、医学研究等倫理審査委員会等の委員会での検討に基づき、医学系研究科教授会又は医学部教授会で最終決定している。

3. 事務組織と事務職員の配置状況

(1) 現状

昭和57年度に医学部及び同附属病院の事務部を統合した医学部事務部4課体制を、国立大学の法人化に伴い、医学研究科・医学部事務部と事務局病院部(平成17年4月より病院事務部)に分離・改編した。

医学研究科・医学部の事務組織は、事務長のもと事務長補佐及び特命の専門員等並びに6係体制としたが、効率的な管理運営を図るため、平成16年7月には特命の専門員等を廃止し、10係体制とした。平成17年4月からは、医学研究科・医学部事務部において担当していた人事関係事務を医学部と附属病院に分離し、病院人事担当係を附属病院事務部に移行等進め9係とし、また、看護学専攻の設置に伴い事務部の名称を「医学系研究科・医学部事務部」と改称、平成18年3月に技術室を設置、平成18年4月には、業務の統廃合に伴い研究協力係及び企画係の2係を廃止し7係とし、平成19年8月に研究支援体制強化のため新たに研究支援係を設置した。その後、平成21年8月に看護学科担当事務長補佐を新設し、平成22

年 8 月には、学務専門員を新設、大学院係を廃止し、学務第 1 係を医学科学務係に、学務第 2 係を看護学科学務係に再構築し、7 係及び技術室の体制で現在に至っている。

事務部としてさらに効率化を図るため、係等の統合再編を進めるべく平成 16 年度から進めている担当部局との折衝を今後も継続していく。

一方、医学系研究科の講座・分野等における研究補助及び事務補助のため、事務系及び技術・技能系職員が配置されているが、高額の人件費を抑制するため、分野付きパート職員の削減に向けて積極的に取り組んでいる。

(2) 点検・評価

予算・人事等が交錯する医学部及び同附属病院の事務を分離することによるメリット・デメリットを考慮しつつ、病院経営に配慮し事務体制の効率化を図ることが必要であり、人事マネジメントの観点から病院人事担当係を平成 17 年度から附属病院事務部に移すなどの評価・見直しを実施してきた。医学系研究科・医学部事務部としては、教育職員の研究・教育・診療をサポートするため業務の見直し・点検を進めている。

(3) 改善・改革と展望

研究科長の指導の下、研究協力事務・入試事務等の改善を行った。医学部及び同附属病院の事務の共通事項については、共同して業務に当たる等の業務に当たっており、今後も業務の改善・組織改革等、特に入試関係事務の強化について積極的に進めていくこととしている。

4. 予算編成と執行(配分)の方針と状況

平成 15 年度までの医学系研究科・医学部及び附属病院の予算は、国立学校特別会計により、運営に必要な経費が歳出予算として、また、附属病院収入・授業料収入等が歳入予算として計上され、予算の編成については、文部科学省から示された概算要求の方針に基づき、医学系研究科・医学部については、教授会、附属病院については科長会議において検討し、文部科学省に概算要求を行っていた。

国立大学法人となった今、予算の編成については、文部科学省から配分される運営費交付金と附属病院収入・授業料収入等の自己収入により運営に必要な歳出経費を賄うこととなり、当該年度の事業計画に基づき予算額の確定後に事務局において大学共通経費が控除され、部局の予算が確定する。これを受けて、医学系研究科・医学部については各施設等の運営費を含め企画委員会で審議し、教授会議において審議決定された予算配分方式により各分野に配分を行う。

当初予算の配分については、以上のとおりであるが、当初予算以外の予算については、それぞれの事項指定の目的に従い配分する。

医学部看護学科の予算については、各施設等の運営費を含め予算配分委員会で審議し、教授会議において審議決定された予算配分方式により配分を行う。

なお、看護学科の配分方針の概要は以下のとおりである。

示達された予算額から看護学科の共通経常経費を除いた予算額を学生関係経費、教育研究経費及び特別経費に分け目的に従い配分する。その中で、教育研究経費については、各教員ごとに配分している。

また、当初予算以外の予算については、それぞれの事項指定の目的に従い配分する。

現在までの改善見直しについて

独立行政法人化により、さらなる大学改革が求められている中、医学系研究科・医学部にあっては、光熱水料の節減等を行うなどして一般管理費の削減に取り組む等、効率のよい予算編成及び執行の実現に向けて取り組んできた。今後も引き続き、経費の節減等改革改善に取り組み実現を図ることとしている。

今後に向けての提言

大学を取り巻く社会的環境は、法人化及び医療制度改革などと相まって、非常に厳しいものとなっている。

こうした状況の中、医学系研究科・医学部及び附属病院は、平成 16 年 6 月に岐阜大学柳戸団地西隣に移転・新築し開院したが、移転後の建物面積、機械・設備等の規模が大幅に増加しており、光熱水料、業務委託費、設備保守料等の管理運営経費が大幅に増加している。

法人化後の運営費は国から配分される運営費交付金と授業料・病院収入等の自己収入で賄うため、その中でも病院収入の占める割合が高く、大学の円滑な運営を図るためには、病院の経営改善等による収入増

対策が急務となっている。

このように限られた予算の中で大学運営を行うため、予算編成においては教育研究の充実・活性化を図るため、さらなる経費の合理化、節減化に努めることとしている。

Ⅲ 医学部医学科

1 教育の理念・目標等

1. 教育の理念と目標

医学科は、学生が将来それぞれ保健・医療に貢献し、医学の発展に寄与することができるように、以下の4項目を達成することを教育の理念・目標としている。

- ① 将来医学関係のいずれの領域に進むうえにも必要な、基礎的知識と基本的技能を修得する。
- ② 生涯にわたって発展させるべき、保健・医療の専門職に必要な基本的態度・習慣を身につける。
- ③ 医学的問題を正しくとらえ、自然科学的のみならず、社会的・心理的方法を統合して解決するための基本的能力を修得する。
- ④ 知識・技能・態度を自ら評価し、かつ自発的学習と修練によって、それらを向上し続ける習慣を身につける。

2. 教育の活性化と充実の経過

医学・医療の急速な進展及び多様化する社会的要請に応えることができると期待される医師・創造力豊かな医学研究者を育成するため、常に、基礎的な分析能力技術の修得、幅広い医学、医療の現状認識、歴史的発展過程の把握及び将来への展望を意識させるとともに問題解決への応用能力の開発に力を注いでいる。

このため1年次生から医学・医療への関心を高める方策として、医学科専任教員による医学概論、医学基礎科目、生命科学実習、初期体験実習、地域体験実習、医学英語などの授業科目を開講している。

現行の医学科の教育形態は、医学科教務厚生委員会カリキュラム部会(従前：カリキュラム委員会)において鋭意検討の上、その基本方針が確立されたもので、平成7年度から「能動型・思考促進型」教育手法であるテュートリアル教育を主体とした少人数教育を採用・実施している。

臨床実習は、平成9年4月から5年次の全学期をクリニカル・クラークシップ型臨床実習とし、同10年度から6年次1学期の約40日間を客員臨床系医学教授等の指導の下で、関連教育病院での院外実習(学外実習)を実施してきた。平成13年3月の医学における教育プログラム研究・開発事業委員会から提示された「医学教育モデル・コア・カリキュラム」に基づき、その内容に沿った教育内容の見直しを行い、平成16年度のキャンパス移転、新病院の開院に伴い、院内臨床実習を4週間1ブロックとして、クラークシップの一層の推進を図った。平成20年度から地域枠入試の導入とともに、学生定員が80名から年々増員となり(平成22年度から107名)、最新の知見に基づくカリキュラムの再度の大幅な見直しが行われ、研究体験と選択授業の拡充、6年一貫のプロフェッショナル教育が開始された。特に臨床実習は、実施開始を4年次2学期後半からとし、実習期間を院内で42週、院内外実習を5年3学期から20週に拡大し、更なる充実を図っている。

以上のような教育体制の改革により、6年間の医学教育を集大成し、学生が、自ら学習する姿勢を修得すること及び個々の患者を通して集学的に学習できるシステムが整った。その効果があって、医師国家試験合格率は常に良好な成績を達成している。

3. 教育の将来構想

(1) 基本理念

近年の先端技術を含む広範な科学技術の進歩に伴う医学・医療の進歩並びに高齢化社会の到来や生活様式の変化に伴う疾病構造の変化など、医学教育・研究の両面における質的・量的な変化には著しいものがあり、この傾向は21世紀に入ったこれからも一層進むものと考えられる。

これらに対応すべく、広範で、しかも高度な医学知識・技術を精選して修得させることも必須ではあるが、多様化する社会的要請に応え得る人間性豊かで倫理観に富む良き医師、創造力豊かな医学研究者の育成を医学教育の基本理念としている。

(2) 教育体制

知・情・意が調和し、かつ、全人的立場に立ってものを見ることができる医師・医学研究者育成を目指した教育をすることを目標にする。また、世界の中の日本、日本の中の東海地方、東海地方の中の岐阜という位置付けを考慮しながら、地域に密着した医療に貢献できる医師の育成も念頭におき、生命科学としての医学のみならず医の倫理・医療経済等、社会科学的側面を重視して教育する。

以上の方針を基に、次の点を考慮して教育することが必要である。

- ① 医学・医療の進展に伴って、その専門化・細分化が進んでいるとともに医学の枠組を超えた学際的な領域の重要性も増してきたため、必然的に多量の知識及び技術を修得させる必要が生じてきている。しかしながら、単なる知識及び技術を蓄積させることに偏ることなく、主体性や創造性の育成、問題解決能力の涵養、医学・医療に対する総合的視野を持つ人材の育成等に十分配慮する。
- ② 分子生物学・分子遺伝学を始めとして医学周辺科学の著しい進展とそれらの医学・医療への導入によって、ややもすると技術優先の傾向が見られるが、心身両面からの包括的医学・医療を目指し、生命に対して深い畏敬の念をもち、患者や患者の家族の立場に立って診療を行える人間性豊かな医師の育成、すなわち医師としての倫理観の醸成、人格形成に配慮する。
- ③ 医学・医療の進展に対して常時関心を持ち、新しい知識・技術の適用に関して的確な判断力を培うために、生涯にわたって学習を継続していく習慣と広く関連諸科学にも常に向学心を持つ態度を修得させることに配慮する。
- ④ 地域医療に関心を寄せ、地域住民の疾病の予防から治癒後の社会復帰に至る医療全般に責任を有することを自覚させる。必要に応じて地域医療の中での教育的役割を果たしていくことが必要である。また、地域医療に貢献するためにもプライマリ・ケアを重視し、総合的に医学を修得させることに配慮する。
- ⑤ 医学・医療の場における国際交流も急激に増加しており、また、開発途上国に対する国際医療協力の必要性も高まってきている。したがって、これら国際的にも活躍できる医師・医学研究者の育成に配慮する。

2 教育活動

1. 学生の受入れ

(1) 学生募集の方法

- ① 学務部入試課から、全学一括で学生募集要項及び入学者選抜に関する要項を県下各高等学校を中心に郵送配布するとともに、希望者に対し直接又は郵送で同要項を配布している。
- ② 医学科紹介パンフレット「医学を志す皆さんへ(医学生に望ましい資質)」及び「テュートリアル・システム」を作成し、オープンキャンパス参加者及び高等学校、予備校等に配布している。
- ③ オープンキャンパスにおいて、医学部長、医学科教務厚生委員長の概要説明、模擬授業、施設見学等を実施し、さらに効果的な紹介とするため参加者からのアンケートを参考に、医学科教務厚生委員会において計画立案を行っている。
- ④ 高等学校の総合授業の一環としてではあるが、岐阜県下の高等学校へ出向き、本学科教員の研究テーマやトピックスの紹介を出前授業として行っている。
- ⑤ 情報交換の場として、岐阜県下、愛知県及び三重県の高等学校の進路指導担当の教諭との懇談会を毎年開催している。
- ⑥ 地域枠入試に関する情報提供のために、高校生を対象とした説明会を実施している。
- ⑦ その他、受験雑誌社等の照会に対応するとともに、私塾主催の入試説明会に医学科教務厚生委員、医学科入学試験委員を派遣し、積極的に取り組んでいる。

(2) 入学者選抜の方法と方針

医学生として望ましい学生を入学させるため、入学者の選抜については長年研究を重ね、入試教科・科目の選定を行っている。

大学入試センター試験を導入した平成2年度以降の推移は次のとおりである。

- | | | | |
|-------|---------------------------------|------|--------------------------------------|
| 平成2年度 | ① 推薦選抜を導入 | 募集人員 | 5人以内 |
| | | 募集要件 | 高校学習成績概評 |
| | | 推薦枠 | 2人以内(1校につき) |
| | | 選抜方法 | 入試センター試験、面接、小論文 |
| | ② 個別学力検査の教科及びセンター試験を含む教科別配点の見直し | | |
| | | | 理科を個別学力検査から削除し、入試センター試験(数学、外国語)の傾斜配点 |
| 平成5年度 | ① 推薦選抜の見直し | 募集人員 | 5人 |

募集要件 高校学習成績概評 A 以上
推薦枠撤廃

② 分離・分割制の導入

		前期日程	募集人員 65 人
		選抜方法	入試センター試験、個別試験(数学、外国語)及び調査書
			後期日程募集人員 10 人
平成 7 年度	募集人員の見直し	選抜方法	入試センター試験、小論文、面接及び調査書
		推薦入学	15 人
		前期日程	55 人
		後期日程	10 人
平成 9 年度	個別学力検査の教科及び入試センター試験を含む教科別配点の見直し		
			理科を個別学力検査に取り入れ、入試センター試験(数学、理科、外国語)の傾斜配点
平成 14 年度	推薦入学Ⅱ特別選抜		傾斜配点した入試センター試験(数学、理科、外国語)の合計 85%を基準点として公表
平成 19 年度	一般選抜の募集人員の変更		
		前期日程	55 人⇒30 人 後期日程 10 人⇒35 人
平成 20 年度	① 地域枠推薦の導入		推薦入学Ⅱ特別選抜として10 人
		選抜方法	: センター試験、面接、小論文
		推薦枠	: 1 校 1 名
	② 入学定員の増加		地域枠 10 人追加により入学定員 80 人⇒90 人
平成 21 年度	① 地域枠推薦入学		定員の増加 10 人⇒15 人
		推薦枠	: 1 校 2 名以内
	② 後期日程		募集人員の増加 35 人⇒40 人
	③ 入学定員の増加		90 人⇒100 人
平成 22 年度	① 地域枠推薦入学		定員の増加 15 人⇒25 人
		推薦枠	: 1 校 7 名内
	② 一般選抜の募集人員の変更		
		前期日程	30 人⇒32 人 後期日程 40 人⇒35 人
	③ 入学定員の増加		100 人⇒107 人

(3) 学生の受入れ状況

学生定員充足状況：過去 8 年間の入学(志願者・入学者)に関する状況は、次表のとおりである。

区分	性別	志願者数	受験者数	入学者数	入学者出身県別内訳			
					岐阜県	愛知県	三重県	その他
17 年度	男	436	350	50	16	18	1	15
	女	237	201	31	8	15		8
	計	673	551	81	24	33	1	23
18 年度	男	863	751	61	15	19	1	26
	女	327	294	19	4	11		4
	計	1,190	1,045	80	19	30	1	30
19 年度	男	2,592	1,981	63	12	18		33
	女	788	645	17	4	6	1	6
	計	3,380	2,626	80	16	24	1	39
20 年度	男	2,296	1,845	66	20	19	2	25
	女	751	626	24	9	8		7
	計	3,047	2,471	90	29	27	2	32
21 年度	男	2,716	2,101	77	16	19	1	41
	女	861	713	24	8	8	1	7
	計	3,577	2,814	101	24	27	2	48

区分	性別	志願者数	受験者数	入学者数	入学者出身県別内訳			
					岐阜県	愛知県	三重県	その他
22年度	男	2,575	1,980	81	24	24		33
	女	881	725	26	9	8		9
	計	3,456	2,705	107	33	32		42
23年度	男	3,084	2,285	87	27	23		37
	女	1,113	866	21	8	7		6
	計	4,197	3,151	108	35	30		43

(4) 編入学制度と実態

学則において、再入学、編入学及び転入学による学生の受入制度を定めているが、医学部医学科では当制度は行っていない。しかし、他大学他学部を卒業した学生が毎年数名入学している。

(5) 研究生の受入れと実態

過去5年間にわたる研究生の受入状況は、次表のとおりである。

区分	入学者数			期間延長者数			計
	基礎系	臨床系	社会医学系	基礎系	臨床系	社会医学系	
19年度	2 (1)	19 (5)		12 (1)	61	4	98 (7)
20年度	1 (1)	13 (2)	1	14	42 (1)	4	75 (4)
21年度	2	13 (2)		10	42 (1)	8	75 (3)
22年度	1 (1)	8		9 (1)	28 (1)	4	50 (3)
23年度		8 (2)		8	28	3	47 (2)

()内は、留学生を内数で示す。

大学院研究生を含む。

2. カリキュラム

(1) カリキュラムの編成方針

カリキュラムの基本的な編成方針は、次のような視点に立ち行っている。

- ① 教養教育と専門教育の有機的連携によって6年一貫教育を充実する。
- ② カリキュラムの編成に当たっては、各専門分野の連携を強化するとともに学際的分野をも考慮しつつ、医学教育の総合性の確立及び学習効率の向上を図る。
- ③ 専門教育においては基礎医学実習、社会医学実習及び臨床医学実習を重視し、テュートリアルシステム主体の教育とする。また、セミナー等の少人数教育を活用して、情動面を含む教員と学生の緊密化及び討議による能動的学習によって問題解決能力の醸成を図り、密度の濃い知識習得をめざす。平成20年度にはカリキュラムの全体的見直しを行い、テュートリアルコース等の編成を変更した。
- ④ 授業の実施に当たっては、コンピュータ、ビデオ等の学習に効果的な教育機器の活用を図るとともに、学生の自主的利用を推進し、教育の効率化に資している。6年一貫教育としてテュートリアル教育のカリキュラムに加え、医学を学ぶに当たっての動機を高め、テュートリアル開始前の基礎知識の獲得を目的として、医学概論、初期体験実習、医学英語、基礎生理学、基礎生化学、生命科学実習、地域体験実習などの授業を開講している。

医学概論は、1年次学生(医学科、看護学科合同)を対象とし、医学部長、病院長も加わり、6年間の医学教育課程の開始に当り、医学とは何か、人間(生命)の本質とは何か、医学の成り立ち、医学と看護との関係、医学の現状と将来の展望(高度先進医学、地域医療など)、医療人として求められる能力、国・地域・国際社会の仕組みと医学の関係、薬害被害者の声など、医学の根本に関わる事項を理解することを目標に実施している。また、医学科1年次での初期体験実習では、病院、福祉施設、保健施設等の見学にとどまらず、実際に介護体験などを行う。1年次後期の地域体験実習では保育所園児、妊産婦、高齢者などと6週間にわたり継続的に関わり、コミュニケーションの取り方を学び、ライフサイクルに対する理解を深める。

- ⑤ 教養教育では、平成24年度から再編成が計画され、人文科学、社会科学における必修単位が増えることに伴い、医学部生にとって基盤形成につながる(「生と死の哲学」など)科目を新たに開講することと

した。一方、従来の総合科目は、複合領域として再構築されるが、既存の単独講座では組めない科目をあてはめている。すなわち、遺伝医学、先端基礎医学、臨床免疫学、リハビリテーション医学、スポーツ医学、温泉医学、救急医学、老年医学（ターミナル・ケアを含む）、臨床栄養学等に関して、複数の関連講座との調整を図りながら、包括的なカリキュラムを組むこととしている。

○ テュートリアルコース指導教員等（平成 23 年度）

コース名		指導教員	授業週数
1	人体構造学	○千田	10
2	代謝・機能学	○恵良，長岡，森田，中島	6
3	病原体学	○江崎，高橋，出口，	5
4	薬理・中毒学	○小澤，飯田	4
5	病理学	○原	3
6	神経・精神・行動学	○山口，岩間，塩入，犬塚	8
7	地域・産業保健学	○永田，松岡，森脇，石塚	2
8	循環器・呼吸器・腎尿路学	○湊口，出口	8
9	消化器・検査医学・血液腫瘍学	○森脇，高見，近藤，清島（満），柴田，吉田	6
10	内分泌・代謝学	○武田，清島（満）	4
11	成育	○近藤，森重	6
12	生命倫理・法医学	○武内，塚田	1
13	皮膚科学	○清島（眞）	2
14	免疫応答学	○武田，高見，近藤，石塚，清島（眞）	2
15	感覚器医学	○伊藤，山本	4
16	運動器学	○清水，松岡	3
17	麻酔・救急・疼痛学	○飯田，小倉	3
		計	77

○印は、コース主任代表を示す。

(2) 教育活動の実施内容と方法

医学科では医学教育の目標として、人間性豊かで生涯学習する医療人及び先端的で創造的研究を推進する医学研究者の育成にポイントを置き、生命科学としての医学のほかに、医の倫理・医療経済等の心理・社会科学的側面を重視する。学生が将来それぞれ保健・医療及び医学分野に貢献し、医学の発展に寄与することができるようになるために、卒業時に以下の 5 項目を達成することをねらいとする。

① 将来医学関係のいずれの領域に進む上にも必要な、基礎知識「(イ)人間の心身の正常な発育・構造・機能、(ロ)発育・構造・機能の高頻度の異状、(ハ)保健・医療における人間と地域・文化・社会・環境、(ニ)人間に有益又は有害に作用する物理的・化学的・生物的・心理的・社会的・文化的諸因子、(ホ)高頻度疾患・主要疾患の診断とそれらの治療の概略、(ヘ)緊急疾患の診断と応急処置、(ト)疾患の予防、(チ)リハビリテーション、(リ)保健・医療システム(保健・福祉資源を含む)」と基本技能「(イ)問診、(ロ)理学的方法による正常と異常の鑑別、(ハ)一般的装置を用いる診断法、(ニ)基本的臨床検査の実施法・選択・解釈と特殊検査法の実施法・解釈、(ホ)臨床データの収集・整理・記録、(ヘ)臨床問題の認識と診断計画の設定と評価、(ト)基本的治療手技、(チ)患者・家族とのコミュニケーション」を修得する。

② 生涯にわたって発展させるべき保健・医療の専門職に必要な基本的態度・習慣「(イ)医学・保健・医療の問題に取り組む積極的態度、(ロ)医学・保健・医療の専門職としての社会への責任感、(ハ)社会・環境の中の複合的存在として人間を把握する態度、(ニ)保健・予防・社会復帰を含む包括的なものとして医療を把握する態度、(ホ)患者及びその家族に対する理解的態度、(ヘ)患者及びその家族との信頼関係を醸成する習慣、(ト)総合的・科学的かつ沈着・冷静な問題解決態度、(チ)自己の能力限界の認識と適切な専門家に対して助言を依頼する習慣、(リ)チーム医療・チーム研究における協調的ないし指導的態度」を身につける。

- ③ 医学的問題を正しくとらえ、自然科学のみならず、社会的・心理学的方法を統合して解決するための基本的能力を修得する。
- ④ 知識・技能・態度を自ら評価し、かつ自発的学習と修練によって、それらを向上し続ける習慣を身につける。
- ⑤ 臨床実習を受けるにあたり、4年次9月(テュートリアル17コース終了後)に行う共用試験 CBT, OSCE を受験し、合格しなければならない。

本学科では6年一貫教育体制をとり、入学後の早い時期から医学生としての自覚を促し、自主的・積極的な学習態度や医師としての基本的態度を身につけるために、初期体験実習、地域体験実習を実施しており、さらに学生の自主的学習態度を育て、医学研究への意欲を養うために、テュートリアル選択コースとして学生を研究室に配属させ自由研究の期間を設けている。

医学教育方法については、自主学習と問題解決型教育を重視し、講義時間の短縮と重要事項の重点教育、少人数グループによるテュートリアル教育を推進している。さらに、社会的要請が強い教育項目、すなわち、医療倫理、社会医学、情報医学、医用工学、救急医学、プライマリ・ケア、老年医学などを重視している。臨床実習はクリニカル・クラークシップ方式を重視し、院内外の選択実習の拡充に努めているが、臨床実習の充実のためには教育に関与する教員の確保、教育組織の整備、附属病院と関連病院における臨床教育スタッフの確保が今後の問題である。大学病院の組織・施設・整備などの整備拡充及び関連研修病院との協力体制は卒前臨床実習の他、生涯教育を含めての臨床研修のために重要である。

豊富な臨床経験を有する学外の医師に、臨床教育への協力を依頼するため、平成8年度から「客員臨床系医学教授、客員臨床系医学助教授(平成19年度から臨床准教授に名称変更)及び客員臨床系医学講師」の制度を設けた。平成10年度からは、6年次学生の学外臨床実習を開始したことに伴い、学外実習を対象とする客員臨床系医学教授等の制度を設けた。平成12年10月1日の医学部看護学科設置に伴い、「岐阜大学医学部医学科客員臨床系医学教授等の称号の付与に関する選考基準」を整備した。

平成12年度以降の称号付与者数とその内訳は、次表のとおりである。

○ 客員臨床系医学教授等称号付与数

区 分	臨床教授	臨床准教授	臨床講師	計
15年度	28	35	43	106
16年度	29	34	43	106
17年度	32	37	46	115
18年度	35	39	47	121
19年度	39	37	47	123
20年度	64	36	43	143
21年度	56	56	21年度から廃止	112
22年度	67	61		128
23年度	71	66		137

(3) 課題と展望

本学の医学教育は、かつては講座別に授業科目が設定され、縦割りの授業が実施されていたが、平成7年度からテュートリアル教育法を導入し、基礎・臨床の講座の枠を取り払った統合型の教育法を全国の医学部に先駆けて実施してきた。同教育法を導入後、既に16年が経過し、その間、教員の教育経験も蓄積され、よりの確で効果的な教育・指導が可能となり、カリキュラムの教材開発も進んできた。

学生のテュートリアルに対する対応も定着してきたが、教員の異動や課題の変更に伴い、年度ごとに発生する様々な問題点に対応し、改革を継続している。導入初期のコースの変更、統廃合、期間の変更等、改革を重ね、現在17コース、77週のテュートリアルが実施されている。

このような医学科のカリキュラムの改革には、長期的展望にたつてカリキュラムの在り方を検討する医学科カリキュラム委員会を常設し、医学教育開発研究センター(MEDC)、医学教育企画開発室、教務厚生委員会と協力し、改革に当たっている。

現在、医学部のカリキュラム改革の大きな流れは、臨床教育の改善、医師としてのプロフェッショナル教育、医学研究者の育成、地域医療などに向いており、社会の新しい要求に沿って、下記のような重点課

題を掲げて教育改革を推進してきた。

- 1) 臨床実習開始前の臨床準備教育の拡充とその評価システムの導入
- 2) クリニカル・クラークシップの一層の推進
- 3) 大学病院および地域医療機関における選択臨床実習の拡充
- 4) シミュレーション教育と模擬患者制度の導入
- 5) 6年一貫のプロフェッショナル教育の導入
- 6) テュートリアル選択コースにおける研究体験の拡充
- 7) 地域体験実習、地域配属などの導入

テュートリアル・システムは自学自習を基本にしており、従前にも増して、効率化した医学・医療情報提供システム等の学習支援体制が必要であり、テュートリアル症例・シラバスの提示、OSCE・シミュレーション教育用動画などを提供できるサーバーシステムを構築しつつある。

3. 教育方針

(1) 教育改革

21世紀における医療人育成の考え方は、平成8年6月13日の21世紀医学・医療懇談会の第一次報告「21世紀の命と健康を守る医療人の育成を目指して」に以下のとおり示されている。

- ・ 医療人としての能力・適性に留意した人材選考
- ・ 人間性豊かな医療人
- ・ 患者中心、患者本位の立場に立った医療人
- ・ 多様な環境の中で育つ医療人
- ・ 生涯学習する医療人
- ・ 地球人として活動する医療人

その後、第2次報告(平成9年2月)、第3次報告(平成9年7月)及び第4次報告(平成11年2月)が公表され、この提言を先取りする形で本学の教育改革がなされてきた。

膨大な医学知識を単に教授し、詰め込むだけの教育では急速な医学の進歩と社会のニーズに対応できる医師、医学者を育成することは不可能である。本学部においては、期待される医療人の育成を目指して学部教育の改善に鋭意取り組み、平成7年度入学生から、少人数・問題解決型教育であるテュートリアルシステムを導入し、臨床教育の改革にも取り組んできた。

平成7年度入学生から導入したカリキュラムでは、以下のような改革がなされた。

- ・ 少人数・問題解決型テュートリアル・システム(2～4年次)
- ・ 医療人としての目的意識を高めるための初期体験実習Ⅰ(Early Exposure I)(1年次)
- ・ リサーチマインドを醸成するための選択テュートリアル(基礎医学・社会医学セミナー)(3年次)
- ・ 医療人に必須な医学英語(1年次)
- ・ 知識・態度・技能の習得を目指した診療参加型クリニカル・クラークシップ(4～6年次)
- ・ 多様な地域医療環境の中での学習経験を図る学外臨床実習(5～6年次)

このカリキュラムの核となるテュートリアルシステムは、暗記に頼る過剰な断片的知識、基礎医学と臨床医学の乖離、学生が積極的に授業参加しない等の教育上の欠陥を改善すべく導入されたもので、患者情報をモデル化した課題を通して、学習への動機を高揚し、問題発見能力、問題解決能力及び洞察力を高め、生涯学習につながる自己学習の習慣を養い、コミュニケーションの熟練を図る教育方略である。

(2) 全学共通教育

岐阜大学では、平成8年9月に教養部が廃止され、地域科学部の発足に伴い、平成9年度から全学体制の教養教育、すなわち全学共通教育が実施されている。大学設置基準第19条「教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。」を尊重し、社会のニーズに応えることができる教養教育がスタートした。平成12年度からは、総合大学の利点を生かし、「全教員協力体制」のもので「人類や自然との共生を推し進めるための教育」、「学問と社会との開かれた関係を構築するための教育」が実施されてきた。平成24年度からは、教養教育の目的である「社会人として生涯にわたる学習の基礎となる学術的な基盤形成を行うこと」をさらに発展させるため、教育内容の改革と卒業に必要な最低修得単位数の見直しを行った。

(3) 各テュートリアルコースの授業計画(シラバス)の作成及び学習内容の調整

授業計画については、カリキュラム委員会、医学科教務厚生委員会、医学教育企画評価室で基本方針を決定し、テュートリアルコース主任を中心にコースごとに作成し、その概要を授業案内に掲載して学生に周知している。平成23年度からは授業案内の軽量化を図り(サイズ及び紙質の変更)、学生が携帯して活用しやすくなるように改良した。各コースの授業内容の調整は、コースごとの話し合いと企画開発室による各コースFDによりなされている。

(4) 臨床実習

本学部では、クリニカル・クラークシップの導入を中心とした臨床実習の改革を行った。

改革にあたっては、日本医学教育学会臨床能力評価ワーキンググループの臨床教育の教育目標(案)による一般目標「将来、医学医療のいずれの分野に進むにせよ、卒業研修を効果的にするために、基本的臨床能力を身につける」を参考とした。

実習開始時期は、かつては5年次3学期から6年次2学期までであったが、幾多の見直しを行い、平成23年度からは4年次2学期から6年次1学期までに拡充した。さらに臨床実習開始直前に「臨床推論(東洋医学的アプローチ)(西洋医学的アプローチ)」コースを設け、クラークシップの直前訓練を充実した。

また、本学部は医学教育開発研究センターが中心となって全国に先駆けて平成9年に模擬患者(SP)参加型医療面接実習を開始した。開始当初コミュニケーション教育がなされていた医学部はごくわずかで、その中において学生全員が模擬患者と医療面接実習を行うという画期的な教育法を導入した。

臨床実習期間中の4時間ではあるが、内容のバージョンアップを図りながら現在に至っている。

(5) 新入生合宿研修

平成7年度から1泊2日の「新入生合宿研修」を導入した。同研修は大学生生活スタート時に、医学生として将来医師、研究者となるための学力修得、人間形成確立等の重要性を認識させる目的で入学式直後に行われる。

この研修の内容は、「医学部長講話、全学共通教育及び専門教育ガイダンス、学生生活ガイダンス、ディベート、セミナー、グループ討論、野外実習、教員との交流会」等である。

(6) 臨床実習資格総合判定試験(共用試験 CBT, OSCE)

平成3年5月の「厚生省臨床実習検討委員会最終報告」に沿って、医行為の拡大とクリニカル・クラークシップの導入の条件として、平成8年2月(第4年次3学期)から臨床実習資格総合判定試験を導入した。平成17年度からは、共用試験 CBT, OSCE を導入しこれによって4年次2学期からの臨床実習への進級判定を行っている。

(7) 他大学における授業科目の履修の方針と状況

6年次の選択臨床実習で海外の大学・教育病院での臨床実習を希望し、資格ありと判定された学生は、海外での実習を許可して、6年生の実習として認めている。海外臨床実習希望者は、医学教育開発研究センターによる「英語で学ぶ臨床推論～海外実習への道～」を受講することが必須であり、この海外実習準備プログラムは、基本的な医療面接や身体診察、臨床推論を英語でできることを目指している。

(8) 在籍、留年、休学、退学の状況

過去8年間の状況は次表のとおりである。医学科における過去8年間の留年の割合は2.3%であり、休学の割合は1.3%である。退学者はこの8年間で8名である。

区分	在籍	留年	休学	退学 (除籍を含む)
平成15年度	495	7	1	0
平成16年度	495	8	4	0
平成17年度	492	11	4	0
平成18年度	488	10	6	0
平成19年度	488	14	10	2
平成20年度	498	8	11	4
平成21年度	518	17	8	1
平成22年度	546	17	10	1

(9) 教育施設・設備の現状

区 分	面 積	用 途	設 備
講義室(4室) 2, 3, 4 年生教室 平成 18 度 3 月 医学科・教育福利棟完成に伴い, 4 月から利用開始 5・6 年生教室 医学部本館	151.2 m ² /室 124.0 m ²	講 義	AV 装置一式
テュートリアル室(30室) 平成 18 度 3 月 医学科・教育福利棟完成に伴い, 4 月から利用開始	21.7 m ² /室	テュートリアル・ コアタイム テュートリアル・ コアタイム 自学・自習室	パソコン, ビデオ, ホワイトボード, シャーカテスン, 医学専門 図書, 大型ディスプレイ, モニ ターシステムを設置
スキルスラボ	119 m ²	臨床技能教育	AV 装置一式, パソコン, 手洗い 装置, 各種シミュレーターを設置
解剖実習室 (生命科学棟 1 階)	284 m ²	解剖実習	AV 装置一式, 解剖台
組織・病理実習室 (2N22)	277 m ²	実習・講義	AV 装置一式, 顕微鏡
生化学・病原態実習室 (4S02)	261 m ²	実習・講義	AV 装置一式, 顕微鏡, 実験台
生体機能系実習室 (8N22)	238 m ²	実習・講義	AV 装置一式, 実験台
情報処理演習室 (2S32)	204 m ²	情報処理	パソコン(100 台), AV 装置一式

(10) 成績の評価、認定の基準

成績の評価・認定については、医学部規則(第 5 条～第 13 条)により行われており、試験の成績が 60 点未満を不合格とする。病気その他やむを得ない理由のため、試験を受験できなかった場合は、その理由を申し出た者に限り、追試験を受けることができる。

試験の結果が不合格と判定された者は 1 回に限り、再試験を受けることができる。

授業科目の成績のうち、優、良及び可は合格とし、不可は不合格とするが、平成 24 年 4 月から、成績評価基準が全学的に統一され、4 段階から 5 段階評価(秀, 優, 良, 可, 不可)になる。これは、特に優秀な学生を適正に評価するために改正されたものである。

5 年次から 6 年次への進級には成績評価を要する条件はないが、他の学年次への進級には、成績評価・認定の条件が次のように設けられている。

① 1 年次から 2 年次への進級

当該学年に課せられる医学部担当教育、全学共通教育の必要単位を修得しなければならない。

② 2 年次から 3 年次へ、3 年次から 4 年次へ、4 年次から 5 年次への進級

当該学年に課せられるテュートリアルコースのうち、2 コース不認定の場合は 1 年間の留年を課し、再度同コースを履修させることとしている。1 コース不認定の場合は仮進級とし、翌年までに合格することを条件とする。なお、テュートリアル・コアタイムの出席率 80%をコース終了時の総合判定試験の受験資格としている。さらに、4 年次臨床実習の進級には、すべてのテュートリアルコースに合格し、共用試験 CBT, OSCE に合格し、かつ、臨床実習入門を修得することを義務付けている。

(11) 医師国家試験合格状況

医師国家試験は、現在の医療体制に求められる医師に必要な医学知識を試験によって、医師の能力を社会的に保証しようとしている制度であると思われるが、医学教育の成果の 1 つとして、国家試験の合格率も軽視することはできない。

過去 8 年間の合格状況は、次表のとおりであり、テュートリアル教育導入後の合格率は良好に推移している。

医師国家試験合格率

区 分	既 卒 者	新 卒 者	計
平成 15 年度 (98 回)	0%	97.4%	93.8%
平成 16 年度 (99 回)	50.0%	90.5%	87.8%
平成 17 年度 (100 回)	36.4%	97.6%	90.5%
平成 18 年度 (101 回)	12.5%	96.3%	88.6%
平成 19 年度 (102 回)	62.5%	97.5%	94.3%
平成 20 年度 (103 回)	40.0%	98.7%	95.1%
平成 21 年度 (104 回)	0.0%	96.2%	91.5%
平成 22 年度 (105 回)	57.1%	92.1%	89.6%

4. 学生生活への配慮

(1) 奨学金の種類と採択状況

過去 5 年間のデータは次表のとおりである。

奨学金の受給内容は、日本人学生を対象にしたものはそのほとんどが貸与であり、留学生は給与である。また、留学生向けの奨学金は希望者に比べその種類が非常に少ないのが現状である。

区 分	日本学生支援機構奨学金				その他の奨学金	
	第 1 種		第 2 種		申請者数	採用者数
	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数		
平成 15 年度	12	5	8	8	0	0
平成 16 年度	26	11	25	24	0	0
平成 17 年度	14	8	19	18	0	0
平成 18 年度	18	14	20	20	1	1
平成 19 年度	22	11	21	17	2	2
平成 20 年度	21	9	17	17	0	0
平成 21 年度	24	15	23	22	1	1
平成 22 年度	19	11	23	21	0	0
平成 23 年度	23	13	19	16	1	1

※平成 16 年 4 月に、日本育英会は廃止され日本学生支援機構奨学金となった。また、「きぼう 21 プラン」が「第二種奨学金」に変わった。

○ 外国人留学生各種奨学金受給者数

区 分	企業等奨学金	
	志 願 者 数	受 給 者 数
平成 15 年度	45	14
平成 16 年度	45	18
平成 17 年度	47	11
平成 18 年度	31	8
平成 19 年度	36	6
平成 20 年度	29	10
平成 21 年度	52	9
平成 22 年度	43	3
平成 23 年度	32	4

○ 岐阜県医学生修学資金制度

平成 20 年度より地域医療を担う人材育成を目的として、上記制度が設けられた。第 1 種は地域枠推薦入試合格者を対象に入学金・授業料と生活資金が支給される。第 2 種は一般の岐阜県出身者を対象に生活資

金が支給される。卒業後、一定期間、岐阜県内の医療に貢献することにより返済が免除される。初年度は第1種10名、第2種35名の枠に対して合計60名の応募があり、特例として、全員に支給されることが決定した。

(2) 授業料の免除の状況

過去5年間の授業料免除者は次表のとおりである。

例年、申請者のうち約7割以上が全額又は半額を免除されている。

区 分	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成15年度	495	27 (1)	11 (1)		29 (2)	18 (1)	
平成16年度	495	24 (0)		19 (0)	22 (1)		18 (0)
平成17年度	492	26 (1)	2	17 (1)	26 (1)	4	17 (1)
平成18年度	488	29 (1)	2	13	29 (1)	2	19
平成19年度	488	40	10	16	36	12	17
平成20年度	498	36 (1)	13	13 (1)	27	11	15 (1)
平成21年度	498	38 (1)	11	18 (1)	32 (1)	15	15 (1)
平成22年度	518	40 (1)	9	26 (1)	33 (1)	7	22 (1)
平成23年度	546	49 (1)	19	20 (1)	43 (1)	17	22 (1)

()内は、留学生を内数で示す。

(3) 学生生活相談の体制と実態

医学科においては、学生の履修、進級及び学生生活に関する相談並びに大学における諸問題について、医学科学務係が窓口となって対応している。

個人的及び分野レベルでの指導事項については、平成15年度に制定し導入している「指導教員制」により、医学科教務厚生委員会委員長、選択テュートリアル分野主任及び部活動顧問が相談員として当たっている。平成18年度からは「里親制度」を新設し、各分野の教授が分担して学生の相談に乗っている。

また、大学全体の制度として、勉学上や学生生活で困っていること、友人関係やセクシュアル・ハラスメントに関する相談の窓口としてキャンパス・ヘルパー制が設けられており、各学部、学務部、全学共通教育事務室等の教職員が相談員となっている。

(4) 課外活動の実態

医学部においては、課外活動を奨励するために、それに係る学生団体を許可しているが、教育目的に沿った医学部生(医学科、看護学科)を対象とする団体の場合には、課外活動団体として教務厚生委員会が認定し、その活動を認めている。

これらの団体への学生の加入状況を次表に示す。

○ 課外活動加入状況

区 分	体育系サークル	文化系サークル	計
平成15年度	437 (2)	348 (0)	785 (2)
平成16年度	438 (3)	277 (1)	715 (4)
平成17年度	432	181	613
平成18年度	411	155	566
平成19年度	396	220	616
平成20年度	436 (2)	212	648 (2)
平成21年度	506	256	762
平成22年度	535 (3)	245 (1)	780 (4)
平成23年度	612 (3)	318 (1)	930 (4)

()内は、留学生を内数で示す。

IV 医学部看護学科

1 教育・研究の理念・目標等

1. 教育・研究の理念と目標

近年の医療・福祉を取り巻く環境の変化に対応し、多様な社会的要請に応えるため、21世紀の医療に向けて、豊かな感性と人間性を備え、日々進歩する知識や技術を修得・発展させる能力や、地域に即した保健医療活動の中心的役割を果たすことのできる資質の高い看護職を育成することを目的に以下のディプロマポリシーを設定している。

- ① 人権と生命の尊厳に対する敬愛、豊かな感性と倫理観の修得
- ② 総合的・全人的に人間を理解する能力
- ③ 自主性と創造力を持ち、主体的に判断・実践ができる問題解決能力
- ④ 看護専門職として、科学的知識・技術を修得し、それを探求していくことができる能力
- ⑤ 看護の役割を認識し、ケアチームの一員として活躍できる能力
- ⑥ 国際的な視野と地域医療への貢献を視野に入れた看護を発展できる能力

2. 教育・研究の活性化と充実の経過

急速な少子・高齢化による人口構成の変化、疾病構造の変化、また人々の健康への関心の高まりなどにより、医療を取り巻く社会環境は著しく変貌してきている。慢性疾患や老化による障害を抱えて生活する人々が増加するにつれ、療養生活の質、生命の尊厳の本質が改めて問い直されるようになった。このように拡大し複雑化する社会的ニーズに応じていける看護者を育成するには、豊かな感性と深い倫理観に裏付けられた人間性、専門的知識・技術と実践力を備え、問題解決能力、また、国際的な視野と地域医療への貢献を視野に入れた看護を発展できる能力を身につけることが課題となる。

このため1年次生から医療・看護への関心を高めるため、初期体験実習や総合科目(医療と生命)、また、医学概論は医学科学生との合同授業を開講している。また、専門教育の基盤となる教養教育は1,2年次に全学部生を対象とした全学共通教育を受講する。

問題解決能力、主体的に学習する能力育成のために、少人数によるグループワークを積極的に取り入れている。また、保健師助産師看護師学校養成所指定規則等の一部改定に伴い、平成21年度からカリキュラムを改正し、よりいっそう系統的な教育を行えるようにしただけでなく、実習での学びの統合を図るための統合実習を取り入れた。

3. 教育・研究の将来構想

(1) 基本理念

わが国における医療・福祉の状況は、近年大きく変化している。医学の進歩と医学を取り巻く諸科学の発展、さらに急速な高齢化などの社会環境の変化に伴い、医療の世界も多様化し、治療とともに援助サービスが重視されるようになってきた。医療における看護の役割は、今後さらに拡大・複雑化していくことは明らかであり、豊かな感性と人間性を備えた資質の高い看護職の育成が不可欠となる。

これらの社会的要請に応えるため、日々進歩する医療の知識・技術に対応し、さらに発展させる能力を持った人材、地域の実情に即したきめ細やかな保健医療活動の中心的役割を果たせる人材を養成するとともに、看護教育及び研究・研修の拠点となり、生涯学習に貢献することのできる、社会に開かれた看護学科を目指すことを基本理念とする。

(2) 教育体制

現代の医療は、治療水準の向上とともに、あらゆる健康レベルの人々を対象とした、保健・医療・福祉が連携した良質できめ細やかな援助サービスが要請される。医療における看護の責任は今後ますます重く、社会の要請に応えるためにディプロマポリシーを踏まえた上で、将来的に次のような内容を担える人材の育成と学問的基盤の確立を目標とする。

- ① 全人的医療を担い得る豊かな感性と人間性を備えた人材
- ② 高度医療の一環を担い得る資質の高い人材
- ③ 保健・医療活動に指導的役割を果たせる人材
- ④ 看護学における学問的基盤を確立できる人材
- ⑤ 広い視野を持ち、国内外で活躍できる人材

医学部医学科および医学部附属病院との緊密な協力体制を築き、養護教諭1種免許取得のための教職課程では総合大学としてのメリットを十分に生かした教育を行っていく。「健康」を視座にすえた統合カリキュラムで育った問題解決能力や判断能力、応用能力のある人材の育成により、地域で保健医療に係わる人々とともにケアチームを作り、生涯学習を続けていける体制整備を目指す。

(3) 研究体制

看護学の研究は、関連諸科学との連携、特に保健・医療分野との共同研究は必須である。臨床、地域における看護職との研究は看護の研究の本質的意義を有するものであり、各講座、分野の特色の中で推進していく。看護の対象や役割の拡大により、健康支援や生活への援助から、教育・福祉・経済・情報などと連携していく必要性が高まっている。総合大学のメリットを活かし、学内外において関連する学問分野、他の専門職との連携を密にすることで学際的かつ効率的な共同研究を推進していく。また、大学院修士課程(看護学専攻)ではより高い専門性を追及した教育・研究の充実を図っている。

2 教育活動

1. 学生の受入れ

(1) 学生募集の方法

- ① 学生募集要項及び入学者選抜に関する要項については、学務部から全学一括で県下高等学校を中心に郵送配布するとともに、希望者に対しては学務係から直接又は郵送で配布している。
- ② 看護学科紹介パンフレット「岐阜大学医学部看護学科案内」を作成し、大学紹介(オープンキャンパス、プチ・オープンキャンパス)を参加者に配布している。また、パンフレット希望者には郵送配布の対応を行っている。
- ③ オープンキャンパス、プチ・オープンキャンパスにおいて、看護学科長による看護学科の概要説明並びに各講座が企画する模擬実習等を体験するだけでなく、在学生による相談会や医学部看護学科教務厚生委員による進学相談を行っている。参加者からのアンケート内容は、教務厚生委員会における次年度以降の計画立案の参考としている。
- ④ 看護学科全教員が6～8月にかけて岐阜県・愛知県を中心に高等学校を訪問し、パンフレットや募集要項を手渡すだけでなく、看護学科の紹介及び進路指導担当の教諭と情報交換を実施している。
- ⑤ 私塾主催の入試説明会への教員派遣や、高等学校への「出前講義」、看護学科への高校訪問の受け入れについて積極的に取り組んでいる。

(2) 入学者選抜の方法と方針

前期日程および後期日程の一般入試に加え、センター試験を課さない推薦入学I特別入試と社会人特別入試を設定している。また3年次編入学試験も実施している。入学試験の定員数は、それぞれ次表のように定めている。

試験	募集人員
推薦入学I特別入試	10
社会人特別入試	3
一般入試(前期日程)	47
一般入試(後期日程)	20
3年次編入学試験	10

看護学科では、次のアドミッションポリシーを定めて公開している。

【教育目的】

看護学科は、看護学をはじめ保健・医療・福祉の各分野に貢献できる人間性豊かで倫理観に富む資質の高い看護の専門職を養成するとともに、看護学の教育研究の推進も目指します。

【求める学生像】

人を愛し生命を尊び、全ての人々の健康の向上に寄与する看護職を育成するために以下のような学生を求めています。

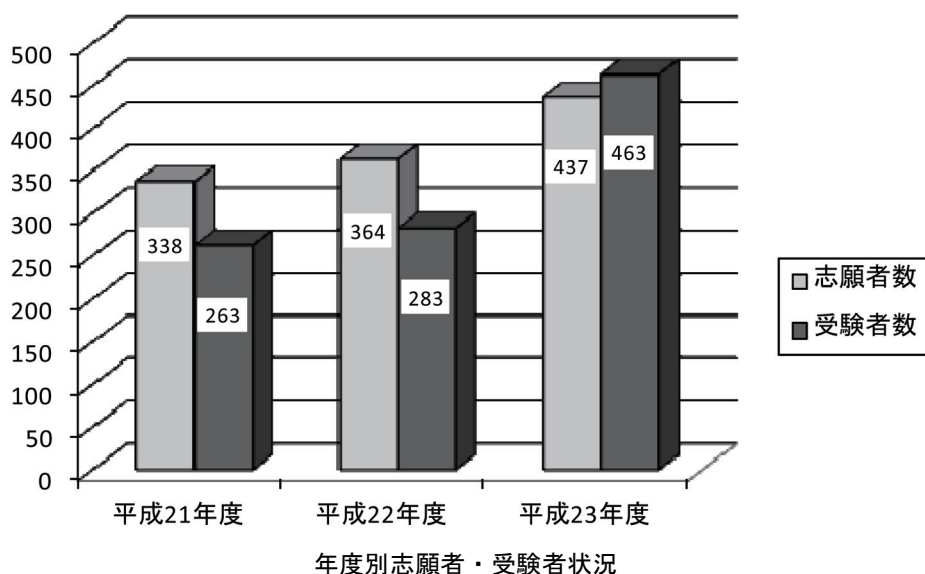
- ① 看護への関心があり、看護学の修得に必要、かつ、十分な基礎的学力を有すること。
- ② 様々な現象に対して、あらゆる角度から観て考え、真実を知ろうという科学的探求心に富み、自己学習意欲が旺盛であること。
- ③ 他者の意見を傾聴し、その気持ちを理解できるように努め、自己の意見を表現できる能力を持っていること。
- ④ 自己の役割を認識し、責任感を持っていること。
- ⑤ 自己の心身の健康に留意し行動できる力を持っていること。

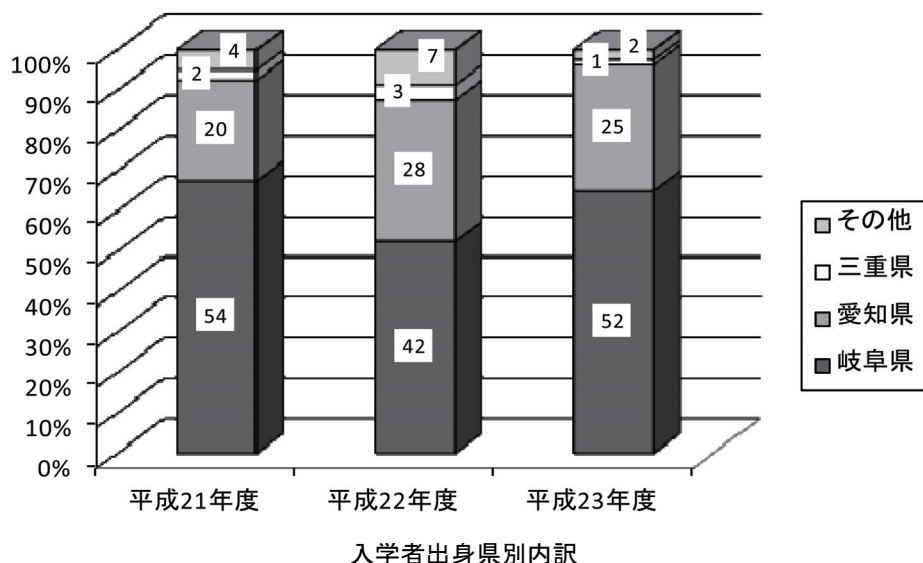
前期日程は基礎的学力により合否判定を行い、後期日程では基礎学力に加えて面接による人物判定を取り入れて合否判定を行っている。推薦入学 I 特別入試と社会人特別入試では小論文による英語読解力と国語力および面接による人物判定を取り入れている。また、3年次編入学試験では国家試験合格レベルの医学・看護に関する基礎専門能力と面接による人物評価によって合否判定を行っている。

(3) 学生の受入れ状況

学生定員充足状況：平成 21 年度から 23 年度までの 3 年間の入学（志願者・入学者）に関する状況は次表のとおりである。

区分		志願者数	受験者数	入学者	県別内訳			
					岐阜県	愛知県	三重県	その他
平成 21 年度	男	18	18	2	1	0	1	0
	女	320	245	79	53	20	1	4
	計	338	263	81	54	20	2	4
平成 22 年度	男	29	24	5	3	2	0	0
	女	335	259	75	39	26	3	7
	計	364	283	80	42	28	3	7
平成 23 年度	男	32	26	5	2	1	1	0
	女	405	335	75	50	24	0	2
	計	437	463	80	52	25	1	2





(4) 編入学制度と実態

看護学科では、すでに看護に関する学科あるいは課程において学習してきた学生を対象に、編入学(第3年次)による学生の受け入れ制度を設けている。

平成21年度～平成23年度の編入学(志願者・入学者)に関する状況は次表のとおりである。平成23年度は再募集を行ったが、看護学科の求める条件に該当する受験者は無く、入学者は0人であった。

区分		志願者数	受験者数	入学者
平成21年度	男	4	4	1
	女	46	32	8
	計	50	36	9
平成22年度	男	4	3	0
	女	30	21	10
	計	34	24	10
平成23年度	男	3	2	0
	女	20	17	0
	計	23	19	0

(5) 研究生の受入れと実態

学則において研究生の受け入れ制度を設けているが、平成21～23年度に研究生の受け入れは無かった。

2. カリキュラム

看護職の基礎的能力と、科学的思考に裏づけられた看護実践能力、保健・医療・福祉全般にわたる広い見識、そして幅広い教養と豊かな人間性を養うことを目的として、教養教育と専門教育(基礎科目と専門科目)を開講している。

(1) カリキュラムの特徴

- ① 教養科目は、全学共通教育科目として開講
個別科目(人文科学系, 社会科学系, 自然科学系, スポーツ・健康科学系), 総合科目, 外国語科目や自由選択科目が開講され, 必要単位を考慮しながら, これらの科目から自分の学びたい科目を選択する。
- ② 地域科学部の科目の受講
基礎科目には看護独自の科目の他に, 地域科学部が開講する科目があり, 他学部の学生と一緒に学ぶ。
- ③ 医学部との合同講義(医学概論)

全人的医療や医療職種の役割などに関して学ぶ。

- ④ 実習や体験に基づいた学習の重視
専門科目は、講義だけでなく体験を踏まえた学習を実施する。

(2) カリキュラムの構築

- ① 看護実践能力の育成を目指してカリキュラムの構築
 - ・看護学士課程教育は、文部科学省の見解に依れば、看護の実務家の育成が目的であると述べられている。看護学教育内容ガイドラインとして2004年に「看護実践能力育成に向けた大学卒業時の到達目標」が示された。これには看護実践能力の5つの構成要素・19項目・76細項目に準拠した項目が上げられている。岐阜大学医学部看護学科では、示された看護実践能力が修得できるように教育内容を各講座間で有機的に関連させながら、看護専門教育を4年一貫教育として実施するようにカリキュラムを構築している。
 - ・1年次生から4年次生までの間に、看護学実習（初期体験実習、基礎看護学実習、急性期看護学実習、慢性期看護学実習、老年看護学実習Ⅰ・Ⅱ、精神看護学実習、小児看護学実習、母性看護学実習、在宅看護学実習、地域看護学実習、統合実習）を通じて看護の計画的な展開能力、特定の健康問題をもつ対象への実践能力、ケアチームの一員として活躍できる基礎的な能力が修得できるように実習を配置している。
- ② 国家試験受験資格が取得できるカリキュラム構築
1年次生から4年次生までの間に、共通教育及び専門教育の各教科目を学習し、4年次学年末に実施される看護師国家試験・保健師国家試験の受験要件を満たす十分な科目と単位数に配慮したカリキュラムを構築している。また助産に関しては、選択科目として助産師国家試験の受験要件を満たすカリキュラムを構築している。
- ③ テュートリアル教育（少人数によるグループワーク）を取れ入れたカリキュラムを構築
入学当初から社会や医療の変化に伴い生起する多様で複雑な健康問題に対して看護職として自ら課題を探究、その課題の解決に向けて学習できる能力の獲得を目指してテュートリアル教育を取り入れたカリキュラム構築をしている。
- ④ 看護学専門科目の一部として発展科目を位置づけ、幅広い視野をもった看護実践能力育成に向けて学習する機会を設けること、さらに、科学的思考の修得と将来への発展を期待して、研究方法の講義及び卒業研究の実際を通して、基礎的能力の修得を行うように位置づけている。

(3) 課題と展望

平成23年3月11日に文部科学省の「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」から最終報告が出された。その中で「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標－教育内容と学習成果－」が示されている。看護学科では、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正に伴う平成24年度入学生からのカリキュラム変更に向け、先の最終報告にあげられた項目と看護学科での教育内容との整合性を検証してきた。この「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標－教育内容と学習成果－」を看護学科で卒業時まで育成する専門的能力と位置づけ、教育内容、教授方法についてさらに検討を加え、より良い教育を実践できるようにしていく必要がある。平成24年度からの新カリキュラムでは、卒業に必要な単位数を133単位から127単位に変更し、学生の自己学習に使用できる時間数を確保することを試みた。また、今までの助産師教育課程の選択制（上限8名）に加え、保健師教育課程も選択制（上限20名）としたことで、保健師として活躍したい学生に焦点をあてた、より効果的な教育・実習内容にできるようにした。今後、新カリキュラムでの教育効果について検証していく必要がある。

また、平成22年度からは養護教諭1種免許取得が可能な教職課程を設置し、平成22年度は4名、平成23年度は5名の学生が教職科目と養護に関する科目を履修している。今後は、4年次に行われる養護実習等の実習に関する教育環境を全学の教職課程専門委員会と連携しながら整備していく必要がある。

3. 教育方針

(1) 教育改革

看護学科では、平成21年度にカリキュラム改正を行った。カリキュラム改正にあたっては、指定規則の変更内容と平成18年度からのカリキュラムの問題点を踏まえ以下の改正を行った。①基礎科目を見直し、平成18年度カリキュラムの20科目から6科目に精選した。また、養護教諭1種免許取得のために基礎情報学演習（1単位）を基礎情報学（2単位）とした。②専門科目の見直しを行い、従来は講座単位で設定され

ていた選択科目の最低履修単位数を撤廃し、選択必修の科目以外は、選択科目履修の自由度を高めた。③健康の保持増進・治療・回復において様々な役割・機能を担っている医療関係部門(者)の活動の実際を把握し、チーム医療及び看護師として他職種との連携を図るための基礎能力を養う目的で、3年次後学期に統合実習を導入した。

(2) 全学共通教育

大学では、専門について深く学ぶとともに、教養を学ぶことが必要である。この目的を達成するため、4年一貫教育体制のもとに、教養教育と専門教育を並行して行っている。教養科目については、全学体制のもとに全学共通教育として進められている。

○全学共通教育の最低修得単位数

科目区分		卒業要件修得単位数	
個別科目		14 単位以上	人文科学系 6 単位以上
			社会科学系 4 単位以上
			自然科学系 2 単位以上
			スポーツ・健康科学系 2 単位以上
総合科目		4 単位以上	
外国語科目	既修外国語系 (必修)	4 単位以上	
	未修外国語系 (必修)	2 単位以上	
	既修外国語系 (選択必修)	2 単位以上	
	未修外国語系 (選択必修)		
自由選択科目		2 単位以上	
学部開講	教養セミナー	2 単位	
合計		30 単位以上	

○全学共通教育の開講時間枠

1 年次前学期

曜日 時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

1 年次後学期

曜日 時限	1	2	3	4	5
月	◎	◎	◎	◎	◎
火	◎	◎	◎	◎	◎
水	◎	◎			
木					
金					

◎ : 全学共通教育の開講時間枠

空白 : 専門教育の開講枠

(3) 専門教育

① テュートリアル教育 (少人数グループワーク)

従来テュートリアル教育として行ってきた専門教育は、看護学教育独特のカリキュラム特徴と時間割上の過密性、および科目ごとの教員の人数上の問題があり、医学科で実施している本来のテュートリアル教育の方法をとることが難しかった。現在は、テュートリアル教育としていた科目では5~10人の少人数グループで課題に取り組む少人数グループワークの形をとっている。グループワークでは教室に加えて9つのセミナー室を使用して行い、セミナー室では課題に関連した専門書や統計資料を配置してグループワーク中に自由に閲覧可能とした。また、課題に取り組むことや取り組み結果をまとめるために、コンピュータ、プリンタ、スキャナーを各セミナー室に配置して学生が自由に使用できるようにしている。平成23年度は古くて動作が遅くなったパソコンを入れ替え、学生が多用しているマイクロソフトワードをセミナー室の全てのパソコンにインストールするなど、学生のニーズにも臨機応変に対応している。平成23年度にはさらに4部屋のセミナー室を設置している。

② 看護学臨地実習

必修科目である臨地実習(25単位)は、卒業要件単位数(133単位以上)のうち20%弱を占める非常に重要な専門教育科目であり、看護師・保健師養成には欠かせないものである。そのため、学生の基礎科目や専門科目の学習進度に合わせ、1年次の初期体験実習による動機付け、2年生の基礎実習における患

者のニーズ把握と看護過程の理解，3年次から4年次にかけての分野別実習における看護過程の展開の学習というように構成してきた。臨地実習に関わる委員会として実習委員会があり，次世代の看護を担う能力を持った人材を育成するために以下の活動を行ってきた。

- ・ 臨地実習施設との調整と臨地実習指導者会議の企画および開催
- ・ 年度ごとの臨地実習計画表の作成
- ・ 臨地実習要項の作成と配布
- ・ 臨地実習ガイダンスの企画と運営
- ・ 臨地実習における病院感染対策マニュアルの改定
- ・ HB感染症と小児感染症の抗体検査と検査結果の管理
- ・ HB感染症と小児感染症ワクチン接種の勧奨
- ・ 学生を対象とした感染予防対策に関する特別講義の開催
- ・ 患者および学生の個人情報保護に関する実習記録等取り扱いマニュアルの作成
- ・ 臨地実習に伴う予算に関する検討
- ・ 在学生へのインフルエンザワクチン接種の勧奨と医学科と合同で実施する希望学生へのワクチン接種

平成21年からは，新型インフルエンザの流行により，臨地実習中のインフルエンザ発生に対する予防行動と発生時の対応の詳細についてまとめた。

地域看護学と母性看護学，助産学の実習は，受け入れ施設の固定化が難しく，施設の変更が多いことが問題点としてあげられるが，他の分野では附属病院以外の施設に関してほぼ安定してきており，施設における指導体制の安定化によって実習における学習効果を高めていくことが可能になってきた。今後，実習指導に関わる教員のさらなる指導能力の向上，実習施設との連携の充実を図ることによって，ディプロマポリシーに合った学生をより多く育成していくことが課題である。

(4) 他大学における授業科目の履修方針と状況

学則第39条の規定「教育上有益と認めるときは，他の大学又は短期大学との協議に基づき，学生に当該他大学等の授業科目を履修させることができる。」とあるが，専門科目についての実績はない。

平成22年度には，学則第41条2項の規定により，平成21年から平成22年にかけてアメリカ合衆国のノーザンケンタッキー大学に留学した学生からの申請に基づき単位認定を行った。単位認定を行った科目は救急看護と看護英文抄読の2科目で，どちらも選択の専門科目であった。

(5) 在籍，留年，休学，退学の状況

過去3年間の状況は次表のとおりである。

区 分	在 籍	留 年	休 学	退学(除籍を含む。)
平成20年度	341	6	2	3
平成21年度	338	9	7	1
平成22年度	343	25	9	0

(6) 教育施設・設備の現状

区 分	面 積	用 途	設 備
看護学科校舎1階 講義室1	134 m ²	講 義	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
看護学科校舎3階 講義室2	105 m ²	〃	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
看護学科校舎3階 講義室3	111 m ²	〃	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備，資料提示装置
看護学科校舎4階 講義室4	90 m ²	〃(学部，大学院)	プロジェクター，ビデオ投影装置，マイク設備
看護学科校舎5階 講義室5	68 m ²	〃	プロジェクター，ビデオ投影装置
総合研究棟1階 セミナー室	第1～9室 26 m ² ～47 m ²	グループワーク，初期 体験実習，自己学習	パソコン，プリンター，スキャナー， 書棚(授業用専門書)
総合研究棟5階 セミナー室	第10～13室 22 m ² ～45 m ²	グループワーク 自己学習	パソコン，プリンター

区 分	面 積	用 途	設 備
総合研究棟 3階 大学院セミナー室 1・2	2室 23㎡～24㎡	講 義	
総合研究棟 3階 大学院生研究室	2室 23㎡～24㎡	研 究	
看護学科校舎 2階 基礎看護実習室 1	258㎡	基礎看護学実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置, ガス乾燥機
看護学科校舎 2階 老年在宅実習室	92㎡	老年・在宅看護学実習	バリアフリーモデルルーム
総合研究棟 2階 成人看護実習室 1	23㎡	成人看護学実習	
総合研究棟 2階 成人看護実習室 2	106㎡	成人看護学実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置,
総合研究棟 2階 成人看護実習室 3	26㎡	成人看護学実習	書棚
総合研究棟 2階 基礎看護実習室 2	47㎡	基礎看護学実習	ビデオ投影装置, マイク設備, 資料提示装置
総合研究棟 3階 地域看護実習室	94㎡	地域看護学実習	
総合研究棟 3階 精神看護実習室 1	53㎡	精神看護学実習	
総合研究棟 3階 精神看護実習室 2	26㎡	精神看護学実習	
総合研究棟 3階 地域・精神看護実習室 1・2・3・4	4室 23㎡～24㎡	精神看護学実習	
総合研究棟 4階 母性・小児看護実習室 1	147㎡	母性・小児看護学実習	沐浴槽, 乾燥機
総合研究棟 4階 母性・小児看護実習室 2	26㎡	母性・小児看護学実習	保育器
総合研究棟 4階 助産学実習室	93㎡	助産学実習	沐浴槽, 分娩台
総合研究棟 4階 母性・小児看護実習室	92㎡	母性・小児看護学実習	IH キッチンヒーター, パソコン, プリンター

(7) 成績の評価, 認定の基準

成績は, 試験等の結果を総合して以下の区分で評価する。

優 (100点～80点) 合格

良 (79点～70点) 合格

可 (69点～60点) 合格

不可 (60点未満) 不合格

病気その他正当な理由により定期試験を受けられなかった者について, 願い出により追試験を受けることができる。定期試験及び追試験に不合格となった者について, 1回に限り再試験を受けることができる。

(8) 看護師等国家試験合格状況

過去3年間の合格状況は次表のとおりである。

区分	受験者	合格者	合格率	全国合格率	
平成 20 年度	保健師	89	89	100.0	98.5
	助産師	4	4	100.0	99.9
	看護師	81	80	98.8	94.4
平成 21 年度	保健師	83	80	96.4	87.8
	助産師	8	5	62.5	83.2
	看護師	75	75	100.0	93.9
平成 22 年度	保健師	84	82	97.6	89.7
	助産師	4	4	100.0	98.2
	看護師	76	75	98.7	96.4

(9) 学生の就職状況

過去3年間の卒業生の就職状況は次表のとおりである。

区分	看護師	保健師	助産師	進学	その他
平成20年度	71	7	4	2	7
平成21年度	68	7	4	2	3
平成22年度	67	9	3	4	2

4. 学生生活への配慮

(1) 奨学金の種類と採択状況

過去3年間のデータは次表のとおりである。

区分	日本学生支援機構				その他の奨学金	
	第1種		きぼう21			
	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数	申請者数	採用者数
平成20年度	18	13	16	15	0	0
平成21年度	28	20	24	24	2	2
平成22年度	15	9	22	21	1	1

(2) 授業料の免除の状況

過去3年間の状況は次表のとおりである。

区分	在籍者数	前学期			後学期		
		申請	免除		申請	免除	
			全額	半額		全額	半額
平成20年度	341	39	12	20	38	14	19
平成21年度	338	38	14	22	35	15	16
平成22年度	343	33	7	21	27	8	17

(3) 学生生活相談の体制と実態

学生の個人的な生活に関する相談については、学務係が窓口として対応している。

個人的相談については定められた担当教員が応じ、講座レベルでの指導事項などについては当該講座の教員により対応し、総合的には教務厚生委員会看護学科委員会において対応している。

(4) 課外活動の実態

看護学科で許可している学生団体は存在しないが、岐阜大学大学教育委員会の認める体育系及び文科系サークル、また岐阜大学医学部教務厚生委員会の認める医学部体育系及び文科系サークルに所属して活動する学生は少なくなく、運動系サークルではマネージャーで活躍する学生が多い。

キャンパスライフが有意義で、健全なものとなるように課外活動を行う学生数の実態は次表のとおりで学年進行とともに増加している。

区分	全学サークル	
	体育系	文化系
平成20年度	48	23
平成21年度	44	32
平成22年度	27	30

※1 各年度の4月1日付の部員数であり、新入部員数は含まない。

2 ()内は、奥穂高岳診療所クラブ部員数(外数)で、7月時点での部員数である。

3 研究活動

〔基礎看護学講座〕

(1) 基礎看護学分野

1. 研究の概要

基礎看護学分野では、看護基礎教育と看護継続教育との関連性の中で、その歴史的背景を踏まえつつ、看護学生及び看護師に必要な看護技術教育に関する研究、看護師のワークライフバランスに関する研究を行っている。また、看護の場の拡大に伴う在宅における感染管理を含む看護管理に関する研究にも取り組んでいる。更に、19世紀英国における社会の変革を Charles Dickens の Hard Times を中心として研究するなど、各自の研究テーマに基づいて取り組んでいる。

- 1) 占領期焦点をあてた病院管理及び看護技術教育に関する研究に取り組んでいる。
- 2) 看護基礎教育における臨床看護師との協働による看護技術教育、及び身体侵襲を伴う看護技術の教育に関する研究に取り組んでいる。
- 3) 在宅における感染管理に関する教育プログラムの効果検証と在宅ターミナルに関する教育プログラムの開発をテーマに研究に取り組んでいる。
- 4) 19世紀英国における社会の変革を Charles Dickens の Hard Times を中心として研究に取り組んでいる。特に労働者階級の人々の生活の視点から、さまざまな社会問題を分析する。また、Charles Dickens がこの時代の社会問題をどのように考え、どのような行動をとり、どのような改革を行うべきとしたかを研究する。
- 5) 基礎看護技術の教育方法の工夫として、実験を取り入れた教育方法に関する研究に取り組んでいる。また、循環病態学分野の専門家とともに、減塩が生体に及ぼす影響について動物実験を行っている。
- 6) 看護師のワークライフバランスが実現するための課題、および施策についての研究に取り組んでいる。

2. 名簿

教授：	滝内隆子	Takako Takiuti
教授：	小松妙子	Taeko Komatsu
准教授：	瀬戸崎康子	Yasuko Setozaki
助教：	岡本千尋	Chihiro Okamoto
助教：	渡邊郁子	Ikuko Watanabe

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）

- 1) 滝内隆子, 小松妙子, 塚原節子, 岡本千尋, 中島美奈子, 中野尚見, 伊藤友美, 高岡光江. 臨床看護師との協働による看護技術教育の評価, 看護教育 2011年; 52巻: 766-771.
- 2) 岡本千尋. PCI・CAG 後等の安静臥床に伴う腰痛緩和方法の検討 -1983~2009年の文献を通して-, 岐阜看護研究会誌 2011年; 3号: 49-55.
- 3) 松田好美, 箕浦とき子, 後閑容子, 滝内隆子, 玉置真理子, 額瀨朋弥. 岐阜県における地域医療に貢献できる看護職の育成プログラムの開発と実践, 岐阜看護研究会誌 2011年; 3号: 121-130.

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 小松妙子, 滝内隆子, 前田修子. 訪問看護師を対象とした「感染管理に関する基礎的技術」研修会の効果検証, 岐阜看護研究会誌 2009年; 1号: 25-32.
- 2) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子. 訪問看護師を対象とした「関係機関・職種と感染管理に関する連携・指導」研修会の学習内容・方法の検討-事前調査の結果から-, 岐阜看護研究会誌 2009年; 1号: 1-7.
- 3) 中野尚見, 滝内隆子, 小松妙子. プリセプターが実際に行っている役割とプリセプターの必要性-プリセ

- プーの視点から一、岐阜看護研究会誌 2009年；1号：33-37.
- 4) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子. 訪問看護師を対象とした「膀胱留置カテーテル挿入・管理」感染管理研修会の効果検証, 日本環境感染学会誌 2009年；26巻：417-424.
 - 5) 滝内隆子, 前田修子, 小松妙子. 訪問看護師を対象とした「感染対策に関する基礎的知識」研修会の効果検証—研修前後の修得状況を通して—, INFECTION CONTROL 2009年；18巻：94-103.
 - 6) 佐々木真紀子, 滝内隆子. 便秘の看護の実践状況と今後の課題, 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要 2009年；17巻：95-101.
 - 7) 渡邊美和, 沼田幸美, 荒井奈津子, 高城有美, 尾田 愛, 塚原節子. 中堅看護師の死後ケアへの思い, 第40回日本看護学会論文集(老年看護) 2009年：138-140.
 - 8) 澤田矢子, 細見由加里, 寺西徳子, 金田麻里, 神子澤梨香, 佐竹明子, 塚原節子. せん妄患者への音楽療法の有用性, 第40回日本看護学会論文集(成人看護Ⅱ) 2009年：75-77.
 - 9) 有坂千亜紀, 蟹谷美香, 塚原節子. 週2回透析患者における自己管理を継続できている要因, 第40回日本看護学会論文集(成人看護Ⅱ) 2009年：308-310.
 - 10) 蛭田美貴, 前田修子, 小松妙子, 岡本千尋, 滝内隆子. 訪問看護師を対象とした「結核・インフルエンザ」研修会の効果検証, 岐阜看護研究会誌 2010年；2号：1-8.
 - 11) 岡本千尋, 前田修子, 小松妙子, 蛭田美貴, 滝内隆子. 訪問看護師を対象とした「疥癬・MRSA」研修会の学習内容・方法の検討, 岐阜看護研究会誌 2010年；2号：9-15.
 - 12) 滝内隆子, 前田修子, 小松妙子, 蛭田美貴, 岡本千尋. 訪問看護師を対象とした「在宅中心静脈栄養」研修会の効果検証, 岐阜看護研究会誌 2010年；2号：17-23.
 - 13) 滝内隆子, 大津廣子, 足立みゆき. 占領期の看護教育指導者講習会で使用されたテキスト —一般基礎看護法に焦点をあてて—, 岐阜看護研究会誌 2010年；2号：25-32.
 - 14) 足立みゆき, 滝内隆子, 渡邊亜紀子. 看護理論を用いた基礎看護技術教育の実際, 岐阜看護研究会誌 2010年；2号：87-92.
 - 15) 渡邊亜紀子, 滝内隆子, 足立みゆき. 経鼻経管栄養モデル作製の効果, 岐阜看護研究会誌 2010年；2号：93-97.
 - 16) 滝内隆子, 小松妙子, 蛭田美貴, 前田修子. 訪問看護師を対象とした持続携帯式腹膜透析に関する研修会の効果検証, 透析ケア 2010年；16巻：700-708.
 - 17) 小松妙子, 滝内隆子, 前田修子. 訪問看護師の在宅ターミナルケアに関する知識・技術の修得状況, 日本在宅ケア学会誌 2010年；13巻：93-100.
 - 18) 前田修子, 滝内隆子, 小松妙子. 訪問看護師を対象とした感染管理の連携・指導に関する研修会の評価 研修会参加前後における知識・技術の修得状況の変化から, 日本在宅ケア学会誌 2010年；13巻：85-92.
 - 19) 佐藤公美子, 坪井良子, 奥宮暁子, 滝内隆子, 青木良子. 占領期・GHQ/SCAPによる病院再編と看護管理の形成過程 PHW/staff visits からの実証, 日本看護歴史学会誌 2010年；23号：41-53.
 - 20) 小松妙子, 前田修子, 滝内隆子. 訪問看護師対象の感染管理に関する在宅人工呼吸器研修会への参加効果, 日本環境感染学会誌 2011年；26巻：41-48.
 - 21) 滝内隆子, 大津廣子, 足立みゆき. 占領期の看護教育指導者講習会における全身清拭に関する教授内容, 岐阜看護研究会誌 2011年；3号：1-8.
 - 22) 佐藤公美子, 坪井良子, 奥宮暁子, 滝内隆子, 青木良子. 占領期の病院管理改革に関する史的考察—占領期文書にみる Manittoff の活動記録からの分析—, 日本看護歴史学会誌 2011年；24巻：10-21.

原著 (欧文)

- 1) Setozaki Y, Times H. Mr. Gradgrind's educational system and its influence on humanity. Journal of Humanities Language & Culture & Literature. 2009;XXXI:47-89.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：前田修子, 研究分担者：滝内隆子, 小松妙子：科学研究費補助金基盤研究(C)：「訪問看護師を対象とした感染管理教育プログラム」の検証と再構築に関する研究：平成 19-21 年度；3,864 千円(1,111：1,422：1,331 千円)
- 2) 研究代表者：小松妙子, 研究分担者：滝内隆子, 前田修子：科学研究費補助金基盤研究(C)：訪問看護師対象の「在宅ターミナルケア」に関する教育プログラム開発：平成 20-22 年度；3,510 千円(1,040：1,170：1,300 千円)
- 3) 研究代表者：佐藤公美子, 研究分担者：滝内隆子, 坪井良子, 奥宮暁子：科学研究費補助金基盤研究(C)：占領期の看護管理に関する考察—GHQ/SCAP 文書による歴史的分析—, 平成 20-22 年度：4,058 千円(1,605：1,483：970 千円)
- 4) 研究代表者：前田修子, 研究分担者：滝内隆子, 小松子他：科学研究費補助金基盤研究(C)：訪問看護師向け「膀胱留置カテーテル管理」研修プログラムの開発と効果検証；平成 21-23 年度；4,834 千円(1,504：1,250：2,080 千円)
- 5) 研究代表者：大津廣子, 研究分担者：滝内隆子, 足立みゆき他：科学研究費補助金基盤研究(C)：看護技術を教える教員・臨床看護師の看護技術教育力の育成・向上プログラムの開発：平成 22-25 年

度；4,899千円(479：3,938：328：154千円)

- 6) 研究代表者：塚原節子，研究分担者；滝内隆子，小松妙子他；大学活性化経費(教育)：AIMS-GIFUを活用した聴診技術の自己習得システム構築(フィジカルアセスメント)：平成22年度；340千円
- 7) 研究代表者：滝内隆子，研究分担者；小松妙子，岡本千尋他；岐阜大学社会人教育支援経費：平成22年度；337千円
- 8) 研究代表者：滝内隆子，研究分担者；滝内隆子，岡本千尋他；大学活性化経費(教育)：「採血」・「点滴静脈内注射」の自己習得システムを活用した授業(基礎看護技術Ⅱ)：平成23年度；500千円
- 9) 研究代表者：小松妙子，研究分担者；滝内隆子，渡邊郁子他；岐阜大学社会人教育支援経費：平成23年度；468千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

- 1) 研究代者：滝内隆子，小松妙子，岡本千尋，渡邊郁子，中島美奈子，棚橋一将，内田佳伯：看護技術シミュレーターの開発(1)；平成23-24年度；150千円；(株)タナック

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

滝内隆子：

- 1) 日本看護歴史学会理事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

- 1) 前田修子，滝内隆子，小松妙子：「訪問看護師を対象とした感染管理教育プログラム」の検証と再構築に関する研究：平成19-21年度科学研究費補助金基盤研究(C)報告書(平成21年3月)
- 2) 前田修子，滝内隆子，小松妙子：「訪問看護師を対象とした感染管理教育プログラム」の実証と再構築に関する研究：平成19-21年度科学研究費補助金基盤研究(C)分担報告書(平成22年3月)
- 3) 箕浦とき子，杉浦太一，滝内隆子，後閑容子，松田好美，奥村大志. 社会人基礎力育成を目指した看護学実習における育成・評価プログラムの開発・実証：平成21年度経済産業省体系的な社会人基礎力育成・評価システムの開発・実証事業分担報告書(平成22年3月)
- 4) 佐藤公美子，滝内隆子，坪井良子，奥宮暁子：占領期の看護管理に関する考察-GHQ/SCAP 文書による歴史的分析-，平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究(C)報告書(平成23年3月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

- 1) 基礎看護分野では看護技術修得のための教育と研究に力を入れ、中でも臨床看護師との協働による看護技術教育、身体侵襲を伴う看護技術の教育に関する取り組みは、論文として成果を発表している。また、臨床看護師との協働による看護技術教育の取り組みは評価され、県外から講演依頼がきている。
- 2) 占領期に焦点をあてた病院管理並びに看護技術教育に関する研究は学会発表や論文として成果を発表している。中でも占領期の看護技術教育については看護史を研究領域とする研究者から史料として残す必要性を要望され、当時の関係者にインタビューを実施するなど研究を進めている。
- 3) 訪問看護師を対象とした在宅の感染管理に関する研修会の効果検証、訪問看護師を対象とした在宅ターミナルに関する教育プログラムの開発に関する研究は学会発表及び論文として成果を発表している。
- 4) 看護職のワークライフバランスに関する研究成果を発表している。早急に研究結果を論文にまとめ、看護職の確保定着に貢献できるように研究を継続していく。
- 5) 3年間での本分野の構成員の異動・欠員等で、一定の職場環境、教育活動を高めることに翻弄し、十分な研究活動のできる環境を整えることは十分とは言い切れない状況である。
- 6) 今回のカリキュラムの改変において、英語の担当者への報告が一切なされなかったのは遺憾である。教務厚生委員会や将来計画委員会にて検討されたのであろうが、私個人としては委員でないため検討に一切入ることができなく、教員会議で初めて聞くという次第であった。英語担当者が在籍しているにもかかわらず、意見を求めないのは理解に苦しむ。担当者としては英語運用力を強化するという今回の目的を良く理解をしているが故に、ストレスが非常に大きくかかった。その他、授業などは順調であり、研究においては英文での執筆を行っている最中である。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 欠員教員の確保に努め、構成員が十分な中で教育活動及び研究活動に取り組めるように環境を整えていく。
- 2) 看護基礎教育の卒業時に求められている看護技術の到達度に学生を到達させるには自己学習できる環境・教材等が不足している。自己学習できる環境の整備及び教材の確保と併せて臨床看護師や在校生と協働した指導体制の整備をする。
- 3) 教員の看護技術力が低下しているため、臨床研修等の機会を確保し看護技術力を向上させる。
- 4) 研究と教育に費やす時間配分のバランスが悪い。今後は、自己の能力を見極め、バランス良く研究と教育に取り組む必要がある。
- 5) 学会誌やインパクトファクターの高い雑誌への論文投稿を実現させなければならない。そのためには、学会発表や雑誌の購読を積極的に行う。
- 6) 上記6)に記したように、英語に関しては担当者がいるのであるから相談をすべきである。

今後の展望

- 1) 平成24年度からのカリキュラム改正の意図を踏まえ、基礎看護学分野の教育内容・方法の充実をはかる。
- 2) 基礎看護学分野の教育方法の向上、および看護職の労働環境に着目した看護管理に関する研究を進めていく。
- 3) 構成員1人1人が取り組んでいる研究、及び基礎看護分野で共同で取り組む研究を推進し、研究活動の充実を図る。基礎看護学分野のテーマの1つである基礎看護技術教育の教育内容・方法の充実として、AIMS-Gifuを活用した取り組みを実践していきたい。
- 4) 循環病態学のメカニズムを動物実験を用いて明らかにしていくとともに、再生医療についても探究していきたい。

(2) 生命機能学分野

1. 研究の概要

本分野では、電子顕微鏡や蛍光顕微鏡に加え、分子生物学やコンピュータの技術を用いて、組織形態から分子レベルにまで至る研究を行っている。形態レベルの研究では、各種動物の舌乳頭及び上皮剥離後の結合組織の表面構造を走査型電子顕微鏡により観察し、主に比較解剖学的側面から食物及び咀嚼方法との関係について研究している。一方、分子レベルの研究としては、新たに見出した中心体タンパク質 CLERC の解析を通して、中心体や中心子機能の進化的特性の解明を目指している。さらに、ヒトを含めた多様な生物種のゲノム情報を活用することにより、生体分子の分子進化経路の解析や、祖先タンパク質の再現、微生物の病原因子の解析等、コンピュータを用いたバイオインフォマティクスに基づく研究を推進している。

2. 名簿

教授： 江村正一 Shoichi Emura
教授： 武藤吉徳 Yoshinori Muto

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）

- 1) Matsuoka T, Kotsuki H, Muto Y. Multi-functions of photodynamic pigments in ciliated protozoans. In: A. Méndez-Vilas ed. Current Research, Technology and Education Topics in Applied Microbiology and Microbial Biotechnology. Badajoz: Formatex Research Center; 2010:419-426.

総説（和文）
なし

総説（欧文）

- 1) Muto Y, Okano Y. CLERC and centrosomal leucine-rich repeat proteins. Central European Journal of Biology. 2010;5:1-10.

原著（和文）

- 1) 江村正一. アブラコウモリの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2009年; 153巻: 56-62.
- 2) 江村正一. カルガモの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2009年; 153巻: 63-69.
- 3) 江村正一. ツグミとシロハラ舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2009年; 153巻: 101-106.
- 4) 江村正一. ヌートリア舌乳頭の結合織芯の観察, 医学と生物学 2009年; 153巻: 107-113.
- 5) 江村正一, 奥村年彦, 陳華岳. レッサパンダの舌乳頭とその結合織芯の走査型電子顕微鏡による観察, 哺乳類科学 2009年; 49巻: 37-43.
- 6) 江村正一. ヒヨドリ舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2009年; 153巻: 243-248.
- 7) 江村正一. 8種類の哺乳動物における肉球の汗腺管について, 医学と生物学 2009年; 153巻: 249-255.
- 8) 江村正一. 3種類のサギ舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2009年; 153巻: 423-430.
- 9) 江村正一. ハクビシンおよびタヌキの有郭乳頭と舌根部円錐乳頭について, 医学と生物学 2009年; 153巻: 431-436.
- 10) 松波宏佳, 武藤吉徳, 松波美紀, 温水理佳, 吉川美保, 箕浦とき子. 椅子からの立ち上がり動作の画像分析—「自然な動き」と「全面的な介助を受けたときの動き」の特徴—, 岐阜看護研究会誌 2009年; 1巻: 17-23.
- 11) 江村正一. アマサギとアオサギの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2010年; 154巻: 20-27.
- 12) 江村正一. ムクドリ, ホトトギス, ウグイスの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2010年; 154巻: 28-35.
- 13) 江村正一. ツバメの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2010年; 154巻: 286-291.
- 14) 江村正一. アオバズクの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2010年; 154巻: 292-298.
- 15) 江村正一, 阿閉泰郎, 陳華岳. 哺乳類の喉頭蓋の形態について, 形態・機能 2010年; 9巻: 13-16.
- 16) 江村正一. オオミズナギドリの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2010年; 154巻: 441-446.
- 17) 江村正一. ドバト, キジバト, アオバトの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2010年; 154

巻：447-453.

- 18) 江村正一. アカエリヒレアシシギの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 1-6.
- 19) 江村正一. カワセミとアカショウビンの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 7-13.
- 20) 江村正一. ハシボソガラスの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 188-193.
- 21) 江村正一. トラツグミ, ハイタカ, オナガガモ, チュウサギの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 194-202.
- 22) 江村正一. フクロモモンガの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 377-383.
- 23) 江村正一. カナダガンとエジプトガンの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 384-389.
- 24) 江村正一. チリーフラミンゴの舌の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 790-795.
- 25) 江村正一. モリスズメフクロウの舌表面の走査型電子顕微鏡による観察, 医学と生物学 2011年; 155巻: 796-801.

原著 (欧文)

- 1) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the Oriental scops owl (*Otus scops*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2009;86:1-6.
- 2) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the Japanese pygmy woodpecker (*Dendrocopos kizuki*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2009;86:31-35.
- 3) Kohbata S, Emura S, Kadoya C. Filterable forms of *Nocardia*: a preferential site of infection in the mouse brain. *Microb Infect.* 2009;11:744-742. IF 2.726
- 4) Chen H, Zhou X, Emura S, Shoumura S. Site-specific bone loss in senescence-accelerated mouse (SAMP6): A murine model for senile osteoporosis. *Exp Gerontol.* 2009;44:792-798. IF 3.804
- 5) Chen H, Yanao R, Emura S, Shoumura S. Anatomic variation of the celiac trunk with special reference to hepatic artery patterns. *Ann Anat.* 2009;191:399-407. IF 1.658
- 6) Emura S, Okumura T, Chen H. Comparative studies of the dorsal surface of the tongue in three avian species by scanning electron microscopy. *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2010;86:111-115.
- 7) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the Jungle nightjar (*Caprimulgus indicus*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2010;86:117-120.
- 8) Chen H, Zhou X, Shoumura S, Emura S, Bunai Y. Age- and gender-dependent changes in three-dimensional microstructure of cortical and trabecular bone at the human femoral neck. *Osteoporosis Int.* 2010;21:627-636. IF 4.859
- 9) Emura S, Okumura T, Chen H. Scanning electron microscopic study of the tongue in the rainbow lorikeet (*Trichoglossus haematodus*). *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2011;88:17-21.
- 10) Emura S, Okumura T, Chen H. Morphology of the lingual papillae in the sitatunga. *Okajimas Folia Anat Jpn.* 2011;88:23-27.
- 11) Muto Y, Tanabe Y, Kawai K, Okano Y, Iio H. Climacostol inhibits *Tetrahymena* motility and mitochondrial respiration. *Cent Eur J Biol.* 2011;6:99-104. IF 0.685
- 12) Matsunami M, Yoshioka T, Minoura T, Okano Y, Muto Y. Evolutionary features and intracellular behavior of PRTB protein. *Biochem Genet.* 2011;49:458-473. IF 0.825
- 13) Ninomiya M, Tanaka K, Tsuchida Y, Muto Y, Koketsu M, Watanabe K. Increased bioavailability of tricin-amino acid conjugates via a prodrug approach. *J Med Chem.* 2011;54:1529-1536. IF 5.207

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

なし

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

- 1) ニノ宮真之, 土田裕三, 瀧野 守, 渡邊邦友, 田中香お里, 武藤吉徳, 他: トリシンアミノ酸接合体 (発明); 平成 22 年(特願 2010-20484)

6. 学会活動

1) 学会役員

江村正一：

- 1) 日本解剖学会評議員(～現在)
- 2) 日本臨床分子形態学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

武藤吉徳：

- 1) Advances in Planar Lipid Bilayers and Liposomes ; Editorial Board(～現在)
- 2) TSWJ (Bioinformatics domain) ; Editorial Board(～現在)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

研究内容は、組織形態から生体分子のレベルまで広範囲に亘るが、分野内の教員間での共同研究は為されていない。また、研究成果は形態及び生体分子レベル共に少数ながら国際的にみても独自の成果が公表されている。しかし、少人数の分野であることもあり、出版数は比較的少ない。

現状の問題点及びその対応策

形態領域（電子顕微鏡）における研究の進行速度は、研究材料としての動物の器官及び組織の確保次第であり、今後これまで以上に全国の動物園及び各自治体の協力を得たいと考えている。一方、中心体タンパク質に関する研究では、CLERC と相互作用するタンパク質の同定や、他の中心体タンパク質との関連についての解析を進める必要がある。このためには、質量分析法等の利用が有効であり、これらを活用して結合タンパク質の同定を可能にしたい。

今後の展望

電子顕微鏡により各種動物の舌形態をさらに多く観察し、舌の構造と食性との関係を明らかにしたい。他方、中心体タンパク質については、多様なゲノム情報を活用できる **Bioinformatics** に基づく解析を積極的に導入し、中心体複製や細胞分裂における役割、さらに中心体タンパク質の分子進化について明らかにしたい。また、遺伝子レベルの研究についても学内の他の研究室との積極的な共同研究を行い、研究成果の奥行きを深めていきたい。

〔母子看護学講座〕

(1) 母性看護学分野

1. 研究の概要

今田葉子：

助産師が提供する周産期母子ケア，母性看護学教育・技術に関する研究

大原良子：

地域における看護職者の連携による幼児期以降の児童性的虐待（Child Sexual Abuse : CSA）の予防プログラムと介入方法の開発。西洋圏では，性的虐待から子供を守るためのプログラムが報告されており，地域を挙げて様々な対応をしている。これらに応用した親を含む地域への啓発プログラムの開発に向けた研究。

2. 名簿

准教授：	今田葉子	Yoko Imada
准教授：	大原良子	Ryoko Ohara
助教：	坂倉知恵	Tomoe Sakakura
助教：	吉田真弓	Mayumi Yoshida

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 今田葉子. パートⅡ 正常な妊娠とアセスメント 妊娠末期の看護：村本淳子，高橋真理編. 周産期ナーシング，東京：ヌーヴェルヒロカワ；2009年：49, 57-62, 83-92.
- 2) 大原良子，金城利雄. リハビリテーション看護の現状と課題：酒井郁子，金城利雄編. リハビリテーション看護，東京：南江堂；2010年：319-328.
- 3) 今田葉子. パートⅡ 正常な妊娠とアセスメント 妊娠末期の看護：村本淳子，高橋真理編. 周産期ナーシング，東京：ヌーヴェルヒロカワ；2011年：64-66, 72-79, 102-111.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 今田葉子，斎藤 真，永見桂子，村本淳子. 新生児の沐浴技術における児頭固定の早期習得に関する研究，母性衛生 2009年；50巻：165-173.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：今田葉子；科学研究費補助金若手研究(B)：乳房マッサージまたは抱き方・吸着のケアを受けた褥婦の乳汁分泌・自律神経系への効果；平成 21-23 年度；2,400 千円(1,800：500：100 千円)
- 2) 研究代表者：川崎晴久，連携研究者：西本 裕，今田葉子，後藤多郎；科学研究費補助金基盤研究(B)：ハンドハプティックインターフェイスによる手技伝達の研究；平成 23-25 年度；19,630 千円(7,280：6,630：5,720 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

今田葉子：

- 1) 日本人間工学会評議員(～平成 21 年度)
- 2) 第 12 回日本母性看護学会学術集会 企画委員(平成 22 年 3 月～7 月)
- 3) 日本人間工学会東海支部 2011 年研究大会 運営委員(平成 22 年 4 月～10 月)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

今田葉子：

- 1) 人間工学会東海支部 2009 年研究大会(平成 21 年 10 月, セッション 3A, 座長)
- 2) 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス部門(平成 22 年 1 月, 岐阜, 東海地区特別講演「母性看護学分野における人間工学的な手法を用いた研究の取り組み」演者)
- 3) 日本人間工学会東海支部 2011 年研究大会(平成 23 年 10 月, セッション 3A, 座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

今田葉子：

- 1) 人間医工学研究開発センター 人間支援ロボティクス部門組織委員(平成 22 年度～現在)
- 2) 岐阜県教員免許状更新講習(平成 22 年 8 月, 岐阜, 「思春期における性の健康教育」講師)

大原良子：

- 1) 全国助産師教育協議会教育課程検討小委員会(平成 23 年度)

坂倉知恵：

- 1) 岐阜県教員免許状更新講習(平成 22 年 8 月, 岐阜, 「思春期における性の健康教育」講師)

10. 報告書

- 1) 久保田君枝, 板谷裕美, 大原良子他：産褥期のモジュール：全国助産師教育協議会, 中部地区活動報告書 マタニティ・ステージ各期のモジュール方式による教育展開：51-73(平成 22 年度版)

11. 報道

- 1) 今田葉子：母性看護学と人間工学 融合：岐阜新聞(2011 年 5 月 3 日)

12. 自己評価

評価

今田葉子：

助産教育課程におけるカリキュラム編成や分野の人材不足等の課題を抱え、特に H23 年度は分野の運営に力を注いだ。研究についてはデータ収集及び分析に留まっており、研究成果の公表まで至らなかった点が残念であった。

大原良子：

教員数の不足に伴う授業時間・実習時間の増加に対応することにおわれ、1年中講義・演習・実習におわれていたという印象である。論文の投稿や発表まで至らず研究成果が全く残せなかった。

現状の問題点及びその対応策

今田葉子：

研究のための時間が十分確保できるよう分野運営の調整、人材確保、教育等に関する計画を立案し実行する。

大原良子：

教員数の不足、入れ替わりの激しさから計画通りに事が進まない状況が続いている。H23年度は定員の2/3の教員しかいないという状況となり多忙を極めたが、H24年度の新任の教員のほうが多く安定するまで時間がかかることが予測される。領域の運営がスムーズに行きそれぞれの役割が果たせるよう努力が必要である。また、指定規則の改正によるカリキュラム変更に対応し、よりよい教育ができるよう努力したい。

H23年度は不足している教員分の授業・実習の対応で精いっぱいであり、研究に全く対応できなかった。学内の教育が最優先であるが、社会的な活動や研究にも取り組む時間の確保し研究者としての役割を果たしたい。

今後の展望

今田葉子：

さらなる研究成果の公表の他、社会活動においても充実を図りたい。

大原良子：

今後は、長期的な地元と密着した研究と海外での学会発表をぜひ行いたい。

(2) 小児看護学分野

1. 研究の概要

小児看護学分野では、健康上の問題を抱えた子どもと家族に対する援助について研究を行ってきた。特に小児気管支喘息やアトピー性皮膚炎といったアレルギー疾患を持つ子どもと家族では、子どもの療養行動の自律や母親の疲労などについて明らかにしてきた。また、思春期の胆道閉鎖症の子どもを対象にした研究では、先天性疾患患児の情報ニーズの特徴を明らかにし、健康管理及び社会生活の自律にむけての支援について検討した。平成 23 年度からは発達障害や肢体不自由児に長年関わってきた助教が加わったことで、さらに研究の幅を広げていくことが可能となった。行ってきた研究は今後も継続・発展させていくものばかりであり、研究に割く時間を十分に確保できない状況ではあるが、取り組みを続けていく予定である。

2. 名簿

教授： 杉浦太一 Taichi Sugiura
准教授： 田中千代 Chiyo Tanaka
助教： 大橋麗子 Reiko Ohashi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 田中千代, 岩井 潤. 系統看護学講座専門 23 小児看護学 2 第 12 版, 東京: 医学書院; 2011 年: 216-266.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 中村泰子, 奈良間美保, 堀 妙子, 田中千代, 齋藤麻子, 松永侑美. 子どもの医療的ケアにかかわる医療・教育職の情報入手の現状と希望の実態, 小児看護 2011 年; 34 巻: 218-223.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 佐合真紀, 浅野みどり, 伊藤浩明, 二村昌樹, 杉浦太一. 食物アレルギー児の母親の食生活管理の現状と負担の関係, 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌 2009 年; 7 巻: 21-27.
- 2) 石黒彩子, 浅野みどり, 杉浦太一, 三浦清世美, 山田知子, 石井 真, 城 憲秀. 構造方程式モデリング手法を用いた気管支喘息をもつ子どもの QOL 概念モデルの検討, 医学と生物学 2010 年; 154 巻: 218-226.

原著（欧文）

- 1) Yamada T, Asano M, Ishiguro A, Sugiura T, Miura K. Collaboration between adolescent asthma patients and medical caregivers: state of collaboration from the perspective of child patients. J Jpn Soc Nurs Health Care. 2009;11:6-14.
- 2) Tanaka C, Narama M. Relationship between the acquisition of health-related information, health behaviors, and social factors in adolescent patients with biliary atresia. The Journal of Child Health. 2010;69:618-627.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：杉浦太一，研究分担者：佐合真紀(平成 21 年度)，大橋麗子(平成 23 年度)；科学研究費補助金基盤研究(C)：睡眠時に起こるアトピー性皮膚炎を持つ幼児の掻痒感への対処法と効果；平成 21-23 年度；4,400 千円(3,120：780：500 千円)
- 2) 研究代表者：奈良間美保，研究分担者：田中千代，堀 妙子，豊田ゆかり，小平由美子；科学研究費補助金基盤研究(B)：親子の相互作用に着目した家族主体の小児在宅ケアガイドラインの有用性の検証と活用；平成 22-23 年度；5,850 千円(4,030：1,820 千円)
- 3) 研究代表者：大橋麗子；科学研究費補助金研究活動スタート支援：肢体不自由児施設における被虐待児の段階的システムの解明；平成 23-24 年度；800 千円 (400：400 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

杉浦太一：

- 1) 一般社団法人日本看護研究学会社員：評議員(～現在)
- 2) 日本看護医療学会評議員(～現在)
- 3) 日本小児保健協会研究助成選考委員会委員(平成 22 年度～平成 23 年度)
- 4) 日本小児看護学会評議員(平成 23 年 7 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

杉浦太一：

- 1) 日本看護研究学会雑誌；編集委員(～現在)

7. 学会招待講演、招待シンポジスト、座長

杉浦太一：

- 1) 日本家族看護学会第 17 回学術集会(平成 22 年 9 月, 名古屋, シンポジウム「家族看護研究を実践につなげるために・・・」座長)
- 2) 経済産業省社会人基礎力育成事例研究セミナー(平成 22 年 9 月, 名古屋, パネルディスカッション「振り返り・評価を活用した社会人基礎力の育成」パネリスト)
- 3) 第 58 回日本小児保健協会学術集会(平成 23 年 9 月, 名古屋, ミニシンポジウム「保育所・幼稚園に通園する発達障害をもつ子ども・母親への対応」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

助教の退職に伴い平成 22 年度は助教がおらず教員 2 名体制で学生の教育と研究を行ってきた。平成 23 年度からは新たな助教が加わり 3 名となった。そのためもあり、業績は多くはないが、授業で使用している教科書を執筆や科学研究費補助金の獲得もあり、かなり十分な業績となっていると考える。

現状の問題点及びその対応策

学生への教育や学内運営に対して使わなければならない時間が多く、研究フィールドで十分に時間を

使った研究を行うことが困難な状況である。論文数や著書数を今後増やしていくことが課題である。

今後の展望

教員の定着を図ることで系統だった研究を行なえるようになり、より良い研究成果を出していくことができるようになると思う。さらに、研究に使用できる時間を確保するために、業務内容をスリム化していくことが望まれる。

〔成人・老年看護学講座〕

(1) 成人看護学分野（慢性期）

1. 研究の概要

臨床における看護の質の向上のために臨床で得られた知の科学的分析，さらに慢性看護学の学問の確立と発展に貢献できるよう研究に取り組んでいる。具体的には，慢性的な病を持ちながら生活する成人期にある患者の QOL, QOL の向上や再構築に求められる看護の理論的探索とそれに依拠する新たな理論開発，難病に関する看護，看護実践能力育成を目指した慢性看護学臨地実習における教育内容などに関する研究である。

2. 名簿

教授：	足立久子	Hisako Adachi
准教授：	福原隆子	Takako Fukuhara
助教：	伊藤育子	Ikuko Ito
助教：	恒川育代	Ikuyo Tsunekawa

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 足立久子. 慢性疾患患者の HRQOL 評価への選好値測定法の適用, 岐阜看護研究会誌 2009 年; 1 巻: 9-16.
- 2) 伊藤育子. 1 型糖尿病をもつ青年期の人々が抱える問題, 岐阜看護研究会誌 2009 年; 1 巻: 79-85.
- 3) 伊藤育子, 杉浦浩子, 中島美奈子, 桑田弘美, 箕浦とき子, 後閑容子. 卒業生による評価, 岐阜看護研究会誌 2009 年; 1 巻: 87-92.
- 4) 福原隆子, 伊藤育子. パーキンソン病をもつ患者の看護, ナーシングカレッジ 2010 年; 14 巻: 59-77.
- 5) 田中さおり, 足立久子. 再入院を繰り返す慢性心不全患者の自己管理行動とその患者を支える家族への支援の現状と課題, 岐阜看護研究会誌 2011 年; 3 巻: 67-77.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 小野敏子, 笠井由美子, 野田洋子, 足立久子. 二分脊椎女性の月経と性の健康に関する研究, 川崎市立看護短期大学紀要 2010; 15 巻: 81-85.
- 2) 杉浦浩子, 中島美奈子, 伊藤育子, 桑田弘美, 箕浦とき子, 後閑容子. 岐阜大学医学部看護学科卒業生の動向および勤務状況の実態, 岐阜大学医学部紀要 2010 年; 56 巻: 1-8.

原著（欧文）

- 1) Adachi H, Oyamada T. Analyses of factors related to the improvement of HRQOL in outpatients with diabetes. Acta Sch Med Univ Gifu. 2010;56:53-57.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者：恒川育代；科学研究費補助金若手研究(B)：男性 2 型糖尿病患者の心筋梗塞予防に向けた職場のソーシャルサポートに関する研究；平成 20-22 年度；2,600 千円(780：780：1,040 千円)
- 2) 研究代表者：伊藤育子；科学研究費補助金若手研究(B)：日本人向けの糖尿病足病変予防のための看護プログラムの作成とその有用性の検討；平成 19-21 年度；3,860 千円(1,000：2,210：650 千円)
- 3) 研究代表者：野田洋子，研究分担者：足立久子；科学研究費補助金基盤研究(C)：二分脊椎女性のリプロダクティブヘルスケアプログラムの実践と評価；平成 22-24 年度；4,160 千円(2,340：1,040：780 千円)
- 4) 研究代表者：伊藤育子；学術研究助成基金助成金若手研究(B)：天疱瘡患者の日常生活の観察と生活

日誌を活用した社会復帰支援プログラム作成と検証；平成 23-25 年度；2,470 千円(780：780：910 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

足立久子：

- 1) 日本看護学研究学会評議員(～平成 21 年 3 月)
- 2) 日本慢性看護学会(～現在)
- 3) 日本ヒューマン・ケア心理学会理事(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

なし

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

福原隆子：

- 1) 岐阜県准看護師試験委員(平成 21 年度)

10. 報告書

- 1) 野田洋子，小野敏子，足立久子他，二分脊椎女性の月経と性の健康に関する包括的ケアプログラムの開発：平成 18-20 年度科学研究費補助金分担報告書(平成 21 年 3 月)
- 2) 後閑容子，箕浦とき子，足立久子，西本 裕，奥村太志，足立みゆき：9 月入学実施に向けての調査検討：1-33(平成 21 年 3 月)
- 3) 伊藤育子：日本人向けの糖尿病足病変予防のための看護プログラムの作成とその有用性の検討；平成 19-21 年度科学研究費補助金若手研究(B) 研究成果報告書(平成 21 年 3 月)
- 4) 恒川育代：男性 2 型糖尿病患者の心筋梗塞予防に向けた職場のソーシャルサポートに関する研究：平成 20-22 年度文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書：1-5(平成 23 年 5 月)

11. 報道

- 1) 福原隆子：「研究室から 大学はいま」高齢者虐待防止活動を推進：岐阜新聞(2009 年 9 月 15 日)

12. 自己評価

評価

実質 3 名の教員により，教育と研究活動を行っている。時間的余裕のない厳しい条件の中で，教育に関しては，ほぼ概ね達成できていると思われる。研究については各教員，少ないながらも業績を積み上げるよう努力している。看護実践能力育成を目指した慢性看護学臨地実習における教育内容に関する共同研

究においても、その成果はわずかではあるが学会発表と論文発表している。

現状の問題点及びその対応策

教育活動に主眼をおき、研究活動の時間の確保は難しく、研究活動に努力しているもののやや低迷状態である。慢性期分野の教員をとりまく研究環境を変えないが、時間が確保できるよう対応していきたい。

今後の展望

学内のみならず、臨床との共同研究の推進を図りたい。また、外部資金の獲得として科学研究費にとどまらず、各種団体の研究助成への申請など積極的に推進していきたい。

(2) 成人看護学分野（急性期）

1. 研究の概要

成人看護学急性期分野では、看護学教育や看護実践に活かすことを目的とした研究課題を設定し、調査研究や教材開発、実験/準実験研究等を行っている。研究の対象は、手術を受ける患者と家族や救急・クリティカルケアを必要とする患者と家族、リハビリテーションを必要とする患者と家族、スポーツ等の運動を行う者など多岐にわたっており、広く家族・地域を含めた健康支援を考えるものである。

主な研究テーマ

- ・成人急性期看護学講義・演習および実習における実践能力の育成と到達度に関する研究
- ・e-learning システムを使用した学習効果の検証に関する研究
- ・成人急性期看護における看護技術や教育方法に関する研究
- ・救急蘇生のシミュレーション教育における学習効果に関する研究
- ・救急領域における患者家族のニーズに関する研究
- ・救命救急領域における自殺未遂患者へのケアに関する研究
- ・災害看護における看護師のストレスおよびそのケアに関する研究
- ・クリティカルケア看護に関する研究
- ・術後せん妄に関する研究
- ・スポーツにおける看護師の役割に関する研究
- ・障害者スポーツの競技成立に関わる因子の研究
- ・骨軟部腫瘍術後の四肢障害者のリハビリテーションに関する研究
- ・上肢障害者のリハビリテーション機器の効果判定
- ・スポーツ外傷・スポーツ障害に関する研究

2. 名簿

教授：	西本 裕	Yutaka Nishimoto
教授：	松田好美	Yoshimi Matsuda
准教授：	高橋由起子	Yukiko Takahashi
助教：	岩田美智子	Michiko Iwata
助教：	林 寛子	Hiroko Hayashi

3. 研究成果の発表

著書（和文）

なし

著書（欧文）

なし

総説（和文）

- 1) 松田好美. 救急部門における看護師の役割—トリアージから感染対策まで, 感染防止 2010年; 3巻: 20-29.
- 2) 柴 裕子, 松田好美. 消化器疾患における開腹手術後患者の離床に関する研究の動向と課題, 岐阜看護研究会誌 2011年; 3号: 57-67.

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 西本 裕. 小中学校における「運動器」の問題—学校教員を対象とした質問紙調査結果の検討—, 岐阜県医師会医学雑誌 2009年; 22巻: 93-100.
- 2) 大野貴敏, 大島康司, 山口良大, 下川邦泰, 清水克時, 西本 裕, 浅野奈美, 広瀬善信. 病的骨折をきたした大腿骨腫瘍の1例, 東海骨軟部腫瘍 2009年; 21巻: 31-32.
- 3) 高橋由起子, 松田好美. コンピュータ教材を用いた術前指導演習の到達度別レポート内容の分析, 岐阜看護研究会誌 2009年; 1号: 73-78.
- 4) 高橋由起子, 松田好美, 梅村俊彰. 生体腎移植を受ける患者の看護についての学生の学び—講義終了の質問紙からの分析—, 日本看護学会論文集看護総合 2009年; 40号: 362-364.
- 5) 高橋由起子, 松田好美, 梅村俊彰, 二村芽久美. 成人急性期看護学実習における受け持ち患者の現状と実習評価の分析—電子カルテシステムの活用による実習状況—, 日本看護学会論文集看護教育 2009年; 40

号：224-226.

- 6) 梅村俊彰. 腎性貧血における Hb 濃度の変化と必要な EPO 量の推定, 臨牀透析 2009 年; 25 巻: 281-285.
- 7) 高橋由起子, 松田好美, 梅村俊彰, 二村芽久美. e-learning システムを活用した看護実践能力育成のための術前指導用教材の利用状況と今後の課題, 岐阜看護研究学会誌 2010 年; 2 号: 33-40.
- 8) 高橋由起子, 松田好美, 梅村俊彰, 二村芽久美. 試行的ブレンディッドラーニングシステムによる学習満足調査—アンケート調査からの分析—, 岐阜看護研究学会誌 2011 年; 3 号: 9-16.
- 9) 二村芽久美, 高橋由起子, 梅村俊彰, 松田好美. 急性期看護学実習における学生の学び—目標到達度別レポート内容の比較から—, 岐阜看護研究学会誌 2011 年; 3 号: 27-36.
- 10) 松田好美, 箕浦とき子, 後閑容子, 滝内隆子, 玉置真理子, 瀬藤朋弥. 岐阜県における地域医療に貢献できる看護職の育成プログラムの開発と実践, 岐阜看護研究学会誌 2011 年; 3 号: 121-130.
- 11) 毛利哲也, 西本 裕, 伊藤 聡, 川崎晴久. 手指リハビリテーション支援システムにおける実証実験, 日本ロボット学会誌 2011 年; 29 巻: 43-44.

原著 (欧文)

- 1) Nishida Y, Isu K, Ueda T, Nishimoto Y, Tuchiya H, Wada T, Sato K, Tsukushi S, Sugiura H. Osteosarcoma in the elderly over 60 years: A multicenter study by the Japanese Musculoskeletal Oncology Group. J Surg Oncol. 2009;100:48-54. IF 2.428
- 2) Nagano A, Ohno T, Nishimoto Y, Yamada K, Shimizu K. Extraskeletal osteosarcoma of the thigh: an autopsy case report. Sarcoma. 2009;186565.
- 3) Yano K, Hashimura J, Aoki T, Nishimoto Y. Flexion-extension motion assistance using an upper limb motion-assist robot based on trajectory estimation of reaching movement. Conf Proc IEEE Eng Med Biol Soc 2009;4599-4602.
- 4) Terabayashi N, Ohno T, Nishimoto Y, Oshima K, Takigami I, Yasufuku Y, Shimizu K. Non-union of a first rib fracture causing thoracic outlet syndrome in a basketball player: A case report. J Shoulder Elbow Surg. 2010;19:e20-e23. IF 2.314
- 5) Hioki M, Kawasaki H, Sakaeda H, Nishimoto Y, Mouri T. Finger Rehabilitation System Using Multi-fingered Haptic Interface Robot Controlled. Proc BioRob. 2010;276-281.
- 6) Ito S, Kawasaki H, Ishigure H, Natsume M, Mouri T, Nishimoto Y. A design of fine motion assist equipment for disabled hand in robotic rehabilitation system. Journal of the Franklin Institute. 2011; 348:79-89.

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 岩本幸英, 研究分担者: 西本 裕; 厚生労働省科学研究費補助金がん臨床研究事業: 高悪性度骨軟部腫瘍に対する標準治療確立のための研究; 平成 20-22 年度; 75,320 千円(31,428 : 25,410 : 18,482 千円)
- 2) 研究代表者: 松田好美; 岐阜大学活性化経費(教育), AIMS-Gifu 学習支援システムを活用した小児・乳児の救急蘇生教育; 平成 21 年度; 490 千円
- 3) 研究代表者: 箕浦とき子, 共同研究者: 後閑容子, 滝内隆子, 松田好美; 岐阜県における地域医療に貢献できる看護職の育成プログラムの開発と実践; 大学活性化経費(地域連携: 一般); 平成 21 年度; 600 千円
- 4) 研究代表者: 松田好美, 研究分担者: 西本 裕, 高橋由起子, 梅村俊彰, 二村芽久美, 竹内登美子, 間宮礼子, 小澤和弘, 寺内英真; 岐阜大学技術交流研究会活動支援費; コンピュータ教材開発研究会; 平成 21 年度; 150 千円
- 5) 研究代表者: 高橋由起子, 研究分担者: 松田好美, 加藤直樹; 科学研究費補助金基盤研究(C): 看護実践能力育成のためのブレンディッドラーニングシステムの構築とその学習効果; 平成 21-23 年度; 2,000 千円(900 : 600 : 500 千円)
- 6) 研究代表者: 高橋由起子, 共同研究者: 西本 裕, 松田好美, 梅村俊彰, 二村芽久美; 大学活性化経費(教育): 看護実践能力を育成のための体験型学内演習の展開; 平成 21 年度; 500 千円
- 7) 研究代表者: 松田好美, 研究分担者: 西本 裕, 高橋由起子, 梅村俊彰, 二村芽久美; 大学活性化経費(教育): 心肺蘇生修得のための継続・連携教育; 平成 22 年度; 500 千円
- 8) 研究代表者: 高橋由起子, 研究分担者: 松田好美, 西本 裕, 梅村俊彰, 二村芽久美, 伊藤友美, 江崎美記, 伊藤稔子, 梶間和枝, 高橋直美; 岐阜大学技術交流研究会活動支援費; Gifu クリティカルケア看護情報研究会; 平成 22 年度; 150 千円
- 9) 研究代表者: 高橋由起子, 共同研究者: 西本 裕, 松田好美, 梅村俊彰, 二村芽久美; 大学活性化経費(教育): クリティカルケア看護に関する実践能力の育成を目指した体験型学内演習プログラム; 平成 22 年度; 500 千円

- 10) 研究代表者：高橋由起子，研究分担者：松田好美，西本 裕，梅村俊彰，岩田美智子，伊藤友美，江崎美記，伊藤稔子，梶間和枝；岐阜大学技術交流研究会活動支援費；Gifu クリティカルケア看護情報研究会；平成 23 年度；150 千円
- 11) 研究代表者：高橋由起子，共同研究者：西本 裕，松田好美，梅村俊彰，岩田美智子；大学活性化経費(教育)：クリティカルケア看護実践能力育成のためのスキルトレーニングプログラムの構築；平成 23 年度；500 千円

2) 受託研究

- 1) 矢野賢一，西本 裕，柳瀬秀治；都市エリア産学官連携促進事業(発展型)「モノづくり技術と IT を活用した高度医療機器の開発」「上肢・下肢動作支援ロボット(アクティブギプス)の開発」；平成 21-22 年度；43,948,853 円(24,373,960：19,574,893 円)

3) 共同研究

- 1) 西本 裕：床上で利用可能な手指リハビリテーション支援システムの研究開発；平成 21 年度；19,677 千円；(株)丸富精工

5. 発明・特許出願状況

- 1) 川崎晴久，夏目昌寿，西本 裕，毛利哲也，石樽康彦；上肢手指機能回復訓練装置；平成 23 年度(特許第 4811868 号)

6. 学会活動

1) 学会役員

西本 裕：

- 1) 中部日本整形外科災害外科学会評議員(～現在)
- 2) 日本整形外科学会代議員(平成 22 年 12 月～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演，招待シンポジスト，座長

西本 裕：

- 1) 第 117 回中部日本整形外科災害外科学会(平成 23 年 10 月，宇部，「腫瘍・腫瘍類似疾患」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

西本 裕：

- 1) 岐阜県社会保険診療報酬支払基金診療報酬請求審査委員会委員(～現在)
- 2) 岐阜県スポーツドクター協議会理事(～現在)
- 3) 岐阜労働局労災保険診療協議会委員(平成 21 年度～現在)
- 4) 損害保険料率算出機構顧問医(平成 21 年度～現在)
- 5) 岐阜県体育協会スポーツ医科学委員(平成 21 年度～現在)
- 6) 広州 2010 アジアパラ競技大会帯同医(平成 22 年 12 月 7 日～20 日)

松田好美：

- 1) 社団法人岐阜県看護協会岐阜県看護教員養成講習会講師(平成 21 年 11 月～平成 22 年 1 月)

高橋由起子：

- 1) 社団法人岐阜県看護協会岐阜県看護教員養成講習会講師(平成 23 年 12 月～現在)

10. 報告書

- 1) 松田好美：AIMS-Gifu 学習支援システムを活用した小児・乳児の救急蘇生教育：平成 21 年度岐阜大学活性化経費(教育)成果報告書：1-4(2010 年 12 月)
- 2) 高橋由起子, 西本 裕, 松田好美, 梅村俊彰, 二村芽久美：看護実践能力育成のための体験型学内演習の展開：平成 21 年度岐阜大学活性化経費(教育)成果報告書：1-4(2010 年 12 月)
- 3) 松田好美, 高橋由起子, 梅村 俊彰：CAI 教材を利用した心肺蘇生法の知識・技術・実施への意思の保持・強化に関する研究：平成 19 年度-21 年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究報告書(平成 23 年 1 月)

11. 報道

- 1) 高橋由起子：「研究室から 大学はいま」PC 教育で看護実践能力の育成：岐阜新聞(2009 年 6 月 16 日)

12. 自己評価

評価

成人急性期看護学分野の教員構成は毎年変化し、平成 23 年度は新任 2 名を加えた 5 名となっている。研究テーマは各々が主要なテーマを持ち、分野全体で協力しながら研究を実践している。また競争的資金として科学研究費補助金基盤研究(C)、厚生労働省科学研究費補助金をそれぞれ 1 件および岐阜大学活性化経費 6 件を獲得している。総合的評価としておおむね目標を達成できたと評価するが、看護に関する欧文原著論文の作成が不足している。新任の 2 名の分野メンバーと共に研究活動の更なる展開を創造する必要がある。

現状の問題点及びその対応策

教員の移動、定着率の問題もあり、継続した共通テーマに沿った研究活動が低迷している。また教員数が少なく急性期看護学および大学院の教育活動に主眼をおいていることにより、研究活動・論文執筆の時間の確保が難しい状況である。次年度からは新任教員と協力し、効率を考えた活動により、各々の専門性を生かした研究体制の構築を図りたい。

今後の展望

各々の専門性を生かしながら、分野としての共通テーマに沿った共同研究を推進していく予定である。また総合大学の特長を生かした学内での共同研究の可能性の追求、また国内の大学・研究施設との学術交流・共同研究の推進を図りたい。競争的資金の獲得については、科学研究費、学内競争的資金にとどまらず各種団体の研究助成への申請を積極的に推進したい。また若手研究員の研究力向上のためには、内地留学や在外研修への派遣も考慮したいが、まずは教員の定着率向上が研究の継続への推進になると考える。

(3) 老年看護学分野

1. 研究の概要

老年看護学分野では、超高齢社会に突入しつつある時代において、多様な個人や家族の人生観や価値観を大切にしたい高齢者への支援やその健康の維持を図ることを重要な課題と考えている。

研究テーマとしては、高齢者の QOL を維持・向上するために、その「もてる力」を重視し、「その人らしい生活の維持」が可能となるようなケアの方策に関する研究を行っている。

看護教育に関連する研究としては、学生の高齢者への実践応力の向上を意図し、主に、臨地実習指導方法に関する研究を行っている。臨地実習では、ありのままに高齢者を理解しケアを実践するための視点を持ち、「もてる力」を意識的に観ることができることを強調して実施している。

大学院医学系研究科看護学専攻においては、地域健康援助学分野の中に、老年看護学は位置づけされており、老年看護学の方向性と現状の間の起きている数々の実情的な課題をとりあげ、制度に関する研究や、実践方法に関する研究に取り組んでいる。

2. 名簿

教授：	松波美紀	Miki Matsunami
准教授：	小木曾加奈子	Kanako Ogiso
助教：	温水理佳	Rika Nukumizu
助教：	吉川美保	Miho Yoshikawa
助教：	臼井かおり	Kaori Usui

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 山村 礎, 勝野とわ子, 奥野茂代, 河原加代子, 川西千恵美, 城生弘美, 松尾ミヨ子, 堀内園子, 箕浦とき子, 安藤郁子他. ナーシング・グラフィカ 基礎看護学 基礎看護技術 一危篤・終末時の看護. 第3版, 東京: メディカ出版: 2011年: 441-454.
- 2) 安藤邑恵, 今井七重, 今井 一, 小木曾加奈子, 乙村 優, 上平公子, 河口尚子, 近藤邦代, 柴田由美子, 正村静子, 高野晃伸, 棚橋千弥子, 問い田小百合, 服部紀子, 林由美子, 松井いづみ, 真野啓子, 八島妙子, 山下科子, 渡辺美幸. 小木曾加奈子監修, 今井七重, 中山かおり編. 看護師必修問題集攻略ブック 12年度版初版, 東京: 成美堂出版: 2011年.
- 3) 松宮良子, 今井七重, 小木曾加奈子. 宮嶋 淳編. 生殖ケアソーシャルワーク論 初版, 東京: ヘルス・システム研究所: 2011年: 29-58.
- 4) 小木曾加奈子, 棚橋千弥子, 柴田由美子執筆編集協力. 看護職従事者必携! U-CAN のナース実用手帳 2012年版 第5版, 東京: 主婦の友社: 2011年.
- 5) 小木曾加奈子執筆編集協力. 介護職従事者必携! U-CAN のケア実用手帳 2012年版 第6版, 東京: 主婦の友社: 2011年.

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 松波宏佳, 武藤吉徳, 松波美紀, 温水理佳, 吉川美保, 箕浦とき子. 椅子からの立ち上がり動作の画像分析 - 「自然な動き」と「全面的な介助を受けたときの動き」の特徴, 岐阜看護研究会誌 2009年: 17-23.
- 2) 新家早紀, 松波美紀, 武藤吉徳. 施設で過ごす認知症高齢者が表出する感情に関する一考察, 第39回日本看護学会論文集-老年看護 2009年: 234-236.
- 3) 松波美紀, 野中恵美, 山田陽子, 野村郁子. 一般病棟で働く看護師の高齢入院患者への関わり方, 第39回日本看護学会論文集-老年看護 2009年: 267-269.
- 4) 市原亜矢子, 可児みさ代, 佐伯洋子, 和下厚子, 松波美紀. 二交替勤務導入に伴い長時間夜勤について考える-看護師の動き方と抱えている気持ちの実態調査を通して, 第39回日本看護学会論文集-看護管理 2009年: 134-136.
- 5) 伊藤育子, 杉浦浩子, 中島美奈子, 桑田弘美, 箕浦とき子, 後閑容子. 卒業生による大学生活の評価, 岐阜看護研究会誌 2009年: 17-23.
- 6) 服部直子, 箕浦とき子. 看護基礎教育における外国人留学生受け入れの実態と今後の課題 -ベトナム人留

学生を受け入れた教育機関と留学生への調査一, 日本看護学教育学会誌 2010年:13-24.

- 7) 野中恵美, 小林淑子, 松波美紀. 一般病棟の病棟看護師と認知症高齢患者との意思疎通の実態, 第40回日本看護学会論文集-老年看護 2010年:105-107.
- 8) 野村彩也子, 武藤明日花, 遠藤牧子, 松波美紀, 温水理佳, 吉川美保, 箕浦とき子. 認知症高齢者が昼間に表出する表情の実態-「音楽療法」活動が開催された日とされなかった日の表情の変化, 岐阜看護研究会誌 2011年;3巻:79-91.
- 9) 丸山あさ美, 箕浦とき子, 吉川美保, 温水理佳, 松波美紀. 化粧療法が高齢女性に与える影響, 岐阜看護研究会誌 2011年;3巻:93-104.
- 10) 温水理佳, 箕浦とき子, 松波美紀, 吉川美保. 認知症高齢者との看護学生とそのコミュニケーションとその指導の検討, 岐阜看護研究会誌 2011年;3巻:105-110.
- 11) 小木曾加奈子. 認知症高齢者の“よくない状態(ill-being)の指標に基づいた分析-生活全体に配慮が必要な認知症高齢者に着目をして-, 介護福祉学 2011年;18巻:155-161.
- 12) 佐藤八千子, 小木曾加奈子, 今井七重. 中高年者が認識する高齢期をいきいきと暮らす秘訣, 岐阜経済大学論集 2011年;44巻:13-21.

原著 (欧文)

- 1) Matsunami M, Yoshioka T, Minoura T, Okano Y, Mito Y. Evolutionary Features and Intracellular Behavior of the PRTB Protein. Biochem Genet. 2011;49:458-473.

IF 0.825

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 箕浦とき子, 研究分担者: 松田好美, 後閑容子, 滝内隆子; 大学活性化経費(地域): 岐阜県における地域医療に貢献できる看護職の育成プログラムの開発と実践; 平成21年度; 700千円
- 2) 研究代表者: 松波美紀; 科学研究費補助金基盤研究(C): 急性期医療における認知症高齢者の「持てる力」を活用した看護ケアプログラムの開発; 平成22-24年度; 2,580千円(1,170:910:500千円)
- 3) 研究代表者: 箕浦とき子, 研究分担者: 松波美紀, 温水理佳, 吉川美保; 大学活性化経費(地域連携:一般): 入院加療中の認知症高齢者の看護を考える-岐阜県内病院で働く看護師とのワークショップの開催-; 平成22年度; 600千円
- 4) 研究代表者: 松波美紀, 研究分担者: 小木曾加奈子, 温水理佳, 臼井かおり, 太田智子; 大学活性化経費(地域連携:一般): 入院加療中の認知症高齢者の看護を考える その2-岐阜県内病院で働く看護師との事例検討会の開催-; 平成23年度; 600千円
- 5) 研究代表者: 小木曾加奈子, 共同研究者: 阿部隆春, 平澤泰子, 山下科子, 安藤邑恵; 高齢社会実践的研究助成: 認知症ケアにおけるケア実践者のケア充実感と職務満足度の関係について-ICFの視点に基づく「認知症ケア内容尺度」の開発-; 平成21年10月-平成23年9月; 2,140千円(1,000:1,140千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

箕浦とき子:

- 1) 日本老年行動科学会常任理事(~現在)

小木曾加奈子:

- 1) 東海学校保健学会会計監査(平成23年度)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

箕浦とき子：

- 1) 高齢者のケアと行動科学編集委員(～現在)
- 2) 日本看護学教育学会誌専任査読委員(平成 21 年 4 月～現在)
- 3) 岐阜看護研究会誌編集委員(平成 21 年度)

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

小木曾加奈子：

- 1) 平成 23 年度地域福祉実践・研究フォーラム・日本地域福祉学会東海北陸地方会(平成 23 年 12 月, 岐阜, フォーラム「医療・介護分野」パネリスト・報告者)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

箕浦とき子：

- 1) 岐阜県看護師等就業協力員(平成 21 年度～現在)
- 2) 社団法人静岡県看護協会認定看護師教育課程「脳卒中リハビリテーション看護」入試委員(～現在)

松波美紀：

- 1) 社団法人岐阜県看護協会看護教員養成課程講師(～現在)

小木曾加奈子：

- 1) 三重県福祉・介護人材の確保と定着に関する実態調査委員長(平成 23 年度)

10. 報告書

- 1) 小木曾加奈子：認知症ケアにおけるケア実践者のケア充実感と職務満足度の関係について－ICF の視点に基づく「認知症ケア内容尺度」の開発－：平成 21・22 年度財団法人日本生命財団助成金研究成果報告書：1-85, 100-108, 117-121, 付録資料 7-43(平成 23 年 9 月)

11. 報道

- 1) 松波美紀：認知症を知り地域で支える：岐阜新聞(2009 年 12 月 27 日)

12. 自己評価

評価

老年看護学分野では、高齢者の「もてる力」に注目した高齢者理解、高齢者ケアの実践のための教育、研究に取り組み、学内での教育と臨地実習での実習指導に一貫性をもたせることができるよう努力している。その取り組みの実践報告はしているが、具体的な教育手法を導き出す段階までにはまだ到達していない。

平成 22 年度より、岐阜大学活性化経費の助成を受け、老年看護学分野として「認知症がある高齢入院高齢患者のケア」に関する研究に取り組み、平成 23 年度には、他施設の協力も得て、少しずつ活動を拡大している。しかし、平成 23 年度には教員構成が大きく変化し、教育内容・方法の調整等に翻弄し、研究活動ができる環境を整えるまでには至らなかった。

現状の問題点及びその対応策

老年看護学分野の臨地実習は 4 年生の前期に 2 単位、3 年生の後期に 2 単位計画しており、年間をとおして実習が行われている状況である。また、実習施設が大学よりは遠方にあるために、研究時間の獲得が困難な状況が継続している。次のカリキュラム改正時にこのあたりの問題を解消するため、時期的な修正は行ったが、それに伴う教育内容の精選・方法に関する検討はまだ十分ではなく、課題は多い。

平成 22 年度より競争的外部資金を得て、「認知症がある高齢入院高齢患者のケア」に関する研究に取り組んでいるが、研究としてまとめるには、倫理面や妥当性・信頼性等の課題も多く、成果発表まで至ってはいない。各年度で、分野としての取り組みを地域へも公表しつつ、共同研究の場を拡大し、その成果を発表していくよう努力していきたい。

今後の展望

超高齢社会の中では、高齢者自身に関することやケアに関することなど、医療・福祉における課題は多い。専門職を対象とした教育・研究だけでは解決することではない。小・中学生を含む一般の人々に高齢者に関する啓蒙を図ることも必要である。その内容を精選し、方法についての研究を推進する必要もある。

平成21年度から大学院医学系研究科看護学専攻、地域健康援助学分野に老年看護学の修士課程が開かれ、3名の学生が在籍している。今後は、大学院の院生の研究を含め、高齢者自身、高齢者の健康問題と直接関わるケア実践者に関連する研究を進め、成果発表の機会も増やしていきたい。

〔地域・精神看護学講座〕

(1) 地域看護学分野

1. 研究の概要

地域看護学分野においては、地域保健、産業保健、学校保健等の公衆衛生分野における研究と訪問看護に関する在宅医療分野の研究がおこなわれている。いずれの研究も、現場の課題に着目した研究テーマが多く、その成果は、公衆衛生や在宅看護の現場に還元されるものである。研究方法は、広く公衆衛生学・疫学及び看護学の研究手法を用いている研究が多い。具体的な研究テーマとしては、最近の公衆衛生分野の関心事である禁煙に関するもの、例えば地域における禁煙教育の介入効果を把握する研究を始め、地域保健活動に関する研究、保健師とその活動に関する研究、訪問看護ステーションの管理運営に関する研究、高齢者の虐待予防、学童へ的高齢者虐待予防教育に関する研究など多岐にわたっている。対象者も保健師や看護師など専門職を対象とした調査、地域住民としての子どもとその両親、高齢者、学生などさまざまな年齢層を対象としている。

このように、地域看護学分野における研究は、あらゆる年代の人々を対象として、健康増進から疾病予防、社会復帰にいたる多様な健康レベルの人々とそれに係る公衆衛生分野の専門職に関する研究など、多彩な研究がなされている。

<主な研究テーマ>

- 1) 職域における健康管理に関する研究
- 2) 高齢者虐待予防に関する研究
- 3) 青少年の喫煙・飲酒・薬物乱用とライフスタイルの関連性についての研究
- 4) 保健師教育、新人保健師の育成に関する研究
- 5) 訪問看護ステーションの経営効率化に関する研究
- 6) 地域における禁煙教育に関する研究
- 7) 訪問看護師のリスクマネジメントに関する研究

2. 名簿

教授：	後閑容子	Yoko Gokan
准教授：	石原多佳子	Takako Ishihara
准教授：	若杉里美	Satomi Wakasugi
准教授：	三好美浩	Yoshihiro Miyoshi
助教：	瀨瀨朋弥	Tomomi Kouketsu
助教：	玉置真理子	Mariko Tamaoki

3. 研究成果の発表

著書（和文）

- 1) 牧野茂徳. 第3節 特殊健康診断について:岐阜県大学保健管理研究会編. 大学生の健康ナビ キャンパスライフの健康管理, 岐阜:岐阜新聞社; 2009年: 15-19.
- 2) 牧野茂徳, 他. クエスチョン・バンク保健師国家試験問題解説 2010, 東京:メヂクメディア; 2009年.
- 3) 玉置真理子. 宮嶋淳他編著. 子どもの豊かな育ちへのまなざしーからだの健康観察ー 京都:久美株式会社; 2010年: 85-89.
- 4) 石原多佳子. 宮嶋淳他編著. 子どもの豊かな育ちへのまなざしー健康の概念ー, 京都:久美株式会社; 2010年: 82-85.
- 5) 石原多佳子. 荒賀直子, 後閑容子編著. 公衆衛生看護学.jp -障害者(児)保健活動-, -歯科保健活動-, 東京:インターメディカル; 2011年: 327-343, 395-402.
- 6) 若杉里美. 地域保健活動のツールー健康相談ー:荒賀直子, 後閑容子編. 第3版公衆衛生看護学.jp, 東京:インターメディカル; 2011年: 199-210.
- 7) 三好美浩, 勝野眞吾, 鬼頭英明, 吉本佐雅子, 西岡伸紀. 性別, 年齢集団, アルバイト経験による大学生における喫煙・飲酒・薬物乱用リスクの下位集団差ー2007年 JYPAD の結果ー, 学校保健研究 2011年; 53巻: 10-22.
- 8) 後閑容子, 荒賀直子編著. 第3版公衆衛生看護学.Jp, 東京:インターメディカル; 2011年

著書（欧文）

なし

総説（和文）

なし

総説（欧文）

なし

原著（和文）

- 1) 安田恭子, 若杉里実, 榊原國城. 大学生活への満足度に及ぼす教育・指導体制の影響, 愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告 2009年; 4号: 17-26.
- 2) 若杉里実, 坂本真理子. 地域看護過程演習の学びのプロセスとその効果, 日本看護学教育学会誌 2010年; 20巻: 15-23.
- 3) 瀨瀨朋弥, 松田宣子. 出産後の喫煙行動と関連要因, 日本公衆衛生雑誌 2010年; 57巻: 104-112.
- 4) 多田敏子, 後閑容子, 鈴木るり子. 保健師教育拡充に向けた教育体制に関する調査, 地域保健 2010年; 41巻: 58-66.
- 5) 杉浦浩子, 中島美奈子, 伊藤育子, 桑田弘美, 箕浦とき子, 後閑容子. 岐阜大学医学部看護学科卒業生の動向および勤務状況の実態, 岐阜大学医学部紀要 2010年; 56巻: 1-8.
- 6) 水野かがみ, 石原多佳子, 本田広国, 水野敏明, 大森正英. 高齢者の健康寿命に関する研究—地域高齢者の健康状態と活動能力, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要 2010年; 3巻: 7-43.
- 7) 表志津子, 佐伯和子, 石原多佳子. 看護職の介護支援専門員が認識する高齢者虐待事例マネジメントへの困難性と対処, 日本老年看護学会誌 2010年; 14巻: 60-67.
- 8) 若杉里実, 安田貴恵子. 新任保健師1年目の体験—母子保健事業での住民との関わりに焦点を当てて—, 日本地域看護学会誌 2011年; 13巻: 61-68.
- 9) 三好美浩, 勝野眞吾, 鬼頭英明, 吉本佐雅子, 西岡伸紀. 性別, 年齢集団, アルバイト経験による大学生における喫煙・飲酒・薬物乱用リスクの下位集団差—2007年 JYPAD の結果—, 学校保健研 2011年; 53巻: 10-22.

原著（欧文）

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 研究代表者: 瀨瀨朋弥; 科学研究費補助金若手研究(スタートアップ): 産後の再喫煙防止を目的とした禁煙サポート方法の検討—夫の喫煙行動に焦点を当てて—; 平成 20-21 年度; 3,107 千円(1,742 : 1,365 千円)
- 2) 研究代表者: 榊原國城, 研究分担者: 安田恭子, 若杉里実; 愛知淑徳大学学術研究振興資金: 大学卒業後のキャリア発達に及ぼす大学教育の効果; 平成 22-23 年度; 2,000 千円(1,425 : 575 千円)
- 3) 研究代表者: 瀨瀨朋弥, 研究分担者: 後閑容子, 石原多佳子, 玉置真理子; 科学研究費補助金基盤研究(C): 地域で行う妊産婦とパートナーを対象とした禁煙サポートプログラムの開発; 平成 22-25 年度; 4,000 千円(1,340 : 970 : 650 : 1,040 千円)
- 4) 研究代表者: 玉置真理子, 科学研究費補助金若手研究(B): 地域保健活動のアウトソーシングが及ぼした行政保健師への影響; 平成 20-22 年度; 359 千円(169 : 100 : 90 千円)
- 5) 研究代表者: 後閑容子, 研究分担者: 石原多佳子, 玉置真理子; 科学研究費補助金基盤研究(C): 行政変革時の保健師の役割再構築—Transition 理論を用いた縦断的研究; 平成 22 年度; 1,500 千円
- 6) 研究代表者: 後閑容子, 研究分担者: 石原多佳子, 玉置真理子, 瀨瀨朋弥; 経済産業省, 医療, 介護等関連分野における規制改革, 産業創出調査研究事業, IT 活用による介護事業者の経営効率化・安定化に資する調査; 平成 22 年度; 2,997 千円
- 7) 研究代表者: 石原多佳子, 研究分担者: 後閑容子, 表志津子, 玉置真理子, 石原敏秀; 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究: 住民協働による学童期からの高齢者虐待一次予防プログラムの開発; 平成 22 年度; 1,100 千円
- 8) 研究代表者: 榊原國城, 研究分担者: 安田恭子, 若杉里実; 愛知淑徳大学学術研究振興資金: 大学卒業後のキャリア発達に及ぼす大学教育の効果; 平成 22-23 年度; 2,000 千円(1,425 : 575 千円)
- 9) 研究代表者: 若杉里実; 科学研究費補助金基盤研究(C): ポートフォリオを活用した新任保健師の個人・家族支援実践能力の育成; 平成 23-25 年度; 1,560 千円(130 : 780 : 650 千円)
- 10) 研究代表者: 三好美浩; 科学研究費補助金研究活動スタート支援: 青少年のライフスタイルを評価する筆問項目のための疫学的調査研究; 平成 23-24 年度; 2,400 千円(1,400 : 1,000 千円)
- 11) 研究代表者: 勝野眞吾, 研究分担者: 鬼頭英明, 西岡伸紀, 三好美浩; 科学研究費補助金基盤研究(B): 青少年の薬物乱用に関するモニタリングとデータアーカイブ構築; 平成 21-24 年度; 450 千円(平

成 23 年度分担金)

- 12) 研究代表者：後閑容子；学術研究助成基金助成金基盤研究(C)：訪問看護における地域リスクマネジメントネットワーク構築に関する研究；平成 23-25 年度；5,200 千円(1,300：2,080：1,820 千円)

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

牧野茂徳：

- 1) 日本産業衛生学会代議員(～現在)
- 2) 日本産業衛生学会東海地方会理事(～現在)
- 3) 日本衛生学会評議員(～現在)
- 4) 日本民族衛生学会評議員(～現在)

後閑容子：

- 1) 民族衛生学学会評議員(～現在)

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

三好美浩：

- 1) 日本学校保健学会奨励賞受賞講演(平成 23 年 11 月)

後閑容子：

- 1) 第 70 回日本公衆衛生学会総会座長(平成 23 年 10 月)

8. 学術賞等の受賞状況

- 1) 瀨瀨朋弥：日本公衆衛生学会総会優秀ポスター賞(平成 21 年)
- 2) 三好美浩：日本学校保健学会奨励賞(平成 23 年)

9. 社会活動

牧野茂徳：

- 1) 「ヘルスプランぎふ 21」推進会議委員(～現在)
- 2) 「ヘルスプランぎふ 21」推進会議地域・職域連携推進部会座長(～現在)
- 3) 岐阜産業保健推進センター産業保健相談員産業医学(～現在)
- 4) 東京都産業保健健康診断機関連絡協議会アドバイザー(～現在)

後閑容子：

- 1) 岐阜県看護協会認定看護師制度セカンドレベル・ファーストレベル教育課程委員会委員長(～現在)

石原多佳子：

- 1) 滋賀県米原市地域包括支援センター運営協議会委員(～現在)

2) 滋賀県米原市高齢者虐待防止ネットワーク会議委員(～現在)

10. 報告書

- 1) 牧野茂徳, 岩田弘敏, 後閑容子, 石原多佳子, 玉置真理子: 岐阜県における過重労働による健康障害予防対策に関する調査研究: 平成 20 年度産業保健調査研究報告書: 1-34(平成 21 年 3 月)
- 2) 牧野茂徳, 岩田弘敏, 森河裕子, 城戸照彦, 廣橋廣次, 中川秀昭, 後閑容子, 石原多佳子, 玉置真理子, 鈴木克司, 角森洋子: 過重労働による健康障害予防対策に関する調査研究(共同研究): 平成 20 年度産業保健調査研究報告書: 1-29(平成 21 年 3 月)
- 3) 後閑容子, 石原多佳子, 玉置真理子, 瀧瀬朋弥: IT 活用等における介護事業者の経営効率化, 安定化に資する調査 平成 22 年度研究報告書(経済産業省平成 22 年度医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出調査研究事業)(平成 23 年 2 月)

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

看護学科の運営に係る諸活動, 地域看護学分野における教育活動を中心にして, 教育及び研究に充実した活動ができたと評価する。特に, 教育活動においては, 研究者の研究活動の成果が着実に反映されていると考えられる。訪問看護ステーションとの協働研究, 市町村保健師への活動協力など, 地域看護学分野の研究の特性を生かした研究活動が行われてきたことは評価に値する。

現状の問題点及びその対応策

研究活動においては, 研究成果を論文として公表することをさらに努力したいと考える。公衆衛生や訪問看護など実践を基盤とした研究を今後も展開したいと考える。

教育活動に関しては, 公衆衛生看護学と在宅看護学野における講義, 演習, さらに実習と多くの授業科目を有する分野である。今後, 平成 24 年度から実施される新しい教育課程の実践に向けて検討をしていきたい。

今後の展望

教員各自が研究テーマをもって, 積極的に研究に取り組むこと, 加えて地域看護学分野としての共通した研究課題をもって, 研究活動をさらに活発化したい。

今後, 教育活動において, 公衆衛生看護学の実習展開の具体的方法を検討することが課題として考えられる。

(2) 精神看護学分野

1. 研究の概要

精神看護学は、社会におけるメンタルヘルスについての諸問題および個々の健康障害を持つ人々に対する看護アプローチの方法を探究する分野であると考えている。こころの働きと日常生活との関連に焦点を当てた精神看護の視点から、こころの健康、健康障害について考察するとともに、心身を病む人々への精神看護学の概念モデルおよび方法論、技術論の実証的な研究を目指している。

研究テーマとしては、精神機能の障害のために「生活能力」や「対人関係能力」に困難を抱える対象への援助を中心とした内容、広く現代の社会病理に関連したメンタルヘルスの問題、ストレスコーピングやコミュニケーション技術などに関する研究を行っている。

看護教育という点では、これらの研究が、学生の「対人関係を構築し維持する能力の向上」と「人間を深く理解していく力の向上」を意図し、人間的交流に基づいた丁寧な観察や個人の特性を踏まえて、そこで起こる現象を把握し、効果的なケアを追求する研究に取り組んでいる。また、大学院に関する内容としては、社会文化的な側面を踏まえて、研究対象者の地域性や臨床の特性を鑑み、看護師としてケア実践能力に繋がるような研究を行っている。

2. 名簿

教授：	奥村太志	Hutoshi Okumura
准教授：	杉浦浩子	Hiroko Sugiura
助教：	大平幸子	Sachiko Ohira

3. 研究成果の発表

著書（和文）
なし

著書（欧文）
なし

総説（和文）

- 1) 奥村太志, 杉浦浩子, 三品弘司. 精神保健看護辞典 第1版, 2010年.
- 2) 奥村太志. 子供の豊かな育ちへのまなざし—スクールソーシャルワーク実践ガイド—, 2010年: 68–73.

総説（欧文）
なし

原著（和文）

- 1) 乙村 優, 奥村太志. 入退院を繰り返すうつ病患者の理解と看護についての考察, 第39回日本看護学会論文集 精神看護 2009年: 134–136.
- 2) 乙村 優, 奥村太志, 佐川和代, 渡辺信成. 精神科デイケアを利用する統合失調症者の音楽療法の体験, 日本精神科看護学会誌 2009年; 52巻: 366–370.
- 3) 杉浦浩子, 三品弘司, 奥村太志. 紙上事例を用いて分析した看護師のコミュニケーションの傾向, 岐阜看護研究会誌 2009年; 1号: 93–98.
- 4) 伊藤育子, 杉浦浩子, 中島美奈子, 桑田弘美, 箕浦とき子, 後閑容子. 卒業生による大学生活の評価, 岐阜看護研究会誌 2009年; 1号: 87–92.
- 5) 三品弘司, 奥村太志, 杉浦浩子, 永井邦芳. 精神科デイケアにおける機能分化に関する一考察, 岐阜県看護研究会誌 2010年; 2号: 49–53.
- 6) 三品弘司, 奥村太志, 杉浦浩子, 永井邦芳. 精神科デイケアにおける通所者のニーズ把握と効果判定に関する研究, 岐阜県看護研究会誌 2010年; 2号: 55–58.
- 7) 乙村 優, 奥村太志: 入院初期のうつ病患者に対する看護の検討, 日本精神科看護学会誌 2010年; 5巻: 37–41.
- 8) 加藤可子, 安藤恵美子, 北原美穂, 林やよい, 杉浦浩子. 外科手術を受けた患者の退院決定に影響する要因の検討—患者と家族員の退院に対する思いの比較から—, 第41回日本看護学会論文集 成人看護II 2010年; 262–264.
- 9) 杉浦浩子, 中島美奈子, 伊藤郁子, 桑田博美, 箕浦とき子, 後閑容子. 岐阜大学医学部看護学科卒業生の動向および勤務状況の実態, 岐阜大学医学部紀要 2010年; 56巻: 1–8.
- 10) 奥村太志, 杉浦浩子, 三品弘司, 石黒千映子, 永井邦芳, 乙村 優, 渋谷菜穂子. 幻聴を主訴とする統合失調症患者の理解とケア—看護における現象学的接近—, 岐阜看護研究会誌 2010年; 2号: 41–48.
- 11) 三品弘司, 杉浦浩子, 奥村太志. 精神看護学実習におけるコミュニケーションの学び, 岐阜看護研究会誌 2011年; 3号: 37–42.

- 12) 杉浦浩子, 三品弘司, 奥村太志. 对患者コミュニケーション場面における看護師の情報受信・処理プロセス, 岐阜看護研究会誌 2011年;3号:43-48.
- 13) 水野きよみ, 岩田明子, 小林浩子, 松橋恵美, 山内博文, 奥村太志. 境界型人格障害患者の事例を通して一患者の問題行動への介入経過からの気づき一, 日本精神科看護学会誌 2011年;54巻:86-89.
- 14) 宮地和美, 尾崎奈美子, 奥村太志. 無為自閉の患者に対する患者参加型カンファレンスの活用, 日本精神科看護学会誌 2011年;54巻:90-94.
- 15) 乙村 優, 奥村太志, 佐川和代. 地域で生活する精神障がい者を支える音楽療法の試みー精神障害者社会復帰支援施設における精神障がい者の現状と看護への活用についてー, 日本精神科看護学会誌 2011年;54巻:162-166.

原著 (欧文)

なし

4. 研究費獲得状況

1) 競争的資金

- 1) 代表者: 杉浦浩子; 大学活性化経費(教育): 自己学習力を強化する学習プログラムの構築; 平成 22年度; 470 千円

2) 受託研究

なし

3) 共同研究

なし

5. 発明・特許出願状況

なし

6. 学会活動

1) 学会役員

なし

2) 学会開催

なし

3) 学術雑誌

なし

7. 学会招待講演, 招待シンポジスト, 座長

奥村太志:

- 1) 日本精神科看護学会第 18 回専門学会Ⅱ(平成 23 年 12 月, 岐阜, ランチョンセミナー「睡眠から統合失調症患者さんの QOL(生活の質)向上を考える」座長)

8. 学術賞等の受賞状況

なし

9. 社会活動

なし

10. 報告書

なし

11. 報道

なし

12. 自己評価

評価

看護学科の運営や新カリキュラム申請など将来に向けての諸活動、精神看護学に関連する教育・研究活動を中心において、充実した活動を行うことができた。中でも、分野として目指してきた実践的研究は、臨床との共同研究として徐々に成果を上げつつある。教育に関しては、学部生や大学院生の研究指導も多岐にわたり、小分野としては数多くの修士論文指導に携わり、完成まで導いたことは評価できる。また、精神看護学に興味・関心を示す学生も数多く、毎年、卒業研究はじめ就職先に精神分野を第一希望とする学生が増えていることから評価できる。

現状の問題点及びその対応策

小分野で人員が少ない状況にありながら、看護学科内の運営や役割の割合が多いこと、実習など教育に投じる時間が多いことにより、研究時間の確保が難しい状況にある。現在は、個々に時間を調整して研究を進めている。しかし、競争的資金の獲得が少なく、これは分野として取り組んでいる研究課題がないことも要因であると考え。今後はこれまで以上に効率性と研究の質を高めるために、分野全体としての研究課題を持ち、研究体制づくりを図りたい。

今後の展望

現在行っている臨床との共同研究をさらに発展させるとともに、分野としての研究課題を持ち、精力的に研究活動をおこなっていききたい。

V 附属病院の現状と課題

1 病院の理念・組織・運営等

1. 理念・基本方針等

(1) 理念

平成 15 年 6 月に附属病院の理念を制定し継承している。

理念：あなたとの対話が創る信頼と安心の病院

(2) 基本方針

平成 15 年 6 月に理念と同時に基本方針を制定し、平成 22 年 9 月に一部を修正している。

同時に「患者の権利宣言」の一部修正も行った。

- 基本方針： 1 患者中心のチーム医療を提供します。
2 人間性豊かな医療人を育成します。
3 先進医療の研究・開発・提供を実践します。
4 地域との医療連携を強化します。

(3) 職業倫理・臨床指針

平成 17 年 12 月に制定し、継承している。

2. 組織、運営

(1) 組織

本院の基本方針で示すように、医学部附属病院の役割は診療、教育、研究の三本柱であり、これらを基盤として地域との医療連携を強固なものとするのが求められている。

また、国内の医療行政や医療環境は目まぐるしく変化しており、岐阜県唯一の特定機能病院として、岐阜県域を中心とする医療機関や行政機関との連携を主導的に図っていかねばならない。

そのため、病院長の業務は、専門的、複雑かつ多様なものとなっており、その業務を補佐し、病院の管理運営体制の充実を図るため、3名の副病院長と1名の病院長補佐を配置し、病院長のサポート体制を強化している。

平成 18 年 1 月には、医療情報部の機能及び次期医療情報システムの見直し並びに充実を図るため、電子診療録担当の病院長補佐 1 名を任命した。(任期は平成 22 年 3 月まで)平成 22 年 1 月には、電子カルテシステム及び関連システムの機能向上のため、第二代の医療情報システムが稼働を開始した。

平成 16 年 4 月に始まった新たな臨床研修制度に対応するため、卒後臨床研修センターを設置し運営しているが、卒後臨床研修制度の重要性を踏まえ、より事業を円滑、主導的に運営するため、平成 22 年 4 月にはセンター長に病院長補佐を任命し、平成 23 年 6 月より救急外来研修を開始した。また、研修医へアンケートやヒアリングなどを実施し改善を図ったことで、平成 23 年度のマッチングは、定員充足率 83.8% (前年度 53.3%) となり大きく伸びた。

平成 19 年 10 月からは、院内の医療安全管理体制の充実を図るため、医療安全管理室に専任の教員を配置し、医療安全管理室長および GRM の業務をサポートできる体制とするとともに、センター長は副病院長とした。

平成 22 年 1 月には、臨床研修の充実、医師の技術向上や外科医療への関心を高めるために内視鏡外科手術トレーニングセンターを設置した。

同じく、平成 22 年 1 月に、周産期医療の充実に向けて、NICU 等の病床整備及び人材養成を担うために NICU 設置準備室を設置し、平成 24 年 4 月の開設を目指している。

平成 23 年 4 月には災害対策マニュアルを改定し、平成 23 年 10 月には、岐阜県基幹災害医療センターの指定を受けた。

平成 23 年 8 月 11 日から 13 日にかけて、医療の質の向上と信頼できる医療の確保に関する事業を行う、中立的・科学的な第三者機関である日本医療機能評価機構の訪問審査が行われ、Ver.6.0 の更新認定を受けた。

(2) 科長会議

附属病院の管理・運営に関する重要事項を審議・決定する病院内の最高審議機関として科長会議が置か

れている。科長会議の組織運営については、岐阜大学医学部附属病院科長会議規程に明文化しており、病院長、各診療科長、中央診療施設等の各部長及び各センター長、薬剤部長、看護部長、診療録管理室長、卒業臨床研修センター長、内視鏡外科手術トレーニングセンター長及び事務部長をもって組織している。

病院の管理・運営については、病院を取巻く環境の変化や患者ニーズの多様化により、的確かつ迅速な対応が求められ、特に、法人化後の病院運営・経営や病院改革の推進については、より広範囲な状況の把握や方向性を見極め等、科長会議に課せられた責務は多大である。

また、病院の管理・運営の円滑化を図るため、毎月1回医局長等、外来医長、病棟医長合同会議を開催し、病院長から科長会議で審議した案件等について説明し、病院職員への周知・徹底を図っている。

(3) 病院運営会議

病院運営を機動的に行う組織として、平成17年6月に病院運営会議を設置した。

病院運営会議は、現在、病院長、副病院長(3名)、事務部長及び病院長補佐(診療録担当)により構成されている。同会議は病院運営全般に関する企画立案をし、経営企画会議及び科長会議と調整を行っている。これにより、病院長のリーダーシップを増強し、権限をより強固なものとした。

この会議は、毎月2回開催しており、病院運営に係る重要な案件については、この会議において審議している。

(4) 病院経営企画会議

附属病院の管理運営を迅速、適切かつ円滑に行うため、平成15年4月に「病院経営企画会議」を設置した。

経営企画会議は毎月2回開催し、組織の改廃、管理運営・予算、経営、病院マネジメント改革、患者サービス、危機管理、各種委員会との連絡調整などを審議・執行してきた。

平成17年6月、病院運営会議の設置に伴い、経営企画会議の審議事項等を見直し、病院経営戦略に関する諸施策、財務及び運営について協議、意見聴取をすることとし、毎月1回の開催に改めた。

この会議は、病院長、副病院長(3名)、医療情報部長、薬剤部長、事務部長、外部の有識者(公認会計士・税理士、弁護士、民間病院の理事長)及び理事(基金・財務担当)の11名で構成している。なお、陪席者として学長、大学院医学系研究科長の出席を得ている。

(5) 大学経営戦略検討会議附属病院検討部会

附属病院の経営戦略について、法人本部との連携により検討を深めるため、平成22年10月の大学経営戦略検討会議の設置を受けて、平成22年11月に病院経営企画会議を附属病院検討部会として位置付け、4つのプロジェクト(1. 施設整備プロジェクト、2. 設備整備プロジェクト、3. スタッフ研修プロジェクト、4. 教育研究支援プロジェクト)について検討を開始した。

(6) 附属病院各種委員会の設置年度、任務(運営方針)、意志決定方法、意志伝達方法

附属病院科長会議等の意思決定を円滑にし、組織の機能を十分に果たすため、各種委員会が組織されている。各種委員会の運営等は学内規程等により明文化され、各委員会の審議結果等は、科長会議に諮られた後、各診療科・部門等に伝達している。

附属病院各種委員会一覧

名称	任期	委員数	審議事項等	設置年度
研修管理委員会	2年	22人	卒業臨床研修及び研修医に関すること。	平成16年度
歯科研修管理委員会	2年	8人	卒業臨床研修及び研修医に関すること。	平成18年度
卒業臨床研修センター運営委員会	2年	35人	卒業臨床研修センターの運営に関すること。	平成16年度
放射線管理運営委員会	2年	43人	放射線取扱施設の管理運営、設備の整備、放射線障害の防止等に関すること。	平成16年度
陽電子断層撮影診療用放射性同位元素使用に関する安全小委員会	2年	9人	FDG-PET検査に関する管理運営、装置の品質保証、品質管理及び医療事故防止対策等に関すること。	平成19年度
臓器提供に係る調整委員会	2年	9人	臓器提供マニュアルの策定、記録開示、臓器移植の適正な実施に関すること。	平成16年度

名 称	任 期	委員数	審 議 事 項 等	設置年度
臨床修練外国医師等 受入委員会	2年	6人	臨床修練医の受け入れ等に関する事 こと。	平成16年度
環境対策委員会	2年	7人	環境保全及び公害防止に関する事 こと。	平成16年度
医療ガス安全管理委員会	2年	10人	医療ガス設備の安全管理に関する事 こと。	平成16年度
医療情報部運営委員会	2年	38人	医療情報部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
クリニカルパス委員会	2年	13人	クリニカルパス全般に関する事 こと。	平成16年度
機種選定委員会	1年	9人	物品の調達契約における機種の選定に 関すること。	平成16年度
医薬品等 受託研究審査委員会	2年	13人	医薬品等の受託研究についての妥当性、 有用性及び安全性等に関する事 こと。	平成16年度
治験管理センター 運営委員会	2年	12人	治験管理センターの管理運営に関する 事 こと。	平成16年度
医療安全管理委員会	2年	16人	医療の安全確保と医療事故防止対策等 に関する事 こと。	平成19年度
脳死判定委員会	2年	4人	脳死判定の適正な実施に関する事 こと。	平成16年度
診療録管理委員会		36人	診療録及びこれに附随する記録等の管 理に関する事 こと。	平成16年度
診療情報提供委員会	2年	11人	診療情報の提供に関する事 こと。	平成16年度
社会保険委員会	2年	37人	社会保険診療の取扱いの改善及び指導 に関する事 こと。	平成16年度
医療事故対策委員会	2年	8人	医療事故及び医事紛争の防止及び対策 に関する事 こと。	平成16年度
さわやかサービス委員会	2年	13人	附属病院における公共施設利用サービ スの改善に関する事 こと。	平成16年度
検査部運営委員会	2年	40人	検査部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
放射線部運営委員会	2年	39人	放射線部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
材料部運営委員会	2年	38人	材料部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
輸血部運営委員会	2年	38人	輸血部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
輸血療法委員会	2年	17人	輸血療法の適正化に関する事 こと。	平成16年度
総合診療部運営委員会	2年	36人	総合診療部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
光学医療診療部運営 委員会	2年	13人	光学医療診療部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
分娩部運営委員会	2年	10人	分娩部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
病理部運営委員会	2年	27人	病理部の管理運営に関する事 こと。	平成16年度
リハビリテーション部 運営委員会	2年	8人	リハビリテーション部の管理運営に関 する事 こと。	平成16年度
医療機器センター 運営委員会	2年	14人	医療機器センターの管理運営に関する 事 こと。	平成16年度
医療連携センター運営 委員会	2年	24人	医療福祉支援センターの管理運営に関 する事 こと。	平成16年度
生体支援センター 運営委員会	2年	23人	生体支援センターの管理運営に関する 事 こと。	平成16年度
栄養管理専門委員会	2年	31人	患者用食事の栄養管理に関する事 こと。	平成16年度
院内感染対策専門委員会	2年	38人	院内環境の向上、院内の感染予防、院内 感染防止に関する調査及び対策に関す ること。	平成16年度
院内感染対策小委員会	2年	13人	院内感染対策に関する事 こと。	平成16年度

名 称	任 期	委員数	審 議 事 項 等	設置年度
高次救命治療センター運営委員会	2年	30人	高次救命治療センターの管理運営に関する事。	平成16年度
手術部運営委員会	2年	38人	手術部の運営に関する事。	平成20年度
薬事委員会	2年	40人	使用医薬品、血液製剤、検査試薬、医療材料の採用等に関する事。	平成16年度
患者行動制限最小化委員会		6人	医療保護入院等の入院患者の行動制限等に関する事。	平成17年度
医学系研究科・医学部情報委員会 病院部会		10人	病院の広報に関する事。	平成17年度
医療情報セキュリティ委員会	2年	10人	情報セキュリティポリシー・マネジメントに関する事。	平成18年度
がんセンター運営委員会	2年	34人	がんセンターの管理運営・施設設備に関する事。	平成21年度
エイズ対策推進センター運営委員会	2年	6人	エイズ対策推進センターの管理運営・予算に関する事。	平成19年度
肝疾患診療支援センター運営委員会	2年	6人	肝疾患診療支援センターの管理運営・予算に関する事。	平成20年度
安全衛生委員会	2年	15人	職員の作業場所、作業方法等における危険を防止するための基本となるべき対策に関する事	平成19年度
静脈注射認定委員会	2年	9人	看護師等が行う業務基準、認定、教育に関する事	平成21年度
診療連携改善委員会	2年	14人	病院勤務医の勤務状況や負担軽減を把握し、改善に関する提言に関する事	平成22年度
内視鏡外科手術トレーニングセンター 検討部会	2年	10人	内視鏡外科手術トレーニングセンターの管理運営・予算に関する事。	平成22年度
医療機器安全管理委員会	2年	17人	職員に対する医療機器の安全使用のための研修に関する事。	平成22年度
経営企画会議	2年	11人	病院の中期目標・中期計画、年度計画及び経営に関する事	平成16年度
褥瘡対策専門委員会	2年	38人	褥瘡対策に関連する環境の整備及び調査等の事項に関する事	平成23年度

(7) 事務組織と事務職員の配置状況

1) 現状

病院の事務組織は、国立大学の法人化を契機に医療行政や時勢に即応するため、並びに病院の運営・経営管理の充実を図るために改編を行ってきた。

平成16年4月には、病院事務に特化した事務組織として事務局に「病院部」を設置し、病院部長のもと総務課、経営管理課及び医療サービス課の3課体制とした。また、これと併せて全学の共通的な事務(契約・施設関係等)の一元化及び集中化を図るため、契約・施設・設備関係事務を事務局の財務部及び施設管理部で処理することとした。

平成17年4月には、病院の運営上の種々の支障を解消するため、事務局から病院部を切り離し、病院長のもと病院事務部を設置し、総務課、管理課、調達課及び医療サービス課の4課並びに経営分析主幹を配置する体制に再編成した。

平成18年4月には、事務の合理化を図るため管理課と調達課を統合した。

平成19年4月には、新たに情報企画課を設置し、より病院の診療情報等を効率的に運用できるよう組織を改編した。

平成21年度以降においては、病院事務機能をより医療情勢並びに病院の運営・経営管理に即応させるため、改編を行ってきた。

平成 22 年 4 月には、病院の企画部門を充実させるため、情報企画課を改編し病院の予算・企画並びに診療情報管理部門を取り込んだ経営企画課を設置した。また、管理課の調達部門を集約化することに併せて、総務課に卒後臨床研修センターや治験等の教育研究支援部門並びに広報担当部門を設置し、医療サービス課には医療支援部門並びに医療安全部門を設置した。

平成 23 年 4 月には、医療サービス課に医療連携室を設置し、がん拠点病院事業、県下医療機関との医療連携事業を推進した。併せて、病院内における医療過誤や訴訟に対応する医療安全機能の充実も図った。平成 24 年 4 月には、さらに機能強化をめざして改編を行うこととしている。

2) 点検・評価

事務組織を再編成し直したことにより、病院運営上の種々の支障の幾つかは改善された。

病院の運営及び経営管理の充実を図るため、病院特化度の高い事務を担当するスペシャリストを確保するため、また医事業務及び経営管理業務に精通した即戦力の人材を確保するため、これらの有資格者や外部医療機関等のキャリア職員並びに新卒者を選考採用するなど、人事配置の見直しを進めた。

また、平成 21 年学長裁定において、一般職員のうち、医学部附属病院の病院に特化した精神保健福祉業務、社会福祉業務、診療情報管理業務、医療情報技術業務、診療報酬請求業務に従事する者については、病院長が病院収入により配置出来ることとなった。

これらにより、平成 21 年度には 2 名、平成 22 年度には 5 名、平成 23 年度には 3 名の選考採用を行い、病院の機能を充実させることが出来た。内訳は、医療情報関連従事者が 5 名、MSW が 2 名、医療事務関連従事者が 3 名である。

3) 改善・改革と展望

病院の運営及び経営管理の充実を図るには、事務組織の充実と業務に精通した人材が重要であるため、今後も不断に事務組織の見直しを行い、人材の確保と育成に努めることとしている。

2 診療活動の現状と課題

1. 診療体制

(1) 臓器別診療

附属病院が平成 16 年 6 月の新築・移転を契機に、旧来のナンバー科から臓器別診療体制に変更し、院内表示も臓器別表示とすることにより患者案内を分かりやすくした。

外来診療科を内科ゾーンと外科ゾーンに分け臓器別に配置し、それぞれのゾーンに中央処置室を設置することにより人員及び処置室の効率的運用を図った。

また、病棟においても内科と外科が臓器別に連携が図れるよう診療科を配置した。

(2) 診療科の連携

附属病院が平成 16 年 6 月の新築・移転を契機に、全ての院内診療情報をペーパーレス・フィルムレスで一元管理すべく、新医療情報システムを導入した。その際、従来の紙カルテから電子カルテに移行し、全診療科で患者情報を共有化できる仕組みとした。電子カルテ化されたことにより 1 患者 1 カルテとなり診療科間での情報のやり取りがスムーズに行われ、情報の共有化を通して診療科間のいわゆる垣根を低くすることを可能にした。さらに、診療科間の連携のみでなく中央診療部門など多職種間での情報共有も進み、チーム医療の推進に大きく寄与している。

なお、情報の一元管理が可能となったことにより、どこにいても、何科の医師・看護師であっても情報を共有できるため、情報を得るために院内を走り回ることがなくなり業務の効率化の点でも大きな改善をみている。

(3) 高度救命救急センター

平成 16 年 4 月、高次救命救急医療を行うため、救急部、集中治療部、手術部及び人工腎室を改組し、新たな組織として地域災害及び救急医療に 24 時間対応可能な「高次救命治療センター」を設置した。高次救命治療センターは、救急、手術、集中治療及び血液浄化治療の 4 部門で構成した国内最大規模の救命治療センターであり、平成 16 年 6 月の新病院開院と同時に活動を開始した。

当病院は、平成 15 年 12 月から岐阜市との間で「救急車医師同乗システムに関する協定書」を締結し、さらに平成 16 年 6 月、「救急自動車への医師搭乗に係る実施要綱に関する契約書」を締結した。また、平成 16 年 5 月、岐阜県との間で「防災ヘリコプターの医師等搭乗に関する協定書」を締結するなど、高次救命治療センターが中心となり、岐阜県及び岐阜地域の救急医療に積極的に取り組んできた。

より一層の救急医療体制を推進するために、平成 22 年度よりドクターヘリ基地病院としての運用開始となった。今後は更に県内の全域重症患者の対応を行うこととなる。

当病院の救急医療の取り組みや実績が認められ、平成 16 年 11 月に「救命救急センター」に指定され、さらに平成 18 年 2 月には岐阜県下で唯一、中部 9 県で 2 施設目となる「高度救命救急センター」に認定された。当病院は、切断指の再接着や広範囲熱症、急性中毒などの特殊疾患に対応できる、高度の救急医療体制を整えた施設であるとの岐阜県からの申請に基づき、厚生労働省の審査を経て岐阜県から認定されたものである。

2. 活動状況

(1) 第一内科

1. 診療の概要

1) 消化管疾患：上下部消化管内視鏡を用いた診断，治療が中心となるが，消化管の早期癌に対しては超音波内視鏡（EUS）を利用した正確な診断の後，内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）などを積極的に行っている。また，最近では小腸内視鏡，カプセル内視鏡を導入し，従来診断が困難とされた小腸病変の診断も可能となっている。吐血・下血などの緊急症例に対しては積極的に緊急内視鏡を施行し，保存的止血を行っている。近年，進歩が目覚ましい消化管悪性腫瘍治療においては，早期癌に対する内視鏡的治療に加えてエビデンスに基づいた化学療法も積極的に取り入れている。特に，近年増加傾向のある消化管悪性リンパ腫には，血液内科と協力して従来の化学療法のみならず分子標的療法や造血幹細胞移植まで視野に入れた治療を行っている。潰瘍性大腸炎やクローン病には，従来の薬物療法に加えて白血球除去療法や分子標的治療などを導入している。

2) 肝臓疾患：重症肝炎には循環管理も含めた全身管理を中心に対処している。特に免疫学的観点に立脚してリンパ球表面マーカー解析やサイトカイン療法なども導入している。慢性肝炎や肝硬変には，積極的にインターフェロンなどの抗ウイルス療法を施行している。肝癌には，腹部超音波検査により微小肝癌の発見，診断に努めている。治療には，血管造影を利用した肝動脈塞栓術（TAE）や熱凝固療法（ラジオ波）などを行っている。いずれも一部の症例では全国規模の多施設共同臨床試験に参加し，新たなエビデンス確立へ向けて努力している。

3) 胆膵疾患：内視鏡的乳頭切開術（EST），内視鏡的バルーン乳頭拡張術（EPBD）などを用いて，手術に頼らない胆石治療を行っている。また，手術ができない進行胆道系悪性腫瘍に対しては QOL を重視して，内視鏡的にステント治療を行う。診断が困難な疾患に対しては胆管/膵管内に極細径内視鏡を挿入して，直接病変を観察し生検を行う。また，超音波内視鏡下吸引針生検（EUS-FNA）も行っている。EUS-FNA は，本領域以外にも応用でき，またその技術は世界的評価を得ている。

4) 栄養治療：肝疾患をはじめとして消化器疾患全般を対象に，間接カロリーメーターなどを用いた正確な栄養アセスメントを行い，最適な栄養治療を行っている。慢性肝疾患に対しての栄養治療の介入により，その予後の改善が得られる。

5) 血液疾患：貧血性疾患，とくに造血の中心となる骨髄の異常に基づく再生不良性貧血や骨髄異形成症候群および白血病，悪性リンパ腫，多発性骨髄腫などの造血器悪性腫瘍に対する診療を行っている。入院対象になる疾患の多くは造血器悪性腫瘍であるが，固形癌とは異なり，化学療法が特に奏功する。このため治癒を目指す化学療法の強度は全体的に高度となり，その管理，支持療法は極めて重要である。さらに一部の疾患には造血幹細胞移植（同種骨髄移植，非血縁者間骨髄移植，同種臍帯血移植，同種・自家末梢血幹細胞移植）を導入している。悪性リンパ腫，多発性骨髄腫などにおいては外来化学療法も積極的に行い，家族と共に生活し，治療が遂行できるような配慮もしている。基本的にはエビデンスに基づく治療を中心に行っているが，一部は当地区独自の臨床試験や全国規模の多施設共同の臨床試験にも参加し，新たなエビデンスを確立するべく努力を行っている。

6) 感染症内科：院内感染症を含む各種感染症の診療を行っているが，結核のような感染症に関しては関連病院と連携しながら診療を行っている。特にエイズ治療は昭和 63 年の岐阜県第一例目の患者から継続的に診療を行っている。当院は岐阜県のエイズ治療拠点病院に指定されており，岐阜県の HIV 感染症患者の過半数の診療を行っている。エイズ患者においてはさまざまな合併症を伴うことが少なくなく，多くの診療科の協力が必要であるが，ほぼ全科での受け入れ体制が万全な状態であることは特筆できる。院内にはエイズ対策推進センターも設置されており，診療のみならず専門カウンセラーによるカウンセリング活動や教育研修活動も積極的に行っている。エイズは不治の病ではなくなっており，近年では慢性疾患として捉えられるようになってきているからこそ，精神的ケアなどが特に重要である（エイズ対策推進センターの項を参照）。また，針刺し事故の対応は生体支援センターが中心となっているが，当科が受診窓口となっている。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定研修施設
- 2) 日本消化器病学会認定施設
- 3) 日本肝臓学会認定施設

- 4) 日本消化器内視鏡学会認定施設
- 5) 日本臨床腫瘍学会認定施設
- 6) 日本がん治療認定医機構研修施設
- 7) 日本血液学会認定研修施設
- 8) 日本呼吸器学会認定施設
- 9) 臍帯血移植実施施設
- 10) 非血縁者間骨髄移植実施施設
- 11) 日本胆道学会指導施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 小腸内視鏡による診断と治療
 診療内容: 原因不明の消化管出血や消化管悪性リンパ腫を対象に小腸内視鏡を実施, 正確な診断と治療を行う。
 他病院での導入状況: 岐阜県内では当院と村上記念病院に導入。
 国内的評価: これまで診断不能と言われた小腸の診断・治療が可能となったことは画期的である。
 国際的評価: 同上。
- 2) 診療名 : 超音波内視鏡下生検 (EUS-FNA)
 診療内容: 体表より穿刺不能な腫瘍性病変やリンパ節病変に対して, 超音波内視鏡ガイド下にて針生検を行う。
 他病院での導入状況: 当院が指導的立場になり, 県内では岐阜市民病院などにて施行。
 国内的評価: これまでは, 開腹あるいは開胸術により診断していた深部病変に対して比較的 non-invasive に診断が可能となり, 極めて有用な診断技術である。
 国際的評価: 同上。
- 3) 診療名 : 同種臍帯血移植
 診療内容: 臍帯血バンクより入手した臍帯血を用いて成人の造血器患者を対象として同種臍帯血移植を行う。
 他病院での導入状況: 岐阜県内では当院と岐阜市民病院小児科のみ。
 国内的評価: 移植可能な臍帯血の入手は移植希望患者の 90% で可能である。このため同種骨髄移植を求める患者でドナーがない場合には, 臍帯血移植が代替治療になる。また, 臍帯血移植はコーディネートに時間がかからないため, 緊急に移植を必要とする患者にとっては極めて魅力的である。このように骨髄移植の代替治療として国内的評価は確立している。
 国際的評価: 成人臍帯血移植の成績は本邦が世界的にも高水準である。
- 4) 診療名 : 非血縁者間骨髄移植
 診療内容: 同胞に移植ドナーがない場合に, 骨髄バンクを利用して善意の健常ドナーから骨髄を提供していただき, 骨髄移植を行う。あわせて骨髄バンクから依頼された健常ドナーからの骨髄採取も行っている (麻酔科を中心に多くの外科系診療科の協力を得ている)。
 他病院での導入状況: 非血縁者間骨髄移植可能な施設は当院の当科のみである。
 国内的評価: 同胞ドナー不在の際の骨髄バンク利用の同種造血幹細胞移植としては非血縁者間骨髄移植の有用性は確立している。
 国際的評価: 同上。
- 5) 診療名 : ミニ移植または Reduced intensity stem cell transplantation (RIST)
 診療内容: 高齢者や何らかの合併症のため通常移植ができない患者を対象として, 前処置を緩和して同種造血幹細胞移植を行う。GVL (移植片対白血病) 効果も期待され, 免疫療法としても位置付けられている。多くは臨床試験として行われる。
 他病院での導入状況: 岐阜県では当院のみ。
 国内的評価: 適応に関しては議論があるが, 一部の症例における効果は認知されている。
 国際的評価: 同上。
- 6) 診療名 : 経口胆道鏡を用いた胆道疾患の診断/治療
 診療内容: 胆管内に細径内視鏡を挿入し, 病変を直接観察しながら結石を破砕したり, 病変の生検を行ったりする。
 他病院での導入状況: 当院が指導的立場になり, 県内では岐阜県総合医療センターなどにて施行。
 国内的評価: 診断困難な胆道疾患, 治療困難な胆管結石に対する有用性が報告されている。
 国際的評価: 同上。

4. 専門医・認定医・指導医

- 森脇久隆：日本内科学会評議員・指導医・内科認定医，日本消化器病学会評議員・指導医・専門医，日本消化器内視鏡学会指導医・専門医，日本肝臓学会指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会評議員・暫定指導医，日本がん治療認定医機構暫定教育医，日本癌学会評議員
- 村上啓雄：日本内科学会指導医・認定医，日本消化器病学会専門医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本呼吸器学会専門医，日本感染症学会専門医
- 白鳥義宗：日本内科学会東海地区評議員・指導医・内科認定医，日本消化器病学会東海支部評議員・指導医・専門医，日本肝臓学会西部評議員・指導医・専門医
- 鶴見 寿：日本内科学会東海地区評議員・指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会代議員・指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会評議員・指導医・がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本臨床内科医会専門医
- 荒木寛司：日本内科学会東海地区評議員・指導医・内科認定医，日本消化器病学会指導医・専門医，日本消化器内視鏡学会指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会暫定指導医，日本がん治療認定医機構暫定教育医
- 安田一朗：日本内科学会東海地区評議員・指導医・内科認定医，日本消化器病学会評議員・指導医・専門医，日本消化器内視鏡学会学術評議員・指導医・専門医，日本胆道学会評議員・指導医，日本がん治療認定医機構暫定教育医
- 内木隆文：日本内科学会指導医・内科認定医，日本消化器病学会専門医，日本肝臓学会専門医
- 原 武志：日本内科学会指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会評議員・指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会指導医・がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医
- 清水雅仁：日本内科学会指導医・内科認定医，日本肝臓学会専門医，日本消化器病学会専門医，日本消化器内視鏡学会専門医
- 白木 亮：日本内科学会指導医・認定医，日本肝臓学会専門医，日本消化器病学会専門医，日本消化器内視鏡学会専門医
- 高井光治：日本内科学会指導医・認定医，日本肝臓学会専門医，日本消化器病学会専門医
- 後藤尚絵：日本内科学会指導医・認定医，日本血液学会専門医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構認定医，日本消化器内視鏡学会専門医
- 兼村信宏：日本内科学会指導医・総合内科専門医・内科認定医，日本血液学会指導医・専門医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構認定医
- 井深貴士：日本内科学会認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本消化器病学会専門医，日本がん治療認定医機構認定医
- 今井健二：日本内科学会認定医，日本肝臓学会専門医，日本消化器病学会専門医，日本がん治療認定医機構認定医
- 小野木章人：日本内科学会認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本消化器病学会専門医
- 北川順一：日本内科学会認定医，日本血液学会専門医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医，日本がん治療認定医機構認定医
- 土井晋平：日本内科学会認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本消化器病学会専門医，日本がん治療認定医機構認定医
- 小川賢吾：日本内科学会認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本消化器病学会専門医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医
- 河口順二：日本内科学会認定医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本消化器病学会専門医
- 久保田全哉：日本内科学会認定医，日本肝臓学会専門医，日本消化器病学会専門医，日本消化器内視鏡学会専門医
- 山内貴裕：日本内科学会認定医，日本消化器病学会専門医
- 大野智彦：日本内科学会認定医
- 河内隆弘：日本内科学会認定医，日本消化器病学会専門医
- 永野淳二：日本内科学会認定医
- 二ノ宮空暢：日本内科学会認定医
- 中西孝之：日本内科学会認定医
- 中村信彦：日本内科学会認定医

5. 自己評価

評価

消化器内科：最新の医療技術として内視鏡の粘膜下層剥離術（ESD）、小腸内視鏡、超音波内視鏡下生検（EUS-FNA）などを積極的に導入し、県内外から数多くの患者の紹介を頂いている。本技術を普及するべく指導的立場にあり、講習会、研修会の依頼も多い。指導者研修として海外からの講演・実技指導の依頼も多い。また、一部は論文に公表し、国際的評価も得ている。

血液内科：血液内科としての歴史は比較的新しいが、積極的に同胞からの同種骨髄移植や同種末梢血幹細胞移植の経験をつみ、臍帯血バンク利用の臍帯血移植実施施設（2005年）および骨髄バンク利用の非血縁者間骨髄移植実施施設（2008年）の認定を受けることができた。県内で唯一の認定施設であり、評価に値すると思われる。また、多くの臨床試験を遂行、最近ではリンパ腫に対する Rituximab 併用 THP-COP 療法などの成績および層別化治療に向けた予後因子解析を論文に公表して、国際的評価を得た。急性白血病においては、岐阜県という地方都市の特徴でもあるが高齢者が比較的多く、先の造血幹細胞移植などの実施は困難な症例が多い。標準的な強力化学療法遂行が困難な症例を対象にサイトカイン併用の少量化学療法の臨床試験を実施し、論文に公表して国際的評価を得ている。

現状の問題点及びその対応策

消化器内科：技術的に検査・治療の困難な症例もある点と患者への侵襲が少なからずある点が問題である。症例によっては、どうしても時間を要することもあるが、より安全に、そして患者に苦痛を与えることのないような技術の向上に努めたい。

血液内科：高齢者が多いという地域性もあり、急性白血病や悪性リンパ腫において標準的治療の遂行が困難な症例が少なくない。また、推定される予後にバラツキもあり、画一治療に疑問がもたれる症例も多く経験する。このため、合併症や予後因子、年齢などに基づく層別化治療が期待される。

今後の展望

消化器内科：消化管疾患においては、より安全で、より精度の高い診断ができるような内視鏡技術を導入したい。また、より根治度の高い内視鏡治療を推進させたい。肝疾患においては、栄養治療を組み込み、その予後の一層の改善を得るべく、エビデンスを確立したい。胆膵疾患においては、内視鏡技術を駆使して、世界に発信するべく、これまで以上に外科的侵襲を回避させた診断・治療を導入したい。

血液内科：層別化治療のためには安定した予後因子の抽出が必要である。現在、白血病やリンパ種を対象に、さまざまな予後因子の探索を行っているが、実際の臨床応用ができるような検証的臨床試験を導入したい。また、新たなる治療エビデンスを確立するべくさまざまな臨床試験（phase II, phase III 試験）を進めたい。一方、治癒指向の標準治療が実施できない症例に対しては、QOL を重視した治療を工夫し、エビデンスを確立したい。

(2) 第二内科

1. 診療の概要

当科は循環器、呼吸器及び腎臓病を専門とする診療科であり、外来、入院ともに当院でも患者数の多い診療科の一つである。

外来部門では、月曜から金曜まで循環器、呼吸器及び腎臓病それぞれの専門外来を毎日設けているばかりでなく、24時間緊急症例にも迅速に対応できる体制をとっており、また密接に関与するペースメーカー外来や心臓リハビリテーション外来、禁煙外来、漢方あるいは鍼灸、外来化学療法などの特殊外来も設置している。外来初診は毎日2-3人の初診医をたて、速やかな診療に留意している。再診はすべて予約制であり、患者さんの待ち時間は非常に少なく好評を得ている。

入院部門でも、循環器、呼吸器及び腎臓病の入院患者を中心に、週に50人前後の入院を受け入れている。循環器内科では、心臓カテーテル検査数も旧国立大学病院の中ではトップであり、冠動脈造影を年に1300件以上、経皮的冠動脈形成術を年に400件以上施行している。中央放射線部の連続血管室は2室を第二内科専用室として用い、別の1室では脳神経外科と一緒に脳血管造影も併せて施行することで、患者負担を減らす努力をしている。また、当科で開発した冠動脈内超音波の **integrated backscatter** 法による冠動脈組織性状の解析により、動脈硬化巣の詳細な分析が可能となり、的確な診断と冠動脈治療が行える先進医療を行っている。呼吸器グループは主に肺癌や慢性閉塞性肺疾患などを治療し、その対象は多岐にわたる。毎週施行される気管内視鏡検査は年間500例以上にわたり、CTガイド下腫瘍生検、局所麻酔下胸腔鏡検査、気管支超音波診断、ガイドシース法を用いた微小病変診断、レーザー治療、ステント治療等の最新の診療技術を用いた診断法を取り入れている。また、呼吸器外科を交えた呼吸器カンファレンスにより、十分なディスカッションのもとに治療法を選択している。看護師、薬剤師と密接に連絡しながら患者さんの **QOL** を重視した医療を目指し、除痛療法は特に積極的に対応している。腎臓グループは糸球体腎炎、ループス腎炎など腎臓疾患は多いが、超音波ガイド下の腎生検を積極的に施行し、適切な診断を行い、治療法を選択し、透析患者さんには腎臓内科医自らシャント手術や腹膜透析等を行っている。また、腎臓内科その中でも最近著増している糖尿病性腎症の治療に特に力を入れている。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定医教育病院
- 2) 日本循環器学会循環器専門医研修施設
- 3) 日本呼吸器学会認定施設
- 4) 日本呼吸器内視鏡学会認定施設
- 5) 日本臨床腫瘍学会認定研修施設
- 6) 日本がん治療認定医機構認定研修施設
- 7) 日本腎臓学会研修施設
- 8) 日本核医学会認定医教育病院
- 9) 日本心血管インターベンション治療学会研修施設
- 10) 日本超音波医学会専門医研修施設
- 11) 日本高血圧学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 分子標的指向性ナノリポゾームを用いたサイトカインによる梗塞心筋組織修復療法
診療内容 : 梗塞心筋に特異的な分子標的指向性ナノリポゾームによる静注という非侵襲的な **drug delivery system** を用いてサイトカイン (**erythropoietin**) による梗塞心筋修復再生療法の確立を目的とする。急性心筋梗塞の治療はできるだけ早期に再灌流を行うことであるが、それに失敗した場合は重症大型心筋梗塞となり、左室リモデリングが進行し心不全に陥るため予後が悪い。この問題を解決するために壊死心筋組織を修復再生し、左室リモデリングを改善させる先進医療の開発が必要。糖鎖工学を応用して、表面に **Sialyl Lewis X (SLX)** 糖鎖抗原蛋白を結合させた外径 **100 nm** の **SLX**-リポゾームに **erythropoietin (EPO)** を内包させた **SLX-(EPO)**-リポゾームを心筋梗塞後に静脈内投与することにより、梗塞領域に選択的に **EPO** を到達させる分子標的指向性ナノリポゾームを用いた心筋組織修復再生療法の開発が目標である。具体的には、ウサギ心筋梗塞モデルを使用して、**SLX-(EPO)**-リポゾームの静注により、心筋梗塞後の梗塞サイズの縮小、心機能改善、左室リモデリングの改善をはかり、その分子メカニズムを解明する。

国内外の評価:本研究は、分子標的指向性 DDS ナノ粒子糖鎖リポゾームを使用することにより心筋梗塞局所に選択的に EPO を高濃度に発現させることができる点にある。すなわち、毛細血管を通過できる外径 100 nm のナノ粒子糖鎖リポゾームの中に EPO を内包させ、リポゾーム表面には Sialyl Lewis X (SLX) 糖鎖抗原蛋白を結合させた SLX-(EPO)-リポゾームは心筋梗塞部位の血管内皮に発現する E-セレクチンと接着し、SLX-(EPO)-リポゾームが障害心筋組織に集積する。この種の研究は国内外において極めて独創的であり、画期的な非侵襲的修復再生療法といえる。

2) 診療名 : 末梢血リンパ球を用いた肺がん患者予後予測法の開発

診療内容 : 腫瘍細胞が自己の免疫系に感知され得る、複数の抗原物質を持つことは既に明らかになっている。このことを利用し、肺がん患者の予後を予測するための、簡便な免疫学的測定法を開発する。近年、切除不能肺癌に対する化学療法の進歩は目覚ましいものがあるがまだまだ満足いくレベルではない。現在、肺がんはがん種の中でも死亡原因の第 1 位を占め年間死亡者数は 60,000 人を超えている。このような難治性の肺がん治療には新たな治療の開発や免疫状態により適切な治療薬使用が急務である。肺癌未治療がん患者末梢血 10 ml より分離したリンパ球を用いる。EGFR 阻害薬、VEGF 阻害薬を使用した治療、免疫細胞療法や樹状細胞療法など、免疫学的反応を利用する治験を受ける症例を解析する。対象には健常ボランティアの血液を使用する。免疫学的な反応は本学免疫病理学 高見剛教授と共同で行い、既に倫理委員会提出済みである。

国内外の評価 : 手術や化学療法、免疫学的療法といった治療方法の種類に関わらず、残存した少量のがん細胞を破壊・排除する免疫反応が、予後に大きな影響を及ぼすものと考えられる。従来は、皮膚反応、末梢血中リンパ球の構成、刺激末梢血リンパ球の産生サイトカインなどを測定して予後を推測する試みがなされたが、有用な方法は未だ開発されていない。本研究は多重染色で T リンパ球と産生サイトカインの関連を解き明かし、個々の T 細胞がどの亜群に属するのかを判定する。これは、従来の類似法が培養上澄中のサイトカインを一括して測定することと異なり、CD3 抗体が擬似的に特異的刺戟した後の T 細胞の polarity を測定することを可能にする。

3) 診療名 : 胸郭インピーダンス法による心臓リハビリテーション中の連続的心拍出量測定モニタリング

診療内容 : 非侵襲的かつ簡便な心拍出量 (CO) 測定法である胸郭インピーダンス法により、主に重症心不全患者に対する心臓リハビリテーションのモニタリングとして連続的に心拍出量を測定し、そのデータを有効で安全な心臓リハビリテーション施行に役立たせる。現在、入院・外来における心大血管患者に対し、心肺運動負荷試験 (CPX) の結果に基づき有効で安全な運動量を決定し、運動処方を行っている。しかし、心臓リハビリテーションにより予後の改善を著しく認めると報告されている重症心不全患者に対しては、CPX と主観的症状の程度分類である Borg 指数により決定される運動量では、突然死や心不全の急性増悪の防止を必ずしも抑制できることが担保できないため、多くの施設では胸郭インピーダンス法による心臓リハビリテーション中の連続的心拍出量測定モニタリングを行っているのは実情である。

国内外の評価 : より重症な心不全患者に対して、より有効かつ安全に心臓リハビリテーションが施行できることから、国内外の心臓リハビリテーション施設で導入され、その有益性はすでに評価を受けている。フィジオフローは、フランスで開発された製品である。従来のインピーダンス心拍出量測定装置は、ベースライン (ZO) 法を採用しているため、測定精度を上げるために電極の装着や被験者への制限が多く、又体動による測定ミスが多く臨床面で実用的ではなかった。フィジオフローはベースライン法を採用せず、測定時にインピーダンス・ベースライン (ZO) の変化に起因する不安定要素を排除したことで、正確かつ再現性が高く、画期的な製品として評価が高い。

4. 専門医・認定医・指導医

湊口信也 : 日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 日本臨床薬理学会認定医・指導医, 日本医師会認定産業医, 日本高血圧学会専門医, 日本心臓リハビリテーション指導士

竹村元三 : 日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医

西垣和彦 : 日本内科学会認定内科医・研修医指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 日本循環器学会

認定 ACLS インストラクター，日本医師会認定産業医，日本医師会認定健康スポーツドクター，日本心血管カテーテル治療学会認定指導医，日本不整脈学会 ICD/CRT 認定医，日本心臓リハビリテーション指導士，厚生労働省認定臨床研修指導医，米国心臓協会 (AHA) 認定 BLS/ACLS インストラクター，労働衛生コンサルタント

川崎雅規：日本内科学会認定内科医・研修医指導医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本超音波医学会超音波専門医・指導医，日本心血管カテーテル治療学会認定専門医

青山琢磨：日本内科学会認定内科医・研修医指導医，日本循環器学会認定循環器専門医

服部有博：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本心血管カテーテル治療学会認定専門医，日本不整脈学会 ICD/CRT 認定医

大野 康：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・研修医指導医，日本呼吸器学会専門医・指導医，日本呼吸器内視鏡学会専門医・指導医，日本臨床腫瘍学会暫定指導医，日本がん認定機構暫定教育医

村田一知朗：日本内科学会認定内科医・研修医指導医，日本腎臓学会認定専門医・指導医

舟口祝彦：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医，日本呼吸器学会専門医，日本呼吸器内視鏡学会専門医，日本がん認定医機構教育医

川村一太：日本内科学会認定医・総合内科専門医，日本循環器学会専門医，日本核医学会専門医，日本心臓リハビリテーション指導士

久保田知希：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本不整脈学会 ICD/CRT 認定医

山田好久：日本内科学会認定内科医

高杉信寛：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

田中俊樹：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

渡邊崇量：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

早川由香：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本禁煙学会認定指導医

竹山俊昭：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医

名和隆英：日本内科学会認定内科医，日本循環器学会認定循環器専門医，日本心臓リハビリテーション指導士

伊藤文隆：日本内科学会認定内科医

吉田学郎：日本内科学会認定内科医

遠渡純輝：日本内科学会認定内科医

川口智則：日本内科学会認定内科医，日本医師会認定産業医

今井 一：日本内科学会認定内科医

宮崎 渚：日本内科学会認定内科医

柳瀬恒明：日本内科学会認定内科医

5. 自己評価

評価

循環器，呼吸器及び腎臓内科とも研究が順調に進行している。その結果，一流のジャーナルにも多数 publish され，2009 年は英文論文数 22 編でインパクトファクターが 85 点，2010 年は英文論文数 17 編でインパクトファクターが 65.394 点，2011 年英文論文数 20 編でインパクトファクターが 73.301 点であった。

現状の問題点及びその対応策

循環器，呼吸器，腎臓と 3 つの分野を担当しているが，助教以上のポジションが少ないため人材確保について困難を伴う。また，臨床，教育，研究のいずれにも時間を費やし，特に臨床，教育においても全力を傾注しているため，研究に十分な時間があるとは言い難い。

今後の展望

現在，循環器疾患，呼吸器疾患，腎臓疾患はますます増加する傾向にあり，それぞれの病気のメカニズムを動物実験，臨床研究を通じて解明し，治療に応用していくことが重要と考えられる。今後，循環器疾患，呼吸器疾患，腎臓疾患の分野において細胞死の一つであるオートファジー，細胞を再生する再生医学，新たなヒト多能性幹細胞である MUSE 細胞などがより重要な研究テーマとなることが予想される。したがって，我々はこの点を十分認識し，分子生物学的手法を駆使し，さらなる活発な研究活動を行っていかなくてはならないと考える。

(3) 第三内科

1. 診療の概要

糖尿病代謝内科では、糖尿病を中心としてインスリン導入、高度な合併症の治療、さらに肥満症や動脈硬化症などの先進検査と予防、糖尿病・生活習慣病の教育入院などを行なっている。免疫・内分泌内科では、全身性エリテマトーデスなどの膠原病、リウマチ性疾患を担当している。治療に難渋することが多くステロイド、免疫抑制剤などを適切に使用し患者の寛解をめざしている。内分泌領域では、最近の画像診断の進歩で偶発的にみつかると下垂体、副腎の腫瘍性病変も多くなり、各種ホルモン負荷検査などの確に診断すると共に他の関連する診療科と連携して専門治療にあたっている。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定内科専門医教育施設
- 2) 日本糖尿病学会認定教育施設
- 3) 日本内分泌学会認定教育施設
- 4) 日本人類遺伝学会認定教育施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 遺伝子診療外来

診療内容：全国からの依頼を受けて、単一遺伝子異常に起因した糖尿病（MODY、ミトコンドリア糖尿病、受容体異常症など）、肥満症、脂質異常症、内分泌疾患などの遺伝子診断を実施している。病態の改善を目指した治療法の開発や専門資格を有する医師による遺伝カウンセリングを実施している。

国内的評価：国内では、当科の研究グループが最も多くの MODY 遺伝子異常を見出しており、現在も数多くの DNA 検査依頼を受けている。特に、重症 MODY3 においてはインスリン依存の 1 型糖尿病との鑑別は重要であり、インスリン治療以外の薬物療法の可能性が得られるので臨床的に意義は大きい。

国際的評価：MODY2, 3, 5, SHP 肥満などの糖尿病/肥満症の原因遺伝子を世界に先駆けて発見しており、当科研究グループは糖尿病遺伝子研究のメッカと言って過言でない。

4. 専門医・認定医・指導医

武田 純：日本内科学会認定医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医・指導医、日本病態栄養学会認定 NST コーディネーター・専門医

堀川幸男：日本内科学会認定医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本病態栄養学会認定 NST コーディネーター・専門医

諏訪哲也：日本内科学会認定内科専門医・指導医、日本糖尿病学会専門医、日本内分泌学会内分泌代謝専門医・指導医、日本糖尿病学会専門医

飯塚勝美：日本内科学会認定医、日本医師会認定産業医、日本糖尿病協会療養指導医、日本病態栄養学会認定 NST コーディネーター・専門医

川地慎一：日本内科学会認定内科専門医・指導医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本内分泌学会内分泌代謝専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本甲状腺学会専門医

塩谷真由美：日本内科学会認定医・指導医、日本医学放射線学会専門医、日本糖尿病学会専門医

廣田卓男：日本内科学会認定内科専門医、日本糖尿病学会専門医、日本甲状腺学会専門医

橋本健一：日本内科学会認定医、日本糖尿病学会専門医

丹羽啓行：日本内科学会認定医、日本糖尿病学会専門医

富田礼子：日本内科学会認定医、日本糖尿病学会専門医

5. 自己評価

評価

チーム医療の実践と専門的コメディカルの育成により、より質の高い医療が提供できている。

当科は岐阜県糖尿病対策推進会議のコア診療科であり、県内の病診連携やチーム医療を推進させている。全国的にも、糖尿病連携手帳、指導ツールであるカンパセーションマップ、専門誌 DM Ensemble、地域療養指導制度である登録医・療養指導医や CDE ネットワークなど、療養指導ツールの開発と普及や制度インフラ整備において主導的役割を果たしている点は高く評価できる。

現状の問題点及びその対応策

糖尿病の増加に伴い、全科に患者が存在し、糖尿病外来や教育入院治療だけでは対応しきれなくなっている。また複雑な合併症例が多く他科の協力のもと診療を行なっている。今後は院内講習会の企画、他科の医師、コメディカルスタッフとより連携を深めていく必要がある。また糖尿病教室は担当病棟のみでなく院内院外にも広く展開していく。

今後の展望

糖尿病などの生活習慣病に対し、岐阜市、医師会などを含む各種自治体や団体と連携し、上記の医療連携インフラの充実と発展を図ることによって地域全体で疾患の理解、予防医療を展開していく。さらに先進医療である遺伝子診断に基づく体質診断とオーダーメイド医療の開発を推進させる。

(4) 神経内科・老年内科

1. 診療の概要

頭痛、めまい、しびれ、手足の不自由、もの忘れなど日常的な問題から比較的稀な神経難病まで神経内科全領域の診断と治療を行っている。パーキンソン病、脳血管障害、認知症など高齢者の患者が多く、老年内科としての大きな側面も担っている。脳炎・脳症などの神経救急疾患においては、高次救急救命センターや他科と連携して対応しているが、人員不足のため脳血管障害の急性期の多くは脳神経外科に依存している。難病拠点病院である本院に配置された難病相談員と協力して、難病患者への社会資源の適応、在宅調整まで幅広く対応している。医師、看護師、医療連携センターを交えた多職種共同の定期的病棟会議、地域の医療・福祉スタッフを交えた拡大カンファレンスを随時開催、かかりつけ医との診療連携、地域での難病関連スタッフ教育を推進している。入院診療においては、在院日数の短縮化およびクリニカルパスの積極的利用にむけて努力している。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定教育施設
- 2) 日本神経学会認定教育施設
- 3) 日本老年医学会認定施設
- 4) 日本脳卒中学会認定研修教育施設

3. 診療開発

1) 診療名：電子瞳孔計による自律神経機能検査

診療内容：自律神経機能検査は、種々の神経変性疾患において重要な徴候であり、特に瞳孔においては、交感神経機能・副交感神経機能の両面の機能が観察可能である。しかし、その重要性にもかかわらず、客観的な評価が困難な分野である。電子瞳孔計の導入により、その自律神経機能を数値として評価が可能となり、神経変性疾患の病態の評価および解明に期待がされている。

他病院での導入状況：東海地域では、主要な神経内科に数施設しか導入されていない。

国内的評価：神経変性疾患における、交感神経機能・副交感神経機能などの自律神経機能検査として、その有効性が報告されている。客観的な評価が可能であり、病態評価や解明への期待は大きい。

国際的評価：神経学の主要な国際誌に、自律神経疾患の交感神経機能・副交感神経機能の評価に有効性を示唆する報告が散見される。

4. 専門医・認定医・指導医

犬塚 貴：日本内科学会認定内科医・指導医、日本神経学会専門医・指導医、日本老年医学会専門医・指導医、日本老年精神医学会認定医

保住 功：日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本神経学会専門医・指導医、日本老年医学会専門医・指導医、日本老年精神医学会認定医、日本人類遺伝学会専門医、日本頭痛学会専門医

木村暁夫：日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本神経学会専門医・指導医

林 祐一：日本内科学会認定内科医・指導医、日本神経学会専門医、日本老年医学会専門医・指導医

田中優司：日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本神経学会専門医・指導医、日本脳卒中学会専門医、日本消化器病学会専門医、日本救急医学会専門医

櫻井岳郎：日本内科学会認定内科医・指導医、日本神経学会専門医

香村彰宏：日本内科学会認定内科医・指導医、日本神経学会専門医

山田 恵：日本内科学会認定内科医、日本神経学会専門医

吉倉延亮：日本内科学会認定内科医

5. 自己評価

評価

限られた教員/医員数と病床数で規模的には限界があるが、当科における診療内容は日常的な問題に加え、神経救急から神経難病の確定診断・社会資源の調整まで幅広く展開してきた。但し、人員不足のため脳血管障害への積極的対応や高次救急救命センターへの出向ができていない。診療一般の目標値はほぼ満たしているが、地域の神経内科医療の整備が遅れていて、退院後の連携が難しいことが多く在院日数につ

いては長期化が避けられないでいる。

医師、看護師、連携センターを交えた定期的病棟会議、地域の医療/福祉スタッフを交えた拡大カンファレンスランスの随時開催、かかりつけ医との診療連携、地域での難病関連スタッフ教育を継続的に行い、学内外の神経内科診療の充実に貢献した。

難病拠点病院である本院に難病専門員が配置されたことから神経難病の対応は格段に改善された。難病専門員と共同して福祉行政スタッフ、訪問看護師・ヘルパーの教育も進めてきた。神経難病等において、かかりつけ医との連携を深め2人主治医を推進してきた。さらに岐阜県難病連の取り組みにも積極的に参加し地域の神経難病対応の底上げに貢献してきた。かかりつけ医の認知症対応力向上研修、地域の認知症ネットワークづくりに、講師や企画の一部を担当するなど積極的に参加し、岐阜県の認知症対応の基盤作りに協力してきた。また学内外の看護師、療法士の養成にも講義等により積極的に貢献した。このような一連の努力は大学病院の診療・臨床教育力の向上だけでなく、地域における神経内科診療へのアクセスを確保してきた。

現状の問題点及びその対応策

何よりも人材の確保が急務である。神経内科医療の整備が遅れている地域ほど、病院研修医に入局の働きかけができず、さらにその整備が遅れるという悪循環は断ち切らなくてはならない。人材不足はすべての問題点の根源である。現在、1) 外来対応力が不十分であり、診察待ち時間が長く改善が求められている。2) 入院在院日数がやや長く、入院待機者が常時多い。3) 脳血管障害への積極的対応や高次救急救命センターへの出向ができていない。4) 地域の神経内科専門医が非常に不足しており、地域医療機関へのパート出張による診療サポートもニーズに追いついていない。5) 学生教育において5年生のクリニカルクラークシップの完全実施にまだ遠い。6) 診療の多忙化のため臨床教育・研究に専念できる時間が限られている。以上の解決のため、実習等での学生との緊密な接触とその継続、初期研修医に対して神経疾患対応スキルアップの催しを多く用意しコミュニケーションを図る。連携センターやかかりつけ医との協力をさらに深め、退院調整或いは外来診療後の紹介環境を整備する。人材の確保と併せて病院業務・臨床実習に向上にむけて教員ポスト（現在臨床講師1のみ）の増設が重要であり求めていく。

今後の展望

新たな入局者を求めて努力する。多職種による定期的病棟会議、かかりつけ医との連携を更に進め、在院日数の短縮化、日常および救急診療対応力を確保していく。人員が増えれば脳神経外科と協力して、高次救急救命センターでSCUを設置して脳血管障害急性期の診療にも寄与していきたい。難病専門員と協力して地域社会の難病対応力を高める努力、地域の認知症対応力の向上、コメディカルスタッフの神経内科・老年科教育を今後も引き続き継続し、病院内外の神経内科診療対応力を向上させたい。さらに診療および臨床実習に必要な病院の教員ポストの増設を求めていく。

(5) 総合内科・総合診療部

1. 診療の概要

近年の医学の進歩とともに、ますます医師の専門化・細分化が進んでいる。一方で、社会の高齢化とともに複数の疾患を併せ持つ患者が急増してきている。すなわち、患者の実態と医師の診療範囲にミスマッチが生じてきている。その結果、主治医としての診療が十分にできなかつたり、専門外の疾患であると最初から診療を断つたりするといった事態が起こってきている。そのため、地方だけではなく都市部でも、全人的・総合的な診療ができる医師が多くの病院で求められるようになってきている。また、原因不明でなかなか診断がつけられなくて医療機関を転々とする患者も多くみられる。そのような患者に対し、病態生理学的な見地から思考し、的確な診断を行うことができる診断能力の高い医師も必要である。我々は、これら2つの社会的ニーズに対して貢献できるような診療と、それに対応できる総合内科医の養成を目指している。

診療面では、1) 初診患者の診療、必要があれば専門診療科への紹介、2) common diseases や複数の疾患を有する患者の診療、3) 診療時間内の1・2次救急患者の診療、4) 専門診療科からの原因不明疾患の依頼診療などを行い、大学病院における中核的な役割を担うことによって、専門診療科の診療効率を高めている。紹介されてくる発熱患者にリウマチ・膠原病疾患が多いため、これらの専門診療にも力を注いでいる。教育面では、1) 医療面接と診察を重要視した卒前・卒後臨床研修の実践、2) 後期臨床研修医を対象とした総合内科医の養成、3) リウマチ専門医の養成、4) 地域医師会との生涯教育に関する連携などに携わっている。また、2004年度から始まった卒後臨床研修制度に合わせ、学内・学外の研修医のレベルアップと交流を目的としたプライマリ・ケアカンファレンスという教育プログラムを、年3回岐阜県内の多くの臨床研修指定病院とともに開催している。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定教育施設
- 2) 日本糖尿病学会認定教育施設
- 3) 日本消化器内視鏡学会指導施設
- 4) 日本循環器学会研修施設
- 5) 日本消化器病学会認定施設
- 6) 日本リウマチ学会教育施設
- 7) 日本老年医学会認定施設
- 8) 日本アレルギー学会準認定教育施設

3. 診療開発

1) 診療名 : 不明熱外来

診療内容：他院での診療において原因が不明であった発熱を主訴とする患者に対し、病態生理学的見地から診断し、迅速に治療方針を決定する。専門的な治療が必要ない場合には、そのまま総合内科外来もしくは病棟にて治療を行う。

他病院での導入状況：現在、不明熱外来を標榜している病院は、我々が調べた限りない。

国内的評価：スタッフの多くが総合内科専門医を取得している。

国際的評価：今後、重症急性呼吸器症候群（SARS）や鳥インフルエンザなど、国際的な感染症の流行が予測されている。同感染症を疑う患者の受け皿となる不明熱外来の標榜は、国際的ニーズに応えるものと考えている。

2) 診療名 : リウマチ・膠原病外来

診療内容：リウマチ・膠原病の診断治療は高度先進医療の実践に不可欠である。不明熱外来で診断されたリウマチ・膠原病は、難病に苦しむ患者にとって重要な課題である。現在、内科ゾーンで生物学的製剤による治療患者を最も多く抱えており、特に関節リウマチは整形外科領域と共同して治療する必要がある。

他病院での導入状況：東海地方では保健衛生大学、愛知医科大学に専門外来はあるが岐阜県下の中核病院では羽島市民病院以外にはない。

国内的評価：日本リウマチ学会総会には毎年臨床的成果を発表している。なお、当科には日本リウマチ学会認定リウマチ専門医3名が在籍して診療を担当している。

国際的評価：米国、ヨーロッパリウマチ学会と共同して、日本リウマチ学会も臨床疫学研究が進行しつつある。

4. 専門医・認定医・指導医

石塚達夫：日本内科学会認定医・専門医・指導医，日本消化器病学会専門医・指導医，日本消化器内視鏡学会専門医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本内分泌学会専門医・指導医，日本老年医学会指導医，日本リウマチ学会専門医，日本病態栄養学会 NST コーディネーター，日本高血圧学会専門医

清島 満：日本内科学会認定医，日本消化器病学会専門医，日本肝臓学会専門医，日本臨床検査学会専門医

宇野嘉弘：日本内科学会認定医・専門医・指導医，日本循環器学会専門医，日本糖尿病学会専門医

森田浩之：日本内科学会認定医・専門医・指導医，日本内分泌学会専門医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本リウマチ学会専門医・指導医，日本老年医学会専門医・指導医，日本病態栄養学会 NST コーディネーター，日本アレルギー学会専門医

梶田和男：日本内科学会認定医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医

和田祐爾：日本内科学会認定医・専門医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本糖尿病学会専門医，日本消化器病学会専門医

池田貴英：日本内科学会認定医・専門医，日本リウマチ学会専門医

森 一郎：日本内科学会認定医・専門医

谷本真由実：日本内科学会認定医

山内雅裕：日本内科学会認定医

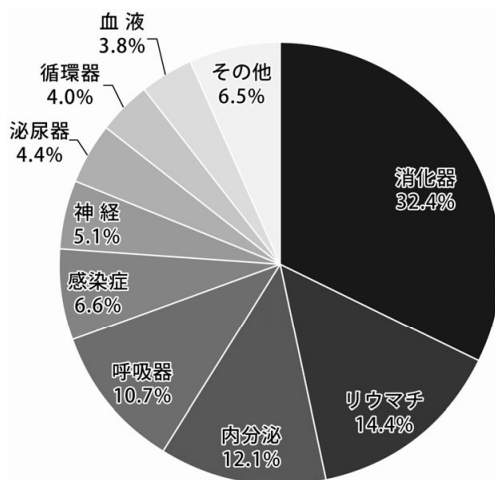
藤岡 圭：日本内科学会認定医・専門医

高橋典子：日本内科学会認定医

5. 自己評価

評価

外来は，月間平均患者数が 1,000～1,100 人となっており，これは大学病院全体の外来患者数の約 4% に相当する。また，開業医や他院からの紹介患者も増加してきており，平均紹介率も平成 22 年度が 30%，23 年度は 37% までアップしてきている。これらのことから，地域においても総合診療外来として認知され活用されつつあると考えている。入院は，2004 年 6 月新病院への移転とともに，東 7 階病棟に 4 床で新規開設し，2007 年 4 月からは 7 床，2011 年 4 月からは 12 床に増床になった。この増床によって，病床を探すことが少なくなり，比較的スムーズに緊急入院にも対応できるようになったのは当科にとっても患者にとっても朗報である。2011 年 10 月現在，2011 年度病床稼働率 98%，平均在院日数 17 日となっている。入院患者の疾患は非常に多岐にわたり，これまで入院した約 1,600 名の患者は図のような内訳になっている。また，他の診療科に比べて診断目的の入院が多いのが特徴である。一方，教育では，初期・後期研修医を受け入れ，基本的な臨床スキルが習得できるようなプログラムを実践している。医師免許取得後 4 年目には日本内科学会認定内科医資格を取得できるように指導している。



現状の問題点及びその対応策

2004 年度から卒後臨床研修が必須化され，そのなかでもプライマリ・ケアの実践が強調されている。総合内科・総合診療部はその中心的な役割を担うべき立場にあるが，なかなか入局を希望し総合内科医を目

指そうとする若い医師が少ないのが現状である。ベッド数が新病院への移転当初の3倍となって明らかに研修の機会は増加しているが、他の研修指定病院で研修をしている研修医たちに総合内科医の魅力や役割について十分に情報が行っているとは考えにくいのが現状である。今後は、研修医が多く在籍する基幹病院に医師を派遣することによって、総合内科医の実力を示して研修医の育成に努めたい。

今後の展望

岐阜県の特徴の1つに山間部が多いことが挙げられる。人口が平野部に比べ少ないため、比較的小規模の病院が多く存在する。また、複数の疾患を併せ持つ高齢者が多いのも特徴である。こうした地区や病院において、最もニーズが高い医師は、ある特定の分野に深い知識と技能を持つ専門的な医師ではなく、むしろ幅広い医学知識と技能を持ったヒューマニティあふれる総合内科医であり、多くの学生や研修医が理想とする医師像の1つでもある。一方、大学病院をはじめとする都市部の基幹病院には、原因が不明の患者も多く紹介されてくるが、それに対応ができる総合内科医が必要となってくる。それは、他の専門診療科の効率的な運営のためにも重要である。

総合内科・総合診療部では、高い診断能力を持ち、一人の患者の複数の疾患に同時に対応ができるスキルを持った総合内科医の養成に全力を尽くし、岐阜県の社会的ニーズに答えてゆきたい。また、遠隔医療を通じてより細やかな診療体制の構築と、他の医療機関や企業との連携によって住民の健康増進による疾病予防にも努めてゆきたい。

(6) 第一外科

1. 診療の概要

当科は心臓血管外科、呼吸器外科、消化器外科（一般外科、甲状腺外科、乳腺外科を含む）の3チームで構成され、外科領域の全臓器疾患の外科治療にあたっている。今後も続くであろう高齢化社会にあつて、外科手術はさらなる低侵襲化と複雑病変に対して高度な技術がますます求められる。高齢者の特徴は決して一疾患のみに罹患していることはなく、時には心臓手術と呼吸器手術、心臓手術と消化器手術の同時手術を行わなくてはならない場合も生じる。同時手術が高侵襲のときの二期手術の順序決定などは多くの経験と実績が必要である。当科ではカンファランスは3チーム合同で行い、お互いにサポート、補完しながら最良の治療戦略を考えている。

心臓血管外科では冠動脈疾患、弁膜症疾患、不整脈疾患、大動脈疾患、末梢動脈疾患、静脈疾患を対象に外科治療を行っている。冠動脈バイパス手術では人工心肺を用いない心拍動下冠動脈バイパス術を第一選択としている。グラフト採取法に関しては、橈骨動脈には内視鏡を用いて手首に約2 cmの切開線のみで採取を行っている。下肢静脈をグラフトとして使用する症例では特殊な器具を用い皮膚切開線を最小限とする方法にて採取を行っている。弁膜症疾患では通常の前中切開のみではなく症例に応じて小切開肋間開胸アプローチにて人工弁置換術と自己弁温存手術を行っている。僧帽弁逆流症に対しては自己弁を温存する弁形成術を積極的に行っている。胸部・腹部大動脈瘤では症例に応じて人工血管置換術とステントグラフト内挿術を行っている。弓部置換術においては脳合併症を低くするために当科で考案したオリジナルの樹枝状血管を使用し良好な結果をあげている。ハイリスク患者の弓部や胸腹部動脈瘤症例に対しては、頸部や腹腔臓器分枝動脈にバイパスを行った後、瘤の部分をステントグラフトで内腔よりcoverするdebranching TEVARを行っている。動脈瘤破裂の緊急手術症例は高次救命センターと連携し県全域より搬送され迅速な手術対応で良好な成績をあげている。

呼吸器外科では肺悪性腫瘍の症例が増加しており、その要因に胸腔鏡下肺葉切除が可能になったことがあげられる。その低侵襲度は大きく、術中出血、術後疼痛の軽減が図られている。また区域切除は更なる低侵襲術式であるが、独自の手法による区域決定法が有効で、確実安全な術式が可能となっている。

消化器外科では1998年から導入している大腸癌と胃癌に対する腹腔鏡下手術を積み重ねており、より質の高い手術が可能になってきている。それに伴い術後管理もより合理的となり、術後早期の退院が可能となった。食道癌に対する胸腔鏡下手術も取り入れ、現在では消化管に対する内視鏡下手術の割合は従来の開胸・開腹術を上回っている。肝切除においては出血量を減少させるためさまざまな手技を導入し、最近3年間の平均出血量は以前の半分となった。膵切除では進行癌に対する門脈合併切除の機会が増加し、一時的門脈下大静脈シャントを使用して安全に門脈再建が可能となっている。1990年から取り組んでいる心疾患、呼吸器疾患と消化器癌の同時手術も低侵襲で可能となり、比較的安全に施行できる手術となった。

2. 教育施設

- 1) 日本外科学会外科専門医制度修練施設指定施設
- 2) 日本胸部外科学会指定施設
- 3) 日本消化器外科学会専門医修練施設
- 4) 心臓血管外科専門医認定機構基幹施設
- 5) 呼吸器外科専門医認定機構基幹施設
- 6) 日本循環器学会循環器研修施設
- 7) 日本肝胆膵外科学会高度技能医修練施設 B

3. 診療開発

- 1) 診療名：心不全合併虚血性心疾患に対する血管新生・心筋再生医療

診療内容：重症の心不全合併虚血性心疾患、低左心機能症例に対して、循環器内科と共同で血行再建可能な部位にはバイパスを行い、血行再建不可能な部位にはエリスロポイエチン投与による血管新生・心筋再生の臨床応用を目指す。また、バイパスが不可能な症例には胸腔鏡下でのエリスロポイエチン心筋内投与も可能としたい。

他病院での導入状況：エリスロポイエチンによる心筋再生は岐阜大学循環器内科の発案であり、他病院での導入はされていない。

国内的評価：心筋再生、血管新生は他の血管新生促進因子での研究がここに来て停滞している。エリスロポイエチンは、臨床上有有害事象は軽微と考えられ、その効果は基礎的研究で確認され

ている。

国際的評価：エリスロポイエチンによる臨床応用は例がなく、新しい治療体系となりうる。

2) 診療名：新しい区域面の同定法を用いた肺癌に対する胸腔鏡下区域切除術

診療内容：当科で施行してきている肺癌に対する胸腔鏡下肺葉切除術から、より呼吸機能を温存した区域切除術を我々独自に考案した方法で施行することにより、患者さまの QOL をより高める。肺葉切除術は、肺癌に対する標準術式であるが、近年、より切除肺を少なくする区域切除の妥当性が検討されてきており、我々もこの手術を胸腔鏡下に施行する方法を考案しより高度な医療を患者様に供給することを目的にしている。また、胸腔鏡も年々進歩してきており、鮮明な画像下での手術が可能となっている。

他病院での導入状況：肺癌における積極的領域切除術は臨床研究も開始されており、その妥当性も認められている。当院も多施設共同研究に参画している。

国内的評価：当科の胸腔鏡下手術は、東海地方では先進的な立場にあると自負している。独自の区域切除は、全国学会にて発表して評価を得ている。

3) 診療名：術中造影超音波検査による至適肝切除術

診療内容：肝切除術において腫瘍の遺残がない切除が重要である。一方、術後肝不全を予防のためには過度な肝切除は避けなければならない。これまでは肝静脈などの構造物を肝区域の境界の目安とし肝切除を行っていたが、門脈血流域によって規定される真の区域と解離していることや、亜区域の境界には目安となる構造物がなく亜区域切除の場合の切除ラインの設定は困難な場合がある。不適切な切除ラインによる肝切除から残肝機能の低下、術後肝不全の発症が危惧される。肝切除術における根治性の向上と残肝機能の温存を保つため、術中造影超音波を用い至適な肝切除ラインを決定する。

他病院での導入状況：超音波用造影剤は肝細胞癌や転移性肝癌の診断で内科領域では普及した検査法である。一方、外科領域では安全な肝切除のための工夫として、術中超音波としての使用の報告が散見されるようになったが、まだ一般的ではない。

国内的評価：術前診断されなかった微小病変の検出することにより、追加肝切除など根治性の向上が見込まれる。また、多発発見例では化学療法への conversion など治療方針の決定にも役立つ。残肝予備能の温存することにより、術後肝不全の予防に期待できる。

国際的評価：前述したように外科領域への応用はまだこれからであるが、縦中超音波造影により安全で治療効果の高い肝切除術が可能となり、術後患者の生命予後、QOL の向上につながると思われる。

4. 専門医・認定医・指導医

竹村博文：日本外科学会指導医・専門医・認定医、日本胸部外科学会指導医・認定医、日本循環器学会専門医、心臓血管外科専門医

岩田 尚：日本外科学会指導医・専門医・認定医、日本胸部外科学会認定医、呼吸器外科専門医、日本がん治療認定医機構暫定教育医・がん治療認定医、肺がん CT 検診認定医

關野考史：日本外科学会専門医・認定医、消化器外科指導医・専門医、日本消化器病学会専門医、日本肝臓学会専門医、日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医、マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

島袋勝也：日本外科学会指導医・専門医・認定医、日本胸部外科学会認定医、日本循環器学会専門医、心臓血管外科専門医、腹部ステントグラフト指導医

村瀬勝俊：日本外科学会指導医・専門医・認定医、消化器外科指導医・専門医・認定医、日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

白橋幸洋：日本外科学会専門医・認定医、呼吸器外科専門医、日本がん治療認定医機構暫定教育医・がん治療認定医、肺がん CT 検診認定医

石田成吏洋：日本外科学会専門医・認定医、心臓血管外科専門医

松野幸博：日本外科学会専門医・認定医、心臓血管外科専門医

木村真樹：日本外科学会専門医・認定医、消化器外科専門医、日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

名知 祥：日本外科学会専門医・認定医、日本救急医学会救急科専門医、マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医、日本救急医学会認定 ICLS 指導者養成ワークショップディレクター・コ

ースディレクター，日本救急医学会 JPTEC 認定インストラクター，日本臨床救急医学会 ISLS 認定ファシリテーター

井原 頌：日本外科学会専門医・認定医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

水野吉雅：日本外科学会専門医，呼吸器外科専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医

關野誠史郎：日本外科学会専門医，消化器外科専門医，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定医

5. 自己評価

評価

総合外科として、あらゆる臓器の外科治療を行ってきたが、そのテーマは低侵襲であった。人工心肺非使用心拍動下冠動脈バイパス術、腹部・胸部大動脈瘤ステントグラフト内挿術、僧帽弁形成術、MICS（小切開による開心術）、胸腔鏡下肺切除術、腹腔鏡下胃切除術、腹腔鏡下結腸切除術、単孔式胆嚢切除術など、あらゆる低侵襲下に努力してきた。症例数も年々増加してきている。国内外の学会等での発表も量的質的にも増加しており、内外にアピールしてきた。

現状の問題点及びその対応策・今後の展望

症例の増加にともなう外来待機期間が徐々に延びており、悪性疾患や循環器疾患を扱う関係上、許容範囲を逸脱することは許されない。関連病院とも連携しながらサテライト手術枠なる構想で連携し、外科治療の質を落とすことなく医療を提供することも今後重要と考える。

低侵襲化は今後もさらに追求されると思われる。カテーテルを利用した弁膜症治療、完全内視鏡下手術、さらにはロボット手術をも視野に入れた手術術式の開発が重要と思われる。

(7) 第二外科

1. 診療の概要

消化器外科・乳腺外科を専門とし、ことに悪性腫瘍に対する外科的治療が主な診療内容である。平成20年の手術症件数は食道癌：10、胃癌：66、結腸・直腸癌：66、原発性・転移性肝癌：27、胆道・膵癌：19、乳癌：55であったものが、平成22年には食道癌：20、胃癌：103と結腸・直腸癌：157といった急速な増大のみならず、原発性・転移性肝癌：32、胆道・膵癌：24例、乳癌：61例と全ての領域で軒並み対応症例が増え岐阜県がん診療拠点施設である大学病院として地域に貢献している。加えて一般消化器外科症例としても、良性疾患である胆嚢摘出術や鼠径ヘルニア、虫垂切除術など緊急例のみならず婦人科等他科の手術の応援として積極的に関与している。基本的には臓器別チームを編成し、各領域の専門医が手術と周術期管理および悪性疾患に対する化学療法などにつき、個々の症例に応じて実施している。

各領域悪性腫瘍に対し根治術が可能と判断した症例には積極的に外科治療を試みているが、切除不能例に対しても、例えば食道癌では放射線・化学療法（5FU+TXT）、胃癌・大腸癌には化学療法（TS-1あるいはFOLFOXなど）を応用し、腫瘍縮小に伴ない切除可能となった症例も多く経験しており、Adjuvant Surgeryとして当科を発信源とした概念を広く国内に提唱している。一方で上部・下部消化管腫瘍の外科治療においては、日本内視鏡外科学会技術認定医を中心に病期進行が比較的早期である症例に対して侵襲が少ない鏡視下手術を導入している。また下部消化管領域では可能な限り自然肛門温存手術（括約筋温存手術）を行っていることに加え、やむなくストーマ（人工肛門）造設が必要となった場合には、ET、WOC ナースの協力の下でストーマ外来を開催し各種相談に応じている。肝胆膵領域では、特に高度に進行して切除不能である肝臓癌に対して抗腫瘍免疫賦活を目的とした凍結治療を臨床応用してきたが、現在はこのメカニズムの解明につき基礎研究を行っている。一般に胆膵癌は根治切除後でも比較的高率に再発するという現実を踏まえ、術前放射線・化学療法を行った上で外科切除を施行しており、現在までの経験症例ではその有用性を示唆する結果を得ている。乳癌に対しては、乳房温存療法など術後満足度を維持することに心がけるのみならず、センチネルリンパ節への検討を応用し不要な腋窩リンパ節郭清を回避する努力をしている。

いずれの臓器の癌に対しても、基本的に化学療法は国内での新規治験に協力・登録を中心として発展に寄与するようにしているが、それ以上に当科での独自性を発揮する場の展開を心がけ、岐阜から世界への発信を目標としている。

2. 教育施設

- 1) 日本外科学会認定医・専門医制度研修施設
- 2) 日本消化器外科学会専門医修練施設
- 3) 日本肝胆膵外科学会高度技能専門医修練施設
- 4) 日本大腸肛門病学会専門医修練施設
- 5) 日本乳癌学会研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：抗腫瘍免疫賦活を目的とした凍結治療

診療内容：外科的切除が不能と判断された肝腫瘍に対し、超音波をガイドとして局所麻酔下に凍結穿刺針を使用することで凍結壊死を誘発する。治療は週1回を原則として可能な限り反復・継続し、抗腫瘍免疫の賦活を促す。

他病院での導入状況：当科独自の治療体系であり、世界的にも類をみない。

国内的評価：重篤な有害事象もなく、1泊入院で1回の治療が可能であることから quality of life を損なうことなく行い得、これまでに実施してきた22例の治療内容につき、各種学会での報告、論文掲載を通し徐々に浸透している。2011年度文部科学省・科学研究費申請にて研究助成を受けることとなり、今後は詳細なメカニズムの解明を行った上で、再度臨床面での応用を目指したい。

国際的評価：凍結治療そのものはこれまでも欧米をはじめ施行されてきた経緯があるが、抗腫瘍免疫賦活を目的とする概念は特異であり、国際癌学会や国際消化器外科学会への発表を通して評価されている。

- 2) 診療名：センチネルリンパ節生検による腋窩リンパ節郭清の適応判定

診療内容：乳癌症例において腫瘍径の小さな場合には、標識アイソトープを腫瘍周辺に注入して腫瘍から最も近く最初に流入するリンパ節（センチネルリンパ節）を摘出し、術中迅速病理検

査にて転移の有無を確認することで郭清の適応を評価している。

他病院での導入状況：全国的には標準内容とされる傾向にある中、岐阜県下では未だ浸透している状況ではなかったが、当院ではすでに安定した手技・方法として定着した。

国内的評価：乳癌診療を専門としている施設では標準内容であり診療ガイドラインにもその意義が評価されている。しかし安定した成績の確保には一定以上の症例数を要する点も指摘されており、その点に関しては当科ではすでに確立した状況と言える。

国際的評価：欧米では日常臨床上重要視されている。

3) 診療名：進行膵癌に対する術前化学・放射線治療の有用性

診療内容：進行膵癌，ことに周辺脈管へ浸潤の傾向にあるものは，例え根治切除しても術後化学療法を選択することが標準的で，それであっても未だ良好な予後を確保しにくいのが現状である。そこで当科では，術前に化学療法と放射線療法した上で外科切除することで再発率を減少させる試みを行っている。放射線治療による局所での癒着が手術の難易度を上げるが，合併症としての術後経過に影響なく，現在までの経験症例では予後の明らかな改善をみている。

他病院での導入状況：本研究は当科が主体となり，連携施設である岐阜県総合医療センターおよび岐阜市民病院という一定の技術ないし症例数を期待しうる施設との共同で推進している。

国内的評価：本邦でも未だ散発的な検討しかみられないが，当科からは消化器外科や癌治療領域での学会で精力的に報告することで徐々にではあるが浸透している。

国際的評価：国際的にも未だ積極的に応用される治療内容ではないが，文献上では同等の治療内容に関する論文が散見される。今後は，国際会議・国際雑誌にも当科での結果を提示し評価されるよう質の高い外科医療を追求したい。

4. 専門医・認定医・指導医

吉田和弘：日本外科学会認定医・専門医・指導医，日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医，日本内視鏡外科学会技術認定医（消化器・一般外科・胃癌），日本乳癌学会認定医，日本癌治療学会臨床試験登録医，日本癌治療認定医・機構暫定教育医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定，日本食道学会食道科認定医，食道外科専門医，日本消化管学会胃腸科認定医

川口順敬：日本外科学会認定医・専門医，日本乳癌学会認定医・乳腺専門医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定

二村 学：日本外科学会認定医，日本消化器外科学会専門医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定，日本消化器外科学会消化器がん外科治療認定医

長田真二：日本外科学会認定医・専門医・指導医，日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医，日本肝胆膵外科学会高度技能指導医，日本癌治療機構暫定教育医，日本消化器がん治療認定医

山口和也：日本外科学会認定医・専門医・指導医，日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医，日本内視鏡外科学会技術認定医（消化器・一般外科・胃癌），消化器がん治療認定医，日本癌治療暫定教育医

高橋孝夫：日本外科学会認定医・専門医・指導医，日本消化器外科学会認定医・専門医，日本大腸肛門病学会専門医，消化器がん治療認定医，日本癌治療暫定教育医，日本癌治療認定医，ICD，胃腸科認定医

野中健一：日本外科学会認定医・専門医，日本消化器外科学会認定医・専門医，日本癌治療認定医機構認定医・暫定教育医

奥村直樹：日本外科学会認定医・専門医，日本消化器外科学会専門医

田中善宏：日本外科学会認定医・専門医，日本消化器外科学会認定医・専門医，日本癌治療認定医機構認定医・暫定教育医，日本麻酔科学会認定医

名和正人：日本外科学会専門医，日本乳癌学会認定医，日本消化器外科学会専門医，日本癌治療認定医機構認定医

今井 寿：日本外科学会専門医，日本消化器外科学会認定医・専門医，日本癌治療認定医機構認定医・暫定教育医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定

斎藤史朗：日本外科学会専門医

佐々木義之：日本外科学会専門医，日本消化器外科学会専門医，日本癌治療認定医機構認定医・暫定教育医

森光華澄：日本外科学会専門医，日本乳がん学会認定医，マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定

太和田昌宏：日本外科学会専門医

森 龍太郎：日本外科学会専門医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会読影認定

棚橋利行：日本外科学会専門医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会読影認定

八幡和憲：日本外科学会専門医，日本癌治療認定医機構認定医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会読影認定

加藤順子：日本外科学会専門医，マンモグラフィー検診精度管理中央委員会読影認定

山田敦子：日本外科学会専門医

5. 自己評価

評価

新病院への移転後，外来・入院診療のいずれにおいても，消化器・乳腺疾患症例数はともに増加の一途をたどっている。手術技術およびその内容としても，各疾患・臓器領域への分化により高い専門性に伴うレベルの向上がみられており，国内でも十分評価される状況である。また高次救命センターとの協力のもと，術後管理体制にも安定がみられている。悪性疾患に対する術後補助療法に関しては，国内各種新規治験への参加によるエビデンスの提唱に関する努力のみならず，附属病院腫瘍センターにおける人的交流を通じた外来化学療法部門の立ち上げに携わり，一層充実した方向へ発展しつつある。以上より消化器・乳腺における悪性腫瘍に対する治療では，岐阜県がん拠点病院である大学病院の一翼を担うべく腫瘍外科として，その役割を多いに果たしている。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 病床数に制限があり，手術，化学療法に加え緊急入院などにおけるベッドの確保に困窮することが多い。
- 2) 手術症例の増加に伴いみられるようになった手術枠の制限が最も大きな問題点の一つである。当科としては，安全性の確保を重視しつつ手術時間の短縮・手術人員のシフトなどの努力を行い，麻酔科および手術部の協力を受け定期手術日（火曜・木曜）に加え水曜枠を確保したが，未だ手術待ち期間は平均3から4週間であることが現実である。
- 3) 全国的な傾向としてみられる若手医師の外科離れが深刻である。大学病院での標準以上の診療レベルを保ちつつ，一般外科として地域医療への貢献が期待される当科事情から周辺医療圏への人材の供給にも責任を果たす必要があり，現段階では医局員の献身的な努力でこれを補っている。その対応としては研修医師の確保に他ならず，外科医療の利点を説きつつ，現状打開の方策を共に考えていけるよう学生時代からの意識レベルのアップをはかるべく教育にも力を入れている。

今後の展望

消化器・乳腺の悪性腫瘍を中心とした診療が今後も主体となる。

学会などの動きとして各領域の専門医を設定する方向にあり，修練施設としての症例数のみならず診療内容の維持が重要で，医局員に対する経験の提供および教育体制の充実が必ず必要とされる。その上で，学会活動を拠点とした最新医療の技術の取り入れや概念の理解を継続することを目標としている。さらに当科ではすでに確立した卒後研修システムをも常に見直し，状況に則した内容を常に検討する努力が必要である。もちろん患者さんの求めに応じた全人的な外科医の育成がどの段階でも必要であることは当然である。

今後とも日常診療のみに明け暮れる臨床科としての存在のみならず，がん医療に関する基礎的研究部門との強固な繋がりを継続する必要がある。現在は当科スタッフの指導により大学院生が研究の中心となっているが，学会発表・論文投稿に対する一定の評価をもとに，医局員一人一人の意識をより向上させ，組織全体としての発展を臨みたい。

(8) 産科婦人科

1. 診療の概要

産科婦人科のすべての領域を対象としており、婦人科腫瘍の手術および内科的治療、生殖生理的疾患（不妊症、思春期、内分泌疾患、更年期）、感染症、婦人科心身症および周産期診断・治療に関して、県唯一の大学病院として地域医療機関との連携をとりながら施行している。

2. 教育施設

- 1) 日本産科婦人科学会認定施設
- 2) 日本婦人科腫瘍学会認定施設
- 3) 母体保護法指定施設
- 4) 日本周産期・新生児医学会暫定認定施設

3. 診療開発

1) 診療名：癌化学療法時の性腺機能障害に対する GnRH アナログの保護作用

診療内容：癌化学療法剤による性腺ダメージからの回避機構の第一歩として本研究では GnRH アナログの卵巣間質細胞保護作用を臨床的に明らかにする事を試みた。

他病院での導入状況：1) 保険適用がないこと、2) 臨床試験（大規模）がないため、臨床応用がなされていない。この試験の開発は大学病院の使命である。

国内的評価：GnRH アナログは卵巣に直接作用し、化学療法剤に対する反応性を低下させると着目した独創性は高い。しかも、GnRH アナログは性ステロイド依存性疾患の治療薬として広く使用されており、直ちに臨床応用出来る可能性を秘めている。発展性が期待出来る研究課題である。性腺の化学療法剤に対する感受性が高く、治療後に二次的な性腺ダメージをきたす事が多い。この性腺障害は不可逆的であり、若年者にとって極めて深刻な合併症となっている。化学療法時の細胞毒性から性腺を保護する事は、将来的な生殖能力を保持する上で重要である。

国際的評価：総説（Reprod. Med. Biol. 2008;7:17-27）として発表した。また、諸外国では臨床応用が始まっており、国際的な位置付けは高い。

2) 診療名：セミオープン化への試み 2（病診連携の促進）

診療内容：患者紹介元であるかかりつけ医と高次機能病院である当院が施設間の垣根を越えて患者の診療を担当する事を目的とする。この事により病診間の連携がより密接となり、患者にとって多大なメリットを有するのみならず、双方の医療従事者間の知識、技術向上にも貢献すると思われる。この事は当院の社会的責任を果たすと同時に収益上の利点も期待できる。

他病院での導入状況：国内他病院では導入されていない。

国内的評価：有床診療所の入院基準の厳格化が今後促進される事により、分娩を始めとする産科入院の取り扱い施設が減少する事が予測される。本計画により、診療所勤務医師の産科診療の関与が継続できる。医師・助産師を始めとした人的資源、施設・設備の集約化による経済効率の改善が見込まれる。この事を婦人科疾患の診療にも拡大する。この事が、診療所医師にとっても、金銭的リスク、スタッフ管理の不安などから解放される事でメリットは大きい。さらに、最終的には、各診療行為における医療スタッフの負担が軽減され安全が確保される。しかしながら、地域の理解および協力が必須であり岐阜地区で本システムが受容されるかどうかの検討も必要である事や、受容された場合のオープンシステムの形態（実際の運用法用に加えて当院が受け持つ役割も含めて）についても極めて慎重に考慮する事が必要である。

国際的評価：諸外国では臨床応用が始まっており、国際的な位置付けは高い。

3) 診療名：リゾフォスファチジン酸を用いた胚培養法の開発

診療内容：1) 体外受精（顕微授精を含む）後、または凍結融解胚の初期、分割胚の培養についてリゾフォスファチジン酸の添加を行い、胚盤胞到達率、着床率、臨床的妊娠率の改善を図る。

2) 第2段階として、未受精卵未熟卵の体外成熟時の培養液としての可能性を探索する。

3) 岐阜県配偶子保存センターの設立（他疾患の治療により性腺機能の廃絶が見込まれる患者の配偶子を保存）

他病院での導入状況：国内他病院では導入されていない。

国内的評価：国内外共通に生殖補助技術の進歩はめざましいものがあり、過去には妊娠の可能性がな

かった患者の妊娠も可能となって来ている反面、技術的な進歩も頭打ちになりつつある。それに伴い妊娠率も頭打ちとなっている。また、#3 に関して公的機関が一元的に管理するシステムは現在の所報告がない。

国際的評価: リゾフォスファチジン酸の着床現象に影響を及ぼす可能性が, *Nature*. 2005;435:104-108 によって示された。

4) 診療名 : 広汎性子宮頸部摘出術 (vaginal trachelectomy) の導入

診療内容: 従来では子宮温存可能な子宮頸癌は臨床進行期 Ia1 期までとされており, 挙児希望のある若年者でも子宮全摘が余儀なくされていた。しかし, 現在では子宮頸部のみを広い範囲で切除することで子宮を温存し, 妊孕性を失わない治療: 広汎性子宮頸部摘出術が可能になってきた。しかし, いまだに実験的な治療であり, 予後や実際の妊娠率など解決すべき課題は多い。

他病院での導入状況: 東海地方の他病院では導入されていない。

国内的評価: 1994 年 Dargent らによって, 世界初の Radical vaginal trachelectomy が報告された。現在までに 500 例以上の報告があり, その 90%以上は Radical vaginal trachelectomy である。日本での本格的導入よりまだ 5 年程度しか経過しておらず, 実施施設もごく僅かである。

国際的評価: 世界的にも実施例は数百例程度である。

5) 診療名 : 婦人科診療における内視鏡検査, 手術の適応増加

診療内容: 良性疾患 (卵巣腫瘍, 子宮筋腫, 子宮内膜症, 子宮奇形, 子宮外妊娠, 卵巣出血等) に対する腫瘍摘出術, 子宮全摘術, 癒着剥離術等の適応を広げる事。悪性疾患特に子宮体癌におけるリンパ節郭清を内視鏡的に行う事で患者に対する非常に大きな侵襲軽減が期待でき, 高度先進医療申請のための準備中である。【具体例】: 腹腔鏡下手術, 子宮鏡手術, 子宮鏡検査

他病院での導入状況: 国内の僅かな施設で実施中。

国内的評価: 一部の施設では既に施行されているが, 婦人科ガイドラインでは未だ標準療法とされておらず, また保険適応でもない。開始するには十分な準備とスタッフの修練を必要とする。

国際的評価: 諸外国ではすでに臨床応用されており, 十分な臨床効と侵襲の低さで, 国際的な位置付けは高い。

4. 専門医・認定医・指導医

森重健一郎: 日本産科婦人科学会専門医, 日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医, 日本がん治療機構がん治療認定医, 日本内分泌学会認定内分泌代謝専門医・指導医, 母体保護法指定医, 日本周産期・新生児医学会暫定指導医

伊藤直樹: 日本産科婦人科学会専門医, 日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍専門医, 日本がん治療機構がん治療認定医, 母体保護法指定医

古井辰郎: 日本産科婦人科学会専門医, 日本婦人科腫瘍学会婦人科腫瘍暫定指導医, 日本がん治療機構がん治療暫定教育医, 日本生殖医学会生殖医療指導医, マンモグラフィー検診精度管理中央委員会検診マンモグラフィー読影認定医, 母体保護法指定医

豊木 廣: 日本産科婦人科学会専門医, 母体保護法指定医

早崎 容: 日本産科婦人科学会専門医, 母体保護法指定医

矢野竜一郎: 日本産科婦人科学会専門医, 母体保護法指定医

小倉寛則: 日本産科婦人科学会専門医

川島英理子: 日本産科婦人科学会専門医, 母体保護法指定医

杉山三知代: 日本産科婦人科学会専門医, 母体保護法指定医

岩砂智丈: 日本産科婦人科学会専門医

牧野 弘: 日本産科婦人科学会専門医

操 暁子: 日本産科婦人科学会専門医

水野智子: 日本産科婦人科学会専門医, 母体保護法指定医

寺澤恵子: 日本産科婦人科学会専門医

5. 自己評価

評価

メンバーの入れ替わりの時期であり, まずは体制の整備の段階にあるのが現状であるが, 臨床部門にお

いては、必要且つ十分なレベルを維持している。

現状の問題点及びその対応策

産婦人科医不足は全国な問題であるが、岐阜県においては特に産婦人科医の不足が顕著と報道されている。研修医に対するアピールも積極的に行っているが、大学および関連病院を含めた必要数は充足されていない。今後は、まずは魅力的な医局であること、研修医からみた評価の高い指導体制であることが必要。その為には、魅力ある診療内容や臨床研究の環境やテーマが必要である。卒前・卒後教育への情熱と新入医局員の数は比例するため、教育は関連病院スタッフを含めた教室員全員で行いたい。このような体制を確立し、出向スタッフや同門会メンバーが実地臨床で困難に直面した時に頼りとなり信頼されるようにしたい。

今後の展望

新任主任教授も着任し、今まで残念ながら施行されていなかった分野にも進出するようになって来た。現状では、総合病院では標準的な医療レベルとされる腹腔鏡がここ 10 年以上行われていなかったが、本年度より積極的に行われるようになり、卵巣腫瘍の茎捻転や子宮外妊娠等の緊急手術も対応可能となった。今後は診療開発にも記載したように、悪性腫瘍に対する適応も拡大していく予定である。この地方では行われていない広汎性子宮頸部摘出術も既に数例の実績があり、その他の分野も含め教室の守備範囲も新たな領域へ拡大していく方針である。

当施設のみでは人員や設備に限りがあり、急速に新知見が明らかになる産科婦人科疾患すべてに対応することは困難である。可能な限り他科や地域の他医療施設との連携を保ち、加速度的に進歩する医学情報を効率的に診療に取り入れるとともに、最先端医療を開発していきたい。そのために、関連病院とは専門性の高い分野の棲み分けを図りながら、緊密に専門領域を補完する体制を築き、卒前・卒後教育の段階からローテーションや人的交流を通して教室の充実を図りたい。

医育機関ということを念頭に置き、優れた医療人を育成する教育、高度・先進的な医療を開発できる研究、そしてその成果を還元し実施する診療のシステムを目指したい。この体制を通して、中核医療施設として地域の医学・医療の発展に寄与したい。

(9) 整形外科

1. 診療の概要

当科病棟は40床（～44床）を持ち、担当医と指導医（専門医）の2人の主治医体制で診療に当たっている。グループは関節、脊椎、腫瘍、手の4つの班に分けられ、各分野とも臨床・研究・教育にバランスを保ちつつ治療に当たっている。紹介先である近隣の関連病院や他府県など遠方の病院との連携を大切にきめ細かい治療をめざしている。専門領域（subspeciality）としては、小児整形外科、腫瘍外科、リウマチ関節外科、脊椎脊髄外科、末梢神経外科、手の外科、マイクロサージャリー、形成外科、外傷外科、スポーツ整形外科、骨粗鬆症、リハビリテーションなどがある。毎朝7時半からのミーティングにより手術患者、術後患者、検査入院患者の検討、各専門部会の検討会、読書会などを行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本整形外科学会研修施設
- 2) 日本リハビリテーション医学会研修施設
- 3) 日本リウマチ学会教育施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：後縦靭帯骨化症に対する頸椎前方除圧固定術

診療内容：椎体亜全摘により骨化巣を摘出する術式（根治術）である。

他病院での導入状況：当科が東海地区では最も多く施行している。

国内的評価：全国的には、手技が容易な後方除圧手術（間接除圧）が主流である。直接除圧である前方除圧固定は熟練した手技が必要で全国的には数病院が積極的に行っている。

国際的評価：米国では、この前方除圧固定の歴史は長く、現在も盛んに行われている。

- 2) 診療名：腰部脊柱管狭窄症、脊椎すべり症に対する頸椎間孔腰椎椎体間固定術（TLIF）

診療内容：脊椎固定術には様々な術式がある。このTLIFという新しい術式は、高い癒合率、低い合併症が特徴である。

他病院での導入状況：東海地区では当院が2001年に最初に行い最も多く施行している。

国内的評価：TLIFのなかでも当科で行っているC-TLIFという固定術は、手技が簡便でその良好な成績を学会で報告し注目されている。

国際的評価：米国ではTLIFが主流になりつつある。

- 3) 診療名：骨粗鬆症性椎体圧潰に対する脊椎短縮術

診療内容：骨粗鬆症患者は増加の一途をたどっている。脊椎骨折は代表的合併症であり、まれに骨折が治癒せず、麻痺や持続する疼痛のために手術が必要となる。前方から潰れた脊椎を再建する方法が以前はとられていたが、高齢者には侵襲が大きく合併症も少なくなかった。後方から残存する脊椎を切除することにより短縮し、後弯した脊椎を正常な形にして固定する方法である。

他病院での導入状況：前方再建術に比較して、合併症の少ない術式として多くの脊椎専門施設で行われている。

国内的評価：ペディクルスクリューを使用する脊椎短縮術が一般的であるが当科では使用していない。ペディクルスクリューは骨粗鬆症患者においては安全な固定法とは言えず、当科では独自の的方法として椎弓にワイヤーもしくはテープを通し、脊椎を短縮固定している。最近では手技も単純化し手術時間や出血量も少なく、長期にわたり再手術率が極めて少ない方法である。

国際的評価：国際的には、椎体形成術などまだまだ議論の多い分野であるが、高齢者の最も多い日本からこの方法を広めていくべきである。

- 4) 診療名：骨感染症に対する抗生剤含侵ハイドロキシアパタイト療法

診療内容：当科で考案した独自の的方法である。人工骨としてのハイドロキシアパタイトに抗生剤をしみこませて、感染部位に設置し感染症を治す手技である。

他病院での導入状況：当科以外ではほとんど行われていない。

国内的評価：骨感染症に対しては、持続洗浄療法が一般的であるがベッドに釘付けとなり患者への負担は大きい。この方法では移動が自由であり、その有効性も遜色なく注目されている。

国際的評価：骨感染症に対しては、やはり持続洗浄療法が一般的であり、この方法を広めていく必要がある。

- 5) 診療名 : 足部変形に対する距骨垂全摘術
 診療内容: 当科で考案した独自の方法である。距骨を部分切除し短縮し変形を矯正する術式である。
 他病院での導入状況: 当科以外ではほとんど行われていない。
 国内的評価: 足部変形に対する矯正術の1つとして簡便な方法であり注目されている。
 国際的評価: 足部変形に対する矯正術式は歴史的に極めて多い術式が考案されてきた。この方法は、今後さらに症例を重ね広めていく必要がある。
- 6) 診療名 : 悪性骨軟部腫瘍に対する持続動脈内注入化学療法
 診療内容: 腫瘍を栄養する動脈にカテーテルを挿入し、選択的かつ全身的に抗癌剤を投与する方法である。
 他病院での導入状況: 当科で全国に先がけ導入した方法である。
 国内的評価: 抗癌剤投与の1つとして数施設で行われている。
 国際的評価: 同様に、有効な手段の1つとして認められている。
- 7) 診療名 : 骨軟部腫瘍の遺伝子解析
 診療内容: 遺伝子診断およびテーラーメイド医療の確立に向けて、骨軟部腫瘍の遺伝子解析を行っている。
 他病院での導入状況: 遺伝子診断を行っている施設は全国でも少ない。
 国内的評価: 他施設から依頼を受けることもある。
 国際的評価: 欧米の主要な癌センターでは一般化されつつある。
- 8) 診療名 : 骨軟部腫瘍に対する凍結治療
 診療内容: 骨軟部腫瘍に対し凍結治療を行っている。低侵襲な治療であり局所麻酔で行えるため、外来での処置が可能である。
 他病院での導入状況: 本治療を行っている施設は全国でも少ない。
 国内的評価: 低侵襲治療のひとつとして有用な治療方法と評価されている。
 国際的評価: 骨軟部腫瘍の凍結治療に関しては、まだまとまった報告がない。

4. 専門医・認定医・指導医

- 清水克時: 日本整形外科学会専門医, 日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医, 日本脊椎脊髄病学会指導医, 日本リウマチ学会専門医
- 西本 裕: 日本整形外科学会専門医, 日本体育協会公認スポーツドクター, 日本障害者スポーツ協会公認障害者スポーツ医
- 佐藤正夫: 日本整形外科学会専門医, 日本整形外科学会認定リウマチ医, 日本整形外科学会認定スポーツ医, 日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医, 日本整形外科学会認定リハビリ医, 日本リウマチ財団登録医, 日本リウマチ学会専門医, 日本リウマチ学会指導医, 日本体育協会公認スポーツドクター, 日本リハビリテーション医学会臨床認定医・専門医, ICD (infection control doctor), 日本医師会健康スポーツドクター
- 大野貴敏: 日本整形外科学会専門医, 病理解剖認定医, 日本整形外科学会認定リウマチ医, 日本リウマチ財団登録医, 日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医, 日本リウマチ学会専門医
- 伊藤芳毅: 日本整形外科学会専門医, 日本リウマチ学会専門医, 日本整形外科学会認定リウマチ医, 日本整形外科学会認定スポーツ医
- 宮本 敬: 日本整形外科学会専門医, 日本脊椎脊髄病学会認定脊椎脊髄外科指導医, 日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医
- 青木隆明: 日本整形外科学会専門医, 日本リハビリテーション学会臨床認定医・専門医・指導医, 日本体育協会公認スポーツドクター, 日本整形外科学会認定スポーツドクター, 日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医, 障害者スポーツ認定医, ドーピングコントロールメディカルオフィサー, 日本医師会健康スポーツ医
- 大島康司: 日本整形外科学会専門医, 日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医, 日本整形外科学会認定運動器リハビリテーション医
- 松本 和: 日本整形外科学会専門医, 日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医, 日本整形外科学会認定リウマチ医

5. 自己評価

評価

少ないスタッフ数で長時間にわたる外来業務, 多くの手術症例に対応している。研修医がいない現状で

は中堅医師に多くの負担がかかっているが、講義、ポリクリなどの教育、また学会発表・論文・講演など積極的に行っている。

現状の問題点及びその対応策

高齢化社会にともない整形外科の必要性は高く、どの関連病院においても外来、手術件数は増加の一途である。大学での手術件数を増やすことは、看護スタッフ数の問題で容易ではないが、徐々に改善している。大学に紹介されてくる患者さんの多くが、半年以上の長期の待機を余儀なくさせられている。現在、近隣の関連病院と協力し対応しているが、関連病院自体の手術件数も増え、スタッフ数から限界に近づいている。大学での手術件数の増加とともに、関連病院とのより良好な提携を行っていく必要がある。

今後の展望

全国的にみると岐阜県はまだまだ整形外科医数が 2-3 割少なく、需要を満たしていない。数年前までは多くの入局者に支えられ、関連病院の医師数を増やすことができ、増加する手術件数になんとか対応してきた。しかし新しい卒後研修制度が始まり、入局は激減し、関連病院の医師数も減少している。したがって、大学を中心とした関連病院ネットワークの維持が困難となっており、そのネットワークの良好な機能のためには多くの新整形外科医の確保が必須である。

(10) 脳神経外科

1. 診療の概要

脳神経外科では脳卒中（くも膜下出血，脳出血，脳梗塞）や重症頭部外傷などの中枢神経救急疾患，脳腫瘍，顔面けいれんや三叉神経痛，不随意運動などの機能的脳疾患，中枢神経系奇形，脊髄脊椎疾患の治療をはじめとして，外来診療では頭痛，めまい，しびれ，意識消失発作などの診断治療，近年増加しつつある脳梗塞の危険因子管理や二次予防，てんかんに対する薬物治療などを行なっている。

2. 教育施設

- 1) 日本脳神経外科学会（基幹施設）
- 2) 日本脳神経血管内治療学会（研修施設）
- 3) 日本脳卒中学会（研修教育病院）

3. 診療開発

- 1) 診療名：蛍光色素フルオレサイトを用いた悪性脳腫瘍摘出術
診療内容：悪性脳腫瘍と正常脳との境界を術中に視覚的にわかりやすくするため蛍光色素であるフルオレサイトを術中に静脈内投与し，腫瘍の摘出率を上げる。
他病院での導入状況：同法を用いた悪性脳腫瘍の摘出術は東海地方では最も経験豊富である。
国内的評価：その他の蛍光色素と比較し，入手が用意で汎用されやすく，また術中にリアルタイムに蛍光色素を術野で確認しやすいなどの利点があり，また重篤な副作用がほとんどない。
国際的評価：当施設独自の投与量によって，より蛍光色素の認識度が高まり，腫瘍の摘出率が高まったことを国際誌（*Journal of Neurosurgery* 2003;99:597-603）に報告している。
- 2) 診療名：メチオニン PET を用いた定位放射線治療における線量計画
診療内容：脳腫瘍の広がりや鋭敏に捉えるメチオニン PET（中部療護センター）を定位放射線治療前に行っておき，その DICOM データを定位放射線治療の線量計画の際にコンピューターに取り込んで腫瘍への効率的な照射範囲の決定に役立てている。
他病院での導入状況：メチオニン PET を用いた線量計画は東京医科歯科大学でも行われているが，メチオニン PET の DICOM 画像を取り込む手法は客観的で正確性が高く当院だけの取り組みである。
国内的評価：腫瘍の広がりや鋭敏に捉えるメチオニン PET は注目度が高く，更にそれを定位放射線治療に応用する取り組みは独自性が高い。
国際的評価：同法を用いた治療や成績が近年，国際誌に新たな手法として報告されつつある。

4. 専門医・認定医・指導医

岩間 亨：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医
吉村紳一：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医，脳神経血管内治療学会指導医
矢野大仁：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医，日本がん治療認定医機構暫定認定医
大江直行：脳神経外科学会専門医，脳卒中学会専門医，日本神経内視鏡学会技術認定医，日本がん治療認定医機構暫定認定医
副田明男：脳神経外科学会専門医
中山則之：脳神経外科学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医
石黒光紀：脳神経外科学会専門医
榎本由貴子：脳神経外科学会専門医，脳神経血管内治療学会専門医

5. 自己評価

評価

脳卒中や重傷頭部外傷などの救急患者を積極的に受け入れると共に，一方では慢性脳虚血性疾患や脳腫瘍患者の紹介患者数も増加し，各プロトコールに則った治療が軌道に乗っている。

現状の問題点及びその対応策

本態性振戦やパーキンソン病などに対する機能神経外科やてんかんの外科，頸椎症などに対する脊椎

外科，小児奇形に対する頭蓋形成術などは当科では治療経験が少ない。しかし，神経内科と共同して患者の選定を行えば，特に本態性振戦やパーキンソン病に対する外科治療数は増える見込みが高い。当科では機能神経外科の一環として定位脳手術を行うためレクセルフレームの購入申請を行い受諾された。

今後の展望

来年度以降，定位脳手術を軌道に乗せ，機能神経外科領域を開拓していきたいと考えている。脳血管障害や頭部外傷，脳腫瘍などの疾患もこれまで以上に症例数の増加を見込むと，手術枠の限界や当科の人員配置の問題もあり調整が必要と思われる。

(11) 眼科

1. 診療の概要

山本哲也教授の専門領域である緑内障をメインに据え、診療活動を行っている。東海地区では現在のところ緑内障を専門とする病院は限りなく少ないため、岐阜県内は勿論であるが、愛知県、三重県、静岡県に居住されている患者さまの来院も数多い。また、緑内障診療のみではなく、水晶体疾患、網膜硝子体疾患、角膜疾患、小児眼疾患などあらゆる眼疾患の患者さまに携わっている。

外来診療は、初診患者は週 3 日（月、火、木曜日）、再診患者は週 4 日（月、火、木、金曜日）に行っている。また、専門外来は週 2 回（木、金曜日）の緑内障外来をはじめ、網膜硝子体外来（月、火曜日）、内眼炎外来（火、木曜日）、腫瘍形成外来（火曜日）、コンタクト外来（金曜日）など、各医師が有する専門特性を生かして配置されており、高度な知識の下に診療を行っている。

一方入院診療は、19 床の病床数で行っており、手術する疾患としては緑内障、網膜硝子体（網膜剥離、糖尿病網膜症、黄斑前膜など）、白内障が多くを占める。網膜剥離、眼外傷をはじめとした疾患に対する緊急手術が多いのも大学病院の特性の一つに挙げられる。宿直は 365 日 24 時間体制での 2 次救急診療に対応しており、岐阜県内の眼科救急の要となっている。

2. 教育施設

- 1) 日本眼科学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 緑内障外来

診療内容：光干渉断層計（Optical Coherence Tomography）は、もともと網膜あるいは視神経微細構造を詳細に観察するために発展した機器である。この機器が前眼部に応用された機器が、前眼部 OCT である。この機器は、非接触型であり、従来の診断機器と比較しより簡便に施行可能であり、より詳細な前眼部構造とくに隅角構造を把握することが可能である。

他病院での導入状況：県内なし

国内的評価：本邦において多いとされる閉塞隅角緑内障は、一旦発症すると失明する危険性の高い疾患の一つである。しかしながら、その成因については未だ充分には理解されていない。この機器は、閉塞隅角緑内障の発症機序の解明、様々な治療効果の判定に極めて有用との評価は一致している。また、緑内障専門施設においては必要不可欠な検査機器である。

国際的評価：欧米（白人）においては、本邦ほど閉塞隅角緑内障の頻度は高くはない。しかしながら、最近とくに東南アジアにおいて閉塞隅角緑内障に関する研究は著明に増加している。閉塞隅角緑内障の発症機序の解明、様々な治療効果判定に有用であるとする報告は多くみられる。また様々な角膜疾患にも応用可能であり、その国際的評価は高い。

4. 専門医・認定医・指導医

山本哲也：日本眼科学会専門医・指導医
川瀬和秀：日本眼科学会専門医・指導医
望月清文：日本眼科学会専門医・指導医
澤田 明：日本眼科学会専門医・指導医
末森晋典：日本眼科学会専門医・指導医
石田恭子：日本眼科学会専門医
石澤聡子：日本眼科学会専門医
宇土一成：日本眼科学会専門医
白木育美：日本眼科学会専門医

5. 自己評価

評価

平成 16 年 6 月に病院移転と電子カルテ導入以降、外来患者総数を減少させる（必要な患者に対し、多くの時間を割く）という医局方針の下、比較的順調にこの目標は達成されつつある。したがって、診療に限って言えば大学病院としての水準は保たれている。しかしながら、教育、研究の分野では大学病院としての本来の水準には未だ達しているとはいえない。

現状の問題点及びその対応策

現在、慢性的な病院に残る医師不足により、当院でも診療、教育、研究の分野で様々な問題が生じている。眼科診療の特徴は、外来患者数の過多、自科検査の過多、網膜剥離など突発した疾患に対する緊急手術の過多ということに集約される。ほとんどの医師が、診療のウエートが多く、教育、研究の分野まで手がまわらない。したがって現在の大学病院の姿は、本来求められるはずの姿（診療、教育、研究いずれも充足しておこなっている）からはかけ離れたものに成り下がっている。

以下に問題点を列記する。

1. 病院の残る医師の絶対数の不足
2. 外来診療を手助けしてくれる視能訓練士の不足

- 1.については、勧誘活動も積極的におこなっているものの、基本的には抜本的な改革を望む。
- 2.については、大学病院での待遇が他病院と比較し圧倒的に悪く、応募が極めて寡少である。この点については病院側にその重要性につき認知するよう働きかける必要がある。

現在において早急に解決可能なものはなく、したがって外来患者さまを重傷度に応じて、収益は必然的に減少するものの、積極的に各病院あるいは診療所、開業医に振り分けていくより喫緊の対応策としてはなさそうである。

今後の展望

大学附属病院として、臨床診療機関、教育機関、医学研究機関というおおまかに 3 種の主機能を担っていく必要がある。なおかつ、全ての分野において、リーダーシップを求められる機関でもある。

近年では、病院を離れる医師が増加する一方であり、この傾向が政府主導で転換されないかぎり、大学病院としての 3 種の主機能を充足させることは並大抵のことではない。

(12) 耳鼻咽喉科

1. 診療の概要

外来の年間の延べ患者数は約 22,000 人である。新患のほぼ 50-60%が紹介患者である。一般外来とともに専門外来としてめまい外来, 耳鳴・難聴外来, 補聴器外来, 副鼻腔・アレルギー外来, 顔面神経外来, 睡眠時呼吸障害外来, 嚥下外来を設けている。

めまい外来では, 一般平衡機能検査の他に温度刺激検査, 重心動揺検査, 前庭誘発筋電位, 視標追跡検査, 視運動刺激検査, 自律神経機能検査, 前庭眼反射に対する検査を行っている。周辺地域のみならず遠隔地からも紹介・受診があり, 岐阜大学耳鼻咽喉科の中心的専門外来となっている。

耳鳴・難聴外来では, 難治性耳鳴に対して種々の治療を試みている。補聴器外来では, 高齢化社会の福祉を考慮し, 積極的に補聴器適合検査を行っている。新生児聴覚スクリーニングにおいては, 2次医療機関として, 難聴の精査を行っている。また難聴が疑われる児には ABR を行い, 難聴の早期発見に努めている。難聴が指摘された患児に対しては, 難聴幼児通園施設であるみやこ園に紹介し, 早期指導, 補聴器の早期装用を進めている。補聴器を適応できない高度難聴患者に対して人工内耳手術の適応を検討している。

副鼻腔外来では, 近年急速に発展した内視鏡下副鼻腔手術の適応の決定, 術後の定期的な経過観察ならびに内視鏡下の術後処置を行っている。解剖的に通常の手術では危険度が高い部位へのアプローチにはナビゲーションを併用し, 低侵襲な内視鏡手術が可能になっている。さらにアレルギー性鼻炎患者に対する日帰りレーザー手術を施行している。

睡眠時呼吸障害外来では, 最近話題になっている睡眠時無呼吸症候群患者に対して家庭での簡易型アプノモニターの貸し出しとその評価, また中等度・高度障害患者に対する入院での終夜睡眠ポリグラフ検査の適応を決定し, 検査後の手術適応や nasal CPAP 適応の決定, およびその経過観察を行っている。

嚥下外来では, 嚥下障害を来している患者に内視鏡検査に加えて VTR 咽頭食道透視を耳鼻咽喉科医が行い, その嚥下障害の評価をし, 治療・リハビリ方針を決定している。

入院患者は年間延べ約 13,000 人である。頭頸部悪性腫瘍患者がその半数以上を占めている。がんセンターのない岐阜県において, 頭頸部領域のがんセンター的役割を担っている。外科, 脳神経外科との協力のもとに拡大手術を積極的に行い, また機能温存を目指し再建手術を同時に行っている。耳科手術, 副鼻腔手術には内視鏡を積極的に導入し, アプローチが難しい例にはナビゲーションの併用を行っている。

形成外科診療を開始し, 頭頸部がんに対する再建のみならず, 他の領域の悪性腫瘍切除後の再建, 熱傷, 顔面骨折を含む顔面外傷, 先天異常, 皮膚腫瘍, 傷跡やケロイド, 難治性潰瘍などの治療を行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本耳鼻咽喉科学会認定研修施設
- 2) 日本気管食道科学会認定研修施設
- 3) 日本頭頸部外科学会認定頭頸部がん研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 前庭障害症例に対する Micro current vestibular galvanic stimulation 併用リハビリテーション

診療内容: 高度な平衡障害で日常生活活動に支障をきたしている前庭障害症例に MCGVS 併用めまいリハビリテーションを行うことにより, 残存した前庭神経のシナプス伝達を強化し, 平衡障害が期待できる。

国内的評価: 多系統萎縮症やパーキンソン病などの変性疾患に対し, 閾値以下の GVS を与えることで, 自律神経機能の改善, 身体活動量の亢進が報告されている。しかし, その臨床的評価や基礎的なデータは乏しく, 作用機序もいまだ不明な点が多い。現在まで, 前庭障害症例への臨床応用はない。

- 2) 診療名 : めまい平衡障害のリハビリテーション

診療内容: めまい平衡障害の ADL (日常生活動作能力) 改善のため, 薬物療法と平行して理学療法を行う。

他病院での導入状況: 当院が全国的にも初期に導入した。現在は方法に差はあるが多施設で導入されている。

国内的評価: 現在は方法論的に認められ多施設で施行されているが, 当院の長期的経験は国内で認められている。

国際的評価: 欧米ではリハビリ部門が行う一般的療法となっている。

3) 診療名 : 「画像支援ナビゲーション手術」の開発

診療内容: ナビゲーションを用いることによる, これまで手術アプローチが困難, 危険な部位にアプローチが可能とする手術支援システムを導入することで, 比較的安全な方法を開発する。
さらに外傷や炎症などによる視機能障害の緊急手術での安全な導入をはかる。

他病院での導入状況: すでに多くの大学で導入がされているが, 緊急手術などでの報告は少ない。

国内的評価: 現在は方法的に認められ多施設で施行されているが, 当科での成績を学会などで報告している。

4. 専門医・認定医・指導医

伊藤八次: 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医, 日本めまい平衡医学会専門会員, 日本気管食道科学会専門医

水田啓介: 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医, 日本めまい平衡医学会専門会員, 日本気管食道科学会専門医, 日本がん治療認定医機構がん治療認定医, 日本頭頸部外科学会頭頸部がん暫定指導医, 日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門医

青木光広: 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医, 日本めまい平衡医学会専門会員, 日本頭頸部外科学会頭頸部がん暫定指導医

加藤久和: 日本形成外科学会専門医, 日本がん治療認定医機構がん治療認定医, 日本創傷外科学会専門医, 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医, 日本形成外科学会皮膚腫瘍外科指導専門医

久世文也: 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医, 日本気管食道科学会専門医, 日本がん治療認定医機構がん治療認定医

西堀丈純: 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医

山田南星: 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医, 日本がん治療認定医機構がん治療認定医

林 寿光: 日本耳鼻咽喉科学会認定耳鼻咽喉科専門医

5. 自己評価

評価

紹介患者は増加している。外来受診患者数, 病棟稼働状況も良い。新医療の開発, 導入が十分とはいえない。

現状の問題点及びその対応策

平成 10 年度に言語聴覚士の国家資格が制度化され国家試験も施行された。定員増は期待しづらい時代ではあるが, 難聴や音声言語障害に対する専任の言語聴覚士の複数採用は国民福祉という観点からぜひとも望まれる。また, 摂食・嚥下障害に対する関心が高まっており, 生活の質の向上のためにはこの障害の改善は不可欠である。現在耳鼻咽喉科医と一部リハビリ担当医師で取り組んでいるが, 今後看護師, 言語聴覚士などとのチーム医療が求められる。

成人聾患者に対する人工内耳埋め込み術はすでに実施しており, 多数の手術経験を有しているが, 小児に対しての手術はまだ実施していない。言語訓練実施施設との協力体制の構築が必要である。

睡眠時呼吸障害はマスクミに取り上げられる機会が増え, 社会的関心事になっており, 潜在的患者数はかなり多いと見込まれる。この患者に対して耳鼻咽喉科医のみで検査に対応しているが, 夜間の検査であることから扱える患者数は十分でない。今後臨床検査技師の協力を得て病院全体での取り組みとする必要があると思われる。

主に, 副鼻腔領域の手術においては, 低侵襲の内視鏡手術を早くから導入し, 治療方法を確立させている。さらにナビゲーションの併用により, 危険な解剖的部位への到達にも内視鏡での手術を可能にしている。

がん診療においては, 患者の QOL を重視し, 機能温存, 臓器温存を可能な限り求める治療を行っている。そのためには, 今後さらに有効で, 安全な治療法の確立と再建術式の向上をはかる必要があると思われる。

今後の展望

高齢化, 少子化社会がますます加速する。高齢者への福祉として, 従来行ってきた補聴器外来の充実と高齢者の平衡維持, 転倒問題に対する平衡医学的アプローチを継続・発展させる。また, 摂食・嚥下障害の評価・治療をリハビリの重点課題の一つとして, 他科・コメディカルの協力のもとにシステム作りを実現する。

新生児聴覚スクリーニングが岐阜県行政事業としてパイロット的に始まった。スクリーニング，難聴児発見後の聴能訓練が円滑に稼働するように岐阜大学耳鼻咽喉科がシステムの指導的役割を果たす。がん拠点病院として，高度な手術治療を行うとともに，有効性の高い治療方法の確立を目指す。

(13) 皮膚科

1. 診療の概要

1) 外来：一般外来（初診，再診）の他に，レーザー治療，光線治療，乾癬，腫瘍，膠原病，アトピー，水疱症，脱毛症，フットケア，アレルギー検査の各専門外来を充実させて，各担当医が最先端の医療を提供している。中心となる担当医は原則として固定され，長期の経過観察・治療に対応している。特徴は以下のごとくである。

- ・レーザー外来では，日本レーザー学会専門医の指導のもと，色素レーザー，Q スイッチアレキサンドライトレーザー，炭酸ガスレーザー，高周波メス（サージトロン）を用いて種々の母斑治療を行っている。
- ・光線治療外来は長波長紫外線を用いた PUVA 療法あるいは中波長紫外線（ナローバンド UVB）治療を行っている。全身照射用ナローバンド UVB 装置により広範囲の皮疹に短時間で照射可能である。
- ・乾癬外来では外用療法を中心に，症状に応じて光線治療，ビタミン A 誘導体や免疫抑制剤内服，生物学的製剤治療を行っている。アフレスシス治療も積極的に導入している。
- ・腫瘍外来では，悪性黒色腫をはじめとする皮膚悪性腫瘍の診断から手術後の経過観察までを行っている。
- ・膠原病外来では，エリテマトーデス，皮膚筋炎，全身性強皮症，シェーグレン症候群など多数の症例を受け持って治療を行い，効果をあげている。特に当科では全身性強皮症と皮膚筋炎が多い点が特徴である。
- ・アトピー外来では患者個々の生活環境や治療に対する希望などを十分聞き，柔軟性をもって診療に当たっている。中等症以上のアトピー性皮膚炎に対しては，教育を兼ねた入院治療も行っている。
- ・水疱症外来では天疱瘡，類天疱瘡の治療選択に自己抗体価測定を取り入れて効果をあげている。
- ・脱毛症外来では脱毛症に対し局所免疫療法と全身療法を組み合わせる治療し多数の有効例がある。無効例ではステロイドの外用，局所注射，内服療法あるいはステロイドパルス療法を行っている。
- ・フットケア外来では糖尿病性壊疽，末梢循環不全，皮膚潰瘍や陥入爪などの症例に対し，治療とともに再発防止のためのスキンケアや生活指導を行っている。
- ・アレルギー検査外来では薬剤，金属，食物，化粧品その他のパッチテストおよびプリックテストを行っている。
- ・火曜日に外来カンファレンスとして関連病院からの紹介患者の特別診察を行い，病診連携を充実させている。
- ・平成 21 年より月 1 回木曜に近隣の皮膚科開業医および総合病院勤務皮膚科医とのカンファレンスを行い，症例の検討を行っている。

2) 入院：当科病床数は 20 床で，稼働率は平成 21 年に 70.3%と減少したが，22 年以後は平均 85%を維持している。平均在院日数は約 13.7 日で平成 17-19 年の 16.2 日と比較して短縮している。疾患は多岐にわたり，悪性黒色腫，有棘細胞癌などの皮膚悪性腫瘍患者は，多くは手術治療（広範囲切除，植皮術あるいは皮弁形成術，リンパ節郭清など）を行い，必要に応じて化学療法から終末期の緩和医療まで広く行っている。その他，手術患者は癒痕の形成手術，母斑，あるいは局所麻酔の小手術も多く行っている。アトピー性皮膚炎は治療とともに，本人あるいは家族へ生活指導，外用剤の使用法の説明などを行い，疾患および治療に対する理解を深めてもらっている。膠原病は全身性強皮症，皮膚筋炎，全身性エリテマトーデスなどを治療している。膠原病や循環障害など難治性皮膚潰瘍を伴う症例では血管拡張剤の点滴や植皮術も行っている。天疱瘡，類天疱瘡など自己免疫性水疱症は，皮膚生検・蛍光抗体法・自己抗体測定により診断し，臨床症状と抗体価の推移を考え合わせて重症度を判定しながらステロイド剤，免疫抑制剤，血漿交換療法，大量ガンマグロブリン療法などを組み合わせる治療している。その他，日常的な帯状疱疹や蜂窩織炎なども入院治療している。

2. 教育施設

1) 日本皮膚科学会認定専門医研修施設

3. 診療開発

1) 診療名：センチネルリンパ節生検

診療内容：リンパ節への微小転移の発見を目的として悪性黒色腫を中心に行っている。放射性物質および色素を用いてセンチネルリンパ節を検出し，病理検査により治療法を決定する。

他病院での導入状況：大学病院，国立がんセンターを中心に実施されている。

国内的評価：先進医療としていくつかの施設で行われ，評価を得ている。

2) 診療名 : アフェレシス治療

診療内容: 膿疱性乾癬に対する好中球・単球吸着療法

他病院での導入状況: 好中球・単球吸着療法は潰瘍性大腸炎に対して多くの施設で行われているが、皮膚疾患に対しては数施設のみで施行されている。

国内的評価: 当科は学会および論文発表をしており、国内他施設からも報告されている。

国際的評価: 当科は欧文誌および国際学会で発表しており、評価されている。

3) 診療名 : 皮膚筋炎における特異的自己抗体を基にした治療法選択

診療内容: 皮膚筋炎では種々の自己抗体が検出され、自己抗体特異的な臨床像を呈することが近年明らかになってきた。そこで自己抗体を検出することにより実際の臨床において診断および治療の選択に役立てる。

他病院での導入状況: いくつかの大学病院で行われている。

国内的評価: 当科は学会および論文発表をしており、国内他施設からも報告されている。

国際的評価: すでに当科は欧文誌および国際学会で発表しており、評価されている。

4. 専門医・認定医・指導医

清島真理子: 日本皮膚科学会専門医, 日本皮膚科学会皮膚悪性腫瘍指導専門医, 日本医真菌学会認定専門医

加納宏行: 日本皮膚科学会専門医, 日本アレルギー学会専門医

藤澤智美: 日本皮膚科学会専門医

渋谷佳直: 日本皮膚科学会専門医

山中新也: 日本皮膚科学会専門医

佐藤三佳: 日本皮膚科学会専門医

太和田知里: 日本皮膚科学会専門医

鈴木智子: 日本皮膚科学会専門医

5. 自己評価

評価

岐阜県内の皮膚科診療の中核であり、外来・入院診療とも一定レベル以上の高度な医療を提供していると評価する。外来患者数は現在も増加を続けて、当院内でも常に上位に位置している。紹介率も常に65%以上であり増加している。一般外来(初診, 再診)の他に、専門外来を充実させて、各担当医が責任をもって診療に当たれる体制を取り効果を得ている。入院の病床稼働率は平成21年に低下したが、22年以降は順調である。月1回近隣の皮膚科開業医および総合病院勤務皮膚科医とのカンファレンスを行い、症例の検討とともに意見交換を密に行っており、好評を得ている。また、研修期間が終了後、全員が皮膚科学会専門医を取得しており、有効な研修プログラムに基づいて十分に研修できていると考えられる。

現状の問題点及びその対応策

皮膚科だけでなく、内科など他科の診療所や病院勤務医との病診連携が必要である。その対策として種々の病診連携の会を通じて当科の特色を広くアピールしたい。また、平成21年12月に作製した皮膚科オリジナルホームページを活用して周知したいと考えている。種々の情報が発信できるように適宜リニューアルしていきたい。

今後の展望

既存設備および限られたスタッフであっても、国内外から評価される高い医療レベルを保てるよう改善に取り組んでいきたい。そのためには近隣の病院・診療所との病診連携をさらに推進したい。その中で質の高い皮膚科専門医を養成したいと考えている。

(14) 泌尿器科

1. 診療の概要

1) 外来診療

月曜日から金曜日まで午前是一般診療を、午後は専門外来若しくは特殊検査を行っている。専門外来としては、腎移植外来、女性泌尿器外来、前立腺腫瘍外来を開設している。女性泌尿器外来は女性が安心して受診出来るように、週1回完全予約制で女性医師による診療を行っている。特殊検査では、膀胱電子スコープ検査をいち早く取り入れており、非浸襲性の検査を心がけている。また、Pressure flow studyの施行により排尿状態の正確な評価を行い、治療法の選択に反映させている。岐阜県下での前立腺癌検診の推進の中心的な役割を果たしており、県下の主な病院との協力の下に統一した基準で2次検査の実施を積極的に行っている。さらに放射線科と連携し、外来での放射線外照射療法(3D-CRT, IMRT)を施行している。また2005年より外来化学療法室が併設されたため当科でも積極的に外来化学療法を導入している。

2) 病棟診療

泌尿器内視鏡手術の急速な進歩により、開腹手術の減少が著しい。2005年に導入したホルミウムレーザー前立腺核出術(HoLEP)は、県内唯一の導入施設で従来のゴールドスタンダードであった経尿道的前立腺切除術(TUR-P)に勝る臨床成果をあげている。女性泌尿器の分野では、女性の尿失禁のタイプ分類を正確に行うための検査を行い、原因に応じ薬物療法、行動療法、手術療法を行っている。腹圧性尿失禁に対する手術療法としては、現在スタンダードとなっているTVT手術に代わって、より侵襲の少ないTOT手術を行っている。また腹圧性尿失禁と同様に、骨盤底支持組織の脆弱化によっておこる骨盤臓器脱に対しては、2007年よりメッシュを用いたTVM手術を行い良好な成績を収めている。結石治療に関しては破砕効率の高いシーメンス社のESWLを駆使し単回治療で良好な成績を得ている。ESWL対象外の結石に対しても細径の内視鏡と破砕効率の高いホルミウムレーザーを用いることで砕石できない結石はほぼ無い状況である。1998年より副腎摘出術に腹腔鏡手術を導入して以来、内分泌内科との連携もあり県下でもトップクラスの手術件数である。さらに、良性疾患のみならず腎の悪性腫瘍に対しても腹腔鏡を用いた手術を積極的に実施し、県下でも最多の手術実績を有している。前立腺癌の治療においては、限局性前立腺癌に対して2004年から東海地区ではじめて小線源療法を導入している。

腎移植では、新しい免疫抑制剤を用いた免疫抑制療法を導入し、生着率の改善を認めており1年生着率98%、5年生着率95%を超えている。これに伴い生体腎移植の例数が増加し、年間20例以上の腎移植を行っており、これは全国国立大学病院の中でもトップクラスの症例数である。

関連施設と共同して尿路生殖器癌の治療方針を策定し、いくつかの分野でclinical studyを実施中である。

2. 教育施設

- 1) 日本泌尿器科学会専門医教育施設
- 2) 日本透析医学会教育認定施設
- 3) 日本内分泌外科学会内分泌・甲状腺外科専門医制度認定施設

3. 診療開発

1) 診療名 : 外来における膀胱鏡検査(膀胱尿道ファイバースコープ)の苦痛の軽減

診療内容: 泌尿器科独特の外来検査に膀胱鏡検査があり、ほぼすべて軟性鏡で行われている。現在の膀胱鏡はすでに古い機種でいずれ更新の必要性があるが、尿道が狭い症例などは、外来検査で痛みを伴う。またほとんどが観察のみの症例であり、より細い内視鏡であれば苦痛を軽減できる。

他病院での導入状況: 岐阜県下でも外来で使用している施設は無い。

国内的評価: 本来尿管鏡用ではあるが、観察には充分で無麻酔でも苦痛も導尿程度。

国際的評価: 痛みを伴う検査は外来では施行していないと予測され不明。

2) 診療名 : 腎臓移植における移植コーディネーターの設置

診療内容: 腎移植の術前から術後のフォローアップにおいてきめ細やかな対応を行い、医療レベルの向上を図るため、専門外来においてレシピエントコーディネーターを配置する。また、臓器移植法改正後の臓器提供増加に対応できるように院内体制の構築をはかるため専従ドナーコーディネーターとしての業務を行う。

他病院での導入状況: 全国の臓器移植施設はレシピエントコーディネーターの設置や移植医療支援室といった名称の院内組織を設置し、コーディネーター認定制度に向けて全国レベルでの研修会なども定期的に開催され、全国的に移植施設でのコーディネーターの設置は進んでき

ている。

国内的評価：全国的に見ても国立大学病院の中で当施設の腎移植症例はトップクラスの実績がある。また腎移植の成績においても同様であるが、コーディネーター設置により更に医療の質を向上させることにより、移植施設としての評価が高まることが予測される（他県からの患者も増えると思われる）。またドナーコーディネーター業務により潜在的ドナーの発掘により臓器提供数も増えることが予測される。

国際的評価：国際的には日本は移植件数が少なく、国際的評価に関しては期待できず。海外ではどの移植施設でもコーディネーターは設置されている。

4. 専門医・認定医・指導医

出口 隆：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本がん治療認定医機構暫定教育医，日本性感染症学会認定医

仲野正博：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本泌尿器科学会/日本 Endourology・ESWL 学会腹腔鏡技術認定医，日本内視鏡外科学会技術認定[泌尿器腹腔鏡]，日本がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医

伊藤慎一：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本透析医学会専門医・指導医，日本臨床腎移植学会腎移植認定医，日本がん治療認定医機構暫定教育医

横井繁明：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本泌尿器科学会/日本 Endourology・ESWL 学会腹腔鏡技術認定医，日本内視鏡外科学会技術認定[泌尿器腹腔鏡]，日本がん治療認定医機構がん治療認定医・暫定教育医，日本内分泌外科学会内分泌・甲状腺外科専門医

安田 満：日本泌尿器科学会専門医・指導医，ICD

土屋朋大：日本泌尿器科学会専門医・指導医，日本透析医学会専門医，日本泌尿器科学会/日本 Endourology・ESWL 学会腹腔鏡技術認定医，日本内視鏡外科学会技術認定[泌尿器腹腔鏡]，日本臨床腎移植学会腎移植認定医

清家健作：日本泌尿器科学会専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医

菅原 崇：日本泌尿器科学会専門医

山田佳輝：日本泌尿器科学会専門医，日本透析医学会専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医

中根慶太：日本泌尿器科学会専門医，日本泌尿器科学会/日本 Endourology・ESWL 学会腹腔鏡技術認定医，日本内視鏡外科学会技術認定[泌尿器腹腔鏡]，日本がん治療認定医機構がん治療認定医

加藤 卓：日本泌尿器科学会専門医

5. 自己評価

評価

先進的な診断法や治療法を積極的に導入して大学病院における泌尿器科としての役割を果たしている。特に、腹腔鏡下手術，前立腺癌の小線源療法，前立腺肥大症に対する HoLEP，腎移植に関しては地域医療をリードしている。岐阜県，愛知県，静岡県，滋賀県に渡る関連病院をまとめ，泌尿器科医療の質の向上と均てん化を行い，さらに，大規模な臨床研究を計画・施行している。若手泌尿器科医の育成に力を入れている。

現状の問題点及びその対応策

人員不足のため，スタッフのオーバーワークが心配される。同様の理由で，専門外来の拡充が困難な状況である。関連施設と異なり，出席すべき会合や提出書類が多い。また，以前から医師への臨床・教育以外の業務負担が多かったが，最近特にこの増加を感じる。以上の対応策の一つとして，優秀なプロフェッショナルのクラークの病棟配置が望まれる。

今後の展望

泌尿器科では今後ますます内視鏡下手術の増加が予測される。当科でも，泌尿器科悪性腫瘍に対して内視鏡下手術が導入されており，その適応拡大を目指している。内視鏡手術を関連病院へも普及させるための教育システムの整備を勧めており，今後は他大学とも交流することにより推し進めていく予定である。さらにロボット支援による根治的前立腺全摘除術や腎部分切除術の有用性が国内外で報告されており，当施設への早期導入が望まれる。

より専門的な知識および技術を要する疾患に対しては，専門外来を設けて最新の診断・治療技術を提供できる体制を構築しており，今後はその治療内容の充実を行いたい。

(15) 精神神経科

1. 診療の概要

精神医療に対する関心が高まり、特にうつ病や発達障害に対する知識が、広く社会一般に普及してきた。それに伴い、従来は精神病院で対処されることの多かった重症患者や身体合併症患者、児童患者が、当科のような総合病院精神科を訪れるようになってきている。当科は従来、疾患の性質を考慮して長期の入院治療を引き受けてきたが、昨今の需要の高まりを受け、入院期間の短縮と後方病院への連携を推し進めてきた。

2. 教育施設

- 1) 日本精神神経学会専門医研修施設
- 2) 日本総合病院精神医学界専門医研修施設
- 3) 日本老年精神医学会認定施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

塩入俊樹：日本精神神経学会専門医・指導医，日本臨床精神神経薬理学会専門医・指導医，日本総合病院精神医学会専門医・指導医，厚生労働省精神保健指定医

高岡 健：日本精神神経学会専門医・指導医，日本児童青年精神医学会認定医，日本総合病院精神医学会専門医・指導医，厚生労働省精神保健指定医

植木啓文：日本精神神経学会専門医・指導医，プライマリケア学会認定医，日本総合病院精神医学会専門医・指導医，日本老年精神医学会専門医，日本医師会認定産業医，厚生労働省精神保健指定医

深尾 琢：日本精神神経学会専門医・指導医，厚生労働省精神保健指定医

天野雄平：日本精神神経学会専門医・指導医，厚生労働省精神保健指定医

松岡 司：厚生労働省精神保健指定医

額額慎也：厚生労働省精神保健指定医

桜庭 泰：厚生労働省精神保健指定医

5. 自己評価

評価

臨床では、身体合併症患者を含む他院からの紹介患者がここ数年で急増し、電気痙攣療法は年間でのべ200件を超え、病床利用率は90%前後まで増加した。平成23年度には平均在院日数が50日を切ったことで、16対1だった看護基準を13対1に引き上げることができた。これまで一貫して赤字であった月別の診療科利益についても、平成23年9月時点で黒字化に成功している。

また、前期研修医の精神科研修枠を増やし、岐阜県立総合医療センターや羽島市民病院からも新たに受け入れることで臨床研修制度への貢献を高めている。後期研修医に対しても、レクチャーや輪読会、回診指導など体制をつくり、研修の充実を図ってきている。

現状の問題点及びその対応策

毎年、数名の後期研修医の入局者を得ることが、精神科地域医療の安定にとって不可欠である。しかしながら、2009年と2011年がいずれも1人ずつの入局であり、十分とは言えない。その大きな要因として、勉学への意識の高い若手医師の都市部流出があり、当科の研究面でもアピールが必要と考えられる。

今後の展望

精神医療に対する需要は、今後ますます大きくなっていくものと思われる。岐阜県内の需要に答えるべく、当科の後期研修医の育成システムの更なる充実が不可欠である。彼らのキャリアアップの重要な柱として、研究チームの立ち上げを急いでいきたい。

(16) 小児科

1. 診療の概要

小児の全分野にわたる専門医療と小児医療一般を担当している。また3次, 2次はもちろんのこと, 1次の救急医療も行っており, 地域医療へも大いに貢献している。外来診療では小児科全体の外来患者数も年々増加して年間16,000人を超えている。一方, 入院患者数も年間1,000人を超えている。365日24時間患者を積極的に受け入れている。その領域は, 小児科全般で, 一般として総合診療的要素をもつ一方で, 極めて高い専門性要素をもつ。すなわちそれらは, 出生前小児科学, 小児の成長発達, アレルギー, 免疫, 膠原病, 代謝, 内分泌, 神経, 心身症, 循環器, 呼吸器, 腎, 肝消化器, 血液腫瘍, 感染, 新生児, 言語発達, 遺伝相談など全領域に及ぶ。また, 平成24年4月よりNICUが開設される予定で, 現在, NICU設置準備室が開設され, 専任医師(小児系)7名〔准教授1, 助教2, 医員4〕をはじめとし, 看護師, 関連部門との協力体制を確立しつつある。

さらに以下のように, 高度な先進医療を行っている。

○アレルギー・呼吸器

アトピー性皮膚炎・気管支喘息・じんま疹・食物アレルギーなどアレルギー全般。世界的なアトピー遺伝子の解明を行っており, それにもとづく遺伝子診断および予知, 予防とオーダーメイド治療を行っている。食物アレルギーでは, 世界的なレベルの高い病態解析から非即時型反応の概念を打ち出し, 抗原特異的リンパ球幼若化反応およびサイトカイン産生, 食物負荷試験などを診療に取り入れ, 過度な除去食療法を避けるように努めている。経口免疫寛容誘導療法を進めている。気管支喘息では, アレルギー, 肺機能, アラキドン酸代謝産物の解析により, 病態に応じた治療の選択を行っている。(オーダーメイド治療・予防。)“気管支喘息のテーラーメイド治療管理法のための手引き”を作成した。重症アトピー性皮膚炎・喘息患者では, 簡易クリーン装置を用いた治療で著明な改善を得ている。ハイリスク児を対象とした予防接種も行っている。

○免疫および感染

感染症全般の診断・治療を行っている。かぜや感染症にかかりやすい児, 原発性免疫不全症, 自己免疫疾患(膠原病), 若年性関節リウマチなどの診断と治療を行っている。無ガンマグロブリン血症に対して定期的に補充療法, また, 免疫不全症に対して骨髄移植や臍帯血移植を行い成果をあげている。先天性免疫不全症の各病型の病因遺伝子解明と遺伝子診断と治療を精力的に行っている。特に, Ataxia-telangiectasia, Bloom症候群に対し効果的な診断・管理を行っている。世界に先駆けて明らかにしたIgG2欠損症の病因となる遺伝子異常も遺伝子診断に応用されている。近年, 明らかにされてきた自己炎症症候群や自然免疫系の異常についても解析と治療開発をすすめている。

○神経・筋疾患

言語, 運動発達の遅れから急性, 慢性の神経筋疾患, てんかん患者に至るまでMRI・MRS・SPECTなどの最新画像装置や電気生理, ビデオ脳波同時記録装置さらには遺伝子解析等を用いて診断・治療を行っている。

○先天代謝異常症

各種先天代謝異常症の診断と治療を幅広く行っている。特にペルオキシソーム病, リソゾーム病, 有機酸代謝異常症については国内でも有数のスクリーニング・診断・研究センターとして機能を果たしており, (高度)先進医療(培養細胞による先天代謝異常診断)も実施していた(現在改めて先進医療として登録申請準備中)。治療として酵素補充療法や骨髄移植なども行っている。

○遺伝相談外来

以前より代謝異常・先天性免疫不全症, 染色体異常などの診断と遺伝相談を行ってきたが, 近年の遺伝子医療の進歩に対応し, 患者さんへの正確な情報伝達とカウンセリングを目的として, 生まれつきの病気だけでなく, 成人してから発病する遺伝病についても対応している。お子さんのこと, ご自分やご家族のことで, 遺伝について詳しく知りたい, 悩みを相談したい, という方のご相談に応じている。平成20年度から岐阜大学医学部附属病院が全国遺伝子医療部門連絡会議の正式会員となり, 当院ではまだ部門ではないが, 全国の遺伝子医療部門との連絡交流をもつことになった(“部門”代表者として近藤直実, 深尾敏幸で登録)。

○心身症

児童の心理的背景をもつ身体症状や行動上の問題, 乳幼児の育児に関する心理的な問題について, 本人や家族に対する相談を行っている。

○血液・腫瘍

白血病，悪性リンパ腫，神経芽細胞腫をはじめとする固形腫瘍等の悪性疾患の診断治療，また貧血，出血性疾患，溶血性尿毒症症候群など血液疾患全般の診断治療も行っている。疾患に応じて化学療法その他に骨髄移植も行っている。

○循環器

学校検診の精査，先天性心疾患，後天性心疾患，不整脈，川崎病の心臓合併症など循環器疾患全般にわたり幅広く診療している。検査はドプラー心エコー，運動負荷心電図等を行っている。心疾患児の学校生活管理について，ホルター心電図や運動負荷心電図検査等をもとに適切な運動処方を行っている。

○腎臓

学校検尿等にて要精密検査となったお子さんを含め，各種腎疾患の治療・生活指導を行っている。

○新生児

病的新生児の入院管理と新生児期に入院を必要とされた赤ちゃんを主として，その後の発達について定期検診や指導を行っている。

○内分泌

低身長症・思春期早発症，糖尿病，甲状腺機能異常など各種内分泌異常の診断・治療を行っている。

○肝臓

黄疸が長引く乳児，種々のウィルス性肝炎の治療，肝疾患の診断と治療を行っている。肝炎ウィルスの母子感染の予防と治療も行っている。

○消化器

X線造影，小児大腸内視鏡を用いた消化器疾患の検査・治療を行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本小児科学会専門医認定施設
- 2) 日本アレルギー学会認定施設
- 3) 日本人類遺伝学会認定施設
- 4) 日本小児神経学会認定施設

3. 診療開発

1) 診療名 : アレルギーのテーラーメイド治療

診療内容：アレルギー反応の病態の詳細が相当明らかになり，抗原（アレルゲン）の生体への侵入から症状発現に至る病態は免疫学的ならびに分子遺伝学的に解明されてきた。そこで，個人個人のアレルギー疾患のバックグラウンドを迅速かつ簡便に明らかにすることで，個々に応じた治療法を選択することができ，治療法の選択が可能となる。具体的には，アトピー性皮膚炎に対するクリーンルームの活用，LST の臨床応用，薬剤のテーラーメイド治療，食物アレルギーの画期的な免疫寛容現象の応用などである。

他病院での導入状況：当院にて開発した独自のシステムであり，他病院では導入されていない。

国内的評価：遺伝子解析に関しては，インベーターアッセイ法を利用することで，明らかになった複数の遺伝子異常を組み合わせ，パネル化し迅速に測定することができるようにセッティングした（特許）。これにより個々のアレルギー疾患の病因病態に応じた治療法の選択が可能となる。また，発症前の場合は，環境因子への十分な対応をはかることにより発症予防にも大いに役立つと考える。

国際的評価：アレルギーの病態解析より，サイトカインの産生と反応性の異常が存在することを明らかにしてきた（Clin Exp Allergy, 2000）。さらに，サイトカインのシグナルに関わる遺伝子を解析し，IgE 産生の抑制系の中で，IL-12 シグナリング中の遺伝子変異の解析をすすめた結果，いくつかの候補遺伝子の同定に成功している（Biochem Biophys Res Commun, 1999, J Allergy Clin Immunol, 2002, Int J Mol Med, 2003, 2010, 2011 他）。

2) 診療名 : 免疫基礎研究に基づく食物アレルギー対策食品の画期的創成

診療内容：食物アレルギー患者を的確に診断し，抗原エピトープを明らかにする。さらに，今までは除去食療法しかなかった食物アレルギーに対して，あらたに抗原エピトープを修飾し，積極的に免疫寛容を誘導させ“食べて治す”画期的アレルギー対策食品の開発をおこない，食物アレルギーを予防治療する。

他病院での導入状況：当院にて牛乳アレルギーの抗原エピトープを明らかにしており，牛乳，大豆食品の開発も当院独自のもので，他病院ではおこなわれていない。

国内的評価：この診療開発は生物系産業創出のための異分野研究支援事業に選定され、ピーンスタークスノー株式会社などと共同でアレルギー対策食品の開発を進めている。

国際的評価：世界で初めて牛乳の主要アレルゲンであるβ-ラクトグロブリンの抗原エピトープを明らかにした。食物アレルギー患者の抗原エピトープ、免疫学的解析について数多く報告している (Inoue R, et al. Clin Exp Allergy 31: 1126-1134, 2001; Sakaguchi H, et al. Clin Exp Allergy 32: 762-770, 2002; Suzuki K, et al. Clin Exp Allergy 32: 1223-1230, 2002; Morita H, et al. Allergy 66:985-986, 2011; Morita H, et al. Int J Mol Med 29:153-158, 2011)。

3) 診療名：先天性免疫不全症候群の遺伝子診断

診療内容：Ataxia-telangiectasia および Bloom 症候群、選択的免疫グロブリン欠乏症、自然免疫不全症、自己炎症性疾患などの先天性免疫不全症候群の疑いのある児について、その臨床像、検査所見から疑われる原因遺伝子について遺伝子解析を行い、診断を確定する。

他病院での導入状況：現在日本で Ataxia-telangiectasia および Bloom 症候群の遺伝子診断を行なっている施設は少ない。

国内的・国際的評価：本研究は過去 10 年間にわたり、日本各地より依頼を受け研究レベルで解析を行ってきたものであり、その方法や遺伝子変異情報については十分な蓄積がある。この遺伝子解析については過去 Fukao T, et al, Hum Mutat (Suppl 1):S223-225, 1998; Fukao T, et al, Hum Mutat 12:338-343, 1998; Kaneko H, et al, Leukemia Lymphoma 27:539-542, 1996; Kaneko H, et al, Int J Mol Med 14:439-442, 2004; Ohnishi H, et al. PNAS 106:10260-10265, 2009; Ohnishi H, et al. JACI 2011(epub); Ohnishi H, et al. J Clin Immunol 2011(epub); Funato M, et al. J Clin Microbiol 94:3432-3435, 2011 などに報告している。

4) 診療名：先天性ケトン体代謝異常症の遺伝子診断

診療内容：ミトコンドリアアセトアセチル-CoA チオラーゼ欠損症およびサクシニル-CoA:3keto 酸 CoA トランスフェラーゼ欠損症の疑いのある児について、その臨床像、検査所見から疑われる原因遺伝子について遺伝子解析を行い、診断を確定する。

他病院での導入状況：疾患自体は頻度の高い疾患ではないが、先天性ケトン体代謝異常症の酵素診断と遺伝子診断においては世界で唯一の診断センターとして解析をおこなっている。

国内的・国際的評価：本研究は過去 15 年間にわたり、世界各地より依頼を受け研究レベルで解析をおこなってきたのものであり、その方法や遺伝子変異情報については十分な蓄積がある。先天性ケトン体代謝異常症の酵素診断と遺伝子診断においては世界で唯一の診断センターとして解析をおこなってきている。当教室からのこれらの疾患の遺伝子解析の論文発表は数多い。

5) 診療名：先天性リンパ管腫・血管腫における新規治療

診療内容：先天性リンパ管腫・血管腫の治療は困難であり、有効な治療法がなかったが、βブロッカーであるプロプラノロールによる新規治療法を確立し、内科的にリンパ管腫・血管腫を消失・縮小させる治療を行っている。

他病院での導入状況：疾患頻度の比較的高い疾患であり、患者数も多いもののいままでも有効な治療手段に乏しく、現在まで日本での先進的役割を果たしている

国内的・国際的評価：本治療については、世界的にも先進的成果であり、学会等でも高く評価されているが、成果の一部は, Ozeki M, et al. New Engl J Med 364:1380-1382, 2011 にも掲載されている。

4. 専門医・認定医・指導医

近藤直実：日本小児科学会専門医・指導責任医，日本アレルギー学会専門医・指導医，日本人類遺伝学会専門医・指導医

深尾敏幸：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医・指導医，日本人類遺伝学会専門医・指導医

金子英雄：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医・指導医，日本血液学会専門医

加藤善一郎：日本小児科学会専門医，日本人類遺伝学会専門医・指導医，日本小児神経学会専門医・指導医

寺本貴英：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医

折居建治：日本小児科学会専門医

松井永子：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医
 川本美奈子：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医
 大西秀典：日本小児科学会専門医
 船戸道徳：日本小児科学会専門医，日本血液学会専門医
 木村 豪：日本小児科学会専門医
 川本典生：日本小児科学会専門医，日本アレルギー学会専門医
 小関道夫：日本小児科学会専門医，日本血液学会専門医
 堀 友博：日本小児科学会専門医
 久保田一生：日本小児科学会専門医
 神田香織：日本小児科学会専門医
 山本崇裕：日本小児科学会専門医
 伊藤裕子：日本小児科学会専門医
 笠原由貴子：日本小児科学会専門医

5. 自己評価

評価

それなりの実績は評価できる。大学の病院であるという視点から今後の更なる高度先進医療開発の実現が望まれる。大学病院内の総合評価では、年度ごとに1位，2位，3位など常に上位を獲得してきた。

現状の問題点及びその対応策

小児科学教室は1教室のみであり，現在助教以上の教官数は10名である。この人数で教育，高度な研究に加えて，小児科の全領域の専門医療，さらに救急医療を行うことは各教官の労働時間の大幅な延長をもってしても，極めて困難である。医員，大学院生の増員と医局員全員の努力にかかっている。対策の1つとして競争的資金である外部資金雇用助教，講師を小児科教室で行っている。40(45)床のベッド数である。小児科医不足に対する対応として，医学研究者およびリサーチマインドを有する高度な質の小児科専門総合医師の同時一体育成研究教育システム。Gifu 新小児科医師育成システムを進めている。その概要を図1に示す。

今後の展望

一般小児科医療全般と各専門分野の医療の更なる充実。さらに高度に専門化された3次医療(4次医療と仮称する)を追求している。遺伝子学的かつ，構造生物学的医療に基づく，各分野における画期的な治療法の開発を目指す(研究の項を参照)“地域と地球(世界，global)に向けた小児医学・医療-21世紀を背負う子供達に-”をテーマに。

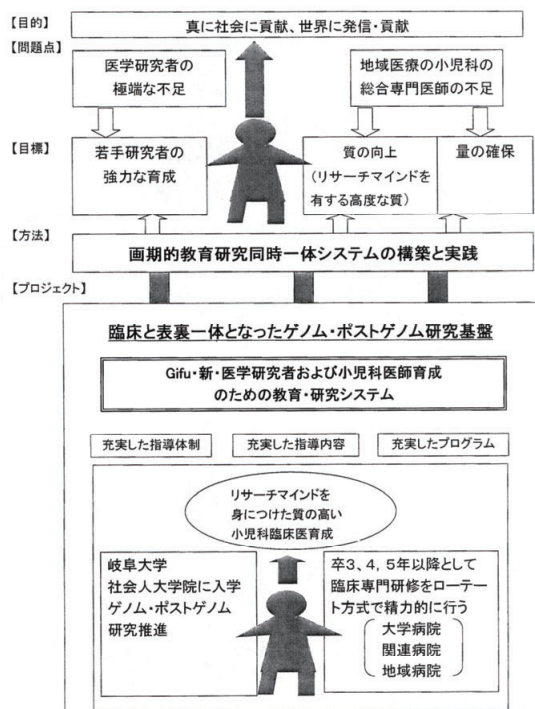


図1 医学研究者と質の高い臨床医師の同時一体育成システム (全国的に重要なモデルになる)

(17) 放射線科

1. 診療の概要

放射線科の業務は、画像診断、放射線治療、Interventional Radiology (IVR) に大きく分けられる。画像診断領域では、CT, MRI, RI など大型放射線診断機器の急速な発達により、高精度の診断が可能となった。各種画像診断の撮影法の最適化、プロトコルの選択、適切な造影検査、リスク管理、画像の読影が主たる業務となる。緊急検査も増加しており、画像診断に引き続く緊急 IVR への対応も平日、休日を問わず行っている。機器性能の発達により、検査時間は短縮しスループットは大きく改善し、検査件数は飛躍的に増加した。病院の重要な業務である画像診断病診連携についても、CT, MRI, 核医学検査を主に担当し、外来にて問診、診察を行った後検査施行し、診断結果は紹介元へ即日報告を行っている。

放射線治療も件数は増加の一途である。特に IGRT (画像誘導放射線治療) にもとづく高精度照射 (IMRT, 定位照射) 件数も増加し、他施設の治療が困難の症例に対しても綿密な治療計画で精密で精度の高い照射で対応している。また密封小線源照射も前立腺癌、子宮がんを中心に行っている。前立腺がんに対する小線源治療は東海地区で先駆けて行った治療法である。

IVR 治療は放射線科および他の診療科の入院で行っている。回診時のカンファレンスで、症状、画像診断、診断、治療方針の決定などを検討し、十分はインフォームド・コンセントを得よう留意している。また、高次救命治療センターに搬送される救急症例の IVR にも 24 時間体制で取り組んでおり、岐阜県の救急医療に大きく貢献している。

2. 教育施設

- 1) 放射線科専門医総合修練機関
- 2) 日本核医学会専門医教育病院
- 3) 日本インターベンショナルラジオロジー学会専門医修練施設
- 4) 日本放射線腫瘍学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 高精度放射線治療 (IGRT, IMRT, 定位放射線治療)

診療内容: 高精度放射線治療とし IGRT (画像誘導放射線治療) をもとに IMRT, 脳, 体幹部定位照射 (3 次元, 4 次元照射) を行う。

他病院での導入状況: 岐阜大学病院には本邦では大学病院としては初めて 2010 年度から高精度放射線治療装置ノバリス Tx が導入され IGRT (画像誘導放射線治療) での治療が可能となり、それにもとづく IMRT や定位照射が開始された。

国内的評価: 岐阜大学では脳に関する定位照射は 2000 年から開始している。頭頸部の定位照射は 2004 年から、体幹部定位照射は 2007 年から施行しており、安全で良好な治療法として国内学会にも報告している。2008 年度は IMRT が前立腺癌で 7 月から開始、2010 年からはノバリス Tx 導入にて、定位照射は脳、頭頸部、肺に施行し年間 100 症例を超え、IMRT においても前立腺中心で約 30 例を照射した。今後、更に照射件数は増加すると考える。

国際的評価: 米国では IMRT はかなり普及した照射法である。本邦においては IMRT および定位放射線治療は徐々に普及してきているが、非常に精密な治療でもあり、時間と労力が必要な治療でもある。IMRT においても保険適応も拡大し、特に IMRT は前立腺癌および頭頸部癌での治療が望まれる。また定位照射においては、特に肺癌においては、本邦がリードしている治療であり、早期非小細胞がんでは、手術に匹敵する成績が報告されている。

- 2) 診療名 : 小径腎癌に対する経皮的凍結療法

診療内容: 小径腎腫瘍 (直径 4cm 以下) の腎悪性腫瘍に対して、経皮的に凍結療法を行う。

他病院での導入状況: 三重大学医学附属病院、京都府立大学附属病院、慶応大学病院などで実施されている。

国内的評価: 凍結療法は 2011 年 10 月に小径腎腫瘍に対し、保険収載された。現在、腎部分切除術が困難な小径腎腫瘍に対しては、岐阜県内での治療は不可能であるため、三重大学にてラジオ波による焼灼術を行っている。ラジオ波焼灼術は保険適応外の治療で高度先進医療として国内の限られた施設で実施されている。

国際的評価: 2004 年より報告が始まり、従来のラジオ波焼灼療法と比べて、治療中の痛みが少なく、安全に施行可能との報告が多い。

4. 専門医・認定医・指導医

兼松雅之：日本医学放射線学会診断専門医，日本 IVR 学会専門医，日本がん治療認定医機構暫定教育医
星 博昭：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医
林 真也：日本医学放射線学会放射線治療専門医，日本放射線腫瘍学会認定医，日本がん治療認定医機構
がん治療認定医
浅野隆彦：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医
近藤浩史：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本 IVR 学会専門医，日本
がん治療認定医機構暫定教育医
富松英人：日本医学放射線学会診断専門医，検診マンモグラフィ読影認定医
加藤博基：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本
IVR 学会専門医，検診マンモグラフィ読影認定医
五島 聡：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本
IVR 学会専門医
大宝和博：日本医学放射線学会放射線治療専門医，日本がん治療認定医機構がん治療認定医
櫻井幸太：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，検診マンモグラフィ読影
認定医
渡邊春夫：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，検診
マンモグラフィ読影認定医
水野 希：日本医学放射線学会認定医，検診マンモグラフィ読影認定医
田中秀和：日本医学放射線学会認定医
吉田麻里子：日本医学放射線学会認定医，検診マンモグラフィ読影認定医

5. 自己評価

評価

画像診断領域では、CT, MRI, RI 装置の急速な発達により、高精度の診断が可能となったが、その撮影法は種々のものがあり、各種疾患に対する最適撮像法を開発し、最善の画像診断を提供している。また、スループット改善により、検査件数の飛躍的に貢献した。検査予約後の待ち日数が短いのも大きく改善した点である。病診連携を取り入れ、CT, MRI, 核医学検査を受け入れ、担当し、診断結果の紹介元への即日報告も実施している。

放射線治療も件数は飛躍的に増加しているが、前立腺癌に対する小線源治療も 2005 年 8 月より開始し、東海地区でいち早く取り入れた。また、脳に関する定位照射は 2000 年から開始し、頭頸部の定位照射は 2004 年から、体幹部定位照射は 2007 年から施行している。2008 年度は IMRT が前立腺癌で 7 月から開始し、2010 年からはノバルス Tx 導入にて、定位照射は脳、頭頸部、肺に施行し年間 100 症例を超え、IMRT においても前立腺中心で約 30 例を照射した。今後、更に照射件数は増加すると考える。

専門医の育成では、日本医学放射線学会総合修練機関、放射線治療専門医修練機関、日本核医学会専門医教育病院、日本放射線腫瘍学会認定施設、日本 IVR 学会修練施設として、最近多くの専門医、認定医を育成してきた。

現状の問題点及びその対応策

CT, MRI など診断機器の進歩はめざましが、至適撮像法や新しい撮像法はさらに検討の余地がある。また、画像情報量の大量化及び複雑化に伴い、読影に要する時間が増加し、3 次元画像の後処理やその読影に要する時間も増加している。さらに、IVR においてもその手技が高度化、複雑化しており、一患者の診断、治療に要する時間が増加している。放射線治療においても、高精度照射での治療計画の複雑化、外部照射と密封小線源治療件数の急激な増加で、同様にかかりの時間と労力を要する。これらの問題を解決するためには、診療に携わる医師の技量の高い水準での平均化及び合理的な診療環境の整備が必要である。また、現時点では放射線科スタッフも少なく人員の増加、充実が望まれる。臨床研究が中心となるが他科との共同研究の拡大がより必要である。

今後の展望

高度の画像診断技術による病態の正確な早期診断と高度技術の IVR 治療による低侵襲治療を推進し、緊急検査から IVR 治療へとシームレスに繋がる体制を確立したい。放射線治療においても、他科との共同で全国レベルの臨床試験の積極参加や高精度照射装置を用いた新たな照射法の開発などに取り組みたい。今後の方針として、さらに IVR 治療や放射線治療による非侵襲的治療の推進と CT, MRI, PET を補助とす

る新たな診断・治療法の開発を進める。EBMに基づく診療，研究と診療の密接な融合，診療の発展につながる基礎研究，世界基準を念頭に置いた診療，研究が今後の展望である。

(18) 麻酔科疼痛治療科

1. 診療の概要

麻酔科疼痛治療科の診療は以下のように多岐に及ぶ。

手術での麻酔サービス、手術後疼痛の管理、小児科・内科による骨髄移植の麻酔、精神科による電気痙攣療法等、あらゆる麻酔管理を担当している。夜間の緊急手術に対する麻酔管理は勿論、時に 24 時間以上に及ぶ手術の麻酔にも対応し、年間 2,500 件以上に安全で質の高い麻酔を提供している。手術後の急性痛に対しては持続硬膜外鎮痛やエコーガイド下の末梢神経ブロックならびにオピオイドの持続静注等による疼痛管理を行っている。

疼痛治療外来は、痛みを訴えている人や神経麻痺を持った人のための総合外来である。患者の病像は多彩であり、「痛み」が主な症状の病気、あるいは様々な種類、複雑な要素をもった痛みを訴える患者が増えてきた。現在は外来治療ベッド 13 床、入院ベッド 6 床の環境で、月曜日には手術室で、また木曜日には放射線透視室で X 線透視を用いて神経ブロックを行っている。

緩和医療チームの構成

当大学病院は、岐阜県がん診療連携拠点病院として活動しており、その一環として緩和医療にも積極的に取り組んでいる。当科はその緩和ケア部門の中心的存在として他診療科と連携のもと活動を行っている。また、入院患者のみならず外来患者に対しても月曜午後に緩和ケア外来（予約制）を開設し、診療を行っている。

2. 教育施設

- 1) 日本麻酔科学会麻酔指導病院
- 2) 日本ペインクリニック学会指定研修施設
- 3) 日本緩和医療学会認定研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 頰部・腰部神経根症に対する pulsed radiofrequency 法

診療内容: 頰部・腰部の神経根症疼痛に対して高周波電流を 42℃以下で間欠的に通電し疼痛軽減を図る治療手段である。

他病院での導入状況: 東海地区では当院のみに導入されている。

国内的評価: 従来の高周波熱凝固法と比べて、知覚低下・筋力低下を来しにくく疼痛改善効果も優れていると考えられている。

国際的評価: 欧米では種々の神経痛の治療に数年前から導入されており、筋力低下を来しにくいため、多椎体の神経に対して加療が可能となることに加えて、神経因性疼痛にも有効であるとの報告に則り、広く施行されている。

4. 専門医・認定医・指導医

飯田宏樹: 日本麻酔科学会指導医・専門医, 日本ペインクリニック学会認定医

竹中元康: 日本麻酔科学会指導医・専門医, 日本ペインクリニック学会認定医

田辺久美子: 日本麻酔科学会指導医・専門医

山本拓巳: 日本麻酔科学会指導医・専門医, 集中治療専門, インфекションコントロールドクター, 日本呼吸療法医学会専門医

長瀬 清: 日本麻酔科学会指導医・専門医

熊澤昌彦: 日本麻酔科学会専門医

杉山陽子: 日本麻酔科学会専門医

福岡尚和: 日本麻酔科学会専門医

飯田美紀: 日本麻酔科学会専門医

松本茂美: 日本麻酔科学会専門医, 日本ペインクリニック学会専門医

山田裕子: 日本麻酔科学会専門医

吉村文貴: 日本麻酔科学会専門医

5. 自己評価

評価

大学病院はもとより関連病院の麻酔科の業務の増加などによるマンパワー不足で、研究に避ける時間

が非常に減ったことなどが重なって、研究課題は十分に達成できなかったと評価している。診療業務に関しては、可能な限り対応しており、中央診療部門としての仕事はかなりの範囲で達成できていると評価している。

現状の問題点及びその対応策

現状の問題点の多くは、マンパワー不足によるところが大きいですが、その充足は必須であるが、大学附属病院が優れた医師を関連の他医療機関に派遣するという社会的責任があるものの、今後は大学内に優れた医師を確保するという視点で教室を運営していく必要もある。専門医を養成するという使命と共に、麻酔科専門医の絶対数が少ないというこの地域の現状のあった現実的な選択をしていく。また、女性医師の有効な活用は今後の円滑な運営の必須条件と考えており、出産等に伴う休暇後の復帰プログラムを確立し、安心して育児・仕事の両立が可能な環境作りに努める方針である。

今後の展望

欧米では、特にアメリカでは手術の約 50%が外来で、日帰り麻酔・手術として行われている。わが国では未だ病院がそのような体制にはないが、手術部の効率的な運用によって、小手術や侵襲的な検査に対する的確で安全な麻酔法を確立し、社会のニーズに対応した麻酔診療を行う。ペインクリニックでの痛みの治療には近郊他大学からの紹介患者も多く評価を得ているが、手術後痛の治療に関しても、一流施設に相応しい痛みの診療システムを構築（急性疼痛管理チーム）していく必要がある。また余力の許すかぎり、癌性疼痛の管理（緩和医療を含む）にも力を注ぐことを目標に、院内・慢性の疼痛管理システムの確立を目指す。

(19) 歯科口腔外科

1. 診療の概要

当科では、一般の歯科・口腔外科的疾患の治療とともに、顎・顔面・口腔に関わる疾患に対し診断と治療を行っている。口腔癌では、本地域におけるがん診療拠点病院としての機能を活用し、放射線・化学療法（含む動注化学療法）の併用による組織温存療法や平成 18 年に県内唯一の施設として認可された先進医療（インプラント義歯）を活用した質の高い機能回復を行っている。その他、顎変形症の施設基準（矯正治療・外科治療の両者）も取得しており、一貫した治療を展開している。顎嚢胞・良性腫瘍（エナメル上皮腫等）では、顎骨を温存する治療を行い、口腔・顎・顔面の機能と形態の保全を図っている。口腔乾燥症・舌痛症では専門外来を開設し治療にあたっている。これらの診療活動により、他の病院歯科・口腔外科、診療所に無い診療機能の強化を図りつつ地域における口腔医療の 3 次機関としての責務を果たすべく活動している。さらに、紹介率向上のため地区単位のミニ講演会、県・市単位の研究会を主催し相手の顔の見える病・診連携の構築に努め、岐阜市および岐阜県内の歯科医療機関と連携した口腔医療の提供を行っている。

2. 教育施設

- 1) (社) 日本口腔外科学会指定研修機関
- 2) 日本顎関節学会指定研修機関
- 3) 歯科医師臨床研修施設（管理型研修施設）

3. 診療開発

1) 診療名 : インプラント専門外来

診療内容：埋入インプラント数として 100~150 本/年で推移し、先進医療（インプラント義歯）の実施医療施設に認定された平成 18 年以降、急速な増加となって来ている。先進医療（インプラント義歯）の適応例では、インプラント埋入に関わる費用以外の費用（検査・投薬・入院料等）を保険診療で行うことが可能であるため、骨移植などの顎堤形成を必要とする例や侵襲の大きいインプラント埋入等を安全に施行する例を中心に、岐阜市・岐阜県内の医療機関と連携して実施している。また、デンタル CT および画像解析システムを外来に設置し、撮影直後の画像診断など詳細な解析を迅速に行い、安全かつ予知性の高い施術を展開している。

他病院での導入状況：県内において先進医療（インプラント義歯）の認可を受けた施設は無く、当科が唯一の施設となっている。

国内的評価：現在、国内外において行われているインプラント治療のほぼ全ての手技・治療法は当科において可能な状況となっており、症例の集積によりこの分野に於けるフロントランナーとなると考えている。

国際的評価：現在、国内外において行われているインプラント治療のほぼ全ての手技・治療法は当科において可能な状況となっており、症例の集積によりこの分野に於けるフロントランナーとなると考えている。

2) 診療名 : 口腔乾燥症・舌痛症外来

診療内容：シェーグレン症候群の可能性も考慮した系統的な検査（サクソンテスト、唾液腺シンチグラフィ、血液検査、唾液腺造影、口唇生検、CT、MRI）および眼科・皮膚科・膠原病内科など関連諸科への対診に基づく診断を行い、病因に応じた適切な治療法の選択を行なっている。また、唾液を用いた口腔病変の非侵襲的診断法の確立と疼痛計を用いた舌痛の客観的評価の導入を目指している。

他病院での導入状況：中部圏内および全国的にみて、当科ほど多くの症例を有し、積極的に取り組んでいる施設はほとんどない（150~200 人/月の follow up と新患を担当している）。

国内的評価：既に学会発表、講演、論文等で或る程度の国内的評価を得ているが、全国的に見ても、口腔乾燥症や舌痛症に積極的に取り組んでいる施設は比較的少ないので、さらに高い評価を得られる可能性は高い。

国際的評価：ラフチジンによる舌痛の緩和に関する論文が国際誌（J Oral Pathol Med）に受理された（2008 年 12 月 1 日現在）。また、唾液を用いた非侵襲的診断法の開発が成功すれば、高い国際的評価を得られると考えられる。疼痛計を用いた口腔内疼痛に関する研究も非常に少なく、この導入により更に質の高い成果を得ると考えられる。

- 3) 診療名 : スタンダード・プリコーションの実施
 診療内容: スタンダード・プリコーションの概念に基づく院内感染予防を実地することにより、高次医療機関の歯科口腔外科として、また、エイズ診療拠点病院としての役割を遂行する。
 他病院での導入状況: 平成 16 年の調査では、エイズ診療拠点病院で歯科を併設している施設の中で、ハンドピースを患者ごとに取り替えるのに必要な本数だけそろえているのは約半数の施設であった。
 国内的評価: 現在、作成されつつある「歯科における院内感染対策ガイドライン」(国立大学附属病院感染対策協議会編)の内容を満たすレベルに到達して来ている。
 国際的評価: 2003年に改訂された CDC(米国疾病管理予防センター)の「歯科臨床における院内感染予防ガイドライン 2003」で推奨しているスタンダード・プリコーションに沿ったレベルの診療体制・システムが構築されて来ている。
- 4) 診療名 : 口腔ケアの導入
 診療内容: 急性期病院である当院において、歯科医師、歯科衛生士による専門的口腔ケアを導入し、放射線・化学療法時の口内炎・菌性感染症等の出現予防、および周術期の誤嚥性肺炎・感染の軽減を図り、本来の治療効果、質的向上に寄与することを目的に展開している。
 他病院での導入状況: 国内のいくつかの施設では行われ、効果ありとのレポートが報告されている。しかし、岐阜県内においてシステムティックに展開している施設はない。
 国内的評価: 急性期病院において口腔ケアを先駆的に取り組んでいる病院から術後肺炎の減少や患者の満足度向上の報告が LANCET などにもなされており、口腔ケアのニーズと評価が認識されつつあり、同様のケアを展開している。
 国際的評価: 2004年に CDC(米国疾病管理予防センター)が公開した「医療ケア関連肺炎防止のためのガイドライン」では、VAP(人工呼吸器関連肺炎)対策の1つとして、人工呼吸器装着患者における口腔ケアの重要性が強調されており、同じ手技の導入を行い展開している。

4. 専門医・認定医・指導医

柴田敏之: 日本口腔外科学会専門医・指導医
 加藤恵三: 日本口腔外科学会専門医・指導医
 牧田浩樹: 日本口腔外科学会専門医
 畠山大二郎: 日本口腔外科学会専門医
 米本和弘: 日本口腔外科学会専門医

5. 自己評価

評価

1.~3.に関して、概ね目標は達成されていると思われる。

現状の問題点及びその対応策

外来受診者の動向として、一般歯科治療症例は減少し、紹介(含む院内紹介)による特殊症例が増加し、受診者の質的・構造的変化が生じて来ている。この現象は望ましいことではあるが、このまま推移すると、研修医教育に不都合が生じる可能性が危惧される。このため、一般患者の増大に向けて大学保健管理センターとの連携により学生・職員の健診を行なっている。一方、入院症例ないし紹介症例は漸次増加傾向を示すことより、上述する努力を継続・発展させることが重要と考えられる。

今後の展望

当科の存在意義は、この地区の口腔医療の二次、三次医療機関としての責務を果たすとともに、より質の高い口腔医療を安全かつ快適に提供することにあると考えている。したがって、これらの使命が果たせない場合、今後の展望は望めず、この任を果たすことのみが展望を拓くと考えている。また、上記の使命を果たすことにより秀逸な臨床医が育成され、相乗効果的な明るい展望が開くものと考え、地道ではあるが確実な方策と信じ日々の努力を行なっている。

また、中期的(3年以内)の展望として、再生医療(細胞プロセッシング)の構築とこれを活用した細胞治療の導入を計画しており、その達成により大きな転換期を迎えると期待している。

(20) 検査部

1. 診療の概要

1) 中央採血部門

病院移転開院以来 3 レーン常設、混雑時 4 レーンとして対処していたが、患者数の増加に伴って待ち時間が大幅に伸びたため、平成 22 年 1 月より 5 レーンに増設した。それでもなお混雑することがあるが、採血専門パートの看護師、臨床検査技師を雇用し、検査部技師および看護師と一緒に採血することで何とか対処している。月に 1-2 例程度 VVR (血管迷走神経反射) を起こす例があるが、すべて大事にいたらず回復している。医師への速やかな連絡など、連絡網も含めて対応策は適正に機能している。

2) 一般検査・血液検査部門

尿検体数も増加の一途をたどっているが、認定一般検査技師を配置して精度の高いデータを臨床サイドに送信している。尿検査結果が外来検体検査のなかでは最も早く電子カルテで結果を見られる。血液部門も目視する検体が多いが、これも血液の二級臨床検査技師を配置して迅速に結果を出し、疑わしい検体については適宜、血液内科の医師に連絡して確認してもらっている。血液検査結果は尿検査に次いで早く結果が得られる。

3) 生化学・免疫血清部門

検査項目数としてはこの部門が最も多く、大型の自動分析装置がフル稼働して処理している。時間外もこの装置を使用しているので日中の値との間に乖離はない。臨床サイドの要望に対応し、セット項目の見直しや、新規項目の院内取り入れを検査部運営委員会において承認された後実施している。反面、利用数の少ない項目等については診療科と話し合って外注にするなど、院内検査項目数が多くなり過ぎないように注意している。また、機器更新に伴って平成 24 年 4 月に総合緊急検査システムを導入する予定であり、検体処理能力のアップが期待され、迅速でより精度の高いデータの供出に努める。

4) 生理部門

心エコー、腹部エコーともオーダー件数が伸びており、検査部担当の分のみで平成 21 年度は心エコー 1,944 件、腹部エコー 240 件で、22 年度はそれぞれ 2,331 例 374 例であった。心エコーは 20%、腹部エコーは 50%以上の増加率であった。さらに新たに部位別のエコー検査の要望があり、平成 22 年 4 月より皮下腫瘍などの病変部のスクリーニング検査を始めた。また耳鼻科の甲状腺検査についても現在検討中である。費用対効果の面からいえば生理部門は最も収益があがる場所であり、検査部としても力をいれているところである。そのほか、耳鼻科の平衡機能検査や整形外科からの要望で術中脊髄モニタリングのセットアップのために手術室に検査技師を派遣している(予定手術のみ)。このように各診療科の要望になるべく添えるよう努力しているが、さらなる個々のスキルアップが必要である。

5) 細菌部門

現在は 3 人体制で対応している。検体の受け付けを 24 時間体制とし、生体支援センターと毎週ミーティングを行い、院内感染対策を講じている。ICT 活動などの院内活動にも参加しているが、マンパワーが不足しており、もう 1 名程度の増員が望まれる。また、平成 22 年 1 月より院内感染対策ソフトを導入し、データ解析など各診療科からもアクセスが可能となっている。現在の問題点としては、検体の質あるいは量の改善があまり見られない点である。なかなか難しい点ではあるが、繰り返し臨床サイドに協力を要請しているところである。

6) 検査情報部門

新規項目の院内取り込みや外注化に伴うオーダー画面の処理、各臨床科のセット検査項目の変更などに随時対応している。RefDB (レファレンスデータベース) を更新し、最新の検査情報が得られるよう努めている。

2. 教育施設

1) 日本臨床検査医学会認定病院

3. 診療開発

1) 診療名 : 動脈硬化の客観的評価方法の確立 (血流依存性血管拡張反応 : Flow Mediated Dilation FMD)

診療内容 : 関節リウマチ患者 (RA) の動脈血管内径を正中より超音波プローブ固定装置により固定。測定値は最高血圧 +10 mmHg の圧力下で評価する。計測時間は約 10 分を予定している。さらに次の目標として循環器科の患者を対象として測定する予定。最新の機種を導入し画像解像度の向上から、FMD の計測が有効な評価方法と考えている。

他病院での導入状況：RA に関しては国内ではない。

国内的評価：日本糖尿病学会、日本栄養食料学会などで本検査のセミナーが組まれており、これからのデータの蓄積が期待される。当検査部からの論文は 2011 年の Clin Rheumatol に accept された。評価が得られれば臨床検査として関節エコー測定時にセット検査として行いたい。

国際的評価：米国では、J Am Coll Cardiol 2002;39:257, 欧州では、J Hypertens 2005;23:7 に FMD 評価ガイドラインや修正が出されており、その重要性が窺える。エコーでの内皮機能検査は非侵襲性であり繰り返し検査が可能で簡便性が高く、治療効果確認に用いられている。

4. 専門医・認定医・指導医

清島 満：日本臨床検査医学会専門医、臨床検査管理医、日本消化器病学会専門医、日本肝臓学会専門医、認定内科医

伊藤弘康：日本医師会認定産業医

金森寛充：認定内科医、日本循環器病学会専門医

大澤陽介：認定内科医、日本消化器病学会専門医、日本肝臓学会専門医、日本内視鏡学会専門医

森 一郎：総合内科専門医

5. 自己評価

評価

通常業務については精度管理も含め目標レベルに達していると考えている。しかし、血液検体を室温で長時間放置してしまっただけで検査ができなかった例など、不注意によるインシデントは未だなくならないが、少しでもゼロに近づくように二重チェックなどによる努力をしていかなければならない。

職員の業務に対するモチベーションを高めるため、日本臨床検査医学会やその他学会の認定技師資格の取得を個々の努力目標に設定している（備考参照）。今後さらに有資格者が増えるよう指導しており、それにより各部門の検査の質がある程度担保されるようになるかとみている。また、23 年度に臨床検査技師の研修費用として 50,000 円/人/年認められたことは各個人が希望する研修に参加しやすい状況になった。

備考) 二級臨床検査士：循環器 3 名 血液 3 名 微生物 2 名

超音波検査士：循環器 4 名 消化器 1 名 泌尿器 1 名 産婦人科 1 名 体表臓器 1 名

認定一般検査技師：2 名、第 2 種 ME 技術者：1 名、心電検査士：1 名、認定 HLA 検査技師：1 名

現状の問題点及びその対応策

臨床検査技師の非常勤ポストが慢性的に 1~2 空席となっており、部門によっては業務に支障をきたすことがある。雇用条件の 3 年期限がネックとなっている可能性があるが、有能な人材に対しては任期付き雇用を導入して人材を確保している。また、職員増員についてはただ要求するのではなく、そのメリットについて具体的な収益数字をあげて要望していく必要がある。

精度管理については海外認証機構 CAP (College of American Pathology) や日本医師会、日本臨床検査技師会が行っている評価に参加し、基準レベルに達している。精度管理の最終的なゴールは ISO15189 の取得にあるが、その取得には 1 年以上前から主任クラスの少なくとも一人を通常業務を免除して専門担当として準備しなければ困難だといわれている。さらに認証には初年度に数百万円の経費が必要であり、現状では難しいと思われる。

今後の展望

検査部の使命であるデータの精度、迅速性、経済性はもちろんクリアしたうえで大学病院検査部としてのアイデンティティーを確立、堅持することが重要である。すなわち、精度管理や検査項目の基準値統一化については岐阜地区の中心的な立場で活動を継続していくべきであろうし、また院内では各診療科からの研究も含めたさまざまな要望に対してフレキシブルに対応していくことがこれからの検査部に望まれる。

(21) 手術部

1. 診療の概要

手術部は、平成 20 年 7 月に高次救命治療センター手術部門から分離し新設された。特定機能病院である岐阜大学医学附属病院の基幹部署としての役割を果たすため、副病院長が手術部長を兼務し、病院経営方針に従い迅速に懸案事項に対処できる組織体制を整えた。

本院における手術の特徴は、悪性腫瘍や心血管手術など大学病院としての役割を期待されている術式に集中していることである。また難易度の高い手術患者だけでなくハイリスク患者や、8 時間を超える長時間手術が多い点にある。複数診療科にまたがる複雑な術式も多く、最先端の周術期医療提供も目指している。高次救命治療センターを併設するため、ロードアンドゴーと言われる超緊急手術や多発外傷、重症熱傷等の手術治療も積極的に行っている。

手術部は様々な手術患者を対象とし、予定手術・緊急手術を問わず各種術式を想定して手術室スタッフや医療機器が配置されている。限られた人的資源の中で常時即応体制の確保が対外的にも求められており、超緊急手術であっても深夜休日を問わず対応できるよう手術環境を確保している。このため手術看護師も緊急待機呼び出しが行われ、この点では手術部は院内でも例外的な部署である。

以上より、手術部の診療は、院内他部署との連携しながら外科系診療科医や麻酔科医と協力することで、当院の手術患者がその恩恵を存分に享受できるようにあらゆる環境を整えている。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

1) 診療名 : 手術患者に対する Web を用いた情報提供と、手術部看護師の術前業務の軽減

診療内容 : 病院 HP から「手術を受ける患者さんへ」のリンクを作成し、手術前オリエンテーションや術前の留意点、当院の特徴などを周知する HP により、手術部看護師が術前訪問で行う説明等を事前に提供することで、手術に対する患者さんの理解や協力を高め、手術看護師の術前業務軽減をはかる。また情報が広く公開された手術部を訴えることができる。

具体的には、(1) 手術室内での医療内容を紹介するビデオクリップを作成する。一般手術、小児、妊婦など目的別に作成する。(2) 「手術を受ける患者さん」という HP を作成し、ビデオクリップに加え手術部の紹介やその活動内容を公開する。(3) ビデオクリップとタイアップした術前説明書を新たに作成する。(4) コンテンツは入院中でも活用できるよう、スマートフォンなどからの閲覧も可能にする。

当院の広報活動は、「鶉船」の発行と病院 HP 管理が中心である。しかし、がんセンターや救命センターを備える急性期病院として手術が果たす役割までは、十分な広報活動ができていない。そのため手術部看護スタッフが行う術前訪問に要する時間も、患者に手術の概略をイメージしてもらうための時間が必要となっている。広報活動による病院ブランド構築は広く散見されるが、密室性を指摘される「手術」からの情報発信は事例も少なくあまり研究されていないため、病院の差別化にもつなげると考える。

他病院での導入状況 : この広報活動は、手術医療において広く社会的貢献が望めるのみでなく、手術部看護師の新たな専門分野開拓や、標準化や効率化を再検討する契機になる。全国的にも手術に特化したこのような具体的な患者への情報提供は端緒についたばかりである。また本研究の隠れた最大の利点は、当院を希望する新入職者や他の医療従事者へのメッセージに活用できる点である。

国内的評価 : このような試みは他院ではほとんど導入されていない。

2) 診療名 : 手術医学を支える手術看護の専門性確保

診療内容 : 昨年度に実施した近隣の国公立大学病院への視察では、業務内容、勤務体系、手術部運営、機器管理等を比較し、当院手術部を客観的に評価した。今年度は新生児手術への準備、手術部業務の ME との共同方法、薬剤業務管理、手術室内の感染対策や安全対策など、より専門性の高い目標を手術部内でフィードバックしたい。

他病院での導入状況 : 本事業は、昨年度の国立大学病院手術部会議において本院が提案し採択された相互訪問事業の一部であり、この点で先駆的な取り組みである。

国内的評価 : 当院手術部の様々な活動内容は、手術医学会、手術看護学会等で発表している。医師、看護師の演題数は、昨年度は 7 題発表した。今年度もすでに 7 題応募している。

3) 診療名 : 次期手術部門システムの開発

診療内容: 手術部は、医療の質を確保しつつ効率化や標準化を追求するため、電子情報を解析し業務改善を行っている。適切な手術部運営や無理のない業務計画に反映させ、安全性の担保や医療過誤防止に配慮している。現在は、経営指標や人材管理、さらに具体的業務分析を看護支援システムとの連携により、素早く正確に行える新しい手術部門システムの開発を進めている。また在庫管理システムの新規導入を目指し、現有の手術部門システムとの相乗効果を目指している。

他病院での導入状況: 当院における手術部門システムと病院情報システムや看護支援システムとの連携は他病院では困難な条件となっているため当院の独壇場である。また業務と IT 活用がシームレスに連携している点も他病院には乏しい特徴である。

国内的評価: 岐阜大学の電子カルテシステムは完成度が高く、病院経営に寄与するだけでなく、見学希望者も多く高い関心を得ている。

国際的評価: 米国における電子カルテの進歩は経営指標への配慮が大きく、この点で臨床医の視点に重点が置かれる本邦の電子カルテとは、必ずしも方向性は一致していない。とはいえ、今後は国際的に求められる標準化や効率化に配慮しながら経営面を支援するシステム構築を目指している。

4. 専門医・認定医・指導医

吉田和弘: 日本外科学会認定医・専門医・指導医, 日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医, 日本内視鏡外科学会技術認定医 (消化器・一般外科・胃癌), 日本乳癌学会認定医, 日本癌治療学会臨床試験登録医, 日本癌治療認定医・機構暫定教育医, マンモグラフィー検診精度管理中央委員会読影認定, 日本食道学会食道科認定医, 食道外科専門医, 日本消化管学会胃腸科認定医

長瀬 清: 日本麻酔科学会専門医・指導医

水野吉雅: 日本外科学会専門医, 呼吸器外科学会専門医, 癌治療認定医

5. 自己評価

評価

新病院開設以後、岐阜大学附属病院の稼働実績と平行するように手術件数は激増している。平成 16 年度新病院開院時に年間 3,114 件であった手術件数は、平成 22 年は 4,869 件と 5 割近い増加を示し、独立法人化され経営改善に努力する旧国立大学附属病院の中でもトップを争う増加率である。昼夜を問わず手術室は稼働し、地域医療の拠点である大学病院としての使命を下支えしている。

また急性期病院において手術はその中心となるべき医療行為であり、また病院経営上も高い収益を生み出し、さらには岐阜大学医学部附属病院のブランド力を創造する原動力である。このため手術件数はじめ手術内容は手術部の評価でもありながら当院の評価そのものであり、手術件数増加は当院のブランドを高める重要な要素である。

一方で手術部は、手術件数増加にかかわらずスタッフ増が難しい環境の中で、その業務量に対処しながら使命感を確保することが求められている。このような困難な環境で積極的に手術医療に貢献できたことは、手術部の誇りである。

また「当院で行うべき手術待機患者を減らす」という病院をあげての使命を手術に従事する外科医や麻酔科医と共有することで、高い動機づけを維持し、手術件数増加や手術医療の質向上のために努力し、また離職者を予防していることは特筆すべきである。

現状の問題点及びその対応策

医療を取り巻く環境が厳しい中で、当院は質の高い手術医療を提供し、安全で医療過誤のない手術を目指し、効率化や標準化を推進している。この目標に従い手術部は、手術予定時間を厳守できるよう綿密な手術計画の立案を促す「3 時間ルール」を導入し、手術の質を担保し手術室の効率利用を図り、その結果再手術率は低下した。

また標準化や効率化を推進することで、外科系診療科医や麻酔科医、さらに手術室看護師数の増員が望めない中で、安全に手術件数の増加を達成している。さらに安全対策、感染対策といった基本的ルールも院内統一基準に従いコンプライアンスを遵守し、手術看護も絶えず改善を重ねることで均一な手術環境が提供できるように、手術部組織全体のボトムアップに努めている。

手術室の日勤帯稼働率は 100% 超と非常に高い値を示し手術受け入れ可能枠数も増加させている。一般的には 70% の稼働率が目標とされる中でこの値は、現状の稼働 7 枠に収容できない手術までもが規定枠

以上に処理されていることを示し、過剰な手術件数を迫られている手術部の現状を端的に表現している数値である。安全を犠牲にしないように、日々の苦労が続いている。

また手術部運営は手術部単独でなし得るものではなく、外科系診療科や麻酔科の協力で成り立っている。この中で、全体の最適化の観点から手術部の厳しいスケジュールを構成するため、多くの診療科に手術スケジュールの融通を依頼することで手術部稼働が成立している。各外科系診療科には手術スケジュール作成において手術部の都合を優先せざるを得ない現状に不満もある中で、多大なご理解を頂いている現状に感謝している。

慢性的な手術待機患者の増加に加えて、高度救命治療センターを併設する本院の特徴に貢献することも合わせて重要な課題である。

このように多くの業務改善を重ねることで大きな収益を導き病院経営に貢献してきた。しかしやはり手術部スタッフのみの努力だけでは限界に近づきつつあり、現状の職場環境は逼迫している。将来の病院経営方針を考慮する上で、急性期病院としてより積極的に手術医療を目指すのであれば、これまでの成果も考慮した上で、手術部は人員、待遇面で積極的に評価されるべきである。

今後の展望

手術待機患者の解消を目指すことで、微力ながら地域医療に貢献できる組織として持続発展したい。

(22) 放射線部

1. 診療の概要

放射線部は、患者の安全を第一に考え、画像診断、放射線治療、核医学検査、IVR 治療の 4 領域に係る装置を設置し、各診療科及び診療部等の診療体制をサポートしている。

常に新しい技術を取り入れ、高度な診療内容と情報を提供している画像診断の領域においては、一般撮影、CT 検査、MR 検査、各種造影検査と血管造影に加え、気管支内視鏡的治療や血管内手術、胸腔内・腹腔内血管塞栓術、抗がん剤動注治療などの **Interventional Radiology** を含めた広範な領域まで行っている。

放射線治療領域においては、MR、CT 画像を用いた高精度の外部照射、腔内照射、組織内照射を行い、根治し得る適応疾患の拡大と治療成績の向上に努めている。さらに、定位放射線治療や強度変調放射線治療 (IMRT) も行っている。

核医学検査の領域においては、臓器イメージングによる腫瘍存在診断、臓器機能診断、臓器血流量定量測定を実施し、治療法の選択、治療効果の評価等に利用されている。また、平成 19 年度より陽電子放射断層法 (PET) 装置による検査も開始している。

業務の遂行にあたっては、医療情報システムにより全ての検査において、オーダーリングシステムによって予約から会計処理業務さらに統計業務まで効率良く運用されている。

2. 教育施設

- 1) 放射線科専門医修練機関
- 2) 日本核医学会専門医教育病院
- 3) 日本 IVR 学会専門医修練施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

兼松雅之：日本医学放射線学会診断専門医，日本血管造影・IVR 学会指導医

浅野隆彦：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本核医学会核医学専門医

富松英人：日本医学放射線学会診断専門医

加藤博基：日本医学放射線学会診断専門医，日本核医学会 PET 核医学認定医，日本血管造影・IVR 学会指導医

浅田修市：日本医学放射線学会診断専門医

5. 自己評価

評価

平成 16 年 6 月に新病院開院後、放射線部は、中央診療施設として、一般単純撮影、CT、MRI、乳房撮影室、骨密度測定室、核医学検査室、X-線透視室、血管造影室、放射線治療がすべて 1 階に集中して配置されているため、動線上も効率的運用に大いに資している。平成 19 年 11 月には核医学検査室に PET/CT 装置を導入し、院内症例のみならず病診連携を介して院外症例も FDG-PET/CT 検査を開始している。

平成 21 年度の CT 検査総数はおよそ 24,500 件、MRI 検査総数はおよそ 10,700 件であり、それぞれ 600 床規模の独立法人化国立大学病院平均のおよそ 1.50 倍、1.55 倍と非常に多くの検査件数を実施している。

平成 20 年度より導入された画像管理加算 2 の算定を満たすべく、CT・MRI・RI 検査の 80%以上を放射線科診断専門医による読影を行っている。

現状の問題点及びその対応策

- 1) サーバーのダウンなどの予期できない障害の発生が起きることがあり、紙運用やフィルム等により対応しているが、時として検査・治療に支障をきたすことがある。
- 2) 放射線機器の高性能化と診療要求内容の高度化に伴い、それに対応すべく診療放射線技師の技術研修が必要であり、時間的不足を補って十分な研修が行えるよう対応していかなければならない。
- 3) CT 室、MRI 室、放射線治療棟などへの看護師の配置が不十分である。
- 4) オーダーリングシステムは、全検査、治療で行っているが、核医学検査は患者さんが受付に直接来ていただいて、検査日の確定を行っている。今後は外来にて検査日の確定が出来るよう改良が必要である。

- 5) 同規模の国立大学病院と比較し、CT・MRI 検査総数の過多を指摘されている。今後長期的に適正な検査数へと是正する必要がある。

今後の展望

平成 23 年度において、マイクロセレクトロン、CT 装置、X 線テレビ装置、血管造影装置、ガンマカメラの 5 機種が更新予定であり、乳房生検装置が新規に導入される予定である。

今後、さらに技師、看護師、医師の人的確保を目指し、旧装置の更新および新しい装置の導入を図ることにより、効率的運用を目指していく必要がある。

(23) 材料部

1. 診療の概要

材料部は、かつて各部署において独自の滅菌業務が行われていたため、滅菌業務を行う最大の部署として中央材料部と呼ばれていました。しかしながら、近年の複雑化する医療現場における滅菌業務を中央化する必要があり、1箇所に機能を集約し、材料部の名称となりました。業務の内容としては2つ挙げることができます。1つ目は洗浄滅菌業務です。具体的には、病院全体の診療及び看護に使用する医療用器材等を洗浄・組み立て・滅菌し、安全で質の良い滅菌及び消毒済み各種医療器材を作成する重要な役割を担っています。さらに供給回収業務として、臨床の場に必要なに応じて適切に医材を提供し、かつ、使用済みの医材を回収し次の滅菌に備えて洗浄等の滅菌前処置を行う業務も平行して行っています。2つ目は医療材料の物流管理業務です。国立大学病院が法人化し、医療経営の効率化が重要視される現在、非常に重要であり責務のある業務となっております。具体的には、医療材料等の選定、発注、検収、在庫管理、供給、搬送、消費、ロット・シリアル番号管理、定数補充といった一連の物品の流れを一元的に管理し、不良在庫の抑制、医療材料購入の効率化、円滑化を図る業務です。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

なし

5. 自己評価

評価

効率的な病院経営のため、滅菌業務はすべて外注化し、安全で効率的な滅菌物品の供給ができています。医療用器材等の洗浄業務においても、中央集約化に向け取り組み、今年度は泌尿器科外来及びMEセンターに関しても材料部へ移行でき、ほぼ洗浄業務の一元化ができていますと考えています。

また、物流管理業務についても、すべて専門SPD業者に外注することにより、現場の医療スタッフの物品管理に係る煩雑さが軽減され、本来業務に専念できる環境が整ったと考えます。

現状の問題点及びその対応策

近年、厳しくなる医療経営を背景に、全国の他の国立大学病院においても病院全体として全力で取り組んでいるのが医療材料の購入の管理です。医療材料の年間の購入額は病院全体で数億円にのぼり、不良在庫を如何に削減していくかが、病院の収支を考える上で重要な課題となってきます。材料部としては大学病院としての医療レベルを落とすことなく、医療材料の購入額を抑えるという、相反する難題を克服しなければなりません。そこで、現在は新規医療材料の採用は、同等の製品がある際には、従来の製品の購入をしないという原則（一増一減）に基づいて新規医療材料の採用を行っています。また、医療材料の部署配置定数の適正化を進めています。各部署の定数が適正に設定されていない場合、部署在庫切れが発生したり、不良在庫の増加や使用期限切れの原因となるため、使用実績、定数補充状況を検討し、随時定数の見直しを行っています。

滅菌業務としては、機器に応じた適切な滅菌方法の確立、洗浄・滅菌記録の保存を重点的に行い、洗浄・滅菌運転記録表の見直しを行いました。今後の問題点としては、外注業者が変わる可能性があり、業務に習熟した人材を確保することおよび「プリオン病感染予防ガイドライン」で推奨される処理方法を検討することが挙げられます。また、現在全国国立大学病院材料部長会議の議題として、「単回使用器材(Single-Use Device)の再生処理使用について」が挙げられています。再使用によるコスト削減や資源の有効利用が期待できる反面、性能や感染防止等の安全性の確保が今後の検討課題とされています。

今後の展望

滅菌業務に関しては、経営の効率化を主眼として手術部の8枠フル稼働が期待されており、それに伴い洗浄・滅菌業務の増大もしくは、必要物品の定数の増大が予想され、それに対応する人員の配置、設備の拡大が必要と考えられます。

医療情勢の複雑化に伴い医療業務の安全性のさらなる確保，標準化，コストパフォーマンスの上昇を目指し，病院内での材料部の果たす役割は，さらに大きな物になっていくと考えられます。

(24) 輸血部

1. 診療の概要

輸血部の診療は輸血細胞療法の安全、適正、有効性を確保することにある。輸血療法は現代医療に不可欠な治療手段であるが、その実態は最も普及した「移植医療」である。他人の臓器（造血・免疫系）を最小限の検査で移入するので、致死的な副作用・合併症や難治性（致死性）感染症の伝搬などのリスクを伴う。そのため、最小量の輸血療法にすべく自己血輸血療法やサイトカインの利用、さらに人工血液などの開発が必要である。

現在、岐阜大学病院では、手術患者のうち輸血を受ける患者の 89%は自己血を輸血部医師の責任の元に貯血し、貯血した患者のおよそ 90%は同種血を回避できている。たとえば、消化器外科患者の赤血球使用量（自己血及び同種血の合計）は漸減し、特に同種赤血球輸血は 5 年間一貫して減少し続けた。厚生省医薬安全局による全国一斉調査（平成 10 年 11 月 1 ヶ間）では、岐阜大学病院内で使用される赤血球輸血のうち 4 割が自己由来であり、本邦第一の自己血輸血の実施率となっている（数年毎に再調査しても、この傾向は不変である）。適応症例及び採取量は近年さらに増加し、当院における年間自己血貯血量は 1,628 単位（2011 年）と前年（1,546 単位）より増加した。同様に、造血幹細胞採取・移植患者数と件数は増加している。

輸血部医師は過去 20 年以上に渡って最小輸血量の教育の一環として自己血輸血療法を指導し、貯血・希釈・回収の 3 法を実践してきているが、同種の輸血細胞治療は今なお増加しているのが現状である。他人の骨髄系および免疫系臓器を含む血液の移入の年間実施数は赤血球製剤 7,311 単位（2010 年）から 7,294 単位（2011 年）と推移した。FFP 製剤は 4,587 単位（2010 年）から 3,449 単位（2011 年）と減少し、血小板製剤は 16,800 単位（2010 年）から 17,250 単位（2011 年）と急増している。当院ではこれら細胞製剤の全てに放射線照射して致死的輸血副作用である輸血後移植片対宿主病を防止している。輸血部の主導で 1988 年初頭照射を開始し、臨床研究の結果を踏まえ、完全実施を目指して致死的副作用の存在を指摘してきたが、同副作用が医療訴訟の対象になるに至ってようやく、1996 年 6 月 1 日、照射率を 100%と決定・実施できた。一方で、不適正な輸血（医学的適応に合致しない過剰輸血）は大学病院を含む大多数の病院においてごく一般的にみられるものであり、同様に当院においても一部は慣習的な行為となっているので、輸血部医師による指導により是正の努力を 10 年余に渡って行った結果、FFP 比は 1.0 以上から 0.48 へと減少し、アルブミン比は一般的な大学病院における指数 3~4 から、2.14（2011 年 12 カ月平均）までアルブミン使用量が減少した。輸血管理料 I の算定要件である FFP 比 0.5 未満、アルブミン比 2.0 未満に到達しつつある。さらにアルブミン製剤の払い出しも輸血部で行えるよう準備中である。

2. 教育施設

- 1) 認定輸血検査技師制度指定施設
- 2) 輸血医学認定医制度認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：自己フィブリン糊の製造

診療内容：自己 FFP を冷凍保存した後、冷蔵解凍すると沈澱してくる凝固因子の濃縮物を生体接着、血管からの出血量の減少のために用いる。

他病院での導入状況：年間 438 件（2011 年）の製造量は国公立大学病院中第 1 位である（2010 年には 431 件）。

国内的評価：製造している国公立大学病院 90 校中 19 校に過ぎない（2010 年）。

国際的評価：同種製剤としての評価は米国等で確定されていると思われる。

- 2) 診療名：自己血小板糊の製造

診療内容：全血で自己血を採取後、無菌的に多血小板血漿を分離供給する。血小板が分泌する組織成長因子を骨造成術のために活用する。

他病院での導入状況：本院では口腔外科の依頼によって 2006 年より導入した。

製造している国公立大学病院 4 校に過ぎない。

国内的評価：2000 年以降、国内の一部の大学病院等に導入が始まった。

国際的評価：1990 年後半に口腔外科領域に応用され始めた。今後の評価を要する。

4. 専門医・認定医・指導医

大塚節子：日本輸血医学会認定医、日本麻酔学会指導医、日本麻酔学会認定医、日本医師会産業医

5. 自己評価

評価

輸血療法の安全、適正、有効性の確保に全力で努めており、診療・教育に関しても一定の成果を上げていると考えているが、研究面については人的不足もあってそのための十分な時間が確保できていない。

現状の問題点及びその対応策

教育活動：

認定医 1 名、認定検査技師 1 名ほか検査技師 2 名の計 4 名が輸血部の全構成員である。この認定医・講師 1 名で、院内の医師を対象に、卒前・卒後教育を担う事はかなり困難を伴う。また、認定検査技師 1 名で時間外の輸血業務のために非専門の検査技師 30 余名を教育しているが、自動化機器の操作を修得する事に主眼がおかれ、輸血医学までの十分な教育に時間がとれない。このような事情から、輸血部医師の増員を要望していたが、2012 年 4 月より助教 1 名が増員される予定である。

診療活動：

「輸血部検査」業務、

ABO 型不適合輸血等の医療事故は防止できるか？

事故防止には、輸血学会によって推奨された手順書に示されるごとく、ABO 型のダブルチェックが最重要である。時間外のみならず、時間内もしばしば検査技師一人体制では、自動化機器がこの不足している技師の変わりをしている。

- ①自動化機器が故障・停止した時にも対応可能な教育を受けた検査技師は、現輸血部 24 時間体制において、輸血部技師の 3 名に過ぎない。
- ②使用しなかった血液製剤の輸血部への返却がされないため、破棄処分となる製剤が多く、損金として計上されている。
- ③救急では ABO 型のダブルチェックの原則が無視されがちである（ダブルチェック用の検体の提出を要求し続けて、漸く数時間後に検体が届く／検査部にも輸血部にも原則を満たすための検体が無い）。
- ④また、電子カルテの理解不足から、オーダーの毎に添付される ABO 型検査依頼を削除しないために、ABO 型検査用のラベルが排出し、それを次の患者の血液スピッツに貼付けるといった誤りも発生している。
- ⑤標準 20 分で血液が用意される救急施設が多い中で、「1 時間を要する」というクレームが発生している。
- ⑥救急部門重視の当院を支える輸血部門としては専門の検査技師が決定的に不足している。

「輸血管理学」業務

1) ハードではなく運用によって以下の現状をさらに改善可能である。

- ①血液製剤破棄率：赤血球 1.25%から 1.73%，血小板 0.36%から 0.86%，FFP 0.55%から 3.73%，Albumin 0.09%から 0.02%に変化。（2010 年と 2011 年のデータ）
 - ②血液製剤破棄額：373 万円（2011 年）、145 万円（2010 年）
 - ③過去半年間（2011 年 4 月～9 月）の輸血用血液保険査定額：118 万円、査定率 1.24%。
- 2) いわゆる血液新法（2003 年施行）から新たな技術料「輸血管理料」の保険収載（2006 年～）まで。
- ①「血液新法」によって、医療機関には副作用情報の収集報告と「適正使用」が義務化された。
副作用に関しては中等度から重症の副作用の定義の浸透、あるいは TRALI 等致死的反応が発生し得ると謂う教育を一般医療従事者に始めなければならない現状である。
 - ②厚労省の医療費削減政策にもかかわらず、「輸血管理料」が認められた背景には適正な輸血療法によって、少子高齢化による輸血液の供給不足を解消し、「血液新法」の付帯事項（血漿分画製剤の 2008 年までの完全国内自給化）を満たす要があった（現自給率 60%）。
 - ③「輸血管理料」の要件、FFP/MAP 0.5 未満、(Alb g+3)単位/MAP が 2 未満に対して直近の当院の実績は FFP/MAP 0.48 と満たし、(Alb g+3)単位/MAP 2.14 と診療科の努力等によって管理料取得の実現可能な数値を示している。また、輸血療法委員会を年 6 回以上開催するのが要件であり実施している。
 - ④厚労省研究班より研究協力依頼に応じて副作用監視指定施設として登録済みであるにもかかわらず、完全ペーパーレス電子カルテに伴って、臨床現場に発生する副作用情報が real time に輸血部門に配信されない状態が続いているため、ハードの点検等情報部門の援助を要する。また、「輸血指針の改定」（2005 年 9 月）によって副作用情報の収集のために空バックを回収するよう指導されているところであるが、移転前に運営委員会において承認済みにもかかわらず、感染対策室（旧）の反対により実行されるに至っていない。副作用発生時において、供血者の血液型/DNA 型、細菌汚染等の検索のためには空バックに附随する供血者の細胞等の検体が必須である。
 - ⑤学会等で authorize されて流布されている血液センター集計の副作用発生率の 60～100 倍が実際には発

- 生しているといわれているが、細菌感染・TRALI等の発症率、その他の副作用の病態については不明のままである。本院には輸血副作用の原因調査体制が整備されていない現状であり、人員配置を要する。
- ⑥輸血領域においては、試薬の品質管理：標準化、QCコントロールが未だ為されていない。
 - ⑦厚生労働省等を介する詳細な輸血関連アンケート調査が、2ヶ月に1回程度課される。
 - ⑧輸血後感染症検査、日赤遡及調査、生物由来製品感染等被害救済制度（2004年）に対応して、早急に輸血前保存検体（PCR対応）を電子カルテ化する必要がある。

3) 「輸血部外来診療」

自己血外来：診療科として公式ではないが、実質上、自己血外来を週5日開設している（1989年～）。年間採取量1,000単位を越す事から、輸血部は「血液銀行」業務を担っている。

- ①担う医師は1名、看護師0.5名（救急あるいは採血室兼務が担う）、検査技師3名。
- ②院内採取量（2011年）；自己血1,628単位製造、自己フィブリン糊438袋製造。
- ③2006年からは口腔外科の依頼に応じて自己PRP（platelet rich plasma）製造を開始。

4) 「外部からの検査等の業務依頼の請負」

- ①骨髓バンク財団より調整医師業務（平成18年～）。

今後の展望

輸血部医師の増員でこれまで以上に輸血療法の安全、適正、有効性が保証されるものと期待される。

「日本輸血学会」が、2006年から「日本輸血細胞療法学会」と改称したので、当輸血部も、細胞療法を安全に施行できるように整備していく必要がある。

再生医科学専攻・組織器官形成分野からは、歯髄より抽出された間葉系幹細胞バンク業務を要請されていることもあり、将来的には細胞プロセッシングセンター運営のガイドライン（作成中）に従い、細胞療法士（仮称）相当の人材が必要である。

(25) 病理部

1. 診療の概要

病理部は、大学病院内で発生する病理検体の診断（術中迅速を含む組織診・細胞診）業務、及び病理学講座とのタイアップにより病理解剖業務を担っている。その運営理念としては、「速やかに且つ確実な病理診断を臨床側に提供するために、病理業務全般にわたるスピードと精度のたゆまない改善の2点にこだわりを持つ」こととしている。実績としては下表に示すように、年間件数で病理組織 9,000 例ほど（うち迅速検査 500 件余り）、細胞診 7,000 件余り、病理解剖 40 例余りを施行している。

	2009 年	2010 年	2011 年
組織診件数	8,615	9,253	9,427
術中迅速件数	434	468	510
細胞診件数	6,101	6,745	6,968
病理解剖数	44	36	37

2. 教育施設

- 1) 日本病理学会認定施設
- 2) 日本臨床細胞学会認定施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

高見 剛：日本病理学会専門医
廣瀬善信：日本病理学会専門医，日本臨床細胞学会専門医
浅野奈美：日本病理学会専門医，日本臨床細胞学会専門医

5. 自己評価

評価

理念に掲げたスピーディーな結果報告のために、部内でのターンアラウンドタイムの努力目標を生検材料 3 日以内・手術材料 7 日以内・細胞診 3 日以内に設定した。実際のターンアラウンドタイムを適時モニターした結果、生検材料及び細胞診においては、目標に概ね近い数字を残すことが出来た。

病理・細胞診断の精度向上のために、引き続き各種の定期カンファランスを実施した。まず、病理医向けの院内症例検討会を毎週行い、様々な難解症例・典型症例・貴重症例を一同がディスカッション顕微鏡を覗きながらレビューする機会を設け、継続した。また、病理医と病理技師のための細胞診一組織診勉強会を毎週行い、細胞像と組織像の照らしあわせをディスカッション顕微鏡で検鏡しながら行った。病理・細胞診断の質的精度は評価しにくいですが、これらの定期カンファランスは精度アップに少なからず貢献したものである。それらはまた、病理・細胞診専門医および細胞検査士の資格取得のための勉強会も兼ねており、それらの資格取得者も順調に増やすことができた。

高度先進医療を担保し下支えする病理の責務のため、病理解剖症例を検討する CPC の開催に加えて、院内カンファランス・研究会を開催あるいはこれらに積極参加した。これまでに開催してきた消化器グループ、整形外科、脳外科などと合同の定期カンファランス・研究会に加えて、泌尿器科、産婦人科、皮膚科などと合同でカンファランスを行うことができた。また、新たに立ちあがった院内 Cancer board でも病理提示を行い、教育的にも貢献を果たした。これらによって、高度先進医療の診断治療のベースとしての病理の意義を臨床側と共有することができた。

また、病理標本作製の精度管理のため、部内での特殊染色・免疫染色勉強会を定期的に行った。病理業務の土台である各種染色の原理・方法・意義・染色態度・工夫点などを全員で確認することができた。

現状の問題点及びその対応策

手術検体のターンアラウンドタイムが目標に比べてやや長め（9-10 日）であった。特に硬組織の脱灰に長時間を要してしまった。これらは今後の課題と思われ、その対応として標本作製のさらなる改善・見直し等によって、時間短縮を図っていきたい。

診療開発などの研究的側面に特記することが無い現状も問題点として挙げられる。昨今の高度先進医

療・個別化医療における遺伝子・悪性度情報など、病理診断の役割はさらに重要になってきており、その点に注目した診断手法的開発を行っていききたい。

今後の展望

運営理念として掲げた「病理業務全般にわたるスピードと精度のたゆまない改善の2点にこだわりを持つ」ために、さらに継続して努力する。引き続き、院内外での研究会・検討会・カンファランスへの積極的な参加・発表を行っていくとともに、学生・研修医・若手病理医・検査技師等の教育全般にも力を注ぐ。また、分子標的薬の臨床応用等に見られるように、疾患（特に腫瘍）診断における遺伝子情報の重要性がさらに高まっている。診療開発として、病理診断における遺伝子診断の併用等を、今後の展開目標とする。

(26) 医療情報部

1. 診療の概要

医療機関の ICT 化が広がりつつある。医療情報部は病院内の ICT 化を推進する母体であり、電子カルテシステムの設計・快活・運用を担当している。電子カルテシステムの運用により診療記録や画像情報等はすべて電子化され、ペーパーレス/フィルムレスの電子化病院として現時点でも世界最先端の状態にある。このような ICT 化された病院の運営を支えるためには、電子カルテシステムの安定稼働、各種マスター類の整備と管理、蓄積された患者情報の長期に亘る安定した管理体制の構築と維持が不可欠である。医療情報部はこのような日常診療を支える ICT 化環境の維持・管理・運営に努力をしている。

2. 教育施設

なし

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

白鳥義宗：日本内科学会認定医・指導医、日本消化器病学会専門医、日本肝臓学会専門医・指導医

5. 自己評価

評価

電子カルテシステムとしては世界最先端の評価を得ている。また、医療情報部の活動としては日常診療を支えるシステムの安定稼働に貢献できたと考えている。

現状の問題点及びその対応策

日常診療の運営を安定して支える電子カルテシステムを維持・管理するためには組織としての体制を充実させることが課題である。特に、電子カルテシステムは技術進歩の速い ICT 分野であるため、それを支える医療情報部スタッフの教育が不可欠である。しかし、これまでは電子カルテシステムの安定稼働を優先し、最先端の ICT 技術等に積極的に触れる機会を十分に与えてこなかった。今後は、医療情報部スタッフが自己研鑽できる環境の構築と充実に努力したいと考えている。

今後の展望

蓄積された膨大な診療データを病院の運営や診療の質向上に活用することが求められている。そのためには、診療データの抽出・分析・診療支援機能へのフィードバックを積極的に推進する必要がある。また、診療データの分析や診療プロセスの分析を担当する人材の育成が急務の課題である。医療情報部は、今後このような活動に対し積極的に対応したいと考えている。

(27) 光学医療診療部

1. 診療の概要

I. 胃腸疾患

- 1) 消化管の早期癌に対しては、超音波内視鏡検査や NBI などの特殊光を併用した拡大内視鏡観察を用いて正確に診断し、食道癌、胃癌、大腸癌、大腸腺腫に対し内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) を積極的に行う。高齢者や重篤な基礎疾患を有する症例には、より低侵襲のアルゴンプラズマ凝固装置 (APC) を用いた焼灼術も行う。また進行癌には化学療法やステント留置術を行う。
- 2) 消化管出血例には緊急内視鏡検査を行い内視鏡的止血術を施行する。食道胃静脈瘤に対しては内視鏡的硬化療法 (EIS) や結紮術 (EVL) を行う。
- 3) また最近では、これまで診断が困難であった小腸病変に対してダブルバルーン小腸内視鏡、カプセル内視鏡を導入し、より正確な診断を得るようにしている。炎症性腸疾患に対しては、内視鏡を用い積極的に診断、重症度判定を行い、適切な治療を行うこととしている。
- 4) その他、種々の疾患による経口摂取不能患者に対し内視鏡的経皮的胃瘻増設術 (PEG) を行い、消化管狭窄例には内視鏡下でのバルーン拡張術を行う。

II. 胆膵疾患

- 1) 超音波内視鏡検査 (EUS)：早期膵癌、胆嚢癌の拾い上げを目的として、血液・他の画像所見において異常が見られた場合に二次スクリーニング検査として行っている。また、膵嚢胞性病変・腫瘍性病変、胆嚢隆起性病変の鑑別診断、膵癌・胆道癌の病期診断にも取り入れ精密な診断を行っている。
- 2) 超音波内視鏡下針生検 (EUS-FNA)：膵癌の確定診断、膵腫瘍の鑑別診断、消化管粘膜下腫瘍の鑑別診断はもとより、肺癌のリンパ節転移診断や体表からの生検が困難な縦隔・腹腔内の原因不明腫瘍、副腎、脾臓など広範囲かつ多彩な部位・臓器からの組織採取を行っている。
- 3) EUS-FNA を応用した治療手技：膵仮性嚢胞・膵膿瘍・感染性膵壊死に対するドレナージや癌性疼痛に対する腹腔神経叢ブロックを行っている。
- 4) 総胆管結石の治療：内視鏡的乳頭切開術 (EST) や内視鏡的バルーン乳頭拡張術 (EPBD) を状況によって使い分け治療を行い、また巨大結石や合流部胆石などの内視鏡治療困難例に対しては、経口胆道鏡下のレーザー碎石や経皮経肝胆道鏡下碎石を行っている。
- 5) 胆道狭窄・閉塞に対するステント留置：原疾患や状況に応じて胆道ステントを使い分けて治療を行っている。

III. 呼吸器疾患 (肺癌)

- 1) 従来、気管支内視鏡的診断が困難であった、肺末梢病変に対しては、ガイドシース法を用いた透視下生検 (気管支内視鏡下に透視下誘導子を用いてガイドシースを挿入し、シース内に気管支内視鏡エコーを挿入し、腫瘍部位を同定する。エコーを抜去後、生検やブラッシングを施行する) ことにより診断率向上に努めている。
- 2) 早期肺癌の中で低肺機能や全身状態不良にて手術困難な症例に対しては、超音波内視鏡検査を用いて進達度診断し、PDT (Photo dynamic therapy) や内視鏡レーザー治療を施行する。また、中枢気管支発生肺癌に対しては気管支腔内放射線治療を施行している。一方、気道狭窄を来たような進行癌には気管支パルピングによる拡張やステント留置術を行う。また、緊急喀血例には止血用バルーンによる内視鏡的止血術や気管支動脈塞栓術等を行う。
- 3) 縦隔リンパ節転移診断や縦隔型肺癌、縦隔腫瘍に対しては、気管支超音波気管支内視鏡下生検 (EBUS-TBNA) を施行し、エコーガイド下に生検を施行する新たな気管支内視鏡診断法を取り入れた診断を行っている。
- 4) 最近では、これまで診断が困難であった肺末梢微小肺腫瘍病変に対して、極細径気管支鏡を用いた、CT ガイド下気管支内視鏡検査を導入し、より正確な診断を得るようにしている。
- 5) 肺門部肺癌や縦隔リンパ節転移症例において Narrow Band Imaging = 狭帯域フィルター内視鏡 (NBI) を用いることにより病期、進達度診断を行っている。

IV. 呼吸器疾患 (びまん性肺疾患)

- 1) 特発性間質性肺炎やサルコードーシス、原因不明のびまん性肺疾患や呼吸器感染症に対して、気管支内視鏡下に BAL (気管支肺胞洗浄法) を施行し、細胞成分、各種サイトカイン、各種ウイルス、細菌検査を施行し、病因を診断する。また、透視下に肺生検を施行し、検査肺組織を陰圧で膨らませ、びまん性肺疾患の診断を行う。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定内科専門医教育施設
- 2) 日本消化器病学会認定施設
- 3) 日本肝臓学会認定施設
- 4) 日本消化器内視鏡学会指定施設
- 5) 日本呼吸器病学会認定施設
- 6) 日本呼吸器内視鏡学会認定施設
- 7) 日本臨床腫瘍学会認定研修施設
- 8) 日本がん治療認定医機構認定研修施設
- 9) 日本アレルギー学会認定教育施設
- 10) 日本胆道学会指導施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : ダブルバルーン小腸内視鏡とカプセル内視鏡による診断と治療
診療内容 : 原因不明の消化管出血患者の小腸領域の疾患に関し内視鏡的に診断・治療する。
他病院での導入 : 岐阜県内では、ダブルバルーン小腸内視鏡と小腸カプセル内視鏡の両機器を導入し診療している施設は数施設のみ。
国内的評価 : 小腸疾患の診断と治療には極めて有用な新しい診断治療技術をして、国際的にも研究評価が進んでいる。
国際的評価 : 同上
- 2) 診療名 : 先進医療での大腸腫瘍に対する内視鏡的粘膜下層剥離術 (大腸 ESD)
診療内容 : 内視鏡的粘膜切除術 (EMR) で対応不可能で一括切除が望まれる大腸腫瘍に対し、内視鏡的粘膜下層剥離術により治療する。
他病院での導入 : 岐阜県内では、先進医療として大腸 ESD を施行しているのは数施設のみ。
国内的評価 : これまで外科切除や再発や正確な病理学的評価が困難である可能性が否定できない分割切除で治療されていた大腸腫瘍に対する新しい内視鏡治療として評価されている。当院では 300 例以上の症例を治療している。
国際的評価 : 同上
- 3) 診療名 : 超音波内視鏡下生検 (EUS-FNA)
診療内容 : 体表より穿刺不可能な腫瘍性病変やリンパ節病変に対して、消化管より超音波内視鏡ガイド下にて針生検を行う。
他病院での導入 : 岐阜県下では既に 3 施設 (岐阜市民病院, 岐阜県総合医療センター, 高山赤十字病院) が導入しているが、全国的にはまだ普及が遅れており、一般臨床レベルで行っている施設は、50 施設に満たない。
国内的評価 : 当施設では年間約 200 例に対して本検査を行っており、国内では最多の症例数を誇る。また、これらの診断・治療成績は海外のトップジャーナルに多数掲載されており、国内外からの見学者も多数訪れるなど国際的な評価も高い。
国際的評価 : 同上
- 4) 診療名 : 気管支内視鏡による診断と治療
診療内容 : 気管支内視鏡エコー検査を用いた肺腫瘍の組織性状の研究にて H20 年度日本内視鏡財団より研究助成金をいただき、気管支内視鏡エコー検査にて、腫瘍の組織性状、進達度、リンパ節転移有無に対して質的診断を行う。
他病院での導入 : 現在、臨床応用されている呼吸器内視鏡エコー検査は岐阜県内では岐阜市民病院、長良医療センターで導入されている。
国内的評価 : 平成 17 年日本呼吸器内視鏡学会総会にて呼吸器と再生医学に関するシンポジストとして発表を行った、平成 20 年度日本内視鏡財団より気管支内視鏡後方拡散エコー法を用いた、腫瘍の組織性状診断、進達度、リンパ節転移診断に関する研究助成金を受けた。平成 21 年日本呼吸器内視鏡学会総会にて呼吸器内視鏡の進歩のシンポジストとして発表をおこなった。
国際的評価 : 今後、内視鏡に関する研究成果を欧米雑誌への投稿や世界気管支鏡学会や米国胸部学会等の国際学会で発表を行う予定である。
- 5) 診療名 : 気管支超音波内視鏡下生検 (EBUS-TBNA)
診療内容 : 透視下診断不可能な腫瘍性病変やリンパ節病変に対して、中枢気管支より超音波内視鏡ガ

イド下にて針生検を行う。

他病院での導入：当科およびほかのいくつかの施設で導入。

国内的評価：これまでは開胸術にて診断していた深部病変に対して、非侵襲的に診断が可能であり、極めて有用な新しい診断技術である。

国際的評価：同上

4. 専門医・認定医・指導医

森脇久隆：日本内科学会認定内科医・指導医，日本消化器病学会専門医・指導医，日本肝臓学会専門医・指導医，日本消化器内視鏡学会専門医・指導医，日本臨床腫瘍学会暫定指導医

荒木寛司：日本内科学会認定内科医，日本消化器病学会専門医・指導医，日本消化器内視鏡学会専門医・指導医，日本臨床腫瘍学会・暫定指導医，日本がん認定医機構・暫定教育医

安田一朗：日本内科学会認定内科医，日本消化器病学会専門医，日本消化器内視鏡学会専門医・指導医，日本胆道学会指導医

大野 康：日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・指導医，日本呼吸器病学会・専門医・指導医，日本呼吸器内視鏡学会・専門医・指導医，日本臨床腫瘍学会・暫定指導医，日本がん認定医機構・暫定教育医

井深貴士：日本内科学会認定内科医・日本消化器内視鏡学会専門医，日本消化器病学会専門医

小野木章人：日本内科学会認定内科医・日本消化器内視鏡学会専門医，日本消化器病学会専門医

土井晋平：日本内科学会認定内科医，日本消化器病学会専門医，日本消化器内視鏡学会専門医，日本がん治療認定医

舟口祝彦：日本内科学会・認定医・専門医，日本呼吸器病学会・専門医，日本呼吸器内視鏡学会・専門医，日本がん認定医機構・教育医

5. 自己評価

評価

消化器領域では，最新の医療技術として内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD），小腸内視鏡，超音波内視鏡下吸引針生検（EUS-FNA）などを積極的に導入し，県内外からご依頼を受け，症例の蓄積している。

また，呼吸器領域では最新の医療技術としてガイドシース法を用いた末梢肺病変の診断，極細径気管支鏡を用いた CT ガイド下気管支鏡，中枢気管支に対する気管支腔内照射，気管支超音波内視鏡下吸引針生検（EBUS-TBNA）などを積極的に導入し，県内外からご依頼を受け，症例の蓄積している。

現状の問題点およびその対応策

技術的に検査・治療の困難な症例もある点と患者様への侵襲が少なからずある点が問題。症例によってはどうしても時間を要するものもあるが，より安全に，そして患者様に苦痛を与えないような技術の習得に努めたい。

今後の展望

より安全かつ最先端な技術を導入するべく努力したい。

(28) 高次救命治療センター

1. 診療の概要

これまでと同様。岐阜大学医学部附属病院の急性期重症患者の治療に当たる中央部門であり、ドクターヘリ基幹病院でもある。

病院内外で発生する重症患者、他の医療機関・救急救命センターで対処できない高度な治療を必要とする患者に対して、24時間体制で総合的、集学的な高度な診断・治療を行う。

2. 教育施設

- 1) 日本救急医学会指導医認定施設
- 2) 日本集中治療医学会専門医認定施設
- 3) 日本航空医療学会認定施設
- 4) 日本透析医学会専門医制度認定施設
- 5) 日本外傷学会専門医研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 高気圧酸素療法
診療内容: 高気圧酸素療法の感染症、外傷に対する臨床応用
国内的評価: 国内多施設共同研究の事務局として推進している。
国際的評価: 前例が少なく、有望

4. 専門医・認定医・指導医

小倉真治: 日本救急医学会指導医・専門医, 日本麻酔科学会指導医・専門医, 日本集中治療医学会専門医, 日本外傷学会専門医

豊田 泉: 日本救急医学会専門医・指導医, 日本脳神経外科学会専門医, 高気圧酸素治療専門医, 日本航空医療学会認定指導医(フライトドクター)

白井邦博: 日本救急医学会指導医・専門医, 日本集中治療医学会専門医

牛越博昭: 日本内科学会認定内科医, 日本内科学会総合内科専門医, 日本内科学会認定臨床研修指導医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 米国内科学会フェロー, 日本医師会認定産業医

金田英巳: 日本救急医学会専門医, 日本外科学会認定医, 日本胸部外科学会認定医, 日本麻酔科学会認定医, 日本医師会認定産業医

吉田省造: 日本救急医学会専門医, ICD 制度協議会認定医, 日本化学療法学会抗菌化学療法認定医, 日本透析医学会専門医

熊田恵介: 日本救急医学会指導医・専門医, 日本集中治療医学会専門医, 日本航空医療学会認定指導医(フライトドクター)

中野通代: 日本麻酔科学会専門医, 日本救急医学会専門医

吉田隆浩: 日本外科学会認定医・専門医, 日本救急医学会専門医

川井 豪: 日本整形外科専門医

長屋聡一郎: 日本救急医学会専門医, 日本小児科学会専門医, 日本麻酔科学会認定, 麻酔科標榜医, ICD 制度協議会認定医

土井智章: 日本救急医学会専門医, 日本透析医学会専門医, 日本外科学会専門医・認定医, 高気圧酸素治療専門医, ICD 制度協議会認定医, 日本化学療法学会抗菌化学療法認定医

名知 祥: 日本救急医学会専門医, 日本外科学会専門医・認定医

森下健太郎: 日本内科学会認定内科医, 日本循環器学会認定循環器専門医, 日本心血管インターベンション治療学会認定医

谷崎隆太郎: 日本内科学会認定内科医, 抗菌化学療法認定医, 日本旅行医学会認定医, 日本医師会認定産業医

井原 頌: 日本外科学会専門医, マンモグラフィ検診精度管理中央委員会認定読影医・指導医

大野智彦: 日本内科学会認定内科医

山田法顕: 日本救急医学会専門医

南 公人: 日本麻酔学会認定医, 日本周術期経食道心エコー認定医, 麻酔標榜医

5. 自己評価

評価

高度救命救急センター日本救急医学会指導医認定施設として名実ともに中部地方救急医療の最後の砦として若手教育機関として、岐阜県のみならず他県からも高い評価を受けている。

現状の問題点及びその対応策

医療の高度化，細分化に伴い更なるスタッフの充実が望まれる。

今後の展望

岐阜県のドクターヘリ事業が開始により，県内（一部は県外）のよりよい救急医療体制を支える。

(29) 医療連携センター

1. 診療の概要

概要

医療連携センターは以下の目的で存在する。

1. 大学病院の高度な先進医療を地域の患者が安心して利用できるための医療環境の整備
2. 大学病院医療の機能分担の明確化と病診・病病連携による効率的な医療を提供できる体制の充実
3. 保健・医療・福祉を一体化した地域完結型の充実
4. 効率的な退院支援のできる体制の整備
5. 患者・家族の抱える様々な問題に対する支援体制の整備
6. 岐阜県難病医療連絡協議会の事務局活動
7. 都道府県がん診療連携拠点病院，肝疾患診療連携拠点病院，エイズ治療中核拠点病院，高次画像診断センターと地域医療ネットワークをリンクさせる統合窓口と管理システム

運用内容

1. 構成職員：センター長，副センター長，センター専任看護師，ソーシャルワーカー，センター専任事務職員

2. 稼働日・時間：月～金曜日 8時30分から17時15分（祝祭日は稼働停止）

* 地域医療連携の稼働時間は他診療機関の夕方診療に合わせて 17時まで運営。

3. 業務内容

1) 患者紹介の円滑化

他診療機関からの患者紹介を FAX（紹介連絡・予約申込票）で受け，迅速に他診療機関に決定日時を FAX で返信することによって，待ち時間の短縮などの便宜を図っている。初診受診に対しては，ID 番号を取得して発行した診察券を来院の際にセンターで直接手渡し，担当受付まで案内する。診察後には，病診連携報告書を紹介元に送付する。患者紹介を促進させるために，各科の診療内容を把握しやすくしたことに加え，当院の担当医師の顔がわかるようにした病院紹介パンフレット（診療のご案内）を関連病院に配布している。

セカンドピニオン（受け入れ）の予約受け付け，他病院へのセカンドピニオンの予約を行う。

2) 地域連携パス運用の支援

地域連携パスの患者登録，各種書類作成，患者・家族への補足説明，連携するかかりつけ医への連絡，次回受診・検査予定の把握と FAX 送信，当院受診の確認，地域連携パスの運用件数等データ収集を行う。当院は，平成 22 年 9 月よりパスコーディネーターを配置し，スムーズな地域連携パス運用に向け取り組んでいる。

3) 退院支援

退院支援の目的は，急性期治療を終えた患者が，病気や障害を抱えながらも，退院して家庭や地域の病院・施設など新たな療養の場で，安全に安心して自立した自分らしい療養生活を送ることができるよう，地域の保健医療福祉機関と連携して支援することである。

当院は，入院中の患者が適切な医療機関に向けて退院（転院）できるよう，退院支援リスクスクリーニング票の活用等により退院困難な要因を有する患者を抽出し，退院支援計画を立案している。在宅療養支援は主にセンター専任看護師が担い，転院支援はソーシャルワーカーが担う。

4) 総合医療相談

- ・女性専門相談：女性医療スタッフによる健康相談
- ・心の相談：療養に関する社会的・心理的な相談
- ・看護相談：患者と家族の療養についての相談，在宅看護・退院に伴う相談
- ・医療福祉相談：医療費，生活費などの経済的問題や社会福祉制度の相談，療養生活，転院，退院に伴う相談
- ・がん相談：「がん」に関わる医療や，がん患者の生活についての相談
- ・難病相談：難病患者が安心して住み慣れた地域で療養できるための相談
- ・セカンドオピニオン：診断法や治療法について主治医以外の意見を聞くことに関する相談
- ・要望・苦情等

5) 岐阜県難病医療連絡協議会事務局の業務内容

- ・難病医療の確保に関する関係機関との連絡調整
- ・福祉施設等への医学的指導・助言
- ・協力病院等の医療従事者向けの難病研修会の開催

・難病患者の療養環境改善のための政策提言

6) 相談支援センターの業務内容

- ・がん相談（総合医療相談の項参照）
- ・がんに関する地域の医療機関の情報収集と提供
- ・地域がん診療拠点病院相談支援センターとの情報交換と課題の共有
- ・がん患者サロン運営の支援
- ・患者会等 NPO 団体との連携

2. 教育施設

教育施設ではないが、岐阜大学看護学科実習の受け入れ等を行っている。

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

武田 純：日本内科学会認定医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本人類遺伝学会専門医・指導医，日本病態栄養学会専門医・認定 NST コーディネーター，日本糖尿病協会療養指導医
堀川幸男：日本内科学会認定医・指導医，日本糖尿病学会専門医・指導医，日本病態栄養学会専門医・認定 NST コーディネーター，日本糖尿病協会療養指導医

5. 自己評価

評価

スムーズな地域医療連携のためのネットワークシステムの確立や相談業務の充実に向け、以下について重点的に取り組んだ。

病診・病病連携の強化のために、FAX を使用した紹介システムによる病診連携，初回紹介時の病診連携報告書の整備を進め、**前方支援及び後方支援の充実**を図った。その結果，平成 22 年度診察予約件数は 6627 件（前年度比+611）と増加し，受診報告の FAX 送信，郵便発送件数も増加傾向にある。セカンドオピニオンは，平成 22 年度の実施件数が 50 件（前年度比+11）と増加した。紹介率は平成 20 年度より徐々に上がり，平成 22 年度の紹介率の年次平均が 66.04%（前年度比+1.14%）となり，病診連携システムが紹介率の上昇に貢献したと考えられる。また，平成 18 年より「岐阜地域医師会連携パス」をはじめとする**地域連携パスの運用支援を開始**した。更に，当院に平成 22 年 9 月よりパスコーディネーターが配置され，5 大がん地域連携パスを中心にスムーズな連携パス運用に向け取り組んでいる。5 大がん地域連携パスの他，生活習慣病関連の岐阜糖尿病地域連携パスや脳卒中地域連携パスなど他の連携パスの運用を整備した。具体的には，①岐阜地域のがん診療連携拠点病院共通の 5 大がん連携パス説明パンフレットの作成，②糖尿病連携手帳を活用した岐阜糖尿病地域連携パス運用の整備，パス運用の周知のための説明パンフレットの作成と関係者への紹介，③脳卒中地域連携パスの運用（新規登録から回復期病院に転院するまで）を整備し，多職種間でパスを共有する体制をつくる等，地域連携の充実に向け，取り組んでいる。その結果，当院で運用されている地域連携パスの登録件数は，181 件（平成 23 年 11 月まで）と増加傾向にある。

平成 22 年度は，「急性期病棟等退院調整加算」や「介護支援連携指導料」の算定に係る運用を定着させることで**退院支援システムの拡大**を図った。その結果，平成 22 年度の退院支援件数 391 件の内，転帰別では，自宅転帰が最も多く 246 件（前年度比+37 件）であった。また，退院前地域ケアカンファレンスの総件数は 213 件であり，前年度の約 1.3 倍に増加した。退院前地域ケアカンファレンスは，患者・家族，地域関係者（かかりつけ医，訪問看護ステーション，在宅療養支援診療所，地域包括支援センターなど），院内関係者間で退院後の医療・福祉サービスについて検討する会議であり，医療依存度の高い患者や終末期の患者等が，安心して在宅で生活する上で重要である。以上のように，在宅療養支援体制が徐々に整ったため，退院支援に関する診療報酬においても，急性期病棟等退院調整加算（140 点）210 件，介護支援連携指導料（300 点）が 78 件の他，退院時共同指導加算（2300 点）が 14 件と平成 21 年度に比べ，算定件数が増加した。

医療連携センターの相談業務には，看護相談，退院・転院相談，精神保健・医療福祉相談，難病相談，がん相談がある。平成 22 年度の相談の月平均は，552.3 件（前年比+57.5 件）で相談件数が増加した。その理由として，平成 21 年 7 月に「**がん患者サロン**」が開設され，ピアサポーターによる相談を開始した事と難病相談件数が増加した事があげられる。難病相談のほとんどが神経難病患者であり，診断早期より患者・家族の意思決定支援に関わり，退院後も地域関係者からの相談に応じる体制が定着した。

難病医療専門員は、県内各地域に出向き、関係者と調整を図り、年に4回**難病ケアコーディネーター研修会を企画**推進した。研修会の内容は主に事例検討が中心であったが、平成22年度は神経難病の面接技術研修を開催した。研修会を通じて岐阜県難病医療ネットワーク事業の円滑な推進を図っている。更に平成23年度は、岐阜県主催の「難病患者災害時対策支援事業」に参画している。

相談支援センターは、平成19年度より**相談支援センター情報交換会を開催**し、岐阜県内のがん診療連携拠点病院のがん相談実務者が参加し、情報交換や事例検討を行っている。平成23年度には、相談支援センター情報交換会から、**岐阜県がん診療連携拠点病院協議会患者相談専門部会に名称を変更**し、目標と課題を明確にした。

医療連携センターの周知に向け、教育としては、大学勤務医師、コメディカル対象に**医療連携センター研修会**を毎年開催している。研修内容は、地域医療・保健・福祉を担う医師・訪問看護師・ケアマネジャー等を講師に迎え、事例検討会、地域連携の在り方や在宅医療・継続看護・地域連携パスについての講演等を行った。広報活動として、平成19年度より「**医療連携センター年報**」を院内及び院外医療機関に配布した。また、院内職員対象に医療連携センターニュースの発行を随時行った。

現状の問題点及びその対応策

医療連携センターは、担当医による紹介先への返信状況を把握するシステムを電子カルテ上に有しているが、十分に機能しているとは言い難い。また、連携先の確保のための地域の医療機関や福祉関連施設の情報整理は充分ではなく、退院支援の連携に関する評価システムも未整備である。啓発不足のため院内職員の医療連携に関する認識の低さも課題である。実際、医療連携センタースタッフ自らが退院支援システムを稼働させているのが実態であり、院内全体で取り組む体制には至っていない。

本対策として、院内では、研修会、ホームページなどを通じた医療連携センター活動の周知と、各診療科や中央診療施設の枠組みを超えたワーキンググループの設置による、適切な医療情報収集の強化と管理体制の整備をより積極的に図っていく。

一方、院外では、地域医療連携ネットワークの確立のため、地元医師会（岐阜県、岐阜市）、救急隊との連携強化をはかるとともに、定期的に県下の医院・診療所に対し、紹介願や診療のご案内、大学病院広報の作成を行い、紹介・逆紹介のさらなる促進に努める。さらに、岐阜市医師会におけるInternet Webや県医師会によるFax紹介システムへの参加を通して、かかりつけ医推進運動と医師・患者への啓蒙運動の一旦を担う。

今後の展望

近年、医療は医師個人が行う単なる医療行為というのではなく、医療従事者の集団である医療機関が提供する、いわば「システムによる医療サービス」と変革を遂げてきている。すなわち、個々の医療機関の特性を活かした連携による「地域完結型医療」の実現が基本概念であり、患者の疾病状況に応じた治療のために地域の中で最適医療が享受できるような連携サービスの提供が求められている。各医療機関との連携強化のためには、病院機能の把握、地域連携パス策定のコーディネート、地域電子カルテの普及あるいは画像情報ネットワークの構築、在宅的施設や有床診療所との差別化が優先課題となる。これらの課題克服により、岐阜県の基幹病院としての大学病院の位置づけを明確化できるであろう。

(30) 生体支援センター

1. 診療の概要

(感染制御部門)

- 日常業務
 - ・ 検査部からの検査情報の把握 (リアルタイム)
 - ・ 院内感染サーベイランスの実施とアウトブレイクの対応
 - ・ 感染症報告書による臨床情報の把握
 - ・ 病院内ラウンドによる感染対策の徹底
 - ・ 感染症クリニック (血液・感染症内科にて)
 - ・ 感染症コンサルテーション (病院感染対策および感染症新法等)
 - ・ 針刺し事故等対策 (24 時間体制, 窓口は消化器/血液・感染症内科)
 - ・ 抗菌薬の適正使用の推進 (Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital : 診療介入)
- 月例業務
 - ・ 生体支援センター会議
 - ・ 感染対策ニュースの発行
 - ・ 厚生労働省院内感染対策サーベイランスデータ作成及び報告
 - ・ 抗菌薬使用量チェック
- その他の通常業務
 - ・ 感染対策マニュアルの改訂及び遵守の徹底
 - ・ ホームページの充実
 - ・ 職務感染対策防止策の充実 (総務課人事係との緊密な連携)
 - － 各種予防接種 (インフルエンザ, HB, MMRV ワクチンなど) の実施
 - ・ 教育・啓蒙活動
 - ・ 国公立大学附属病院感染対策協議会 (文部科学省) への参加
 - ・ 岐阜院内感染対策検討会の主催 (年 2 回, 関連病院参加)
 - ・ 感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律 (感染症法) への対応
 - ・ 各種クリニカル・パス作成への参加
- 感染制御体制
 - ・ 稼働日及び稼働時間
 - 原則として, 平日日勤帯 (8:30~17:15)
 - ・ 時間外及び休日
 - 夜勤師長等を介してセンター員と連絡を取り合い, 24 時間体制で対応 (含: 救急感染症患者)
 - ・ 針刺し事故については, 消化器/血液・感染症内科来及び当直医が 24 時間体制で対応

(栄養管理部門)

- ・ 栄養アセスメント (身体計測, 血液検査等による患者の栄養状態の把握・観察)
- ・ 最適な栄養摂取方法の指導・提言 (経口・経管・経静脈栄養の選択と処方)
- ・ 栄養摂取量の算出
- ・ 栄養療法クリニック (栄養療法の効果判定と合併症のチェック)
- ・ 疾患別病院食などメニューの改善
- ・ 患者・家族への栄養指導 (在宅での管理方法を含めて)
- ・ 栄養管理マニュアルの制定および遵守の徹底
- ・ ホームページの作成及び充実
- ・ 各種クリニカル・パス作成への参加
- ・ NST 会議及びラウンド (毎週火曜日 15:00~17:00)
- ・ NCM : 随時受付 (栄養管理実施加算業務を含めて)
- ・ 職員教育
- ・ 日本静脈経腸栄養サポートチーム (NST) 専門療法士取得に係わる実地訓練

(栄養マネジメント部門)

- ・ 患者の栄養管理
- ・ 患者給食の調理及び配膳
- ・ NST による栄養サポート, 栄養食事指導
- ・ 栄養管理・栄養指導の効果判定

(教育・研究部門)

- ・医学部医学科および看護学科学学生への栄養管理教育ならびに感染制御教育
- ・臨床実習における病院感染対策の徹底
- ・臨床実習における針刺し等感染暴露事故に対する迅速な対応
- ・医師及び看護師・栄養士への栄養管理・感染制御教育
- ・地域医療機関への NST/ICT 実践のための指導及び教育
- ・ICD (Infection Control Doctor) 及び ICN (Infection Control Nurse) の育成
- ・各疾患における病態・病期の栄養療法の標準化 (マニュアル) 策定のための研究
- ・薬剤耐性菌感染症対策に関する研究
- ・Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital の効果判定に関する研究
- ・病院経営効率における NST/ICT の役割に関する研究
- ・電子化感染症サーベイランスシステムの開発

(褥瘡対策部門)

- ・全入院患者の寝たきり度の評価 (褥瘡発生リスクアセスメント)
- ・ハイリスク・リスク患者への褥瘡予防対策の徹底
- ・褥瘡患者の回診および治療方法の検討並びに評価
- ・褥瘡対策会議及びラウンド (毎週木曜日 15:00~17:00)
- ・主治医, 看護師への助言, 指導
- ・褥瘡対策マニュアルの策定および遵守の徹底
- ・褥瘡予防に関する物品の整備

(呼吸療法支援部門)

- ・二回 (毎週火・金曜日 15:00~16:00) の病棟ラウンド
(人工呼吸器の運用状況の確認, 安全管理など)
- ・人工呼吸器からの離脱支援
- ・各種呼吸療法の指導・支援
- ・呼吸療法コンサルテーション
(原則として, 平日日勤帯 8:30~17:15)
- ・呼吸療法の標準化, マニュアル策定
- ・RST 会議 (年 6 回)
- ・院内勉強会の開催 (年 6 回)
- ・対外活動
 - 東海 RST 協力会コアメンバーとして参加
 - 岐阜人工呼吸セミナー (NPO 法人 岐阜救急災害医療研究開発機構主催)
- ・学会発表 呼吸療法医学会, 集中治療学会など

(予防接種部門)

- ・岐阜県予防接種センターとして設置
- ・予防接種の実施 (市町村からの依頼の基づく 3 次接種機関として)
- ・予防接種に係わる相談事業の実施 (市町村や地域医療施設からの相談に対応)
- ・予防接種の知識や情報の提供
- ・海外渡航者などの予防接種の実施 (トラベラーズワクチン, 学内, 学外)
- ・岐阜県予防接種センター研修会開催

2. 教育施設

- 1) 日本感染症学会研修施設
- 2) 日本呼吸器学会認定施設
- 3) 日本栄養療法推進協議会 NST (栄養サポートチーム) 稼働施設
- 4) 日本静脈経腸栄養学会 NST (栄養サポートチーム) 稼働施設
- 5) 日本静脈経腸栄養サポートチーム (NST) 専門療法士取得に係わる実地訓練施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 「感染症管理システム」(電子化感染症サーベイランスシステム)
診療内容 : 感染症管理に必要な情報 (患者 ID, 細菌検査結果, 炎症 (WBC, CRP 等) 反応, ベッド情報, 基礎疾患, 医療器具挿入情報など) を既存病院システムから毎日一定の時間に自動的

に収集・蓄積できる。

得られたデータは自動的に解析され、以下の3つの機能が実現できる。

①Web システムを通して各診療端末でエンドユーザー（主治医や担当スタッフ）が利用できる（過去一定期間の任意の条件での細菌検出状況および抗菌薬感受性、病棟単位での患者入室状況および、細菌検査結果の時系列表示、細菌名や抗菌薬名をクリックすると自動的に文献的知識情報解説がポップアップで表示など）。

②ICT として、本システムのサーバにて細菌の異常集積が有意か否か判定でき、問題、疑いの場合は、感染情報レポート（患者リスト）や抗菌感受性リスト、発生状況の2次元キャリアマップ表示等の種々の統計処理が速やかにできる。またエンドユーザーから任意の統計解析要望の処理も可能であり、さらに月報作成など手作業で行ってきた多くの業務の自動化が可能となった。

③厚生労働省の JANIS 院内感染対策サーベイランス事業のデータを入力なしで媒体に排出できる。

他病院での導入状況：当院は群馬大学とともに開発した。なお、2010年1月の病院電子カルテ更新に合わせて、本システムを発展的に改良した「Medlas-SHIPL:Medlas-Standardized Hospital Infection Primary Lookout」に更新して稼働中。

国内的評価：全病院的感染症サーベイランスを電子カルテシステムと協調して全面電子化したシステムは他に類がなく、大きな評価を受けた。（平成18年11月17日 第89回日本細菌学会関東支部総会 Best Presentation 賞受賞：「国立大学医学部附属病院共ソフト“感染症管理システム”を用いた電子化病院感染サーベイランスを開始して」）

国際的評価：世界的にもこのような診療支援・全自動感染症サーベイランスシステム開発は例がなく、注目されている。また厚生労働省 JANIS サーベイランスシステムにおいて本システムのノウハウを生かしたデータ処理が実現している。

2) 診療名 : Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital

診療内容：平成21年8月より入院患者において、抗菌薬処方患者を処方開始日から ICT 専任メンバーである臨床薬剤師（日本化学療法学会抗菌化学療法専門薬剤師, ICD）が電子カルテで処方監視。「感染病巣の特定あるいは推定」、「起炎菌の特定あるいは推定」、「用法」、「用量」の4つのポイントで適正使用がなされているか判定し、必要があればこの臨床薬剤師から直接、また場合によっては ICT メンバーの ICD に報告を受けたうえで ICD から主治医と適宜ディスカッションして、より適正な抗菌薬処方、また適正な細菌感染症治療に結びつくようにしている。ICT からの処方変更提案に対して約95%が変更実現している。また最近では処方変更提案例数を超える主治医からの ICT への抗菌薬処方コンサルテーション件数があり、主治医と ICT の間の関係は大変良好である。これらの取り組みにより、抗菌薬の不適切使用は激減しており、効果を上げている。またこの間院内において薬剤耐性菌のアウトブレイクはほとんど見られない。さらに、取組前後で抗菌薬使用症例の診療費が有意に減少したことが確かめられた。

他病院での導入状況：国内でこのような本格的な抗菌薬処方介入を行っている施設はない。

国内的評価：本システムのアウトカムについて国公立大学附属病院感染対策協議会、各種学会で発表し、評価を得ている。現在論文投稿中。

国際的評価：SHEA (米国医療疫学学会) 2010 で発表し、評価を得た。

4. 専門医・認定医・指導医

村上啓雄：日本感染症学会認定感染症専門医・指導医，日本呼吸器学会認定呼吸器専門医・指導医，日本消化器病学会認定消化器専門医・指導医，日本内科学会認定内科医・指導医，日本消化器内視鏡学会認定消化器内視鏡専門医，日本肝臓学会認定肝臓専門医，日本化学療法学会認定抗菌化学療法指導医，ICD 制度協議会認定（日本感染症学会推薦）ICD，日本医師会認定産業医，日本消化器がん検診学会認定医，日本病態栄養学会認定 NST コーディネーター，日本静脈経腸栄養学会認定医

飯塚勝美：日本糖尿病協会療養指導医，日本病態栄養学会専門医，日本医師会認定産業医

内木隆文：日本内科学会認定内科医，日本肝臓学会認定肝臓専門医，日本消化器病学会認定消化器病専門医，日本内科学会認定総合内科指導医

名和正人：日本外科学会認定外科専門医，日本消化器外科学会認定消化器外科専門医，日本乳癌学会認定医，日本癌治療認定医機構認定医，マンモグラフィ検診精度中央管理委員会認定読影認定医

清水雅仁：日本内科学会認定内科医，日本肝臓学会認定肝臓専門医，日本がん治療認定機構がん治療認定医，日本消化器内視鏡学会認定消化器内視鏡専門医，日本消化器病学会認定消化器病専門医，日本内科学会認定総合内科指導医

5. 自己評価 評価

当院の医療関連感染対策を担当する部署として平成9年4月に創設された感染対策室を前身として，平成14年4月からは，同室を栄養管理や褥瘡対策，リスクマネジメントの機能をあわせもつ「栄養管理・感染制御サポートセンター」（院内配置）としてグレードアップし，さらに平成15年4月からは名称を「生体支援センター（NST/ICT）」と変え，正式に中央診療部門のひとつとして独立した。なお，平成20年4月からは予防接種部門（岐阜県から委託された予防接種センターとして）をさらに平成20年10月からは呼吸器療法支援部門（RST）を増設し，より広範囲の横断的診療支援を行っている。

すなわち，現在当センターは「感染制御」「予防接種」「栄養管理」「褥瘡対策」「呼吸療法支援」の5本柱で業務を遂行している。これらの業務は，多職種から構成されるチーム医療の携帯で行われる診療支援であり，全国的にもこのような横断的中央診療部門を設置している国立大学病院はなく，画期的な体制をとっていると言える。

生体支援センターというわかりづらい名称も，現在では院内はもとより学外でも認知されるに至っており，これらの支援職員を含め，関与する全メンバーが地道な努力をしてきたおかげだと自負している。

現在のメンバー構成は，以下の総勢50名となっている。

★専任職員：7名

教官4名：講師（内科医）1名，助教3名（内科医2名，外科医1名）

看護師長1名，副看護師長1名

事務補佐員1名

★兼任職員：1名（センター長）

教官1名（教授，内科医）

★支援メンバー：50名

教官21名（教授1名，臨床教授1名，准教授4名，講師7名，助教3名），その他の医師（医院5名）

看護師10名（看護師長2名，副看護師長2名，その他4名），臨床検査技師2名，薬剤師6名，

管理栄養士・栄養士6名，臨床工学技士2名，理学療法士2名，事務官1名

現状の問題点及びその対応策

- (1) 現在，各種学会認定や資格を有するメンバーは多職種にわたって多数在籍しているものの。すべて専従での活動はできていない。また専任教官4名は登録されているが，実質的には母体分野の仕事で90%以上，当センターでの業務量は10%以下である。これらのことは，極めて多岐にわたる当センター業務が存在するなかで，現場での個々の事例に対してきめ細やかに対応することには限界があると言わざるを得ない。また100%当センターに専従している1名の看護師長には，多大な負担がかかっていることも大きな問題点である。
- (2) しかし平成21年8月から開始した「Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital」は，ICT活動あるいは多職種チーム医療の在り方に一石を投じる取り組みである。すなわち，抗菌薬適正使用に専任の臨床薬剤師が中心的役割を演じており，チーム医療におけるメディカルスタッフの専門性を如何なく発揮し，その役割が患者診療内容に直接影響を及ぼすことによる充実感，やりがいを生じさせている。ICTなどのチーム医療は多数の異なる職種がただ単に一堂に会してミーティングしたり，院内ラウンドをしたりすることが重要なのではない。それぞれの職種の専門性をいかに発揮し，各々の職種が直接患者にふれあって診療に参加することが真のチーム医療であると考えられ，上記取り組みはまさにそのようなモデルケースとなっている。今後は臨床検査技師（細菌検査技師）をはじめとして，ICT以外のチーム活動も含めて各職種の専門性をもっと発揮できる体制や取り組みをさらに発展させるべきである。
- (3) しかしながら，やはり現状では中央診療部門とういには業務量の多さ，多彩さを考慮すると余りにも組織的体制が不十分であるという点が大きな問題点である。上記取り組みも1名の専任薬剤師に全面的に頼っているが，巨大な病院組織から考えると，少なくとも2名以上の体制が必須であり，後進の指導の面でも複数名の屋根瓦方式での育成ができる人員配置が望ましい。これはすべてのチームのすべての職種でも同様なことが言えよう。いずれにせよ現在の地道な活動によって，専従メンバーの増加めざしていかなければならない。手始めとして平成24年度からは，HIV診療など感染症診

療も担当する専従の医師 1 名および専従の疫学調査専門職員を配置する方向で調整中である。

- (4) 当センターは担当する診療支援は、チームラウンドやマニュアルの充実のみではほとんど意味がない。個々の職員のレベルアップを継続的にはかるべきであり、卒前教育含めた教育・研修体制を改善しなければいつまでも安全かつ適切な診療を行う上でのリスクは減少しない。したがって、他の領域（医療安全など）も含めて病院全体として事務方が管理する研修管理体制の確立が望まれる。医療安全管理室と生体支援センター合同での年 2 回のセミナーはそれぞれ数回ずつ同じメニューで開催（VTR 開催も併用）し、ほぼ全職員が聴講できるように配慮したり、また新規・中途採用職員の研修の機会を多数設けたりと現場ではクフしているものの、医療監視や病院機能評価への対応面でも事務体制の確立は急務と思われる。
- (5) これも他の領域と同様のことであるが、院内での情報伝達体制が全くと言ってよいほど不十分である。横断的診療支援業務の適切な遂行には、「情報共有」は不可欠と言い切ってよい。リンクドクターやリンクナースのみではなく、外部委託業者職員も含め、すべての職員に迅速かつ適切に「情報共有」がなされるように病院情報伝達体制のインフラ整備が望まれる。
- (6) ホームページのリニューアルがされていない。ホームページ機能を最大限発揮して、地域連携の面でも展開をしていきたい。

今後の展望

いずれにせよ、各種事例に迅速かつ的確に対応しながら、診療横断的に院内で頼りにされるセンターとして貢献できるべくさらなる精進していきたい。上記問題点を少しずつ解消し、より安定した診療支援業務が展開できるように、人事・組織的基盤の安定化は継続課題であると考えている。

(31) がんセンター

1. 診療の概要

都道府県がん診療連携拠点病院に認定されたことにもなつて岐阜大学医学部附属病院に腫瘍センターが設立され、平成 21 年 5 月がんセンターと名称を変更した。

がんセンターには、診療連携部門、放射線治療部門、化学療法部門、緩和ケア部門、臨床研究・教育研修部門、情報管理・病診連携部門を設置している。

診療連携部門

- ・ 外科切除を含めた標準治療の実施に関すること：各科診療内容の確認と実績の評価
- ・ 診療科横断的外科治療の実施を前提としたカンサーボードの運営
- ・ 各診療科と光学診療部、病理検査部及び画像診断部など中央部門との連携

放射線治療部門

- ・ 放射線治療の実施
- ・ 放射線治療医の育成及び放射線治療看護師、技師の育成
- ・ がんの放射線治療に関すること

化学療法部門

- ・ がん化学療法の実施に関すること

緩和ケア部門

- ・ がんの緩和治療に関すること
- ・ 緩和ケアチームに関すること
- ・ 緩和ケア相談に関すること
- ・ 緩和ケアに対する研修、実地教育に関すること

臨床研究・教育研修部門

- ・ 連携拠点病院の重要な任務として院内外の各部門（医師、看護師、薬剤師、放射線技師、検査技師、事務系職員など）のスタッフ毎の研修や教育・研修会の実施に関すること
- ・ 全医療従事者を対象に、がん総論、臨床試験、放射線治療、各種がん診療の各論などがんの情報を広く広報すること
- ・ がんの標準治療のみならず新たな治療開発としての臨床試験に関する情報提供
- ・ がんプロフェッショナル養成プランに伴う教育研修に関すること

情報管理・病診連携部門

- ・ がん登録に関すること
- ・ がん登録対象患者の見つけ出し（抽出された診療データからの拾い出し作業）
- ・ がん登録（院内がん登録用、岐阜県がん登録用にそれぞれデータ入力作業）
- ・ 院内集計におけるがん統計データ作成
- ・ 国立がんセンターへ提出するデータの作成
- ・ 岐阜県へ提出するデータの作成
- ・ 診療科へ統計データ等の提供
- ・ 院内、地域連携クリティカルパスの整備及び実施に関すること
- ・ ホームページによる情報発信
- ・ 患者、家族及び患者会に対するサポート
- ・ 相談支援室の運営に関すること
- 日常業務
 - ・ がん相談（対象：院内及び院外のがん患者・家族・その関係者）
 - ・ 地域連携パス運用支援及びモニター管理
- 月例業務
 - ・ がんセンター運営委員会
 - ・ 医療連携センター内検討会（月別のがん相談件数・地域連携パス運用件数報告）
- その他の通常業務
 - ・ がんに関する冊子・ポスターの設置（玄関・外来・病棟）
 - ・ がんに関する図書（院内図書室）
 - ・ 相談室の充実
 - ・ がん相談に活用する「がんに関する Q & A」の適宜改訂
 - ・ がん診療連携拠点病院（岐阜県）相談支援センター情報交換会の開催（2 回/年）

- ・NPO 団体への支援（患者サロン開催の支援等）
- ・がん相談窓口の広報：リーフレットの設置（玄関・外来）
- ・地域連携バス運用及び他職種間の調整
- ・岐阜地域医療連携室実務者連絡会，岐阜地域連携パスイキングへの参加
- ・がんセンター会議参加

2. 教育施設

- 1) 都道府県がん診療連携拠点病院
- 2) 日本臨床腫瘍学会認定研修施設
- 3) 日本がん治療認定機構認定研修施設
- 4) 日本外科学会・認定医・外科専門医制度修練施設
- 5) 日本消化器外科学会・専門医修練施設
- 6) 日本乳癌学会・認定施設
- 7) 日本肝胆膵外科学会・高度技能専門医認定施設
- 8) 日本婦人科腫瘍学会・専門医修練施設
- 9) 婦人科悪性腫瘍化学療法研究機構登録参加施設
- 10) 日本放射線腫瘍学会・認定施設
- 11) 日本緩和医療学会・認定研修施設
- 12) 日本医療薬学会・がん専門薬剤師研修施設
- 13) 日本病院薬剤師会・がん専門薬剤師研修施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：高度進行肝癌に対する抗腫瘍免疫賦活を目的とした凍結治療
 診療内容：外科的切除が不能と判断された肝腫瘍に対し，超音波をガイドとして局所麻酔下に凍結穿刺針を使用することで凍結壊死を誘発する。治療は週1回を原則として可能な限り反復・継続し，抗腫瘍免疫の賦活を促す。
 他病院での導入状況：当科独自の治療体系であり，世界的にも類をみない。
 国内的評価：重篤な有害事象もなく，1泊入院で1回の治療が可能であることから **quality of life** を損なうことなく行い得，これまでに実施してきた22例の治療内容につき，各種学会での報告，論文掲載を通し徐々に浸透している。現在高度医療として厚生労働省へ申請手続き中である。
 国際的評価：凍結治療そのものはこれまでも欧米をはじめ施行されてきた経緯があるが，抗腫瘍免疫賦活を目的とする概念は特異であり，2008年は国際癌学会や国際消化器外科学会への発表を通して評価されつつある。
- 2) 診療名：センチネルリンパ節生検による腋窩リンパ節郭清の適応判定
 診療内容：乳癌症例において腫瘍径の小さな場合には，標識アイソトープを腫瘍周辺に注入して腫瘍から最も近く最初に流入するリンパ節（センチネルリンパ節）を摘出し，術中迅速病理検査にて転移の有無を確認することで郭清の適応を評価している。
 他病院での導入状況：全国的には標準内容とされる傾向にあるが，岐阜県下では未だ浸透している状況ではない。
 国内的評価：乳癌診療を専門としている施設では標準内容であり診療ガイドラインにもその意義が評価されている。しかし安定した成績の確保には一定以上の症例数を要する点も指摘されており，その点に関しては当科ではすでに確立した状況と言える。
 国際的評価：欧米では日常臨床上重要視されている。
- 3) 診療名：インプラント専門外来
 診療内容：埋入インプラント数として100～150本/年で推移し，先進医療（インプラント義歯）の実施医療施設に認定された平成18年以降，急速な増加となって来ている。先進医療（インプラント義歯）の適応例では，インプラント埋入に関わる費用以外の費用（検査・投薬・入院料等）を保険診療で行うことが可能であるため，骨移植などの顎堤形成を必要とする例や侵襲の大きいインプラント埋入等を安全に施行する例を中心に，岐阜市・岐阜県内の医療機関と連携して実施している。また，デンタルCTおよび画像解析システムを外来に設置し，撮影直後の画像診断など詳細な解析を迅速に行い，安全かつ予知性の高い施術を展開している。

他病院での導入状況：県内において先進医療（インプラント義歯）の認可を受けた施設は無く、当科が唯一の施設となっている。

国内的評価：現在、国内外において行われているインプラント治療のほぼ全ての手技・治療法は当科において可能な状況となっており、症例の集積によりこの分野に於けるフロントランナーとなると考えている。

国際的評価：現在、国内外において行われているインプラント治療のほぼ全ての手技・治療法は当科において可能な状況となっており、症例の集積によりこの分野に於けるフロントランナーとなると考えている。

4) 診療名：先進医療での大腸腫瘍に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（大腸 ESD）

診療内容：内視鏡的粘膜切除術（EMR）で対応不可能で一括切除が望まれる大腸腫瘍に対し、内視鏡的粘膜下層剥離術により治療する。

他病院での導入：岐阜県内では、先進医療として大腸 ESD を施行しているのは数施設のみ。

国内的評価：これまで外科切除や再発や正確な病理学的評価が困難である可能性が否定できない分割切除で治療されていた大腸腫瘍に対する新しい内視鏡治療として評価されている。当院では 300 例以上の症例を治療している。

国際的評価：同上

5) 診療名：高精度放射線治療

診療内容：高精度放射線治療装置ノバリス Tx を用い IGRT（画像誘導放射線治療）による定位照射、IMRT（強度変調照射）など高精度照射

他病院での導入：当院は岐阜県内では、3次元原体照射と IMRT が IGRT を用い高精度に照射可能な唯一の施設である。

国内的評価：これまで他病院照射困難な症例にも対応、高精度照射とし、脳、頭頸部腫瘍、肺腫瘍での定位照射、前立腺癌への IMRT での治療を年間約 100 例照射治療施行している。

国際的評価：肺癌に対する定位照射は、日本が先進的に治療を行ってきており治療成績も良好で当院でも積極的に対応、適応拡大を今後図る。

4. 専門医・認定医・指導医

岩間 亨：脳神経外科学会専門医、脳卒中学会専門医

森脇久隆：日本内科学会認定内科医・指導医、日本消化器病学会専門医・指導医、日本肝臓学会専門医・指導医、日本消化器内視鏡学会認定医・専門医、日本臨床腫瘍学会暫定指導医

吉田和弘：日本外科学会認定医・専門医・指導医、日本消化器外科学会認定医・専門医・指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医（消化器・一般外科・胃癌）、日本乳癌学会認定医、日本癌治療学会臨床試験登録医、日本癌治療機構暫定教育医、マンモグラフィ検診精度管理中央委員会読影認定、日本食道学会食道科認定医、日本消化管学会胃腸科認定医、消化器がん治療認定医

鶴見 寿：日本内科学会東海地区指導医・総合内科専門医・内科認定医、日本血液学会指導医・専門医、日本臨床腫瘍学会暫定指導医・がん薬物療法専門医、日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本臨床内科医会専門医

白鳥義宗：日本内科学会認定内科医・指導医、日本消化器病学会専門医、日本肝臓学会専門医・指導医、日本がん治療認定医機構暫定教育医、American Gastroenterological Association (AGA Fellow)

堀川幸男：日本内科学会認定医、日本糖尿病学会専門医・指導医、日本病態栄養学会認定 NST コーディネーター、日本糖尿病協会療養指導医

長田真二：日本外科学会認定医・外科専門医・指導医、日本消化器外科学会専門医・認定医・指導医、日本肝胆膵外科学会高度技能指導医、日本がん治療認定機構暫定教育医

林 真也：日本放射線腫瘍学会認定医、日本医学放射線学会治療専門医、日本がん治療認定機構認定医、第一種放射線取扱主任者

原 武志：日本内科学会指導医・総合内科専門医・内科認定医、日本血液学会指導医・専門医、日本臨床腫瘍学会暫定指導医・がん薬物療法専門医、日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医

竹中元康：日本麻酔科学会指導医・日本ペインクリニック学会認定医・日本緩和医療学会暫定指導医

5. 自己評価

評価

当センターは都道府県がん診療連携拠点病院に認定されたことに伴って岐阜大学医学部附属病院に設立されている。

診療連携部門としては、診療科の横断的な連携を強化することでより広範囲な治療体系を確立することを目的として設置されており、厚生労働省健康局長通知第 0301001 号を受けて立ち上げたがんセンターボードの充実を主な任務として、より明確な活動を目指している。

一方教育研修部門としては、岐阜がん薬物療法研究会及びがん医療従事者研修会は、院内および岐阜県内の各病院のがん医療に携わる全医療従事者を対象に、がん総論、臨床試験、放射線治療、各種がん診療の各論などの講演会を開催した。一部は、看護部教育委員会、岐阜県病院薬剤師会との共催である。講師は、岐阜大学病院内の各診療科の先生方を中心に実施した。また、各種企業主催あるいは当院がんセンターとの共催の講習会・研修会には、全国のご高名な先生方に講演もお願いした。

情報管理・病診連携部門としては、院内がん登録の充実さらには地域がん診療連携拠点病院との連携としてがん登録実務者研修会を開催している。さらにはがん相談や特に患者サロンの実施や国立がんセンターなどとのテレビ中継カンファレンスの実施により、研修の機会を用意している。

これらのことにより本センターが都道府県がん診療拠点病院の役割を担うのに十分な機能を果たしていると評価できる。

現状の問題点及びその対応策

現在外来化学療法室の稼働に関して、化学療法のレジメン登録の充実、予約及び効率のよい稼働を目視している。化学療法専門医の充実や、国立がんセンターなどへの研修などにより、専門薬剤師、看護師の配置をした。また、化学療法の適応外使用などに関しても、がんセンター内での委員会での検討を義務づけることで **EBM** の実践に取り組んだ。

一方、診療科間の診療連携に関してはこれまで個々に行われていた検討を、がんセンターボードを立ち上げることで、より広く院内外からの参加を可能にし、より多くの意見の基で患者さん個々に最適な治療を提供できるように対策を講じている。特に抗癌剤や、放射線治療を行うこととこれらに外科的切除が可能ななどの診療科を超えたカンファレンスの実施が重要であると考えられる。

放射線治療、緩和治療に関してもがん治療の中心的役割の一つである。今後のこれらの医療を担う若い医師やメディカルスタッフの充実が急務である。さらには、地域の第一線で活躍されているかかりつけ医の先生方との連携、地域連携クリニカルパスの充実などの対策が重要であると共に、患者さんの活動に対する支援やがん相談に関しても、人材の研修教育が急務である。

今後の展望

岐阜県の真のがんセンター機能を有した総合病院・教育病院としてのさらなる充実を図るとともに、都道府県がん診療連携拠点病院としての組織改編、さらなる診療、研究、教育の充実を図っていく。

(32) 肝疾患診療支援センター

1. 診療の概要

肝臓疾患

- ・ 劇症肝炎：循環管理も含めた全身管理を中心に対処する。特に免疫学的観点に立脚してリンパ球表面マーカー解析やサイトカイン療法も視野に入れて、24 時間持続透析 (CHDF) や各種補充療法を行なう。さらには、臨床栄養面の研究成果を基礎とした間接カロリーメータの測定を行い、最適な栄養治療を行なう。
- ・ 慢性肝炎・肝硬変：インターフェロン療法などを中心に抗ウイルス療法を行なう。また、日常管理には単に薬物療法だけではなく、最適な栄養療法を行い、良好な QOL の維持を目指す。
- ・ 肝癌：
(診断) 微小な腫瘍の存在診断、腫瘍の性格診断能力は最新の MRI や PET の導入により飛躍的に向上している。造影超音波を使用することにより、今までの超音波では捉えられなかった微小な肝癌の検出と腫瘍の性格診断を行なう。
(治療) この造影超音波を使用し、微小な肝癌もラジオ波焼灼術 (RFA) にて治療している。多発肝癌や門脈腫瘍栓など治療困難症例に対しても、放射線治療を併用するなど集学的治療により、治療効果の向上を試みている。
- ・ 関連病院でも医師の減少により、肝癌の治療が困難になっている。患者の入院受け入れだけでなく、医師の出張治療などを行い、地域医療の発展と人材育成に尽力している。
- ・ 地域の関連病院で肝癌のデータベースを作成し、肝癌患者総数や動態を把握する。
- ・ 肝炎パス・肝癌パスを使用することにより、病院とかかりつけ医の連携を強化し、日常診療はかかりつけ医で行い、検査は病院で行なうシステムを構築する。
- ・ 市民公開講座や肝炎友の会での講演を通して肝疾患に対する知識の向上を図る。
- ・ 肝疾患診療支援センター内に相談窓口を設け、専門相談員が肝疾患についての質問への解答や、助成金、B 型肝炎訴訟についての情報提供を行う。

2. 教育施設

- 1) 日本内科学会認定内科専門医教育施設
- 2) 日本消化器病学会認定施設
- 3) 日本肝臓学会認定施設
- 4) 日本消化器内視鏡学会指定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：進行肝細胞癌に対する集学的治療の試み。
診療内容：進行した肝細胞癌に対して、動注用シスプラチンを繰り返し動注する。また、門脈腫瘍栓に対しては、放射線治療も併用する。
他病院での導入状況：関連施設にて導入が始まっている。
国内的評価：進行肝細胞癌に対しては、動注リザーバー留置による肝動注が主流であり、留置手技の煩雑さと留置後の管理が問題となっていた。これに対して、担癌動脈のみに動注を繰り返し行なうことにより、より細やかな治療が可能となり、従来のリザーバー動注と奏効率は同等であることが証明された。
- 2) 診療名：C 型慢性肝炎に対するペグインターフェロン+リバビリン併用長期療法改良の試み
診療内容：C 型慢性肝炎難治症例 (1 型, 高ウイルス量) のうち、治療後のウイルス消失が遅い症例に対して 48 週以後に 24~48 週間の少量長期併用療法 (計 72~96 週) を行い、その有用性を明らかにした。
他病院での導入状況：関連施設との共同研究を行っている。
国内的評価：72 週の有用性の報告が見られるが、96 週の報告の検討は無い。
国際的評価：72 週の有用性の報告が見られるが、96 週の報告の検討は無い。
- 3) 診療名：C 型肝炎ウイルス陽性肝細胞癌治療後の再発抑制
診療内容：非環式レチノイドが C 型肝炎ウイルス陽性肝細胞癌治療後の再発抑制効果を示すことをすでに証明した。薬剤承認に向けて検証治験に参加する予定である。
他病院での導入状況：国内施設との共同研究を行う予定である。

4. 専門医・認定医・指導医

森脇久隆：日本内科学会認定医・指導医，日本消化器病学会専門医・指導医，日本肝臓学会専門医・指導医，日本消化器内視鏡学会専門医・指導医

高井光治：日本内科学会認定医，日本消化器病学会専門医，日本肝臓学会専門医

5. 自己評価

評価

年々県内外からの治療依頼が増加している。

現状の問題点及びその対応策

受け入れ困難な状況が発生し，入院については一ヶ月待ちの状態である。可能な限り入院期間を短縮し，受け入れ患者数を増やしている。

今後の展望

より安全で確実な治療を目指し，再発防止も含めた全人的管理を目指す。

(33) エイズ対策推進センター

1. 診療の概要

エイズ診療そのものは、血液感染症内科を窓口として担当させて頂いているが、診療上必要に応じて、他科の全面的な協力のもと全診療科への受け入れも可能となっている。また、針刺し事故などの感染対策上の観点から生体支援センターとの協力体制も万全である。

HIV 診療は、感染しているか否かから始まる。また感染が明らかになった場合は、その患者の状態に応じて抗ウイルス療法を開始する。日和見感染を発症したエイズの状態においては日和見感染の治療が優先される。治療は原則として外来にて行い、日和見感染を発症している場合には入院が必要になるが、最近では治療が進歩し、ほとんどの患者は社会復帰可能である。それゆえ HIV 診療にとって重要なことは、医師による診療のみならず、患者の身体的・精神的ケアであり、看護師による診療サポート、薬剤師による服薬支援、専門カウンセラーによるカウンセリング体制の整備、ソーシャルワーカーによる社会的福祉支援などが求められ、これらの充実化も順調に進んでおり、その体制はほぼ確立している。

当院は平成 7 年 5 月にエイズ拠点病院の指定を受け、さらに平成 19 年 12 月には岐阜県エイズ治療中核拠点病院の指定を受けた。これに基づき平成 19 年 12 月に岐阜大学医学部附属病院エイズ対策推進センターが設置され、血液感染症内科中心の診療のみならず、院内外への教育・研修活動、情報提供活動なども進めている。

2. 教育施設

- 1) 岐阜県エイズ治療中核拠点病院
- 2) 日本血液学会認定研修病院

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 強力抗ウイルス療法 (HAART)

診療内容: HIV に対する抗ウイルス療法

他病院での導入状況: 欧米でのガイドラインを参考に作成された本邦での治療ガイドラインに準拠して、エイズ拠点病院を中心に施行されている。

国内的評価: ガイドラインではあるが、本領域の治療方針は、欧米での治験結果によって毎年変更されている。すなわち本領域の治療は、新規薬剤の導入とともに日々変遷しており、標準治療の確立までには至っていない。

国際的評価: 欧米での治験結果によってガイドラインは毎年変更されている。HIV に対する抗ウイルス療法は、進歩のめざましい領域であり、評価は絶えず変動している。

4. 専門医・認定医・指導医

鶴見 寿: 日本内科学会東海地区評議員・指導医・総合内科専門医・内科認定医、日本血液学会代議員・指導医・専門医、日本臨床腫瘍学会指導医・がん薬物療法専門医、日本がん治療認定医機構暫定教育医・認定医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本臨床内科医会専門医

5. 自己評価

評価

エイズの治療は、以前では特別な医療機関でのみ行われると思われていたが、当院では昭和 63 年の岐阜県第一例目の症例から関わり、現在では病院全体として通常の患者と分け隔てなく診療できる体制が整っており、また行政とも協力しつつ県内の指導的立場で診療連携などができるようになったことは評価できると思われる。特に HIV 専門薬剤師、HIV 専門カウンセラーとの協力・連携が極めて密であることは、診療体制の構築上、評価に値すると思われる。

現状の問題点及びその対応策

今後患者は増加すると思われるが、本領域に直接携わることができる専門医療スタッフの確保、充実が求められる。

今後の展望

今後、岐阜県のさらなるエイズ診療における全人的医療体制の整備を目指し、職員への HIV 感染症の正しい知識の浸透と診療技術向上を推進するとともに、ブロック拠点病院あるいは地域の他の医療機関

との連携などをより一層充実化させていく予定である。また、感染者の早期発見・早期治療ができるよう、行政と協力して、地域住民、感染ハイリスク者らへの啓発活動や抗体検査会開催などにも力を入れたい。

(34) 分娩部

1. 診療の概要

県内唯一の大学病院として、妊娠高血圧症候群・糖尿病・自己免疫疾患・血液疾患・腫瘍など合併症妊娠の管理、胎児中枢神経系・心臓・肺・腹部・四肢・血液などの出生前診断と管理、妊娠初期の染色体検査・代謝異常診断（小児科と提携）、胎児子宮内発育遅延・早期発症双胎児間輸血症候群などハイリスク胎児症例の周産期管理などを行っている。ただし、現在岐阜地区では、すべての異常妊娠を大学一施設で管理するのは困難であり、岐阜県総合医療センター、岐阜市民病院、長良医療センター等が、それぞれの特色を生かす形で、症例により、疾患により、妊娠種数により適切に協力し、円滑に診療がなされている。緊急搬送においても、岐阜県周産期医療に救急搬送マニュアルに沿って、岐阜大学病院の特色を生かして、1. 母体救命、2. 出生推定体重 2,500g 以上の早産および 3. コントロールタワー的な役割を担っている。この救急体制は現在問題なく稼働している。

2. 教育施設

産科婦人科参照

3. 診療開発

産科婦人科参照

4. 専門医・認定医・指導医

産科婦人科参照

5. 自己評価

評価

合併症妊娠の管理、出生前診断、ハイリスク胎児管理などの診療は地域一次・二次医療機関の要請に応じている。また、周産期母体救急マニュアルもトラブルなく稼働している。当院の高次救命治療センターおよび放射線科の協力により、重傷症例の緊急搬送が円滑に対処できており、他県で問題になったような搬送の問題は解決されている。現状十分な成果をあげていると評価している。

現状の問題点及びその対応策

岐阜大学病院を含めた県全体の NICU 不足が著しく、この整備が優先課題である。現在、すでに当院での NICU の建設が進行中で、近くある程度は改善が期待できる。それと平行して、帝王切開術の増加に対応した手術枠の改善が必要である。更に最近分娩数が増加しており、それとともに産科入院患者数の増加が産科婦人科全体の病床管理上大きな問題となっている。

今後の展望

院内の NICU も整備され、ますます岐阜県内の産科医療の充実が望める。今後も岐阜県周産期医療の主たる一員として、産科医療の中心を担いたい。そのためには、これまで築いてきた救急搬送マニュアルを現場に則したように、改善していきたい。

(35) リハビリテーション部

1. 診療の概要

当部は、リハビリテーション専門医のもと、11名の理学療法士と3名の作業療法士、2名の言語聴覚士でリハビリテーションの治療に当たっています。運動器疾患、脳血管障害、呼吸器疾患、循環器疾患、小児、神経系疾患の幅広い分野に取り組んでおります。また、疾患に応じて足圧測定や、動作解析、サーモグラフィ、超音波検査など評価し、適切なリハビリが行えるように診療に役立てています。定期的なリハビリカンファランスをはじめ、関連病院との勉強会など地域のリハビリ活動にも積極的に取り組むとともに、障害者スポーツにもボランティアとして救護・帯同し、参加しております。

2. 教育施設

- 1) 日本リハビリテーション医学会研修施設
- 2) 理学療法士、作業療法士・言語聴覚士実習施設

3. 診療開発

- 1) 工学部との共同開発をすすめ、上肢機能障害に対する日常生活動作訓練のためのロボットや姿勢保持訓練の矯正訓練装置の開発に取り組んでいる。また機能障害に対する訓練ロボットについても開発をすすめている。国内国外で装置の学会発表や、ロボット展示を行い、広く公開している。
- 2) 動作解析を行い、リハビリの質の向上や、機能障害の原因解明にも役立てている。
- 3) 足圧測定や、重心測定、歩行解析による靴装具の開発治蝶を施行している。
- 4) f-MRIを撮像することで、機能改善の評価や予後予想、効果的な訓練の指導評価に利用している。
- 5) 音楽療法も取り組み、意識障害患者の脳刺激活性を促すよう施術している。

4. 専門医・認定医・指導医

清水克時：日本整形外科学会専門医、日本整形外科学会認定脊椎脊髄病医、日本脊椎脊髄学会指導医、日本リウマチ学会専門医
大野義幸：日本整形外科学会専門医、日本リハビリテーション医学会臨床認定医、日本手外科学会専門医、日本形成外科学会専門医、日本体育協会公認スポーツドクター
青木隆明：日本リハビリテーション医学会臨床認定医・専門医・指導医、日本整形外科学会専門医、日本整形外科学会スポーツ医・運動器リハビリテーション医、日本体育協会公認スポーツドクター、日本障害者スポーツ認定医、ドーピングコントロールオフィサー、義肢装具判定医

5. 自己評価

評価

1日18単位以上の患者へのリハビリ対応を行い、患者へのリハビリ評価を多方面から取り組んでいる。研究面や装具の開発、学会発表にも積極的に取り組み、障害者へのボランティア活動も盛んに参加している。また中核病院として地域のリハビリテーション活性化を図るための勉強会や研究会・研修についてもすすめている。

現状の問題点及びその対応策

1日の理学療法士一人に対する単位数は限られており、対応に苦慮しているが、増員することで対応している。リハビリの専門医が岐阜には限られており今後リハビリ専門医の育成にも取り組んでいきたい。

今後の展望

リハビリテーション専門医の育成に取り組むとともに、施設や人材の充実をはかり、患者に満足のいくリハビリテーションを提供したい。また障害者スポーツにも積極的に参加し、より社会貢献に尽くしていきたい。

(36) 医療機器センター

1. 診療の概要

平成 16 年、当院の新病院移転と同時に ME センターとして本格的な稼働を開始した。集中治療への技術提供、手術治療への技術提供、医療機器の中央管理など多くの治療や機器管理に貢献してきている。血液浄化室業務、ペースメーカー業務、不整脈治療におけるアブレーション業務を数年前から業務に取り入れ、さらに 2 年前から高気圧酸素療法業務も手がけている。

集中治療部門においては、高度救命救急センターにおける血液浄化治療に積極的に取り組み、敗血症に対しては、DHP と HDF の同時治療が施行可能な特殊回路を作成し、有効な治療を目指している。急性期における血漿交換療法として、PE では分離不可能な重症高脂血症患者に対して遠心分離法を用いた血漿交換療法を考案し、治療に成功した。また、補助循環 (PCPS, ECMO) の治療にも積極的に参加し、高度救命救急センターの医師とともに治療にあたっている。補助循環における人工肺機能の長期維持を目標に JV を用いた O₂ コントロールに取り組んでいる。また、人工呼吸器離脱困難な患者に対し、陽・陰圧式体外人工呼吸器を用いた呼吸リハビリも実施している。

手術部門への技術提供としては、心臓手術における人工心肺操作、自己血液回収操作、レーザー設定操作などを行っている。人工心肺操作は、超低体温手術における脳分離手術など特殊な操作技術を必要とする手術も多く、分離方法による血流量確保に関して、ME センター独自に考案したデバイスを使用し、安定した手法を用いることが可能となっている。また、CABG では、Off Pump 手術が多いが、急遽人工心肺が必要になった場合でも、迅速に回路準備を行い、サッカー、ベントが使用可能な大学病院独自の半閉鎖回路を考案し、手術に望んでいる。

医療機器中央管理では、ME センター発足時は、人工呼吸器、輸液ポンプ、シリンジポンプなどの管理から始まり、現在では、機種を増大して管理を行っている。管理当初は、医療機器の把握と統一、稼働率上昇、消耗品統一などを目標としていたが、今日、医療機器の安全等が重要視されているため、管理項目の中に従来の使用点検、故障点検、修理点検に加えて、医療機器の定期点検、定期部品交換の項目を取り入れている。さらに、定期点検内容として、電気的安全チェックも取り入れ、漏電流などの対策も行っている。

血液浄化室業務は、慢性透析患者における手術待機患者を対象に透析を行っている。心臓疾患や消化器系における手術患者も多く、非常に透析困難な患者に対して透析治療を施行している。また、透析困難症例の患者への治療選択として、HF, HDF をはじめ、無酢酸透析の治療も施せるよう技術取得、装置整備を行っている。

ペースメーカー業務としては、埋め込み術をはじめとして、外来ペースメーカーチェック、ペースメーカー埋め込み患者の手術対応チェック等も必要に応じて行っている。不整脈治療においては、アブレーション治療における解析装置、出力装置の操作を行っている。

高気圧酸素療法は、急性期 CO 中毒患者における治療や術創部、感染創部の早期治癒などの治療が多く行われている。毎日、1~2 名の患者の治療を一人 2 hr, 2 atm の治療工程を行なっている。

また、人工呼吸器中央機器管理業務の一環として、RST (呼吸サポートチーム : Respiratory Support Team) に積極的に加わり、患者の疾患にあった人工呼吸器の選択や RTX を用いた長期人工呼吸器からの離脱補助、無気肺改善などの治療も行なっている。

2. 教育施設

- 1) 東海医療科学専門学校・臨床工学科臨床実習施設
- 2) 鈴鹿医療科学大学・臨床工学科臨床実習施設
- 3) 小松医療短期大学・臨床工学科臨床実習施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

柚原利至：日本人工臓器学会・体外循環技術認定士、ME 学会・ME2 種技術認定士

柴田典寿：ME 学会・ME2 種技術認定士、日本臨床工学技士会・ペースメーカー専門技術認定士

和田典子：ME 学会・ME2 種技術認定士

大森章二：ME 学会・ME2 種技術認定士

柿田英登：ME 学会・ME2 種技術認定士、3 学会合同・呼吸療法技術認定士

広瀬愛理：ME 学会・ME2 種技術認定士

田中智也：ME 学会・ME2 種技術認定士
川添将弘：ME 学会・ME2 種技術認定士

5. 自己評価

評価

医師とともに治療にあたり、ME センター独自に当番制（オンコール体制）を整えることで、救急患者に対応することが可能となっている。中央管理においても定期点検（3 ヶ月，半年，1 年）を行うことで医療機器の使用頻度を把握し，安全性などの確保が可能となっている。集中治療領域において急性血液浄化は欠かせないものとなっており，多種多様の治療技術提供が行えるように技術向上に努めてきた。不整脈治療およびペースメーカー業務は，専属のスタッフを置き技術習得に貢献できているといえる。

現状の問題点及びその対応策

現在，病院内における ME センターの位置づけは不明確なものとなっている。今後，医療機器が発展するとともに，操作する人材の確保と技術確保が必要となるため，病院内での位置づけを確立し，臨床工学技士の増員，組織作りを進めていかなければならない。さらには，技術向上のために学会，技術講習会などのへの参加も積極的に行う必要がある。集中治療学会，日本体外技術学会，臨床工学技士会などのへ演題，シンポジウムなどの参加はあるが，今後専門臨床工学技士を発足するにあたり，透析技術認定士，人工呼吸療法認定士，体外循環認定士といった資格を取得するために，学会やセミナー等への参加を促していくべきである。

今後の展望

ME センターの位置づけ，業務内容を明確なものとし，業務の遂行を迅速なものとしていく。また，今後，心臓カテーテル業務への参加の声も多く，技術提供を考慮していく。

(37) 治験管理センター

1. 診療の概要

新しい医薬品の開発、すなわち治験は、人類の健康を保つために大切な役割を果たしている。しかしながら、これらの研究は最終的にヒトを対象とした試験であるため、慎重に実施しなければならない。厚生労働省は、平成元年に GCP (医薬品の臨床試験の実施に関する基準) を設け、更に治験の在り方を改善するために平成 9 年 3 月に新 GCP を定め、平成 10 年 4 月に完全施行された。そして、医師主導の治験が制度化に関する規定および治験施設支援機関 (SMO) の規定が盛り込まれた改正省令 GCP が平成 15 年 6 月に施行された。その目的は、治験における科学性の向上、国際的な評価に耐える治験、それに基づいた国際間の協力、すなわちハーモナイゼーションの確立、更に重要なこととして被験者の人権保護の強化である。本院においても、平成 14 年 4 月に治験管理室を発展的に解消し、治験管理センターを院内措置で設置した。治験管理センターでは、被験者の人権や安全を守り、適正かつ円滑に治験が実施されるように支援している。

2. 教育施設

1) 日本医療薬学会認定薬剤師制度研修施設

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

伊藤善規：日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師

石原正志：日本薬剤師会認定薬剤師，がん薬物療法認定薬剤師，HIV 感染症認定薬剤師，NST 専門薬剤師

河原加奈：日本臨床薬理学会認定 CRC

5. 自己評価

評価

これまで治験管理センターでは、治験業務の効率化のために、病院の電子カルテシステムを活用し、各治験ごとに、テンプレートおよびクリニカル・パスを作成し、プロトコール遵守に主眼を置き、治験業務を行っている。また、平成 20 年からは、治験業務に従事できる医師を育成するために、年 1～2 回程度治験セミナーを開催している。平成 22 年度は 21 名、平成 23 年度は 38 名の分担医師の資格を有した医師を育成し、治験実施体制の強化を行なった。治験の受入件数は、平成 16 年の移転以来横ばい状態であったが、平成 20 年度から実施している治験セミナー実施に伴い、治験担当医師数も増加傾向であり、また治験受入件数も増加している。平成 23 年 1 月より新規に治験管理センターのホームページを開設した。

現状の問題点及びその対応策

治験受入件数の増加および治験内容の複雑化に伴い、院内 CRC 一人あたりの業務量の増大や治験業務のダブルチェック体制が十分でない状態であり、人的なミスによる逸脱を起しかねない現状である。

解消策として、テンプレートおよびクリニカル・パスの活用による治験業務の効率化を図る。また、治験業務において、ダブルチェックが行なえるような体制づくりを構築していく。

今後の展望

治験を実施する上で、質の高いデータを得、早く治験を実施することが重要なため、今後もテンプレートおよびクリニカル・パスをフルに活用し、治験業務の効率化に努め、逸脱のないよう治験業務を実施していく。また、クリニカル・パスを応用することで治験実施を簡便にし、治験実施終了までの期間短縮を目指すため、今後も診療科へのクリニカル・パスの活用の啓蒙を行なっていく。

以上により、本院への治験実施要請が多くなると予想されるため、更なる治験実施体制の改善及び治験コーディネーターの配置を図る必要がある。

(38) 高次画像診断センター

1. 診療の概要

岐阜県における高度かつ先進的な画像診断の拠点として、高精度な画像診断を日々提供することにより、地域医療連携を推進することを使命としている。多列検出器 CT, 3 テスラ装置を含む高磁場 MRI, PET/CT 装置や SPECT/CT 装置を含む核医学診断装置, 乳房 X 線撮影装置, IVR-CT を用いて, 38 名の診療放射線技師と 13 名の放射線画像診断医 (内 9 名は放射線科診断専門医, 1 名は放射線科専門医) が高水準の専門性をもって検査・読影にあたり, 詳細かつわかりやすい画像診断報告書を日々提供している。

また, 医療連携センターを介して, 近隣病院からの CT 及び MRI 検査, FDG-PET/CT によるがん診療, 画像診断に関するご相談にも対応している。

高次救命治療センターと共同で, 24 時間態勢で緊急搬送患者の IVR 治療に当たっている。

画像診断に関する生涯学習を目的として, 他科医師を含む院内・院外医師及び学生を対象に, インターネットのビデオ会議システムを用いた他病院との合同画像カンファレンスを毎日実施している。

2. 教育施設

- 1) 放射線科専門医総合修練機関
- 2) 日本核医学会専門医教育病院

3. 診療開発

1) 診療名 : CT colonography

診療内容: 多列検出型 CT (MDCT) を用いて, 大腸を観察する手法である。

他病院での導入状況: 国立がんセンター中央病院において, 大腸がん術前精査として導入されている。

医療法人山下病院において, ドックに導入されている。

国内的評価: 日本国内では導入施設は少なく最先端の検査手法である。今後発展する分野と思われる。

国際的評価: 米国では大腸がんスクリーニングを目的として研究が進んでおり, multicenter trial などにより, 大腸ポリープ検出に関する検討が盛んである。英国では, 有症状者に対する大腸がん精査目的に導入されている。

4. 専門医・認定医・指導医

兼松雅之: 日本医学放射線学会専門医, 日本血管造影・IVR 学会指導医

浅野隆彦: 日本医学放射線学会専門医, 日本核医学会 PET 核医学認定医, 日本核医学会核医学専門医

加藤博基: 日本医学放射線学会専門医, 日本核医学会 PET 核医学認定医, 日本核医学会核医学専門医, 日本血管造影・IVR 学会指導医

5. 自己評価

評価

平成 20 年度より導入された画像管理加算 2 の算定を満たすべく, CT・MRI・RI 検査の 80%以上を放射線科診断専門医による読影を行っている。

緊急 IVR 検査・治療により, 多くの救急搬送患者の救命に貢献している。

医療連携センターを介した病診連携による多列 CT 検査, 高磁場 MRI 検査, FDG-PET/CT 検査は, 近隣病院・医院より多くの検査依頼を受けており, 検査当日ないしは翌日に画像診断報告書を配信している。

毎日の他病院との合同画像カンファレンスは非常に好評であり, 院内の学生のみならず, 院外実習中の学生や, 初期臨床研修医などの参加が多数見られる。

現状の問題点及びその対応策

放射線科医が CT・MRI・核医学検査室及び PET/CT 検査室に常駐し, 造影検査や薬剤投与に当たっており, 医師にしかできない業務の遅滞の要因となっている。

本年度より導入された画像管理加算 2 の算定を満たすため, 読影業務に追われている。

緊急 IVR 検査・治療のため, 岐阜県中から救急患者が搬送されているが, 年々増加傾向にあり, IVR 施行医の負担が増大している。

今後の展望

平成 24 年 4 月には, Dual energy CT 装置導入を予定している。今後, さらに技師, 看護師, 医師の人的確保, 新しい装置の導入を図り, 高度かつ先進的な画像診断を継続していく所存である。

(39) 薬剤部

1. 診療の概要

薬剤部では薬物治療における安全確保と専門性を活かしたチーム医療への貢献を基本理念として、従来から実施している調剤、薬剤管理指導（入院患者への薬物治療支援）、注射剤調製、医薬品情報提供、薬物血中濃度解析（TDM）、院内製剤、薬品管理、治験の支援および管理などの業務はもとより、感染コントロールチーム（ICT）、栄養サポートチーム（NST）、緩和ケアチーム、褥瘡対策チームなどのチーム医療の一員も担っている。さらには、外来化学療法室、糖尿教室、点眼教室へも積極的に関わることによって、院内の各部門で薬剤師の専門性を発揮すべく努力している。以下に、薬剤部での業務内容の概略を記す。

1) 調剤業務

- ・コンピュータによるチェックシステム（自動鑑査システム）を本院独自で開発し、過量投与、重複投与、相互作用の防止のみならず、電子カルテを自動的に閲覧することにより患者さんの病名や検査値から処方内容をチェックする鑑査システムを充実し、薬物治療における安全性を確保
- ・錠剤の一回量包装（一包化）機や注射薬の自動払い出し機などの医療機器と自動鑑査システムを連動させることによる業務の効率化

2) 注射剤調製業務

- ・全病棟を対象に抗がん剤、中心静脈栄養剤の無菌調製を実施
- ・外来化学療法室で用いられる抗がん剤の無菌調製を平成 17 年度から開始し、平成 20 年 4 月以降は薬剤師による抗がん剤の無菌調製実施率が 100%達成
- ・無菌調製を正確に行うためにコンピュータによる鑑査支援システムを内蔵したクリーンベンチ・安全キャビネットを開発し、薬剤の取り違えと分量ミスを起こさないシステムを構築し、正確で安全な調製を実施

3) 外来がん化学療法業務

- ・外来がん化学療法室にがん専門薬剤師を含む薬剤師 3 名を常駐させ、患者さんへの治療説明、服薬説明、副作用についての説明と対処法、副作用のチェックと必要に応じて症状緩和のための医師への処方の提案（電子カルテに記載）などの業務を中心に展開
- ・さらに、お薬手帳を利用して、ほぼ全患者さんに対して処方内容や副作用等の問題点を記入し、患者さんの薬が市中の薬局で調剤される際に調剤薬局の薬剤師に必要な情報が伝わり、安全性を確保するための薬薬連携への取り組み

4) 薬剤管理指導業務（入院患者への薬物療法支援業務）

- ・入院患者さんに対する服薬指導のみならず、医師・看護師に対する医薬品情報提供、処方提案、疼痛治療や副作用対策など治療の支援にも関与
- ・一部の病棟では薬剤師を専任とし、入院時から退院まで一貫して治療に関わることによって薬物療法の適正化を推進
- ・ICU および ACCC では全国に先駆けて薬剤師の常駐を行い、抗 MRSA 薬の TDM を通して、処方設計の支援などを実施

5) 感染対策業務

- ・院内感染コントロールチームに感染制御専門薬剤師が専任で関わり、抗菌薬が処方された全入院患者に対して、抗菌薬の適正使用の推進、薬剤耐性菌の出現防止に努めている

6) 医薬品情報提供業務

- ・インターネット及び院内のイントラネットを駆使して医薬品情報の迅速な収集と提供を実施

7) 薬物血中濃度解析業務

- ・検査部で測定された血中濃度測定値に基づいて薬物動態のシミュレーションを行うことによって適正な投与量ならびに投与間隔を算出し、医師に対して投与設計の支援情報を提供

8) 院内製剤業務

- ・市販されていない特殊院内製剤の調製などを行うことによって、患者さんの治療に貢献

9) 薬品管理業務

- ・処方オーダーリングデータを利用して医薬品の使用状況を把握し、院内薬品在庫の適正化を推進
- ・各病棟・外来には病棟責任薬剤師および外来責任薬剤師を配置して在庫薬品の管理を行っており、期限切れや不良在庫の防止に努めている
- ・麻薬・向精神薬については法規に基づいて厳密な管理を実施

10) 治験管理業務

- ・治験管理センターと連携して治験の支援や治験薬の管理を実施

薬剤部員数は未だ少数ながら、院内の各種医療チームに参画するようになり、少しずつではあるが、チーム内で薬剤師の専門性が発揮できるようになっている。その他に、薬剤師が生体支援センター、医療連携センター、エイズ対策推進センター、がんセンター、レジメン検討部会、医療安全管理室、等の構成員を併任し、院内の多くの部門の業務に関わっている。

一方、対外的な活動としては、日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師研修事業認定研修施設および日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設として研修生の受け入れを行っており、がん専門薬剤師の養成に関与している。また、定期的に部内で研修会を開催し、調剤薬局薬剤師との交流を図るなど薬業連携も推進している。

2. 教育施設

- 1) 日本医療薬学会認定薬剤師制度研修施設
- 2) 日本医療薬学会がん専門薬剤師研修施設
- 3) 日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師研修事業認定研修施設
- 4) 薬学生実務実習受入施設

3. 診療開発

- 1) 診療名 : 医薬品認証機能を付加した注射剤無菌調製支援システム

診療内容: コンピュータ、モニター、バーコードリーダー、電子天秤を搭載したクリーンベンチ・安全キャビネットを開発し、注射剤の無菌調製の過程を監視することによって注射剤調製の正確性向上に貢献してきた。今回、医薬品への RSS コードの掲示に伴い、RSS コードから医薬品の認証を行う機能を付加し、機能を充実した。

他病院での導入状況: 注射剤無菌調製支援システムは、本院薬剤部が医療機器メーカーと共同で開発したシステムであり、すでに全国の病院で導入が始まっている。また、医薬品の認証機能を兼ね備えた新システムもすでに実用化が終了しており、順次、他病院にも導入される予定である。

国内的評価: 2004 年度に開発した旧システムは、注射剤調製の過程をコンピュータでチェックできる唯一のシステムとして医療過誤防止の観点から高く評価されてきた。新たに機能付加した本システムは、医薬品の取り間違いを防止することが可能となり、さらに注射剤調製の正確性ならびに安全性の向上が期待される。

国際的評価: 未定

4. 専門医・認定医・指導医

伊藤善規: 日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師

松浦克彦: 日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師、日本医療薬学会がん専門薬剤師・指導薬剤師、日本静脈経腸栄養学会栄養サポートチーム専門薬剤師

岡安伸二: 日本医療薬学会認定薬剤師、日本糖尿病療養指導士、認定実務実習指導薬剤師

下田浩欣: 日本糖尿病療養指導士

安田浩二: 日本医療薬学会認定薬剤師

丹羽 隆: 日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師、日本病院薬剤師会感染制御専門薬剤師、日本化学療法学会抗菌化学療法認定薬剤師、インфекションコントロールドクター

飯原大稔: 日本医療薬学会認定薬剤師・指導薬剤師、日本病院薬剤師会がん専門薬剤師、日本医療薬学会がん指導薬剤師

石原正志: 日本静脈経腸栄養学会栄養サポートチーム専門薬剤師、日本病院薬剤師会 HIV 感染症薬物療法認定薬剤師、日本病院薬剤師会がん薬物療法認定薬剤師

山内恵太: 日本医療薬学会認定薬剤師

山田紘嗣: 認定実務実習指導薬剤師

西垣美奈子: 日本生薬学会漢方薬・生薬認定薬剤師

河原加奈: 日本臨床薬理学会認定 CRC

5. 自己評価

評価

現在、薬剤部内の薬剤師定員数は 35 名であるが、定足数に達していないため入院患者の持参薬管理や入院患者への薬物療法支援業務(薬剤管理指導業務)が十分にできていない。さらに、ICU・ACCC で

は薬剤師 2 名を常駐させることによって、抗 MRSA 薬の処方設計、注射薬の調製、薬品管理など医薬品の適正使用ならびにリスマネジメントに関わっていたが、現在は常駐 1 名、併任 1 名体制であり、戦力低下の状況となっている。一方、外来化学療法室へはこれまで薬剤師 2 名の常駐であったが、薬剤師 3 名常駐体制として戦力強化を図り、抗がん剤調製の完全実施、患者さんへの治療説明や服薬指導、副作用対策支援などにより安全性の確保のみならず、診療効率の向上による医療収益の増加に貢献した。最近では、患者来院後の採血から診察までの待ち時間を利用した「診察前患者面談」を実施し、副作用モニタリングや処方提案を積極的に行い、診療効率の向上に寄与している。さらに、感染領域の専門的知識と技能を有する専門薬剤師 1 名を感染コントロールチームの活動に専従させることにより、抗菌薬の医療費削減、入院期間の短縮、耐性菌出現率の低下に貢献できた。これらの取り組みを含め総合的に評価すると、医療の安全性の確保ならびに病院経営への貢献ができたと考ええる。しかし、全病棟に薬剤師を専任で配置し、医療安全体制のさらなる強化と患者満足度の向上のために、薬剤師確保さらには増員の課題は急務である。

現状の問題点及びその対応策

NICU の本格稼働、放射線医薬品の管理、等、新たな薬剤業務が増加する中で薬剤師の人材不足は、現職員の負担増加に繋がり、時間外勤務の増加や休暇の未消化といった問題が生じ、深刻な問題である。薬剤師の定員割れが生じる主な原因となっているのは、身分、給与、就労時間等の待遇面での問題であるが、これについては 1 部門としての対応策はない。医療はさらに高度化および専門化してきており、薬物治療における有効性と安全性を確保する上では、専門的知識と技能を有する薬剤師のニーズが益々高まる。したがって、専門薬剤師を目指す薬剤師に対しては、学会や研修会への参加、専門書などの書籍の共同購入等においては惜しみない支援を行い、質の高い薬剤師の育成と新たな人材確保に取り組む必要がある。

なお、現定員数の 35 名が充足しても全入院患者への薬物療法支援はできず、薬剤業務の医療経済効果や医療安全への貢献度を客観的指標により評価を行い、病院経営者側へ理解を促すことにより、薬剤師の定員数増加ならびに勤務条件や給与等の処遇改善に取り組む必要がある。

今後の展望

高度化かつ専門化する医療において、安全性を確保することは病院にとって極めて大きな課題である。薬剤師は薬の専門家として院内各部署において活躍することが求められている。近年、専門薬剤師の必要性が論じられ、多くの専門領域において専門薬剤師認定制度が導入され、その数はなおも増え続けている。専門薬剤師を養成することによって今後は全病棟を対象に薬剤師を配置し、薬物療法へのより深い関与を推進するとともに、チーム医療に関与することによって生じる明確なアウトカムを追及することが重要であり、その実現のためには、厚生労働省が提案している医療スタッフによる医師業務の役割分担の見直しを検討し、医療の質を確保するために薬剤師による新たな業務の展開について検討する必要がある。また、新規医薬品の開発に携わることは大学病院の使命であり、治験管理センターと密接に連携して、治験の円滑な推進を行うとともに、医療者主導の臨床研究にも積極的に取り組む必要があると考ええる。

(40) 看護部

1. 看護部の概要

看護部理念 「思いやりのある看護の実践」

- 基本方針
- 1) 患者が置かれている状況から必要な看護に気づきます。
 - 2) 科学的根拠に基づいた安全な看護を提供します。
 - 3) 患者の権利を尊重した看護を提供します。
 - 4) 地域と連携した看護を提供します。
 - 5) 思いやりのある看護を提供できる組織文化を醸成します。

当院は、県下唯一の特定機能病院として、また、高度救命救急センター設置病院、都道府県がん診療・難病医療連携・エイズ治療中核・肝疾患診療連携の4つの拠点病院としての役割を果たしつつ、地域の中核病院として医療を展開している。このような病院に、看護職員約600名を、外来部門(1看護単位)、病棟部門(12看護単位)、中央診療施設等(5看護単位)に配置している。また、保健師助産師看護師法に規定されている「診療の補助と療養上の世話」の看護ケア範囲において、看護部理念・基本方針に基づき、24時間365日看護を提供している。

平成25年度までの中期的看護部運営方針は、「ひとり一人の看護師が誇りを持ち、生き生きと仕事ができるような組織作り」「柔軟な勤務体制や看護支援体制を充実させ、ワーク・ライフ・バランスを実現できるような環境づくり」をかかげている。これらの方針を具現化するために、第一点目は、一人当たりの看護提供力の向上を図る。第二点目は、優秀な人材の確保と定着が必要である。

看護の質向上のために平成20年入院基本料7対1の取得や、平成24年4月NICU開設、平成25年4月外来化学療法室の増床、光学診療部の施設拡大に向け年々看護師の増員を図っている。また、看護師の増員だけではなく、看護師の発揮能力を高めるために「高度医療に対応できる看護実践者の育成」という教育理念のもと、看護実践の保有能力を向上させるための教育を継続的に実施している。同時に、専門看護師や認定看護師、その他看護に関連する糖尿病療養指導士や呼吸療法士、社会福祉士などの有資格者による教育や看護実践への支援も実施している。

専門看護師や認定看護師の育成は、平成17年より計画的に行っており、平成23年度現在、1領域2名の専門看護師、10領域14名の認定看護師が誕生している。これらの看護師は、看護の質向上のためのリソースナースとして、呼吸療法支援チーム・栄養サポートチーム・感染対策チーム・褥そう対策チーム・緩和医療チームなどの高度な専門職チームのメンバーとして組織横断的に活動している。また、専門看護師・認定看護師間の情報共有や活動を支援するために、平成22年度に看護部内にリソースナース委員会を設置した。

一方、地域医療連携を推し進めるために、看護部からは、社会福祉士、介護支援専門員、社会福祉士の資格を持った4名の看護師を医療連携センターのセンター員として配置している。入院時から退院を見据えて退院調整を行い、安心して地域に戻れるよう他施設との連携を図っている。

2. 教育施設

- 1) 看護学臨地実習施設
- 2) 認定看護師教育課程実習施設：感染管理分野、救急看護分野

3. 専門看護師・認定看護師・その他

荻谷三月：がん看護専門看護師
坂井田笑子：がん看護専門看護師
深尾亜由美：感染管理認定看護師
土屋麻由美：感染管理認定看護師
古市ふみよ：摂食・嚥下障害看護認定看護師
木下幸子：皮膚・排泄ケア認定看護師
杉原博子：集中ケア認定看護師
山下浩司：救急看護認定看護師
石川りえ：皮膚・排泄ケア認定看護師
瀧 寛子：集中ケア認定看護師、3学会合同呼吸療法認定士
高橋 繭：がん化学療法認定看護師
牧野リカ：がん性疼痛看護認定看護師
古田 均：糖尿病看護認定看護師、日本糖尿病療法指導士

岡本知美：新生児集中ケア認定看護師
吉川昌弥：手術看護認定看護師
河村陽子：がん化学療法認定看護師
日本糖尿病療養指導士 9名
介護支援専門員 5名
3学会合同呼吸療法認定士 4名
社会福祉士 2名
日本禁煙学会認定指導看護師 2名
救急医学会認定 ICLS インストラクター 1名
JPTEC インストラクター 1名
救命救急士 1名
日本インターベンショナルラジオロジー看護師 1名

4. 自己評価

評価

現在、中期的看護部運営方針に沿って、看護部の組織目標を設定し目標到達に向け看護部一丸となって活動している。一年ごとに目標の到達度評価をし、次年度への看護部運営活動につなげることができている。また、看護師個々のキャリア開発のための体制作り、柔軟な勤務体制と育児支援体制は整った。今後、これらの体制を十分に活用し、看護師一人ひとりのキャリア開発を推し進めると同時に、ワーク・ライフ・バランスの実現のための活動をしていく必要がある。

現状の問題点及びその対応策

- 1) 特定機能病院、高度救命救急センター設置病院、4つの拠点病院としての機能を果たすために、高度な医療を提供する必要があり、それに伴って幅広い高度な知識・技術を有する看護師の配置が必要である。対応策として、必要とする領域における専門看護師や認定看護師の育成を図ると同時に、これらのリソースを有効活用することにより、個々の看護師のキャリア開発を行い、看護部全体の看護の質向上を図る。
- 2) 看護業務や新入職者の育成を遂行するにあたって、中堅看護師が大きな役割を担っている。しかし、妊娠・出産・育児をする看護師の増加により、看護職員全体に占める中堅看護師の割合は少なくなってきた。このことにより実働する中堅看護師に負担がかかり、疲弊し、離職につながっている。対応策として、まず第一に看護師の離職防止策を実施、第二に優秀な人材の確保、第三に一人前看護師数の増加を図る。
- 3) 育児支援制度を利用する看護職員が年々増加の一途をたどっている。しかし、育児期に一度入ると、フルタイム看護師として職場復帰するまでに長い期間を要する。このことにより、制度利用期間中の制度利用者のキャリアアップを図ることができない。対応策として、制度利用者のキャリアアップ支援の方策を確立する。
- 4) 患者の超高齢化に伴い、病状の重症化、謔妄、認知・知覚障害などによる日常生活支援が必要な患者割合が年々高くなってきている。加齢による様々な機能低下を伴った高齢者の看護には、危険を予知した患者の見守りや話し相手等の看護業務が多く含まれている。これらの業務は、無資格者でも可能な業務であるため、無資格者による看護補助業務を有効に取り入れた看護の実施体制の整備をしていく。

今後の展望

チーム医療の推進が図られている中で、看護師が専門職として任されている看護サービスのより一層の向上を図るために、人材の確保と定着、仕事と生活の調和に関する支援体制の充実と活用を図っていく。これらの看護部の活動をすることにより、特定機能病院、各種の拠点病院の役割を果たす地域の中核病院としての医療提供に寄与したい。

(41) NICU 設置準備室

1. 診療の概要

- 1) 平成 24 年 4 月に新たに新生児集中治療部として NICU 6 床, GCU 6 床を東 4F 病棟北側に設置するために平成 23 年 1 月に NICU 設置準備室が設置された。
- 2) 施設整備：平成 22 年 9 月から平成 23 年 2 月にかけて工事が行われた。
- 3) 診療器材整備：平成 23 年 3 月より順次納入された。
- 4) 人員の配置および研修：
平成 22 年度に准教授 1 人および助教 3 人が配置され、さらに医員 5 人および看護師 25 人を配置することになった。
医師を岐阜県総合医療センター新生児センターに派遣し研修をおこなった。
看護師の研修を岐阜県総合医療センター新生児センターおよび名古屋第一赤十字病院総合周産期母子医療センターにおいておこなった。
- 5) 新生児, 未熟児医療全般を行う。

2. 教育施設

- 1) 日本周産期・新生児医学会新生児専門医研修施設（補完研修施設）
- 2) 日本小児科学会認定施設
- 3) 日本アレルギー学会認定施設
- 4) 日本人類遺伝学会認定施設
- 5) 日本小児神経学会認定施設

3. 診療開発

- 1) 診療名：CGH アレイなどの検査機器を利用した先天性疾患の診断方法の確立
診療内容：現行の染色体検査や遺伝子検査法では診断が困難な遺伝病、遺伝子病、染色体異常、胎芽病、胎児病、免疫不全症、代謝性疾患などについて CGH アレイなどの検査を行い、原因検索をすすめ早期に診断を行うことで、ひいては新規治療開発につなげることを目指している。
特に、以下の項目に重点をおいて考えている。
 - (1) 染色体異常症の高精度な診断
 - (2) 先天性神経筋疾患の簡便な診断法の確立にむけた研究
 - (3) 先天性代謝性疾患の簡便な診断法の確立にむけた研究
 - (4) 先天性免疫不全症の原因検索および診断にむけた研究これらの疾患について検査法について検討し高度な診断方法の確立し、ひいては新規治療開発に結びつけることを目指している。
他病院での導入状況：岐阜県内における病院ではおこなわれていない。一部の疾患については国内でも行っている医療機関はあるが稀である。
国内的評価：研究段階の検査法であるが、有益な情報が得られることが知られている。様々な疾患への応用が期待されている。検査費用が高価であることが問題である。
国際的評価：様々な染色体異常症の診断に利用され論文発表が行われており、今後様々な疾患に応用されることが期待されている有用な検査法と位置づけられている。
- 2) 診療名：新生児の持続脳波モニタリング、近赤外分光法を用いた脳機能解析や超音波 3D 画像を用いた大脳各部位の容積の変化を使用した神経発達評価法の確立と治療への応用に向けた研究
診療内容：新生児の持続脳波モニタリングにより今まで発見が困難であった新生児けいれんの検出や周産期ストレスの脳への影響を評価しその後の発達と比較する。また同時に近赤外分光法を用いた脳表面の組織酸素飽和度の変化を評価することで低酸素や、脳虚血の影響を検討する。超音波による血流や 3D 画像を用いた大脳各部位の容積の変化を他の検査とあわせて検討する。
他病院での導入状況：岐阜県総合医療センターで導入が検討されている。
国内的評価：研究段階の検査法であるが、有益な情報が得られることが知られている。検査費用が高価であることが問題である。
国際的評価：新生児の脳機能評価法として利用され論文発表が行われており、研究段階の検査法であ

るが有用な方法と位置づけられている。

3) 診療名 : 新生児の自律神経機能評価法の確立と治療への応用に向けた研究

診療内容 : 現行では新生児の自律神経機能検査法はかぎられておりその評価法も確立されていない。
新たな心電図, 脳波をもちいた自律神経検査を導入し新生児の睡眠や無呼吸発作などを解析することで新生児の生理や病態の解明を目指している。

他病院での導入状況 : 岐阜県内における病院ではおこなわれていない。

国内的評価 : 研究段階の検査法であるが, 有益な情報が得られることが知られている。検査の評価が難しいことが問題である。

国際的評価 : 報告が少ないが論文発表が行われており, 今後有用な検査法となることが考えられる。

4) 診療名 : 先天性代謝性疾患の診断のための検査の確立と治療への応用に向けた研究

診療内容 : 連続した解析が可能な分光光度計を導入することで新生児の先天性代謝異常症の診断に必要な酵素活性を迅速に測定することが可能となる。また微量検体で測定可能な検査機器を導入することで有用な診断方法の確立を目指す。

他病院での導入状況 : 岐阜県内における病院ではおこなわれていない。

国内的評価 : 研究段階の検査法であるが, 有益な情報が得られることが知られている。患者数が少ないため診断施設が少なく検査手技が難しいことが問題である。

国際的評価 : 報告が少ないが論文発表が行われており, 患者数を蓄積することと新たな診断方法の確立をすることが今後必要であると考えられる。

4. 専門医・認定医・指導医

折居建治 : 日本小児科学会専門医, 新生児蘇生法「専門コース」インストラクター

矢野竜一郎 : 日本産科婦人科学会専門医, 母体保護法指定医

森本将敬 : 新生児蘇生法「専門コース」修了

木村 豪 : 日本小児科学会専門医, 新生児蘇生法「専門コース」修了

川本典生 : 日本小児科学会専門医, 日本アレルギー学会専門医, 新生児蘇生法「専門コース」修了

山本崇裕 : 日本小児科学会専門医, 新生児蘇生法「専門コース」修了

5. 自己評価

評価

平成 24 年 4 月に診療開始し, 5 月に新生児特定集中治療室管理料に関する施設認定申請を行うべく, 医師, 看護師の研修および運用マニュアルを作成し各診療部門との連携を円滑におこなえるように準備をおこなっている。

現状の問題点及びその対応策

岐阜大学の新生児集中治療部と岐阜県総合周産期母子医療センター, 岐阜県内の地域周産期母子医療センターとの連携を円滑にすすめるために, 各医療機関における機能分担を明確にすることが必要である。岐阜大学においては, 先天性遺伝性疾患, 染色体異常症, 胎芽病, 胎児病, 先天性免疫不全症, 先天性代謝性疾患などの診断および治療などの高度先進医療をおこなうことを予定している。また, 周産期医療を担う人材育成のための卒前, 卒後の教育プログラムを立ち上げ, 人材の確保をすすめる。

今後の展望

平成 24 年 4 月より新生児集中治療部における診療を開始し, 各医療機関と連携して岐阜地区の新生児医療の充実をはかる。高度先進医療の診断・治療法の開発を目指す。

(42) 診療録管理室

1. 診療の概要

診療報酬に DPC/PDPS (Diagnosis Procedure Combination/ Per-Diem Payment System) が導入されるに伴い、診療情報管理士の雇用が始まり、新病院移転後の平成 17 年 2 月に診療録管理室が正式に設置された。

業務内容はその経緯から、DPC/PDPS のためのコーディング業務から始まっているが、単にコーディング業務に留まらず、1) 電子診療録の管理、2) 診療録の量的・質的 point 検ならびに記載上の指導、3) 診療録の閲覧・開示の 3 つも主たる業務としている。

組織は現在 9 名の医師と 4 名の診療情報管理士によって構成され、医師による診療録記載業務ならびに事務組織による医事業務の基礎となる部分を支援・指導する立場となっている。

2. 教育施設

- 1) 藤田保健衛生大学・臨床実習施設
- 2) 鈴鹿医療科学大学・臨床実習施設
- 3) 大学病院診療情報管理士連絡会幹事病院

3. 診療開発

なし

4. 専門医・認定医・指導医

白鳥義宗：日本内科学会認定指導医、日本消化器病学会認定消化器専門医・指導医、日本肝臓学会認定肝臓専門医・指導医、日本がん治療認定医機構暫定教育医、日本医療情報学会医療情報技師育成指導者、American Gastroenterological Association Fellow

豊田 泉：日本救急医学会専門医・指導医、日本脳神経外科学会専門医、日本高気圧環境医学会専門医、日本航空医療学会認定指導医

西垣和彦：日本内科学会認定医・指導医、日本循環器学会認定循環器専門医、日本心血管インターベンション治療学会認定専門医・指導医、日本不整脈学会認定植込み型除細動器/ペースングによる心不全治療認定医、日本心臓リハビリテーション学会：心臓リハビリテーション指導士、日本医師会認定産業医、日本医師会認定健康スポーツドクター、厚生労働省認定労働衛生コンサルタント、American Heart Association (AHA) : AHA-BLS & -ACLS Instructor

川地慎一：日本内科学会認定総合内科専門医・指導医、日本糖尿病学会認定専門医・指導医、日本内分泌学会認定専門医・指導医、日本甲状腺学会認定専門医、日本消化器内視鏡学会認定専門医、日本体育協会公認スポーツドクター

森田浩之：日本内科学会認定医・専門医・指導医、日本内分泌学会認定専門医・指導医、日本糖尿病学会認定専門医・指導医、日本リウマチ学会認定専門医・指導医、日本老年病学会認定専門医・指導医、日本アレルギー学会認定専門医、日本病院総合診療医学会認定医

加藤善一郎：日本小児科学会認定専門医、日本小児神経学会認定専門医・専門医研修施設責任指導医、日本人類遺伝学会認定専門医・指導医

古井辰郎：日本産科婦人科学会認定専門医、日本生殖医学会認定専門医、日本がん治療認定機構暫定指導医

望月清文：日本眼科学会認定眼科専門医・指導医

長瀬 清：麻酔科標榜医、日本麻酔科学会認定医・指導医

三浦亜耶乃：診療情報管理士

福田直子：診療情報管理士

福田正哉：診療情報管理士受講中

丸茂尚子：診療情報管理士受講中

5. 自己評価

評価

DPC/PDPS のコーディング業務は、転科症例を中心にコーディングの確認・支援を行っており、コーディングの精度向上に一定の役割を果たしている。

電子診療録の管理については、医療情報部と連携しながら、正確な記録が残せるように努力しており、

国内外でもトップクラスの評価を受けている。

診療録の量的・質的点検ならびに記載上の指導については、入職時の研修会や診療録管理委員会等を通じて点検並びに記載指導を行っている。この評価の詳細に関しては、次の項で説明する。

診療録の閲覧・開示については、年間 60 件以上になっており、年々増加している。全国の大学病院の中でもトップクラスの開示数であり、病院としての診療録の透明性・情報開示の姿勢のひとつの表れと思われる。

現状の問題点及びその対応策

当院の電子診療録については、その運用を含め国内外で高い評価を受けているが、いくつかの問題点も抱えている。

近年、勤務医の過重労働が問題となっており、その軽減策として診療の補助者を置く病院がほとんどであり、大学病院と言えども例外ではない。しかし、当院の診療録記載業務に関しては全て医師に任されている。このことは人員削減を可能とし、経営効率改善には寄与できるが、時代の要請を考えると現在の医師のみに頼るシステムの維持は難しい側面もあり、今後も引き続き検討が必要と思われる。

また、当院の病院情報システムに関しては、医師をはじめとする医療従事者に対する仕組みとしては先進的であるが、事務業務を遂行する仕組みとしては十分とは言えずまだまだ非効率的である。この診療録の医療事務的に不足する部分を如何に補うかも当院診療録上の重要な課題である。

さらに診療録に関与する人員の問題もある。システムに依存する部分が多く、慢性的な人員不足となっている。そのため他大学に比しシステム的なチェックは行えているが、人的に目で点検し指摘を行うことが困難な状態である。また、診療情報管理士は事務組織の中で比較的短期間で人事異動が行われることがあり、技術・知識の蓄積が難しい現状がある。専門性の高い、資格の必要な事務職についての雇用の問題である。そのため、DPC/PDPS のコーディネーティング業務を含め、個々の技術力向上に努めているところである。今後、業務委託の職員との連携や前述の雇用方法ならびに教育方法などを含め、レベルアップのための方策を検討していく必要があると考えられる。

今後の展望

診療録管理室ならびに診療情報管理士の位置づけを明確化し、業務連携の在り方を見直すことにより、より効率的で質の高い医療を展開できるように支援していく予定である。

3. 診療スタッフ

(1) 診療要員の配置状況

当病院の診療は、大学院医学系研究科に所属する臨床系講座の教育職員及び医学部附属病院に所属する教育職員、また、医学部附属病院に所属する医員、医員(研修医)等により行われている。

教育職員については、他大学病院と同様、教授・准教授・講師・助教により診療が行われているが、平成17年度からは診療に携わる助教について、「臨床講師」という呼称を与えた(病院長発令による)。これは、講師相当の経験年数を有する助手に対し、講師格付けの給与を支給することによって、当病院の診療業務に、より意欲を持って携わることが出来るよう措置されたものである。

また、平成17年度から、医員については本院の業績を踏まえ、診療業務に対する評価と人材の確保のため、約40%給与をアップし、医員(研修医)については、民間病院等との給与等の格差を是正するため、月額30万円を確保するための諸手当等を含めた給与の支給を実施した。

平成23年度診療スタッフの配置状況については下記のとおりである。

診療科名	研究科所属 教員人数	病院所属 教員人数	寄附講座 所属人数	医員	医員 (研修医)	合計
第1内科	3	4		9		16
第2内科	4	6		12		22
第3内科	3	3		4		10
神経内科・老年科	4	1		5		10
総合内科	3	1	1	5		10
第1外科	3	7		4		14
第2外科	4	5	1	4		14
産科婦人科	3	4		4		11
整形外科	3	5	2	8		18
脳神経外科	4	3		6		13
眼科	3	3		5		11
耳鼻咽喉科	3	5		4		12
皮膚科	2	3		6		11
泌尿器科	3	4		6		13
精神神経科	3	4		4		11
小児科	3	5		7		15
放射線科	3	3		6		12
麻酔科蘇生科	3	5		6		14
歯科口腔外科	3	5		1	1	10
検査部	3	2				5
放射線部		2				2
輸血部		1				1
手術部		2				2
医療情報部		1				1
材料部		1				1
病理部	1	1		1		3
光学医療診療部		2				2
高次救命治療センター	5	10		12		27
医療連携センター		1				1
生体支援センター	1	4				5
肝疾患診療支援センター		1				1
卒後臨床研修センター		1			23	24
NICU設置準備室		4				4

診療科名	研究科所属 教員人数	病院所属 教員人数	寄附講座 所属人数	医員	医員 (研修医)	合計
病院長直属				2		2
合計	67	109	4	121	24	328

(2) 診療支援要員の配置状況

平成 17 年度から診療放射線技師・作業療法士、理学療法士・臨床工学技師等を増員することにより、患者サービス・診療機能のより一層の向上、診療報酬の増額による病院運営の発展に寄与することとなった。

また、平成 18 年 1 月から医療情報部の機能を見直し、医療情報部副部長に新たに電子診療録担当の病院長補佐を命じ、また、管理課に医療情報室を設けることによって、電子カルテシステムの操作性の向上や診療報酬との連携、クリニカルパスの導入等、病院運営の根幹をなすものとしてその機能の拡充を図った。

(3) 看護要員の配置状況

平成 16 年度から雇用形態を任期付職員として採用することによって、病院機能に沿った看護職を採用できている。また、本院の基本理念を果たすため、他の医療メンバーと協働しながら患者中心の看護活動を行うことにより、地域社会に貢献することを使命としている。

現在、看護師、助産師、看護助手を合わせて約 500 人体制で日々看護業務に励んでいるが、任期付職員については 3 年を限度としており、退職者の発生により、順次任期のない職員とすることによって、より良い人材を確保することが可能となっている。

4. 先進医療

(1) 先進医療

先進医療名	該当診療科	料金	承認年月日
1. インプラント義歯	歯科口腔外科		平成 19 年 2 月 1 日
フィクスチャー 1 式、上部構造 1 歯		320,240 円	
フィクスチャー 1 式		272,990 円	
ただし、フィクスチャー・上部構造は使用数に応じて次の料金を加算する。			
フィクスチャー 1 式につき		94,980 円	
上部構造 1 歯につき		47,250 円	
2. 内視鏡的大腸粘膜下層剥離術	第 1 内科	60,900 円	平成 22 年 8 月 1 日

(2) 高度先進医療技術の開発導入

平成 23 年 7 月に診療科別ヒアリングを実施した。このヒアリングにおいて、各診療科の取り組みあるいは取り組もうとする先端医療について、事業計画書を基に病院長、副病院長等運営組織による意見聴取を行った。

ヒアリングの結果を基に、各診療科が今後導入を希望する高度先進医療技術について、病院長裁量経費として事業費の配分をした。

平成 23 年度

先進医療の開発	4 件	32,550 千円
特色ある診療の開発・導入	7 件	43,536 千円

5. 地域医療の取り組み

(1) 地域医療の確保

地域医療の確保として、①岐阜地域の医師不足を緩和し、適正配置するには勤務医の絶対数が必要であること。②特に、これまで地域の医師養成を担ってきた大学(医局)関連医師プールの確保が必須であること。③また、高度先進医療を提供し、その能力を備えた医師を育成する大学病院後期研修医師の確保が必要であること。の 3 点を踏まえ、医師不足に対する当病院の取組みとして、「岐阜方式による新たな後期研修医師養成システム」(病院長直属医員制度)を導入することにより、医局への入局を敬遠する初期卒後臨床研修修了医を後期研修医として採用することとした。

(2) 難病医療拠点病院の指定

県内の基幹病院及び一般協力病院からの要請に応じて、主に特に高度の医療を要する難病患者の受け入れを行うとともに、基幹病院に対して、難病医療に係る情報の提供及び相談に応じる役割を担う「難病医療拠点病院」として、平成 17 年 9 月に岐阜県から指定を受けた。岐阜県は、平成 18 年度から「岐阜県難病医療連絡協議会事業」を当病院へ業務委託することとした。

平成 18 年度から県内の医療機関等へ出向き、難病ケアコーディネーター研修会を開催するなど難病担当者のネットワークを構築している。

(3) 都道府県がん診療連携拠点病院の指定

質の高い専門的ながん診療や地域の医療機関と連携した医療の提供等を実施するとともに、専門的ながん医療を行う医師・薬剤師・看護師等を対象とした研修の実施や地域がん診療連携拠点病院等に対する情報提供、症例相談、診療支援を行うなど、県のがん診療機能の中心的役割を担っていくことを目的に、平成 18 年 8 月に「都道府県がん診療連携拠点病院」として、厚生労働省から指定を受けた。

(4) エイズ中核拠点病院の指定

当院は平成 19 年 3 月に岐阜県のエイズ治療拠点病院に指定されており、岐阜県の HIV 感染症患者の過半数の診療を行っている。エイズ患者においてはさまざまな合併症を伴うことが少なくなく、多くの診療科の協力が必要であるが、ほぼ全科での受け入れ体制が万全な状態であることは特筆できる。院内にはエイズ対策推進センターも設置されており、診療のみならず専門カウンセラーによるカウンセリング活動や教育研修活動も積極的に行っている。エイズは不治の病ではなくなっており、近年では慢性疾患として捉えられるようになってきているからこそ、精神的ケアなどが特に重要である。

(5) 肝疾患診療連携拠点病院の指定

県内における肝疾患診療ネットワークの中心的な役割を果たすため、平成 19 年 11 月に「肝疾患診療連携拠点病院」として、岐阜県から選定を受けた。重症肝炎には循環管理も含めた全身管理を中心に対処している。特に免疫学的観点に立脚してリンパ球表面マーカー解析やサイトカイン療法なども導入している。慢性肝炎や肝硬変には、積極的にインターフェロンなどの抗ウイルス療法を施行している。

(6) 岐阜県予防接種センターの機能

岐阜県から、平成 20 年 4 月に県内における予防接種センター機能を有する医療機関として本院が選定された。

(7) 三次周産期医療ネットワーク岐阜県予防接種センターの機能

平成 20 年 4 月に岐阜県周産期医療ネットワーク事業に参画し、「周産期医療支援病院」として参画することとなった。

(8) 臓器提供連絡調整員の配置

県内の病院が日常的に臓器提供に関する情報を集めたり、所属する施設の職員に対して臓器移植についての普及・啓発及び臓器提供があった際に臓器移植コーディネーターと緊密な連携を持って患者家族等を支援するなど、臓器移植に関する事業の推進を図るための役割を担う臓器提供連絡調整員として、岐阜県から本院職員 5 名が委嘱された。

6. 卒後臨床研修の状況

卒後臨床研修センターは、卒後臨床研修の必修化に伴い、平成 14 年 5 月に設置された。

平成 20 年 10 月には、規程を一部改正し、後期研修医のキャリア形成支援センターとしての機能を持たせた。

(1) 初期臨床研修

岐阜大学病院プログラムの特徴

- ・ 未来型病院であるインテリジェントホスピタル（日本で 1 番先進的 IT 病院）において、最新の情報システムの医療活用をマスターさせ、新時代を担う医師を養成する。

- ・ 医局の枠に縛られず、研修センター所属で「病院全体の研修医」として指導する。将来、基幹学会の認定医・専門医申請に対応できるよう疾患群・手術例・剖検例を研修センターが適正な症例配分を行う。
- ・ 2年一貫大学病院で研修する「単独コース」と、大学病院と協力型病院の2施設で研修する「たすきがけコース」があり、コース選択は柔軟的である。
- ・ 高次救命治療センターは、救急指導医と救急専門医を含めた専従医師が約30名おり、診療科の壁を取り払った総合的な高度救急研修が可能である。
- ・ 多様な研修ニーズに対応できる、大学病院の特色(各種医療センター)を活かしたオーダーメイド研修である(幅広い診療科と豊富な専門プログラムからのメニュー選択)。
- ・ 大学病院が豊富な教育資源を持っていることから、現行の研修プログラムを弾力化し、研修分野や研修期間を見直すことが可能かどうかについての基礎資料を得るためのモデル事業が募集され、本院では外科に特化したプログラム((特別コース)岐阜大学病院外科研修プログラム)を作成し、平成21年4月から研修を開始することとなった。

平成21年度岐阜大学病院卒後臨床研修プログラム

1. プログラムの募集定員

プログラム名	募集定員	摘要
岐阜大学病院プログラム	37名	
コース1	(14名)	岐阜大学医学部附属病院 2年一貫研修
コース2	(10名)	1年目岐阜大学医学部附属病院 2年目協力型臨床研修病院から選択
コース3	(10名)	1年目協力型臨床研修病院から選択 2年目岐阜大学医学部附属病院
(特別コース)岐阜大学病院 外科研修プログラム	3名	1年目大学病院, 協力型病院 2年目大学病院, 協力型病院(6ヶ月以内)
合計	37名	

研修スケジュール

1. 岐阜大学病院プログラム

○コース1, コース2

1年目の研修ローテーション [岐阜大学病院]

3ヶ月	9ヶ月
高次救命治療センター・麻酔科リンクシステム	内科選択・外科リンクシステム

2年目の研修ローテーション [コース1: 岐阜大学病院, コース2: 協力型病院]

2～3ヶ月	1ヶ月	2ヶ月	1ヶ月	5～6ヶ月
小児科	精神科	産婦人科	地域保健・医療	選択科目

○コース3

1年目の研修ローテーション [協力型病院]

6ヶ月	6ヶ月
内科	外科(救急・麻酔を含む)

2年目の研修ローテーション [岐阜大学病院]

2～3ヶ月	1ヶ月	2ヶ月	1ヶ月	5～6ヶ月
小児科	精神科	産婦人科	地域医療	選択

2. (特別コース)岐阜大学病院外科研修プログラム

1年目の研修ローテーション: [岐阜大学医学部附属病院・協力型研修病院]

1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	1ヶ月	6ヶ月
救急	内科	小児科	産婦人科	精神科	地域医療	選択科目

2年目の研修ローテーション：[岐阜大学医学部附属病院・協力型研修病院]

12ヶ月(協力型研修病院は6ヶ月以内)
外科

3. 協力型研修病院(18病院)

岐阜県総合医療センター	羽島市民病院
岐阜市民病院	岐阜県厚生農業協同組合連合会 岐北厚生病院
医療法人蘇西厚生会松波総合病院	朝日大学歯学部附属村上記念病院
岐阜県立下呂温泉病院※1, ※2	国民健康保険関ヶ原病院
岐阜赤十字病院	医療法人香徳会関中央病院
岐阜県厚生農業協同組合連合会 久美愛厚生病院※1	多治見市民病院
特定医療法人厚生会木沢記念病院	高山赤十字病院※1
岐阜県厚生農業協同組合連合会 中濃厚生病院	杉田玄白記念 公立小浜病院
医療法人社団志聖会犬山中央病院	国立病院機構長良医療センター※2

※1は2年次の地域医療研修として選択可能な病院。

※2は2年次の産婦人科研修における産科研修の協力施設

4. 協力施設(20施設)

社団法人岐阜県労働基準協会連合会 労働衛生センター	岐阜県厚生農業協同組合連合会 揖斐厚生病院
岐阜県赤十字血液センター	特定医療法人白鳳会鷺見病院
財団法人岐阜健康管理センター	岐阜県西濃保健所
岐阜市保健所	特定医療法人録三会太田病院
社団医療法人かなめ会山内ホスピタル	岐阜県東濃保健所
岐阜県飛騨保健所	郡上市国保和良病院
岐阜県岐阜保健所	市立恵那病院
岐阜県関保健所	国民健康保険上矢作病院
岐阜県中濃保健所	国民健康保険坂下病院
岐阜県恵那保健所	下呂市立金山病院

(2) 後期臨床研修

初期臨床研修の修了者を対象として、入局あるいは非入局のかたちで専門医療の研修や研究を行う。基本的に、各診療科において「専門医コース」と「大学院コース」が設定されており選択される。前者は学会認定の専門医取得をもって到達目標とする。非入局の場合は病院長直属枠に属することによって後期臨床研修に従事する。

平成20年度に、岐阜大学を含む東海7大学で応募した「大学病院連携型高度医療人養成推進事業」において以下のプログラムが採択されたので、同年度以降は本プログラムに基づいて後期臨床研修を実施することになった。

東海若手医師キャリア支援プログラム

選定された「東海若手医師キャリア支援プログラム」は、東海地域における7大学とその関連病院の医師育成システムを相互に補完しながら、当地域で研修する全ての若手医師にキャリアパスを提示し、最終的に当地域全体に専門医を充足させる取組である。実際には、ホームページ上で7大学の総数300もの研修プログラムを可視化し、研修者を個々に登録させて専門医療を指導する。

7大学が中心となってキャリアパスを提示することで、当地域の病院で研修中のすべての研修医が幅広い選択肢を得るのみならず、大学院進学をもキャリアパスに組み込むことができる。また、当地域では7大学の関連病院の重複が多く、関連病院において他大学指導医からの指導を受けるなど、相互に研鑽するこ

とがより推進される。

岐阜大学病院では「キャリア形成支援センター」を卒後臨床研修センター内に設置し、コーディネーター、専任の教員、事務員を配置した。平成 20 年度末から登録作業が開始される。

7. 外来患者数及び入院患者数

(1) 外来患者数

区分	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
外来患者数	309,109 人	314,609 人	301,754 人	299,571 人	307,512 人
1 日平均患者数	1,262 人	1,284 人	1,242 人	1,238 人	1,265 人

(2) 入院患者数、病床稼働率及び平均在院日数

606 床について過去 5 年間の入院患者数、病床稼働率及び平均在院日数の推移

区分	平成 18 年度	平成 19 年度	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
入院患者数	190,197 人	187,715 人	183,006 人	179,456 人	178,731 人
病床稼働率	85.99 %	84.63 %	82.74 %	81.13 %	80.80 %
平均在院日数	16.07 日	15.34 日	14.82 日	14.64 日	13.80 日

8. 診療用施設・設備等の整備

導入年度	施設・設備等	
19 年度	TV会議システム 血管内超音波診断装置 全身麻酔器	移動型外科用 X 線装置 高解像度ビデオ電子内視鏡システム
20 年度	放射線治療システム 能動型冠灌流装置パルスインフューザー 低温プラズマ滅菌システム	マルチディテクタ X 線コンピュータ断層撮影装置 内視鏡業務支援システムサーバ
21 年度	電子カルテ・部門システム更新 検査部設備 内視鏡設備	迅速検査・治療システム 手術部設備
22 年度	新生児特定集中治療室施設・設備 移動型デジタル式汎用 X 線透視診断装置 造血幹細胞移植システム	ヘリポート設備 超音波診断装置

9. 病院経営・財務の状況

(1) 病院経営について

第 1 期中期目標期間(平成 16～21 年度)では、新病院開院に合わせ完全ペーパーレス・フィルムレスの電子カルテシステムを導入し、平成 21 年度の医療情報システム更新時には医事、看護、物流など各部門からの広範な診療データを統合管理できる DWH(データウェアハウス)の構築を行い、経営状況の迅速な把握を可能とした。また高次救命治療センター設置による急性期医療体制の整備、「都道府県がん診療連携拠点病院」「肝疾患診療連携拠点病院」「難病医療拠点病院」の指定など病病・病診連携の推進、電子カルテデータを活用した部門別原価計算の導入、7 対 1 看護体制の実施などにより増収を図った。(医業収益(附属病院収益)は法人化前の平成 15 年度 102 億 8 千万円から平成 21 年度 152 億 1 千万円と 49 億 3 千万円増加)

第 2 期中期目標期間(平成 22 年度～)からは、ドクターヘリの稼働や平成 24 年度稼働の NICU に対応するため病床配置の見直し、手術待ち患者の解消に向けて手術枠運用の見直し、経費削減では医薬品、診療材料の更なる値引率拡大、ジェネリック薬品の拡大など経営改善を図るとともに診療データの有効活用による医療の質の向上に向け体制の整備も図っている。(平成 22 年度の医業収益は手術件数の増加や診療報酬改定の影響により対前年度 14 億 9 千万円増の 167 億円)

しかし、近年、がん化学療法や内視鏡検査・治療を受ける患者が急激に増加しており、既存の診療施設では患者環境、医療従事者の安全管理上からも限界に近づき安全・安心な医療の提供が困難となってきた。さらに医師育成、地域医療の確保のため人材養成機能の充実を図るため北診療棟を整備することと

した。また看護師や技師など医療スタッフの充実に伴い更衣室・休憩室の不足、外来患者の増加による駐車場不足など施設面の整備が急務となっている。また高額医療機器の多くを移転時に整備し、その耐用年数が第2中期目標期間に到来することから、これらの医療機器の整備、医療情報システムの更新、さらには勤務医の負担軽減、7対1看護体制の維持など様々な課題がある。加えて、借入金を含む債務残高が平成22年度末現在380億5千万円と多額であり、現行の運営費交付金算定ルールのままでは、増収分を目的積立金にできないため経営としては非常に厳しい状況となっている。

(2) 財務状況

業 務 損 益
(自 平成 22 年 4 月 1 日 至 平成 23 年 3 月 31 日)

【附属病院】 (単位：千円)

業務費用	
業務費	
教育経費	32,380
研究経費	222,812
診療経費	11,435,350
受託研究費	280,257
受託事業費	34,672
人件費	7,044,698
一般管理費	158,633
財務費用	639,422
雑損	257
小 計	19,848,484
業務収益	
運営費交付金収益	4,334,815
附属病院収益	16,704,503
受託研究等収益	280,210
受託事業等収益	35,008
補助金等収益	175,856
寄附金収益	79,448
資産見返負債戻入	246,228
雑益	12,926
小 計	21,868,997
業務損益	2,020,512
土地	4,937,841
建物	25,900,479
構築物	996,957
その他	9,544,458
帰属資産	41,379,735

※ 財務諸表より抜粋(記載金額は千円未満を切捨てて表示している)
2,020,512千円の利益が生じているが、うち1,416,836千円は法人化に伴う特殊な会計処理によるもので、これを考慮すると603,676千円となる。

10. 各種療法等の届出状況

厚生労働大臣が定める施設基準状況 平成 23 年 10 月 1 日現在

名 称	届出年月日	承認番号
地域歯科診療支援病院歯科初診料	平成 22 年 4 月 1 日	(病初診) 第 15 号
歯科外来診療環境体制加算	平成 20 年 8 月 1 日	(外来環) 第 91 号
特定機能病院入院基本料 (一般病棟)	平成 20 年 5 月 1 日	(特定入院) 第 2 号
特定機能病院入院基本料 (精神病棟)	平成 23 年 7 月 1 日	(特定入院) 第 3 号
臨床研修病院入院診療加算 (医科)	平成 17 年 3 月 1 日	(臨床研修) 第 15 号
臨床研修病院入院診療加算 (歯科)	平成 18 年 4 月 1 日	(臨床研修) 第 27 号
救急医療管理加算・乳幼児救急医療管理加算	平成 22 年 5 月 1 日	(救急加算) 第 59 号
超急性期脳卒中加算	平成 20 年 4 月 1 日	(超急性期) 第 4 号
妊産婦緊急搬送入院加算	平成 20 年 4 月 1 日	(妊産婦) 第 8 号
診療録管理体制加算	平成 17 年 3 月 1 日	(診療録) 第 38 号
急性期看護補助体制加算	平成 22 年 5 月 1 日	(急性看護) 第 21 号
看護補助加算 (精神病棟)	平成 23 年 7 月 1 日	(看護) 第 166 号
療養環境加算	平成 16 年 5 月 20 日	(療) 第 12 号
重症者等療養環境特別加算	平成 17 年 5 月 1 日	(重) 第 42 号
精神科応急入院施設管理加算	平成 18 年 8 月 1 日	(精応) 第 2 号
精神科身体合併症管理加算	平成 22 年 4 月 1 日	(精合併加算) 第 9 号
がん診療連携拠点病院加算	平成 18 年 9 月 1 日	(がん拠点) 第 6 号
栄養管理実施加算	平成 18 年 4 月 1 日	(栄養管理) 第 22 号
医療安全対策加算	平成 20 年 4 月 1 日	(医療安全) 第 4 号
感染防止対策加算	平成 22 年 4 月 1 日	(感染防止) 第 1 号
褥瘡患者管理加算	平成 16 年 5 月 20 日	(褥) 第 96 号
褥瘡ハイリスク患者ケア加算	平成 18 年 6 月 1 日	(褥瘡ケア) 第 5 号
ハイリスク妊娠管理加算	平成 20 年 4 月 1 日	(ハイ妊娠) 第 13 号
ハイリスク分娩管理加算	平成 21 年 5 月 1 日	(ハイ分娩) 第 17 号
急性期病棟等退院調整加算 1	平成 22 年 4 月 1 日	(急性退院 1) 第 19 号
救急搬送患者地域連携紹介加算	平成 22 年 8 月 1 日	(救急紹介) 第 5 号
呼吸ケアチーム加算	平成 22 年 5 月 1 日	(呼吸チ) 第 3 号
地域歯科診療支援病院入院加算	平成 20 年 4 月 1 日	(地歯入院) 第 6 号
救命救急入院料 3	平成 22 年 7 月 1 日	(救 3) 第 3 号
救命救急入院料 4	平成 22 年 4 月 1 日	(救 4) 第 1 号
特定集中治療室管理料 2	平成 22 年 7 月 1 日	(集 2) 第 2 号
小児入院医療管理料 2	平成 23 年 5 月 1 日	(小入 2) 第 1 号
ウイルス疾患指導料	平成 18 年 4 月 1 日	(ウ指) 第 1 号
高度難聴指導管理料	平成 16 年 5 月 20 日	(高) 第 68 号
糖尿病合併症管理料	平成 23 年 10 月 1 日	(糖管) 第 28 号
がん性疼痛緩和指導管理料	平成 22 年 4 月 1 日	(がん疼) 第 43 号
ニコチン依存症管理料	平成 21 年 8 月 1 日	(ニコ) 第 153 号
地域連携診療計画管理料, 地域連携診療計画退院時指導料	平成 20 年 6 月 1 日	(地連携) 第 50 号
がん治療連携計画策定料	平成 23 年 3 月 1 日	(がん計) 第 6 号
肝炎インターフェロン治療計画料	平成 22 年 6 月 1 日	(肝炎) 第 28 号
薬剤管理指導料	平成 22 年 4 月 1 日	(薬) 第 93 号
医療機器安全管理料 1	平成 20 年 4 月 1 日	(機安 1) 第 7 号
医療機器安全管理料 2	平成 21 年 7 月 1 日	(機安 2) 第 6 号
歯科治療総合医療管理料	平成 18 年 4 月 1 日	(医管) 第 372 号
血液細胞核酸増幅同定検査	平成 20 年 4 月 1 日	(血) 第 12 号
HPV核酸同定検査	平成 22 年 6 月 1 日	(HPV) 第 65 号
検体検査管理加算 (I)	平成 20 年 4 月 1 日	(検 I) 第 136 号
検体検査管理加算 (III)	平成 20 年 4 月 1 日	(検 III) 第 29 号
検体検査管理加算 (IV)	平成 22 年 4 月 1 日	(検 IV) 第 5 号

名 称	届出年月日	承認番号
心臓カテーテル法による諸検査の血管内視鏡検査加算	平成 20 年 4 月 1 日	(血内) 第 6 号
埋込型心電図検査	平成 22 年 4 月 1 日	(埋心電) 第 7 号
人工膵臓	平成 20 年 4 月 1 日	(膵) 第 3 号
皮下連続式グルコース測定	平成 22 年 4 月 1 日	(皮グル) 第 1 号
長期継続頭蓋内脳波検査	平成 16 年 5 月 20 日	(長) 第 6 号
神経学的検査	平成 20 年 7 月 1 日	(神経) 第 23 号
補聴器適合検査	平成 16 年 5 月 20 日	(補聴) 第 6 号
コンタクトレンズ検査料 1	平成 20 年 4 月 1 日	(コン 1) 第 199 号
小児食物アレルギー負荷検査	平成 18 年 4 月 1 日	(小検) 第 6 号
センチネルリンパ節生検 (併用法)	平成 22 年 4 月 1 日	(セ) 第 9 号
センチネルリンパ節生検 (単独法)	平成 22 年 4 月 1 日	(セ) 第 10 号
画像診断管理加算 2	平成 20 年 4 月 1 日	(画 2) 第 7 号
ボジトロン断層撮影又はボジトロン断層・コンピューター断層複合撮影	平成 20 年 6 月 1 日	(ボジ) 第 9, 10 号
CT 撮影及び MRI 撮影	平成 18 年 4 月 1 日	(C・M) 第 40, 156, 157, 158, 159, 160 号
冠動脈 CT 撮影加算	平成 21 年 4 月 1 日	(冠動 C) 第 10 号
心臓 MRI 撮影加算	平成 21 年 4 月 1 日	(心臓 M) 第 8 号
外来化学療法加算 1	平成 20 年 4 月 1 日	(外化 1) 第 30 号
無菌製剤処理料	平成 20 年 4 月 1 日	(菌) 第 40 号
心大血管疾患リハビリテーション料 (I)	平成 21 年 11 月 1 日	(心 I) 第 10 号
脳血管疾患等リハビリテーション料 (I)	平成 18 年 9 月 1 日	(脳 I) 第 26 号
運動器リハビリテーション料 (I)	平成 22 年 4 月 1 日	(運 I) 第 37 号
呼吸器リハビリテーション料 (I)	平成 18 年 4 月 1 日	(呼 I) 第 36 号
集団コミュニケーション療法料	平成 20 年 4 月 1 日	(集コ) 第 9 号
医療保護入院等診療料	平成 18 年 1 月 1 日	(医療保護) 第 16 号
歯科技工加算	平成 22 年 4 月 1 日	(歯技工) 第 137 号
悪性黒色腫センチネルリンパ節加算	平成 22 年 4 月 1 日	(黒セ) 第 2 号
脳刺激装置植込術 (頭蓋内電極植込術を含む。)及び脳刺激装置交換術	平成 16 年 5 月 20 日	(脳刺) 第 8 号
脊髄刺激装置植込術及び脊髄刺激装置交換術	平成 16 年 5 月 20 日	(脊刺) 第 8 号
人工内耳埋込術	平成 16 年 5 月 20 日	(人) 第 2 号
乳がんセンチネルリンパ節加算 1 及び 2	平成 22 年 4 月 1 日	(乳セ) 第 11, 12 号
経皮的冠動脈形成術 (高速回転式経皮経管アテレクトミーカテーテルによるもの)	平成 21 年 9 月 1 日	(経高) 第 9 号
ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術	平成 16 年 5 月 20 日	(ペ) 第 62 号
埋込型心電図記録計移植術及び埋込型心電図記録計摘出術	平成 22 年 4 月 1 日	(埋記) 第 7 号
両心室ペースメーカー移植術及び両心室ペースメーカー交換術	平成 16 年 12 月 1 日	(両ペ) 第 3 号
埋込型除細動器移植術及び埋込型除細動器交換術	平成 16 年 12 月 1 日	(除) 第 5 号
両室ベising機能付き埋込型除細動器移植術及び両室ベising機能付き埋込型除細動器交換術	平成 21 年 1 月 1 日	(両除) 第 5 号
大動脈バルーンパンピング法 (IABP 法)	平成 16 年 5 月 20 日	(大) 第 30 号
補助人工心臓	平成 16 年 12 月 1 日	(補心) 第 4 号

名 称	届出年月日	承認番号
経皮的動脈遮断術	平成 22 年 4 月 1 日	(大遮) 第 5 号
ダメージコントロール手術	平成 22 年 4 月 1 日	(ダメ) 第 7 号
体外衝撃波胆石破砕術	平成 20 年 4 月 1 日	(胆) 第 17 号
腹腔鏡下肝切除術	平成 23 年 5 月 1 日	(腹肝) 第 3 号
体外衝撃波腎・尿管結石破砕術	平成 17 年 4 月 1 日	(腎) 第 25 号
同種死体腎移植術	平成 20 年 4 月 1 日	(腎植) 第 1 号
生体腎移植術	平成 20 年 4 月 1 日	(生腎) 第 1 号
膀胱水圧拡張術	平成 22 年 4 月 1 日	(膀胱) 第 2 号
医科点数表第 2 章第 10 部手術の通則 5 及び 6 (歯科点数表第 2 章第 9 部の通則 4 を含む。)に掲げる手術 (手術は別掲)	平成 20 年 4 月 1 日	(通手) 第 100 号
歯周組織再生誘導手術	平成 20 年 4 月 1 日	(GTR) 第 31 号
麻酔管理料 (I)	平成 16 年 5 月 20 日	(麻管 I) 第 49 号

名 称	届出年月日	承認番号
麻酔管理料 (II)	平成 22 年 4 月 1 日	(麻管 II) 第 3 号
放射線治療専任加算	平成 16 年 5 月 20 日	(放専) 第 7 号
高エネルギー放射線治療	平成 16 年 5 月 20 日	(高放) 第 11 号
強度変調放射線治療 (IMRT)	平成 21 年 6 月 1 日	(強度) 第 2 号
画像誘導放射線治療 (IGRT)	平成 22 年 4 月 1 日	(画誘) 第 2 号
直線加速器による定位放射線治療	平成 16 年 8 月 1 日	(直定) 第 2 号
クラウン・ブリッジ維持管理料	平成 16 年 5 月 20 日	(補管) 第 1120 号
歯科矯正診断料	平成 22 年 8 月 1 日	(矯診) 第 43 号
顎口腔機能診断料 (顎変形症 (顎離断等の手術を必要とするものに限る。) の手術前後における歯科矯正に係るもの)	平成 18 年 6 月 1 日	(顎診) 第 13 号
入院時食事療養 (I)	平成 16 年 5 月 20 日	(食) 第 279 号

(別掲)

名 称		届出年月日	承認番号
医科点数表第 2 章第 10 部手術の通則 5 及び 6 (歯科点数表第 2 章第 9 部の通則 4 を含む。)に掲げる手術		平成 20 年 4 月 1 日	(通手) 第 100 号
区分 1	ア	頭蓋内腫瘍摘出術等	
	イ	黄斑下手術等	
	ウ	鼓室形成手術等	
	エ	肺悪性腫瘍手術等	
	オ	経皮的カテーテル心筋焼灼術	
区分 2	ア	靭帯断裂形成手術等	
	イ	水頭症手術等	
	ウ	鼻副鼻腔悪性腫瘍手術等	
	エ	尿道形成手術等	
	オ	角膜移植術	
	カ	肝切除術等	
	キ	子宮附属器悪性腫瘍手術等	
区分 3	ア	上顎骨形成術等	
	イ	上顎骨悪性腫瘍手術等	
	ウ	バセドウ甲状腺全摘 (亜全摘) 術 (両葉)	
	エ	母指化手術等	
	オ	内反足手術等	
	カ	食道切除再建術等	
	キ	同種死体腎移植術等	
区分 1～3 以外	ア	人工関節置換術	
	イ	乳児外科施設基準対象手術	
	ウ	ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術	
	エ	冠動脈、大動脈バイパス移植術 (人工心肺を使用しないものを含む。) 及び体外循環を要する手術	
	オ	経皮的冠動脈形成術、経皮的冠動脈粥腫切除術及び経皮的冠動脈ステント留置術	

11. エイズ拠点病院としての診療体制

当院は、HIV 感染症・エイズ診療に関しては万全の受け入れ体制をとっている。昭和 63 年に岐阜県としては第一例目となる血友病患者におけるエイズ症例を経験して以来、これまでに約 70 例の診療経験があり、岐阜県の過半数の HIV・エイズ患者の診療を担当している。エイズ診療そのものは、当初は第一内科で、病院移転後の平成 16 年からは血液感染症内科にて担当しているが、診療上必要に応じて、他科の全面的な協力のもとあらゆる診療科への受け入れも可能となっている。また、針刺し事故などの感染対策上の観点から生体支援センターと協力体制も万全である。

HIV 治療は近年急激に進歩しており、エイズは致命的な病気ではなく慢性疾患として捉えられるようになってきている。それゆえ HIV 診療にとって重要なことは、医師による診療のみならず、患者の身体的・精神的ケアであり、看護師による診療サポート、薬剤師による服薬支援、専門カウンセラーによるカウンセリング体制の整備などが求められ、これらの充実化も順調に進んでおり、その体制はほぼ確立した。

一方、エイズ診療に関する総合的医療の提供と当地区の他の医療機関への情報提供、医療従事者教育などを目的に、当院は平成 7 年 5 月に岐阜県のエイズ拠点病院の指定を受け、さらに平成 19 年 12 月には岐阜県エイズ治療中核拠点病院の指定を受けた。これに基づき平成 19 年 12 月に岐阜大学医学部附属病院エイズ対策推進センターが設置され、血液感染症内科中心の診療のみならず、院内外への教育・研修活動、情報提供活動なども進めている。

今後、岐阜県のさらなるエイズ診療における全人的医療体制の整備を目指し、職員への HIV 感染症の正しい知識の浸透と診療技術向上を推進するとともに、ブロック拠点病院あるいは地域の他の医療機関との連携などをより一層充実化させていく予定である。

12. 医療関連 (院内) 感染対策

医療関連感染対策については、平成 9 年 4 月創設の感染対策室を実行機関として、審議機関である院内感染対策委員会 (現：院内感染対策専門委員会) およびその下部組織である MRSA 院内感染対策専門部会 (現：院内感染対策小委員会) と緊密に連絡をとりながら行ってきた。平成 14 年 4 月からは、同室を栄養管理や褥瘡対策、リスクマネジメントの機能をあわせもつ「栄養管理・感染制御サポートセンター」(院内措置)として発展的に解消し、平成 15 年 4 月からは名称を「生体支援センター (NST/ICT)」と変え、正式に中央診療部門のひとつとして独立した。なお、平成 20 年 4 月からは予防接種部門 (岐阜県から委託された予防接種センターとして) を、さらに平成 20 年 10 月からは呼吸療法支援部門 (RST) を増設し、より広範囲の横断的診療支援を行っている。

当センター感染制御部門、すなわち ICT の使命を列举すると、①院内感染発生状況調査 (サーベイランス) およびアウトブレイクの早期発見と対応 (最優先業務)、②「感染症管理システム」を用いた全電子化サーベイランス、③院内感染対策マニュアルの作成・更新 (最新版；平成 24 年 1 月発行「岐阜大学医学部附属病院感染対策マニュアル Ver. 1.4. 2012」)、④抗菌薬適正使用への取り組み (Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital)、⑤感染症クリニックおよび病棟巡回、⑥教育・広報活動、⑦職業感染 (針刺し事故等) 防止対策、⑧学会・研究活動、⑨国公立大学医学部附属病院感染対策協議会への参加、⑩厚生労働省院内感染サーベイランス事業 (JANIS) への参加、⑪岐阜県内の病院感染対策の規格統一および情報交換、病診連携などを目的とした「岐阜院内感染対策検討会 (年 2 回)」の企画・実施など多岐にわたっている。また炭疽などのバイオテロ対策や SARS・新型インフルエンザ対策などの迅速対応も担当してきたが、今後、ますます医療が高度・複雑化し、医療関連感染のリスクが増すとともに新たな新興・再興感染症への対応がさらに重要化することが予想され、ICT の業務範囲は拡大し続けている。さらに独立行政法人化、包括医療などの背景を考慮すると、感染制御による医療経済効果やリスクマネジメントの追求が病院運営にとっても重要課題であることは従前と変わらない。

現在、ICT の構成員は生体支援センター長 (兼務；日本感染症学会感染症専門医、ICD 制度協議会 (日本感染症学会推薦) ICD、日本化学療法学会抗菌化学療法指導医の各資格をもつ) 1 名、ICT 専任教育職員 (内科および外科) 2 名、専任看護師長 (日本看護協会認定感染管理看護師：ICN) 1 名、兼任事務職員 1 名のほか、支援メンバーとして医学部微生物・バイオインフォマティクス部門の教官 1 名 (ICD)、生命科学総合実験センター嫌気性菌実験分野の教育職員 1 名 (ICD)、外科系診療科教育職員 3 名 (泌尿器科 ICD、麻酔科 ICD および胸部外科医師)、高次救命治療センター教育職員 1 名 (ICD)、医療安全管理室教育職員 1 名、GRM 1 名 (看護師長)、検査部細菌検査室臨床検査技師 1 名 (副検査技師長) および薬剤部の職員 1 名 (ICD および日本化学療法学会抗菌化学療法認定薬剤師の資格をもつ薬剤部主任)、栄養管理室長 1 名および技能補佐員 1 名の合計 18 名となっている。このうち、センター長および専任看護師長、専任医師 (内科、泌尿

器科，麻酔科)，薬剤部主任，検査部副技師長の7名はICTの中でもスペシャリストとして，より高度な業務を担当し，週1回のミーティングおよびラウンドを実施している(S-ICT)。

このように，専任職員を含めた多職種によるチーム医療活動がICT活動としても展開されてはいるものの，以下の課題を指摘せざるを得ない。

★現状の問題点及びその対応策

- (1) 現在ICDの学会認定を受けているメンバーは多職種の7名在籍しているものの，すべて専任での活動はできていない。また専任教官2名は登録されているが，実質的には母体分野の仕事を90%以上，当センターでの業務量は10%以下である。これらのことは，いくらマニュアルを整備してあっても，アウトブレイクや現場での個々の感染事例に対してきめ細やかに対応することには限界がある。また1名の専任看護師長(ICN)には多大な負担がかかっていることも大きな問題点である。
- (2) ただし，平成21年8月から開始した「Antimicrobial Stewardship in Gifu University Hospital : ASGUH」は，ICT活動あるいは多職種チーム医療の在り方に一石を投じる取り組みである。すなわち，抗菌薬適正使用に専任の臨床薬剤師が中心的役割を演じており，チーム医療におけるメディカルスタッフの専門性を如何なく発揮し，その役割が患者診療内容に直接影響を及ぼすことによる充実感，やりがいを生じさせている。ICTなどのチーム医療は多数の異なる職種がただ単に一堂に会してミーティングしたり，院内ラウンドをしたりすることが重要なのではない。それぞれの職種の専門性をいかに発揮し，各々の職種が直接患者にふれあって診療に参加することが真のチーム医療であると考えられ，上記取り組みはまさにそのようなモデルケースとなっている。今後は臨床検査技師(細菌検査技師)をはじめとして，各職種の専門性をもっと発揮できる体制や取り組みをさらに発展させるべきである。また，事務職員についても医療技術職員をサポートしつつ，かつ自身もより専門的知識や経験も求められるようになってきているため，感染症法などを含めたトレーニングを受け，しかもより長期に専任担当することが望ましい。
- (3) しかしながら，やはり現状では中央診療部門というには業務量の多さ，多彩さを考慮すると余りにも組織的体制が不十分であるという点が大きな問題点である。上記ASGUHの取り組みも1名の専任薬剤師に全面的に頼っているが，巨大な病院組織から考えると，少なくとも2名以上の体制が必須であり，後進の指導の面でも複数名の屋根瓦方式での育成ができる人員配置が望ましい。いずれにせよ現在の地道な活動によって，専従メンバーの増加をめざしていかなければならない。手始めとして平成24年度からは，HIV診療など感染症診療も担当する専従の医師1名および専従の疫学調査専門職員を配置することが内定している。
- (4) 医療関連感染対策は，ICTメンバーによる活動のレベルアップやマニュアルの充実のみではほとんど意味がない。現場で実際に感染予防策を遵守すべき職員のレベルアップを継続的にはかるべきであり，卒前教育も含めた教育・研修体制を改善しなければいつまでもリスクは減少しない。すなわち感染予防策を適切に遵守している職員はいるものの，全体の遵守率については，決して高くない現実を認めざるを得ない。したがって他の領域(医療安全など)も含め病院全体として事務方が管理する研修管理体制の確立が望まれる。医療安全管理室と生体支援センター合同での年2回のセミナーはそれぞれ数回ずつ同じメニューで開催(VTR開催も併用)し，ほぼ全職員が聴講できるように配慮したり，また新規・中途採用職員の研修の機会を多数設けたりと現場では工夫しているものの，医療監視や病院機能評価への対応面でも事務体制の確立は急務と思われる。
- (5) これも他の領域と同様のことであるが，院内での情報伝達体制が全くと言ってよいほど不十分である。感染制御に大きな力を発揮するのはまずは「情報共有」と言い切つてよい。リンクドクターやリンクナースのみではなく，外部委託業者職員も含め，すべての職員に迅速かつ適切に「情報共有」がなされるように院内情報伝達体制のインフラ整備が望まれる。
- (6) ホームページのリニューアルがされていない。ホームページ機能を最大限発揮して，地域連携の面でも展開をしていきたい。

★今後の展望

いずれにせよ，各種事例に迅速かつ的確に対応しながら，診療横断的に院内で頼りにされるセンターとして貢献できるべくさらなる精進をしていきたい。上記問題点を少しずつ解消し，より安定した診療支援業務が展開できるように，人事・組織的基盤の安定化は継続課題であると考えている。

13. 医療安全対策

概要

医療安全管理室は、平成 14 年 4 月に院内に専任リスクマネージャー (General Risk Manager: GRM) として専従看護師長 1 名が配置され、院内の医療安全対策の実務機関として発足したが、医療安全への社会的ニーズの高まりや、平成 18 年の医療法改正を背景に、平成 19 年 10 月からは教育職員 (医師) 1 名を専従配置し、一層の体制強化を図ったところである。現在の室員構成は、室長 (医療安全担当副病院長)、副室長 (医師)、専従 GRM (看護師長)、病棟医長代表、外来医長代表、薬剤部副部長がそれぞれ 1 名、看護師長 2 名、医療サービス課長補佐 1 名、専従非常勤事務職員 1 名の計 10 名で構成されている。医療安全管理室は、院内組織上、診療科、中央診療部門および事務部門からは独立した病院長直属の機関として位置づけられている。主な業務は、診療科・組織横断的に院内の安全管理を担い、医療事故防止及び医療の安全性向上をめざして調査、分析、対策の立案および実行等を行うことである。

医療安全管理委員会は、医療安全管理対策及び医療事故防止に関する重要事項の審議を行う常設の月例開催委員会である。具体的には、医療の安全管理対策の検討及び推進、医療安全管理のための職員研修、医療事故及びインシデント報告に関する情報収集及び分析、医療安全マニュアルの作成等について、医療安全管理室からの報告及び提案について審議する。メンバーは医療安全管理室長 (以上安全担当副病院長) を委員長に、医療安全管理室 GRM、同副室長、薬剤部長、輸血部長、放射線部長、医療情報部長、医療機器センター長、生体支援センター長 (院内感染対策担当)、病棟医長代表、外来医長代表、高次救命治療センター副センター長、手術部副部長、検査部技師長、放射線部技師長、副看護部長、医療サービス課長の 16 名から構成されている。

さらに医療安全対策を全職員に周知徹底するために、院内全診療科、中央診療部門、各病棟に配置された全リスクマネージャー 82 名が一堂に会するリスクマネージャー会議を年 2 回定期開催している。

また、平成 19 年 4 月に制定された岐阜大学医学部附属病院の憲章・基本戦略では、(4) 医療安全基本戦略として、

- ・患者参加型の医療安全対策を推進する。
- ・自ら進んで医療講習会に参加し、医療安全に関する意識と知識を高める。
- ・医療安全向上のための改善策を、積極的・速やかに取り入れ実践する。
- ・積極的にインシデントレポートを提出する。
- ・医療職種間のコミュニケーションを円滑化する。
- ・マニュアルを常に見直し周知徹底を図る。

の 6 項目の行動目標が定められた。平成 19 年 10 月には「岐阜大学医学部附属病院医療安全管理指針」が制定され、病院ホームページ、電子カルテオンラインマニュアルに掲載するなどされ、周知徹底を図っている。

このほか、医療法改正に伴い平成 19 年 4 月から医薬品安全管理責任者、医療機器安全管理責任者が置かれることとなり、医薬品については薬事委員会、医療機器については医療機器安全管理委員会で安全管理に関する審議も行うよう体制が整備された。また、医薬品の安全使用のための業務手順書や医療機器安全管理マニュアルも策定された。なお、院内感染対策に関しては従前から生体支援センター長 (感染制御部門: ICT 長) が責任者と位置付けられ、院内感染対策小委員会および院内感染対策専門委員会で審議を行っている。

(1) インシデント報告とその対策

インシデント (incident) は「患者の診療やケアにおいて、本来あるべき姿から外れた行為や事態の発生」を意味し、全ての病院職員には積極的な報告を義務付けている。医療安全管理室ではインシデント報告を受け、必要な事例については追加で聞き取り調査等を実施するとともに、集計して統計処理や分析を行っている。平成 22 年度の総報告件数は 1,907 件で、これらのインシデント報告は、医療安全管理室員会議 (隔週水曜日開催) でレビューし、重要事例の抽出やインシデントレベルの検討、追加調査の必要性の有無、対応方針等を検討している。また、緊急性の高いものについては医療安全管理室と当該部署のリスクマネージャー間で情報交換の上、安全対策を実施している。医療安全管理室内で検討された対応方針や実際に実施した安全対策については、医療安全管理委員会 (月 1 回開催) において審議され、その結果については科長会 (月例)、医局長等合同会議 (月例)、リスクマネージャー会議 (年 2 回) 等で報告し、また、医療安全トピックス等のニュースを発行して職員に周知徹底している。

日本医療機能評価機構へ報告すべき事例は、基本的には国立大学医学部附属病院医療安全管理協議会で提示されている身体影響レベル 3b 以上の警鐘事例としており、レベルの最終確定は医療安全管理室で行っ

ている。

病院としての対応が必要な事例については、医療安全管理室から病院長へ速やかに報告して医療事故対策委員会の招集を求め、その後の対応を協議している。平成 18 年以降、外部委員を加えた医療事故調査委員会を開催する事例は 2 件であり、その他病院長の指示に基づき院内で拡大医療安全管理室員会議を招集し調査・検討した事例は毎年 2～3 件程度である。

(2) 医療安全に係る職員教育

医療安全に係る研修は、医療安全管理室が中心となり医療法に定められている年 2 回の全職員を対象とした研修、新規採用者対象の研修、中途採用者対象の研修等を実施している。全職員対象の研修については、平成 20 年度からは、生体支援センター感染制御部門との合同で月曜日～金曜日までの 5 日間同一の研修を連日実施し、さらに非常勤職員を対象とした追加研修も実施して受講率の向上を図っている。研修の内容としては院内で発生したインシデント事例や新たに医療安全管理委員会で取り決めた安全対策の紹介を中心に行っている。また新規・中途採用者対象研修については、総務課研修支援係が担当し、研修設定日に出席できない場合は必要に応じて DVD 研修を実施するなど、全職員の出席を必須として出席率向上を図っている。新採用時のほか、看護部を中心に希望する職員に対して別途実技研修を実施しており、このほか人工呼吸器に関しては生体支援センター呼吸療法支援部門 (Respiration Support Team : RST)、その他の医療機器については医療機器センター、医薬品に関しては薬剤部と連携して研修を行っている。

(3) 院内ラウンド

平成 20 年度から、おおむね月 1 回の院内ラウンドを実施している。院内ラウンドでは、医療安全上問題のある行為や状態の有無の確認や、救急カートや医療機器の点検状況の確認、インシデント報告内容の確認、事故の恐れのある医療機器の回収、医薬品の管理状況の確認等を実施している。院内ラウンドで収集した情報は、医療安全対策の立案や対策の実施状況の確認に役立てている。

(4) 医療安全マニュアルの策定

平成 12 年 6 月に「医療事故等防止マニュアル 患者中心・患者主体の医療を目指して」が発行され、平成 16 年度からは「医療安全マニュアル」と改題し、毎年度ごとに全体的な見直しを図っている。また「医療安全マニュアル」には医療安全管理委員会で審議決定されたさまざまな安全対策を速やかに反映するため、院内に配布されているバインダー内の内容は随時差し替えて最新の状態を保つようにしている。また、「医療安全マニュアル」は電子カルテオンラインマニュアルとして掲載し、院内すべての医療端末から参照できる。

(5) ニュース・トピックスの発行

医療安全管理室からは、平成 22 年度は医療安全委員会ニュースを 2 回、医療安全トピックスを 10 回発行した。また、日本医療機能評価機構事故収集事業からの医療安全情報を配布するなどの情報発信を行っている。

(6) 国立大学病院間相互チェック・医療法第 25 条による立入検査

平成 18 年度に一時中断した国立大学附属病院間での「医療安全・質向上のための相互チェック」は、平成 19 年度から再開され 22 年度まで、国立大学医学部附属病院医療安全管理協議会で指定された担当大学が当院の医療安全の実施状況を確認している。また、東海北陸厚生局、岐阜県、岐阜市保健所が共同して行う「医療法第 25 条による立入検査」においても、近年は医療安全に関する確認事項が増加しており、これらで指摘を受けた項目の中で、医療安全管理室で対応すべきものについては改善策を検討し、医療安全管理委員会に諮った上で実施している。

自己評価 評価

平成 19 年からの 2 年間は医師の専任担当者 (GRM) が配置され、従来から求められていた種々の活動がようやく少しずつ実施できるようになってきたところであったが、平成 21 年 11 月以後は専任医師の不在が続いている。平成 24 年度以降は、医師の専任医療安全管理者 (GRM) を配置する予定であり、医療安全管理体制の適正化を図りたいと考えている。また、このところ医療事故による死亡患者は発生していないことは幸いであるが、他の施設と比較して看護師以外の職種からのインシデント報告件数が少ないことから、職種ごとに医療安全文化の醸成を図る具体的な取り組みが必要である。

現状の問題点及びその対応策

インシデント報告の報告件数は、すなわち職員の医療安全に対する意識を示していることにほかならず、これについて改革を行うには粘り強く研修等の啓蒙活動を推進していく以外ない。また、各部署のリスクマネージャーの育成も不十分であり、特に各診療科医師のリスクマネージャーに対してどのように必要な資質を身につけさせるかは大きな課題である。医師不足を背景に非常に多忙な状態に置かれている彼らの目を医療安全に向けさせることができれば、確実に医療事故防止につながると考えられる。また、専任リスクマネージャーの後任育成も重要な課題である。

今後の展望

まず医師の専任 GRM の配置を第一目標としたい。また、医療安全基本戦略や医療安全管理指針に基づいた職員一人一人の医療安全思想の定着を目指すため、今後も講習会等の地道な活動が基本である。それによってインシデント報告件数は増加し、重大事故の発生を防止することにつながる。また、医療安全管理委員会において、医療安全基本戦略の行動目標のうちこれまであまり取り組まれてこなかった、患者参加型医療安全対策の推進と医療職種間のコミュニケーションの円滑化についての議論を深め、実効性のある具体案を策定・実践して、これらの行動目標が実現できるように取り組む。

14. 入院基本料・入院時食事療養の状況

(1) 入院基本料

区 分	基本料の別	届出年月日	備 考
一般病棟 病床数 569 床	特定機能病院 (7 : 1)	平成 20 年 5 月 1 日	急性期看護補助体制加算 (50 対 1)
	特定集中治療室管理料 2	平成 22 年 7 月 1 日	
	救命救急入院料 3	平成 22 年 7 月 1 日	平成 22 年 5 月 1 日
	救命救急入院料 4	平成 22 年 4 月 1 日	看護補助加算 1
	小児入院医療管理料 2	平成 22 年 5 月 1 日	(50 対 1)
精神病棟 病床数 37 床	特定機能病院 (13 : 1)	平成 23 年 7 月 1 日	平成 23 年 7 月 1 日

(2) 入院時食事療養

区 分	届出年月日
入院時食事療養 (I)	平成 16 年 5 月 20 日

15. 病院ボランティア

患者サービスの向上のために平成 10 年 4 月に開始した病院ボランティア活動は、平成 20 年に 10 年を迎え、現在に至っている。活動登録者は平成 23 年 11 月現在 38 名であり、院内案内、患者搬送の介助、車椅子等の清掃・修理、病棟での病衣の配布等スタッフの手伝い、院内図書室の図書整理、各種イベントの手伝い等、その活動は多岐にわたり、病院の中で欠くことのできない存在となっている。

ボランティア間の交流と活動の充実のために、院内にボランティア控室が設置されている。また、リーダー・曜日リーダーを中心としたボランティアとの意見交換会を年に数回行い、院内外の研修にも積極的に参加させ、質的向上を図っている。

16. 院内学級

院内学級は、岐阜県教育委員会及び岐阜市教育委員会との協議を経て、岐阜市立京町小学校、同伊奈波中学校の病弱児学級として位置付けられ、平成 8 年 4 月に旧病院の小児科病棟の一部を改装、転用して開設した。院内学級は「むくのき学級」と名付けられた。

病院の新築・移転を契機に、新病院 4 階の小児科病棟に小学校教室 35㎡、中学校教室 17㎡、職員室 19㎡の院内学級を新たに設け、併せて設備の充実を図り、岐阜市教育委員会との間で「岐阜大学医学部附属病院の入院児童・生徒に対する義務教育の実施に関する協定書」を締結し、開設した。

この院内学級は、岐阜市立黒野小学校、同岐北中学校の病弱児学級と位置付けられ、平成 23 年 11 月現在小学校教室 8 人、中学校教室 2 人の児童・生徒が在籍している。

17. 院内図書室

入院患者やその家族が利用できるよう院内図書室が平成 10 年 4 月に開設された。平成 16 年 6 月の本院移転後は、病棟 9 階に開設され、景観がよく、患者が読書を楽しむというだけにとどまらず、家族等の憩いの場所としての役目も大いに果たしている。

図書は、入院されていた患者やスタッフ等多くの方から寄贈され、絵本、児童図書、コミックス、小説、随筆、評論、辞書等多岐にわたり、ボランティアにより図書の整理が行われている。また、医学・看護に関する情報を得てもらえるよう、医学関係の専門図書を購入し、さらには、小児患者向けの学習図書の購入をするなど、院内図書室の充実を図っている。

18. 医薬品の臨床試験の実施方針

医薬品の臨床試験（治験）は、新薬の開発を通じ、医療や医学の発展に大きく貢献しており、特定機能病院として高度な医療を提供する大学病院は、治験を実施する医療機関として重要な役割を担っている。

治験は、平成 9 年 4 月に施行された医薬品の臨床試験の実施に関する基準（新 GCP）を遵守し、安全性、有効性及び治験データの信頼性が確保して行われる必要がある。当病院においても、このことを十分に認識し、倫理的な配慮のもとに科学的にまた適正に治験を実施しているところである。

当病院においては、治験を円滑に実施するために、平成 14 年 4 月に治験管理室を発展的に解消し、治験管理センターを院内措置で設置、さらに平成 14 年度までは併任の治験コーディネーター（薬剤師、看護師各 1 名）の配置のみであったが、平成 15 年 4 月から専任の治験コーディネーターを配置し、現在、専任の薬剤師 1 名、臨床検査技師 1 名、併任の薬剤師 1 名を配置している。

専任の治験コーディネーターの配置により、治験責任医師、治験分担医師、治験協力者等及び被験者とその家族との連絡・調整を行う体制が十分とは言えないまでも整備することができた。また、治験コーディネーターによる治験実施計画のスケジュール管理も一部行えるようになったが、今後、より一層円滑に治験を実施するために更なる治験実施体制及び治験コーディネーターの整備を図る必要がある。

平成 22 年度の取り組みとしては、治験の受入れや実施を円滑に推進するため、治験依頼者や患者さんへのホームページを治験管理センターとして新たに設置し、治験の受入件数促進のため治験セミナーを開催し、治験分担医師数の増加促進を図った。今後も、治験受入件数増加に向け、治験受入体制の有効な整備、各診療科へ治験受入の促進、治験依頼者へ治験依頼の促進を図っていく予定である。

19. 広報

(1) ホームページのリニューアル

医学系研究科・医学部情報委員会附属病院部会にワーキンググループを組織し、患者向けに分かりやすいよう、ホームページのコンテンツ、サイトマップ、デザインなどの見直しを行い、平成 22 年 6 月にリニューアルしたホームページをアップした。

また、平成 23 年 9 月には、英語版のホームページを開設した。

(2) 広報誌「鶴舟」の充実

附属病院広報誌「鶴舟」は、平成 12 年 3 月 1 日に創刊号を発行し、第 6 号（平成 16 年 3 月 1 日発行）をもって発行を一時休止していた。新病院の新築移転期間中は、「岐阜大学医学部及び医学部附属病院広報委員会ニュース」を発行し、移転の情報を中心に広報していた。

新病院が開院し運営が軌道に乗り、病院情報を内外に発信することは法人化後の病院運営にとって重要であるため、医学系研究科・医学部情報委員会に附属病院部会で検討の結果、附属病院広報誌「鶴舟」第 7 号を平成 18 年 1 月 31 日に再刊した。

平成 23 年 4 月には、より患者向けに分かりやすいものとするため、掲載内容の充実を検討し、連載記事などを加えた「鶴舟」第 16 号を発行した。

VI 自己評価

1. 医科学専攻・再生医科学専攻及び医学部医学科

医学系研究科・医学部の自己評価

岐阜大学大学院医学系研究科長・医学部長 犬塚 貴

教育

全国共用試験 CBT・OSCE の成績は良好であり、医師国家試験における新卒者の合格率も高く(資料①)、医学教育機関としての水準は達成されている。しかし、年度による差があり、国試模試の結果をモニターして国試前に適切な指導が必要である。特にカリキュラムの移行期の学年では注意が必要である。

学生の能動的な学習習慣の確立を目的にテュートリアル教育が導入されて 15 年以上経過した。その評価は卒業後長期の追跡調査や、群間比較ができないことなどの困難があり、導入前後の国試合格率の増加、授業態度の改善など一時的なエピソードに限られている。医学教育企画評価室と当該分野等によってテュートリアル各コースの振り返り、チューター評価の改善などの努力がなされている。学生による授業評価はテュートリアルコースなど一部に限られており、教員の授業改善に至るまでのフィードバックシステムが依然不十分である。テュートリアル教育におけるコアタイムについては、新しい学習領域のスタート時期での適応や、その回数について、近年議論が多く交わされるようになった。また症例の診断クイズで終始する傾向があり、病態病理や当該領域の研究動向への深まりが不十分であるという指摘もある。全般的な見直しの必要性について検討がなされているが、テュートリアル教育システム運用の改良、或いは次世代型教育システムの開発につなげていく必要がある。

臨床実習(6年生)では海外研修を推奨しているが、参加者は毎年 10 名足らずである。医学教育開発研究センター(MEDC)では、外国人講師や前年経験した学生の協力を得て海外研修のサポート講座を開いている。GM 会の経済的支援も用意されている。より多くの学生が海外に出てカルチャーショックを受けることが望ましい。一方、韓国の忠北大学、タイのチェンマイ大学から不定期であるが学生実習生を受け入れている。学生の相互実習交流は学部内の国際化に重要であり、個別の教授のみに依存せず、学生クラブや大学、自治体等の協力を得て発展させていく必要がある。

課外活動では、2010 年に第 62 回西日本医学生体育大会(西医体)で総合優勝に輝き、開学以来の快挙となった。現在、全学 1 クラブ制となっているが、医学生の授業・実習時間等を考えると、全学との合同クラブは難しい面があり、独自の練習施設の確保に理解をもつ必要がある。文化系クラブについては医学部記念会館 1F に共用ミーティング室の設置、学生棟の防音改装を行うことになった。

近年、一部学生の引きこもり、勉学意欲の低下が問題になっており、保護者の協力を得る必要に迫られ、2011 年から入学時に学生の了承を得て、成績表の送付を始めた。また、情報ネット空間での振る舞い、個人情報取り扱いの問題など、過去に例のない新たな問題が生じており、学生に対して医師・医療者としての使命感、責任感、倫理観をしっかり育てるため、情報倫理の教育に力を入れている。教員の学生との関わりは授業、課外活動、里親制度など多面的に用意してあるが、学生の多様化、個別化、仮想世界への耽溺が進んでおり、教職員と学生、学生相互のコミュニケーションを意識的に確保していくことが重要である。

入学試験は競争倍率が前期、後期共に全国の医学科の中で最高となり(資料②)、全国的に注目を受け、優秀な学生が全国から集まるようになった。高倍率の理由の一つは 2 次試験の配点が大きく、センター試験で偶々失敗した者に挽回の機会を与えていること、二つ目は前期試験のみにシフトした大学がかなりあること、また本学(前期・後期)は面接を課していない数少ない大学であることも理由の一つだという指摘もある。23 年度後期試験では 100 倍近くになり、会場、監督員、採点教員の確保に苦心したが、危機管理上の観点から 2012 年度からは 40 倍での 2 段階選抜を実施することになった。

本学および全国の医学教育を牽引してきた、医学教育開発研究センター(MEDC)は、2010 年に医学系の教育分野では全国唯一の全国共同利用拠点に採用され、「多職種連携医療法の開発と FD の全国展開」などのプロジェクトを遂行中である。2011 年には同センター開設 10 周年を祝った。

新臨床研修医制度導入を契機に県内の地域中核病院機能の脆弱化が顕著となり、この窮状を救うために地域枠による入学定員の増加が行われた(資料③)。本学では永らく 80 名であったが、2008 年度から漸増し、2010 年度には 107 名まで増加した(34%増)。学生定員増加に対する教員の増加はごく僅かであり、まもなく、さしかかる臨床実習での教員の負担が危惧される。本学では 2007 年度に地域医療医学センターを立ち上げ、県からの関連寄附講座も加わり、2008 年度には地域医療の重要性を意識した新たなカリキュラムもスタートさせた。地域枠学生の育成を念頭に、2009 年には県内の主要病院と共に岐阜県医師育成・確保コンソーシアムを結成した。今後の地域枠在学者の増加、卒業後の指定勤務とキャリア支援のため、2012 年度から地域

医療医学センターの再構築を決定した。過大な期待を抱く自治体、各病院・診療科・大学の利害の錯綜、地域枠学生・卒業生のモチベーションの維持など大きな課題が待ち受けている。

新臨床研修医制度はまた、学部から研究科への研究志向の流れを断ち切る存在になり、本学でも大学院入学者が減少している(資料④)。背景には大学病院の研修医・医員の低処遇、大学院生の不十分な生活支援があり、卒業生は都市部へ広がり、且つ大学を敬遠する傾向がある。2008年度からの新カリキュラムでは基礎配属期間を3ヶ月に延長し、成果の学会発表支援を行っているが応募は少数である。また学生がクラブ感覚で参加できる大学院コース(MD-PhDコース)も設置したが、応募は2名のみであり有効なものにならなかった。これは日常的に多忙化している学生にとって、あまりメリットがないことが一因と思われる。院生の入学定員割れは、アカデミックマインドのみに頼る現状では、その回復はなかなか難しい。根本的には、魅力的な研究による研究マインドの刺激が重要であることは当然であるが、現実的な処遇の問題は無視できない。

研究

活発に進められている研究としては、ITを利用した救急医療体制の構築に関する研究があり、経済産業省の支援を得て、多くの企業が参加して進行している。文科省知的クラスター事業の後継である、都市エリア産学官連携促進事業が2009年に採択され、医工連携、産学協同の理想的な発展を遂げている。その成果の一部は2010年に人間医工学研究開発センターとして発展した。また医療画像情報処理による医師のコンピュータ支援診断の開発も実用化に迫っている。iPSに関する研究も、歯髄幹細胞からの誘導やCell processingセンターの設置により基礎・臨床の多分野で広がっている。リプログラミングによる分化制御の研究の一部がCell Stem Cell (Yamada Y, et al, 2010)に掲載され、主任研究者は京大 iPS 細胞研究所の教授に昇進した。糖尿病の発症機序の解明と遺伝子診断法の開発、体脂肪減少因子を用いた2型糖尿病の治療、循環器リスクと耐糖能の効率的な健診マーカーの探索、食物アレルギー対策食品の創生、アレルギーのテラーメイド治療管理ガイドライン、先天性ケトン体代謝異常症に関する研究、核内受容体蛋白を分子標的とした肝臓化学予防の研究など、大型の競争的外部資金等を獲得して進行中である(資料⑤、⑥)。隣接地に移転してきた薬大との連携も、学部学生の教育研究指導に関する覚書、医薬連携推進部会、臨床研究推進支援助成も創られ成果が期待されている。しかし、競争的外部資金の獲得については総額として減少傾向であり、発明、特許についても同様である(資料⑦)。2009年に行ったアンケートでは、研究方向としては「がん」「再生」、方法論では「分子生物」「遺伝子改変動物」組織では「医薬連携」が多く、これらも参考にして、他組織との共同研究、プロジェクトに臨機応変な研究チーム編成がなされるとよいであろう。COEをはじめ大型或いは政策プロジェクトの情報収集と共に、いつでも参画応募できる準備が重要である。研究科長裁量経費による研究助成は、多分野・異分野との共同研究を中心に行われてきたが、こうした研究の情報や技術の交換の支援は大切である。海外留学からの帰学者への研究費支援を行ってきたが、帰国後の研究継続と波及効果を図るために必要である。外部資金獲得によるポスト設置としては、寄附講座がH24春に新たに4講座設置されることになった。教授の選考においては研究領域の慎重な検討、選考委員による積極的なリクルートを展開してきた。複合講座の統廃合の議論もあったが、厳しい選考過程を踏んで、意欲に燃えた人材が一人でも多く本学にいることの方が、より望ましいと考えた。また、少数ながら任期つき助教の競争的獲得も、毎回業績の高い人材が選出され、ある程度的人数は、このような制度で活性化を図るべきと思われる。

一方、今後の研究を支える若手・学生を見渡した時、深刻な状況がある。最低限度を示したコアカリキュラムのレベルに安住する学生、リサーチマインドの涵養不足、新臨床研修医制度の導入による専門医への偏重、大学病院・大学院の低処遇の問題、これらを凌駕するような魅力的な研究の乏しさにより、基礎的研究における若い研究者が減少している。人件費削減が確実に進行し多くの分野は3人以下の教員構成となり、若い世代の基礎研究参入への意欲を抑制している。懸念されていたことであるが、研究の結果として出てくる英文原著論文の数、総インパクトファクター(IF)が減少した。さらに論文当たりのIFも減少しており質の低下も示唆される(資料⑧)。この3年間の本学の研究で、筆頭著者としてビッグジャーナルに掲載されたのは、前述のCell Stem CellとN Engl J Med. (Ozeki M, et al. 2011)のみである。基礎研究と臨床応用をつなぐトランスレーショナルリサーチは医学系研究科に最も相応しい研究手法・体制であり、難治性疾患の病態解明と治療法の確立などに向けて、多分野・異分野と連携して推進して行くべきである。

臨床

附属病院は高次救命治療センターや、がん・エイズ・肝疾患・難病・災害の拠点病院として、また特定機能病院として地域医療の最後の砦として機能している(資料⑨、⑩)。また高度先進医療の開発、基礎研究と臨床応用をつなぐトランスレーショナルリサーチを遂行する上で極めて重要な場となっている。さらに医学・看護・薬学・救命士等の臨床教育の場でもある。これらを可能にしているのは、歴代病院長はじめ病院スタッフのたゆまぬ努力による、良好な経営と安全確保である。

社会貢献

日常的な教育による人材育成，研究成果による医学・医療の進歩，診療による高度先進医療の実践を通じた社会貢献は当然のことであるが，国や地方自治体などの行政から委嘱された専門委員として，また地域の文教施設などの教育スタッフとして，さらに地域の診療施設支援を介した直接的な社会貢献も果たしてきた。

本学は岐阜県の医療の充実のために，自治体と連携して難局を乗り切るために責任ある行動を取る必要がある。本学はすでに県内および周辺に大きな貢献をしてきているが，一方で過大な期待を寄せられることも多い。本学がどのような貢献をなしてきたか，或いは今後なし得るかについて，適切な情報発信をすることも必要である。

資料①

本学の医師国家試験の合格率(第 88 回～第 106 回)

区 分	新卒者合格率
第 88 回(平成 5 年度)	87.8%
第 89 回(平成 6 年度)	91.9%
第 90 回(平成 7 年度)	94.3%
第 91 回(平成 8 年度)	90.4%
第 92 回(平成 9 年度)	98.8%
第 93 回(平成 10 年度)	94.3%
第 94 回(平成 11 年度)	84.1%
第 95 回(平成 12 年度)	97.4%
第 96 回(平成 13 年度)	100.0%
第 97 回(平成 14 年度)	100.0%
第 98 回(平成 15 年度)	97.4%
第 99 回(平成 16 年度)	90.5%
第 100 回(平成 17 年度)	97.6%
第 101 回(平成 18 年度)	96.3%
第 102 回(平成 19 年度)	97.5%
第 103 回(平成 20 年度)	97.5%
第 104 回(平成 21 年度)	98.7%
第 105 回(平成 22 年度)	96.2%
第 106 回(平成 23 年度)	92.1%

テュートリアル教育 1 期生

資料②

医学科出願者数(受験者数)

年度	前期日程	後期日程	推薦(一般)	推薦(地域枠)	計
	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	
H18 年度	895 (835) 〔16.3〕 《15.2》	224 (139) 〔22.4〕 《13.9》	71 (71) 〔4.7〕 《4.7》	—	1190 (1045) 〔14.9〕 《13.1》
H19 年度	583 (573) 〔19.4〕 《19.1》	2760 (2053) 〔78.9〕 《58.7》	37 (36) 〔2.5〕 《2.4》	—	3380 (2662) 〔42.3〕 《33.3》

年度	前期日程	後期日程	推薦(一般)	推薦(地域枠)	計
	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	志願者数 (受験者数) 〔志願倍率〕 《受験倍率》	
H20年度	618 (573) 〔20.6〕 《19.1》	2372 (1841) 〔67.8〕 《52.6》	35 (35) 〔2.3〕 《2.3》	22 (22) 〔2.2〕 《2.2》	3047 (2471) 〔33.9〕 《27.5》
H21年度	658 (588) 〔21.9〕 《19.6》	2871 (2178) 〔71.8〕 《54.5》	20 (20) 〔1.3〕 《1.3》	28 (28) 〔1.9〕 《1.9》	3577 (2814) 〔35.8〕 《28.1》
H22年度	652 (566) 〔20.4〕 《17.7》	2748 (2083) 〔78.5〕 《59.5》	21 (21) 〔1.4〕 《1.4》	35 (35) 〔1.4〕 《1.4》	3456 (2705) 〔32.3〕 《25.3》
H23年度	666 (580) 〔20.8〕 《18.1》	3457 (2497) 〔98.8〕 《71.3》	20 (20) 〔1.3〕 《1.3》	54 (54) 〔2.2〕 《2.2》	4197 (3151) 〔39.2〕 《29.4》

資料③

医学部医学科の入学者選抜について

入学定員

	前期日程	後期日程	推薦(一般)	推薦(地域枠)	計
H18年度	55	10	15	—	80
H19年度	30	35	15	—	80
H20年度	30	35	15	10	90
H21年度	30	40	15	15	100
H22年度	32	35	15	25	107
H23年度	32	35	15	25	107
H24年度	32	35	15	25	107+1

(注) H24年度 +1 は震災特別枠

資料④

医学系研究科入学者の推移(医科学専攻+再生医科学専攻(後期))

	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
定員(計)	59	59	59	59	59	53	53	53	53	53
入学者(計)	60	47	60	52	55	43	58	34	40	39(3)
充足率(計)	101.7%	79.7%	101.7%	88.1%	93.2%	81.1%	109.4%	64.2%	75.5%	73.6%

資料⑤

外部資金受入状況

	平成 16 年度		平成 17 年度		平成 18 年度		平成 19 年度		
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	
寄附金	485	521,979	496	496,560	577	492,252	518	483,699	
受託研究 (治験)	83	92,068	89	80,278	111	87,742	115	89,557	
受託研究 (その他)	16	196,526	22	334,395	22	200,347	21	243,833	
民間等との共同研究	30	25,903	43	38,563	50	117,299	52	67,989	
厚生労働科学研究費補助金	22	87,300	20	139,718	23	149,911	24	180,576	
その他助成金等	41	208,418	40	178,851	29	220,384	32	255,564	
科学研究費補助金	110	501,910	102	423,450	92	214,400	99	220,070	
内訳	特定領域研究	8	58,500	6	44,100	7	49,200	5	30,900
	基盤研究 (A)	2	17,810	2	16,250	0	0	1	9,100
	基盤研究 (B)	16	82,400	17	69,900	13	66,300	10	50,830
	基盤研究 (C)	46	60,500	40	58,300	35	45,200	37	66,040
	萌芽研究	12	14,900	11	10,600	7	11,000	10	13,700
	若手研究 (A)	0	0	0	0	0	0	1	7,800
	若手研究 (B)	20	28,100	22	25,700	28	40,400	30	36,600
	若手研究 (スタートアップ)	—	—	—	—	0	0	2	2,000
	特別研究員奨励賞	5	5,700	3	3,600	2	2,300	3	3,100
学術創成研究費	1	234,000	1	195,000	0	0	0	0	
合計	787	1,634,104	812	1,691,815	904	1,482,335	853	1,488,192	

	平成 20 年度		平成 21 年度		平成 22 年度		
	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	件数	金額 (千円)	
寄附金	497	452,893	493	373,813	531	400,193	
受託研究 (治験)	143	87,227	158	114,664	218	83,012	
受託研究 (その他)	25	205,082	41	373,506	38	286,769	
民間等との共同研究	51	77,583	28	33,947	31	30,217	
厚生労働科学研究費補助金	26	140,586	30	150,980	28	137,210	
その他助成金等	39	210,139	30	122,602	28	61,691	
科学研究費補助金	106	228,347	110	229,900	114	207,168	
内訳	新学術領域研究	0	0	1	14,690	1	23,140
	特定領域研究	4	29,100	4	30,500	0	0
	基盤研究 (A)	1	8,060	1	8,970	0	0
	基盤研究 (B)	7	40,950	8	36,920	9	44,460
	基盤研究 (C)	50	81,120	47	69,030	64	91,000
	挑戦萌芽	9	11,400	9	8,100	5	4,900
	若手研究 (A)	1	5,590	1	4,810	0	0
	若手研究 (B)	24	40,820	29	47,580	27	37,416
	若手研究 (スタートアップ)	4	7,007	4	5,850	2	2,782
	特別研究員奨励賞	3	2,800	1	800	2	1,400
	奨励研究	3	1,500	5	2,650	4	2,070
合計	887	1,401,857	890	1,399,412	988	1,206,260	

(注) 若手研究 (スタートアップ) の平成 22 年度の欄には研究活動スタート支援の件数と金額を記載

資料⑥

競争的大型研究費獲得状況

文部科学省科学研究費補助金	核内受容体蛋白を分子標的とした肝癌化学予防に関する研究	79,500 千円	平成 17 ～ 22 年度	消化器病態学分野
	麻酔薬シグナル伝達機構におけるナトリウムカリウムポンプの役割とその構造変化の解析	26,130 千円	平成 19 ～ 22 年度	麻酔・疼痛制御学分野
厚生労働省科学研究費補助金	アレルギーのテーラーメイド治療管理ガイドラインの確立と実用化	84,000 千円	平成 19 ～ 22 年度	小児病態学分野
	体脂肪減少因子を用いた 2 型糖尿病の治療	150,800 千円	平成 19 ～ 22 年度	内分泌代謝病態学分野
	循環器リスクと耐糖能障害の効率的な健診マーカーの探索	45,945 千円	平成 21 年度～	小児病態学分野
	先天性ケトン体代謝異常症 (HMG-CoA 合成酵素欠損症, HMG-CoA リアーゼ欠損症, β-ケトチオラーゼ欠損症, SCOT 欠損症)の発症形態と患者数の把握, 診断治療指針に関する研究	57,200 千円	平成 22 年度～	内分泌代謝病態学分野
	MODY1-6 の病態調査と識別的診断基準の策定	31,200 千円	平成 22 年度～	組織・器官形成分野
独立行政法人農業行・生物系特定産業技術研究機構 生物系産業創出のための異分野融合支援事業	免疫基礎研究に基づく食物アレルギー対策食品の画期的創生	160,000 千円	平成 17 ～ 22 年度	小児病態学分野
独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構	糖尿病の発症機構の解明と遺伝子診断法の開発研究プロジェクト	375,375 千円	平成 18 ～ 23 年度	内分泌代謝病態学分野
独立行政法人科学技術振興機構	歯胚幹細胞からの iPS 細胞の誘導効率の確認とヒト iPS 細胞の誘導因子減少化の検討	75,185 千円	平成 20 年度～	組織・器官形成分野
	マウス NC 細胞のリプログラミングによる分化制御	29,770 千円	平成 21 年度～	組織・器官形成分野

その他の大型研究費

経済産業省	医療・介護等関連分野における規制改革・産業創出実証事業 (緊急医療体制の構築に資する車載 IT システムの導入における課題抽出・分析のための調査実証事業)	533,000 千円	平成 21 ～ 23 年度	高次救命治療センター
文部科学省	多職種連携医療教育法の開発と FD の全国展開	69,000 千円	平成 23 ～ 26 年度	医学教育研究センター
文部科学省	モノづくり技術とITを活用した高度医療機器の開発	259,874 千円 (工学部を含む)	平成 21 ～ 23 年度	知能イメージ分野 高次救命治療センター 医療情報学分野 高度先進外科学分野 看護学科 整形外科

資料⑦

発明・特許の出願・登録件数

(医学部附属病院, 医学教育開発研究センター, 保健管理センター, 人獣感染防御研究センターを含む)

	発明	特許出願	特許登録
平成 16 年度	11	8	
平成 17 年度	25	20	5
平成 18 年度	24	36	3
平成 19 年度	17	11	2
平成 20 年度	20	13	1
平成 21 年度	7	8	0
平成 22 年度	10	5	3

資料⑧

論文数とインパクトファクター

	著書		総説		原著		小計		合計
	和文	欧文	和文	欧文	和文	欧文	和文	欧文	
平成 15 年	154	12	208	15	247	312 (906.91)	609	339	948
平成 16 年	147	12	215	16	236	283 (911.69)	598	311	909
平成 17 年	143	21	190	18	216	332 (833.43)	549	371	920
平成 18 年	215	17	221	10	152	317 (838.41)	588	344	932
平成 19 年	108	16	206	6	224	331 (703.76)	538	353	891
平成 20 年	224	10	140	16	215	261 (624.72)	579	287	866
平成 21 年	139	15	171	4	240	292 (701.73)	550	311	861
平成 22 年	179	12	172	15	212	256 (650.91)	563	283	846
平成 23 年	194	8	154	16	203	273 (713.75)	551	297	848

()内はインパクトファクターを示す。

資料⑨

認定施設等 Accreditation of Academic Society

基本領域学会

日本内科学会 (認定教育施設)	日本精神神経学会 (専門医制度研修施設)
日本外科学会 (専門医制度修練施設(指定施設))	日本小児科学会 (専門医研修施設)
日本産科婦人科学会 (専門医制度卒後研修指導施設)	日本医学放射線学会 (専門医総合修練機関)
日本整形外科学会 (専門医研修施設)	日本麻酔科学会 (認定病院)
日本脳神経外科学会 (専門医訓練基幹施設)	日本臨床検査医学会 (認定研修施設)
日本眼科学会 (眼科研修プログラム施行施設 (基幹研修施設))	日本病理学会 (認定施設)
日本耳鼻咽喉科学会 (専門医研修施設)	日本救急医学会 (救急科専門医指定施設・指導医指定施設)
日本皮膚科学会 (専門医主研修施設)	日本リハビリテーション医学会 (研修施設)
日本泌尿器科学会 (基幹教育施設)	日本形成外科学会 (認定施設)

専門領域学会

日本胸部外科学会 (指定施設)	日本循環器学会 (専門医研修施設)
心臓血管外科専門医認定機構 (基幹施設)	日本呼吸器学会 (認定施設)
日本呼吸器外科専門医合同委員会 (基幹施設)	日本腎臓学会 (研修施設)
日本消化器内視鏡学会 (指導施設)	日本糖尿病学会 (認定教育施設)
日本呼吸器内視鏡学会 (認定施設)	日本内分泌学会 (認定教育施設)
日本血液学会 (研修施設)	日本輸血・細胞治療学会 (認定医制度指定施設, 認定輸血検査技師制度指定施設)
日本臨床腫瘍学会 (認定研修施設)	日本気管食道科学会 (専門医研修施設)
日本乳癌学会 (認定施設)	日本顎関節学会 (認定研修機関)
日本周産期・新生児医学会 (新生児研修施設 (補完施設))	日本放射線腫瘍学会 (認定施設)
日本脳卒中学会 (認定研修教育病院)	日本ペインクリニック学会 (指定研修施設)
日本リウマチ学会 (教育施設)	日本老年精神医学会 (認定施設)
日本口腔外科学会 (研修施設)	日本アレルギー学会 (認定教育施設)
日本老年医学会 (認定施設)	日本透析医学会 (認定施設)
日本神経学会 (教育施設)	日本小児神経学会 (専門医研修認定施設)
日本核医学会 (専門医教育病院)	日本集中治療医学会 (専門医研修施設)
日本消化器病学会 (認定施設)	日本プライマリ・ケア連合学会 (認定医研修施設)
日本肝臓学会 (認定施設)	日本感染症学会 (認定研修施設)
日本消化器外科学会 (専門医制度指定修練施設)	日本脳神経血管内治療学会 (研修施設)
日本人類遺伝学会, 日本遺伝カウンセリング学会 (臨床遺伝専門医制度認定研修施設)	日本臨床薬理学会 (研修施設)
日本臨床細胞学会 (認定施設)	日本医療薬学会 (がん専門薬剤師研修施設)
日本心血管インターベンション治療学会 (研修施設)	日本病院薬剤師会 (がん専門薬剤師研修施設)
日本高血圧学会 (認定施設)	日本静脈経腸栄養学会 (NST専門療法士認定教育施設)
日本インターベンショナルラジオロジー学会 (専門医修練認定施設)	日本肝胆膵外科学会 (高度技能医修練施設B)
日本婦人科腫瘍学会 (専門医制度指定修練施設)	日本緩和医療学会 (認定研修施設)
日本がん治療認定医機構 (認定研修施設)	日本超音波医学会 (専門医研修施設)
婦人科悪性腫瘍化学療法研究機構 (登録参加施設)	日本手外科学会 (認定研修施設(基幹施設))
日本総合病院精神医学会 (専門医研修施設)	日本航空医療学会 (認定施設)
日本外傷学会 (外傷専門医研修施設)	日本頭頸部外科学会 (認定研修施設)
日本脊椎脊髄病学会 (認定施設)	日本内分泌外科学会・日本甲状腺外科学会 (専門医制度認定施設)

資料⑩

医療機関の指定承認状況 Legal Authorization of Medical Services

(1) 病院開設許可(承認)等

法令等の名称	承認年月日
医療法第7条第1項による開設許可(承認)	平成16年5月20日
特定機能病院の名称の使用承認	平成16年5月20日

(2) 岐阜県難病医療拠点病院

指定等の年月日	平成17年9月21日
---------	------------

(3) 都道府県がん診療連携拠点病院

指定等の年月日	平成18年8月24日
---------	------------

(4) エイズ治療の中核拠点病院

指定等の年月日	平成19年3月1日
---------	-----------

(5) 肝疾患診療連携拠点病院

指定等の年月日	平成19年11月1日
---------	------------

(6) 災害拠点病院基幹災害医療センター

指定等の年月日	平成23年10月26日
---------	-------------

(7) 法令による医療機関の指定等

法令等の名称	指定等の年月日	
健康保険法による(特定承認)保険医療機関	平成16年5月20日	
国民健康保険法による(特定承認)療養取扱機関	平成16年5月20日	
消防法による救急医療(第3次救急病院)	平成2年5月8日	
高度救命救急センター	平成18年2月1日	
生活保護法による医療機関	昭和42年6月1日	
労働者災害補償保険法による医療機関	昭和53年2月1日	
地方公務員災害補償法による医療機関	昭和47年4月1日	
原爆医療法 一般医療	昭和43年7月1日	
原爆被災者医療法による被爆者認定疾病医療	平成21年7月23日	
母子保健法 養育医療	昭和42年6月1日	
後期高齢者保険取扱機関	平成20年4月1日	
精神保健法による医療機関	昭和42年6月1日	
更生医療 戦傷病者特別援護法	昭和42年6月1日	
障害者自立支援法	育成医療	昭和19年2月1日
	更生医療	昭和19年2月1日
	精神通院医療	昭和19年4月1日

(8) 小児慢性特定疾患治療研究事業

疾患名	指定等の年月日
悪性新生物	昭和48年6月1日
慢性腎疾患	昭和48年6月1日
慢性呼吸器疾患	昭和48年6月1日
慢性心疾患	昭和48年6月1日
内分泌疾患	昭和48年6月1日
膠原病	昭和48年6月1日
糖尿病	昭和48年6月1日

疾患名	指定等の年月日
先天性代謝異常	昭和48年6月1日
血友病等血液疾患・免疫疾患	昭和48年6月1日
神経・筋疾患	平成2年4月1日
慢性消化器疾患	平成17年4月1日

(9) 先天性血液凝固因子障害等治療研究事業

疾患名	指定等の年月日
先天性血液凝固因子欠乏症	平成2年3月1日
血液凝固因子製剤に起因するHIV感染症	平成2年3月1日

(10) 特定疾患治療研究事業(国指定)

疾患名	指定等の年月日	
ベーチェット病	昭和47年4月1日	
多発性硬化症(MS)	昭和48年4月1日	
重症筋無力症(MG)	昭和47年4月1日	
全身性エリテマトーデス(SLE)	昭和47年4月1日	
スモン	昭和47年4月1日	
再生不良性貧血	昭和48年4月1日	
サルコイドーシス	昭和49年10月1日	
筋萎縮性側索硬化症(ALS)	昭和49年10月1日	
強皮症	昭和49年10月1日	
皮膚筋炎及び多発性筋炎	昭和49年10月1日	
特発性血小板減少性紫斑病	昭和49年10月1日	
結節性動脈周囲炎	結節性多発動脈炎	昭和50年10月1日
	顕微鏡的多発血管炎	昭和50年10月1日
潰瘍性大腸炎(UC)	昭和50年10月1日	
大動脈炎症候群	昭和50年10月1日	
ピュルガー病(バージャー病)	昭和50年10月1日	
天疱瘡	昭和50年10月1日	
脊髄小脳変性症(SCD)	昭和51年10月1日	
クローン病	昭和51年10月1日	
難治性肝炎のうち劇症肝炎	昭和51年10月1日	
悪性関節リウマチ	昭和52年10月1日	
パーキンソン病 関連疾患	進行性核上性麻痺	平成15年10月1日
	大脳皮質基底核変性症	平成15年10月1日
	パーキンソン病	昭和53年10月1日
アミロイドーシス	昭和54年10月1日	
後縦靭帯骨化症	昭和55年12月1日	
ハンチントン病	昭和56年10月1日	
モヤモヤ病(ウィリス動脈輪閉塞症)	昭和57年10月1日	
ウェグナー肉芽腫症	昭和59年1月1日	
特発性拡張型(うっ血型)心筋症	昭和60年1月1日	
多系統萎縮症	綿糸体黒質変性症	平成15年10月1日
	オリープ橋小脳萎縮症	昭和51年10月1日
	シャイ・ドレーガー症候群	昭和61年1月1日
表皮水疱症(接合部型及び栄養障害型)	昭和62年1月1日	
膿疱乾癬	昭和63年1月1日	
広範脊柱管狭窄症	昭和64年1月1日	
原発性胆汁性肝硬変(PBC)	平成2年1月1日	

疾患名		指定等の年月日
重症急性性肺炎		平成 3 年 1 月 1 日
特発性大腿骨頭壊死症		平成 4 年 1 月 1 日
混合性結合組織病 (MCTD)		平成 5 年 1 月 1 日
原発性免疫不全症候群		平成 6 年 1 月 1 日
特発性間質性肺炎		平成 7 年 1 月 1 日
網膜色素変性症		平成 8 年 1 月 1 日
プリオン病	クロイツフェルト・ヤコブ病	平成 9 年 1 月 1 日
	ゲルストマン・ストロイスラー・シャインカー病	平成 14 年 6 月 1 日
	致死性家族性不眠症	平成 14 年 6 月 1 日
肺動脈性肺高血圧症		平成 10 年 1 月 1 日
神経線維腫症 I 型		平成 10 年 5 月 1 日
神経線維腫症 II 型		平成 10 年 5 月 1 日
亜急性硬化性全脳炎 (SSPE)		平成 10 年 12 月 1 日
バッド・キアリ症候群		平成 10 年 12 月 1 日
慢性血栓塞栓性肺高血圧症		平成 10 年 12 月 1 日
ライソゾーム病	ライソゾーム病 (ファブリー病を除く)	平成 13 年 5 月 1 日
	ライソゾーム病 (ファブリー病)	平成 11 年 4 月 1 日
副腎白質ジストロフィー		平成 12 年 4 月 1 日
家族性高コレステロール血症 (ホモ接合体)		平成 21 年 10 月 1 日
脊髄性筋萎縮症		平成 21 年 10 月 1 日
球脊髄性筋萎縮症		平成 21 年 10 月 1 日
慢性炎症性脱髄性多発神経炎		平成 21 年 10 月 1 日
肥大型心筋症		平成 21 年 10 月 1 日
拘束型心筋症		平成 21 年 10 月 1 日
ミトコンドリア病		平成 21 年 10 月 1 日
リンパ脈管筋腫症 (LAM)		平成 21 年 10 月 1 日
重症多形滲出性紅斑 (急性期)		平成 21 年 10 月 1 日
黄色靱帯骨化症		平成 21 年 10 月 1 日
間脳下垂体機能障害	PRL 分泌異常症	平成 21 年 10 月 1 日
	ゴナドトロピン分泌異常症	平成 21 年 10 月 1 日
	ADH 分泌異常症	平成 21 年 10 月 1 日
	下垂体性 TSH 分泌異常症	平成 21 年 10 月 1 日
	クッシング病	平成 21 年 10 月 1 日
	先端巨大症	平成 21 年 10 月 1 日
	下垂体機能低下症	平成 21 年 10 月 1 日

(11) 看護体系

区分		指定等の年月日
特定機能病院 入院基本料	一般病棟 7:1	平成 20 年 5 月 1 日
	精神病棟 13:1	平成 23 年 7 月 1 日
看護補助加算 1 (精神病棟)	50:1	平成 23 年 7 月 1 日
急性期看護補助体制加算	50:1	平成 22 年 5 月 1 日

(12) 厚生労働大臣の定める施設基準状況

区分	算定開始年月日
地域歯科診療支援病院歯科初診料	平成 22 年 4 月 1 日
歯科外来診療環境体制加算	平成 20 年 8 月 1 日
臨床研修病院入院診療加算 (医科)	平成 17 年 3 月 1 日
臨床研修病院入院診療加算 (歯科)	平成 18 年 4 月 1 日
超急性期脳卒中加算	平成 20 年 4 月 1 日
妊産婦緊急搬送入院加算	平成 20 年 4 月 1 日

区分	算定開始年月日
診療録管理体制加算	平成 17 年 3 月 1 日
療養環境加算	平成 16 年 5 月 20 日
重症者等療養環境特別加算	平成 17 年 5 月 1 日
小児入院医療管理料 2	平成 22 年 5 月 1 日
精神科応急入院施設管理加算	平成 18 年 8 月 1 日
精神科身体合併症管理加算	平成 22 年 4 月 1 日
がん診療連携拠点病院加算	平成 18 年 9 月 1 日
栄養管理実施加算	平成 18 年 4 月 1 日
医療安全対策加算 1	平成 20 年 4 月 1 日
感染防止対策加算	平成 22 年 4 月 1 日
救急医療管理加算・乳幼児救急医療管理加算	平成 22 年 5 月 1 日
救急搬送患者地域連携紹介加算	平成 22 年 8 月 1 日
褥瘡患者管理加算	平成 16 年 5 月 20 日
褥瘡ハイリスク患者ケア加算	平成 18 年 6 月 1 日
ハイリスク妊娠管理加算	平成 20 年 4 月 1 日
ハイリスク分娩管理加算	平成 21 年 5 月 1 日
急性期病棟等退院調整加算 1	平成 22 年 4 月 1 日
呼吸ケアチーム加算	平成 22 年 5 月 1 日
地域歯科診療支援病院入院加算	平成 20 年 4 月 1 日
救命救急入院料 3	平成 22 年 7 月 1 日
救命救急入院料 4	平成 22 年 4 月 1 日
特定集中治療室管理料 2	平成 22 年 7 月 1 日
入院時食事療養 (I)	平成 16 年 5 月 20 日
ウイルス疾患指導料	平成 18 年 4 月 1 日
高度難聴指導管理料	平成 16 年 5 月 20 日
がん性疼痛緩和指導管理料	平成 22 年 4 月 1 日
ニコチン依存症管理料	平成 21 年 8 月 1 日
地域連携診療計画管理料	平成 20 年 6 月 1 日
がん治療連携計画策定料	平成 23 年 3 月 1 日
薬剤管理指導料	平成 22 年 4 月 1 日
医薬品安全性情報等管理体制加算	平成 22 年 4 月 1 日
医療機器安全管理料 1	平成 20 年 4 月 1 日
医療機器安全管理料 2	平成 21 年 7 月 1 日
歯科治療総合医療管理料	平成 18 年 4 月 1 日
血液細胞核酸増幅同定検査	平成 20 年 4 月 1 日
検体検査管理加算 (I)	平成 20 年 4 月 1 日
検体検査管理加算 (III)	平成 20 年 4 月 1 日
検体検査管理加算 (IV)	平成 22 年 4 月 1 日
HPV 核酸同定検査	平成 22 年 6 月 1 日
肝炎インターフェロン治療計画料	平成 22 年 6 月 1 日
心臓カテーテル法による諸検査の血管内視鏡検査加算	平成 20 年 4 月 1 日
埋込型心電図検査	平成 22 年 4 月 1 日
人工膵臓	平成 20 年 4 月 1 日
皮下連続式グルコース測定	平成 22 年 4 月 1 日
長期継続頭蓋内脳波検査	平成 16 年 5 月 20 日
神経学的検査	平成 20 年 7 月 1 日
補聴器適合検査	平成 16 年 5 月 20 日
コンタクトレンズ検査料 1	平成 20 年 4 月 1 日
小児食物アレルギー負荷検査	平成 18 年 4 月 1 日
センチネルリンパ節生検 (単独法) 乳がんに係るものに限る	平成 22 年 4 月 1 日
センチネルリンパ節生検 (併用法) 乳がんに係るものに限る	平成 22 年 4 月 1 日
画像診断管理加算 2	平成 20 年 4 月 1 日
ポジトロン断層撮影又はポジトロン断層・ コンピューター断層複合撮影	平成 20 年 6 月 1 日

区 分	算定開始年月日
CT 撮影及び MRI 撮影	平成 18 年 4 月 1 日
冠動脈 CT 撮影加算	平成 21 年 4 月 1 日
心臓 MRI 撮影加算	平成 21 年 4 月 1 日
外来化学療法加算 1	平成 20 年 4 月 1 日
無菌製剤処理科	平成 20 年 4 月 1 日
心大血管疾患リハビリテーション料 (I)	平成 21 年 11 月 1 日
脳血管疾患リハビリテーション料 (I)	平成 18 年 9 月 1 日
運動器リハビリテーション料 (I)	平成 22 年 4 月 1 日
呼吸器リハビリテーション料 (I)	平成 18 年 4 月 1 日
集団コミュニケーション療法料	平成 20 年 4 月 1 日
医療保護入院等診療料	平成 18 年 1 月 1 日
歯科技工加算	平成 22 年 4 月 1 日
悪性黒色腫センチネルリンパ節加算	平成 22 年 4 月 1 日
脳刺激装置植込術 (頭蓋内電極植込術を含む。)及び脳刺激装置交換術, 脊髄刺激装置植込術及び脊髄刺激装置交換術	平成 16 年 5 月 20 日
人工内耳埋込術	平成 16 年 5 月 20 日
乳がんセンチネルリンパ節加算 1, 乳がんセンチネルリンパ節加算 2 (単独法)	平成 22 年 4 月 1 日
乳がんセンチネルリンパ節加算 1, 乳がんセンチネルリンパ節加算 2 (併用法)	平成 22 年 4 月 1 日
経皮的冠動脈形成術 (高速回転式経皮経管アテレクトミーカテーテルによるもの)	平成 21 年 9 月 1 日
ペースメーカー移植術及びペースメーカー交換術	平成 16 年 5 月 20 日
埋込型心電図記録計移植術及び埋込型心電図記録計摘出術	平成 22 年 4 月 1 日
両心室ペースメーカー移植術及び両心室ペースメーカー交換術	平成 16 年 12 月 1 日
埋込型除細動器移植術及び埋込型除細動器交換術	平成 16 年 12 月 1 日
両室ペーシング機能付き埋込型除細動器移植術及び両室ペーシング機能付き埋込型除細動器交換術	平成 21 年 1 月 1 日
大動脈バルーンパンピング法 (IABP法)	平成 16 年 5 月 20 日
補助人工心臓	平成 16 年 12 月 1 日
経皮的動脈遮断術	平成 22 年 4 月 1 日
ダメージコントロール手術	平成 22 年 4 月 1 日
体外衝撃波胆石破砕術	平成 20 年 4 月 1 日
腹腔鏡下肝切除術	平成 23 年 5 月 1 日
体外衝撃波腎・尿管結石破砕術	平成 17 年 4 月 1 日
同種死体腎移植術	平成 20 年 4 月 1 日
生体腎移植術	平成 20 年 4 月 1 日
膀胱水圧拡張術	平成 22 年 4 月 1 日
医科点数表第 2 章第 10 部手術の通則 5 及び 6 (歯科点数表第 2 章第 9 部の通則 4 を含む。)に掲げる手術	平成 20 年 4 月 1 日
歯周組織再生誘導手術	平成 20 年 4 月 1 日
麻酔管理料 (I)	平成 16 年 5 月 20 日
麻酔管理料 (II)	平成 22 年 4 月 1 日
放射線治療専任加算	平成 16 年 5 月 20 日
高エネルギー放射線治療	平成 16 年 5 月 20 日
強度変調放射線治療 (IMRT)	平成 21 年 6 月 1 日
画像誘導放射線治療 (IGRT)	平成 22 年 4 月 1 日
直線加速器による定位放射線治療	平成 16 年 8 月 1 日
クラウン・ブリッジ維持管理料	平成 16 年 5 月 20 日
歯科矯正診断料	平成 22 年 8 月 1 日
顎口腔機能診断料 (顎変形症 (顎離断等の手術を必要とするものに限る) の手術前後における歯科矯正に係るもの)	平成 18 年 6 月 1 日

(13) 臨床修練指定病院

区 分	指定等の年月日
臨床修練指定病院 (外国医師・外国歯科医師)	昭和 63 年 3 月 29 日

(14) 先進医療

区 分	指定等の年月日
インプラント義歯	平成 19 年 2 月 1 日
内視鏡的大腸粘膜下層剥離術	平成 22 年 8 月 2 日

2. 看護学専攻及び医学部看護学科

医学系研究科看護学専攻・医学部看護学科の自己評価

医学部看護学科長 江村 正一

1. 教育

教育に関しては、入学者数に対する留年者数は各学年に数名(4名～9名)出ているが、学生のほとんどは4年間という修業年限内で看護学科を卒業している。また、看護学科学生にとっての入学目的は、看護師・保健師・助産師の資格を取ることであるが、卒業生の国家試験結果を見てみると、その合格率は非常に高く、毎年全国平均を大きく上回っている。平成22年度为国家試験合格率では、看護師98.7%、保健師97.6%、助産師100%と高い値を示している。このように学生が目的を達成できるように、教職員は実習をはじめ講義・演習など、教育内容のより一層の充実に日々努めているところである。一方で、全国規模で看護教員が不足している状況にあり、岐阜大学も同様に、平成24年4月時点で、いくつかの看護学分野に教員の欠員がでる可能性がある。それにともなって専任教員の負担増は想像を絶するものであり、教育への質の低下が懸念されている。現時点における看護学科の最大の課題は教員の確保である。

先に述べたように、平成24年度からは保健師教育過程を選択性とし、また、過密スケジュールをなくすことで、充実した看護師教育過程が展開できるようにした。これにより、より一層きめ細かな教育と全人的看護教育が可能となるものと考え、平成24年度からの看護学教育に期待したい。

2. 研究

研究に関しては、看護学科・看護学専攻においてこれまで以上の業績が達成できなかったのは残念である。この原因は明らかに教員数の不足に伴った専任教員の負担増であり、教員の努力不足とはいきれない。それぞれの教員は研究への意欲はあってもそれに取り組む時間を確保できないのが現状である。このような状況にありながらも、今後は看護の専門分野のみの研究に取り組むだけでなく、これまで以上に別の分野との共同研究を推進し、新しい知見を得ることで看護学の更なる発展につなげたい。

3. 社会貢献

社会貢献においては、個々の教員がそれぞれの専門分野で行っている。具体的には、岐阜県看護協会の研修や看護学学会の運営、講師、シンポジストなど、県内看護系学校の専門分野での講義の担当、地方自治体の各種運営委員会などの委員や委員長など、さらに、各種専門の協議会(全国保健師教育機関協議会、全国助産師教育機関協議会の役員など)多種多様な分野で社会貢献している。

3. 医学部附属病院

医学部附属病院の自己評価

医学部附属病院長 岩間 亨

平成 21 年度から 23 年度の自己評価を行う。

森脇前病院長時代の平成 20・21 年度の到達目標は①次期中期計画の策定、IT システムの更新、②プロフィットセンターの整備、③収支目標の達成であった。

第二期中期目標・中期計画は予定通り平成 21 年度に策定され、IT システムも平成 22 年 1 月より第二代の医療情報システムが稼働を開始した。プロフィットセンターの整備は平成 20 年度までにハード面での整備を終えた中央手術部門、ICU、ACCC に加え、平成 21 年度には循環器分野では MDCT の導入と心臓リハビリの開設、臨床腫瘍部門での新リニアック装置 (Novalis Tx) の導入を行った。医業収益も目標に到達し、全項目で目標を達成した。

平成 22・23 年度の到達目標として掲げた項目は、①高度先進医療の提供、②職員の研修充実、③医療連携の強化、④健全な病院経営である。現時点 (平成 23 年 12 月) における自己評価は以下のとおりである。

高度先進医療の提供のために、①手術件数の増加による手術待機期間の減少、②外来化学療法室の利用拡大、③放射線治療数の拡大、④集中治療室の効率的運用を計画した。手術室の効率的運用と手術枠の拡大により手術件数は平成 21 年度の約 4,500 件から、平成 22 年度には 4,868 件に増加し、平成 23 年度もこれまで平成 22 年度と同様に高い実績を残している。外来化学療法室の稼働は順調に増加し施設上の限界に達した。同様に患者数の増加によって施設が手狭となっている光学医療診療部とともに施設を拡充するため北診療棟の増築を決定した (平成 25 年 3 月完成予定)。放射線治療部門の効率的運用のために放射線部への看護師配置数を増加した。また、平成 23 年 2 月より運用を開始したドクターヘリ事業によって生じると予想された ACCC の稼働増加に備えて病床の再配分を行った。院内 ICU は運用の改善により稼働が増加したが、ACCC は現時点でドクターヘリの運用が予想を下回っており (予想：月 30 件強、実績：月 20 件弱)、稼働増加には至っていない。放射線治療数の増加、待機期間の減少も現時点で検証ができていない。

職員の研修充実のために、①初期臨床研修の充実、②メディカルスタッフの研修支援、③地域医療人を含めた研修会の実施を計画した。初期臨床研修は柔軟なプログラム、研修会の開催と救急外来研修の開始などにより充実し、平成 24 年度初期研修医マッチング数の増加 (25 名) に繋がった。メディカルスタッフの研修費用を予算措置し、また内視鏡外科手術トレーニングセンターにロボット手術シミュレーターを導入した。

医療連携の強化のため医療連携センターをはじめ、各診療拠点センターに専従職員を配置した。五大がん、脳卒中などの地域医療連携パスの導入が進みつつあるが、現時点で十分と言えるまでには到達しておらず今後さらに運用を拡大していく必要がある。

平成 22 年春の診療報酬プラス改定と自己努力により平成 22 年度の病院収益は目標の 153 億円を大幅に上回る 167 億円を達成した。平成 23 年度も現在までほぼ目標通りの収益を達成している。

以上、平成 21～23 年度の目標到達度の自己評価はおおむね良好であるが、集中治療室を含めた病床利用の拡大、手術待機時間の減少、地域連携の強化には今後も更なる取り組みが必要であると思われる。

医学系研究科・医学部自己評価委員会委員名簿

	犬塚	貴	(研究科長)
	清島	満	(副研究科長)
委員長	小澤	修	(副研究科長)
	岩間	亨	(病院長)
	江村	正一	(看護学科長)
	湊口	信也	(医学科教務厚生委員長)
	杉浦	太一	(看護学科教務厚生委員長)
	恵良	聖一	(医学研究科学務委員長)
	足立	久子	(看護学専攻学務委員長)
	高見	剛	(基礎・社会医学系教授)
	竹村	博文	(臨床医学系教授)
	奥村	太志	(看護学科将来計画委員長)
	森田	啓之	(岐阜大学評価室員)
	森田	安夫	(医学研究科・医学部事務長)
	臼井	清	(病院総務課長)

医学系研究科・医学部自己評価委員会「現状と課題」作業部会委員名簿

部会長	小澤	修	(副研究科長)
	湊口	信也	(医学科教務厚生委員長)
	杉浦	太一	(看護学科教務厚生委員長)
	森田	安夫	(医学研究科・医学部事務長)
事務局	大屋	正人	(医学研究科・医学部事務長補佐)
	吉田	真二	(医学研究科・医学部研究支援係長)
			※平成23年7月31日まで
	北野	信哉	(医学研究科・医学部研究支援係長)
			※平成23年8月1日から
	中村	大吾	(医学研究科・医学部事務職員)

岐阜大学
大学院医学系研究科・医学部・附属病院の
現状と課題(第8号)

2012年3月 発行

編集 岐阜大学大学院医学系研究科・医学部自己評価委員会

発行 岐阜大学
大学院医学系研究科・医学部・附属病院
〒501-1194 岐阜市柳戸1番1
TEL.058-230-6000(代表)

印刷 株式会社 コームラ

